

Cosminexus V11 BPM/ESB 基盤 サービスプラットフォーム リファレンス

文法・操作書

3021-3-J46-80

前書き

■ 対象製品

マニュアル「アプリケーションサーバ & BPM/ESB 基盤 概説」の前書きの対象製品の説明を参照してください。

■ 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

■ 商標類

AIX は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

Apache(R), Apache Kafka(R), および Kafka(R)は、Apache Software Foundation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Eclipse は、Eclipse Foundation, Inc.の商標です。

IBM は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft, Excel, Windows, Windows Server は、マイクロソフト 企業グループの商標です。

Oracle(R), Java, MySQL 及び NetSuite は、Oracle, その子会社及び関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

UNIX は、The Open Group の登録商標です。

その他記載の会社名、製品名などは、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

Eclipse は、開発ツールプロバイダのオープンコミュニティである Eclipse Foundation, Inc.により構築された開発ツール統合のためのオープンプラットフォームです。

This product includes software developed by the Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>).

本ソフトウェアに含まれる第三者ソフトウェアに関する情報を次に示します。

第三者ソフトウェア：Trang

著作権者：Thai Open Source Software Center Ltd

当該ソフトウェアのライセンス条文：以下の通り。

Copyright (c) 2002, 2003, 2008 Thai Open Source Software Center Ltd

All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without modification, are permitted provided that the following conditions are met:

Redistributions of source code must retain the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer.

Redistributions in binary form must reproduce the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer in the documentation and/or other materials provided with the distribution.

Neither the name of the Thai Open Source Software Center Ltd nor the names of its contributors may be used to endorse or promote products derived from this software without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE COPYRIGHT HOLDERS AND CONTRIBUTORS "AS IS" AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE REGENTS OR CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

■ ランゲージパックの使用について

このマニュアルでは、Eclipse Babel Project が提供する BABEL 日本語ランゲージパックを適用した Eclipse メニュー表記を使用しています。使用するランゲージパックのバージョンによっては、マニュアル内の表記と異なる場合があります。

■ 発行

2026 年 1 月 3021-3-J46-80

■ 著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2020, 2026, Hitachi, Ltd.

変更内容

変更内容(3021-3-J46-80) uCosminexus Service Architect 11-70, uCosminexus Service Platform 11-70

追加・変更内容	変更箇所
Service Platform および Service Architect から次の適用 OS を削除した。 <ul style="list-style-type: none"> Windows 10 x64 Red Hat Enterprise Linux 8 (AMD/Intel 64) 	—
繰り返しアクティビティの [繰り返し条件設定] ダイアログの XPath 式を [条件式の作成] ダイアログで指定できるようにした。	1.4.27, 1.4.30
XML スキーマを利用した JSON-XML 変換 (拡張モード) ができるようにした。これに伴い、次の点を修正した。 <ul style="list-style-type: none"> cscjson2xsdadv コマンドと cscjsonxmlconvadv コマンドを追加した。 HTTP 受付定義ファイルに httprecp.json-xml-convert.mode プロパティと httprecp.json-transfer.allow-partial-conversion プロパティを追加した。 HTTP 受付ルーティング定義ファイルに <request-schema>要素と <response-schema>要素を追加した。 拡張モードに対し、既存の JSON-XML 変換を標準モードとして区別した。 	2.1, 2.4 cscjson2xsd, 2.4 cscjson2xsdadv, 2.4 cscjsonxmlconv, 2.4 cscjsonxmlconvadv, 3.11.3(1), 3.11.3(4), 3.11.4(1), 3.11.4(4)
スケジュール駆動受付に関して次の点を修正した。 <ul style="list-style-type: none"> スケジュール駆動受付定義ファイルで、scdrepc.event.occurrence-interval プロパティの指定値のチェック仕様を変更した。 スケジュール駆動受付コンフィグファイルに scdrepc.schedule-start-time を追加し、イベント開始時刻を指定できるようにした。 	3.15.1(2), 6.18.1(1), 6.18.1(3)
JSON-XML 変換の小数点を含む数値の出力結果を指数形式から小数点形式へ変更した。これに伴い、JSON-XML 変換定義ファイルに json-xml-convert.decimal-xmloutput-control プロパティを追加した。	3.18.1(1), 3.18.1(3)
FTP アダプタのファイル転送の性能向上のため、ログインセッション維持機能を追加した。これに伴い、FTP アダプタ実行環境プロパティファイルを次のように修正した。 <ul style="list-style-type: none"> ftpadp.session.keep プロパティを追加した。 ftpadp.session.idle-timeout プロパティを追加した。 ftpadp.session.max プロパティを追加した。 ftp-command.allow プロパティの記載を修正した。 また、FTP コマンド許可リスト定義ファイルで指定できないコマンドとして QUIT コマンドを追加した。	6.8.3(1), 6.8.3(3), 6.8.6(3)
FTP アダプタに RENAME オペレーションを追加し、ファイルのリネームができるようにした。これに伴い、次の点を修正した。	6.8.3(3), 6.8.6(2), 6.8.6(3)

追加・変更内容	変更箇所
<ul style="list-style-type: none">FTP アダプタ実行環境プロパティファイルの ftpadp.cscthrough-filepath プロパティの省略時に実行できないコマンドの種類として、ファイルのリネーム前とリネーム後の記載を追加した。FTP コマンド許可リスト定義ファイルで実行を許可する FTP コマンドの実行タイミングの記載を集約し、ファイルのリネーム前・リネーム後のコマンドを追加した。	6.8.3(3), 6.8.6(2), 6.8.6(3)

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

このマニュアルをお読みになる際の前提情報については、マニュアル「アプリケーションサーバ & BPM/ESB 基盤 概説」のはじめにの説明を参照してください。

目次

前書き	2
変更内容	4
はじめに	6

第1編 開発環境のリファレンス

1	画面（開発環境）	18
1.1	画面構成（開発環境）	19
1.1.1	バイナリフォーマット定義ファイルを定義する画面の構成	19
1.1.2	HCSC コンポーネントを作成またはデータ変換を定義する画面の構成	20
1.1.3	ビジネスプロセスのデバッグ画面の構成	21
1.2	定義画面および情報表示画面	29
1.2.1	バイナリフォーマット定義画面	30
1.2.2	サービスアダプタ定義画面	35
1.2.3	ビジネスプロセス定義画面	62
1.2.4	データ変換定義画面	70
1.2.5	ユーザ定義受付定義画面	75
1.2.6	HCSC コンポーネント情報表示画面	90
1.2.7	ユーザ定義受付情報表示画面	93
1.3	バイナリフォーマット定義に関連するダイアログ	95
1.3.1	フォーマットダイアログ	95
1.3.2	単純内容要素ダイアログ	102
1.3.3	複合内容要素ダイアログ	115
1.3.4	構成要素ダイアログ	120
1.3.5	条件値設定ダイアログ	129
1.3.6	ノード選択ダイアログ（バイナリフォーマット定義）	131
1.3.7	要素選択ダイアログ	135
1.3.8	セパレータ選択ダイアログ	136
1.3.9	セパレータ追加/変更ダイアログ	137
1.3.10	【新規バイナリフォーマット定義ファイル】ウィザードのページ	138
1.4	ビジネスプロセスに関連するダイアログ	144
1.4.1	変数・相関セット一覧ダイアログ	144
1.4.2	ヘッダ割当変数ダイアログ	147
1.4.3	割当相関セット群ダイアログ	148
1.4.4	変数の表示ダイアログ	150

1.4.5	電文フォーマットの取込ダイアログ	151
1.4.6	フォルト処理の割当ダイアログ	152
1.4.7	受付アクティビティダイアログ	153
1.4.8	オペレーション名の取込ダイアログ (受付アクティビティ)	155
1.4.9	応答アクティビティダイアログ	156
1.4.10	オペレーション名の取込ダイアログ (応答アクティビティ)	158
1.4.11	サービス呼出アクティビティダイアログ	160
1.4.12	Java 呼出アクティビティダイアログ	162
1.4.13	データ変換アクティビティダイアログ	164
1.4.14	代入アクティビティダイアログ	166
1.4.15	代入アクティビティサブダイアログ	168
1.4.16	無操作アクティビティダイアログ	171
1.4.17	フォルト送出アクティビティダイアログ	172
1.4.18	補償アクティビティダイアログ	174
1.4.19	待機アクティビティダイアログ	175
1.4.20	検証アクティビティダイアログ	176
1.4.21	ログ出力アクティビティダイアログ	178
1.4.22	ログ出力アクティビティサブダイアログ	180
1.4.23	途中終了アクティビティダイアログ	182
1.4.24	スコープアクティビティダイアログ	183
1.4.25	繰り返しアクティビティダイアログ	184
1.4.26	繰り返しリスト設定ダイアログ	185
1.4.27	繰り返し条件設定ダイアログ	187
1.4.28	分岐アクティビティダイアログ	189
1.4.29	条件設定ダイアログ (分岐アクティビティ)	190
1.4.30	条件式の作成ダイアログ	192
1.4.31	並列処理アクティビティダイアログ	195
1.4.32	リンクダイアログ	196
1.4.33	条件設定ダイアログ (並列処理アクティビティ)	197
1.4.34	パレット設定ダイアログ	198
1.5	ビジネスプロセスのデバッグに関連するダイアログ	201
1.5.1	デバッグ構成ダイアログ	201
1.5.2	条件設定ダイアログ	204
1.5.3	値の設定ダイアログ	205
1.6	データ変換に関連するダイアログ	207
1.6.1	変換元スキーマファイル設定ダイアログ	207
1.6.2	変換元・変換先スキーマファイル設定ダイアログ	208
1.6.3	ルート要素選択ダイアログ	210
1.6.4	マッピング元設定ダイアログ	211

- 1.6.5 自動マッピング元設定ダイアログ 213
- 1.6.6 自動マッピング候補選択ダイアログ 215
- 1.6.7 くり返し設定ダイアログ 216
- 1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換) 217
- 1.6.9 ファンクション選択ダイアログ 219
- 1.6.10 名称検索ダイアログ 220
- 1.6.11 ノード条件設定ダイアログ 224
- 1.6.12 条件設定ダイアログ (ノード条件の設定) 225
- 1.6.13 マッピング定義登録ダイアログ 229
- 1.6.14 複製マッピング範囲設定ダイアログ 230
- 1.6.15 複製マッピング元設定ダイアログ 231
- 1.6.16 マッピング定義のインポートダイアログ 232
- 1.6.17 マッピング定義のエクスポートダイアログ 234
- 1.6.18 設定ダイアログ (データ変換の設定) 235
- 1.6.19 文字列連結ダイアログ 238
- 1.6.20 部分文字列取得ダイアログ 240
- 1.6.21 文字数取得ダイアログ 243
- 1.6.22 文字列調査ダイアログ 245
- 1.6.23 空白除去ダイアログ 246
- 1.6.24 数値フォーマット変換ダイアログ 248
- 1.6.25 数値演算ダイアログ 250
- 1.6.26 端数処理ダイアログ 252
- 1.6.27 総和ダイアログ 254
- 1.6.28 否定演算ダイアログ 255
- 1.6.29 論理演算ダイアログ 257
- 1.6.30 シフト演算ダイアログ 259
- 1.6.31 ノード名取得ダイアログ 262
- 1.6.32 ノード数取得ダイアログ 263
- 1.6.33 ノード調査ダイアログ 264
- 1.6.34 くり返しダイアログ 266
- 1.6.35 ソート条件追加/編集ダイアログ 268
- 1.6.36 選択ダイアログ 270
- 1.6.37 条件追加/編集ダイアログ 273
- 1.6.38 値置換えダイアログ 275
- 1.6.39 基数変換ダイアログ 278
- 1.6.40 カスタムダイアログ 280
- 1.6.41 定数ダイアログ 283
- 1.6.42 XPath ダイアログ 284
- 1.6.43 変換ファンクション選択ダイアログ 285

- 1.6.44 入力値を除去ダイアログ 286
- 1.6.45 DB アダプタマッピング設定ダイアログ 288
- 1.7 ユーザ定義受付に関連するダイアログ 290
 - 1.7.1 ユーザ定義受付削除ダイアログ 290
- 1.8 サービスの操作に関連するダイアログ 292
 - 1.8.1 複数パッケージングダイアログ 292
 - 1.8.2 複数サービス追加ダイアログ 293
 - 1.8.3 複数サービス削除ダイアログ 295
- 1.9 WSDL カスタムバインディングファイルに関連するダイアログ 297
 - 1.9.1 設定ダイアログ (WSDL カスタムバインディングファイルの設定) 297
- 1.10 検証・パッケージングに関連するダイアログ 299
 - 1.10.1 設定ダイアログ (検証・パッケージングの動作設定) 299
- 1.11 バイナリフォーマット定義画面の操作 302
 - 1.11.1 要素をコピーして貼り付ける 302
 - 1.11.2 要素を削除する 304
 - 1.11.3 要素を移動する 304
 - 1.11.4 操作を元に戻す 307
 - 1.11.5 操作をやり直す 307
- 1.12 ビジネスプロセス定義画面の操作 309
 - 1.12.1 オブジェクトをコピーする 309
 - 1.12.2 オブジェクトを切り取る 309
 - 1.12.3 オブジェクトを貼り付ける 310
 - 1.12.4 オブジェクトを削除する 312
 - 1.12.5 オブジェクトを整列する 312
 - 1.12.6 操作を元に戻す 313
 - 1.12.7 元に戻した操作をやり直す 313
 - 1.12.8 キャンバスの表示を拡大する 314
 - 1.12.9 キャンバスの表示を縮小する 314
 - 1.12.10 キャンバスの表示を元のサイズに戻す 315
 - 1.12.11 パレットの表示を設定する 315
 - 1.12.12 コメントを最小化する 318
 - 1.12.13 コメントを元のサイズに戻す 318
 - 1.12.14 コメントの背景色を変更する 318
 - 1.12.15 アクティビティのスナップ機能の有効・無効を設定する 319
 - 1.12.16 アクティビティのオートコネクト機能の有効・無効を設定する 321
 - 1.12.17 アクティビティの自動整列機能の設定を変更する 324
 - 1.12.18 アクティビティのアイコンのラベルサイズを変更する 326
- 1.13 データ変換定義画面の操作 328
 - 1.13.1 操作を元に戻す 328

- 1.13.2 操作をやり直す 328
- 1.13.3 名前空間接頭辞を XML に出力する 328
- 1.13.4 定義を保存する 329
- 1.13.5 マッピング線の色を変更する 329
- 1.13.6 スキーマツリービューアから要素のパスをコピーする 330
- 1.13.7 マッピングビューアのファンクションをコピーして貼り付ける 330
- 1.14 アウトラインビューのフィルタ機能の設定 331
- 1.14.1 変数一覧表示の有効・無効を設定する 331
- 1.14.2 アクティビティ一覧表示の有効・無効を設定する 331

2 コマンド (開発環境) 334

- 2.1 コマンドの種類 335
- 2.2 コマンドの入力形式 336
- 2.3 コマンドの文法の記述形式 338
- 2.4 サービスプラットフォームの開発環境で使用するコマンド 340
 - csamkxmls (DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルの生成) 340
 - cscbinaryparse (DOM とバイナリデータの相互変換) 341
 - cscfdx2xsd (バイナリフォーマット定義ファイルから XML フォーマット定義ファイルの生成) 345
 - cscgenbinary (バイナリフォーマット定義ファイルからバイナリ電文の生成) 346
 - cscjson2xsd (JSON 形式データから XSD ファイルへの変換 (標準モード)) 351
 - cscjson2xsdadv (JSON 形式データから XSD ファイルへの変換 (拡張モード)) 353
 - cscjsonxmlconv (JSON 形式データと XML 形式データの相互変換 (標準モード)) 354
 - cscjsonxmlconvadv (JSON 形式データと XML 形式データの相互変換 (拡張モード)) 356
 - cscsoas2servicedef (OpenAPI 仕様書を HCSC コンポーネントの定義に変換) 357
 - cscsoapmode (SOAP モードの設定) 360
 - csctransform (データ変換のテスト) 361
 - csmexecutebp (ビジネスプロセスの実行) 366

3 定義ファイル (開発環境) 370

- 3.1 定義ファイルの種類 371
- 3.2 定義ファイルの入力形式 373
- 3.3 定義ファイルの文法の記述形式 374
- 3.4 TP1 連携で利用するファイル 376
 - 3.4.1 TP1/RPC 受付定義ファイル 376
 - 3.4.2 TP1 アダプタ環境定義ファイル 378
 - 3.4.3 TP1 アダプタ通信構成定義ファイル 380
- 3.5 FTP 連携で利用するファイル 386
 - 3.5.1 FTP 受付定義ファイル 386
 - 3.5.2 ファイル操作アダプタ定義ファイル 389
- 3.6 SOAP 連携で利用するファイル 402
 - 3.6.1 SOAP 受付定義ファイル 402

- 3.6.2 クライアント定義ファイル 403
- 3.7 Object Access アダプタで利用するファイル 405
 - 3.7.1 Object Access アダプタ通信構成定義ファイル 405
- 3.8 Message Queue アダプタで利用するファイル 409
 - 3.8.1 Message Queue アダプタ環境定義ファイル 409
 - 3.8.2 Message Queue アダプタ通信構成定義ファイル 411
- 3.9 Message Queue 受付で利用するファイル 417
 - 3.9.1 Message Queue 受付定義ファイル 417
- 3.10 HTTP アダプタで利用するファイル 423
 - 3.10.1 HTTP アダプタ定義ファイル 423
- 3.11 HTTP 受付で利用するファイル 429
 - 3.11.1 HTTP レスポンスヘッダ定義ファイル 429
 - 3.11.2 HTTP 受付サービス選択定義ファイル 430
 - 3.11.3 HTTP 受付定義ファイル 431
 - 3.11.4 HTTP 受付ルーティング定義ファイル 443
- 3.12 ファイルイベント連携で利用するファイル 452
 - 3.12.1 ファイルイベント受付定義ファイル 452
- 3.13 Kafka アダプタで利用するファイル 455
 - 3.13.1 Kafka アダプタ定義ファイル 455
- 3.14 Kafka 受付で利用するファイル 460
 - 3.14.1 Kafka 受付定義ファイル 460
- 3.15 スケジュール駆動受付で利用するファイル 471
 - 3.15.1 スケジュール駆動受付定義ファイル 471
- 3.16 gRPC アダプタで利用するファイル 475
 - 3.16.1 gRPC アダプタ独自定義ファイル 475
- 3.17 gRPC 受付で利用するファイル 480
 - 3.17.1 gRPC 受付定義ファイル 480
- 3.18 JSON 形式データと XML 形式データの変換で利用するファイル 483
 - 3.18.1 JSON-XML 変換定義ファイル 483
- 3.19 データ変換単体テストコマンドで利用するファイル 486
 - 3.19.1 データ変換コマンドプロパティファイル 486
 - 3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル 491
 - 3.19.3 バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル 495
 - 3.19.4 バイナリ電文生成定義ファイル 499
 - 3.19.5 バイナリパースコマンドプロパティファイル 502
- 3.20 ログ出力アクティビティで利用するファイル 506
 - 3.20.1 ログ出力アクティビティ定義ファイル 506
- 3.20.2 メッセージ定義ファイル 509
- 3.21 ビジネスプロセスの実行で利用するファイル 513

第2編 実行環境・運用環境のリファレンス

4 画面（運用環境） 516

- 4.1 画面構成（運用環境） 517
- 4.2 基本情報ページ 520
 - 4.2.1 HCSC サーバ基本情報 520
 - 4.2.2 ビジネスプロセス基本情報 521
 - 4.2.3 サービスアダプタ基本情報 522
 - 4.2.4 ユーザ定義受付基本情報 527
- 4.3 定義情報ページ 529
 - 4.3.1 HCSC サーバ定義情報 529
 - 4.3.2 ユーザ定義受付定義情報 531
- 4.4 稼働運用ページ 532
 - 4.4.1 HCSC サーバ稼働運用 532
 - 4.4.2 サービスアダプタ稼働運用 534
 - 4.4.3 ビジネスプロセス稼働運用 535
 - 4.4.4 ユーザ定義受付稼働運用 537
- 4.5 稼働確認ページ 540
- 4.6 履歴管理ページ 545
 - 4.6.1 検索条件フィールド 545
 - 4.6.2 検索結果フィールド 548
 - 4.6.3 詳細情報フィールド 549

5 コマンド（運用環境・実行環境） 554

- 5.1 コマンドの種類 555
 - 5.1.1 コマンドの一覧 555
 - 5.1.2 コマンドの同時実行について 560
 - 5.1.3 コマンドのタイムアウト機能 560
 - 5.1.4 コマンドの中断機能 561
- 5.2 コマンドの入力形式 562
- 5.3 コマンドの文法の記述形式 564
- 5.4 サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンド 566
 - csaftpuseradd (FTP アダプタのユーザの登録・更新) 566
 - csaftpuserdel (FTP アダプタのユーザの削除) 571
 - csaftpuserls (FTP アダプタのユーザの表示) 573
 - csahttppuseradd (HTTP アダプタで使用するアカウント情報の登録・更新) 575
 - csahttppuserdel (HTTP アダプタで使用するアカウント情報の削除) 582
 - csahttppuserls (HTTP アダプタで使用するアカウント認証のユーザ情報の表示) 584
 - csakeyadd (公開鍵認証の秘密鍵情報の登録・更新) 585

csakeydel (公開鍵認証の秘密鍵情報の削除)	588
csakeyls (公開鍵認証の秘密鍵情報の表示)	589
csauseradd (パスワード認証のユーザ情報の登録・更新)	590
csauserdel (パスワード認証のユーザ情報の削除)	595
csauserls (パスワード認証のユーザ情報の表示)	596
cscapputil (アプリケーションの操作)	597
csccmctl (定義ファイルの管理)	600
csccompoconfig (HCSC コンポーネントの定義)	603
csccompodeploy (HCSC コンポーネントの配備)	606
csccompstart (HCSC コンポーネントの開始)	610
csccompstop (HCSC コンポーネントの停止)	613
csccompounddeploy (配備済みの HCSC コンポーネントの削除)	616
cscenvbackup (HCSC-Manager 環境のバックアップ)	619
cscenvrestore (HCSC-Manager 環境のリストア)	621
cscenvupdate (実行環境のバージョンアップ)	622
cscfscls (共通フォルダの参照)	623
cscfscrm (共通フォルダの削除)	626
cscfswls (作業フォルダの参照)	629
cscfswrm (作業フォルダの削除)	632
cscmsgtk (メッセージトラッキング機能の起動)	634
cscpasswd (ユーザの管理)	638
cscpidelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除)	641
cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行)	646
cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)	650
cscprecache (フォーマット定義およびデータ変換定義の事前キャッシュ)	667
cscrcptnstart (標準受付およびユーザ定義受付の開始)	669
cscrcptnstop (標準受付およびユーザ定義受付の停止)	671
cscrepcheck (インポート可否の検証)	674
cscrepctl (インポート/エクスポート)	676
cscrepdiff (リポジトリ情報の差分の表示)	680
cscrepls (リポジトリ情報の表示)	686
cscrepupdate (リポジトリのアップデート)	702
cscresinfo (リソース稼働情報の表示)	703
cscstatus (状態表示)	709
cscsetup (本番環境の簡易セットアップ)	713
cscsvcctl (サービス情報の管理)	716
cscsvcls (サービス情報の表示)	719
cscsvconfig (HCSC サーバランタイムの定義)	724
cscsvsetup (HCSC サーバのセットアップ)	726
cscsvstart (HCSC サーバの起動)	727
cscsvstop (HCSC サーバの停止)	730
cscsvunsetup (HCSC サーバのアンセットアップ)	732
cscutil (各種操作)	734
csmftpaddusr (FTP インバウンドアダプタのユーザの登録・更新)	739
csmftpdelusr (FTP インバウンドアダプタのユーザの削除)	742

csmftplsusr (FTP インバウンドアダプタのユーザの表示)	744
csmftplshistory (転送履歴の表示)	745
csmmailaddusr (メールアダプタユーザ情報の登録・更新)	749
csmmaildelusr (メールアダプタユーザ情報の削除)	752
csmmaillsusr (メールアダプタユーザ情報の表示)	755

6 定義ファイル (運用環境・実行環境) 757

6.1	定義ファイルの種類	758
6.2	定義ファイルの入力形式	762
6.3	定義ファイルの文法の記述形式	764
6.4	HCSC サーバの構築で利用するファイル	766
6.4.1	cscsetup コマンド定義ファイル	766
6.4.2	HCSC サーバ構成定義ファイル	767
6.4.3	HCSC サーバセットアップ定義ファイル	774
6.5	HCSC サーバの運用で利用するファイル	797
6.5.1	HCSC-Manager コマンド JavaVM 起動オプション定義ファイル	797
6.5.2	HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル	800
6.5.3	HCSC-Manager 定義ファイル	801
6.5.4	HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル	809
6.5.5	HCSC コンポーネント指定ファイル	810
6.5.6	HCSC サーバランタイム定義ファイル	813
6.5.7	エミュレート設定情報定義ファイル	841
6.5.8	コンポーネント ID 設定ファイル	847
6.5.9	コンポーネント種別設定ファイル	849
6.5.10	サービス情報変更定義ファイル	851
6.6	SOAP 連携で利用するファイル	860
6.6.1	SOAP Fault 動作定義ファイル	860
6.6.2	ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	862
6.7	TP1 連携で利用するファイル	864
6.7.1	TP1 アダプタ実行環境プロパティファイル	864
6.8	FTP 連携で利用するファイル	867
6.8.1	FTP アダプタアカウント定義ファイル	867
6.8.2	FTP アダプタコマンド定義ファイル	867
6.8.3	FTP アダプタ実行環境プロパティファイル	869
6.8.4	FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル	891
6.8.5	FTP 受付コンフィグファイル	892
6.8.6	FTP コマンド許可リスト定義ファイル	896
6.8.7	FTP 実行許可リスト定義ファイル	899
6.8.8	ファイル操作アダプタ実行環境プロパティファイル	902
6.8.9	リストコマンドオプション定義ファイル	908

- 6.9 ファイルイベント連携で利用するファイル 912
- 6.9.1 ファイルイベント受付コンフィグファイル 912
- 6.9.2 ファイルイベント受付共通コンフィグファイル 913
- 6.10 ファイルアダプタで利用するファイル 915
- 6.10.1 ファイルアダプタ実行環境プロパティファイル 915
- 6.11 Object Access アダプタで利用するファイル 918
- 6.11.1 Object Access アダプタ実行環境プロパティファイル 918
- 6.12 Message Queue アダプタで利用するファイル 921
- 6.12.1 Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイル 921
- 6.13 メールアダプタで利用するファイル 925
- 6.13.1 メールアダプタアカウント定義ファイル 925
- 6.13.2 メールアダプタコマンド定義ファイル 925
- 6.13.3 メールアダプタ実行環境プロパティファイル 927
- 6.13.4 メールヘッダ定義ファイル 937
- 6.14 HTTP アダプタで利用するファイル 939
- 6.14.1 HTTP アダプタアカウント定義ファイル 939
- 6.14.2 HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル 939
- 6.14.3 HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル 952
- 6.15 コマンドアダプタで利用するファイル 955
- 6.15.1 実行許可コマンド定義ファイル 955
- 6.15.2 プロセス環境変数定義ファイル 956
- 6.15.3 コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル 957
- 6.15.4 コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル 963
- 6.16 SFTP アダプタで利用するファイル 965
- 6.16.1 SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル 965
- 6.16.2 SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル 980
- 6.17 Kafka アダプタで利用するファイル 982
- 6.17.1 Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル 982
- 6.17.2 Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル 989
- 6.18 スケジュール駆動受付で利用するファイル 991
- 6.18.1 スケジュール駆動受付コンフィグファイル 991
- 6.18.2 スケジュール駆動受付共通コンフィグファイル 993
- 6.19 gRPC アダプタで利用するファイル 995
- 6.19.1 gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル 995
- 6.19.2 gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル 1000
- 6.20 ユーザ認証で利用するファイル 1002
- 6.20.1 ユーザ認証情報管理コマンド定義ファイル 1002
- 6.20.2 アカウント情報管理コマンド定義ファイル 1003
- 6.21 ユーザ情報の登録で利用するファイル 1005

6.21.1 ユーザ情報指定ファイル 1005

付録 1009

付録 A 文字コード対応表 1010

付録 A.1 半角コードの対応表 1010

付録 A.2 特殊文字のコード対応表 1018

付録 B 用語解説 1029

索引 1030

1

画面（開発環境）

この章では、サービスプラットフォームの開発環境で使用する画面について説明します。

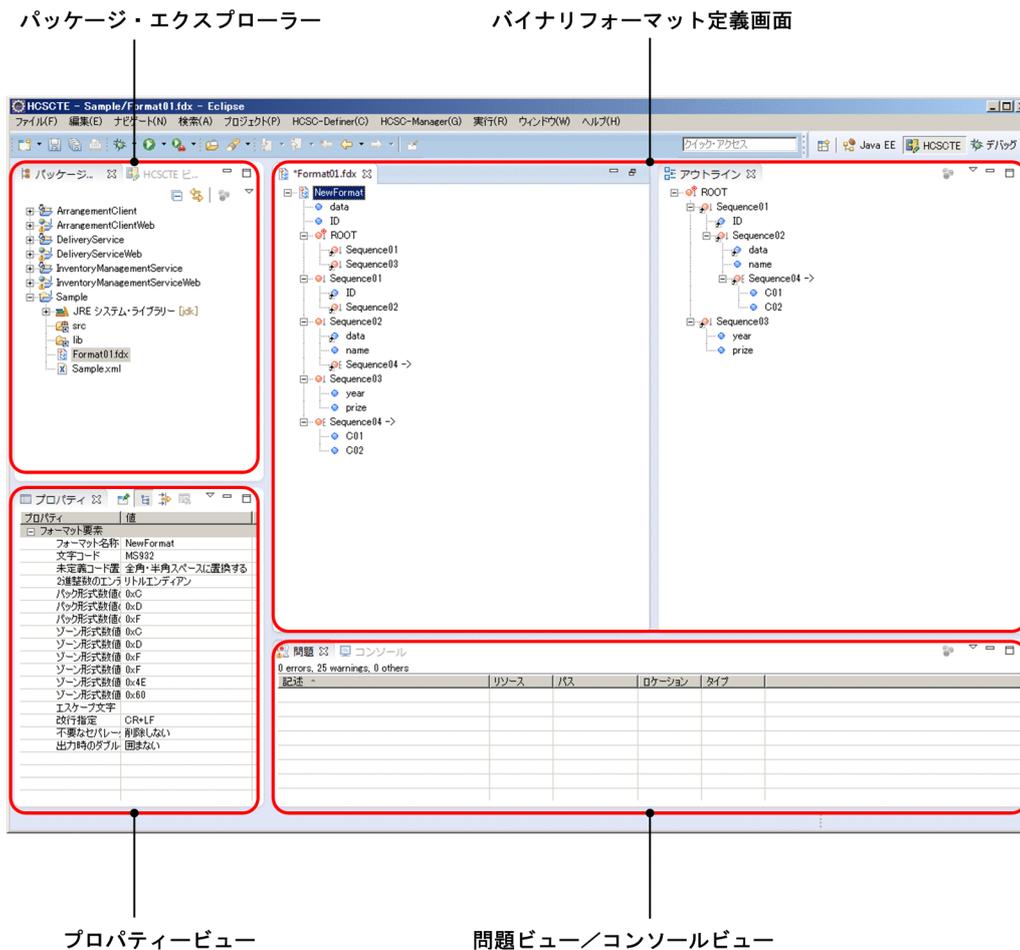
1.1 画面構成（開発環境）

開発環境で使用する画面の構成について説明します。

1.1.1 バイナリフォーマット定義ファイルを定義する画面の構成

次の画面は、ウィザードで作成したバイナリフォーマット定義ファイルに対し、要素などを定義する画面です。画面の構成を説明します。

図 1-1 バイナリフォーマット定義ファイルを定義する画面の構成



パッケージ・エクスプローラー

バイナリフォーマット定義ファイルの一覧が表示されます。

バイナリフォーマット定義画面

バイナリフォーマット定義ファイルの内容を定義する画面です。バイナリフォーマット定義エディタおよびアウトラインビューから構成されます。

バイナリフォーマット定義画面の詳細については、「1.2.1 バイナリフォーマット定義画面」を参照してください。

プロパティビュー

バイナリフォーマット定義画面で定義したバイナリフォーマット定義ファイルの情報や各要素の情報が表示されます。

問題ビュー

バイナリフォーマット定義ファイルを検証した結果、問題があった場合に、問題点の一覧が表示されます。

コンソールビュー

バイナリフォーマット定義ファイルの検証結果が表示されます。

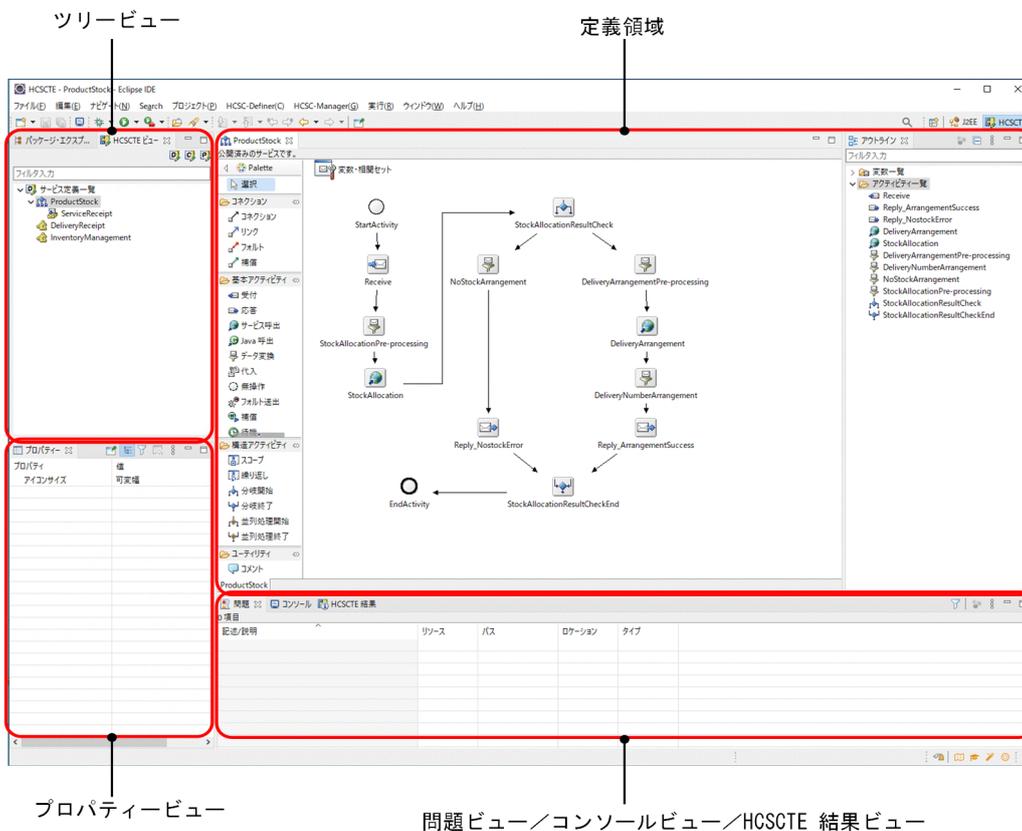
参考

Eclipse のパースペクティブによっては、初期状態で表示されないビューがあります。この場合、Eclipse のメニューから [ウィンドウ] - [ビューの表示] を選択して、必要なビューを開いてください。

1.1.2 HCSC コンポーネントを作成またはデータ変換を定義する画面の構成

次の画面は、HCSC コンポーネントの作成や、データ変換の定義で使用する画面です。画面の構成を説明します。

図 1-2 HCSC コンポーネントを作成またはデータ変換を定義する画面の構成



ツリービュー

サービス定義一覧、公開サービス一覧、およびシステム構成定義一覧が表示されます。

ツリービューの表示項目は、ツリービューの上部にあるテキストボックスに表示項目の名称を入力することでフィルタリングできます。

定義領域

操作に応じて次に示す定義画面または情報表示画面が表示されます。

- サービスアダプタ定義画面
- ビジネスプロセス定義画面
- データ変換定義画面
- ユーザ定義受付定義画面
- HCSC コンポーネント情報表示画面
- ユーザ定義受付情報表示画面

それぞれの画面の詳細については、「[1.2 定義画面および情報表示画面](#)」を参照してください。

プロパティビュー

定義領域で定義した HCSC コンポーネントの情報などが表示されます。

問題ビュー

HCSC コンポーネントおよびデータ変換定義を検証した結果、問題があった場合に、問題点の一覧が表示されます。

コンソールビュー

次に示す情報が表示されます。

- 出力時刻（出力形式：[yyyy/MM/dd HH:mm:ss]）
- エラー情報
- 検証結果

HCSCTE 結果ビュー

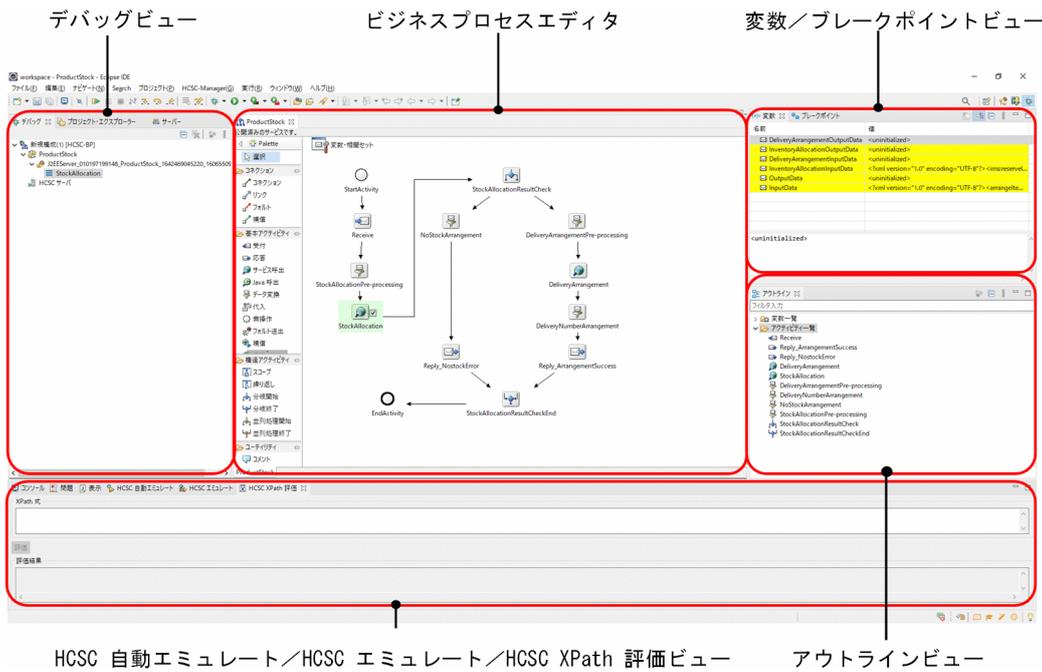
検証、パッケージング、公開化、非公開化が発生する処理の結果として、次に示す情報が表示されます。

- サービス名
- サービス種別
- メッセージ

1.1.3 ビジネスプロセスのデバッグ画面の構成

ビジネスプロセスのデバッグで使用する画面の構成を次の図に示します。

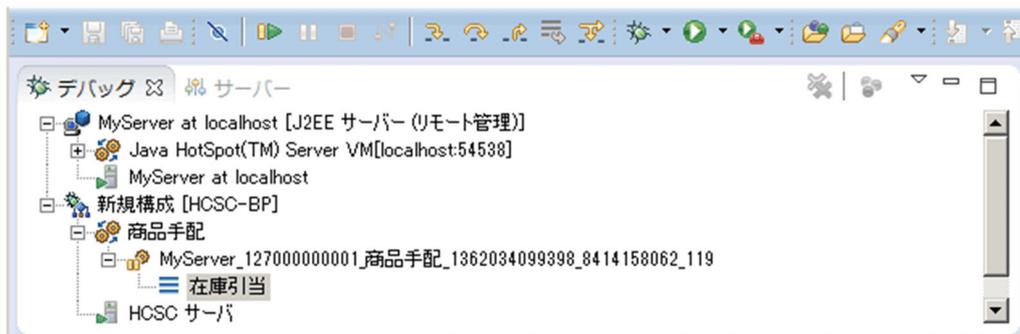
図 1-3 ビジネスプロセスのデバッグ画面の構成



(1) デバッグビュー

デバッグ中のビジネスプロセスの名称、および中断しているアクティビティの名称が表示されます。また、ステップ実行、再開、および終了の操作を実行します。

図 1-4 デバッグビュー



デバッグビューに表示されるアイコンを次に示します。

表 1-1 デバッグビューのアイコン

アイコン	名称	説明
	デバッグ構成	「[[デバッグ構成] ダイアログで指定した名称] [HCSC-BP]」が表示されます。
	ビジネスプロセス	デバッグ中のビジネスプロセスの名称が表示されます。
	プロセスインスタンス※	プロセスインスタンス名が表示されます。

アイコン	名称	説明
	アクティビティ	中断しているアクティビティの名称が表示されます。
	HCSC サーバ	常に「HCSC サーバ」が表示されます。
	ステップイン	中断しているアクティビティがステップ実行、および再開されます。ステップイン、ステップオーバー、ステップリターン、および再開したときの処理の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム開発ガイド 基本開発編」の「10. ビジネスプロセスのデバッグ」を参照してください。
	ステップオーバー	
	ステップリターン	
	再開	
	終了	ビジネスプロセスのデバッグが終了されます。

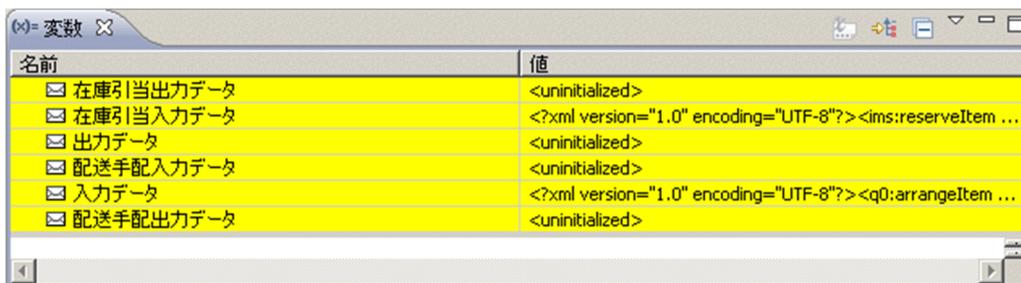
注※

プロセスインスタンスの処理が中断している場合、アイコンは  で表示されます。プロセスインスタンスが処理中の場合は  になります。

(2) 変数ビュー

ビジネスプロセスで現在使用している変数、および関連セットを確認したり、変数の値を更新したりするときに使用します。

図 1-5 変数ビュー



名前	値
 在庫引当出力データ	<uninitialized>
 在庫引当入力データ	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?><ims:reserveItem ...
 出力データ	<uninitialized>
 配送手配入力データ	<uninitialized>
 入力データ	<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?><q0:arrangeItem ...
 配送手配出力データ	<uninitialized>

[名前]

変数 () および関連セット () の名称が表示されます。

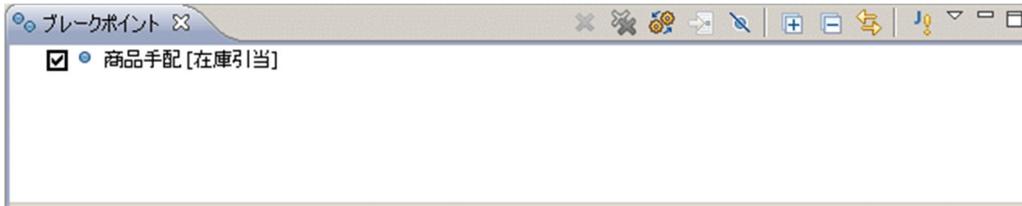
[値]

変数および関連セットの値が表示されます。ビジネスプロセスの実行によって変数の値が変わった場合や、変数の値を更新した場合、値が変わった変数の [名前] および [値] のセルが黄色で表示されます。変数が初期化されていない場合は、<uninitialized>が表示されます。なお、実行中のスコープと上位のスコープに同じ名前の変数や関連セットがある場合、変数ビューには実行中のスコープの変数や関連セットが表示されます。

(3) ブレークポイントビュー

ブレークポイントの設定を有効，または無効にする場合に使用します。

図 1-6 ブレークポイントビュー



アクティビティに設定したブレークポイントが「ビジネスプロセス名 [アクティビティ名]」の形式で表示されます。ブレークポイントに条件式を指定している場合は、「ビジネスプロセス名 [アクティビティ名]：条件式」の形式で表示されます。

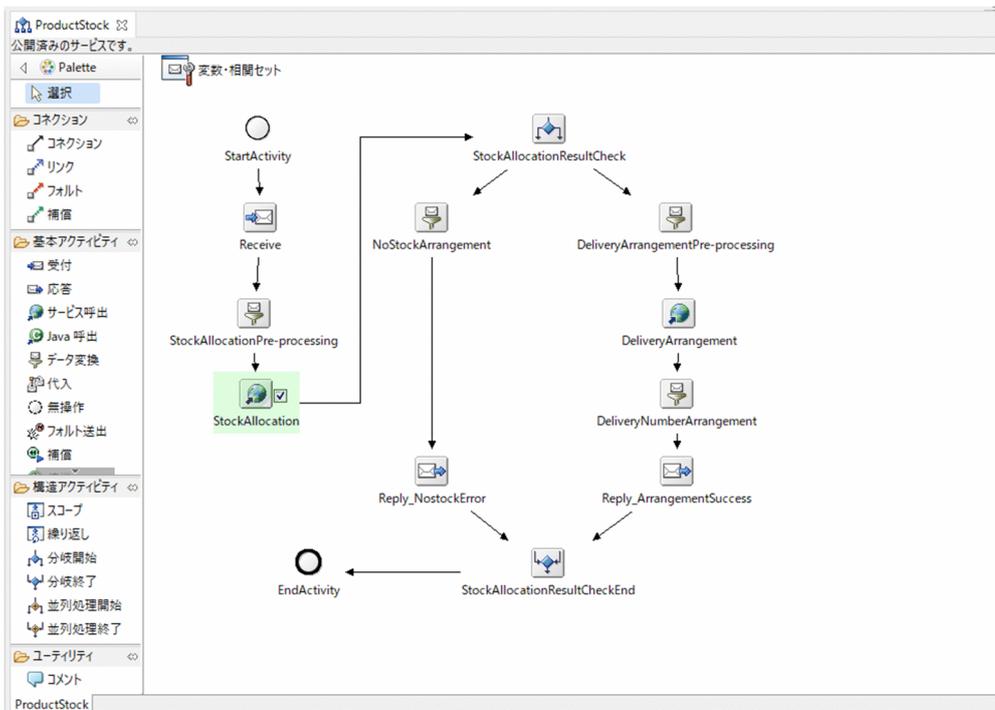
設定したブレークポイントを有効にする場合は，チェックボックスをチェックします。設定したブレークポイントを無効にする場合は，チェックボックスのチェックを解除します。

なお，ビジネスプロセスのデバッグでは，すべてのブレークポイントをスキップする機能（）は使用できません。

(4) ビジネスプロセスエディタ

デバッグ中のビジネスプロセスが表示されます。

図 1-7 ビジネスプロセスエディタ



プロセスインスタンスの処理が中断しているときは，中断しているアクティビティが緑色で表示されます。

なお、ブレークポイントが設定されたアクティビティには、ブレークポイントを表すマークが付きます。ブレークポイントが有効の場合は、次の図のようにマークがチェックされた状態になります。ブレークポイントが無効の場合は、マークのチェックが外れた状態になります。

図 1-8 ブレークポイントが設定されたアクティビティ



(5) HCSC 自動エミュレートビュー

サービスの自動エミュレーションを設定するときに使用します。

図 1-9 HCSC 自動エミュレートビュー



[有効]

サービスの自動エミュレーションの設定を有効にする場合にチェックボックスをチェックします。

[優先順位]

先頭の行から順番に 1, 2, 3, ...が表示されます。

[サービス名]

セルを選択すると、選択できるサービスの一覧がドロップダウンリストで表示されます。

[オペレーション名]

セルを選択すると、[サービス名] で選択したサービスが持つオペレーションの一覧がドロップダウンリストで表示されます。

[応答種別]

セルを選択すると、通常応答またはフォルト応答をドロップダウンリストから選択できます。

[応答電文]

セルを選択すると、[...] ボタンが表示されます。[...] ボタンをクリックすると、応答電文を設定するダイアログが表示されます。すでに応答電文を設定している場合は、応答電文のファイル名が表示されます。

[条件]

サービスをエミュレーションする条件式を XPath で入力します。条件式を入力するときは、次の点に注意してください。

- サービスの要求電文に対して条件を設定するため、変数名の指定は不要です。

- 空文字 (0x00) および csc:getVariableData などの拡張関数は使用できません。
- 条件式を指定しなかった場合は、常に真として評価されます。

[追加] ボタン

テーブルに行が追加されます。

[削除] ボタン

セルを選択して [削除] ボタンをクリックすると、選択したセルを含む行が削除されます。

[上へ] ボタン

選択した行の優先順位を上げます。

[下へ] ボタン

選択した行の優先順位を下げます。

[保存] ボタン

HCSC 自動エミュレートビューで設定した情報を保存するダイアログが表示されます。

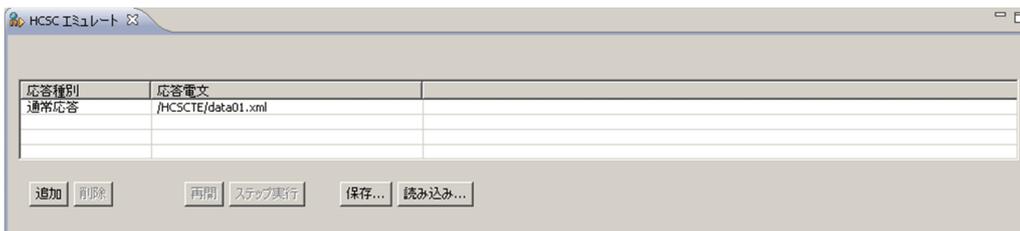
[読み込み] ボタン

HCSC 自動エミュレートビューで設定した情報を取得するダイアログが表示されます。

(6) HCSC エミュレートビュー

サービスの手動エミュレーションを設定、および実行するときに使用します。

図 1-10 HCSC エミュレートビュー



[応答種別]

セルを選択すると、ドロップダウンリストが表示され、通常応答またはフォルト応答を選択できます。

[応答電文]

セルを選択すると、[...] ボタンが表示されます。[...] ボタンをクリックすると、応答電文を設定するダイアログが表示されます。すでに応答電文を設定している場合は、応答電文のファイル名が表示されます。

[追加] ボタン

テーブルに行が追加されます。

[削除] ボタン

セルを選択して [削除] ボタンをクリックすると、選択したセルを含む行が削除されます。

[再開] ボタン

サービスがエミュレーションされ、ビジネスプロセスのデバッグが再開されます。

[ステップ実行] ボタン

サービスがエミュレーションされ、ビジネスプロセスのデバッグがステップオーバーされます。

[保存] ボタン

HCSC エミュレートビューで設定した情報を保存するダイアログが表示されます。

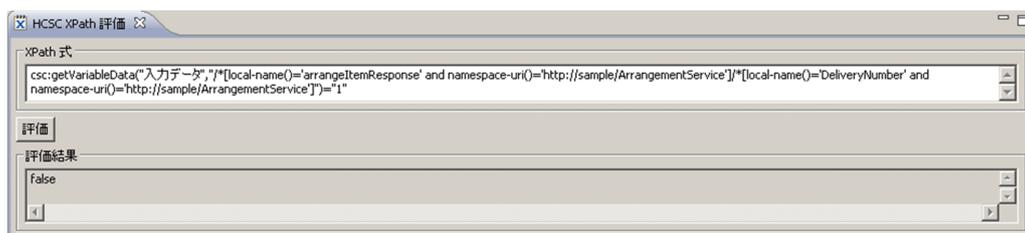
[読み込み] ボタン

HCSC エミュレートビューで設定した情報を取得するダイアログが表示されます。

(7) HCSC XPath 評価ビュー

分岐開始アクティビティや代入アクティビティの条件式を評価するときに使用します。

図 1-11 HCSC XPath 評価ビュー



[XPath 式]

条件式を XPath で入力します。条件式を入力するときは、次の点に注意してください。

- 空文字 (0x00) は使用できません。
- 改行が含まれる値の同値判定はできません。

例えば、変数 x の要素/y/z を次に示すような値とします。

```
"a  
b"
```

このとき、次の XPath 式で XPath 評価を実行しても評価結果は真 (true) になりません。

```
$x/y/z="a  
b"
```

改行文字やスペースを取り除く XPath の関数 `normalize-space()` を使用することで回避できます。

[評価] ボタン

[XPath 式] に入力した条件式が評価されます。

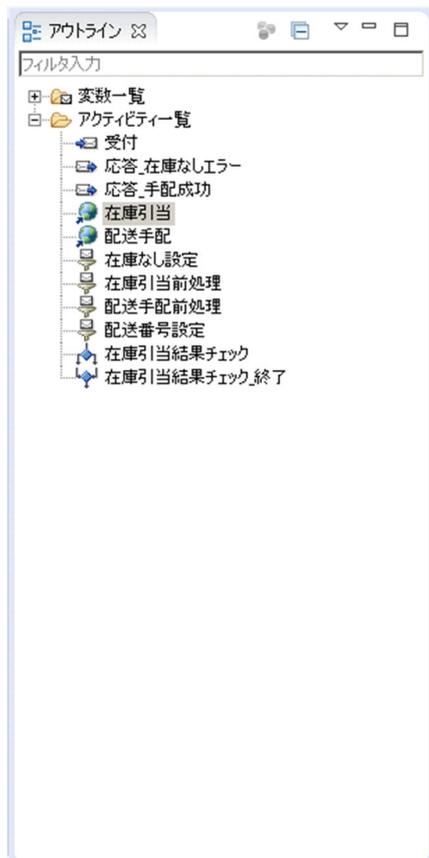
[評価結果]

[XPath 式] に入力した条件式の評価結果が表示されます。

(8) アウトラインビュー

デバッグ中のビジネスプロセスで定義した変数の名称, およびアクティビティの名称が表示されます。

図 1-12 アウトラインビュー



1.2 定義画面および情報表示画面

この節では、開発環境で使用する画面を定義内容ごとに項目を分けて説明します。画面の種類と、各画面の説明個所を次の表に示します。

表 1-2 開発環境で使用する画面の一覧

画面名	画面と構成要素（タブなど）の説明	説明個所
バイナリフォーマット定義画面	バイナリフォーマット定義ファイルを定義します。 <ul style="list-style-type: none">バイナリフォーマット定義エディタ バイナリフォーマット定義ファイルの内容を定義します。アウトラインビュー バイナリフォーマット定義エディタで定義した各要素の関係が表示されます。	1.2.1
サービスアダプタ定義画面 (Web サービスの場合)	SOAP アダプタの定義内容を表示または編集します。 「基本」タブに基本項目、「詳細」タブに詳細項目を表示します。	1.2.2(1)
サービスアダプタ定義画面 (SessionBean の場合)	SessionBean アダプタの定義内容を表示または編集します。 「基本」タブに基本項目、「詳細」タブに詳細項目を表示します。	1.2.2(2)
サービスアダプタ定義画面 (MDB (WS-R) の場合)	MDB (WS-R) アダプタの定義内容を表示または編集します。 「基本」タブに基本項目、「詳細」タブに詳細項目を表示します。	1.2.2(3)
サービスアダプタ定義画面 (MDB (DB キュー) の場合)	MDB (DB キュー) アダプタの定義内容を表示または編集します。 「基本」タブに基本項目を表示します。	1.2.2(4)
サービスアダプタ定義画面 (gRPC アダプタの場合)	gRPC アダプタの定義内容を表示または編集します。 「基本」タブに基本項目、「詳細」タブに詳細項目を表示します。	1.2.2(5)
サービスアダプタ定義画面 (汎用カスタムアダプタの場合)	汎用カスタムアダプタの定義内容を表示または編集します。 「基本」タブに基本項目、「詳細」タブに詳細項目を表示します。	1.2.2(6)
サービスアダプタ定義画面 (その他のアダプタの場合)	次に示すアダプタの定義内容を表示または編集します。 <ul style="list-style-type: none">DB アダプタTP1 アダプタファイルアダプタObject Access アダプタMessage Queue アダプタFTP アダプタファイル操作アダプタメールアダプタコマンドアダプタHTTP アダプタSFTP アダプタKafka アダプタ 「基本」タブに基本項目、「詳細」タブに詳細項目を表示します。	1.2.2(7)
ビジネスプロセス定義画面	ビジネスプロセスをビジネスプロセスエディタで定義します。	1.2.3

画面名	画面と構成要素（タブなど）の説明	説明箇所
データ変換定義画面	データ変換をマッピング定義エディタで定義します。	1.2.4
ユーザ定義受付定義画面	ユーザ定義受付の定義内容を表示または編集します。 「基本」タブに基本項目、「詳細」タブに詳細項目を表示します。	1.2.5
HCSC コンポーネント情報表示画面	HCSC サーバの構成および HCSC コンポーネントの情報が表示されます。	1.2.6
ユーザ定義受付情報表示画面	ユーザ定義受付の情報が表示されます。	1.2.7

この章の画面や操作の説明で使用している記号を次に示します。

記号	意味
< >	< >内の名称がユーザの環境によって異なることを表します。
「 」	入力値、可変値、またはメッセージなどのユーザが入力する内容を表します。

注意事項

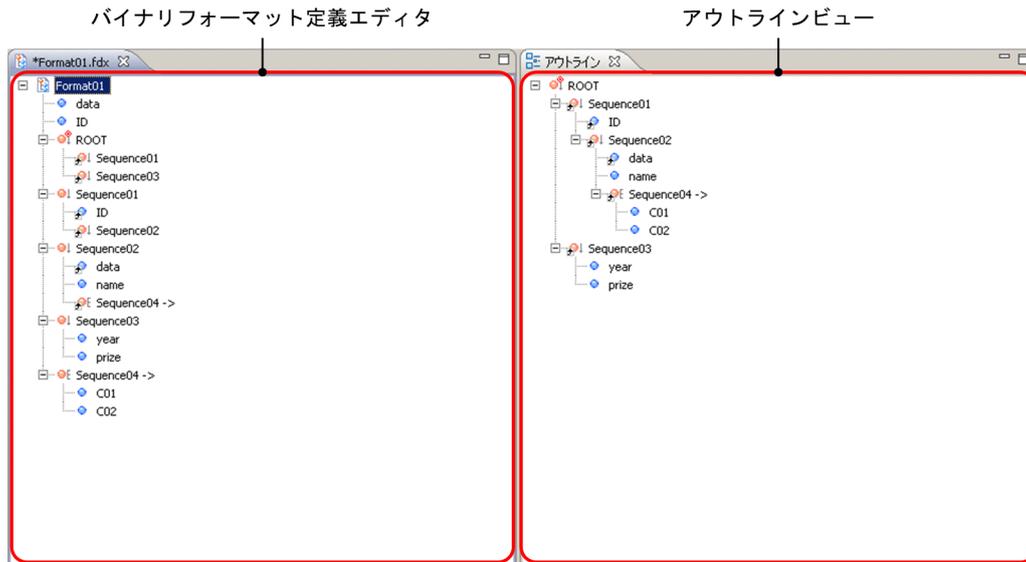
- HCSCTE では、複数のウィンドウからの同時操作はサポートされていません。Eclipse のメニューから [ウィンドウ] - [新規ウィンドウ] を選択して、新しいウィンドウを開かないでください。
- ビジネスプロセス定義画面やサービスアダプタ定義画面などのオープンに失敗した場合、不正なエディタが開くことがあります。誤動作を避けるため、このエディタはすぐに閉じてください。

1.2.1 バイナリフォーマット定義画面

バイナリフォーマット定義ファイルの定義で使用する、バイナリフォーマット定義画面について説明します。

バイナリフォーマット定義ファイルの作成方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4 電文フォーマット（バイナリフォーマット定義ファイル）の作成方法」を参照してください。

図 1-13 バイナリフォーマット定義画面



バイナリフォーマット定義画面は、バイナリフォーマット定義エディタとアウトラインビューから構成されます。

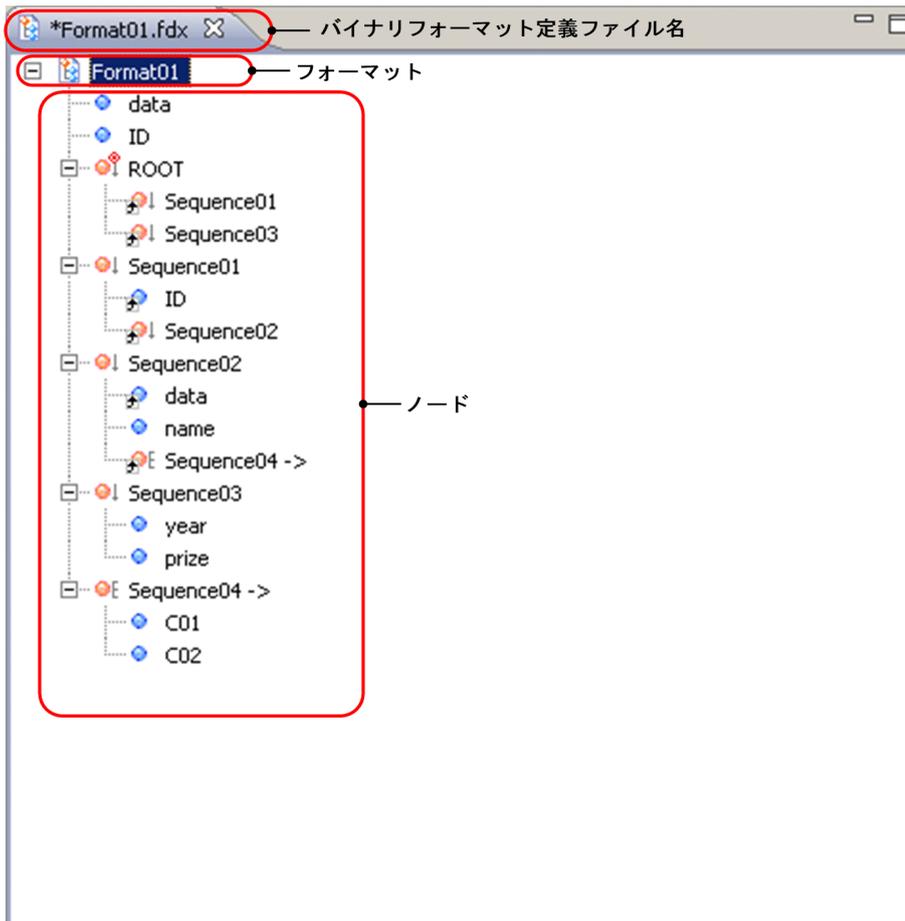
それぞれの表示内容について、次に説明します。

(1) バイナリフォーマット定義エディタ

要素を設定してバイナリフォーマット定義ファイルの内容を定義します。定義した内容はツリー形式で表示されます。

バイナリフォーマット定義エディタの表示内容について説明します。

図 1-14 バイナリフォーマット定義エディタ



バイナリフォーマット定義ファイル名

バイナリフォーマット定義ファイルの名称です。

バイナリフォーマット定義エディタは、複数のバイナリフォーマット定義ファイルを開いて編集できます。編集するバイナリフォーマット定義ファイルの名称をクリックすると、編集の対象がアクティブになります。また、アウトラインビューの表示も切り替わります。

フォーマット ()

バイナリフォーマット定義ファイルのフォーマット名です。

ノード

バイナリフォーマット定義ファイル内に定義されている要素です。

フォーマットを基準に1つ目の階層はグローバル定義の要素です。2つ目の階層は複合内容要素の構成要素です。各ノードには、アイコンと要素名が表示されます。

なお、バイナリフォーマット定義エディタでノードを選択すると、アウトラインビューでも同じノードが選択状態になります。

各ノードの表示内容を次の表に示します。

表 1-3 バイナリフォーマット定義エディタに表示されるノード

区分	アイコン	説明
グローバル定義の要素		単純内容要素です。
		逐次構成の複合内容要素です。
		ルート要素に設定されている逐次構成の複合内容要素です。
		選択構成の複合内容要素です。
		ルート要素に設定されている選択構成の複合内容要素です。
複合内容要素の構成要素		構成要素として設定されている単純内容要素です。
		構成要素として設定されている逐次構成の複合内容要素です。
		構成要素として設定されている選択構成の複合内容要素です。
		ローカル定義の単純内容要素です。

検証の結果として、警告またはエラーが発生しているノードには、上で示すアイコンに警告またはエラーの発生を示すアイコン（警告：，エラー：）が付与されて表示されます。

出現回数

ノードに出現回数が設定されている場合に、次の形式で表示されます。

[最小出現回数:最大出現回数]

構成要素を設定したときに、出現回数をどのように設定したかによって、出現回数の表示は異なります。出現回数の表示と設定内容の関係を次の表に示します。

表 1-4 出現回数の表示と設定内容の関係

表示形式	出現回数の指定方法	説明
[n:n]	固定	n は固定の出現回数です。 最小出現回数と最大出現回数に同じ値が表示されます。例えば、出現回数が 3 回で固定の場合、[3:3]と表示されます。
[n:*]	データの終端まで	データを省略できる場合 最小出現回数 n が 0 になり、[0:*]と表示されます。 データを省略できない場合 最小出現回数 n が 1 になり、[1:*]と表示されます。
[0:*]->	ノード指定	最小出現回数は 0、最大出現回数は*で表示されます。また、ほかのノードを参照するノードであることを示す「->」が表示されます。
[n:m]	範囲指定	出現回数が n~m の範囲であることを示しています。

依存関係

ほかのノードを参照しているノード（依存ノード）の場合、「->」が表示されます。ただし、参照されているノード（ターゲットノード）には何も表示されません。

なお、依存関係の詳細情報（パスなど）は、プロパティビューに表示されます。

(2) アウトラインビュー

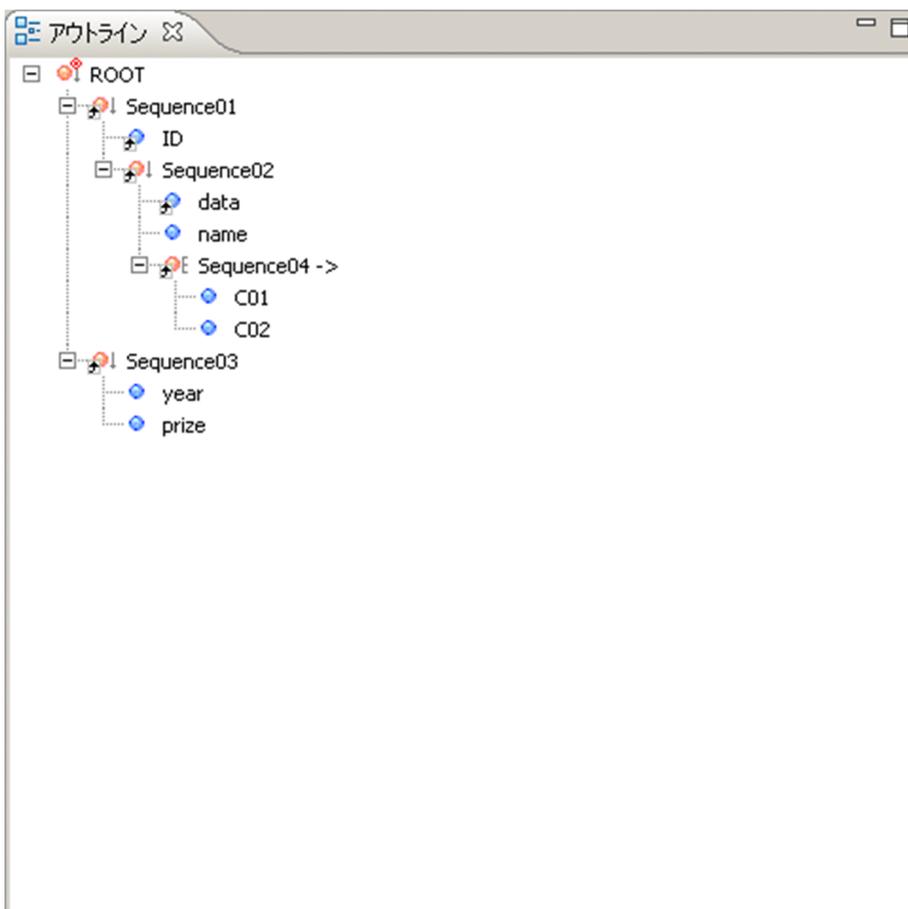
バイナリフォーマット定義エディタで定義した各要素の関係を確認できます。各要素の関係は、ルート要素を起点としたツリー形式で表現されます。

アウトラインビューの表示は、バイナリフォーマット定義エディタで要素を定義すると、自動的に更新されます。アウトラインビューでは要素を定義できません。

なお、アウトラインビューに表示されているノード（ルート要素および構成要素）を選択すると、バイナリフォーマット定義エディタでも同じノードが選択状態になります。

アウトラインビューの表示内容について説明します。

図 1-15 アウトラインビュー



ノード

バイナリフォーマット定義ファイル内に定義されている要素です。

各ノードの表示内容を次の表に示します。

表 1-5 アウトラインビューに表示されるノード

区分	アイコン	説明
ルート要素		ルート要素に設定されている逐次構成の複合内容要素です。
		ルート要素に設定されている選択構成の複合内容要素です。
構成要素		構成要素として設定されている単純内容要素です。
		構成要素として設定されている逐次構成の複合内容要素です。
		構成要素として設定されている選択構成の複合内容要素です。
		ローカル定義の単純内容要素です。

検証の結果として、警告またはエラーが発生しているノードには、上で示すアイコンに警告またはエラーの発生を示すアイコン（警告：，エラー：）が付与されて表示されます。

1.2.2 サービスアダプタ定義画面

サービスアダプタ定義画面でのサービスアダプタの定義について、サービス種別ごとに説明します。

画面の表示方法、および各サービスアダプタの定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3 サービスアダプタの内容の定義」を参照してください。

注意事項

- サービスアダプタ定義画面では、入力項目の前後に半角スペースや全角スペースを指定できません。ただし、MDB（WS-R）アダプタの詳細画面の「転送キュー作成先 RD エリア名」には、末尾に半角スペースを指定できます。
- サービスアダプタ定義画面で「表示」ボタンをクリックして電文フォーマットを表示する際、サービスアダプタ定義画面の「電文フォーマット」に表示されているファイル名と異なるファイル名がテキストエディタ上部のタブに表示されることがあります。

(1) サービス種別「Web サービス」の場合

サービス種別「Web サービス」で指定する、SOAP アダプタを定義する場合の画面について説明します。

(a) Web サービスの基本画面

Web サービスの基本画面の項目について説明します。

図 1-16 サービスアダプタ定義画面 (Web サービスの基本画面)

[ボディ] タブを表示した状態

在庫管理

■サービス部品制御情報
サービス名: 在庫管理
サービスID: Invadp
サービス種別: Web サービス
アドレス: http://localhost/InventoryManage
最大インスタンス数: 0
サービスクラス名: InventoryManager
オペレーション: reserveltem
 システム例外をフォルトに変換する

■オペレーション情報
オペレーション名: reserveltem
通信モデル: 同期

■要求電文
ボディ ハッダ
標準
 使う
電文フォーマット: [] 参照...
表示... 出力...
サービス部品
電文フォーマット: cscformat1.xsd 参照...
表示... 出力...
データ変換定義
【標準⇒サービス部品】 [] 編集... 削除

■応答電文
ボディ ハッダ
標準
 使う
電文フォーマット: [] 参照...
表示... 出力...
サービス部品
電文フォーマット: cscformat1.xsd 参照...
表示... 出力...
データ変換定義
【サービス部品⇒標準】 [] 編集... 削除

■フォルト電文
フォルト名: []
電文フォーマット: [] 参照...
表示... 出力...

サービスアダプタ定義 (基本) | サービスアダプタ定義 (詳細)

[ヘッダ] タブを表示した状態

在庫管理
公開済みのサービスです。

■サービス部品制御情報
サービス名: 在庫管理
サービスID: InvAdp
サービス種別: Web サービス
アドレス: http://localhost/InventoryManagemer
最大インスタンス数: 0
サービスクラス名: InventoryManager
オペレーション: reserveItem
 システム例外をフォルトに変換する

■オペレーション情報
オペレーション名: reserveItem
通信モデル: 同期

■要求電文
ボディ ヘッダ
ルート要素: [追加...] [削除]
名前空間: []
電文フォーマット: [] [表示...] [出力...]

■応答電文
ボディ ヘッダ
ルート要素: [追加...] [削除]
名前空間: []
電文フォーマット: [] [表示...] [出力...]

■フォルト電文
フォルト名: []
電文フォーマット: [] [参照...]
[表示...] [出力...]

サービスアダプタ定義 (基本) | サービスアダプタ定義 (詳細)

(i) [サービス部品制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品についての情報が表示されます。

[サービス名]

HCSC コンポーネントの名称が表示されます。

[サービス ID]

HCSC コンポーネントの ID が表示されます。サービス ID は、8 バイト以内の英数字およびアンダーバー (_) で指定します。

[サービス種別]

サービス部品の種別として「Web サービス」が表示されます。

[アドレス]

サービス部品のある URL が表示されます。

[最大インスタンス数]

サービス部品の最大インスタンス数が表示されます。

[サービスクラス名]

サービス部品のクラス名が表示されます。

[オペレーション]

オペレーション名が表示されます。サービス部品が持つオペレーション名をドロップダウンリストから選択できます。

[システム例外をフォルトに変換する] チェックボックス

サービス部品で発生した例外をフォルトに変換する場合にチェックします。

なお、サービスアダプタ内で発生した例外はフォルトに変換されません。

詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.11 サービスアダプタでの例外発生時の運用」を参照してください。

(ii) [オペレーション情報]

サービス部品のオペレーションについての情報が表示されます。

[オペレーション名]

サービス部品制御情報のオペレーション欄で選択したオペレーションの名称が表示されます。

[通信モデル]

サービス部品制御情報のオペレーション欄で選択したオペレーションの通信モデルとして「同期」が表示されます。

(iii) [要求電文]

サービスリクエストから送信される要求電文の情報が表示されます。

[ボディ] タブ

- ・ [標準]

[使う] チェックボックス

サービスリクエストから受け付けた標準電文の内容を確認したり、標準電文をサービス部品電文のフォーマットにデータ変換したりする場合にチェックします。

[電文フォーマット]

サービスリクエストから受け付けた標準電文のフォーマット名が表示されます。電文フォーマットは変更できます。

[参照] ボタン

標準電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。

[表示] ボタン

標準電文のフォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

標準電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

- ・ [サービス部品]

[電文フォーマット]

サービス部品の電文フォーマット名が表示されます。電文フォーマットは、サービス部品電文のオペレーションの要求電文に該当する WSDL から自動生成されます。変更はできません。

[参照] ボタン

このボタンは使用しません。

[表示] ボタン

サービス部品の電文フォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

サービス部品の電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

・データ変換

[データ変換定義]

標準電文からサービス部品電文へデータ変換するための定義ファイル名を入力します。

[編集] ボタン

データ変換定義画面が表示されます。データ変換定義欄で設定した定義ファイルの内容を編集できます。初めて定義する場合は、[ルート要素選択] ダイアログが表示されます。電文フォーマットを変更した場合は、電文フォーマットの変更を反映するかを確認するダイアログが表示されます。

[削除] ボタン

[編集] ボタンで設定したデータ変換定義を削除します。

[ヘッダ] タブ

・[ルート要素]

ルート要素が表示されます。ドロップダウンリストに表示されるルート要素の一覧は、ボタンで追加・削除できます。

[追加] ボタン

電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。電文フォーマットを設定したあと、その電文フォーマットに含まれるルート要素を追加できます。

[削除] ボタン

[ルート要素] に表示されているルート要素を削除します。削除するルート要素はドロップダウンリストから選択できます。

・[名前空間]

[ルート要素] に表示されているルート要素の名前空間が表示されます。

・[電文フォーマット]

[ルート要素] に表示されているルート要素を含んだ電文フォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

ルート要素を含んだ電文のフォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(iv) [応答電文]

サービス部品から送信される応答電文の情報が表示されます。

[ボディ] タブ

- [標準]

[使う] チェックボックス

サービス部品から受け付けたサービス部品電文の内容を確認したり、サービス部品電文を標準電文のフォーマットにデータ変換したりする場合にチェックします。

[電文フォーマット]

サービス部品から受け付けた標準電文のフォーマット名が表示されます。電文フォーマットは変更できません。

[参照] ボタン

標準電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。

[表示] ボタン

標準電文のフォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

標準電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

- [サービス部品]

[電文フォーマット]

サービス部品の電文フォーマット名が表示されます。電文フォーマットは、サービス部品電文のオペレーションの応答電文に該当する WSDL から自動生成されます。変更はできません。

[参照] ボタン

このボタンは使用しません。

[表示] ボタン

サービス部品電文のフォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

サービス部品の電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

- データ変換

[データ変換定義]

サービス部品電文から標準電文へデータ変換するための定義ファイル名を入力します。

[編集] ボタン

データ変換定義画面が表示されます。データ変換定義欄で設定した定義ファイルの内容を編集できます。初めて定義する場合は、[ルート要素選択] ダイアログが表示されます。電文フォーマットを変更した場合は、電文フォーマットの変更を反映するかを確認するダイアログが表示されます。

[削除] ボタン

[編集] ボタンで指定したデータ変換定義を削除します。

[ヘッダ] タブ

・ [ルート要素]

ルート要素が表示されます。ドロップダウンリストに表示されるルート要素の一覧は、ボタンで追加・削除できます。

[追加] ボタン

電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。電文フォーマットを設定したあと、その電文フォーマットに含まれるルート要素を追加できます。

[削除] ボタン

[ルート要素] に表示されているルート要素を削除します。削除するルート要素はドロップダウンリストから選択できます。

・ [名前空間]

[ルート要素] に表示されているルート要素の名前空間が表示されます。

・ [電文フォーマット]

[ルート要素] に表示されているルート要素を含んだ電文フォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

ルート要素を含んだフォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(v) [フォルト電文]

サービス部品のフォルト電文についての情報が表示されます。

[フォルト名]

サービス部品のフォルトの名称が表示されます。

[電文フォーマット]

サービス部品のフォルト電文のフォーマット名が表示されます。

[参照] ボタン

このボタンは使用しません。

[表示] ボタン

フォルト電文のフォーマットが表示されます。

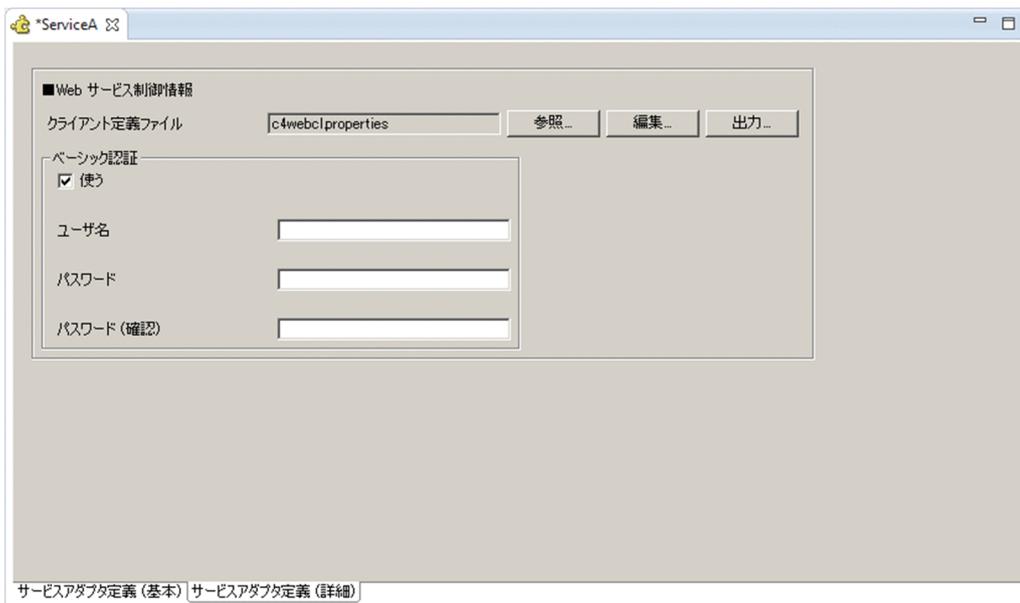
[出力] ボタン

フォルト電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(b) Web サービスの詳細画面

Web サービスの詳細画面の項目について説明します。

図 1-17 サービスアダプタ定義画面 (Web サービスの詳細画面)



(i) [Web サービス制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品について、サービス種別ごとの情報が表示されます。

・クライアント定義ファイル

[クライアント定義ファイル]

[参照] ボタンで設定したクライアント定義ファイル名が表示されます。

[参照] ボタン

クライアント定義ファイルを設定するダイアログが表示されます。

[編集] ボタン

クライアント定義ファイルを編集するためのエディタが起動します。エディタ上でクライアント定義ファイルを保存したあと、サービスアダプタを保存することで、編集した内容がリポジトリに反映されます。

クライアント定義ファイルの編集中にサービスアダプタを保存しようとする、クライアント定義ファイルを保存してよいか確認するダイアログが表示されます。

[出力] ボタン

クライアント定義ファイルの出力先を指定するダイアログが表示されます。

・ベーシック認証

[ベーシック認証]

[使う] チェックボックス

サービス部品で、ベーシック認証を使用している場合にチェックします。

[ユーザ名]

半角英数字, 半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」※), および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) を入力します。バイト長の制限はありません。

注※

SOAP1.1 モードの場合, # (ハッシュマーク), : (コロン), ? (クエスチョン), @ (アットマーク), / (スラッシュ) は使用できません。SOAP1.1/1.2 併用モードの場合, : (コロン), / (スラッシュ) は使用できません。

[パスワード]

40 バイト以内の半角英数字, 半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」※), および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) を入力します。

注※

SOAP1.1 モードの場合, # (ハッシュマーク), : (コロン), ? (クエスチョン), @ (アットマーク), / (スラッシュ) は使用できません。SOAP1.1/1.2 併用モードの場合, : (コロン), / (スラッシュ) は使用できません。

[パスワード (確認)]

パスワード欄で入力したパスワードを再度入力します。

(2) サービス種別「SessionBean」の場合

サービス種別「SessionBean」に対応するサービスアダプタを定義する場合の画面について説明します。

(a) SessionBean の基本画面

SessionBean の基本画面の項目について説明します。

図 1-18 サービスアダプタ定義画面 (SessionBean の基本画面)

(i) [サービス部品制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品についての情報が表示されます。

[サービス種別]

サービス部品の種別として「SessionBean」が表示されます。

[アドレス]

JNDI 名前空間に登録されている、呼び出すサービス部品の名称を入力します。

リモート呼び出しとなるようにアドレスを指定します（ローカル呼び出しはできません）。

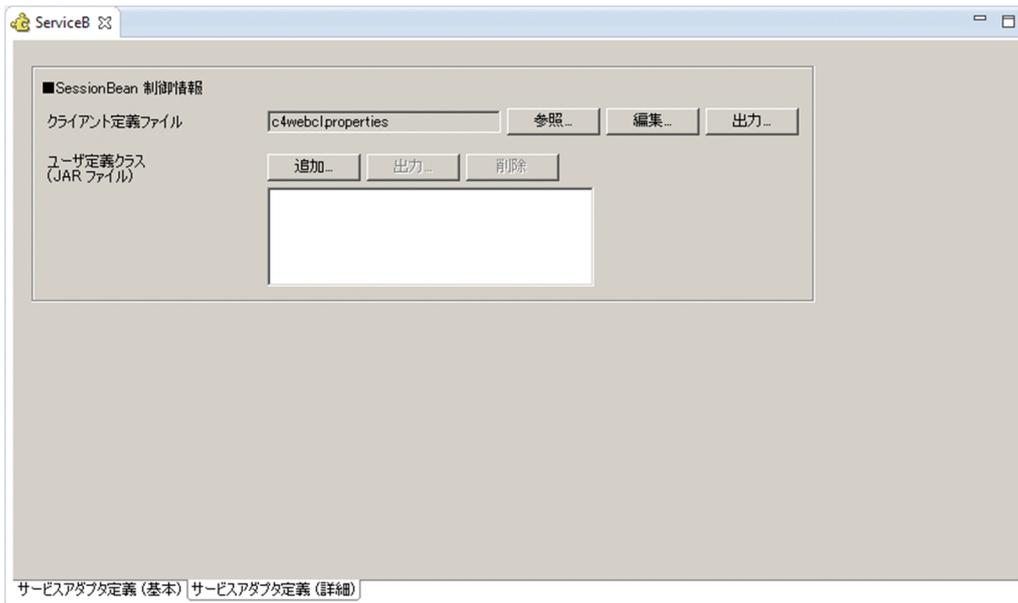
SessionBean の場合は、フォルト電文の情報は表示されません。

上記以外の各項目は、Web サービスの基本画面と同様です。Web サービスの基本画面の項目については、「1.2.2(1)(a) Web サービスの基本画面」を参照してください。

(b) SessionBean の詳細画面

SessionBean の詳細画面の項目について説明します。

図 1-19 サービスアダプタ定義画面 (SessionBean の詳細画面)



(i) [SessionBean 制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品について、サービス種別ごとの情報が表示されま
す。

・クライアント定義ファイル

[クライアント定義ファイル]

クライアント定義ファイル名が表示されます。

[参照] ボタン

クライアント定義ファイルを設定するダイアログが表示されます。

[編集] ボタン

クライアント定義ファイルを編集するためのエディタが起動します。エディタ上でクライアント定
義ファイルを保存したあと、サービスアダプタを保存することで、編集した内容がリポジトリに反
映されます。

クライアント定義ファイルの編集中にサービスアダプタを保存しようとする、クライアント定義
ファイルを保存してよいか確認するダイアログが表示されます。

[出力] ボタン

クライアント定義ファイルの出力先を指定するダイアログが表示されます。

・ユーザ定義クラス

[ユーザ定義クラス (JAR ファイル)]

[追加] ボタンで設定したユーザ定義クラス (JAR ファイル) 名が表示されます。

[追加] ボタン

ユーザ定義クラス (JAR ファイル) を設定するダイアログが表示されます。選択する JAR ファイル
の拡張子は、すべて小文字の「jar」としてください。

[出力] ボタン

ユーザ定義クラス (JAR ファイル) の出力先を指定するダイアログが表示されます。

[削除] ボタン

ユーザ定義クラス欄で選択した JAR ファイルを削除します。

(3) サービス種別「MDB (WS-R)」の場合

サービス種別「MDB (WS-R)」に対応するサービスアダプタを定義する場合の画面について説明します。

(a) MDB (WS-R) の基本画面

MDB (WS-R) の基本画面の項目について説明します。

図 1-20 サービスアダプタ定義画面 (MDB (WS-R) の基本画面)

The screenshot shows a web-based configuration interface for a service adapter. The main area is divided into several panels:

- サービス部品制御情報 (Service Component Control Information):** Fields include Service Name (MDBWSRAdapter), Service ID (mdbwsr), Service Type (MDB/WS-R), Address (Address_mdb), Max Instance Count (0), Service Class Name, Operation (send), and a checkbox for system exception fallback.
- 要求電文 (Request Message):** Includes a 'Body' section with a 'Standard' checkbox (checked), message format (cscformat2.xsd), and service component (cscformat1.xsd). It also has a 'Data Exchange Definition' section with a mapping named 'mapping1'.
- 応答電文 (Response Message):** Similar structure to the request message, but with the 'Standard' checkbox unchecked.
- フォルト電文 (Fault Message):** Fields for fault name and message format.

At the bottom, there are navigation tabs for 'サービスアダプタ定義 (基本)' and 'サービスアダプタ定義 (詳細)'.

(i) [サービス部品制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品についての情報が表示されます。

[サービス種別]

サービス部品の種別として「MDB/WS-R」が表示されます。

[アドレス]

サービス部品に関連づけられているキュー名を入力します。

[サービスクラス名]

この項目は使用しません。

(ii) [オペレーション情報]

サービス部品のオペレーションについての情報が表示されます。

[通信モデル]

サービス部品制御情報のオペレーション欄で選択したオペレーションの通信モデルとして「非同期」が表示されます。

(iii) [要求電文]

・ [サービス部品]

[電文フォーマット]

サービス部品電文のフォーマット名を入力します。電文フォーマットは変更できます。

[参照] ボタン

サービス部品電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。

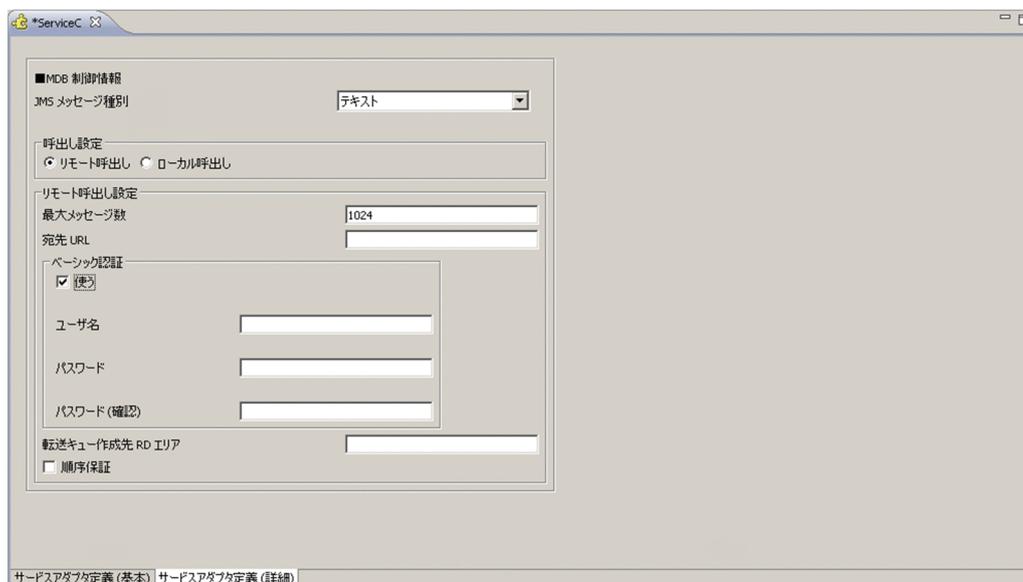
MDB (WS-R) の場合は、応答電文、およびフォルト電文の情報は表示されません。

上記以外の項目は、Web サービスの基本画面と同様です。Web サービスの基本画面の項目については、[\[1.2.2\(1\)\(a\) Web サービスの基本画面\]](#)を参照してください。

(b) MDB (WS-R) の詳細画面

MDB (WS-R) の詳細画面の項目について説明します。

図 1-21 サービスアダプタ定義画面 (MDB (WS-R) の詳細画面)



(i) [MDB 制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品について、サービス種別ごとの情報が表示されません。

[JMS メッセージ種別]

サービス部品の JMS メッセージ種別が表示されます。次に示すメッセージ種別をドロップダウンリストから選択します。

- テキスト
- バイト
- オブジェクト

• [呼出し設定]

[リモート呼出し] ラジオボタン

サービス部品をリモート呼出しする場合に選択します。選択すると、リモート呼出し設定の各項目が活性化し、入力できる状態になります。

[ローカル呼出し] ラジオボタン

サービス部品をローカル呼出しする場合に選択します。選択すると、リモート呼出し設定の各項目が非活性化し、入力できない状態になります。

• [リモート呼出し設定]

[最大メッセージ数]

サービス部品が送信できる電文の最大数を設定します。設定できる値は 1~65535 です。

[宛先 URL]

非同期時の応答結果の受信先 URL を設定します。

• [ベーシック認証]

[使う] チェックボックス

サービス部品で、ベーシック認証を使用している場合にチェックします。

[ユーザ名]

英数字および記号を半角で入力します。バイト長の制限はありません。

[パスワード]

40 バイト以内の英数字および記号を半角で入力します。

[パスワード (確認)]

パスワード欄で入力したパスワードを再度入力します。

[転送キュー作成先 RD エリア名]

転送キューの作成先 RD エリア名を指定します。なお、この項目の末尾には半角スペースを指定できません。

[順序保証] チェックボックス

Reliable Messaging で転送の順序を保証する場合にチェックします。

(4) サービス種別「MDB (DB キュー)」の場合

サービス種別「MDB (DB キュー)」に対応するサービスアダプタを定義する場合の画面について説明します。

(a) MDB (DB キュー) の基本画面

MDB (DB キュー) の基本画面の項目について説明します。

図 1-22 サービスアダプタ定義画面 (MDB (DB キュー) の基本画面)

(i) [サービス部品制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品についての情報が表示されます。

[サービス種別]

サービス部品の種別として「MDB/DB キュー」が表示されます。

上記以外の項目は、MDB (WS-R) の基本画面と同様です。MDB (WS-R) の基本画面の項目については、「[1.2.2\(3\)\(a\) MDB \(WS-R\) の基本画面](#)」を参照してください。

なお、MDB (DB キュー) には、詳細画面はありません。

(5) サービス種別「gRPC アダプタ」の場合

サービス種別「gRPC アダプタ」に対応するサービスアダプタを定義する場合の画面について説明します。

(a) gRPC アダプタの基本画面

gRPC アダプタの基本画面の項目について説明します。

図 1-23 サービスアダプタ定義画面 (gRPC アダプタの基本画面)

(i) [サービス部品制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品についての情報が表示されます。

[サービス名]

HCSC コンポーネントの名称が表示されます。変更することもできます。

[サービス ID]

HCSC コンポーネントの ID が表示されます。

変更する場合は、8 バイト以内の英数字およびアンダーバー (_) で指定します。

[サービス種別]

サービス部品の種別として「gRPC アダプタ」が表示されます。

[最大インスタンス数]

サービス部品の最大インスタンス数が表示されます。変更することもできます。

[gRPC Service 名]

gRPC Service 名が表示されます。

[オペレーション (RPC メソッド)]

オペレーション (RPC メソッド) が表示されます。

[システム例外をフォルトに変換する] チェックボックス

サービス部品で発生した例外をフォルトに変換する場合にチェックします。

なお、サービスアダプタ内で発生した例外はフォルトに変換されません。

詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.11 サービスアダプタでの例外発生時の運用」を参照してください。

(ii) [オペレーション情報]

サービス部品のオペレーションについての情報が表示されます。

[オペレーション名 (RPC メソッド名)]

オペレーション名 (RPC メソッド名) が表示されます。

[通信モデル]

オペレーションの通信モデルとして「同期」が表示されます。

(iii) [要求電文]

サービスリクエストから送信される要求電文の情報が表示されます。

[電文フォーマット]

電文フォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

電文フォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(iv) [応答電文]

サービス部品から送信される応答電文の情報が表示されます。

[電文フォーマット]

電文フォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

電文フォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(v) [フォルト電文]

サービス部品のフォルト電文についての情報が表示されます。

[フォルト名]

サービス部品のフォルトの名称が表示されます。

[電文フォーマット]

サービス部品のフォルト電文のフォーマット名が表示されます。

[参照] ボタン

フォルト電文フォーマットのファイルを設定するダイアログが表示されます。フォルト電文フォーマットの内容を修正して再登録する際に使用します。それ以外のファイルを指定した場合は動作を保証しません。

[表示] ボタン

フォルト電文のフォーマットが表示されます。

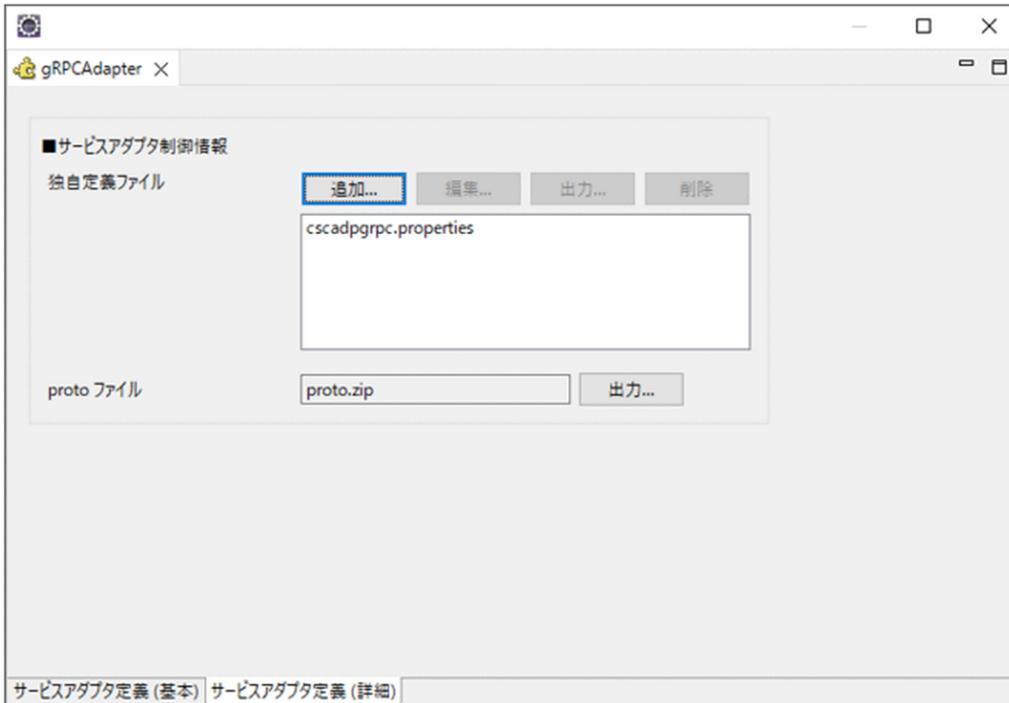
[出力] ボタン

フォルト電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(b) gRPCアダプタの詳細画面

gRPCアダプタの詳細画面の項目について説明します。

図 1-24 サービスアダプタ定義画面 (gRPCアダプタ詳細画面)



(i) [サービスアダプタ制御情報]

サービスアダプタ新規作成時に指定したサービス部品について、サービス種別ごとの情報が表示されます。

・独自定義ファイル

[独自定義ファイル]

[追加] ボタンで設定した独自定義ファイル (gRPCアダプタ独自定義ファイル) のファイル名が表示されます。

[追加] ボタン

独自定義ファイル (gRPCアダプタ独自定義ファイル) を追加するダイアログが表示されます。

[編集] ボタン

選択した独自定義ファイルを編集するためのエディタが起動します。

独自定義ファイルを複数選択してクリックした場合は、選択されたすべての独自定義ファイルに対してエディタが起動します。

エディタ上で独自定義ファイルを保存したあと、サービスアダプタを保存することで、編集した内容がリポジトリに反映されます。独自定義ファイルの編集中にサービスアダプタを保存しようとするすると、独自定義ファイルを保存してよいか確認するダイアログが表示されます。

[出力] ボタン

独自定義ファイル (gRPC アダプタ独自定義ファイル) の出力先を指定するダイアログが表示されます。

[削除] ボタン

選択したファイルを削除します。

• proto ファイル

[proto ファイル]

proto ファイルを ZIP 形式で圧縮したファイルの名称「proto.zip」が表示されます。

[出力] ボタン

ファイル「proto.zip」の出力先を指定するダイアログが表示されます。

proto.zip の内容については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.13.1 gRPC プロトコルを利用したシステム」を参照してください。

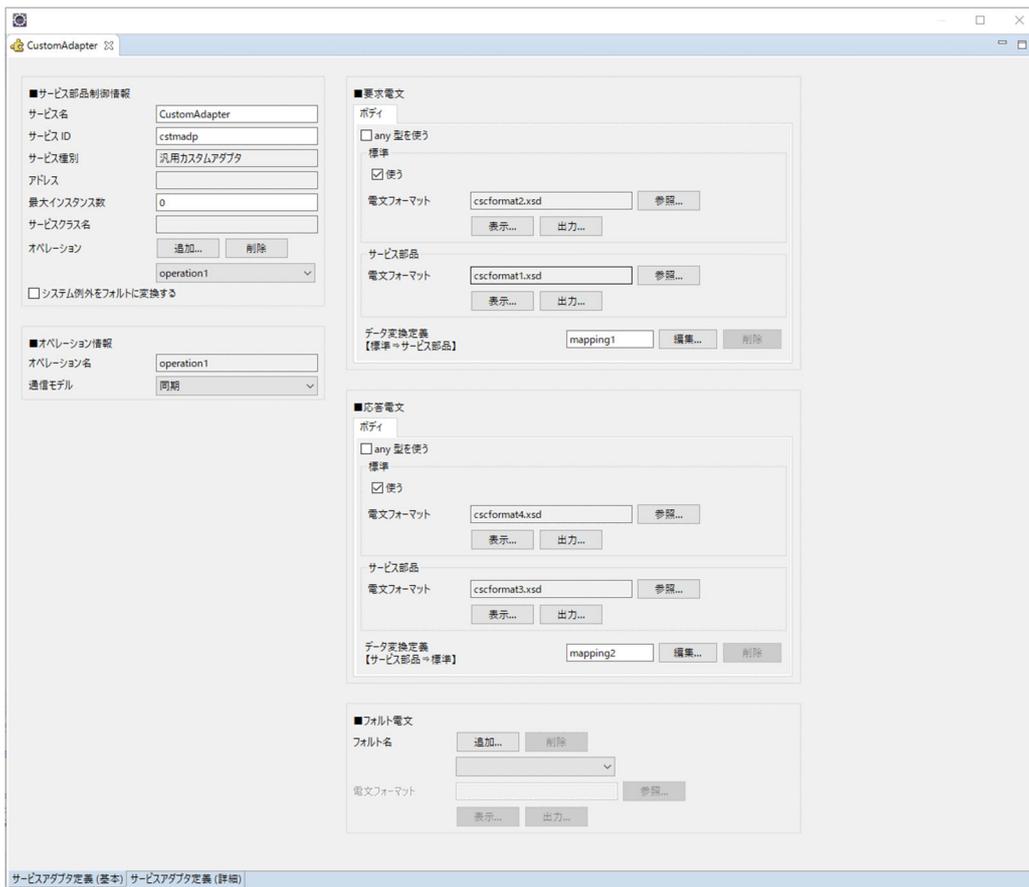
(6) サービス種別「汎用カスタムアダプタ」の場合

汎用カスタムアダプタを定義する場合の画面について説明します。

(a) 汎用カスタムアダプタの基本画面

汎用カスタムアダプタの基本画面の項目について説明します。

図 1-25 サービスアダプタ定義画面（汎用カスタムアダプタの基本画面）



(i) [サービス部品制御情報]

汎用カスタムアダプタの新規作成時に指定したサービス部品についての情報が表示されます。

[サービス名]

HCSC コンポーネントの名称が表示されます。

[サービス ID]

HCSC コンポーネントの ID が表示されます。サービス ID は、8 バイト以内の英数字およびアンダーバー (_) で指定します。

[サービス種別]

サービス部品の種別として「汎用カスタムアダプタ」が表示されます。

[アドレス]

この項目は使用しません。

[最大インスタンス数]

サービス部品の最大インスタンス数が表示されます。

[サービスクラス名]

この項目は使用しません。

[オペレーション]

オペレーション名が表示されます。サービス部品が持つオペレーション名をドロップダウンリストから選択できます。

[追加] ボタン

オペレーションを追加するダイアログが表示されます。

[削除] ボタン

オペレーション欄で選択したオペレーションを削除します。

[システム例外をフォルトに変換する] チェックボックス

サービス部品で発生した例外をフォルトに変換する場合にチェックします。

なお、サービスアダプタ内で発生した例外はフォルトに変換されません。

詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.11 サービスアダプタでの例外発生時の運用」を参照してください。

(ii) [オペレーション情報]

サービス部品のオペレーションについての情報が表示されます。

[オペレーション名]

サービス部品制御情報のオペレーション欄で選択したオペレーションの名称が表示されます。

[通信モデル]

サービス部品制御情報のオペレーション欄で選択したオペレーションの通信モデルが表示されます。同期または非同期をドロップダウンリストから選択できます。選択内容によって、次のように表示が変わります。

- 同期を選択した場合：応答電文とフォルト電文の情報が表示されます。
- 非同期を選択した場合：応答電文とフォルト電文の情報は表示されません。非同期のままサービスアダプタの定義を保存すると、応答電文とフォルト電文の全項目は消えます。

(iii) [要求電文]

サービスリクエストから送信される要求電文の情報が表示されます。

[any 型を使う] チェックボックス

データの型を指定しないでサービスアダプタを作成する場合にチェックします。

• [標準]

[使う] チェックボックス

サービスリクエストから受け付けた標準電文の内容を確認したり、標準電文を汎用カスタムアダプタ電文のフォーマットにデータ変換したりする場合にチェックします。

[電文フォーマット]

サービスリクエストから受け付けた標準電文のフォーマット名が表示されます。電文フォーマットは変更できます。

[参照] ボタン

標準電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。

[表示] ボタン

標準電文のフォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

標準電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

・ [サービス部品]

[電文フォーマット]

汎用カスタムアダプタ電文のフォーマット名を入力します。電文フォーマットは変更できます。

[参照] ボタン

汎用カスタムアダプタ電文のフォーマットファイルを設定するダイアログが表示されます。

[表示] ボタン

汎用カスタムアダプタ電文のフォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

汎用カスタムアダプタ電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

・ データ変換

[データ変換定義]

標準電文から汎用カスタムアダプタ電文へデータ変換するための定義ファイル名を入力します。

[編集] ボタン

データ変換定義画面が表示されます。データ変換定義欄で設定した定義ファイルの内容を編集できます。初めて定義する場合は、[ルート要素選択] ダイアログが表示されます。電文フォーマットを変更した場合は、電文フォーマットの変更を反映するかを確認するダイアログが表示されます。

[削除] ボタン

[編集] ボタンで設定したデータ変換定義を削除します。

(iv) [応答電文]

サービス部品から送信される応答電文の情報が表示されます。

オペレーション情報の通信モデル欄で「同期」を選択した場合だけ、設定できます。

[any 型を使う] チェックボックス

データの型を指定しないでサービスアダプタを作成する場合にチェックします。

・ [標準]

[使う] チェックボックス

サービス部品から受け付けた汎用カスタムアダプタ電文の内容を確認したり、汎用カスタムアダプタ電文を標準電文のフォーマットにデータ変換したりする場合にチェックします。

[電文フォーマット]

サービス部品から受け付けた標準電文のフォーマット名が表示されます。電文フォーマットは変更できます。

[参照] ボタン

標準電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。

[表示] ボタン

標準電文フォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

標準電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

・ [サービス部品]

[電文フォーマット]

サービス部品の電文フォーマット名が表示されます。電文フォーマットは変更できます。

[参照] ボタン

汎用カスタムアダプタ電文のフォーマットファイルを設定するダイアログが表示されます。

[表示] ボタン

汎用カスタムアダプタのフォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

汎用カスタムアダプタのフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

・ データ変換

[データ変換定義]

汎用カスタムアダプタ電文から標準電文へデータ変換するための定義ファイル名を入力します。

[編集] ボタン

データ変換定義画面が表示されます。データ変換定義欄で設定した定義ファイルの内容を編集できます。初めて定義する場合は、[ルート要素選択] ダイアログが表示されます。電文フォーマットを変更した場合は、電文フォーマットの変更を反映するかを確認するダイアログが表示されます。

[削除] ボタン

[編集] ボタンで指定したデータ変換定義を削除します。

(v) [フォルト電文]

サービス部品のフォルト電文についての情報が表示されます。

[追加] ボタン

フォルト名を追加するダイアログが表示されます。汎用カスタムアダプタの定義では、このボタンは使用しません。

[削除] ボタン

フォルト名欄で選択したフォルト名を削除します。汎用カスタムアダプタの定義では、このボタンは使用しません。

[フォルト名]

サービス部品のフォルトの名称が表示されます。汎用カスタムアダプタの定義では、この欄は使用しません。

[電文フォーマット]

サービス部品のフォルト電文のフォーマット名が表示されます。汎用カスタムアダプタの定義では、この欄は使用しません。

[参照] ボタン

フォルト電文のフォーマットを設定するダイアログが表示されます。汎用カスタムアダプタの定義では、このボタンは使用しません。

[表示] ボタン

フォルト電文のフォーマットが表示されます。汎用カスタムアダプタの定義では、このボタンは使用しません。

[出力] ボタン

フォルト電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(b) 汎用カスタムアダプタの詳細画面

汎用カスタムアダプタの詳細画面の項目について説明します。

図 1-26 サービスアダプタ定義画面 (汎用カスタムアダプタの詳細画面)



(i) [サービスアダプタ制御情報]

汎用カスタムアダプタの新規作成時に指定したサービス部品についての情報が表示されます。

・ サービスアダプタ

[サービスアダプタ (EJB-JAR ファイル)]

[参照] ボタンで設定した汎用カスタムアダプタの EJB-JAR ファイルの名称が表示されます。

[参照] ボタン

汎用カスタムアダプタの EAR ファイル名を設定するダイアログが表示されます。

・ユーティリティクラス

[ユーティリティクラス (JAR ファイル)]

[追加] ボタンで設定したユーティリティクラスが表示されます。汎用カスタムアダプタの定義では、この欄は使用しません。

[追加] ボタン

ユーティリティクラスを追加するダイアログが表示されます。汎用カスタムアダプタの定義では、このボタンは使用しません。

[出力] ボタン

ユーティリティクラスの出力先を指定するダイアログが表示されます。汎用カスタムアダプタの定義では、このボタンは使用しません。

[削除] ボタン

ユーティリティクラス欄で選択したファイルを削除します。汎用カスタムアダプタの定義では、このボタンは使用しません。

・独自定義ファイル

[独自定義ファイル]

[追加] ボタンで設定した SQL オペレーション定義ファイル、およびアプリケーション統合属性ファイルが表示されます。

[追加] ボタン

独自定義ファイル (SQL オペレーション定義ファイルおよびアプリケーション統合属性ファイル) を追加するダイアログが表示されます。

[編集] ボタン

選択した独自定義ファイルを編集するためのエディタが起動します。

独自定義ファイルを複数選択してクリックした場合は、選択されたすべての独自定義ファイルに対してエディタが起動します。

エディタ上で独自定義ファイルを保存したあと、サービスアダプタを保存することで、編集した内容がリポジトリに反映されます。独自定義ファイルの編集集中にサービスアダプタを保存しようとする、独自定義ファイルを保存してよいか確認するダイアログが表示されます。

[出力] ボタン

独自定義ファイル (SQL オペレーション定義ファイルおよびアプリケーション統合属性ファイル) の出力先を指定するダイアログが表示されます。

[削除] ボタン

選択したファイルを削除します。

(7) その他のサービスアダプタの場合

次に示すサービスアダプタを定義する場合の画面について説明します。

- DB アダプタ
- TP1 アダプタ
- ファイルアダプタ
- Object Access アダプタ
- Message Queue アダプタ
- FTP アダプタ
- ファイル操作アダプタ
- メールアダプタ
- HTTP アダプタ
- コマンドアダプタ
- SFTP アダプタ
- Kafka アダプタ

(a) その他のサービスアダプタの基本画面

基本画面は汎用カスタムアダプタの基本画面と同じですが、画面項目の表示内容が一部異なります。汎用カスタムアダプタの基本画面の項目については、「1.2.2(6)(a) 汎用カスタムアダプタの基本画面」を参照してください。

汎用カスタムアダプタの基本画面と差異がある項目について、次に説明します。

(i) [サービス部品制御情報]

[サービス種別]

サービス部品の種別として、次の中から該当するサービス種別が表示されます。

- DB アダプタ
- TP1 アダプタ
- ファイルアダプタ
- Object Access アダプタ
- Message Queue アダプタ
- FTP アダプタ
- ファイル操作アダプタ
- メールアダプタ
- HTTP アダプタ

- コマンドアダプタ
- SFTP アダプタ
- Kafka アダプタ

(b) その他のサービスアダプタの詳細画面

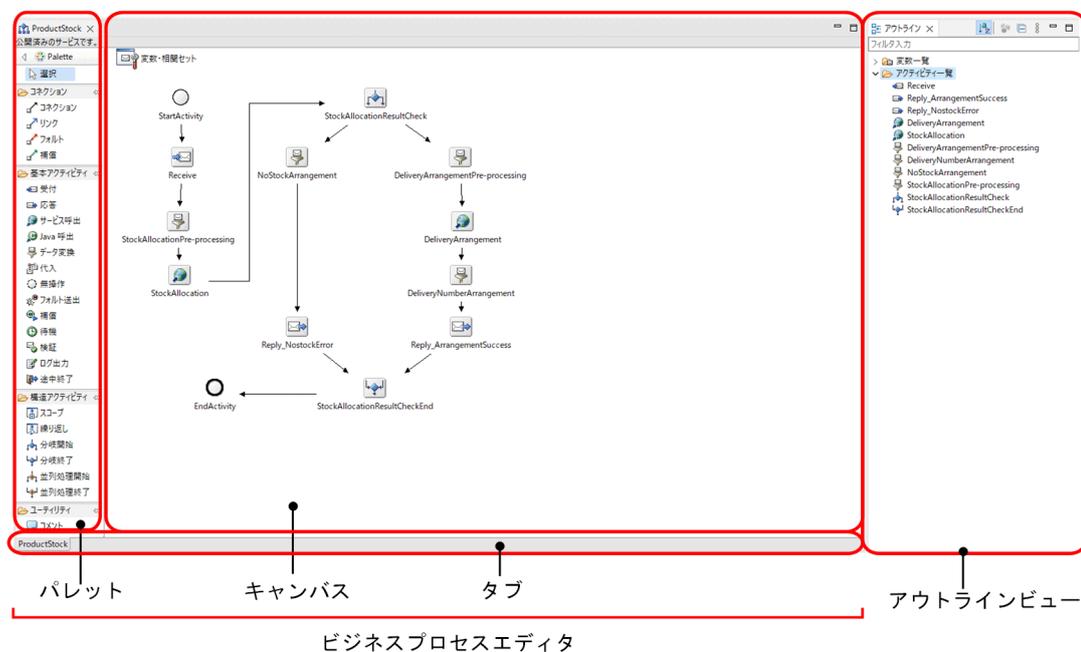
詳細画面の各項目は、汎用カスタムアダプタの詳細画面と同様です。汎用カスタムアダプタの詳細画面の項目については、「1.2.2(6)(b) 汎用カスタムアダプタの詳細画面」を参照してください。

1.2.3 ビジネスプロセス定義画面

ビジネスプロセスの定義に使用するビジネスプロセス定義画面について説明します。

操作方法については、「1.12 ビジネスプロセス定義画面の操作」を参照してください。

図 1-27 ビジネスプロセス定義画面



(1) パレット

キャンバスに配置するアクティビティ、コネクションまたはコメントをパレットのツールから選択します。

パレットの各項目について説明します。

図 1-28 パレット (ビジネスプロセス定義画面)



グループ

コネクションまたは同じ種類のアクティビティをまとめたグループです。先頭に 📁 が付いています。

ツール

グループの下位にあるアクティビティ、コネクションおよびコメントです。

選択したアクティビティは、キャンバスを任意の個所でクリックすると配置されます。ドラッグ&ドロップでキャンバスに配置することもできます。

また、コネクションを選択し、キャンバスに配置したアクティビティを二つ選択すると、アクティビティ同士を連結できます。

パレットのグループおよびツールの一覧を次の表に示します。

表 1-6 パレットのグループおよびツール (ビジネスプロセス定義画面)

アイコン	表示名	説明
	選択	キャンバス上のアクティビティおよびコネクションを選択します。
	コネクション	通常のコネクション、リンクコネクション、およびフォルトコネクションをまとめたグループです。
	コネクション	通常のコネクションを連結するコネクションです。
	リンク	リンクコネクションです。リンクを定義する場合にアクティビティを連結します。
	フォルト	フォルトコネクションです。フォルト処理を定義する場合にアクティビティを連結します。
	補償	補償コネクションです。補償処理を定義する場合にアクティビティを連結します。
	基本アクティビティ	ビジネスプロセスで基本的な定義（受付処理、応答処理、サービス部品の呼び出しなど）をするアクティビティをまとめたグループです。
	受付	受付アクティビティです。
	応答	応答アクティビティです。
	サービス呼出	サービス呼出アクティビティです。
	Java 呼出	Java 呼出アクティビティです。
	データ変換	データ変換アクティビティです。
	代入	代入アクティビティです。
	無操作	無操作アクティビティです。
	フォルト送出	フォルト送出アクティビティです。
	補償	補償アクティビティです。
	待機	待機アクティビティです。
	検証	検証アクティビティです。
	ログ出力	ログ出力アクティビティです。
	途中終了	途中終了アクティビティです。

アイコン	表示名	説明
	構造アクティビティ	ビジネスプロセスで分岐処理，並列処理，繰り返し処理などを使って構造的な定義をするアクティビティをまとめたグループです。
	スコープ	スコープアクティビティです。
	繰り返し	繰り返しアクティビティです。
	分岐開始	分岐開始アクティビティです。
	分岐終了	分岐終了アクティビティです。
	並列処理開始	並列処理開始アクティビティです。
	並列処理終了	並列処理終了アクティビティです。
	ユーティリティ	ユーティリティのグループです。
	コメント	コメントを作成します。

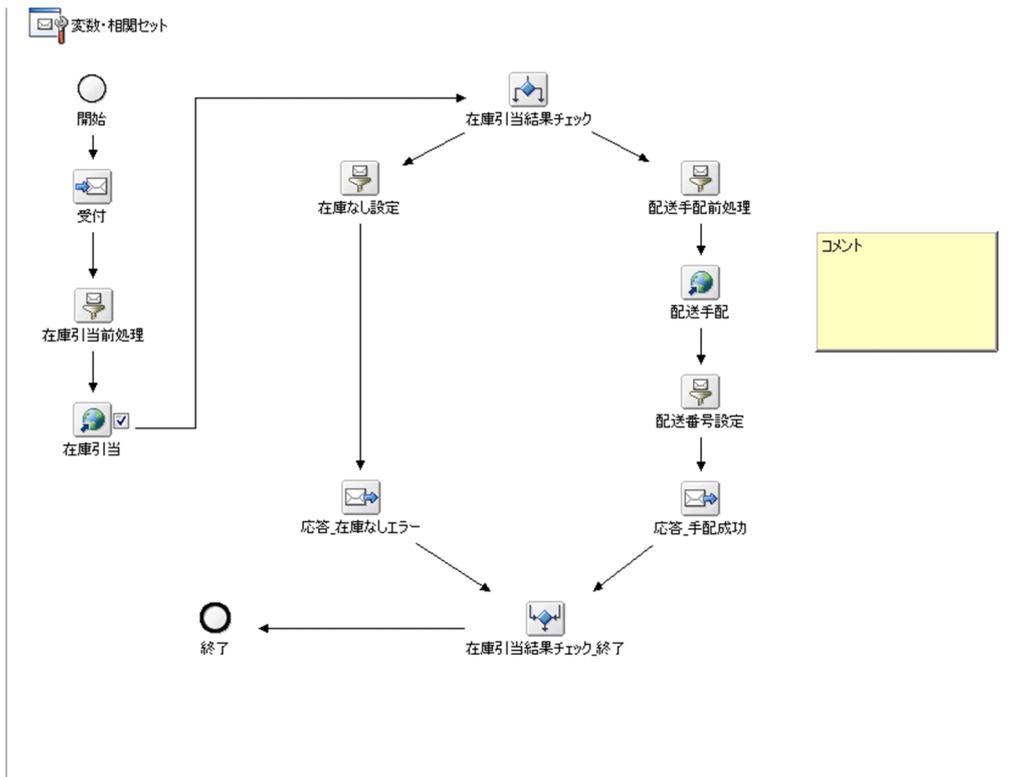
(2) キャンバス

キャンバスには，パレットで選択したアクティビティを配置します。また，配置したアクティビティをコネクションで連結します。

参考

オートコネクト機能が有効の場合，キャンバス上で配置または移動しようとするアクティビティがほかのアクティビティに近づくと，アクティビティとのコネクションがプレビュー表示されます。その状態でアクティビティを配置すると，コネクションが確定し，アクティビティ同士が連結されます。オートコネクト機能については，「[1.12.16 アクティビティのオートコネクト機能の有効・無効を設定する](#)」を参照してください。

図 1-29 キャンバス



キャンバスには、変数・相関セット、ビジネスプロセスの開始を示す開始アクティビティ、およびビジネスプロセスの終了を示す終了アクティビティがすでに配置されています。

変数・相関セット (📁)

変数・相関セットを定義する場合に使用します。クリックすると、[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。

開始 (○)

開始アクティビティです。このアクティビティは削除できません。

終了 (○)

終了アクティビティです。このアクティビティは削除できません。

(3) タブ

次に示すアクティビティのタブでは、開いているタブを閉じたり、上位階層のタブを開いたりといった操作ができます。

- スコープアクティビティ
- 繰り返しアクティビティ
- データ変換アクティビティ

(a) 開いているタブを閉じる

開いているタブを閉じる方法には、次の3とおりがあります。

- スコープアクティビティ、繰り返しアクティビティの場合、キャンバスで項目が選択されていない状態で右クリックし、コンテキストメニューで [タブを閉じる] を選択する
- 閉じる対象のタブを右クリックし、コンテキストメニューで [タブを閉じる] を選択する
- 閉じる対象のタブを中クリックする

なお、データ変換アクティビティで編集のタブを閉じようとするとき、変更内容を破棄してよいかを問い合わせるメッセージが表示されます。変更内容を破棄してよい場合は [はい] ボタンを選択してください。

(b) 上位階層のタブを開く

アクティビティの上位階層のタブを開く方法には、次の2とおりがあります。

- スコープアクティビティ、繰り返しアクティビティの場合、キャンバスで項目が選択されていない状態で右クリックし、コンテキストメニューで [定義キャンバスのタブを開く] を選択する
- 閉じる対象のタブを右クリックし、コンテキストメニューで [定義キャンバスのタブを開く] を選択する

操作後は、開いたタブがアクティブになります。

(4) アウトラインビュー

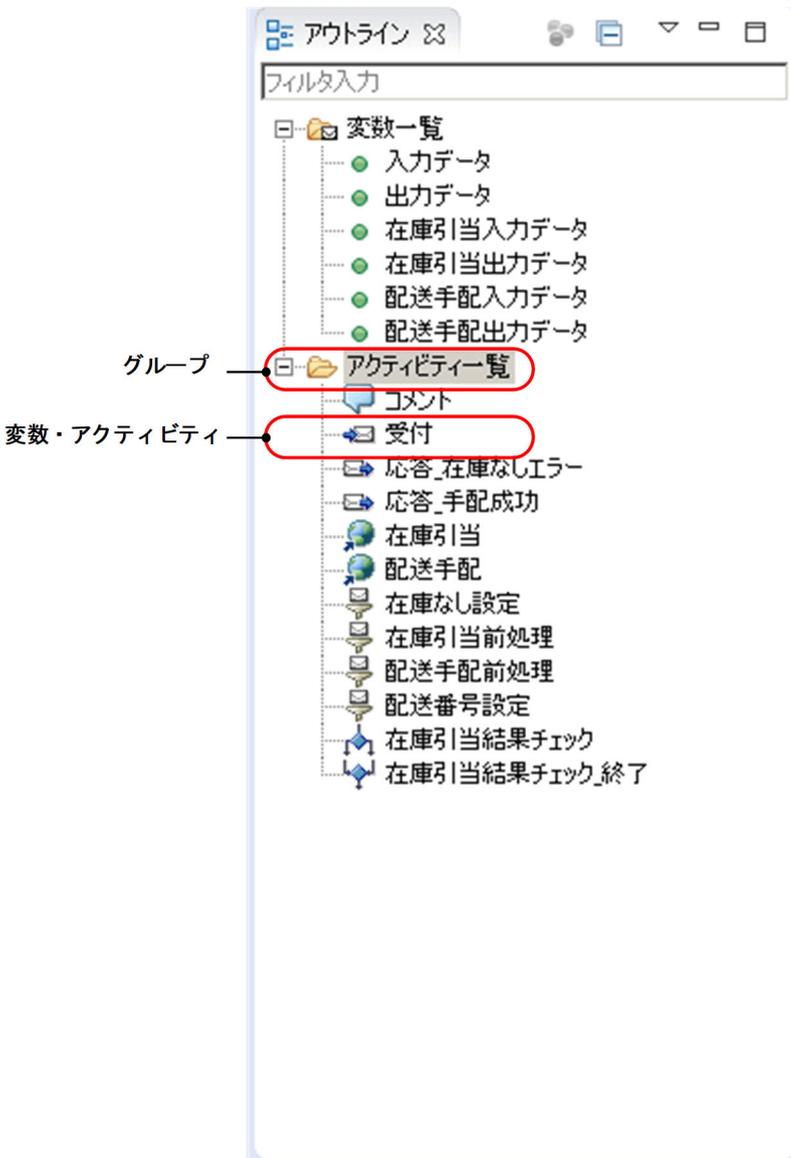
ビジネスプロセスで定義した変数、アクティビティの一覧が表示されます。アウトラインビューの表示は、ビジネスプロセスを定義すると、自動的に更新されます。

アウトラインビューに表示されている変数をダブルクリックすると、[変数・関連セット一覧] ダイアログが表示され、[変数・関連セット一覧] ダイアログでも同じ項目が選択状態になります。また、アウトラインビューに表示されているアクティビティを選択すると、ビジネスプロセス定義画面でも同じ項目が選択状態になります。

アウトラインビューの表示項目は、アウトラインビューの上部にあるテキストボックスに表示項目の名称を入力することでフィルタリングできます。また、フィルタ機能として変数一覧フィルタ、アクティビティ一覧フィルタがあります。変数一覧フィルタ、アクティビティ一覧フィルタについては、「[1.14 アウトラインビューのフィルタ機能の設定](#)」を参照してください。

アウトラインビューの表示内容について説明します。

図 1-30 アウトラインビュー (ビジネスプロセス定義画面)



グループ

変数またはアクティビティをまとめたグループです。

変数・アクティビティ

ビジネスプロセスで定義した変数, アクティビティです。

アウトラインビューに表示されるグループおよび変数・アクティビティの一覧を次の表に示します。

表 1-7 アウトラインビューのグループおよび変数・アクティビティ (ビジネスプロセス定義画面)

アイコン	表示名	説明
	変数一覧	変数をまとめたグループです。
	<変数の名称>	変数です。

アイコン	表示名	説明
	アクティビティー一覧	アクティビティをまとめたグループです。
	<受付アクティビティの名称>	受付アクティビティです。
	<応答アクティビティの名称>	応答アクティビティです。
	<サービス呼出アクティビティの名称>	サービス呼出アクティビティです。
	<Java 呼出アクティビティの名称>	Java 呼出アクティビティです。
	<データ変換アクティビティの名称>	データ変換アクティビティです。
	<代入アクティビティの名称>	代入アクティビティです。
	<無操作アクティビティの名称>	無操作アクティビティです。
	<フォルト送出アクティビティの名称>	フォルト送出アクティビティです。
	<補償アクティビティの名称>	補償アクティビティです。
	<待機アクティビティの名称>	待機アクティビティです。
	<検証アクティビティの名称>	検証アクティビティです。
	<ログ出力アクティビティの名称>	ログ出力アクティビティです。
	<途中終了アクティビティの名称>	途中終了アクティビティです。
	<スコープアクティビティの名称>	スコープアクティビティです。スコープアクティビティ内で定義した変数、アクティビティはスコープアクティビティを起点としたツリー形式で表示されます。
	<繰り返しアクティビティの名称>	繰り返しアクティビティです。繰り返しアクティビティ内で定義したアクティビティは繰り返しアクティビティを起点としたツリー形式で表示されます。
	<分岐開始アクティビティの名称>	分岐開始アクティビティです。
	<分岐終了アクティビティの名称>	分岐終了アクティビティです。
	<並列処理開始アクティビティの名称>	並列処理開始アクティビティです。

アイコン	表示名	説明
	<並列処理終アクティビティの名称>	並列処理終了アクティビティです。
	<コメントの1行目の内容>	コメントです。

1.2.4 データ変換定義画面

マッピング定義エディタではデータ変換を定義します。

操作方法については、「1.13 データ変換定義画面の操作」を参照してください。

図 1-31 データ変換定義画面

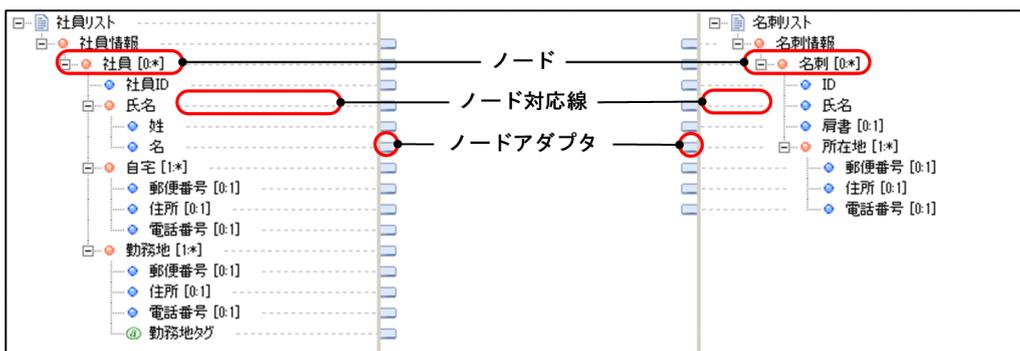


(1) 変換元スキーマツリービューア、マッピングビューア、および変換先スキーマツリービューア

変換元スキーマツリービューアのノードから変換先スキーマツリービューアのノードへマッピングします。マッピングビューアでは、パレットから選択したファンクションを配置したり、ノードアダプタやファンクションをマッピング線で接続したりします。

変換元スキーマツリービューア、マッピングビューア、および変換先スキーマツリービューアの各項目について説明します。

図 1-32 変換元スキーマツリービューア、マッピングビューア、および変換先スキーマツリービューア



ノード

XML スキーマのスキーマ論理名、要素、および属性です。

ノードに表示されるアイコンおよびアイコンの意味を次に示します。

- スキーマ論理名 ()
XML スキーマファイルを識別する論理名を表します。
- 複合内容 ()
複合内容を持つ複合型の要素を表します。
- 単純内容 ()
単純型の要素、および単純内容を持つ複合型の要素を表します。
- 属性 ()
要素の属性を表します。

ノードの最後に表示される角括弧 ([]) の値は、ノードの出現回数を示します。出現回数は次の形式で表示されます。

[最小出現回数：最大出現回数]

最大出現回数に上限がない場合、アスタリスク (*) が表示されます。

最小出現回数、最大出現回数とともに 1 回の場合、出現回数は表示されません。

コピーしたい要素を選択して右クリックし、コンテキストメニューで「要素パスのコピー」を選択すると、パスがクリップボードへコピーできます。N対1変換時は、「\$<スキーマの論理名（ビジネスプロセスの変数名）>」を含むパスがコピーされます。

ノード対応線

ノードとノードアダプタの対応を示す線です。

ノードアダプタ

ノードアダプタはすべてのノードに対して表示されます。変換元のノードアダプタと変換先のノードアダプタをマッピング線で接続して、マッピングします。ノードアダプタには、マッピング対象のノードアダプタ（■）とマッピング対象外のノードアダプタ（□）の2種類があります。マッピング対象およびマッピング対象外については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.11 マッピングの条件」を参照してください。

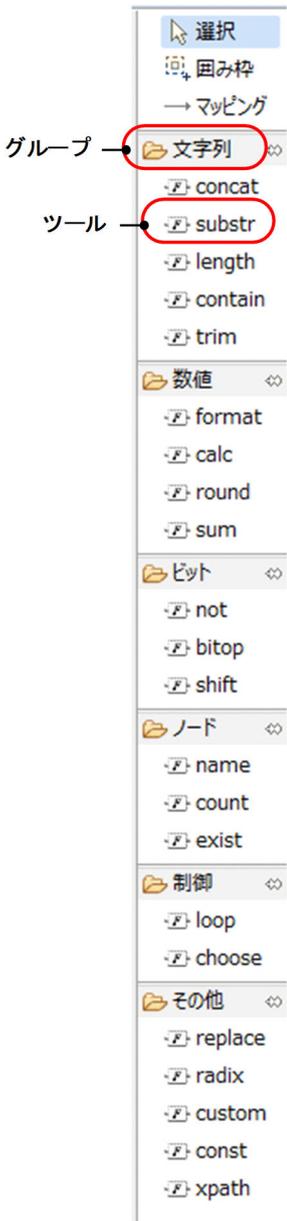
なお、ノードアダプタは、マッピングビューアに表示されるスクロールバーではスクロールできません。変換先スキーマツリービューアに表示されるスクロールバーを動かすことでスクロールできます。

(2) パレット

マッピングビューアに配置するファンクションをパレットのツールから選択します。また、マッピング線を選択して、ノードアダプタやファンクションを接続します。

パレットの各項目について説明します。

図 1-33 パレット (データ変換定義画面)



グループ

同じ種類のファンクションをまとめたグループです。先頭に 📁 が付いています。クリックすると、グループ下のツール一覧が非表示になります。ツール一覧が非表示の場合は、ツールの一覧が表示されます。

ツール

ファンクションやマッピング線などです。選択したファンクションをマッピングビューアに配置したり、ノードアダプタやファンクションをマッピング線で接続したりします。

パレットのグループおよびツールの一覧を次の表に示します。

表 1-8 パレットのグループおよびツール（データ変換定義画面）

アイコン	表示名	説明
	選択	マッピングビューア上のファンクションおよびマッピング線を選択します。
	囲み枠	四角で囲んだ範囲に含まれるファンクションおよびマッピング線を選択します。
	マッピング	ノードやファンクションを接続するマッピング線です。
	文字列	文字列に関するファンクションをまとめたグループです。
	concat	文字列連結ファンクションです。
	substr	部分文字列取得ファンクションです。
	length	文字数取得ファンクションです。
	contain	文字列調査ファンクションです。
	trim	空白除去ファンクションです。
	数値	数値に関するファンクションをまとめたグループです。
	format	数値フォーマット変換ファンクションです。
	calc	数値演算ファンクションです。
	round	端数処理ファンクションです。
	sum	総和ファンクションです。
	ビット	ビット演算に関するファンクションをまとめたグループです。
	not	否定演算ファンクションです。
	bitop	論理演算ファンクションです。
	shift	シフト演算ファンクションです。
	ノード	ノードに関するファンクションをまとめたグループです。
	name	ノード名取得ファンクションです。
	count	ノード数取得ファンクションです。
	exist	ノード調査ファンクションです。
	制御	マッピングを制御するファンクションをまとめたグループです。
	loop	くり返しファンクションです。
	choose	選択ファンクションです。
	その他	どのグループにも当てはまらないファンクションをまとめたグループです。
	replace	値置換えファンクションです。

アイコン	表示名	説明
	radix	基数変換ファンクションです。
	custom	カスタムファンクションです。
	const	定数ファンクションです。
	xpath	XPath ファンクションです。

1.2.5 ユーザ定義受付定義画面

ユーザ定義受付定義画面での受付の定義について、受付種別ごとに説明します。

画面の表示方法、および各受付の定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「2. ユーザ定義受付の定義」を参照してください。

(1) 受付種別「SOAP 受付」の場合

ユーザ定義受付定義画面の、SOAP 受付の定義情報の表示について説明します。

(a) SOAP 受付の基本画面

SOAP 受付の基本画面の項目について説明します。

図 1-34 ユーザ定義受付定義画面 (SOAP 受付の基本画面)

[ボディ] タブを表示した状態

■ユーザ定義受付情報
 受付名: SOAPA
 受付 ID: rcp4
 受付種別: SOAP 受付
 ポート名: Arrangement
 コンテキストルート: rcp4
 オペレーション名: arrangeItem

■要求電文
 ボディ | ヘッダ
 電文フォーマット: cscformat1.xsd [表示...] [出力...]

■応答電文
 ボディ | ヘッダ
 電文フォーマット: cscformat1.xsd [表示...] [出力...]

■フォルト電文
 フォルト名: []
 電文フォーマット: [] [表示...] [出力...]

ユーザ定義受付 (基本)

[ヘッダ] タブを表示した状態

■ユーザ定義受付情報
 受付名: SOAPA
 受付 ID: rcp4
 受付種別: SOAP 受付
 ポート名: Arrangement
 コンテキストルート: rcp4
 オペレーション名: arrangeItem

■要求電文
 ボディ | ヘッダ
 ルート要素: [追加...] [削除] (reserveItem)
 名前空間: http://sample/InventoryManagementService
 電文フォーマット: cscformat1.xsd [表示...] [出力...]

■応答電文
 ボディ | ヘッダ
 ルート要素: [追加...] [削除] (reserveItemResponse)
 名前空間: http://sample/InventoryManagementService
 電文フォーマット: cscformat1.xsd [表示...] [出力...]

■フォルト電文
 フォルト名: []
 電文フォーマット: [] [表示...] [出力...]

ユーザ定義受付 (基本)

[ユーザ定義受付情報]

[受付名]

ユーザ定義受付を追加したときにユーザ定義受付追加ウィザードに指定した受付名が表示されます。受付名は、XMLSchema の NCName 定義文字で、40 バイト以内で指定します。また、受付名は、ビジネスプロセス内で一意になるように指定します。

[受付 ID]

ユーザ定義受付を追加したときに付与される ID が表示されます。受付 ID は、8 バイト以内の英数字およびアンダーバー (_) で指定します。また、受付 ID は、リポジトリ内で一意になるように指定します。

[受付種別]

受付の種別として「SOAP 受付」が表示されます。受付種別は変更できません。

[ポート名]

ユーザ定義受付を追加するウィザードの [Port の指定] で選択したポート名が表示されます。

[コンテキストルート]

コンテキストルート名が表示されます。コンテキストルート名は、次の点に注意して指定します。

- 半角英数字および次に示す記号で指定してください。
/ @ + - \$ _ . ! ' () % ~
- リポジトリ内で一意になるように指定してください。
- アプリケーションサーバの仕様に準拠した指定をしてください。次の値を指定すると、デプロイ時にエラーとなります。

先頭、または末尾に区切り文字 (/) が指定されている。

(例) /rcp, rcp/sub/

区切り文字 (/) が多重指定されている。

(例) rcp//sub

相対パスが指定されている。

(例) rcp./sub/..

パーセントエンコーディング以外の目的でパーセント (%) が指定されている。

(例) rcp%

- HCSC サーバ名、HCSC サーバに配備された SOAP アダプタ (サービス種別「Web サービス」で指定) のサービス ID、および Reliable Messaging で使用するコンテキストルートの値は指定しないでください。

[オペレーション名]

オペレーション名が表示されます。ユーザ定義受付に定義されているオペレーション名をドロップダウンリストから選択できます。

[要求電文]

- [ボディ] タブ

[電文フォーマット]

要求電文の電文フォーマット名が表示されます。電文フォーマットは、WSDL から自動生成されません。

- [表示] ボタン

要求電文の電文フォーマットが表示されます。

- **[出力] ボタン**

要求電文の電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

- **[ヘッダ] タブ**

- [ルート要素]**

ルート要素が表示されます。要求電文にヘッダ情報が含まれていない場合、この項目には何も表示されません。ドロップダウンリストに表示されるルート要素の一覧は、ボタンで追加・削除できます。

- **[追加] ボタン**

電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。電文フォーマットを設定したあと、その電文フォーマットに含まれるルート要素を追加できます。

- **[削除] ボタン**

[ルート要素] に表示されているルート要素を削除します。

- [名前空間]**

[ルート要素] に表示されているルート要素の名前空間が表示されます。要求電文にヘッダ情報が含まれていない場合、この項目には何も表示されません。

- [電文フォーマット]**

[ルート要素] に表示されているルート要素を含んだ電文フォーマット名が表示されます。要求電文にヘッダ情報が含まれていない場合、この項目には何も表示されません。

- [表示] ボタン**

要求電文のヘッダ情報が表示されます。

- [出力] ボタン**

要求電文のヘッダ情報の出力先を指定するダイアログが表示されます。

- [応答電文]**

- **[ボディ] タブ**

- [電文フォーマット]**

応答電文の電文フォーマット名が表示されます。電文フォーマットは、WSDL から自動生成されます。

- [表示] ボタン**

応答電文の電文フォーマットが表示されます。

- [出力] ボタン**

応答電文の電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

- **[ヘッダ] タブ**

- [ルート要素]**

ルート要素が表示されます。応答電文にヘッダ情報が含まれていない場合、この項目には何も表示されません。ドロップダウンリストに表示されるルート要素の一覧は、ボタンで追加・削除できます。

- **[追加] ボタン**

電文フォーマットを設定するダイアログが表示されます。電文フォーマットを設定したあと、その電文フォーマットに含まれるルート要素を追加できます。

- **[削除] ボタン**

[ルート要素] に表示されているルート要素を削除します。

[名前空間]

[ルート要素] に表示されているルート要素の名前空間が表示されます。応答電文にヘッダ情報が含まれていない場合、この項目には何も表示されません。

[電文フォーマット]

[ルート要素] に表示されているルート要素を含んだ電文フォーマット名が表示されます。応答電文にヘッダ情報が含まれていない場合、この項目には何も表示されません。

[表示] ボタン

応答電文のヘッダ情報が表示されます。

[出力] ボタン

応答電文のヘッダ情報の出力先を指定するダイアログが表示されます。

[フォルト電文]

[フォルト名]

ユーザ定義受付のフォルトの名称が表示されます。

[電文フォーマット]

フォルト電文のフォーマット名が表示されます。電文フォーマットは、WSDL から自動生成されません。

[表示] ボタン

フォルト電文のフォーマットが表示されます。

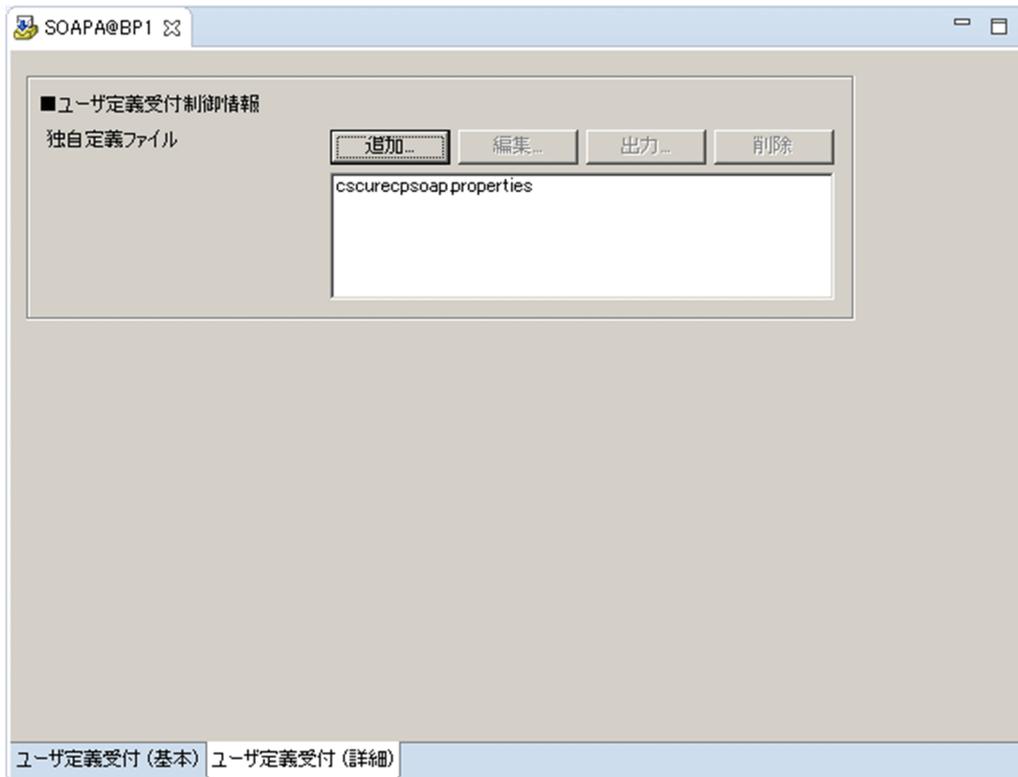
[出力] ボタン

フォルト電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(b) SOAP 受付の詳細画面

SOAP 受付の詳細画面の項目について説明します。この画面は、SOAP1.1/1.2 併用モードでだけ使用されます。

図 1-35 ユーザ定義受付定義画面 (SOAP 受付の詳細画面)



[ユーザ定義受付制御情報]

独自定義ファイルの名称が表示されます。

[独自定義ファイル]

独自定義ファイルが表示されます。

独自定義ファイルは次のボタンで追加・編集・削除・出力先指定ができます。

- [追加] ボタン

独自定義ファイルを追加するダイアログが表示されます。

- [編集] ボタン

選択した独自定義ファイルを編集するためのエディタが起動します。

独自定義ファイルを複数選択してクリックした場合は、選択されたすべての独自定義ファイルに対してエディタが起動します。エディタ上で独自定義ファイルを保存したあと、ユーザ定義受付を保存することで、編集した内容がリポジトリに反映されます。独自定義ファイルの編集中にユーザ定義受付を保存しようとする、独自定義ファイルを保存してよいか確認するダイアログが表示されます。

- [出力] ボタン

独自定義ファイルの出力先を指定するダイアログが表示されます。

- [削除] ボタン

選択したファイルを削除します。

(2) 受付種別「gRPC 受付」の場合

ユーザ定義受付定義画面の、gRPC 受付の定義情報の表示について説明します。

(a) gRPC 受付の基本画面

gRPC 受付の基本画面の項目について説明します。

図 1-36 ユーザ定義受付定義画面 (gRPC 受付の基本画面)

[ユーザー定義受付情報]

[受付名]

ユーザー定義受付を追加したときにユーザー定義受付追加ウィザードに指定した受付名が表示されます。受付名は、XMLSchema の NCName 定義文字で、40 バイト以内で指定します。また、受付名は、ビジネスプロセス内で一意になるように指定します。

[受付 ID]

受付の ID が表示されます。受付 ID は、8 バイト以内の英数字およびアンダーバー (_) で指定します。

[受付種別]

受付の種別として「gRPC 受付」が表示されます。受付種別は変更できません。

[gRPC Service 名]

gRPC Service 名が表示されます。

[オペレーション名 (RPC メソッド名)]

オペレーション名 (RPC メソッド名) が表示されます。

[要求電文]

[電文フォーマット]

要求電文の電文フォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

要求電文の電文フォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

要求電文の電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

[応答電文]

[電文フォーマット]

応答電文の電文フォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

応答電文の電文フォーマットが表示されます。

[出力] ボタン

応答電文の電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

[フォルト電文]

[フォルト名]

ユーザ定義受付のフォルトの名称が表示されます。

[電文フォーマット]

フォルト電文のフォーマット名が表示されます。

[参照] ボタン

フォルト電文フォーマットのファイルを設定するダイアログが表示されます。フォルト電文フォーマットの内容を修正して再登録する際に使用します。それ以外のファイルを指定した場合は動作を保証しません。

[表示] ボタン

フォルト電文のフォーマットが表示されます。

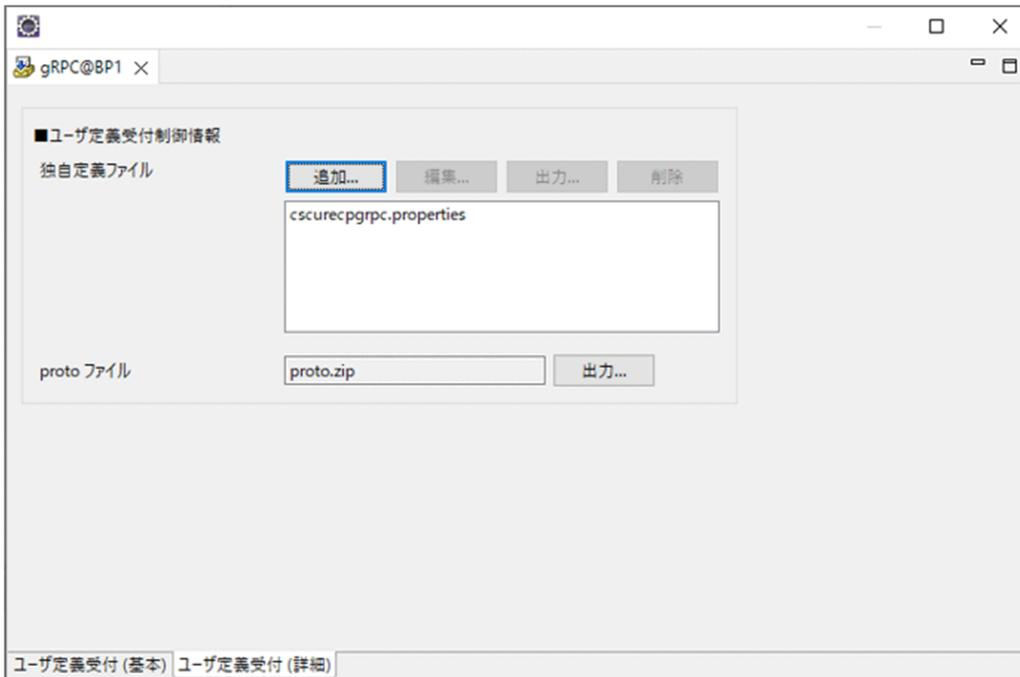
[出力] ボタン

フォルト電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

(b) gRPC 受付の詳細画面

gRPC 受付の詳細画面の項目について説明します。

図 1-37 ユーザ定義受付定義画面 (gRPC 受付の詳細画面)



[ユーザー定義受付制御情報]

[独自定義ファイル]

gRPC 受付定義ファイルのファイル名「cscurecpgrpc.properties」が表示されます。独自定義ファイルは次のボタンで追加・編集・削除・出力先指定ができます。

- [追加] ボタン

独自定義ファイルを追加するダイアログが表示されます。

- [編集] ボタン

選択した独自定義ファイルを編集するためのエディタが起動します。

独自定義ファイルを複数選択してクリックした場合は、選択されたすべての独自定義ファイルに対してエディタが起動します。エディタ上で独自定義ファイルを保存したあと、ユーザー定義受付を保存することで、編集した内容がリポジトリに反映されます。独自定義ファイルの編集中にユーザー定義受付を保存しようとする、独自定義ファイルを保存してよいか確認するダイアログが表示されます。

- [出力] ボタン

独自定義ファイルの出力先を指定するダイアログが表示されます。

- [削除] ボタン

選択したファイルを削除します。

[proto ファイル]

proto ファイルを ZIP 形式で圧縮したファイルの名称「proto.zip」が表示されます。

- [出力] ボタン

ファイル「proto.zip」の出力先を指定するダイアログが表示されます。

proto.zip の内容については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.13.1 gRPC プロトコルを利用したシステム」を参照してください。

(3) 受付種別「TP1/RPC 受付」, 「FTP 受付」, 「HTTP 受付」, 「Message Queue 受付」, 「ファイルイベント受付」, 「Kafka 受付」, 「スケジュール駆動受付」, 「カスタム受付」の場合

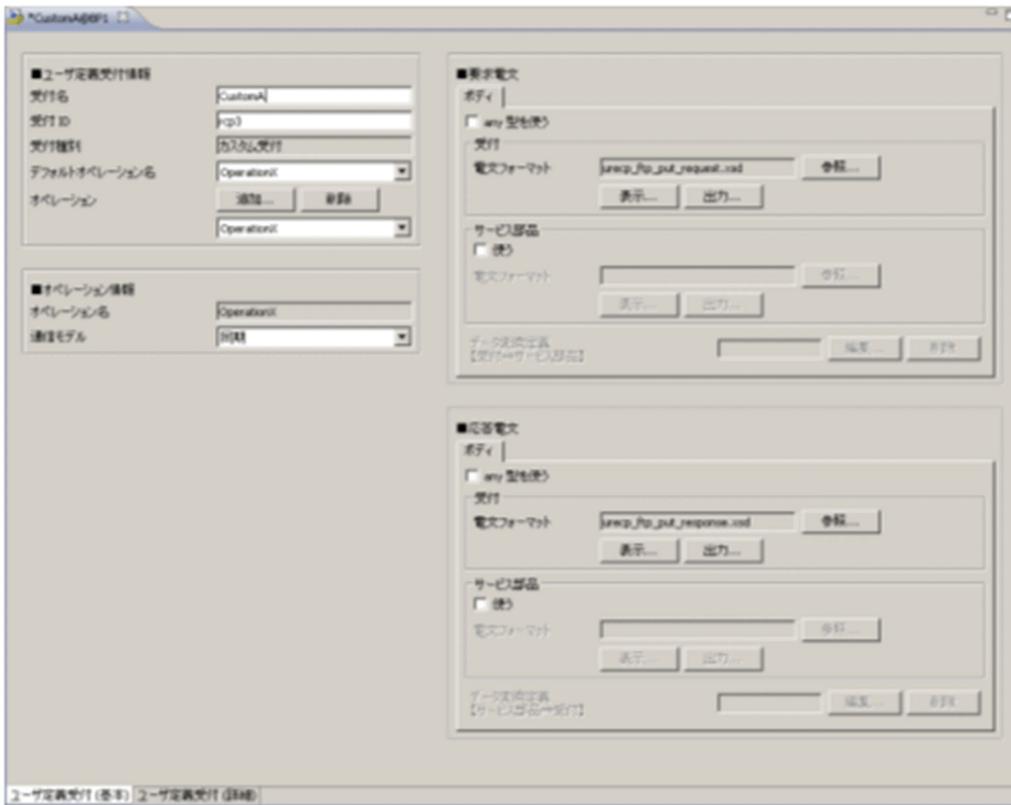
次に示す受付種別の画面項目について説明します。

- TP1/RPC 受付
- FTP 受付
- HTTP 受付
- Message Queue 受付
- ファイルイベント受付
- Kafka 受付
- スケジュール駆動受付
- カスタム受付

(a) TP1/RPC 受付, FTP 受付, HTTP 受付, Message Queue 受付, ファイルイベント受付, Kafka 受付, スケジュール駆動受付, カスタム受付の基本画面

TP1/RPC 受付, FTP 受付, HTTP 受付, Message Queue 受付, ファイルイベント受付, Kafka 受付, スケジュール駆動受付, カスタム受付の基本画面の項目について説明します。

図 1-38 ユーザ定義受付定義画面 (TP1/RPC 受付, FTP 受付, HTTP 受付, Message Queue 受付, ファイルイベント受付, Kafka 受付, スケジュール駆動受付, カスタム受付の基本画面)



[ユーザ定義受付情報]

[受付名]

受付の名称が表示されます。受付の名称は 40 バイト以内で指定します。受付名は、ユーザ定義受付（呼出先選択）の場合はリポジトリ内で、それ以外の受付の場合はビジネスプロセス内で一意になるように指定します。

[受付 ID]

受付の ID が表示されます。受付 ID は、8 バイト以内の英数字およびアンダーバー（_）で指定します。

[受付種別]

受付の種別として次のどれかが表示されます。受付種別は変更できません。

- TP1/RPC 受付
- FTP 受付
- HTTP 受付
- Message Queue 受付
- ファイルイベント受付
- Kafka 受付

- スケジュール駆動受付
- カスタム受付

[デフォルトオペレーション名]

デフォルトで呼び出すオペレーション名が表示されます。デフォルトで呼び出すオペレーション名をドロップダウンリストから選択できます。

[オペレーション]

オペレーション名が表示されます。受付で定義されているオペレーション名をドロップダウンリストから選択できます。

- [追加] ボタン
オペレーションを追加するダイアログが表示されます。
- [削除] ボタン
[オペレーション] 欄で選択したオペレーションを削除します。

[オペレーション情報]

サービス部品のオペレーションについての情報が表示されます。

[オペレーション名]

[ユーザ定義受付情報] の [オペレーション] 欄で選択したオペレーションの名称が表示されます。

[通信モデル]

オペレーションの通信モデルが表示されます。同期または非同期をドロップダウンリストから選択できます。TP1/RPC 受付および FTP 受付の場合、必ず同期を選択してください。

[要求電文]

受付がサービスリクエストから受け取る要求電文の情報が表示されます。

[any 型を使う] チェックボックス

データの型を指定しないでユーザ定義受付を作成する場合にチェックします。

[受付]

- [電文フォーマット]
受付がサービスリクエストから受け取る要求電文のフォーマット名が表示されます。表示される電文フォーマットは、受付の種類によって次のように異なります。
 - TP1/RPC 受付の場合：fdx ファイル
 - FTP 受付、ファイルイベント受付、Kafka 受付またはスケジュール駆動受付の場合：xsd ファイル
 - 上記以外の場合：fdx ファイルまたは xsd ファイル電文フォーマットは変更できます。
- [参照] ボタン
要求電文のフォーマットを設定するダイアログが表示されます。
- [表示] ボタン

要求電文のフォーマットが表示されます。

- **[出力] ボタン**

要求電文フォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

[サービス部品]

- **[使う] チェックボックス**

受付がビジネスプロセスに渡す要求電文を、データ変換する場合にチェックします。TP1/RPC 受付の場合、必ずチェックしてください。

- **[電文フォーマット]**

受付がビジネスプロセスに渡す要求電文のフォーマット名が表示されます。表示される電文フォーマットは、xsd ファイルです。

電文フォーマットは変更できます。

- **[参照] ボタン**

要求電文のフォーマットを設定するダイアログが表示されます。

- **[表示] ボタン**

要求電文のフォーマットが表示されます。

- **[出力] ボタン**

要求電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

[データ変換定義]

要求電文をデータ変換するための定義ファイル名が表示されます。TP1/RPC 受付の場合、必ずデータ変換用の定義ファイルを指定してください。

- **[編集] ボタン**

データ変換定義画面が表示されます。[データ変換定義] で設定した定義ファイルの内容を編集できます。初めて定義する場合は、[ルート要素選択] ダイアログが表示されます。電文フォーマットを変更した場合は、電文フォーマットの変更を反映するかを確認するダイアログが表示されます。

- **[削除] ボタン**

[編集] ボタンで設定したデータ変換定義を削除します。

[応答電文]

受付がサービスリクエストに返す応答電文の情報が表示されます。オペレーション情報の [通信モデル] で、「同期」を選択した場合だけ、設定できます。

[any 型を使う] チェックボックス

データの型を指定しないでユーザ定義受付を作成する場合にチェックします。

[受付]

- **[電文フォーマット]**

受付がサービスリクエストに返す応答電文のフォーマット名が表示されます。表示される電文フォーマットは、受付の種類によって次のように異なります。

- ・ TP1/RPC 受付の場合：fdx ファイル
- ・ FTP 受付またはファイルイベント受付の場合：xsd ファイル
- ・ 上記以外の場合：fdx ファイルまたは xsd ファイル

電文フォーマットは変更できます。

- **[参照] ボタン**
応答電文のフォーマットを設定するダイアログが表示されます。
- **[表示] ボタン**
応答電文のフォーマットが表示されます。
- **[出力] ボタン**
応答電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

[サービス部品]

- **[使う] チェックボックス**
受付がビジネスプロセスから受け取る応答電文を、データ変換する場合にチェックします。
TP1/RPC 受付の場合、必ずチェックしてください。
- **[電文フォーマット]**
受付がビジネスプロセスから受け取る応答電文のフォーマット名が表示されます。表示される電文フォーマットは、xsd ファイルです。
電文フォーマットは変更できます。
- **[参照] ボタン**
応答電文のフォーマットを設定するダイアログが表示されます。
- **[表示] ボタン**
応答電文のフォーマットが表示されます。
- **[出力] ボタン**
応答電文のフォーマットの出力先を指定するダイアログが表示されます。

[データ変換定義]

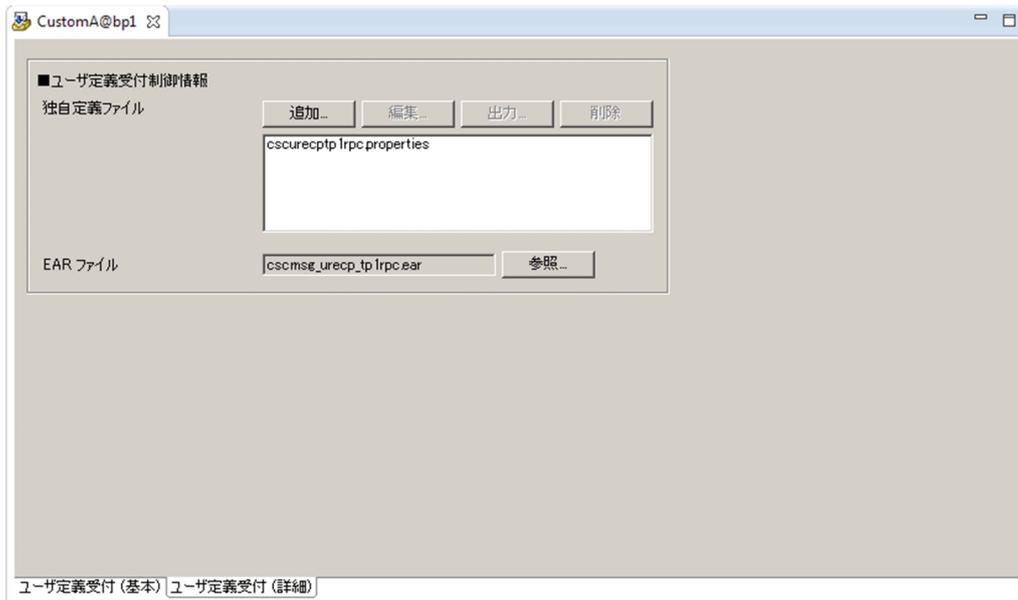
応答電文をデータ変換するための定義ファイル名が表示されます。TP1/RPC 受付の場合、必ずデータ変換用の定義ファイルを指定してください。

- **[編集] ボタン**
データ変換定義画面が表示されます。[データ変換定義] で設定した定義ファイルの内容を編集できます。初めて定義する場合は、[ルート要素選択] ダイアログが表示されます。電文フォーマットを変更した場合は、電文フォーマットの変更を反映するかを確認するダイアログが表示されます。
- **[削除] ボタン**
[編集] ボタンで設定したデータ変換定義を削除します。

(b) TP1/RPC 受付, FTP 受付, HTTP 受付, Message Queue 受付, ファイルイベント受付, Kafka 受付, スケジュール駆動受付, カスタム受付の詳細画面

TP1/RPC 受付, FTP 受付, HTTP 受付, Message Queue 受付, ファイルイベント受付, Kafka 受付, スケジュール駆動受付, カスタム受付の詳細画面の項目について説明します。

図 1-39 ユーザ定義受付定義画面 (TP1/RPC 受付, FTP 受付, HTTP 受付, Message Queue 受付, ファイルイベント受付, Kafka 受付, スケジュール駆動受付, カスタム受付の詳細画面)



[ユーザー定義受付制御情報]

独自定義ファイルおよび EAR ファイルの名称が表示されます。

[独自定義ファイル]

独自定義ファイルが表示されます。受付の種類に応じて、次の独自定義ファイルのファイル名が表示されます。

受付の種類	独自定義ファイル
TP1/RPC 受付	TP1/RPC 受付定義ファイル
FTP 受付	FTP 受付定義ファイル
HTTP 受付	HTTP 受付定義ファイル HTTP レスポンスヘッダ定義ファイル HTTP 受付サービス選択定義ファイル (ユーザー定義受付 (呼出先選択) の場合)
Message Queue 受付	Message Queue 受付定義ファイル
ファイルイベント受付	ファイルイベント受付定義ファイル
Kafka 受付	Kafka 受付定義ファイル
スケジュール駆動受付	スケジュール駆動受付定義ファイル

受付の種類	独自定義ファイル
上記以外	カスタム受付ユーザファイル

独自定義ファイルは次のボタンで追加・編集・削除・出力先指定ができます。

- **[追加] ボタン**

独自定義ファイルを追加するダイアログが表示されます。

- **[編集] ボタン**

選択した独自定義ファイルを編集するためのエディタが起動します。

独自定義ファイルを複数選択してクリックした場合は、選択されたすべての独自定義ファイルに対してエディタが起動します。エディタ上で独自定義ファイルを保存したあと、ユーザ定義受付を保存することで、編集した内容がリポジトリに反映されます。独自定義ファイルの編集中にユーザ定義受付を保存しようとする、独自定義ファイルを保存してよいか確認するダイアログが表示されます。

- **[出力] ボタン**

独自定義ファイルの出力先を指定するダイアログが表示されます。

- **[削除] ボタン**

選択したファイルを削除します。

[EAR ファイル]

[参照] ボタンで設定した EAR ファイルの名称が表示されます。

- **[参照] ボタン**

インポートする EAR ファイルを設定するダイアログが表示されます。

1.2.6 HCSC コンポーネント情報表示画面

HCSC コンポーネントの情報を表示する HCSC コンポーネント情報表示画面について説明します。

図 1-40 HCSC コンポーネント情報表示画面

(1) インタフェース情報

インタフェース情報の各項目について説明します。

[サービス名]

ツリービューの公開サービス一覧で選択した HCSC コンポーネントの名称が表示されます。

[オペレーション]

[サービス名] に表示された HCSC コンポーネントのオペレーション名が表示されます。情報を表示するオペレーションを、ドロップダウンリストから選択します。

(2) サーバ情報

サーバ情報の各項目について説明します。

[サーバ名]

サービス部品を呼び出すことができるクラスタ名が表示されます。

[Web サービス]

Web サービスの受付宛先情報 (URL) が表示されます。また、取得する WSDL 定義のスタイル (バインディングスタイル)、および SOAP 仕様のバージョン (SOAP バージョン) を選択します。

なお、表示される受付宛先情報 (URL) は SOAP1.1 の場合だけです。SOAP1.2 の場合は、SOAP バージョンを選択して取得した WSDL の <soap12:address> の location を確認してください。

[WSDL 取得] ボタン

Web サービスで使用する WSDL ファイルを取得する [WSDL ファイルの保存] ダイアログが表示されます。

[EJB] ※1

HCSC サーバの SessionBean の受付宛先情報が表示されます。宛先情報には JNDI 名称が表示されま

[スタブ取得] ボタン

SessionBean で使用する RMI-IIOP スタブファイルを取得する [スタブファイルの保存] ダイアログが表示されます。

[MDB/WS-R] ※2

[サーバ名] で選択した HCSC サーバの MDB (WS-R) の受付宛先情報が表示されます。宛先情報には URL が表示されます。

[MDB/DB キュー] ※2

[サーバ名] で選択した HCSC サーバの MDB (DB キュー) の受付宛先情報が表示されます。宛先情報にはキュー名称が表示されます。

注※1

クラスタが J2EE サーバ名の異なる複数の HCSC サーバで構成されている場合、特定の HCSC サーバの情報しか表示されません。

注※2

HCSC サーバがロードバランスクラスタ構成の場合、ロードバランスクラスタ経由で非同期の実行要求 (MDB (WS-R) または MDB (DB キュー)) を受け付けられません。非同期の実行要求は、個々の HCSC サーバで直接受け付けます。

クラスタに HCSC サーバが複数存在する場合、個々の HCSC サーバの受付宛先情報はコンマ (,) 区切りで表示されます。

(3) オペレーション情報

[インタフェース情報] の [オペレーション] で選択したオペレーションの情報が表示されます。

[オペレーション名]

[インタフェース情報] の [オペレーション] で選択したオペレーション名称が表示されます。

[通信モデル]

[インタフェース情報] の [オペレーション] で選択したオペレーションの通信モデルが表示されます。同期または非同期のどちらかが表示されます。

(4) 要求電文

[インタフェース情報] の [オペレーション] で選択したオペレーションの情報が表示されます。

[標準電文フォーマット]

標準の要求電文のフォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

[標準電文フォーマット] に表示された要求電文の内容を表示します。

[出力] ボタン

[標準電文フォーマット] に表示された要求電文の出力先を指定するダイアログが表示されます。

[フォーマット ID]

標準の要求電文のフォーマット ID が表示されます。

(5) 応答電文

[インタフェース情報] の [オペレーション] で選択したオペレーションの情報が表示されます。

[標準電文フォーマット]

標準の応答電文のフォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

[標準電文フォーマット] に表示された応答電文の内容を表示します。

[出力] ボタン

[標準電文フォーマット] に表示された応答電文の出力先を指定するダイアログが表示されます。

[フォーマット ID]

標準の応答電文のフォーマット ID が表示されます。

(6) フォルト電文

[インタフェース情報] の [オペレーション] で選択したオペレーションの情報が表示されます。

[フォルト名]

フォルト名が表示されます。情報を表示するフォルト名を、ドロップダウンリストから選択します。

[電文フォーマット]

[フォルト名] で選択した電文のフォーマット名が表示されます。

[表示] ボタン

[電文フォーマット] に表示された電文の内容を表示します。

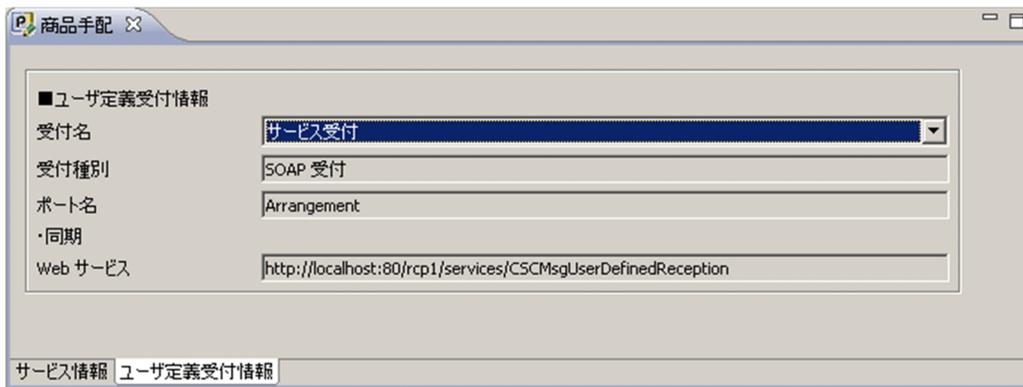
[出力] ボタン

[電文フォーマット] に表示された電文の出力先を指定するダイアログが表示されます。

1.2.7 ユーザ定義受付情報表示画面

パッケージング後のユーザ定義受付の定義情報を表示するユーザ定義受付情報表示画面について説明します。

図 1-41 ユーザ定義受付情報表示画面



[ユーザ定義受付情報]

[受付名]

ユーザ定義受付を追加したときにユーザ定義受付追加ウィザードに指定した受付名が表示されます。

[受付種別]

ユーザ定義受付追加ウィザードに指定した受付種別が表示されます。

[ポート名]

ユーザ定義受付を追加したときにユーザ定義受付追加ウィザードに指定したポート名が表示されます。

[同期]

情報は表示されません。

[Web サービス]

WSDL のサービスロケーションの値 (wsdl:port 要素内の soap-address 要素の location 属性に設定している値) に設定する URL が表示されます。

サービスリクエストを作成する前に、WSDL を編集して、この項目に表示された値をサービスロケーションの値として設定します。

WSDL の編集については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「9.7.2 WSDL を編集する」を参照してください。

1.3 バイナリフォーマット定義に関連するダイアログ

バイナリフォーマット定義に関連するダイアログについて説明します。

1.3.1 フォーマットダイアログ

[フォーマット] ダイアログは、バイナリフォーマット定義ファイルのフォーマット名称や文字コードを設定するときに使用します。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.4 要素を定義する (CSV 以外の形式の場合)」を参照してください。

図 1-42 [フォーマット] ダイアログ

フォーマット

フォーマット名称(N): NewFormat

文字コード

文字コード(C): MS932

Java提供のエンコーダー・デコーダーを使用する(J)

文字コード(Q): windows-31j

未定義コード置換時の処理

全角・半角スペースに置換する(H) 全角スペースに置換する(W)

2進整数のエンディアン

ビッグエンディアン(B) リトルエンディアン(L)

パック形式数値のカスタム定義

ビット値(16進数)

正符号(P): C 負符号(M): D 符号なし(A): F

ソーン形式数値のカスタム定義

ビット値(16進数)

正符号(U): C 負符号(I): D 符号なし(I): F ソーン(Z): F

符号文字(16進数)

正符号(1): 4E 負符号(2): 60

セパレータ

エスケープ文字(E):

改行指定(E): CR+LF

不要なセパレータの削除(S)

CSV形式

出力時のダブルクォーテーション"|"の囲み(Q)

コード変換テーブル

デフォルトから変更する(G)

格納ディレクトリ名(R):

OK キャンセル

[インフォメーション]

[フォーマット] ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム

ム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[フォーマット名称]

バイナリフォーマット定義ファイルのフォーマット名称を指定します。NCName 型で 256 文字以内で指定します。

[フォーマット：CSV 形式]

フォーマット形式が CSV 形式の場合に表示されます。

[文字コード]

[文字コード] (Code Converter を使用する場合)

バイナリデータで Code Converter を使用する場合に、文字コードをドロップダウンリストから選択します。

選択できる文字コード種別を次の表に示します。なお、文字コードの詳細は、「付録 A 文字コード対応表」を参照してください。

表 1-9 選択できる文字コード種別 (Code Converter を使用する場合)

文字コード種別	コード体系	サポートする文字範囲	補足
MS932	SJIS	UCS-2	Microsoft コードページ 932 ただし、IBM 選択文字、NEC 選定 IBM 拡張文字は含みません。IBM 選択文字、NEC 選定 IBM 拡張文字を使用する場合には、ユーザマッピングの定義が必要になります。
UTF8	Unicode	UCS-4※1	Unicode の UTF-8 エンコーディング※2
UTF16_BIG	Unicode	UCS-2	ビッグエンディアンで扱う Unicode の UTF-16 エンコーディング※2
UTF16_LITTLE	Unicode	UCS-2	リトルエンディアンで扱う Unicode の UTF-16 エンコーディング※2
JIS	JIS 漢字コード	UCS-2	JIS X 0201, JIS C 6226, JIS X 0208, JIS X 0212, および ASCII
EUC※3	EUC	UCS-2	ASCII と JIS X0208 を使用できる EUC (EUC-JP) コードセット 3 の領域も含みます。※4
EUC_HJ※3	EUC	UCS-2	外字を 2 バイトの範囲で使用するために、独自に拡張された EUC
KEIS+EBCDIC	KEIS	UCS-2	KEIS'83 および半角英数字が EBCDIC
KEIS+EBCDIK	KEIS	UCS-2	KEIS'83 および半角英数字が EBCDIK
KEIS※5	KEIS	UCS-2	KEIS'83
IBM_CODE+EBCDIC(LATIN)	IBM 漢字コード	UCS-2	IBM 漢字コード+標準または拡張英小文字セット

文字コード種別	コード体系	サポートする文字範囲	補足
IBM_CODE+EBCDIC(KANA)	IBM 漢字コード	UCS-2	IBM 漢字コード+標準または拡張カタカナ文字セット
IBM_CODE※5	IBM 漢字コード	UCS-2	IBM 漢字コード
JEF+EBCDIC	JEF	UCS-2	JEF 漢字コード+ JEF 版 EBCDIC
JEF+EBCDIK	JEF	UCS-2	JEF 漢字コード+ JEF 版 EBCDIK
JEF※5	JEF	UCS-2	JEF 漢字コード
CUSTOM	文字コード変換 UOC	UCS-2	文字コードを変換するためにユーザが作成した外部プログラム

注※1

マッピング処理 (XSLT) では、UTF-16 に符号化されて処理されるため、Unicode 補助文字 (0x10000~0x10FFFF) はサロゲートペアに符号化されます。

注※2

BOM 付きのデータは扱えません。BOM (Byte Order Mark) とは、データのバイトの並び順序を表すコードです。

注※3

バイナリデータの入力時および出力時には、EUC コードの文字のバイトサイズを先頭バイトで判別します。先頭バイトにおける文字バイト数を次の表に示します。

文字コード	先頭バイト	文字バイト数	備考
EUC	0x00~0x7E	1 バイト	ASCII
	0xA1~0xFE	2 バイト	JIS X 0208 (補助コードセット 1)
	0x8E	2 バイト	JIS X 0201 カタカナ (補助コードセット 2)
	0x8F	3 バイト	JIS X 0212 補助漢字 (補助コードセット 3) デフォルトの変換対応については「注※4」を参照してください。
EUC-HJ	0x00~0x7E	1 バイト	ASCII
	0xA1~0xFE	2 バイト	EUC-HJ 領域 または JIS X 0208 (補助コードセット 1)
	0x8E	2 バイト	JIS X 0201 カタカナ (補助コードセット 2)

固定長で定義する場合は、入力文字列および出力文字列のサイズがバイナリフォーマット定義に指定したデータ長を超えないよう、注意してデータ長を決めてください。

注※4

EUC コードセット 3 の領域内の文字の変換マッピングは、デフォルトでは Unicode 私用領域への領域マッピングとなります。JIS X 0212 へマッピングする場合は、単体版の Code Converter を使用

し、ユーザマッピングを作成することで対応してください。利用する Code Converter については「付録 A 文字コード対応表」を参照してください。

注※5

CSV 形式では使用できません。

[Java 提供のエンコーダー・デコーダーを使用する] チェックボックス

バイナリデータのエンコードとデコードに、Java 提供のエンコーダーとデコーダーを使用する場合にチェックします。

[文字コード] (Java 提供のエンコーダー・デコーダーを使用する場合)

バイナリデータで Java 提供のエンコーダー・デコーダーを使用する場合に、文字コードをドロップダウンリストから選択します。

選択できる文字コード種別を次の表に示します。なお、文字コードの詳細は、「付録 A 文字コード対応表」を参照してください。

表 1-10 選択できる文字コード種別 (Java 提供のエンコーダー・デコーダーを使用する場合)

文字コード種別	説明
windows-31j	Windows 日本語
UTF-8	8 ビット Unicode (UCS) Transformation Format
UTF-16BE	16 ビット Unicode (UCS) Transformation Format, ビッグエンディアン・バイト順
UTF-16LE	16 ビット Unicode (UCS) Transformation Format, リトルエンディアン・バイト順
ISO-2022-JP	ISO 2022 形式の JIS X 0201, 0208, 日本語
EUC-JP	JISX 0201, 0208, 0212, EUC エンコーディング, 日本語
x-IBM939	UDC 4370 文字を含む日本語ラテン文字漢字, 5035 のスーパー・セット
x-IBM930	UDC 4370 文字を含む日本語カタカナ漢字, 5026 のスーパー・セット

[未定義コード置換時の処理]

HCSC サーバランタイム定義ファイルで telegram-undefined-character-code=REPLACE (未定義部分の文字コードをスペースに置換する) が指定されている場合、スペースまたは任意文字の置換方法を次の中から選択します。

- [全角・半角スペースに置換する]

次の表に示す置換種別に従って、スペースまたは任意文字を全角・半角へ置換します。任意文字へ置換する場合は、J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルに任意文字を指定する必要があります。置換する任意文字の指定については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「2.3.9 J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) を設定する」で、未定義コードの任意文字への置換に関する説明を参照してください。

バイナリの文字コード	置換種別
MS932	半角

バイナリの文字コード	置換種別
UTF8	半角
UTF16_BIG UTF16_LITTLE	半角
JIS	<ul style="list-style-type: none"> エスケープ状態が JISC6226_1978, JISX0208_1983, JISX0212_1990 の場合 全角 エスケープ状態が JISX0201_LATIN, JISX0201_JIS8, ASCII の場合 半角
EUC EUC_HJ	半角
KEIS+EBCDIC KEIS+EBCDIK	<ul style="list-style-type: none"> シフト状態が半角の場合 半角 シフト状態が全角の場合 全角
KEIS	全角
IBM_CODE+EBCDIC(LATIN) IBM_CODE+EBCDIC(KANA)	<ul style="list-style-type: none"> シフト状態が半角の場合 半角 シフト状態が全角の場合 全角
IBM_CODE	全角
JEF_EBCDIC JEF_EBCDIK	<ul style="list-style-type: none"> シフト状態が半角の場合 半角 シフト状態が全角の場合 全角
JEF	全角

- [全角スペースに置換する]
スペースまたは任意文字をすべて全角へ置換します。

[2 進整数のエンディアン]

バイナリデータに含まれる 2 進整数のエンディアンをラジオボタンで選択します。
この項目は、使用するバイナリデータが CSV 形式以外の場合にだけ選択できます。

[パック形式数値のカスタム定義]

パック形式数値のカスタム定義は、[単純内容要素] ダイアログの設定が次のすべての条件を満たしている場合に適用されます。

- [データ種別] で [パック形式数値] を選択している
- [符号の設定] で [カスタム] を選択している
- [符号の有無] で [あり] を選択している

[ビット値 (16 進数)]

パック形式数値の符号ビットを 16 進数で指定します。

- [正符号]
パック形式数値の正符号ビットを 16 進数の英数字で指定します。
- [負符号]
パック形式数値の負符号ビットを 16 進数の英数字で指定します。
- [符号なし]
パック形式数値の符号なし (絶対値) ビットを 16 進数の英数字で指定します。

[ゾーン形式数値のカスタム定義]

ゾーン形式数値のカスタム定義は、[単純内容要素] ダイアログの設定が次のすべての条件を満たしている場合に適用されます。

- [データ種別] で [ゾーン形式数値] を選択している
- [符号の設定] で [カスタム] を選択している
- [符号の有無] で [あり] を選択している

[ビット値 (16 進数)]

ゾーン形式数値の符号ビットを 16 進数で指定します。

[符号の設定] が [符号ビット] の場合に適用されます。

- [正符号]
パック形式数値の正符号ビットを 16 進数の英数字で指定します。
- [負符号]
パック形式数値の負符号ビットを 16 進数の英数字で指定します。
- [符号なし]
パック形式数値の符号なし (絶対値) ビットを 16 進数の英数字で指定します。
- [ゾーン]
ゾーン形式数値のゾーンビットを 16 進数の英数字で指定します。

[符号文字 (16 進数)]

ゾーン形式数値で符号を表す文字を 16 進数で指定します。

[符号の設定] が [符号文字] の場合に適用されます。

- [正符号]
正符号文字を英数字 1~2 桁の 16 進数で指定します。
- [負符号]
負符号文字を英数字 1~2 桁の 16 進数で指定します。

[セパレータ]

[エスケープ文字]

セパレータとして使用する文字がデータ内に含まれる場合に、エスケープ文字として使用する文字を指定します。エスケープ文字として使用できる文字は、1文字のラテン文字 (JIS X 0201 の「0x21」～「0x7E」) または半角スペース (JIS X 0201 の「0x20」) です。

この項目は、使用するバイナリデータが CSV 形式以外の場合に指定できます。

[改行指定]

セパレータで使用する改行文字をドロップダウンリストで選択します。使用できる改行コードは、CR + LF、または LF です。

[不要なセパレータの削除] チェックボックス

末尾のセパレータを削除する場合にチェックします。

[CSV 形式]

[出力時のダブルクォーテーション (") の囲み] チェックボックス

データ項目をダブルクォーテーションで囲む場合にチェックします。

ただし、チェックした場合でも値が空文字列の場合はダブルクォーテーションで囲みません。

[コード変換テーブル]

[デフォルトから変更する] チェックボックス

Code Converter のコード変換ライブラリから参照される、コード変換テーブルの格納ディレクトリを変更する場合にチェックします。デフォルトのディレクトリは次のとおりです。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%lib%external%table
```

[格納ディレクトリ名]

[デフォルトから変更する] チェックボックスをチェックした場合に、コード変換テーブルの格納先のディレクトリ名部分を指定します。

コード変換テーブル格納パスのルートパスは、HCSC サーバランタイム定義ファイルの code-table-root-path プロパティで指定されています。ここでは、そのルートパスの配下に置くディレクトリの名称を指定します。

ディレクトリ名は 64 文字以内で、英数字 (0~9, A~Z, a~z) またはアンダーバー (_) で指定します。

[OK] ボタン

指定した内容を設定して [フォーマット] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

指定した内容を設定しないで [フォーマット] ダイアログを閉じます。

1.3.2 単純内容要素ダイアログ

[単純内容要素] ダイアログは、バイナリフォーマット定義ファイルに単純内容要素を設定するときに使用します。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.4 要素を定義する (CSV 以外の形式の場合)」を参照してください。

[単純内容要素] ダイアログは、グローバル定義の単純内容要素を設定する場合と、ローカル定義の単純内容要素を設定する場合で表示されるタブが異なります。

(1) 単純内容要素タブ

単純内容要素タブは、設定する単純内容要素がグローバル定義でもローカル定義でも表示されます。単純内容要素の情報を指定します。

図 1-43 [単純内容要素] ダイアログ (単純内容要素タブ)

単純内容要素

名称(M): S1

単純内容要素

データ種別(Y): 文字列

サイズ

固定(F) 10 バイト

可変(V)

詳細

個別文字コード

指定する(P)

フォーマット設定値: MS932

文字コード(C): KEIS

埋め字(E): スペース 空文字(0x00)までをデータとする(N)

左右寄せ

左(L) 右(R)

不要文字

削除する(T) 削除しない(O)

使用不可文字

代替文字に置換(A)

先頭代替文字(16進数)(I): 2400

CSV形式

空データとNullデータを区別する(G)

COBOLデータ形式

LOW-VALUEの変換(W)

OK キャンセル

[データ種別]

単純内容要素として使用するデータの種別をドロップダウンリストから選択します。選択できるデータ種別と、それに応じて [詳細] に表示される内容を次に示します。

データ種別	[詳細] に表示される内容
文字列	「(a) 文字列型の場合」を参照してください。
整数	「(c) 整数・実数・固定小数部数値型の場合」を参照してください。
実数	
固定小数部数値	
ゾーン形式数値※	「(b) ゾーン・パック形式数値型の場合」を参照してください。
パック形式数値※	
符号付 2 進整数※	[詳細] には何も表示されません。
符号無 2 進整数※	
バイト列※	「(d) バイト列型の場合」を参照してください。
ビット列※	[詳細] には何も表示されません。
日付時刻	「(e) 日付時刻型の場合」を参照してください。

注※

バイナリデータとして CSV 形式のデータを扱う場合は選択できません。

[サイズ]

単純内容要素として使用するデータのサイズを指定します。

• 固定値の場合

ラジオボタンで [固定] を選択し、サイズを指定します。

データ種別と文字コードによって指定できるサイズの範囲が異なります。指定できるサイズの範囲を次の表に示します。

表 1-11 固定値の単純内容要素に指定できるサイズの範囲

データ種別	文字コード	指定できる範囲	単位	
文字列, 整数, 実数, 固定小数部数値	UTF16 以外	1※~2,147,483,647	バイト	
	UTF16	2※~2,147,483,646	バイト	
ゾーン形式数値, パック形式数値	—	1~2,147,483,647	バイト	
符号付 2 進整数, 符号無 2 進整数	—	1~8	バイト	
バイト列	—	1~2,147,483,647	バイト	
ビット列	—	1~64	ビット	
日付時刻	CCYYMMDD	UTF16 以外	8~2,147,483,647	バイト
		UTF16	16~2,147,483,646	バイト
	YYMMDD	UTF16 以外	6~2,147,483,647	バイト
		UTF16	12~2,147,483,646	バイト

データ種別		文字コード	指定できる範囲	単位
日付時刻	hhmmss	UTF16 以外	6~2,147,483,647	バイト
		UTF16	12~2,147,483,646	バイト
	CCYYMMDDhhmmss	UTF16 以外	14~2,147,483,647	バイト
		UTF16	28~2,147,483,646	バイト
	YYMMDDhhmmss	UTF16 以外	12~2,147,483,647	バイト
		UTF16	24~2,147,483,646	バイト

(凡例)

—：指定できる範囲が文字コードに依存しないことを示します。

注※

データ種別が文字列のローカル単純内容要素の場合は、サイズが0バイトのデータを意味する0も指定できます。CSV形式のバイナリフォーマット定義の場合は指定できません。

- 可変値の場合

ラジオボタンで「可変」を選択します。サイズの決定方法は、構成要素タブ（または「構成要素」ダイアログ）の「サイズ」で設定します。

【詳細】

【データ種別】の選択内容に応じて、次のように表示内容が異なります。

(a) 文字列型の場合

【データ種別】で「文字列」を選択した場合に表示されます。なお、【サイズ】に0を指定した場合は【詳細】の各項目は非活性となり、指定できません。

図 1-44 [単純内容要素] ダイアログ (単純内容要素タブ ([データ種別] で「文字列」を選択した場合))



[個別文字コード]

単純内容要素として使用するデータの文字コードが、[フォーマット] ダイアログに設定した文字コードと異なる場合、文字コードを個別に指定します。

[サイズ] で「可変」を選択した場合は、構成要素のサイズ設定で [データの終端まで] または [サイズノード] が選択されている場合に個別文字コードが指定できます。

[指定する] チェックボックス

個別文字コードを指定する場合にチェックします。

[フォーマット設定値]

[フォーマット] ダイアログの [文字コード] グループで設定した文字コードが表示されます。

[文字コード]

指定する文字コードをドロップダウンリストから選択します。

選択できる文字コード種別については、「表 1-9 選択できる文字コード種別 (Code Converter を使用する場合)」または「表 1-10 選択できる文字コード種別 (Java 提供のエンコーダー・デコーダーを使用する場合)」を参照してください。

なお、Code Converter の文字コードの詳細は、「付録 A 文字コード対応表」を参照してください。

[埋め字]

単純内容要素として使用するデータが指定したサイズに満たない場合、余った部分を埋める文字をドロップダウンリストから選択します。空白で埋める場合は [スペース] を、空文字 (0x00) で埋める場合は [空文字 (0x00)] を選択します。

[空文字(0x00)までをデータとする] チェックボックス

空文字 (0x00) までをデータとして扱う場合にチェックします。

[埋め字] で [空文字 (0x00)] が選択されている場合だけ指定できます。

[左右寄せ]

データを寄せる方向を [左] ラジオボタンまたは [右] ラジオボタンで選択します。この項目は、次のどちらかの場合に指定できます。

- [空文字(0x00)までをデータとする] チェックボックスが非活性である場合
- [空文字(0x00)までをデータとする] チェックボックスが活性化していて、チェックされていない場合

[不要文字]

不要文字を削除するかどうかをラジオボタンで設定します。この項目は、次のどちらかの場合に指定できます。

- [空文字(0x00)までをデータとする] チェックボックスが非活性である場合
- [空文字(0x00)までをデータとする] チェックボックスが活性化していて、チェックされていない場合

不要文字の削除については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.1 バイナリフォーマット定義ファイルのデータ型と文字コードの種類」を参照してください。

[使用不可文字]

XML で使用できない文字が含まれている場合に、代替として使用する文字を指定します。使用できない文字は次のとおりです。

- 0x00~0x1F (0x09, 0x0A, 0x0D を除く)
制御コード
- 0xFFFFE~0xFFFF
未定義文字 (Unicode としては本来使用禁止)

[代替文字に置換] チェックボックス

使用不可文字を代替文字に置換する場合にチェックします。

[先頭代替文字(16進数)]

代替として使用する文字を 16 進数で指定します。[代替文字に置換] チェックボックスがチェックされている場合に指定できます。

代替文字の最初の 1 文字を指定すると、続く 34 個分はそれぞれ 0x00~0x1F, 0xFFFFE~0xFFFF に対応して代替文字として使用されます。16 進数は先頭の「0x」を付けずに指定します。例えば、0x2400 の場合は 2400 となります。

先頭の代替文字として指定できる値を次に示します。

- 0020~D7DE

- E000～FFDC

デフォルト値は 2400 です。大文字・小文字は区別されません。

【CSV 形式】

【空データと Null データを区別する】 チェックボックス

CSV 形式のバイナリデータを変換する際、"" (空文字列) とデータなし (Null データ) を識別する場合にチェックします。バイナリフォーマット定義ファイルを CSV 形式で作成した場合か、親である複合内容要素のセパレータ形式が「CSV 形式」である場合に指定できます。

詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「付録 Q CSV 形式の単純内容要素のデータなしの区別」を参照してください。

【COBOL データ形式】

【LOW-VALUE の変換】 チェックボックス

COBOL 特有のデータ形式である LOW-VALUE (0x00 で埋められたデータ) を変換する場合にチェックします。

サイズが固定 (0 でない) で、かつ埋め字がスペースである場合に指定できます。

(b) ゾーン・パック形式数値型の場合

【データ種別】で「ゾーン形式数値」または「パック形式数値」を選択した場合に表示されます。

図 1-45 【単純内容要素】ダイアログ (単純内容要素タブ (【データ種別】で「ゾーン形式数値」または「パック形式数値」を選択した場合))



【桁数】

桁数を設定します。

[全体] チェックボックス

ゾーン・パック形式数値型の場合は常に非活性です。そのため、全体桁数の最大値は指定できません。

[小数部] チェックボックス

小数部の桁数の最大値を 0～33 で指定できます。

[符号の設定]

10 進数符号の設定方法として、[自動] または [カスタム] を選択します。

[カスタム] を選択すると、[フォーマット] ダイアログで指定された項目が使用されます。

[符号の有無]

符号を付けない場合は [なし]、符号を付ける場合は [あり] を選択します。

この項目は、[符号の設定] で [カスタム] を選択した場合に指定できます。

[符号の種類]

符号を符号ビットで付ける場合は [符号ビット]、符号文字で付ける場合は [符号文字] を選択します。

この項目は、次のすべての条件を満たしている場合に指定できます。

- [データ種別] で [ゾーン形式数値] を選択している
- [符号の設定] で [カスタム] を選択している
- [符号の有無] で [あり] を選択している

[符号の位置]

符号を前に付ける場合は [前]、符号を後ろに付ける場合は [後] を選択します。

この項目は、次のすべての条件を満たしている場合に指定できます。

- [データ種別] で [ゾーン形式数値] を選択している
- [符号の設定] で [カスタム] を選択している
- [符号の有無] で [あり] を選択している

(c) 整数・実数・固定小数部数値型の場合

[データ種別] で「整数」、「実数」または「固定小数部数値」を選択した場合に表示されます。

図 1-46 [単純内容要素] ダイアログ (単純内容要素タブ ([データ種別] で「整数」または「実数」を選択した場合))

単純内容要素

名称(M): int

単純内容要素

データ種別(Y): 整数

サイズ

固定(E) 1 バイト

可変(V)

詳細

個別文字コード

指定する(E)

フォーマット設定値: [MS932]

文字コード(C): UTF8

桁数

全体(1): 1

小数部(D): 0

符号の有無

なし(N)

負だけあり(U)

常にあり(A)

埋め字

スペース(S)

0

左右寄せ

左(L) 右(R)

不要文字

削除する(I) 削除しない(O)

CSV形式

空データとNullデータを区別する(S)

COBOLデータ形式

LOW-VALUEの変換(W)

OK キャンセル

図 1-47 【単純内容要素】 ダイアログ（単純内容要素タブ（[データ種別] で「固定小数部数値」を選択した場合））



【個別文字コード】

単純内容要素として使用するデータの文字コードが、[フォーマット] ダイアログに設定した文字コードと異なる場合、文字コードを個別に指定します。この項目は[データ種別]が「整数」または「実数」の場合に指定できます。

文字コードに KEIS, IBM_CODE, JEF は指定できません。

[サイズ] で「可変」を選択した場合は、構成要素のサイズ設定で [データの終端まで] または [サイズノード] が選択されている場合に個別文字コードが指定できます。

【指定する】 チェックボックス

個別文字コードを指定する場合にチェックします。

【フォーマット設定値】

[フォーマット] ダイアログの [文字コード] グループで設定した文字コードが表示されます。

【文字コード】

指定する文字コードをドロップダウンリストから選択します。指定した文字コードは次に示すデータにも使用されます。

- 単純内容要素ダイアログの [符号の有無] の設定によってデータに付与されるプラス記号 (+) およびマイナス記号 (-)

- 単純内容要素ダイアログの [埋め字] の設定によってデータに付与されるスペースおよび「0」選択できる文字コード種別については、「1.3.1 フォーマットダイアログ」の「表 1-9 選択できる文字コード種別 (Code Converter を使用する場合)」または「表 1-10 選択できる文字コード種別 (Java 提供のエンコーダー・デコーダーを使用する場合)」を参照してください。なお、Code Converter の文字コードの詳細は、「付録 A 文字コード対応表」を参照してください。

【桁数】

桁数を設定します。

【全体】 チェックボックス

チェックすると全体桁数の最大値を 1~34 で指定できます。指定できる桁数は、[サイズ] の設定によって次のように異なります。

- [サイズ] で [固定] を選択した場合
全体桁数は整数部、符号、小数部の合計桁数になります。
なお、実数の場合、[小数部] の桁数に 1 以上の数値を指定すると、全体桁数には小数点も含まれます。
- [サイズ] で [可変] を選択した場合
全体桁数には符号と小数点の桁数を含みません。

【小数部】 チェックボックス

チェックすると、小数部の桁数の最大値を 0~33 で指定できます。

データ種別が実数または固定小数部数値の場合に指定できます。

固定小数部数値の場合、チェックを外すことはできません。

【符号の有無】

データ種別が整数、実数または固定小数部数値の場合、正負の符号の有無をラジオボタンで選択します。

- 符号がない場合
[なし] を選択します。
- 負の符号だけある場合
[負だけあり] を選択します。
- 常に正負の符号がある場合
[常にあり] を選択します。

【埋め字】

データ種別が整数、実数または固定小数部数値の場合、単純内容要素として使用するデータが指定したサイズに満たないとき、余った部分を埋める文字をラジオボタンで選択します。空白で埋める場合は [スペース] を、0 で埋める場合は [0] を選択します。

【左右寄せ】

データを寄せる方向を [左] ラジオボタンまたは [右] ラジオボタンで選択します。[埋め字] が [0] の場合は [左] ラジオボタンは設定できません。

[不要文字]

不要文字を削除するかどうかをラジオボタンで設定します。

[CSV 形式]

[空データと Null データを区別する] チェックボックス

CSV 形式のバイナリデータを変換する際、"" (空文字列) とデータなし (Null データ) を識別する場合にチェックします。バイナリフォーマット定義ファイルを CSV 形式で作成した場合か、親である複合内容要素のセパレータ形式が「CSV 形式」である場合に指定できます。

詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「付録 Q CSV 形式の単純内容要素のデータなしの区別」を参照してください。

[COBOL データ形式]

[LOW-VALUE の変換] チェックボックス

COBOL 特有のデータ形式である LOW-VALUE (0x00 で埋められたデータ) を変換する場合にチェックします。

サイズが固定である場合に指定できます。

(d) バイト列型の場合

[データ種別] で「バイト列」を選択した場合に表示されます。

図 1-48 [単純内容要素] ダイアログ (単純内容要素タブ ([データ種別] で「バイト列」を選択した場合))



[エンコード形式]

エンコード形式として、スキーマのデータ型である hexBinary または base64Binary をラジオボタンで設定します。

(e) 日付時刻型の場合

[データ種別] で「日付時刻」を選択した場合に表示されます。

図 1-49 [単純内容要素] ダイアログ (単純内容要素タブ ([データ種別] で「日付時刻」を選択した場合))

単純内容要素

名称(M): ITEM

単純内容要素

データ種別(Y): 日付時刻

サイズ

固定(F) 8 バイト

可変(V)

詳細

形式(I): CCYYMMDD 秒小数部桁数(I): 0

左右寄せ

左(L) 右(R)

CSV形式

空データとNullデータを区別する(G)

OK キャンセル

[日付時刻]

データ種別が日付時刻の場合、日付時刻の形式を設定します。

[形式]

日付時刻の形式をドロップダウンリストから選択します。

[秒小数部桁数]

日付時刻の形式に時刻 (hhmmss) が含まれる場合、秒の小数部分の桁数を 0~3 で指定します。

[左右寄せ]

データの寄せる方向を [左] ラジオボタンまたは [右] ラジオボタンで選択します。

【CSV 形式】

【空データと Null データを区別する】 チェックボックス

CSV 形式のバイナリデータを変換する際、"" (空文字列) とデータなし (Null データ) を識別する場合にチェックします。バイナリフォーマット定義ファイルを CSV 形式で作成した場合か、親である複合内容要素のセパレータ形式が「CSV 形式」である場合に指定できます。

詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「付録 Q CSV 形式の単純内容要素のデータなしの区別」を参照してください。

(2) 構成要素タブ

構成要素タブには、構成要素の情報を指定します。

構成要素タブは、ローカル定義の単純内容要素を設定する場合にだけ表示されます。単純内容要素タブの [サイズ] に 0 を指定した場合は非活性となります。

図 1-50 【単純内容要素】 ダイアログ (構成要素タブ)



指定する内容は、【構成要素】 ダイアログの構成要素タブと同じです。

【構成要素】 ダイアログの構成要素タブについては、「1.3.4(3) 構成要素タブ (単純内容要素)」を参照してください。

(3) 各タブで共通の内容

各タブで共通の内容を次に示します。

[インフォメーション]

[単純内容要素] ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[名称]

単純内容要素の名称を指定します。NCName 型で利用できる文字を利用して 256 文字以内で指定します。

[OK] ボタン

指定した内容を設定して [単純内容要素] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

指定した内容を設定しないで [単純内容要素] ダイアログを閉じます。

1.3.3 複合内容要素ダイアログ

[複合内容要素] ダイアログは、バイナリフォーマット定義ファイルに複合内容要素を設定するときに使用します。また、複合内容要素にセパレータを設定するときにも使用します。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.4 要素を定義する (CSV 以外の形式の場合)」を参照してください。

[複合内容要素] ダイアログは、複合内容要素を設定する場合と、セパレータを設定する場合で操作するタブが異なります。

(1) 複合内容要素タブ

複合内容要素タブは、複合内容要素の情報を指定するときに使用します。

構成区分が [選択構成] の場合、利用する構成要素を何から選択するかによって、表示される画面が変わります。

図 1-51 [複合内容要素] ダイアログ (複合内容要素タブ：構成要素を選択条件ノードの値から選択する場合)



図 1-52 [複合内容要素] ダイアログ (複合内容要素タブ：構成要素を開始セパレータの値から選択する場合)



【構成区分】

複合内容要素に設定された構成要素の構成区分をラジオボタンで選択します。

- 逐次構成の場合
[逐次構成] を選択します。
- 選択構成の場合
[選択構成] を選択します。

【選択種別】

構成区分が [選択構成] の場合、選択構成の選択種別をラジオボタンで選択します。

- 選択条件ノードの値から、利用する構成要素を選択する場合
[選択条件ノード] を選択し、[ノード選択] ボタンをクリックして選択条件ノードを指定します。
- 構成要素の開始セパレータの値から、利用する構成要素を選択する場合
[構成要素の開始セパレータ] を選択します。

【ノード選択】 ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。構成要素の選択条件ノードを選択するときに使用します。

[ノード選択] ダイアログで選択したノードは次のように表示されます。

- 基準パスで選択した場合
基準ノードからの相対パスが表示されます。
- 絶対パスで選択した場合
ルート要素からのパスが表示されます。

【構成要素一覧】

複合内容要素に設定された構成要素の一覧が表示されます。

【名称】

構成要素に設定されている単純内容要素および複合内容要素の名称が表示されます。

【選択条件値】

構成区分が [選択構成] で選択種別が [選択条件ノード] の場合、構成要素に設定されている選択条件値が表示されます。構成区分が [逐次構成] の場合、および構成区分が [選択構成] で選択種別が [構成要素の開始セパレータ] の場合、この項目は表示されません。

1つの要素に複数の選択条件値が設定されている場合は、区切り文字で区切って表示されます。

構成区分が [選択構成] で選択種別が [選択条件ノード] の場合、[選択条件値] に表示されているどの値にも当てはまらないときは、選択条件値が表示されていない構成要素が出現します。このような構成要素は、構成要素の中で1つだけ設定できます。

【開始セパレータ値】

構成区分が [選択構成] で選択種別が [構成要素の開始セパレータ] の場合、構成要素に設定されている開始セパレータ値が表示されます。構成区分が [逐次構成] の場合、および構成区分が [選択構成] で選択種別が [選択条件ノード] の場合、この項目は表示されません。

構成区分が [選択構成] で選択種別が [構成要素の開始セパレータ] の場合で、[開始セパレータ値] に表示されているどの値にも当てはまらないとき、次に示す構成要素が出現します。

- 開始セパレータ値が表示されていない構成要素
- 単純内容要素である構成要素

このような構成要素は、構成要素の中で1つだけ設定できます。

[上へ] ボタン

構成要素一覧で選択した構成要素の配置を1つ上に変更します。

[下へ] ボタン

構成要素一覧で選択した構成要素の配置を1つ下に変更します。

[条件値設定] ボタン

構成区分が [選択構成] で選択種別が [選択条件ノード] の場合、このボタンをクリックすると、[条件値設定] ダイアログが表示されます。構成区分が [逐次構成] の場合、および [選択構成] で選択種別が [構成要素の開始セパレータ] の場合、このボタンは表示されません。構成要素一覧で選択した構成要素の選択条件値を設定するときに使用します。

(2) セパレータタブ

セパレータタブは、複合内容要素にセパレータを設定する場合に使用します。

図 1-53 [複合内容要素] ダイアログ (セパレータタブ)



[セパレータ形式]

使用するセパレータ形式をドロップダウンリストから選択します。選択できるセパレータを次に示します。

- ユーザ指定：ユーザが各セパレータを設定します。
- CSV：CSV形式のセパレータを自動で設定します。

なお、セパレータ形式に CSV を選択した場合、開始セパレータおよび中間区切りセパレータは次のように設定されます。

- 開始セパレータ：なし
- 中間セパレータ：コンマ (,)

開始セパレータ、中間区切りセパレータ、終了セパレータとして使用するセパレータを、次の項目を利用してそれぞれ指定します。

[使用する] チェックボックス

各セパレータを使用する場合にチェックします。

[セパレータ名称]

使用するセパレータの名称を指定します。

[選択] ボタン

[セパレータ選択] ダイアログが表示されます。

[セパレータ値]

[セパレータ名称] を指定した場合、定義されているセパレータの値が表示されます。セパレータの値は [] で囲まれて表示されます。

(3) 各タブで共通の内容

各タブで共通の内容を次に示します。

[インフォメーション]

[複合内容要素] ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[名称]

複合内容要素の名称を指定します。NCName 型で利用できる文字を利用して 256 文字以内で指定します。

[OK] ボタン

指定した内容を設定して [複合内容要素] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

指定した内容を設定しないで [複合内容要素] ダイアログを閉じます。

1.3.4 構成要素ダイアログ

[構成要素] ダイアログは、グローバル定義の単純内容要素または複合内容要素を、複合内容要素の構成要素に設定するときに使用します。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.4 要素を定義する (CSV 以外の形式の場合)」を参照してください。

[構成要素] ダイアログは、グローバル定義の単純内容要素を構成要素に設定する場合と、複合内容要素を構成要素に設定する場合で表示されるタブが異なります。

(1) 単純内容要素タブ

単純内容要素タブは、単純内容要素を構成要素に設定する場合にだけ表示されます。構成要素に設定する単純内容要素の情報が表示されます。内容は変更できません。

図 1-54 [構成要素] ダイアログ (単純内容要素タブ)

構成要素

名称(M): data2

単純内容要素 構成要素

データ種別(Y): 固定小数部数値

サイズ

固定(F) 1 バイト

可変(V)

詳細

個別文字コード

指定する(P)

フォーマット設定値: [MS932]

文字コード(C): MS932

桁数

全体(1): 1

小数部(D): 0

符号の有無

なし(N)

負だけあり(U)

常にあり(A)

埋め字

スペース(S)

0

左右寄せ

左(L) 右(R)

不要文字

削除する(T) 削除しない(O)

CSV形式

空データとNullデータを区別する(G)

COBOLデータ形式

LOW-VALUEの変換(W)

OK キャンセル

表示される情報は、構成要素に設定するグローバル定義の単純内容要素を設定するときに、[単純内容要素] ダイアログの単純内容要素タブで設定した値です。

[単純内容要素] ダイアログの単純内容要素タブについては、「[1.3.2\(1\) 単純内容要素タブ](#)」を参照してください。

(2) 複合内容要素タブ

複合内容要素タブは、複合内容要素を構成要素に設定する場合にだけ表示されます。構成要素に設定する複合内容要素の情報が表示されます。内容は変更できません。

図 1-55 「構成要素」ダイアログ（複合内容要素タブ）



表示される情報は、構成要素に設定する複合内容要素を設定するときに、[複合内容要素] ダイアログで設定した値です。

[複合内容要素] ダイアログについては、「[1.3.3 複合内容要素ダイアログ](#)」を参照してください。

(3) 構成要素タブ（単純内容要素）

構成要素タブには構成要素の情報を指定します。構成要素タブは、構成要素に設定する要素がグローバル定義の単純内容要素でも複合内容要素でも表示されます。構成要素が単純内容要素の場合に表示される構成要素タブを次に示します。

図 1-56 【構成要素】 ダイアログ (単純内容要素の構成要素タブ)



【出現回数】

構成要素の出現回数を指定します。

- 出現回数が固定の場合
ラジオボタンで [固定] を選択し、出現回数を 1~2,147,483,647 で指定します。
- 出現回数を範囲で指定する場合
ラジオボタンで [範囲指定] を選択し、[最小] と [最大] で出現回数の範囲を指定します。設定できる範囲は、1~2,147,483,647 です。
- データの終端までを要素とする場合
ラジオボタンで [データの終端まで] を選択します。なお、必ず 1 回以上出現させる場合は、[データの省略不可] チェックボックスにチェックします。

参考

データの終端とは次の場合を示します。

- 設定された各要素のセパレータの組み合わせからデータ終端と判断できるセパレータが出現した場合
 - 全データを読み取った場合
 - 設定された複合内容要素のサイズノードから、指定されたサイズのデータを読み取った場合
- 出現回数をほかの要素に依存させる場合

ラジオボタンで [出現回数ノード] を選択し、[ノード選択] ボタンをクリックして依存させるノードを選択します。バイナリデータとして CSV 形式のデータを扱う場合、非活性になります。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。構成要素の出現回数をほかの要素に依存させる場合、依存させるノードを選択するときに使用します。

[ノード選択] ダイアログで選択したノードは次のように表示されます。

- 基準パスで選択した場合
基準ノードからの相対パスが表示されます。
- 絶対パスで選択した場合
ルート要素からのパスが表示されます。

[サイズ]

単純内容要素タブの [サイズ] で [可変] を選択した場合に、構成要素である単純内容要素として使用するデータのサイズを設定します。バイナリデータとして CSV 形式のデータを扱う場合、非活性になります。

- データの終端までを要素とする場合
ラジオボタンで [データの終端まで] を選択します。単純内容要素タブの場合だけ活性になります。

参考

データの終端とは次の場合を示します。

- 設定された各要素のセパレータの組み合わせからデータ終端と判断できるセパレータが出現した場合
- 全データを読み取った場合
- 設定された複合内容要素のサイズノードから、指定されたサイズのデータを読み取った場合

- サイズをほかの要素に依存させる場合
ラジオボタンで [サイズノード] を選択し、[ノード選択] ボタンをクリックして依存させるノードを選択します。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。構成要素である単純内容要素のサイズをほかの要素に依存させる場合、依存させるノードを選択するときに使用します。

[ノード選択] ダイアログで選択したノードは次のように表示されます。

- 基準パスで選択した場合
基準ノードからの相対パスが表示されます。
- 絶対パスで選択した場合
ルート要素からのパスが表示されます。

[サイズ算出方法]

サイズノードのサイズの算出方法を次の中からドロップダウンリストで選択します。サイズ算出方法の設定のない過去バージョンのバイナリフォーマット定義を利用すると、「システム既定値」が仮定されます。

指定値	サイズノードの値
システム既定値（デフォルト）	サイズノードの拡張機能の有効/無効は、実行環境の J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) の csc.dt.sizeNode.includeSelfSize プロパティの設定値に従います。J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルの設定については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「2.3.9 J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) を設定する」を参照してください。
データ長のみ	サイズノードの拡張機能は無効となり、サイズノードの長さは、サイズノードの設定要素のサイズが適用されます。
サイズノードの長さも含める	サイズノードの拡張機能が有効となり、サイズノードの長さは、サイズノードの設定要素のサイズと、サイズノード自身のサイズの合計が適用されます。

[サイズノード値の単位]

サイズノード値の単位を次の中から選択します。

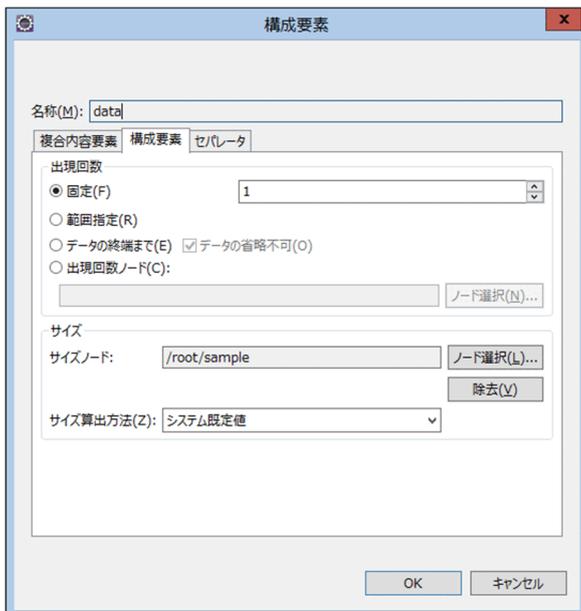
- バイト数（デフォルト）
サイズノードの値をバイト単位で換算します。
- 桁数
サイズノードの値をデータの桁数で換算します。
[桁数] を選択すると、[サイズ算出方法] は非活性となります。

この項目は、単純内容要素タブで [データ種別] に「パック形式数値」、[サイズ] に [可変] ラジオボタンを選択した場合に、構成要素タブで [サイズノード] ラジオボタンを選択すると活性化されます。

(4) 構成要素タブ（複合内容要素）

構成要素タブには構成要素の情報を指定します。構成要素タブは、構成要素に設定する要素がグローバル定義の単純内容要素でも複合内容要素でも表示されます。構成要素が複合内容要素の場合に表示される構成要素タブを次に示します。

図 1-57 【構成要素】 ダイアログ (複合内容要素の構成要素タブ)



【出現回数】

- 出現回数が固定の場合
CSV 形式のヘッダ要素のとき、ラジオボタンで [固定] を選択し、出現回数を 0~1 で指定します。CSV 形式のレコード要素または非 CSV 形式のとき、ラジオボタンで [固定] を選択し、出現回数を 1~2,147,483,647 で指定します。
- 出現回数を範囲で指定する場合
CSV 形式のレコード要素または非 CSV 形式のとき、ラジオボタンで [範囲指定] を選択し、[最小] と [最大] で出現回数の範囲を指定します。設定できる範囲は、1~2,147,483,647 です。CSV 形式のヘッダ要素のとき、[範囲指定] は非活性になります。
- データの終端までを要素とする場合
CSV 形式のレコード要素または非 CSV 形式のとき、ラジオボタンで [データの終端まで] を選択します。なお、必ず 1 回以上出現させる場合は、[データの省略不可] チェックボックスにチェックします。CSV 形式のヘッダ要素のとき、[データの終端まで] は非活性になります。

参考

データの終端とは次の場合を示します。

- 設定された各要素のセパレータの組み合わせからデータ終端と判断できるセパレータが出現した場合
 - 全データを読み取った場合
 - 設定された複合内容要素のサイズノードから、指定されたサイズのデータを読み取った場合
- 出現回数をほかの要素に依存させる場合

非 CSV 形式のとき、ラジオボタンで [出現回数ノード] を選択し、[ノード選択] ボタンをクリックして依存させるノードを選択します。

CSV 形式のヘッダ要素またはレコード要素のとき、[出現回数ノード] は非活性になります。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。構成要素の出現回数をほかの要素に依存させる場合、依存させるノードを選択するときに使用します。

[ノード選択] ダイアログで選択したノードは次のように表示されます。

- 基準パスで選択した場合
基準ノードからの相対パスが表示されます。
- 絶対パスで選択した場合
ルート要素からのパスが表示されます。

[サイズ]

構成要素タブの出現回数が固定で 1 回の場合に、構成要素である複合内容要素として使用するデータのサイズを設定します。バイナリデータとして CSV 形式のデータを扱う場合、非活性になります。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。構成要素である複合内容要素のサイズをほかの要素に依存させる場合、依存させるノードを選択するときに使用します。

[ノード選択] ダイアログで選択したノードは次のように表示されます。

- 基準パスで選択した場合
基準ノードからの相対パスが表示されます。
- 絶対パスで選択した場合
ルート要素からのパスが表示されます。

[除去] ボタン

[サイズノード] の値を削除します。

[サイズ算出方法]

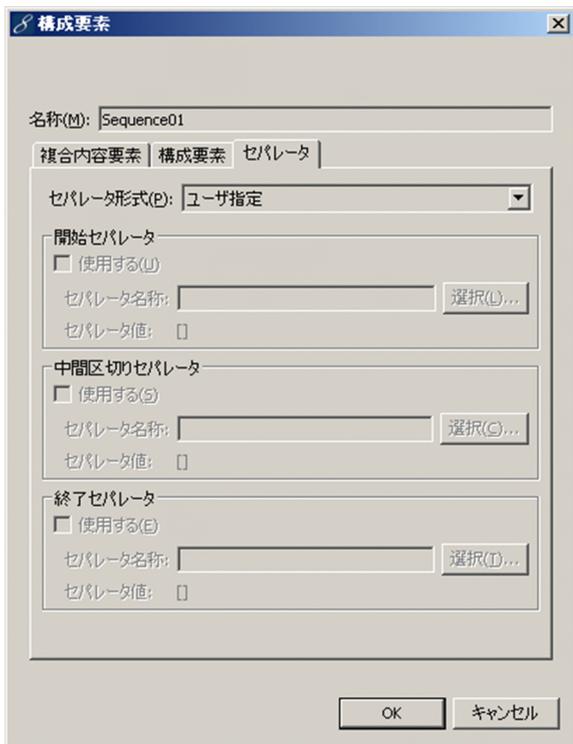
サイズノードのサイズの算出方法を次の中からドロップダウンリストで選択します。

指定値	サイズノードの値
システム既定値 (デフォルト)	サイズノードの拡張機能の有効/無効は、実行環境の J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) の csc.dt.sizeNode.includeSelfSize プロパティの設定値に従います。J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルの設定については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「2.3.9 J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) を設定する」を参照してください。
データ長のみ	サイズノードの拡張機能は無効となり、サイズノードの長さは、サイズノードの設定要素のサイズが適用されます。
サイズノードの長さも含める	サイズノードの拡張機能が有効となり、サイズノードの長さは、サイズノードの設定要素のサイズと、サイズノード自身のサイズの合計が適用されます。

(5) セパレータタブ

セパレータタブは、複合内容要素を構成要素に設定する場合にだけ表示されます。構成要素に設定する複合内容要素のセパレータの情報が表示されます。内容は変更できません。

図 1-58 【構成要素】 ダイアログ (セパレータタブ)



表示される情報は、構成要素に設定する複合内容要素にセパレータを設定するときに、【複合内容要素】ダイアログで設定した値です。

【複合内容要素】ダイアログについては、「[1.3.3 複合内容要素ダイアログ](#)」を参照してください。

(6) 各タブで共通の内容

各タブで共通の内容を次に示します。

【インフォメーション】

【構成要素】ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム開発ガイド 基本開発編」の「[4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する](#)」を参照してください。

【名称】

構成要素に設定する要素の名称が表示されます。

【OK】 ボタン

指定した内容を設定して【構成要素】ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

指定した内容を設定しないで [構成要素] ダイアログを閉じます。

1.3.5 条件値設定ダイアログ

[条件値設定] ダイアログは、選択構成の複合内容要素の構成要素に選択条件値を設定するときに使用します。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.4 要素を定義する (CSV 以外の形式の場合)」を参照してください。

図 1-59 [条件値設定] ダイアログ

条件値設定

選択条件

ノード: C02

データ種別: 文字列

使用不可文字: 代替文字に置換しない

先頭代替文字:

形式:

全体桁数:

小数部桁数:

符号の有無:

エンコード形式:

サイズ(バイト): 1

名称: data

条件値

単一条件指定(S)

条件値(V):

複数条件指定(M)

条件値(Δ):

区切り文字(D): ,

OK キャンセル

[インフォメーション]

[条件値設定] ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[選択条件]

[ノード]

選択条件ノードが表示されます。

[データ種別]

選択条件ノードのデータ種別が表示されます。

[使用不可文字]

選択条件ノードのデータ種別が文字列の場合に、XML で使用できない文字を置換するかどうかのどちらかで表示されます。

- 代替文字に置換しない
- 代替文字に置換する

[先頭代替文字]

選択条件ノードのデータ種別が文字列で、[使用不可文字] に「代替文字に置換する」が表示されている場合、代替文字の最初の 1 文字が 0XXXXX の形式で表示されます。

[形式]

選択条件ノードのデータ種別が日付時刻の場合、日付時刻の形式が表示されます。

[全体桁数]

選択条件ノードのデータ種別が整数、実数、固定小数部数値の場合、全体桁数の設定状態が表示されます。

[小数部桁数]

選択条件ノードのデータ種別が実数、固定小数部数値、ゾーン形式数値、パック形式数値、または日付時刻（時刻を含む形式）の場合、小数部分の桁数が表示されます。小数部分の桁数が指定されていない場合は表示されません。

[符号の有無]

選択条件ノードのデータ種別が整数、実数または固定小数部数値の場合、符号の有無が表示されます。また、ゾーン形式数値またはパック形式数値で、符号の設定が [カスタム] の場合、符号の有無が表示されます。

[エンコード形式]

選択条件ノードのデータ種別がバイト列の場合、エンコード形式としてスキーマのデータ型である次のどちらかが表示されます。

- hexBinary
- base64Binary

[サイズ (<単位>)]

選択条件ノードのサイズが固定値の場合、その値が表示されます。可変値の場合には「可変」と表示されます。

<単位>はデータ種別に応じて [バイト] または [ビット] が表示されます。

[名称]

選択条件値を設定する構成要素の名称が表示されます。

[条件値]

1つの要素に対して1つの選択条件値を指定する場合は[単一条件指定]、複数の選択条件値を指定する場合は[複数条件指定]を選択します。

指定できる条件値は、選択条件ノードのデータ種別によって異なります。指定できる条件値については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[単一条件指定]

1つの要素に対して1つの選択条件値を指定する場合に、選択条件値を1,024文字以内で指定します。

[複数条件指定]

1つの要素に対して複数の選択条件値を指定する場合に、選択条件値と区切り文字を指定します。

- [条件値]

選択条件値を区切り文字で区切って指定します。選択条件値の文字数に制限はありません。

- [区切り文字]

区切り文字のデフォルト値「, (半角コンマ)」を変更したい場合に指定します。使用できる文字は1文字のラテン文字(0x21~0x7E)、または半角スペース(0x20)です。

区切り文字に指定した文字は、選択条件値の一部として使用できません。また、エスケープシーケンスのような定義方法はありません。

例えば、選択条件値として「aaa,bbb,ccc」、区切り文字として「, (半角コンマ)」が指定された構成要素は、選択条件ノードに対して「aaa」、「bbb」、または「ccc」を入力した際に選択されます。複数の選択条件値を「, (半角コンマ)」で区切って指定する例を次に示します。

```
aaa, bbb, ccc, zzz
```

[OK] ボタン

指定した内容を設定して[条件値設定]ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

指定した内容を設定しないで[条件値設定]ダイアログを閉じます。

1.3.6 ノード選択ダイアログ (バイナリフォーマット定義)

[ノード選択]ダイアログ(バイナリフォーマット定義)は、構成要素の出現回数やサイズをほかの要素から参照する場合のターゲットノードや、構成要素の選択条件値を持つ選択条件ノードを選択するときに使用します。

次のダイアログにある[ノード選択]ボタンをクリックした場合には表示されます。

- [単純内容要素]ダイアログ(構成要素タブ)
- [構成要素]ダイアログ(構成要素タブ)

- [複合内容要素] ダイアログ

図 1-60 [ノード選択] ダイアログ (バイナリフォーマット定義)



[インフォメーション]

[ノード選択] ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[パス指定]

ターゲットノードまたは選択条件ノードの指定方法をラジオボタンで選択します。

[基準パス] ラジオボタン

基準ノードからのパスでターゲットノードまたは選択条件ノードを指定する場合に選択します。

基準ノードとは、参照元の構成要素（依存ノード）がツリー全体に複数ある場合に、共通するツリー構成部分の最上位ノードです。

[基準パス] を選択すると、[ノード構成] には基準ノードからの構成がツリー表示されます。

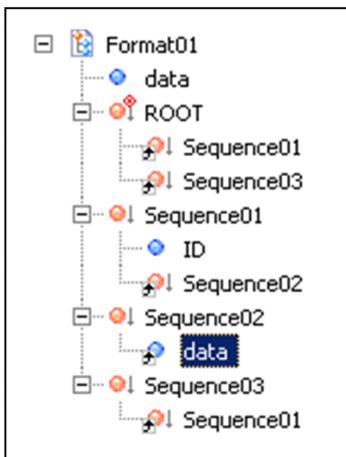
[基準パス] を選択した場合の例を次の図に示します。

図 1-61 基準パスを選択した場合の例

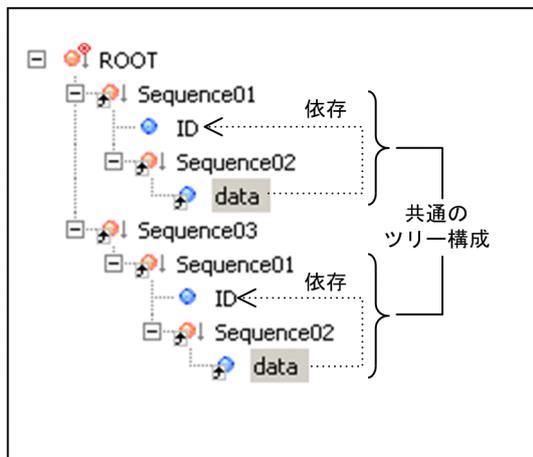
・ノード選択ダイアログ (バイナリフォーマット定義)



・フォーマット定義エディタ



・アウトラインビュー



[絶対パス] ラジオボタン

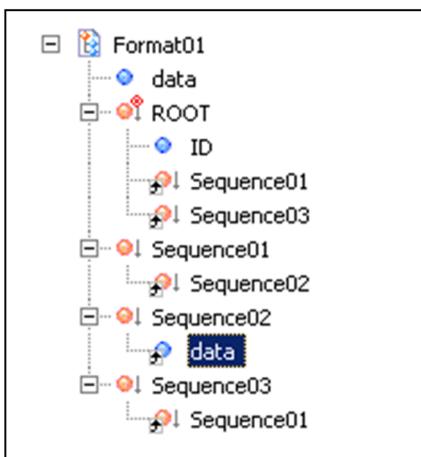
ルート要素からのパスでターゲットノードまたは選択条件ノードを指定する場合に選択します。
 [絶対パス] を選択すると、[ノード構成] にはルート要素からの構成がツリー表示されます。
 [絶対パス] を選択した場合の例を次の図に示します。

図 1-62 絶対パスを選択した場合の例

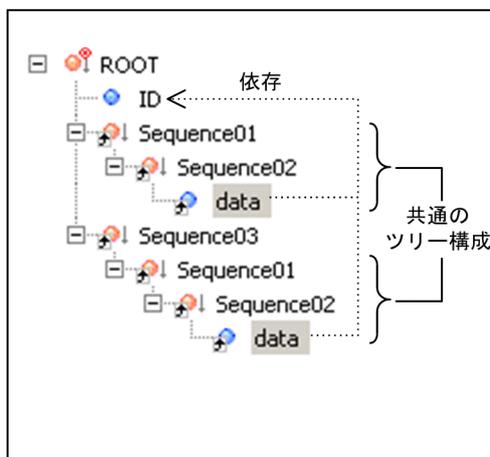
・ノード選択ダイアログ (バイナリフォーマット定義)



・フォーマット定義エディタ



・アウトラインビュー



[ノード構成]

[パス指定] の選択に従って、ノードの構成がツリー表示されます。表示されたツリーからターゲットノードまたは選択条件ノードを選択します。

[OK] ボタン

指定した内容を設定して [ノード選択] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

指定した内容を設定しないで [ノード選択] ダイアログを閉じます。

1.3.7 要素選択ダイアログ

[要素選択] ダイアログは、構成要素として設定するグローバル定義の要素を選択するときに使用します。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.4 要素を定義する（CSV 以外の形式の場合）」を参照してください。

図 1-63 [要素選択] ダイアログ



[インフォメーション]

[要素選択] ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[要素一覧]

構成要素として設定する要素を選択します。

[名称]

構成要素として設定できるグローバル定義の要素が表示されます。

[要素]

単純内容要素の場合は「単純内容」、複合内容要素の場合は「複合内容」と表示されます。

[OK] ボタン

指定した内容を設定して [要素選択] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

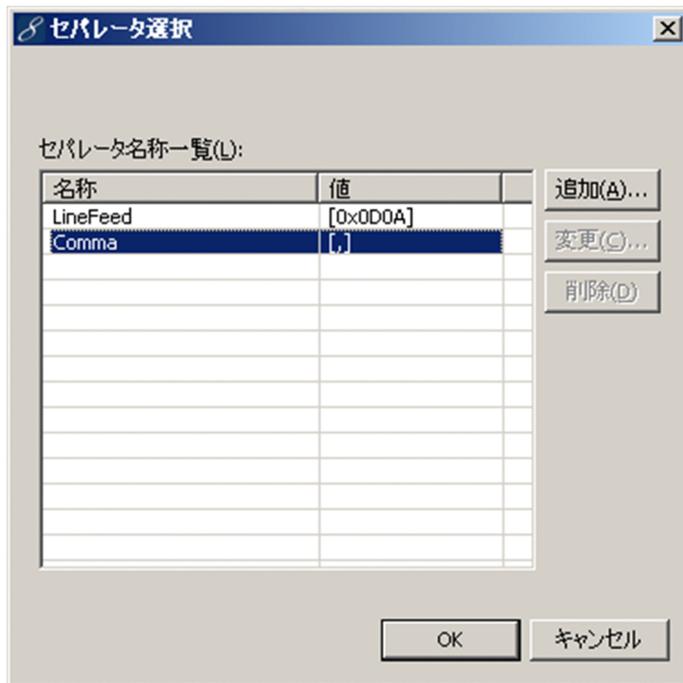
指定した内容を設定しないで [要素選択] ダイアログを閉じます。

1.3.8 セパレータ選択ダイアログ

[セパレータ選択] ダイアログは、複合内容要素の開始セパレータ、中間区切りセパレータおよび終了セパレータとして設定するセパレータを選択するダイアログです。

[複合内容要素] ダイアログ (セパレータタブ) の、各セパレータの指定欄にある [選択] ボタンをクリックした場合に表示されます。

図 1-64 [セパレータ選択] ダイアログ



[インフォメーション]

[セパレータ選択] ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[セパレータ名称一覧]

[名称]

定義されているセパレータの名称が表示されます。

[値]

定義されているセパレータの値が表示されます。セパレータの値は [] で囲まれて表示されます。

[追加] ボタン

セパレータとして使用する文字を新たに追加するときに使用します。[セパレータ追加/変更] ダイアログが表示されます。

[変更] ボタン

すでに定義されているセパレータの名称およびセパレータの値を変更するときに使用します。[セパレータ名称一覧] から情報を変更するセパレータを選択してクリックすると、[セパレータ追加/変更] ダイアログが表示されます。

なお、次のセパレータの情報は変更できません。

- 「LineFeed」 および 「Comma」 (初期設定されているセパレータ)
- 同じ複合内容要素の中で、すでにほかのセパレータとして指定されているセパレータ

[削除] ボタン

すでに定義されているセパレータを削除するときに使用します。[セパレータ名称一覧] から削除するセパレータを選択してクリックすると、選択したセパレータが削除されます。

なお、次のセパレータは削除できません。

- 「LineFeed」 および 「Comma」 (初期設定されているセパレータ)
- 同じ複合内容要素の中で、すでにほかのセパレータとして指定されているセパレータ

[OK] ボタン

指定した内容を設定して [セパレータ選択] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

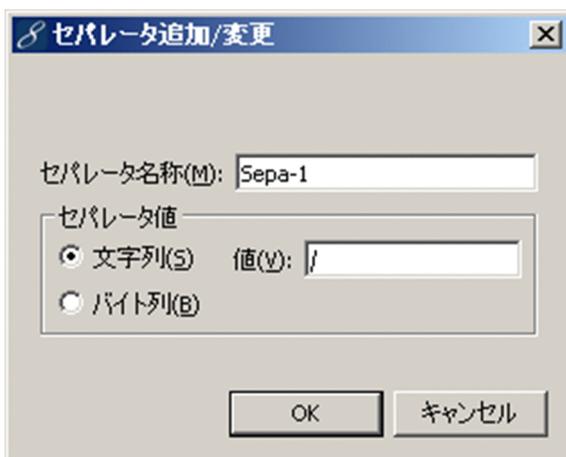
指定した内容を設定しないで [セパレータ選択] ダイアログを閉じます。

1.3.9 セパレータ追加/変更ダイアログ

[セパレータ追加/変更] ダイアログは、複合内容要素の開始セパレータ、中間区切りセパレータおよび終了セパレータとして使用するセパレータを追加したり、セパレータの情報を変更したりするダイアログです。

[セパレータ選択] ダイアログの、[追加] ボタンまたは [変更] ボタンをクリックした場合には表示されます。

図 1-65 [セパレータ追加/変更] ダイアログ



[インフォメーション]

[セパレータ追加/変更] ダイアログの入力情報に問題がある場合に、ダイアログの最上段に問題点を示すメッセージが表示されます。表示されるメッセージと対策については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.7 バイナリフォーマット定義ファイルを検証する」を参照してください。

[セパレータ名称]

セパレータの名称を指定します。NCName 型で 256 文字以内で指定します。

すでに定義されているセパレータの情報を変更する場合には、セパレータ名称が初期表示されます。セパレータを新規追加する場合には、「Sepa-」という接頭語に通し番号が付いた名称が初期表示されます。

[セパレータ値]

[文字列] ラジオボタン

セパレータの値として文字列を使用する場合に選択します。

[バイト列] ラジオボタン

セパレータの値としてバイト列を使用する場合に選択します。

[値]

セパレータの値として使用する文字列またはバイト列を指定します。文字列の場合、指定できる文字は、ラテン文字 (JIS X 0201 の「0x21」～「0x7E」) または半角スペース (JIS X 0201 の「0x20」) で 1,024 文字以内です。

セパレータの値として ASCII 文字列の「012」を表現したい場合の指定例を次に示します。

- 文字列の場合
「012」と、文字列をそのまま指定します。
- バイト列の場合
「303132」と、16 進数の 0x 表記なしの形式で指定します。

[OK] ボタン

指定した内容を設定して [セパレータ追加/変更] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

指定した内容を設定しないで [セパレータ追加/変更] ダイアログを閉じます。

1.3.10 [新規バイナリフォーマット定義ファイル] ウィザードのページ

[新規バイナリフォーマット定義ファイル] ウィザードを選択したときに表示されるページの設定項目について説明します。バイナリフォーマット定義ファイルの作成手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.4.3 バイナリフォーマット定義ファイルを新規作成する」を参照してください。

(1) COBOL 登録集原文設定ページ

変換する COBOL 登録集原文ファイルや、変換時に必要な情報を設定するページです。

図 1-66 COBOL 登録集原文設定ページ

新規バイナリフォーマット定義ファイル

COBOL登録集原文からの変換
変換するCOBOL登録集原文ファイルを指定してください。

COBOL登録集原文のファイル名(O):
C:\TEMP_FILE\cobel\INPUT.CBL 参照(R)...

PICTURE句の通貨編集文字(P): ¥

基本項目の文字コード(S): MS932

2進形式のエンディアン(E): ビッグエンディアン(B) リトルエンディアン(L)

? < 戻る(B) 次へ(N) > 終了(F) キャンセル

[COBOL 登録集原文のファイル名]

変換する COBOL 登録集原文ファイル名を指定します。

[参照] ボタン

COBOL 登録集原文ファイルを設定するダイアログが表示されます。

[PICTURE 句の通貨編集文字]

PICTURE 句の文字列で使用する通貨文字を指定します。初期値は「¥」が指定されています。

PICTURE 句の通貨編集文字に指定できる文字を次に示します。

[!], [#], [\$], [%], [&], [<], [>], [?], [@], [F], [G], [H], [I], [J], [K], [L], [M], [O], [Q], [T], [U], [W], [Y], [,], [¥], [], [^], [_], [`], [{}], [~], [}, [}], [~], 半角カタカナ (MS932 コードの 0xA1~0xDF)

[基本項目の文字コード]

基本項目で使用されている文字コードを選択します。初期値は「MS932」が選択されています。ここで選択した文字コードは、バイナリフォーマット定義ファイルの文字コードとして設定されます。

基本項目で選択できる文字コードを次に示します。

- MS932
- UTF8
- UTF16_BIG
- UTF16_LITTLE
- JIS
- EUC
- EUC-HJ
- KEIS+EBCDIC
- KEIS+EBCDIK
- KEIS
- IBM_CODE+EBCDIC(LATIN)
- IBM_CODE+EBCDIC(KANA)
- IBM_CODE
- JEF+EBCDIC
- JEF+EBCDIK
- JEF
- CUSTOM

[2 進形式のエンディアン]

2進形式のエンディアンをビッグエンディアンまたはリトルエンディアンのどちらかから選択します。
初期値は「リトルエンディアン」が選択されています。

[次へ] ボタン

データ項目設定ページへ進みます。

(2) データ項目設定ページ

COBOL 登録集原文ファイルを変換した結果が表示されます。各項目は複数列のツリービューで表示されます。

なお、FILLER の場合は同じ親を持つ兄弟データ項目ごとに「_00001」, 「_00002」のように、先頭 2 文字が「_」で、残り 5 文字が昇順の番号となる名称で別名が設定されます。

[データ名] に表示された名称が、同じ親を持つ兄弟データ項目のデータ名または別名と重複する場合は、[データ名] の末尾に数値が付加された名称が別名に設定されます。

[データ種別]

変換後のバイナリフォーマット定義ファイルでの属性が表示されます。COBOL のデータ型と変換後のバイナリフォーマット定義ファイルのデータ型の対応については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「4.5.2 データ項目の設定 (COBOL85 言語の形式を使用する場合)」のデータ型の対応の説明を参照してください。

[出現回数]

COBOL 登録集原文ファイルの OCCURS 句で 2 以上の値が指定されている場合に、指定された値が表示されます。

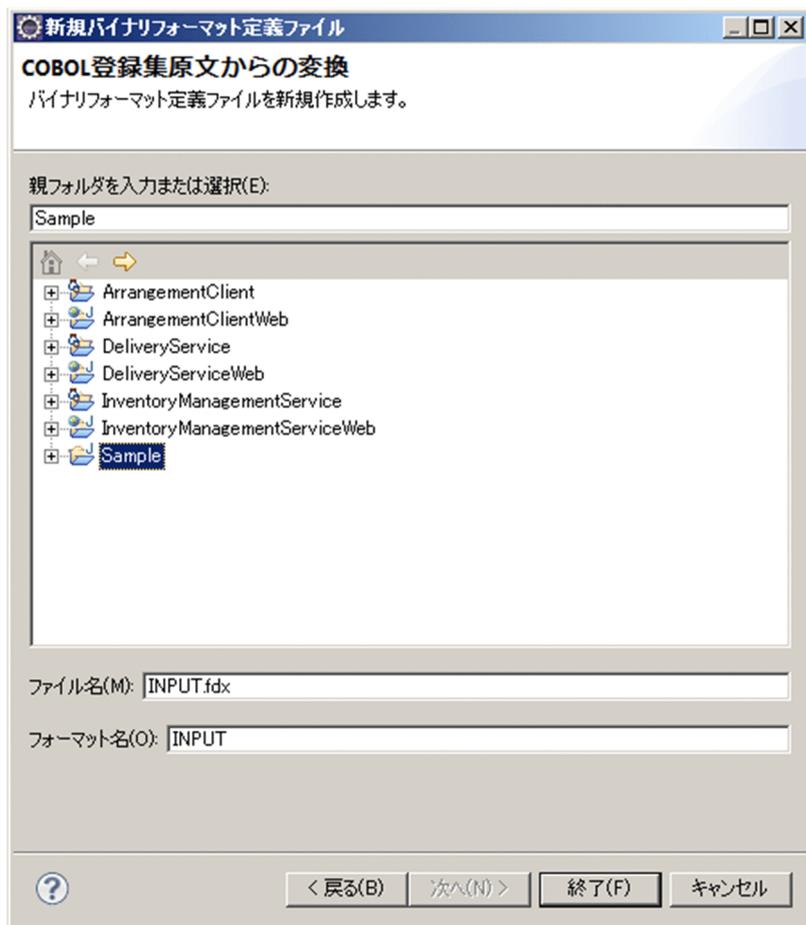
[次へ] ボタン

出力ファイル設定ページへ進みます。

(3) 出力ファイル設定ページ

バイナリフォーマット定義ファイルを出力するときに使用します。

図 1-68 出力ファイル設定ページ



[親フォルダを入力または選択]

入力または選択したフォルダ名が表示されます。

[ファイル名]

バイナリフォーマット定義ファイル名を指定できます。初期値は「(フォーマット名) + ".fdx"」が指定されています。NCName で使用できる文字を入力できます。

[フォーマット名]

バイナリフォーマット定義ファイルのフォーマット名を指定できます。初期値は [ファイル名] から括弧を除いた文字列となります。NCName で使用できる文字を入力できます。[フォーマット名] に文字を入力すると、「入力した文字 + ".fdx"」が [ファイル名] にも連動して設定されます。

1.4 ビジネスプロセスに関連するダイアログ

ビジネスプロセスに関連するダイアログについて説明します。

注意事項

ビジネスプロセスに関連するダイアログでは、入力項目の前後に半角スペースや全角スペースを指定できません。

1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ

[変数・相関セット一覧] ダイアログは、変数や相関セットを追加、変更したり、一覧を表示したりするときに使用します。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.5.1 変数の定義」および「5.5.2 相関セットの定義」を参照してください。

図 1-69 [変数・相関セット一覧] ダイアログ (変数情報の表示)

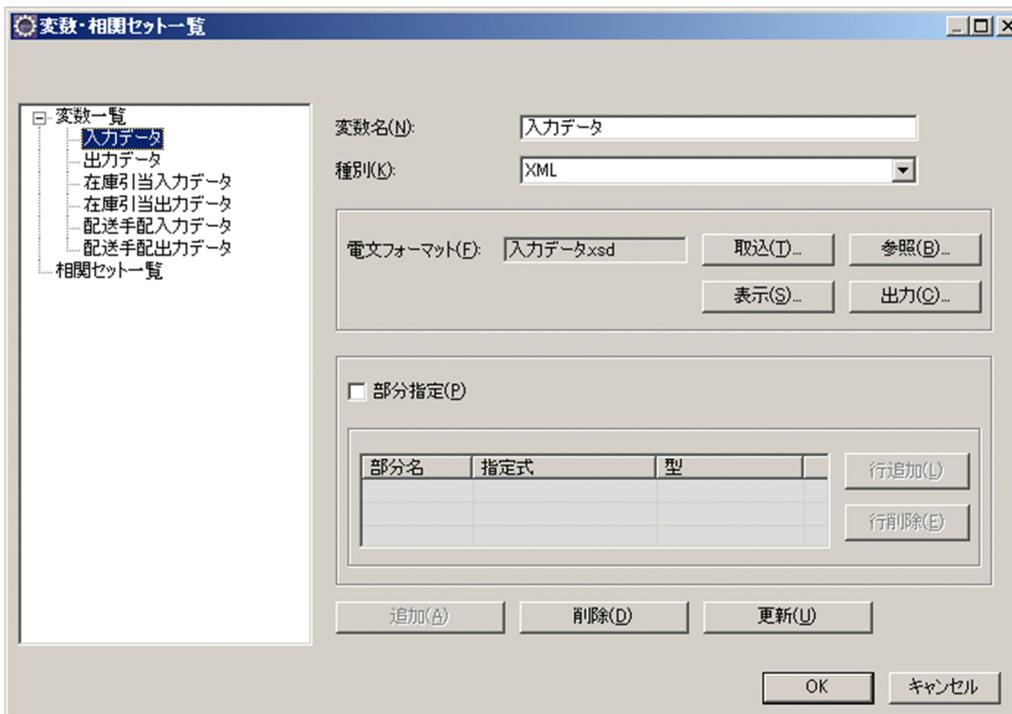
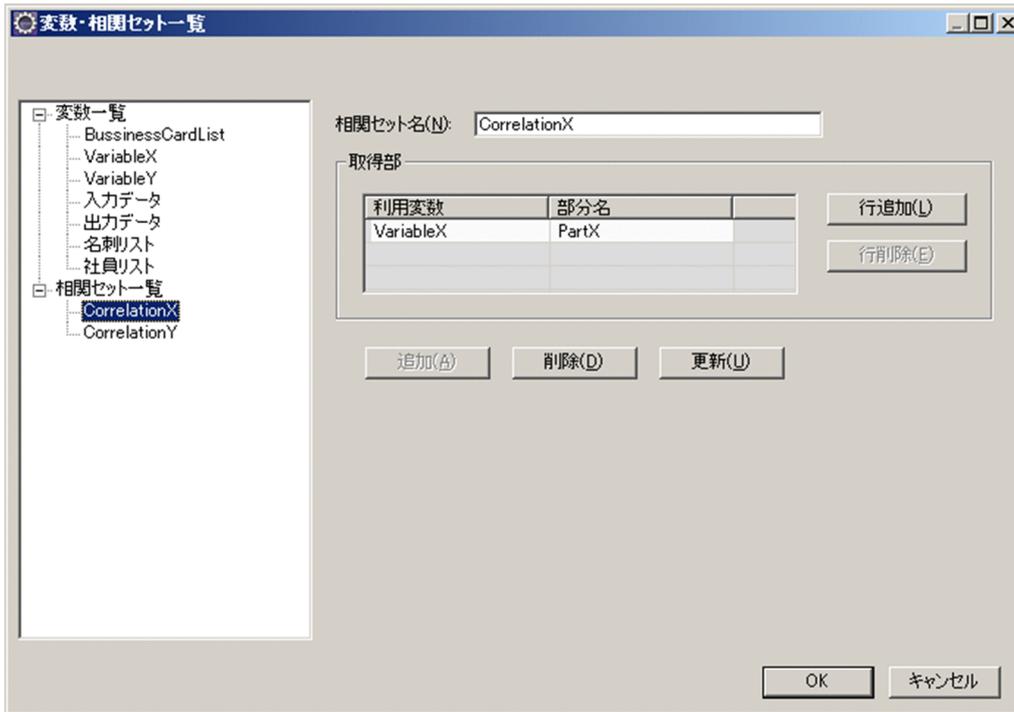


図 1-70 [変数・相関セット一覧] ダイアログ (相関セット情報の表示)



[変数一覧]

プロセスまたはスコープに属する定義済み変数の一覧が表示されます。

[変数名]

変数名を 64 バイト以内で指定します。

[種別]

変数の種別を次の 6 種類から選択します。

- XML 型 (XML)
- バイナリ型 (non-XML)
- any 型 (any)
- 数値 (numeric)
- 文字列 (string)
- 真偽値 (boolean)

[電文フォーマット]

変数の種別がメッセージ型 (XML, non-XML) の場合に、電文フォーマットとなるファイルが表示されます。

[取込] ボタン

変数の種別がメッセージ型 (XML, non-XML) の場合に、呼び出すサービス部品またはユーザ定義受付の要求電文、応答電文またはフォルト電文に設定されている電文フォーマットを、変数に設定する場合に使用します。

[電文フォーマットの取込] ダイアログが表示されます。[電文フォーマットの取込] ダイアログでは、変数に設定する電文フォーマットを指定します。

[参照] ボタン

変数の種別がメッセージ型 (XML, non-XML) の場合に、電文フォーマットとなるファイルを指定します。

[表示] ボタン

変数の種別がメッセージ型 (XML, non-XML) の場合、変数のパスを取得するときに使用します。[変数の表示] ダイアログが表示されます。

[出力] ボタン

電文フォーマットのファイルの出力先を指定するダイアログが表示されます。

[部分指定] チェックボックス

変数の種別がメッセージ型 (XML, non-XML) の場合、部分指定をするためにチェックします。

[部分名]

部分指定をする場合、部分名を指定します。

部分名は、次の条件に従って指定します。

部分の型がメッセージ型 (XML) の場合

部分名はビジネスプロセス内で一意である必要があります。

部分の型が数値 (numeric)、文字列 (string) または真偽値 (boolean) の場合

- 電文フォーマットが異なる変数で、同じ部分の型である場合、同じ部分名を使用できます。
- 上記以外の場合、部分名は一意である必要があります。

[指定式]

部分指定をする場合、部分名に対応する式を指定します。指定式には、[変数の表示] ダイアログの [選択パス] で取得したパスを指定します。

[型]

部分名に対応する型を選択します。

- 変数の種別がメッセージ型 (XML) の場合
メッセージ型 (XML)、数値 (numeric)、文字列 (string)、真偽値 (boolean) の4種類から選択します。
- 変数の種別がメッセージ型 (non-XML) の場合
数値 (numeric)、文字列 (string)、真偽値 (boolean) の3種類から選択します。

[関連セット一覧]

プロセスまたはスコープに属する定義済み関連セットの一覧が表示されます。

[関連セット名]

関連セット名を64バイト以内で指定します。

[取得部]

[利用変数]

相関セットの定義に利用する電文フォーマットを持つ変数を指定します。所属しているスコープおよびその親スコープで定義済みの、基本型の部分を持つメッセージ型の変数が表示されます。

[部分名]

[利用変数] で選択した変数に対して、相関セットとして利用する基本型の部分の、部分名を指定します。

[行追加] ボタン

部分指定または取得部指定をするための行を追加します。

[行削除] ボタン

不要な部分指定または取得部指定の行を削除します。

[追加] ボタン

定義した変数や相関セットの情報を新規追加します。

[削除] ボタン

定義した変数や相関セットの情報を削除します。

[更新] ボタン

定義済みの変数や相関セットの情報の内容を更新します。

[OK] ボタン

定義した内容で、[変数・相関セット一覧] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

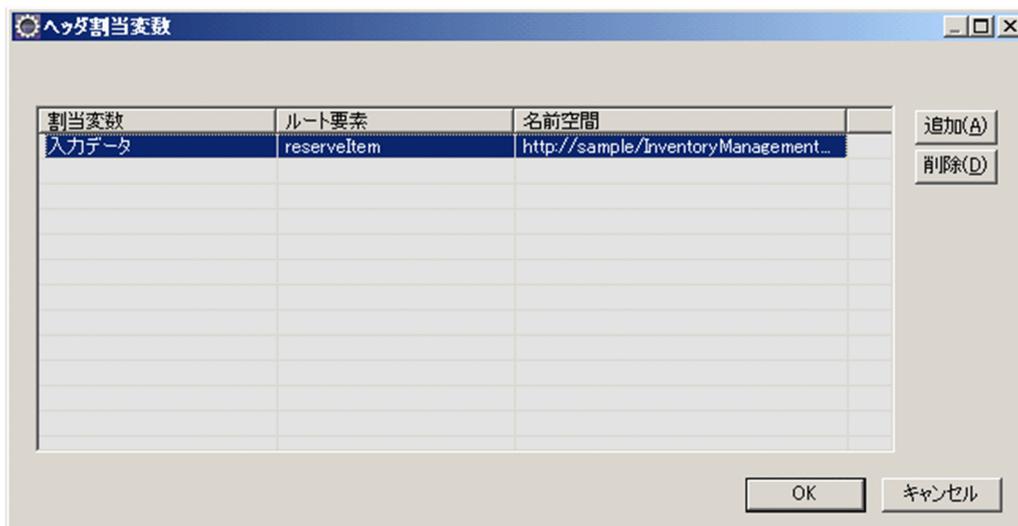
定義した内容を取り消し、定義前の内容で [変数・相関セット一覧] ダイアログを閉じます。

1.4.2 ヘッダ割当変数ダイアログ

[ヘッダ割当変数] ダイアログは、ヘッダ割当変数を設定するときに使用します。

受付アクティビティ、応答アクティビティ、およびサービス呼出アクティビティのヘッダ割当変数の [設定] ボタンをクリックした場合に表示されます。

図 1-71 [ヘッダ割当変数] ダイアログ



[割当変数]

割当変数が昇順に表示されます。

[ルート要素]

割当変数に定義したルート要素が表示されます。

[名前空間]

ルート要素の名前空間が表示されます。

[追加] ボタン

表の最下行に新しい行を追加します。

[削除] ボタン

[割当変数] に表示された割当変数を行ごと削除します。一度に複数の割当変数の行を選択して削除できます。

[OK] ボタン

定義した内容で、[ヘッダ割当変数] ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義した内容を取り消し、定義前の内容で [ヘッダ割当変数] ダイアログを閉じます。

1.4.3 割当関連セット群ダイアログ

[割当関連セット群] ダイアログは、[変数・関連セット一覧] ダイアログで定義した関連セットグループをアクティビティに割り当てるときに使用します。

受付アクティビティ、応答アクティビティ、およびサービス呼出アクティビティの [設定] ボタンをクリックした場合は表示されます。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.5.2 相関セットの定義」を参照してください。

図 1-72 【割当相関セット群】 ダイアログ



【相関セット】

要求電文や応答電文に割り当てる相関セットを、ドロップダウンリストから選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義済みの相関セットだけが表示されます。

【追加】 ボタン

【相関セット】で選択した相関セットを【相関セット名】に追加します。

【編集】 ボタン

【変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。

【削除】 ボタン

【相関セット名】に表示された相関セットを行ごと削除します。一度に複数の相関セットの行を選択して削除できます。

【相関セット名】

【相関セット】で選択した相関セットが表示されます。

【初期化】

相関セットを初期化するかどうかを選択します。初期化する場合は「yes」を、初期化しない場合は「no」を選択します。

【パターン】

相関セットのパターンを選択します。受付アクティビティ、および応答アクティビティから相関セットの割当があった場合は、「-」が表示されます。

【OK】 ボタン

定義した内容で、【割当相関セット群】 ダイアログを閉じます。

【キャンセル】 ボタン

定義した内容を取り消し、定義前の内容で【割当相関セット群】 ダイアログを閉じます。

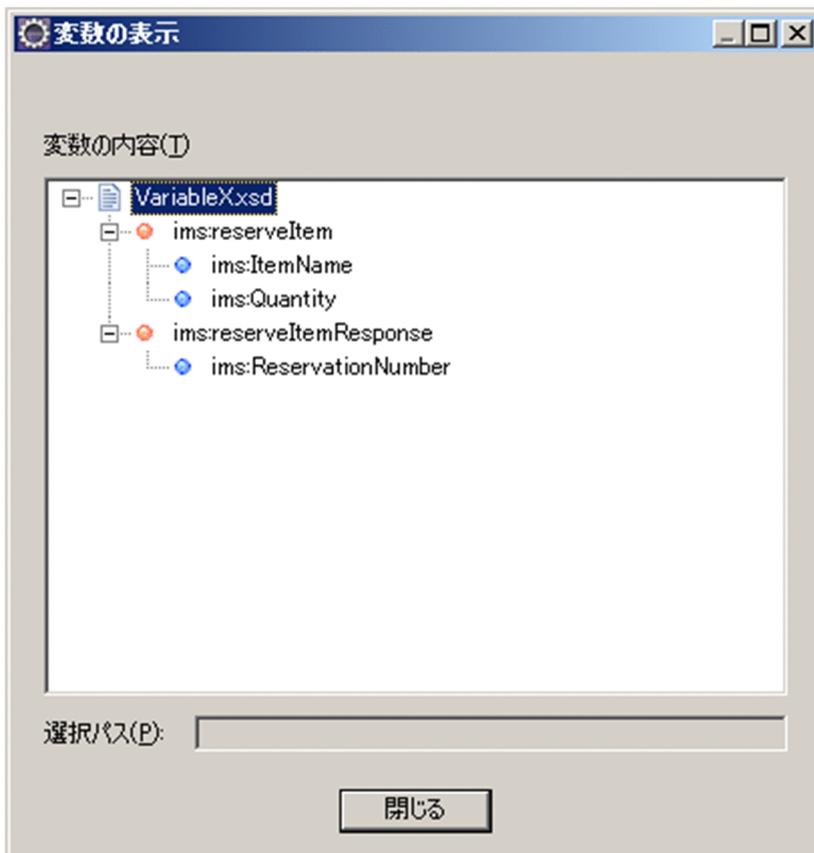
1.4.4 変数の表示ダイアログ

[変数の表示] ダイアログは、変数のパスを取得する場合に使用します。

[変数・相関セット一覧] ダイアログなどの [表示] ボタンをクリックした場合に表示されます。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.5.1 変数の定義」を参照してください。

図 1-73 [変数の表示] ダイアログ



[変数の内容]

[変数・相関セット一覧] ダイアログなどで選択した変数の内容がツリービューで表示されます。

表示された変数を選択し、右クリックして [パスの取得] を選択すると、ルート要素からの絶対パスを取得できます。取得したパスは、任意の個所に貼り付けることができます。

[選択パス]

ツリービューで表示された変数を選択すると、選択した変数のパスがルート要素からの絶対パスで表示されます。

[閉じる] ボタン

[変数の表示] ダイアログを閉じます。

1.4.5 電文フォーマットの取込ダイアログ

呼び出すサービス部品またはユーザ定義受付の、要求電文、応答電文またはフォルト電文に設定されている電文フォーマットを、変数に設定するときに使用します。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの [取込] ボタンをクリックした場合に表示されます。

操作手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.5.1 変数の定義」を参照してください。

図 1-74 「電文フォーマットの取込」ダイアログ

電文フォーマットの取込

サービス/受付

サービス名(S): ServiceA

受付名(R):

取込対象

オペレーション名(O): reserveItem

電文種別(T): 要求電文 (ボディ)

ヘッダルート要素(H):

名前空間(N):

フォルト名(F):

電文フォーマット(M): F1 xsd

OK キャンセル

[サービス/受付]

[サービス名] ラジオボタン

呼び出すサービス部品の要求電文、応答電文またはフォルト電文に設定されている電文フォーマットを、変数に設定する場合に選択します。ドロップダウンリストでは、呼び出すサービス部品を選択します。

[受付名] ラジオボタン

ユーザ定義受付に設定されている電文フォーマットを、変数に設定する場合に選択します。ドロップダウンリストでは、取り込むユーザ定義受付を選択します。

[取込対象]

[オペレーション名]

[サービス/受付] で指定したサービス部品またはユーザ定義受付のオペレーションのうち、取り込むオペレーション名をドロップダウンリストで選択します。

[電文種別]

変数に設定する電文フォーマットの種別を次の中からドロップダウンリストで選択します。

- 要求電文 (ボディ)
- 応答電文 (ボディ)
- 要求電文 (ヘッダ)
- 応答電文 (ヘッダ)
- フォルト電文

[ヘッダルート要素]

選択したヘッダに設定されたルート要素が昇順で表示されます。

[名前空間]

[電文種別] で「要求電文 (ヘッダ)」または「応答電文 (ヘッダ)」を選択した場合、名前空間が表示されます。

[フォルト名]

[電文種別] でフォルト電文を選択した場合、[オペレーション名] で選択したオペレーションのうち、取り込むフォルト名を選択します。

[電文フォーマット]

電文フォーマットとなる XML スキーマファイルの名称を入力します。

[OK] ボタン

ダイアログを閉じます。設定した内容は、[変数・相関セット一覧] ダイアログに反映されます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.6 フォルト処理の割当ダイアログ

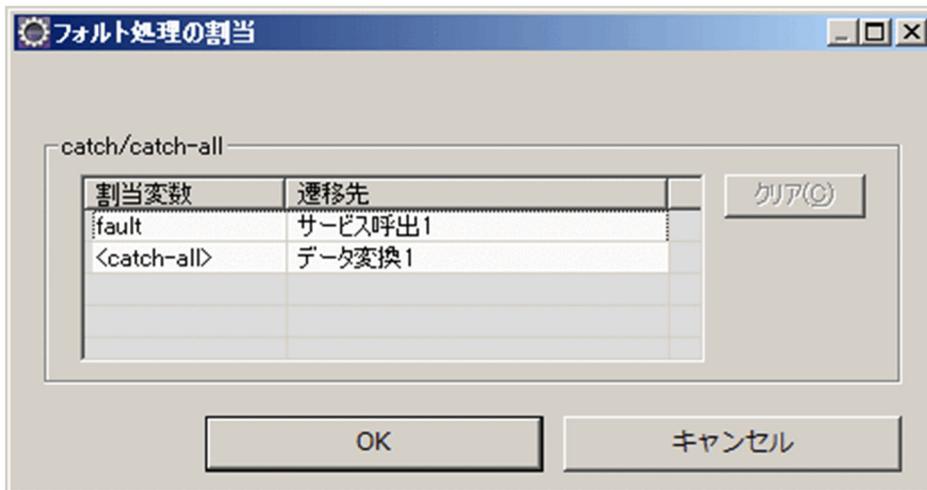
フォルト処理の条件を設定するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- フォルトコネクションを利用して設定した連結線をダブルクリックする
- フォルトコネクションを利用して設定した連結線を選択して右クリックし、[設定] を選択する

操作方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.4.4 フォルト処理を定義する」を参照してください。

図 1-75 「フォルト処理の割当」ダイアログ



[割当変数]

フォルトの対象となる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、該当するビジネスプロセスに定義されている変数が表示されます。

なお、定義していないフォルトが発生した場合のフォルト処理を設定する場合、ドロップダウンリストから「catch-all」を選択します。

[遷移先]

[割当変数] に指定したフォルトが発生したときに実行するフォルト処理を定義したアクティビティのアクティビティ名称を選択します。

[クリア] ボタン

選択している [割当変数] の行に指定されている内容をクリアします。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.7 受付アクティビティダイアログ

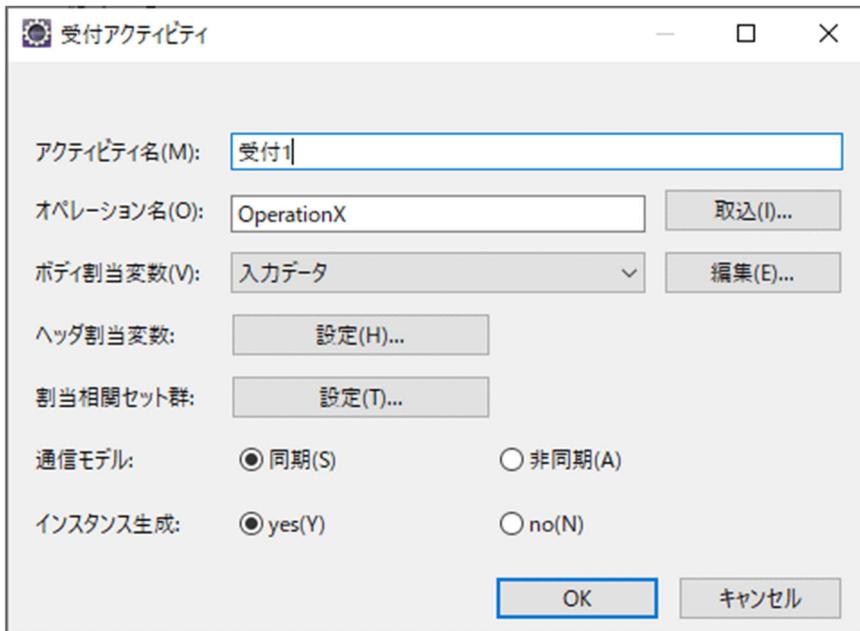
受付アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの受付アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスの受付アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

受付アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.2 受付アクティビティ」を参照してください。

図 1-76 [受付アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[オペレーション名]

サービスリクエストからサービス部品を呼び出すときに利用するオペレーション名を指定します。オペレーション名は、ビジネスプロセス内で一意になるように指定します。ビジネスプロセス内のほかの受付アクティビティに設定されている名称と重複している場合、ビジネスプロセスの検証時にエラーになります。

オペレーション名を直接指定する場合は、255 バイト以内で指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

オペレーション名を受付から取り込む場合は、[取込] ボタンから [オペレーション名の取込] ダイアログを起動して指定します。

[取込] ボタン

[オペレーション名の取込] ダイアログが表示されます。[オペレーション名] に設定するオペレーション名を指定する場合にクリックします。

受付アクティビティの [オペレーション名の取込] ダイアログの詳細については、「[1.4.8 オペレーション名の取込ダイアログ \(受付アクティビティ\)](#)」を参照してください。

[ボディ割当変数]

ビジネスプロセスの要求電文に割り当てる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・関連セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[ボディ割当変数] に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[ヘッダ割当変数]

[設定] ボタンをクリックして、定義済みのヘッダ割当変数をアクティビティに割り当てます。

[設定] ボタン

[ヘッダ割当変数] ダイアログが表示されます。必要に応じて、アクティビティに割り当てるヘッダ割当変数を [ヘッダ割当変数] ダイアログで設定します。

[ヘッダ割当変数] ダイアログの詳細については、「[1.4.2 ヘッダ割当変数ダイアログ](#)」を参照してください。

[割当相関セット群]

[設定] ボタンをクリックして定義済みの相関セットグループをアクティビティに割り当てます。

[設定] ボタン

[割当相関セット群] ダイアログが表示されます。必要に応じて、アクティビティに割り当てる相関セットを [割当相関セット群] ダイアログで設定します。また、割り当てる相関セットを初期化するかどうかを設定します。

なお、[インスタンス生成] で [no] を選択した場合、初期化しない相関セットを1つだけ設定する必要があります。

[割当相関セット群] ダイアログの詳細については、「[1.4.3 割当相関セット群ダイアログ](#)」を参照してください。

[通信モデル]

オペレーションの同期または非同期を選択します。

[インスタンス生成]

要求電文を受け付けたときに、プロセスを初期化するかどうかを選択します。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

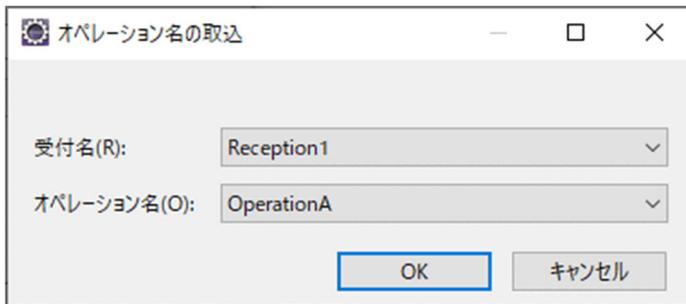
定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.8 オペレーション名の取込ダイアログ (受付アクティビティ)

[受付アクティビティ] ダイアログで設定するオペレーション名を指定するダイアログです。[受付アクティビティ] ダイアログの [取込] ボタンをクリックした場合には表示されます。

受付アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.2 受付アクティビティ」を参照してください。

図 1-77 「オペレーション名の取込」ダイアログ（受付アクティビティ）



[受付名]

受付名をドロップダウンリストから選択します。

ドロップダウンリストには、ビジネスプロセスのユーザ定義受付（呼出先固定）の受付名の一覧が表示されます。ユーザ定義受付（呼出先固定）が定義されていない場合は、ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付名の一覧が表示されます。

ここで選択した受付に定義されているオペレーション名が、[オペレーション名]に一覧表示されます。

[オペレーション名]

オペレーション名をドロップダウンリストから選択します。

ドロップダウンリストには、[受付名]で選択した受付に定義されているオペレーション名の一覧が表示されます。[受付名]で受付名が未選択の場合や、選択した受付にオペレーション名が定義されていない場合は、一覧に表示されません。

[OK] ボタン

定義内容を [受付アクティビティ] ダイアログに反映してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を [受付アクティビティ] ダイアログに反映しないでダイアログを閉じます。

1.4.9 応答アクティビティダイアログ

応答アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの応答アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスの応答アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

応答アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.3 応答アクティビティ」を参照してください。

図 1-78 [応答アクティビティ] ダイアログ

応答アクティビティ

アクティビティ名(M): 応答1

オペレーション名(O): OperationX 取込(I)...

ボディ割当変数(V): 出力データ 編集(E)...

ヘッダ割当変数: 設定(H)...

割当関連セット群: 設定(T)...

フォルト名(F):

OK キャンセル

[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[オペレーション名]

対応する受付アクティビティに指定したオペレーション名を指定します。

オペレーション名を直接指定する場合は、255 バイト以内で指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

オペレーション名を受付または受付アクティビティから取り込む場合は、[取込] ボタンから [オペレーション名の取込] ダイアログを起動して指定します。

[取込] ボタン

[オペレーション名の取込] ダイアログが表示されます。[オペレーション名] に設定するオペレーション名を指定する場合にクリックします。

応答アクティビティの [オペレーション名の取込] ダイアログの詳細については、「[1.4.10 オペレーション名の取込ダイアログ \(応答アクティビティ\)](#)」を参照してください。

[ボディ割当変数]

応答電文に割り当てる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・関連セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[編集] ボタン

[変数・関連セット一覧] ダイアログが表示されます。[ボディ割当変数] に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・関連セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・関連セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[ヘッダ割当変数]

[設定] ボタンをクリックして、定義済みのヘッダ割当変数をアクティビティに割り当てます。

[設定] ボタン

[ヘッダ割当変数] ダイアログが表示されます。必要に応じて、アクティビティに割り当てるヘッダ割当変数を [ヘッダ割当変数] ダイアログで設定します。

[ヘッダ割当変数] ダイアログの詳細については、「[1.4.2 ヘッダ割当変数ダイアログ](#)」を参照してください。

[割当関連セット群]

[設定] ボタンをクリックして定義済みの関連セットグループをアクティビティに割り当てます。

[設定] ボタン

[割当関連セット群] ダイアログが表示されます。必要に応じて、アクティビティに割り当てる関連セットを [割当関連セット群] ダイアログで設定します。また、割り当てる関連セットを初期化するかどうかを設定します。

[割当関連セット群] ダイアログの詳細については、「[1.4.3 割当関連セット群ダイアログ](#)」を参照してください。

[フォルト名]

フォルト処理として応答アクティビティを定義して、サービスリクエストにフォルトが発生したことを示す応答電文を送信する場合、フォルトの名称を指定します。XMLSchema の NCName 定義文字でローカル名を指定します。

フォルト名を指定しない場合、応答電文は正常な応答となります。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.10 オペレーション名の取込ダイアログ (応答アクティビティ)

[応答アクティビティ] ダイアログで設定するオペレーション名を指定するダイアログです。[応答アクティビティ] ダイアログの [取込] ボタンをクリックした場合には表示されます。

応答アクティビティの定義手順については、マニュアル「[サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編](#)」の「[5.6.2 受付アクティビティ](#)」を参照してください。

図 1-79 [オペレーション名の取込] ダイアログ (応答アクティビティ)

オペレーション名の取込

ユーザ定義受付から取込(C)

受付名(R): Reception1

オペレーション名(O): OperationA

受付アクティビティから取込(T)

受付アクティビティ名(V):

オペレーション名:

OK キャンセル

[ユーザ定義受付から取込] ラジオボタン

オペレーション名をユーザ定義受付から取り込む場合に選択します。

[受付名]

受付名をドロップダウンリストから選択します。

ドロップダウンリストには、ビジネスプロセスのユーザ定義受付（呼出先固定）の受付名の一覧が表示されます。ユーザ定義受付（呼出先固定）が定義されていない場合は、ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付名の一覧が表示されます。

ここで選択した受付に定義されているオペレーション名が、[オペレーション名]に一覧表示されます。

[オペレーション名]

オペレーション名をドロップダウンリストから選択します。

ドロップダウンリストには、[受付名]で選択した受付に定義されているオペレーション名の一覧が表示されます。[受付名]で受付名が未選択の場合や、選択した受付にオペレーション名が定義されていない場合は、一覧に表示されません。

[受付アクティビティから取込] ラジオボタン

オペレーション名を受付アクティビティから取り込む場合に選択します。

[受付アクティビティ名]

受付アクティビティ名をドロップダウンリストから選択します。

ドロップダウンリストには、ビジネスプロセスに定義されている受付アクティビティの一覧が表示されます。ビジネスプロセスに受付アクティビティが存在しない場合は、一覧に表示されません。

ここで選択した受付アクティビティに定義されているオペレーション名が、[オペレーション名]に表示されます。

[オペレーション名]

[受付アクティビティ名] で選択した受付アクティビティに定義されているオペレーション名が表示されます。[受付アクティビティ名] で受付アクティビティ名が未選択の場合や、選択した受付アクティビティにオペレーション名が定義されていない場合は、表示されません。

[OK] ボタン

定義内容を [応答アクティビティ] ダイアログに反映してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を [応答アクティビティ] ダイアログに反映しないでダイアログを閉じます。

1.4.11 サービス呼出アクティビティダイアログ

サービス呼出アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスのサービス呼出アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスのサービス呼出アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

サービス呼出アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.4 サービス呼出アクティビティ」を参照してください。

図 1-80 [サービス呼出アクティビティ] ダイアログ

サービス呼出アクティビティ

アクティビティ名(M): Helloサービス

サービス名(S): Helloサービスアダプタ

オペレーション名(O): getHelloString

通信モデル: 同期

要求電文

ボディ割当変数(Q): 入力データ 編集(E)...

ヘッダ割当変数: 設定(H)...

応答電文

ボディ割当変数(B): 出力データ 編集(D)...

ヘッダ割当変数: 設定(I)...

割当関連セット群: 設定(I)...

OK キャンセル

[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。
また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[サービス名]

要求電文を送信して呼び出すサービス部品をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、ツリービューのサービス定義一覧に表示されるサービス部品が表示されます。

[オペレーション名]

[サービス名] で指定したサービス部品のオペレーションのうち、実際に呼び出すオペレーションの名称を指定します。

[通信モデル]

[オペレーション名] で選択したオペレーションに設定されている通信モデル（同期または非同期）が表示されます。

[要求電文]

要求電文に関する割当変数を次に示す項目で指定します。

[ボディ割当変数]

サービス部品を呼び出す要求電文に割り当てる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[ヘッダ割当変数]

[ヘッダ割当変数] ダイアログが表示されます。必要に応じて、アクティビティに割り当てるヘッダ割当変数を [ヘッダ割当変数] ダイアログで設定します。

[ヘッダ割当変数] ダイアログの詳細については、「[1.4.2 ヘッダ割当変数ダイアログ](#)」を参照してください。

[応答電文]

応答電文に関する割当変数を次に示す項目で指定します。

[ボディ割当変数]

同期オペレーションから受け取る応答電文に割り当てる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[ヘッダ割当変数]

[ヘッダ割当変数] ダイアログが表示されます。必要に応じて、アクティビティに割り当てるヘッダ割当変数を [ヘッダ割当変数] ダイアログで設定します。

[ヘッダ割当変数] ダイアログの詳細については、「[1.4.2 ヘッダ割当変数ダイアログ](#)」を参照してください。

[割当関連セット群]

[設定] ボタンをクリックして定義済みの関連セットグループを割り当てます。関連セットグループは、サービス部品を呼び出す要求電文、およびサービス部品から受け取る応答電文に割り当てられます。

[設定] ボタン

[割当関連セット群] ダイアログが表示されます。サービス部品を呼び出す要求電文、およびサービス部品から受け取る応答電文に割り当てる関連セットを [割当関連セット群] ダイアログで設定します。また、割り当てる関連セットを初期化するかどうか、およびパターンを設定します。

[割当関連セット群] ダイアログの詳細については、「[1.4.3 割当関連セット群ダイアログ](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.12 Java 呼出アクティビティダイアログ

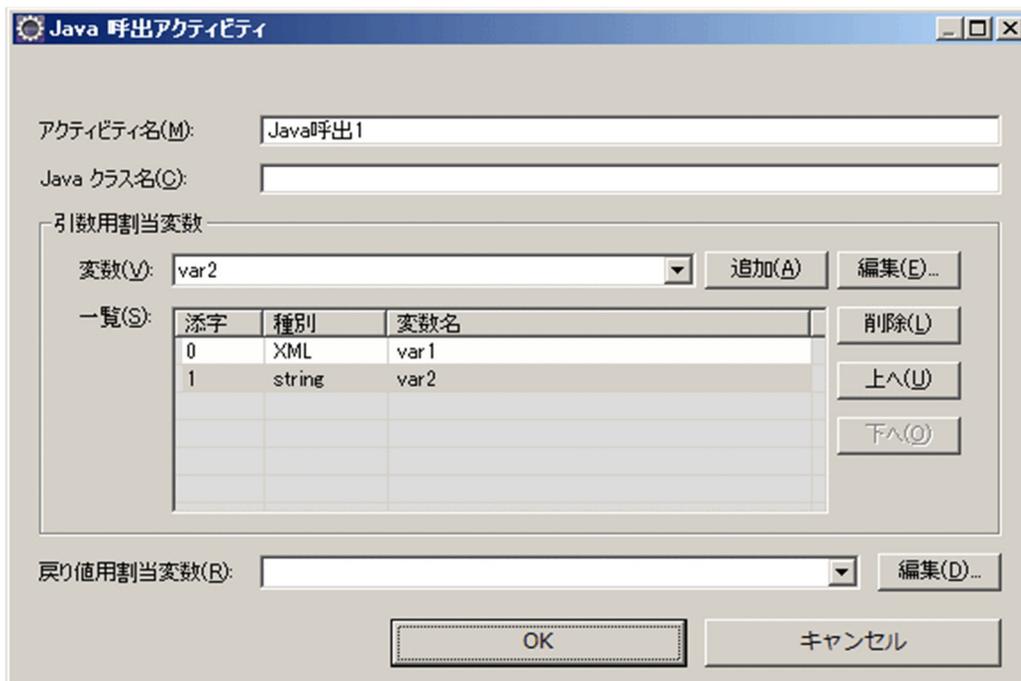
Java 呼出アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの Java 呼出アクティビティをダブルクリックする ([Java エディタ起動] メニューが非活性の場合だけ)
- キャンバスの Java 呼出アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

Java 呼出アクティビティの定義手順については、マニュアル「[サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編](#)」の「[5.6.5 Java 呼出アクティビティ](#)」を参照してください。

図 1-81 [Java 呼出アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[Java クラス名]

Java クラス名を指定します。指定する Java クラス名にはパッケージ名称を含みます。なお、拡張子（.class, .java など）は指定しないでください。

[引数用割当変数]

[Java クラス名] で指定した Java クラスを呼び出すときの引数に割り当てる変数を指定します。変数は複数指定できます。

[変数]

[Java クラス名] で指定した Java クラスを呼び出すときの引数に割り当てる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用できる変数だけが表示されます。

選択した変数は、[追加] ボタンをクリックすると [一覧] に表示されます。

[追加] ボタン

[変数] で選択した変数を [一覧] に追加します。

[一覧]

[Java クラス名] で指定した Java クラスを呼び出すときの引数に割り当てる変数が表示されます。Java クラスを呼び出すときの引数の順序は [添字] の順序と同じです。

[添字]

割り当てた変数を使用する場合の、Java クラスの可変長引数（配列）の添字が表示されます。

09-70 以前のバージョンのインタフェースを使用する場合、この値は使用されません。

[種別]

Java クラスの引数に割り当てる変数の種別が表示されます。

[変数名]

Java クラスの引数に割り当てる変数名が表示されます。

[削除] ボタン

[一覧] で選択した変数を削除します。複数選択して [削除] ボタンをクリックすると、選択したすべての変数が削除されます。

[上へ] ボタン

[一覧] で選択した変数の順序を 1 つ前に移動します。

[下へ] ボタン

[一覧] で選択した変数の順序を 1 つ後ろに移動します。

[戻り値用割当変数]

[Java クラス名] で指定した Java クラスを呼び出すときの戻り値に割り当てる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[引数用割当変数] または [戻り値用割当変数] に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.13 データ変換アクティビティダイアログ

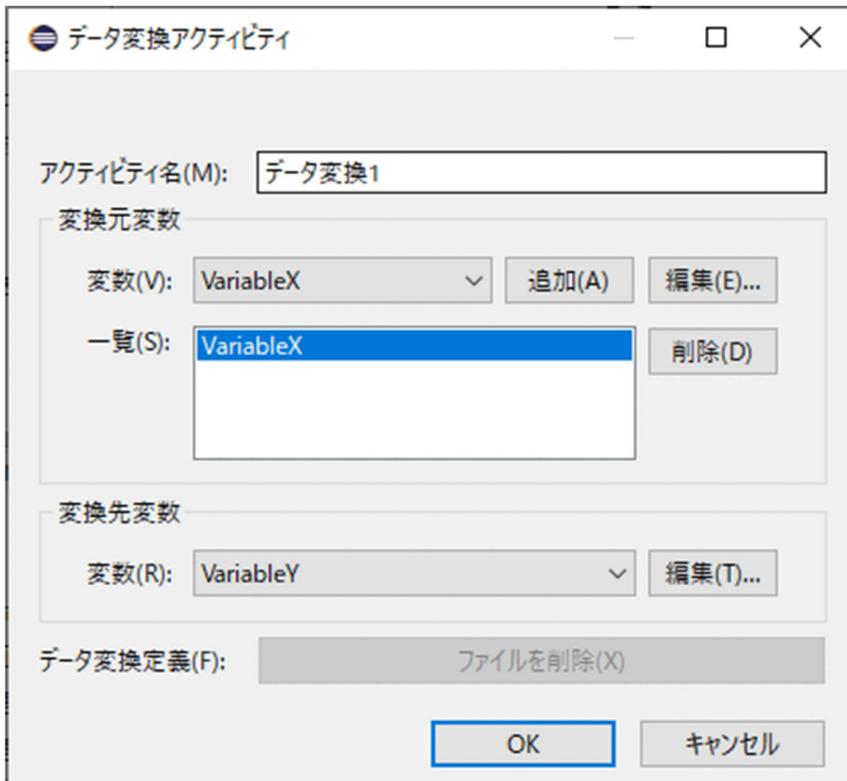
データ変換アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスのデータ変換アクティビティをダブルクリックする ([マッピング定義起動] メニューが非活性の場合だけ)
- キャンバスのデータ変換アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

データ変換アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.6 データ変換アクティビティ」を参照してください。

図 1-82 [データ変換アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[変換元変数]

次の項目を利用して、データ変換の変換元となる変数を指定します。変数は複数指定できます。また、データ変換を定義したあとでも変更できます。

[変数]

データ変換の変換元になる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。選択した変数は、[追加] ボタンをクリックすると [一覧] に表示されます。

[追加] ボタン

[変数] で選択した変数を [一覧] に追加します。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[変数] に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ」を参照してください。

[一覧]

データ変換の変換元になる変数が表示されます。

[削除] ボタン

[一覧] で選択した変数を削除します。複数選択して [削除] ボタンをクリックすると、選択したすべての変数が削除されます。

[変換先変数]

次の項目を利用して、データ変換の変換先となる変数を指定します。データ変換を定義したあとでも変更できます。

[変数]

データ変換の変換先になる変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[変数] に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[データ変換定義]

[ファイルを削除] ボタン

データ変換定義画面で作成したデータ変換定義ファイルを削除します。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

注意事項

データ変換を定義したあとに、変換元変数または変換先変数を変更した場合は、データ変換を定義し直してください。データ変換を定義し直す方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.3.2 電文フォーマットを変更した場合の定義手順](#)」を参照してください。

1.4.14 代入アクティビティダイアログ

代入アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

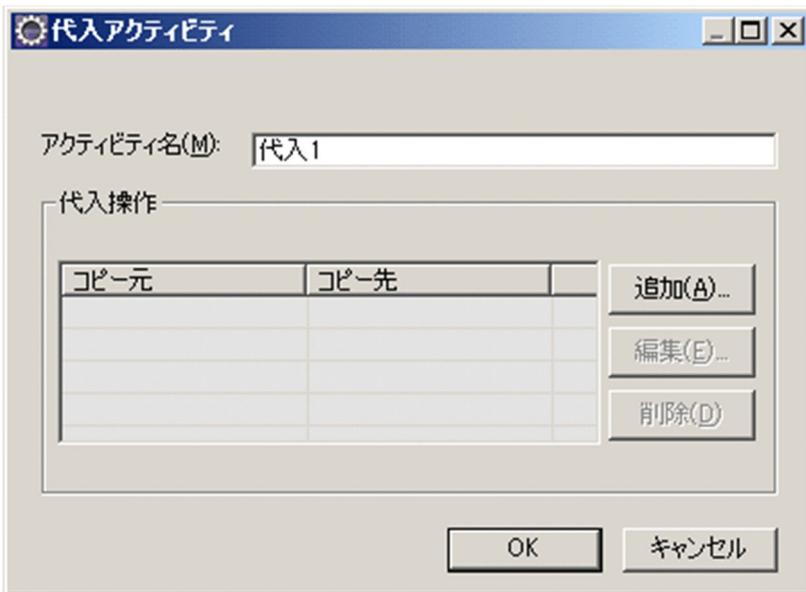
次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの代入アクティビティをダブルクリックする

- キャンバスの代入アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

代入アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.7 代入アクティビティ」を参照してください。

図 1-83 [代入アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[代入操作]

[コピー元]

代入元となる変数または値が表示されます。[追加] ボタンをクリックして表示される [代入アクティビティ] サブダイアログで設定します。

[コピー先]

代入先となる変数が表示されます。[追加] ボタンをクリックして表示される [代入アクティビティ] サブダイアログで設定します。

[追加] ボタン

[代入アクティビティ] サブダイアログが表示されます。[コピー先] および [コピー元] に変数または値を追加する場合にクリックします。[代入アクティビティ] サブダイアログについては、「[1.4.15 代入アクティビティサブダイアログ](#)」を参照してください。

[編集] ボタン

[代入アクティビティ] サブダイアログが表示されます。[コピー先] および [コピー元] の変数または値を編集する場合にクリックします。[代入アクティビティ] サブダイアログについては、「[1.4.15 代入アクティビティサブダイアログ](#)」を参照してください。

[削除] ボタン

[コピー先] および [コピー元] で選択した行を削除します。複数の行を選択して [クリア] ボタンをクリックすると、選択したすべての行が削除されます。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.15 代入アクティビティサブダイアログ

[代入アクティビティ] ダイアログで定義する [コピー元] および [コピー先] を追加または編集するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- [代入アクティビティ] ダイアログの [追加] ボタンをクリックする
- [代入アクティビティ] ダイアログの [編集] ボタンをクリックする

代入アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.7 代入アクティビティ」を参照してください。

図 1-84 [代入アクティビティ] サブダイアログ

代入アクティビティ

コピー元

変数(V)

名前(M): VariableX 編集(D)...

部分名(P):

式(E)

変数の表示(B): 表示(I)...

値(C):

固定値(テキスト)(E)

テキストデータ(T): 参照(B)...

出力(O)...

固定値(非テキスト)(X)

ファイル名(N): 参照(O)...

出力(U)...

コピー先

変数名(R): VariableY 編集(D)...

部分名(A):

OK キャンセル

[コピー元]

次の項目を利用して、[代入アクティビティ] ダイアログの [コピー元] に設定する値を指定します。

[変数] ラジオボタン

[コピー元] に変数を設定する場合に選択します。変数名、または変数名と部分名を組み合わせで設定します。

[名前]

[コピー元] に設定する変数名をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・関連セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[名前] に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[部分名]

[名前] で選択した変数がメッセージ型の場合、部分名をドロップダウンリストで選択できます。ドロップダウンリストには、[名前] で選択した変数に設定されている部分名だけが表示されます。

[式] ラジオボタン

[コピー元] に値 (数値, 文字列, 真偽値) を設定する場合, または [コピー元] にメッセージ型の変数の一部を絶対パス (XPath 式) で指定して設定する場合に選択します。

[変数の表示]

[コピー元] の [式] で変数を利用する場合, 表示する変数名をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには, [変数・相関セット一覧] ダイアログで定義したメッセージ型の変数のうち, 利用可能な変数だけが表示されます。

[表示] ボタン

[変数の表示] ダイアログが表示されます。[変数の表示] ダイアログでは, [変数の表示] で指定したメッセージ型の変数の内容から, コピー元に設定する内容を選択して, 絶対パス (XPath 式) を取得できます。

[変数の表示] ダイアログについては、「[1.4.4 変数の表示ダイアログ](#)」を参照してください。

[値]

[コピー元] に数値, 文字列, 真偽値を設定する場合, それぞれの値を指定します。

指定する値については, マニュアル「[サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編](#)」の「[5.6.21 アクティビティ定義ダイアログの XPath の指定](#)」を参照してください。

[固定値 (テキスト)] ラジオボタン

UTF-8 で表示できる固定値を指定する場合に選択します。

[テキストデータ]

固定値を直接入力するか, [参照] ボタンから指定したファイルの内容を取り込みます。

固定値は, UTF-8 で表示できる値である必要があります。空白や改行もデータの一部となります。また, 改行 LF は, ダイアログを閉じるときに CR+LF に変換されます。

なお, [参照] ボタンでファイルの内容を取り込むと, そのとき [テキストデータ] に入力されていた内容は削除されます。

[参照] ボタン

フォルダの選択画面が表示され, 固定値が記載されたファイルを指定できます。エンコードが「UTF-8」のファイルを指定してください。エンコードが「UTF-8」でない場合の動作は保証できません。制御文字もデータの一部となります。

指定したファイルの内容は [テキストデータ] に取り込まれます。

[出力] ボタン

[テキストデータ] に表示されている固定値をファイル出力するためのダイアログが表示されます。

[固定値 (非テキスト)] ラジオボタン

UTF-8 で表示できない固定値を指定する場合に選択します。

[ファイル名]

[参照] ボタンで指定したファイルのファイル名が表示されます。

[参照] ボタン

フォルダの選択画面が表示され、固定値が記載されたファイルを指定できます。制御文字もデータの一部となります。

[出力] ボタン

ファイルの出力先を指定するダイアログが表示されます。

[コピー先]

次の項目を利用して、[代入アクティビティ] ダイアログの [コピー先] に設定する値を指定します。

[変数名]

[コピー先] に設定する変数名をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[変数名] に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、[\[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ\]](#) を参照してください。

[部分名]

[変数名] で選択した変数がメッセージ型の場合、部分名をドロップダウンリストで選択できます。ドロップダウンリストには、[変数名] で選択した変数に設定されている部分名だけが表示されます。

[OK] ボタン

定義内容を [代入アクティビティ] ダイアログに反映してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を [代入アクティビティ] ダイアログに反映しないでダイアログを閉じます。

1.4.16 無操作アクティビティダイアログ

無操作アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの無操作アクティビティをダブルクリックする

- キャンバスの無操作アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

無操作アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.8 無操作アクティビティ」を参照してください。

図 1-85 [無操作アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.17 フォルト送出アクティビティダイアログ

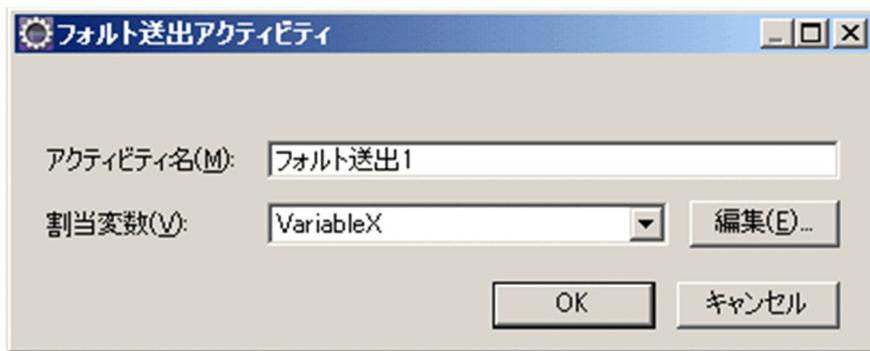
フォルト送出アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスのフォルト送出アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスのフォルト送出アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

フォルト送出アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.9 フォルト送出アクティビティ」を参照してください。

図 1-86 「フォルト送出アクティビティ」 ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[割当変数]

フォルトの使い方によって次のように設定有無が異なります。

- 特定の電文形式のフォルトを上位のスコープまたはビジネスプロセスに送出する場合
送出するフォルトに割り当てる変数をドロップダウンリストで選択します。
ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。
- すでに発生しているフォルトをそのまま上位のスコープまたはビジネスプロセスに送出する場合
変数は設定しないでください。

この場合、フォルト送出アクティビティはどこかのアクティビティのフォルトハンドラ内※に定義する必要があります。フォルトハンドラ内に定義されていない場合は、動作を保証しません。

注※ フォルトハンドラが多段に定義されている場合、上位のフォルトハンドラ配下の位置にはフォルト送出アクティビティを定義できません。このような位置に定義した場合は動作を保証しません。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[割当変数] に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.18 補償アクティビティダイアログ

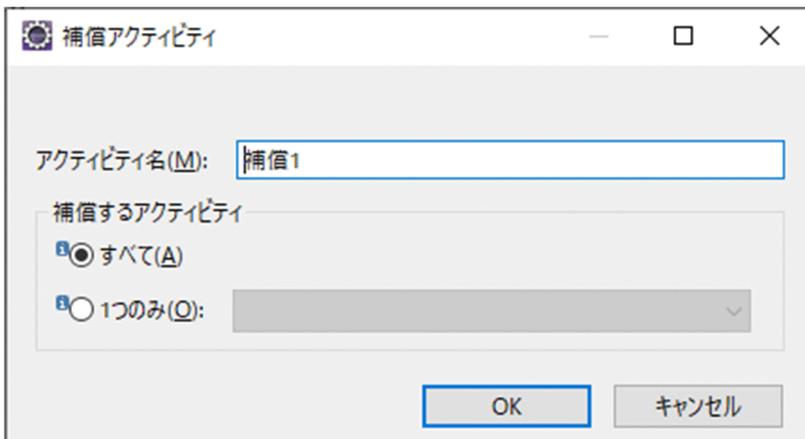
補償アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの補償アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスの補償アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

補償アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.10 補償アクティビティ」を参照してください。

図 1-87 [補償アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[補償するアクティビティ]

補償範囲にある補償ハンドラの起動対象を次の中から選択します。

[すべて] ラジオボタン

補償範囲内で補償ハンドラが定義されたすべてのアクティビティ[※]に対して、補償処理が実行されます。

[1 つのみ] ラジオボタン

補償範囲内で補償ハンドラが定義されたアクティビティ[※]のうち、選択された 1 つのアクティビティの補償処理だけが実行されます。

実行するアクティビティは右側のコンボボックスで選択できます。

注※ ビジネスプロセス定義画面のプロパティ項目「スコープアクティビティのデフォルトハンドラ」が ON に設定されていて、補償ハンドラが定義されていないスコープアクティビティも含まれます。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.19 待機アクティビティダイアログ

待機アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの待機アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスの待機アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

待機アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.11 待機アクティビティ」を参照してください。

図 1-88 [待機アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[待機時間]

次の項目を利用して、ビジネスプロセスの処理を待機する時間を指定します。

[間隔] ラジオボタン

任意の時間、処理を停止させる場合に選択します。例えば、5 分間処理を停止させる場合は、[間隔] ラジオボタンを選択します。

[期限] ラジオボタン

任意の時間まで、処理を停止させる場合に選択します。例えば、2009 年 5 月 31 日まで処理を停止させる場合は、[期限] ラジオボタンを選択します。

[変数]

[待機時間] の [式] で変数を利用する場合、表示する変数名をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義したメッセージ型の変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[表示] ボタン

[変数の表示] ダイアログが表示されます。[変数の表示] ダイアログでは、[変数の表示] で指定したメッセージ型の変数の内容から、待機時間に設定する内容を選択して、絶対パス (XPath 式) を取得できます。

[変数の表示] ダイアログについては、「[1.4.4 変数の表示ダイアログ](#)」を参照してください。

[式]

待機時間の間隔または期限として指定する式を XPath で指定します。指定する値については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.11 待機アクティビティ](#)」、および「[5.6.21 アクティビティ定義ダイアログの XPath の指定](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.20 検証アクティビティダイアログ

検証アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの検証アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスの検証アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

検証アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.12 検証アクティビティ](#)」を参照してください。

図 1-89 [検証アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[検証する変数]

次の項目を利用して、ビジネスプロセスの処理を検証する変数を指定します。

[変数]

変数をドロップダウンリストから選択します。ドロップダウンリストには、ビジネスプロセス定義画面で定義された変数のうち、種別が「XML」の変数を表示します。また、空の要素を最後に表示します。

[追加] ボタン

[変数] で選択した変数を追加します。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[変数・相関セット一覧] ダイアログでは、[変数] で選択した変数を編集します。

[変数・相関セット一覧] ダイアログについては、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[一覧]

追加された変数を追加順に表示します。

変数を削除する場合は、対象となる変数を選択します。複数の変数を選択できます。

[削除] ボタン

[一覧] で選択した変数を削除します。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.21 ログ出力アクティビティダイアログ

ログ出力アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスのログ出力アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスのログ出力アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

ログ出力アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.13 ログ出力アクティビティ」を参照してください。

図 1-90 [ログ出力アクティビティ] ダイアログ

ログ出力アクティビティ

アクティビティ名(M): ログ出力1

ログ出力識別子(I): logger1

ログ出力内容

リソース Key (K): MSGID_001-ERROR

任意の文字列(S):

埋め込み要素

一覧(L):

添字	埋め込み要素値
0	var[part1]

追加(A)

編集(E)...

削除(D)

上^(U)

下^(O)

OK

キャンセル

[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[ログ出力識別子]

ログ出力識別子を指定します。

ログ出力識別子はログ出力先を一意に識別する文字列です。事前にログ出力アクティビティ定義ファイルで定義したログ出力識別子の中から、出力情報に該当するログ出力識別子を1つ指定します。

ログ出力アクティビティ定義ファイルについては、「[3.20.1 ログ出力アクティビティ定義ファイル](#)」を参照してください。

[ログ出力内容]

出力するメッセージの指定方法を次の中から選択します。

[リソース Key] ラジオボタン

出力するメッセージをメッセージ定義ファイルで定義する場合に選択します。この項目を指定するには、事前にメッセージ定義ファイルの作成が必要です。

メッセージ定義ファイルの中から、出力するメッセージが定義されたプロパティのキーをテキストボックスに1つ指定します。キーの形式は「リソース Key-ログの出力レベル」です（「-」は半角ハイフン）。

メッセージ定義ファイルについては、「[3.20.2 メッセージ定義ファイル](#)」を参照してください。

[任意の文字列] ラジオボタン

出力するメッセージの内容を直接指定する場合に選択します。

メッセージの内容はテキストボックスに、次の点に注意して指定してください。

- 改行は指定しないでください。
- 制御文字は指定しないでください。
- 埋め込み文字を指定する場合は、添字を{}で囲んで指定してください。

[埋め込み要素]

出力するメッセージに埋め込み文字を使用する場合に、埋め込み要素を指定します。

[一覧]

メッセージ内容の埋め込み文字に割り当てる埋め込み要素が、添字の順に一覧表示されます。

例えば、メッセージ内容に埋め込み文字を「Element = {0}, {1}」と定義する場合、{0}の部分には添字「0」の埋め込み要素値が、{1}の部分には添字「1」に設定された埋め込み要素値が埋め込まれます。

埋め込み要素の追加・編集は、「ログ出力アクティビティ」サブダイアログで設定します。

埋め込み要素と埋め込み文字の数が一致しない場合は次のようになります。

- 埋め込み要素の数がメッセージ内容の埋め込み文字の数より多い場合、超えた分は無視されます。
- 埋め込み要素の数がメッセージ内容の埋め込み文字の数より少ない場合、足りない埋め込み文字部分は埋め込まれない状態で出力されます。

例：メッセージ内容の埋め込み文字が「Element = {0}, {1}」で、埋め込み要素値が「aaa」1つしか設定されていない場合、「Element = aaa, {1}」と出力されます。

[添字]

添字が0から順に連番で表示されます。

[埋め込み要素値]

「ログ出力アクティビティ」サブダイアログで設定した埋め込み要素値が表示されます。

埋め込み要素値の表示位置は、[上へ] ボタンおよび [下へ] ボタンで変更できます。

[追加] ボタン

[ログ出力アクティビティ] サブダイアログが表示されます。[一覧] に埋め込み要素を追加する場合にクリックします。

[ログ出力アクティビティ] サブダイアログについては、「[1.4.22 ログ出力アクティビティサブダイアログ](#)」を参照してください。

[編集] ボタン

[ログ出力アクティビティ] サブダイアログが表示されます。[一覧] の埋め込み要素の内容を編集する場合にクリックします。

[ログ出力アクティビティ] サブダイアログについては、「[1.4.22 ログ出力アクティビティサブダイアログ](#)」を参照してください。

[削除] ボタン

[一覧] で選択した行を削除します。

[上へ] ボタン

[一覧] で選択した行の位置が1つ上に移動します。

[下へ] ボタン

[一覧] で選択した行の位置が1つ下に移動します。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.22 ログ出力アクティビティサブダイアログ

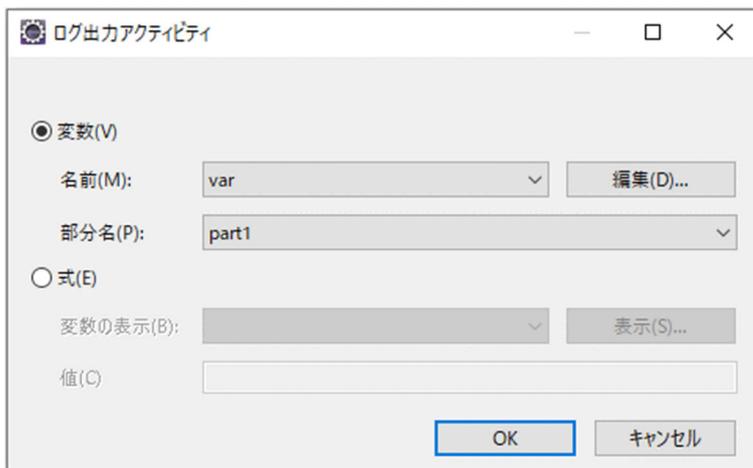
[ログ出力アクティビティ] ダイアログで定義する埋め込み要素値を追加または編集するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- [ログ出力アクティビティ] ダイアログの [追加] ボタンをクリックする
- [ログ出力アクティビティ] ダイアログの [編集] ボタンをクリックする

ログ出力アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.13 ログ出力アクティビティ](#)」を参照してください。

図 1-91 【ログ出力アクティビティ】サブダイアログ



埋め込み要素を設定するには、変数または XPath 式で指定します。

【変数】 ラジオボタン

埋め込み要素値として変数を設定する場合に選択します。変数名、または変数名と部分名を組み合わせで設定します。

【名前】

【埋め込み要素】 に設定する変数名をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、【変数・相関セット一覧】 ダイアログで定義した変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

【編集】 ボタン

【変数・相関セット一覧】 ダイアログが表示されます。【名前】 に設定する変数の内容を編集する場合にクリックします。

【変数・相関セット一覧】 ダイアログの詳細については、[\[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ\]](#) を参照してください。

【部分名】

【名前】 で選択した変数がメッセージ型の場合、部分名をドロップダウンリストで選択できます。ドロップダウンリストには、【名前】 で選択した変数に設定されている部分名だけが表示されます。

【式】 ラジオボタン

埋め込み要素値として XPath 式を指定する場合に選択します。

【変数の表示】

式に変数を利用する場合、表示する変数名をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、【変数・相関セット一覧】 ダイアログで定義したメッセージ型の変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

【表示】 ボタン

【変数の表示】 ダイアログが表示されます。【変数の表示】 ダイアログでは、【変数の表示】 で指定したメッセージ型の変数の内容から設定する内容を選択して、絶対パス (XPath 式) を取得できます。

[変数の表示] ダイアログについては、「1.4.4 変数の表示ダイアログ」を参照してください。

[値]

式に必要な値（数値，文字列，真偽値）を指定します。

指定する値については，マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.21 アクティビティ定義ダイアログの XPath の指定」を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を [ログ出力アクティビティ] ダイアログに反映してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を [ログ出力アクティビティ] ダイアログに反映しないでダイアログを閉じます。

1.4.23 途中終了アクティビティダイアログ

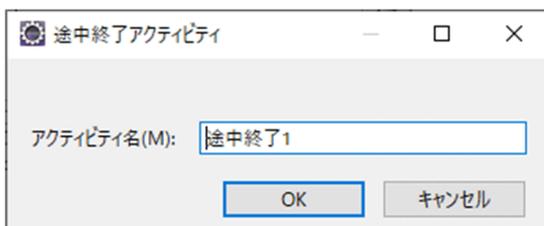
途中終了アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの途中終了アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスの途中終了アクティビティを選択して右クリックし，[設定] を選択する

途中終了アクティビティの定義手順については，マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.14 途中終了アクティビティ」を参照してください。

図 1-92 [途中終了アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は，XMLSchema の NCName 定義文字です。

また，アクティビティ名は，ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.24 スコープアクティビティダイアログ

スコープアクティビティの詳細を定義するダイアログです。

キャンバスのスコープアクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択した場合に表示されます。

スコープアクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.15 スコープアクティビティ」を参照してください。

図 1-93 [スコープアクティビティ] ダイアログ

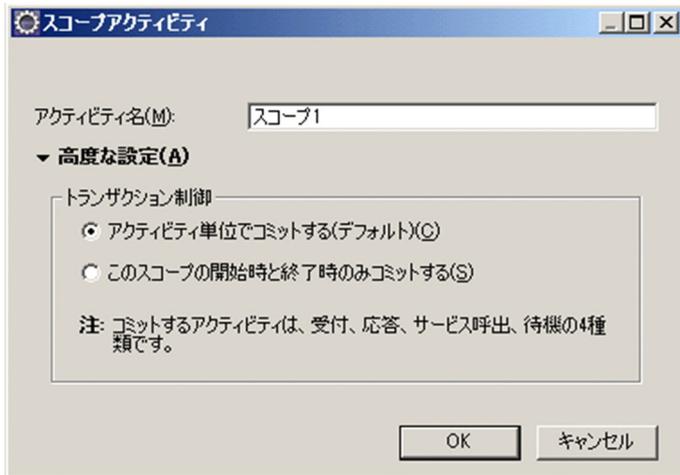
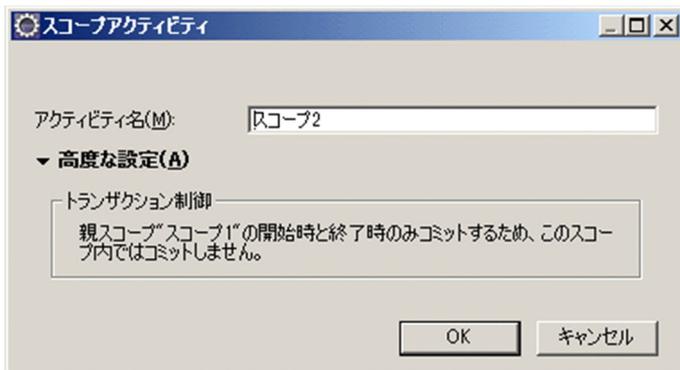


図 1-94 [スコープアクティビティ] ダイアログ（上位のスコープで [このスコープの開始時と終了時のみコミットする] ラジオボタンが選択されている場合）



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[高度な設定]

[▼] をクリックすると、ダイアログ上の [トランザクション制御] の表示/非表示を切り替えられます。

[トランザクション制御]

トランザクションのコミットのタイミングを次のどちらかで選択します。

[アクティビティ単位でコミットする] ラジオボタン (デフォルト)

トランザクションをアクティビティ単位でコミットする場合に選択します。

[このスコープの開始時と終了時のみコミットする] ラジオボタン

トランザクションのコミットのタイミングをスコープの開始時および終了時だけとする場合に選択します。なお、この項目を選択したスコープアクティビティを定義する際には、スコープアクティビティ内に受付アクティビティ、応答アクティビティ、待機アクティビティを定義すると、検証エラーとなります。

スコープアクティビティを定義する場合の注意事項については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.15 スコープアクティビティ」を参照してください。

なお、上位のスコープで [このスコープの開始時と終了時のみコミットする] ラジオボタンが選択されている場合は、これらのラジオボタンでコミットのタイミングは設定できません。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.25 繰り返しアクティビティダイアログ

繰り返しアクティビティの詳細を定義するダイアログです。

キャンバスの繰り返しアクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択した場合に表示されます。

繰り返しアクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.16 繰り返しアクティビティ」を参照してください。

図 1-95 [繰り返しアクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[繰り返しモード]

[条件指定方式]

[繰り返し条件設定] ボタンをクリックして表示される [繰り返し条件設定] ダイアログから、繰り返しの条件を設定します。[繰り返し条件設定] ダイアログについては、「[1.4.27 繰り返し条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。

[リスト指定方式]

[繰り返しリスト設定] ボタンをクリックして表示される [繰り返しリスト設定] ダイアログから、繰り返し対象となるリストを指定します。[繰り返しリスト設定] ダイアログについては、「[1.4.26 繰り返しリスト設定ダイアログ](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

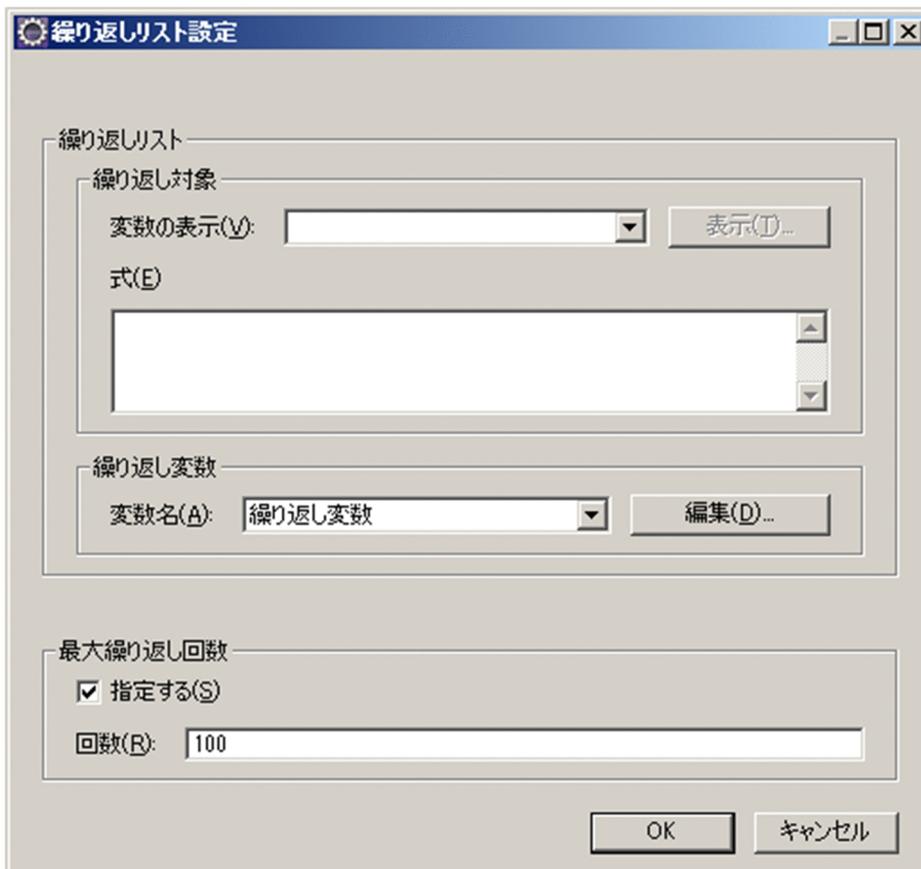
1.4.26 繰り返しリスト設定ダイアログ

繰り返しアクティビティで繰り返し処理を設定する場合のリストを定義するダイアログです。

[繰り返しアクティビティ] ダイアログの [繰り返しリスト設定] ボタンをクリックした場合に表示されます。

繰り返しアクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.16 繰り返しアクティビティ](#)」を参照してください。

図 1-96 [繰り返しリスト設定] ダイアログ (繰り返しアクティビティ)



[繰り返しリスト]

[変数の表示]

繰り返しリストに変数を利用した式を設定する場合、変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義したメッセージ型の変数のうち、利用できる変数だけが表示されます。

[表示] ボタン

[変数の表示] ダイアログが表示されます。[変数の表示] ダイアログでは、[変数の表示] で指定したメッセージ型 (XML, non-XML) の変数の内容を確認できます。

[変数の表示] ダイアログについては、「[1.4.4 変数の表示ダイアログ](#)」を参照してください。

[式]

評価結果が繰り返し要素を定義した変数の要素のパスとなる式を XPath 式で指定します。XPath 式の指定については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.21 アクティビティ定義ダイアログの XPath の指定](#)」を参照してください。なお、拡張関数は使用できません。

[変数名]

繰り返し要素を格納する変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義した XML の変数のうち、利用できる変数だけが表示されます。

[変数・相関セット一覧] ダイアログについては、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。[変数・相関セット一覧] ダイアログでは、変数の追加や削除ができます。

[変数・相関セット一覧] ダイアログについては、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[最大繰り返し回数]

[指定する] チェックボックス

最大繰り返し回数を指定する場合にチェックします。

チェックボックスをチェックしない場合は、最大で 2,147,483,647 回まで繰り返すことができます。

[回数]

繰り返しの回数の最大値を半角の数字で指定します。指定できる値は 1~2,147,483,647 の整数です。

[OK] ボタン

定義内容を [繰り返しアクティビティ] ダイアログに反映してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を [繰り返しアクティビティ] ダイアログに反映しないでダイアログを閉じます。

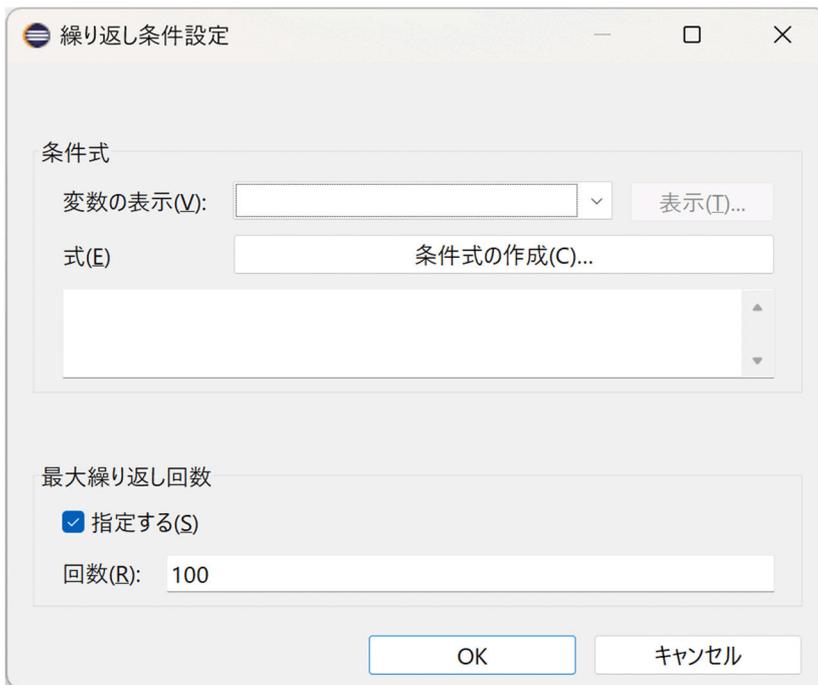
1.4.27 繰り返し条件設定ダイアログ

繰り返しアクティビティを利用して繰り返し処理を設定する場合の条件を定義するダイアログです。

[繰り返しアクティビティ] ダイアログの [繰り返し条件設定] ボタンをクリックした場合には表示されます。

繰り返しアクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.16 繰り返しアクティビティ](#)」を参照してください。

図 1-97 [繰り返し条件設定] ダイアログ (繰り返しアクティビティ)



[条件式]

[変数の表示]

条件に変数を利用した式を設定する場合、変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義したメッセージ型 (XML) の変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[表示] ボタン

[変数の表示] ダイアログが表示されます。[変数の表示] ダイアログでは、[変数の表示] で指定したメッセージ型 (XML) の変数の内容を確認できます。

[変数の表示] ダイアログについては、「[1.4.4 変数の表示ダイアログ](#)」を参照してください。

[式]

繰り返し条件の条件式を XPath 式でテキストエリアに指定します。XPath 式の中では、拡張関数を使用して変数内の情報を取得し、利用することができます。拡張関数の使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.21 アクティビティ定義ダイアログの XPath の指定](#)」を参照してください。

また、[条件式の作成] ボタンから [条件式の作成] ダイアログを起動して、定義した内容を基に XPath 式を作成することもできます。

[条件式の作成] ボタン

[条件式の作成] ダイアログが表示されます。[条件式の作成] ダイアログで条件式を指定すると、その内容を基に作成された XPath 式が [式] のテキストエリアに反映されます。

[条件式の作成] ダイアログについては、「[1.4.30 条件式の作成ダイアログ](#)」を参照してください。

[最大繰り返し回数]

次の項目を利用して、繰り返しアクティビティでの最大繰り返し回数を指定します。

[指定する] チェックボックス

最大繰り返し回数を指定する場合にチェックします。

チェックボックスをチェックしない場合は、最大で 2,147,483,647 回まで繰り返すことができます。

[回数]

繰り返しの回数の最大値を半角の数字で指定します。指定できる値は 1~2,147,483,647 の整数です。

[OK] ボタン

定義内容を [繰り返しアクティビティ] ダイアログに反映してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を [繰り返しアクティビティ] ダイアログに反映しないでダイアログを閉じます。

1.4.28 分岐アクティビティダイアログ

分岐アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの分岐アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスの分岐アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

分岐アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.17 分岐アクティビティ」を参照してください。

図 1-98 [分岐アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[分岐条件]

[優先順位]

[条件名] に設定される条件の優先順位が、優先順位の高い順に表示されます。条件の優先順位は、[上へ] ボタンおよび [下へ] ボタンで変更できます。

[条件名]

条件の名称が表示されます。条件は、[条件設定] ボタンをクリックして表示される [条件設定] ダイアログで設定します。

[遷移先]

その条件を満たす場合に実行するアクティビティのアクティビティ名を選択します。

[条件設定] ボタン

[条件設定] ダイアログが表示されます。分岐の条件を設定するときにクリックします。[条件設定] ダイアログについては、「[1.4.29 条件設定ダイアログ \(分岐アクティビティ\)](#)」を参照してください。

[クリア] ボタン

選択した条件を削除します。

[上へ] ボタン

選択した条件の優先順位を 1 つ上げます。

[下へ] ボタン

選択した条件の優先順位を 1 つ下げます。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

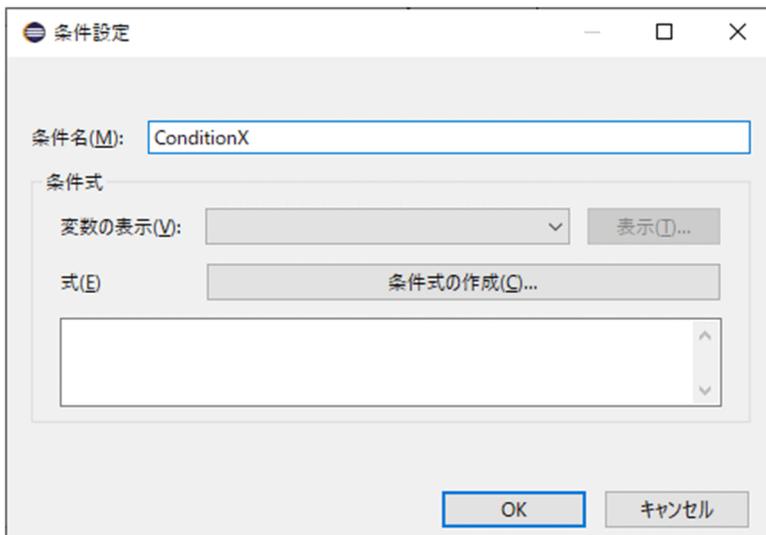
1.4.29 条件設定ダイアログ (分岐アクティビティ)

[分岐アクティビティ] ダイアログで定義する分岐処理の分岐条件を設定するダイアログです。

[分岐アクティビティ] ダイアログの [条件設定] ボタンをクリックした場合に表示されます。

分岐アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.17 分岐アクティビティ](#)」を参照してください。

図 1-99 [条件設定] ダイアログ (分岐アクティビティ)



[条件名]

[分岐アクティビティ] ダイアログの [条件名] に設定する条件の名称を指定します。条件名は、分岐アクティビティの定義内で一意になるように指定します。

[変数の表示]

条件に変数を利用した式を設定する場合、変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義したメッセージ型の変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[表示] ボタン

[変数の表示] ダイアログが表示されます。[変数の表示] ダイアログでは、[変数の表示] で指定したメッセージ型の変数の内容を確認できます。

[変数の表示] ダイアログについては、「[1.4.4 変数の表示ダイアログ](#)」を参照してください。

[式]

分岐条件の条件式を XPath 式でテキストエリアに指定します。XPath 式の中では、拡張関数を使用して変数内の情報を取得し、利用することができます。拡張関数の使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.21 アクティビティ定義ダイアログの XPath の指定](#)」を参照してください。

また、[条件式の作成] ボタンから [条件式の作成] ダイアログを起動して、定義した内容を基に XPath 式を作成することもできます。

[条件式の作成] ボタン

[条件式の作成] ダイアログが表示されます。[条件式の作成] ダイアログで条件式を指定すると、その内容を基に作成された XPath 式が [式] のテキストエリアに反映されます。

[条件式の作成] ダイアログについては、「[1.4.30 条件式の作成ダイアログ](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を [分岐アクティビティ] ダイアログに反映してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を [分岐アクティビティ] ダイアログに反映しないでダイアログを閉じます。

1.4.30 条件式の作成ダイアログ

XPath 式を作成するための条件式を指定するダイアログです。指定した条件式を基に XPath 式が作成され、呼び出し元のダイアログの [式] テキストエリアに反映されます。

このダイアログは、次に示すダイアログで [条件式の作成] ボタンをクリックした場合に表示されます。

- 分岐アクティビティの [条件設定] ダイアログ
- 繰り返しアクティビティの [繰り返し条件設定] ダイアログ

このダイアログで定義できない条件は、呼び出し元のダイアログの [式] で定義してください。

分岐アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.17 分岐アクティビティ」を参照してください。繰り返しアクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.16 繰り返しアクティビティ」を参照してください。

図 1-100 [条件式の作成] ダイアログ

条件式の作成

条件式

値比較(L)

左辺

変数(M)

変数名(M): [] 編集(D): []

部分名(P): []

式(E):

変数の表示(B): [] 表示(Y)... []

値(C): []

論理値(W) 論理値

真(X) 偽(F)

演算(B): [=]

右辺

変数(N)

変数名(N): [] 編集(H): []

部分名(Q): []

式(K):

変数の表示(I): [] 表示(Z)... []

値(S): []

論理値(J) 論理値

真(U) 偽(G)

変数初期化状態判定(O)

変数名(A): [] 編集(D): [] 未初期化 []

OK キャンセル

条件式の内容に応じて、次のどちらかのラジオボタンを選択します。

- [値比較] ラジオボタン
条件式として演算式を定義する場合に選択します。演算式は左辺・演算子・右辺をそれぞれ定義します。

- [変数初期化状態判定] ラジオボタン

特定の変数が初期化されているかどうかで判定する場合に選択します。

指定する条件と、作成される XPath 式の例を次に示します。

指定する条件			作成される XPath 式
左辺	演算子	右辺	
「変数名」に numeric 型の変数を指定	<=	「変数名」に numeric 型の変数を指定	csc:getVariableData('変数名') <= csc:getVariableData('変数名')
「変数名」「部分名」(部分の型: string) を指定	=	「値」に ["aaa"] を指定	bpws:getVariableProperty('変数名', '部分名') = "aaa"
「変数名」に boolean 型の変数を指定	=	「論理値」に 「真」 を指定	csc:getVariableData('変数名') = true()
「値」に 「\$変数名」 を指定	=	「値」に 「csc:getVariableData('変数名)」 を指定	\$変数名 = csc:getVariableData('変数名')
「変数初期化状態判定」に変数名と「初期化済み」を指定			csc:getMessageInitialize('変数名')
「変数初期化状態判定」に変数名と「未初期化」を指定			csc:getMessageInitialize('変数名') = false()

[値比較] ラジオボタン

条件式を演算式で定義する場合に選択します。

演算式は、左辺・右辺の項目と、それを対応付ける比較演算子を定義します。

[左辺] および [右辺] には、変数、式、または論理値を定義します。

[変数] ラジオボタン

変数を指定する場合に選択します。

変数名は [変数名] の右のドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、ビジネスプロセスエディタで定義された変数名が一覧表示されます。変数の型が XML 型、non-XML 型、string 型、numeric 型、boolean 型の変数名が設定できます。

[編集] ボタンをクリックすると、[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示され、変数を追加・編集・選択できます。[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、[\[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ\]](#) を参照してください。

[部分名] は、選択した変数の部分名をドロップダウンリストで選択します。変数部分の型が string 型、numeric 型、boolean 型の部分名が設定できます。

これらの指定によって生成される XPath 式を次に示します。

変数名を指定した場合

```
csc:getVariableData('変数名')
```

変数名と部分名を指定した場合

```
bpws:getVariableProperty('変数名','部分名')
```

[式] ラジオボタン

変数とその値を式で指定する場合に選択します。

[変数の表示] ドロップダウンリストでは、表示する変数名を選択します。ドロップダウンリストには、ビジネスプロセスエディタで定義された XML 型、non-XML 型の変数名が一覧表示されます。

[表示] ボタンをクリックすると [変数の表示] ダイアログが表示され、[変数の表示] で指定した変数の内容を確認できます。[変数の表示] ダイアログについては、「[1.4.4 変数の表示ダイアログ](#)」を参照してください。

[値] には式の値として、任意の数値、文字列、XPath 式、拡張関数を指定できます。XPath 式は評価結果が真となるよう定義する必要があります。[値] に設定した値はそのまま XPath 式に反映されます。

[論理値] ラジオボタン

論理値を指定する場合に選択します。この項目を選択した場合、さらに次のどちらかを選択する必要があります。

- [真] ラジオボタン
真 (true()) を指定する場合に選択します。
- [偽] ラジオボタン
偽 (false()) を指定する場合に選択します。

[演算]

左辺と右辺の定義内容に対応する比較演算子を次の中から選択します。

=, !=, >, <, >=, <=

[変数初期化状態判定] ラジオボタン

変数を初期化状態で判定する場合に選択します。

[変数名]

判定する変数の名前をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、ビジネスプロセスエディタで定義された XML 型、non-XML 型、any 型の変数名が一覧表示されます。

[編集] ボタン

[変数・相関セット一覧] ダイアログが表示されます。指定した変数の内容を編集する場合にクリックします。

[変数・相関セット一覧] ダイアログの詳細については、「[1.4.1 変数・相関セット一覧ダイアログ](#)」を参照してください。

[未初期化] または [初期化済み]

変数の初期化状態として、「未初期化」または「初期化済み」を選択します。

「未初期化」を選択した場合、指定した変数が未初期化かで判定する、次の XPath 式が生成されます。

```
csc:getMessageInitialize('変数名') = false()
```

「初期化済み」を選択した場合、指定した変数が初期化済みかで判定する、次の XPath 式が生成されます。

```
csc:getMessageInitialize('変数名')
```

[OK] ボタン

定義内容を基に XPath 式を作成してダイアログを閉じます。

作成した XPath 式は、[条件設定] ダイアログの [式] に反映されます。

[キャンセル] ボタン

ダイアログを閉じます。XPath 式は作成されません。

1.4.31 並列処理アクティビティダイアログ

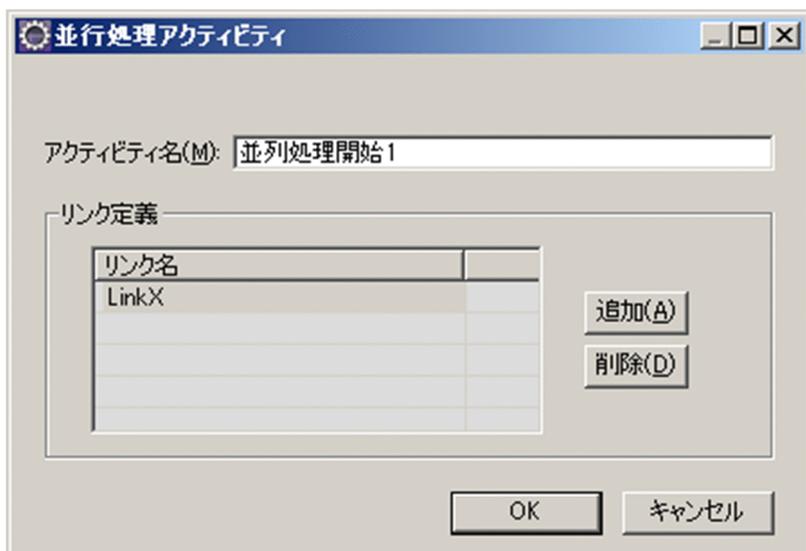
並列処理アクティビティの詳細を定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- キャンバスの並列処理開始アクティビティをダブルクリックする
- キャンバスの並列処理開始アクティビティを選択して右クリックし、[設定] を選択する

並列処理アクティビティの定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.18 並列処理アクティビティ」を参照してください。

図 1-101 [並列処理アクティビティ] ダイアログ



[アクティビティ名]

アクティビティの名称を指定します。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

また、アクティビティ名は、ビジネスプロセス（スコープ内も含む）内で一意になるように指定します。

[リンク定義]

[リンク名]

リンクの名称を指定します。リンクの名称は、ビジネスプロセス内で一意になるように指定します。

[追加] ボタン

[リンク名] に入力行を 1 行追加します。

[削除] ボタン

選択したリンク名を削除します。削除するリンク名は複数指定できます。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

1.4.32 リンクダイアログ

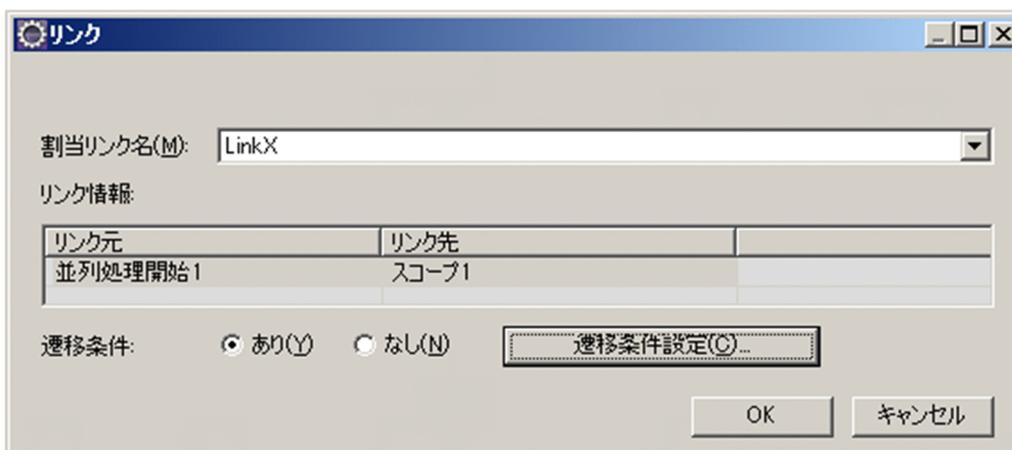
並列処理する複数のシーケンス間でのリンクを定義するダイアログです。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- リンク対象のアクティビティ同士を連結する連結線をダブルクリックする
- リンク対象のアクティビティ同士を連結する連結線を選択して右クリックし、[設定] を選択する

並列処理時のリンクの定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.18 並列処理アクティビティ」を参照してください。

図 1-102 [リンク] ダイアログ



[割当リンク名]

割り当てるリンクの名称をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、該当するスコープ内で設定したリンク名が表示されます。

[リンク情報]

[リンク元]

リンクコネクションを利用して連結されているアクティビティのうち、連結元に当たるアクティビティの名称が表示されます。

[リンク先]

リンクコネクションを利用して連結されているアクティビティのうち、連結先に当たるアクティビティの名称が表示されます。

[遷移条件]

リンクによる遷移に条件を定義するかどうかを選択します。

[遷移条件設定] ボタン

[条件設定] ダイアログが表示されます。リンクによる遷移の条件を設定するときにクリックします。条件が設定できるのは、[遷移条件] で [あり] を選択した場合だけです。[条件設定] ダイアログについては、[1.4.33 条件設定ダイアログ (並列処理アクティビティ)] を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を保存してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を保存しないでダイアログを閉じます。

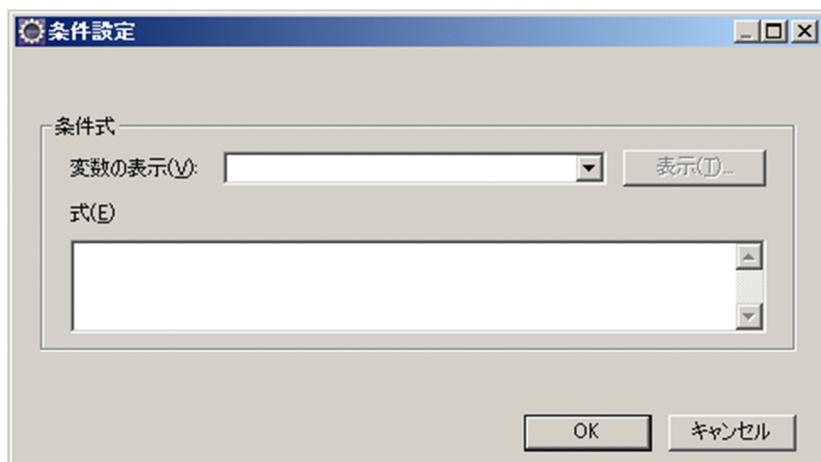
1.4.33 条件設定ダイアログ (並列処理アクティビティ)

並列処理でリンクを設定した場合のリンクの条件を定義するダイアログです。

[リンク] ダイアログの [遷移条件設定] ボタンをクリックした場合に表示されます。

並列処理時のリンクの定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6.18 並列処理アクティビティ」を参照してください。

図 1-103 [条件設定] ダイアログ (並列処理アクティビティ)



[変数の表示]

条件に変数を利用した式を設定する場合、変数をドロップダウンリストで選択します。ドロップダウンリストには、[変数・相関セット一覧] ダイアログで定義したメッセージ型の変数のうち、利用可能な変数だけが表示されます。

[表示] ボタン

[変数の表示] ダイアログが表示されます。[変数の表示] ダイアログでは、[変数の表示] で指定したメッセージ型の変数の内容を確認できます。

[変数の表示] ダイアログについては、「[1.4.4 変数の表示ダイアログ](#)」を参照してください。

[式]

遷移条件の条件式を XPath 式で指定します。XPath 式の中では、拡張関数を使用して変数内の情報を取得し、利用することができます。拡張関数の使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[5.6.21 アクティビティ定義ダイアログの XPath の指定](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

定義内容を [リンク] ダイアログに反映してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

定義内容を [リンク] ダイアログに反映しないでダイアログを閉じます。

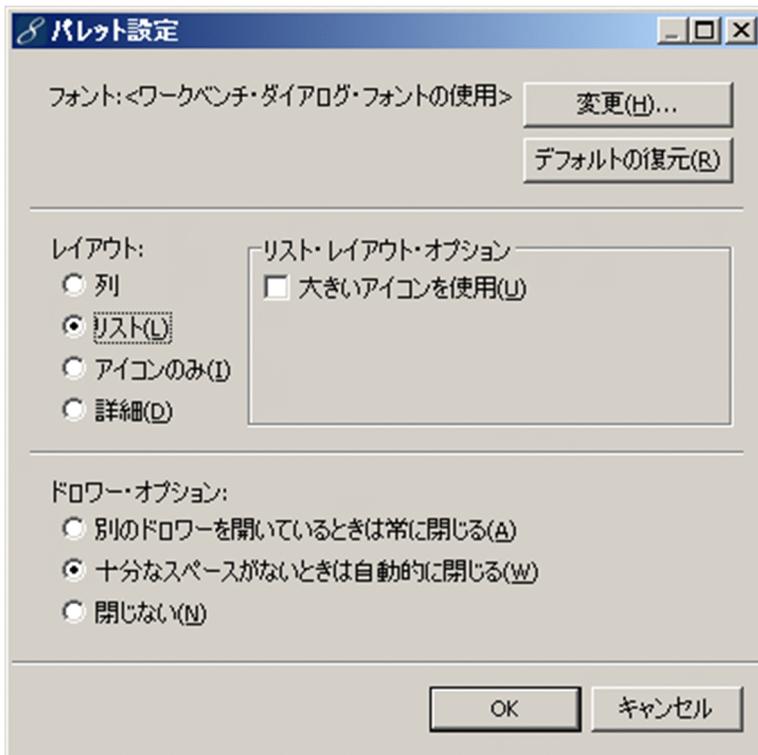
1.4.34 パレット設定ダイアログ

[パレット設定] ダイアログは、パレットの表示を設定する場合に使用します。

パレットのグループまたはツールを右クリックして、[設定] を選択した場合に表示されます。

操作手順については、「[1.12.11 パレットの表示を設定する](#)」を参照してください。

図 1-104 [パレット設定] ダイアログ



[フォント]

[変更] ボタン

パレットのグループおよびツールのフォントを変更する場合に使用します。クリックすると、[設定] ダイアログが表示されます。

[デフォルトの復元] ボタン

[変更] ボタンで変更したフォントを Eclipse で設定したフォントに戻す場合に使用します。

[レイアウト]

次のどれかのラジオボタンを選択して、パレットのグループおよびツールのレイアウトを設定します。

[列] ラジオボタン

すべてのグループおよびツールを水平に整列します。

[リスト] ラジオボタン

すべてのグループおよびツールを垂直に整列します。

[アイコンのみ] ラジオボタン

すべてのツールに対して、ツール名を表示しないでアイコンだけの表示にします。

[詳細] ラジオボタン

すべてのツールに対して、詳細なフォーマットおよび記述を表示します。

[リスト・レイアウト・オプション]

[大きいアイコンを使用] チェックボックス

パレットのツールのアイコンサイズを大きくする場合にチェックします。

[ドロー・オプション]

次のどれかのラジオボタンを選択して、パレットのツール一覧の表示方法を設定します。

[別のドローを開いているときは常に閉じる] ラジオボタン

1つのグループのツール一覧だけを表示します。

[十分なスペースがないときは自動的に閉じる] ラジオボタン

複数のグループのツール一覧を表示しているためパレットに十分な表示スペースがない場合、自動的にツール一覧が閉じます。

[閉じない] ラジオボタン

常にツール一覧を表示します。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

1.5 ビジネスプロセスのデバッグに関連するダイアログ

ビジネスプロセスのデバッグに関連するダイアログについて説明します。

1.5.1 デバッグ構成ダイアログ

ビジネスプロセスのデバッグの構成を定義するダイアログです。

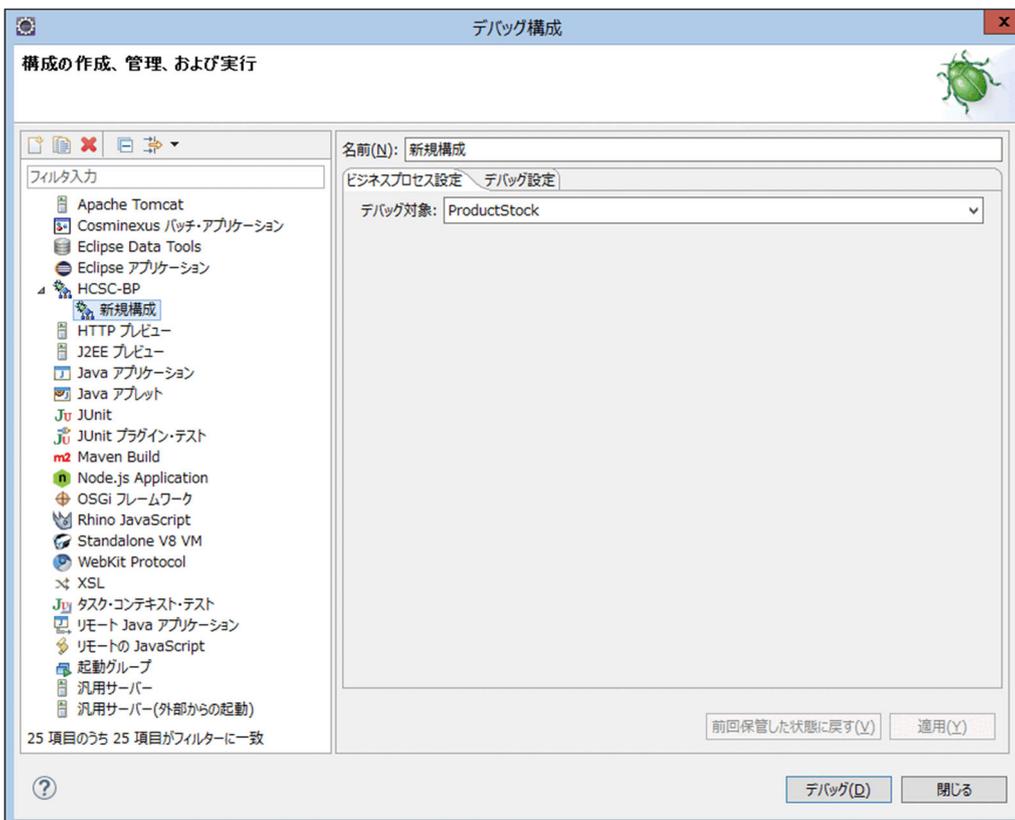
次のどれかの操作をした場合に表示されます。

- Eclipse の [デバッグ] メニューから [デバッグの構成] を選択する
- ツリービューのサービス定義一覧からデバッグするビジネスプロセスを右クリックし、[デバッグの構成] を選択する
- パッケージ・エクスプローラから対象のプロジェクトを右クリックし、[デバッグ] - [デバッグの構成] を選択する
- Eclipse の [実行] メニューから [デバッグの構成] を選択する

ビジネスプロセスのデバッグを実行する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「10. ビジネスプロセスのデバッグ」を参照してください。

[デバッグ構成] ダイアログの構成を次に示します。

図 1-105 [デバッグ構成] ダイアログの構成



[デバッグ構成] ダイアログは、ビジネスプロセス設定タブとデバッグ設定タブから構成されています。

(1) ビジネスプロセス設定タブ

ビジネスプロセス設定タブの項目について説明します。

図 1-106 ビジネスプロセス設定タブ



[デバッグ対象]

デバッグするビジネスプロセスをドロップダウンリストから選択します。

(2) デバッグ設定タブ

デバッグ設定タブの項目について説明します。

図 1-107 デバッグ設定タブ

ビジネスプロセス設定 デバッグ設定

ソケットの設定

IP アドレス デフォルト (127.0.0.1)
 その他:

ポート番号 デフォルト (0)
 その他:

通信の設定

送受信の最大サイズ (MB) デフォルト (10)
 その他:

タイムアウト (秒) デフォルト (180)
 その他:

パッケージング済みビジネスプロセス

再パッケージングしない
 再パッケージングする

サービス呼出アクティビティに設定されているサービス

自動的に配備・開始する
 配備・開始しない

[ソケットの設定]

ビジネスプロセスのデバッグに使用する IP アドレス、およびポート番号を指定します。

[IP アドレス]

ビジネスプロセスのデバッグに使用する IP アドレスを指定します。任意の IP アドレスを指定する場合は、[その他] ラジオボタンを選択し、テキストボックスに IP アドレスを入力します。

[ポート番号]

ビジネスプロセスのデバッグに使用するポート番号を指定します。任意のポート番号を指定する場合は、[その他] ラジオボタンを選択し、テキストボックスにポート番号を入力します。ポート番号には、0~65535 までの数字を入力できます。ポート番号に 0 を入力した場合、未使用のポート番号が自動で設定されます。

[通信の設定]

送受信の最大サイズおよびタイムアウト値を指定します。

[送受信の最大サイズ(MB)]

データ (電文など) の送受信の最大サイズ (単位: MB) を指定します。任意の最大サイズを指定する場合は、[その他] ラジオボタンを選択し、テキストボックスに送受信の最大サイズを入力しま

す。送受信の最大サイズには 1~2,000 までの数字を入力できます。[送受信の最大サイズ(MB)]に入力したサイズ以上のデータを送受信した場合、ビジネスプロセスのデバッグが強制的に終了します。

参考

このパラメタは、ビジネスプロセスのデバッグで扱うことができる変数値（電文）の長さ、XPath 式の長さ、XPath 式の評価結果の長さ、デバッグ実行時に受信するデバッグ情報のサイズに影響します。

[タイムアウト(秒)]

開発環境と実行環境の間でビジネスプロセスのデバッグのための接続が確立するまでのタイムアウト値（単位：秒）を設定します。任意のタイムアウト値を指定する場合は、[その他] ラジオボタンを選択し、テキストボックスにタイムアウト値を入力します。タイムアウト値には 1~1,800 までの数字を入力できます。

[パッケージ済みビジネスプロセス]

パッケージ済みのビジネスプロセスを再パッケージングするかどうかを選択します。

[再パッケージングしない] ラジオボタンを選択した場合は再パッケージングされません。

[再パッケージングする] ラジオボタンを選択した場合は再パッケージングされます。

[サービス呼出アクティビティに設定されているサービス]

サービス呼出アクティビティに設定されているサービスを配備・開始するかどうかを選択します。

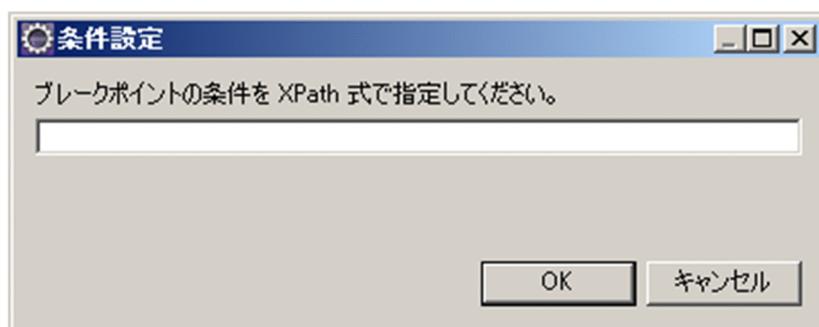
[自動的に配備・開始する] ラジオボタンを選択した場合は自動的に配備・開始されます。

[配備・開始しない] ラジオボタンを選択した場合は配備・開始されません。

1.5.2 条件設定ダイアログ

ブレイクポイントの条件設定を変更するダイアログです。

図 1-108 [条件設定] ダイアログ



プロセスインスタンスの処理が中断する条件式を XPath で指定します。条件式に空文字 (0x00) は使用できません。

1.5.3 値の設定ダイアログ

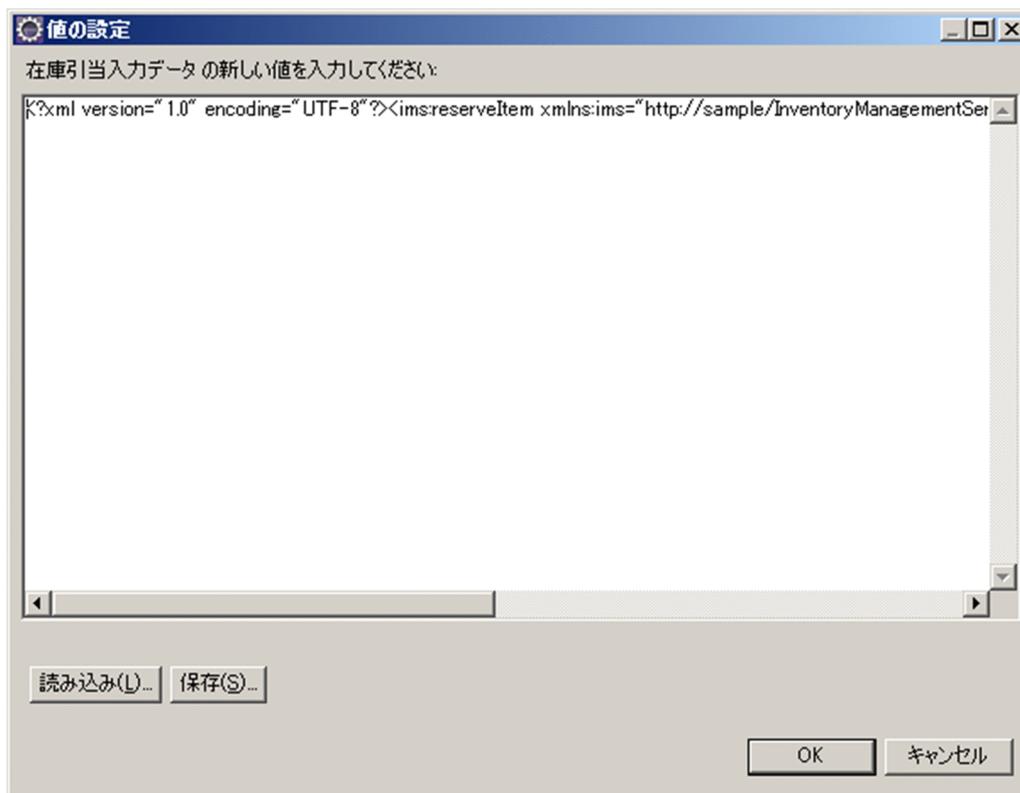
[値の設定] ダイアログは、メッセージ型の変数の場合とメッセージ型以外の変数の場合とで、表示される内容が異なります。

(1) 値の設定ダイアログ（メッセージ型の変数の場合）

メッセージ型の変数の値を更新するときに使用するダイアログです。

変数ビューから XML, non-XML, any の変数を右クリックし、[値の変更] を選択した場合に表示されます。

図 1-109 [値の設定] ダイアログ（メッセージ型の変数の場合）



変数の型が XML の場合に、入力フィールドに変数の値を入力します。バイナリ型 (non-XML), any 型の変数の値は入力できません。

変数の値に空文字 (0x00) は使用できません。メッセージ型の変数を更新すると、XML の文字コードは必ず UTF-8 になります (UTF-8 以外の文字コードを指定しても UTF-8 に変換されます)。

[読み込み] ボタン

ファイルを設定するダイアログが表示されます。

[保存] ボタン

ファイルを保存するダイアログが表示されます。

[OK] ボタン

入力した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

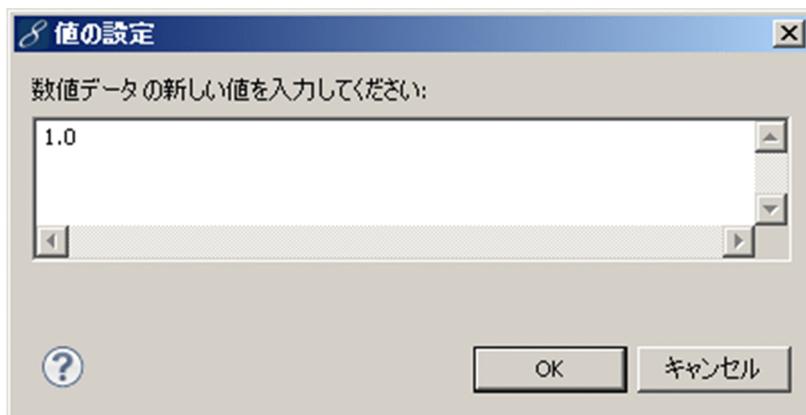
設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) 値の設定ダイアログ (メッセージ型以外の変数の場合)

XML, non-XML, any 以外の変数の値を更新するときに使用するダイアログです。

変数ビューから XML, non-XML, any 以外の変数を右クリックし、[値の変更] を選択した場合に表示されます。

図 1-110 [値の設定] ダイアログ (メッセージ型以外の変数の場合)



入力フィールドに変数の値を入力します。変数の型ごとに入力できる値の範囲を次の表に示します。

表 1-12 変数の型ごとに入力できる値の範囲

変数の型	値の範囲
numeric 型	java.lang.Double の valueOf (java.lang.String) メソッドで解釈できる値 (例: +1, 3.14, 1e-2d)
boolean 型	true または false
string 型	任意の文字列 (例: 15 インチ LCD ディスプレイ)

[OK] ボタン

入力した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

1.6 データ変換に関連するダイアログ

データ変換に関連するダイアログについて説明します。データ変換定義画面のマッピング定義時に表示されるダイアログと、ファンクションの操作時に表示されるダイアログに、大きく分類されます。

1.6.1 変換元スキーマファイル設定ダイアログ

[変換元スキーマファイル設定] ダイアログでは、N 対 1 でデータ変換をする場合に、変換元スキーマのファイルを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 新規マッピング定義ファイルのウィザードの「変換元・変換先スキーマファイル設定」ページで [N 対 1 変換] ラジオボタンを選択し、[追加] または [編集] ボタンをクリックする
- N 対 1 のデータ変換定義作成時に、[変換元・変換先スキーマファイル設定] ダイアログの [編集] ボタンをクリックする

図 1-111 [変換元スキーマファイル設定] ダイアログ



(1) 表示項目

[変換元スキーマ]

変換元スキーマのファイルパスを指定します。

[選択] ボタン

変換元スキーマのファイルを選択するダイアログが表示されます。

[スキーマ論理名]

変換元スキーマ内で一意となるスキーマ論理名を指定します。

[OK] ボタン

設定した内容を検証したあと、設定を保存して、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[変換元スキーマファイル設定] ダイアログでは、N 対 1 のデータ変換に使用する変換元スキーマのファイルを追加または変更できます。データ変換の定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.3.1 データ変換の定義手順」を参照してください。

1.6.2 変換元・変換先スキーマファイル設定ダイアログ

[変換元・変換先スキーマファイル設定] ダイアログでは、変換元スキーマのファイルと、変換先スキーマのファイルを指定します。

変換元スキーマツリービューまたは変換先スキーマツリービューのスキーマ論理名を右クリックし、[ルート要素選択] を選択した場合に表示されます。1 対 1 と N 対 1 のデータ変換では、表示されるダイアログが異なります。

図 1-112 [変換元・変換先スキーマファイル設定] ダイアログ (1 対 1 のデータ変換の場合)

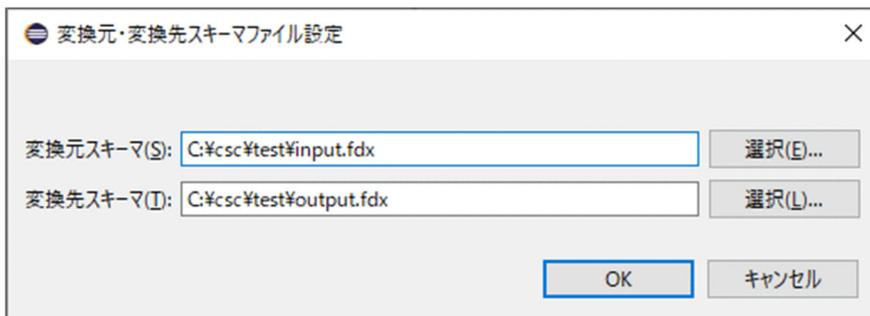
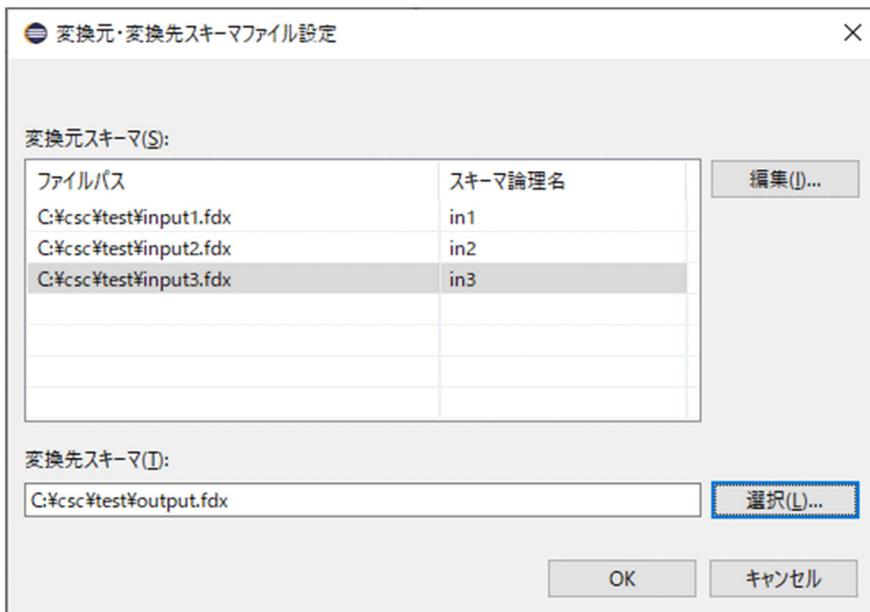


図 1-113 [変換元・変換先スキーマファイル設定] ダイアログ (N 対 1 のデータ変換の場合)



(1) 表示項目

(a) 1対1のデータ変換の場合

[変換元スキーマ]

変換元スキーマのファイルパスを指定します。[選択] ボタンから変換元スキーマのファイルを指定できます。

[選択] ボタン

変換元スキーマのファイルを選択するダイアログが表示されます。

[変換先スキーマ]

変換先スキーマのファイルパスを指定します。[選択] ボタンから変換先スキーマのファイルを指定できます。

[選択] ボタン

変換先スキーマのファイルを選択するダイアログが表示されます。

[OK] ボタン

設定した内容を検証したあと、設定を保存して、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(b) N対1のデータ変換の場合

[変換元スキーマ]

[ファイルパス]

以前指定した変換元スキーマのファイルパスが表示されます。

[スキーマ論理名]

以前指定した変換元スキーマのスキーマ論理名が表示されます。

[編集] ボタン

変換元スキーマが選択されている状態でクリックすると、[変換元スキーマファイル設定] ダイアログが表示され、変換元スキーマファイルとスキーマ論理名を変更できます。[変換元スキーマファイル設定] ダイアログについては、「[1.6.1 変換元スキーマファイル設定ダイアログ](#)」を参照してください。

[変換先スキーマ]

変換先スキーマのファイルパスを指定します。[選択] ボタンから変換先スキーマのファイルを指定できます。

[選択] ボタン

変換先スキーマのファイルを選択するダイアログが表示されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[変換元・変換先スキーマファイル設定] ダイアログでは、変換元スキーマのファイルと変換先スキーマのファイルを指定できます。データ変換の定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.3.1 データ変換の定義手順」を参照してください。

1.6.3 ルート要素選択ダイアログ

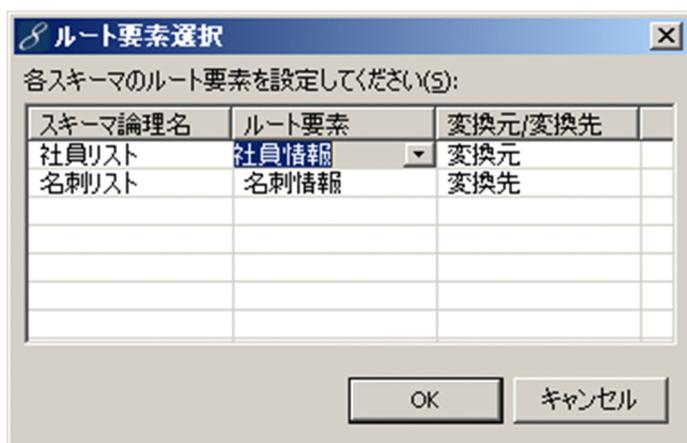
[ルート要素選択] ダイアログでは、マッピングするスキーマ論理名のルート要素を選択します。

次のどれかの操作をした場合に表示されます。

- サービスアダプタ定義画面またはビジネスプロセス定義画面のデータ変換アクティビティから、データ変換定義画面を表示する（新規にデータ変換を定義する場合）
- スキーマ（電文フォーマット）のルート要素を変更または削除してからデータ変換定義画面を表示する
- 変換元スキーマツリービューアまたは変換先スキーマツリービューアのスキーマ論理名を右クリックし、[ルート要素選択] を選択する

[ルート要素選択] ダイアログを次に示します。

図 1-114 [ルート要素選択] ダイアログ



(1) 表示項目

[スキーマ論理名]

マッピング対象となる XML スキーマファイルのスキーマ論理名が表示されます。

[ルート要素]

ルート要素をドロップダウンリストから選択します。選択したルート要素のスキーマがデータ変換定義画面でツリー表示されます。

[変換元/変換先]

マッピング対象となる XML スキーマファイルが、変換元 XML スキーマファイルの場合は「変換元」、変換先 XML スキーマファイルの場合は「変換先」と表示されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。ただし、次の場合にクリックするとエラーになります。

- ルート要素を初めて選択する場合
- 電文フォーマットを変更してデータ変換を定義し直す場合

(2) このダイアログでできる内容

[ルート要素選択] ダイアログでは、ルート要素を選択および変更することができます。選択および変更すると、ルート要素のスキーマがデータ変換定義画面でツリー表示されます。ルート要素の選択および変更方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.3.1 データ変換の定義手順」を参照してください。

1.6.4 マッピング元設定ダイアログ

[マッピング元設定] ダイアログでは、マッピング元となる変換元ノードおよびファンクションを指定します。

[マッピング元設定] ダイアログは、変換先ノードを右クリックして、[マッピング元] を選択した場合に表示されます。

[マッピング元設定] ダイアログを次に示します。

図 1-115 [マッピング元設定] ダイアログ



(1) 表示項目

[パス/ファンクション名]

マッピング元となる変換先ノードおよびファンクションを指定します。すでにマッピングされている場合、そのマッピング元が表示されます。

[パス/ファンクション名] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[依存対象]

繰り返しファンクションを使用した場合、[パス/ファンクション名] で指定した繰り返しファンクションに対応する繰り返し依存対象が表示されます。繰り返し依存対象の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.6 繰り返しの設定」を参照してください。

[ノード追加] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[パス/ファンクション名] にマッピング元となる変換元ノードを追加する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせるときにクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション追加] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[パス/ファンクション名] にマッピング元となるファンクションを追加する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[除去] ボタン

[パス/ファンクション名] で選択した変換元ノードまたはファンクションが [パス/ファンクション名] から削除されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[マッピング元設定] ダイアログでは、次のことができます。

- マッピングする

[マッピング元設定] ダイアログを使用したマッピング方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4 マッピングする」を参照してください。

- 繰り返し依存対象を確認する

繰り返し依存対象の確認方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.6.4 繰り返し依存対象を確認する」を参照してください。

- 繰り返し依存対象を変更する

繰り返し依存対象の変更方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.6.5 繰り返し依存対象を変更する」を参照してください。

1.6.5 自動マッピング元設定ダイアログ

[自動マッピング元設定] ダイアログでは、自動でマッピングさせる変換元ノードの範囲と変換先ノードの範囲を指定します。

[自動マッピング元設定] ダイアログは、変換先ノードの要素（自動でマッピングさせたい範囲の最上位要素）を右クリックして、[自動マッピング] を選択した場合に表示されます。

[自動マッピング元設定] ダイアログを次に示します。

図 1-116 [自動マッピング元設定] ダイアログ



(1) 表示項目

[パス]

[ノード追加] ボタンで選択したマッピング対象の要素が表示されます。

[自動マッピング元設定] ダイアログを閉じると [パス] に表示されている内容はリセットされ、再び [自動マッピング元設定] ダイアログを表示したときには [パス] には何も選択されていない状態になります。

[ノード追加] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[パス] にマッピング元となる変換元ノードの要素を追加する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[除去] ボタン

[パス] で選択した要素が [パス] から削除されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[自動マッピング元設定] ダイアログでは、変換元ノードの範囲と変換先ノードの範囲を指定すると、変換元ノードと変換先ノードで類似度が高い要素同士を自動でマッピングします。範囲内にマッピング候補が存在しない場合やすでに変換先ノードアダプタにマッピング線が接続されている場合は、マッピングされません。

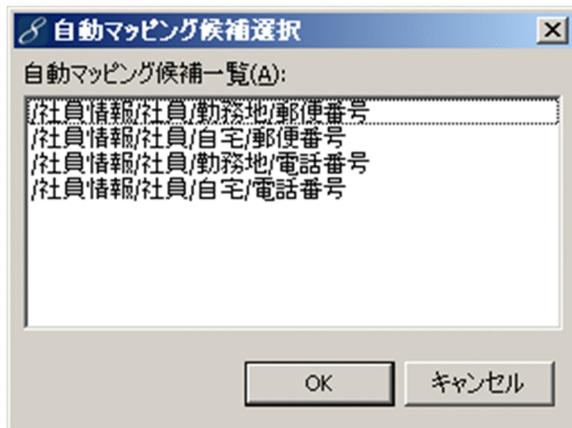
1.6.6 自動マッピング候補選択ダイアログ

[自動マッピング候補選択] ダイアログでは、自動でマッピングさせる要素の候補を指定します。

[自動マッピング候補選択] ダイアログは、変換先ノードの要素を右クリックして、[自動マッピング候補選択] を選択した場合に表示されます。

[自動マッピング候補選択] ダイアログを次に示します。

図 1-117 [自動マッピング候補選択] ダイアログ



(1) 表示項目

[自動マッピング候補一覧]

選択した変換先ノードの要素に対して、マッピングの候補となる変換元ノードの要素が一覧で表示されます。表示順序は優先度が高い候補ほど上位になります。

自動でマッピングする候補が存在しない場合、[自動マッピング候補一覧] には何も表示されません。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[自動マッピング候補選択] ダイアログでは、変換元ノードの要素の候補を指定すると、選択した候補の要素がマッピングされ、マッピング線（代入線）が自動で設定されます。また、選択した要素のノードアダプタにマッピング線が接続済みの場合でも、同一の要素で依存関係が異なるマッピング線を接続できるときは、指定した候補とのマッピングが実行されます。

1.6.7 くり返し設定ダイアログ

[くり返し設定] ダイアログでは、マッピング元となるくり返しファンクションを指定します。[くり返し設定] ダイアログを次に示します。

[くり返し設定] ダイアログは、くり返しファンクションを使用した場合、変換先ノードを右クリックして、[くり返し] を選択したときに表示されます。

[くり返し設定] ダイアログを次に示します。

図 1-118 [くり返し設定] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

マッピング元となるくり返しファンクションを指定します。くり返しファンクション名が表示されます。

[依存対象]

[ファンクション名] で指定したくり返しファンクションに対応するくり返し依存対象が表示されます。くり返し依存対象の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.6 くり返しの設定」を参照してください。

[ファンクション追加] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[ファンクション名] にマッピング元となるくり返しファンクションを追加する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[上へ] ボタン

[ファンクション名] で選択したくり返しファンクションの位置が1つ上に移動します。このボタンは、くり返しを合成する場合に使用することがあります。

[下へ] ボタン

[ファンクション名] で選択したくり返しファンクションの位置が1つ下に移動します。このボタンは、くり返しを合成する場合に使用することがあります。

[除去] ボタン

[ファンクション名] で選択したくり返しファンクションが [ファンクション名] から削除されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[くり返し設定] ダイアログでは、次のことができます。

- マッピングする
- くり返しを合成する
- くり返し依存対象を確認する
- くり返し依存対象を変更する

上記の方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.6 くり返しの設定」を参照してください。

1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)

[ノード選択] ダイアログ (データ変換) では、変換元ノード、または変換先ノードを指定します。

次のどれかの操作をした場合に、変換元ノードを指定する [ノード選択] ダイアログ (データ変換) が表示されます。

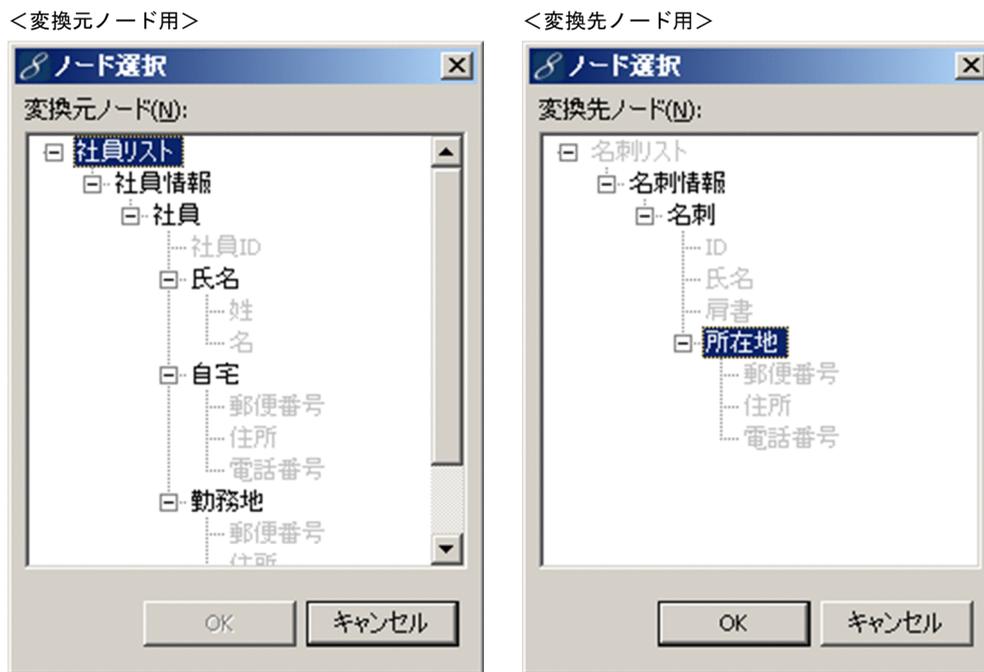
- [マッピング元設定] ダイアログの [ノード追加] ボタンをクリックする
- 各ファンクションの設定ダイアログの [ノード追加] ボタンまたは [ノード選択] ボタンをクリックする
- [自動マッピング元設定] ダイアログの [ノード追加] ボタンをクリックする
- [複製マッピング元設定] ダイアログの [ノード追加] ボタンをクリックする
- [複製マッピング範囲設定] ダイアログの [変換元ノード] の [ノード選択] ボタンをクリックする

次の操作をした場合に、変換先ノードを指定する [ノード選択] ダイアログ (データ変換) が表示されます。

- [複製マッピング範囲設定] ダイアログの [変換先ノード] の [ノード選択] ボタンをクリックする

[ノード選択] ダイアログ (データ変換) を次に示します。

図 1-119 [ノード選択] ダイアログ (データ変換)



(1) 表示項目

[変換元ノード]

マッピング定義の変換元ノードが表示されます。

起動元ダイアログの項目へ設定できないノードは、グレーで表示されます。グレーで表示されたノードを選択した場合、[OK] ボタンはクリックできません。

[変換先ノード]

マッピング定義の変換先ノードが表示されます。

起動元ダイアログの項目へ設定できないノードは、グレーで表示されます。グレーで表示されたノードを選択した場合、[OK] ボタンはクリックできません。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[ノード選択] ダイアログ (データ変換) では、次のことができます。

- マッピング元となる変換元ノードを指定する

[マッピング元設定] ダイアログまたは各ファンクションの設定ダイアログから表示した場合、マッピング元となる変換元ノードを指定して、[マッピング元設定] ダイアログまたは各ファンクションの設定ダイアログに変換元ノードを設定します。

- 自動マッピングでマッピング元となる変換元ノードを指定する
[自動マッピング元設定] ダイアログから表示した場合、自動でマッピングさせたい変換元ノードの要素を指定して、[自動マッピング元設定] ダイアログのパスに変換元ノードの要素を設定します。
- 構造一致の複製マッピングでコピー先となる変換元ノードを指定する
[複製マッピング元設定] ダイアログから表示した場合、コピー先となる変換元ノードを指定して、[複製マッピング元設定] ダイアログに変換元ノードを設定します。
- 要素名一致の複製マッピングでコピー元またはコピー先となる変換元ノードを指定する
[複製マッピング範囲設定] ダイアログの [変換元ノード] から表示した場合、マッピング定義のコピー元またはコピー先となる変換元ノードを指定して、[複製マッピング範囲設定] ダイアログに変換元ノードを設定します。
- 要素名一致の複製マッピングでコピー元またはコピー先となる変換先ノードを指定する
[複製マッピング範囲設定] ダイアログの [変換先ノード] から表示した場合、マッピング定義のコピー元またはコピー先となる変換先ノードを指定して、[複製マッピング範囲設定] ダイアログに変換先ノードを設定します。

1.6.9 ファンクション選択ダイアログ

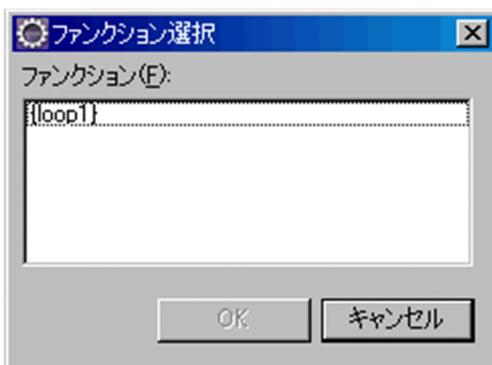
[ファンクション選択] ダイアログは、マッピング元となるファンクションを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- [マッピング元設定] ダイアログの [ファンクション追加] ボタンをクリックする
- 各ファンクションの設定ダイアログの [ファンクション追加] ボタンまたは [ファンクション選択] ボタンをクリックする

[ファンクション選択] ダイアログを次に示します。

図 1-120 [ファンクション選択] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション]

マッピング元として選択できるファンクションが表示されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[ファンクション選択] ダイアログでは、マッピング元となるファンクションを指定して、[マッピング元設定] ダイアログまたは各ファンクションの設定ダイアログに指定したファンクションを設定します。

1.6.10 名称検索ダイアログ

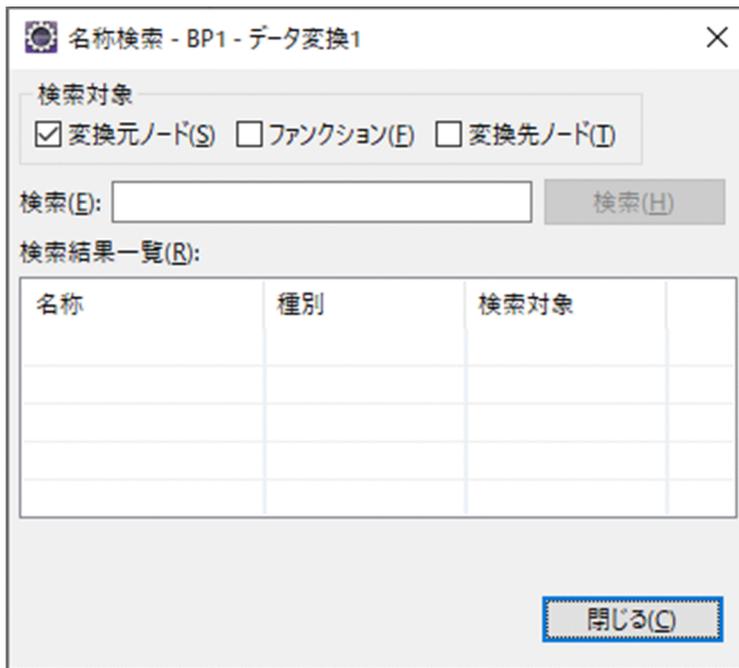
[名称検索] ダイアログでは、要素名またはファンクション名を部分一致で検索して、検索結果のパスを一覧表示します。

ダイアログを表示したまま、画面上のマッピング定義を編集することもできます。なお、ダイアログが表示された状態で画面上のファンクション名を変更した場合、動作は保証しません。

[名称検索] ダイアログは、データ変換定義画面のツリービューアまたはマッピングビューアの適当な場所で右クリックして、[名称検索] を選択した場合に表示されます。

[名称検索] ダイアログを次に示します。

図 1-121 [名称検索] ダイアログ



(1) 表示項目

[検索対象]

検索対象として、[変換元ノード]、[ファンクション] または [変換先ノード] チェックボックスを選択します。チェックボックスを複数選択することもできます。

[検索]

検索文字列を指定します。指定後に [検索] ボタンをクリックすると、検索文字列を含むノードまたはファンクションを部分一致で検索できます。

ノードを検索する場合、ノードのパス全体ではなく、パス末端の要素名だけが検索対象となります。検索対象となるノードの種別は次のとおりです。

- 論理名
- 複合内容要素
- 単純内容要素
- 属性
- any 要素
- anyAttribute 属性
- #(sequence)
- #(choice)
- #anonymous

検索に関しては次の点に注意してください。

- 検索文字列の大文字と小文字は区別されません。
- 正規表現での検索はできません。

検索結果は、[検索結果一覧]に一覧表示されます。

[検索] ボタン

[検索] に指定した検索文字列を含む、ノードまたはファンクションを部分一致で検索できます。検索結果は [検索結果一覧] に表示されます。

[検索結果一覧]

検索結果が一覧表示されます。

[名称]

検索結果が画面上の表示順に従って一覧表示されます。表示された検索結果を選択すると、表示元のデータ変換定義画面の該当箇所も選択されます。

検索対象	[名称] の表示内容	検索結果の選択時に、表示元の画面で選択される箇所
変換元ノード	検索結果のノードのパス	変換元スキーマツリービューア上の該当するノード
ファンクション	検索結果のファンクション名	該当するファンクション
変換先ノード	検索結果のノードのパス	変換先スキーマツリービューア上の該当するノード

なお、検索対象が「変換元ノード」または「変換先ノード」の場合、表示されたパスは次の手順でクリップボードへコピーできます。N 対 1 変換時は、「\$<スキーマの論理名 (ビジネスプロセスの変数名) >」を含むパスがコピーされます。

1. コピーしたいパスを選択して右クリックする
2. コンテキストメニューで [要素パスのコピー] を選択する

スキーマの論理名の場合は、右クリックしても [要素パスのコピー] は表示されません。

[種別]

検索結果の種別を表示します。

検索対象が「変換元ノード」または「変換先ノード」の場合は、次の内容が表示されます。

ノードの種別	[種別] に出力される内容
論理名	論理名
複合内容要素	複合内容要素
単純内容要素	単純内容要素
属性	属性
any 要素	any
anyAttribute 属性	anyAttribute
#(sequence)	#(sequence)
#(choice)	#(choice)

ノードの種別	[種別] に出力される内容
#anonymous	#anonymous

検索対象が「ファンクション」の場合は、次の内容が表示されます。

ファンクションの種別	[種別] に出力される内容
文字列連結ファンクション	concat
部分文字列取得ファンクション	substr
文字数取得ファンクション	length
文字列調査ファンクション	contain
空白除去ファンクション	trim
数値フォーマット変換ファンクション	format
数値演算ファンクション	calc
端数処理ファンクション	round
総和ファンクション	sum
否定演算ファンクション	not
論理演算ファンクション	bitop
シフト演算ファンクション	shift
ノード名取得ファンクション	name
ノード数取得ファンクション	count
ノード調査ファンクション	exist
くり返しファンクション	loop
選択ファンクション	choose
値置換えファンクション	replace
基数変換ファンクション	radix
カスタムファンクション	custom
定数ファンクション	const
XPath ファンクション	xpath

【検索対象】

検索時に [検索対象] で選択した項目（「変換元ノード」、「ファンクション」、または「変換先ノード」）を表示します。

【検索要素数】

検索結果の個数が表示されます。

なお、この項目は、[検索] ボタンをクリックして検索を実行したあとに、[検索結果一覧] の下に表示されます。

[閉じる] ボタン

[名称検索] ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[名称検索] ダイアログでは、要素名またはファンクション名を部分一致で検索できます。変換元ノード、変換先ノード、またはファンクションの数が多い場合に、使用したいノードまたはファンクションを簡単に探し出せます。

1.6.11 ノード条件設定ダイアログ

[ノード条件設定] ダイアログでは、ノード条件を設定する変換元ノードを指定し、条件を設定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- [マッピング元設定] ダイアログの [ノード条件設定] ボタンをクリックする
- 各ファンクションの設定ダイアログの [ノード条件設定] ボタンをクリックする

[ノード条件設定] ダイアログを次に示します。

図 1-122 [ノード条件設定] ダイアログ



(1) 表示項目

[ノード]

[マッピング元設定] ダイアログまたは各ファンクションを設定するダイアログで選択したノードおよびその子孫ノードが表示されます。

[条件]

[条件設定] ダイアログで設定した条件が表示されます。

[条件設定] ボタン

[条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定する場合にクリックします。

[条件設定] ダイアログについては、「[1.6.12 条件設定ダイアログ \(ノード条件の設定\)](#)」を参照してください。

[条件削除] ボタン

[条件] で選択した条件を [条件] から削除します。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[ノード条件設定] ダイアログでは、ノード条件を設定する変換元ノードを指定して、ノード条件を設定します。条件を設定した変換元ノードは、その条件を満たす場合だけマッピングします。変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「[サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編](#)」の「[7.7 ノード条件を設定する](#)」を参照してください。

1.6.12 条件設定ダイアログ (ノード条件の設定)

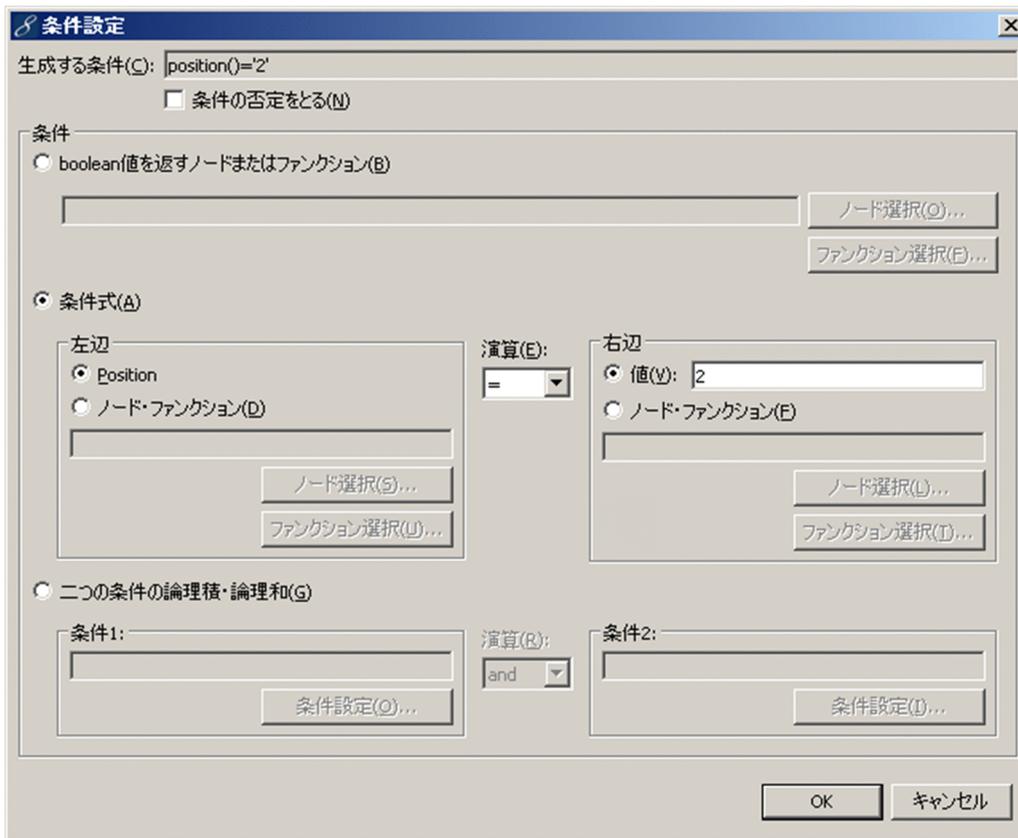
[条件設定] ダイアログでは、条件の内容を決めます。

次のどれかの操作をした場合に表示されます。

- [ノード条件設定] ダイアログの [条件設定] ボタンをクリックする
- [条件追加/編集] ダイアログの [条件設定] ボタンをクリックする
- [条件設定] ダイアログの [条件設定] ボタンをクリックする

[条件設定] ダイアログを次に示します。

図 1-123 [条件設定] ダイアログ (ノード条件の設定)



(1) 表示項目

[生成する条件]

[条件] で設定した条件が表示されます。

[条件の否定をとる] チェックボックスにチェックした場合、条件の先頭に「not」が表示されます。

[条件の否定をとる] チェックボックス

[条件] で設定した条件と反対の内容を条件とする場合にチェックします。

[条件]

[boolean 値を返すノードまたはファンクション] ラジオボタン

論理値を条件として設定する場合に選択します。

[ノード選択] ボタンまたは [ファンクション選択] ボタンで指定したマッピング元の値によって、次の論理値が設定されます。

- マッピング元の値が「true」、または「0」、「-0」、もしくは「NaN」以外の数値の場合
真が条件として設定されます。
- マッピング元の値が「true」以外の文字列、または「0」、「-0」、もしくは「NaN」の数値の場合
偽が条件として設定されます。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。マッピング元に変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「[1.6.8 ノード選択ダイアログ \(データ変換\)](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。マッピング元ファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[条件式] ラジオボタン

指定した条件式を条件として設定する場合に選択します。

[左辺]

[Position] ラジオボタン

マッピング元のインスタンスの出現する順番を条件として設定する場合に選択します。

例えば、「Position=2」（このラジオボタンを選択し、右辺の値に「2」を指定）と指定した場合、2番目に表示するインスタンスを条件として設定します。

[ノード・ファンクション] ラジオボタン

変換元ノードまたはファンクションの値を条件として設定する場合に選択します。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。条件式の左辺に変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「[1.6.8 ノード選択ダイアログ \(データ変換\)](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。条件式の左辺にファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[演算] ドロップダウンリスト

条件式に設定する演算子が表示されます。表示される演算子を次に示します。

- =
- !=
- >
- <
- >=

- <=

[右辺]

[値] ラジオボタン

ユーザが指定した値を条件として設定する場合に選択します。指定できる文字数は、1,024 文字までです。

[ノード・ファンクション] ラジオボタン

変換元ノードまたはファンクションの値を条件として設定する場合に選択します。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。条件式の右辺に変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「[1.6.8 ノード選択ダイアログ \(データ変換\)](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。条件式の右辺にファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[二つの条件の論理積・論理和] ラジオボタン

2つの条件を設定して、その条件の論理積または論理和を条件に設定する場合に選択します。条件に複数の「二つの条件の論理積・論理和」が存在する場合は、論理積が優先されます。ただし、前後を丸括弧「()」で囲んだ場合は、その論理式が優先されます。

[条件 1]

1つ目の条件が表示されます。

[条件設定] ボタン

[条件設定] ダイアログが表示されます。1つ目の条件を設定する場合にクリックします。

[演算] ドロップダウンリスト

and (論理積) または or (論理和) が表示されます。

[条件 2]

2つ目の条件が表示されます。

[条件設定] ボタン

[条件設定] ダイアログが表示されます。2つ目の条件を設定する場合にクリックします。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[条件設定] ダイアログでは、次のことができます。

- ノード条件を設定する
ノード条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。
- 選択ファンクションの条件を設定する
選択ファンクションの条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.13 マッピング定義登録ダイアログ

[マッピング定義登録] ダイアログでは、マッピング定義をコピーするときのコピー元として登録するマッピング定義ファイル（拡張子：.mdo）を指定します。

[マッピング定義登録] ダイアログは、データ変換定義画面の変換元スキーマツリービューア、マッピングビューア、または変換先スキーマツリービューアの適当な場所で右クリックして、[マッピング定義登録]を選択した場合に表示されます。

[マッピング定義登録] ダイアログを次に示します。

図 1-124 [マッピング定義登録] ダイアログ



(1) 表示項目

[マッピング定義ファイル]

コピー元となるマッピング定義ファイルを指定します。すでにマッピング定義ファイルが登録されている場合、登録されているマッピング定義ファイルが表示されます。

[選択] ボタン

ファイルを選択するダイアログが表示されます。ファイルを選択するダイアログに最初に表示されるディレクトリは、[設定] ダイアログで任意の場所に設定できます。[設定] ダイアログについては、「1.6.18 設定ダイアログ (データ変換の設定)」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[マッピング定義登録] ダイアログでは、マッピング定義をコピーするときのコピー元として登録するマッピング定義ファイル（拡張子：.mdo）を設定できます。マッピング定義のコピーについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.8.4 マッピング定義のコピー」を参照してください。

1.6.14 複製マッピング範囲設定ダイアログ

[複製マッピング範囲設定] ダイアログでは、マッピング定義をコピーするときコピー元およびコピー先となるノード（変換元ノードおよび変換先ノード）を指定します。

[複製マッピング範囲設定] ダイアログは、データ変換定義画面の変換先スキーマツリービューアで複合内容要素を右クリックし、[複製マッピング] から「要素名一致」を選択した場合に表示されます。

[複製マッピング範囲設定] ダイアログを次に示します。

図 1-125 [複製マッピング範囲設定] ダイアログ



(1) 表示項目

[複製マッピング元]

[変換元ノード]

複製マッピング元の変換元ノードを指定します。

変換元ノードを変更する場合は右側の [ノード選択] ボタンをクリックし、表示された [ノード選択] ダイアログで指定します。[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[変換先ノード]

複製マッピング元の変換先ノードを指定します。

変換先ノードを変更する場合は右側の [ノード選択] ボタンをクリックし、表示された [ノード選択] ダイアログで指定します。[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[複製マッピング先]

[変換元ノード]

複製マッピング先の変換元ノードを指定します。

変換元ノードを変更する場合は右側の [ノード選択] ボタンをクリックし、表示された [ノード選択] ダイアログで指定します。[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[変換先ノード]

複製マッピング先の変換先ノードを指定します。

変換先ノードを変更する場合は右側の [ノード選択] ボタンをクリックし、表示された [ノード選択] ダイアログで指定します。[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[複製マッピング範囲設定] ダイアログでは、マッピング定義のコピー元およびコピー先となるノードを設定できます。それぞれの項目に変換元ノードおよび変換先ノードを設定します。

マッピング定義のコピーについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.8.4 マッピング定義のコピー」を参照してください。

1.6.15 複製マッピング元設定ダイアログ

[複製マッピング元設定] ダイアログでは、マッピング定義をコピーするときにコピー先となるノード (変換元ノード) を指定します。

[複製マッピング元設定] ダイアログは、データ変換定義画面の変換先スキーマツリービューアで複合内容要素を右クリックし、[複製マッピング] から [構造一致] を選択した場合に表示されます。

[複製マッピング元設定] ダイアログを次に示します。

図 1-126 「複製マッピング元設定」ダイアログ



(1) 表示項目

[パス]

マッピング定義をコピーするときにコピー先となるノード（変換元ノード）を指定します。

[パス] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード追加] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[パス] にノード（変換元ノード）を追加する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ（データ変換）」を参照してください。

[除去] ボタン

[パス] で選択したノード（変換元ノード）が [パス] から削除されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

「複製マッピング元設定」ダイアログでは、マッピング定義をコピーするときにコピー先となるノード（変換元ノード）を設定できます。マッピング定義のコピーについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.8.4 マッピング定義のコピー」を参照してください。

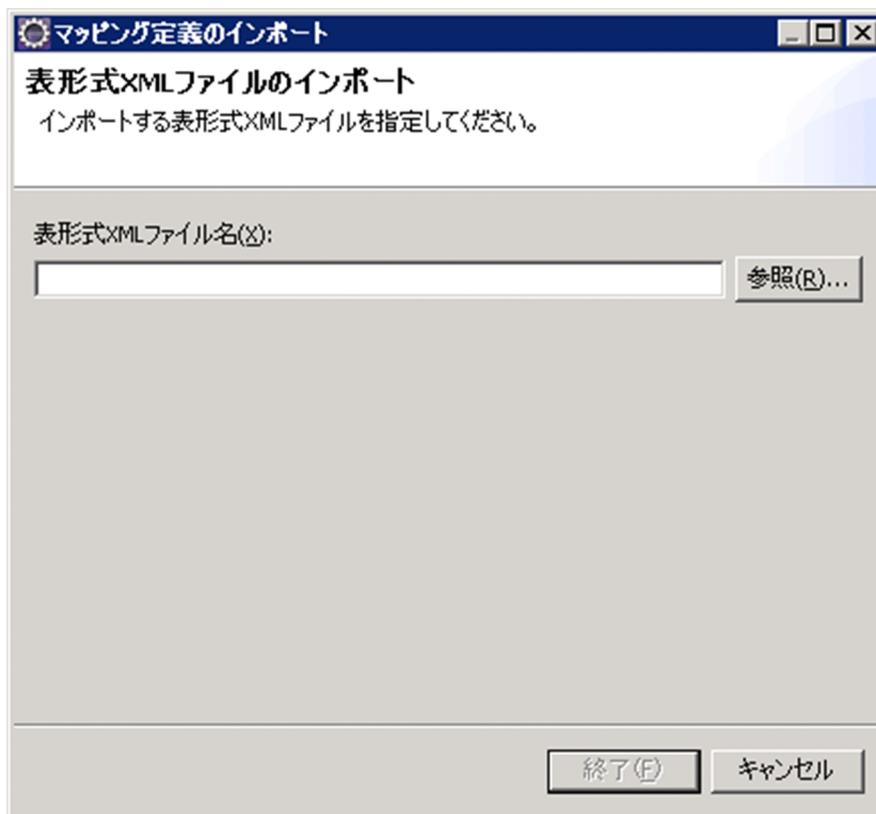
1.6.16 マッピング定義のインポートダイアログ

[マッピング定義のインポート] ダイアログは、Excel で定義したマッピング内容を表形式 XML ファイルでエクスポートしたあと、その定義内容をデータ変換定義画面へインポートするときに使用します。

[マッピング定義のインポート] ダイアログは、データ変換定義画面のマッピングビューア上で右クリックして、[マッピング定義のインポート] を選択した場合に表示されます。

[マッピング定義のインポート] ダイアログを次に示します。

図 1-127 [マッピング定義のインポート] ダイアログ



(1) 表示項目

[表形式 XML ファイル名]

インポートする表形式 XML ファイル名を指定します。

[参照] ボタン

表形式 XML ファイルを設定するダイアログが表示されます。

[終了] ボタン

[マッピング定義のインポート] ダイアログを閉じます。

Excel で定義したファンクションとマッピング線が、データ変換定義画面に反映されます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[マッピング定義のインポート] ダイアログでは、Excel で定義したマッピングをインポートできます。マッピング定義のインポートについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.13 Excel を利用したマッピング定義のインポート」を参照してください。

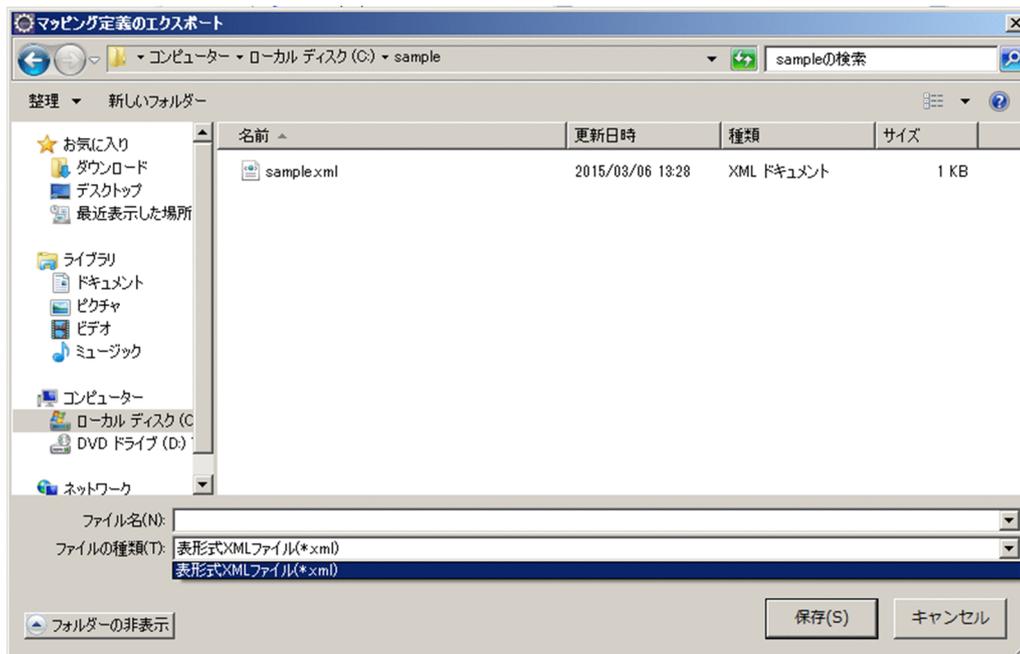
1.6.17 マッピング定義のエクスポートダイアログ

[マッピング定義のエクスポート] ダイアログは、マッピング定義エディタで定義したマッピング内容を、表形式 XML ファイルにエクスポートするときに表示されます。

[マッピング定義のエクスポート] ダイアログは、データ変換定義画面のマッピングビューア上で右クリックして、[マッピング定義のエクスポート] を選択した場合に表示されます。

[マッピング定義のエクスポート] ダイアログを次に示します。

図 1-128 [マッピング定義のエクスポート] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファイル名]

エクスポートする表形式 XML ファイル名を指定します。

[ファイルの種類]

表形式 XML ファイル (*.xml) を指定します。

[保存] ボタン

マッピング定義のエクスポートを開始するダイアログが表示されます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[マッピング定義のエクスポート] ダイアログでは、定義したマッピングを表形式 XML ファイルにエクスポートできます。Excel を利用したマッピング定義のエクスポートについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.14 Excel を利用したマッピング定義のエクスポート」を参照してください。

1.6.18 設定ダイアログ (データ変換の設定)

データ変換について設定する場合の、[設定] ダイアログの表示手順を次に示します。

1. Eclipse のメニューから、[ウィンドウ] - [設定] を選択します。

[設定] ダイアログが表示されます。

2. ダイアログ左側から [HCSC-Definer] - [データ変換] を選択します。

データ変換定義画面の設定項目がダイアログ右側に表示されます。

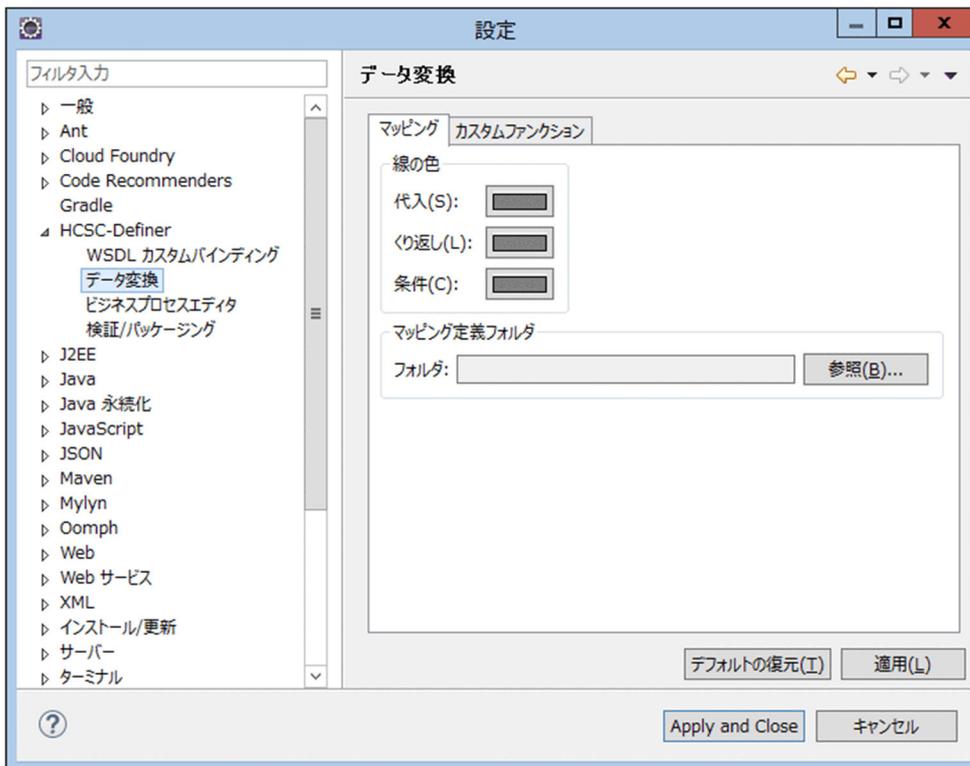
ダイアログ右側に表示されるマッピングタブとカスタムファンクションタブについて、次に説明します。

(1) 表示項目

(a) マッピングタブ

[設定] ダイアログのデータ変換のマッピングタブを次に示します。

図 1-129 [設定] ダイアログ (データ変換のマッピングタブ)



表示項目は次のとおりです。

[線の色]

[代入]

[代入] の右側にあるボタンをクリックすると、[色の設定] ダイアログが表示されます。

[くり返し]

[くり返し] の右側にあるボタンをクリックすると、[色の設定] ダイアログが表示されます。

[条件]

[条件] の右側にあるボタンをクリックすると、[色の設定] ダイアログが表示されます。

[マッピング定義フォルダ]

[フォルダ]

マッピング定義を保存するとき、およびマッピング定義を登録するとき最初に表示するフォルダを指定します。

[参照] ボタン

フォルダの選択画面が表示されます。

[デフォルトの復元] ボタン

データ変換をデフォルトの設定に戻します。データ変換のデフォルトの設定は次のとおりです。

- マッピング線の色：グレー
- マッピング定義フォルダ：空欄

- 変換ファンクション定義ファイル：空欄

変換ファンクション定義ファイルについては、「(b) カスタムファンクションタブ」を参照してください。

[適用] ボタン

設定した内容を有効にします。ダイアログは閉じません。

[Apply and Close] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

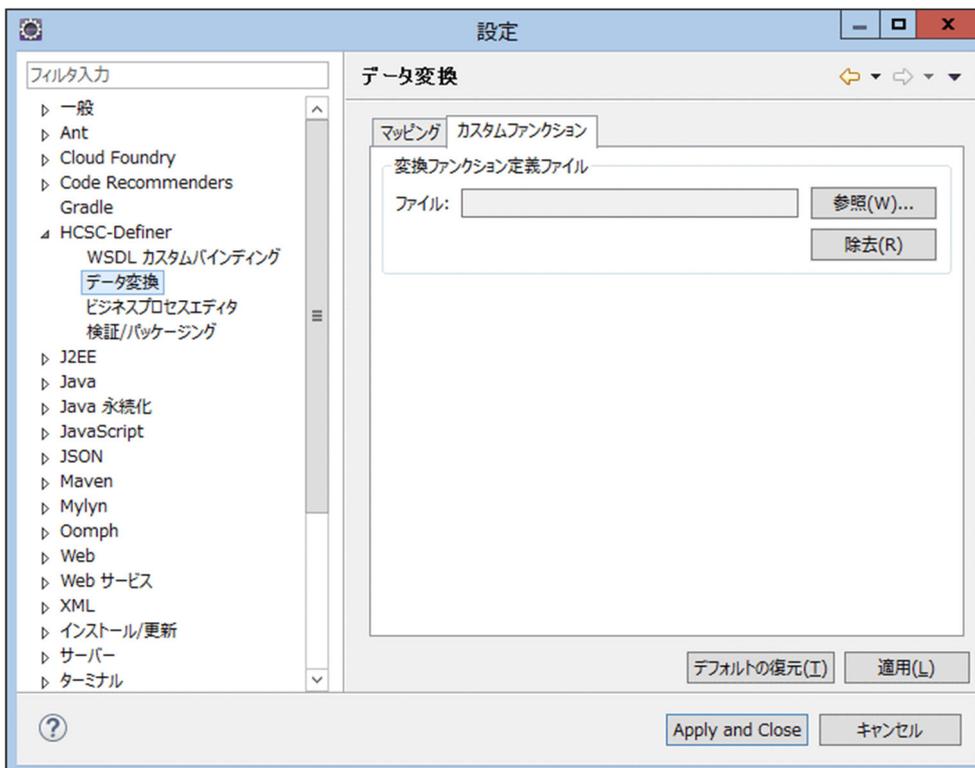
[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(b) カスタムファンクションタブ

[設定] ダイアログのデータ変換のカスタムファンクションタブを次に示します。

図 1-130 [設定] ダイアログ (データ変換のカスタムファンクションタブ)



表示項目は次のとおりです。

[変換ファンクション定義ファイル]

[ファイル]

カスタムファンクションの定義で使用する変換ファンクション定義ファイルを指定します。

[参照] ボタン

ファイルの選択画面が表示されます。

[除去] ボタン

[ファイル] に指定した変換ファンクション定義ファイルが [ファイル] から削除されます。

[デフォルトの復元] ボタン

データ変換をデフォルトの設定に戻します。データ変換のデフォルトの設定は次のとおりです。

- マッピング線の色：グレー
- マッピング定義フォルダ：空欄
- 変換ファンクション定義ファイル：空欄

マッピング線の色、およびマッピング定義フォルダについては、「(a) マッピングタブ」を参照してください。

[適用] ボタン

設定した内容を有効にします。ダイアログは閉じません。

[Apply and Close] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[設定] ダイアログでは次のことができます。

- マッピングタブの場合
 - マッピング線の色を変更できます。詳細については、「[1.13.5 マッピング線の色を変更する](#)」を参照してください。
 - [マッピング定義登録] ダイアログおよび [マッピング定義保存] ダイアログで最初に参照するディレクトリを設定できます。[マッピング定義登録] ダイアログについては、「[1.6.13 マッピング定義登録ダイアログ](#)」を参照してください。
- カスタムファンクションタブの場合

カスタムファンクションを定義するときに必要となる変換ファンクション定義ファイルを登録できます。カスタムファンクションの定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工](#)」を参照してください。

1.6.19 文字列連結ダイアログ

[文字列連結] ダイアログでは、連結対象となる文字列を指定します。

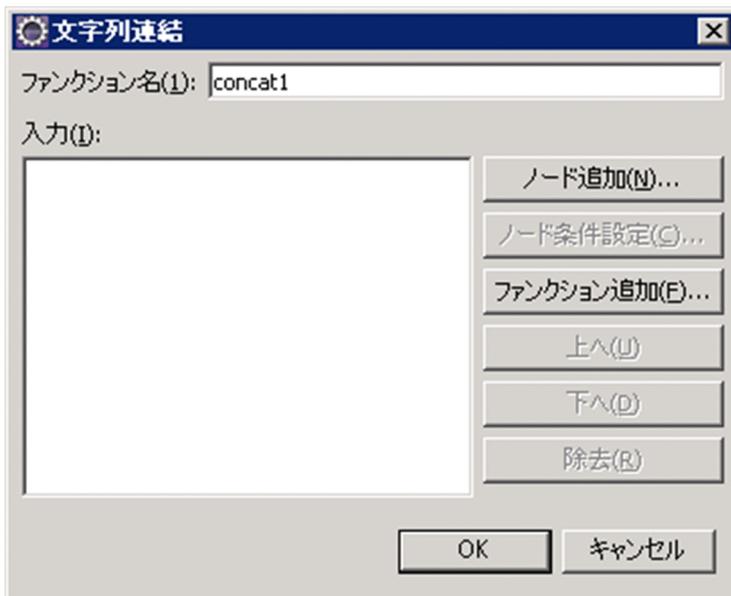
次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 文字列連結ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する

- 文字列連結ファンクションをダブルクリックする

[文字列連結] ダイアログを次に示します。

図 1-131 [文字列連結] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

連結対象となる文字列の変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに連結対象と文字列連結ファンクションがマッピングされている場合、その連結対象が表示されます。

[入力] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード追加] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力] に連結対象となる文字列の変換元ノードを追加する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

【ファンクション追加】 ボタン

【ファンクション選択】 ダイアログが表示されます。【入力】 に連結対象となる文字列のファンクションを追加する場合にクリックします。

【ファンクション選択】 ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

【上へ】 ボタン

【入力】 で選択した変換元ノードまたはファンクションの位置が1つ上に移動します。

【下へ】 ボタン

【入力】 で選択した変換元ノードまたはファンクションの位置が1つ下に移動します。

【除去】 ボタン

【入力】 で選択した変換元ノードまたはファンクションが【入力】 から削除されます。

【OK】 ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

【キャンセル】 ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

【文字列連結】 ダイアログでは、文字列連結ファンクションを設定できます。部分文字列取得ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工](#)」を参照してください。

1.6.20 部分文字列取得ダイアログ

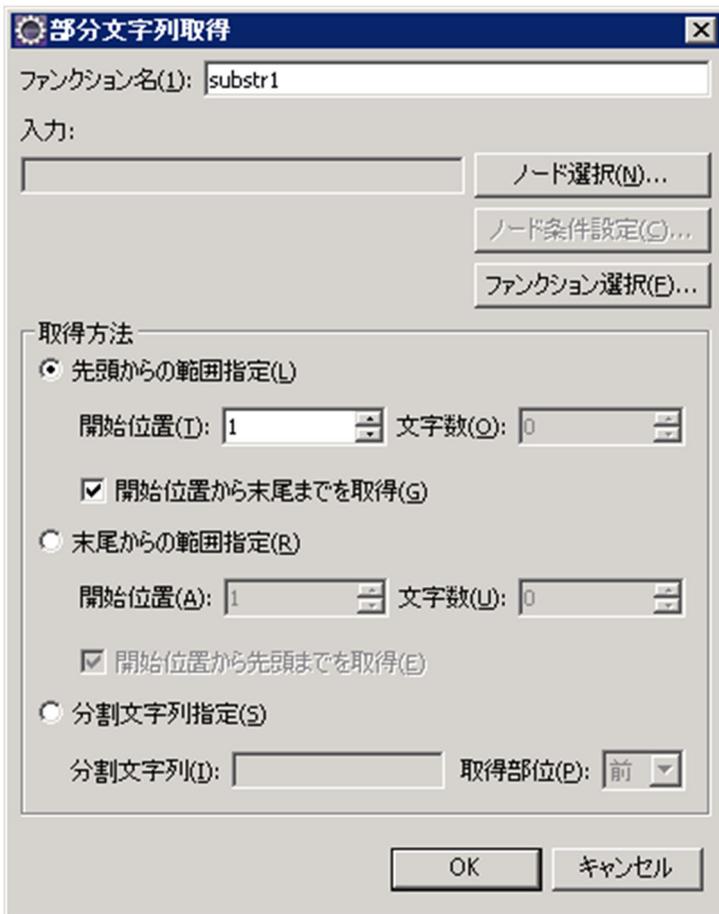
【部分文字列取得】 ダイアログでは、1つの文字列から取り出す一部分の文字列を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 部分文字列取得ファンクションを右クリックし、【設定】を選択する
- 部分文字列取得ファンクションをダブルクリックする

【部分文字列取得】 ダイアログを次に示します。

図 1-132 「部分文字列取得」 ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

一部分の文字列の取り出し元となる変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに取り出し元と部分文字列取得がマッピングされている場合、その取り出し元が表示されます。

[入力]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力]に一部分の文字列の取り出し元となる変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「[1.6.11 ノード条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム開発ガイド 基本開発編」の「[7.7 ノード条件を設定する](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力] に一部分の文字列の取り出し元となるファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[取得方法]

[先頭からの範囲指定] ラジオボタン

取り出す範囲を文字列の先頭から指定する場合に選択します。

[開始位置]

取り出す文字列の開始文字の位置を指定します。

[文字数]

取り出す文字列の文字数を指定します。指定できる文字数は 0 から 2,147,483,647 までです。

[開始位置から末尾までを取得] チェックボックス

[開始位置] で指定した開始文字の位置から末尾までの文字列を取り出したい場合にチェックします。

[末尾からの範囲指定] ラジオボタン

取り出す範囲を文字列の末尾から指定する場合に選択します。

[開始位置]

取り出す文字列の開始文字の位置を指定します。

[文字数]

取り出す文字列の文字数を指定します。指定できる文字数は 0 から 2,147,483,647 までです。

[開始位置から先頭までを取得] チェックボックス

[開始位置] で指定した開始文字の位置から先頭までの文字列を取り出したい場合にチェックします。

[分割文字列指定] ラジオボタン

文字列を 2 つに分割して、分割した前の部分かあとの部分かのどちらかを指定する場合に選択します。分割文字列が複数検索される文字列の場合は、先頭から検索して最初に出現した分割文字列の位置で分割されます。また、分割文字列が検索されない場合は空文字となります。

[分割文字列]

マッピング元の文字列を分割する文字列を指定します。指定できる文字数は、1,024 文字までです。

[取得部位]

前または後が表示されます。

- 前
先頭の文字から [分割文字列] で指定した文字列より前の文字列を取得します。
- 後
[分割文字列] で指定した文字列以降の文字列を取得します。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[部分文字列取得] ダイアログでは、部分文字列取得ファンクションを設定できます。部分文字列取得ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.21 文字数取得ダイアログ

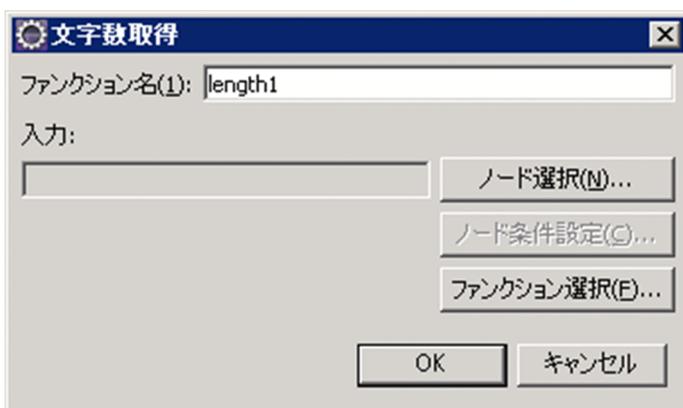
[文字数取得] ダイアログでは、文字数を取得したい文字列を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 文字数取得ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 文字数取得ファンクションをダブルクリックする

[文字数取得] ダイアログを次に示します。

図 1-133 [文字数取得] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

文字数を取得したい文字列の変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに文字数の取得対象と文字数取得ファンクションがマッピングされている場合、その文字数の取得対象が表示されます。

[入力]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択]ダイアログが表示されます。[入力]に文字数を取得したい文字列の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択]ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定]ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定]ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択]ダイアログが表示されます。[入力]に文字数を取得したい文字列のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択]ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[文字数取得]ダイアログでは、文字数取得ファンクションを設定できます。文字数取得ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.22 文字列調査ダイアログ

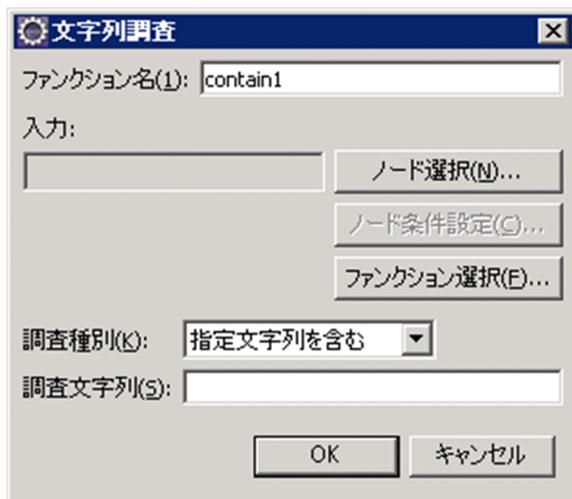
[文字列調査] ダイアログでは、特定の文字列を含むか、特定の文字列で開始するかを調査方法として選択し、その調査対象となる文字列を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 文字列調査ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 文字列調査ファンクションをダブルクリックする

[文字列調査] ダイアログを次に示します。

図 1-134 [文字列調査] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[入力]

調査対象となる文字列の変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに調査対象と文字列調査ファンクションがマッピングされている場合、その調査対象が表示されます。

[入力] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力] に調査対象となる文字列の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「[1.6.11 ノード条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム開発ガイド 基本開発編」の「[7.7 ノード条件を設定する](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力] に調査対象となる文字列のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[調査種別]

[調査文字列] で指定した文字列に対する調査種別が表示されます。表示される調査種別を次に示します。

- 指定文字列を含む
- 指定文字列から開始

[調査文字列]

調査対象となる文字列を指定します。指定できる文字数は、1,024 文字までです。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[文字列調査] ダイアログでは、文字列調査ファンクションを設定できます。文字列調査ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工](#)」を参照してください。

1.6.23 空白除去ダイアログ

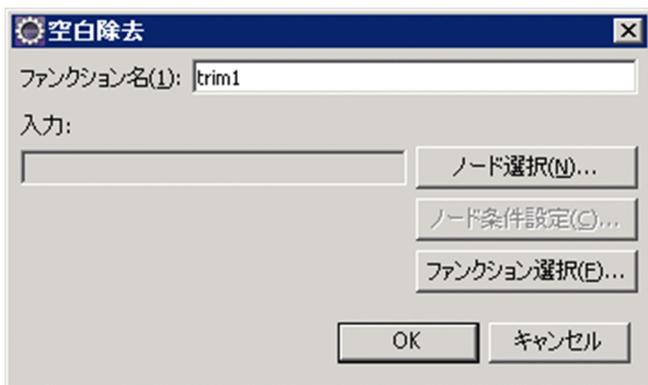
[空白除去] ダイアログでは、空白の除去対象となる文字列を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 空白除去ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 空白除去ファンクションをダブルクリックする

[空白除去] ダイアログを次に示します。

図 1-135 [空白除去] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[入力]

空白の除去対象となる文字列の変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに空白の除去対象と空白除去ファンクションがマッピングされている場合、その空白の除去対象が表示されます。

[入力] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力] に空白の除去対象となる文字列の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力] に空白の除去対象となる文字列のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[空白除去] ダイアログでは、空白除去ファンクションを設定できます。空白除去ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.24 数値フォーマット変換ダイアログ

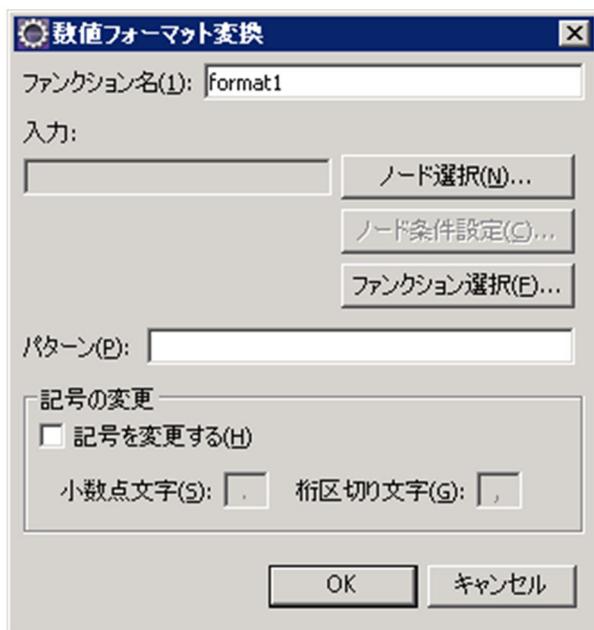
[数値フォーマット変換] ダイアログでは、変換後の `java.text.DecimalFormat` クラスの形式のパターン文字列を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 数値フォーマット変換ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 数値フォーマット変換ファンクションをダブルクリックする

[数値フォーマット変換] ダイアログを次に示します。

図 1-136 [数値フォーマット変換] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

変換対象となる数値の変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに変換対象と数値フォーマット変換ファンクションがマッピングされている場合、その変換対象が表示されます。

[入力]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択]ダイアログが表示されます。[入力]に変換対象となる数値の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択]ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定]ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定]ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択]ダイアログが表示されます。[入力]に変換対象となる数値のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択]ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[パターン]

変換後のjava.text.DecimalFormatクラスの形式のパターン文字列を指定します。指定できる文字数は、1,024文字までです。

[記号の変更]を指定した場合は、変更後の記号を使用してパターンを記述してください。

[記号の変更]

[記号を変更する] チェックボックス

小数点文字または桁区切り文字をデフォルトから変更する場合にチェックします。

[小数点文字]

小数点文字を変更する場合、変更後の小数点文字の記号を指定します。

[桁区切り文字]

桁区切り文字を変更する場合、変更後の桁区切り文字の記号を指定します。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[数値フォーマット変換] ダイアログでは、数値フォーマット変換ファンクションを設定できます。数値フォーマット変換ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.25 数値演算ダイアログ

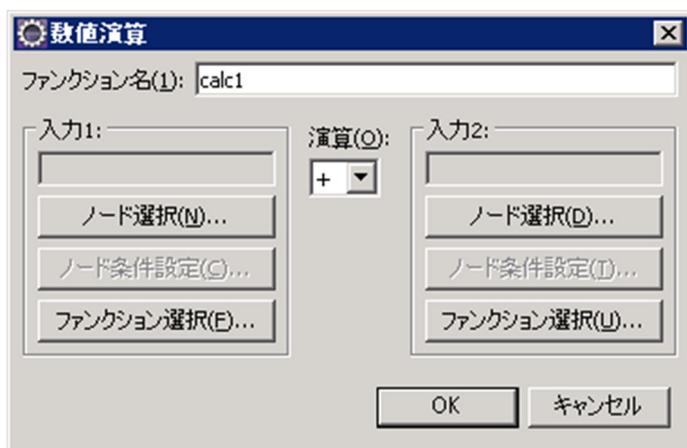
[数値演算] ダイアログでは、演算対象となる2つの数値と演算の種類を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 数値演算ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 数値演算ファンクションをダブルクリックする

[数値演算] ダイアログを次に示します。

図 1-137 [数値演算] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力 1]

演算対象となる 1 つ目の数値の変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに演算対象と数値演算ファンクションがマッピングされている場合、その演算対象が表示されます。

[入力 1] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力 1] に演算対象となる数値の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力 1] に演算対象となる数値のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[演算] ドロップダウンリスト

実行できる演算が表示されます。表示される演算を次に示します。

- + (加算)
- - (減算)
- * (乗算)
- / (除算)
- % (剰余)

[入力 2]

演算対象となる 2 つ目の数値の変換元ノードおよびファンクションを指定します。表示形式は [入力 1] と同じです。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力 2] に演算対象となる数値の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「[1.6.11 ノード条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.7 ノード条件を設定する](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力 2] に演算対象となる数値のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[数値演算] ダイアログでは、数値演算ファンクションを設定できます。数値演算ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工](#)」を参照してください。

1.6.26 端数処理ダイアログ

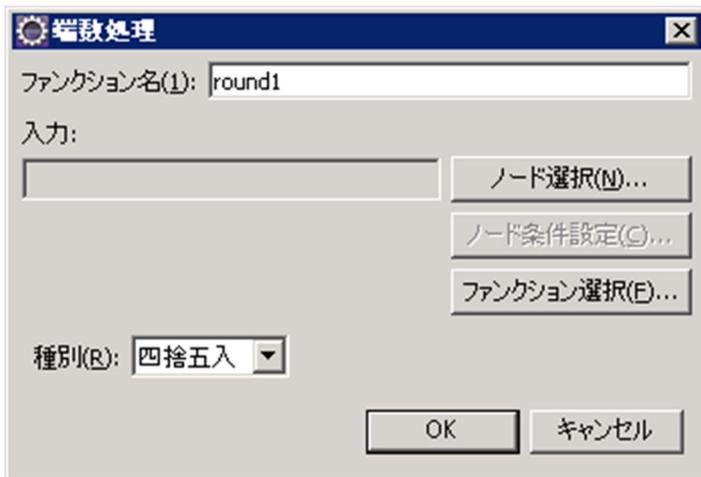
[端数処理] ダイアログでは、端数処理の対象となる数値を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 端数処理ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 端数処理ファンクションをダブルクリックする

[端数処理] ダイアログを次に示します。

図 1-138 [端数処理] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[入力]

端数処理の対象となる数値の変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに端数処理の対象と端数処理ファンクションがマッピングされている場合、その端数処理の対象が表示されます。

[入力] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力] に端数処理の対象となる数値の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力] に端数処理の対象となる数値のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

【種別】

実行できる端数処理が表示されます。表示される端数処理を次に示します。

- 四捨五入
- 切り捨て
- 切り上げ

【OK】 ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

【キャンセル】 ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

【端数処理】 ダイアログでは、端数処理ファンクションを設定できます。端数処理ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.27 総和ダイアログ

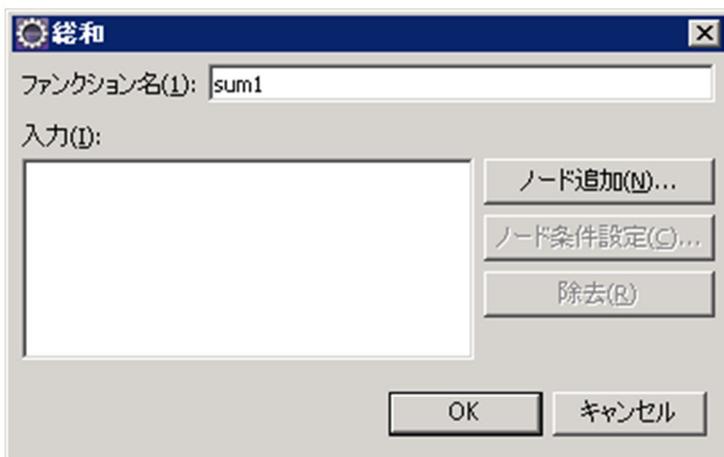
【総和】 ダイアログでは、合計したいノードが含まれているノードセットを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 総和ファンクションを右クリックし、【設定】を選択する
- 総和ファンクションをダブルクリックする

【総和】 ダイアログを次に示します。

図 1-139 【総和】 ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

合計したいノードが含まれているノードセットを指定します。すでにノードセットと総和ファンクションがマッピングされている場合、そのノードセットが表示されます。

[入力]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード追加] ボタン

[ノード選択]ダイアログが表示されます。[入力]に合計したいノードが含まれているノードセットを追加する場合にクリックします。

[ノード選択]ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定]ダイアログが表示されます。ノードセットに条件を設定して、その条件を満たすノードセットだけをマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定]ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[除去] ボタン

[入力]で選択したノードセットが[入力]から削除されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[総和]ダイアログでは、総和ファンクションを設定できます。総和ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.28 否定演算ダイアログ

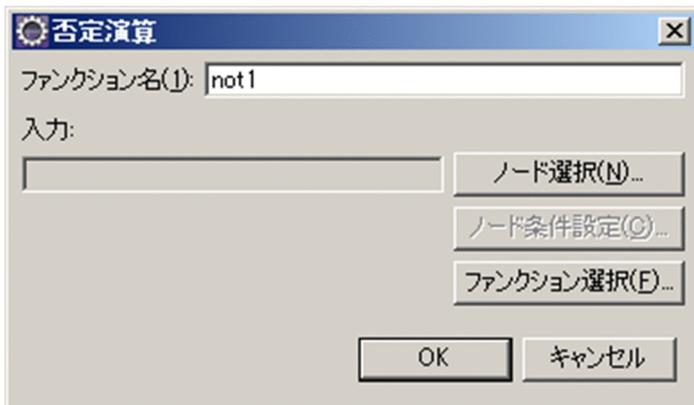
[否定演算]ダイアログでは、否定演算の対象としたいノードを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 否定演算ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 否定演算ファンクションをダブルクリックする

[否定演算] ダイアログを次に示します。

図 1-140 [否定演算] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[入力]

否定演算の対象としたいノードを指定します。すでにノードと否定演算ファンクションがマッピングされている場合、そのノードが表示されます。

[入力] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力] に否定演算の対象としたいノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。ノードに条件を設定して、その条件を満たすノードだけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力] に否定演算の対象としたいファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[否定演算] ダイアログでは、否定演算ファンクションを設定できます。否定演算ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.29 論理演算ダイアログ

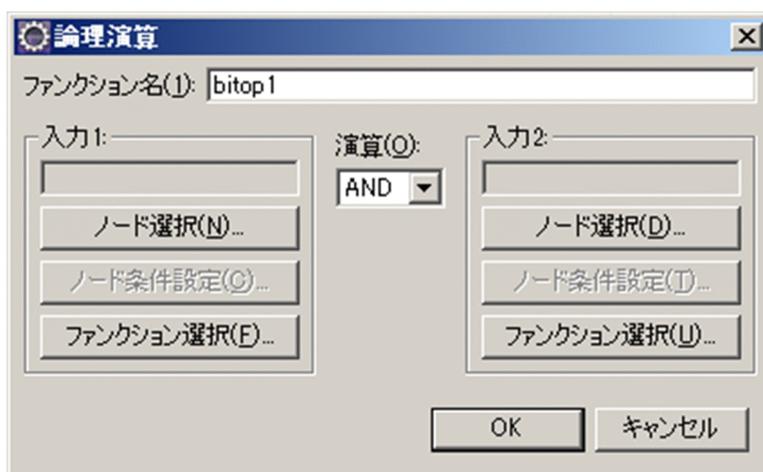
[論理演算] ダイアログでは、論理演算の対象となる変換元ノードまたはファンクションを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 論理演算ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 論理演算ファンクションをダブルクリックする

[論理演算] ダイアログを次に示します。

図 1-141 [論理演算] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力1]

論理演算の対象としたいノードが含まれているノードを指定します。すでにノードと論理演算ファンクションがマッピングされている場合、そのノードが表示されます。

[入力1]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力1]に論理演算の対象としたいノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。ノードに条件を設定して、その条件を満たすノードだけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力1]に論理演算の対象としたいファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[演算] ドロップダウンリスト

条件式に設定する演算子が表示されます。表示される演算子を次に示します。

- AND (論理積)
- OR (論理和)
- XOR (排他的論理和)

[入力2]

論理演算の対象としたいノードが含まれているノードを指定します。すでにノードと論理演算ファンクションがマッピングされている場合、そのノードが表示されます。

[入力2]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力 2] に合計したいノードが含まれているノードセットを追加する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「[1.6.8 ノード選択ダイアログ \(データ変換\)](#)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。ノードに条件を設定して、その条件を満たすノードだけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「[1.6.11 ノード条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.7 ノード条件を設定する](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力 2] に論理演算の対象としたいファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[論理演算] ダイアログでは、論理演算ファンクションを設定できます。論理演算ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工](#)」を参照してください。

1.6.30 シフト演算ダイアログ

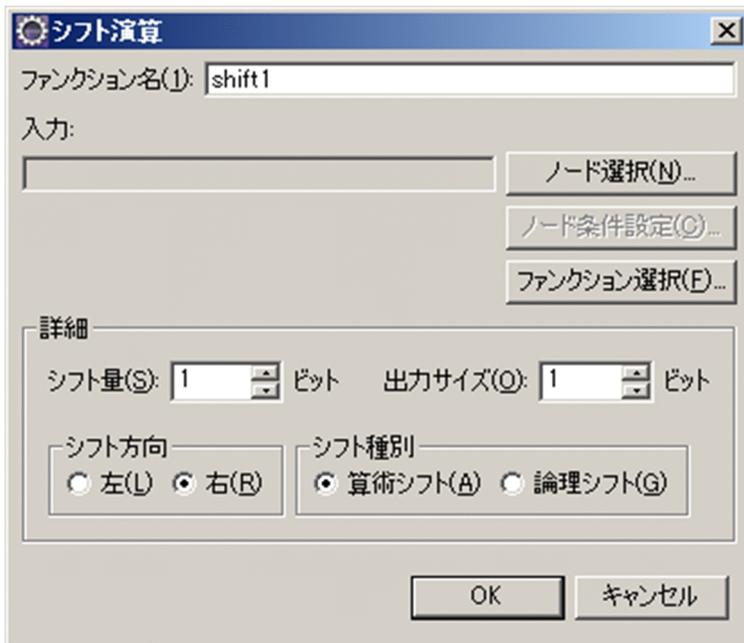
[シフト演算] ダイアログでは、シフト演算の対象となる変換元ノードまたはファンクションを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- シフト演算ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- シフト演算ファンクションをダブルクリックする

[シフト演算] ダイアログを次に示します。

図 1-142 [シフト演算] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

シフト演算の対象としたいノードが含まれているノードを指定します。すでにノードとシフト演算ファンクションがマッピングされている場合、そのノードが表示されます。

[入力]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力]にシフト演算の対象としたいノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。ノードに条件を設定して、その条件を満たすノードだけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力] に論理演算の対象としたいファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[詳細]

シフト演算ファンクションの詳細項目を設定します。

[シフト量]

シフトするビット数を指定します。指定できるビット数は0から64までです。

[出力サイズ]

出力する範囲を指定します。指定したサイズ分、下位ビットから取得します。指定できるビット数は1から64までです。

[シフト方向]

シフト方向として [左] ラジオボタンまたは [右] ラジオボタンを指定します。

[シフト種別]

シフト方向が [右] の場合にシフト方法を次のどちらかで指定します。

[算術シフト] ラジオボタン

最上位のビット（符号ビット）はシフト対象にならないで保持されます。

[論理シフト] ラジオボタン

最上位のビット（符号ビット）はシフト対象になります。また、シフトによって空いたビットには「0」が補完されます。

左シフトの場合は、算術シフトと論理シフトの結果が同じ値になるため、シフト種別の設定は不要です。シフトごとの仕様を次に示します。

ビットの種類	左シフト	右シフト	
		算術シフト	論理シフト
符号ビットのシフト	シフトする	シフトしない	シフトする
出力サイズ未満の空きビット	"0"で埋める	符号ビットで埋める	"0"で埋める
シフト時の空きビット	"0"で埋める	符号ビットで埋める	"0"で埋める

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[シフト演算] ダイアログでは、シフト演算ファンクションを設定できます。シフト演算ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.31 ノード名取得ダイアログ

[ノード名取得] ダイアログでは、ノード名を取得したい変換元ノードを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- ノード名取得ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- ノード名取得ファンクションをダブルクリックする

[ノード名取得] ダイアログを次に示します。

図 1-143 [ノード名取得] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[入力]

ノード名を取得したい変換元ノードを指定します。すでにノード名を取得したい変換元ノードとノード名取得ファンクションがマッピングされている場合、その変換元ノードが表示されます。

[入力] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力] にノード名を取得したい変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[ノード名取得] ダイアログでは、ノード名取得ファンクションを設定できます。ノード名取得ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.32 ノード数取得ダイアログ

[ノード数取得] ダイアログでは、ノード数を取得したいノードセットを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- ・ ノード数取得ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- ・ ノード数取得ファンクションをダブルクリックする

[ノード数取得] ダイアログを次に示します。

図 1-144 [ノード数取得] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

ノード数を取得したいノードセットを指定します。すでにノードセットとノード数取得ファンクションがマッピングされている場合、そのノードセットが表示されます。

[入力]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力]にノード数を取得したいノードセットを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。ノードセットに条件を設定して、その条件を満たすノードセットだけをマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[ノード数取得] ダイアログでは、ノード数取得ファンクションを設定できます。ノード数取得ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.33 ノード調査ダイアログ

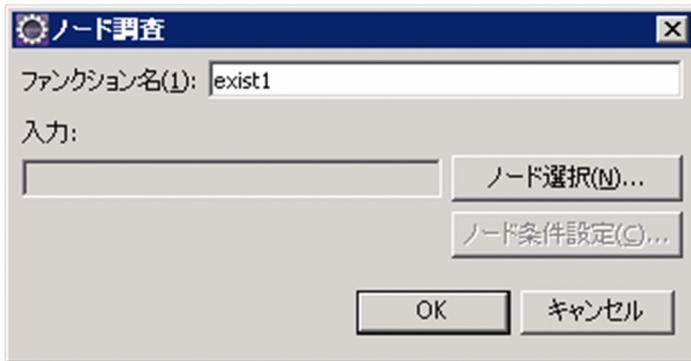
[ノード調査] ダイアログでは、ノードが存在するか調査したいマッピング元の変換元ノードを指定します。次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- ノード調査ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する

- ノード調査ファンクションをダブルクリックする

[ノード調査] ダイアログを次に示します。

図 1-145 [ノード調査] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[入力]

ノードが存在するか調査したい変換元ノードを指定します。すでにノードが存在するか調査したい変換元ノードとノード調査ファンクションがマッピングされている場合、その変換元ノードが表示されます。

[入力] での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力] にノードが存在するか調査したい変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[ノード調査] ダイアログでは、ノード調査ファンクションを設定できます。ノード調査ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.34 くり返しダイアログ

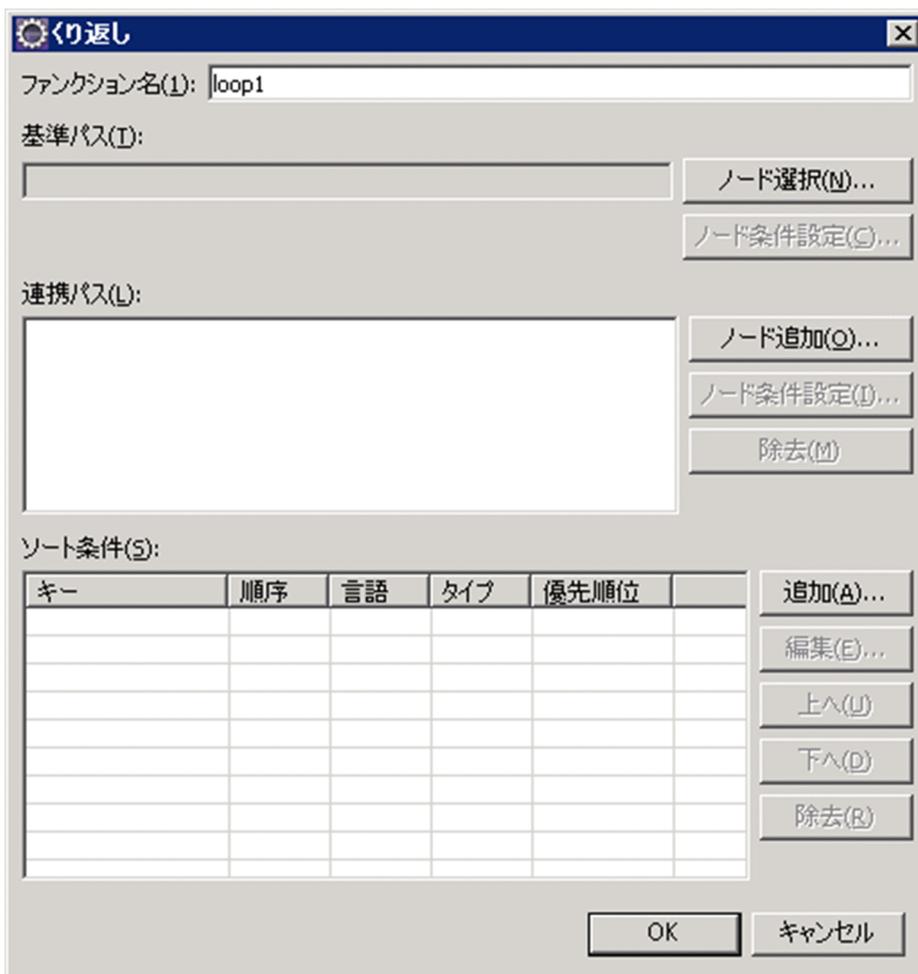
[くり返し] ダイアログでは、変換先ノードにくり返しを対応づけたい変換元ノードを指定します。また、複数回出現する変換元ノードのインスタンスのソート条件を設定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- くり返しファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- くり返しファンクションをダブルクリックする

[くり返し] ダイアログを次に示します。

図 1-146 [くり返し] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[基準パス]

変換先ノードにくり返しを対応づけたい変換元ノードを指定します。すでにくり返しを対応づけたい変換元ノードとくり返しファンクションがマッピングされている場合、その変換元ノードが表示されます。

[基準パス]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[基準パス]にくり返しを対応づけたい変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[連携パス]

設定されているすべての連携パスが表示されます。条件設定または除去をしたい場合に連携パスを選択します。

[ノード追加] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。連携パスを選択して [OK] ボタンをクリックすると、指定された連携パスが [連携パス] の一番下に追加されます。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。連携パスに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、連携パスに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[除去] ボタン

[連携パス] で選択したパスが [連携パス] から削除されます。

【ソート条件】

【ソート条件追加/編集】 ダイアログで設定した内容が表示されます。【ソート条件】 に設定できるキーは8つまでです。

【ソート条件追加/編集】 ダイアログについては、「[1.6.35 ソート条件追加/編集ダイアログ](#)」を参照してください。

【追加】 ボタン

【ソート条件追加/編集】 ダイアログが表示されます。【ソート条件】 にキーを追加して、ソートする条件を設定する場合にクリックします。

【ソート条件追加/編集】 ダイアログについては、「[1.6.35 ソート条件追加/編集ダイアログ](#)」を参照してください。

【編集】 ボタン

【ソート条件追加/編集】 ダイアログが表示されます。【ソート条件】 に設定されたキーのソート条件を編集する場合にクリックします。

【ソート条件追加/編集】 ダイアログについては、「[1.6.35 ソート条件追加/編集ダイアログ](#)」を参照してください。

【上へ】 ボタン

【ソート条件】 で選択したキーの位置が1つ上に移動します。

【下へ】 ボタン

【ソート条件】 で選択したキーの位置が1つ下に移動します。

【除去】 ボタン

【ソート条件】 で選択したキーが【ソート条件】 から削除されます。

【OK】 ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

【キャンセル】 ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

【くり返し】 ダイアログでは、くり返しファンクションを設定できます。くり返しファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工](#)」を参照してください。

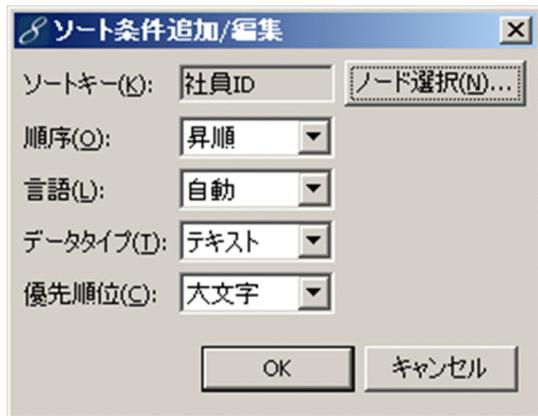
1.6.35 ソート条件追加/編集ダイアログ

【ソート条件追加/編集】 ダイアログでは、【くり返し】 ダイアログの【ソート条件】 にキーを追加して、ソート条件を設定します。また、キーに設定されたソート条件を編集します。

[ソート条件追加/編集] ダイアログは、[くり返し] ダイアログの [追加] ボタンまたは [編集] ボタンをクリックした場合には表示されます。

[ソート条件追加/編集] ダイアログを次に示します。

図 1-147 [ソート条件追加/編集] ダイアログ



(1) 表示項目

[ソートキー]

ソートさせたいインスタンスの元となる変換元ノードを指定します。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[ソートキー] にソートさせたいインスタンスの元となる変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[順序]

インスタンスをソートする順序が表示されます。表示される順序を次に示します。

- 昇順
- 降順

[言語]

インスタンスをソートする言語が表示されます。表示される言語を次に示します。

- 日本語
- 英語
- 自動

なお、「自動」を選択した場合、デフォルトに設定されているシステムのロケールに対応した言語コードが指定されます。

[データタイプ]

インスタンスをソートするデータタイプが表示されます。表示されるデータタイプを次に示します。

- テキスト
- 数値

【優先順位】

インスタンスをソートする優先順位が表示されます。[データタイプ] が「テキスト」の場合に選択します。表示される優先順位を次に示します。

- 大文字
- 小文字

【OK】 ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

【キャンセル】 ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[ソート条件追加/編集] ダイアログでは、くり返しファンクションのソート条件を設定できます。くり返しファンクションのソート条件の設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.36 選択ダイアログ

[選択] ダイアログでは、条件を設定して、それに合致したものから出力する変換元ノードまたはファンクションを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 選択ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 選択ファンクションをダブルクリックする

[選択] ダイアログを次に示します。

図 1-148 [選択] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[条件と出力値]

[条件]

[条件追加/編集] ダイアログで設定した条件が表示されます。[条件追加/編集] ダイアログでの設定方法については、「1.6.37 条件追加/編集ダイアログ」を参照してください。設定した条件は、上から順番に評価されます。

[出力値]

条件に合致する場合に出力する出力値の変換元ノードまたはファンクションを指定します。すでに出力値の変換元ノードまたはファンクションと選択ファンクションがマッピングされている場合、その変換元ノードまたはファンクションが表示されます。

[出力値] に表示される変換元ノードまたはファンクションについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。なお、このダイアログの [空ノード] ラジオボタンを選択した指定した場合は「空ノード」が、[ノードを出力しない] ラジオボタンを選択した指定した場合は「出力なし」が表示されます。

[追加] ボタン

[条件追加/編集] ダイアログが表示されます。[条件と出力値] に条件および出力値を追加する場合にクリックします。

[編集] ボタン

[条件追加/編集] ダイアログが表示されます。[条件と出力値] の条件または出力値を編集する場合にクリックします。

[上へ] ボタン

[条件と出力値] で選択した条件および出力値の位置が1つ上に移動します。

[下へ] ボタン

[条件と出力値] で選択した条件および出力値の位置が1つ下に移動します。

[除去] ボタン

[条件と出力値] で選択した条件および出力値が [条件と出力値] から削除されます。

[どの条件にも合致しない場合]

[条件と出力値] で指定したすべての条件に合致しない場合の出力を設定します。

[ノードを出力する] ラジオボタン

変換先ノードを出力させるときに選択します。

[ノードを出力しない] ラジオボタン

変換先ノードを出力させないときに選択します。

[出力値]

[どの条件にも合致しない場合] の [ノードを出力する] ラジオボタンを選択した場合に設定します。

[値を出力する] ラジオボタン

変換元ノードまたはファンクションの値を出力させるときに選択します。

[値]

出力値の変換元ノードおよびファンクションを指定します。

出力値の表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[値] に出力値の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「[1.6.11 ノード条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.7 ノード条件を設定する](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[値] に出力値のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[空ノード] ラジオボタン

変換先ノードに値を出力させない（空ノードを出力）ときに選択します。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[選択] ダイアログでは、選択ファンクションを設定できます。選択ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工](#)」を参照してください。

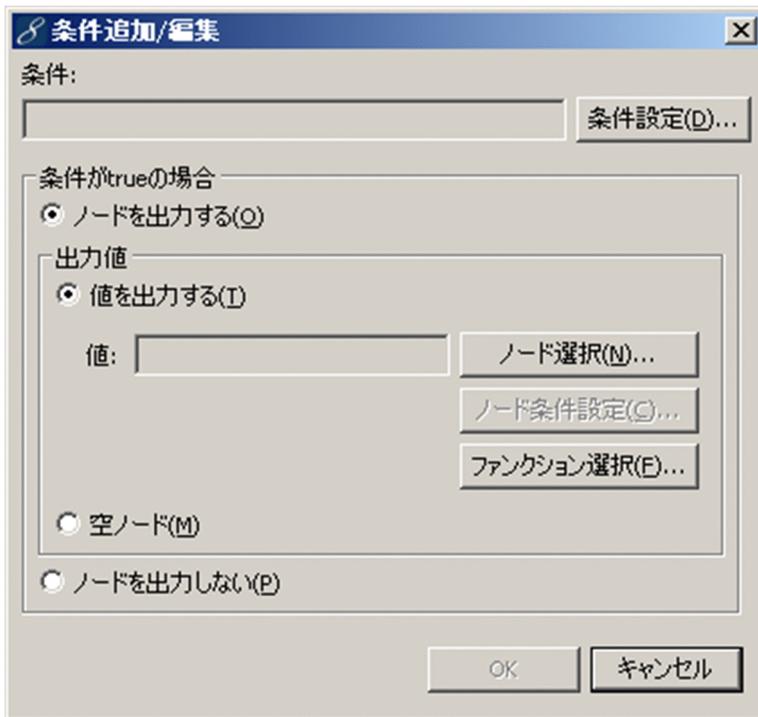
1.6.37 条件追加/編集ダイアログ

[条件追加/編集] ダイアログでは、[選択] ダイアログの [条件と出力値] に条件を追加します。また、条件と出力値の条件または出力値を編集します。

[条件追加/編集] ダイアログは、[選択] ダイアログの [追加] ボタンまたは [編集] ボタンをクリックした場合に表示されます。

[条件追加/編集] ダイアログを次に示します。

図 1-149 [条件追加/編集] ダイアログ



(1) 表示項目

[条件]

[条件設定] ダイアログで設定した条件が表示されます。[条件設定] ダイアログでの設定方法については、「[1.6.12 条件設定ダイアログ \(ノード条件の設定\)](#)」を参照してください。

[条件が true の場合]

[条件] で指定した条件に合致する場合の出力を設定します。

[ノードを出力する] ラジオボタン

変換先ノードを出力させるときに選択します。

[ノードを出力しない] ラジオボタン

変換先ノードを出力させないときに選択します。

[出力値]

[条件が true の場合] の [ノードを出力する] ラジオボタンを選択した場合に設定します。

[値を出力する] ラジオボタン

変換元ノードまたはファンクションの値を出力させるときに選択します。

[値]

出力値の変換元ノードおよびファンクションを指定します。

出力値の表示形式については、マニュアル「[サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編](#)」の「[7.4.6 マッピング元の表示形式](#)」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[値] に出力値の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「[1.6.8 ノード選択ダイアログ \(データ変換\)](#)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「[1.6.11 ノード条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.7 ノード条件を設定する](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[値] に出力値のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[空ノード] ラジオボタン

変換先ノードに値を出力させない（空ノードを出力）ときに選択します。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[条件追加/編集] ダイアログでは、選択ファンクションの条件の追加・編集を設定できます。選択ファンクションの条件の追加・編集の設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工](#)」を参照してください。

1.6.38 値置換えダイアログ

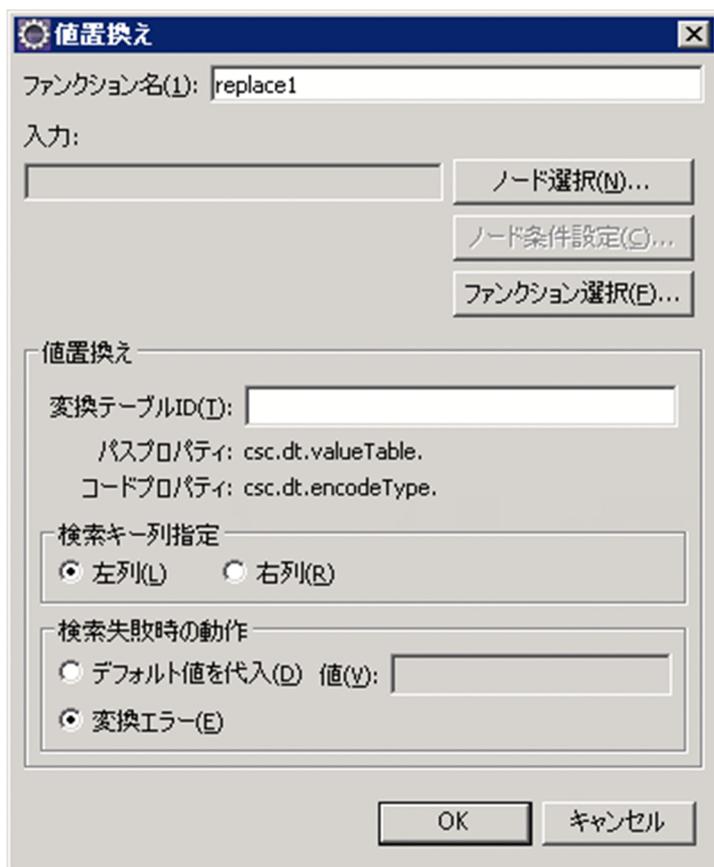
[値置換え] ダイアログでは、マッピング元からの入力値を置き換えてマッピング先に代入するための変換テーブルを指定します。また、置き換え元の文字列を検索する列と、置き換え元の文字列が変換テーブルに存在しなかった場合の対処を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 値置換えファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 値置換えファンクションをダブルクリックする

[値置換え] ダイアログを次に示します。

図 1-150 [値置換え] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

置き換えの対象となる文字列の変換元ノードおよびファンクションを指定します。すでに置き換えの対象と値置換えファンクションがマッピングされている場合、その置き換えの対象が表示されます。

[入力]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[入力]に置き換えの対象となる文字列の変換元ノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択] ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。変換元ノードに条件を設定して、その条件を満たす場合だけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定] ダイアログについては、「[1.6.11 ノード条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。また、ノード条件の設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「[7.7 ノード条件を設定する](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[入力] に置き換えの対象となる文字列のファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[値置換え]

[変換テーブル ID]

値の置き換えに使用する変換テーブルの変換テーブル ID を指定します。変換テーブル ID は、変換テーブルの作成後に J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) に記述した変換テーブルの名称です。

[パスプロパティ]

[変換テーブル ID] に指定した変換テーブルの格納先が設定されているプロパティ (usrconf.properties のキー) が表示されます。次の形式で表示されます。

```
csc.dt.valueTable.<変換テーブルID>
```

[コードプロパティ]

[変換テーブル ID] に指定した変換テーブルで使用している文字コードが設定されているプロパティ (usrconf.properties のキー) が表示されます。次の形式で表示されます。

```
csc.dt.encodeType.<変換テーブルID>
```

[検索キー列指定]

[左列] ラジオボタン

置き換え元の文字列を変換テーブルの左列から検索して、右列の文字列に置き換える場合に選択します。

[右列] ラジオボタン

置き換え元の文字列を変換テーブルの右列から検索して、左列の文字列に置き換える場合に選択します。

[検索失敗時の動作]

[デフォルト値を代入] ラジオボタン

置き換え元の文字列の検索失敗時に、あらかじめ指定した値をマッピング先に代入する場合に選択します。

[値]

置き換え元の文字列の検索失敗時に、マッピング先に代入するデフォルト値を指定します。[デフォルト値を代入]を選択した場合に指定します。

[変換エラー] ラジオボタン

置き換え元の文字列の検索失敗時に、変換エラーを発生させる場合に選択します。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[値置換え] ダイアログでは、値置換えファンクションを設定できます。値置換えファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.39 基数変換ダイアログ

[基数変換] ダイアログでは、基数変換の対象となる変換元ノードまたはファンクションを指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 基数変換ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 基数変換ファンクションをダブルクリックする

[基数変換] ダイアログを次に示します。

図 1-151 [基数変換] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchemaのNCName定義文字です。

[入力]

基数変換の対象としたいノードを指定します。すでにノードと基数演算ファンクションがマッピングされている場合、そのノードが表示されます。

[入力]での表示形式については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.4.6 マッピング元の表示形式」を参照してください。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択]ダイアログが表示されます。[入力]に基数演算の対象としたいノードを指定する場合にクリックします。

[ノード選択]ダイアログについては、「1.6.8 ノード選択ダイアログ (データ変換)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定]ダイアログが表示されます。ノードに条件を設定して、その条件を満たすノードだけマッピングさせる場合にクリックします。

[ノード条件設定]ダイアログについては、「1.6.11 ノード条件設定ダイアログ」を参照してください。また、変換元ノードに条件を設定する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.7 ノード条件を設定する」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択]ダイアログが表示されます。[入力]に基数演算の対象としたいファンクションを指定する場合にクリックします。

[ファンクション選択]ダイアログについては、「1.6.9 ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[入力基数] ドロップダウンリスト

入力値の基数を指定します。指定できる値を次に示します。入力基数と出力基数に同じ値を指定できません。

- 16 (進数)
- 10 (進数)
- 2 (進数)

[出力基数] ドロップダウンリスト

入力値を変換する基数を指定します。指定できる値を次に示します。入力基数と出力基数に同じ値を指定できません。

- 16 (進数)
- 10 (進数)

- 2 (進数)

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[基数変換] ダイアログでは、基数変換ファンクションを設定できます。基数変換の設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.40 カスタムダイアログ

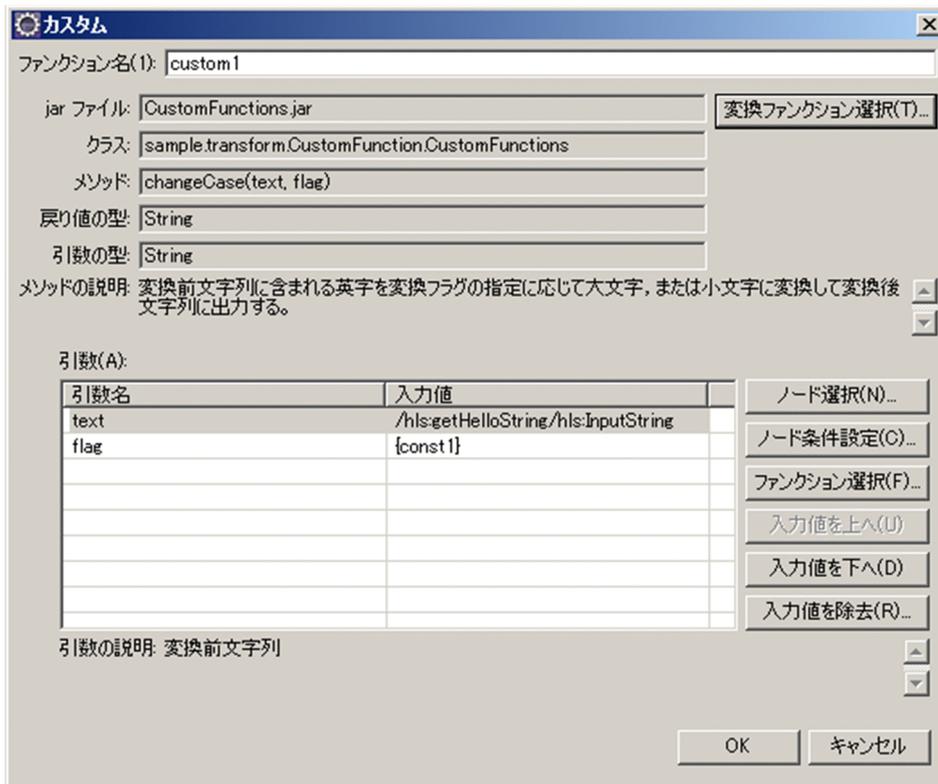
[カスタム] ダイアログでは、カスタムファンクションから呼び出す Java プログラム (変換ファンクション) を設定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- カスタムファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- カスタムファンクションをダブルクリックする

[カスタム] ダイアログを次に示します。

図 1-152 [カスタム] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[jar ファイル]

[変換ファンクション選択] ダイアログで選択したメソッドが存在する jar ファイルが表示されます。

[変換ファンクション選択] ボタン

[変換ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[変換ファンクション選択] ダイアログについては、「1.6.43 変換ファンクション選択ダイアログ」を参照してください。

[クラス]

[変換ファンクション選択] ダイアログで選択したメソッドが存在するクラスが表示されます。

[メソッド]

[変換ファンクション選択] ダイアログで選択したメソッドが表示されます。「メソッド名 (引数 1, 引数 2, …)」の形式で表示されます。

[戻り値の型]

[変換ファンクション選択] ダイアログで選択した変換ファンクションのメソッドの戻り値の型が表示されます。

[引数の型]

[変換ファンクション選択] ダイアログで選択した変換ファンクションのメソッドの引数の型が表示されます。引数がない場合は表示されません。

[メソッドの説明]

[変換ファンクション選択] ダイアログで選択したメソッドのコメントが表示されます。

[引数]

[引数名]

[変換ファンクション選択] ダイアログで選択したメソッドの引数名が表示されます。

[入力値]

メソッドの引数に入力する値を選択します。

[ノード選択] ボタン

[ノード選択] ダイアログが表示されます。[ノード選択] ダイアログについては、「[1.6.8 ノード選択ダイアログ \(データ変換\)](#)」を参照してください。

[ノード条件設定] ボタン

[ノード条件設定] ダイアログが表示されます。[ノード条件設定] ダイアログについては、「[1.6.11 ノード条件設定ダイアログ](#)」を参照してください。

[ファンクション選択] ボタン

[ファンクション選択] ダイアログが表示されます。[ファンクション選択] ダイアログについては、「[1.6.9 ファンクション選択ダイアログ](#)」を参照してください。

[入力値を上へ] ボタン

[入力値] で選択した値の位置が1つ上に移動します。

[入力値を下へ] ボタン

[入力値] で選択した値の位置が1つ下に移動します。

[入力値を除去] ボタン

[入力値を除去] ダイアログが表示されます。[入力値を除去] ダイアログについては、「[1.6.44 入力値を除去ダイアログ](#)」を参照してください。

[引数の説明]

[変換ファンクション選択] ダイアログで選択したメソッドの引数のコメントが表示されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[カスタム] ダイアログでは、次のことができます。

- カスタムファンクションから呼び出す変換ファンクションのメソッドの選択
- カスタムファンクションから呼び出す変換ファンクションのメソッドの引数に入力する値の選択

カスタムファンクションの定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.41 定数ダイアログ

[定数] ダイアログでは、マッピング先に代入する値を指定します。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- 定数ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- 定数ファンクションをダブルクリックする

[定数] ダイアログを次に示します。

図 1-153 [定数] ダイアログ

(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクション名を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[文字列] ラジオボタン

マッピング先に代入する値が文字列の場合に選択します。

[数値] ラジオボタン

マッピング先に代入する値が数値の場合に選択します。

[値]

マッピング先に代入する文字列または数値を指定します。指定できる文字数は、1,024文字までです。
[文字列] ラジオボタンを選択している場合は、空欄にすることで空文字列を設定できます。

[論理値] ラジオボタン

マッピング先に代入する値が論理値の場合に選択します。

[論理値]

[真] ラジオボタン

マッピング先に代入する論理値が真の場合に選択します。

[偽] ラジオボタン

マッピング先に代入する論理値が偽の場合に選択します。

[特殊ノード] ラジオボタン

マッピング先に代入する値が特殊ノードの場合に選択します。

[値]

[ノード出力なし] ラジオボタン

マッピング先にノードを出力させない場合に選択します。

[空ノード] ラジオボタン

マッピング先のノードに値を代入しない（空ノード）場合に選択します。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

[定数] ダイアログでは、定数ファンクションを設定できます。定数ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.42 XPath ダイアログ

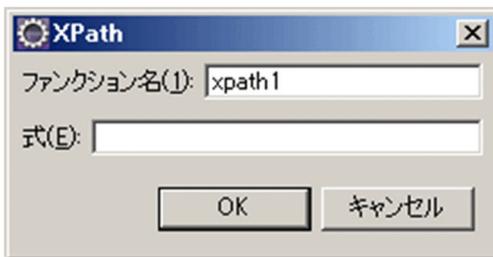
[XPath] ダイアログでは、変換先ノードやファンクションへの入力値を XPath 式で指定します（XPath ファンクション）。

次のどちらかの操作をした場合に表示されます。

- XPath ファンクションを右クリックし、[設定] を選択する
- XPath ファンクションをダブルクリックする

[XPath] ダイアログを次に示します。

図 1-154 [XPath] ダイアログ



(1) 表示項目

[ファンクション名]

ファンクションの名称を表示します。任意の名称に変更する場合は、64 文字以内で指定してください。使用できる文字は、XMLSchema の NCName 定義文字です。

[式]

XPath 式を指定します。入力できる文字数に制限はありません。

(2) このダイアログでできる内容

[XPath] ダイアログでは、XPath ファンクションを設定できます。XPath ファンクションの設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

1.6.43 変換ファンクション選択ダイアログ

[変換ファンクション選択] ダイアログでは、カスタムファンクションから呼び出す Java プログラム（変換ファンクション）のメソッドを選択します。

[変換ファンクション選択] ダイアログは、[カスタム] ダイアログで [変換ファンクションの選択] ボタンをクリックした場合に表示されます。

[変換ファンクション選択] ダイアログを次に示します。

図 1-155 [変換ファンクション選択] ダイアログ



(1) 表示項目

[変換ファンクション]

変換ファンクション定義ファイルに指定された jar ファイルのメソッドが表示されます。ここで、カスタムファンクションから呼び出す変換ファンクションのメソッドを選択します。

[メソッドの説明]

[変換ファンクション] で選択したメソッドの説明が表示されます。

[OK] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

カスタムファンクションから呼び出す変換ファンクションのメソッドを設定できます。カスタムファンクションの定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

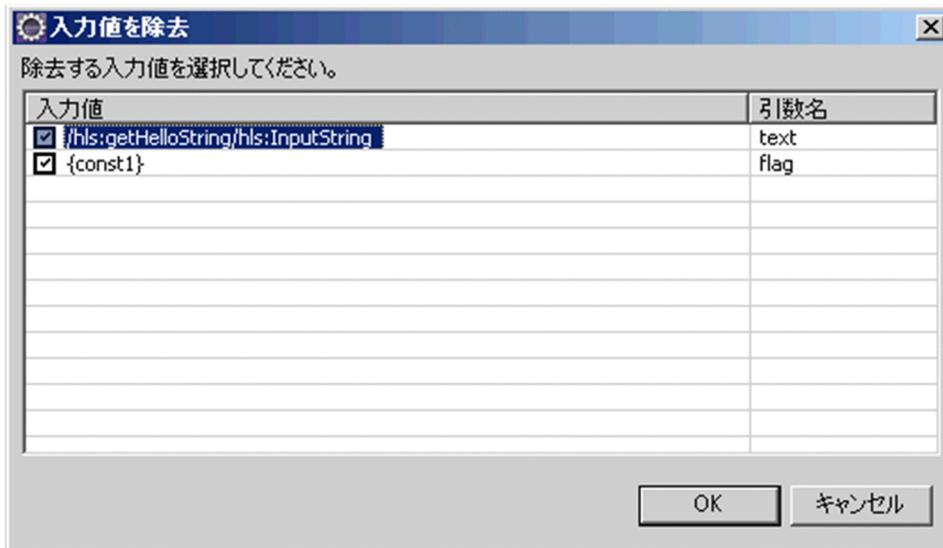
1.6.44 入力値を除去ダイアログ

[入力値を除去] ダイアログでは、カスタムファンクションに入力された値を除去します。

[入力値を除去] ダイアログは、[カスタム] ダイアログで [入力値を除去] ボタンをクリックした場合には表示されます。

[入力値を除去] ダイアログを次に示します。

図 1-156 [入力値を除去] ダイアログ



(1) 表示項目

[入力値]

接続された順に、カスタムファンクションに接続されたノードおよびファンクションを表示します。除去したい入力値のチェックボックスにチェックします。

[引数名]

[入力値] の値が入力される引数がある場合は、引数名が表示されます。

[OK] ボタン

[入力値] のチェックボックスにチェックした入力値を削除して、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

カスタムファンクションに入力された値を除去できます。カスタムファンクションの定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「7.5 ファンクションを使用した値またはノードの加工」を参照してください。

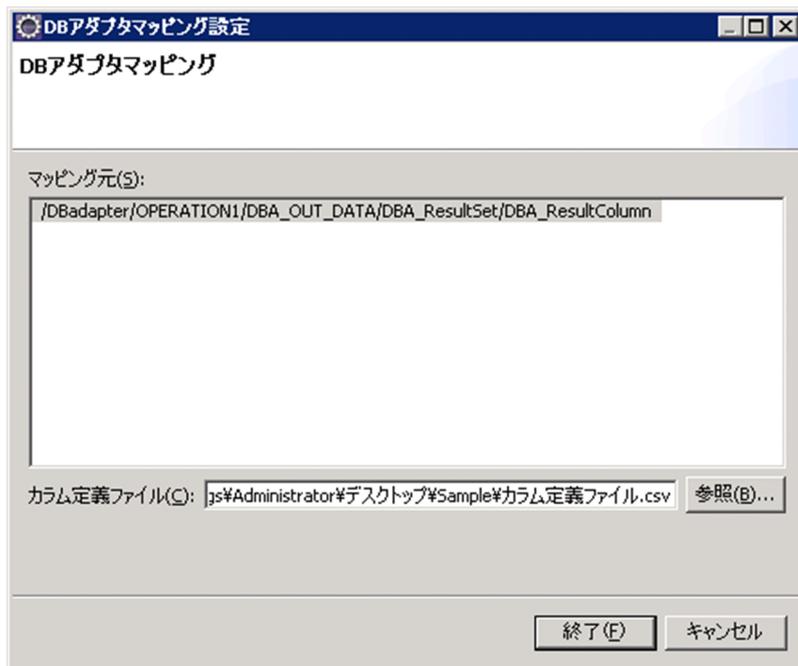
1.6.45 DBアダプタマッピング設定ダイアログ

[DBアダプタマッピング設定] ダイアログでは、マッピング内容を定義したカラム定義ファイルを指定することで、DBアダプタで取得したデータを列名が要素名となるフォーマットへ自動でマッピングできます。

[DBアダプタマッピング設定] ダイアログは、DBアダプタの検索結果で変換先のマッピング対象とする要素の親要素（複合内容要素）を右クリックし、[特殊マッピング] - [DBアダプタ] を選択すると表示されます。

[DBアダプタマッピング設定] ダイアログを次に示します。

図 1-157 [DBアダプタマッピング設定] ダイアログ



(1) 表示項目

[マッピング元]

変換元スキーマのノードが、変換元スキーマのルートからのフルパスで一覧表示されます。この中からマッピング対象とするノードを選択します。

[カラム定義ファイル]

マッピング対象となる変換元列番号と変換先要素名が定義されているカラム定義ファイルを指定します。[参照] ボタンをクリックすると、カラム定義ファイルを設定するダイアログが表示されます。

[終了] ボタン

マッピングを完了してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

(2) このダイアログでできる内容

マッピング内容を定義したカラム定義ファイルを指定することで、DB アダプタで取得したデータを列名が要素名となるフォーマットへ自動でマッピングできます。カラム定義ファイルの作成方法および DB アダプタのマッピング方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「付録」 DB アダプタで取得したデータの自動マッピング」を参照してください。

1.7 ユーザ定義受付に関連するダイアログ

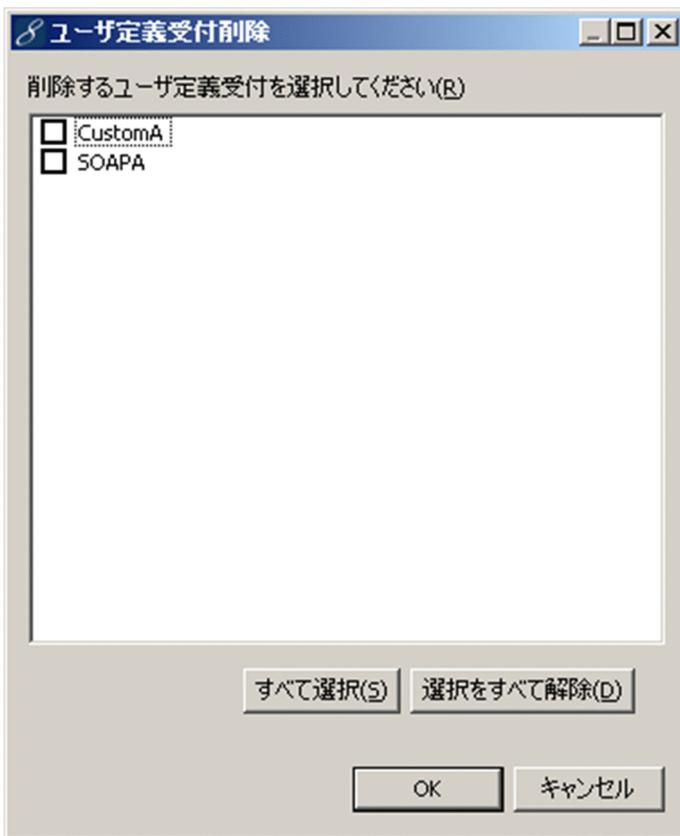
ユーザ定義受付に関連するダイアログについて説明します。

1.7.1 ユーザ定義受付削除ダイアログ

ユーザ定義受付を削除するためのダイアログです。

ユーザ定義受付の削除方法の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「2.16 ユーザ定義受付の削除」を参照してください。

図 1-158 [ユーザ定義受付削除] ダイアログ



[削除するユーザ定義受付を選択してください]

定義されているユーザ定義受付の一覧が表示されます。削除するユーザ定義受付をチェックボックスで選択します。

[すべて選択] ボタン

ユーザ定義受付の一覧のすべてのチェックボックスがチェックされます。

[選択をすべて解除] ボタン

ユーザ定義受付の一覧のすべてのチェックボックスのチェックが解除されます。

[OK] ボタン

指定したユーザ定義受付を削除して、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

ユーザ定義受付を削除しないでダイアログを閉じます。

1.8 サービスの操作に関連するダイアログ

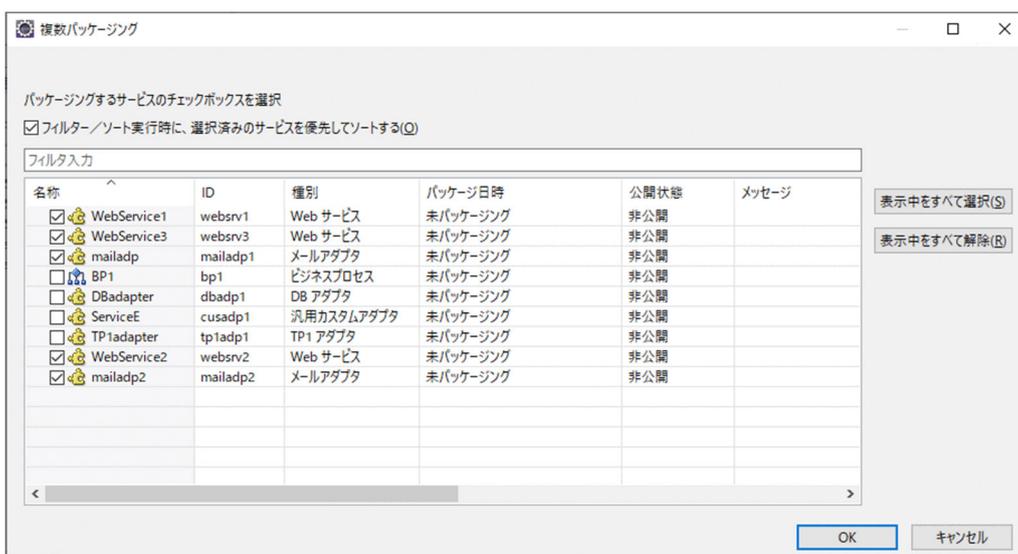
複数のサービスを操作するダイアログについて説明します。

1.8.1 複数パッケージングダイアログ

複数のサービスをパッケージングする場合、該当するサービスを選択するためのダイアログです。

複数パッケージングの詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「8.2 パッケージング」を参照してください。

図 1-159 「複数パッケージング」ダイアログ



「フィルター/ソート実行時に、選択済みのサービスを優先してソートする」チェックボックス

チェックされているサービスをサービス一覧の先頭へソートしたい場合、このチェックボックスをチェックし、列のヘッダ部分をクリックします。[名称] 列でソートした例を次に示します。

名称	ID	種別	パッケージ日時	公開状態	メッセージ
<input checked="" type="checkbox"/> WebService1	websrv1	Web サービス	未パッケージング	非公開	
<input checked="" type="checkbox"/> WebService2	websrv2	Web サービス	未パッケージング	非公開	
<input checked="" type="checkbox"/> WebService3	websrv3	Web サービス	未パッケージング	非公開	
<input checked="" type="checkbox"/> mailadp	mailadp1	メールアダプタ	未パッケージング	非公開	
<input checked="" type="checkbox"/> mailadp2	mailadp2	メールアダプタ	未パッケージング	非公開	
<input type="checkbox"/> BP1	bp1	ビジネスプロセス	未パッケージング	非公開	
<input type="checkbox"/> DBadapter	dbadp1	DB アダプタ	未パッケージング	非公開	
<input type="checkbox"/> ServiceE	cusadp1	汎用カスタムアダプタ	未パッケージング	非公開	
<input type="checkbox"/> TP1adapter	tp1adp1	TP1 アダプタ	未パッケージング	非公開	

フィルタ文字列

サービス一覧を特定のキーワードでフィルタリングしたい場合に入力します。これによって、該当する情報を含むサービスだけを表示できます。

サービス一覧

サービス名およびその情報が一覧表示されます。ユーザ定義受付（呼出先選択）は、ビジネスプロセスやサービスアダプタと同じ階層に表示されます。また、列のヘッダ部分をクリックすると、列の情報で行をソートできます。

サービス一覧の中から、パッケージングしたいサービスの [名称] 列をチェックします。[メッセージ] 列にエラーが表示されているサービスはチェックできません。

チェック状態は次の規則に従って切り替えられます。

1. ユーザ定義受付を持つビジネスプロセスのチェック状態を切り替える場合

チェック状態を切り替えるビジネスプロセスに属するすべてのユーザ定義受付も同じチェック状態に切り替えます。

2. ユーザ定義受付のチェック状態を切り替える場合

チェック状態を切り替えるユーザ定義受付の呼出元ビジネスプロセスと、呼出元ビジネスプロセスに属するすべてのユーザ定義受付も同じチェック状態に切り替えます。

3. 複数サービスが選択されている状態で選択中のサービスのチェック状態を切り替える場合

チェックボックスをクリックしたサービス以外の選択サービスも同じチェック状態に切り替えます。

選択中のサービスの中に 1. または 2. が含まれる場合は、1. または 2. の動作に従います。

チェック状態は次のボタンで一括で切り替えることもできます。

[表示中をすべて選択] ボタン

フィルタリング結果のサービスをすべてチェックします。

[表示中をすべて解除] ボタン

フィルタリング結果のサービスの選択状態を解除します。

[OK] ボタン

選択したサービスをパッケージングしてダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

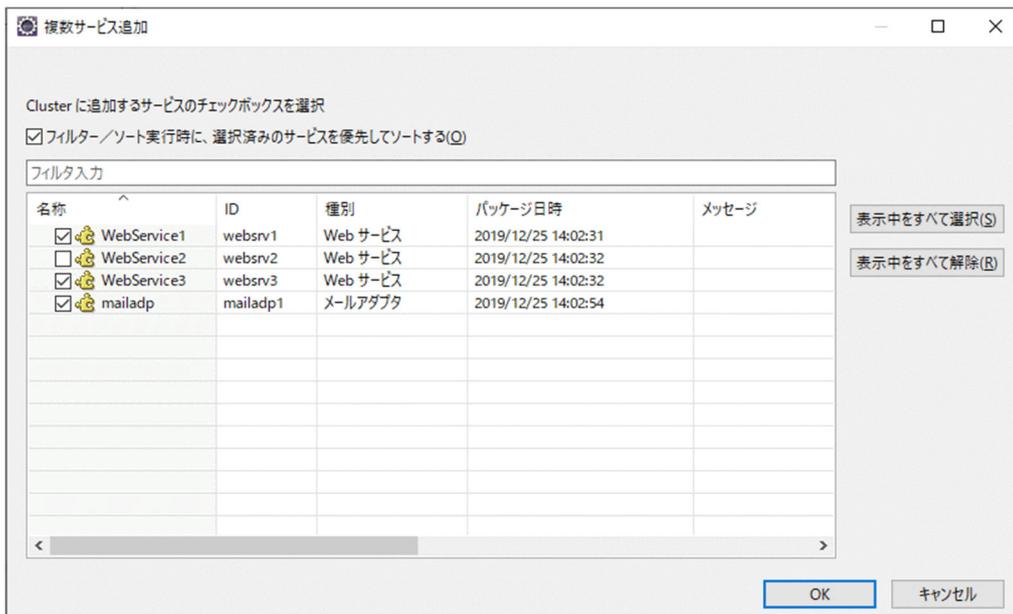
パッケージングしないでダイアログを閉じます。

1.8.2 複数サービス追加ダイアログ

複数のサービスを追加する場合、該当するサービスを選択するためのダイアログです。

複数サービス追加については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「8.3.2 クラスタに HCSC コンポーネントを追加する」を参照してください。

図 1-160 [複数サービス追加] ダイアログ



[フィルター／ソート実行時に、選択済みのサービスを優先してソートする] チェックボックス

チェックされているサービスをサービス一覧の先頭へソートしたい場合、このチェックボックスをチェックし、列のヘッダ部分をクリックします。[名称] 列でソートした例を次に示します。

名称	ID	種別	パッケージ日時	メッセージ
<input checked="" type="checkbox"/> WebService1	websrv1	Web サービス	2019/12/25 14:02:31	
<input checked="" type="checkbox"/> WebService3	websrv3	Web サービス	2019/12/25 14:02:32	
<input checked="" type="checkbox"/> mailadp	mailadp1	メールアダプタ	2019/12/25 14:02:54	
<input type="checkbox"/> WebService2	websrv2	Web サービス	2019/12/25 14:02:32	

フィルタ文字列

サービス一覧を特定のキーワードでフィルタリングしたい場合に入力します。これによって、該当する情報を含むサービスだけを表示できます。

サービス一覧

サービス名およびその情報が一覧表示されます。ユーザ定義受付（呼出先選択）は、ビジネスプロセスやサービスアダプタと同じ階層に表示されます。また、列のヘッダ部分をクリックすると、列の情報で行をソートできます。

サービス一覧の中から、追加したいサービスの [名称] 列のチェックボックスをチェックします。[メッセージ] 列にエラーが表示されているサービスはチェックできません。

チェック状態は次の規則に従って切り替えられます。

1. ユーザ定義受付を持つビジネスプロセスのチェック状態を切り替える場合
 チェック状態を切り替えるビジネスプロセスに属するすべてのユーザ定義受付も同じチェック状態に切り替えます。
2. ユーザ定義受付のチェック状態を切り替える場合
 チェック状態を切り替えるユーザ定義受付の呼出元ビジネスプロセスと、呼出元ビジネスプロセスに属するすべてのユーザ定義受付も同じチェック状態に切り替えます。
3. 複数サービスが選択されている状態で選択中のサービスのチェック状態を切り替える場合

チェックボックスをクリックしたサービス以外の選択サービスも同じチェック状態に切り替えます。

選択中のサービスの中に 1.または 2.が含まれる場合は、1.または 2.の動作に従います。

チェック状態は次のボタンで一括で切り替えることもできます。

[表示中をすべて選択] ボタン

フィルタリング結果のサービスをすべてチェックします。

[表示中をすべて解除] ボタン

フィルタリング結果のサービスの選択状態を解除します。

[OK] ボタン

サービスを追加してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

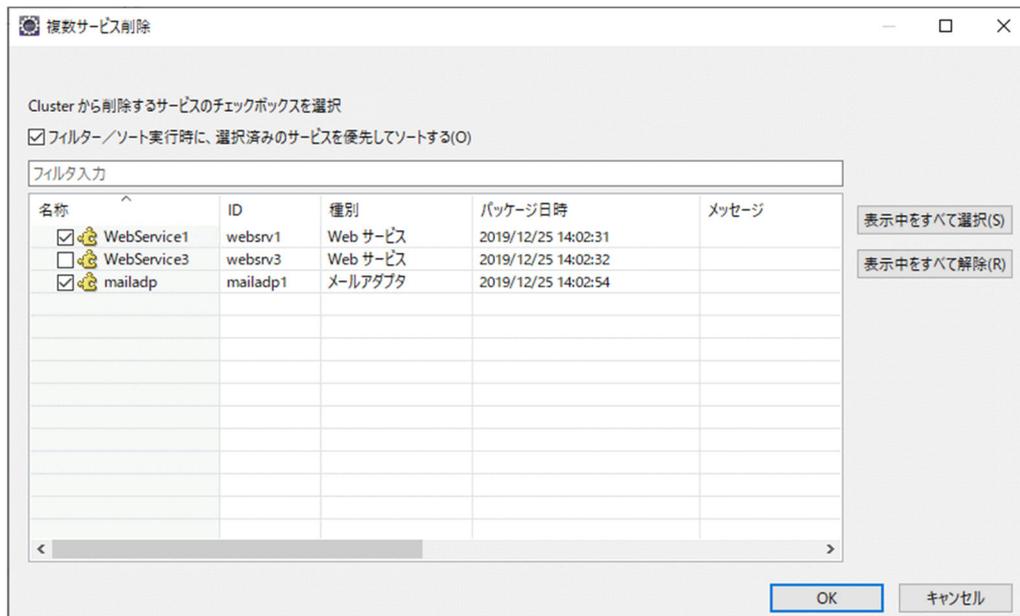
サービスを追加しないでダイアログを閉じます。

1.8.3 複数サービス削除ダイアログ

複数のサービスを削除する場合、該当するサービスを選択するためのダイアログです。

複数サービス削除については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「8.3.3 クラスタから HCSC コンポーネントを削除する」を参照してください。

図 1-161 [複数サービス削除] ダイアログ



[フィルター/ソート実行時に、選択済みのサービスを優先してソートする] チェックボックス

チェックされているサービスをサービス一覧の先頭へソートしたい場合、このチェックボックスをチェックし、列のヘッダ部分をクリックします。[名称] 列でソートした例を次に示します。

名称	ID	種別	パッケージ日時	メッセージ
<input checked="" type="checkbox"/> WebService1	websrv1	Web サービス	2019/12/25 14:02:31	
<input checked="" type="checkbox"/> mailadp	mailadp1	メールアダプタ	2019/12/25 14:02:54	
<input type="checkbox"/> WebService3	websrv3	Web サービス	2019/12/25 14:02:32	

フィルタ文字列

サービス一覧を特定のキーワードでフィルタリングしたい場合に入力します。これによって、該当する情報を含むサービスだけを表示できます。

サービス一覧

サービス名およびその情報が一覧表示されます。ユーザ定義受付（呼出先選択）は、ビジネスプロセスやサービスアダプタと同じ階層に表示されます。また、列のヘッダ部分をクリックすると、列の情報で行をソートできます。

サービス一覧の中から、削除したいサービスの [名称] 列のチェックボックスをチェックします。[メッセージ] 列にエラーが表示されているサービスはチェックできません。

チェック状態は次の規則に従って切り替えられます。

1. ユーザ定義受付を持つビジネスプロセスのチェック状態を切り替える場合

チェック状態を切り替えるビジネスプロセスに属するすべてのユーザ定義受付も同じチェック状態に切り替えます。

2. ユーザ定義受付のチェック状態を切り替える場合

チェック状態を切り替えるユーザ定義受付の呼出元ビジネスプロセスと、呼出元ビジネスプロセスに属するすべてのユーザ定義受付も同じチェック状態に切り替えます。

3. 複数サービスが選択されている状態で選択中のサービスのチェック状態を切り替える場合

チェックボックスをクリックしたサービス以外の選択サービスも同じチェック状態に切り替えます。選択中のサービスの中に 1. または 2. が含まれる場合は、1. または 2. の動作に従います。

チェック状態は次のボタンで一括で切り替えることもできます。

[表示中をすべて選択] ボタン

フィルタリング結果のサービスをすべてチェックします。

[表示中をすべて解除] ボタン

フィルタリング結果のサービスの選択状態を解除します。

[OK] ボタン

サービスを削除してダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

サービスを削除しないでダイアログを閉じます。

1.9 WSDL カスタムバインディングファイルに関連するダイアログ

WSDL カスタムバインディングファイルに関連するダイアログについて説明します。

1.9.1 設定ダイアログ (WSDL カスタムバインディングファイルの設定)

WSDL カスタムバインディングファイルを設定するためのダイアログです。SOAP1.1/1.2 併用モードの SOAP アダプタまたはユーザ定義受付 (SOAP 受付) を作成する際に使用します。

外部バインディングファイルを利用した WSDL のカスタマイズについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「付録 K 外部バインディングファイルを利用した WSDL のカスタマイズ」を参照してください。

WSDL カスタムバインディングファイルについて設定する場合の、[設定] ダイアログの表示手順を次に示します。

1. Eclipse のメニューから、[ウィンドウ] - [設定] を選択します。

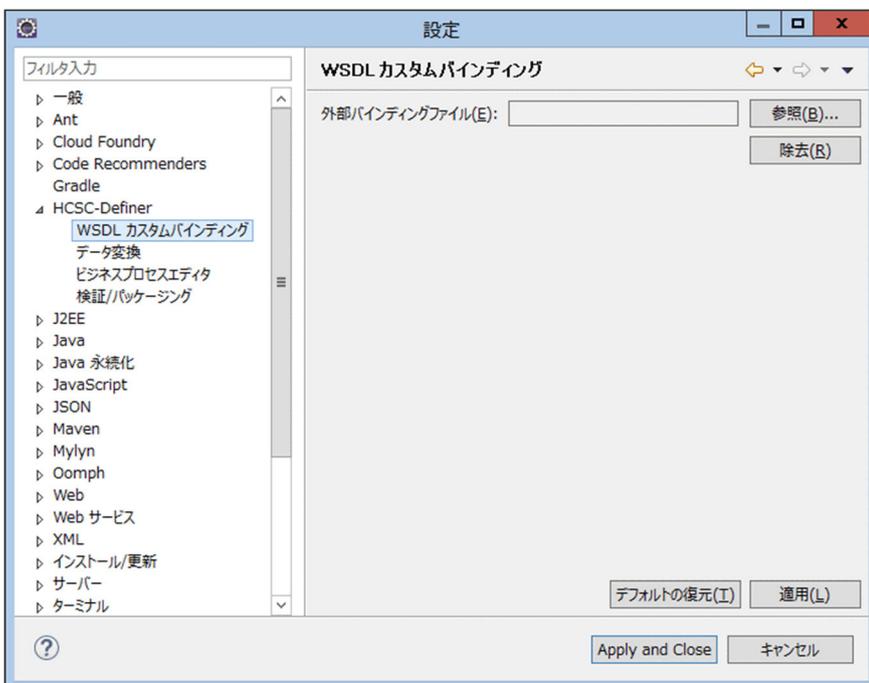
[設定] ダイアログが表示されます。

2. ダイアログ左側から [HCSC-Definer] - [WSDL カスタムバインディング] を選択します。

WSDL カスタムバインディングの設定項目がダイアログ右側に表示されます。

WSDL カスタムバインディングの設定項目について、次に説明します。

図 1-162 [設定] ダイアログ (WSDL カスタムバインディングの設定項目)



表示項目は次のとおりです。

[外部バインディングファイル]

外部バインディングファイルの絶対パスが表示されます。[参照] ボタンから外部バインディングファイルを指定していない場合は何も表示されません。

[参照] ボタン

フォルダの選択画面が表示され、外部バインディングファイルを指定できます。

なお、09-00 以前で外部バインディングファイルを使用していて、更新インストールで 09-50 以降にバージョンアップした場合は、09-00 以前で使用していた次のファイルを指定してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%config%tools%custom%custombinding.xml
```

[除去] ボタン

[外部バインディングファイル] に表示されているパスをクリアします。

[デフォルトの復元] ボタン

WSDL カスタムバインディングの設定値をデフォルト値へ戻します。デフォルト値は次のとおりです。

- [外部バインディングファイル]：空欄

[適用] ボタン

設定した内容を有効にします。ダイアログは閉じません。

[Apply and Close] ボタン

設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

[キャンセル] ボタン

設定した内容を無効にして、ダイアログを閉じます。

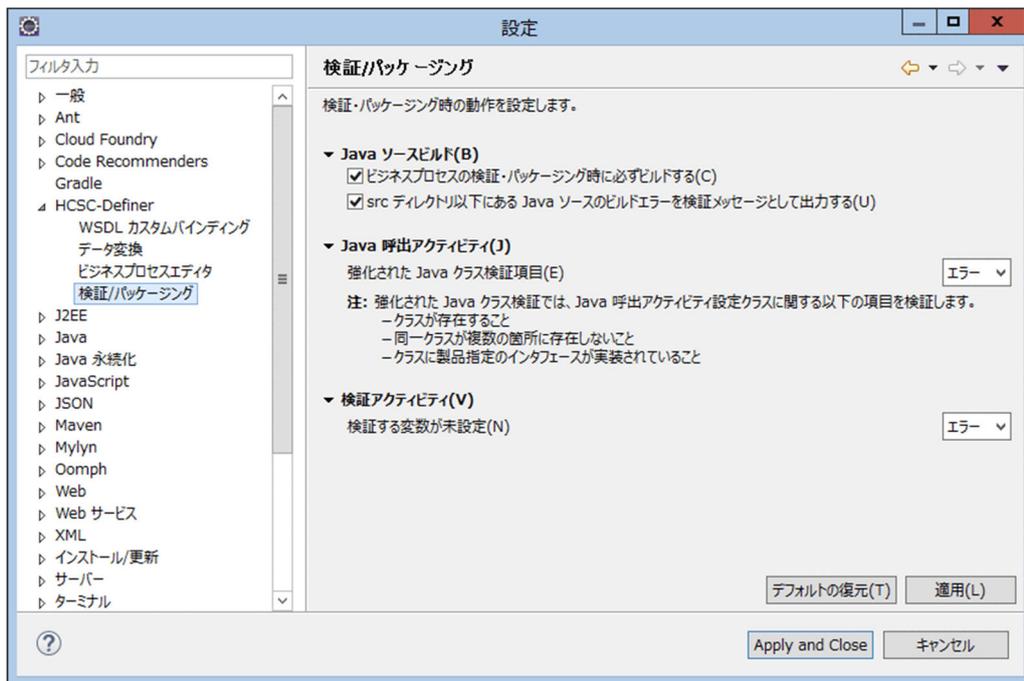
1.10 検証・パッケージングに関連するダイアログ

1.10.1 設定ダイアログ（検証・パッケージングの動作設定）

検証・パッケージングの動作のうち、いくつかの項目を変更できます。設定ダイアログは次の方法で開きます。

方法

1. Eclipse のメニューから、[ウィンドウ] - [設定] を選択します。
[設定] ダイアログが表示されます。
2. ダイアログ左側から [HCSC-Definer] - [検証/パッケージング] を選択します。
検証・パッケージングの動作設定画面がダイアログ右側に表示されます。



各要素の設定について、次に説明します。

(1) Java ソースビルドに関する設定

Java クラスに関する次の設定を変更できます。設定変更を反映させるには、設定ダイアログの [適用] ボタン、または [Apply and Close] ボタンをクリックします。

[ビジネスプロセスの検証・パッケージング時に必ずビルドする]

検証・パッケージング実行時に Java クラスのビルド結果を最新にします。推奨設定は、[ビジネスプロセスの検証・パッケージング時に必ずビルドする] がチェックされている状態です。09-70 以前の動作にする場合は、[ビジネスプロセスの検証・パッケージング時に必ずビルドする] のチェックを外してください（非推奨）。

[src ディレクトリ以下にある Java ソースのビルドエラーを検証メッセージとして出力する]

検証・パッケージング実行時に、Java クラスのエラーを出力します。推奨設定は、[src ディレクトリ以下にある Java ソースのビルドエラーを検証メッセージとして出力する] がチェックされている状態です。09-70 以前の動作にする場合は、[src ディレクトリ以下にある Java ソースのビルドエラーを検証メッセージとして出力する] のチェックを外してください（非推奨）。

チェックありとチェックなしの動作を次に示します。

動作項目	チェックあり	チェックなし
エラー検出実行条件	検証対象のビジネスプロセスに Java 呼出アクティビティがある	検証対象のビジネスプロセスに Java 呼出アクティビティがある
エラー検出範囲	src ディレクトリ以下のすべての Java クラス	Java 呼出アクティビティの「Java クラス名」に設定されている Java クラスだけ

(2) Java 呼出アクティビティに関する設定

Java 呼出アクティビティに関する検証項目の検証レベルを設定できます。設定変更を反映させるには、設定ダイアログの [適用] ボタン、または [Apply and Close] ボタンをクリックします。

[強化された Java クラス検証項目]

推奨設定は [エラー] です。09-70 以前の動作にする場合は、[警告] を設定してください（非推奨）。次の表の内容を検証します。

項番	検証内容
1	Java 呼出アクティビティの「Java クラス名」に指定されているクラスが、HCSCTE プロジェクトの classes ディレクトリ内に存在するか。
2	Java 呼出アクティビティの「Java クラス名」に指定されているクラスが、次の個所に 1 つだけ存在するか。 <ul style="list-style-type: none">HCSCTE プロジェクトの classes ディレクトリHCSCTE プロジェクトの lib 内の JAR ファイル内
3	Java 呼出アクティビティの「Java クラス名」に指定されているクラスが、専用インターフェース (jp.co.Hitachi.soft.csc.bp.receiver.ejb.CustomClassInterfaceM, または jp.co.Hitachi.soft.csc.bp.receiver.ejb.CustomClassInterface) を実装しているか。
4	項番 3 の検証に必要なクラス、またはインターフェースが存在するか※。
5	Java 呼出アクティビティの「引数用割当変数」に 2 個以上の変数が設定されていて、かつ Java 呼出アクティビティの「Java クラス名」に指定されているクラスが jp.co.Hitachi.soft.csc.bp.receiver.ejb.CustomClassInterfaceM を実装しているか。

注※

実行環境の usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル) で必要なクラスを含む JAR ファイルを add.class.path で指定する運用の場合は、項番 4 のエラーを無視してかまいません。設定値を [警告] または [無視] にしてください。

(3) 検証アクティビティに関する設定

検証アクティビティに関する検証項目のレベルを設定できます。設定変更を反映させるには、設定ダイアログの [適用] ボタン、または [Apply and Close] ボタンをクリックします。

[検証する変数が未設定]

検証アクティビティに変数が設定されていないときの動作を指定します。推奨設定は [エラー] です。09-70 以前の動作にする場合は、[警告] を設定してください (非推奨)。

1.11 バイナリフォーマット定義画面の操作

バイナリフォーマット定義画面での操作について説明します。

注意事項

以降の項での説明は、バイナリフォーマット定義画面内のバイナリフォーマット定義エディタの操作の説明です。バイナリフォーマット定義画面内のアウトラインビューには、バイナリフォーマット定義エディタでの操作結果が表示されます。

1.11.1 要素をコピーして貼り付ける

バイナリフォーマット定義エディタ上の要素をコピーして貼り付けます。

注意事項

コピーした要素は、ほかのバイナリフォーマット定義ファイルを編集しているバイナリフォーマット定義エディタ上には貼り付けできません。貼り付けできるのは、コピーした要素があるバイナリフォーマット定義エディタ上だけです。

要素をコピーして貼り付ける手順を次に示します。

1. コピーする要素を選択します。
2. 右クリックして [コピー] を選択するか、[Ctrl] キー+ [C] キーを押します。
3. 貼り付け先の要素を選択します。
4. 右クリックして [貼り付け] を選択するか、[Ctrl] キー+ [V] キーを押します。

貼り付けた要素の名称は次の形式で自動設定されます (n は要素名をユニークにするための自然数)。

```
Copy-<n>-<コピー元の要素名>
```

ただし、ローカル定義の単純内容要素を別の複合内容要素の構成要素として貼り付ける場合で、同じ名称の構成要素がないときは、コピー元の要素と同じ名称の要素として貼り付けられます。

コピー元の要素と貼り付け先の要素の対応を次の表に示します。

表 1-13 コピー元の要素と貼り付け先の要素の対応

コピー元の要素	貼り付け先の要素					
	フォーマット	単純内容要素 (グローバル定義)	複合内容要素	構成要素 (単純内容要素 (グローバル定義))	構成要素 (複合内容要素)	構成要素 (単純内容要素 (ローカル定義))
フォーマット	—	—	—	—	—	—
単純内容要素 (グローバル定義)	(1)	(2)	(2)	—	—	—
複合内容要素	(1)	(2)	(2)	—	—	—
構成要素 (単純内容要素 (グローバル定義))	—	—	—	—	—	—
構成要素 (複合内容要素)	—	—	—	—	—	—
構成要素 (単純内容要素 (ローカル定義))	—	—	(3)	(4)	(4)	(4)

(凡例)

—：コピー、貼り付けはできません。

(1)

コピーしたグローバル定義の単純内容要素または複合内容要素と同じ内容で、グローバル定義の単純内容要素または複合内容要素が追加されます。すべてのグローバル定義の要素の最後尾に追加されます。

なお、複合内容要素をコピーした場合、複合内容要素に設定されている構成要素もコピーされます。

(2)

コピーしたグローバル定義の単純内容要素または複合内容要素と同じ内容で、グローバル定義の単純内容要素または複合内容要素が追加されます。貼り付け先に選択したグローバル定義の要素の上に追加されます。

なお、複合内容要素をコピーした場合、複合内容要素に設定されている構成要素もコピーされます。

(3)

コピーしたローカル定義の単純内容要素と同じ内容で、選択した複合内容要素にローカル定義の単純内容要素が追加されます。選択した複合内容要素の構成要素の最後尾に追加されます。

(4)

コピーしたローカル定義の単純内容要素と同じ内容で、ローカル定義の単純内容要素が追加されます。貼り付け先に選択した構成要素の上に追加されます。

注意事項

- グローバル定義の単純内容要素をコピーして、ローカル定義の単純内容要素として貼り付けることはできません。逆に、ローカル定義の単純内容要素をコピーして、グローバル定義の単純内容要素として貼り付けることもできません。
- バイナリデータとして CSV 形式のデータを利用する場合、コピーできるのは、複合内容要素 (ヘッダ要素またはレコード要素) の構成要素として設定されている単純内容要素だけです。

1.11.2 要素を削除する

バイナリフォーマット定義エディタ上の要素を削除します。

要素を削除する手順を次に示します。

1. 削除する要素を選択します。
2. 右クリックして [削除] を選択するか, [Delete] キーを押します。

なお, 次の要素の場合は削除できません。

- 構成要素から参照されているグローバル定義の単純内容要素および複合内容要素
- ルート要素に設定されている複合内容要素

また, 次の要素の場合, 削除してよいかを確認する警告メッセージが表示されます。

- ほかの要素の出現回数, サイズを決定する単純内容要素 (ターゲットノード)
- ほかの要素の選択条件値を持つ単純内容要素 (選択条件ノード)

1.11.3 要素を移動する

バイナリフォーマット定義エディタ上の要素は, 移動する要素 (ドラッグ元) を移動先 (ドロップ先) にドラッグ&ドロップして移動できます。ドラッグ中に [Esc] キーを押すと, 動作をキャンセルできます。

ドロップ先の種類と, ドラッグ時に [Ctrl] キーを押しているかどうかによって, ドラッグ&ドロップしたときの結果は異なります。

注意事項

- ドラッグ&ドロップできる範囲は, バイナリフォーマット定義エディタ内に限定されます。バイナリフォーマット定義エディタの要素を, 別のビューやエディタへドロップすることも, 別のビューやエディタの要素をバイナリフォーマット定義エディタにドロップすることもできません。
- ドラッグ&ドロップによって, 選択条件などの要素間の依存関係に問題が発生しても, ドラッグ&ドロップした時点ではエラーになりません。バイナリフォーマットファイルの検証を実施したときにエラーが出力されます。
- バイナリデータとして CSV 形式のデータを利用する場合, ドラッグできるのはローカル単純内容要素だけです。ドラッグしたローカル単純内容要素をドロップできるのは, 複合内容要素 (ヘッダ要素またはレコード要素), およびその構成要素の上辺と下辺です。

参考

ツリーがバイナリフォーマット定義エディタ内に収まらず、ドロップ先の要素が表示されていない場合、ドラッグするときのカーソルをバイナリフォーマット定義エディタの枠の近くに移動させると自動的にスクロールされます。

また、ツリーが折りたたまれていてドロップ先の要素が表示されていない場合、ドラッグするときのカーソルを折りたたまれていた要素の近くに滞留させておくと自動的にツリーが展開されます。

(1) ドロップ先の種類

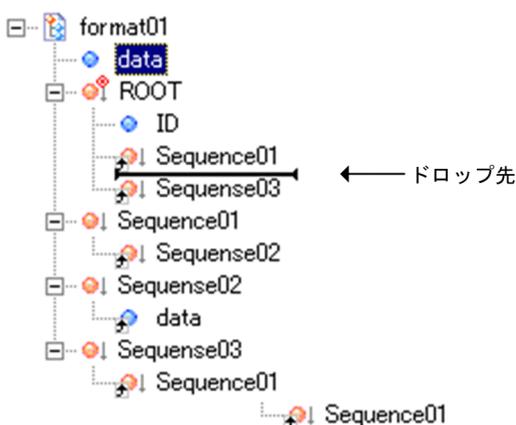
ドロップ先の種類には、要素、上辺および下辺があります。

要素をドロップ先にする場合、ドロップ先の要素にドラッグしたカーソルを移動すると、要素の表示色が反転します。

上辺および下辺をドロップ先にする場合、ドロップ位置に線（）が表示されます。

上辺および下辺にドロップする場合の例を次に示します。

図 1-163 上辺および下辺にドロップする場合の例



この図の例では、ドロップ先は構成要素「Sequence01」の下辺、かつ構成要素「Sequence03」の上辺になります。

(2) ドラッグ&ドロップしたときの結果

ドラッグ&ドロップしたときの結果は、[Ctrl] キーを押しているかどうかによって異なります。

[Ctrl] キーを押さないでドラッグ&ドロップする場合

移動

要素を移動します。ドラッグ元の要素は削除され、ドロップ先に追加されます。

参照追加

グローバル定義の複合内容要素に構成要素を追加します。ドラッグ&ドロップして追加された構成要素の内容はデフォルト値になります。

[Ctrl] キーを押さないでドラッグ&ドロップした場合の、ドラッグ元とドロップ先の関係を次の表に示します。

表 1-14 ドラッグ&ドロップしたときの結果（[Ctrl] キーを利用しない場合）

ドラッグ元	ドロップ先								
	単純内容要素（グローバル定義）			複合内容要素（グローバル定義）			構成要素		
	上辺	要素	下辺	上辺	要素	下辺	上辺	要素	下辺
単純内容要素（グローバル定義）	移動	—	移動	移動	参照追加	移動	参照追加	—	参照追加
複合内容要素（グローバル定義）	移動	—	移動	移動	参照追加	移動	参照追加	—	参照追加
構成要素（単純内容要素）	—	—	—	—	—	—	移動	—	移動
構成要素（複合内容要素）	—	—	—	—	—	—	移動	—	移動
構成要素（単純内容要素（ローカル定義））	—	—	—	—	—	—	移動	—	移動

（凡例）

—：ドラッグ&ドロップできません。

[Ctrl] キーを押したままドラッグ&ドロップする場合

コピー追加

要素をコピーして追加します。

追加された要素の設定情報は、ドラッグ元の要素の情報が引き継がれます。

追加された要素の名称は次の形式で自動設定されます（nは要素名をユニークにするための自然数）。

Copy-<n>-<ドラッグ元の要素名>

複合内容要素をコピー追加した場合、ドラッグ元の複合内容要素に設定されている構成要素も引き継がれます。

[Ctrl] キーを押したままドラッグ&ドロップした場合の、ドラッグ元とドロップ先の関係を次の表に示します。

表 1-15 ドラッグ&ドロップしたときの結果（[Ctrl] キーを利用した場合）

ドラッグ元	ドロップ先											
	フォーマット			単純内容要素（グローバル定義）			複合内容要素（グローバル定義）			構成要素		
	上辺	要素	下辺	上辺	要素	下辺	上辺	要素	下辺	上辺	要素	下辺
単純内容要素（グローバル定義）	-	○	-	○	-	○	○	-	○	-	-	-
複合内容要素（グローバル定義）	-	○	-	○	-	○	○	-	○	-	-	-
構成要素（単純内容要素）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
構成要素（複合内容要素）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
構成要素（単純内容要素（ローカル定義））	-	-	-	-	-	-	-	○	-	○	-	○

（凡例）

- ：ドラッグ&ドロップできません。
- ：コピー追加できます。

1.11.4 操作を元に戻す

バイナリフォーマット定義エディタで行った操作を元に戻します。操作は何回でも元に戻すことができます。

操作を元に戻すには次の2つの方法があります。

方法 1

バイナリフォーマット定義エディタ上で右クリックして、[元に戻す] を選択します。

方法 2

[Ctrl] キー+ [Z] キーを押します。

1.11.5 操作をやり直す

バイナリフォーマット定義エディタで行った操作をやり直します。操作は何回でもやり直すことができます。

操作をやり直すには次の2つの方法があります。

方法 1

バイナリフォーマット定義エディタ上で右クリックして、[やり直し] を選択します。

方法 2

[Ctrl] キー+ [Y] キーを押します。

1.12 ビジネスプロセス定義画面の操作

ビジネスプロセス定義画面での操作について説明します。

1.12.1 オブジェクトをコピーする

キャンバス上のオブジェクト（アクティビティ、コネクション、リンクコネクション、フォルトコネクション、補償コネクション、およびコメント）をコピーします。オブジェクトを複数選択した場合、選択したすべてのオブジェクトをコピーします。

オブジェクトはビジネスプロセス画面のキャンバス以外に、Word、Excel などほかのアプリケーションにもコピーできます。ただし、開始アクティビティおよび終了アクティビティは、ほかのアプリケーションにはコピーできますが、ビジネスプロセス画面のキャンバスにはコピーはできません。

オブジェクトをコピーする手順を次に示します。

1. コピーしたいオブジェクトを選択します。

コネクションをコピーする場合、連結元のアクティビティおよび連結先のアクティビティも一緒に選択してください。連結元のアクティビティおよび連結先のアクティビティを一緒に選択しないと、コネクションはコピーされません。

2. 次のどちらかの方法でコピーします。

- 右クリックして、[コピー] を選択します。
- [Ctrl] キー+ [C] キーを押します。

1.12.2 オブジェクトを切り取る

キャンバス上のオブジェクト（アクティビティ、コネクション、リンクコネクション、フォルトコネクション、補償コネクション、およびコメント）を切り取ります。切り取ることができるオブジェクトなどはコピーの場合と同じです。詳細については、「[1.12.1 オブジェクトをコピーする](#)」を参照してください。

オブジェクトを切り取る手順を次に示します。

1. 切り取りたいオブジェクトを選択します。

コネクションを切り取る場合、連結元のアクティビティおよび連結先のアクティビティも一緒に選択してください。連結元のアクティビティおよび連結先のアクティビティを一緒に選択しないと、コネクションを切り取ることができません。

2. 次のどちらかの方法で切り取ります。

- 右クリックして、[切り取り] を選択します。
- [Ctrl] キー+ [X] キーを押します。

1.12.3 オブジェクトを貼り付ける

コピーまたは切り取ったオブジェクト（アクティビティ、コネクション、リンクコネクション、フォルトコネクション、補償コネクション、およびコメント）を、ビジネスプロセス画面のキャンバスまたはほかのアプリケーションに貼り付けます。

(1) 貼り付け方法

オブジェクトの貼り付け方法について、貼り付け先がキャンバスの場合とほかのアプリケーションの場合とに分けて次に示します。

キャンバスの場合

次のどちらかの方法で貼り付けます。

- アクティビティが選択されていない状態でキャンバス上を右クリックして、[貼り付け] を選択します。
- [Ctrl] キー+ [V] キーを押します。

ほかのアプリケーションの場合

[Ctrl] キー+ [V] キーを押します。

(2) 貼り付け結果

貼り付け結果はオブジェクトによって次のように異なります。

注意事項

貼り付け時に簡易的なチェックが実行され、各アクティビティやコネクションで不整合が発生した場合はコンソールビューに警告メッセージが出力されます。各アクティビティやコネクションに対する整合のチェック内容については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「5.6 アクティビティの定義」を参照してください。

(a) アクティビティまたはコメントをコピーまたは切り取った場合の貼り付け結果

貼り付け先によって、コピーまたは切り取り元から貼り付けられる内容が異なります。貼り付け先によるアクティビティまたはコメントの内容の違いを次の表に示します。

表 1-16 貼り付け先によるアクティビティまたはコメントの内容の違い

コピーまたは切り取り元	貼り付け先			
	同じキャンバス内	同じビジネスプロセスの定義内 (別のスコープまたは別の繰り返し)	別のビジネスプロセスの定義	別のアプリケーション
開始アクティビティ	×	×	×	△

コピーまたは切り取り元	貼り付け先			
	同じキャンバス内	同じビジネスプロセスの定義内 (別のスコープまたは別の繰り返し)	別のビジネスプロセスの定義	別のアプリケーション
終了アクティビティ	×	×	×	△
データ変換アクティビティ	◎	◎※1	◎※1	△
スコープアクティビティ	◎	◎※2	◎※2	△
繰り返しアクティビティ	◎	◎※2	◎※2	△
上記以外のアクティビティ	◎	◎	◎	△
コメント	◎	◎	◎	△

(凡例)

◎：次の内容が貼り付けられます。

- アクティビティまたはコメントのアイコン
- アクティビティまたはコメントの定義情報

変数、相関セット、リンク、補償アクティビティのコンボボックスで設定されたアクティビティ名は、名称だけが貼り付けられます。そのため、貼り付け先に定義が存在しなければ、参照状態が不正となります。

△：次の内容が貼り付けられます。

- アクティビティのアイコン

コピー先では定義できません。

×：貼り付けられません。

ただし、スコープアクティビティまたは繰り返しアクティビティがコピー対象の場合は、キャンバス上のアクティビティが貼り付けられます。

注※1

コピーまたは切り取り実行時にマッピング定義エディタが開いていれば、その編集内容で貼り付けられます。

注※2

定義した変数情報と、キャンバスで定義されたアクティビティも貼り付けられます。

(b) コネクションをコピーまたは切り取った場合の貼り付け結果

コネクションの定義情報のうち、変数およびリンクは名称だけが貼り付けられます。そのため、貼り付け先に定義が存在しなければ、参照状態が不正となります。

1.12.4 オブジェクトを削除する

キャンバス上のオブジェクト（アクティビティ、コネクション、リンクコネクション、フォルトコネクション、補償コネクション、およびコメント）を削除します。オブジェクトを複数選択した場合、選択したすべてのオブジェクトを削除します。

オブジェクトを削除する手順を次に示します。

1. 削除したいオブジェクトを選択します。

2. 次のどちらかの方法で削除します。

- 右クリックして、[削除] を選択します。
- [Delete] キーを押します。

なお、連結元のアクティビティまたは連結先のアクティビティを削除すると、連結されていたコネクション、リンクコネクション、フォルトコネクション、補償コネクション、およびコメントも削除されます。

1.12.5 オブジェクトを整列する

キャンバス上で選択した複数のオブジェクト（アクティビティ、コネクション、リンクコネクション、フォルトコネクション、補償コネクション、およびコメント）を整列します。整列の種類は、次から選択できます。

- 自動整列
- 左揃え
- 中央揃え（水平方向）
- 右揃え
- 上揃え
- 中央揃え（垂直方向）
- 下揃え

なお、コネクション、リンクコネクション、フォルトコネクション、および補償コネクションは、アクティビティの整列に伴い移動されるだけです。

自動整列の場合は、整列されるアクティビティ同士を連結しているコネクション（リンクコネクション、フォルトコネクション、補償コネクションを含めます）に設定されている折れ曲がり点はすべて解除されます。また、コメントは自動整列の対象外です。

一部のコネクションには、折れ曲がり点が自動で設定されます。

オブジェクトを整列する手順を次に示します。

1. 整列したいオブジェクトを選択します。

整列したいオブジェクトの中には、必ず 2 つ以上のアクティビティを含めてください。

2. 次のどちらかの方法で整列します。

- 右クリックして、[整列] を指定し、整列の種類を選択します。
- 自動整列は、[Ctrl] キー + [Shift] キー + [F] キーを押す方法でも実行できます。

1.12.6 操作を元に戻す

キャンバス上で行った操作を元に戻します。元に戻す操作の対象は、ビジネスプロセスごとに管理されています。よって、同じビジネスプロセス内の別のスコープアクティビティまたは繰り返しアクティビティの操作の場合は、元に戻すことができます。また、操作は 50 回まで元に戻すことができます。なお、次の操作は元に戻すことができません。

- プロパティビューでの操作
- スコープのタブまたは繰り返しのタブを、開くまたは閉じる操作
ただし、操作を元に戻してスコープアクティビティおよび繰り返しアクティビティを削除した場合、スコープのタブまたは繰り返しのタブは削除されます。
- データ変換定義画面での操作
- 表示を拡大または縮小する操作
- マッピング定義への電文フォーマット変更の反映

操作を元に戻すには、次の 2 つの方法があります。

方法 1

アクティビティが選択されていない状態でキャンバス上を右クリックして、[元に戻す] を選択します。

方法 2

[Ctrl] キー + [Z] キーを押します。

注意事項

ビジネスプロセスを保存した時点で、操作が初期化されます。したがって、ビジネスプロセスを保存すると、操作を元に戻すことができません。

1.12.7 元に戻した操作をやり直す

元に戻した操作をやり直します。やり直す操作の対象は、元に戻す操作と同様に、ビジネスプロセスごとに管理されています。また、やり直すことができる操作の回数は、連続して元に戻した回数までとなります。

操作をやり直すには、次の2つの方法があります。

方法 1

アクティビティが選択されていない状態でキャンバス上を右クリックして、[やり直す] を選択します。

方法 2

[Ctrl] キー+ [Y] キーを押します。

注意事項

ビジネスプロセスを保存した時点で、操作が初期化されます。したがって、ビジネスプロセスを保存すると、操作を元に戻すことができません。

1.12.8 キャンバスの表示を拡大する

キャンバスの表示を拡大します。表示は 200%まで拡大できます。

表示を拡大するには、次の3つの方法があります。

方法 1

アクティビティが選択されていない状態でキャンバス上を右クリックして、[拡大] を選択します。

方法 2

[Ctrl] キー+ [+] キーを押します。

方法 3

[Ctrl] キー+ホイールマウスを使用します。

1.12.9 キャンバスの表示を縮小する

キャンバスの表示を縮小します。表示は 10%まで縮小できます。

表示を縮小するには、次の3つの方法があります。

方法 1

アクティビティが選択されていない状態でキャンバス上を右クリックして、[縮小] を選択します。

方法 2

[Ctrl] キー+ [-] キーを押します。

方法 3

[Ctrl] キー+ホイールマウスを使用します。

1.12.10 キャンバスの表示を元のサイズに戻す

拡大または縮小したキャンバスの表示を元のサイズ（100%）に戻します。

次の方法で表示を元のサイズに戻します。

方法

アクティビティが選択されていない状態でキャンバス上を右クリックして、[元のサイズに戻す] を選択します。

1.12.11 パレットの表示を設定する

パレットの表示を設定します。設定できる内容を次に示します。

- グループおよびツールのレイアウト
- アイコンのサイズ
- フォント
- グループ下のツール一覧の表示または非表示

パレットの表示項目については、「[1.2.3\(1\) パレット](#)」を参照してください。なお、ここで設定した内容は、すべてのビジネスプロセス画面で適用されます。

(1) グループおよびツールのレイアウトを設定する

パレットのグループおよびツールは、次のようにレイアウトを設定できます。

- 列
すべてのグループおよびツールを水平に整列します。
- リスト
すべてのグループおよびツールを垂直に整列します。
- アイコンのみ
すべてのツールに対して、ツール名を表示せずアイコンだけの表示にします。
- 詳細
すべてのツールに対して、詳細なフォーマットおよび記述を表示します。

グループおよびツールのレイアウトを設定するには、次の2つの方法があります。

方法 1

パレットのグループまたはツールを右クリックして、[レイアウト] から設定したい項目を選択します。

方法 2

1. パレットのグループまたはツールを右クリックして、[設定] を選択します。
[パレット設定] ダイアログが表示されます。
2. [レイアウト] から設定したい項目を選択します。

(2) アイコンのサイズを設定する

パレットのツールのアイコンは、サイズを大きくできます。

ツールのアイコンのサイズを大きくするには、次の 2 つの方法があります。

方法 1

パレットのグループまたはツールを右クリックして、[大きいアイコンを使用] を選択します。

方法 2

1. パレットのグループまたはツールを右クリックして、[設定] を選択します。
[パレット設定] ダイアログが表示されます。
2. [リスト・レイアウト・オプション] の [大きいアイコンを使用] チェックボックスにチェックします。

(3) フォントを設定する

パレットのグループおよびツールのフォントは変更できます。また、変更したフォントはデフォルトに戻すことができます。

フォントを設定する方法を、フォントを変更する場合とフォントをデフォルトに戻す場合とに分けて次に示します。

フォントを変更する場合

1. パレットのグループまたはツールを右クリックして、[設定] を選択します。
[パレット設定] ダイアログが表示されます。
2. [フォント] の [変更] ボタンをクリックします。

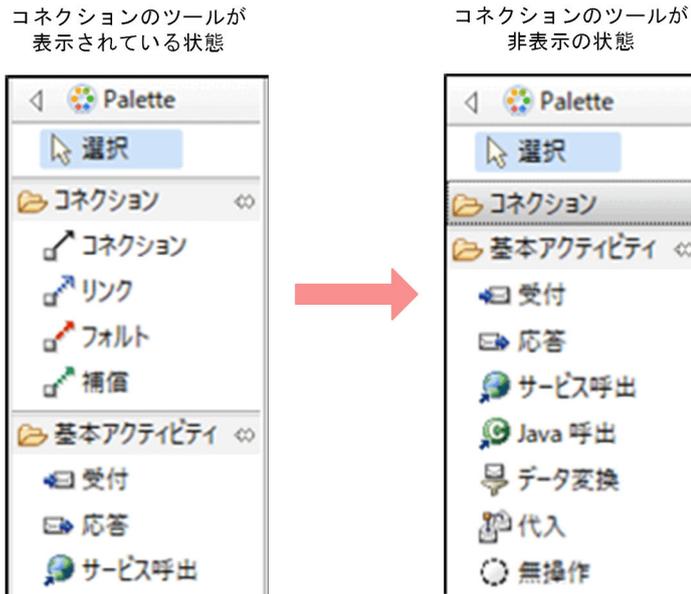
フォントをデフォルトに戻す場合

1. パレットのグループまたはツールを右クリックして、[設定] を選択します。
[パレット設定] ダイアログが表示されます。
2. [フォント] の [デフォルトの復元] ボタンをクリックします。

(4) ツールの一覧の表示または非表示を設定する

パレットに表示されているツールの一覧を非表示にすることができます。また、非表示にしたツールの一覧を表示させることができます。ツールの一覧の表示および非表示の例を次に示します。

図 1-164 ツールの一覧の表示および非表示



ツールの一覧を表示または非表示にするには、次の 2 つの方法があります。

方法 1

パレットのグループをクリックします。

方法 2

1. パレットのグループを右クリックして、[設定] を選択します。

[パレット設定] ダイアログが表示されます。

2. [ドロー・オプション] で次のラジオボタンを選択します。

[別のドローを開いているときは常に閉じる] ラジオボタン

一つのグループのツール一覧だけを表示させたい場合を選択します。

[十分なスペースがないときは自動的に閉じる] ラジオボタン

複数のグループのツール一覧を表示しているためパレットに十分な表示スペースがない場合、自動的にツール一覧を閉じたいときに選択します。ただし、ピン留め※が設定されているグループは、パレットに十分な表示スペースがない場合でもツール一覧は閉じません。

[閉じない] ラジオボタン

グループや表示スペースの影響によって、ツール一覧が閉じないようにしたい場合を選択します。

注※

ピン留めを設定するには、次の 2 つの方法があります。

方法 1

パレットのグループの右側にある  (ピン) をクリックします。

方法 2

パレットのグループを右クリックして、[ピン留め] を選択します。

1.12.12 コメントを最小化する

コメントを最小化します。最小化するには次の 2 つの方法があります。

方法 1 (選択したコメントを最小化する)

最小化されていないコメントを選択して右クリックし、[コメントを最小化する] を選択します。

方法 2 (キャンバス上のすべてのコメントを最小化する)

アクティビティが選択されていない状態でキャンバス上を右クリックして、[すべてのコメントを最小化する] を選択します。

1.12.13 コメントを元のサイズに戻す

最小化したコメントを元の大きさに戻します。コメントの大きさを戻すには次の 2 つの方法があります。

方法 1 (選択したコメントの最小化を解除する)

最小化状態のコメントを選択して右クリックし、[コメントを元のサイズに戻す] を選択します。

方法 2 (キャンバス上のすべてのコメントの最小化を解除する)

アクティビティが選択されていない状態でキャンバス上を右クリックして、[すべてのコメントを元のサイズに戻す] を選択します。

1.12.14 コメントの背景色を変更する

コメントの背景色を変更できます。背景色の変更手順を次に示します。

1. 背景色を変更したいコメントを選択して、右クリックします。
コメントを複数選択して、背景色をまとめて変えることもできます。
2. 右クリックのメニュー [背景色] のサブメニューの中から、背景色を選択します。
選択できる背景色は、黄・赤・青・緑・灰色のほか、3 種類のカスタム背景色です。

カスタム背景色は次の手順で変更できます。

1. Eclipse のメニューから [ウィンドウ] - [設定] を選択します。
[設定] ダイアログが表示されます。
2. 左ペインで [HCSC-Definer] - [ビジネスプロセスエディタ] を選択します。
右ペインに [ビジネスプロセスエディタ] ページが表示されます。
3. [コメント] の [カスタム背景色] から、変更したいカスタム背景色 ([カスタム 1] ~ [カスタム 3]) のボタンをクリックします。



4. 表示された色の中から、変更したい色を選択します。
選択した色がダイアログに表示されます。
5. [適用して閉じる] ボタンをクリックします。
設定した内容を有効にして、ダイアログを閉じます。

1.12.15 アクティビティのスナップ機能の有効・無効を設定する

アクティビティのスナップ機能とは、ビジネスプロセスエディタ上のアクティビティを整列させる機能です。スナップ機能を有効にすると、ビジネスプロセス上のアクティビティをドラッグして移動した場合、ほかのアクティビティの垂直線上または平行線上に近付くと、自動で位置調整されます。

スナップ機能はデフォルトで有効になります。

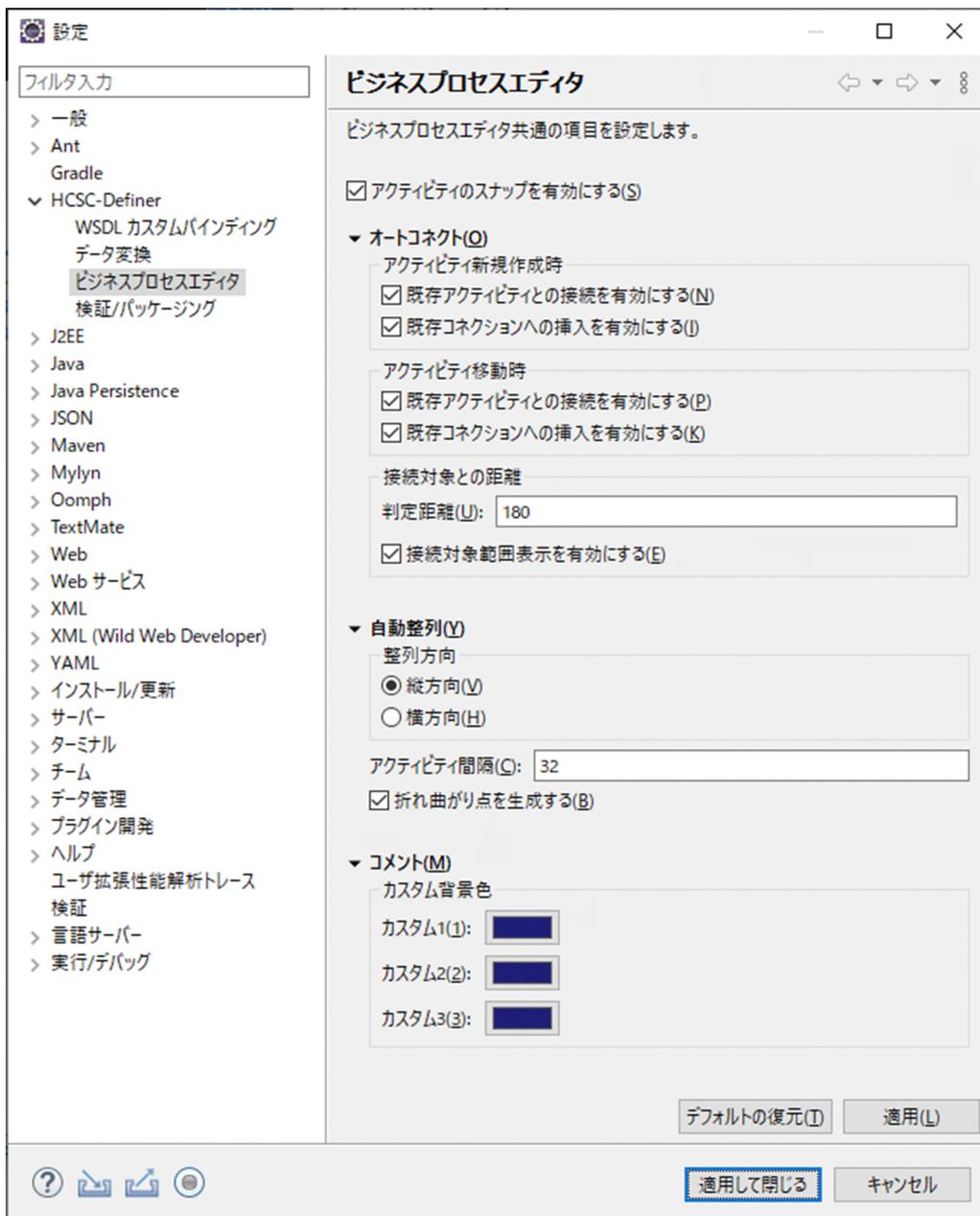
無効にするには次の2つの方法があります。

方法1

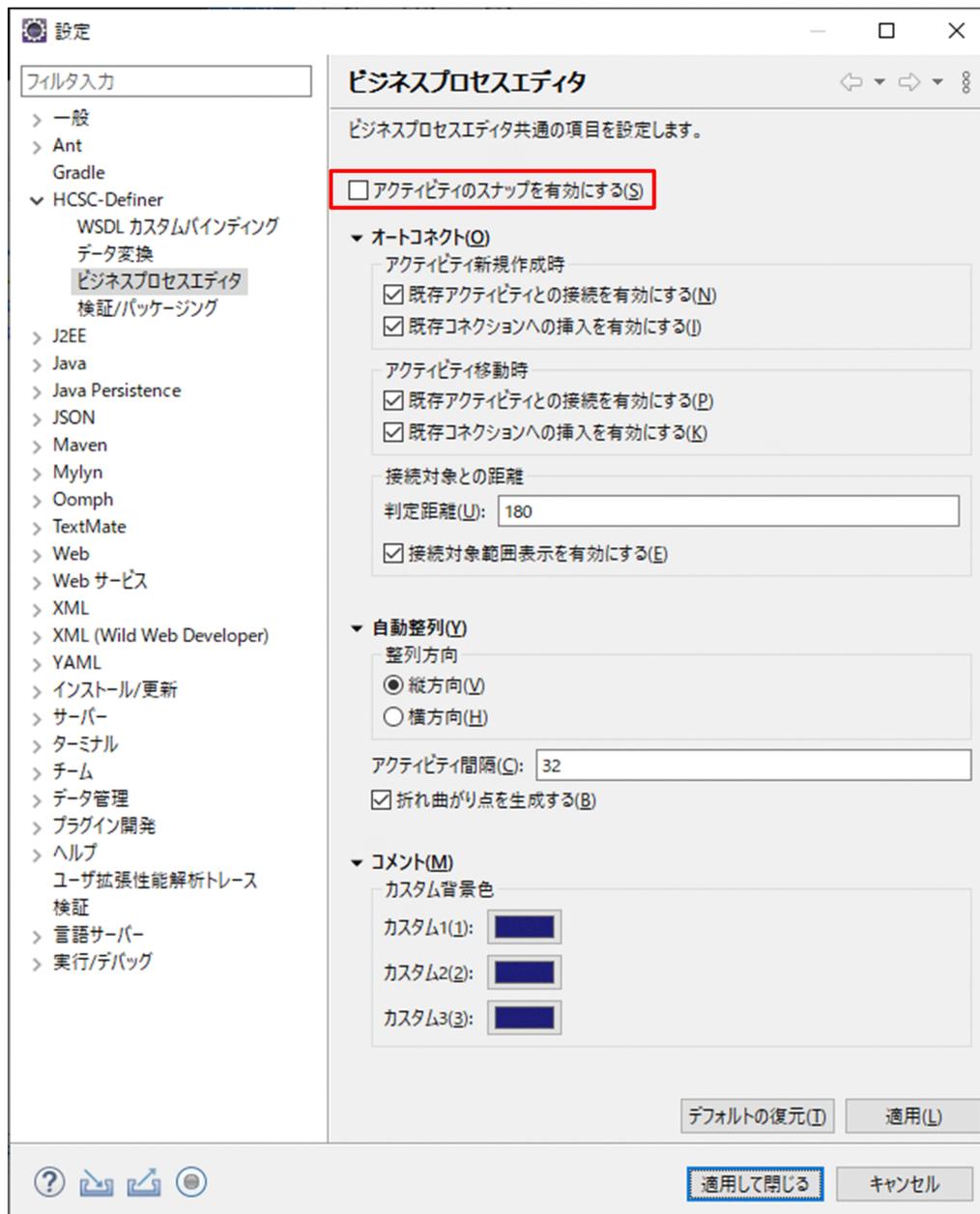
[Alt] キーを押しながらドラッグします。

方法2 (すべてのアクティビティのスナップ機能を解除する)

1. Eclipse のメニューから [ウィンドウ] - [設定] を選択します。
[設定] ダイアログが表示されます。
2. 左ペインで [HCSC-Definer] - [ビジネスプロセスエディタ] を選択します。
右ペインに [ビジネスプロセスエディタ] ページが表示されます。



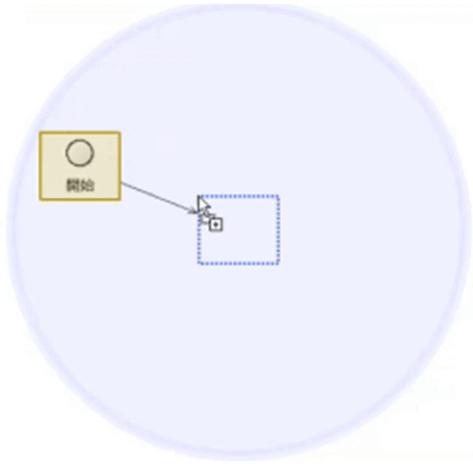
3. [アクティビティのスナップを有効にする] のチェックを外します。



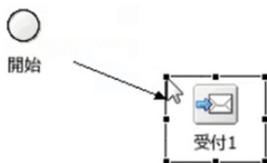
4. [適用して閉じる] ボタンをクリックします。

1.12.16 アクティビティのオートコネクト機能の有効・無効を設定する

アクティビティのオートコネクト機能とは、ビジネスプロセスエディタ上に配置または移動しようとするアクティビティがほかのアクティビティと近づいた際に、コネクションをプレビュー表示する機能です。



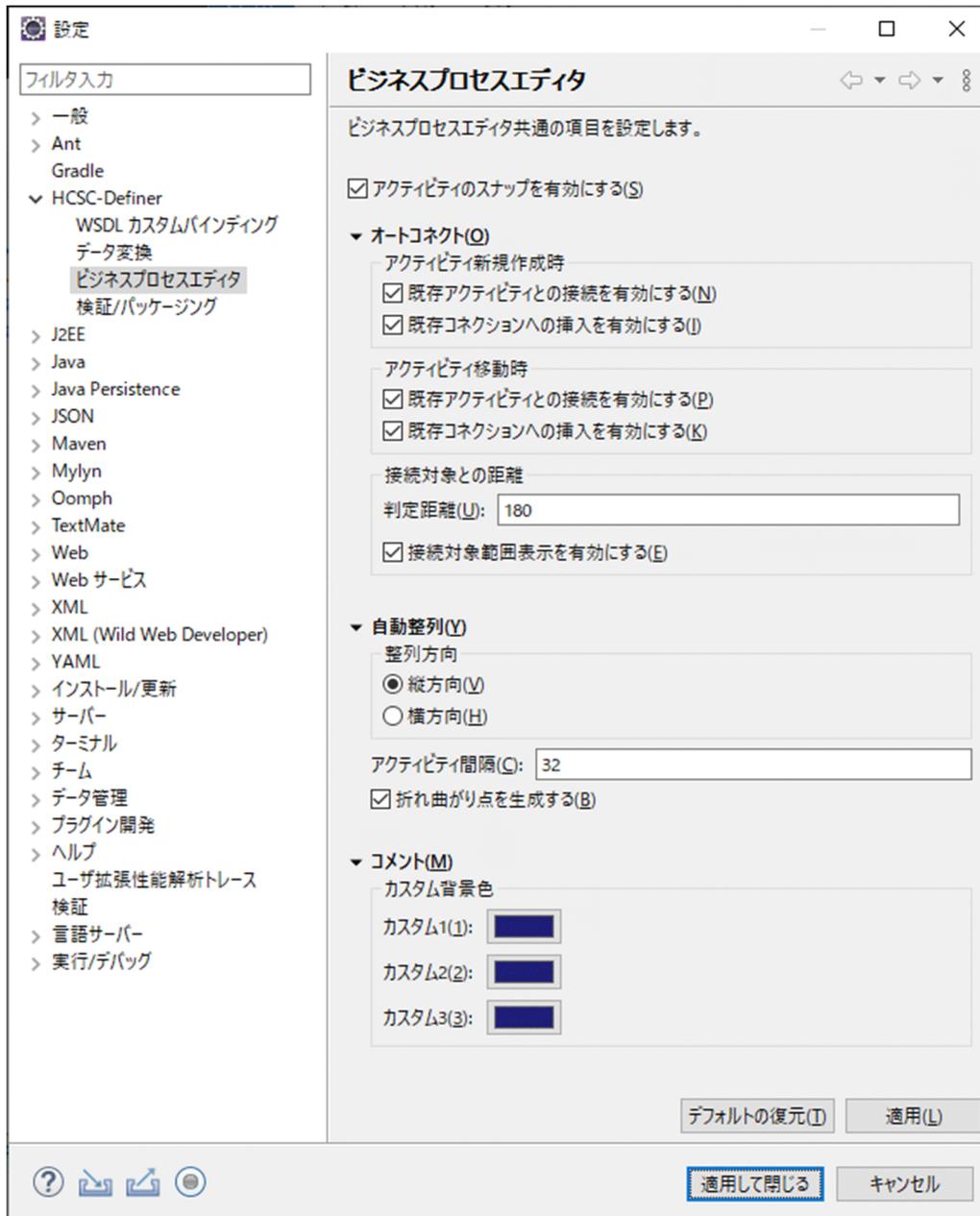
また、連結しているアクティビティに近づくと、それらのアクティビティへ連結する別のコネク션을プレビュー表示することもできます。



この状態でアクティビティを配置すると、コネクションが確定し、アクティビティと連結されます。

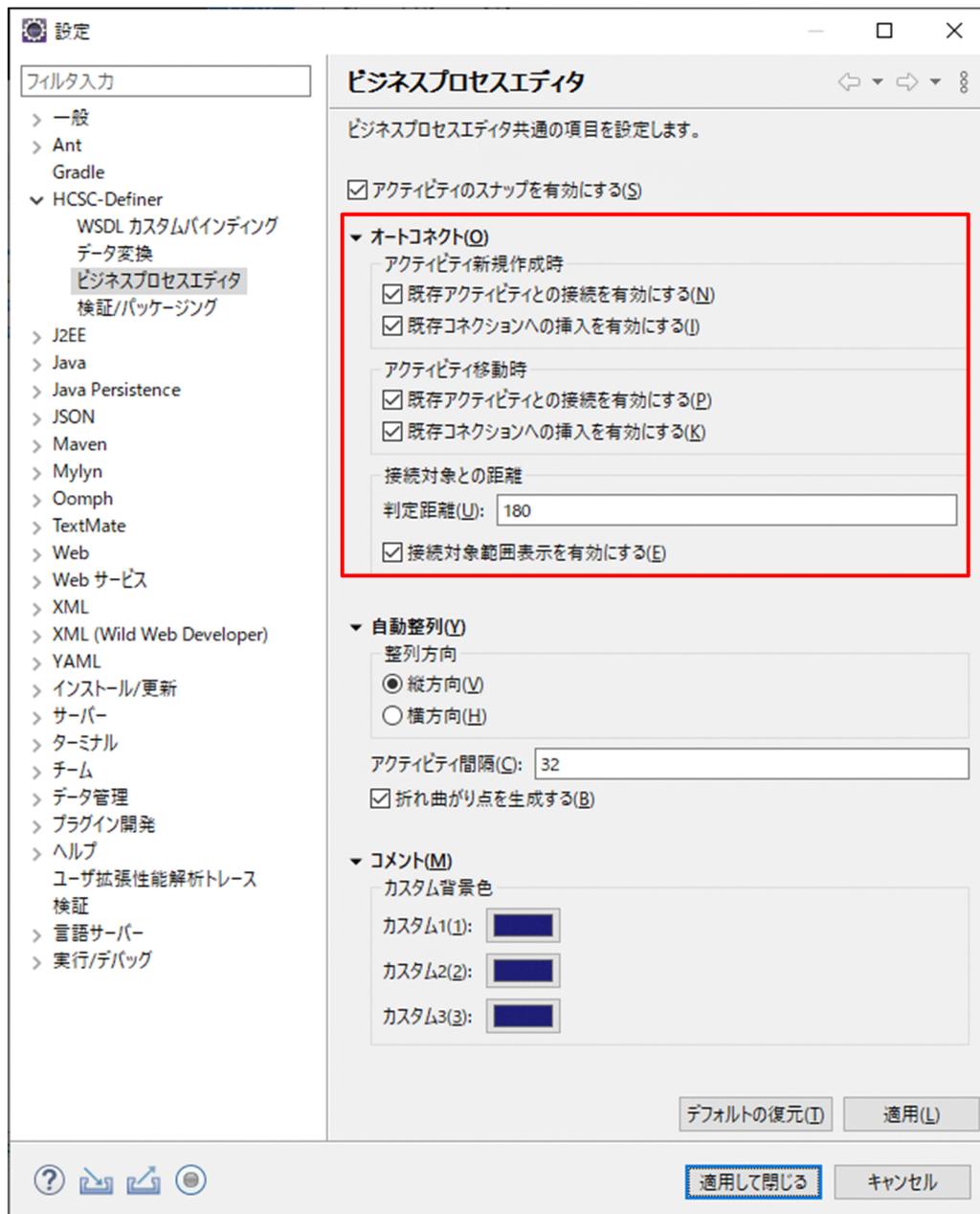
オートコネクト機能はデフォルトで有効になります。オートコネクト機能を無効にしたり、設定を変更したりする手順を次に示します。

1. Eclipse のメニューから [ウィンドウ] - [設定] を選択します。
[設定] ダイアログが表示されます。
2. 左ペインで [HCSC-Definer] - [ビジネスプロセスエディタ] を選択します。
右ペインに [ビジネスプロセスエディタ] ページが表示されます。



3. 「オートコネクト」の項目を必要に応じて修正します。

- 既存のアクティビティとの接続を有効にするか、既存のコネクションへの挿入を有効にするか（アクティビティの新規作成時と移動時とでそれぞれ設定）
- コネクションをプレビュー表示する距離
- アクティビティのドラッグ中に、オートコネクト対象となる範囲を円で表示するか

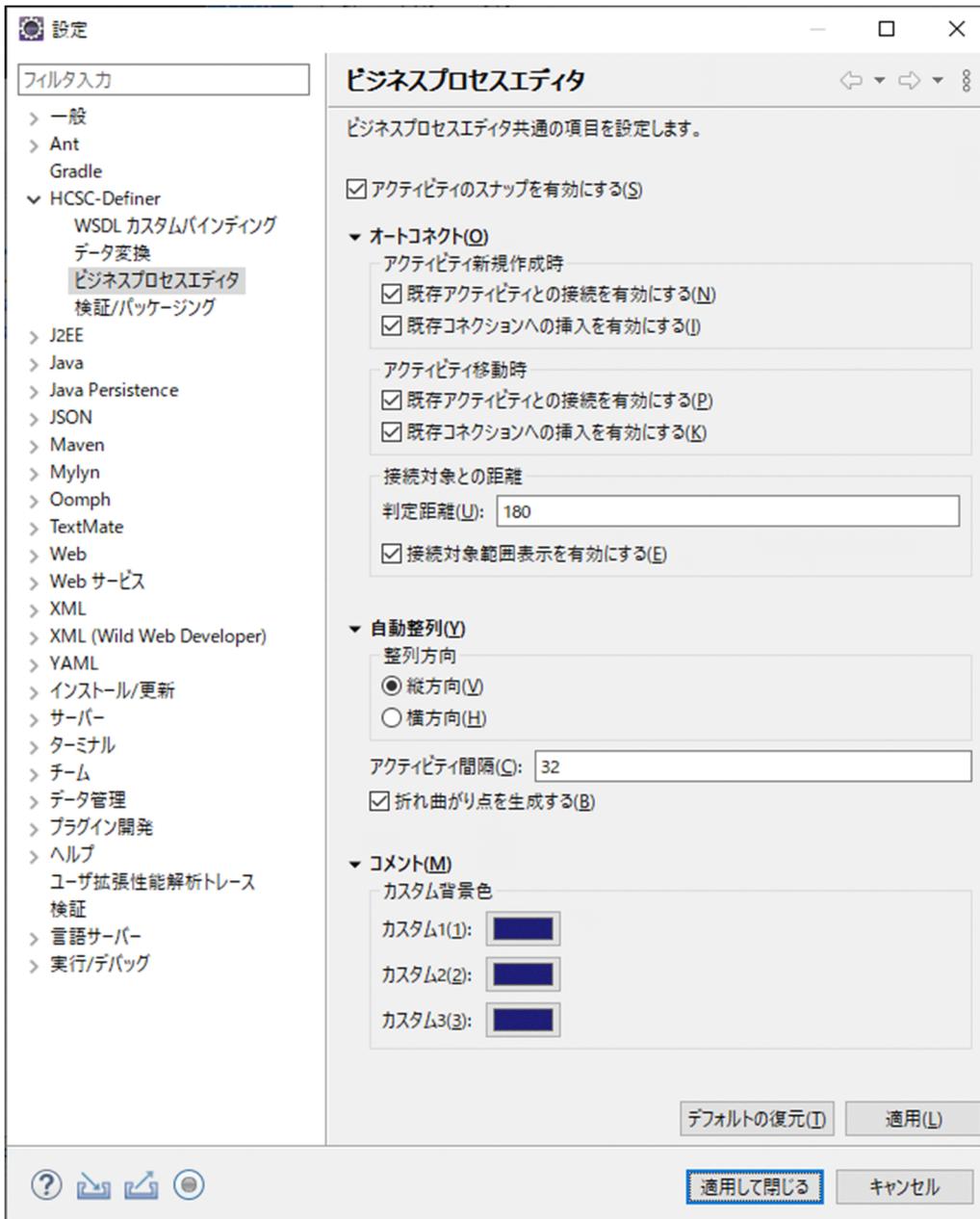


4. [適用して閉じる] ボタンをクリックします。

1.12.17 アクティビティの自動整列機能の設定を変更する

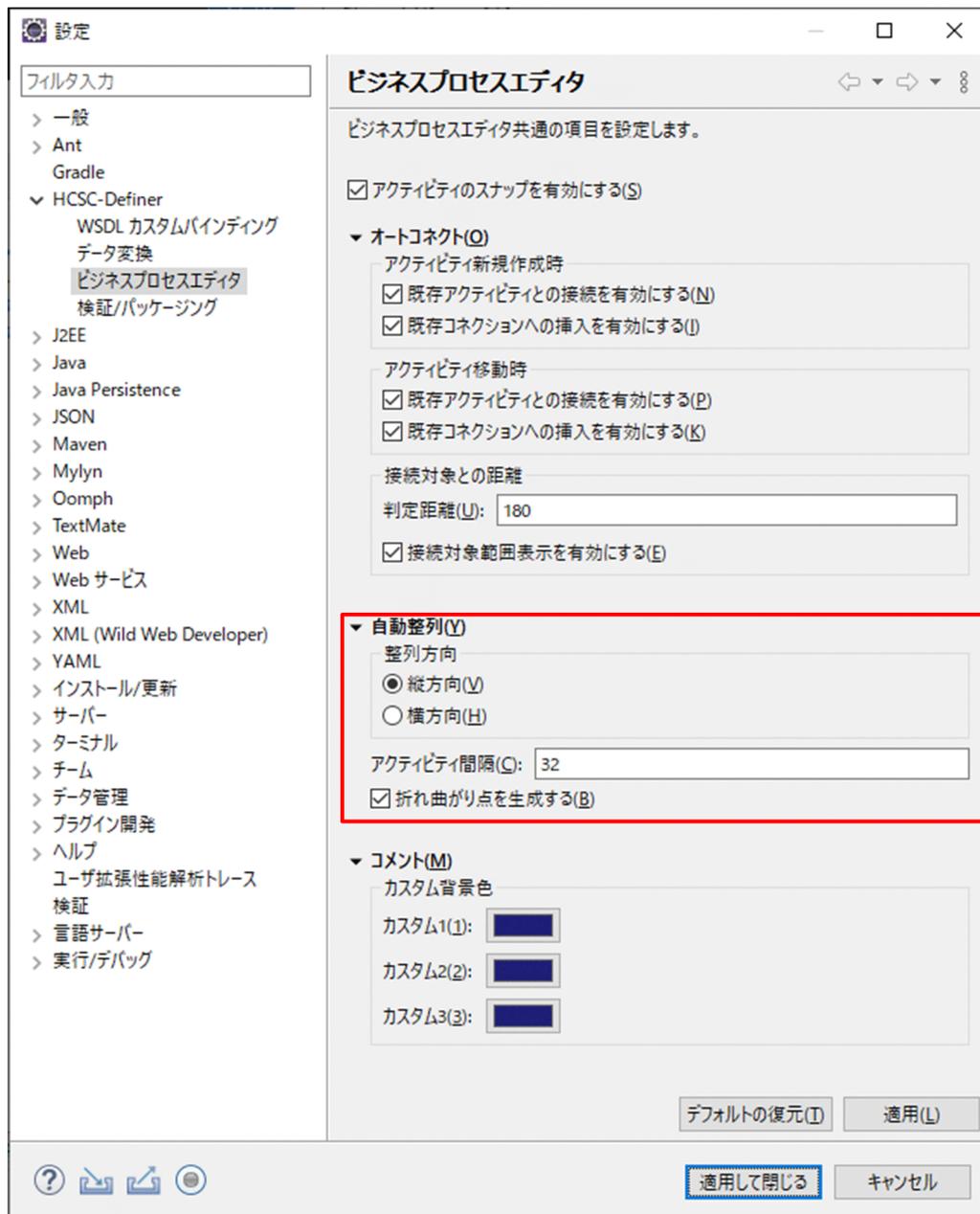
アクティビティの自動整列機能の設定を変更する手順を次に示します。

1. Eclipse のメニューから [ウィンドウ] - [設定] を選択します。
[設定] ダイアログが表示されます。
2. 左ペインで [HCSC-Definer] - [ビジネスプロセスエディタ] を選択します。
右ペインに [ビジネスプロセスエディタ] ページが表示されます。



3. 「自動整列」の項目を必要に応じて修正します。

- 自動整列の方向の選択
縦方向（上から下）
横方向（左から右）
- 整列後のアクティビティ間隔
- 折れ曲がり点を生成するかどうか



4. [適用して閉じる] ボタンをクリックします。

1.12.18 アクティビティのアイコンのラベルサイズを変更する

ビジネスプロセスエディタ上のアクティビティのアイコンは、アイコンの下に表示されるアクティビティ名のラベルのサイズを変更できます。

ラベルサイズの表示形式には可変幅と固定幅があります。表示形式はビジネスプロセスごとに変更することもできます。

■可変幅の場合



StockAllocationPre-processing

ラベルを1行で表示する

■固定幅（ラベル2行）の場合



StockAllocationPre-processing

ラベルの横幅が固定され、
最大2行で表示する

可変幅

1行のラベルにアクティビティ名全体が表示されます。そのため、アクティビティ名が長いほどラベルは長くなります。

11-00までに作成したビジネスプロセスのラベルは、可変幅で表示されます。

固定幅

ラベルの横幅が固定されます。複数行にわたって表示することもできます。

固定幅は、横幅と最大行数の組み合わせの中から選択します。最大行数でも文字列が表示しきれない場合は、ラベルの末尾が「...」と省略されます。

ラベルのサイズの変更手順を次に示します。

1. ビジネスプロセスエディタでキャンバスを選択します。

アクティビティとコネクションが選択されていないことを確認してください。

2. プロパティビューの項目「アイコンサイズ」で設定を変更します。

項目「アイコンサイズ」の設定値とその内容を次に示します。デフォルトは「固定幅（中）－ラベル1行」です。

設定値	横幅	最大行数
可変幅	アクティビティ名の長さ分	1行
固定幅（小）－ラベル1行	短い（70ピクセル）	1行
固定幅（小）－ラベル2行		2行
固定幅（小）－ラベル3行		3行
固定幅（中）－ラベル1行	中程度（105ピクセル）	1行
固定幅（中）－ラベル2行		2行
固定幅（中）－ラベル3行		3行
固定幅（大）－ラベル1行	長い（140ピクセル）	1行
固定幅（大）－ラベル2行		2行
固定幅（大）－ラベル3行		3行

1.13 データ変換定義画面の操作

データ変換定義画面での操作について説明します。

1.13.1 操作を元に戻す

データ変換定義画面で実行した操作を元に戻します。操作は何回でも元に戻すことができます。また、保存したあとでも操作を元に戻すことができます。

操作を元に戻すには、次の2つの方法があります。

方法1

データ変換定義画面上で右クリックして、[元に戻す] を選択します。

方法2

[Ctrl] キー+ [Z] キーを押します。

1.13.2 操作をやり直す

データ変換定義画面で行った操作をやり直します。操作は何回でもやり直すことができます。また、保存したあとでも操作をやり直すことができます。

操作をやり直すには、次の2つの方法があります。

方法1

データ変換定義画面上で右クリックして、[やり直し] を選択します。

方法2

[Ctrl] キー+ [Y] キーを押します。

1.13.3 名前空間接頭辞を XML に出力する

名前空間接頭辞を XML に出力するかどうかは、データ変換定義画面で切り替えられます。切り替え方法を次に示します。

方法

データ変換定義画面上で右クリックして、[名前空間接頭辞を XML に出力する] を選択します。

[名前空間接頭辞を XML に出力する] の左側がチェックされている場合は、XML に名前空間接頭辞が出力されます。

1.13.4 定義を保存する

データ変換定義を保存する方法を次に示します。

方法 1

Eclipse のメニューから、[ファイル] - [保存] を選択します。

方法 2

Eclipse のメニューから、[ファイル] - [すべて保管] を選択します。

方法 3

Eclipse のツールバーの、[保存] アイコンをクリックします。

方法 4

ユーザ定義受付定義画面で、[Ctrl] キー+ [S] キーを押します。

保存したデータ変換定義は再編集できます。再編集する場合は、サービスアダプタ定義画面またはビジネスプロセス定義画面のデータ変換アクティビティから、データ変換定義画面を表示して再編集してください。

1.13.5 マッピング線の色を変更する

マッピング線の色を変更する方法を次に示します。

方法

1. Eclipse のメニューから、[ウィンドウ] - [設定] を選択します。
[設定] ダイアログが表示されます。
2. ダイアログ左側から [HCSC-Definer] - [データ変換] を選択します。
データ変換定義画面の設定項目がダイアログ右側に表示されます。データ変換定義画面の設定項目については、「[1.6.18 設定ダイアログ \(データ変換の設定\)](#)」を参照してください。
3. マッピング線の種類に応じて次のボタンをクリックし、色を設定します。
 - ・代入線の色を設定する場合：[代入] の右側にあるボタン
 - ・くり返し対応線とくり返し連携線の色を設定する場合：[くり返し] の右側にあるボタン
 - ・条件線の色を設定する場合：[条件] の右側にあるボタン各 OS に対応した、色を選択するダイアログが表示されます。表示されたダイアログで、設定したい色を選択します。
4. [適用] ボタンをクリックします。
5. [Apply and Close] ボタンをクリックします。

1.13.6 スキーマツリービューアから要素のパスをコピーする

要素のパスをスキーマツリービューアからクリップボードへコピーする方法を次に示します。

方法

変換元スキーマツリービューアまたは変換先スキーマツリービューアで、コピーしたい要素を選択して右クリックし、コンテキストメニューで [要素パスのコピー] を選択します。

これによって、選択した要素のフルパスがクリップボードに保存されます。

N 対 1 変換時は、「\$<スキーマの論理名 (ビジネスプロセスの変数名)>」を含むパスがコピーされます。

1.13.7 マッピングビューアのファンクションをコピーして貼り付ける

マッピングビューアのファンクションをコピーして、任意の場所に貼り付ける方法を次に示します。

方法

1. マッピングビューアでファンクションを選択して右クリックし、コンテキストメニューで [コピー] を選択します。

[Ctrl] キー+ [C] キーを押す方法でもコピーできます。

複数のファンクションを選択してコピーすることもできます。

2. マッピングビューアの任意の場所で右クリックし、コンテキストメニューで [貼り付け] を選択します。

[Ctrl] キー+ [V] キーを押す方法でも貼り付けられます。

1.14 アウトラインビューのフィルタ機能の設定

アウトラインビューはフィルタ機能を使用することで変数一覧表示、アクティビティ一覧表示の有効・無効を設定できます。

1.14.1 変数一覧表示の有効・無効を設定する

変数一覧表示はデフォルトで有効になります。有効・無効を設定する方法を次に示します。

方法

アウトラインビューのメニューから、[変数一覧を表示] を選択します。

表示する場合、[変数一覧を表示] をチェックしてください。表示しない場合、[変数一覧を表示] のチェックを外してください。



1.14.2 アクティビティ一覧表示の有効・無効を設定する

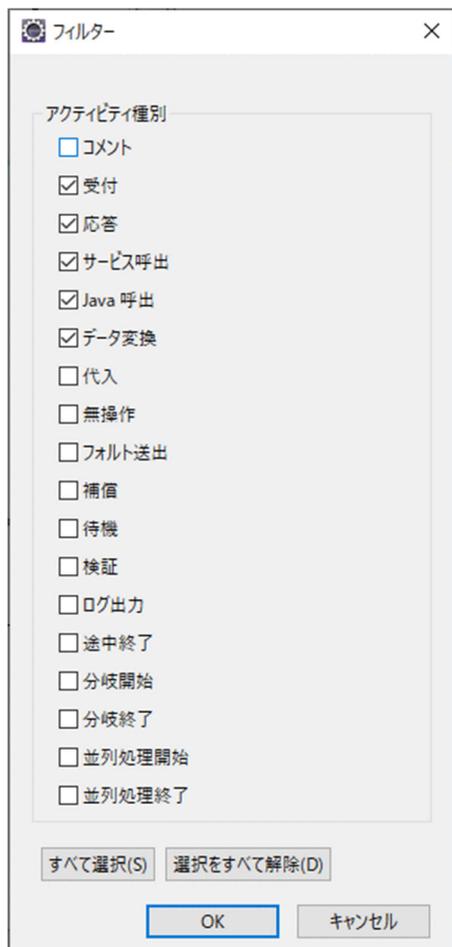
アクティビティ一覧表示はアクティビティの種別ごとに有効・無効を設定できます。アクティビティ一覧表示はデフォルトですべて有効になります。有効・無効を設定する方法を次に示します。

方法

1. アウトラインビューのメニューから、[フィルター] を選択します。
[フィルター] ダイアログが表示されます。



2. アウトラインビューに表示したいアクティビティ種別をチェックします。
表示する場合、[アクティビティ種別] の中の各項目をチェックしてください。表示しない場合、[アクティビティ種別] の中の各項目のチェックを外してください。



3. [OK] ボタンをクリックします。

2

コマンド（開発環境）

この章では、サービスプラットフォームのシステム開発に利用するコマンドについて説明します。

2.1 コマンドの種類

サービスプラットフォームの開発環境で使用するコマンドの一覧を、次の表に示します。

表 2-1 サービスプラットフォームの開発環境で使用するコマンドの一覧

コマンド	説明
csamkxmls	DB アダプタのサービス部品を実行するための DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルを作成します。
cscbinaryparse	DOM とバイナリデータとを変換し、変換後のファイルを出力します。
cscfdx2xsd	バイナリフォーマット定義ファイルから XML フォーマット定義ファイルを生成します。
cscgenbinary	バイナリフォーマット定義ファイルからバイナリ電文を生成します。
cscjson2xsd	JSON 形式データを XSD ファイルに変換し、変換後のファイルを出力します。JSON-XML 変換の標準モードで使用します。
cscjson2xsdadv	JSON 形式データを XSD ファイルに変換し、変換後のファイルを出力します。JSON-XML 変換の拡張モードで使用します。
cscjsonxmlconv	JSON 形式データと XML 形式データとを変換し、変換後のファイルを出力します。JSON-XML 変換の標準モードで使用します。
cscjsonxmlconvadv	JSON 形式データと XML 形式データとを変換し、変換後のファイルを出力します。JSON-XML 変換の拡張モードで使用します。
cscas2servicedef	OpenAPI 仕様書を HCSC コンポーネントの定義に変換します。
cscsoapmode	使用する SOAP モードを設定します。
csctransform	データ変換のテストを実施し、変換後のファイルを出力します。
csmexecutebp	ビジネスプロセスにリクエストを送信します。

2.2 コマンドの入力形式

コマンドの入力形式を次に示します。

コマンド名 [引数…]

各項目について説明します。なお、コマンドプロンプトを「\$」、コマンド名を「cmd」と表記します。

コマンド名

実行するコマンドのファイル名を指定します。

空白を含むパスを指定してコマンドを実行する場合、パス全体を" "で囲む必要があります。

- 誤った指定例：\$ C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CC¥server¥bin¥cmd
- 正しい指定例：\$ "C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CC¥server¥bin¥cmd"

引数

引数には、オプションも含まれます。オプションの入力形式および指定規則を次に示します。

オプションの入力形式

オプションは、「-」（ハイフン）で始まる文字列です。オプションの入力形式には、オプション引数を指定しない形式と、1個のオプション引数を指定する形式があります。

オプション引数を指定しない形式

```
$ cmd -オプションフラグ
```

1個のオプション引数を指定する形式

```
$ cmd -オプションフラグ<スペースまたはタブ>オプション引数
```

(凡例)

- オプションフラグ
 - 1文字の半角英数字です。大文字と小文字が区別されます。
- オプション引数
 - オプションフラグに対する引数です。

オプションの指定規則

- オプションフラグは、1つの「-」（ハイフン）にまとめて指定できません。
誤った指定例：\$ cmd -abc
正しい指定例：\$ cmd -a -b -c
- オプション引数を必要とするオプションフラグのオプション引数は、省略できません。
- オプションフラグとオプション引数の間には、スペースまたはタブが必要です。
誤った指定例：\$ cmd -afile

正しい指定例：`$ cmd -a file`

- 同じオプションフラグは、複数指定できません。

誤った指定例：`$ cmd -a 1 -a 2`

- オプション引数に空白を含む場合、オプション引数全体を""で囲む必要があります。

誤った指定例：`$ cmd -a file 1`

正しい指定例：`$ cmd -a "file 1"`

2.3 コマンドの文法の記述形式

コマンドの文法について次の形式で説明します。

形式

コマンドの入力形式を示します。

機能

コマンドの機能について説明します。

引数

コマンドの引数およびオプションについて説明します。

使用例

コマンドの使用例について説明します。

戻り値

コマンドの戻り値について説明します。

注意事項

コマンドを実行する上での全体的な注意事項について説明します。

注

すべてのコマンドで上記の項目をすべて説明しているわけではありません。また、上記以外に、各コマンドの固有情報を記載している場合があります。

この章の文法の説明で使用している記号を次に示します。

記号	意味
	横に並べられた複数の項目に対する項目間の区切りを示し、「または」を意味します。 (例) A B A または B を指定することを示します。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから1つを選択することを示します。項目が横に並べられ、記号 で区切られている場合は、そのうちの1つを選択します。 (例) {A B C} A, B または C のどれかを指定することを示します。
[]	この記号で囲まれている項目は省略してもよいことを示します。 (例) [A] 「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。
< >	この記号で囲まれている項目は、該当する要素を指定することを示します。 (例) <プロパティ> プロパティを記述します。
…	記述が省略されていることを示します。 (例) ABC…

記号	意味
…	ABC の後ろに記述があり、その記述が省略されていることを示します。
~	この記号の前に示された項目が、記号~に続く< >, (()), << >>などの規則に従うことを示します。
< >	項目を記述するときに従わなければならない構文要素を示します。構文要素については、次の表を参照してください。
(())	項目で指定できる値の範囲を示します。
<< >>	項目を省略したときに、システムが仮定する標準値を示します。

この章で使用している構文要素の種類と定義を次に示します。

種類	定義
英字	A~Z a~z
英小文字	a~z
英大文字	A~Z
数字	0~9
英数字	A~Z a~z 0~9
記号	_ . -
文字列	任意の文字の配列

2.4 サービスプラットフォームの開発環境で使用するコマンド

csamkxmls (DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルの生成)

形式

```
csamkxmls -o <SQLオペレーション定義ファイルの名称>  
          -x <DBアダプタ用のXMLフォーマット定義ファイルの名称>  
          [-f]
```

機能

DB アダプタのサービス部品を実行するための DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルを作成します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

引数

-o <SQL オペレーション定義ファイルの名称> ~ ((1-200 バイト))

SQL 実行形式を記載している SQL オペレーション定義ファイルの名称を指定します。SQL オペレーション定義ファイルの名称は、形式が「csa_sql_<任意の名称>.xml」のファイルを絶対パスで指定します。

-x <DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルの名称> ~ ((1-200 バイト))

作成する DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルの名称を指定します。DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルの名称は、拡張子が「.xsd」のファイルを絶対パスで指定します。なお、XML フォーマット定義ファイルの名称は、200 バイト※以内で指定してください。

注※

XML フォーマット定義ファイルの絶対パスを UTF-8 で変換したときのバイト数です。

-f

作成する DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルと同じ名称の XML フォーマット定義ファイルがすでにある場合、上書きをします。作成する DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルと同じ名称の XML フォーマット定義ファイルがすでにある場合に、このオプションを指定していないと、エラーになります。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscbinaryparse (DOM とバイナリデータの相互変換)

形式

(1) コマンドに引数を直接指定する場合

```
cscbinaryparse -format <バイナリフォーマット定義ファイルのパス>  
                -infile <入力データファイルのパス>  
                -outfile <出力データファイルのパス>  
                [-inverse]  
                [-uocclass <文字コード変換UOCのクラス名>  
                [-uocproperty <文字コード変換UOCの独自定義ファイルのパス>]]  
                [-codetableroopath <コード変換テーブルの格納パスのルートパス>]  
                [-debugtrace [-debugtracefilepath <デバッグ情報の出力先パス>]]  
                [-cscdtsysprop <データ変換用システムプロパティファイルのパス>]  
                [-undefinedcode {ERROR | REPLACE}]
```

(2) コマンドの引数をファイルに指定する場合

```
cscbinaryparse -f <バイナリパースコマンドプロパティファイルのパス>
```

機能

DOM とバイナリデータとを変換し、変換結果をファイル出力します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

コマンドの引数の指定方法には次の 2 種類があります。

- コマンドに引数を直接指定する方法

コマンド実行時に引数を指定する方法です。-f オプションと一緒に指定すると、直接指定した引数はすべて無効となり、-f オプションに指定したバイナリパースコマンドプロパティファイルに記載された引数が有効になります。

- コマンドの引数をファイルに指定する方法

コマンドの引数をバイナリパスコマンドプロパティファイルにプロパティ形式で列記し、そのファイル名を-f オプションで指定する方法です。

システム環境変数 COSMINEXUS_HOME が正しく設定されていない場合、コマンドを実行するとエラーになります。

引数

(1)コマンドに引数を直接指定する場合

-format <バイナリフォーマット定義ファイルのパス>

バイナリフォーマット定義ファイル (.fdx) のパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できません。

-infile <入力データファイルのパス>

入力データファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できません。

指定できるデータの種類を次に示します。

- バイナリデータ
- 次のどちらかの DOM データ (XML)
 - バイナリデータから DOM 変換で生成した DOM データ
 - XML スキーマファイル (-format オプションで指定したバイナリフォーマット定義ファイルを cscfdx2xsd コマンドに指定して生成) に沿った DOM データ

-outfile <出力データファイルのパス>

出力データファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。出力先のディレクトリが存在しない場合はエラーになります。この引数は省略できません。

指定したパスに同名のファイルが存在する場合、ファイルを上書きします。同名のファイルが存在しない場合は、ファイルを新たに作成します。

-inverse

バイナリと DOM の変換動作を指定します。この引数は省略できます。

- この引数を指定した場合
DOM データをバイナリデータに変換します。
- この引数を指定しない場合
バイナリデータを DOM データに変換します。

-uocclass <文字コード変換 UOC のクラス名>

文字コード変換 UOC のクラス名を完全修飾名で指定します。この引数は省略できます。

文字コード変換 UOC のクラス名は、この引数とバイナリパースコマンドプロパティファイルのほかに、データ変換用システムプロパティファイルでも指定できます。指定が重複した場合は、次に示す優先順位に従って指定値が適用されます。

優先順位	プロパティファイル名/コマンド名	該当するプロパティ名/引数名
1	データ変換用システムプロパティファイル	csc.dt.ownCodeConverter.className
2	バイナリパースコマンドプロパティファイル	csctransform.uoc.class
3	cscbinaryparse コマンド	-uocclass

データ変換用システムプロパティファイルの csc.dt.ownCodeConverter.className の設定については、「3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル」を参照してください。

なお、文字コード変換 UOC を使用する場合は、文字コード変換 UOC の jar ファイルをシステム環境変数 CSC_DATA_TRANSFORM_CLASSPATH に設定してください。外部の jar ファイルに定義されているクラスをカスタムファンクションや文字コード変換 UOC から呼び出す場合も、該当する jar ファイルを環境変数に設定する必要があります。

-uocproperty <文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス>

-uocclass オプションが指定されている場合に、文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

-uocclass オプションが指定されていない場合は、この引数の指定は無効となります。-uocclass オプションを指定してこの引数を省略した場合は、独自定義ファイルを読み込まない状態で文字コード変換 UOC のクラスがデータ変換時に実行されます。

-codetablerootpath <コード変換テーブルの格納パスのルートパス>

コード変換ライブラリで使用するコード変換テーブル格納パスのルートパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

-debugtrace

デバッグ情報を出力する場合に指定します。この引数は省略できます。

-debugtracefilepath <デバッグ情報の出力先パス> ~<<コマンドを実行したカレントディレクトリ>>

-debugtrace オプションを指定している場合、デバッグ情報の出力先パスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

この引数を設定していない場合、出力先を指定していない場合、または指定したディレクトリが存在しない場合は、コマンドを実行したカレントディレクトリにデバッグ情報が出力されます。

-cscdtsysprop <データ変換用システムプロパティファイルのパス>

データ変換用システムプロパティファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

データ変換用システムプロパティファイルは、Service Platform のデータ変換のシステムプロパティを指定したファイルです。指定方法については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。

-undefinedcode {ERROR | REPLACE} ~<<ERROR>>

バイナリデータの文字コード変換時に未定義の文字コードを検出した場合の動作を指定します。この引数は省略できます。

指定できる値は次のとおりです。

- ERROR
未定義の文字コードを検出した時点でエラーとし、処理を終了します。
- REPLACE
未定義部分の文字コードを空白の文字コードに置換して処理を継続します。

(2)コマンドの引数をファイルに指定する場合

-f<バイナリパースコマンドプロパティファイルのパス>

バイナリパースコマンドプロパティファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

バイナリパースコマンドプロパティファイル

cscbinaryparse コマンドの引数を Java のプロパティファイル形式で列記したファイルです。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。

バイナリパースコマンドプロパティファイルの定義方法については、「[3.19.5 バイナリパースコマンドプロパティファイル](#)」を参照してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。

注意事項

- コマンドの実行時にスタックオーバーフローや OOM (Out Of Memory) が発生した場合、システム環境変数 CSC_DATA_TRANSFORM_OPT に JavaVM 起動オプションを指定して、スタック領域やヒープ領域の値を設定してください。

システム環境変数に指定できる JavaVM 起動オプションを次に示します。

JavaVM 起動オプション	説明
-Xms	ヒープ領域 (New 領域 + Old 領域) の初期値

JavaVM 起動オプション	説明
-Xmx	ヒープ領域（New 領域 + Old 領域）の最大値
-Xss	スレッドのスタックサイズ
-XX:MetaspaceSize	Metaspace 領域に起因する FullGC の基準値の指定
-XX:MaxMetaspaceSize	Metaspace 領域の最大値の指定

- パスをワイルドカードで指定した場合の動作は保証しません。

cscfdx2xsd (バイナリフォーマット定義ファイルから XML フォーマット定義ファイルの生成)

形式

```
cscfdx2xsd <fdxファイルパス> [<xsdファイルパス>]
```

機能

バイナリフォーマット定義ファイルから XML フォーマット定義ファイルを生成します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

引数

<fdx ファイルパス>

入力するバイナリフォーマット定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

指定できるファイルは 1 つだけです。ワイルドカードの指定によって複数ファイルが選択された場合はエラーになります。

<xsd ファイルパス>

出力する XML フォーマット定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

この指定を省略した場合、<fdx ファイルパス>に指定したパスの拡張子を「.xsd」に変更したファイルパスが仮定されます。

使用例

(1) バイナリフォーマット定義ファイル「CSVFormat.fdx」からXMLフォーマット定義ファイル「CSVFormat.xsd」を生成する場合

```
C:¥> cscfdx2xsd CSVFormat.fdx
KECT91001-I The XML schema file was created successfully. (file = CSVFormat.xsd)
C:¥>
```

(2) バイナリフォーマット定義ファイル「BinFormat.fdx」からXMLフォーマット定義ファイル「XMLFormat.xsd」を生成して、既存のXMLフォーマット定義ファイル「XMLFormat.xsd」に上書きをする場合

```
C:¥> cscfdx2xsd BinFormat.fdx XMLFormat.xsd
KECT91002-Q The specified XML schema file already exists. Do you want to overwrite it? [Y/N]:y
KECT91001-I The XML schema file was created successfully. (file = XMLFormat.xsd)
C:¥>
```

戻り値

このコマンドには戻り値はありません。メッセージが標準出力に出力されます。

注意事項

次の場合はエラーになります。

- バイナリフォーマット定義ファイルの検証が完了していない場合
- バイナリフォーマット定義ファイルの拡張子が「.fdx」以外の場合
- 指定したバイナリフォーマット定義ファイルが存在しない場合
- バイナリフォーマット定義ファイルとして読み込むことができない場合
- バイナリフォーマット定義ファイルの指定、またはXMLフォーマット定義ファイルの指定で、ワイルドカードを使用した場合
- 変換処理中に何らかのエラーが発生した場合

cscgenbinary (バイナリフォーマット定義ファイルからバイナリ電文の生成)

形式

(1) コマンドに引数を直接指定する場合

```
cscgenbinary -format <バイナリフォーマット定義ファイルのパス>
               {-outbinfile <出力バイナリファイルのパス>
                [-inxmlfile <入力XMLファイルのパス>]
                | -outxmlfile <出力XMLファイルのパス>}
               [-genproperty <バイナリ電文生成定義ファイルのパス>]
```

```
[-uocclass <文字コード変換UOCのクラス名>
[-uocproperty <文字コード変換UOCの独自定義ファイルのパス>]]
[-codetablerrootpath <コード変換テーブルの格納パスのルートパス>]
[-debugtrace [-debugtracefilepath <デバッグ情報の出力先パス>]]
[-cscdtsysprop <データ変換用システムプロパティファイルのパス>]
[-undefinedcode {ERROR | REPLACE}]
```

(2)コマンドの引数をファイルに指定する場合

```
cscgenbinary -f <バイナリ電文生成コマンドプロパティファイルのパス>
```

機能

バイナリフォーマット定義ファイルからバイナリ電文を生成します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

コマンドの引数の指定方法には次の2種類があります。

- コマンドに引数を直接指定する方法
コマンド実行時に引数を指定する方法です。-f オプションと一緒に指定すると、直接指定した引数はすべて無効となり、-f オプションに指定したバイナリ電文生成コマンドプロパティファイルに記載された引数が有効になります。
- コマンドの引数をファイルに指定する方法
コマンドの引数をバイナリ電文生成コマンドプロパティファイルにプロパティ形式で列記し、そのファイル名を-f オプションで指定する方法です。

システム環境変数 COSMINEXUS_HOME が正しく設定されていない場合、コマンドを実行するとエラーになります。

cscgenbinary コマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「10.5.7 cscgenbinary コマンドの使用方法」を参照してください。

引数

(1)コマンドに引数を直接指定する場合

-format <バイナリフォーマット定義ファイルのパス>

エディタでの検証が完了しているバイナリフォーマット定義ファイル (.fdx) のパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。拡張子の`大文字`・`小文字`は区別しません。この引数は省略できません。

-outbinfile <出力バイナリファイルのパス>

出力バイナリファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。出力先のディレクトリが存在しない場合はエラーになります。

-outbinfile オプション（出力バイナリファイルのパス）と-outxmlfile オプション（出力 XML ファイルのパス）は、どちらか一方を指定してください。

指定したパスに同名のファイルが存在する場合、ファイルを上書きします。同名のファイルが存在しない場合は、ファイルを新たに作成します。

-inxmlfile <入力 XML ファイルのパス>

XML ファイルからバイナリ電文を生成する場合に、入力 XML ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

-outxmlfile オプションと同時に指定すると、この引数の指定は無効になります。

指定する入力 XML ファイルは、バイナリフォーマット定義ファイル（-format オプションで指定）を基に cscfdx2xsd コマンドで生成した XML スキーマファイルに沿っている必要があります。XML スキーマファイルに沿っていない場合は動作を保証しません。

-outxmlfile <出力 XML ファイルのパス>

出力 XML ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。出力先のディレクトリが存在しない場合はエラーになります。この引数は省略できません。

-outbinfile オプション（出力バイナリファイルのパス）と-outxmlfile オプション（出力 XML ファイルのパス）は、どちらか一方を指定してください。

指定したパスに同名のファイルが存在する場合、ファイルを上書きします。同名のファイルが存在しない場合は、ファイルを新たに作成します。

-genproperty <バイナリ電文生成定義ファイルのパス>

バイナリ電文生成定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

-inxmlfile オプションと同時に指定すると、この引数の指定は無効になります。

バイナリ電文生成定義ファイルは、単純内容要素の要素値をデフォルト値から変更したい場合に作成します。バイナリ電文生成定義ファイルについては、[\[3.19.4 バイナリ電文生成定義ファイル\]](#)を参照してください。

-uocclass <文字コード変換 UOC のクラス名>

文字コード変換 UOC のクラス名を完全修飾名で指定します。この引数は省略できます。

なお、文字コード変換 UOC のクラス名は、次に示すファイルまたはコマンドでも指定できます。指定が重複した場合に適用される優先順位を次に示します。

優先順位	プロパティファイル名/コマンド名	該当するプロパティ名/引数名
1	データ変換用システムプロパティファイル	csc.dt.ownCodeConverter.className
2	バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル	csctransform.uoc.class
3	cscgenbinary コマンド	-uocclass

データ変換用システムプロパティファイルの `csc.dt.ownCodeConverter.className` の設定については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。

なお、文字コード変換 UOC を使用する場合は、文字コード変換 UOC の jar ファイルをシステム環境変数 `CSC_DATA_TRANSFORM_CLASSPATH` に設定してください。外部の jar ファイルに定義されているクラスをカスタムファンクションや文字コード変換 UOC から呼び出す場合も、該当する jar ファイルを環境変数に設定する必要があります。

-uocproperty <文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス>

`-uocclass` オプションが指定されている場合に、文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

`-uocclass` オプションが指定されていない場合は、この引数の指定は無効となります。`-uocclass` オプションを指定してこの引数を省略した場合は、独自定義ファイルを読み込まない状態で文字コード変換 UOC のクラスがデータ変換時に実行されます。

-codetablerootpath <コード変換テーブルの格納パスのルートパス>

コード変換ライブラリで使用するコード変換テーブル格納パスのルートパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

-debugtrace

デバッグ情報を出力する場合に指定します。この引数は省略できます。

-debugtracefilepath <デバッグ情報の出力先パス> ~<<コマンドを実行したカレントディレクトリ>>

`-debugtrace` オプションを指定している場合、デバッグ情報の出力先パスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

この引数を設定していない場合、デバッグ情報の出力先を指定していない場合、または指定したディレクトリが存在しない場合は、コマンドを実行したカレントディレクトリにデバッグ情報が出力されます。

-cscdtsysprop <データ変換用システムプロパティファイルのパス>

データ変換用システムプロパティファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

データ変換用システムプロパティファイルは、Service Platform のデータ変換のシステムプロパティを指定したファイルです。指定方法については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。

-undefinedcode {ERROR | REPLACE} ~<<ERROR>>

バイナリデータの文字コード変換時に未定義の文字コードを検出した場合の動作を指定します。この引数は省略できます。

指定できる値は次のとおりです。

- ERROR
未定義の文字コードを検出した時点でエラーとし、処理を終了します。
- REPLACE
未定義部分の文字コードを空白の文字コードに置換して処理を継続します。

(2)コマンドの引数をファイルに指定する場合

-f<バイナリ電文生成コマンドプロパティファイルのパス>

バイナリ電文生成コマンドプロパティファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル

cscgenbinary コマンドの引数を Java のプロパティファイル形式で列記したファイルです。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。

バイナリ電文生成コマンドプロパティファイルの定義方法については、「[3.19.3 バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル](#)」を参照してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。

注意事項

- コマンドの実行時にスタックオーバーフローや OOM (Out Of Memory) が発生した場合、システム環境変数 CSC_DATA_TRANSFORM_OPT に JavaVM 起動オプションを指定して、スタック領域やヒープ領域の値を設定してください。

システム環境変数に指定できる JavaVM 起動オプションを次に示します。

JavaVM 起動オプション	説明
-Xms	ヒープ領域 (New 領域 + Old 領域) の初期値
-Xmx	ヒープ領域 (New 領域 + Old 領域) の最大値
-Xss	スレッドのスタックサイズ
-XX:MetaspaceSize	Metaspace 領域に起因する FullGC の基準値の指定

JavaVM 起動オプション	説明
-XX:MaxMetaspaceSize	Metaspace 領域の最大値の指定

- パスをワイルドカードで指定した場合の動作は保証しません。

cscjson2xsd (JSON 形式データから XSD ファイルへの変換 (標準モード))

形式

```
cscjson2xsd -in {<JSONファイルパス>
              | <JSONファイルを格納したディレクトリのパス>}
              -out <XSDファイルパス>
              [-f <JSON-XML変換定義ファイルのパス>]
```

機能

JSON 形式データから XSD ファイルを生成します。JSON-XML 変換の標準モードで使用します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

引数

-in {<JSON ファイルパス> | <JSON ファイルを格納したディレクトリのパス>}

JSON ファイル (拡張子 [.json]) の格納場所を絶対パスまたは相対パスで指定します。相対パスの場合、カレントディレクトリをパスの起点とします。次のどちらかの方法で指定します。

- JSON ファイルのパス
入力する JSON ファイルのパスを指定します。
- JSON ファイルを格納したディレクトリのパス
入力する JSON ファイルを格納したディレクトリのパスを指定します。
指定したディレクトリ直下にあるすべての JSON ファイルが入力対象となります。指定したディレクトリ直下に JSON ファイルが 1 つも存在しない場合は、エラーとなります。

-out <XSD ファイルパス>

出力する XSD ファイル (拡張子 [.xsd]) のパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。相対パスの場合、カレントディレクトリをパスの起点とします。

指定されたディレクトリが存在しない場合は、ディレクトリを生成してファイルを出力します。すでに同名のファイルがある場合はファイルを上書きします。

-f <JSON-XML 変換定義ファイルのパス> ~<<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>>%CSCTE%config%tools%json%csc_json_converter.properties>>

JSON 形式データと XML 形式データとの変換動作が指定された JSON-XML 変換定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。相対パスの場合、カレントディレクトリをパスの起点とします。

JSON-XML 変換定義ファイルを適用するには、次の 2 とおりの方法があります。

- 引数-f で、任意の JSON-XML 変換定義ファイルを指定する方法
任意のファイル名の JSON-XML 変換定義ファイルを指定できます。
- 引数-f を指定しないで、所定のファイルを自動的に読み込ませる方法
引数-f の指定を省略すると、次に示すファイルが読み込まれます。事前に JSON-XML 変換定義ファイルを次に示すファイル名で格納しておく必要があります。ファイル内容は編集することもできます。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%config%tools%json%csc_json_converter.properties
```

このファイルが存在しない場合は、JSON-XML 変換ライブラリのデフォルト値で動作します。JSON-XML 変換ライブラリについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「13.2 JSON-XML 変換 API を使用したデータの形式変換」を参照してください。

JSON-XML 変換定義ファイル

JSON 形式データと XML 形式データとの変換動作を Java のプロパティファイル形式で列記したファイルです。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。このファイルは、cscjson2xsd コマンドと cscjsonxmlconv コマンドの両方で指定できます。

テンプレートファイルを次に示します。編集後、引数-f を指定する場合は任意のファイル名で格納してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%templates%csc_json_converter.properties
```

JSON-XML 変換定義ファイルの定義方法については、「3.18.1 JSON-XML 変換定義ファイル」を参照してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、管理者権限のあるユーザで実行してください。
- システム環境変数 COSMINEXUS_HOME が正しく設定されていることが必要です。

cscjson2xsdadv (JSON 形式データから XSD ファイルへの変換 (拡張モード))

形式

```
cscjson2xsdadv -in <JSONファイルパス>
               -out <XSDファイルパス>
```

機能

JSON 形式データから XSD ファイルを生成します。JSON-XML 変換の拡張モードで使用します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

引数

-in <JSON ファイルパス>

JSON ファイル (拡張子「.json」) の格納場所を絶対パスまたは相対パスで指定します。相対パスの場合、カレントディレクトリをパスの起点とします。

入力する JSON ファイルのパスを指定してください。拡張子「.json」以外のファイルを指定するとエラーになります。

-out <XSD ファイルパス>

出力する XSD ファイル (拡張子「.xsd」) のパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。相対パスの場合、カレントディレクトリをパスの起点とします。

指定されたディレクトリが存在しない場合は、ディレクトリを生成してファイルを出力します。すでに同名のファイルがある場合はファイルを上書きします。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、管理者権限のあるユーザで実行してください。

cscjsonxmlconv (JSON 形式データと XML 形式データの相互変換 (標準モード))

形式

```
cscjsonxmlconv -in <入力ファイルのパス>  
                -out <出力ファイルのパス>  
                [-f <JSON-XML変換定義ファイルのパス>]
```

機能

JSON 形式データと XML 形式データとを相互に変換した結果をファイルとして生成します。JSON-XML 変換の標準モードで使用します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

引数

-in <入力ファイルのパス>

入力ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。指定できるのは拡張子「.json」または「.xml」のファイルだけです。

-out <出力ファイルのパス>

出力ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。指定できるファイルは、-in オプションで指定したファイルによって異なります。

- -in オプションで指定したファイルが、拡張子「.json」のファイルの場合
拡張子「.xml」のファイルだけ指定できます。
- -in オプションで指定したファイルが、拡張子「.xml」のファイルの場合
拡張子「.json」のファイルだけ指定できます。

指定されたディレクトリが存在しない場合は、ディレクトリを生成してファイルを出力します。すでに同名のファイルがある場合はファイルを上書きします。

-f <JSON-XML 変換定義ファイルのパス> ~<<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%config%tools%json%csc_json_converter.properties>>

JSON 形式データと XML 形式データとの変換動作が指定された JSON-XML 変換定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

JSON-XML 変換定義ファイルを適用するには、次の 2 とおりの方法があります。

- 引数-fで、任意のJSON-XML変換定義ファイルを指定する方法
任意のファイル名のJSON-XML変換定義ファイルを指定できます。
- 引数-fを指定しないで、所定のファイルを自動的に読み込ませる方法
引数-fの指定を省略すると、次に示すファイルが読み込まれます。事前にJSON-XML変換定義ファイルを次に示すファイル名で格納しておく必要があります。ファイル内容は編集することもできます。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%config%tools%json%csc_json_converter.properties
```

このファイルが存在しない場合は、JSON-XML変換ライブラリのデフォルト値で動作します。JSON-XML変換ライブラリについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「13.2 JSON-XML変換APIを使用したデータの形式変換」を参照してください。

JSON-XML変換定義ファイル

JSON形式データとXML形式データとの変換動作をJavaのプロパティファイル形式で列記したファイルです。使用できる文字コードはUTF-8だけです。このファイルは、cscjson2xsdコマンドとcscjsonxmlconvコマンドの両方で指定できます。

テンプレートファイルを次に示します。編集後、引数-fを指定する場合は任意のファイル名で格納してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%templates%csc_json_converter.properties
```

JSON-XML変換定義ファイルの定義方法については、「3.18.1 JSON-XML変換定義ファイル」を参照してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、管理者権限のあるユーザで実行してください。
- システム環境変数COSMINEXUS_HOMEが正しく設定されていることが必要です。

cscjsonxmlconvadv (JSON 形式データと XML 形式データの相互変換 (拡張モード))

形式

```
cscjsonxmlconvadv -in <入力ファイルのパス>  
                  -xsd <入力XSDファイルのパス>  
                  -out <出力ファイルのパス>
```

機能

JSON 形式データと XML 形式データとを相互に変換した結果をファイルとして生成します。JSON-XML 変換の拡張モードで使用します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

引数

-in <入力ファイルのパス>

入力ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。指定できるのは拡張子「.json」または「.xml」のファイルだけです。

-xsd <入力 XSD ファイルのパス>

XSD ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。指定できるのは拡張子「.xsd」のファイルだけです。

-out <出力ファイルのパス>

出力ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。指定できるファイルは、-in オプションで指定したファイルによって異なります。

- -in オプションで指定したファイルが、拡張子「.json」のファイルの場合
拡張子「.xml」のファイルだけ指定できます。
- -in オプションで指定したファイルが、拡張子「.xml」のファイルの場合
拡張子「.json」のファイルだけ指定できます。

指定されたディレクトリが存在しない場合は、ディレクトリを生成してファイルを出力します。すでに同名のファイルがある場合はファイルを上書きします。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、管理者権限のあるユーザで実行してください。

cscواس2servicedef (OpenAPI 仕様書を HCSC コンポーネントの定義に変換)

形式

```
cscواس2servicedef -in <OpenAPI仕様書のファイルパス>
                  -out <出力先ディレクトリパス>
                  [-f <JSON-XML変換定義ファイルのパス>]
                  [-mediaTypePriority <メディアタイプの優先順位>]
```

機能

OpenAPI 仕様書から、HTTP 受付またはビジネスプロセスの次に示す定義を生成します。

- サービス定義 XML ファイル
- 電文のスキーマ
- 独自定義ファイル

必要に応じて生成した定義を編集し、サービス定義のインポート機能を使って HTTP 受付またはビジネスプロセスを生成できます。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

OpenAPI 仕様書から HTTP 受付を作成する方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.15.14 OpenAPI 仕様書から HCSC コンポーネントを作成する OpenAPI 仕様書インポート機能」を参照してください。

引数

-in <OpenAPI 仕様書のファイルパス>

OpenAPI 仕様書のファイルパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。指定できるのは拡張子「.yaml」または「.json」のファイルだけです。

なお、OpenAPI 仕様書に使用できる文字コードは UTF-8 だけです。UTF-8 以外の文字コードのファイルを指定した場合の動作は保証しません。

-out <出力先ディレクトリパス>

出力先ディレクトリのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。指定したディレクトリが存在しない場合は、指定されたディレクトリ名を作成したうえでファイルを出力します。

出力されるファイルの種類については、項目「出力形式」を参照してください。

-f <JSON-XML 変換定義ファイルのパス> ~<<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>>%CSCTE%config%tools%json%csc_json_converter.properties>>

JSON-XML 変換定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

HTTP 受付で JSON データを受信する場合（JSON-XML 変換機能を利用する場合）は必要に応じて JSON-XML 変換定義ファイルを作成し、指定してください。

JSON-XML 変換定義ファイルを適用するには、次の 2 とおりの方法があります。

- 引数-f で、任意の JSON-XML 変換定義ファイルを指定する方法
任意のファイル名の JSON-XML 変換定義ファイルを指定できます。
- 引数-f を指定しないで、所定のファイルを自動的に読み込ませる方法
引数-f の指定を省略すると、次に示すファイルが読み込まれます。事前に JSON-XML 変換定義ファイルを次に示すファイル名で格納しておく必要があります。ファイル内容は編集することもできます。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%config%tools%json%csc_json_converter.properties
```

このファイルが存在しない場合は、JSON-XML 変換ライブラリのデフォルト値で動作します。JSON-XML 変換ライブラリについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「13.2 JSON-XML 変換 API を使用したデータの形式変換」を参照してください。

JSON-XML 変換定義ファイル

JSON 形式データと XML 形式データとの変換動作を Java のプロパティファイル形式で列記したファイルです。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。テンプレートファイルを次に示します。編集後、引数-f を指定する場合は任意のファイル名で格納してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%templates%csc_json_converter.properties
```

JSON-XML 変換定義ファイルの定義方法については、「3.18.1 JSON-XML 変換定義ファイル」を参照してください。

-mediaTypePriority <メディアタイプの優先順位> ~<<json,xml,form>>

XML Schema を生成するためのメディアタイプの優先順位を指定します。

「json」「xml」「form」を優先順位の高いほうからコンマ区切りで指定します。コンマの前後にはスペースを入れないで連続して指定してください。例えば、優先順位を XML→JSON→FORM とする場合は、「xml,json,form」と指定します。

優先順位として指定できる組み合わせを次に示します。

- json,xml,form (デフォルト)
- json,form,xml
- xml,json,form
- xml,form,json
- form,json,xml
- form,xml,json
- json,xml
- json,form
- xml,json
- xml,form
- form,json
- form,xml
- json
- xml
- form

出力形式

コマンド実行後、「<-out オプションで指定した出力先ディレクトリ>¥<受付名>¥」の下に、次に示すファイルが出力されます。

ファイル名	ファイルの内容
servicedef_<受付名>.xml	HTTP 受付（呼出先選択）のサービス定義 XML ファイル
servicedef_<ビジネスプロセス名>.xml	ビジネスプロセスのサービス定義 XML ファイル (オペレーションごとに出力)
cscrecphhttp.properties	HTTP 受付定義ファイル

ファイル名	ファイルの内容
cscurecphhttp_routing.properties	HTTP ルーティング定義ファイル
http_body_request_<ビジネスプロセス名>.xsd	要求電文ボディの XML Schema (ビジネスプロセス名ごとに出力)
http_body_response_<ビジネスプロセス名>_<ステータスコード>.xsd	応答電文ボディの XML Schema (ビジネスプロセス名およびステータスコードごとに出力)

HTTP 受付が複数作成されるケースでは、同様の構成が複数出力されます。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- コマンド実行前に、環境変数 COSMINEXUS_HOME, および環境変数 TEMP (Windows の Temp 領域のパス) を正しく設定してください。正しく設定されていない場合、動作は保証しません。
- 各オプションで指定するパスには、ワイルドカードや Windows の予約語は指定しないでください。
- コマンド実行前に、次に示すディレクトリの下に、コマンドが使用する前提 OSS の jar ファイルを配置してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%lib¥external
```

cscsoapmode (SOAP モードの設定)

形式

```
cscsoapmode {only | both | -h}
```

機能

使用する SOAP モードを設定します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

引数

only

SOAP1.1 モードを利用する場合に指定します。

both

SOAP1.1/1.2 併用モードを使用する場合に指定します。

-h

コマンドの使用方法と、現在の SOAP モードを表示します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。

注意事項

- このコマンドは、管理者権限のあるユーザで実行してください。
- このコマンドは HCSCTE プロジェクトを作成する前に実行する必要があります。すでに HCSCTE プロジェクトを作成している場合の設定手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「3.1.5 SOAP モードを変更する」を参照してください。
- コマンドを実行し、SOAP モードの設定を反映させるには、Eclipse の再起動が必要になります。

csctransform (データ変換のテスト)

形式

(1)コマンドに引数を直接指定する場合

```
csctransform -xsl <XSLファイル (マッピング定義) のパス>  
-informat <入力フォーマット定義ファイルのパス>  
-infile <入力ファイルのパス>  
-outformat <出力フォーマット定義ファイルのパス>  
-outfile <出力ファイルのパス>  
[-uoclass <文字コード変換UOCのクラス名>  
[-uocproperty <文字コード変換UOCの独自定義ファイルのパス>]]  
[-codetablereadpath <コード変換テーブルの格納パスのルートパス>]  
[-validate]  
[-debugtrace [-debugtracefilepath <デバッグ情報の出力先パス>]]  
[-cscdtsysprop <データ変換用システムプロパティファイルのパス>]  
[-undefinedcode {ERROR | REPLACE}]
```

(2)コマンドの引数をファイルに指定する場合

```
csctransform -f <データ変換コマンドプロパティファイルのパス>
```

機能

XML 形式データとバイナリデータとを変換し、変換結果をファイル出力します。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

コマンドの引数の指定方法には次の 2 種類があります。

- コマンドに引数を直接指定する方法
コマンド実行時に引数を指定する方法です。-f オプションと一緒に指定すると、直接指定した引数はすべて無効となり、-f オプションに指定したデータ変換コマンドプロパティファイルに記載された引数が有効になります。
1 対 1 の変換だけ実行できます。
- コマンドの引数をファイルに指定する方法
コマンドの引数をデータ変換コマンドプロパティファイルにプロパティ形式で列記し、そのファイル名を-f オプションで指定する方法です。
n 対 1 の変換および 1 対 1 の変換を実行できます。

システム環境変数 COSMINEXUS_HOME が正しく設定されていない場合、コマンドを実行するとエラーになります。

引数

(1)コマンドに引数を直接指定する場合

-xsl <XSL ファイル (マッピング定義) のパス>

XSL ファイル (マッピング定義) のパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できません。

-informat <入力フォーマット定義ファイルのパス>

入力フォーマット定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できません。

指定できるデータの種類の拡張子は「.xsd」(XML フォーマット) または「.fdx」(バイナリフォーマット) のファイルです。

-infile <入力ファイルのパス>

入力ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できません。

-outformat <出力フォーマット定義ファイルのパス>

出力フォーマット定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できません。

指定できるデータの種類の拡張子は「.xsd」（XML フォーマット）または「.fdx」（バイナリフォーマット）のファイルです。

-outfile <出力ファイルのパス>

存在する出力ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。出力先のディレクトリが存在しない場合はエラーになります。この引数は省略できません。

指定したパスに同名のファイルが存在する場合、ファイルを上書きします。同名のファイルが存在しない場合は、ファイルを新たに作成します。

-uocclass <文字コード変換 UOC のクラス名>

文字コード変換 UOC のクラス名を完全修飾名で指定します。この引数は省略できます。

文字コード変換 UOC のクラス名は、この引数とデータ変換コマンドプロパティファイルのほかに、データ変換用システムプロパティファイルでも指定できます。指定が重複した場合は、次に示す優先順位に従って指定値が適用されます。

優先順位	プロパティファイル名/コマンド名	該当するプロパティ名/引数名
1	データ変換用システムプロパティファイル	csc.dt.ownCodeConverter.className
2	データ変換コマンドプロパティファイル	csctransform.uoc.class
3	csctransform コマンド	-uocclass

データ変換用システムプロパティファイルの `csc.dt.ownCodeConverter.className` の設定については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。

なお、文字コード変換 UOC を使用する場合は、文字コード変換 UOC の jar ファイルをシステム環境変数 `CSC_DATA_TRANSFORM_CLASSPATH` に設定してください。外部の jar ファイルに定義されているクラスをカスタムファンクションや文字コード変換 UOC から呼び出す場合も、該当する jar ファイルを環境変数に設定する必要があります。

-uocproperty <文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス>

`-uocclass` オプションが指定されている場合に、文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

-uocclass オプションが指定されていない場合は、この引数の指定は無効となります。-uocclass オプションを指定してこの引数を省略した場合は、独自定義ファイルを読み込まない状態で文字コード変換 UOC のクラスがデータ変換時に実行されます。

-codetablerootpath <コード変換テーブルの格納パスのルートパス>

コード変換ライブラリで使用するコード変換テーブル格納パスのルートパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

-validate

次に示すスキーマ検証を実施する場合に指定します。

- 入力ファイル (XML) に対して、入力フォーマット定義ファイル (XML Schema) を使ったスキーマ検証を実施します。
- 出力ファイル (XML) に対して、出力フォーマット定義ファイル (XML Schema) を使ったスキーマ検証を実施します。

この引数は省略できます。

-debugtrace

デバッグ情報を出力する場合に指定します。この引数は省略できます。

-debugtracefilepath <デバッグ情報の出力先パス> ~<<コマンドを実行したカレントディレクトリ>>

-debugtrace オプションを指定している場合、デバッグ情報の出力先パスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

この引数を設定していない場合、出力先を指定していない場合、または指定したディレクトリが存在しない場合は、コマンドを実行したカレントディレクトリにデバッグ情報が出力されます。

-cscdtsysprop <データ変換用システムプロパティファイルのパス>

データ変換用システムプロパティファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。この引数は省略できます。

データ変換用システムプロパティファイルは、Service Platform のデータ変換のシステムプロパティを指定したファイルです。指定方法については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。

-undefinedcode {ERROR | REPLACE} ~<<ERROR>>

バイナリデータの文字コード変換処理で、未定義の文字コードを検出したときの動作を指定します。この引数は省略できます。

指定できる値は次のとおりです。

- ERROR

未定義の文字コードを検出した時点でエラーとし、処理を終了します。

- REPLACE

未定義部分の文字コードを空白の文字コードに置換して処理を続けます。

(2)コマンドの引数をファイルに指定する場合

-f<データ変換コマンドプロパティファイルのパス>

データ変換コマンドプロパティファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

データ変換コマンドプロパティファイル

csctransform コマンドの引数を Java のプロパティファイル形式で列記したファイルです。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。

データ変換コマンドプロパティファイルの定義方法については、「[3.19.1 データ変換コマンドプロパティファイル](#)」を参照してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	異常終了しました。

注意事項

- コマンドの実行時にスタックオーバーフローや OOM (Out Of Memory) が発生した場合、システム環境変数 CSC_DATA_TRANSFORM_OPT に JavaVM 起動オプションを指定して、スタック領域やヒープ領域の値を設定してください。

システム環境変数に指定できる JavaVM 起動オプションを次に示します。

JavaVM 起動オプション	説明
-Xms	ヒープ領域 (New 領域 + Old 領域) の初期値
-Xmx	ヒープ領域 (New 領域 + Old 領域) の最大値
-Xss	スレッドのスタックサイズ
-XX:MetaspaceSize	Metaspace 領域に起因する FullGC の基準値の指定
-XX:MaxMetaspaceSize	Metaspace 領域の最大値の指定

- パスをワイルドカードで指定した場合の動作は保証しません。

csminexusbp (ビジネスプロセスの実行)

形式

```
csminexusbp [-h]
             [-processname <ビジネスプロセス名>]
             [-operation <オペレーション名>]
             [-telegram <ビジネスプロセスへ送信する電文を記載したファイルのパス>]
             [-f <ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルのファイルパス>]
```

機能

ビジネスプロセスにリクエストを送信して実行するコマンドです。標準の同期受付 (Web サービス) を使用してビジネスプロセスを呼び出します。

このコマンドを実行することで、任意のユーザ定義受付を持つ場合に呼び出すリクエストを用意しなくとも、ビジネスプロセスにリクエストを送信できます。

このコマンドは、次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%bin
```

コマンドを実行する場合は、この場所まで移動するかパスを指定してください。

前提条件

このコマンドを実行すると、標準の同期受付 (Web サービス) を使用してビジネスプロセスを呼び出します。そのため、次に示す前提条件を満たす必要があります。

- HCSC サーバの構築時に、標準の同期受付 (Web サービス) を使用するよう定義されていること
- コマンドの実行時に、Web サーバ、標準の同期受付 (Web サービス) および呼び出すビジネスプロセスが起動状態であること

ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルとの関係

次の表に示す項目は、ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルと csminexusbp コマンドの両方で指定できます。両方に同じ項目が指定された場合は、コマンドの指定が優先されます。

ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルのプロパティ	csminexusbp コマンドの引数	設定内容
process-name	-processname	ビジネスプロセス名
bp-operation-name	-operation	オペレーション名
telegram-filepath	-telegram	要求電文を記載したファイルのパス

なお、ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルでは、例外ログの情報なども指定できます。ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルを使用する場合は、このコマンドの -f オプションに指定して実行します。ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルの指定方法については、「[3.21.1 ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイル](#)」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法を表示します。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-processname <ビジネスプロセス名> ~ ((1-64 バイト))

呼び出すビジネスプロセスのビジネスプロセス名を指定します。64 バイト以内の XMLSchema の NCName 定義文字で指定してください。サービスアダプタ名を指定した場合の動作は保証しません。

-operation <オペレーション名> ~ ((1-255 バイト))

呼び出すビジネスプロセスのオペレーション名を指定します。255 バイト以内の XMLSchema の NCName 定義文字で指定してください。

-telegram <ビジネスプロセスへ送信する電文を記載したファイルのパス>

ビジネスプロセスへ送信する電文が記載されたファイルを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白が含まれる場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲む必要があります。

指定を省略した場合、ビジネスプロセスに電文が送信されません。

電文を記載したファイル

ビジネスプロセスへ送信する要求電文は、任意のディレクトリの任意のファイルに定義できます。このファイルは、管理者権限のあるユーザがアクセスできる必要があります。

-f <ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルのファイルパス>

ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルのファイルパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白が含まれる場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲む必要があります。

ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイル

csmexecutebp コマンドの動作を Java のプロパティファイル形式で定義するファイルです。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。

ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルの定義方法については、[\[3.21.1 ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイル\]](#) を参照してください。

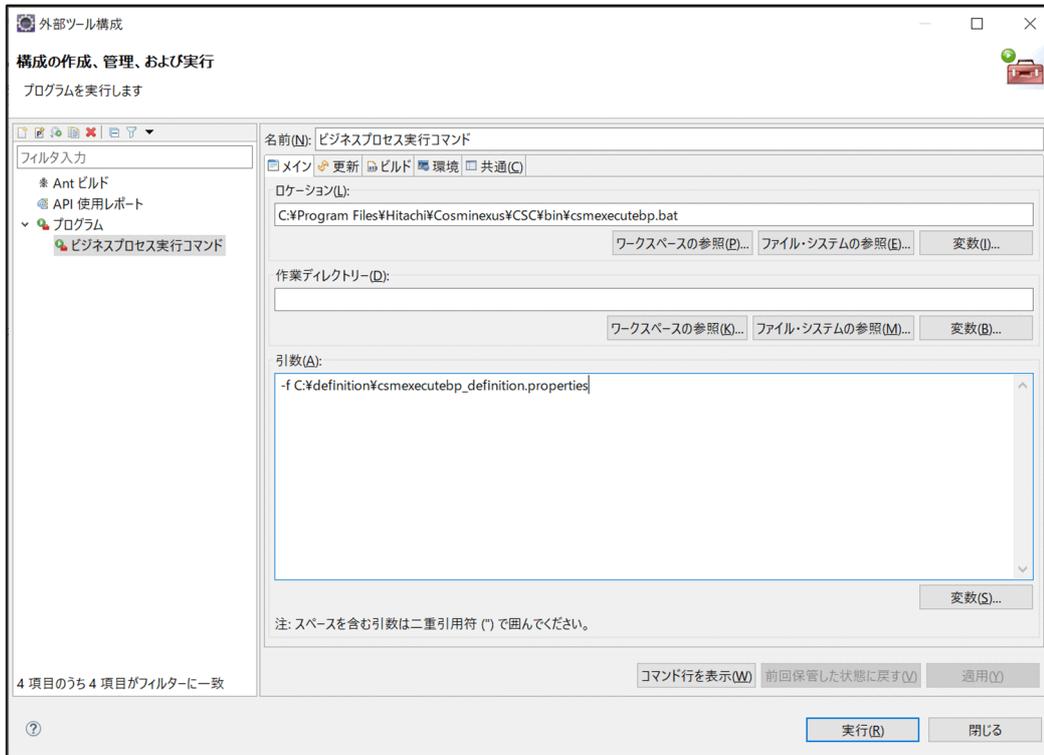
使用例

csmexecutebp コマンドに、ビジネスプロセス名、オペレーション名、電文のファイルパス、ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルのファイルパスを指定して実行する場合の例を次に示します。

```
csmexecutebp -processname BP1 -operation op1 -telegram C:%telegram%telegram_op1.xml -f C:%definition%csmexecutebp_definition.properties
```

csmeexecutebp コマンドは、Eclipse の [外部ツール構成] ダイアログから実行することもできます。[外部ツール構成] ダイアログから実行する場合の手順と指定例を次に示します。

1. Eclipse のメニューから [実行] - [外部ツール] - [外部ツールの構成] を選択します。
[外部ツール構成] ダイアログが表示されます。
2. 左ペインの [プログラム] を右クリックし、[新規構成] を選択します。
[構成の作成、管理、および実行] ページが表示されます。



3. [メイン] タブを選択して、次の内容を入力します。

項目名	設定値
名前	任意の名称を指定します。
ロケーション	ビジネスプロセス実行コマンドのパスを次のように指定します。 <サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%bin%csmexecutebp.bat
引数	ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルのファイルパスを次のように指定します。 -f <ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルのファイルパス>

4. [実行] ボタンをクリックします。
コマンドが登録、および実行され、コンソールビューに実行結果が表示されます。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。

戻り値	意味
1	異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、管理者権限のあるユーザで実行してください。
 - コマンド実行時に、JavaVM 起動オプションを設定することはできません。
 - このコマンドによるビジネスプロセスの呼び出し時には、作業フォルダが生成されません。そのため、ビジネスプロセス内で作業フォルダは使用できません。
- また、ビジネスプロセスの呼び出し時にヘッダ電文の送信ができないため、ビジネスプロセスの受付アクティビティでヘッダ割当変数を指定している場合、ヘッダ割当変数に指定した変数は初期化されません。

3

定義ファイル（開発環境）

この章では、サービスプラットフォームの開発環境で使用する定義ファイルの文法について説明します。

3.1 定義ファイルの種類

開発環境の定義ファイルの種類を次に示します。

表 3-1 定義ファイル一覧（開発環境）

分類	ファイル名	概要
TP1 連携で利用するファイル	TP1/RPC 受付定義ファイル	TP1/RPC 受付のチューニングパラメタなどの動作を制御するパラメタを設定します。
	TP1 アダプタ環境定義ファイル	TP1 アダプタの環境定義に必要な情報を設定します。
	TP1 アダプタ通信構成定義ファイル	TP1 アダプタの通信構成定義に必要な情報を定義します。
FTP 連携で利用するファイル	FTP 受付定義ファイル	FTP 受付をセットアップしたあとに設定変更できる内容を設定します。
	ファイル操作アダプタ定義ファイル	ファイル操作アダプタの動作情報を設定します。
SOAP 連携で利用するファイル	SOAP 受付定義ファイル	SOAP1.1/1.2 併用モードで、ユーザ定義受付（SOAP 受付）が呼び出された際の動作を定義します。
	クライアント定義ファイル	SOAP1.1/1.2 併用モードで、サービスアダプタから Web サービスを呼び出すときの動作を定義します。
Object Access アダプタで利用するファイル	Object Access アダプタ通信構成定義ファイル	Object Access アダプタの通信定義を設定します。
Message Queue アダプタで利用するファイル	Message Queue アダプタ環境定義ファイル	Message Queue アダプタの環境定義情報を設定します。
	Message Queue アダプタ通信構成定義ファイル	Message Queue アダプタの通信定義を設定します。
Message Queue 受付で利用するファイル	Message Queue 受付定義ファイル	Message Queue 受付の動作情報を設定します。
HTTP アダプタで利用するファイル	HTTP アダプタ定義ファイル	HTTP アダプタの動作情報を設定します。
HTTP 受付で利用するファイル	HTTP レスポンスヘッダ定義ファイル	HTTP 受付の応答電文フォーマット（ヘッダ変数用）を省略した場合のデフォルト値として使用する HTTP レスポンスヘッダ情報を設定します。
	HTTP 受付サービス選択定義ファイル	ユーザ定義受付（呼出先選択）の HTTP 受付から呼び出すビジネスプロセスの情報と、呼び出す条件を設定します。
	HTTP 受付定義ファイル	HTTP 受付の動作情報を設定します。
	HTTP 受付ルーティング定義ファイル	HTTP 受付から呼び出すビジネスプロセスや、HTTP 受付で実行する機能を設定します。
ファイルイベント連携で利用するファイル	ファイルイベント受付定義ファイル	ファイルイベント受付の動作情報を設定します。

分類	ファイル名	概要
Kafka アダプタで利用するファイル	Kafka アダプタ定義ファイル	Kafka アダプタの動作情報を設定します。
Kafka 受付で利用するファイル	Kafka 受付定義ファイル	Kafka 受付の動作情報を設定します。
スケジュール駆動受付で利用するファイル	スケジュール駆動受付定義ファイル	スケジュール駆動受付の動作情報を設定します。
gRPC アダプタで利用するファイル	gRPC アダプタ独自定義ファイル	gRPC アダプタの動作情報を設定します。
gRPC 受付で利用するファイル	gRPC 受付定義ファイル	gRPC 受付の動作情報を設定します。
JSON 形式データと XML 形式データの変換で利用するファイル	JSON-XML 変換定義ファイル	JSON-XML 変換の動作を設定します。 JSON 変換ツール（cscjson2xsd コマンド、cscjsonxmlconv コマンド、および cscsoas2servicedef コマンド）で使用します。
データ変換単体テストコマンドで利用するファイル	データ変換コマンドプロパティファイル	csctransform コマンドの引数と同じ内容をプロパティファイル形式で設定します。
	データ変換用システムプロパティファイル	Service Platform のデータ変換のシステムプロパティを設定します。 設定したファイルは、csbinaryparse コマンド、csctransform コマンド、および cscgenbinary コマンドの実行時に指定します。
	バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル	cscgenbinary コマンドの引数と同じ内容をプロパティファイル形式で設定します。
	バイナリ電文生成定義ファイル	単純内容要素の要素値をデフォルト値から変更したい場合に設定します。
	バイナリパースコマンドプロパティファイル	csbinaryparse コマンドの引数と同じ内容をプロパティファイル形式で設定します。
ログ出力アクティビティで利用するファイル	ログ出力アクティビティ定義ファイル	ログ出力アクティビティを設定した場合に出力される、ログ出力アクティビティのログファイルの情報をプロパティファイル形式で設定します。
	メッセージ定義ファイル	ログ出力アクティビティで出力するメッセージをプロパティファイル形式で設定します。
ビジネスプロセスの実行で利用するファイル	ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイル	ビジネスプロセス実行コマンドの動作をプロパティファイル形式で設定します。

3.2 定義ファイルの入力形式

表 3-1 に示す定義ファイルは、一部の要素を除き、次に示す Java のプロパティファイル形式で作成または編集します。

形式

定義ファイルの入力形式を次に示します。

```
<キー名称> = <値>  
#<コメント>
```

各項目について説明します。なお、各項目は、ISO-8859-1 文字エンコーディングを使用してください。

キー名称

定義するキー名称を指定します。

値

定義する値がある場合に指定します。改行までを値とするため、値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は指定できません。

コメント

行頭に「#」を記述した場合、その行はコメントとして扱われます。

3.3 定義ファイルの文法の記述形式

以降で説明する定義ファイルの文法について、次の形式で記述します。なお、すべてのファイルを次の形式で記述しているわけではありません。また、各ファイルの固有情報を記載している場合があります。

形式

ファイルの記述形式を示します。

機能

ファイルの機能について説明します。

ファイルの格納先

ファイルの格納先を示します。

設定できる要素

ファイルの中で指定できる XML の要素について説明します。

設定できるパラメタ

ファイルの中で指定できるパラメタについて説明します。

設定できるプロパティ

ファイルの中で指定できるプロパティについて説明します。プロパティ名の可変値は<>で囲んで示します。

記述例

ファイルの内容の記述例を示します。

注意事項

ファイルを設定または使用する際の注意事項を説明します。

この章の文法の説明で使用している記号を次に示します。

記号	意味
	横に並べられた複数の項目に対する項目間の区切りを示し、「または」を意味します。 (例) A B A または B を指定することを示します。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから1つを選択することを示します。項目が横に並べられ、記号 で区切られている場合は、そのうちの1つを選択します。 (例) {A B C} A, B または C のどれかを指定することを示します。
[]	この記号で囲まれている項目は省略してもよいことを示します。 (例) [A] 「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。
< >	この記号で囲まれている項目は、該当する要素を指定することを示します。 (例) <プロパティ>

記号	意味
< >	プロパティを記述します。
…	記述が省略されていることを示します。 (例) ABC… ABC の後ろに記述があり、その記述が省略されていることを示します。
~	この記号の前に示された項目が、記号~に続く< >, (()), << >>などの規則に従うことを示します。
< >	項目を記述するときに従わなければならない構文要素を示します。構文要素については、次の表を参照してください。
(())	項目で指定できる値の範囲を示します。
<< >>	項目を省略したときに、システムが仮定する標準値を示します。

この章で使用している構文要素の種類と定義を次に示します。

種類	定義
英字	A~Z a~z
英小文字	a~z
英大文字	A~Z
数字	0~9
英数字	A~Z a~z 0~9
記号	- . -
文字列	任意の文字の配列

3.4 TP1 連携で利用するファイル

3.4.1 TP1/RPC 受付定義ファイル

(1) 形式

```
urecp-tp1rpc.activation-config.service=TP1/RPC受付のサービス名
[urecp-tp1rpc.activation-config.queue_max_length=TP1/RPC受付のスケジュールキューの長さ]
[urecp-tp1rpc.activation-config.stay_watch_queue_rate=TP1/RPC受付のスケジュールキューの滞留
監視でのしきい値]
[urecp-tp1rpc.activation-config.stay_watch_check_interval=TP1/RPC受付のスケジュールキューの
滞留監視での警告メッセージの抑止時間]
urecp-tp1rpc.resource-adapter=TP1/RPC受付が使用するTP1インバウンドアダプタの表示名
[urecp-tp1rpc.pooled-instance.minimum=TP1/RPC受付のプール内のインスタンスの最小数]
[urecp-tp1rpc.pooled-instance.maximum=TP1/RPC受付のプール内のインスタンスの最大数]
[urecp-tp1rpc.ejb-transaction-timeout=TP1/RPC受付のEJBトランザクションタイムアウト時間]
[urecp-tp1rpc.dt-skip={true | false}]
```

(2) 機能

TP1/RPC 受付のチューニングパラメタなどの動作を制御するパラメタを設定します。

TP1/RPC 受付定義ファイルは「cscurecpt1rpc.properties」というファイル名で作成します。TP1/RPC 受付開始時に設定した内容が有効になります。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%samples\urecp\cscurecpt1rpc.properties
```

(4) 設定できるプロパティ

urecp-tp1rpc.activation-config.service=TP1/RPC 受付のサービス名 ～<先頭が英字の英数字およびアンダーバー (_) >((1-31 文字))

TP1/RPC 受付のサービス名を指定します。

urecp-tp1rpc.activation-config.queue_max_length=TP1/RPC 受付のスケジュールキューの長さ ～<数字>((1-65535))<<100>>

TP1/RPC 受付のスケジュールキューに設定できる要求数の最大値を整数で指定します。

urecp-tp1rpc.activation-config.stay_watch_queue_rate=TP1/RPC 受付のスケジュールキューの滞留監視でのしきい値 ～<数字>((0-100))<<70>>

TP1/RPC 受付のスケジュールキューの滞留監視でのしきい値を整数で指定します。

`urecp-tp1rpc.activation-config.stay_watch_check_interval=TP1/RPC 受付のスケジュールキューの滞留監視での警告メッセージの抑止時間 ~<数字>((1-2147483647))<<60>>`

TP1/RPC 受付のスケジュールキューの滞留監視で、警告メッセージを抑止する時間（単位：秒）を整数で指定します。

`urecp-tp1rpc.resource-adapter=TP1/RPC 受付が使用する TP1 インバウンドアダプタの表示名 ~<英数字およびアンダーバー () >((1-240 文字))`

TP1/RPC 受付が使用する TP1 インバウンドアダプタの表示名を指定します。

`urecp-tp1rpc.pooled-instance.minimum=TP1/RPC 受付のプール内のインスタンスの最小数 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>`

TP1/RPC 受付のプール内のインスタンスの最小数を整数で指定します。0 を指定した場合、制限はありません。

なお、このプロパティでは、`urecp-tp1rpc.pooled-instance.maximum` プロパティで指定した値より小さい値を指定してください。指定した値が、`urecp-tp1rpc.pooled-instance.maximum` プロパティで指定した値よりも大きい場合、コマンド実行時にエラーになります。

`urecp-tp1rpc.pooled-instance.maximum=TP1/RPC 受付のプール内のインスタンスの最大数 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>`

TP1/RPC 受付のプール内のインスタンスの最大数を整数で指定します。0 を指定した場合、受付処理のプール内のインスタンスの最大数には、1 が設定されます。

なお、このプロパティでは、`urecp-tp1rpc.pooled-instance.minimum` プロパティで指定した値より大きい値を指定してください。指定した値が、`urecp-tp1rpc.pooled-instance.minimum` プロパティで指定した値よりも小さい場合、コマンド実行時にエラーになります。

`urecp-tp1rpc.ejb-transaction-timeout=TP1/RPC 受付の EJB トランザクションタイムアウト時間 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>`

TP1/RPC 受付の EJB トランザクションタイムアウト時間を秒単位で指定します。0 を指定した場合、J2EE サーバに設定されたデフォルトのタイムアウト値で動作します。

`urecp-tp1rpc.dt-skip={true | false}`

データ変換時に電文の構造変換をスキップするかどうかを指定します。このプロパティを省略、または値を省略した場合、構造変換をスキップしません。

- true
構造変換をスキップします。
- false

構造変換をスキップしません。

なお、値を指定する場合は、true または false のどちらかを指定してください。true または false 以外の値を指定した場合、コマンド実行時にエラーになります。

(5) 記述例

記述例を次に示します。

```
urecp-tp1rpc.activation-config.service=refer
urecp-tp1rpc.activation-config.queue_max_length=10
urecp-tp1rpc.activation-config.stay_watch_queue_rate=70
urecp-tp1rpc.activation-config.stay_watch_check_interval=60
urecp-tp1rpc.resource-adapter=TP1_Inbound_Adapter
urecp-tp1rpc.pooled-instance.minimum=1
urecp-tp1rpc.pooled-instance.maximum=10
urecp-tp1rpc.ejb-transaction-timeout=0
urecp-tp1rpc.dt-skip=true
```

3.4.2 TP1アダプタ環境定義ファイル

(1) 形式

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE properties SYSTEM "http://java.sun.com/dtd/properties.dtd">
<properties>
  <entry key="adptp1_deffile">TP1アダプタ通信構成定義ファイル名</entry>
  <entry key="adptp1_fault_message_enable">[ true | false ]</entry>
</properties>
```

(凡例) : ユーザの編集箇所を示しています。

(2) 機能

TP1 アダプタの環境定義に必要な情報は、XML 形式の TP1 アダプタの環境定義ファイルに定義します。次に示すディレクトリに格納されているサンプルファイルを利用して作成します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%TP1%config%templates
%customadapter_properties.xml
```

このファイルは、開発環境でパッケージングしたあと、実行環境にインポートすることで、実行環境に反映されます。内容を変更する場合は、開発環境で再度パッケージングして実行環境にインポートしてください。

指定を省略する場合は、開始タグおよび終了タグを含めて省略してください。開始タグおよび終了タグの記述を残して要素の値だけを省略することはできません。

<entry key="adptp1_fault_message_enable">を省略する場合の指定例を次に示します。

誤った指定例

```
:  
<properties>  
  <entry key="adptp1_deffile">adptp1_config.xml</entry>  
  <entry key="adptp1_fault_message_enable"></entry>  
</properties>  
:
```

正しい指定例

```
:  
<properties>  
  <entry key="adptp1_deffile">adptp1_config.xml</entry>  
</properties>  
:
```

(3) ファイルの格納先

サンプルファイルは任意のディレクトリにファイル名「customadapter_properties.xml」で保存してください。

(4) 設定できる要素

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
```

XML ファイルであることを示す XML 宣言です。

```
<!DOCTYPE properties SYSTEM "http://java.sun.com/dtd/properties.dtd">
```

DTD サブセットを示す要素型定義宣言です。

```
<properties>
```

TP1 アダプタの環境定義のルート要素です。

```
<entry key="adptp1_deffile"> ~<文字列>
```

実行環境での通信構成が定義された、TP1 アダプタ通信構成定義ファイルのファイル名を指定する要素です。

```
<entry key="adptp1_fault_message_enable"> ~{ true | false }<<false>>
```

TP1 アダプタのエラー情報の拡張オプション（拡張した要素の出力有無）を指定する要素です。次のどちらかを指定してください。

- true
拡張した要素を出力します。
- false

拡張した要素を出力しません。

3.4.3 TP1 アダプタ通信構成定義ファイル

(1) 形式

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<adaptp1_properties>
  <service_group>サービスグループ名</service_group>
  <operation>
    <op_name>オペレーション名</op_name>
    <service_group>サービスグループ名</service_group>
    <service>サービス名</service>
    <watch_time>応答監視時間</watch_time>
  </operation>
  <connect_mode>接続方式</connect_mode>
  <active_mode>確立方式</active_mode>
  <standcon_mode>常設コネクションモード</standcon_mode>
  <static_host>接続先ホスト名</static_host>
  <static_port>接続先ポート番号</static_port>
  <con_pool_num>同時に処理できるRPC要求の最大数</con_pool_num>
  <send_buff_size>送信バッファサイズ</send_buff_size>
  <recv_buff_size>受信バッファサイズ</recv_buff_size>
  <tcpip_wait_time>メッセージ受信時の最大待ち時間</tcpip_wait_time>
</adaptp1_properties>
```

(凡例) : ユーザの編集箇所を示しています。

: 複数指定できることを示しています。

(2) 機能

TP1 アダプタの通信構成定義に必要な情報は、XML 形式の TP1 アダプタの通信構成定義ファイルに定義します。次に示すディレクトリに格納されているサンプルファイルを利用して作成します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter¥TP1¥config¥templates
¥adtp1_config.xml
```

このファイルは、開発環境でパッケージングしたあと、実行環境にインポートすることで、実行環境に反映されます。内容を変更する場合は、開発環境で再度パッケージングして実行環境にインポートしてください。

指定を省略する場合は、開始タグおよび終了タグを含めて省略してください。開始タグおよび終了タグの記述を残して要素の値だけを省略することはできません。

<active_mode>および<standcon_mode>を省略する場合の指定例を次に示します。

誤った指定例

```
:
<connect_mode>STAND</connect_mode>
<active_mode></active_mode>
<standcon_mode></standcon_mode>
```

```
<con_pool_num>64</con_pool_num>  
:
```

正しい指定例

```
:  
<connect_mode>STAND</connect_mode>  
<con_pool_num>64</con_pool_num>  
:
```

なお、一部の要素の値は、TP1 アダプタ接続先動的変更機能を使って動的に変更することもできます。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.7.6 TP1 アダプタの接続先動的変更」を参照してください。

(3) ファイルの格納先

サンプルファイルは任意の名称で任意のディレクトリに保存してください。その後、TP1 アダプタ環境定義ファイルの<entry key="adptp1_deffile"> (TP1 アダプタ通信構成定義ファイルのファイル名) で指定したファイル名を指定してください。

(4) 設定できる要素

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
```

XML ファイルであることを示す XML 宣言です。

```
<adaptp1_properties>
```

TP1 アダプタの通信構成定義のルート要素です。

```
<service_group> ~<識別子>((1-31 文字))
```

サービスグループ名を指定する要素です。この要素の値に接続先システムのサービスグループ名を指定してください。

MHP (Message Handling Program) を接続先とした TCP/IP 接続の場合、この要素の値は無効となります。MHP 以外の場合はこの要素は省略できません。

```
<operation>
```

オペレーション情報のルート要素です。この要素はオペレーションの数だけ定義できます。

MHP を接続先とした TCP/IP 接続の場合、この要素は無効となり、この要素をルートとする要素の値も無効となります。MHP 以外の場合はこの要素は省略できません。

- <op_name> ~<英数字>((1-256 文字))

オペレーション名を指定する要素です。この要素の値に、サービスリクエストからサービスを要求するときに指定するオペレーション名を指定してください。オペレーション名は重複しないよう指定してください。

- **<service_group> ~<識別子>((1-31 文字))**

サービスグループ名を指定する要素です。この要素は省略できます。省略した場合は、ルート要素直下の<service_group>の値が適用されます。

この要素の値に接続先システムのサービスグループ名を指定してください。

- **<service> ~<識別子>((1-31 文字))**

サービス名を指定する要素です。この要素は省略できません。

この要素の値に接続先システムのサービスグループに登録されているサービス名を指定してください。

- **<watch_time> ~<符号なし整数>((0-65535))(単位：秒)<<180>>**

応答監視時間を指定する要素です。この要素は省略できます。

この要素の値に、TP1 アダプタから通信先の OpenTP1 システムに対してサービス要求を行ってから応答を受信するまでの監視時間の最大値を指定します。なお、0 を指定した場合は、応答を受信するまで無限に待ちます。

この要素の指定値は、TP1 アダプタへサービス要求を行ったときに発生する OpenTP1 システムとの通信にだけ有効です。有効範囲の詳細は、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.7.3 HCSC サーバから TP1 アダプタを使った TP1 サービス部品の呼び出し」の通信処理の開始中および停止中に監視時間として適用される値について説明している表、および通信処理の運用中に監視時間に適用される値について説明している表を参照してください。

ここで指定した値は、TP1 アダプタ接続先動的変更機能で動的に変更することもできます。

<connect_mode> ~{STAND | RAP | STATIC | TCPIP}

接続方式を指定する要素です。この要素は省略できません。

この要素の値に、OpenTP1 システムと接続するときの接続方式を指定してください。通信先を指定した接続を指定する場合は、STATIC を指定してください。

指定できる値および意味は次のとおりです。

- STAND：通常 RPC 接続
- RAP：リモート API 接続
- STATIC：通信先を指定した RPC 接続
- TCPIP：MHP を接続先とした TCP/IP 接続

注意事項

この要素に「STATIC」を指定した場合は、active_mode 要素および standcon_mode 要素の設定が無効となります。

<active_mode> ~{STAND | EACH}<<STAND>>

確立方式を指定する要素です。この要素の指定値は、リモート API 接続 (connect_mode 要素の設定値が RAP) の場合だけ有効です。この要素は省略できます。

この要素の値に、リモート API 接続時に確立する接続の常設または非常設を指定してください。

指定できる値および意味は次のとおりです。

- STAND：常設接続
- EACH：非常設接続

<standcon_mode> ~{AUTO | MANUAL}<<AUTO>>

常設接続の管理方法を指定する要素です。この要素の指定値は、リモート API 接続で常設接続を確立する場合だけ有効です。この要素は省略できます。

この要素の値に、リモート API 接続時に確立する常設接続の管理方法を指定してください。

指定できる値は次のとおりです。

- AUTO：オート接続モード
- MANUAL：非オート接続モード

<static_host> ~<文字列>((1 - 255 文字))

通信先を指定した接続をする場合の接続先のホスト名を指定する要素です。この要素は省略できます。

この要素の値に、接続先スケジューラサーバのホスト名を指定してください。

この要素の指定値は、RPC で通信先を指定した接続をする場合だけ有効です。そのため、次のどちらかに該当する場合は指定しても無効です。

- ネームサービス、スケジューラダイレクト機能、またはリモート API 機能を使用した RPC で接続する場合
- MHP を接続先とした TCP/IP 接続をする場合

ここで指定した値は、TP1 アダプタ接続先動的変更機能で動的に変更することもできます。

<static_port> ~<符号なし整数>((5001 - 65535))

通信先を指定した接続をする場合の接続先のポート番号を指定する要素です。この要素は省略できます。

この要素の値に、接続先スケジューラサーバのポート番号を指定してください。

この要素の指定値は、RPC で通信先を指定した接続をする場合だけ有効です。そのため、次のどちらかに該当する場合は指定しても無効です。

- ネームサービス、スケジューラダイレクト機能、またはリモート API 機能を使用した RPC で接続する場合
- MHP を接続先とした TCP/IP 接続をする場合

ここで指定した値は、TP1 アダプタ接続先動的変更機能で動的に変更することもできます。

`<con_pool_num>` ~<符号なし整数>((1-1024))

コネクションリソースのプーリング数を指定する要素です。この要素は省略できません。

この要素の値には、次の両方の条件を満たす数値を指定してください。

- サービスアダプタ定義画面で指定する最大インスタンス数 (TP1 アダプタの最大インスタンス数) と同じ数値を指定してください。
最大インスタンス数より少ない数値を指定すると、サービス実行要求の受け付け数がこの要素の指定値を超えた場合、コネクションリソースが割り当てられなくなり、要求されたサービスがエラーとなります。
- 最大インスタンス数より多い数値を指定すると、差分のコネクションリソースが未使用のまま、余分なメモリを消費した状態となります。
- 接続先システムの同時処理数 (RPC 同時処理数または TCP/IP 同時処理数) の最大数を超えない値を指定してください。

`<send_buff_size>` ~<符号なし整数>((1-8388608)) (単位: バイト) <<4096>>

送信バッファサイズを指定する要素です。この要素は省略できます。

この要素の値に、接続先 OpenTP1 システムに要求する送信メッセージの最大長を指定してください。

なお、TP1/Client/J 環境定義ファイルの `dccltrpcmaxmsgsize` オペランドで指定されている値より大きな値を指定することはできません。TP1/Client/J 環境定義ファイルについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「付録 A.2 TP1/Client/J の定義」を参照してください。

`<recv_buff_size>` ~<符号なし整数>((1-8388608)) (単位: バイト) <<4096>>

受信バッファサイズを指定する要素です。この要素は省略できます。

この要素の値に、接続先 OpenTP1 システムから受信メッセージの最大長を指定してください。

なお、TP1/Client/J 環境定義ファイルの `dccltrpcmaxmsgsize` オペランドで指定されている値より大きな値を指定することはできません。TP1/Client/J 環境定義ファイルについては、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「付録 A.2 TP1/Client/J の定義」を参照してください。

`<tcpip_wait_time>` ~<数字>((-1-65535)) (単位: 秒) <<180>>

メッセージ受信時の最大待ち時間を指定する要素です。この要素は、MHP を接続先とした TCP/IP 接続を利用する場合だけ有効です。それ以外の場合で値を設定しても無効となります。この要素は省略できます。

この要素の値に、MHP から送信されたメッセージが TP1 アダプタで受信完了するまでの、待ち時間の最大値を指定します。指定値に応じて次のように動作します。

- -1 を指定した場合
受信が完了するまで無限に待ち続けます。
- 0 を指定した場合
メッセージ受信実行時にすでにメッセージが届いていれば受信します。
受信するメッセージが無かった場合は例外が発生し、TP1 アダプタは応答領域に Fault 情報を設定して応答を返します。
- 1 から 65535 までの数値を指定した場合
指定した秒数だけメッセージの受信を待ちます。指定した秒数を過ぎてもメッセージの受信が完了しない場合は例外が発生し、TP1 アダプタは応答領域に Fault 情報を設定して応答を返します。

ここで指定した値は、TP1 アダプタ接続先動的変更機能で動的に変更することもできます。

3.5 FTP 連携で利用するファイル

3.5.1 FTP 受付定義ファイル

(1) 形式

```
[urecp-ftp.resource-adapter=受付処理が使用するFTPインバウンドアダプタの表示名]  
[urecp-ftp.pooled-instance.minimum=カスタム受付フレームワークのプール内のインスタンスの最小  
数]  
[urecp-ftp.pooled-instance.maximum=受付処理およびカスタム受付フレームワークのプール内のイン  
スタンスの最大数]  
[urecp-ftp.ejb-transaction-timeout=受付処理およびカスタム受付フレームワークのEJBトランザク  
ションタイムアウト時間]  
[urecp-ftp.work-dir.auto-delete={true | false}]  
[urecp-ftp.common-dir-file.auto-delete={true | false}]  
[urecp-ftp.list-command-path-extraction={true | false}]
```

(2) 機能

FTP 受付をセットアップしたあとに設定変更できる内容を設定します。FTP 受付開始時に、FTP 受付定義ファイルに設定した内容が有効になります。

なお、FTP 受付に対して FTP 受付定義ファイルが設定されていない場合、FTP 受付定義ファイルで設定できるすべてのプロパティに、デフォルト値が仮定されます。この場合、FTP 受付のデプロイ時、および FTP 受付の起動時に KDEC00410-W メッセージを出力します。

FTP 受付定義ファイルは「cscurecpftp.properties」というファイル名で作成します。
「cscurecpftp.properties」以外のファイル名で作成した場合、そのファイルは無視されます。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftprec%templates%cscurecpft  
p.properties
```

(4) 設定できるプロパティ

urecp-ftp.resource-adapter=受付処理が使用する FTP インバウンドアダプタの表示名 ~<半角英数字
とアンダーバー (_) >((0-240 文字))<<Connector 属性ファイルの display-name タグの設定値>>

受付処理が使用する、FTP インバウンドアダプタの表示名を指定します。大文字と小文字は区別されま
す。このプロパティは省略できます。

ここでは、Connector 属性ファイルの display-name タグの設定値を指定してください。

このプロパティを省略、またはこのプロパティに値を指定しなかった場合、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) 実行時に、値のチェック処理を実行しません。

urecp-ftp.pooled-instance.minimum=カスタム受付フレームワークのプール内のインスタンスの最小数 ~<数字>((0-2147483647))<<0>>

カスタム受付フレームワークのプール内のインスタンスの最小数を指定します。なお、受付処理のプール内のインスタンスの最小数は固定値です。このプロパティで変更することはできません。

urecp-ftp.pooled-instance.maximum プロパティの値 (受付処理およびカスタム受付フレームワークのプール内のインスタンスの最大数) 以下の値を指定してください。

このプロパティを省略、またはこのプロパティに値を指定しなかった場合、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) 実行時に、値のチェック処理を実行しません。また、コマンド制御 (MBean) 実行時に、FTP 受付のカスタムアダプタ用アプリケーション統合属性ファイルの対象となる要素に値を適用しません。

urecp-ftp.pooled-instance.maximum=受付処理およびカスタム受付フレームワークのプール内のインスタンスの最大数 ~<数字>((0-2147483647))<<0>>

受付処理およびカスタム受付フレームワークのプール内のインスタンスの最大数を指定します。

urecp-ftp.pooled-instance.minimum プロパティの値 (カスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最小数) 以上の値を指定してください。

0 を指定した場合、受付処理およびカスタム受付フレームワークのプール内のインスタンスの最大数には、1 が設定されます。

このプロパティを省略、またはこのプロパティに値を指定しなかった場合、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) 実行時に、値のチェック処理を実行しません。また、コマンド制御 (MBean) 実行時に、FTP 受付のアプリケーション統合属性ファイルの対象となる要素に値を適用しません。

urecp-ftp.ejb-transaction-timeout=受付処理およびカスタム受付フレームワークの EJB トランザクションタイムアウト時間 ~<数字>((0-2147483647))<<0>>

受付処理およびカスタム受付フレームワークの EJB トランザクションタイムアウト時間を秒単位で指定します。0 を指定した場合、J2EE サーバに設定されたデフォルトのタイムアウト値で動作します。

このプロパティを省略、またはこのプロパティに値を指定しなかった場合、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) 実行時に、値のチェック処理を実行しません。また、コマンド制御 (MBean) 実行時に、FTP 受付のカスタムアダプタ用アプリケーション統合属性ファイルの対象要素に値を適用しません。

数字以外の値や範囲外の値が指定された場合は、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) 実行時にエラーとなります。

urecp-ftp.work-dir.auto-delete={true | false} ~<<true>>

FTP 受付が作業フォルダを自動的に削除するかどうかを指定します。

- true

FTP 受付で自動的に作業フォルダを削除します。FTP 受付がビジネスプロセスからの応答を受け取り、FTP 受付の処理が正常に完了したあとに削除します。

- false

FTP 受付で作業フォルダを削除しません。

注意事項

ビジネスプロセスが非同期型の場合、このプロパティに false を指定する必要があります。

`urecp-ftp.common-dir-file.auto-delete={true | false} ~<<false>>`

FTP 受付が共通フォルダ内のファイルを自動的に削除するかどうかを指定します。

- true

FTP 受付で自動的に共通フォルダ内のファイルを削除します。FTP 受付がビジネスプロセスからの応答を受け取り、FTP 受付の処理が正常に完了したあとに削除します。

- false

FTP 受付で共通フォルダ内のファイルを削除しません。

`urecp-ftp.list-command-path-extraction={true | false} ~<<false>>`

FTP 受付が GETINFO オペレーションの情報取得パス情報を抽出するかどうかを指定します。

- true

FTP 受付で GETINFO オペレーションの情報取得パス情報を抽出します。

- false

FTP 受付で GETINFO オペレーションの情報取得パス情報を抽出しません。

(5) 記述例

記述例を次に示します。

```
urecp-ftp.resource-adapter=FTP_Inbound_Adapter
urecp-ftp.work-dir.auto-delete=true
```

(6) 注意事項

FTP 受付定義ファイルの内容が不正な場合、FTP 受付のデプロイ時にエラーとなります。

3.5.2 ファイル操作アダプタ定義ファイル

(1) 形式

```
[csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad={ON | OFF}]
[csc.adapter.fileOperation.transform.input={non-xml | xml}]
[csc.adapter.fileOperation.transform.output={non-xml | xml}]
[csc.adapter.fileOperation.transform.format={fixed | separate | eorseparate}]
[csc.adapter.fileOperation.transform.outputTemplateXmlFile=出力用テンプレートXMLファイルの
ファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.EOR=EORコード]

[csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord={ON | OFF}]
[csc.adapter.fileOperation.transform.trailerRecord={ON | OFF}]

[csc.adapter.fileOperation.transform.header.inFormat=ヘッダレコード入力用のバイナリフォー
マット定義ファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.header.outFormat=ヘッダレコード出力用のバイナリフォー
マット定義ファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.header.inElement=ヘッダレコードに対応する入力XMLファィ
ルの要素のパス]
[csc.adapter.fileOperation.transform.header.outElement=ヘッダレコードに対応する出力XMLファ
イルの要素のパス]
[csc.adapter.fileOperation.transform.header.styleSheet=ヘッダレコード変換用のXSLファイル
名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.header.fixedSize=ヘッダレコードの固定長サイズ]
[csc.adapter.fileOperation.transform.header.batchSize=分割処理時のヘッダレコードと見なす先
頭のレコード数]

[csc.adapter.fileOperation.transform.data.inFormat=データレコード入力用のバイナリフォー
マット定義ファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.data.outFormat=データレコード出力用のバイナリフォー
マット定義ファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.data.inElement=データレコードに対応する入力XMLファィ
ルの要素のパス]
[csc.adapter.fileOperation.transform.data.outElement=データレコードに対応する出力XMLファィ
ルの要素のパス]
[csc.adapter.fileOperation.transform.data.styleSheet=データレコード変換用のXSLファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.data.fixedSize=データレコードの固定長サイズ]
[csc.adapter.fileOperation.transform.data.batchSize=1回当たりのデータレコードの変換数]

[csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.inFormat=トレーラレコード入力用のバイナリ
フォーマット定義ファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.outFormat=トレーラレコード出力用のバイナリ
フォーマット定義ファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.inElement=トレーラレコードに対応する入力XML
ファイルの要素のパス]
[csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.outElement=トレーラレコードに対応する出力XML
ファイルの要素のパス]
[csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.styleSheet=トレーラレコード変換用のXSLファイル
名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.fixedSize=トレーラレコードの固定長サイズ]

[csc.adapter.fileOperation.transform.all.inFormat=一括処理時の入力用のバイナリフォーマット
定義ファイル名]
[csc.adapter.fileOperation.transform.all.outFormat=一括処理時の出力用のバイナリフォーマット
```

定義ファイル名]

[csc.adapter.fileOperation.transform.all.styleSheet=一括処理時の変換用のXSLファイル名]

[csc.adapter.fileOperation.transform.existFile={overwrite | error}]

[csc.adapter.fileOperation.copy.existFile={overwrite | error}]

[csc.adapter.fileOperation.move.existFile={overwrite | error}]

[csc.adapter.fileOperation.compress.existFile={overwrite | error}]

[csc.adapter.fileOperation.extract.existFile={overwrite | error}]

[csc.adapter.fileOperation.writeList.existFile={overwrite | error}]

(2) 機能

ファイル操作アダプタの動作情報を設定します。

ファイル操作アダプタ定義ファイルは「cscFileOperation.properties」というファイル名で作成します。

ファイル操作アダプタの開始時に、ファイル操作アダプタ定義ファイルに設定した内容が有効になります。

(3) 設定できるプロパティ

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad={ON | OFF} ~<<ON>>

ファイルの入出力時、レコードごとに分割処理するかどうかを指定します。

- ON
分割処理
- OFF
一括処理

ON または OFF 以外の値を指定した場合は一括処理されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.input={non-xml | xml} ~<<non-xml>>

入力ファイルの種別を指定します。

- non-xml
バイナリ形式
- xml
XML 形式

non-xml または xml 以外の値を指定した場合はバイナリ形式として扱われます。

csc.adapter.fileOperation.transform.output={non-xml | xml} ~<<non-xml>>

出力ファイルの種別を指定します。

- non-xml

バイナリ形式

- xml

XML 形式

non-xml または xml 以外の値を指定した場合はバイナリ形式として扱われます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.format={fixed | separate | eorseparate} ~<<fixed>>`

入力ファイルの形式を指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または `csc.adapter.fileOperation.transform.input` プロパティで xml（XML 形式）を指定した場合、このプロパティの指定は無視されます。

- fixed

固定長形式

- separate

改行セパレータ形式

- eorseparate

EOR セパレータ形式

これ以外の値を指定した場合は改行セパレータ形式になります。

`csc.adapter.fileOperation.transform.outputTemplateXmlFile=出力用テンプレート XML ファイルのファイル名 ~<文字列><<cscOutputTemplate.xml>>`

出力用テンプレート XML ファイルのファイル名を指定します。パスは指定できません。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）、または `csc.adapter.fileOperation.transform.output` プロパティで non-xml（出力ファイルがバイナリ形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.EOR=EOR コード ~<文字列>`

EOR セパレータ形式で使用する EOR コード（レコードの終端を示すコード）を 16 進数で指定します。16 進数の先頭には「0x」を付与しないでください。

EOR コードの最大長は 8 バイト（16 進数文字列で 16 文字）です。16 進数の表記に使用するアルファベットは大文字・小文字を区別しません。

`csc.adapter.fileOperation.transform.format` プロパティで eorseparate（EOR セパレータ形式）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

`csc.adapter.fileOperation.transform.format` プロパティで eorseparate（EOR セパレータ形式）以外を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord={ON | OFF} ~<<ON>>`

ファイルにヘッダレコードを使用するかどうかを指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

- ON
ヘッダレコードを使用する
- OFF
ヘッダレコードを使用しない

ON または OFF 以外の値を指定した場合、ヘッダレコードを使用しません。

`csc.adapter.fileOperation.transform.trailerRecord={ON | OFF} ~<<ON>>`

ファイルにトレーラレコードを使用するかどうかを指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

- ON
トレーラレコードを使用する
- OFF
トレーラレコードを使用しない

ON または OFF 以外の値を指定した場合、トレーラレコードを使用しません。

`csc.adapter.fileOperation.transform.header.inFormat=ヘッダレコード入力用のバイナリフォーマット定義ファイル名 ~<文字列>`

ヘッダレコード入力用のバイナリフォーマット定義ファイル名を指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord` プロパティで ON（ファイルにヘッダレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または `csc.adapter.fileOperation.transform.input` プロパティで `xml`（入力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.header.outFormat=ヘッダレコード出力用のバイナリフォーマット定義ファイル名 ~<文字列>`

ヘッダレコード出力用のバイナリフォーマット定義ファイル名を指定します。

csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord プロパティで ON（ファイルにヘッダレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.output プロパティで xml（出力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.header.inElement=ヘッダレコードに対応する入力 XML ファイルの要素のパス ~<文字列>

ヘッダレコードに対応する入力 XML ファイルの要素のパスを次の形式で指定します。

要素のパス ::= ('/' ['{' 名前空間URI '}'] 要素名)+

入力ファイルが XML 形式で、csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord プロパティで ON（ファイルにヘッダレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.input プロパティで non-xml（入力ファイルがバイナリ形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.data.inElement プロパティまたは csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.inElement プロパティに指定した要素のパスと重複する場合はエラーとなります。

csc.adapter.fileOperation.transform.header.outElement=ヘッダレコードに対応する出力 XML ファイルの要素のパス ~<文字列>

ヘッダレコードに対応する出力 XML ファイルの要素のパスを次の形式で指定します。

要素のパス ::= ('/' ['{' 名前空間URI '}'] 要素名)+

入力ファイルが XML 形式で、csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord プロパティで ON（ファイルにヘッダレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.output プロパティで non-xml（出力ファイルがバイナリ形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.data.outElement プロパティまたは csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.outElement プロパティに指定した要素のパスと重複する場合はエラーとなります。

csc.adapter.fileOperation.transform.header.styleSheet=ヘッダレコード変換用の XSL ファイル名 ~<文字列>

ヘッダレコード変換用の XSL ファイル名（ユーザ任意のファイル名）を指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord` プロパティで ON（ファイルにヘッダレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.header.fixedSize=ヘッダレコードの固定長サイズ ~<数字>`
`((1-2147483647))`

ヘッダレコードの固定長サイズを指定します（単位：バイト）。次に示すプロパティが両方とも設定されている場合、このプロパティは省略できません。

- `csc.adapter.fileOperation.transform.format` プロパティの値が `fixed`（入力ファイルの形式が固定長）
- `csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord` プロパティの値が ON（ヘッダレコードを使用する）

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または `csc.adapter.fileOperation.transform.input` プロパティで `xml`（入力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。また、`csc.adapter.fileOperation.transform.format` プロパティで `separate`（入力ファイルの形式が改行セパレータ）を指定している場合、このプロパティは省略できます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.header.batchSize=分割処理時のヘッダレコードと見なす先頭のレコード数 ~<数字>((0-524288000))<<0>>`

分割処理方式で、ヘッダレコードと見なす先頭のレコード数を指定します。0 を指定した場合は 1 レコードと見なされます。

0 を指定した場合と、1 から 524288000 までの数値を指定した場合とでは、改行文字の扱いが次のように異なります。

- 0 を指定した場合（指定を省略した場合、不正な値を指定した場合、および範囲外の値を指定した場合を含む）
ヘッダレコードの終了は改行文字（EOR コード）で判断されます。ヘッダレコードから改行文字を除いた部分が 1 レコードとして変換されます。
- 1 から 524288000 を指定した場合
ヘッダレコードの区切りは改行文字（EOR コード）で判断されます。ヘッダレコードは改行文字も含めて変換されます。

次のどれかに当てはまる場合、このプロパティの指定は無視されます。

- `csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティの値が OFF（入力ファイル形式の一括処理）
- `csc.adapter.fileOperation.transform.input` プロパティの値が `xml`（入力ファイルが XML 形式）

- `csc.adapter.fileOperation.transform.format` プロパティの値が `fixed` (入力ファイルの形式が固定長)
- `csc.adapter.fileOperation.transform.headerRecord` プロパティの値が `OFF` (ヘッダレコードを使用しない)

`csc.adapter.fileOperation.transform.data.inFormat=データレコード入力用のバイナリフォーマット定義ファイル名 ~<文字列>`

データレコード入力用のバイナリフォーマット定義ファイル名を指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで `OFF` (入力ファイル形式の一括処理) を指定している場合、または `csc.adapter.fileOperation.transform.input` プロパティで `xml` (入力ファイルが XML 形式) を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.data.outFormat=データレコード出力用のバイナリフォーマット定義ファイル名 ~<文字列>`

データレコード出力用のバイナリフォーマット定義ファイル名を指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで `OFF` (入力ファイル形式の一括処理) を指定している場合、または `csc.adapter.fileOperation.transform.output` プロパティで `xml` (出力ファイルが XML 形式) を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.data.inElement=データレコードに対応する入力 XML ファイルの要素のパス ~<文字列>`

データレコードに対応する入力 XML ファイルの要素のパスを次の形式で指定します。

```
要素のパス ::= ( '/' [ '{' 名前空間URI '}' ] 要素名)+
```

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで `OFF` (入力ファイル形式の一括処理) を指定している場合、または `csc.adapter.fileOperation.transform.input` プロパティで `non-xml` (入力ファイルがバイナリ形式) を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.header.inElement` プロパティまたは `csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.inElement` プロパティに指定した要素のパスと重複する場合はエラーとなります。

`csc.adapter.fileOperation.transform.data.outElement=データレコードに対応する出力 XML ファイルの要素のパス ~<文字列>`

データレコードに対応する出力 XML ファイルの要素のパスを次の形式で指定します。

```
要素のパス ::= ( '/' [ '{' 名前空間URI '}' ] 要素名)+
```

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.output プロパティで non-xml（出力ファイルがバイナリ形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.header.outElement プロパティまたは csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.outElement プロパティに指定した要素のパスと重複する場合はエラーとなります。

csc.adapter.fileOperation.transform.data.styleSheet=データレコード変換用の XSL ファイル名 ~<文字列>

データレコード変換用の XSL ファイル名（ユーザ任意のファイル名）を指定します。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.data.fixedSize=データレコードの固定長サイズ ~<数字>
((1-2147483647))

データレコードの固定長サイズを指定します（単位：バイト）。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.input プロパティで xml（入力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。また、

csc.adapter.fileOperation.transform.format プロパティで separate（入力ファイルの形式が改行セパレータ）を指定している場合、このプロパティは省略できます。

csc.adapter.fileOperation.transform.data.batchSize=1 回当たりのデータレコードの変換数 ~<数字>
<0><0>>

データレコードを何レコードずつ変換するか指定します。1レコード当たりのデータ量が小さいと、1レコードずつ変換するよりも複数レコードを同時に変換した方が、変換性能が向上する場合があります。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「8.7.3 ファイル変換オペレーション」の複数のデータレコードの同時変換に関する記述を参照してください。

0を指定すると1レコードずつ変換されます（小規模データ向けの変換処理）。

1以上を指定すると、変換処理が大規模データ向けに最適化されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.inFormat=トレーラレコード入力用のバイナリフォーマット定義ファイル名 ~<文字列>

トレーラレコード入力用のバイナリフォーマット定義ファイル名を指定します。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailerRecord プロパティで ON（ファイルにトレーラレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.input プロパティで xml（入力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.outFormat=トレーラレコード出力用のバイナリフォーマット定義ファイル名 ~<文字列>

トレーラレコード出力用のバイナリフォーマット定義ファイル名を指定します。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailerRecord プロパティで ON（ファイルにトレーラレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.output プロパティで xml（出力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.inElement=トレーラレコードに対応する入力 XML ファイルの要素のパス ~<文字列>

トレーラレコードに対応する入力 XML ファイルの要素のパスを次の形式で指定します。

要素のパス ::= ('/' ['{ 名前空間URI }'] 要素名)+

入力ファイルが XML 形式で、csc.adapter.fileOperation.transform.trailerRecord プロパティで ON（ファイルにトレーラレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.input プロパティで non-xml（入力ファイルがバイナリ形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.header.inElement プロパティまたは csc.adapter.fileOperation.transform.data.inElement プロパティに指定した要素のパスと重複する場合はエラーとなります。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.outElement=トレーラレコードに対応する出力 XML ファイルの要素のパス ~<文字列>

トレーラレコードに対応する出力 XML ファイルの要素のパスを次の形式で指定します。

要素のパス ::= ('/' ['{ 名前空間URI }'] 要素名)+

入力ファイルが XML 形式で、csc.adapter.fileOperation.transform.trailerRecord プロパティで ON（ファイルにトレーラレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.output プロパティで non-xml（出力ファイルがバイナリ形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.header.outElement プロパティまたは csc.adapter.fileOperation.transform.data.outElement プロパティに指定した要素のパスと重複する場合はエラーとなります。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.styleSheet=トレーラレコード変換用の XSL ファイル名 ~<文字列>

トレーラレコード変換用の XSL ファイル名（ユーザ任意のファイル名）を指定します。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailerRecord プロパティで ON（ファイルにトレーラレコードを使用する）を指定している場合、このプロパティは省略できません。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.trailer.fixedSize=トレーラレコードの固定長サイズ ~<数字> ((1-2147483647))

トレーラレコードの固定長サイズを指定します（単位：バイト）。次に示すプロパティが両方とも設定されている場合、このプロパティは省略できません。

- csc.adapter.fileOperation.transform.format プロパティの値が fixed（入力ファイルの形式が固定長）
- csc.adapter.fileOperation.transform.trailerRecord プロパティの値が ON（トレーラレコードを使用する）

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで OFF（入力ファイル形式の一括処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.input プロパティで xml（入力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。また、csc.adapter.fileOperation.transform.format プロパティで separate を指定している場合は、このプロパティは省略できます。

csc.adapter.fileOperation.transform.all.inFormat=一括処理時の入力用のバイナリフォーマット定義ファイル名 ~<文字列>

一括処理時の入力用のバイナリフォーマット定義ファイル名を指定します。

csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad プロパティで ON（入力ファイル形式の分割処理）を指定している場合、または csc.adapter.fileOperation.transform.input プロパティで xml（入力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

csc.adapter.fileOperation.transform.all.outFormat=一括処理時の出力用のバイナリフォーマット定義ファイル名 ~<文字列>

一括処理時の出力用のバイナリフォーマット定義ファイル名を指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで ON（入力ファイル形式の分割処理）を指定している場合、または `csc.adapter.fileOperation.transform.output` プロパティで `xml`（出力ファイルが XML 形式）を指定している場合、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.all.styleSheet`=一括処理時の変換用の XSL ファイル名 ~<文字列>

一括処理時の変換用の XSL ファイル名（ユーザ任意のファイル名）を指定します。

`csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad` プロパティで ON（入力ファイル形式の分割処理）を指定している場合は、このプロパティの指定は無視されます。

`csc.adapter.fileOperation.transform.existFile`={`overwrite` | `error`} ~<<overwrite>>

ファイル変換オペレーション時に出力するファイルと同名のファイルが存在する場合、上書きするかどうかを指定します。

- `overwrite`
既存の内容のファイルに上書き
- `error`
ファイル変換を中止し例外を発行

`overwrite` または `error` 以外の値を指定した場合、ファイル変換を中止し、例外を発行します。

`csc.adapter.fileOperation.copy.existFile`={`overwrite` | `error`} ~<<overwrite>>

ファイル複製オペレーション時に同名のファイルが存在する場合、上書きするかどうかを指定します。

- `overwrite`
既存の内容のファイルに上書き
- `error`
コピーを中止し例外を発行

`overwrite` または `error` 以外の値を指定した場合、コピーを中止し、例外を発行します。

`csc.adapter.fileOperation.move.existFile`={`overwrite` | `error`} ~<<overwrite>>

ファイル移動オペレーション時に出力するファイルと同名のファイルが存在する場合、上書きするかどうかを指定します。

- `overwrite`
既存の内容のファイルに上書き
- `error`

移動を中止し例外を発行

overwrite または error 以外の値を指定した場合、移動を中止し、例外を発行します。

`csc.adapter.fileOperation.compress.existFile={overwrite | error} ~<<overwrite>>`

ファイル圧縮オペレーション時に出力するファイルと同名のファイルが存在する場合、上書きするかどうかを指定します。

- **overwrite**
既存の内容のファイルに上書き圧縮
- **error**
圧縮を中止し例外を発行

overwrite または error 以外の値を指定した場合、圧縮を中止し、例外を発行します。

`csc.adapter.fileOperation.extract.existFile={overwrite | error} ~<<overwrite>>`

ファイル伸張オペレーション時に出力するファイルと同名のファイルが存在する場合、上書きするかどうかを指定します。

- **overwrite**
既存の内容のファイルに上書き伸張
- **error**
伸張を中止し例外を発行

overwrite または error 以外の値を指定した場合、伸張を中止し、例外を発行します。

`csc.adapter.fileOperation.writeList.existFile={overwrite | error} ~<<overwrite>>`

ファイル一覧書き込みオペレーション時に出力するファイルと同名のファイルが存在する場合、上書きするかどうかを指定します。

- **overwrite**
既存の内容のファイルに上書き
- **error**
一覧書き込みを中止し例外を発行

overwrite または error 以外の値を指定した場合、一覧書き込みを中止し、例外を発行します。

(4) 記述例

記述例を次に示します。

```
csc.adapter.fileOperation.transform.splitLoad=on
csc.adapter.fileOperation.transform.format=fixed
csc.adapter.fileOperation.transform.header.inFormat=in_hdr.fdx
csc.adapter.fileOperation.transform.header.outFormat=out_hdr.fdx
csc.adapter.fileOperation.transform.header.styleSheet=trans_hdr.xsl
csc.adapter.fileOperation.transform.header.fixedSize=64
:
```

3.6 SOAP 連携で利用するファイル

3.6.1 SOAP 受付定義ファイル

(1) 形式

```
[urecp-soap.switchover.file-transfer.mode={true | false}]
```

(2) 機能

SOAP1.1/1.2 併用モードで、ユーザ定義受付（SOAP 受付）が呼び出された際の動作を定義するファイルです。ユーザ定義受付（SOAP 受付）の開始時に設定が有効になります。不正な定義が含まれていた場合、初期化処理でエラーが発生しますが開始コマンドは正常終了します。Web サービス初期化時の動作についてはマニュアル「アプリケーションサーバ Web サービス開発ガイド」の「10.9 Web サービスの初期化と破棄」を参照してください。

なお、ユーザ定義受付（SOAP 受付）に対して SOAP 受付定義ファイルが設定されていない場合、SOAP 受付定義ファイルで設定できるすべてのプロパティに、デフォルト値が仮定されます。

SOAP 受付定義ファイルは「cscurecpsoap.properties」というファイル名で作成します。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%soaprecp%templates%cscurecpsoap.properties
```

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。SOAP 受付定義ファイルを編集する場合は、ユーザ定義受付（SOAP 受付）の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で「独自定義ファイル」の「編集」ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

(4) 設定できるパラメタ

```
urecp-soap.switchover.file-transfer.mode={true | false} ~<<false>>
```

リクエスト受付時に SOAP 受付が作業フォルダを作成するかどうかを設定します。大文字と小文字は区別されません。

このプロパティは添付ファイルが存在しないリクエストに対して有効です。添付ファイルが存在する場合は、必ず作業フォルダが作成されます。

- true

リクエストに添付ファイルが存在するかどうかに関係なく作業フォルダが作成されます。なお、作成された作業フォルダは SOAP 受付では削除されません。

- false

リクエストに添付ファイルが存在する場合は作業フォルダが作成されます。それ以外の場合は、作業フォルダは作成されません。

(5) 記述例

記述例を次に示します。

```
urecp-soap.switchover.file-transfer.mode=true
```

3.6.2 クライアント定義ファイル

(1) 形式

```
[com.cosminexus.csc.connect.timeout=接続タイムアウト値]  
[com.cosminexus.csc.request.timeout=読み込みタイムアウト値]  
[com.cosminexus.csc.session.maintain={true | false}]  
[com.cosminexus.csc.auto-delete-incomplete-file={true | false}]  
[com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.count=ロックリトライ回数]  
[com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.interval=ロックリトライ間隔]
```

(2) 機能

SOAP1.1/1.2 併用モードで、サービスアダプタから Web サービスを呼び出すときの動作を定義するファイルです。サービスアダプタの開始時に設定が有効になります。

クライアント定義ファイルは「cscwsconf.properties」というファイル名で作成します。

(3) 設定できるパラメタ

com.cosminexus.csc.connect.timeout=接続タイムアウト値 ~<数字>((0-86400))<<60>>

SOAP アダプタからサービス部品にアクセスする際のソケットの接続タイムアウト値を秒単位で指定します。0 を指定した場合、タイムアウトしません。このプロパティで指定したタイムアウト値は、Web サービス呼び出し時に適用されます。

com.cosminexus.csc.request.timeout=読み込みタイムアウト値 ~<数字>((0-86400))<<300>>

SOAP アダプタからサービス部品にアクセスする際のソケットの読み込みタイムアウト値を秒単位で指定します。0 を指定した場合、タイムアウトしません。このプロパティで指定したタイムアウト値は、Web サービス呼び出し時に適用されます。

`com.cosminexus.csc.session.maintain={true | false} ~<<false>>`

HTTP セッションの維持の有無を指定します。

- `true`
セッションが維持されます。
- `false`
セッションが維持されません。

`com.cosminexus.csc.auto-delete-incomplete-file={true | false} ~<<true>>`

SOAP アダプタがサービス部品から添付ファイルを受信し、作業フォルダまたは共通フォルダにファイルを出力する際にエラーが発生すると不完全なファイルが生成されます。この不完全なファイルを自動的に削除するかどうかを指定します。

- `true`
不完全なファイルを自動的に削除します。
- `false`
不完全なファイルを自動的に削除しません。

`com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.count =ロックリトライ回数 ~<数字>`
`((0-1024))<<0>>`

共通フォルダ内のファイルの共有ロック取得失敗時のロックリトライ回数を指定します。

`com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.interval =ロックリトライ間隔 ~<数字>`
`((1-1024))<<1>>`

共通フォルダ内のファイルの共有ロック失敗時のロックリトライ間隔を秒単位で指定します。

(4) 記述例

```
com.cosminexus.csc.connect.timeout=120
com.cosminexus.csc.request.timeout=480
com.cosminexus.csc.session.maintain=false
com.cosminexus.csc.auto-delete-incomplete-file=true
com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.count=5
com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.interval=1
```

(5) 注意事項

同一のプロパティを複数記述しないでください。複数記述した場合、どの値が有効になるか保証されません。

3.7 Object Access アダプタで利用するファイル

3.7.1 Object Access アダプタ通信構成定義ファイル

(1) 形式

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<adapteroa_properties>
  <communication1>
    <operation>
      <op_name>オペレーション名称</op_name>
      <method_name>メソッド名称</method_name>
      <return_watch_time>応答監視時間</return_watch_time>
    </operation>
    <bind_type>スマートエージェントへのバインド形態</bind_type>
    <object_name>オブジェクト名称</object_name>
    <connect_watch_time>コネクション確立監視時間</connect_watch_time>
    <repository_id>リポジトリID</repository_id>
    <host_name>ホスト名称またはIPアドレス</host_name>
    <interface_id>インタフェースID</interface_id>
  </communication1>
</adapteroa_properties>
```

(凡例) : ユーザの編集箇所を示しています。

: 複数指定できることを示しています。

(2) 機能

Object Access アダプタの通信定義を XML 形式で設定します。

Object Access アダプタ通信構成定義ファイルは次の手順で作成し、実行環境に反映してください。Object Access アダプタ通信構成定義ファイルの作成から、Object Access アダプタを定義するまでの流れは、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.8 Object Access アダプタを定義する」を参照してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、Object Access アダプタ通信構成定義ファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%0A%config%templates%adpoa_communication1.xml
```

編集後のファイルは、ファイル名「adpoa_com.xml」で保存してください。

2. ユーザ定義ファイル作成コマンドを実行し、定義した Object Access アダプタ通信構成定義ファイルを jar ファイルにパッケージングします。
3. HCSC 開発環境でパッケージングし、実行環境へインポートします。

Object Access アダプタ通信構成定義ファイルの定義内容を変更した場合は、手順 2~3 を実行して、実行環境へインポートしてください。

(3) 設定できる要素

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

このファイルが XML ファイルであることを示す XML 宣言です。

<adaptera_properties>

Object Access アダプタ通信構成定義のルート要素です。

<communication1>

オブジェクトアダプタに BOA, オブジェクト間通信にスマートエージェントを利用する通信管理要素です。1 つだけ定義できます。指定は省略できません。

<operation>

IDL のオペレーションを指定する要素です。この要素はオペレーションの数だけ定義できます。指定は省略できません。

<op_name>

オペレーション名称を指定する要素です。この要素の値には、HCSC 開発環境に指定するオペレーション名称を指定してください。指定は省略できません。

なお、指定した値の正誤はチェックされません。Object Access アダプタでは、この要素の値として「exec2」を指定します。

<method_name>

IDL のメソッド名称を指定する要素です。この要素の値には、<op_name>要素で指定したオペレーション名称に対応する IDL のオペレーション宣言のメソッド名称を指定してください。指定は省略できません。

なお、オペレーション名称とメソッド名称の対応や、指定値の正誤はチェックされません。Object Access アダプタでは、この要素の値には「exec2」を指定します。

<return_watch_time> ~<符号なし数字>((0-1800000))<<180000>>

リクエスト要求に対する応答監視時間を指定する要素です。この要素の値には、Object Access アダプタが通信先のオブジェクトに対してリクエスト要求を開始してから、応答が返るまでの待ち時間の最大値をミリ秒単位で指定してください。指定は省略できます。

0 を指定した場合は、応答を受信するまで無限に待ちます。

<bind_type> ~{Type1 | Type2}<<Type1>>

スマートエージェントへのバインド形態を指定する要素です。この要素の値には、スマートエージェントへのバインド形態のタイプを次の中から指定してください。指定は省略できます。

- Type1
通信相手が複数存在し、負荷分散したい場合に指定します。
- Type2
通信相手が 1 か所の場合に指定します。

<object_name>

オブジェクト名称を指定する要素です。この要素の値には、ORB オブジェクトを識別するオブジェクト名称を指定してください。指定は省略できません。

なお、指定値の正誤はチェックされません。

<connect_watch_time> ~<符号なし数字>((0-1800000))<<0>>

コネクション確立監視時間を指定する要素です。この要素の値には、通信先のオブジェクトに対してコネクション確立の要求を開始してから、応答が返るまでの待ち時間の最大値をミリ秒単位で指定してください。指定は省略できます。

0 を指定した場合は、コネクションが確立するまで無限に待ち続けます。

<repository_id>

インタフェースのリポジトリ ID を指定する要素です。この要素の値には、IDL のインタフェースのリポジトリ ID を指定してください。リポジトリ ID については、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) デベロッパーズガイド」を参照してください。指定は省略できません。

なお、指定値の正誤はチェックされません。Object Access アダプタではこの要素の値に「IDL:OWB2:1.0」を指定します。

<host_name>

ホスト名称を指定する要素です。この要素の値には、ORB オブジェクトを探すホスト名称を識別する文字列または IP アドレスを指定してください。指定は省略できます。

なお、指定値の正誤はチェックされません。

<interface_id> ~<英数字>((1-50 文字))

インタフェース ID を指定する要素です。通信インタフェースファイル作成コマンドの-interfaceid に指定したインタフェース ID を指定します。指定は省略できません。

(4) 記述例

要素の指定値を省略する場合は、各要素の開始タグと終了タグを含めて省略します。開始タグおよび終了タグだけを記述しても値を省略できません。<connect_watch_time>の指定を省略する場合の記述例を次に示します。

正しい記述方法

```
:  
<object_name>Object001</object_name>  
<repository_id>IDL:0WB2:1.0</repository_id>  
:
```

誤った記述方法 (<connect_watch_time>の指定値がない)

```
:  
<object_name>Object001</object_name>  
<connect_watch_time></ connect_watch_time >  
<repository_id>IDL:0WB2:1.0</repository_id>  
:
```

3.8 Message Queue アダプタで利用するファイル

3.8.1 Message Queue アダプタ環境定義ファイル

(1) 形式

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE properties SYSTEM "http://java.sun.com/dtd/properties.dtd">
<properties>
  <entry key="adpmq_deffile">Message Queueアダプタ通信構成定義ファイル名称</entry>
</properties>
```

(2) 機能

Message Queue アダプタの環境定義情報を XML 形式で設定します。

Message Queue アダプタ環境定義ファイルは次の手順で作成し、実行環境に反映してください。

1. 次のテンプレートファイルを任意のディレクトリにコピーし、Message Queue アダプタ環境定義ファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%MQ%config%templates%customadapter_properties.xml
```

編集後のファイルは、ファイル名「customadapter_properties.xml」で保存してください。

2. 定義した Message Queue アダプタ環境定義ファイルを HCSC 開発環境でパッケージングし、実行環境へインポートします。

Message Queue アダプタ環境定義ファイルの定義内容を変更した場合は、手順 2 を実行して実行環境へインポートしてください。

(3) 設定できる要素

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
```

このファイルが XML ファイルであることを示す XML 宣言です。

```
<!DOCTYPE properties SYSTEM "http://java.sun.com/dtd/properties.dtd">
```

DTD サブセットを示す要素型定義宣言です。

```
<properties>
```

Message Queue アダプタ環境定義のルート要素です。

```
<entry key="adpmq_deffile"> ~< Message Queue アダプタ通信構成定義ファイル名称>
```

Message Queue アダプタ通信構成定義ファイル名称を指定する要素です。この要素の値には、実行環境での通信構成を記述した Message Queue アダプタの通信構成定義ファイル名称を記述してください。Message Queue アダプタの通信構成定義ファイルについては、「[3.8.2 Message Queue アダプタ通信構成定義ファイル](#)」を参照してください。

3.8.2 Message Queue アダプタ通信構成定義ファイル

(1) 形式

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<adaptermq_properties>
  <res_ref_name>リソースアダプタ特定情報</res_ref_name>

  {
    <operation>
      <op_name>オペレーション名</op_name>
      <char_code>文字コード</char_code>
      <send_operation>
        <res_name>送信キュー特定情報</res_name>
        <id_type>メッセージ送受信タイプ</id_type>
        <message_type>送信用メッセージタイプ</message_type>
        <JMSDeliveryMode>メッセージ永続性</JMSDeliveryMode>
        <JMSExpiration>メッセージ保存時間</JMSExpiration>
        <JMSType>メッセージタイプ</JMSType>
        <JMSCorrelID_PFX>メッセージ相関識別子プリフィックス</JMSCorrelID_PFX>
      </send_operation>
    </operation>
  }
  {
    <operation>
      <op_name>オペレーション名</op_name>
      <receive_operation>
        <res_name>受信キュー特定情報</res_name>
        <id_type>メッセージ送受信タイプ</id_type>
        <receive_timeout>メッセージ応答監視時間</receive_timeout>
      </receive_operation>
    </operation>
  }
  {
    <operation>
      <op_name>オペレーション名</op_name>
      <char_code>文字コード</char_code>
      <sndrcv_operation>
        <res_inf>
          <snd_res_name>送信キュー特定情報</snd_res_name>
          <rcv_res_name>受信キュー特定情報</rcv_res_name>
        </res_inf>
        <message_type>送信用メッセージタイプ</message_type>
        <JMSDeliveryMode>メッセージ永続性</JMSDeliveryMode>
        <JMSExpiration>メッセージ保存時間</JMSExpiration>
        <JMSType>メッセージタイプ</JMSType>
        <receive_timeout>メッセージ応答監視時間</receive_timeout>
      </sndrcv_operation>
    </operation>
  }
  {
    <operation>
      <op_name>オペレーション名</op_name>
      <browse_operation>
        <res_name>受信キュー特定情報</res_name>
        <id_type>メッセージ送受信タイプ</id_type>
      </browse_operation>
    </operation>
  }
</adaptermq_properties>
```

(凡例)

■ : ユーザの編集個所を示しています。

{ } : 複数指定できることを示しています。

(2) 機能

Message Queue アダプタの通信定義を XML 形式で設定します。通信定義には次の種類があります。

- メッセージ送信用オペレーション定義

- メッセージ受信用オペレーション定義
- メッセージ送受信オペレーション定義
- ブラウズ・メッセージ受信用オペレーション定義

Message Queue アダプタ通信構成定義ファイルは次の手順で作成し、実行環境に反映してください。

1. 次のテンプレートファイルを任意のディレクトリにコピーし、Message Queue アダプタ通信構成定義ファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%MQ%config%templates%adpmq_communication.xml
```

編集後のファイルは任意のファイル名で保存してください。

2. HCSC 開発環境でパッケージングし、実行環境へインポートします。

作成した Message Queue アダプタ通信構成定義ファイルのファイル名は、Message Queue アダプタ環境定義ファイルの<entry key="adpmq_deffile">要素の値として指定する必要があります。詳細については、「[3.8.1 Message Queue アダプタ環境定義ファイル](#)」を参照してください。

Message Queue アダプタ通信構成定義ファイルの定義内容を変更した場合は、手順 2 を実行して実行環境へインポートしてください。

(3) 設定できる要素

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
```

このファイルが XML ファイルであることを示す XML 宣言です。

```
<adaptermq_properties>
```

Message Queue アダプタ通信構成定義のルート要素です。

```
<res_ref_name> ~<英数字, 階層区切り文字>((1-255 バイト))
```

リソースアダプタ特定情報を指定します。この要素の値には、アプリケーション統合属性ファイルの<hitachi-session-bean-property>に含まれる<res-ref-name>要素の内容と「jms/」を含めて同じ値を指定してください。指定は省略できません。

アプリケーション統合属性ファイルの指定値と合わせる定義項目については、アプリケーション統合属性ファイルの指定方法に従ってください。アプリケーション統合属性ファイルの指定方法は、マニュアル「[アプリケーションサーバリファレンス 定義編\(アプリケーション/リソース定義\)](#)」を参照してください。

```
<operation>
```

オペレーション要素です。この要素はオペレーションの数だけ定義できます。指定は省略できません。

```
<op_name> ~<英数字>((1-256 バイト))
```

3. 定義ファイル (開発環境)

オペレーション名を指定する要素です。この要素の値には、HCSC 開発環境に指定するオペレーション名を指定してください。指定は省略できません。

<char_code> ~{UTF8 | UTF16_BIG | UTF16_LITTLE | MS932 | JIS | KEIS+EBCDIC | KEIS+EBCDIK}<<UTF8>>

バイナリ入力形式のメッセージ送信要求電文またはメッセージ送受信要求電文に送信キュー特定情報および受信キュー特定情報を指定する場合、文字コードを指定します。指定は省略できます。

<send_operation>

メッセージ送信を指定する要素です。指定は省略できます。

メッセージ送信定義を設定する場合は必ず指定してください。

<receive_operation>

メッセージ受信を指定する要素です。指定は省略できます。

メッセージ受信定義を設定する場合は必ず指定してください。

<sndrcv_operation>

メッセージ送受信を指定する要素です。指定は省略できます。

メッセージ送受信定義を設定する場合は必ず指定してください。

<browse_operation>

ブラウズ・メッセージ受信を指定する要素です。指定は省略できます。

ブラウズ・メッセージ受信定義を設定する場合は必ず指定してください。

<res_name> ~<英数字, 階層区切り文字>((1-255 バイト))<<要求電文設定情報>>

送信キュー特定情報または受信キュー特定情報を指定します。この要素の値には、アプリケーション統合属性ファイルの<hitachi-session-bean-property>に含まれる<resource-env-ref-name>要素内容と同じ値を指定してください。

要求電文で送信キュー特定情報または受信キュー特定情報を指定する場合は、指定を省略できます。

アプリケーション統合属性ファイルの指定値と合わせる定義項目については、アプリケーション統合属性ファイルの指定方法に従ってください。アプリケーション統合属性ファイルの指定方法は、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス 定義編(アプリケーション/リソース定義)」を参照してください。

<res_inf>

メッセージ送受信要求を実行する場合、送信キュー特定情報 (<snd_res_name>) および受信キュー特定情報 (<rcv_res_name>) 要素を指定します。指定は省略できます。

指定する場合は、送信キュー特定情報と受信キュー特定情報の両方を指定してください。一方だけは指定できません。

<snd_res_name> ~<英数字, 階層区切り文字>((1-255 バイト))<<要求電文設定情報>>

送信キュー特定情報を指定します。この要素の値には、アプリケーション統合属性ファイルの<hitachi-session-bean-property>に含まれる<resource-env-ref-name>要素内容と同じ値を指定してください。

要求電文で送信キュー特定情報を指定する場合は、指定を省略できます。

アプリケーション統合属性ファイルの指定値と合わせる定義項目については、アプリケーション統合属性ファイルの指定方法に従ってください。アプリケーション統合属性ファイルの指定方法は、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス 定義編(アプリケーション/リソース定義)」を参照してください。

<rcv_res_name> ~<英数字, 階層区切り文字>((1-255 バイト))<<要求電文設定情報>>

受信キュー特定情報を指定します。この要素の値には、アプリケーション統合属性ファイルの<hitachi-session-bean-property>に含まれる<resource-env-ref-name>要素と同じ値を指定してください。

要求電文で受信キュー特定情報を指定する場合は、指定を省略できます。

アプリケーション統合属性ファイルの指定値と合わせる定義項目については、アプリケーション統合属性ファイルの指定方法に従ってください。アプリケーション統合属性ファイルの指定方法は、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス 定義編(アプリケーション/リソース定義)」を参照してください。

<id_type> ~{Type1 | Type2}<<Type1>>

メッセージ関連識別子を設定するかどうかを次の中から指定します。指定は省略できます。

- Type1
メッセージ関連識別子を設定しません。
- Type2
メッセージ関連識別子を設定します。

メッセージ送信要求の場合と、ブラウザ・メッセージ受信またはメッセージ受信要求の場合とで、次のように動作が異なります。

値	メッセージ送信要求の場合	メッセージ受信またはブラウザ・メッセージ受信要求の場合
Type1	メッセージ関連識別子を設定しないでメッセージを送信します。	メッセージ関連識別子を設定しないでメッセージを受信します。
Type2	JMSCorrelationID にメッセージ関連識別子を設定してメッセージを送信します。メッセージ識別子は Message Queue アダプタが自動的に生成します。	ユーザ指定のメッセージ識別子 (CorrelationID) を設定してメッセージを受信します。

<message_type> ~{BytesMessage | TextMessage}<<BytesMessage>>

送信用メッセージタイプを指定します。指定は省略できます。

- BytesMessage
javax.jms.BytesMessage で送信します。
- TextMessage
javax.jms.TextMessage で送信します。ただし、メッセージ送信要求（要求電文）がバイナリ形式の場合はエラーとなります。

<JMSDeliveryMode> ~{PERSISTENT | NONPERSISTENT}<<PERSISTENT>>

送信メッセージの永続性の有無を指定します。指定は省略できます。

- PERSISTENT
永続性ありを指定します。キューマネージャ再開始後、送信キューにメッセージが残ります。
- NONPERSISTENT
永続性なしを指定します。キューマネージャ再開始後、送信キューにメッセージが残りません。

<JMSExpiration> ~<数字>((0-65535000))<<0>>

送信メッセージ送信時の保持時間をミリ秒単位で指定します。指定は省略できます。

指定を省略するか 0 を指定した場合、メッセージが取得されるまで送信キューに保持し続けます。

なお、1 秒未満の時間を指定すると、0 ミリ秒と解釈される場合があります。JMS プロバイダの仕様を確認してください。

<JMSType> ~<英数字>

メッセージタイプを指定します。この要素の値に、送受信するメッセージを特定するメッセージタイプを指定してください。指定は省略できます。

リソースアダプタの Queue プロパティの targetClient 指定に「MQ」を指定した場合、この指定は有効となりません。

<JMSCorrelID_PFX> ~<英数字>((1-6 バイト))

メッセージ相関識別子 (CorrelationID) のプリフィックスを指定します。指定は省略できます。

この要素の値には、メッセージ相関識別子のプリフィックスを指定してください。この要素の値は、メッセージ送信要求またはメッセージ送受信要求で、<id_type>要素が「Type2」の場合に有効となります。

<receive_timeout> ~<数字>((1000-65535000))<<180000>>

メッセージ応答監視時間をミリ秒単位で指定します。指定は省略できます。

この要素の値には、メッセージの受信が完了するまでの時間を指定します。この要素の値の時間内にメッセージを受信できない場合は、Fault 応答情報が返ります。

(4) 記述例

要素の指定値を省略する場合は、各要素の開始タグおよび終了タグを含めて省略してください。開始タグおよび終了タグだけを記述しても、値の省略やタグ内の定義順序の変更はできません。

正しい記述方法

```
      :  
<JMSExpiration>0</JMSExpiration>  
<JMSDeliveryMode>PERSISTENT</JMSDeliveryMode>  
      :
```

誤った記述方法 (<JMSDeliveryMode>の指定値がない)

```
      :  
<JMSExpiration>0</JMSExpiration>  
<JMSDeliveryMode></JMSDeliveryMode>  
      :
```

3.9 Message Queue 受付で利用するファイル

3.9.1 Message Queue 受付定義ファイル

(1) 形式

```
resource-adapter=Message Queue受付が使用するMQリソースアダプタの表示名
[pooled-instance.minimum=カスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最小数]
[pooled-instance.maximum=Message Queue受付およびカスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最大数]
[ejb-transaction-timeout=Message Queue受付およびカスタム受付フレームワークのEJBトランザクションタイムアウト時間]
activation-config.destination=メッセージを受信する宛先
activation-config.username=キューマネージャ接続時のデフォルトユーザ名
[activation-config.ccdtURL=プロパティ値]
[activation-config.CCSID=プロパティ値]
[activation-config.channel=プロパティ値]
[activation-config.clientID=プロパティ値]
[activation-config.failIfQuiesce=プロパティ値]
[activation-config.headerCompression=プロパティ値]
[activation-config.hostName=プロパティ値]
[activation-config.localAddress=プロパティ値]
[activation-config.messageBatchSize=プロパティ値]
[activation-config.messageCompression=プロパティ値]
[activation-config.messageRetention=プロパティ値]
[activation-config.password=プロパティ値]
[activation-config.pollingInterval=プロパティ値]
[activation-config.port=プロパティ値]
[activation-config.providerVersion=プロパティ値]
[activation-config.queueManager=プロパティ値]
[activation-config.rescanInterval=プロパティ値]
[activation-config.shareConvAllowed=プロパティ値]
[activation-config.transportType=プロパティ値]
[activation-config.maxMessages=プロパティ値]
[activation-config.maxPoolDepth=プロパティ値]
[activation-config.messageSelector=プロパティ値]
[activation-config.poolTimeout=プロパティ値]
[activation-config.readAheadAllowed=プロパティ値]
[activation-config.readAheadClosePolicy=プロパティ値]
[activation-config.startTimeout=プロパティ値]
[activation-config.useJNDI=プロパティ値]
```

(2) 機能

Message Queue 受付の動作情報を設定します。

Message Queue 受付開始時に、Message Queue 受付定義ファイルに設定した内容が有効になります。

なお、Message Queue 受付に対して Message Queue 受付定義ファイルが設定されていない場合、Message Queue 受付の配備時にエラーになります。

Message Queue 受付定義ファイルは「cscurecpmq.properties」というファイル名で作成します。「cscurecpmq.properties」以外のファイル名で作成した場合、そのファイルは無視されます。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%mq%config%templates%cscurecpmq.properties
```

(4) 設定できるプロパティ

resource-adapter=Message Queue 受付が使用する MQ リソースアダプタの表示名 ~<英数字およびアンダーバー (_) >((1-240文字))

Message Queue 受付が使用する MQ リソースアダプタの表示名を指定します。

pooled-instance.minimum=カスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最小数 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>

カスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最小数を整数で指定します。0 を指定した場合、制限はありません。

pooled-instance.maximum=Message Queue 受付およびカスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最大数 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>

Message Queue 受付およびカスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最大数を整数で指定します。0 を指定した場合、受付処理のプール内のインスタンスの最大数には、1 が設定されます。

ejb-transaction-timeout=Message Queue 受付およびカスタム受付フレームワークの EJB トランザクションタイムアウト時間 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>

Message Queue 受付およびカスタム受付フレームワークの EJB トランザクションタイムアウト時間を秒単位で指定します。0 を指定した場合、J2EE サーバに設定されたデフォルトのタイムアウト値で動作します。

activation-config.destination=メッセージを受信する宛先 ~<英数字および記号>

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「destination」に値を設定します。プロパティ値には、メッセージを受信する宛先 (IBM MQ で作成したキュー名称) を指定します。

activation-config.username=キューマネージャ接続時のデフォルトユーザ名 ~<英数字および記号><<null>>

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「username」に値を設定します。プロパティ値には、キューマネージャへ接続するときに使用するデフォルトユーザ名を指定します。

activation-config.ccdtURL=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「ccdtURL」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

クライアントチャンネル定義テーブルが格納されているファイルの名前と場所を識別し、このファイルのアクセス方法を指定します。

activation-config.CCSID=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「CCSID」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.channel=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「channel」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.clientID=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「clientID」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.failIfQuiesce=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「failIfQuiesce」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.headerCompression=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「headerCompression」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.hostName=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「hostName」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.localAddress=プロパティ値

IBM MQとの接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「localAddress」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQのマニュアルを参照してください。

activation-config.messageBatchSize=プロパティ値

IBM MQとの接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「messageBatchSize」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQのマニュアルを参照してください。

activation-config.messageCompression=プロパティ値

IBM MQとの接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「messageCompression」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQのマニュアルを参照してください。

activation-config.messageRetention=プロパティ値

IBM MQとの接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「messageRetention」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQのマニュアルを参照してください。

activation-config.password=プロパティ値

IBM MQとの接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「password」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQのマニュアルを参照してください。

activation-config.pollingInterval=プロパティ値

IBM MQとの接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「pollingInterval」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQのマニュアルを参照してください。

activation-config.port=プロパティ値

IBM MQとの接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「port」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQのマニュアルを参照してください。

activation-config.providerVersion= プロパティ値

IBM MQとの接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「providerVersion」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQのマニュアルを参照してください。

activation-config.queueManager=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「queueManager」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.rescanInterval=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「rescanInterval」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.shareConvAllowed=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「shareConvAllowed」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.transportType=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「transportType」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.maxMessages=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「maxMessages」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.maxPoolDepth=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「maxPoolDepth」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.messageSelector=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「messageSelector」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.poolTimeout=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「poolTimeout」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.readAheadAllowed=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「readAheadAllowed」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.readAheadClosePolicy=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「readAheadClosePolicy」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.startTimeout=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「startTimeout」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

activation-config.useJNDI=プロパティ値

IBM MQ との接続で使用される ActivationSpec オブジェクトのプロパティ「useJNDI」に値を設定します。プロパティ値に指定できる値など、このプロパティの詳細は、IBM MQ のマニュアルを参照してください。

3.10 HTTP アダプタで利用するファイル

3.10.1 HTTP アダプタ定義ファイル

(1) 形式

```
[adphttp.protocol.follow-redirect={true | false}]
[adphttp.protocol.encoding-type=エンコーディング形式]
[adphttp.protocol.connect-timeout=接続タイムアウト時間]
[adphttp.protocol.read-timeout=読み込みタイムアウト時間]
[adphttp.protocol.chunked-encoding-size=チャンクサイズ]
[adphttp.protocol.https-server-authentication={true | false}]
[adphttp.protocol.https-hostname-verification={true | false}]

[adphttp.file.read-lock.retry.count=共有ロック取得失敗時のロックリトライ回数]
[adphttp.file.read-lock.retry.interval=共有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔]

[adphttp.data-size-limit.body-message=HTTPレスポンスボディの最大サイズ]
[adphttp.data-size-limit.file=ファイルの最大サイズ]

[adphttp.response-code.normal=正常処理として扱うステータスコード]
[adphttp.response-code.fault=フォルト処理として扱うステータスコード]

[adphttp.auto-delete-incomplete-file={true | false}]

[adphttp.request.switchover.json-transfer.mode={true | false}]
[adphttp.response.switchover.json-transfer.mode={true | false}]

[adphttp.oauth.authentication={true | false}]
```

(2) 機能

HTTP アダプタの動作情報を設定します。

HTTP アダプタ定義ファイルは「cscadphttp.properties」というファイル名で作成します。

HTTP アダプタの開始時に、HTTP アダプタ定義ファイルに設定した内容が有効になります。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config%templates%cscadphttp.properties
```

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。このテンプレートファイルを任意のディレクトリにコピーしたあとファイルを編集し、定義ファイルを作成してください。

(4) 設定できるプロパティ

(a) プロトコル動作指定関連

`adhttp.protocol.follow-redirect={true | false} ~<<false>>`

リダイレクト機能を使うかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されません。

- true
リダイレクト機能を使用します。
- false
リダイレクト機能を使用しません。

HTTP アダプタのリダイレクト機能は、V9 互換モードでは使用できません。リダイレクト機能については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.16.11 HTTP アダプタのリダイレクト」を参照してください。

`adhttp.protocol.encoding-type=エンコーディング形式 ~((gzip))`

送受信する HTTP ボディのエンコーディング形式を指定します。指定できるエンコーディング形式は「gzip」だけです。大文字と小文字は区別されません。デフォルトではエンコーディング形式は定義されません。

- gzip
HTTP ボディが自動でエンコードされます。

gzip 形式で HTTP ボディを送受信する場合だけ指定してください。gzip 形式で HTTP ボディを送受信しない場合は、プロパティをコメントアウトまたは削除してください。

`adhttp.protocol.connect-timeout=接続タイムアウト時間 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<60000>>`

接続タイムアウト時間をミリ秒単位で指定します。値に 0 を指定した場合はタイムアウトしません。

`adhttp.protocol.read-timeout=読み込みタイムアウト時間 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<300000>>`

読み込みタイムアウト時間をミリ秒単位で指定します。値に 0 を指定した場合はタイムアウトしません。

`adhttp.protocol.chunked-encoding-size=チャンクサイズ ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>`

`java.net.HttpURLConnection#setChunkedStreamingMode(Integer)` に設定する値を指定します。ただし、指定した値でチャンク送信されるかは JDK の動作に依存します。値を設定しない（チャンク送信しない）場合は 0 を指定するか、またはコメントアウトしてください。

チャンク送信する設定にした場合、ベーシック認証は無効になります。また、リダイレクト処理は使用できません。

チャンクサイズは通常は「4096」を指定し、必要に応じて値を増減してください。任意の値を指定する場合は、使用する環境に合わせて次の点に注意してください。

- チャンクサイズに極端に小さな値（1桁の数字など）を設定した場合は、チャンク送信されない場合があります。
- チャンクサイズを小さくしすぎると、チャンクエンコーディングに伴うオーバーヘッドが大きくなります。
- チャンクサイズを大きくしすぎると、メモリが不足しエラーが発生します。

`adphttp.protocol.https-server-authentication={true | false} ~<<true>>`

HTTPS 通信時にサーバ認証をするかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されません。

- true
HTTPS 通信時にサーバ認証をします。
- false
HTTPS 通信時にサーバ認証をしません。

`adphttp.protocol.https-hostname-verification={true | false} ~<<true>>`

HTTPS 通信時にホスト名を検証するかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されません。

- true
HTTPS 通信時にホスト名を検証します。
- false
HTTPS 通信時にホスト名を検証しません。

(b) ファイルアクセス排他取得関連

`adphttp.file.read-lock.retry.count=共有ロック取得失敗時のロックリトライ回数 ~<数字>
((0-1024))<<0>>`

共通フォルダの共有ロック取得失敗時のロックリトライ回数を指定します。

`adphttp.file.read-lock.retry.interval=共有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔 ~<数字>
((1-1024))<<1>>`

共通フォルダの共有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔を秒単位で指定します。

(c) データサイズ制限関連

`adphttp.data-size-limit.body-message=HTTP レスポンスボディの最大サイズ ~<数字>
((-1-2147483647))<<-1>>`

HTTP レスポンスを応答電文（ボディ）に設定する際に許容するデータの最大サイズをバイト単位で指定します。値に-1 を指定した場合はサイズが制限されません。

`adphttp.data-size-limit.file=ファイルの最大サイズ ~<数字>((-1-2147483647))<<-1>>`

HTTP レスポンスをファイルに書き出す際に許容するデータの最大サイズをバイト単位で指定します。値に-1 を指定した場合はサイズが制限されません。

(d) レスポンスコード関連

`adphttp.response-code.normal=正常処理として扱うステータスコード ~<3桁のステータスコード
><<200>>`

正常処理として扱う3桁のステータスコードを指定します。指定したステータスコードのHTTPレスポンスがHTTPアダプタに返ると応答電文で処理されます。

ステータスコードは判定基準に従って、正常処理、フォルト処理、システム例外として扱われます。判定基準については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.16.4 HTTPレスポンスと応答電文の関係」の、ステータスコードの正常処理またはフォルト処理の設定に関する説明を参照してください。

複数のステータスコードを指定する場合は、正規表現で指定します。200番台のステータスコードを正常処理として扱う場合の設定例を次に示します。

```
adphttp.response-code.normal=2[0-9][0-9]
```

正常処理またはフォルト処理のどちらにも設定していないステータスコードがHTTPアダプタに渡された場合はシステム例外となります。項目が省略された場合、または値が省略された場合は、デフォルト値で動作します。

`adphttp.response-code.fault=フォルト処理として扱うステータスコード ~<3桁のステータスコード>`

フォルト処理として扱う3桁のステータスコードを指定します。ここで指定したステータスコードのHTTPレスポンスがHTTPアダプタに返ると、フォルト電文で処理されます。指定を省略した場合、ステータスコードは設定されません。

ステータスコードは判定基準に従って、正常処理、フォルト処理、システム例外として扱われます。判定基準については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.16.4 HTTPレスポンスと応答電文の関係」の、ステータスコードの正常処理またはフォルト処理の設定に関する説明を参照してください。

複数のステータスコードを指定する場合は、正規表現で指定します。adphttp.response-code.normal プロパティで指定したステータスコード以外のすべてのステータスコードをフォルト応答にする場合の設定例を次に示します。

```
adphttp.response-code.fault=[1-9][0-9][0-9]
```

正常処理またはフォルト処理のどちらにも設定していないステータスコードが HTTP アダプタに渡された場合は、システム例外となります。

(e) 拡張機能関連

```
adphttp.auto-delete-incomplete-file={true | false} ~<<true>>
```

ネットワーク障害や I/O エラー、データサイズ制限の超過などの理由で共通フォルダや作業フォルダに不完全な受信ファイルが生成された場合に、受信ファイルを自動的に削除するか指定します。大文字と小文字は区別されません。

- true
不完全な受信ファイルを自動的に削除します。
- false
不完全な受信ファイルを自動的に削除しません。

不完全な受信ファイルによるストレージの消費を防止する場合は true、障害発生時の状態の保存（保持）を優先する場合は false を選択してください。

不完全な受信ファイルを自動的に削除しない場合は、ストレージの空き容量が枯渇しないように、必要に応じて手動で不要なファイルを削除してください。削除方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.20 作業フォルダを削除する」、および「5.4.22 共通フォルダ内のファイルを削除する」を参照してください。

(f) JSON-XML 変換関連

```
adphttp.request.switchover.json-transfer.mode={true | false} ~<<false>>
```

HTTP アダプタのリクエスト処理時に JSON-XML 変換をするかどうかを指定します。

- true
HTTP アダプタのリクエスト処理時に JSON-XML 変換をします。
- false
HTTP アダプタのリクエスト処理時に JSON-XML 変換をしません。

```
adphttp.response.switchover.json-transfer.mode={true | false} ~<<false>>
```

HTTP アダプタのレスポンス処理時に JSON-XML 変換をするかどうかを指定します。

- true

HTTP アダプタのレスポンス処理時に JSON-XML 変換をします。

- false

HTTP アダプタのレスポンス処理時に JSON-XML 変換をしません。

(g) OAuth 2.0 認証関連

`adphttp.oauth.authentication={true | false} ~<<false>>`

HTTP アダプタ実行時に OAuth 2.0 の認証フローを使用するかどうかを指定します。

- true

HTTP アダプタ実行時に OAuth 2.0 の認証フローを使用します。

- false

HTTP アダプタ実行時に OAuth 2.0 の認証フローを使用しません。

注意事項

OAuth 2.0 の認証フローを使用する場合は、true を指定しないと認証情報が不正になります。認証情報が不正な場合、HTTP リクエストがエラー応答したり、応答電文（ヘッダ）にアクセストークンが格納されなかったりすることがあります。

(5) 記述例

記述例を次に示します。

```
adphttp.protocol.encoding-type=gzip
adphttp.protocol.connect-timeout=60000
adphttp.protocol.read-timeout=300000
adphttp.protocol.chunked-encoding-size=0
adphttp.protocol.https-server-authentication=true
adphttp.protocol.https-hostname-verification=true
adphttp.file.read-lock.retry.count=0
adphttp.file.read-lock.retry.interval=1
adphttp.data-size-limit.body-message=-1
adphttp.data-size-limit.file=-1
adphttp.response-code.normal=200
adphttp.response-code.fault=500
adphttp.auto-delete-incomplete-file=true
adphttp.request.switchover.json-transfer.mode=true
adphttp.response.switchover.json-transfer.mode=true
```

(6) 注意事項

プロパティファイルは文字コードを UTF-8 にして保存してください。UTF-8 以外の文字コードを使用した場合、設定値を正しく解釈できない場合があります。

3.11 HTTP 受付で利用するファイル

3.11.1 HTTP レスポンスヘッダ定義ファイル

(1) 形式

```
<キー名称>=<値>
```

(2) 機能

HTTP 受付の応答電文フォーマット（ヘッダ変数用）を省略した場合のデフォルト値として使用する HTTP レスポンスヘッダ情報を設定します。HTTP 受付定義ファイルから呼び出される任意のファイルです。

HTTP レスポンスヘッダ定義ファイルを作成する際の注意事項を次に示します。

- HTTP レスポンスヘッダ定義ファイルが空の場合、または HTTP 受付定義ファイルに `httprecp.response.header.filename` プロパティを設定していない場合の動作については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.15.5 HTTP 受付のレスポンス処理」を参照してください。
- HTTP 受付定義ファイルの `httprecp.response.header.filename` プロパティの値が空の場合、または値と一致する HTTP レスポンスヘッダ定義ファイルがリポジトリにない場合はエラーが発生します。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%http%config%templates%cscurecphhttp_header.properties
```

■ 注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。HTTP レスポンスヘッダ定義ファイルを編集する場合は、HTTP 受付の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で「独自定義ファイル」の「編集」ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

(4) 記述例

記述例を次に示します。

```
Connection=close  
extension-header=extension-header1
```

3.11.2 HTTP 受付サービス選択定義ファイル

(1) 形式

```
<HTTPメソッド名> [, <ホスト名>] = <ビジネスプロセス名>
```

(2) 機能

ユーザ定義受付（呼出先選択）である HTTP 受付の場合に、HTTP 受付から呼び出すビジネスプロセス、およびビジネスプロセスを呼び出す条件を設定します。このファイルは、開発環境のユーザ定義受付定義画面でユーザ定義受付（呼出先選択）の HTTP 受付を定義する際に、独自定義ファイルとして設定します。

ユーザ定義受付（呼出先選択）の HTTP 受付の定義手順については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「付録 L ユーザ定義受付（呼出先選択）の定義」を参照してください。ユーザ定義受付定義画面の設定項目については、「1.2.5(3) 受付種別「TP1/RPC 受付」, 「FTP 受付」, 「HTTP 受付」, 「Message Queue 受付」, 「ファイルイベント受付」, 「Kafka 受付」, 「スケジュール駆動受付」, 「カスタム受付」の場合」を参照してください。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception¥http¥config¥templates¥cscrecphhttp_selection.properties
```

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。HTTP 受付サービス選択定義ファイルを編集する場合は、ユーザ定義受付（呼出先選択）である HTTP 受付の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で [独自定義ファイル] の [編集] ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

(4) 設定できるプロパティ

```
<HTTP メソッド名> [, <ホスト名>]
```

HTTP 受付から呼び出すビジネスプロセスの条件として、HTTP メソッド、または HTTP メソッドおよびホストを指定します。

ホスト名の指定は、大文字小文字を区別します。

```
<ビジネスプロセス名>
```

HTTP 受付から呼び出すビジネスプロセスの名称を指定します。

(5) 記述例

記述例を次に示します。

HTTP メソッドおよびホストをキーとして設定する場合

```
PUT, GyoumuKanri.hitachi.co.jp=BP1
DELETE, GyoumuKanri.hitachi.co.jp=BP2
GET, GyoumuKanri.hitachi.co.jp=BP3
```

HTTP メソッドをキーとして設定する場合

```
PUT=BP1
DELETE=BP2
GET=BP3
```

(6) 注意事項

- ユーザ定義受付（呼出先選択）として定義した HTTP 受付から、HTTP 受付サービス選択定義ファイルを削除しないでください。削除した場合の動作は保証しません。
- ユーザ定義受付（呼出先固定）として定義した HTTP 受付に対し、HTTP 受付サービス選択定義ファイルを追加しないでください。追加した場合の動作は保証しません。

3.11.3 HTTP 受付定義ファイル

(1) 形式

```
[urecp-http.context-root=HTTP受付のコンテキストルート]
[urecp-http.max-threads=HTTP受付の最大同時実行スレッド数]
[urecp-http.exclusive-threads=HTTP受付の占有実行スレッド数]
[urecp-http.queue-size=HTTP受付の実行待ちキューのサイズ]
[urecp-http.pooled-instance.minimum=HTTP受付のプール内のインスタンスの最小数]
[urecp-http.pooled-instance.maximum=HTTP受付のプール内のインスタンスの最大数]
[urecp-http.ejb-transaction-timeout=HTTP受付のEJBトランザクションタイムアウト時間]
```

```
[httprecp.switchover.pass-through.mode={true | false}]
[httprecp.switchover.file-transfer.mode={true | false}]
[httprecp.http.charset={Shift_JIS | UTF-8}]
[httprecp.response.ignore-bodymsg={true | false}]
[httprecp.response.header.filename=HTTPレスポンスヘッダ定義ファイルの名称]
[httprecp.system-exception.status-code=システム例外時のステータスコード]
[httprecp.response.generate.content-length={true | false}]
[httprecp.file-trans.temp-file.partsize-threshold=一時ファイルを出力する閾値サイズ]
[httprecp.file-trans.maxsize.part=受信できるファイルデータの1ファイル当たりの上限サイズ]
[httprecp.file-trans.maxsize.request=受信できるHTTPリクエストボディの上限サイズ]
[httprecp.work-dir.auto-delete={true | false}]
[httprecp.response.download.disposition-type=HTTPレスポンスヘッダのContent-Dispositionヘッダに設定する値]
[httprecp.pass-through.parameter-use={true | false}]
```

```
[httprecp.request.switchover.json-transfer.mode={true | false}]
[httprecp.response.switchover.json-transfer.mode={true | false}]
[httprecp.json-xml-convert.mode={standard | advanced}]
[httprecp.json-transfer.allow-partial-conversion={true | false}]

[httprecp.response.compression.url-pattern<URLパターン識別番号>=リクエストURLのURLパターン]
[httprecp.response.compression.rule<圧縮規則識別番号>.url-mapping<URLマッピング識別番号>=HTTPレスポンス圧縮規則のURLパターン]
[httprecp.response.compression.rule<圧縮規則識別番号>.condition<圧縮条件識別番号>=メディアタイプ:圧縮しきい値]

[httprecp.use-routing-definition={true | false}]

[httprecp.telegram-auto-convert={true | false}]
```

(2) 機能

HTTP 受付の動作情報を設定します。HTTP 受付開始時に HTTP 受付定義ファイルに設定した内容が有効になります。

HTTP 受付定義ファイルは「cscurecphttp.properties」というファイル名で作成します。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%http%config%templates%cscurecphttp.properties
```

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。HTTP 受付定義ファイルを編集する場合は、HTTP 受付の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で [独自定義ファイル] の [編集] ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

(4) 設定できるプロパティ

(a) HTTP 受付関連

urecp-http.context-root=HTTP 受付のコンテキストルート ~<<HTTP 受付の受付 ID>>

HTTP 受付のコンテキストルートを半角英数字および次に示す半角記号で指定します。

- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- アンダーバー (_)
- 波ダッシュ (~)

- スラッシュ (/)
- アットマーク (@)
- プラス (+)
- ドル (\$)
- 感嘆符 (!)
- 引用符 (')
- 丸括弧 (())
- パーセント (%)

上記以外の文字を指定した場合、および次の場合はエラーとなります。

- 先頭または末尾に区切り文字 (/) が指定されている
- 区切り文字 (/) が多重指定されている
- 相対パスで指定されている
- パーセントエンコーディング以外の目的でパーセント (%) が指定されている

このプロパティを省略した場合、HTTP 受付の受付 ID が設定されます。

urecp-http.max-threads=HTTP 受付の最大同時実行スレッド数 ~<数字>((1-1024))<<0>>

HTTP 受付の最大同時実行スレッド数を指定します。HTTP 受付の占有スレッド数 (urecp-http.exclusive-threads プロパティで指定) 以上の値を指定する必要があります。

urecp-http.exclusive-threads=HTTP 受付の占有実行スレッド数 ~<数字>((0-1024))<<0>>

HTTP 受付の占有実行スレッド数を指定します。HTTP 受付の最大同時実行スレッド数 (urecp-http.max-threads プロパティで指定) を超えない範囲で値を指定する必要があります。

urecp-http.queue-size=HTTP 受付の実行待ちキューのサイズ ~<数字>
((0-2147483647))<<8192>>

HTTP 受付の実行待ちキューのサイズを指定します。

urecp-http.pooled-instance.minimum=HTTP 受付のプール内のインスタンスの最小数 ~<数字>((0
または 1-2147483647))<<0>>

HTTP 受付のプール内のインスタンスの最小数を整数で指定します。0 を指定した場合、制限はありません。

なお、このプロパティでは、urecp-http.pooled-instance.maximum プロパティの値 (HTTP 受付のプール内のインスタンスの最大数) 以下の値を指定してください。指定した値が、urecp-http.pooled-instance.maximum プロパティで指定した値よりも大きい場合、運用コマンド実行時にエラーになります。

`urecp-http.pooled-instance.maximum=HTTP 受付のプール内のインスタンスの最大数 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>`

HTTP 受付のプール内のインスタンスの最大数を整数で指定します。0 を指定した場合、制限はありません。

なお、このプロパティでは、`urecp-http.pooled-instance.minimum` プロパティの値 (HTTP 受付のプール内のインスタンスの最小数) 以上の値を指定してください。指定した値が、`urecp-http.pooled-instance.minimum` プロパティで指定した値よりも小さい場合、運用コマンド実行時にエラーになります。

`urecp-http.ejb-transaction-timeout=HTTP 受付の EJB トランザクションタイムアウト時間 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>`

HTTP 受付の EJB トランザクションタイムアウト時間を秒単位で指定します。0 を指定した場合、J2EE サーバに設定されたデフォルトのタイムアウト値で動作します。

(b) 受付設定関連

`httprecp.switchover.pass-through.mode={true | false} ~<<false>>`

メッセージボディをビジネスプロセスに渡すときのボディ変数を生成するモードを指定します。大文字と小文字は区別されません。

- true
パススルーモードを使用します。
- false
標準モードを使用します。

このプロパティは、`httprecp.telegram-auto-convert` プロパティに true (電文自動変換機能が有効) が指定された場合は無効になります。

`httprecp.switchover.file-transfer.mode={true | false} ~<<false>>`

リクエスト受付時に HTTP 受付が作業フォルダを作成するかどうかを設定します。大文字と小文字は区別されません。

このプロパティはマルチパート型以外のリクエストに対して有効です。マルチパート型のデータの場合は、必ず作業フォルダが作成されます。

- true
リクエストがマルチパート型かどうかに関係なく作業フォルダが必ず作成されます。
- false
リクエストがマルチパート型の場合は作業フォルダが生成されます。それ以外の場合、作業フォルダは作成されません。

`httprecp.http.charset={Shift_JIS | UTF-8} ~<<UTF-8>>`

メッセージボディとクエリのエンコードに使用する文字コードを指定します。大文字と小文字は区別されません。

`httprecp.response.ignore-bodymsg={true | false} ~<<false>>`

ビジネスプロセスから受信した応答電文（ボディ）を HTTP 受付が無視する（HTTP レスポンスに設定しない）かどうかを設定します。大文字と小文字は区別されません。

- true
応答電文（ボディ）は HTTP レスポンスに設定されません。
- false
応答電文（ボディ）は HTTP レスポンスのボディ部分に設定されます。

`httprecp.response.header.filename=HTTP レスポンスヘッダ定義ファイルの名称`

HTTP レスポンスヘッダ定義ファイルの名称を指定します。大文字と小文字は区別されます。

`httprecp.system-exception.status-code=システム例外時のステータスコード ~<数字> ((000-999))<<500>>`

システム例外時のステータスコードを 3 桁の数字で指定します。

`httprecp.response.generate.content-length={true | false} ~<<true>>`

HTTP 受付でコンテンツ長を生成するかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されません。

- true
コンテンツ長を生成します。
- false
コンテンツ長を生成しません。

`httprecp.file-trans.temp-file.partsize-threshold=一時ファイルを出力する閾値サイズ ~<数字> ((0 または 1-2147483647))<<0>>`

マルチパート型の HTTP リクエストの場合に、HTTP リクエストを一時ファイルに出力するときの閾値となるサイズをバイト単位で指定します。

HTTP 受付が受信した HTTP リクエストのサイズがこの値を超えた場合、受信した HTTP リクエストは一時ファイルに出力されます。0 を指定した場合、一時ファイルは必ず出力されます。

`httprecp.file-trans.maxsize.part=受信できるファイルデータの 1 ファイル当たりの上限サイズ ~<数字> ((0 または 1-2147483647))<<2147483647>>`

HTTP 受付で受信できるファイルデータの 1 ファイル当たりの上限サイズの値をバイト単位で指定します。

HTTP 受付が受信したマルチパート型 HTTP リクエストの各パートのうち、ファイル形式で扱うパートのサイズがこの値を超えた場合、システム例外が発生します。

`httprecp.file-trans.maxsize.request=受信できる HTTP リクエストボディの上限サイズ ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<2147483647>>`

HTTP 受付で受信できる HTTP リクエストボディの上限サイズをバイト単位で指定します。

HTTP 受付が受信した HTTP リクエストボディのサイズがこの値を超えた場合、システム例外が発生します。

`httprecp.work-dir.auto-delete={true | false} ~<<true>>`

処理完了後に作業フォルダを自動的に削除するかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されません。

- true
ビジネスプロセスの処理が正常に完了したあと、作業フォルダが自動で削除されます。
- false
作業フォルダは自動で削除されません。

false 以外の値を指定した場合、またはキーや値を省略した場合は、true と見なされます。ビジネスプロセスが非同期型の場合、このプロパティには false を指定してください。

`httprecp.response.download.disposition-type=HTTP レスポンスヘッダの Content-Disposition ヘッダに設定する値 ~<<attachment>>`

HTTP 受付から HTTP クライアントにデータを送信するときに HTTP レスポンスヘッダの Content-Disposition ヘッダに設定する値を指定します。大文字と小文字は区別されます。なお、指定した値が有効かどうかは検証されません。

このプロパティで設定したヘッダの値は、HTTP クライアントがダウンロードするファイルが 1 つの場合だけ利用されます。

`httprecp.pass-through.parameter-use={true | false} ~<<true>>`

パススルーモードで、HTTP リクエストボディに msg キーを使用するかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されません。

このプロパティは、`httprecp.switchover.pass-through.mode` プロパティで true を指定した場合だけ有効となります。

- true
msg キーを使用します。
- false
msg キーを使用しません。HTTP リクエストボディの内容が要求電文として直接ビジネスプロセスに渡されます。

(c) JSON-XML 変換関連

`httprecp.request.switchover.json-transfer.mode={true | false} ~<<false>>`

HTTP 受付のリクエスト処理時に JSON-XML 変換をするかどうかを指定します。

- true
HTTP 受付のリクエスト処理時に JSON-XML 変換をします。
- false
HTTP 受付のリクエスト処理時に JSON-XML 変換をしません。

このプロパティは、`httprecp.telegram-auto-convert` プロパティに true（電文自動変換機能が有効）が指定された場合は無効になります。

`httprecp.response.switchover.json-transfer.mode={true | false} ~<<false>>`

HTTP 受付のレスポンス処理時に JSON-XML 変換をするかどうかを指定します。

- true
HTTP 受付のレスポンス処理時に JSON-XML 変換をします。
- false
HTTP 受付のレスポンス処理時に JSON-XML 変換をしません。

このプロパティは、`httprecp.telegram-auto-convert` プロパティに true（電文自動変換機能が有効）が指定された場合は無効になります。

`httprecp.json-xml-convert.mode={standard | advanced} ~<<standard>>`

JSON-XML 変換の変換処理のモードを次の中から指定します。指定値の大文字と小文字は区別されます。

- standard
標準モードで JSON-XML 変換処理を実行します。
11-70 より前との互換性を重視する場合に設定してください。
- advanced
拡張モードで JSON-XML 変換処理を実行します。
拡張モードはメリット・デメリットを考慮した上で選択してください。拡張モードの詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「12. 拡張モードでの JSON データの変換」を参照してください。

`httprecp.json-transfer.allow-partial-conversion={true | false} ~<<false>>`

拡張モードの JSON-XML 変換処理で、変換できない要素がある場合の対処を次の中から指定します。指定値の大文字と小文字は区別されません。

- true

変換できない要素があっても、部分的な変換を許可してリクエストを続行します。

- false

変換できない要素があった場合、リクエスト処理をエラーにします。

(d) HTTP レスポンス圧縮機能関連

`httprecp.response.compression.url-pattern<URL パターン識別番号>=リクエスト URL の URL パターン`

このプロパティは HTTP レスポンス圧縮機能に関する指定です。

このプロパティは、アプリケーション統合属性ファイルの URL マッピングを指定する `<filter-mapping>` タグ内の `<url-pattern>` タグに対応します。アプリケーション統合属性ファイルと HTTP レスポンス圧縮機能については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 互換編」の「9.2 HTTP レスポンス圧縮機能」を参照してください。

指定を省略した場合、HTTP レスポンス圧縮規則の判定は実施されません。また、同じプロパティを指定した場合の動作は保証されません。

`<URL パターン識別番号>`

1 から始まる一意な連番を設定します。連番が途切れた場合、途切れる前までのプロパティが有効となります。

リクエスト URL の URL パターン

リクエスト URL のコンテキストルートからの相対パスを指定します。

- 大文字と小文字は区別されます。
- 複数の URL パターンに該当する場合は、より小さい URL パターン識別番号の設定が適用されます。
- `[/*]` を指定した場合は、すべてのリクエスト URL が一致したとみなされます。

リクエスト URL がここで設定された URL パターンに該当する場合、別のプロパティで設定された HTTP レスポンス圧縮規則に基づいて、圧縮処理をするか判定されます。HTTP レスポンス圧縮規則は次に示すプロパティで設定します。

- `httprecp.response.compression.rule<圧縮規則識別番号>.url-mapping<URL マッピング識別番号>=HTTP レスポンス圧縮規則の URL パターン`
- `httprecp.response.compression.rule<圧縮規則識別番号>.condition<圧縮条件識別番号>=メディアタイプ:圧縮しきい値`

複数の URL パターンを設定する場合は、異なる URL パターン識別番号を持つプロパティを複数設定してください。

- 2 種類の URL パターンを設定する例

```
httprecp.response.compression.url-pattern1=/app1/*  
httprecp.response.compression.url-pattern2=/app2/*
```

`httprecp.response.compression.rule<圧縮規則識別番号>.url-mapping<URL マッピング識別番号>=HTTP レスポンス圧縮規則の URL パターン ~<</*>>`

このプロパティは HTTP レスポンス圧縮機能に関する指定です。

このプロパティは、アプリケーション統合属性ファイルの URL パターンを指定する `<hitachi-filter-property><init-param>` タグの `<param-value>` タグに対応します。アプリケーション統合属性ファイルと HTTP レスポンス圧縮機能については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 互換編」の「9.2 HTTP レスポンス圧縮機能」を参照してください。

指定を省略した場合、すべてのリクエスト URL が一致したとみなされます。また、同じプロパティを指定した場合の動作は保証されません。

<圧縮規則識別番号>

1 から始まる一意な連番を指定します。連番に相当する圧縮規則識別番号がどのプロパティにもない場合は、それ以降のプロパティは無効となります。

HTTP レスポンス圧縮規則としてほかに次に示すプロパティでメディアタイプおよび圧縮しきい値を設定する場合、同じ圧縮規則識別番号を設定してください。

- `httprecp.response.compression.rule<圧縮規則識別番号>.condition<圧縮条件識別番号>=メディアタイプ:圧縮しきい値`

<URL マッピング識別番号>

1 つの圧縮規則識別番号に対して、1 から始まる一意な連番を設定します。連番が途切れた場合、途切れる前までのプロパティが有効となります。

HTTP レスポンス圧縮規則の URL パターン

リクエスト URL のコンテキストルートからの相対パスを設定します。

- 大文字と小文字は区別されます。
- 複数の URL パターンに該当する場合は、より小さい URL パターン識別番号の設定が適用されます。
- `[/*]` を指定した場合は、すべてのリクエスト URL が一致したとみなされます。

圧縮規則識別番号と URL マッピング識別番号を組み合わせることで、複数の HTTP レスポンス圧縮規則を設定できます。

1 つの HTTP レスポンス圧縮規則に複数の URL パターンを設定する場合

同じ圧縮規則識別番号で異なる URL マッピング識別番号を持つプロパティを複数設定してください。次の例では、圧縮規則 1 に対して 2 種類の URL パターンを設定しています。

```
httprecp.response.compression.rule1.url-mapping1=/app/dir1/*
httprecp.response.compression.rule1.url-mapping2=/app/dir2/*
```

複数の HTTP レスポンス圧縮規則を設定する場合

異なる圧縮規則識別番号を持つプロパティを複数設定してください。次の例では、2 種類の圧縮規則を設定しています。圧縮規則識別番号が異なるため、URL マッピング識別番号はどちらも開始番号である 1 になっています。

```
httprecp.response.compression.rule1.url-mapping1=/app/dir1/*
httprecp.response.compression.rule2.url-mapping1=/app/dir2/*
```

httprecp.response.compression.rule<圧縮規則識別番号>.condition<圧縮条件識別番号>=メディアタイプ:圧縮しきい値 ~<<*:100>>

このプロパティは HTTP レスポンス圧縮機能に関する指定です。

このプロパティは、アプリケーション統合属性ファイルの圧縮規則を指定する<hitachi-filter-property><init-param>タグの<param-value>タグに対応します。アプリケーション統合属性ファイルと HTTP レスポンス圧縮機能については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 互換編」の「9.2 HTTP レスポンス圧縮機能」を参照してください。

指定を省略した場合、レスポンスボディが 100 バイトを超えるすべてのメディアタイプの HTTP レスポンスが対象となります。

同じプロパティを指定した場合の動作は保証されません。

<圧縮規則識別番号>

1 から始まる一意な連番を指定します。連番に相当する圧縮規則識別番号がどのプロパティにもない場合は、それ以降のプロパティは無効となります。

HTTP レスポンス圧縮規則としてほかに次に示すプロパティで URL パターンを設定する場合は、同じ圧縮規則識別番号を設定してください。

- httprecp.response.compression.rule<圧縮規則識別番号>.url-mapping<URL マッピング識別番号>=HTTP レスポンス圧縮規則の URL パターン

<圧縮条件識別番号>

1 つの圧縮規則識別番号に対して、1 から始まる一意な連番を設定します。連番が途切れた場合、途切れる前までのプロパティが有効となります。

メディアタイプ:圧縮しきい値

メディアタイプと圧縮しきい値を半角のコロン (:) で区切って指定してください。

メディアタイプ

- 大文字と小文字は区別されません。
- 同じメディアタイプを複数指定した場合は、より大きい圧縮条件識別番号の設定が適用されます。
- アスタリスク (*) を指定した場合は、すべてのメディアタイプが適用されます。ただし、メディアタイプごとの指定がある場合はその指定が優先されます。

圧縮しきい値

- 100 から 2,147,483,647 までの整数値 (単位: バイト) を設定してください。

圧縮規則識別番号と圧縮条件識別番号を組み合わせることで、複数の HTTP レスポンス圧縮規則を設定できます。

1 つの HTTP レスポンス圧縮規則に複数のメディアタイプおよび圧縮しきい値を設定する場合

同じ圧縮規則識別番号で異なる圧縮条件識別番号を持つプロパティを複数設定してください。次の例では、圧縮規則 1 に対して 2 種類のメディアタイプおよび圧縮しきい値を設定しています。

```
httprecp.response.compression.rule1.condition1=text/html:500
httprecp.response.compression.rule1.condition2=*:1000
```

複数の HTTP レスポンス圧縮規則を設定する場合

異なる圧縮規則識別番号を持つプロパティを複数設定してください。次の例では、2 種類の圧縮規則を設定しています。圧縮規則識別番号が異なるため、圧縮条件識別番号はどちらも開始番号である 1 になっています。

```
httprecp.response.compression.rule1.condition1=text/html:500
httprecp.response.compression.rule2.condition1=*:1000
```

(e) HTTP 受付のルーティング機能関連

httprecp.use-routing-definition={true | false} ~<<false>>

HTTP 受付の実行時に HTTP 受付ルーティング定義ファイルを読み込むかどうかを指定します。

HTTP 受付ルーティング定義ファイルでは、HTTP 受付から呼び出すビジネスプロセスや、HTTP 受付で実行する機能を設定できます。HTTP 受付ルーティング定義ファイルの定義内容については、「[3.11.4 HTTP 受付ルーティング定義ファイル](#)」を参照してください。

- true
HTTP 受付の実行時に HTTP 受付ルーティング定義ファイルを読み込みます。
HTTP 受付サービス選択定義ファイルは読み込みません。
- false
HTTP 受付の実行時に HTTP 受付サービス選択定義ファイルを読み込みます。
HTTP 受付ルーティング定義ファイルは読み込みません。

(f) HTTP 受付の電文自動変換機能関連

httprecp.telegram-auto-convert={true | false} ~<<false>>

HTTP 受付の電文自動変換機能を有効にするかどうかを指定します。

- true
電文自動変換機能を有効にします。要求・応答電文の変換処理は、content-type/accept HTTP ヘッダの値に基づいて実行されます。
- false
電文自動変換機能を無効にします。要求・応答電文の変換処理では、content-type/accept HTTP ヘッダの値は無視されます。

要求・応答電文の変換処理は、HTTP 受付定義ファイルの次のプロパティの指定値に基づいて実行されます。

- httprecp.response.switchover.json-transfer.mode (レスポンス処理時の JSON-XML 変換の有無)
- httprecp.request.switchover.json-transfer.mode (リクエスト処理時の JSON-XML 変換の有無)
- httprecp.switchover.pass-through.mode (パススルーモードまたは標準モードの指定)

ただし、これらのプロパティが HTTP 受付ルーティング定義ファイルで実行サービスごとに指定されている場合は、その指定値が優先されます。

(5) 記述例

(a) 記述例 1

記述例を次に示します。

```
urecp-http.max-threads=10
urecp-http.exclusive-threads=0
urecp-http.queue-size=8192
urecp-http.pooled-instance.minimum=0
urecp-http.pooled-instance.maximum=0
urecp-http.ejb-transaction-timeout=0
httprecp.switchover.pass-through.mode=false
httprecp.switchover.file-transfer.mode=false
httprecp.http.charset=UTF-8
httprecp.response.ignore-bodymsg=false
httprecp.response.header.filename=cscurecphttp_header.properties
httprecp.system-exception.status-code=500
httprecp.response.generate.content-length=true
httprecp.request.switchover.json-transfer.mode=true
httprecp.response.switchover.json-transfer.mode=true
```

(b) 記述例 2：レスポンスボディを gzip 形式で圧縮する場合

複数の圧縮条件を指定して、レスポンスボディを gzip 形式で圧縮する場合の記述例を示します。

```
# 圧縮対象のHTTPリクエストの設定
httprecp.response.compression.url-pattern1=/app/*

# 圧縮規則1
httprecp.response.compression.rule1.url-mapping1=/app/dir1/*
httprecp.response.compression.rule1.condition1=text/html:100
httprecp.response.compression.rule1.condition2=application/pdf:1000

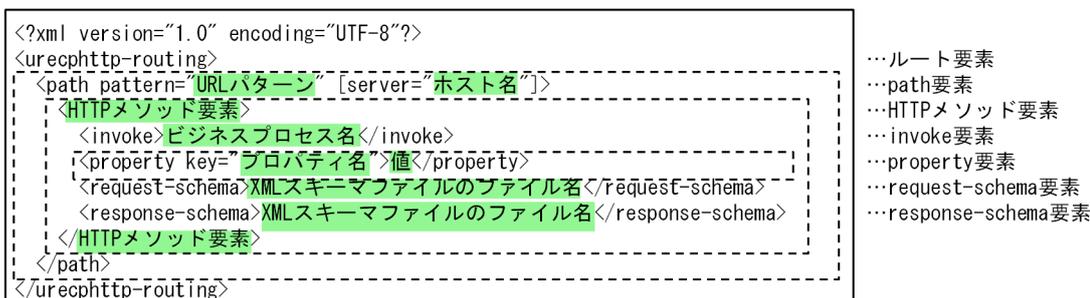
# 圧縮規則2
httprecp.response.compression.rule2.url-mapping1=/app/dir2/*
httprecp.response.compression.rule2.url-mapping2=/app/dir3/*
httprecp.response.compression.rule2.condition1=text/html:200
```

この例では、リクエスト URL のコンテキストルートからの相対パスが/app/で始まる HTTP リクエストを圧縮しています。また、次に示す 2 種類の圧縮規則を設定しています。

- 圧縮規則 1
 - リクエスト URL のコンテキストルートからの相対パスが/app/dir1/で始まる HTTP リクエスト
 - メディアタイプが text/html で、HTTP レスポンスのボディサイズが 100 バイトを超える HTTP リクエスト
 - メディアタイプが application/pdf で、HTTP レスポンスのボディサイズが 1000 バイトを超える HTTP リクエスト
- 圧縮規則 2
 - リクエスト URL のコンテキストルートからの相対パスが、 /app/dir2/または/app/dir3/で始まる HTTP リクエスト
 - メディアタイプが text/html で、HTTP レスポンスのボディサイズが 200 バイトを超える HTTP リクエスト

3.11.4 HTTP 受付ルーティング定義ファイル

(1) 形式



- (凡例) : ユーザの編集箇所を示しています。
 : 複数指定できることを示しています。

(2) 機能

HTTP 受付のマッチングの条件や、実行するプロパティ値を XML 形式で設定します。

HTTP 受付ルーティング定義ファイルが読み込まれるようにするには、HTTP 受付定義ファイルで `httprecp.use-routing-definition` プロパティに `true` を指定する必要があります。

この定義ファイルは HTTP 受付の起動時に読み込まれます。読み込み時にエラーが発生すると、HTTP 受付の起動に失敗します。

HTTP 受付のルーティング機能については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.15.12 HTTP 受付のルーティング機能」を参照してください。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception¥http¥config¥templates¥cscurecphhttp_routing.xml
```

■ 注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。HTTP 受付ルーティング定義ファイルを編集する場合は、ユーザ定義受付（呼出先選択）である HTTP 受付の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で [独自定義ファイル] の [編集] ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

(4) 設定できる要素

(a) <?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>

このファイルが XML ファイルであることを示す XML 宣言です。

(b) <urecphhttp-routing>

HTTP 受付ルーティング定義のルート要素です。

(c) <path pattern="URL パターン" [server="ホスト名"]>

path 要素です。path 要素は複数定義することもできます。

path 要素ごとに次に示す属性を設定します。

- pattern="URL パターン"

pattern 属性には、URL パターンとして URL とのマッチング規則を設定します。pattern 属性は必ず指定してください。

リクエスト URL の中で、コンテキストルート（HTTP 受付定義ファイルで指定）より後ろの部分を URL パターンとして指定します。

リクエスト URL の形式を次に示します。URL パターンには「<URL セグメント>/…」以降を指定します。

```
http[s]://<ホスト名>:<ポート番号>/<コンテキストルート>/<URLセグメント>/…
```

URL パターンの詳細な仕様を次に示します。

```
url-pattern= strict-url-pattern | flex-url-pattern
strict-url-pattern= '/' url-segment | strict-url-pattern '/' url-segment
flex-url-pattern= strict-url-pattern '/' flex-segment
url-segment= segment | dynamic-segment
```

```
dynamic-segment= '{ path-variable-name }'
flex-segment= '{* path-variable-name }'
path-variable-name= Namespaces in XML 1.0 (Third Edition)で規定するNCName※
segment= RFC 3986 - Uniform Resource Identifier (URI): Generic Syntaxで規定されるsegment
```

注※ NCName で使用できる文字のうち「:」（コロン）は使用できません。

次に、URL パターンの記述について説明します。

URL パターンの記述規則

URL パターンは「/」で始まり、URL セグメント（「/」で区切られた部分）で構成します。

URL セグメントには、RFC 3986 - Uniform Resource Identifier (URI): Generic Syntax で規定される segment に加え、ワイルドカードとして使用できる URL セグメント（動的セグメント）が設定できます。動的セグメントを指定していない URL パターンの場合、コンテキストルート部分を除いたリクエスト URL と完全一致する場合だけ、マッチしたと判定されます。

URL パターンの記述規則に合致しない pattern 属性が指定された場合は、KDEC80463-E メッセージを出力して、HTTP 受付の開始に失敗します。

pattern 属性で指定されていない URL パターンを使用してリクエストが実行された場合、エラーメッセージ（KDEC80464-E）を出力して、HTTP ステータスコード（404）をリクエストに返します。

定義ファイル内に複数定義された URL パターンは、先に定義された URL パターンの内容が優先されます。マッチング順序については、「[\(6\) マッチング順序](#)」を参照してください。

動的セグメントの指定方法

動的セグメントは「{ }」で囲み、可変値（URL パラメタ名）を設定します。これによって、リクエスト URL 内の対応するセグメントにマッチします。

また、URL パターンの末尾には、リクエスト URL 内の対応するセグメント以降全体がマッチする動的セグメントを指定できます。この動的セグメントは、URL パラメタ名を「{* }」で囲んで指定します。

なお、URL パターン内で URL パラメタ名が重複していると、HTTP 受付の開始に失敗します。

動的セグメントを設定した場合の抽出結果については、「[\(5\) 動的セグメントを指定した場合の抽出結果](#)」を参照してください。

動的セグメントを使用した URL パターンのマッチングの判定

URL パターンの動的セグメントの設定値の例と、リクエスト URL にマッチするかを次に示します。

URL パターンの設定値	コンテキストルート部分を除いたリクエスト URL	マッチするか
/books/{bookid}/page/{pageno}	/books/1/page/	○
	/books/1/page/2	○
	/books/1/page/2/	×
	/books/1/page/2/images	×
/books/{bookid}/page/{*extraparam}	/books/1/page/	○

URL パターンの設定値	コンテキストルート部分を除いたリクエスト URL	マッチするか
/books/{bookid}/page/{*extraparam}	/books/1/page/2	○
	/books/1/page/2/	
	/books/1/page/2/images	
/books/{*bookid}/page/{pageno}	({*bookid}が URL パターンの末尾でないため、リクエスト URL に関係なく、HTTP 受付の起動時にエラー)	—

(凡例)

- ：リクエスト URL にマッチします。
- ×：リクエスト URL にマッチしません。
- ：マッチング処理は実行されません。

- server="ホスト名"

server 属性にはホスト名を設定します。大文字と小文字は区別されません。server 属性の指定は省略することもできます。

この属性が指定された場合、クライアントからの HTTP リクエストヘッダ Host とのマッチングを実施します。同一のホストに複数のドメイン名を割り当て、機能を振り分けたい場合などに使用します。

この属性が指定されなかった場合、すべての HTTP リクエストヘッダ Host がマッチします。

(d) <HTTP メソッド要素>

HTTP メソッド要素として設定できる要素を次に示します。

設定できる要素	マッチするリクエストメソッド
<GET>…</GET>	リクエストメソッドが GET の場合
<POST>…</POST>	リクエストメソッドが POST の場合
<HEAD>…</HEAD>	リクエストメソッドが HEAD の場合
<PUT>…</PUT>	リクエストメソッドが PUT の場合
<DELETE>…</DELETE>	リクエストメソッドが DELETE の場合
<OPTIONS>…</OPTIONS>	リクエストメソッドが OPTIONS の場合

この要素に設定されていない HTTP メソッドを使用してリクエストが実行された場合、エラーメッセージ (KDEC80464-E) を出力して、HTTP ステータスコード (405) をリクエストに返します。

HTTP メソッド要素は複数の種類を設定できますが、同じ HTTP メソッド要素を path 要素内に指定すると、HTTP 受付の開始に失敗します。

(e) <invoke>

invoke 要素には、HTTP 受付から呼び出すビジネスプロセス名を設定します。

設定したビジネスプロセス名は、次の両方の設定値にマッチするリクエストを受信した場合に呼び出されま
す。

- path 要素の設定値 (URL パターンとホスト名)
- HTTP メソッド要素の設定値 (HTTP メソッド)

(f) <property>

property 要素には、HTTP 受付定義ファイルのプロパティと値を設定します。

次の両方の設定値にマッチするリクエストを受信した場合、HTTP 受付の実行時だけプロパティ値を変更
して実行できます。

- path 要素の設定値 (URL パターンとホスト名)
- HTTP メソッド要素の設定値 (HTTP メソッド)

このとき、同じプロパティが HTTP 受付定義ファイルに設定されていても、HTTP 受付ルーティング定
義ファイルのプロパティが適用されます。

HTTP 受付ルーティング定義ファイルのプロパティ値と、HTTP 受付定義ファイルのプロパティ値との優
先順位を次に示します。

1. HTTP 受付ルーティング定義ファイルに設定したプロパティの値
2. HTTP 受付定義ファイルに設定したプロパティの値
3. HTTP 受付定義ファイルに設定するプロパティのデフォルト値

property 要素は HTTP メソッド要素内に複数定義できます。なお、同じプロパティ名を複数定義すると、
HTTP 受付の開始に失敗します。

設定形式

プロパティ名と値を次の形式で設定します。

```
<property key="プロパティ名">値</property>
```

設定できるプロパティの種類

設定できるプロパティの種類を次に示します。各プロパティの設定値については、「[3.11.3 HTTP 受
付定義ファイル](#)」を参照してください。

- httprecp.switchover.pass-through.mode (パススルーモードまたは標準モードの指定)
- httprecp.pass-through.parameter-use (パススルーモードの msg キーの使用可否)
- httprecp.request.switchover.json-transfer.mode (リクエスト処理時の JSON-XML 変換の有無)
- httprecp.response.switchover.json-transfer.mode (レスポンス処理時の JSON-XML 変換の有
無)

(g) <request-schema>

request-schema 要素には、拡張モードで JSON-XML 変換を実行する場合に、HTTP 受付のリクエスト処理で使用する XML スキーマファイルのファイル名を設定します。標準モードで JSON-XML 変換を実行する場合は、この要素は設定不要です。

拡張モードで JSON-XML 変換を実施する場合、HTTP 受付ルーティング定義ファイルの読み込み後にこの要素のチェックが実施されます。チェック内容とエラーが発生するタイミングを次に示します。

チェック内容	出力するエラーメッセージ	エラーが発生するタイミング
指定したファイル名の XML スキーマファイルが独自定義ファイルに設定されていない場合	KDEC80469-E	HTTP 受付の電文自動変換機能の使用有無によって次のように異なります。 <ul style="list-style-type: none">• 使用しない場合 HTTP 受付の起動時• 使用する場合 リクエスト実行時
指定した XML スキーマファイルの読み込みに失敗した場合		
この要素が設定されていない場合	KDEC80468-E	

(h) <response-schema>

response-schema 要素には、拡張モードで JSON-XML 変換を実行する場合に、HTTP 受付のレスポンス処理で使用する XML スキーマファイルのファイル名を設定します。標準モードで JSON-XML 変換を実行する場合は、この要素は設定不要です。

拡張モードで JSON-XML 変換を実施する場合、HTTP 受付ルーティング定義ファイルの読み込み後にこの要素のチェックが実施されます。チェック内容とエラーが発生するタイミングを次に示します。

チェック内容	出力するエラーメッセージ	エラーが発生するタイミング
指定したファイル名の XML スキーマファイルが独自定義ファイルに設定されていない場合	KDEC80469-E	HTTP 受付の電文自動変換機能の使用有無によって次のように異なります。 <ul style="list-style-type: none">• 使用しない場合 HTTP 受付の起動時• 使用する場合 リクエスト実行時
指定した XML スキーマファイルの読み込みに失敗した場合		
この要素が設定されていない場合	KDEC80468-E	

(5) 動的セグメントを指定した場合の抽出結果

URL パターンに動的セグメントを指定した場合、リクエスト URL の対応するセグメントが抽出されます。URL パターンの末尾に「[*] {}」で囲まれた動的セグメントを指定した場合は、「/」で区切られた複数のセグメントが抽出されます。

抽出結果は、要求電文フォーマット（ヘッダ変数用）の要求ヘッダ電文の<url-parameters>要素の子要素として設定されます。HTTP 受付の電文フォーマットについては、マニュアル「サービスプラットフォーム

ム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「2.5.2 HTTP 受付の電文フォーマットを作成する」を参照してください。

例として、動的セグメントを指定した URL パターンと、その抽出結果を次に示します。

URL パターンの設定値	コンテキストルート部分を除いたリクエスト URL	URL パラメタの抽出結果
/books	/books	なし（動的セグメントを指定していないため）
/books/{bookid}/page/{pageno}	/books/1/page/	<url-parameters> <bookid>1</bookid> <pageno></pageno> </url-parameters>
	/books/1/page/2	<url-parameters> <bookid>1</bookid> <pageno>2</pageno> </url-parameters>
/books/{bookid}/page/{*extra}	/books/1/page/	<url-parameters> <bookid>1</bookid> <extra></extra> </url-parameters>
	/books/1/page/2	<url-parameters> <bookid>1</bookid> <extra>2</extra> </url-parameters>
	/books/1/page/2/images	<url-parameters> <bookid>1</bookid> <extra>2/images</extra> </url-parameters>

(6) マッチング順序

HTTP 受付ルーティング定義ファイルの中で、最初にマッチしたホスト名、URL パターンおよび HTTP メソッドが有効になります。

次の定義例のマッチング順序について説明します。

```
<urecphhttp-routing>
  <path pattern="/books/{bookid}">
    <GET><invoke>BP01</invoke></GET>
  </path>
  <path pattern="/books/extra">
    <GET><invoke>BP02</invoke></GET>
  </path>
</urecphhttp-routing>
```

この場合、「/books/extra」への GET リクエストは、定義されている 2 つの URL パターン「/books/{bookid}」「/books/extra」のどちらにもマッチします。「/books/{bookid}」のほうが先に定義されているので、HTTP 受付はビジネスプロセス「BP01」を呼び出します。BP02 は呼び出されません。

「/books/extra」への GET リクエストで BP02 を呼び出し、「/books/extra」以外の /books/xxx へのリクエストで BP01 を呼び出すようにするには、次のように「/books/extra」を先に定義してください。

```
<urecphttp-routing>
  <path pattern="/books/extra">
    <GET><invoke>BP02</invoke></GET>
  </path>
  <path pattern="/books/{bookid}">
    <GET><invoke>BP01</invoke></GET>
  </path>
</urecphttp-routing>
```

(7) 記述例

HTTP 受付ルーティング定義ファイルの記述例を XML 宣言を含めて次に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<urecphttp-routing xmlns="http://www.hitachi.co.jp/soft/xml/cosminexus/csc/reception/http/routing"
  xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:schemaLocation="http://www.hitachi.co.jp/soft/xml/cosminexus/csc/reception/http/routing/urecp_http_routing_definition.xsd">
  <path pattern="/api/books">
    <GET>
      <invoke>bp01</invoke>
      <property key="httprecp.switchover.pass-through.mode">true</property>
      <property key="httprecp.pass-through.parameter-use">true</property>
    </GET>
    <POST><invoke>bp02</invoke></POST>
  </path>
  <path pattern="/api/books/{book-id}">
    <GET><invoke>bp03</invoke></GET>
    <PUT><invoke>bp04</invoke></PUT>
    <DELETE><invoke>bp05</invoke></DELETE>
  </path>
  <path pattern="/api/books/{book-id}/authors/{author-idx}">
    <GET><invoke>bp06</invoke></GET>
    <PUT><invoke>bp07</invoke></PUT>
    <DELETE><invoke>bp08</invoke></DELETE>
  </path>
</urecphttp-routing>
```

この場合、URL パラメタの抽出結果を保持するヘッダ電文のスキーマ (urecp_http_header_urlparameter.xsd) は、次のように作成してください。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<xsd:schema elementFormDefault="qualified"
  targetNamespace="http://www.hitachi.co.jp/soft/xml/cosminexus/csc/reception/http/request">
```

```
xmlns:hrc="http://www.hitachi.co.jp/soft/xml/cosminexus/csc/reception/http/request"
xmlns:xsd="http://www.w3.org/2001/XMLSchema">
  <xsd:complexType name="http-header-urlparametersType">
    <xsd:sequence>
      <xsd:element name="book-id" type="xsd:string"/>
      <xsd:element name="author-idx" type="xsd:string"/>
    </xsd:sequence>
  </xsd:complexType>
</xsd:schema>
```

3.12 ファイルイベント連携で利用するファイル

3.12.1 ファイルイベント受付定義ファイル

(1) 形式

```
[urecp-fileevent.thread-pool.minimum=ファイルイベント受付処理の最小スレッド数]  
[urecp-fileevent.thread-pool.maximum=ファイルイベント受付処理の最大スレッド数]  
  
[urecp-fileevent.sub-folder=監視ファイルの格納先となるサブフォルダのパス]  
[urecp-fileevent.common-folder.definition-name=共通フォルダ定義名]  
[urecp-fileevent.monitored-file-name.regex=監視対象のファイル名の正規表現]  
[urecp-fileevent.monitored.common-folder={true | false}]  
[urecp-fileevent.file.auto-delete={true | false}]
```

(2) 機能

ファイルイベント受付の動作情報を設定します。このファイルは、開発環境でのファイルイベント受付の作成時に独自定義ファイルとして設定します。

ファイルイベント受付のセットアップ後に設定内容を変更する場合は、「(3) ファイルの格納先」に示すテンプレートファイルの内容を編集して、同じファイル名「cscurecpfileevent.properties」で保存してください。これ以外のファイル名を独自定義ファイルとして設定しても無効となります。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>CSC\custom-reception\fileevent\config\templates\cscurecpfileevent.properties
```

注意事項

ファイルイベント受付定義ファイルを編集する場合は、ファイルイベント受付の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で「独自定義ファイル」の「編集」ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

設定した内容はファイルイベント受付の開始時に有効になります。定義内容が不正な場合は、ファイルイベント受付の配備時または起動時にエラーとなります。

(4) 設定できるプロパティ

(a) 処理スレッドの同時実行数

`urecp-fileevent.thread-pool.minimum`=ファイルイベント受付処理の最小スレッド数 ~<整数値>
(`((1-2147483647))<<1>>`)

ファイルイベント受付を呼び出すスレッドに関して、スレッドプール内で同時に実行できる数の最小値を指定します。

`urecp-fileevent.thread-pool.maximum`=ファイルイベント受付処理の最大スレッド数 ~<整数値>
(`((1-2147483647))<<32>>`)

ファイルイベント受付を呼び出すスレッドに関して、スレッドプール内で同時に実行できる数の最大値を指定します。最小スレッド数以上の値を指定する必要があります。

(b) 監視ファイル

`urecp-fileevent.sub-folder`=監視ファイルの格納先となるサブフォルダのパス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白>

監視対象のファイルをサブフォルダに格納する場合、サブフォルダ名を相対パスで指定します。フォルダ区切りは「/」を使用します。

存在しないフォルダを指定した場合は、ファイルイベント受付のリクエスト処理が失敗します。

監視対象のファイル全体のパス長は、OS の最大パス長を超えないようにしてください。OS のパス長の上限については、各 OS のドキュメントを参照してください。

`urecp-fileevent.common-folder.definition-name`=共通フォルダ定義名 ~<英数字 (0~9, A~Z, a~z), アンダーバー (_) >(`((1-64 文字))<<default>>`)

ファイルイベント受付が取得対象ファイルの存在を確認する際に参照する、共通フォルダ定義名を指定します。

HCSC サーバランタイム定義ファイルの「`common-folder-<共通フォルダ定義名>`」に指定した共通フォルダ定義名を指定してください。

`urecp-fileevent.monitored-file-name.regex`=監視対象のファイル名の正規表現 ~<文字列>

ファイルイベント受付で監視の対象とするファイル名を正規表現で指定します。正規表現の記述仕様は、`java.util.regex.Pattern` クラスの仕様に従ってください。

指定を省略した場合は、ファイル名に「.csc」を含まないファイル名のファイルがすべて監視対象となります。

`urecp-fileevent.monitored.common-folder`={true | false} ~<<false>>

ファイルイベント受付の監視対象のフォルダを共通フォルダにするか指定します。

- true
共通フォルダ内の取得対象ファイルを監視します。
- false
監視フォルダ内の更新完了通知ファイルを監視します。

`urecp-fileevent.file.auto-delete={true | false} ~<<true>>`

ビジネスプロセスからの応答が正常の場合に、取得対象ファイルを自動的に削除するか否かを指定します。

このプロパティは、監視対象が共通フォルダの場合だけ有効となります。

- true
取得対象ファイルを削除します。
- false
取得対象ファイルを削除しません。

(5) 記述例

ファイルイベント受付定義ファイルの記述例を次に示します。

```
urecp-fileevent.thread-pool.minimum=1
urecp-fileevent.thread-pool.maximum=32
urecp-fileevent.sub-folder=folder1
urecp-fileevent.common-folder.definition-name=common
urecp-fileevent.monitored-file-name.regex=file[0-9]*¥.txt
urecp-fileevent.monitored.common-folder=false
```

3.13 Kafka アダプタで利用するファイル

3.13.1 Kafka アダプタ定義ファイル

(1) 形式

```
[adpkafka.xml2json={true | false}]  
  
[adpkafka.request.record.binary.decoding={hexBinary | base64Binary}]  
  
producer.key.serializer={ByteArraySerializer | StringSerializer}  
producer.value.serializer={ByteArraySerializer | StringSerializer}  
  
[producer.acks=Apache Kafkaが書き込み完了通知を返すタイミング]  
  
[producer.compression.type={none | gzip}]  
  
[producer.retries=メッセージの再送信回数]  
  
[producer.client.id=送信リクエストの実行時にBrokerに渡すid文字列]  
  
[producer.connections.max.idle.ms=アイドル状態の接続タイムアウト時間]  
[producer.delivery.timeout.ms=メッセージ送信の応答のタイムアウト時間]  
[producer.max.block.ms=送信リクエストの呼び出しのタイムアウト時間]  
[producer.request.timeout.ms=送信要求の応答のタイムアウト時間]  
[producer.socket.connection.setup.timeout.max.ms=ソケット接続が確立されるまでクライアントが  
待機する最大時間]  
[producer.socket.connection.setup.timeout.ms=ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機  
する時間]
```

(2) 機能

Kafka アダプタの動作情報を設定します。設定した内容は Kafka アダプタの開始時に有効になります。

Kafka アダプタ定義ファイルは「adpkafka.properties」というファイル名で作成します。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Kafka%config%templates%adpkafka.properties
```

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。このテンプレートファイルを任意のディレクトリにコピーしたあとファイルを編集し、定義ファイルを作成してください。

(4) 設定できるプロパティ

(a) 拡張機能

`adpkafka.xml2json={true | false} ~<<false>>`

ボディ要求電文の JSON-XML 変換を実施するかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されます。

- true
JSON-XML 変換を実施します。
- false
JSON-XML 変換を実施しません。

(b) デコード形式

`adpkafka.request.record.binary.decoding={hexBinary | base64Binary} ~<<hexBinary>>`

要求電文中の要素値をバイナリデータへデコードする際のデコード形式を指定します。

- hexBinary
hexBinary 形式でデコードします。
- base64Binary
base64Binary 形式でデコードします。

`producer.key.serializer` プロパティに `ByteArraySerializer` を指定した場合、ヘッダ要求電文のメッセージの `key` 要素に指定した値は、ここで指定したデコード形式でデコードされて Apache Kafka へ送信されます。そのため、`key` 要素の値はデコード形式に合わせて指定する必要があります。形式が異なる場合の動作は保証できません。

(c) シリアライザクラス

`producer.key.serializer={ByteArraySerializer | StringSerializer}`

メッセージのキーのシリアライザクラスを指定します。指定は省略できません。

- `ByteArraySerializer`
メッセージのキーのデータ型を `Byte[]` として扱います。
これを指定した場合、ヘッダ要求電文のメッセージの `key` 要素に指定した値は、`adpkafka.request.record.binary.decoding` プロパティに指定したデコード形式でデコードされて Apache Kafka へ送信されます。
- `StringSerializer`
メッセージのキーのデータ型を `java.lang.String` として扱います。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「key.serializer」に設定されます。詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.value.serializer={ByteArraySerializer | StringSerializer}`

メッセージの値のシリアライザクラスを指定します。指定は省略できません。

JSON-XML 変換を実施（`adpkafka.xml2json=true` を指定）する場合は、StringSerializer を指定してください。

- ByteArraySerializer
メッセージの値のデータ型を Byte[] として扱います。
- StringSerializer
メッセージの値のデータ型を java.lang.String として扱います。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「value.serializer」に設定されます。詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

(d) 書き込み完了通知のタイミング

`producer.acks=Apache Kafka が書き込み完了通知を返すタイミング` ~<<1>>

Kafka アダプタからの送信リクエストに対し、Apache Kafka が書き込み完了通知（ack）を返すタイミングを指定します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「acks」に設定されます。設定値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

(e) 圧縮タイプ

`producer.compression.type={none | gzip}` ~<<none>>

メッセージの圧縮タイプを指定します。

- none
圧縮しません。
- gzip
gzip を使用します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「compression.type」に設定されます。詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

(f) 再試行回数

`producer.retries=メッセージの再送信回数` ~<<2147483647>>

一時的なエラーで送信が失敗したメッセージの再送信回数を指定します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「retries」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

(g) クライアント ID

`producer.client.id`=送信リクエストの実行時に Broker に渡す id 文字列 ~<<空文字列>>

送信リクエストの実行時に Broker に渡す id 文字列を指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「client.id」に設定されます。設定値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

(h) タイムアウト時間

`producer.connections.max.idle.ms`=アイドル状態の接続タイムアウト時間 ~<<540000>>

アイドル状態の接続を閉じるまでの最大待機時間をミリ秒単位で指定します。

指定した時間を過ぎると、アイドル状態となっている接続を閉じますが、メッセージ送信機能は続行します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「connections.max.idle.ms」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.delivery.timeout.ms`=メッセージ送信の応答のタイムアウト時間 ~<<120000>>

Kafka アダプタからの送信リクエストの呼び出しが返されてから、Apache Kafka へメッセージ送信の成功または失敗を応答するまでの最大待機時間をミリ秒単位で指定します。`producer.request.timeout.ms` プロパティの指定値以上の値を指定してください。

指定した時間を過ぎると、エラーメッセージを出力してメッセージ送信機能を停止します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「delivery.timeout.ms」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.max.block.ms`=送信リクエストの呼び出しのタイムアウト時間 ~<<60000>>

送信リクエストの呼び出しまでの最大待機時間をミリ秒単位で指定します。

指定した時間を過ぎると、エラーメッセージを出力してメッセージ送信機能を停止します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「max.block.ms」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.request.timeout.ms`=送信要求の応答のタイムアウト時間 ~<<30000>>

送信要求の応答までの最大待機時間をミリ秒単位で指定します。

指定した時間を過ぎると、次のように対処されます。

- メッセージを再送できる場合は、リクエストが再試行されます。
- メッセージを再送できない場合は、エラーメッセージを出力してメッセージ送信機能を停止します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「`request.timeout.ms`」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.socket.connection.setup.timeout.max.ms`=ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機する最大時間 ~<<30000>>

ソケット接続が確立されるまでのクライアントの最大待機時間をミリ秒単位で指定します。

指定した時間を過ぎると、ほかのノードに接続を切り替えます。メッセージ送信機能は続行します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「`socket.connection.setup.timeout.max.ms`」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.socket.connection.setup.timeout.ms`=ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機する時間 ~<<10000>>

ソケット接続が確立されるまでのクライアントの待機時間をミリ秒単位で指定します。

指定した時間を過ぎると、ほかのノードに接続を切り替えます。メッセージ送信機能は続行します。

ここで設定した値は、Apache Kafka へのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「`socket.connection.setup.timeout.ms`」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

3.14 Kafka 受付で利用するファイル

3.14.1 Kafka 受付定義ファイル

(1) 形式

```
consumer.key.deserializer={StringDeserializer | ByteArrayDeserializer}
consumer.value.deserializer={StringDeserializer | ByteArrayDeserializer}
consumer.bootstrap.servers=初期接続時のホスト/ポート
[consumer.fetch.min.bytes=フェッチ要求への返却データの最小量]
consumer.group.id=Consumerグループの識別文字列
[consumer.heartbeat.interval.ms=ハートビート間の予想時間]
[consumer.max.partition.fetch.bytes=パーティションごとのデータの最大量]
[consumer.session.timeout.ms=クライアントの障害検出用のタイムアウト時間]
[consumer.ssl.key.password=キーストアファイル内の秘密鍵のパスワード]
[consumer.ssl.keystore.key=キーストアファイルの秘密キー]
[consumer.ssl.keystore.location=キーストアファイルの格納場所]
[consumer.ssl.keystore.password=キーストアファイルのストアパスワード]
[consumer.ssl.truststore.location=トラストストアファイルの格納場所]
[consumer.ssl.truststore.password=トラストストアファイルのパスワード]
[consumer.auto.offset.reset={earliest | latest}]
[consumer.client.dns.lookup={use_all_dns_ips | resolve_canonical_bootstrap_servers_only}]
[consumer.connections.max.idle.ms=アイドル状態の接続タイムアウト時間]
[consumer.fetch.max.bytes=フェッチ要求への返却データの最大量]
[consumer.max.poll.interval.ms=ポーリングの最大遅延時間]
[consumer.max.poll.records=1回のポーリングの呼び出しで返されるレコードの最大数]
[consumer.receive.buffer.bytes=TCP受信ソケットバッファのサイズ]
[consumer.request.timeout.ms=要求の応答を待機する最大時間]
[consumer.security.protocol={PLAINTEXT | SSL}]
[consumer.send.buffer.bytes=TCP送信ソケットバッファのサイズ]
[consumer.socket.connection.setup.timeout.max.ms=ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機する最大時間]
[consumer.socket.connection.setup.timeout.ms=ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機する時間]
[consumer.ssl.enabled.protocols=SSL接続が有効なプロトコルのリスト]
[consumer.ssl.keystore.type=キーストアファイルのファイル形式]
[consumer.ssl.protocol=SSLContextの生成に使用するSSLプロトコル]
[consumer.ssl.provider=SSL接続に使用するセキュリティプロバイダの名称]
[consumer.ssl.truststore.type=トラストストアファイルのファイル形式]
[consumer.client.id=リクエスト時にサーバに渡すID文字列]
[consumer.fetch.max.wait.ms=フェッチ要求への応答のブロック時間]
[consumer.metadata.max.age.ms=メタデータの強制更新までの時間]
[consumer.reconnect.backoff.max.ms=Brokerへ再接続するまでの最大待機時間]
[consumer.reconnect.backoff.ms=特定のホストへの再接続を試行する前に待機する基本時間]
[consumer.retry.backoff.ms=特定のパーティションへの再要求までの待機時間]
[consumer.retry.backoff.max.ms=特定のパーティションへの再要求までの最大待機時間]

[urecp-kafka.commit-processing.control={msg-rcv-after | msg-proc-after}]
[urecp-kafka.commit-timeout.ms=オフセットのコミットの最大待機時間]
[urecp-kafka.poll-timeout.ms=ポーリング時の待ち時間]
urecp-kafka.topic.name=サブスクライブするトピック
[urecp-kafka.err-message.retry-count=Kafka受付の呼び出しのリトライ回数]
[urecp-kafka.record-binary.encoding={hexBinary | base64Binary}]
```

```
[urecp-kafka.resource-adapter=Kafkaインバウンドアダプタの表示名]
[urecp-kafka.ejb-transaction-timeout=EJBトランザクションのタイムアウト時間]
[urecp-kafka.json2xml={true | false}]
```

(2) 機能

Kafka インバウンドアダプタ内で動作する Consumer の動作や、Kafka 受付の動作を設定します。設定した内容は、Kafka 受付のデプロイ時、Kafka 受付の起動時、または `cscmctl` コマンドの実行時に読み込まれます。

Kafka 受付定義ファイルは「`cscurecpkafka.properties`」というファイル名で作成してください。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%kafka%config%templates%cscurecpkafka.properties
```

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。Kafka 受付定義ファイルを編集する場合は、Kafka 受付の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で [独自定義ファイル] の [編集] ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

(4) 設定できるプロパティ

(a) Apache Kafka の定義

```
consumer.key.deserializer={StringDeserializer | ByteArrayDeserializer}
```

メッセージのキーのデシリアライザを指定します。指定は省略できません。

- StringDeserializer
デシリアライザとして StringDeserializer を使用します。
- ByteArrayDeserializer
デシリアライザとして ByteArrayDeserializer を使用します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「`key.deserializer`」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

```
consumer.value.deserializer={StringDeserializer | ByteArrayDeserializer}
```

メッセージの値のデシリアライザを指定します。指定は省略できません。

- StringDeserializer

デシリアライザとして StringDeserializer を使用します。

- ByteArrayDeserializer

デシリアライザとして ByteArrayDeserializer を使用します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「value.deserializer」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.bootstrap.servers=初期接続時のホスト/ポート

Kafka クラスタへの初期接続を確立するために使用するホスト/ポートを指定します。指定は省略できません。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「bootstrap.servers」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.fetch.min.bytes=フェッチ要求への返却データの最小量 ~<<1>>

サーバがフェッチ要求に対して返す必要のあるデータの最小量を指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「fetch.min.bytes」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.group.id=Consumer グループの識別文字列

Consumer が属する Consumer グループを識別するための、一意の文字列を指定します。指定は省略できません。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「group.id」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.heartbeat.interval.ms=ハートビート間の予想時間 ~<<3000>>

Consumer コーディネータへのハートビート間の予想時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「heartbeat.interval.ms」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.max.partition.fetch.bytes=パーティションごとのデータの最大量 ~<<1048576>>

サーバが返すパーティションごとのデータの最大量を指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「max.partition.fetch.bytes」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.session.timeout.ms=クライアントの障害検出用のタイムアウト時間 ~<<45000>>

Apache Kafka のグループ管理機能の使用時のタイムアウト時間をミリ秒で指定します。クライアントの障害を検出するために使用されます。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「session.timeout.ms」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.key.password=キーストアファイル内の秘密鍵のパスワード

キーストアファイル内の秘密鍵のパスワードを指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.key.password」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.keystore.key=キーストアファイルの秘密キー

キーストアファイルの秘密キーを指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.keystore.key」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.keystore.location=キーストアファイルの格納場所

キーストアファイルの格納場所を指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.keystore.location」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.keystore.password=キーストアファイルのストアパスワード

キーストアファイルのストアパスワードを指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.keystore.password」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.truststore.location=トラストストアファイルの格納場所

トラストストアファイルの格納場所を指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.truststore.location」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.ssl.truststore.password=`トラストストアファイルのパスワード

トラストストアファイルのパスワードを指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.truststore.password」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.auto.offset.reset={earliest | latest} ~<<latest>>`

Apache Kafka に初期オフセットがない場合や、現在のオフセットがサーバ上に存在しない場合の対処方法を次のどちらかで指定します。

- earliest
最も早いオフセットに自動的にリセットします。
- latest
自動的に最新のオフセットにリセットします。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「auto.offset.reset」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.client.dns.lookup={use_all_dns_ips | resolve_canonical_bootstrap_servers_only} ~<<use_all_dns_ips>>`

クライアントが DNS ルックアップを使用する方法を次のどちらかで指定します。

- use_all_dns_ips
接続が正常に確立されるまで、返された各 IP アドレスに順番に接続します。すべての IP アドレスが一度使用されると、クライアントはホスト名から IP アドレスを再度名前解決します（ただし、JVM と OS キャッシュの両方の DNS 名のルックアップ）。
- resolve_canonical_bootstrap_servers_only
各ブートストラップアドレスを正規名のリストで名前解決します。
ブートストラップフェーズのあとは、use_all_dns_ips と同じ動作となります。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「client.dns.lookup」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.connections.max.idle.ms=`アイドル状態の接続タイムアウト時間 ~<<540000>>

アイドル状態の接続を閉じるまでのタイムアウト時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「connections.max.idle.ms」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.fetch.max.bytes=フェッチ要求への返却データの最大量 ~<<52428800>>

サーバがフェッチ要求に対して返す必要のあるデータの最大量を指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「fetch.max.bytes」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.max.poll.interval.ms=ポーリングの最大遅延時間 ~<<300000>>

ポーリングの実行間隔の最大遅延時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「max.poll.interval.ms」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.max.poll.records=1 回のポーリングの呼び出しで返されるレコードの最大数 ~<<500>>

1 回のポーリングの呼び出しで返されるレコードの最大数を指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「max.poll.records」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.receive.buffer.bytes=TCP 受信ソケットバッファのサイズ ~<<65536>>

TCP 受信ソケットバッファのサイズを指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「receive.buffer.bytes」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.request.timeout.ms=要求の応答を待機する最大時間 ~<<30000>>

要求に対する応答を待機する最大時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「request.timeout.ms」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.security.protocol={PLAINTEXT | SSL} ~<<PLAINTEXT>>

Broker との通信に使用するプロトコルを次のどちらかで指定します。

- PLAINTEXT
PLAINTEXT を使用します。
- SSL
SSL を使用します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「security.protocol」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.send.buffer.bytes=TCP 送信ソケットバッファのサイズ ~<<131072>>

TCP 送信ソケットバッファのサイズを指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「send.buffer.bytes」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.socket.connection.setup.timeout.max.ms=ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機する最大時間 ~<<30000>>

ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機する時間の最大値をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「socket.connection.setup.timeout.max.ms」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.socket.connection.setup.timeout.ms=ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機する時間 ~<<10000>>

ソケット接続が確立されるまでクライアントが待機する時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「socket.connection.setup.timeout.ms」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.enabled.protocols=SSL 接続が有効なプロトコルのリスト ~<<TLSv1.2,TLSv1.3>>

SSL 接続が有効になっているプロトコルのリストを指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.enabled.protocols」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.keystore.type=キーストアファイルのファイル形式 ~<<JKS>>

キーストアファイルのファイル形式を指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.keystore.type」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.protocol=SSLContext の生成に使用する SSL プロトコル ~<<TLSv1.3>>

SSLContext の生成に使用する SSL プロトコルを指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.protocol」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.provider=SSL 接続に使用するセキュリティプロバイダの名称 ~<<null>>

SSL 接続に使用するセキュリティプロバイダの名前を指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.provider」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.ssl.truststore.type=トラストストアファイルのファイル形式 ~<<JKS>>

トラストストアファイルのファイル形式を指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「ssl.truststore.type」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.client.id=リクエスト時にサーバに渡す ID 文字列 ~<<空文字列>>

リクエスト時にサーバに渡す ID 文字列を指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「client.id」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

consumer.fetch.max.wait.ms=フェッチ要求への応答のブロック時間 ~<<500>>

Consumer 定義「fetch.min.bytes」で指定されたデータ最小量に達するデータがない場合、サーバがフェッチ要求に応答する前にブロックする時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「fetch.max.wait.ms」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.metadata.max.age.ms=メタデータの強制更新までの時間 ~<<300000>>`

メタデータの強制更新までの時間をミリ秒単位で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「`metadata.max.age.ms`」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.reconnect.backoff.max.ms=Broker へ再接続するまでの最大待機時間 ~<<1000>>`

接続に失敗した Broker に再接続するまでの待機時間をミリ秒単位で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「`reconnect.backoff.max.ms`」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.reconnect.backoff.ms=特定のホストへの再接続を試行する前に待機する基本時間 ~<<50>>`

特定のホストへの再接続を試行する前に待機する基本時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「`reconnect.backoff.ms`」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.retry.backoff.ms=特定のパーティションへの再要求までの待機時間 ~<<100>>`

要求が失敗した特定のトピックのパーティションに対して、要求を再試行するまでの待機時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「`retry.backoff.ms`」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`consumer.retry.backoff.max.ms=特定のパーティションへの再要求までの最大待機時間 ~<<1000>>`

要求が失敗した特定のトピックのパーティションに対して、要求を再試行するまでの最大待機時間をミリ秒で指定します。

ここで設定した値は Apache Kafka の Consumer 定義「`retry.backoff.max.ms`」に設定され、Kafka インバウンドアダプタの Consumer 機能に使用されます。設定できる値などの詳細は Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

(b) Kafka 受付独自の定義

`urecp-kafka.commit-processing.control={msg-rcv-after | msg-proc-after} ~<<msg-proc-after>>`

Kafka インバウンドアダプタから Broker へオフセットをコミットするタイミングを指定します。

- msg-rcv-after
Apache Kafka からメッセージを受信した直後にコミットします。
- msg-proc-after
Kafka 受付から応答が返ったあとでコミットします。

urecp-kafka.commit-timeout.ms=オフセットのコミットの最大待機時間 ~<数字>
((1-2147483647))<<60000>>

Kafka インバウンドアダプタから Broker へコミットする際に、オフセットのコミットを待機する最大時間をミリ秒で指定します。

urecp-kafka.poll-timeout.ms=ポーリング時の待ち時間 ~<数字>((1-2147483647))<<60000>>

Kafka インバウンドアダプタで利用できるレコードがない場合に、ポーリングをブロックする最大時間をミリ秒で指定します。利用できるレコードがある場合はブロックしません。

urecp-kafka.topic-name=サブスクライブするトピック ~<半角英数字, アンダーバー (_), ハイフン (-), ピリオド (.) >((1 トピック当たり 1-249 文字))

Kafka インバウンドアダプタがサブスクライブするトピックの名称を指定します。指定は省略できません。

コマンド制御 (MBean) の実行時は設定値が適切かチェックされます。cscmctl コマンドの実行時はチェックされません。

トピックを複数指定する場合は、値をコンマ区切りで指定してください。

urecp-kafka.err-message.retry-count=Kafka 受付の呼び出しのリトライ回数 ~<数字>
((0-1024))<<1>>

Kafka 受付が Kafka インバウンドアダプタへエラー応答をした際に、Kafka 受付の呼び出しをリトライする回数を指定します。値に 0 を指定した場合はリトライを実行しません。

urecp-kafka.record-binary.encoding={hexBinary | base64Binary} ~<<hexBinary>>

Kafka インバウンドアダプタから渡されたレコードデータをビジネスプロセスに渡す要求電文に関して、要素値に設定するレコードデータのエンコード形式を指定します。

- hexBinary
レコードデータを hexBinary 形式でエンコードします。
- base64Binary
レコードデータを base64Binary 形式でエンコードします。

urecp-kafka.resource-adapter=Kafka インバウンドアダプタの表示名 ~<英数字 (a~z, A~Z, 0~9) およびアンダーバー (_)>((1-240 文字))<<Kafka_Inbound_Resource_Adapter>>

受付処理が使用する Kafka インバウンドアダプタの表示名（Connector 属性ファイルの display-name タグの設定値）を指定します。

urecp-kafka.ejb-transaction-timeout=EJB トランザクションのタイムアウト時間 ~<数字>
((0-2147483647))<<0>>

受付処理およびカスタム受付フレームワークの EJB トランザクションのタイムアウト時間（秒）を指定します。

0 を指定した場合、J2EE サーバに設定されたデフォルトのタイムアウト値で動作します。

urecp-kafka.json2xml={true | false} ~<<false>>

Kafka 受付のリクエスト処理時に JSON-XML 変換をするかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されます。

- true
JSON-XML 変換機能を使用して、レコードの値を XML に変換します。
- false
JSON-XML 変換機能を使用しません。

3.15 スケジュール駆動受付で利用するファイル

3.15.1 スケジュール駆動受付定義ファイル

(1) 形式

[scdrecp.event.occurrence-interval=イベント発生間隔]

[urecp-scd.task.processing-max.parallel.count=並列実行可能なタスク最大数]

[scdrecp.allow.new-task.executing={true | false}]

[scdrecp.waiting-execution-tasks.maximum=待機可能なタスクの最大数]

[scdrecp.create.work-dir={true | false}]

[scdrecp.work-dir.auto-delete={true | false}]

[scdrecp.suppress-execution-task.error-occures-threshold=逐次処理タスクのエラー連続回数のしきい値]

(2) 機能

スケジュール駆動受付の動作情報を設定します。このファイルはスケジュール駆動受付の独自定義ファイルです。

このファイルは必要に応じて設定してください。設定されなかった場合は、各プロパティにデフォルト値が適用され、スケジュール駆動受付のデプロイ時にメッセージ「KDEC10106-W」が出力されます。

このファイルは、指定値のチェックのタイミングと、不正な値が検出された場合の動作が、プロパティによって次のように異なります。

プロパティの種類	チェックのタイミング	不正な値が検出された場合の動作
「urecp-scd」で始まるプロパティ	スケジュール駆動受付の配備時	スケジュール駆動受付の配備に失敗する。
	cscmctl コマンド実行時	cscmctl コマンドの実行に失敗する。
「scdrecp」で始まるプロパティ	スケジュール駆動受付の起動時	スケジュール駆動受付の起動に失敗する。
	cscmctl コマンド実行時	cscmctl コマンドの実行に失敗する。
scdrecp.event.occurrence-interval プロパティ	スケジュール駆動受付の起動時	スケジュール駆動受付の起動に失敗する。

(3) ファイルの格納先

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>CSC%custom-reception%schedule%config%templates%cscurecpschedule.properties

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。スケジュール駆動受付定義ファイルを編集する場合は、スケジュール駆動受付の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で「独自定義ファイル」の「編集」ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

設定した内容は、デプロイ時、スケジュール駆動受付の起動時、または `cscmctl` コマンド実行時に読み込まれます。

(4) 設定できるプロパティ

(a) イベントの発生間隔

`scdrecp.event.occurrence-interval`=イベント発生間隔 ～<数字>((1-86400))<<600>>

イベントを発生させる間隔を秒単位で指定します。

(b) 実行中のタスクの動作

`urecp-scd.task.processing-max.parallel.count`=並列実行可能なタスク最大数 ～<数字>((1-64))<<1>>

イベントの発生時刻にすでに実行中のタスクがある場合、並列して実行できるタスクの最大数を指定します。

1 を設定した場合は、タスクの処理順序が「逐次」となります。

1 より大きい値を指定した場合は、タスクの処理順序が「並列」となります。

タスクの処理順序については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「3.6 ビジネスプロセスのスケジュール設定」を参照してください。

`scdrecp.allow.new-task.executing`={true | false} ～<<false>>

イベントの発生時刻にすでに実行中のタスクがある場合、新たにタスクを実行するかを次の中から指定します。

- true
新たにタスクを実行します。
- false
新たにタスクを実行しません。

`scdrecp.waiting-execution-tasks.maximum`=待機可能なタスクの最大数 ～<数字>((1-86400))<<86400>>

実行を待機できるタスクの最大数を指定します。

実行待機タスクの登録数がこの最大数を越えた時点で、現在発生しているイベントに関するタスクが実行されなくなります。スケジュールの実行は継続されます。

なお、スケジュール駆動受付の起動後に初めてこの最大数を越えた場合は、メッセージ KDEC84204-W が出力されます。

なお、`scdrecp.allow.new-task.executing` プロパティに `false`（イベントの発生時刻に実行中のタスクがある場合は新たにタスクを実行しない）が設定されている場合は、実行を待機するタスクが存在しないため、`scdrecp.waiting-execution-tasks.maximum` プロパティの設定値は無効となります。

(c) 作業フォルダ

`scdrecp.create.work-dir={true | false} ~<<false>>`

タスク実行時に作業フォルダを作成するかどうかを次の中から指定します。

- `true`
タスク実行時に作業フォルダを作成します。
- `false`
タスク実行時に作業フォルダを作成しません。

`scdrecp.work-dir.auto-delete={true | false} ~<<false>>`

タスクの処理の正常終了後に作業フォルダを自動的に削除するかどうかを次の中から指定します。

- `true`
作業フォルダを自動的に削除します。
- `false`
作業フォルダを自動的に削除しません。

(d) エラー発生時のスケジュールの実行の抑止

`scdrecp.suppress-execution-task.error-occures-threshold=逐次処理タスクのエラー連続回数のしきい値 ~<数字>((0-1024))<<0>>`

逐次処理のタスク実行をエラー連続回数に応じて抑止させたい場合、しきい値となる連続回数を指定します。0を設定した場合は、エラー連続回数によるタスク実行の抑止はされません。

タスクのエラー連続回数がこのしきい値に達すると、それ以降のタスクは実行が抑止されます。なお、1つのタスクに複数のエラーが発生した場合（例えば、タスク実行でタイムアウトが発生し、かつビジネスプロセスがエラーを返した場合）は、エラーは1回とカウントされます。

エラー連続回数は、次の事象が発生すると0からカウントし直されます。

- タスクが正常終了した場合
- スケジュール駆動受付を再起動した場合

- HCSC サーバを再起動した場合

実行抑止されたタスクを再開するには、スケジュール駆動受付を再起動する必要があります。

3.16 gRPC アダプタで利用するファイル

3.16.1 gRPC アダプタ独自定義ファイル

(1) 形式

```
[adpgrpc.protocol.keepalive-time=キープアライブPINGの送信間隔]
[adpgrpc.protocol.keepalive-timeout=キープアライブタイムアウト時間]
[adpgrpc.protocol.keepalive-without-calls={true | false}]
[adpgrpc.protocol.idle-timeout=アイドルタイムアウト時間]
[adpgrpc.protocol.deadline=リクエストの実行期限]
[adpgrpc.protocol.wait-for-ready={true | false}]
[adpgrpc.protocol.message-compression.enabled={true | false}]

[adpgrpc.data-size-limit.max-inbound-message-size=gRPCアダプタで受信できる最大メッセージサイズ]
[adpgrpc.data-size-limit.max-outbound-message-size=gRPC呼び出しで送信できる最大メッセージサイズ]
[adpgrpc.data-size-limit.max-inbound-metadata-size=受信できるメタデータの最大サイズ]

[adpgrpc.response-code.fault=フォルト処理するステータスコード]
```

(2) 機能

gRPC アダプタの動作情報を設定します。

gRPC アダプタ独自定義ファイルは「cscadpgrpc.properties」というファイル名で作成します。gRPC アダプタの作成時にサービスアダプタ定義画面の [独自定義ファイル] にこのファイルを設定することで、gRPC アダプタの開始時に設定内容が有効になります。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%gRPC%config%templates%cscadpgrpc.properties
```

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。gRPC アダプタ独自定義ファイルを編集する場合は、gRPC アダプタの追加時にサービスアダプタ定義画面（詳細）で [独自定義ファイル] の [編集] ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

(4) 設定できるプロパティ

(a) プロトコル動作指定

`adpgrpc.protocol.keepalive-time=キープアライブ PING の送信間隔` ~((10000-86400000000))

キープアライブ PING の送信間隔をミリ秒単位で指定します。範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

gRPC サーバ側で許可されているキープアライブ時間より小さい値を設定した場合、接続が強制的に閉じられるため、必要最小限の値を設定することを推奨します。

次の場合、キープアライブは無効となります。

- 最大値を指定した場合
- このプロパティを省略した場合

キープアライブを有効にした場合、接続先の gRPC サービスの負荷が増加することがあります。

`adpgrpc.protocol.keepalive-timeout=キープアライブタイムアウト時間` ~((10-9223372036854))<<20000>>

キープアライブ PING の送信後に、接続先から応答が返ってくるまでの時間をミリ秒単位で指定します。RTT (Round-Trip Time) の複数倍の値を設定することを推奨します。

範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.protocol.keepalive-without-calls={true | false}` ~<<false>>

未処理の RPC がない場合にキープアライブを実行するかどうかを選択します。

指定できる値を次に示します。これ以外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。大文字と小文字は区別されます。

- true
未処理の RPC がない場合にキープアライブを実行します。gRPC サーバ側でも同様の設定がされていなければ無効になります。
「true」を選択すると未使用の接続が解放されないため、帯域幅の消費量と CPU 使用率が増加します。
- false
未処理の RPC がない場合にキープアライブを実行しません。

通常はデフォルトの「false」を選択し、かつアイドルタイムアウト時間を `adpgrpc.protocol.idle-timeout` プロパティで設定して、未使用の接続を適切に解放することを推奨します。

`adpgrpc.protocol.idle-timeout=アイドルタイムアウト時間` ~((1000-2592000000))<<1800000>>

未処理の RPC がない場合に、チャンネルの状態をアイドル状態に移行するまでの時間をミリ秒単位で指定します。範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

タイムアウトを無効にする場合、最大値を指定してください。

`adpgrpc.protocol.deadline=リクエストの実行期限 ~((0-315576000000.999999999 の数値を文字列で表現したもの))<<0>>`

RPC が `DEADLINE_EXCEEDED` でエラー終了する前の完了待ち時間を指定します。

範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。0 より小さい値を設定した場合の動作は保証しません。

整数部は秒に、小数部はナノ秒に変換されます。

小数部分が9桁を超える場合、10桁以降の小数部分は無視されます。

タイムアウトを無効にする場合、0を指定するか、プロパティの指定を省略してください。

指定された実行期限を過ぎてもRPCが完了しなかった場合、リクエストはエラーとなり、ステータスコード「`DEADLINE_EXCEEDED`」が返却されます。

`adpgrpc.protocol.wait-for-ready={true | false} ~<<false>>`

gRPC 呼び出しを待機するかどうかを次のどちらかで指定します。大文字と小文字は区別されます。これ以外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

- true
待機します。
- false
待機しません。

`adpgrpc.protocol.message-compression.enabled={true | false} ~<<false>>`

gRPC サービスへ送信するメッセージの圧縮有無を指定します。大文字と小文字は区別されます。これ以外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

- true
圧縮します。
- false
圧縮しません。

(b) データサイズ制限

`adpgrpc.data-size-limit.max-inbound-message-size=gRPC アダプタで受信できる最大メッセージサイズ ~((0-2147483647))<<4194304>>`

gRPC アダプタで受信できる最大メッセージサイズをバイト単位で設定します。範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

指定された値を超える受信メッセージが受信された場合、そのメッセージは処理されないで、RPC はステータスコード「RESOURCE_EXHAUSTED」で失敗します。

`adpgrpc.data-size-limit.max-outbound-message-size=gRPC 呼び出しで送信できる最大メッセージサイズ` $\sim((0-2147483647))\langle\langle 2147483647 \rangle\rangle$

gRPC 呼び出しで送信できる最大メッセージサイズをバイト単位で設定します。範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

指定された値を超えるメッセージを送信しようとした場合、そのメッセージは処理されないで、エラーメッセージ「KDEC84004-E」を出力してリクエスト処理が失敗します。

`adpgrpc.data-size-limit.max-inbound-metadata-size=受信できるメタデータの最大サイズ` $\sim((1-2147483647))\langle\langle 8192 \rangle\rangle$

受信できるメタデータの最大サイズをバイト単位で設定します。範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

(c) フォルト応答

`adpgrpc.response-code.fault=フォルト処理するステータスコード`

フォルト処理するステータスコードをコンマ (,) 区切りで指定します。

指定できるステータスコードを次に示します。各ステータスコードの意味については、gRPC のドキュメントを参照してください。

- CANCELLED
- UNKNOWN
- INVALID_ARGUMENT
- DEADLINE_EXCEEDED
- NOT_FOUND
- ALREADY_EXISTS
- PERMISSION_DENIED
- RESOURCE_EXHAUSTED
- FAILED_PRECONDITION
- ABORTED
- OUT_OF_RANGE
- UNIMPLEMENTED

- INTERNAL
- UNAVAILABLE
- DATA_LOSS
- UNAUTHENTICATED

これ以外の値を設定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

3.17 gRPC 受付で利用するファイル

3.17.1 gRPC 受付定義ファイル

(1) 形式

```
[urecp-grpc.resource-adapter=gRPCインバウンドアダプタの表示名]  
[urecp-grpc.pooled-instance.minimum=プール内インスタンスの最小数]  
[urecp-grpc.pooled-instance.maximum=プール内インスタンスの最大数]  
[urecp-grpc.ejb-transaction-timeout=EJBトランザクションタイムアウト時間]  
[grpcrcp.system-exception.status-code=システム例外時のステータスコード]  
[grpcrcp.message-compression.enabled={true | false}]
```

(2) 機能

gRPC インバウンドアダプタ内で動作する gRPC サービスの動作や、gRPC 受付の動作を設定します。設定した内容は、gRPC 受付のデプロイ時、gRPC 受付の起動時、または `cscmctl` コマンドの実行時に読み込まれます。

gRPC 受付定義ファイルが設定されていない場合は、デフォルト値が適用されます。また、gRPC 受付のデプロイ時にメッセージ `KDEC10105-W` が出力されます。

gRPC 受付定義ファイルは「`cscurecpgrpc.properties`」というファイル名で作成してください。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%gRPC%config%templates%cscurecpgrpc.properties
```

注意事項

ここに格納されているファイルはテンプレートファイルです。gRPC 受付定義ファイルを編集する場合は、gRPC 受付の追加時にユーザ定義受付定義画面（詳細）で [独自定義ファイル] の [編集] ボタンをクリックし、定義ファイルの内容を修正してください。

(4) 設定できるプロパティ

`urecp-grpc.resource-adapter=gRPC インバウンドアダプタの表示名` ~<英数字およびアンダーバー (< >)((1-240文字))<<gRPC_Inbound_Resource_Adapter>>

受付処理が使用する gRPC インバウンドアダプタの表示名 (Connector 属性ファイルの `display-name` タグの設定値) を指定します。

gRPC インバウンドアダプタの表示名として、240 バイト以内の文字列を指定します。

文字列長が上限を超えている場合や、使用できない文字を指定した場合は、gRPC 受付のデプロイ時にエラーとなります。

`urecp-grpc.pooled-instance.minimum`=プール内インスタンスの最小数 ~<整数>((0 または 1-2147483647))<<0>>

カスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最小数を指定します。

0 を指定した場合、制限はありません。

範囲外の値が指定された場合は、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) の実行時にエラーになります。

指定値がプール内インスタンスの最大数 (`urecp-grpc.pooled-instance.maximum` プロパティで指定) より大きいと、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) の実行時にエラーとなります。

キーまたは値が省略された場合は次のように動作します。

- 運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) の実行時に、値のチェック処理が実行されません。
- コマンド制御 (MBean) 実行時に、gRPC 受付のアプリケーション統合属性ファイルの対象要素に値が適用されません。

なお、受付処理のプール内インスタンスの最小数は「1」固定のため、このプロパティでは変更できません。

`urecp-grpc.pooled-instance.maximum`=プール内インスタンスの最大数 ~<整数>((0 または 1-2147483647))<<0>>

受付処理およびカスタム受付フレームワークのプール内インスタンスの最大数を指定します。

0 (無制限) を指定した場合、受付処理のプール内インスタンスの最大数には 1 が設定されます。

範囲外の値が指定された場合は、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) の実行時にエラーになります。

キーまたは値が省略された場合は次のように動作します。

- 運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) の実行時に、値のチェック処理が実行されません。
- コマンド制御 (MBean) 実行時に、gRPC 受付のアプリケーション統合属性ファイルの対象要素に値が適用されません。

指定値がプール内インスタンスの最小数 (`urecp-grpc.pooled-instance.minimum` プロパティで指定) より小さいと、運用コマンドおよびコマンド制御 (MBean) の実行時にエラーとなります。

`urecp-grpc.ejb-transaction-timeout`=EJB トランザクションタイムアウト時間 ~<数字>((0 または 1-2147483647))<<0>>

受付処理およびカスタム受付フレームワークの EJB トランザクションタイムアウト時間（秒）を指定します。

0 を指定した場合、J2EE サーバに設定されたデフォルトのタイムアウト値で動作します。

`grprecp.system-exception.status-code=システム例外時のステータスコード ~<<INTERNAL>>`

システム例外時のステータスコードを次の中から指定します。各ステータスコードの意味については、gRPC のドキュメントを参照してください。

- CANCELLED
- UNKNOWN
- INVALID_ARGUMENT
- DEADLINE_EXCEEDED
- NOT_FOUND
- ALREADY_EXISTS
- PERMISSION_DENIED
- RESOURCE_EXHAUSTED
- FAILED_PRECONDITION
- ABORTED
- OUT_OF_RANGE
- UNIMPLEMENTED
- INTERNAL
- UNAVAILABLE
- DATA_LOSS
- UNAUTHENTICATED

`grprecp.message-compression.enabled={true | false} ~<<false>>`

gRPC クライアントへ返却するメッセージを圧縮するかどうかを次のどちらかで指定します。メッセージの圧縮タイプは gzip 形式です。

- true
メッセージを圧縮します。
- false
メッセージを圧縮しません。

3.18 JSON 形式データと XML 形式データの変換で利用するファイル

3.18.1 JSON-XML 変換定義ファイル

(1) 形式

```
[json-xml-convert.arrays.parent-element-name=XML形式データのルート要素の名称]  
[json-xml-convert.arrays.child-element-name=XML形式データの繰り返し要素の名称]  
[json-xml-convert.arrays.child-simple-element-name=XML形式データの繰り返し要素内に定義される子要素の名称]  
[json-xml-convert.root-element-name=XML形式データのルート要素の名称]  
[json-xml-convert.json-type.include={true | false}]  
[json-xml-convert.decimal-xmloutput-control={true | false}]
```

(2) 機能

JSON 形式データと XML 形式データとの間の変換に関する動作を設定します。このファイルは、開発環境での次に示す HCSC コンポーネントの作成時に独自定義ファイルとして設定します。

- HTTP 受付
- Kafka 受付
- HTTP アダプタ
- Kafka アダプタ

このファイルは次のコマンドで使用します。JSON-XML 変換 API からは使用しません。

- cscjson2xsd コマンド (JSON 形式データから XSD ファイルへの変換 (標準モード))
- cscjsonxmlconv コマンド (JSON 形式データと XML 形式データの相互変換 (標準モード))
- cscoas2servicedef コマンド (OpenAPI 仕様書を HCSC コンポーネントの定義に変換)

なお、このファイルは実行環境でも使用できます。JSON 変換ツールの実行結果が同じになるよう、開発環境と実行環境で同じファイルを使用してください。

次に示すテンプレートファイルを編集して使用してください。

テンプレートファイルの場所

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%templates%csc_json_converter.properties
```

JSON-XML 変換定義ファイルは、次に示す手順で編集します。

1. サービスアダプタ定義画面 (詳細) の [独自定義ファイル] の [追加] ボタンをクリックして、JSON-XML 変換定義ファイルのテンプレートファイルを追加します。

2. [独自定義ファイル] の [編集] ボタンをクリックします。
JSON-XML 変換定義ファイルを編集するためのエディタが起動します。
3. エディタ上で JSON-XML 変換定義ファイルを編集します。
4. Eclipse のメニューから [ファイル] - [保存] を選択し、編集内容を保存します。

ファイル名は「csc_json_converter.properties」で固定です。これ以外のファイル名を独自定義ファイルとして設定しても無効となります。また、独自定義ファイルに「csc_json_converter.properties」を設定しない場合、JSON-XML 変換はデフォルトの設定で動作します。

また、定義した JSON-XML 変換定義ファイルを JSON 形式データの変換時に読み込むには、cscjson2xsd コマンドまたは cscjsonxmlconv コマンドを次のどちらかの方法で実行します。

- 引数-f に JSON-XML 変換定義ファイル名を指定してコマンドを実行する方法
- 次に示すパスに JSON-XML 変換定義ファイルを格納しておき、引数-f を指定しないでコマンドを実行する方法

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%config%tools%json%csc_json_converter.properties
```

このディレクトリにファイルが格納された状態で引数-f を指定して実行すると、引数-f で指定した JSON-XML 変換定義ファイルが適用されます。

JSON 変換ツール (cscjson2xsd コマンドまたは cscjsonxmlconv コマンド) を使用した変換については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「14. JSON 変換ツールを使用したデータ変換」を参照してください。

設定した内容は、該当する受付またはサービスアダプタの開始時に有効になります。定義内容が不正な場合は、該当する受付またはサービスアダプタの配備時、または起動時にエラーとなります。

(3) 設定できるプロパティ

json-xml-convert.arrays.parent-element-name=XML 形式データのルート要素の名称 ~< NCName 型の文字列><<csc-array>>

JSON 形式データが配列から始まる場合に生成される、XML 形式データのルート要素の名称を指定します。

json-xml-convert.arrays.child-element-name=XML 形式データの繰り返し要素の名称 ~< NCName 型の文字列><<csc-element>>

JSON 形式データの配列に対応する、XML 形式データの繰り返し要素の名称を指定します。

json-xml-convert.arrays.child-simple-element-name=XML 形式データの繰り返し要素内に定義される子要素の名称 ~< NCName 型の文字列><<csc-simple>>

JSON 形式データの文字列型、数値型、または boolean 型の配列値に対応する、XML 形式データの繰り返し要素内に定義される子要素の名称を指定します。

`json-xml-convert.root-element-name=XML 形式データのルート要素の名称` ~<<NCName 型の文字列>><<csc-object>>

JSON 形式データがオブジェクト型から始まる場合に生成される、XML 形式データのルート要素の名称を指定します。

`json-xml-convert.json-type.include={true | false}` ~<<false>>

JSON のデータ種別を XML 形式データの属性に含めるかどうかを指定します。

- true
JSON 形式データのデータ種別を XML 形式データの属性に含めます。
- false
JSON 形式データのデータ種別を XML 形式データの属性に含めません。

`json-xml-convert.decimal-xmloutput-control={true | false}` ~<<true>>

JSON 形式データから XML 形式データへの変換で、小数点を含む数値項目の出力形式を指定します。

- true
小数点を含む数値項目は、次のどれかのメソッド仕様に従った数値を出力します。
 - `java.lang.Float.toString()`
 - `java.lang.Double.toString()`
 - `java.math.BigDecimal.toString()`
- false
小数点を含む数値項目は、元の形式（入力値の形式）のまま出力します。

(4) 記述例

記述例を次に示します。

```
json-xml-convert.arrays.parent-element-name=csc-array
json-xml-convert.arrays.child-element-name=csc-element
json-xml-convert.arrays.child-simple-element-name=csc-simple
json-xml-convert.root-element-name=csc-object
json-xml-convert.json-type.include=false
```

3.19 データ変換単体テストコマンドで利用するファイル

3.19.1 データ変換コマンドプロパティファイル

(1) 形式

```
csctransform.xml=XSLファイル（マッピング定義）のパス
csctransform.input.format<n>=入力フォーマット定義ファイルのパス
csctransform.input.data<n>=入力ファイルのパス
[csctransform.input.name<n>=入力スキーマの論理名]
csctransform.output.format=出力フォーマット定義ファイルのパス
csctransform.output.data=出力ファイルのパス
[csctransform.uoc.class=文字コード変換UOCのクラス名]
[csctransform.uoc.property=文字コード変換UOCの独自定義ファイルのパス]
[csctransform.code.table.root.path=コード変換テーブルの格納パスのルートパス]
[csctransform.validate={true | false}]
[csctransform.debugtrace={ON | OFF}]
[csctransform.debugtrace.filepath=デバッグ情報の出力先パス]
[csctransform.system.properties=データ変換用システムプロパティファイルのパス]
[csctransform.undefined.code={ERROR | REPLACE}]
```

(2) 機能

csctransform コマンドの引数をプロパティ形式でファイルに設定します。設定したファイルは、csctransform コマンドの-f オプションで指定できます。csctransform コマンドについては、[\[csctransform \(データ変換のテスト\)\]](#)を参照してください。

csctransform コマンドの引数との対応

このファイルで設定するプロパティと、csctransform コマンドの引数との対応を次に示します。

項番	プロパティのキー名	対応するコマンド引数	設定内容
1	csctransform.xml	-xsl	XSL ファイル（マッピング定義）のパス
2	csctransform.input.format<n>	-informat	入力フォーマット定義ファイルのパス
3	csctransform.input.data<n>	-infile	入力ファイルのパス
4	csctransform.input.name<n>	なし	入力スキーマの論理名
5	csctransform.output.format	-outformat	出力フォーマット定義ファイルのパス
6	csctransform.output.data	-outfile	出力ファイルのパス
7	csctransform.uoc.class	-uocclass	文字コード変換 UOC のクラス名
8	csctransform.uoc.property	-uocproperty	文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス

項番	プロパティのキー名	対応するコマンド引数	設定内容
9	csctransform.code.table.root.path	-codetablerootpath	コード変換テーブルの格納パスのルートパス
10	csctransform.validate	-validate	入力ファイルまたは出力ファイルのスキーマ検証の有無
11	csctransform.debugtrace	-debugtrace	デバッグ情報の出力有無
12	csctransform.debugtrace.filepath	-debugtracefilepath	デバッグ情報の出力先パス
13	csctransform.system.properties	-cscdtsysprop	データ変換用システムプロパティファイルのパス
14	csctransform.undefined.code	-undefinedcode	未定義の文字コードへの対処

ファイルの編集方法

ファイルは Java のプロパティファイル形式で設定します。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。次に示すテンプレートファイルを編集して、任意のファイル名で保存してください。

テンプレートファイルの場所

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%template%cscdt_csctransform.properties
```

(3) 設定できるプロパティ

csctransform.xsl=XSL ファイル（マッピング定義）のパス

XSL ファイル（マッピング定義）のパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

同じプロパティを複数指定した場合、どれが有効になるかは保証されません。

csctransform.input.format<n>=入力フォーマット定義ファイルのパス

入力フォーマット定義ファイル（拡張子「.xsd」または「.fdx」）のパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

<n>には 1 以上の整数（半角）を連番で指定します。重複する整数を<n>に指定した場合、どのプロパティが有効になるかは保証されません。

- 次のように設定すると、<n>が 1 から 5 まで連番で指定されていると解釈されます。

```
csctransform.input.format1 = c:%temp%format1.xsd
csctransform.input.format2 = c:%temp%format2.xsd
csctransform.input.format3 = c:%temp%format3.xsd
csctransform.input.format4 = c:%temp%format4.xsd
csctransform.input.format5 = c:%temp%format5.xsd
```

- 次のように設定すると、<n>が連番でない（5 が指定されていない）ため、1 から 4 までが指定されていると解釈されます。

```
csctransform.input.format1 = c:¥¥temp¥¥format1.xsd
csctransform.input.format2 = c:¥¥temp¥¥format2.xsd
csctransform.input.format3 = c:¥¥temp¥¥format3.xsd
csctransform.input.format4 = c:¥¥temp¥¥format4.xsd
csctransform.input.format6 = c:¥¥temp¥¥format6.xsd
```

- 次のように設定すると、<n>に 1 が指定されていないため、設定内容が不正と判断され、エラーになります。

```
csctransform.input.format2 = c:¥¥temp¥¥format2.xsd
csctransform.input.format3 = c:¥¥temp¥¥format3.xsd
csctransform.input.format4 = c:¥¥temp¥¥format4.xsd
```

csctransform.input.data<n>=入力ファイルのパス

入力ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

<n>には 1 以上の整数（半角）を連番で指定します。重複する整数を<n>に指定した場合、どのプロパティが有効になるかは保証されません。

csctransform.input.name<n>=入力スキーマの論理名

n 対 1 変換の場合に入力スキーマの論理名を指定します。省略すると、データ変換の実行でエラーになります。

<n>には 1 以上の整数（半角）を連番で指定します。重複する整数を<n>に指定した場合、どのプロパティが有効になるかは保証されません。

1 対 1 変換の場合はこのプロパティの指定は不要です。指定しても無視されます。

csctransform.output.format=出力フォーマット定義ファイルのパス

出力フォーマット定義ファイル（拡張子「.xsd」または「.fdx」）のパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

同じプロパティを複数指定した場合、どれが有効になるかは保証されません。

csctransform.output.data=出力ファイルのパス

出力ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。出力先のディレクトリが存在しない場合はエラーになります。

指定したパスに同名のファイルが存在する場合、ファイルを上書きします。同名のファイルが存在しない場合は、ファイルを新たに作成します。

同じプロパティを複数指定した場合、どれが有効になるかは保証されません。

csctransform.uoc.class=文字コード変換 UOC のクラス名

文字コード変換 UOC のクラス名を完全修飾名で指定します。

文字コード変換 UOC のクラス名の指定が重複した場合は、次に示す優先順位で指定値が適用されます。

優先順位	プロパティファイル名/コマンド名	該当するプロパティ名/引数名
1	データ変換用システムプロパティファイル	csc.dt.ownCodeConverter.className
2	データ変換コマンドプロパティファイル	csctransform.uoc.class
3	csctransform コマンド	-uocclass

データ変換用システムプロパティファイルの csc.dt.ownCodeConverter.className の設定については、「3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル」を参照してください。csctransform コマンドについては、「csctransform (データ変換のテスト)」を参照してください。

csctransform.uoc.property=文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス

文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

csctransform.uoc.class プロパティ (文字コード変換 UOC のクラス名) が指定されている場合だけ有効です。

同じプロパティを複数指定した場合、どれが有効になるかは保証されません。

csctransform.code.table.root.path=コード変換テーブルの格納パスのルートパス

コード変換ライブラリで使用するコード変換テーブルの格納パスのルートパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

csctransform.validate={true | false} ~<<false>>

スキーマ検証の実施有無を指定します。

- true

次に示すスキーマ検証を実施します。

- 入力ファイル (XML) に対して、入力フォーマット定義ファイル (XML Schema) を使ったスキーマ検証を実施します。
- 出力ファイル (XML) に対して、出力フォーマット定義ファイル (XML Schema) を使ったスキーマ検証を実施します。

- false

スキーマ検証を実施しません。

同じプロパティを複数指定した場合、どれが有効になるかは保証されません。

csctransform.debugtrace={ON | OFF} ~<<OFF>>

デバッグ情報を出力するかどうかを指定します。

- ON
出力します。
- OFF
出力しません。

`csctransform.debugtrace.filepath`=デバッグ情報の出力先パス ~<<csctransform コマンドの実行カレントディレクトリ>>

デバッグ情報の出力先パスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

`csctransform.debugtrace` プロパティに「ON」を指定した場合だけ有効です。

次の場合はデフォルト値が適用され、`csctransform` コマンドを実行したカレントディレクトリにデバッグ情報が出力されます。

- このプロパティを設定していない
- このプロパティに出力先を指定していない
- 指定したディレクトリが存在しない

`csctransform.system.properties`=データ変換用システムプロパティファイルのパス

データ変換用システムプロパティファイルに設定した Service Platform のシステムプロパティを有効にする場合、ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

データ変換用システムプロパティファイルの設定内容については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。

同じプロパティを複数指定した場合、どれが有効になるかは保証されません。

`csctransform.undefined.code`=`{ERROR | REPLACE}` ~<<ERROR>>

バイナリデータの文字コード変換処理で未定義の文字コードを検出した場合の動作を指定します。

- ERROR
検出時にエラーとなり処理を終了します。
- REPLACE
未定義部分の文字コードを空白の文字コードに置換して処理を継続します。

同じプロパティを複数指定した場合、どれが有効になるかは保証されません。

(4) 注意事項

- パスをワイルドカードで指定した場合の動作は保証しません。
- パスのセパレータに「¥」を使用する場合はエスケープしてください。

3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル

(1) 形式

```
[csc.dt.codetablepath=コード変換テーブルの格納パス]
[csc.dt.ownCodeConverter.className=文字コード変換UOCのクラス名]
[csc.dt.customFuncDir=カスタムファンクションで使用するjarファイルの格納パス]
[csc.dt.valueTable.変換テーブルID=値置換えファンクションで使用する変換テーブルのファイルパス]
[csc.dt.valueTableSize=値置換えファンクションで使用する変換テーブルの合計ファイルサイズ]
[csc.dt.encodeType.変換テーブルID={MS932 | UTF8 | UTF16_BIG | UTF16_LITTLE}]
[csc.dt.undefined.replace.データ変換種別=置換文字コード]
[csc.dt.sizeNode.includeSelfSize={true | false}]
```

(2) 機能

Service Platform のデータ変換のシステムプロパティを設定します。設定したファイルは、`cscbinaryparse` コマンド、`csctransform` コマンド、および `cscgenbinary` コマンドの実行時に指定します。

(3) ファイルの格納先

テンプレートファイルの格納場所を次に示します。任意のディレクトリにコピーし、ファイルを編集して任意のファイル名で保存してください。

テンプレートファイルの場所：

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%template%csctransform_sys.properties
```

(4) 設定できるプロパティ

`csc.dt.codetablepath`=コード変換テーブルの格納パス

文字コード変換 UOC でコード変換の API を使用する場合に、Code Converter のコード変換テーブルの格納パスを次の形式で指定します。

```
<コード変換テーブル格納パスディレクトリ>/table
```

設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「2.7.2 文字コード変換 UOC による拡張」を参照してください。

`csc.dt.ownCodeConverter.className`=文字コード変換 UOC のクラス名

開発環境で作成した文字コード変換 UOC を実行環境で使用する場合に、文字コード変換 UOC のクラス名を完全修飾名で登録します。設定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「付録 H.2 文字コード変換 UOC を使用するための設定」を参照してください。

なお、このプロパティは `cscbinaryparse` コマンド、`csctransform` コマンド、`cscgenbinary` コマンド、およびそれらのコマンドプロパティファイルでも指定できます。重複して指定されている場合は、データ変換用システムプロパティファイルの指定が優先されます。該当するプロパティ名および引数名を次の表に示します。

プロパティファイル名/コマンド名	該当するプロパティ名/引数名
データ変換用システムプロパティファイル	<code>csc.dt.ownCodeConverter.className</code>
<ul style="list-style-type: none"> バイナリパースコマンドプロパティファイル (<code>cscbinaryparse</code> コマンドのコマンドプロパティファイル) データ変換コマンドプロパティファイル (<code>csctransform</code> コマンドのコマンドプロパティファイル) バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル (<code>cscgenbinary</code> コマンドのコマンドプロパティファイル) 	<code>csctransform.uoc.class</code>
<ul style="list-style-type: none"> <code>cscbinaryparse</code> コマンド <code>csctransform</code> コマンド <code>cscgenbinary</code> コマンド 	<code>-uocclass</code>

`csc.dt.customFuncDir`=カスタムファンクションで使用する jar ファイルの格納パス

カスタムファンクションで使用する jar ファイルの格納先を変更する場合、パスを指定します。

注意事項

jar ファイルの格納先としてサービスプラットフォームのインストールディレクトリ配下を指定すると、アンインストール時に jar ファイルが削除されるおそれがあります。そのため、インストールディレクトリ配下以外の場所を設定してください。

`csc.dt.valueTable`.変換テーブル ID=値置換えファンクションで使用する変換テーブルのファイルパス

開発環境で作成したデータ変換定義に値置換えファンクションが含まれる場合、値置換えファンクションで利用する変換テーブルのファイルパスを指定します。

変換テーブル ID

変換テーブルの変換テーブル ID を指定します。

変換テーブルのファイルパス

変換テーブルのファイルパスを絶対パスで指定します。

`csc.dt.valueTableSize`=値置換えファンクションで使用する変換テーブルの合計ファイルサイズ ~<数字>((1-2097151))<<10>>

開発環境で作成したデータ変換定義に値置換えファンクションが含まれる場合、値置換えファンクションで利用する変換テーブルの合計ファイルサイズ (単位: キロバイト) の上限値を正の整数で指定します。

指定を省略した場合は 10 が仮定されます。上限値を超えるサイズの変換テーブルを読み込むと、KDEC40730-E を J2EE サーバのログファイルに出力し、HCSC サーバの起動を中断します。

`csc.dt.encodeType.変換テーブル ID={MS932 | UTF8 | UTF16_BIG | UTF16_LITTLE}`

開発環境で作成したデータ変換定義に値置換えファンクションが含まれる場合、値置換えファンクションで利用する文字コードを指定します。

`csc.dt.undefined.replace.データ変換種別=置換文字コード`

バイナリデータと Unicode 文字列とを変換する場合、未定義の文字コードはデフォルトでは空白文字へ置換されますが、このプロパティに設定した任意の文字へ置換することもできます。

なお、任意の文字へ置換するには、次のどちらかに REPLACE を指定する必要があります。

- csctransform コマンドの引数-undefinedcode
- データ変換コマンドプロパティファイルの csctransform.undefined.code プロパティ

プロパティは変換する文字コードと置換種別によって、次のように異なります。置換する文字は 16 進数で指定してください。

- バイナリデータを Unicode 文字列に変換する場合
該当するシステムプロパティに置換文字コードを Unicode big endian の 16 進数で指定します。
指定できるシステムプロパティを次の表に示します。システムプロパティは、入力バイナリデータの置換種別ごとに指定できます。

表 3-2 システムプロパティ一覧 (バイナリデータを Unicode 文字列に変換する場合)

項番	キー名称	置換種別	変換先の Unicode 文字列の文字コード
1	<code>csc.dt.undefined.replace.bin2xml</code>	半角	Unicode big endian
2	<code>csc.dt.undefined.replace.bin2xml.full</code>	全角	

- Unicode 文字列をバイナリデータに変換する場合
該当するシステムプロパティに置換文字コードを 16 進数で指定します。
指定できるシステムプロパティを次の表に示します。システムプロパティは、変換先のバイナリデータの文字コードと置換種別ごとに指定できます。

表 3-3 システムプロパティ一覧 (Unicode 文字列をバイナリデータに変換する場合)

項番	キー名称	置換種別	変換先のバイナリデータの文字コード
1	<code>csc.dt.undefined.replace.xml2utf16be</code>	半角	UTF16 big endian
2	<code>csc.dt.undefined.replace.xml2utf16be.full</code>	全角	
3	<code>csc.dt.undefined.replace.xml2utf16le</code>	半角	UTF16 little endian
4	<code>csc.dt.undefined.replace.xml2utf16le.full</code>	全角	

項番	キー名称	置換種別	変換先のバイナリデータの文字コード
5	csc.dt.undefined.replace.xml2utf8	半角	UTF8
6	csc.dt.undefined.replace.xml2utf8.full	全角	
7	csc.dt.undefined.replace.xml2ms932	半角	MS932
8	csc.dt.undefined.replace.xml2ms932.full	全角	
9	csc.dt.undefined.replace.xml2keisC	半角	KEIS + EBCDIC
10	csc.dt.undefined.replace.xml2keisC.full	全角	
11	csc.dt.undefined.replace.xml2keisK	半角	KEIS + EBCDIK
12	csc.dt.undefined.replace.xml2keisK.full	全角	
13	csc.dt.undefined.replace.xml2keis.full	全角	KEIS
14	csc.dt.undefined.replace.xml2ibmC.latin	半角	IBM + EBCDIC(LATIN)
15	csc.dt.undefined.replace.xml2ibmC.latin.full	全角	
16	csc.dt.undefined.replace.xml2ibmC.kana	半角	IBM + EBCDIC(KANA)
17	csc.dt.undefined.replace.xml2ibmC.kana.full	全角	
18	csc.dt.undefined.replace.xml2ibm.full	全角	IBM
19	csc.dt.undefined.replace.xml2jefC	半角	JEF + EBCDIC
20	csc.dt.undefined.replace.xml2jefC.full	全角	
21	csc.dt.undefined.replace.xml2jefK	半角	JEF + EBCDIK
22	csc.dt.undefined.replace.xml2jefK.full	全角	
23	csc.dt.undefined.replace.xml2jef.full	全角	JEF
24	csc.dt.undefined.replace.xml2jis	半角	JIS
25	csc.dt.undefined.replace.xml2jis.full	全角	
26	csc.dt.undefined.replace.xml2euc	半角	EUC
27	csc.dt.undefined.replace.xml2euc.full	全角	
28	csc.dt.undefined.replace.xml2euchj	半角	EUC_HJ
29	csc.dt.undefined.replace.xml2euchj.full	全角	

`csc.dt.sizeNode.includeSelfSize={true | false} ~<<false>>`

サイズノードの拡張機能を使用するかどうかを指定します。

- true
サイズノードの拡張機能を使用します。
- false

サイズノードの拡張機能を使用しません。

3.19.3 バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル

(1) 形式

```
csctransform.format=バイナリフォーマット定義ファイルのパス
csctransform.output.binary.data=出力バイナリファイルのパス
csctransform.output.xml.data=出力XMLファイルのパス
[csctransform.input.xml.data=入力XMLファイルのパス]
[csctransform.generate.property=バイナリ電文生成定義ファイルのパス]
[csctransform.uoc.class=文字コード変換UOCのクラス名]
[csctransform.uoc.property=文字コード変換UOCの独自定義ファイルのパス]
[csctransform.code.table.root.path=コード変換テーブルの格納パスのルートパス]
[csctransform.debugtrace={ON | OFF}]
[csctransform.debugtrace.filepath=デバッグ情報の出力先パス]
[csctransform.system.properties=データ変換用システムプロパティファイルのパス]
[csctransform.undefined.code={ERROR | REPLACE}]
```

(2) 機能

cscgenbinary コマンドの引数をプロパティ形式でファイルに設定します。設定したファイルは、cscgenbinary コマンドの実行時に -f オプションで指定できます。cscgenbinary コマンドについては、「[cscgenbinary \(バイナリフォーマット定義ファイルからバイナリ電文の生成\)](#)」を参照してください。

cscgenbinary コマンドの引数との対応

このファイルで設定するプロパティと、cscgenbinary コマンドの引数との対応を次に示します。

項番	プロパティのキー名	対応するコマンド引数	設定内容
1	csctransform.format	-format	バイナリフォーマット定義ファイルのパス
2	csctransform.output.binary.data	-outbinfile	出力バイナリファイルのパス
3	csctransform.output.xml.data	-outxmlfile	出力 XML ファイルのパス
4	csctransform.input.xml.data	-inxmlfile	入力 XML ファイルのパス
5	csctransform.generate.property	-genproperty	バイナリ電文生成定義ファイルのパス
6	csctransform.uoc.class	-uocclass	文字コード変換 UOC のクラス名
7	csctransform.uoc.property	-uocproperty	文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス
8	csctransform.code.table.root.path	-codetablerootpath	コード変換テーブルの格納パスのルートパス
9	csctransform.debugtrace	-debugtrace	デバッグ情報の出力有無
10	csctransform.debugtrace.filepath	-debugtracefilepath	デバッグ情報の出力先パス

項番	プロパティのキー名	対応するコマンド引数	設定内容
11	csctransform.system.properties	-cscdtsysprop	データ変換用システムプロパティファイルのパス
12	csctransform.undefined.code	-undefinedcode	未定義の文字コードへの対処

ファイルの編集方法

ファイルは Java のプロパティファイル形式で設定します。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。次に示すテンプレートファイルを編集して、任意のファイル名で保存してください。

テンプレートファイルの場所

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%template%cscdt_cscgenbinary.properties
```

(3) 設定できるプロパティ

csctransform.format=バイナリフォーマット定義ファイルのパス

エディタでの検証が完了しているバイナリフォーマット定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

指定できるファイルの拡張子は「.fdx」だけです。拡張子の大文字・小文字は区別しません。

csctransform.output.binary.data=出力バイナリファイルのパス

出力バイナリファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。出力先のディレクトリが存在しない場合はエラーになります。

csctransform.output.binary.data（出力バイナリファイルのパス）と csctransform.output.xml.data（出力 XML ファイルのパス）は、どちらか一方を指定してください。

指定したパスに同名のファイルが存在する場合、ファイルを上書きします。同名のファイルが存在しない場合は、ファイルを新たに作成します。

csctransform.output.xml.data=出力 XML ファイルのパス

出力 XML ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。出力先のディレクトリが存在しない場合はエラーになります。

csctransform.output.binary.data（出力バイナリファイルのパス）と csctransform.output.xml.data（出力 XML ファイルのパス）は、どちらか一方を指定してください。

指定したパスに同名のファイルが存在する場合、ファイルを上書きします。同名のファイルが存在しない場合は、ファイルを新たに作成します。

csctransform.input.xml.data=入力 XML ファイルのパス

XML ファイルからバイナリ電文を生成する場合に、入力 XML ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

csctransform.output.xml.data と同時に指定すると、このプロパティの指定は無効になります。

指定する入力 XML ファイルは、バイナリフォーマット定義ファイル (csctransform.format で指定) を基に cscfdx2xsd コマンドで生成した XML スキーマファイルに沿っている必要があります。XML スキーマファイルに沿っていない場合は動作を保証しません。

csctransform.generate.property=バイナリ電文生成定義ファイルのパス

バイナリ電文生成定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

csctransform.input.xml.data と同時に指定すると、このプロパティの指定は無効になります。

バイナリ電文生成定義ファイルは、単純内容要素の要素値をデフォルト値から変更したい場合に作成します。バイナリ電文生成定義ファイルについては、「[3.19.4 バイナリ電文生成定義ファイル](#)」を参照してください。

csctransform.uoc.class=文字コード変換 UOC のクラス名

文字コード変換 UOC のクラス名を完全修飾名で指定します。

文字コード変換 UOC のクラス名は、次に示すファイルまたはコマンドでも指定できます。指定が重複した場合に適用される優先順位を次に示します。

優先順位	プロパティファイル名/コマンド名	該当するプロパティ名/引数名
1	データ変換用システムプロパティファイル	csc.dt.ownCodeConverter.className
2	バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル	csctransform.uoc.class
3	cscgenbinary コマンド	-uocclass

データ変換用システムプロパティファイルの csc.dt.ownCodeConverter.className の設定については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。cscgenbinary コマンドについては、「[cscgenbinary \(バイナリフォーマット定義ファイルからバイナリ電文の生成\)](#)」を参照してください。

なお、文字コード変換 UOC を使用する場合は、文字コード変換 UOC の jar ファイルをシステム環境変数 CSC_DATA_TRANSFORM_CLASSPATH に設定してください。外部の jar ファイルに定義されているクラスをカスタムファンクションや文字コード変換 UOC から呼び出す場合も、該当する jar ファイルを環境変数に設定する必要があります。

csctransform.uoc.property=文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス

文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

csctransform.uoc.class プロパティが設定されていない場合は、このプロパティの指定は無効となります。csctransform.uoc.class プロパティを指定してこの引数を省略した場合は、独自定義ファイルを読み込まない状態で文字コード変換 UOC のクラスがデータ変換時に実行されます。

csctransform.code.table.root.path=コード変換テーブルの格納パスのルートパス

コード変換ライブラリで使用するコード変換テーブルの格納パスのルートパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

csctransform.debugtrace={ON | OFF} ~<<OFF>>

デバッグ情報を出力するか指定します。

- ON
出力します。
- OFF
出力しません。

csctransform.debugtrace.filepath=デバッグ情報の出力先パス ~<<cscgenbinary コマンドの実行カレントディレクトリ>>

デバッグ情報の出力先パスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

csctransform.debugtrace プロパティに「ON」を指定した場合だけ有効です。

次の場合はデフォルト値が適用され、cscgenbinary コマンドを実行したカレントディレクトリにデバッグ情報が出力されます。

- このプロパティを設定していない
- このプロパティにデバッグ情報の出力先を指定していない
- 指定したディレクトリが存在しない

csctransform.system.properties=データ変換用システムプロパティファイルのパス

データ変換用システムプロパティファイルに設定した Service Platform のシステムプロパティを有効にする場合、ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

データ変換用システムプロパティファイルの設定内容については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。

csctransform.undefined.code={ERROR | REPLACE} ~<<ERROR>>

バイナリデータの文字コード変換時に未定義の文字コードを検出した場合の動作を指定します。

- ERROR
検出時にエラーとなり処理を終了します。

- REPLACE

未定義部分の文字コードを空白の文字コードに置換して処理を継続します。

(4) 注意事項

- パスをワイルドカードで指定した場合の動作は保証しません。
- パスのセパレータに「¥」を使用する場合はエスケープしてください。

3.19.4 バイナリ電文生成定義ファイル

(1) 形式

次の3とおりの方法で記述できます。

指定形式 1

```
<ルートからの絶対パスで記述した要素名>=<設定値>
```

指定形式 2

```
<要素名>=<設定値>
```

指定形式 3

```
[CSCDT_STRING=データ種別「文字列」の設定値]  
[CSCDT_INT=データ種別「整数」の設定値]  
[CSCDT_DOUBLE=データ種別「実数」の設定値]  
[CSCDT_IMPLICIT=データ種別「固定小数部数値」の設定値]  
[CSCDT_ZONE=データ種別「ゾーン形式数値」の設定値]  
[CSCDT_PACK=データ種別「パック形式数値」の設定値]  
[CSCDT_SIGNED=データ種別「符号付2進整数」の設定値]  
[CSCDT_UNSIGNED=データ種別「符号無2進整数」の設定値]  
[CSCDT_BINARY_HEX=データ種別「バイト列 (hexBinary)」の設定値]  
[CSCDT_BINARY_BASE64=データ種別「バイト列 (base64Binary)」の設定値]  
[CSCDT_BIT=データ種別「ビット列」の設定値]  
[CSCDT_DATETIME=データ種別「日付時刻」の設定値]
```

同じ要素を異なる指定形式で記述した場合は、次の優先順に従って適用されます。

1. 指定形式 1
2. 指定形式 2
3. 指定形式 3

(2) 機能

バイナリ電文の生成時に、単純内容要素の要素値をデフォルト値から変更したい場合に設定します。文字コードは UTF-8 とする必要があります。

このファイルは、バイナリ電文を次に示すコマンドまたはプロパティファイルで生成する場合に指定します。バイナリ電文をデフォルト値で生成する場合は設定不要です。設定しなかった場合はデフォルトの要素値が適用されます。

- **cscgenbinary** コマンド

バイナリ電文生成定義ファイルのファイル名を `-genproperty` オプションで指定します。

`cscgenbinary` コマンドについては、「[cscgenbinary \(バイナリフォーマット定義ファイルからバイナリ電文の生成\)](#)」を参照してください。

- **バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル**

バイナリ電文生成定義ファイルのファイル名を `csctransform.generate.property` プロパティで指定します。

バイナリ電文生成コマンドプロパティファイルについては、「[3.19.3 バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル](#)」を参照してください。

(3) ファイルの格納先

テンプレートファイルの格納場所を次に示します。

テンプレートファイルの場所：

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%template%cscdt_generatedef.properties
```

テンプレートファイルは指定形式 3 のプロパティ形式で記述されています。テンプレートファイルは任意のディレクトリにコピーし、ファイルを編集して任意のファイル名で保存してください。

(4) 設定できる値

単純内容要素の要素値のデフォルト値と、XML の型を次に示します。ファイルに設定する値はそれぞれの XML の型に従って設定してください。

表 3-4 バイナリ電文生成定義ファイルの設定値

データ種別	XML の型	デフォルト値	指定形式 3 のプロパティ名
文字列	xsd:string	空文字列 (長さ 0 バイト)	CSCDT_STRING
整数	xsd:decimal	0	CSCDT_INT
実数	xsd:decimal	0	CSCDT_DOUBLE
固定小数部数値	xsd:decimal	0	CSCDT_IMPLICIT
ゾーン形式数値	xsd:decimal	0	CSCDT_ZONE
パック形式数値	xsd:decimal	0	CSCDT_PACK
符号付 2 進整数	xsd:integer	0	CSCDT_SIGNED

データ種別	XML の型	デフォルト値	指定形式 3 のプロパティ名
符号無 2 進整数	xsd:integer	0	CSCDT_UNSIGNED
バイト列 (hexBinary)	xsd:hexBinary	00 (0x00)	CSCDT_BINARY_HEX
バイト列 (base64Binary)	xsd:base64Binary	AA== (0x00)	CSCDT_BINARY_BASE64
ビット列	xsd:hexBinary	00 (0x00)	CSCDT_BIT
日付時刻	xsd:date	YYMMDD 形式 2000-01-01 (バイナリ変換後は 000101) CCYYMMDD 形式 2000-01-01 (バイナリ変換後は 20000101)	CSCDT_DATETIME
	xsd:time	hhmmss 形式 00:00:00 (バイナリ変換後は 000000)	
	xsd:dateTime	YYMMDDhhmmss 形式 2000-01-01T00:00:00 (バイナリ変換後は 000101000000) CCYYMMDDhhmmss 形式 2000-01-01T00:00:00 (バイナリ変換後は 20000101000000)	

指定形式の種類と指定例を次に示します。「=」の後ろに<設定値>を指定しなかった要素は、空要素となります。

指定形式 1 の場合

<ルートからの絶対パスで記述した要素名>=<設定値>

要素名と、変更後の設定値を指定します。要素名は、ルートからの絶対パスで指定します。

指定例を次に示します。

例 : /root/complex/element=abc

指定形式 2 の場合

<要素名>=<設定値>

要素名と、変更後の設定値を指定します。要素名にパス部分は指定しません。

指定例を次に示します。

例 : element=abc

指定形式 3 の場合

<プロパティ名>=<設定値>

データ種別に応じて、表「バイナリ電文生成定義ファイルの設定値」に示すプロパティ名と、変更後の設定値を指定します。

指定例を次に示します。

```
例 : CSCDT_STRING=abc
```

3.19.5 バイナリパースコマンドプロパティファイル

(1) 形式

```
csctransform.format=バイナリフォーマット定義ファイルのパス
csctransform.input.data=入力データファイルのパス
csctransform.output.data=出力データファイルのパス
[csctransform.inverse={true | false}]
[csctransform.uoc.class=文字コード変換UOCのクラス名]
[csctransform.uoc.property=文字コード変換UOCの独自定義ファイルのパス]
[csctransform.code.table.root.path=コード変換テーブルの格納パスのルートパス]
[csctransform.debugtrace={ON | OFF}]
[csctransform.debugtrace.filepath=デバッグ情報の出力先パス]
[csctransform.system.properties=データ変換用システムプロパティファイルのパス]
[csctransform.undefined.code={ERROR | REPLACE}]
```

(2) 機能

csbinaryparse コマンドの引数をプロパティ形式でファイルに設定します。設定したファイルは、csbinaryparse コマンドの実行時に -f オプションで指定できます。csbinaryparse コマンドについては、「[csbinaryparse \(DOM とバイナリデータの相互変換\)](#)」を参照してください。

csbinaryparse コマンドの引数との対応

このファイルで設定するプロパティと、csbinaryparse コマンドの引数との対応を次に示します。

項番	プロパティのキー名	対応するコマンド引数	設定内容
1	csctransform.format	-format	バイナリフォーマット定義ファイルのパス
2	csctransform.input.data	-infile	入力データファイルのパス
3	csctransform.output.data	-outfile	出力データファイルのパス
4	csctransform.inverse	-inverse	バイナリと DOM の変換動作
5	csctransform.uoc.class	-uocclass	文字コード変換 UOC のクラス名
6	csctransform.uoc.property	-uocproperty	文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス
7	csctransform.code.table.root.path	-codetablerootpath	コード変換テーブルの格納パスのルートパス

項番	プロパティのキー名	対応するコマンド引数	設定内容
8	csctransform.debugtrace	-debugtrace	デバッグ情報の出力有無
9	csctransform.debugtrace.filepath	-debugtracefilepath	デバッグ情報の出力先パス
10	csctransform.system.properties	-cscdtsysprop	データ変換用システムプロパティファイルのパス
11	csctransform.undefined.code	-undefinedcode	未定義の文字コードへの対処

ファイルの編集方法

ファイルは Java のプロパティファイル形式で設定します。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。次に示すテンプレートファイルを編集して、任意のファイル名で保存してください。

テンプレートファイルの場所

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSCTE%template%cscdt_cscbinarypar
se.properties
```

(3) 設定できるプロパティ

csctransform.format=バイナリフォーマット定義ファイルのパス

入力フォーマット定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

指定できるファイルの拡張子は「.fdx」だけです。

csctransform.input.data=入力データファイルのパス

入力データファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

入力データファイルとして指定できるデータの種類を次に示します。

- バイナリデータ
- 次のどちらかの DOM データ (XML)
 - バイナリデータから DOM 変換で生成した DOM データ
 - XML スキーマファイル (csctransform.format で指定したバイナリフォーマット定義ファイルを cscfdx2xsd コマンドに指定して生成) に沿った DOM データ

csctransform.output.data=出力データファイルのパス

出力データファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。出力先のディレクトリが存在しない場合はエラーになります。

指定したパスに同名のファイルが存在する場合、ファイルを上書きします。同名のファイルが存在しない場合は、ファイルを新たに作成します。

csctransform.inverse={true | false} ~<<false>>

バイナリと DOM の変換動作を切り替えます。

- true
DOM データをバイナリデータに変換します。
- false
バイナリデータを DOM データに変換します。

`csctransform.uoc.class`=文字コード変換 UOC のクラス名

文字コード変換 UOC のクラス名を完全修飾名で指定します。

文字コード変換 UOC のクラス名の指定が重複した場合は、次に示す優先順位で指定値が適用されます。

優先順位	プロパティファイル名/コマンド名	該当するプロパティ名/引数名
1	データ変換用システムプロパティファイル	<code>csc.dt.ownCodeConverter.className</code>
2	バイナリパースコマンドプロパティファイル	<code>csctransform.uoc.class</code>
3	<code>cscbinaryparse</code> コマンド	<code>-uocclass</code>

データ変換用システムプロパティファイルの `csc.dt.ownCodeConverter.className` の設定については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。`cscbinaryparse` コマンドについては、「[cscbinaryparse \(DOM とバイナリデータの相互変換\)](#)」を参照してください。

`csctransform.uoc.property`=文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパス

文字コード変換 UOC の独自定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

`csctransform.uoc.class` プロパティが設定されていない場合は、このプロパティの指定は無効となります。

`csctransform.code.table.root.path`=コード変換テーブルの格納パスのルートパス

コード変換ライブラリで使用するコード変換テーブルの格納パスのルートパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

`csctransform.debugtrace`={ON | OFF} ~<<OFF>>

デバッグ情報を出力するか指定します。

- ON
出力します。
- OFF
出力しません。

`csctransform.debugtrace.filepath`=デバッグ情報の出力先パス

デバッグ情報の出力先パスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

`csctransform.debugtrace` プロパティを指定した場合だけ有効になります。

次の場合はデフォルト値が適用され、`ccscbinaryparse` コマンドを実行したカレントディレクトリにデバッグ情報が出力されます。

- このプロパティを設定していない
- このプロパティに出力先を指定していない
- 指定したディレクトリが存在しない

`csctransform.system.properties`=データ変換用システムプロパティファイルのパス

データ変換用システムプロパティファイルに設定した Service Platform のシステムプロパティを有効にする場合、ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。

データ変換用システムプロパティファイルの設定内容については、「[3.19.2 データ変換用システムプロパティファイル](#)」を参照してください。

`csctransform.undefined.code`={ERROR | REPLACE} ~<<ERROR>>

バイナリデータの文字コード変換時に未定義の文字コードを検出した場合の動作を指定します。

- ERROR
検出時にエラーとなり処理を終了します。
- REPLACE
未定義部分の文字コードを空白の文字コードに置換して処理を継続します。

(4) 注意事項

- パスをワイルドカードで指定した場合の動作は保証しません。
- パスのセパレータに「¥」を使用する場合はエスケープしてください。

3.20 ログ出力アクティビティで利用するファイル

3.20.1 ログ出力アクティビティ定義ファイル

(1) 形式

```
log-activity.<ログ出力識別子>.filepath=ログ出力アクティビティのログファイルの出力先パス  
[log-activity.<ログ出力識別子>.filesize=ログ出力アクティビティのログファイルの1面当たりの  
ファイルサイズ]  
[log-activity.<ログ出力識別子>.filenum=ログ出力アクティビティのログファイルのバックアップ  
ファイルの面数]  
[log-activity.<ログ出力識別子>.level={TRACE | DEBUG | INFO | WARN | ERROR | FATAL}]  
[log-activity.<ログ出力識別子>.message-definition-filepath=メッセージ定義ファイルのファイル  
パス]
```

(2) 機能

ログ出力アクティビティで任意のメッセージを出力する場合に、出力するファイルの情報をログ出力アクティビティ定義ファイルで設定します。

[ログ出力アクティビティ] ダイアログと各定義ファイルの関係、およびログファイルの出力結果については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「3.9 ログ出力アクティビティでのログ出力」を参照してください。

また、[ログ出力アクティビティ] ダイアログの指定方法については、「1.4.21 ログ出力アクティビティダイアログ」を参照してください。

(a) 作成手順

ログ出力アクティビティ定義ファイルの作成から、ログ出力アクティビティに割り当てるまでの流れを次に示します。

1. 次のテンプレートファイルを基に、ログ出力アクティビティ定義ファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%bp%templates%log_activity_definition.properties
```

各プロパティのキー部分にはログ出力識別子を指定します。ログ出力識別子の指定については、「(b) ログ出力識別子の定義」を参照してください。

各プロパティの指定方法については、「(3) 設定できるプロパティ」を参照してください。

2. 編集後のファイルをファイル名「log_activity_definition.properties」で任意のディレクトリに格納してください。
3. ログ出力アクティビティ定義ファイルのパスを HCSC サーバランタイム定義ファイルの bp-log-activity-definition-filepath プロパティに指定します。

bp-log-activity-definition-filepath プロパティについては、「6.5.6 HCSC サーバランタイム定義ファイル」を参照してください。

4. ログ出力アクティビティの定義時に、[ログ出力アクティビティ] ダイアログの [ログ出力識別子] にログ出力識別子を指定します。

ログ出力アクティビティ定義ファイルに記述したログ出力識別子を指定してください。

複数のログ出力アクティビティから、1つのログ出力識別子を指定することもできます。これによって、複数のログ出力アクティビティから同じログファイルに出力させることができます。

なお、ログ出力アクティビティ定義ファイルの定義内容は、HCSC サーバの次回起動時から有効になります。

(b) ログ出力識別子の定義

ログ出力識別子は、ログ出力アクティビティのログの出力先を一意に識別する文字列です。

ログ出力識別子には、次の条件を満たす値を指定してください。条件を満たさない値を指定した場合の動作は保証しません。

- ログ出力識別子は最大 20 文字で指定してください。使用できる文字は、半角英数字およびアンダーバー (_) です。
- 複数のログ出力識別子で、同一のログ出力先を指定しないでください。
- 複数の HCSC サーバで、同一のログ出力先を指定しないでください。

定義されたログ出力識別子は、ログ出力アクティビティの定義時に [ログ出力アクティビティ] ダイアログの画面項目 [ログ出力識別子] に指定することで有効になります。

(3) 設定できるプロパティ

log-activity.<ログ出力識別子>.filepath=ログ出力アクティビティのログファイルの出力先パス

ログファイルの出力先のファイルパスをファイル名も含めて設定します。パスを指定する場合の注意事項を次に示します。

- 相対パス、親ディレクトリ表現 ([..¥], [../]), およびカレントディレクトリ表現 ([.¥], [./]) を含むパスは指定しないでください。
- シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
- Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

出力先として指定されたディレクトリが存在しない場合は、自動的に作成されます。

指定された出力先ファイルを開けなかった場合は、HCSC サーバの起動に失敗します。

なお、ログファイルのファイル名は、ローテーション方式に応じて次のようになります。

- ラップアラウンドモードの場合：「ファイル名<面数>.log」
- シフトモードの場合：「ファイル名.log」

log-activity.<ログ出力識別子>.filesize=ログ出力アクティビティのログファイルの1面当たりのファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>

ログファイルの1面当たりのファイルサイズを設定します。不正な値を指定した場合、HCSC サーバの起動に失敗します。

log-activity.<ログ出力識別子>.filenum=ログ出力アクティビティのログファイルのバックアップファイルの面数 ~<数字>((1-16))<<4>>

ログファイルのバックアップファイルの面数を設定します。不正な値を指定した場合、HCSC サーバの起動に失敗します。

log-activity.<ログ出力識別子>.level={TRACE | DEBUG | INFO | WARN | ERROR | FATAL} ~<<ERROR>>

ログの出力レベルを次の中から設定します。不正な値を指定した場合、HCSC サーバの起動に失敗します。

- TRACE
- DEBUG
- INFO
- WARN
- ERROR
- FATAL

ログ出力アクティビティ定義ファイルとメッセージ定義ファイルの間で異なる出力レベルが設定された場合、次のように出力されます。

ログ出力アクティビティ定義ファイルの出力レベルの指定	メッセージ定義ファイルの出力レベルの指定					
	TRACE	DEBUG	INFO	WARN	ERROR	FATAL
TRACE	○	○	○	○	○	○
DEBUG	×	○	○	○	○	○
INFO	×	×	○	○	○	○
WARN	×	×	×	○	○	○
ERROR	×	×	×	×	○	○
FATAL	×	×	×	×	×	○

(凡例)

- ：出力されます。
- ×：出力されません。

log-activity.<ログ出力識別子>.message-definition-filepath=メッセージ定義ファイルのファイルパス

出力するメッセージがメッセージ定義ファイルに定義されている場合に、メッセージ定義ファイルのファイルパスを指定します。

このプロパティは、ログ出力アクティビティの定義時に [ログ出力アクティビティ] ダイアログで [リソース Key] を選択する場合に必要です。[任意の文字列] を選択してメッセージをダイアログ上に直接指定する場合は、このプロパティは指定不要です。

パスを指定する場合の注意事項を次に示します。

- 相対パス、親ディレクトリ表現 ([..¥], [../]), およびカレントディレクトリ表現 ([.¥], [./]) を含むパスは指定しないでください。
- シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
- Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

存在しないファイルパスを指定した場合や、入力形式に沿っていない場合は、HCSC サーバの起動に失敗します。

3.20.2 メッセージ定義ファイル

(1) 形式

```
リソースKey-ログの出力レベル=出力するメッセージ  
:
```

(2) 機能

(a) ログ出力アクティビティでの任意のメッセージの出力方法

ログ出力アクティビティで任意のメッセージを出力する場合、次のどちらかの方法で指定します。

- [ログ出力アクティビティ] ダイアログの [任意の文字列] に、メッセージを直接指定する
- メッセージ定義ファイルにメッセージを記述しておき、該当するプロパティのキーを [ログ出力アクティビティ] ダイアログの [リソース Key] に指定する

この項では、メッセージ定義ファイルの作成について説明します。

[ログ出力アクティビティ] ダイアログと各定義ファイルの関係、およびログファイルの出力結果については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「3.9 ログ出力アクティビティでのログ出力」を参照してください。

また、[ログ出力アクティビティ] ダイアログの指定方法については、「[1.4.21 ログ出力アクティビティダイアログ](#)」を参照してください。

(b) 作成手順

メッセージ定義ファイルの作成から、ログ出力アクティビティに割り当てるまでの流れを次に示します。

1. 次のテンプレートファイルを基に、メッセージ定義ファイルをプロパティ形式で記述します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%bp%templates%message_definition.properties
```

メッセージ定義ファイルには次の項目を記述します。各項目の指定規則は「[\(3\) 設定できるプロパティ](#)」を参照してください。

- キー名には、リソース Key と、ログの出力レベルを「- (半角ハイフン)」で連結して記述します。「- (半角ハイフン)」はリソース Key に使用できません。
- 指定値には、出力するメッセージを記述します。

1 つのメッセージ定義ファイルには複数行記述できます。

ファイルは、ログ出力識別子ごと (ログの出力先ごと) に分けて作成してください。

2. メッセージ定義ファイルを格納します。

格納場所とファイル名は任意です。

3. メッセージ定義ファイルのパスをログ出力アクティビティ定義ファイルの log-activity.<ログ出力識別子>.message-definition-filepath プロパティに設定します。

これによってログ出力識別子に割り当てられます。パスの設定方法については、「[3.20.1 ログ出力アクティビティ定義ファイル](#)」を参照してください。

4. ログ出力アクティビティの定義時に、[ログ出力アクティビティ] ダイアログの [リソース Key] を指定します。

[リソース Key] には、メッセージ定義ファイルに記述したプロパティのキー「リソース Key-ログの出力レベル」を指定してください。

複数のログ出力アクティビティから、1 つのメッセージ定義ファイルを指定することもできます。

なお、メッセージ定義ファイルの定義内容は、HCSC サーバの次回起動時から有効になります。

(3) 設定できるプロパティ

リソース Key

リソース Key を指定します。

ログの出力レベル ~< TRACE | DEBUG | INFO | WARN | ERROR | FATAL >

出力するメッセージのログの出力レベルを次の中から指定します。

- TRACE

- DEBUG
- INFO
- WARN
- ERROR
- FATAL

ログ出力アクティビティ定義ファイルとメッセージ定義ファイルの間で異なる出力レベルが設定された場合、次のように出力されます。

ログ出力アクティビティ定義ファイルの出力レベルの指定	メッセージ定義ファイルの出力レベルの指定					
	TRACE	DEBUG	INFO	WARN	ERROR	FATAL
TRACE	○	○	○	○	○	○
DEBUG	×	○	○	○	○	○
INFO	×	×	○	○	○	○
WARN	×	×	×	○	○	○
ERROR	×	×	×	×	○	○
FATAL	×	×	×	×	×	○

(凡例)

- ：出力されます。
- ×：出力されません。

出力するメッセージ ～< java.text.MessageFormat で解釈できる値>

出力するメッセージを java.text.MessageFormat で解釈できる値で指定します。なお、FormatElement に FormatType と FormatStyle は指定できません。これらの条件を満たさない値を指定した場合の動作は保証しません。

出力するメッセージには、改行を含む文字列は設定できません。

メッセージには埋め込み文字として、ビジネスプロセス定義画面に指定した変数や、変数内の情報を埋め込むことができます。それぞれ指定できる内容を次に示します。

- 変数
変数の値を埋め込むことができます。ビジネスプロセスで定義できるすべての変数を使用できます。「non-XML」「any」の変数の場合、16進数に変換した値を埋め込みます。
- 変数内の情報
変数の部分または XPath で取得した変数内の情報を埋め込むことができます。

埋め込み文字を使用する場合、メッセージに添字を{}で囲んで指定します。

添字に割り当てる変数や式は、[ログ出力アクティビティ] ダイアログの [埋め込み要素値] で指定します。[ログ出力アクティビティ] ダイアログについては、「[1.4.21 ログ出力アクティビティダイアログ](#)」を参照してください。

(4) 記述例

メッセージ定義ファイルの記述例を次に示します。

```
msg_id_001-ERROR= The specified element is not defined. (element name = {0})  
msg_id_002-WARN = The fault message has initialized.
```

3.21 ビジネスプロセスの実行で利用するファイル

3.21.1 ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイル

(1) 形式

```
[hostname=IPアドレスまたはホスト名]
[port=ポート番号]
[protocol={http | https}]
[cluster-name=クラスタ名]

[process-name=ビジネスプロセス名]
[bp-operation-name=オペレーション名]
[clientID=クライアント関連ID]
[telegram-filepath=要求電文を記載したファイルのパス]

[exceptionlog-filepath=例外ログの出力先パス]
[exceptionlog-filesize=例外ログの1ファイル当たりの上限サイズ]
[exceptionlog-filenum=例外ログの最大面数]
```

(2) 機能

ビジネスプロセス実行コマンド（`csmexecutebp` コマンド）の動作や、例外ログの情報などを設定します。このファイルは設定を省略することもできます。

設定したファイルは、`csmexecutebp` コマンドの実行時に `-f` オプションで指定できます。`csmexecutebp` コマンドについては、「[csmexecutebp \(ビジネスプロセスの実行\)](#)」を参照してください。

ファイルの編集方法

ファイルは Java のプロパティファイル形式で設定します。使用できる文字コードは UTF-8 だけです。次に示すテンプレートファイルをコピーし、任意のディレクトリに任意のファイル名で保存して編集してください。

テンプレートファイルの場所

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%templates%csmexecutebp_definition.properties
```

なお、保存先のディレクトリおよびファイルは、管理者権限のあるユーザがアクセスできることが必要です。

csmexecutebp コマンドとの関係

次の表に示す項目は、ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイルと `csmexecutebp` コマンドの両方で指定できます。両方に同じ項目が指定された場合は、コマンドの指定が優先されます。

ビジネスプロセス実行コマンド定義 ファイルのプロパティ	csmaxecutebp コマンドの引数	設定内容
process-name	-processname	ビジネスプロセス名
bp-operation-name	-operation	オペレーション名
telegram-filepath	-telegram	要求電文を記載したファイルのパス

(3) 設定できるプロパティ

(a) 接続先関連

hostname=IP アドレスまたはホスト名 ～< Web サーバの IP アドレスまたはホスト名>
<<localhost>>

Web サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。

port=ポート番号 ～<数字>((1-65535))<<80>>

Web サーバのポート番号を指定します。範囲外の値を指定した場合は、csmaxecutebp コマンドが異常終了します。

protocol={http | https} ～<<http>>

Web サーバの受付プロトコルを次のどちらかで指定します。これ以外の値を指定した場合は、csmaxecutebp コマンドが異常終了します。

- http
HTTP で受け付けられます。
- https
HTTPS で受け付けられます。

cluster-name=クラスタ名 ～<半角英数字およびアンダーバー (_)>((1-8 文字))<<Cluster>>

標準の同期受付 (Web サービス) が配備されている HCSC サーバのクラスタ名を指定します。不正な値を指定した場合は、csmaxecutebp コマンドが異常終了します。

(b) リクエスト関連

process-name=ビジネスプロセス名 ～< XMLSchema の NCName 定義文字>((1-64 バイト))

ビジネスプロセス名を指定します。不正な値を指定した場合は、csmaxecutebp コマンドが異常終了します。

サービスアダプタ名を指定した場合の動作は保証しません。

bp-operation-name=オペレーション名 ～< XMLSchema の NCName 定義文字>((1-255 バイト))

ビジネスプロセスのオペレーション名を指定します。不正な値を指定した場合は、csmexecutebp コマンドが異常終了します。

clientID=クライアント関連 ID ~<半角英数字, アンダーバー (_), ハイフン (-), ピリオド (.) >
(1-255 文字)

クライアント関連 ID を指定します。指定を省略した場合は、クライアント関連 ID は送信されません。不正な値を指定した場合は、csmexecutebp コマンドが異常終了します。

telegram-filepath=要求電文を記載したファイルのパス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白>

ビジネスプロセスへ送信する要求電文が記載されたファイルを絶対パスで指定します。管理者権限のあるユーザがアクセスできるファイルを指定してください。

ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用してください。

存在しないパスを指定した場合は、csmexecutebp コマンドが異常終了します。

(c) ログ関連

exceptionlog-filepath=例外ログの出力先パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥CSC¥log¥msg¥csmexecutebp>>

例外ログの出力先パスを絶対パスで指定します。

ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用してください。

存在しないディレクトリを指定した場合は、csmexecutebp コマンドが異常終了します。

exceptionlog-filesize=例外ログの 1 ファイル当たりの上限サイズ ~<数字>
(4096-16777216)<<2097152>>

例外ログの 1 ファイル当たりの上限サイズをバイト単位で指定します。範囲外の値を指定した場合は、csmexecutebp コマンドが異常終了します。

exceptionlog-filename=例外ログの最大面数 ~<数字>((1-16))<<4>>

例外ログの最大面数を指定します。範囲外の値を指定した場合は、csmexecutebp コマンドが異常終了します。

4

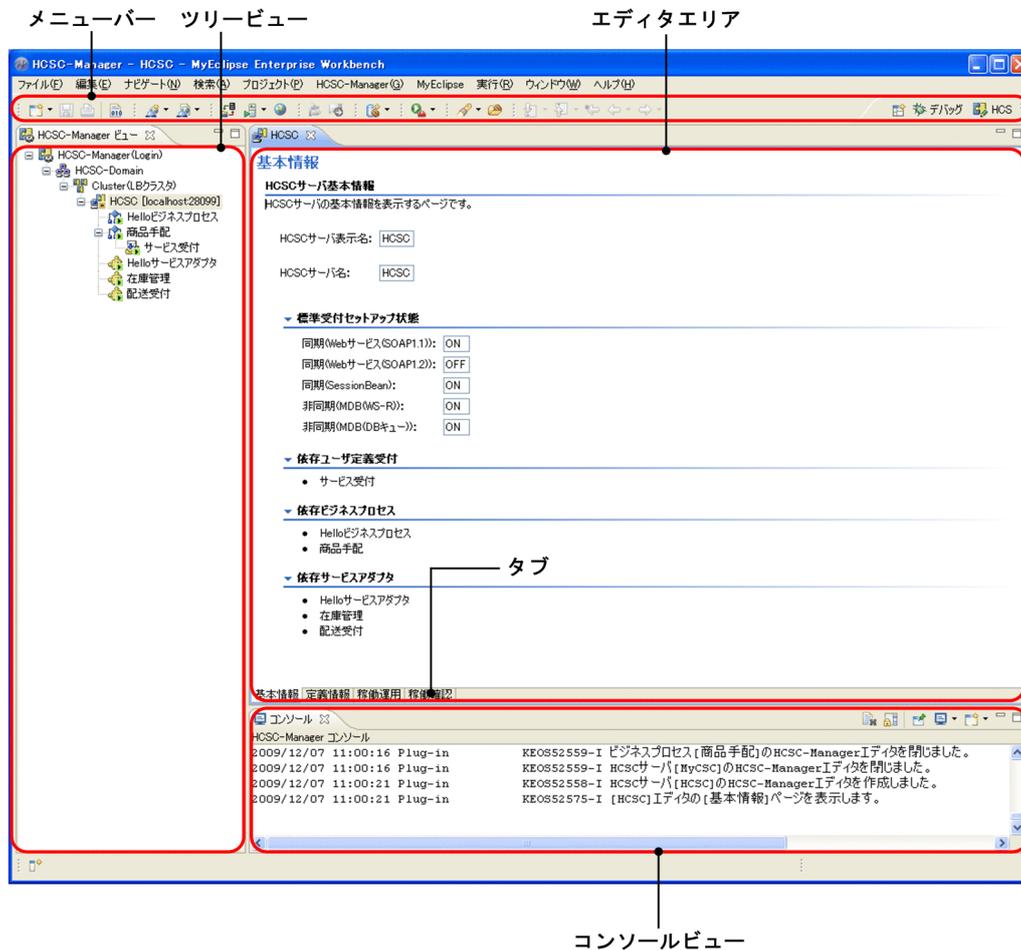
画面（運用環境）

この章では、サービスプラットフォームの運用環境で使用する画面について説明します。

4.1 画面構成 (運用環境)

運用環境での画面構成について説明します。

図 4-1 運用環境での画面構成



メニューバー

Eclipse のメニューバーです。運用環境の固有メニューは [HCSC-Manager] です。

ツリービュー

HCSC-Manager が管理しているシステム構成、および管理対象（サービスアダプタやビジネスプロセス）の状態がアイコンで表示されます。管理対象を示すアイコンに、その状態を表すアイコンを組み合わせることで表示します。ツリービューで表示されるアイコンを次の表に示します。

表 4-1 ツリービューで表示されるアイコン

分類	アイコン/状態	説明
アイコン		HCSC-Manager を示します。
		HCSC-Domain を示します。
		ロードバランスクラスタまたは HA クラスタを示します。

分類	アイコン/状態	説明
アイコン		HCSC サーバを示します。
		ビジネスプロセスを示します。
		サービスアダプタを示します。
		ユーザ定義受付を示します。
状態		次のどちらかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> HCSC サーバの起動状態 サービスアダプタの開始状態
		停止状態を示します。
		閉塞状態を示します。
		配備前状態を示します。
		取得失敗を示します。

ツリービューで管理対象を選択して右クリックすると、コンテキストメニューが表示され、管理対象に対する操作ができるようになります。

エディタエリア

ツリービューに表示される管理対象の情報を表示したり、操作したりするためのエディタです。エディタの種類を次に示します。

表 4-2 エディタの種類

エディタ名	ページ名	機能
HCSC サーバエディタ	基本情報ページ	HCSC サーバの基本情報を表示します。
	定義情報ページ	HCSC サーバの定義情報を表示します。
	稼働運用ページ	HCSC サーバの稼働運用操作を実行します。
	稼働確認ページ	HCSC サーバのリソースの稼働情報を確認します。
ビジネスプロセスエディタ	基本情報ページ	ビジネスプロセスの基本情報を表示します。
	稼働運用ページ	ビジネスプロセスの稼働運用操作を実行します。
	履歴管理ページ	プロセスインスタンスの実行履歴を管理します。
サービスアダプタエディタ	基本情報ページ	サービスアダプタの基本情報を表示します。
	稼働運用ページ	サービスアダプタの稼働運用を実行します。
ユーザ定義受付エディタ	基本情報ページ	ユーザ定義受付の基本情報を表示します。
	定義情報ページ	ユーザ定義受付の定義情報を表示します。
	稼働運用ページ	ユーザ定義受付の稼働運用操作を実行します。

タブ

エディタごとに、表 4-2 に示すページに切り替わります。

コンソールビュー

ログを出力する領域です。

コンソールビューには、次の形式で出力されます。

yyyy/mm/dd△hh:mm:ss△アプリケーション名△メッセージ ID△メッセージ本文

アプリケーション名には、次のように表示されます。

- 画面操作のログの場合：「Plug-in」
- Manager からのログの場合：セットアップ時に指定した Manager 名

出力されるメッセージが 64KB を超える場合は、古いメッセージから 4KB ほど行単位で削除されます。

ショートカット

ツリービューやダイアログなどで、[Alt] キーを押したまま「(G)」などのアンダーライン付きの文字と同じキーを押すと、管理対象を選択できます。

この章の画面や操作の説明で使用している記号を次に示します。

記号	意味
< >	< >内の名称がユーザの環境によって異なることを表します。
「 」	入力値、可変値、またはメッセージなどのユーザが入力する内容を表します。

4.2 基本情報ページ

基本情報ページには、HCSC-Manager が管理している対象の現在の基本情報が表示されます。これらの情報は、設定内容を確認するために利用できます。

各管理対象の基本情報ページは、ツリービューから管理対象を選択し、エディタエリアで [基本情報] タブを選択すると表示されます。

基本情報ページについて、管理対象ごとに説明します。

4.2.1 HCSC サーバ基本情報

HCSC サーバの基本情報ページには、HCSC サーバの構築時の情報が表示されます。この情報で、HCSC サーバをセットアップしたあとの設定内容を確認できます。

HCSC サーバの基本情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-2 HCSC サーバの基本情報ページ



HCSC サーバ表示名

HCSC サーバの表示名が表示されます。HCSC サーバの表示名が指定されていない場合は、HCSC サーバの名称が表示されます。

HCSC サーバ名

HCSC サーバの名称が表示されます。

標準受付セットアップ状態

次の項目について、セットアップしているかどうかが表示されます。セットアップしている場合は「ON」、セットアップしていない場合は「OFF」、基本情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

- 同期 (Web サービス (SOAP1.1))
- 同期 (Web サービス (SOAP1.2))
- 同期 (SessionBean)
- 非同期 (MDB (WS-R))
- 非同期 (MDB (DB キュー))

依存ユーザ定義受付

HCSC サーバに依存しているユーザ定義受付の名称が表示されます。

依存ビジネスプロセス

HCSC サーバに依存しているビジネスプロセスのサービス名が表示されます。

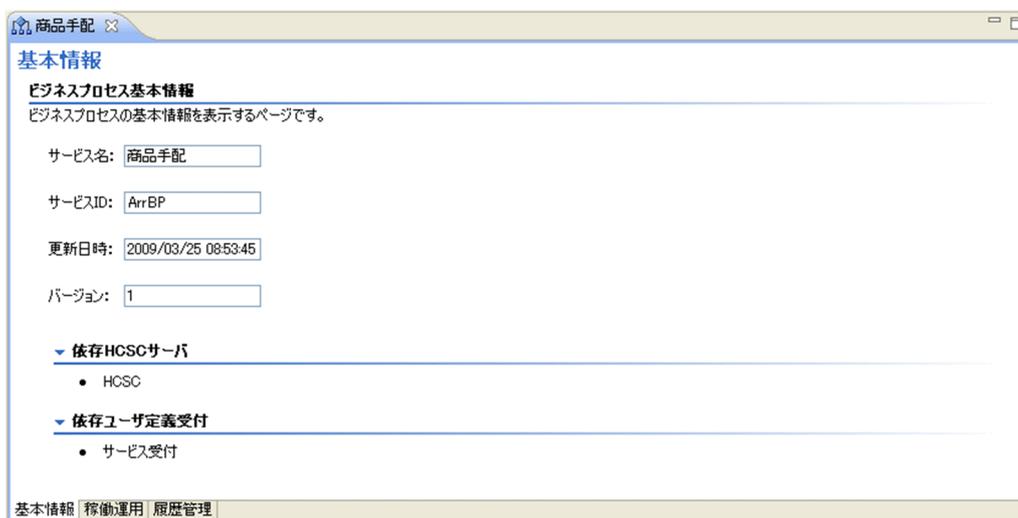
依存サービスアダプタ

HCSC サーバに依存しているサービスアダプタのサービス名が表示されます。

4.2.2 ビジネスプロセス基本情報

ビジネスプロセスの基本情報ページには、ビジネスプロセスの基本情報が表示され、ビジネスプロセスの設定内容を確認できます。ビジネスプロセスの基本情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-3 ビジネスプロセスの基本情報ページ



サービス名

ビジネスプロセス定義名またはサービス名が表示されます。

サービス ID

ビジネスプロセスのサービス ID が表示されます。

更新日時

配備済みビジネスプロセスが更新された日時が表示されます。基本情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」、ビジネスプロセスの配備前は「-」が表示されます。

バージョン

ビジネスプロセスのバージョンが表示されます。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

依存ユーザ定義受付

依存しているユーザ定義受付の名称が表示されます。

4.2.3 サービスアダプタ基本情報

サービスアダプタの基本情報ページには、サービスアダプタの基本情報が表示され、サービスアダプタの設定内容を確認できます。サービスアダプタの基本情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-4 サービスアダプタの基本情報ページ (サービス種別が Web サービスの場合)

在庫管理

基本情報

サービスアダプタ基本情報

サービスアダプタの基本情報を表示するページです。

サービス名:

サービスID:

サービス種別:

送信元キュー名:

更新日時:

▼ サービス情報

URL:

接続タイムアウト[秒]:

読み込みタイムアウト[秒]:

書き込みタイムアウト[秒]:

HTTPセッションの維持:

ベーシック認証の使用可否チェック:

ベーシック認証のユーザ:

ベーシック認証のパスワード:

プロキシサーバを使用しないホスト名:

プロキシサーバのホスト名:

プロキシサーバのポート番号:

プロキシサーバのユーザ:

プロキシサーバのパスワード:

性能解析トレース出力オプション:

受信SOAPEnvelopeの最大バイト数:

送信SOAPEnvelopeの最大バイト数:

▼ 依存HCSCサーバ

- HCSC

基本情報 | 稼働運用

サービス名

サービスアダプタのサービス名が表示されます。

サービス ID

サービスアダプタのサービス ID が表示されます。

サービス種別

サービスアダプタのサービス種別が表示されます。次の種別のうち、どれかが表示されます。

- Web サービス (SOAP1.1)
- Web サービス (SOAP1.2)
- SessionBean
- MDB (WS-R)
- MDB (DB キュー)
- カスタム

送信元キュー名

非同期のサービスアダプタの場合に、サービスアダプタが利用するキュー名が表示されます。サービスアダプタの配備前は「-」が表示されます。

更新日時

配備済みサービスアダプタが更新された日時が表示されます。基本情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」、サービスアダプタの配備前は「-」が表示されます。

サービス情報

サービス種別に応じた情報が表示されます。

サービス種別と対応するサービス情報を次の表に示します。

表 4-3 サービス種別に対応するサービス情報の表示項目

サービス種別	サービス情報	
	項目	意味
Web サービス (SOAP1.1)	URL	Web サービスの URL が表示されます。
	接続タイムアウト [秒]	サービス部品呼び出し時のソケットの接続タイムアウト値が表示されます。
	読み込みタイムアウト [秒]	サービス部品呼び出し時のソケットの読み込みタイムアウト値が表示されます。
	書き込みタイムアウト [秒]	サービス部品呼び出し時のソケットの書き込みタイムアウト値が表示されます。
	HTTP セッションの維持	HTTP セッションを維持するかどうかを指定します。 <ul style="list-style-type: none">• true セッションを維持します。• false セッションを維持しません。
	ベーシック認証の使用可否チェック	サービスアダプタがベーシック認証を使用するかどうかが表示されます。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none">• true 使用します。• false 使用しません。
	ベーシック認証のユーザ	ベーシック認証のユーザ ID が設定されていた場合、「The value has already been set.」が表示されます。
	ベーシック認証のパスワード	ベーシック認証のパスワードが設定されていた場合、「The value has already been set.」が表示されます。
	プロキシサーバを使用しないホスト名	プロキシサーバを使用しない場合のホスト名または IP アドレス群が表示されます。
プロキシサーバのホスト名	プロキシサーバのホスト名または IP アドレスが表示されません。	

サービス種別	サービス情報	
	項目	意味
Web サービス (SOAP1.1)	プロキシサーバのポート番号	プロキシサーバのポート番号が表示されます。
	プロキシサーバのユーザ	プロキシサーバの認証ユーザ ID が設定されていた場合、「The value has already been set.」が表示されます。
	プロキシサーバのパスワード	プロキシサーバの認証ユーザ ID に対応するパスワードが設定されていた場合、「The value has already been set.」が表示されます。
	性能解析トレース出力オプション	性能解析トレースを出力するかどうかが表示されます。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • ALL トレース取得ポイントで性能解析トレースを出力します。 • NONHANDLER トレース取得ポイントで性能解析トレースを出力しません。 <p>トレース取得ポイントの詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」を参照してください。</p>
	受信 SOAPEnvelope の最大バイト数	受信できる SOAP エンベロープの最大バイト数が表示されます。
	送信 SOAPEnvelope の最大バイト数	送信できる SOAP エンベロープの最大バイト数が表示されます。
Web サービス (SOAP1.2)	URL	Web サービスの URL が表示されます。
	接続タイムアウト [秒]	サービス部品呼び出し時のソケットの接続タイムアウト値が表示されます。
	読み込みタイムアウト [秒]	サービス部品呼び出し時のソケットの読み込みタイムアウト値が表示されます。
	HTTP セッションの維持	HTTP セッションを維持するかどうかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • true セッションを維持します。 • false セッションを維持しません。
	ベーシック認証の使用可否チェック	サービスアダプタがベーシック認証を使用するかどうかが表示されます。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • true 使用します。 • false 使用しません。
	ベーシック認証のユーザ	ベーシック認証のユーザ ID が設定されていた場合、「The value has already been set.」が表示されます。

サービス種別	サービス情報	
	項目	意味
Web サービス (SOAP1.2)	ベーシック認証のパスワード	ベーシック認証のパスワードが設定されていた場合、「The value has already been set.」が表示されます。
SessionBean	URL	ネーミングサービスの URL が表示されます。
	ルックアップ名	JNDI 名前空間に登録されている、呼び出すサービス部品の名称が表示されます。
	EJB 呼出しタイムアウト	サービス部品呼び出し時のビジネスメソッド呼び出しのタイムアウト値が表示されます。
	性能解析トレース出力オプション	性能解析トレースを出力するかどうかが表示されます。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • ALL トレース取得ポイントで性能解析トレースを出力します。 • NONHANDLER トレース取得ポイントで性能解析トレースを出力しません。 <p>トレース取得ポイントの詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」を参照してください。</p>
MDB (WS-R)	送信先キュー名	サービスアダプタがメッセージを送信するキュー名が表示されます。
	呼出し設定	リモートホストのサービス部品に接続するか、ローカルホストのサービス部品に接続するかが表示されます。リモートホストのサービス部品に接続する場合は、「リモート呼出し」が表示されます。ローカルホストのサービス部品に接続する場合は、「ローカル呼出し」が表示されます。
	URL	サービスアダプタが使用する転送キューのメッセージ転送先の URL が表示されます。[呼出し設定] が「ローカル呼出し」の場合は、何も表示されません。
	最大メッセージ数	サービスアダプタが使用する転送キューが保持できるメッセージの最大数が表示されます。[呼出し設定] が「ローカル呼出し」の場合は、何も表示されません。
	順序保証	サービスアダプタが使用する転送キューがメッセージを正しい順序で転送することを保証するかどうかが表示されます。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • ON 保証します。 • OFF 保証しません。 <p>[呼出し設定] が「ローカル呼出し」の場合は、何も表示されません。</p>

サービス種別	サービス情報	
	項目	意味
MDB (WS-R)	転送キュー作成先 RD エリア	サービスアダプタが使用する転送キューの作成先の RD エリア名が表示されます。[呼出し設定] が「ローカル呼出し」の場合は、何も表示されません。
MDB (DB キュー)	送信先キュー名	サービス部品に関連づけられるキュー名が表示されます。

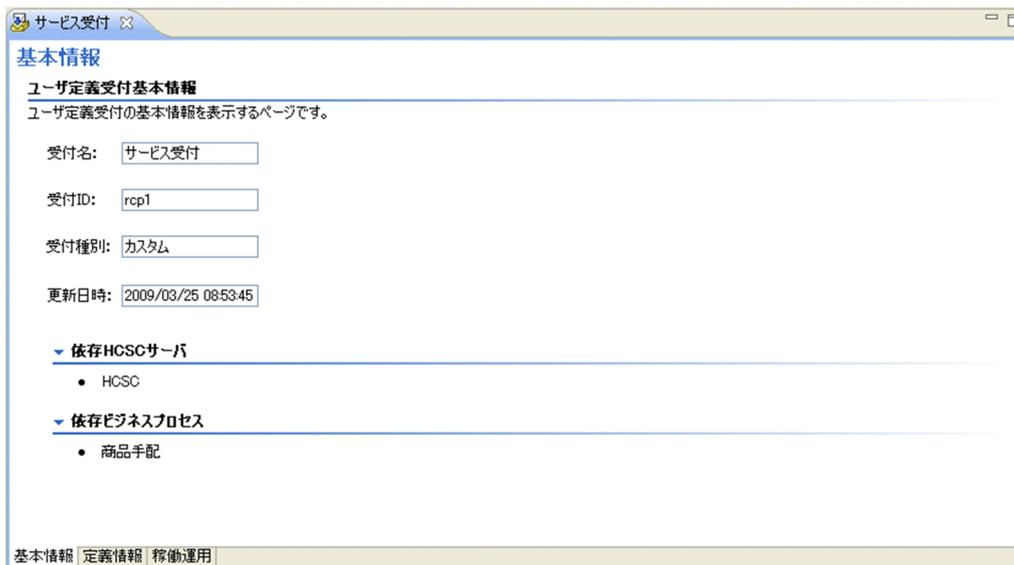
依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

4.2.4 ユーザ定義受付基本情報

ユーザ定義受付基本情報ページには、ユーザ定義受付の基本情報が表示され、ユーザ定義受付の設定内容を確認できます。ユーザ定義受付基本情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-5 ユーザ定義受付基本情報ページ



受付名

ユーザ定義受付の受付名が表示されます。

受付 ID

ユーザ定義受付の受付 ID が表示されます。

受付種別

ユーザ定義受付の受付種別として、次のどちらかが表示されます。

- Web サービス
- カスタム

更新日時

ユーザ定義受付が更新された日時が表示されます。基本情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」、ユーザ定義受付の配備前は「-」が表示されます。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

依存ビジネスプロセス

依存しているビジネスプロセスのサービス名が表示されます。ユーザ定義受付（呼出先選択）の場合は「-」が表示されます。

4.3 定義情報ページ

定義情報ページには、管理対象に設定され、実行環境で反映済みの定義情報が表示されます。これらの情報は、HCSC サーバの構築後も変更できます。

各管理対象の定義情報ページは、ツリービューから管理対象を選択し、エディタエリアで [定義情報] タブを選択すると表示されます。また、変更後の定義情報を画面に表示させるには、ほかのページに切り替えてから再度、定義情報ページを開いてください。

定義情報ページについて、管理対象ごとに説明します。

4.3.1 HCSC サーバ定義情報

HCSC サーバの定義情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-6 HCSC サーバの定義情報ページ



HCSC サーバ表示名

HCSC サーバの表示名が表示されます。

同期受付 (Web サービス (SOAP1.1))

次の情報が表示されます。定義情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。この受付がセットアップされていない場合は「-」が表示されます。

最大同時実行数

同期受付 (Web サービス (SOAP1.1)) の最大同時実行数が表示されます。

占有スレッド数

同期受付 (Web サービス (SOAP1.1)) の占有スレッド数が表示されます。

実行待ちキューサイズ

同期受付 (Web サービス (SOAP1.1)) の実行待ちキューサイズが表示されます。

同期受付 (Web サービス (SOAP1.2))

次の情報が表示されます。定義情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。この受付がセットアップされていない場合は「-」が表示されます。

最大同時実行数

同期受付 (Web サービス (SOAP1.2)) の最大同時実行数が表示されます。

占有スレッド数

同期受付 (Web サービス (SOAP1.2)) の占有スレッド数が表示されます。

実行待ちキューサイズ

同期受付 (Web サービス (SOAP1.2)) の実行待ちキューサイズが表示されます。

同期受付 (SessionBean)

次の情報が表示されます。定義情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。この受付がセットアップされていない場合は「-」が表示されます。

最小インスタンス数

同期受付 (SessionBean) の最小インスタンス数が表示されます。

最大インスタンス数

同期受付 (SessionBean) の最大インスタンス数が表示されます。

CTM 連携

CTM 連携をしているかどうかが表示されます。

CTM 用スレッド数

CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数が表示されます。

非同期受付 (MDB (WS-R))

次の情報が表示されます。定義情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。この受付がセットアップされていない場合は「-」が表示されます。

最大インスタンス数

非同期受付 (MDB (WS-R)) の最大インスタンス数が表示されます。

4.3.2 ユーザ定義受付定義情報

ユーザ定義受付定義情報ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-7 ユーザ定義受付定義情報ページ

情報の取得に失敗した場合は、[受付名] 以外の各項目に「取得失敗」が表示されます。ユーザ定義受付の配備前は、[受付名] 以外の各項目に「-」が表示されます。

受付名

ユーザ定義受付の名称が表示されます。

最大同時実行数

ユーザ定義受付に定義されている最大同時実行数が表示されます。

占有スレッド数

ユーザ定義受付に定義されている占有スレッド数が表示されます。

実行待ちキューサイズ

ユーザ定義受付に定義されている実行待ちキューサイズが表示されます。

4.4 稼働運用ページ

稼働運用ページは、ツリービューから管理対象を選択し、エディタエリアで「稼働運用」タブを選択すると表示されます。稼働運用ページでは、HCSC サーバおよび標準受付の運用操作を実行します。HCSC サーバ、サービスアダプタ、ビジネスプロセスまたはユーザ定義受付で表示される内容が異なります。

稼働運用ページについて、管理対象ごとに説明します。

4.4.1 HCSC サーバ稼働運用

HCSC サーバの稼働運用ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-8 HCSC サーバの稼働運用ページ



HCSC サーバ表示名

この画面で操作する HCSC サーバの表示名が表示されます。

稼働状態

HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

HCSC サーバを起動または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

標準受付稼働状態

標準受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

標準受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存ユーザ定義受付

HCSC サーバに依存しているユーザ定義受付の稼働状態が一覧に表示されます。

受付名

依存しているユーザ定義受付の名称が表示されます。

依存サービス名

ユーザ定義受付が依存しているサービス名が表示されます。ユーザ定義受付（呼出先選択）の場合は「-」が表示されます。

稼働状態

依存しているユーザ定義受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

HCSC サーバ

【起動】 ボタン

HCSC サーバを起動します。

【停止】 ボタン

HCSC サーバを停止します。

標準受付

[開始] ボタン

標準受付を開始します。

[通常停止] ボタン

標準受付を停止します。通常の運用で標準受付を停止する場合に利用します。

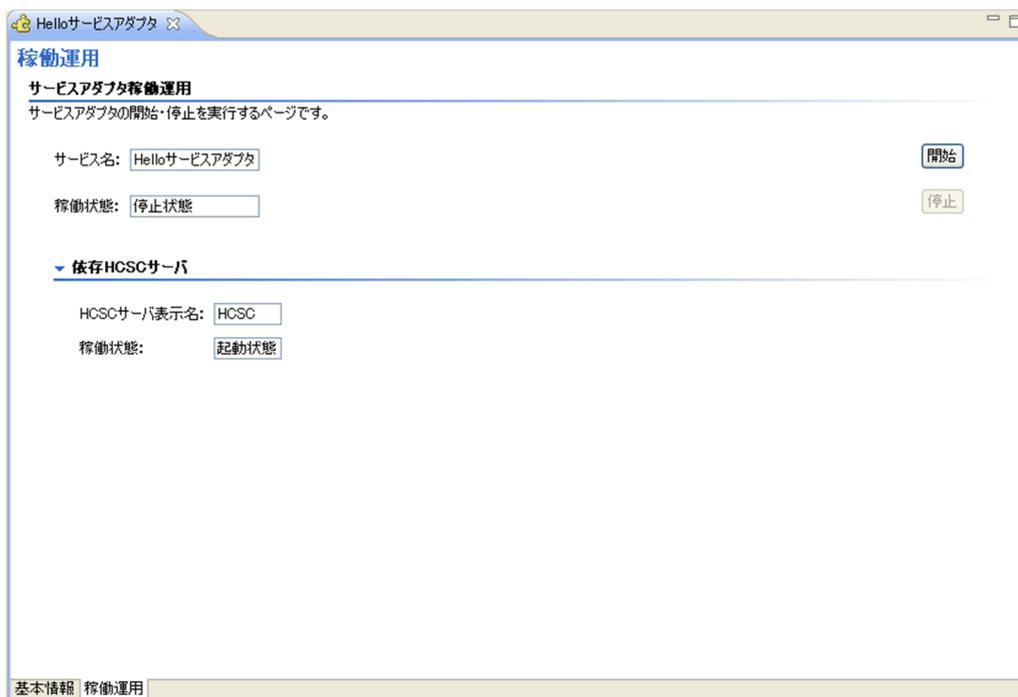
[計画停止] ボタン

標準受付を停止します。HCSC サーバをアンセットアップする場合に利用します。

4.4.2 サービスアダプタ稼働運用

サービスアダプタの稼働運用ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-9 サービスアダプタの稼働運用ページ



サービス名

この画面で操作するサービスアダプタのサービス名が表示されます。

稼働状態

サービスアダプタの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中

- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

サービスアダプタを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの情報が表示されます。

HCSC サーバ表示名

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

稼働状態

サービスアダプタが配備されている HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

サービスアダプタを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

[開始] ボタン

サービスアダプタを開始します。

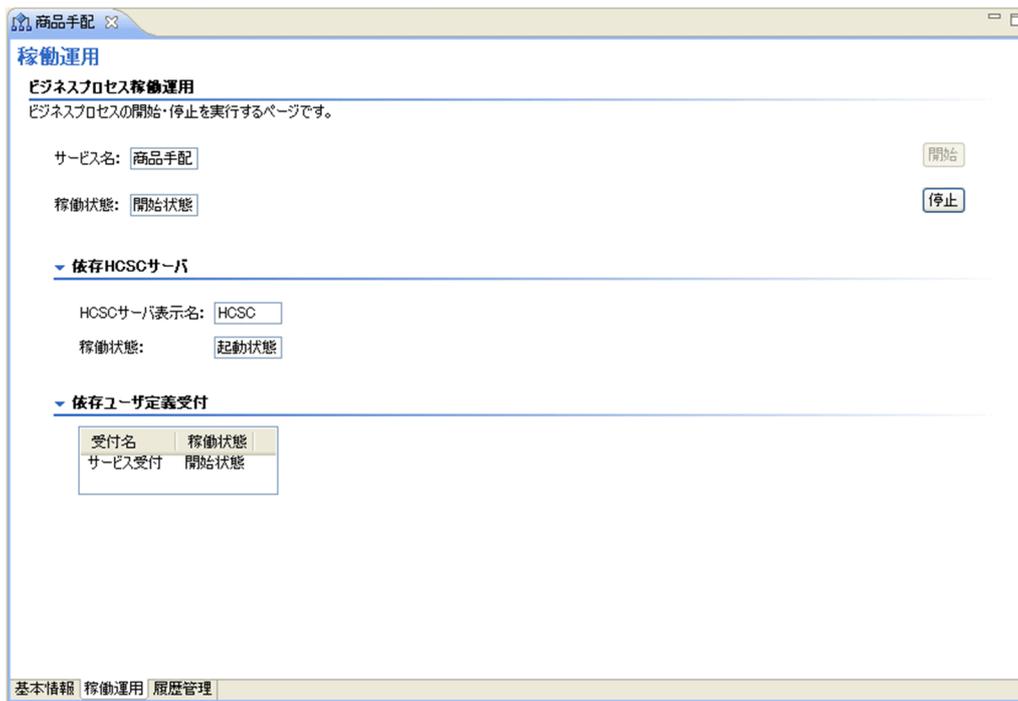
[停止] ボタン

サービスアダプタを停止します。

4.4.3 ビジネスプロセス稼働運用

ビジネスプロセスの稼働運用ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-10 ビジネスプロセスの稼働運用ページ



サービス名

この画面で操作するビジネスプロセスのサービス名が表示されます。

稼働状態

ビジネスプロセスの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

ビジネスプロセスを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの情報が表示されます。

HCSC サーバ表示名

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

稼働状態

ビジネスプロセスが配備されている HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

ビジネスプロセスを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存ユーザ定義受付

依存しているユーザ定義受付の情報が表示されます。

受付名

ユーザ定義受付の受付名が表示されます。定義されているユーザ定義受付の分だけ表示されます。

稼働状態

ユーザ定義受付の稼働状態が表示されます。定義されているユーザ定義受付の分だけ表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 取得失敗
- 配備前状態

ビジネスプロセスを開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

[開始] ボタン

ビジネスプロセスを開始します。

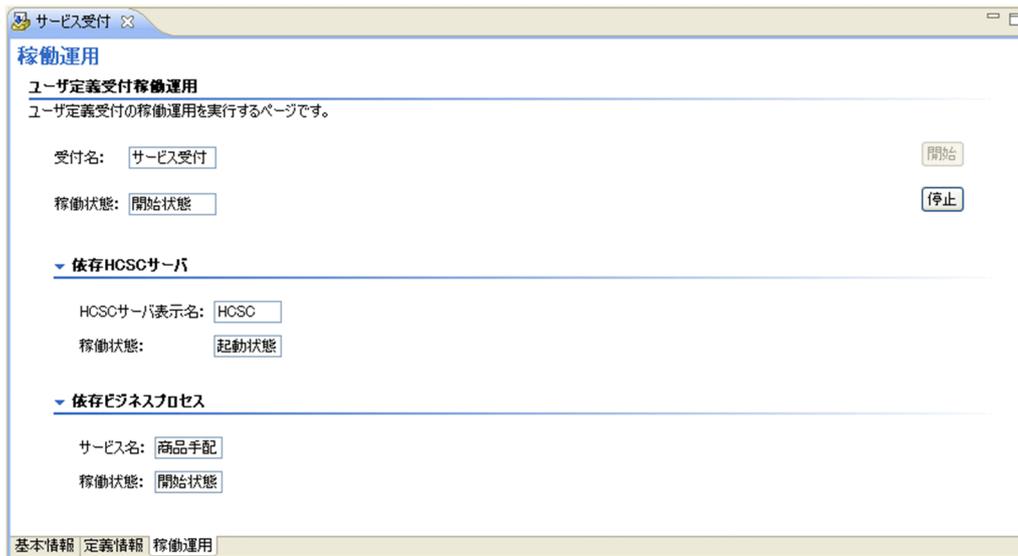
[停止] ボタン

ビジネスプロセスを停止します。

4.4.4 ユーザ定義受付稼働運用

ユーザ定義受付稼働運用ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-11 ユーザ定義受付稼働運用ページ



受付名

この画面で操作するユーザ定義受付の受付名が表示されます。

稼働状態

ユーザ定義受付の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

ユーザ定義受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存 HCSC サーバ

依存している HCSC サーバの情報が表示されます。

HCSC サーバ表示名

依存している HCSC サーバの表示名が表示されます。

稼働状態

ユーザ定義受付が配備されている HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態

- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

ユーザ定義受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

依存ビジネスプロセス

依存しているビジネスプロセスの情報が表示されます。

サービス名

依存するビジネスプロセスのサービス名が表示されます。ユーザ定義受付（呼出先選択）の場合は「-」が表示されます。

稼働状態

ビジネスプロセスの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

ユーザ定義受付（呼出先選択）の場合は「-」が表示されます。

ユーザ定義受付を開始または停止した場合以外でも、実行環境からの通知で状態が変更される場合があります。

[開始] ボタン

ユーザ定義受付を開始します。

[停止] ボタン

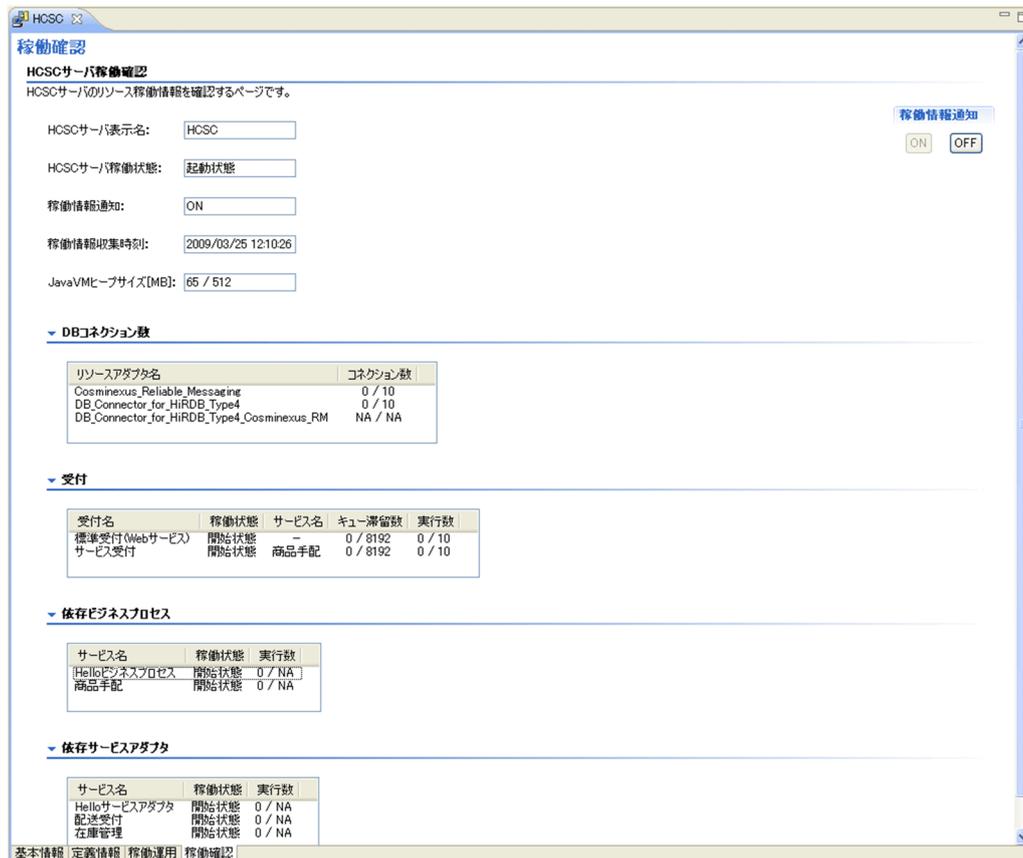
ユーザ定義受付を停止します。

4.5 稼働確認ページ

稼働確認ページには、HCSC サーバのリソースの稼働情報が表示されます。稼働確認ページは、エディタエリアで [稼働確認] タブを選択すると表示されます。

稼働確認ページの画面および表示される項目を次に示します。

図 4-12 稼働確認ページ



HCSC サーバ表示名

HCSC サーバの表示名が表示されます。

HCSC サーバ稼働状態

HCSC サーバの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 起動状態
- 停止中
- 起動中
- 取得失敗

稼働情報通知

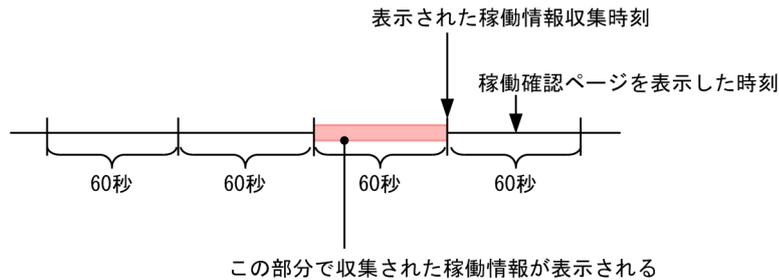
実行環境から HCSC サーバに稼働情報を通知するかどうかが表示されます。稼働情報を通知する場合は「ON」が、稼働情報を通知しない場合は「OFF」が表示されます。

稼働情報収集時刻

稼働情報が収集された時刻が表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

稼働情報は次の図に示すように、表示された稼働情報収集時刻の直前の 60 秒間（デフォルト）に収集された情報になります。

図 4-13 稼働情報収集時刻と収集された稼働情報の関係



Java VM ヒープサイズ [MB]

HCSC サーバの Java VM ヒープサイズが表示されます。「収集した Java VM ヒープサイズの最大値 / Java VM ヒープサイズの上限值」の形式で表示されます。

小数点以下は切り捨てられ、整数で表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

なお、Java VM の-Xmx オプションで指定した値から Survivor 領域の 1 つ分のサイズを除いた値が表示されます。

DB コネクション数

J2EE サーバ上で稼働しているすべてのリソースアダプタの情報が表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合は、情報が表示されません。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

リソースアダプタ名

リソースアダプタの表示名が表示されます。

コネクション数

HCSC サーバの DB コネクション数が表示されます。「収集した DB コネクション数の最大値 / DB コネクション数の上限値」の形式で表示されます。DB コネクション数の上限値には、1～2,147,483,647 の範囲で指定した値が表示されます。DB コネクション数の上限値に「-1」（無制限）を指定した場合は、「収集した DB コネクション数の最大値 / NA」の形式で表示されます。「NA」は無制限であることを示します。また、次の場合は、「NA / NA」（無効値）が表示されます。

- DB コネクション数の上限値に「0」を指定した場合
- 該当のリソースアダプタがルートリソースアダプタ、または Reliable Messaging 連携用 DB コネクタの場合

受付

受付（標準受付またはユーザ定義受付）の情報が表示されます。標準受付の場合、標準受付がセットアップされていないときは、情報が表示されません。

受付名

- 標準受付の場合
「標準受付（Web サービス（SOAP1.1）」）または「標準受付（Web サービス（SOAP1.2）」）が表示されます。
- ユーザ定義受付の場合
ユーザが定義した受付名が表示されます。

稼働状態

受付（標準受付またはユーザ定義受付）の稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。ユーザ定義受付の場合、ユーザ定義受付が配備前状態のときは「配備前状態」が表示されます。

サービス名

依存しているビジネスプロセスやサービスアダプタのサービス名が表示されます。標準受付の場合は、常に「-」が表示されます。ユーザ定義受付（呼出先選択）の場合は「-」が表示されます。

キュー滞留数

受付（標準受付またはユーザ定義受付）のキュー滞留数が表示されます。「収集したキュー滞留数の最大値 / キュー滞留数の上限値」の形式で表示されます。

キュー滞留数は、0～2,147,483,647 の範囲で表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合や、該当する受付が停止状態の場合は「-」が表示されます。ユーザ定義受付の場合、配備前状態のときは「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

実行数

受付（標準受付またはユーザ定義受付）の実行数が表示されます。「収集した実行数の最大値 / 実行数の上限値」の形式で表示されます。

実行数は、1～1,024 の範囲で表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合や、該当する受付が停止状態の場合は「-」が表示されます。ユーザ定義受付の場合、配備前状態のときは「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

依存ビジネスプロセス

HCSC サーバに依存しているビジネスプロセスの情報が表示されます。

サービス名

依存するビジネスプロセスのサービス名が表示されます。

稼働状態

ビジネスプロセスの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗
- 配備前状態

HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。

実行数

ビジネスプロセスの実行数が表示されます。「収集した実行数の最大値 / NA」の形式で表示されます。「NA」は無制限であることを示します。収集した実行数の最大値には、0~2,147,483,647 の範囲で値が表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合や、ビジネスプロセスが配備前状態、または停止状態の場合は「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

依存サービスアダプタ

HCSC サーバに依存しているサービスアダプタの情報が表示されます。

サービス名

サービスアダプタのサービス名が表示されます。

稼働状態

サービスアダプタの稼働状態が表示されます。次のどれかが表示されます。

- 停止状態
- 開始状態
- 停止中
- 開始中
- 停止失敗
- 開始失敗
- 取得失敗

- 配備前状態

HCSC サーバが起動状態以外の場合は「-」が表示されます。

実行数

サービスアダプタの実行数が表示されます。「収集した実行数の最大値 / 実行数の上限値」の形式で表示されます。「実行数の上限値」には「NA」が表示される場合もあります。「NA」は無制限であることを示します。収集した実行数の最大値には、0~2,147,483,647 の範囲で値が表示されます。HCSC サーバが起動状態以外の場合や、サービスアダプタが配備前状態、または停止状態の場合は「-」が表示されます。稼働情報の取得に失敗した場合は「取得失敗」が表示されます。

稼働情報通知

[ON] ボタン

実行環境からの稼働情報の通知を開始します。

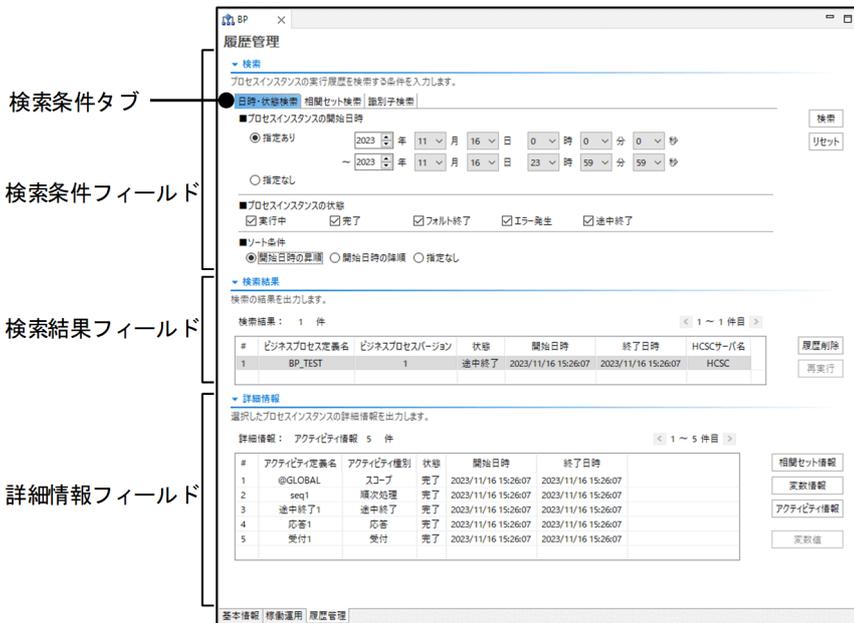
[OFF] ボタン

実行環境からの稼働情報の通知を停止します。

4.6 履歴管理ページ

履歴管理ページは、ツリービューから管理対象のビジネスプロセスを選択し、[履歴管理] タブを選択すると表示されます。履歴管理ページでは、プロセスインスタンスの実行履歴の検索、削除、再実行、および詳細情報を取得できます。履歴管理ページの構成について説明します。

図 4-14 履歴管理ページの構成



・検索条件タブ

日時/状態検索，関連セット検索，または識別子検索を切り替えます。

・検索条件フィールド

検索条件の選択，入力，または検索をします。

・検索結果フィールド

検索結果の表示，実行履歴の削除，または実行履歴の再実行をします。

・詳細情報フィールド

検索結果から詳細情報の選択，または表示をします。

4.6.1 検索条件フィールド

検索条件の選択，入力，または検索をします。

(1) 日時/状態検索

図 4-15 【日時・状態検索】タブ選択時の検索条件フィールド

The screenshot shows a search interface with the following elements:

- 検索** (Search) button
- プロセスインスタンスの実行履歴を検索する条件を入力します。
- タブ: 日時・状態検索 | 相関セット検索 | 識別子検索
- プロセスインスタンスの開始日時
 - 指定あり: 2023年 11月 16日 0時 0分 0秒
 - 指定なし: 2023年 11月 16日 23時 59分 59秒
- プロセスインスタンスの状態
 - 実行中
 - 完了
 - フォルト終了
 - エラー発生
 - 途中終了
- ソート条件
 - 開始日時の昇順
 - 開始日時の降順
 - 指定なし
- 検索 | リセット buttons

【日時・状態検索】タブ

検索条件として日時や状態からプロセスインスタンスを検索する画面を選択するタブです。

・プロセスインスタンスの開始日時

プロセスインスタンスの開始日時を指定してプロセスインスタンスを検索する場合に使用します。

【指定あり】ラジオボタン

プロセスインスタンスの開始日時を指定してプロセスインスタンスを検索する場合に選択します。

【指定なし】ラジオボタン

プロセスインスタンスの開始日時を指定しないでプロセスインスタンスを検索する場合に選択します。

日時条件開始入力フィールド

検索範囲の開始日時を入力します。指定した日時は、稼働しているマシンのタイムゾーンの日時として扱われます。

年

検索範囲の開始年を西暦で指定します。4桁の整数を半角で入力します。入力できる範囲は1970～9999です。

月

検索範囲の開始月をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は1～12です。

日

検索範囲の開始日をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は1～31です。

時

検索範囲の開始時間をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は0～23です。

分

検索範囲の開始分をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は0～59です。

秒

検索範囲の開始秒をドロップダウンリストから選択します。選択できる範囲は0～59です。

日時条件終了入力フィールド

検索範囲の終了日時を入力します。

年、月、日、時、分、および秒については、日時条件開始入力フィールドと同様です。

・プロセスインスタンスの状態

プロセスインスタンスの状態を指定してプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。複数の状態を選択して、どれかの状態の場合を検索することもできます。

[実行中] チェックボックス

実行中のプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。

[完了] チェックボックス

プロセスのグローバルスコープが完了したプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。

[フォルト終了] チェックボックス

フォルトが発生し、グローバルスコープでもキャッチできないで、フォルト終了したプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。

[エラー発生] チェックボックス

サービス呼出アクティビティまたはスコープアクティビティの実行中にエラーが発生し、終了したプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。

[途中終了] チェックボックス

プロセス実行中に実行された途中終了アクティビティによって途中終了したプロセスインスタンスを検索する場合にチェックします。

・ソート条件

検索結果の表示順序を指定します。

[開始日時の昇順] ラジオボタン

検索結果を開始日時の昇順で表示する場合に選択します。

[開始日時の降順] ラジオボタン

検索結果を開始日時の降順で表示する場合に選択します。

[指定なし] ラジオボタン

ソート条件を指定しないで検索結果を表示する場合に選択します。

・[検索] ボタン

指定した条件で検索が実行されます。

・[リセット] ボタン

選択しているタブに入力した検索条件が初期値に戻ります。

(2) 関連セット検索

図 4-16 [関連セット検索] タブ選択時の検索条件フィールド

▼ 検索
プロセスインスタンスの実行履歴を検索する条件を入力します。

日時・状態検索 | **関連セット検索** | 識別子検索

関連セット定義名:

関連セット値:

[関連セット検索] タブ

検索条件として関連セットからプロセスインスタンスを検索する画面を選択するタブです。「関連セット定義名」および「関連セット値」の両方に入力が必要です。

関連セット定義名

検索する関連セット定義名を半角の英数字で入力します。

関連セット値

検索する関連セット値を半角の英数字で入力します。

(3) 識別子検索

図 4-17 [識別子検索] タブ選択時の検索条件フィールド

▼ 検索
プロセスインスタンスの実行履歴を検索する条件を入力します。
日時・状態検索 | 関連セット検索 | 識別子検索
プロセスインスタンス識別子
J2EEServer_010210084218_商品手配_1237958488046_5666943123_138
検索
リセット

[識別子検索] タブ

検索条件としてプロセスインスタンス識別子からプロセスインスタンスを検索する画面を選択するタブです。

プロセスインスタンス識別子

検索するプロセスインスタンス識別子を入力します。

4.6.2 検索結果フィールド

検索結果件数

検索結果の総数が表示されます。

表示件数範囲

検索結果一覧に表示している検索結果の範囲について、検索結果の上位から何件目であるかの範囲が表示されます。

[<] ボタン

検索結果の前の最大 20 件が表示されます。

[>] ボタン

検索結果の次の最大 20 件が表示されます。

検索結果一覧

検索条件に該当した検索対象が表示されます。一度に表示できる件数は 20 件までです。

#

検索結果件数に対応した番号が表示されます。

ビジネスプロセス定義名

ビジネスプロセスの定義名が表示されます。

ビジネスプロセスバージョン

ビジネスプロセスのバージョンが表示されます。

状態

プロセスインスタンスの状態が表示されます。

開始日時

プロセスインスタンスの実行を開始した日時が表示されます。検索条件で指定したときと同様に「yyyy/mm/dd hh:mm:ss」の形式で表示されます。開始していない場合は表示されません。

終了日時

プロセスインスタンスの実行を終了した日時が表示されます。検索条件で指定したときと同様に「yyyy/mm/dd hh:mm:ss」の形式で表示されます。終了していない場合は表示されません。

HCSC サーバ名

最後に実行した HCSC サーバ名が表示されます。

[履歴削除] ボタン

検索結果から選択した、ある 1 つのプロセスインスタンスの実行履歴が削除されます。

[再実行] ボタン

検索結果から選択した、ある 1 つのプロセスインスタンスが再実行されます。

4.6.3 詳細情報フィールド

検索結果から詳細情報の選択、または表示をします。

(1) 相関セット情報

詳細情報件数

検索結果一覧で選択したプロセスインスタンスの詳細情報の総件数、および詳細情報の種別（相関セット情報、変数情報、またはアクティビティ情報）が表示されます。

表示件数範囲

詳細情報一覧に表示している検索結果の範囲を、検索結果の上位から何件目であるかの範囲が表示されます。

[<] ボタン

検索結果の前の最大 20 件が表示されます。

[>] ボタン

検索結果の次の最大 20 件が表示されます。

詳細情報一覧

詳細情報の種別（相関セット情報、変数情報、またはアクティビティ情報）で選択した項目に対応した詳細情報が表示されます。一度に表示できる件数は20件までです。

図 4-18 詳細情報一覧（相関セット情報）

#	相関セット定義名	相関セット値
1	set	HDD対応プラズマテレビ 60型

図 4-19 詳細情報一覧（変数情報）

#	変数定義名	変数型	変数値
1	入力データ	Message	<?xml version="1.0" encoding="UT...
2	出力データ	Message	<?xml version="1.0" encoding="UT...
3	在庫引当入力データ	Message	<?xml version="1.0" encoding="UT...
4	在庫引当出力データ	Message	<?xml version="1.0" encoding="UT...
5	配送手配入力データ	Message	<?xml version="1.0" encoding="UT...
6	配送手配出力データ	Message	<?xml version="1.0" encoding="UT...

図 4-20 詳細情報一覧（アクティビティ情報）

#	アクティビティ定義名	アクティビティ種別	状態	開始日時	終了日時
1	@GLOBAL	スコープ	完了	2008/10/10 12:27:30	2008/10/10 12:27:31
2	seq1	順次処理	完了	2008/10/10 12:27:30	2008/10/10 12:27:31
3	受付	受付	完了	2008/10/10 12:27:30	2008/10/10 12:27:30
4	在庫引当前処理	代入	完了	2008/10/10 12:27:30	2008/10/10 12:27:31
5	在庫引当	サービス呼出	完了	2008/10/10 12:27:31	2008/10/10 12:27:31
6	在庫引当結果チェック	分岐	完了	2008/10/10 12:27:31	2008/10/10 12:27:31
7	配送番号設定	代入	完了	2008/10/10 12:27:31	2008/10/10 12:27:31
8	seq2	順次処理	完了	2008/10/10 12:27:31	2008/10/10 12:27:31
9	応答手配成功	応答	完了	2008/10/10 12:27:31	2008/10/10 12:27:31
10	配送手配	サービス呼出	完了	2008/10/10 12:27:31	2008/10/10 12:27:31
11	配送手配前処理	代入	完了	2008/10/10 12:27:31	2008/10/10 12:27:31
12	seq3	順次処理	実行省略		2008/10/10 12:27:31
13	応答在庫なしエラー	応答	実行省略		2008/10/10 12:27:31
14	在庫なし設定	代入	実行省略		2008/10/10 12:27:31

#

詳細情報件数に対応した番号が表示されます。

相関セット定義名

[相関セット情報] ボタンをクリックした場合に相関セット定義名が表示されます。相関セット定義名の昇順で表示されます。

相関セット値

[相関セット情報] ボタンをクリックした場合に相関セット値が表示されます。

変数定義名

[変数情報] ボタンをクリックした場合に変数定義名が表示されます。変数定義名の昇順で表示されます。

変数型

[変数情報] ボタンをクリックした場合に変数のデータ型（Boolean, Numeric, String, または Message）が表示されます。

メッセージ型の変数である XML 型 (XML), バイナリ型 (non-XML), any 型 (any) は, 「Message」と表示されます。

変数値

[変数情報] ボタンをクリックした場合に変数値が表示されます。変数型によって次の内容が表示されます。

Boolean: 真偽値として, 「1」(真) または 「0」(偽) が表示されます。

Numeric: 数値 (64 ビット浮動小数) が表示されます。

String: 文字列が表示されます。

Message: 電文 (XML, non-XML, any) が表示されます。

アクティビティ定義名

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に, アクティビティ定義名が表示されます。開始日時昇順で表示されます。また, 開始日時が空欄の項目は後ろに配置されます。

アクティビティ種別

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に, 次に示すアクティビティの種別が表示されません。

表 4-4 アクティビティの種別

名称	説明
受付	サービスリクエストが送信した要求電文を受信します。
応答	同期受信をした際に, プロセスの実行結果をサービスリクエストに応答します。
サービス呼出	要求電文をサービス部品に送信します。
代入	変数へ代入します。
スコープ	アクティビティの有効範囲を定めます。 グローバルスコープ名は, 「@GLOBAL」となります。
順次処理	アクティビティを定義した順番に実行します。 順次処理アクティビティは, 保持しているアクティビティの最後のアクティビティが完了したときに, 完了となります。
並列処理	定義したアクティビティを同時に実行します。 ビジネスプロセス開発時の並列処理開始アクティビティと並列処理終了アクティビティは, 並列処理アクティビティとして表示されます。並列処理アクティビティは, 保持するすべてのアクティビティが完了したときに, 完了となります。
分岐	定義した選択条件によって実行するアクティビティを選択します。 ビジネスプロセス開発時の分岐開始アクティビティと分岐終了アクティビティは, 分岐アクティビティとして分岐開始アクティビティ名で表示されます。分岐アクティビティは, 分岐条件によって選択されたアクティビティが完了したときに, 完了となります。
繰り返し	定義した繰り返し条件が真である間, または繰り返しリストの要素数分, アクティビティの実行を繰り返します。
java 呼出	決められたインターフェースに従って java プログラムを呼び出します。

名称	説明
無操作	何もしない動作を表します。
フォルト送出	上位のスコープアクティビティに、ユーザ定義のフォルトを通知します。 このフォルトアクティビティが完了状態であっても、通知先のアクティビティにはフォルト発生として扱われます。
補償	補償コネクションを定義したアクティビティを呼び出します。
待機	指定した一定の間隔、または期限まで、プロセスの実行を待機させます。
検証	指定されたメッセージ型変数（XML）を検証します。
ログ出力	任意のログを出力します。
途中終了	プロセスを終了します。

状態

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に、次に示すアクティビティの状態が表示されます。

表 4-5 アクティビティの状態

名称	説明
未実行	アクティビティインスタンスが未実行で、今後実行される可能性のある状態であることを示します。
未省略	アクティビティインスタンスが未実行で、今後実行が省略される状態であることを示します。
実行中	アクティビティインスタンスが実行中の状態であることを示します。
実行中（待ち受け）	アクティビティインスタンスが実行中で、かつ再実行可能な状態であることを示します。
待ち受け	受付アクティビティインスタンスが、受け付けのできる状態であることを示します。
フォルト中	スコープアクティビティインスタンスにフォルトが発生し、キャッチしたアクティビティを実行している状態であることを示します。
完了	アクティビティインスタンスが正常に実行され、終了した状態であることを示します。
完了（待ち受け）	アクティビティのインスタンスが正常に実行されて終了した状態で、再実行可能な状態であることを示します。
キャンセル	フォルトが発生し、待ち受けまたは実行中のアクティビティインスタンスの実行がキャンセルされた状態であることを示します。
フォルト終了	アクティビティインスタンスの実行中にフォルトが発生して終了した状態であることを示します。
実行省略	アクティビティインスタンスの実行が省略され終了した状態であることを示します。
エラー発生	アクティビティインスタンスの実行中にエラーが発生して終了した状態であることを示します。
補償中	補償ハンドラの配下に定義したアクティビティが実行中の状態であることを示します。
補償完了	補償ハンドラの配下に定義したアクティビティが正常に実行され、終了した状態であることを示します。

開始日時

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に、アクティビティの開始日時が検索条件フィールドの形式と同様に表示されます。

終了日時

[アクティビティ情報] ボタンをクリックした場合に、アクティビティの終了日時が検索条件フィールドの形式と同様に表示されます。

[関連セット情報] ボタン

検索結果一覧で選択したプロセスインスタンスについて、関連セットの詳細情報が表示されます。関連セット情報は、関連セット定義名で昇順にソートされます。

[変数情報] ボタン

検索結果一覧で選択したプロセスインスタンスについて、変数の詳細情報が表示されます。変数情報は、変数定義名で昇順にソートされます。

[アクティビティ情報] ボタン

検索結果一覧で選択したプロセスインスタンスについて、アクティビティの詳細情報が表示されます。アクティビティ情報は、開始日時で昇順にソートされます。なお、開始日時が空欄（未実行）の項目は後ろに並びます。

[変数値] ボタン

詳細情報一覧に表示された変数情報のデータ型が String、またはメッセージ型の場合に、変数値の内容を別ウィンドウに表示できます。

5

コマンド（運用環境・実行環境）

この章では、サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンドの文法について説明します。

5.1 コマンドの種類

サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンドには、3種類あります。それぞれのコマンドは、コマンドが格納されるディレクトリが異なります。

コマンドの種類	実行する環境	機能
コマンド名が csc で始まるコマンド	運用環境	HCSC サーバの構築、基本運用、およびリポジトリやユーザの管理ができます。 なお、一部のコマンドは、Management Server と通信して HCSC サーバを管理します。そのため、コマンドを強制停止しても処理は継続されることがあります。 また、コマンド名と JavaVM 起動オプションを HCSC-Manager コマンド JavaVM 起動オプション定義ファイルに設定しておく、コマンド実行時に設定内容が適用されます。
コマンド名が csm で始まるコマンド*	実行環境	各種アカウントの管理や、転送履歴を表示できます。
コマンド名が csa で始まるコマンド		

注※

使用するデータベースが HiRDB で JDBC ドライバが HiRDB Type4 JDBC Driver の場合は、HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルに HiRDB Type4 JDBC Driver のパスを指定してください。

使用するデータベースが Oracle の場合は、HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルに Oracle JDBC Thin Driver のパスを指定してください。

注意事項

サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンドは管理者権限のあるユーザで実行してください。なお、UNIX の場合の Service Coordinator の管理者の変更方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 A Service Coordinator 管理者の変更方法 (UNIX の場合)」を参照してください。

5.1.1 コマンドの一覧

サービスプラットフォームのコマンドの一覧を運用環境と実行環境に分けて表で示します。

(1) 運用環境で使用するコマンドの一覧

運用環境で使用するコマンドは次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%bin
```

運用環境で使用するコマンドを次の表に示します。

表 5-1 サービスプラットフォームの運用環境で使用するコマンドの一覧

機能の分類		コマンド	説明	処理の分類	
大分類	小分類				
管理系	ユーザ管理	cscpasswd	指定された条件に従ってユーザ情報を変更します。	A	
	リポジトリ管理	cscreppls	リポジトリ情報を標準出力に出力します。	C	
		cscrepdiff	現在のリポジトリ情報とエクスポートしたリポジトリ情報の差分を標準出力に表示します。	C	
		cscrepcheck	リポジトリのインポート可否を検証します。	A	
		cscrepctl	リポジトリ内の情報を ZIP 形式ファイルに出力したり, ZIP 形式で保存された情報をリポジトリに展開したりします。	A	
		cscrepupdate	運用環境のリポジトリをアップデートします。	A	
	サービス管理	cscsvcls	サービス情報を標準出力に出力します。また, cscsvctl コマンドの引数に指定する値を調べます。	C	
		cscsvctl	サービス情報変更定義ファイルを出力または入力します。また, サービスアダプタに関するサービス情報を変更します。	A	
	環境管理	cscenvbackup	HCSC-Manager 環境の復元に必要なファイルをバックアップします。	C	
		cscenvrestore	HCSC-Manager 環境のバックアップファイルを利用して環境を復元します。	A	
	構築系	サーバ構築	cscsvsetup	HCSC サーバのセットアップをします。	A
			cscsvunsetup	HCSC サーバのアンセットアップをします。	A
HCSC コンポーネントの構築		csccompodeploy	HCSC コンポーネントを配備します。	A	
		csccompounddeploy	配備済みの HCSC コンポーネントを削除します。	A	
サーバ定義設定, 取得		cscsvconfig (-operation オプションに set を指定)	HCSC サーバの定義情報を更新します。	B	
		cscsvconfig (-operation オプションに get を指定)	HCSC サーバの定義情報を取得します。	C	
定義ファイルの取得, 設定, 削除		csccmctl (-operation オプションに get を指定)	開発環境で設定した定義ファイルを取得します。	D	
		csccmctl (-operation オプションに set を指定)	定義ファイルを運用環境上に設定します。	A	

機能の分類		コマンド	説明	処理の分類
大分類	小分類			
構築系	定義ファイルの取得, 設定, 削除	<code>cscmctl</code> (-operation オプションに <code>reset</code> を指定)	運用環境上に設定した定義ファイルを削除します。	A
	HCSC コンポーネント定義設定, 取得	<code>csccompoconfig</code> (-operation オプションに <code>set</code> を指定)	ユーザ定義受付の定義情報を更新します。	B
		<code>csccompoconfig</code> (-operation オプションに <code>get</code> を指定)	ユーザ定義受付の定義情報を取得します。	C
	簡易セットアップ	<code>cscsetup</code>	本番環境に適用できるシステムを容易に構築します。	A
運用系	サーバ運用	<code>cscsvstart</code>	HCSC サーバを起動します。	B
		<code>cscsvstop</code>	HCSC サーバを停止します。	B
	HCSC コンポーネント運用	<code>csccompostart</code>	HCSC コンポーネントを開始します。	B
		<code>csccompostop</code>	HCSC コンポーネントを停止します。	B
		<code>cscprecache</code>	フォーマット定義およびデータ変換定義を事前キャッシュします。	C
	標準受付およびユーザ定義受付	<code>cscrcptnstart</code>	標準受付およびユーザ定義受付を開始します。	B
		<code>cscrcptnstop</code>	標準受付およびユーザ定義受付を停止します。	B
	状態確認	<code>cscstatus</code>	HCSC サーバ, 標準受付, および HCSC コンポーネントの状態を表示します	C
	稼働確認	<code>cscresinfo</code>	HCSC サーバのリソースの稼働情報を表示します。	C
	汎用	<code>cscutil</code>	次に示す操作をします。	D
			<ul style="list-style-type: none"> HCSC サーバの起動と停止 HCSC コンポーネントの開始, 停止および情報取得 HCSC サーバセットアップ情報, HCSC サーバ情報の取得 標準受付の開始と停止 ユーザ定義受付の情報取得 	
			指定された条件に従ってビジネスプロセス情報を検索し CSV または TSV 形式で出力します。	C
			指定された条件に従ってビジネスプロセスの実行履歴を削除します。	C
		<code>cscpireexec</code>	指定された条件に従って実行中のビジネスプロセスを再実行します。	C

機能の分類		コマンド	説明	処理の分類
大分類	小分類			
運用系	汎用	<code>cscapputil</code>	HCSC サーバが管理しているアプリケーションを操作します。	C
ファイル連携	フォルダ運用	<code>cscfscls</code>	共通フォルダ内のファイルを参照します。	C
		<code>cscfscrm</code>	共通フォルダ内のファイルを削除します。	B
		<code>cscfswls</code>	作業フォルダを参照します。	C
		<code>cscfswrm</code>	作業フォルダを削除します。	B
ツール	バージョンアップ	<code>cscenvupdate</code>	指定した実行環境の HCSC サーバをバージョンアップします。	A
	メッセージトラッキング	<code>cscmsgtk</code>	メッセージトラッキングを起動し、メッセージトラッキングプロンプトを表示します。	E

(凡例)

- A：リポジトリ更新コマンド（実行時にリポジトリが更新されるコマンド）です。
- B：サーバ更新コマンド（実行時に HCSC サーバの情報または状態が更新されるコマンド）です。
- C：参照コマンド（実行時に情報を参照するだけのコマンド）です。HCSC サーバやリポジトリは更新されません。
- D：オプションによって、サーバ更新コマンドか参照コマンドかが異なります。
- E：リポジトリ更新、サーバ更新、参照のどれにも該当しないコマンドです。

(2) 実行環境で使用するコマンドの一覧

実行環境で使用するコマンドは次の場所に格納されています。

`csaftp` で始まるコマンド

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%bin
```

それ以外のコマンド

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%bin
```

実行環境で使用するコマンドを次の表に示します。

表 5-2 サービスプラットフォームの実行環境で使用するコマンドの一覧

機能の分類		コマンド	説明	処理の分類
大分類	小分類			
FTP 連携	ユーザの登録, 更新, 取得	<code>csaftpuseradd</code>	FTP アダプタに新規のユーザを登録します。	B
		<code>csaftpuserdel</code>	FTP アダプタに登録されているユーザを削除します。	B
		<code>csaftpuserls</code>	FTP アダプタに登録されているユーザを表示します。	C

機能の分類		コマンド	説明	処理の分類
大分類	小分類			
FTP 連携	ユーザの登録, 更新, 取得	csmftppaddusr	FTP インバウンドアダプタに新規のユーザを登録します。	B
		csmftpdelusr	FTP インバウンドアダプタに登録されているユーザを削除します。	B
		csmftplsusr	FTP インバウンドアダプタに登録されているユーザを表示します。	C
	転送履歴	csmftplshistory	FTP インバウンドアダプタの転送履歴を表示します。	C
メール連携	ユーザの登録, 更新, 取得	csmmailaddusr	メールアダプタアカウント定義ファイルにユーザ情報を登録 (または更新) します。	B
		csmmaildelusr	メールアダプタアカウント定義ファイルに登録されているユーザ情報を削除します。	B
		csmmaillsusr	メールアダプタアカウント定義ファイルに登録されているユーザ情報を表示します。	C
公開鍵認証	秘密鍵の情報の登録, 更新, 取得	csakeyadd	公開鍵認証情報に秘密鍵の情報を登録 (または更新) します。	B
		csakeydel	公開鍵認証情報に登録されている秘密鍵の情報を削除します。	B
		csakeypls	公開鍵認証情報に登録されている秘密鍵の情報を表示します。	C
パスワード認証	ユーザの登録, 更新, 取得	csauseradd	パスワード認証情報にユーザおよびパスワードを登録 (または更新) します。	B
		csauserdel	パスワード認証情報に登録されているユーザおよびパスワードを削除します。	B
		csauserpls	パスワード認証情報に登録されているユーザおよびパスワードを表示します。	C
アカウント情報	ユーザの登録, 更新, 取得	csahttpuseradd	HTTP アダプタアカウント定義ファイルにアカウント情報を登録 (または更新) します。	B
		csahttpuserdel	HTTP アダプタアカウント定義ファイルに登録されているアカウント情報を削除します。	B
		csahttpuserpls	HTTP アダプタアカウント定義ファイルに登録されているアカウント認証のユーザ情報を表示します。	C

(凡例)

B：サーバ更新コマンド (実行時に HCSC サーバの情報または状態が更新されるコマンド) です。

C：参照コマンド (実行時に情報を参照するだけのコマンド) です。HCSC サーバやリポジトリは更新されません。

5. コマンド (運用環境・実行環境)

5.1.2 コマンドの同時実行について

コマンドを実行するときに、ほかの操作が実行中の場合、コマンドが実行できない場合があります。ほかの操作を実行中の場合にコマンドが実行できるかどうかを次の表に示します。

表 5-3 ほかの操作が実行中のコマンドの実行可否

実行するコマンド	現在実行中の操作, または現在の状態				
	リポジトリ更新コマンド実行中	サーバ更新コマンド実行中	参照コマンド実行中	画面へログインしている状態	画面からの操作中(更新系)
リポジトリ更新コマンド	×	×	×	×	×
サーバ更新コマンド	×	×	○	○	×
参照コマンド	×	○	○	○	○

(凡例)

○：コマンドが実行できます。

×：コマンドは実行できません。リポジトリ更新コマンドとリポジトリ操作（参照/更新）のあるコマンドとを同時実行した場合、排他エラーとなりリターンコード3が返ります。

注

cscutil コマンドには、サーバ更新コマンドの機能（HCSC サーバの起動、停止など）と、参照コマンドの機能（HCSC サーバ情報の取得など）があります。

ほかの操作が実行中の場合に cscutil コマンドを実行するときは、実行する機能（オプションの指定）によって、実行の可否が異なります。

5.1.3 コマンドのタイムアウト機能

実行したコマンドの応答がない場合に備え、タイムアウト機能があります。HCSC サーバが提供するタイムアウト機能を次に示します。各定義ファイルについては、「[6.5 HCSC サーバの運用で利用するファイル](#)」を参照してください。

表 5-4 HCSC サーバが提供するタイムアウト機能

定義ファイル	プロパティ	タイムアウト機能の種類
HCSC-Manager 定義ファイル	cscmng.manager.<マネージャ識別名>.timeout	通信タイムアウト
	cscmng.server.<HCSC サーバ名>.hws.svstop.timeout	監視時間
HCSC サーバランタイム定義ファイル	csc-command-timeout	通信タイムアウト
	csc-precache-timeout	通信タイムアウト
	startcsc-timeout	監視時間
	stopcsc-timeout	監視時間

定義ファイル	プロパティ	タイムアウト機能の種類
HCSC サーバランタイム定義ファイル	j2ee-stopapp-timeout	監視時間
	receptionstop-monitor-timer	通信タイムアウト, 監視時間
	csc-receptionstop-timeout	通信タイムアウト

(凡例)

通信タイムアウト：

通信障害を検出します。

監視時間：

コマンドの延長で、ある対象が期待する状態になるまで待機します。

「監視時間」に分類されるプロパティは、システムの拡張（HCSC コンポーネントの増加）に応じてタイムアウト値のチューニングが必要となります。

注意事項

コマンドのタイムアウト機能は、その時間を超過した時点でコマンドクライアント側に制御を返すことは保証しません。

コマンドによっては、障害発生時に巻き戻し処理が実行される場合があるため、設定した時間を超過してからクライアント側に結果が通知されるまで、設定値より長い時間を要する場合があります。

5.1.4 コマンドの中断機能

リソースをある時間までに解放させる方法として中断機能があります。中断条件（時間）を指定しておくことで、コマンドの実行中に処理を中断できます。中断機能によって実行が中断されたコマンドは警告メッセージを出力し、終了コード「10」を返します。

HCSC サーバが提供する中断機能を次に示します。

- cscpidelete コマンド (-canceltimer オプション)
- cscpiselect コマンド (-canceltimer オプション)

5.2 コマンドの入力形式

コマンドの入力形式を次に示します。

コマンド名 [引数…]

各項目について説明します。なお、コマンドプロンプトを「\$」、コマンド名を「cmd」と表記します。

コマンド名

実行するコマンドのファイル名を指定します。

空白を含むパスを指定してコマンドを実行する場合、パス全体を" "で囲む必要があります。

- 誤った指定例：\$ C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CC¥server¥bin¥cmd
- 正しい指定例：\$ "C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CC¥server¥bin¥cmd"

引数

引数には、オプションも含まれます。オプションの入力形式および指定規則を次に示します。

オプションの入力形式

オプションは、ハイフン (-) で始まる文字列です。オプションの入力形式には、オプション引数を指定しない形式と、1 個のオプション引数を指定する形式があります。

- オプション引数を指定しない形式
\$ cmd -オプションフラグ
- 1 個のオプション引数を指定する形式
\$ cmd -オプションフラグ オプション引数

(凡例)

- オプションフラグ
1 文字の半角英数字です。大文字と小文字が区別されます。
- オプション引数
オプションフラグに対する引数です。

オプションの指定規則

- オプションフラグは、1 つのハイフン (-) にまとめて指定できません。
誤った指定例：\$ cmd -abc
正しい指定例：\$ cmd -a -b -c
- オプション引数を必要とするオプションフラグのオプション引数は、省略できません。
- オプションフラグとオプション引数の間には、スペースまたはタブが必要です。
誤った指定例：\$ cmd -afile
正しい指定例：\$ cmd -a file
- 同じオプションフラグは、複数指定できません。

誤った指定例：\$ cmd -a 1 -a 2

- オプション引数に空白を含む場合、オプション引数全体を""で囲む必要があります。

誤った指定例：\$ cmd -a file 1

正しい指定例：\$ cmd -a "file 1"

- オプション引数に特殊文字（エスケープ文字）を含む場合、特殊文字を""で囲む必要があります。

誤った指定例：\$ cmd -a xyz;12

正しい指定例：\$ cmd -a "xyz;12"

オプションの優先順位

- 各コマンドのオプションの幾つかは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルに記述すると省略できます。HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルとコマンド引数の指定は、次のような優先順位になります。
 - ・ HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルとコマンド引数の両方に指定がある場合
コマンド引数に指定した方が有効となります。
 - ・ HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルとコマンド引数の両方に記述がない場合
異常終了します。

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの詳細については、[「6.5.2 HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル」](#)を参照してください。

- オプションの指定に優先順位はありません。例 1 と例 2 は、同一のコマンドとして扱われます。

例 1：\$ cmd -a file -b option

例 2：\$ cmd -b option -a file

5.3 コマンドの文法の記述形式

以降で説明するコマンドの文法について、次の形式で記述します。なお、各コマンドは、アルファベットの順に説明します。

形式

コマンドの入力形式を示します。

機能

コマンドの機能について説明します。

引数

コマンドの引数およびオプションについて説明します。

出力形式

コマンドの出力形式を示します。

入力例

コマンドの入力例を示します。

表示形式

コマンドの出力形式を示します。

表示例

コマンドの表示例を示します。

戻り値

コマンドの戻り値について示します。

注意事項

コマンドを実行する上での全体的な注意事項について説明します。

注

すべてのコマンドで上記の項目をすべて説明しているわけではありません。また、上記以外に、各コマンドの固有情報を記載している場合があります。

この章の文法の説明で使用している記号を次に示します。

記号	意味
	横に並べられた複数の項目に対する項目間の区切りを示し、「または」を意味します。 (例) A B A または B を指定することを示します。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから1つを選択することを示します。項目が横に並べられ、記号 で区切られている場合は、そのうちの1つを選択します。 (例) {A B C} A, B または C のどれかを指定することを示します。

記号	意味
[]	この記号で囲まれている項目は省略してもよいことを示します。 (例) [A] 「何も指定しない」か「Aを指定する」ことを示します。
< >	この記号で囲まれている項目は、該当する要素を指定することを示します。 (例) <プロパティ> プロパティを記述します。
…	記述が省略されていることを示します。 (例) ABC… ABCの後ろに記述があり、その記述が省略されていることを示します。
~	この記号の前に示された項目が、記号~に続く< >, (()), << >>などの規則に従うことを示します。
< >	項目を記述するときに従わなければならない構文要素を示します。構文要素については、次の表を参照してください。
(())	項目で指定できる値の範囲を示します。
<< >>	項目を省略したときに、システムが仮定する標準値を示します。

この章で使用している構文要素の種類と定義を次に示します。

種類	定義
英字	A~Z a~z
英小文字	a~z
英大文字	A~Z
数字	0~9
英数字	A~Z a~z 0~9
記号	_ . -
文字列	任意の文字の配列

5.4 サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンド

csaftpuseradd (FTP アダプタのユーザの登録・更新)

形式

```
csaftpuseradd [-h]
               { -userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>
                 | -user <ログインユーザID>
                 -pass <ログインパスワード>
                 [-account <課金情報>] }
               [-r]
               { -f <FTPアダプタアカウント定義ファイルのパス> | -name <サービスID> }
```

機能

FTP アダプタアカウント定義ファイルに新規のユーザを登録します。登録できるユーザ数の上限はありません。ユーザがすでに登録されている場合は、パスワードや課金情報を更新します。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- このコマンドの-pass オプションにパスワードを指定した場合、プロセスの引数を確認できる OS 機能などによって、パスワードが検知されるおそれがあります。このため、-userinfofile オプションを使用した、ユーザ情報指定ファイルでのパスワードの設定を推奨します。
- 運用コマンドを実行する管理者にだけ、FTP アダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。
- コマンドにユーザ情報指定ファイルを指定する場合、運用コマンドを実行する管理者にだけ、ユーザ情報指定ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.14 FTP アダプタのユーザ情報を確認および変更する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>

ログインユーザ ID、ログインパスワード、課金情報が記載されているユーザ情報指定ファイルのパスを指定します。絶対パス、またはコマンド実行時のカレントディレクトリからの相対パスで指定してください。パスが空白を含む場合は、パス全体をダブルクォーテーション (") で囲ってください。

指定されたユーザ情報指定ファイルのユーザ情報がすべて正常であれば、その内容が FTP アダプタアカウント定義ファイルに一括で登録または更新されます。ただし、次の場合はエラーとなり、登録・更新は実施されません。

- 指定されたファイルが存在しない場合
- ファイル内のユーザ情報に 1 つでも不正があった場合
- ファイル内にログインユーザ ID が重複している場合

なお、実行対象のユーザ情報指定ファイルには、ユーザ情報の登録または更新のどちらかだけを指定できます。

ユーザ情報指定ファイルの記載方法については、[\[6.21.1 ユーザ情報指定ファイル\]](#) を参照してください。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字および半角記号> ((1-80 文字))

登録または更新したいユーザ ID を指定します。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 ((
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)

- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (˘)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字および半角記号> ((1-80 文字))

登録または更新したいユーザ ID に対するパスワードを指定します。使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号は-user オプションと同じです。

更新したい場合 (-r オプションを指定する場合)、更新後のパスワードを指定します。

-account <課金情報> ~<半角英数字および半角記号> ((1 文字以上))

登録または更新したいユーザに対する課金情報 (アカウントを示す文字列) を指定します。使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号は-user オプションと同じです。

このオプションを省略、または<課金情報>に空文字を指定した場合、課金情報は設定されません。

なお、課金情報が設定されているユーザのパスワードを変更する場合、このオプションを指定する必要があります。

-r

すでに登録されているユーザ ID のパスワードを変更する場合に指定します。

-f <FTP アダプタアカウント定義ファイルのパス>

FTP アダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パス、または絶対パスで指定します。空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

ファイルが存在しない場合、新規に FTP アダプタアカウント定義ファイルが作成されます。ただし、ディレクトリが存在しない場合は、エラーになります。既存の FTP アダプタアカウント定義ファイルに新規アカウントを追加する場合は、既存の FTP アダプタアカウント定義ファイルを指定してください。

-name <サービス ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

製品固定パスで FTP アダプタ単位にユーザを管理する場合に、FTP アダプタのサービス ID を指定します。

製品固定パスにファイルが存在しない場合、新規に FTP アダプタアカウント定義ファイルが作成されます。ただし、ディレクトリが存在しない場合は、エラーになります。製品固定パスの詳細は、「[6.8.1 FTP アダプタアカウント定義ファイル](#)」を参照してください。

入力例

●ユーザ情報を任意の単位・任意のパスのアカウント定義ファイルで管理する場合

(1) 課金情報を設定するユーザを登録する場合

```
csaftpuseradd -user user1 -pass password1 -account account1 -f account.properties
```

(2) 課金情報を設定しないユーザを登録する場合

```
csaftpuseradd -user user2 -pass password2 -f account.properties
```

(3) ユーザ情報指定ファイルのユーザ情報を一括で登録する場合

```
csaftpuseradd -userinfofile userinfo.txt -f account.properties
```

(4) ユーザのパスワードと課金情報を更新する場合

```
csaftpuseradd -user user1 -pass passwordnew -account accountnew -r -f account.properties
```

(5) ユーザ情報指定ファイルのユーザ情報を一括で更新する場合

```
csaftpuseradd -userinfofile userinfo.txt -r -f account.properties
```

(6) 課金情報が設定されていないユーザのパスワードを更新する場合

```
csaftpuseradd -user user2 -pass passwordnew -r -f account.properties
```

(7) すでに登録されているユーザに課金情報を追加する場合

```
csaftpuseradd -user user2 -pass password2 -account account2 -r -f account.properties
```

(8) すでに登録されているユーザの課金情報を削除する場合

```
csaftpuseradd -user user1 -pass password1 -r -f account.properties
```

●ユーザ情報を FTP アダプタ単位・製品固定パスのアカウント定義ファイルで管理する場合

(1) 課金情報を設定するユーザを登録する場合

```
csaftpuseradd -user user1 -pass password1 -account account1 -name adp1
```

(2) 課金情報を設定しないユーザを登録する場合

```
csaftpuseradd -user user2 -pass password2 -name adp1
```

(3) ユーザ情報指定ファイルのユーザ情報を一括で登録する場合

```
csaftpuseradd -userinfofile userinfo.txt -name adp1
```

(4) ユーザのパスワードと課金情報を更新する場合

```
csaftpuseradd -user user1 -pass passwordnew -account accountnew -r -name adp1
```

(5) ユーザ情報指定ファイルのユーザ情報を一括で更新する場合

```
csaftpuseradd -userinfofile userinfo.txt -r -name adp1
```

(6) 課金情報が設定されていないユーザのパスワードを更新する場合

```
csaftpuseradd -user user2 -pass passwordnew -r -name adp1
```

(7) すでに登録されているユーザに課金情報を追加する場合

```
csaftpuseradd -user user2 -pass password2 -account account2 -r -name adp1
```

(8) すでに登録されているユーザの課金情報を削除する場合

```
csaftpuseradd -user user1 -pass password1 -r -name adp1
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- FTP アダプタアカウント定義ファイルは編集できません。
- コマンドの実行内容（ユーザの登録・更新）は、FTP アダプタの開始後に有効となります。また、FTP アダプタが開始している状態でコマンドを実行した場合、コマンドの実行内容（ユーザの登録・更新）は、次に FTP アダプタを開始したあとに有効となります。
- FTP アダプタアカウント定義ファイルは、コマンド実行中のファイルの入出力エラー（ディスクフルなど）によって壊れるおそれがあります。定期的にバックアップを取得してください。
- -f オプションに「<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config\common%account.properties」を指定しないでください。

csaftpuserdel (FTP アダプタのユーザの削除)

形式

```
csaftpuserdel [-h]
               -user <ログインユーザID>
               { -f <FTPアダプタアカウント定義ファイルのパス> | -name <サービスID> }
```

機能

FTP アダプタアカウント定義ファイルに登録されているユーザを削除します。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.14 FTP アダプタのユーザ情報を確認および変更する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字および半角記号> ((1-80 文字))

削除したいユーザ ID を指定します。使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 ((
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)

- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (`)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

-f <FTP アダプタアカウント定義ファイルのパス>

FTP アダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パス、または絶対パスで指定します。空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

-name <サービス ID> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-8 文字))

FTP アダプタのサービス ID を指定します。ユーザの登録で-name オプションを指定していない場合、このオプションではなく-f オプションを使用してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- FTP アダプタアカウント定義ファイルは編集できません。

- FTP アダプタアカウント定義ファイルのユーザ認証情報が 0 個になっても FTP アダプタアカウント定義ファイルは削除されません。
- コマンドを実行する前に、運用コマンドを実行する管理者にだけ、FTP アダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。
- コマンドの実行内容（ユーザの削除）は、FTP アダプタの開始後に有効となります。また、FTP アダプタが開始している状態でコマンドを実行した場合、コマンドの実行内容（ユーザの削除）は、次に FTP アダプタを開始したあとに有効となります。
- FTP アダプタアカウント定義ファイルは、コマンド実行中のファイルの入出力エラー（ディスクフルなど）によって壊れるおそれがあります。定期的にバックアップを取得してください。
- `-f` オプションに「<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥CSC¥config¥common¥account.properties」を指定しないでください。

csaftpuserls (FTP アダプタのユーザの表示)

形式

```
csaftpuserls [-h]
              { -f <FTPアダプタアカウント定義ファイルのパス> | -name <サービスID> }
```

機能

FTP アダプタアカウント定義ファイルに登録されているユーザを表示します。表示結果は標準出力に出力します。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.14 FTP アダプタのユーザ情報を確認および変更する」を参照してください。

引数

`-h`

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

`-f <FTP アダプタアカウント定義ファイルのパス>`

FTP アダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パス、または絶対パスで指定します。空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

`-name <サービス ID> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-8 文字))`

登録されているユーザを表示したい FTP アダプタのサービス ID を指定します。

表示形式

(1) ユーザ認証情報が登録されている場合 (-name 指定なし)

1: ユーザ ID1 = 課金情報

2: ユーザ ID2

:

-name オプションを指定しないで登録したユーザ認証情報を 1 行ずつ表示します。ユーザ ID に対する課金情報が設定されている場合は、課金情報を表示します。

(2) ユーザ認証情報が登録されていない場合 (-name 指定なし)

none

(3) ユーザ認証情報が登録されている場合 (-name 指定あり)

1: ユーザ ID1 = 課金情報

2: ユーザ ID2

:

-name オプションを指定して登録したユーザ認証情報を 1 行ずつ表示します。ユーザ ID に対する課金情報が設定されている場合は、課金情報を表示します。

(4) ユーザ認証情報が登録されていない場合 (-name 指定あり)

none

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- FTP アダプタアカウント定義ファイルは編集できません。
- コマンドを実行する前に、運用コマンドを実行する管理者にだけ、FTP アダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。
- -f オプションに「<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config\common%account.properties」を指定しないでください。

csahttputeradd (HTTP アダプタで使用するアカウント情報の登録・更新)

形式

```
csahttputeradd [-h]
                { -userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>
                [-aws]
                | -user <ユーザ名>
                  -pass <パスワード>
                  -uri <接続先URI>
                | -accesskey <アクセスキーID>
                  -secretaccesskey <シークレットアクセスキー>
                  -accesskeypairid <アクセスキーペアID>
                }
                [-r]
                -f <HTTPアダプタアカウント定義ファイルのパス>
```

機能

アカウント情報を登録・更新します。登録できるアカウント情報の数に上限はありません。

登録・更新できるアカウント情報の種類と内容を次に示します。

- ベーシック認証の認証情報で使用するアカウント情報
ユーザ名、パスワードおよび接続先 URI を登録します。
同じユーザ名に対して異なる接続先 URI を設定すれば、別のアカウント情報として管理することもできます。なお、パスワードはユーザ名と対にする必要があります。
- 署名付き AWS API リクエストの署名生成で使用するアカウント情報
アクセスキー ID とシークレットアクセスキーを登録します。また、これらを一意に区別するための ID (アクセスキーペア ID) を登録します。

登録または更新したアカウント情報は、HTTP アダプタの開始後から有効になります。また、HTTP アダプタが開始している状態でこのコマンドを実行すると、登録または更新したアカウント情報は、次の HTTP アダプタの開始後から有効となります。

アカウント情報管理コマンドでは、コマンド実行時に排他制御を実行しません。そのため、アカウント情報の更新中にほかにアカウント情報を更新するコマンド (csahttputeradd コマンドまたは csahttputerdel コマンド) を実行した場合はエラーとなり、メッセージ KDEC81216-E を出力します。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- このコマンドの -pass オプションにパスワードを指定した場合、プロセスの引数を確認できる OS 機能などによって、パスワードが検知されるおそれがあります。このため、-userinfofile オプションを使用した、ユーザ情報指定ファイルでのパスワードの設定を推奨します。
- コマンドを実行する管理者に限定して、HTTP アダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。

- コマンドにユーザ情報指定ファイルを指定する場合、コマンドを実行する管理者に限定して、ユーザ情報指定ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。
- HTTP アダプタアカウント定義ファイルを更新する場合は、バックアップファイルの作成をお勧めします。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>

ユーザ情報指定ファイルのパスを指定します。絶対パス、またはコマンド実行時のカレントディレクトリからの相対パスで指定してください。パスが空白を含む場合は、パス全体をダブルクォーテーション (") で囲んでください。

-user, -pass, -uri, -accesskey, -secretaccesskey オプションと同時に指定できません。

ユーザ情報指定ファイルには、ユーザ情報を次の形式で記載してください。

- ベーシック認証で使用するユーザ情報を指定する場合
<ユーザ名> <パスワード> <接続先 URI>
- 署名生成で使用するユーザ情報を指定する場合 (-aws オプションと併せて指定)
<アクセスキー ID> <シークレットアクセスキー> <アクセスキーペア ID>

指定されたユーザ情報指定ファイルのユーザ情報がすべて正常であれば、その内容が HTTP アダプタアカウント定義ファイルに一括で登録または更新されます。ただし、次の場合はエラーとなり、登録・更新は実施されません。

- 指定されたファイルが存在しない場合
- ファイル内のユーザ情報に 1 つでも不正があった場合
- ファイル内にユーザ名と接続先 URI の同じ組み合わせがある場合
- ファイル内に<アクセスキーペア ID>が重複している場合

なお、実行対象のユーザ情報指定ファイルには、ユーザ情報の登録または更新のどちらかだけを指定できません。

ユーザ情報指定ファイルの記載方法については、[「6.21.1 ユーザ情報指定ファイル」](#)を参照してください。

-aws

署名生成のユーザ情報をユーザ情報指定ファイルで登録・更新する場合に指定します。

-user, -pass, -uri, -accesskey, -secretaccesskey オプションと同時に指定できません。

このオプションは-userinfofile オプションと併せて指定します。ユーザ情報指定ファイルには、ユーザ情報を「<アクセスキー ID><シークレットアクセスキー> <アクセスキーペア ID>」で指定します。

-user <ユーザ名> ~<半角英数字および半角記号> ((1~80 文字))

登録または更新したいアカウント情報のユーザ名を指定します。

-userinfofile, -aws, -accesskeypairid, -accesskey, -secretaccesskey オプションと同時に指定できません。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」 ~ 「0x7E」), および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])

- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (˘)
- 始め波括弧 ({})
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

指定したユーザ名と HTTP アダプタアカウント定義ファイルのユーザ名が完全一致した場合、同一のユーザ名と判断されます。

-pass <パスワード> ~<半角英数字および半角記号> ((1~80 文字))

登録または更新するアカウント情報に対応するパスワードを指定します。

-userinfofile, -aws, -accesskeypairid, -accesskey, -secretaccesskey オプションと同時に指定できません。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)

- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (^)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

-uri <接続先 URI> ~<半角英数字および半角記号>

ベーシック認証を実施するサービスの URI を指定します。アカウント情報から作成された認証情報は、ここで指定された接続先 URI でベーシック認証が実施されます。

-userinfofile, -aws, -accesskeypairid, -accesskey, -secretaccesskey オプションと同時に指定できません。

接続先 URI の指定形式を次に示します。< >で囲まれた部分は要素を表し、[]で囲まれた部分は省略できることを表します。

```
<scheme>://<host>[:<port>][<path>]
```

ここで指定した値は、認証情報の作成時に実行される URI のマッチングで、次のように補完または解釈されます。

- 「:<port>」を省略した場合、次に示す値で補完されます。
http の場合：80
https の場合：443
- 「<path>」を省略した場合、「/」が補完されます。

- 「<scheme>」 および 「<host>」 は、大文字と小文字は区別されません。

指定した接続先 URI と、HTTP アダプタアカウント定義ファイルの接続先 URI を正規化して、それらの値が完全一致した場合、同一の接続先 URI と判断されます。

なお、接続先 URI を更新する場合は、ユーザ名および接続先 URI を指定してアカウント情報を削除し、再度登録してください。

-accesskey <アクセスキー ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () >

署名生成のユーザ情報を指定する場合に、登録または更新するアカウント情報のアクセスキー ID を指定します。

-userinfofile, -aws, -user, -pass, -uri オプションと同時に指定できません。

-secretaccesskey <シークレットアクセスキー>

署名生成のユーザ情報を指定する場合に、登録または更新するアカウント情報のシークレットアクセスキーを指定します。

-userinfofile, -aws, -user, -pass, -uri オプションと同時に指定できません。

-accesskeypairid <アクセスキーペア ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () >

署名生成のユーザ情報を指定する場合に、登録または更新するアカウント情報のアクセスキーペア（アクセスキー ID とシークレットアクセスキー）を一意に区別するための ID を指定します。

-userinfofile, -aws, -user, -pass, -uri オプションと同時に指定できません。

-r

次のどちらかの情報を更新する場合に指定します。

- ユーザ名 (-user) と接続先 URI (-uri) に対応するパスワード
-pass オプションと併せて指定する必要があります。
- アクセスキーペア ID (-accesskeypairid) に対応するアクセスキー ID とシークレットアクセスキー
-accesskey オプション、-secretaccesskey オプションと併せて指定する必要があります。なお、未登録のアクセスキーペア ID を指定した場合、エラーになり更新に失敗します。

-f <HTTP アダプタアカウント定義ファイルのパス>

このコマンドで定義したアカウント情報を保存するための、HTTP アダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲ってください。

指定したファイルが存在しない場合は次のように動作します。

- アカウント情報の登録時

指定したファイル名で、HTTP アダプタアカウント定義ファイルが新規作成されます。ただし、指定したディレクトリが存在しない場合はエラーになります。

- アカウント情報の更新時（引数-r を指定した場合）
エラーになります。

コマンド実行後、ここで保存した HTTP アダプタアカウント定義ファイルは、HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルの adphttp.config.account-inf-filepath プロパティに設定することで読み込まれます。HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルについては、「6.14.2 HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル」を参照してください。

入力例

●アクセスキー ID・シークレットアクセスキーを登録する場合

(1) コマンド引数に指定する場合

```
csahttpuseradd -accesskey AKIAIOSFODNN7EXAMPLE -secretaccesskey wJalrXUtnFEMI/K7MDENG/bPxRfiCYEXAMPLEKEY -accesskeypairid EXAMPLEKEYPAIRID -f "C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CSC¥custom-adapter¥HTTP¥config¥account.properties"
```

(2) ユーザ情報指定ファイルに指定する場合

```
csahttpuseradd -userinfofile C:¥temp¥userinfo.txt -aws -f "C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CSC¥custom-adapter¥HTTP¥config¥account.properties"
```

●アクセスキー ID・シークレットアクセスキーを更新する場合

(1) コマンド引数に指定する場合

```
csahttpuseradd -accesskey AKIAIOSFODNN7EXAMPLE -secretaccesskey wJalrXUtnFEMI/K7MDENG/bPxRfiCYEXAMPLEKEY -accesskeypairid EXAMPLEKEYPAIRID -r -f "C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CSC¥custom-adapter¥HTTP¥config¥account.properties"
```

(2) ユーザ情報指定ファイルに指定する場合

```
csahttpuseradd -userinfofile C:¥temp¥userinfo.txt -aws -r -f "C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CSC¥custom-adapter¥HTTP¥config¥account.properties"
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- HTTP アダプタアカウント定義ファイルは直接編集しないでください。

csahttpuserdel (HTTP アダプタで使用するアカウント情報の削除)

形式

```
csahttpuserdel [-h]
                 {-user <ユーザ名>
                  -uri <接続先URI>
                  | -accesskeypairid <アクセスキーペアID> }
                 -f <HTTPアダプタアカウント定義ファイルのパス>
```

機能

HTTP アダプタアカウント定義ファイルに登録されているアカウント情報を削除します。削除できるアカウント情報は次のとおりです。

- ベーシック認証の認証情報で使用するアカウント情報
指定されたユーザ名と接続先 URI の組み合わせを基に、アカウント情報を削除します。
- 署名付き AWS API リクエストの署名生成で使用するアカウント情報
指定されたアクセスキーペア ID を基に、アカウント情報を削除します。

削除したアカウント情報は、HTTP アダプタの開始後に反映されます。また、HTTP アダプタが開始している状態でこのコマンドを実行すると、削除したアカウント情報は、HTTP アダプタの次回開始後に反映されます。

なお、HTTP アダプタアカウント定義ファイルは、アカウント情報数が 0 個になっても削除されません。

アカウント情報管理コマンドでは、コマンド実行時に排他制御を実行しません。そのため、アカウント情報の更新中にほかにアカウント情報を更新するコマンド (csahttpuseradd コマンドまたは csahttpuserdel コマンド) を実行した場合はエラーとなり、メッセージ KDEC81216-E を出力します。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- コマンドを実行する管理者に限定して、HTTP アダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。
- HTTP アダプタアカウント定義ファイルのバックアップファイルの作成をお勧めします。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ユーザ名> ~<半角英数字および半角記号> ((1~80 文字))

削除したいアカウント情報のユーザ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-accesskeypairid オプションと同時に指定できません。

指定したユーザ名と HTTP アダプタアカウント定義ファイルのユーザ名が完全一致した場合、同一のユーザ名と判断されます。

-uri <接続先 URI>

削除するアカウント情報の接続先 URI を指定します。

-accesskeypairid オプションと同時に指定できません。

指定した接続先 URI と、HTTP アダプタアカウント定義ファイルの接続先 URI を正規化して、それらの値が完全一致した場合、同一の接続先 URI と判断されます。

-accesskeypairid <アクセスキーペア ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () >

署名生成のユーザ情報を指定する場合に、削除するアカウント情報のアクセスキーペア ID を指定します。未登録のアクセスキーペア ID を指定した場合、エラーとなり削除に失敗します。

-user, -uri オプションと同時に指定できません。

-f <HTTP アダプタアカウント定義ファイルのパス>

削除するアカウント情報が登録されている HTTP アダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

コマンド実行後、ここで指定した HTTP アダプタアカウント定義ファイルは、HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルの adphttp.config.account-inf-filepath プロパティに設定することで読み込まれます。HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルについては、「[6.14.2 HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

指定したファイルが存在しない場合は、エラーになります。

入力例

アクセスキー ID・シークレットアクセスキーを削除する場合

```
csahttpuserdel -accesskeypairid EXAMPLEKEYPAIRID -f "C:¥Program Files¥Hitachi¥Cosminexus¥CSC¥custom-adapter¥HTTP¥config¥account.properties"
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- HTTP アダプタアカウント定義ファイルは直接編集しないでください。

csahttuserls (HTTP アダプタで使用するアカウント認証のユーザ情報の表示)

形式

```
csahttuserls [-h]
              [-aws]
              -f <HTTPアダプタアカウント定義ファイルのパス>
```

機能

HTTP アダプタアカウント定義ファイルに登録されているアカウント情報を表示します。表示形式については「表示形式」を参照してください。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- コマンドを実行する管理者に限定して、HTTP アダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-aws

HTTP アダプタアカウント定義ファイルに登録されているアクセスキーペア ID を表示する場合に指定します。

このオプションを指定しない場合は、ユーザ名と接続先 URI を表示します。

-f <HTTP アダプタアカウント定義ファイルのパス>

HTTP アダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、指定値をダブルクォーテーション (") で囲んでください。

指定したファイルが存在しない場合はエラーになります。

表示形式

(1) HTTP アダプタアカウント定義ファイルに登録情報がある場合

- コマンドに `-aws` オプションを指定しないで実行した場合

接続先 URI とユーザ名の間を半角スペースで区切って、1 行ずつ表示します (△は半角スペース)。

```
-----  
接続先URI△ユーザ名  
  ⋮  
  ⋮  
-----
```

- コマンドに `-aws` オプションを指定して実行した場合

アクセスキーペア ID を 1 行ずつ表示します。

```
-----  
アクセスキーペアID  
  ⋮  
  ⋮  
-----
```

(2) HTTP アダプタアカウント定義ファイルに登録情報がない場合

情報、ヘッダ、フッタとも表示しません。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- HTTP アダプタアカウント定義ファイルは直接編集しないでください。

csakeyadd (公開鍵認証の秘密鍵情報の登録・更新)

形式

```
csakeyadd [-h]  
  { -userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>  
  | -keyfile <秘密鍵のファイルパス>  
  [-pass <秘密鍵のパスフレーズ>]  
  -keyid <鍵ID> }  
[-r]  
-f <公開鍵認証情報定義ファイルのパス>
```

機能

ユーザ認証のうち、公開鍵認証に必要な秘密鍵の情報を登録または更新します。登録できる公開鍵認証情報の数に上限はありません。

登録または更新した公開鍵認証情報は、それを使用するサービスアダプタの初回リクエスト時に有効となります。また、初回リクエスト後にこのコマンドを実行すると、登録または更新した公開鍵認証情報は、次のサービスアダプタの開始後から有効となります。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- このコマンドの-pass オプションにパスワードを指定した場合、プロセスの引数を確認できる OS 機能などによって、パスワードが検知されるおそれがあります。このため、-userinfofile オプションを使用した、ユーザ情報指定ファイルでのパスワードの設定を推奨します。
- コマンドを実行する管理者に限定して、公開鍵認証情報定義ファイルと秘密鍵ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。
- コマンドにユーザ情報指定ファイルを指定する場合、コマンドを実行する管理者に限定して、ユーザ情報指定ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。
- 公開鍵認証情報定義ファイルを更新する場合は、バックアップファイルの作成をお勧めします。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>

秘密鍵のファイルパス、秘密鍵のパスフレーズ、鍵 ID が記載されているユーザ情報指定ファイルのパスを指定します。絶対パス、またはコマンド実行時のカレントディレクトリからの相対パスで指定してください。パスが空白を含む場合は、パス全体をダブルクォーテーション (") で囲んでください。

指定されたユーザ情報指定ファイルのユーザ情報がすべて正常であれば、その内容が公開鍵認証情報定義ファイルに一括で登録または更新されます。ただし、次の場合はエラーとなり、登録・更新は実施されません。

- 指定されたファイルが存在しない場合
- ファイル内のユーザ情報に 1 つでも不正があった場合
- ファイル内に鍵 ID が重複している場合

なお、実行対象のユーザ情報指定ファイルには、ユーザ情報の登録または更新のどちらかだけを指定できません。

ユーザ情報指定ファイルの記載方法については、「[6.21.1 ユーザ情報指定ファイル](#)」を参照してください。

-keyfile <秘密鍵のファイルパス>

秘密鍵ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

指定したファイルが存在しない場合はエラーになります。

-pass <秘密鍵のパスフレーズ>

対象となる秘密鍵にパスフレーズが設定されている場合、秘密鍵のパスフレーズを指定します。

-keyid <鍵 ID> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1~8 文字))

秘密鍵を一意に区別するための ID を指定します。

- 公開鍵認証情報の登録時
公開鍵認証情報定義ファイル内で一意となる ID を指定してください。
- 公開鍵認証情報の更新時 (引数-r を指定した場合)
公開鍵認証情報定義ファイルに登録されている ID を指定してください。

-r

登録済みの公開鍵認証情報を更新する場合に指定します。

-f <公開鍵認証情報定義ファイルのパス>

このコマンドで定義した公開鍵認証情報を保存するための、公開鍵認証情報定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

指定したファイルが存在しない場合は次のように動作します。

- 公開鍵認証情報の登録時
指定したファイル名で、公開鍵認証情報定義ファイルが新規作成されます。ただし、指定したディレクトリが存在しない場合はエラーになります。
- 公開鍵認証情報の更新時 (引数-r を指定した場合)
エラーになります。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 公開鍵認証情報定義ファイルは直接編集しないでください。
- コマンドの実行後は、秘密鍵ファイルの編集・移動はしないでください。

csakeydel (公開鍵認証の秘密鍵情報の削除)

形式

```
csakeydel [-h]
           -keyid <鍵ID>
           -f <公開鍵認証情報定義ファイルのパス>
```

機能

公開鍵認証情報定義ファイルに登録されている秘密鍵の情報を削除します。

削除した秘密鍵の情報は、認証情報を使用するサービスアダプタの開始後に反映されます。また、サービスアダプタが開始している状態でこのコマンドを実行すると、削除した秘密鍵の情報は、次のサービスアダプタの開始後に反映されます。

なお、秘密鍵ファイルは、秘密鍵の情報を削除しても削除されません。公開鍵認証情報数が 0 個になった場合も、公開鍵認証情報定義ファイルは削除されません。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- コマンドを実行する管理者に限定して、公開鍵認証情報定義ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。
- 公開鍵認証情報定義ファイルのバックアップファイルの作成をお勧めします。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-keyid <鍵 ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1~8 文字))

削除したい公開鍵認証情報の秘密鍵の ID を指定します。

-f <公開鍵認証情報定義ファイルのパス>

公開鍵認証情報定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

指定したファイルが存在しない場合はエラーになります。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 公開鍵認証情報定義ファイルは直接編集しないでください。

csakeyls (公開鍵認証の秘密鍵情報の表示)

形式

```
csakeyls [-h]
          -f <公開鍵認証情報定義ファイルのパス>
```

機能

公開鍵認証情報定義ファイルに登録されている秘密鍵情報を次の形式で表示します。

```
--- (ヘッダとして「-」を可変長で表示)
公開鍵認証情報
--- (フッタとして「-」を可変長で表示)
```

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- コマンドを実行する管理者に限定して、公開鍵認証情報定義ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-f <公開鍵認証情報定義ファイルのパス>

公開鍵認証情報定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

指定したファイルが存在しない場合はエラーになります。

表示形式

(1)公開鍵認証情報定義ファイルに登録情報がある場合

公開鍵認証情報を 1 行ずつ表示します。

```
-----  
鍵ID パスフレーズ※ 秘密鍵のファイルパス  
  ⋮  
  ⋮  
-----
```

注※

パスフレーズが設定されている場合は「****」、設定されていない場合は「△△△△」（半角空白 4 つ）が表示されます。

(2)公開鍵認証情報定義ファイルに登録情報がない場合（公開鍵認証情報ファイルは存在するが、登録情報がない場合）

```
----  
none  
----
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 公開鍵認証情報定義ファイルは直接編集しないでください。

csuseradd（パスワード認証のユーザ情報の登録・更新）

形式

```
csuseradd [-h]  
          { -userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>  
            | -user <ユーザ名>  
            -pass <パスワード> }
```

機能

ユーザ認証のうち、パスワード認証に必要なユーザ情報（ユーザ名およびパスワード）を登録または更新します。登録できるユーザ数に上限はありません。

登録または更新したパスワード認証情報は、それを使用するサービスアダプタの開始後から有効になります。また、サービスアダプタが開始している状態でこのコマンドを実行すると、登録または更新したパスワード認証情報は、次のサービスアダプタの開始後から有効となります。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- このコマンドの `-pass` オプションにパスワードを指定した場合、プロセスの引数を確認できる OS 機能などによって、パスワードが検知されるおそれがあります。このため、`-userinfofile` オプションを使用した、ユーザ情報指定ファイルでのパスワードの設定を推奨します。
- コマンドを実行する管理者に限定して、パスワード認証情報定義ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。
- コマンドにユーザ情報指定ファイルを指定する場合、コマンドを実行する管理者にだけ、ユーザ情報指定ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。
- パスワード認証情報定義ファイルを更新する場合は、バックアップファイルの作成をお勧めします。

引数

`-h`

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

`-userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>`

ユーザ名、パスワードが記載されているユーザ情報指定ファイルのパスを指定します。絶対パス、またはコマンド実行時のカレントディレクトリからの相対パスで指定してください。パスが空白を含む場合は、パス全体をダブルクォーテーション (") で囲んでください。

指定されたユーザ情報指定ファイルのユーザ情報がすべて正常であれば、その内容がパスワード認証情報定義ファイルに一括で登録または更新されます。ただし、次の場合はエラーとなり、登録・更新は実施されません。

- 指定されたファイルが存在しない場合
- ファイル内のユーザ情報に 1 つでも不正があった場合
- ファイル内にユーザ名が重複している場合

なお、実行対象のユーザ情報指定ファイルには、ユーザ情報の登録または更新のどちらかだけを指定できません。

ユーザ情報指定ファイルの記載方法については、「[6.21.1 ユーザ情報指定ファイル](#)」を参照してください。

-user <ユーザ名> ~<半角英数字および半角記号> ((1~80文字))

登録または更新したいユーザ名を指定します。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])

- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (˘)
- 始め波括弧 ({ }
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

-pass <パスワード> ~<半角英数字および半角記号> ((1~80文字))

登録または更新するユーザに対応するパスワードを指定します。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」 ~ 「0x7E」), および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)

- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフлекс (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (˘)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (ˆ)

-r

登録済みのユーザのパスワードを変更する場合に指定します。

-f <パスワード認証情報定義ファイルのパス>

このコマンドで定義したパスワード認証情報を保存するための、パスワード認証情報定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

指定したファイルが存在しない場合は次のように動作します。

- パスワード認証情報の登録時
指定したファイル名で、パスワード認証情報定義ファイルが作成されます。ただし、指定したディレクトリが存在しない場合はエラーになります。
- パスワード認証情報の更新時 (引数-r を指定した場合)
エラーになります。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- パスワード認証情報定義ファイルは直接編集しないでください。

csauserdel (パスワード認証のユーザ情報の削除)

形式

```
csauserdel [-h]
            -user <ユーザ名>
            -f <パスワード認証情報定義ファイルのパス>
```

機能

パスワード認証情報定義ファイルに登録されているユーザ情報を削除します。

削除したユーザの情報は、認証情報を使用するサービスアダプタの開始後に反映されます。また、サービスアダプタが開始している状態でこのコマンドを実行すると、削除したユーザの情報は、次のサービスアダプタの開始後に反映されます。

なお、パスワード認証情報定義ファイルは、ユーザ情報数が0個になっても削除されません。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- コマンドを実行する管理者に限定して、パスワード認証情報定義ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。
- パスワード認証情報定義ファイルのバックアップファイルの作成をお勧めします。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ユーザ名> ~<半角英数字および半角記号> ((1~80文字))

削除したいユーザ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-f <パスワード認証情報定義ファイルのパス>

パスワード認証情報定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

指定したファイルが存在しない場合は、エラーになります。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- パスワード認証情報定義ファイルは直接編集しないでください。

csuserls (パスワード認証のユーザ情報の表示)

形式

```
csuserls [-h]
          -f <パスワード認証情報定義ファイルのパス>
```

機能

パスワード認証情報定義ファイルに登録されているユーザの情報を次の形式で表示します。

```
--- (ヘッダとして「-」を可変長で表示)
ユーザ名
--- (フッタとして「-」を可変長で表示)
```

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- コマンドを実行する管理者に限定して、パスワード認証情報定義ファイルに対する更新・参照権限を設定してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-f <パスワード認証情報定義ファイルのパス>

パスワード認証情報定義ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。パスに空白を含む場合は、指定値をダブルクォーテーション (") で囲みます。

指定したファイルが存在しない場合はエラーになります。

表示形式

(1)パスワード認証情報定義ファイルに登録情報がある場合

```
-----  
ユーザ名  
  ⋮  
  ⋮  
-----
```

(2)パスワード認証情報定義ファイルに登録情報がない場合

```
----  
none  
----
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- パスワード認証情報定義ファイルは直接編集しないでください。

cscapputil (アプリケーションの操作)

形式

```
cscapputil [-h]  
  -user <ログインユーザID>  
  -pass <ログインパスワード>  
  {-mng <Manager名>  
   | -host <IPアドレス>:<ポート番号>  
   | -mnguser <管理ユーザID> [-mngpass <管理ユーザパスワード>]}  
  {-operation { start | stop | delete }  
  -j2ee <J2EEサーバ名> -app <アプリケーション名>  
   | -operation list -j2ee <J2EEサーバ名>}
```

機能

HCSC サーバが管理しているアプリケーションを操作します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「7.5.3 HCSC サーバのセットアップおよびアンセットアップ時の回復方法」
- 「7.5.4 HCSC コンポーネントの配備および削除時の回復方法」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-mng <Manager 名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

Management Server を識別するための名称 (Manager 名) を指定します。リポジトリ内に存在する Manager 名を指定してください。

-host <ホスト名または IP アドレス> : <ポート番号> ~<ホスト名または IP アドレス : 文字列, ポート番号 : 数字> ((文字列 : 1 文字以上, ポート番号 : 1-65535))

Manager リモート管理機能のホスト名 (または IP アドレス) とポート番号を「:」で連結して指定します。IP アドレス, ポート番号ともに省略できません。

リポジトリが存在しない状態でも、-host オプションは指定できます。-host オプションを指定する場合、-mnguser オプションおよび-mngpass オプションを指定してください。

-mnguser <管理ユーザ ID> ~ ((1 文字以上))

Management Server の管理ユーザ ID を指定します。

-mngpass <管理ユーザパスワード> ~ ((1 文字以上))

Management Server の管理ユーザパスワードを指定します。パスワードがない場合は指定しません。

-operation { start | stop | delete }

指定したアプリケーションの操作を指定します。

- start

アプリケーションを開始します。

- stop

アプリケーションを停止します。

- delete

アプリケーションを削除します。

- list

アプリケーションを表示します。

-j2ee <J2EE サーバ名> ~ ((1 文字以上))

J2EE サーバの論理名を指定します。

-app <アプリケーション名> ~ ((1 文字以上))

アプリケーション名称を指定します。

-operation に list を指定した場合、このオプションは省略できます。指定した場合、値は無視されます。

入力例

(1)J2EE サーバ [J2EEServer] 上にあるアプリケーション [HCSCMessaging] を開始する場合

```
cscapputil -user admin -pass admin -host localhost:28099 -mnguser admin -j2ee J2EEServer  
-app HCSCMessaging -operation start
```

(2)J2EE サーバ [J2EEServer] 上にあるアプリケーション [HCSCMessaging] を停止する場合

```
cscapputil -user admin -pass admin -host localhost:28099 -mnguser admin -j2ee J2EEServer  
-app HCSCMessaging -operation stop
```

(3)J2EE サーバ [J2EEServer] 上にあるアプリケーション [HCSCMessaging] を削除する場合

```
cscapputil -user admin -pass admin -host localhost:28099 -mnguser admin -j2ee J2EEServer  
-app HCSCMessaging -operation delete
```

(4)J2EE サーバ [J2EEServer] 上にあるアプリケーションを表示する場合

```
cscapputil -user admin -pass admin -host localhost:28099 -mnguser admin -j2ee J2EEServer  
-operation list
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

このコマンドでアプリケーションを削除した場合、HCSC システムが正常に動作しなくなるおそれがあります。そのため、十分に注意して運用してください。

cscmctl (定義ファイルの管理)

形式

```
cscmctl [-h]
        -user <ログインユーザID>
        -pass <ログインパスワード>
        -cluster <クラスタ名>
        -name <サービスアダプタのサービスID | 受付ID>
        -targetfilename <定義ファイル名>
        [-basedir <カレントディレクトリ>]
        -operation {get | set | reset}
```

機能

開発環境で設定した定義ファイルに対して、次の機能を利用できます。

- 開発環境に設定された定義ファイルの取得 (-operation get)
- 定義ファイルを運用環境に設定 (-operation set)
- 運用環境上に設定した定義ファイルの削除 (-operation reset)

開発環境と運用環境で設定する値が異なる場合にこのコマンドを使用します。このコマンドで設定した定義ファイルは、運用環境でだけ有効になります。

このコマンドで削除できるのは運用環境に設定した定義ファイルだけです。開発環境で設定した定義ファイル自体は削除できません。開発環境で設定した定義ファイルを削除したい場合は、開発環境で定義ファイルを削除してください。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- -operation オプションに get を指定した場合の使用方法
「3.1.9 HCSC コンポーネントの定義ファイルを運用環境に取得する」
- -operation オプションに set を指定した場合の使用方法
「3.1.10 HCSC コンポーネントの定義ファイルを運用環境に設定、更新する」
- -operation オプションに reset を指定した場合の使用方法

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

サービス情報を変更するサービスアダプタがあるクラスタ名を指定します。リポジトリ内に存在するクラスタが 1 つの場合は、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルに指定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

-name <サービスアダプタのサービス ID> | <受付 ID> ~ <半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

次のどちらかを指定します。

- サービスアダプタの定義ファイルを設定する場合：サービス ID
- ユーザ定義受付の定義ファイルを設定する場合：受付 ID

-targetfilename <定義ファイル名> ~((1 文字以上))

取得、設定、更新、および消去する定義ファイル名を指定します。指定できる値はファイル名だけです。

取得、設定、および更新時に、存在しないファイル名を指定した場合はエラーになります。消去時に存在しないファイル名を指定した場合は、エラーにはなりません。処理を続けます。

ディレクトリやファイルのパスの長さは、OS に依存して制限されます。-basedir オプションに指定したカレントディレクトリと連結したパスの長さが、OS で制限された長さに達しないよう設定してください。

-basedir <カレントディレクトリ> ~ ((1 文字以上))

取得、設定、および更新する定義ファイルのディレクトリパス名を相対パスまたは絶対パスで指定します。指定値はディレクトリである必要があります。存在するディレクトリを指定してください。

このオプションを指定しない場合は、コマンド実行時のパスがカレントディレクトリと見なされます。

ディレクトリやファイルのパスの長さは、OS に依存して制限されます。-targetfilename オプションに指定した定義ファイル名と連結したパスの長さが、OS で制限された長さに達しないよう設定してください。

なお、-operation reset オプションが指定された場合、このオプションは無視されます。

-operation {get | set | reset}

開発環境で設定した定義ファイルを運用環境に取得、設定、および削除します。開発環境での設定とは異なる設定をする場合に使用します。

- get
 - targetfilename オプションで指定した定義ファイルが、-basedir オプションで指定したディレクトリ下に配置されます。
 - 同一のファイル名が存在する場合、ファイルが上書きされます。
- set
 - basedir オプションで指定したディレクトリ下にある、-targetfilename オプションで指定したファイルが運用環境のリポジトリに設定されます。すでに同名の定義ファイルが設定されている場合は、内容が更新されます。
- reset
 - targetfilename オプションで指定したファイル名が、-operation set オプションで指定した運用環境のリポジトリのファイル名と一致する場合、定義ファイルが削除されます。

入力例

サービスアダプタの定義ファイルを設定する場合

(1)定義ファイル「adptp1_config.xml」を運用環境に取得する場合

```
cscmctl -cluster CLS1 -name ADP1 -targetfilename adptp1_config.xml -basedir C:%tmp -operation get
```

(2)運用環境の定義ファイル「adptp1_config.xml」を設定または更新する場合

```
cscmctl -cluster CLS1 -name ADP1 -targetfilename adptp1_config.xml -basedir C:%tmp -operation set
```

(3)運用環境の定義ファイル「adptp1_config.xml」の設定を削除する場合

```
cscmctl -cluster CLS1 -name ADP1 -targetfilename adptp1_config.xml -operation reset
```

TP1/RPC 受付の定義ファイルを設定する場合

(1)定義ファイル「cscurecftp1rpc.properties」を運用環境に取得する場合

```
cscmctl -cluster CLS1 -name RCP1 -targetfilename cscurecftp1rpc.properties -basedir C:%tmp -operation get
```

(2)運用環境の定義ファイル「cscurecftp1rpc.properties」を設定または更新する場合

```
cscmctl -cluster CLS1 -name RCP1 -targetfilename cscurecftp1rpc.properties -basedir C:%tmp -operation set
```

(3)運用環境の定義ファイル「cscurecptlrpc.properties」の設定を削除する場合

```
cscmctl -cluster CLS1 -name RCP1 -targetfilename cscurecptlrpc.properties -operation reset
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- -operation set オプションまたは-operation reset オプションは、HCSC コンポーネントの配備前に実行してください。
- -operation get オプションでは、実行環境の独自定義ファイル設定機能によって実行環境に配置された独自定義ファイルは取得されません。

csccompoconfig (HCSC コンポーネントの定義)

形式

```
csccompoconfig [-h]
  -user <ログインユーザID>
  -pass <ログインパスワード>
  {-operation get -csc <HCSCサーバ名>
  [-outputfile <出力先パス付きファイル名>]
  | -operation set -propfile
  {<ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル名>
  | <アプリケーション統合属性ファイル名>}
  {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}}
  -name <受付ID>
```

機能

ユーザ定義受付の定義情報の取得および変更をします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- -operation オプションに set を指定した場合の使用方法
「3.1.15 ユーザ定義受付の定義情報を設定する」
- -operation オプションに get を指定した場合の使用方法
「3.1.16 ユーザ定義受付の定義情報を確認する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-operation {get | set}

このコマンドの動作を指定します。

- get
指定したユーザ定義受付に設定されている定義を標準出力に出力します。
- set
-propfile オプションで指定したファイルの内容を指定したユーザ定義受付に反映します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。

-outputfile <出力先パス付きファイル名> ~ ((1-200 バイト))

-operation get オプションを指定したときに、定義内容を出力するファイル名とパスを指定します。相対パス、または絶対パスで指定します。

-propfile {<ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル名> | <アプリケーション統合属性ファイル名>} ~ ((1-200 バイト))

次に示すどちらかの受付に定義する定義一覧を記載したファイル名を指定します。相対パス、または絶対パスで指定します。-operation set オプションを指定したときに有効になります。

- SOAP 受付：ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルを設定します。
- カスタム受付（ファイルイベント受付以外）：アプリケーション統合属性ファイルを設定します。

ファイルイベント受付の場合は、このコマンドでアプリケーション統合属性ファイルの変更はできません。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8文字))<-csc オプションで指定したサーバ名>>

クラスタ名を指定します。-operation set オプションを指定したときに有効になります。また、クラスタ種別が HA のときに-cluster オプションを指定するとエラーになります。

-name <受付 ID> ~ <半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8文字))

ユーザ定義受付の受付 ID を指定します。

出力形式

-operation get オプションを指定した場合の出力形式を示します。

- SOAP 受付

```
user-defined-reception-soap.threads.maximum=20
user-defined-reception-soap.queue-size=1000
user-defined-reception-soap.exclusive.threads=2
```

- カスタム受付

アプリケーション統合属性ファイル形式に従います。

-operation get オプションを指定した場合に、-outputfile オプションに出力先パス付きファイル名を指定すると、標準出力する内容が、指定したファイルに出力されます。

入力例

(1)サーバ「CSCSrv1」に配備されている SOAP ユーザ定義受付 ID「URECP1」の定義を取得する場合

```
cscscompoconfig -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -name URECP1 -operation get
```

(2)サーバ「CSCSrv1」に配備されている SOAP ユーザ定義受付 ID「URECP1」の定義をファイルに出力する場合

```
cscscompoconfig -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -name URECP1 -operation get -outputfile runtime_recp1.properties
```

(3)サーバ「CSCSrv1」に配備されているカスタム受付 ID「CRECP1」の定義を取得する場合

```
cscscompoconfig -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -name CRECP1 -operation get
```

(4)サーバ「CSCSrv1」に配備されているカスタム受付 ID「CRECP1」の定義をファイルに出力する場合

```
cscscompoconfig -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -name CRECP1 -operation get -outputfile userdef_crecp1.xml
```

(5)クラスタ「CLS1」に配備されているすべての SOAP ユーザ定義受付 ID「URECP1」の定義を設定する場合

```
cscscompoconfig -user admin -pass admin -cluster CLS1 -name URECP1 -operation set -profile cscsurcptnconfig.properties
```

(6) クラスタ「CLS1」に配備されているすべてのカスタム受付ID「CRECP1」の定義を設定する場合

```
cscscompoconfig -user admin -pass admin -cluster CLS1 -name CRECP1 -operation set -profile userdef_crecp1.xml
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- SOAP 受付の場合、このコマンドは HCSC コンポーネントの配備後に実施してください。カスタム受付の場合、このコマンドは HCSC コンポーネントの配備後で、かつサービス停止時に実施してください。
- 配備前の HCSC コンポーネントに対してこのコマンドを実行した場合はエラーとなります。
- デフォルト値から変更していない値は出力されません。
- HCSC コンポーネントを削除したときに、その HCSC コンポーネントに設定した値は無効になります。
- `-operation set` オプションは、実行環境の独自定義ファイル設定機能を使用している HCSC コンポーネントに対しては指定できません。実行した場合の動作は保証しません。

実行環境の独自定義ファイル設定機能については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.10.3 実行環境の独自定義ファイル設定機能を使用した独自定義ファイルの定義手順」を参照してください。

cscscompodeploy (HCSC コンポーネントの配備)

形式

```
cscscompodeploy [-h]
                 -user <ログインユーザID>
                 -pass <ログインパスワード>
                 {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
                 {-name <サービスID | 受付ID>
                  | -all [-errskip]
                  | -namelist <HCSCコンポーネント指定ファイル名> [-errskip]}
```

機能

セットアップ済みの HCSC サーバに、HCSC コンポーネントを配備します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

また、実行対象が複数の HCSC コンポーネントである場合、一部の HCSC コンポーネントでエラー（通信障害など、HCSC コンポーネント呼び出し時に発生するエラーを含む）が発生しても、その HCSC コンポーネントの処理をスキップして処理を継続することもできます（エラースキップ機能）。エラースキップ機能は、運用環境の運用画面や開発環境の一括実行機能（「複数サービスをサーバに配備して開始」など）からは実行できません。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「3.1.8 サービスアダプタを配備する」
- 「3.1.13 ビジネスプロセスを配備する」
- 「3.1.14 ユーザ定義受付を配備する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC コンポーネントを配備する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC コンポーネントを一括配備するクラスタ名を指定します。なお、クラスタ種別が HA のときに cluster を指定するとエラーになります。

-name <サービス ID | 受付 ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

配備する HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID を指定します。

-all

未配備の HCSC コンポーネントをすべて配備します。-csc と同時に指定した場合は、その HCSC サーバ内で未配備の HCSC コンポーネントをすべて配備します。-cluster と同時に指定した場合は、そのクラスタ内で未配備の HCSC コンポーネントをすべて配備します。

このオプションを指定した場合の HCSC コンポーネントの配備順は次のとおりです。-errskip と同時に指定していない場合、処理中にエラーが発生すると、すべての HCSC コンポーネントが配備されていなくても配備処理は終了します。

配備順	HCSC コンポーネントの種類	HCSC コンポーネント内の配備順
1	サービスアダプタ	サービス ID の昇順
2	ビジネスプロセス	ビジネスプロセス名の昇順
3	ユーザ定義受付	次の優先順位に従って実行されます。 1. ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付 ID の昇順 2. ビジネスプロセス名の昇順、およびユーザ定義受付（呼出先固定）の受付 ID の昇順

-errskip

指定された HCSC コンポーネントの一部で配備に失敗しても、処理を継続します（エラースキップ機能）。このオプションは、-all または -namelist と同時に指定してください。

エラースキップ機能を使用していて、HCSC コンポーネントでエラーが発生した場合、HCSC-Manager のログおよびコンソールへのメッセージ出力の流れは次のようになります。

1. 一部の HCSC コンポーネントでエラーが発生すると、該当するエラーメッセージを出力して、処理を継続します。
2. すべての HCSC コンポーネントの処理終了後、エラーとなった HCSC コンポーネントの件数を通知する警告メッセージを出力します。

なお、このオプションを HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル（csccmd.properties）に定義すれば、常にエラースキップ機能が有効になり、このコマンドでの指定を省略できます。HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの定義方法については、「[6.5.2 HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル](#)」を参照してください。

-namelist <HCSC コンポーネント指定ファイル名> ~((1-200 バイト))

配備する HCSC コンポーネントを HCSC コンポーネント指定ファイルで指定します。絶対パスまたは相対パスで指定します。ファイルが存在しない場合は異常終了します。HCSC コンポーネント指定ファイルについては、「[6.5.5 HCSC コンポーネント指定ファイル](#)」を参照してください。

なお、指定された HCSC コンポーネントの配備順およびエラー発生時の処理は、-all オプションと同じです。

入力例

(1)単一の HCSC サーバにすべてのサービスアダプタを配備する場合

```
csccompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -all
```

(2)指定したサービスアダプタを単一の HCSC サーバに配備する場合

```
csccompodeploy -user <ログインユーザID> -pass <ログインパスワード> -csc <HCSCサーバ名> -name <サービスアダプタのサービスID>
```

(3)HCSC サーバ「CSCSrv1」下にあるすべての HCSC コンポーネントを配備し、一部の HCSC コンポーネントの配備に失敗しても処理を継続する場合

```
csccompodeploy -csc CSCSrv1 -all -errskip
```

(4)HCSC サーバ「CSCSrv1」下にある HCSC コンポーネントのうち、HCSC コンポーネント指定ファイル「hscscomponent.txt」に指定されている HCSC コンポーネントを配備し、一部の HCSC コンポーネントの配備に失敗しても処理を継続する場合

```
csccompodeploy -csc CSCSrv1 -namelist hscscomponent.txt -errskip
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

-errskip を指定する場合は、HCSC コンポーネントの処理でエラーが発生しても処理を継続するため、戻り値は「0」となります。ただし、オプションの組み合わせ不正など、HCSC コンポーネント呼び出し時以外でエラーが発生した場合、戻り値は「0」以外となるときがあります。

注意事項

- このコマンドを複数のクライアントから1つの HCSC サーバに対して同時に実行すると、処理エラー（排他エラー、またはコンポーネントへの操作重複による異常終了）となるおそれがあります。エラーが発生した場合は、次のどちらかの方法でコマンドを再実行してください。
 - all オプションを指定して HCSC コンポーネントを再配備する
 - name オプションを指定して個別に HCSC コンポーネントを配備する

csccompostart (HCSC コンポーネントの開始)

形式

```
csccompostart [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
               {-name <サービスID | 受付ID>
                | -all [-errskip]
                | -namelist <HCSCコンポーネント指定ファイル名> [-errskip]}
               [-nogc]
```

機能

HCSC コンポーネントを開始します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

また、実行対象が複数の HCSC コンポーネントである場合、一部の HCSC コンポーネントでエラー（通信障害など、HCSC コンポーネント呼び出し時に発生するエラーを含む）が発生しても、その HCSC コンポーネントの処理をスキップして処理を継続することもできます（エラースキップ機能）。エラースキップ機能は、運用環境の運用画面や開発環境の一括実行機能（「複数サービスをサーバに配備して開始」など）からは実行できません。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- ・ [5.3.7 サービスアダプタを開始する]
- ・ [5.3.8 ビジネスプロセスを開始する]
- ・ [5.3.9 ユーザ定義受付を開始する]

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

開始する HCSC コンポーネントの HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC コンポーネントを一括開始するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-name <サービス ID | 受付 ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

開始する HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID を指定します。-cluster と同時に指定した場合は、クラスタ内の同じサービス ID の HCSC コンポーネントをすべて開始します。

-all

指定範囲内で停止中の HCSC コンポーネントをすべて開始します。-csc と同時に指定した場合は、指定した HCSC サーバ内で停止中のすべての HCSC コンポーネントを開始します。-cluster と同時に指定した場合は、指定したクラスタ内で停止中のすべての HCSC コンポーネントを開始します。

このオプションを指定した場合の HCSC コンポーネントの開始順は次のとおりです。-errskip と同時に指定していない場合、処理中にエラーが発生すると、すべての HCSC コンポーネントが開始されていなくても開始処理は終了します。

開始順	HCSC コンポーネントの種類	HCSC コンポーネント内の開始順
1	サービスアダプタ	サービス ID の昇順
2	ビジネスプロセス	ビジネスプロセス名の昇順
3	ユーザ定義受付	次の優先順位に従って実行されます。 1. ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付 ID の昇順 2. ビジネスプロセス名の昇順、およびユーザ定義受付（呼出先固定）の受付 ID の昇順

-errskip

指定された HCSC コンポーネントの一部で開始に失敗しても、処理を継続します（エラースキップ機能）。このオプションは、-all または -namelist と同時に指定してください。

エラースキップ機能を使用していて、HCSC コンポーネントでエラーが発生した場合、HCSC-Manager のログおよびコンソールへのメッセージ出力の流れは次のようになります。

1. 一部の HCSC コンポーネントでエラーが発生すると、該当するエラーメッセージを出力して、処理を継続します。
2. すべての HCSC コンポーネントの処理終了後、エラーとなった HCSC コンポーネントの件数を通知する警告メッセージを出力します。

なお、このオプションを HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル (csccmd.properties) に定義すれば、常にエラースキップ機能が有効になり、このコマンドでの指定を省略できます。HCSC-Manager コ

マンド共通定義ファイルの定義方法については、「[6.5.2 HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル](#)」を参照してください。

-namelist <HCSC コンポーネント指定ファイル名> ~((1-200 バイト))

開始する HCSC コンポーネントを HCSC コンポーネント指定ファイルで指定します。絶対パスまたは相対パスで指定します。ファイルが存在しない場合は異常終了します。HCSC コンポーネント指定ファイルについては、「[6.5.5 HCSC コンポーネント指定ファイル](#)」を参照してください。

なお、指定された HCSC コンポーネントの開始順およびエラー発生時の処理は、-all オプションと同じです。

-nogc

FullGC を発生させないでコンポーネントを開始します。ただし、このオプションを指定しても、JavaVM が自動的に発生させる FullGC や、J2EE サーバの異常処理で発行される FullGC は抑止されません。

HCSC コンポーネント開始時に明示的に FullGC を発生させる場合は、javagc コマンドを実行してください。javagc コマンドについては、マニュアル「[アプリケーションサーバ リファレンス コマンド編](#)」の「javagc (GC の強制発生)」を参照してください。

入力例

(1)HCSC サーバ「HCSC」下にある「BP1」を開始する場合

```
cscocompostart -user admin -pass admin -csc HCSC -name BP1
```

(2)HCSC サーバ「HCSC」下にあるすべての HCSC コンポーネントを一括開始する場合

```
cscocompostart -user admin -pass admin -csc HCSC -all
```

(3)クラスタ「Cluster」下にある HCSC サーバごとに「BP1」を一括開始する場合

```
cscocompostart -user admin -pass admin -cluster Cluster -name BP1
```

(4)クラスタ「Cluster」下にあるすべての HCSC コンポーネントを一括開始する場合

```
cscocompostart -user admin -pass admin -cluster Cluster -all
```

(5)FullGC を発生させないで、HCSC サーバ「CSCSrv1」下にある「BP1」を一括開始する場合

```
cscocompostart -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -name BP1 -nogc
```

(6)HCSC サーバ「CSCSrv1」下にある HCSC コンポーネントのうち、HCSC コンポーネント指定ファイル「hscocomponent.txt」に指定されている HCSC コンポーネントを一括開始する場合

```
cscocompostart -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -namelist hscocomponent.txt
```

(7)HCSC サーバ「CSCSrv1」下にあるすべての HCSC コンポーネントを開始し、一部の HCSC コンポーネントの開始に失敗しても処理を継続する場合

```
cscocompostart -csc CSCSrv1 -all -errskip
```

(8)HCSC サーバ「CSCSrv1」下にある HCSC コンポーネントのうち、HCSC コンポーネント指定ファイル「hscscomponent.txt」に指定されている HCSC コンポーネントを開始し、一部の HCSC コンポーネントの開始に失敗しても処理を継続する場合

```
cscscompostart -csc CSCSrv1 -namelist hscscomponent.txt -errskip
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

-errskip を指定する場合は、HCSC コンポーネントの処理でエラーが発生しても処理を継続するため、戻り値は「0」となります。ただし、オプションの組み合わせ不正など、HCSC コンポーネント呼び出し時以外でエラーが発生した場合、戻り値は「0」以外となる場合があります。

注意事項

- このコマンドは停止状態の HCSC コンポーネントに対して実行してください。複数の HCSC コンポーネントが指定された場合、起動状態ではない HCSC コンポーネントが処理対象となります。起動状態の HCSC コンポーネントが指定された場合は処理をスキップします。
- コマンド実行時に HCSC サーバは起動している必要があります。
- cluster や -all を指定してエラーになった場合、結果を cscsstatus コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。
- このコマンドを複数のクライアントから 1 つの HCSC サーバに対して同時に実行すると、処理エラー（排他エラー、またはコンポーネントへの操作重複による異常終了）となるおそれがあります。エラーが発生した場合は、次のどちらかの方法でコマンドを再実行してください。
 - all オプションを指定して HCSC コンポーネントを起動する
 - name オプションを指定して個別に HCSC コンポーネントを起動する

cscscompostop (HCSC コンポーネントの停止)

形式

```
cscscompostop [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
```

```
{-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
{-name <サービスID | 受付ID> | -all
| -namelist <HCSCコンポーネント指定ファイル名>}
[-nogc]
```

機能

HCSC コンポーネントを停止します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- ・「5.3.36 ユーザ定義受付を停止する」
- ・「5.3.37 サービスアダプタを停止する」
- ・「5.3.38 ビジネスプロセスを停止する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

停止する HCSC コンポーネントの HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC コンポーネントを一括停止するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに-cluster を指定するとエラーになります。

-name <サービス ID | 受付 ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

停止する HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID を指定します。-cluster と同時に指定した場合は、クラスタ内の同じサービス ID の HCSC コンポーネントをすべて停止します。

-all

指定範囲内で開始中の HCSC コンポーネントをすべて停止します。-csc と同時に指定した場合は、その HCSC サーバ内で開始中のすべての HCSC コンポーネントを停止します。-cluster と同時に指定した場合は、そのクラスタ内で開始中のすべての HCSC コンポーネントを停止します。

このオプションを指定した場合の HCSC コンポーネントの停止順は次のとおりです。処理中にエラーが発生した場合は、すべての HCSC コンポーネントが停止されていなくても停止処理は終了します。

停止順	HCSC コンポーネントの種類	HCSC コンポーネント内の停止順
1	ユーザ定義受付	次の優先順位に従って実行されます。 1. ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付 ID の昇順 2. ビジネスプロセス名の昇順, およびユーザ定義受付（呼出先固定）の受付 ID の昇順
2	ビジネスプロセス	ビジネスプロセス名の昇順
3	サービスアダプタ	サービス ID の昇順

-namelist <HCSC コンポーネント指定ファイル名> ~((1-200 バイト))

停止する HCSC コンポーネントを HCSC コンポーネント指定ファイルで指定します。絶対パスまたは相対パスで指定します。ファイルが存在しない場合は異常終了します。HCSC コンポーネント指定ファイルについては、「6.5.5 HCSC コンポーネント指定ファイル」を参照してください。

なお、指定された HCSC コンポーネントの停止順は、-all オプションと同じです。

-nogc

FullGC を発生させないでコンポーネントを停止します。ただし、このオプションを指定しても、JavaVM が自動的に発生させる FullGC は抑止されません。

入力例

(1)HCSC サーバ「HCSC」下にある「BP1」を停止する場合

```
cscocompostop -user admin -pass admin -csc HCSC -name BP1
```

(2)HCSC サーバ「HCSC」下にあるすべての HCSC コンポーネントを一括停止する場合

```
cscocompostop -user admin -pass admin -csc HCSC -all
```

(3)クラスタ「Cluster」下にある HCSC サーバごとに「BP1」を一括停止する場合

```
cscocompostop -user admin -pass admin -cluster Cluster -name BP1
```

(4)クラスタ「Cluster」下にあるすべての HCSC コンポーネントを一括停止する場合

```
cscocompostop -user admin -pass admin -cluster Cluster -all
```

(5)FullGC を発生させないで、HCSC サーバ「CSCSrv1」下にある「BP1」を一括停止する場合

```
cscscompostop -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -name BP1 -nogc
```

(6)HCSC サーバ「CSCSrv1」下にある HCSC コンポーネントのうち、HCSC コンポーネント指定ファイル「hscscomponent.txt」に指定されている HCSC コンポーネントを一括停止する場合

```
cscscompostop -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -namelist hscscomponent.txt
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは開始状態の HCSC コンポーネントに対して実行してください。複数の HCSC コンポーネントが指定された場合、停止状態ではない HCSC コンポーネントが処理対象となります。停止状態の HCSC コンポーネントが指定された場合は処理をスキップします。
- コマンド実行時に HCSC サーバは起動している必要があります。
- cluster や-all を指定してエラーになった場合、結果を cscstatus コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。
- このコマンドを複数のクライアントから 1 つの HCSC サーバに対して同時に実行すると、処理エラー（排他エラー、またはコンポーネントへの操作重複による異常終了）となるおそれがあります。エラーが発生した場合は、次のどちらかの方法でコマンドを再実行してください。
 - all オプションを指定して HCSC コンポーネントを停止する
 - name オプションを指定して個別に HCSC コンポーネントを停止する

cscscompoundeploy（配備済みの HCSC コンポーネントの削除）

形式

```
cscscompoundeploy [-h]
  -user <ログインユーザID>
  -pass <ログインパスワード>
  {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
  {-name <サービスID | 受付ID> | -all
  | -namelist <HCSCコンポーネント指定ファイル名>}
```

```
[-force]
[-ignore]
[-nogc]
```

機能

実行環境に配備した HCSC コンポーネントを削除します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「3.3.1 サービスアダプタを削除する」
- 「3.3.2 ビジネスプロセスを削除する」
- 「3.3.3 ユーザ定義受付を削除する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

実行環境から削除する HCSC コンポーネントが属している HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC コンポーネントを一括削除するクラスタ名を指定します。なお、クラスタ種別が HA のときに-cluster を指定するとエラーになります。

-name <サービス ID | 受付 ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

実行環境から削除する HCSC コンポーネントのサービス ID または受付 ID を指定します。

-all

配備した HCSC コンポーネントをすべて削除します。-csc と同時に指定した場合は、その HCSC サーバ内に配備された HCSC コンポーネントをすべて削除します。-cluster と同時に指定した場合は、そのクラスタ内に配備された HCSC コンポーネントをすべて削除します。

このオプションを指定した場合の HCSC コンポーネントの削除順は次のとおりです。処理中にエラーが発生した場合は、すべての HCSC コンポーネントが削除されていなくても削除処理は終了します。

削除順	HCSC コンポーネントの種類	HCSC コンポーネント内の削除順
1	ユーザ定義受付	次の優先順位に従って実行されます。 <ul style="list-style-type: none">ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付 ID の昇順ビジネスプロセス名の昇順、およびユーザ定義受付（呼出先固定）の受付 ID の昇順
2	ビジネスプロセス	ビジネスプロセス名の昇順
3	サービスアダプタ	サービス ID の昇順

-namelist <HCSC コンポーネント指定ファイル名> ~((1-200 バイト))

削除する HCSC コンポーネントを HCSC コンポーネント指定ファイルで指定します。絶対パスまたは相対パスで指定します。ファイルが存在しない場合は異常終了します。HCSC コンポーネント指定ファイルについては、「6.5.5 HCSC コンポーネント指定ファイル」を参照してください。

なお、指定された HCSC コンポーネントの削除順は、-all オプションと同じです。

-force

配備したサービスアダプタを強制削除します。このオプションは、サービスアダプタに対して有効です。ビジネスプロセスおよびユーザ定義受付に対してこのオプションを指定しても、削除されません。なお、削除するサービスアダプタが非同期（MDB（WS-R））の場合、転送キューにメッセージが残っていてもサービスアダプタを削除します。

-ignore

実行環境へ配備した HCSC コンポーネントの削除に失敗した場合にも、リポジトリの情報を更新する場合に指定します。ハードディスク障害やアンセットアップ時の通信障害による実行環境とリポジトリ環境の不整合を調整するために使用します。

-nogc

FullGC を発生させないでコンポーネントを削除します。ただし、このオプションを指定しても、JavaVM が自動的に発生させる FullGC は抑止されません。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。

戻り値	意味
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
4	仕掛かっている電文があるため、サービスアダプタの削除に失敗しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドを複数のクライアントから 1 つの HCSC サーバに対して同時に実行すると、処理エラー（排他エラー、またはコンポーネントへの操作重複による異常終了）となるおそれがあります。エラーが発生した場合は、次のどちらかの方法でコマンドを再実行してください。
 - all オプションを指定して HCSC コンポーネントを削除する
 - name オプションを指定して個別に HCSC コンポーネントを削除する

cscenvbackup (HCSC-Manager 環境のバックアップ)

形式

```
cscenvbackup [-h]
              -user <ログインユーザID>
              -pass <ログインパスワード>
              [-backupdir <バックアップファイル出力先ディレクトリ>]
```

機能

HCSC-Manager 環境で発生した障害の復旧やスケールアップなどの環境移行をするために、HCSC-Manager 環境の復元に必要なファイルをバックアップします。バックアップファイル名は、次の形式で付与されます。

IPv4 の場合：cscmngBKaaabbbcccd_YYYYMMDDhhmmss.zip

IPv6 の場合：cscmngBKaaaabbbcccddeeefffgggghhhh_YYYYMMDDhhmmss.zip

cscmngBK :

HCSC-Manager 環境のバックアップファイルであることを示します。

aaabbbcccd :

コマンドを実行したマシンの IPv4 アドレスを示します。ただし、IP アドレスの取得に失敗した場合は、ファイル名に含まれません。

aaaabbbbccccddddeeeeffffgggghhhh :

コマンドを実行したマシンの IPv6 アドレスを示します。ただし、IP アドレスの取得に失敗した場合は、ファイル名に含まれません。

YYYYMMDDhhmmss :

バックアップした時間を示します。

YYYY : 西暦年, MM : 月, DD : 日, hh : 時, mm : 分, ss : 秒

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.9.3 運用環境のバックアップと復旧」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-backupdir <バックアップファイル出力先ディレクトリ> ((1-100 バイト))

HCSC-Manager 環境のバックアップファイルの出力先ディレクトリを指定します。このオプションを省略した場合、HCSC-Manager 定義ファイルに指定した出力先が仮定されます。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

cscrepdiff コマンドで現在のシステム構成情報との比較はできません。

cscenvrestore (HCSC-Manager 環境のリストア)

形式

```
cscenvrestore [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               -restorefile <HCSC-Manager動作環境のバックアップファイル名>
```

機能

次に示す HCSC-Manager 環境のバックアップファイルを利用して環境を復元します。

- リポジトリインポート成功時に自動的に取得したバックアップファイル
- cscenvbackup コマンドで取得したバックアップファイル

これら以外のファイルから環境を復元することはできません。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.9.3 運用環境のバックアップと復旧」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-restorefile <HCSC-Manager 動作環境のバックアップファイル名> ~((1-200 バイト))

復元する HCSC-Manager 動作環境のバックアップファイル名を絶対パスまたは相対パスで指定します。デフォルトはリポジトリインポート成功時に自動取得したバックアップファイルです。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。

戻り値	意味
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

HCSC サーバ環境に合った HCSC-Manager 環境のバックアップファイルで復元してください。

cscenvupdate (実行環境のバージョンアップ)

形式

```
cscenvupdate [-h]
              -csc <HCSCサーバ名>
              [-force]
```

機能

指定した HCSC サーバに対して、実行環境のアップデートやデータベースの更新を実行します。運用環境のリポジトリのバージョンが古い場合は、リポジトリのアップデートも同時に実行されます。

HCSC サーバ名は、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 開発環境でリポジトリのバージョンアップをする場合
「付録 G 旧バージョンからの移行」
- 運用環境でリポジトリのバージョンアップをする場合
「付録 H 運用環境でリポジトリを旧バージョンから移行する方法」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-8 文字))

バージョンアップする HCSC サーバ名を指定します。

-force

cscenvupdate コマンドを実行中ではないが、エラーとなる場合に、仕掛かり中のバージョンアップを実行します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- データベースが HiRDB の場合にローリングアップデートをすると、エラーが発生することがあります。詳細は、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 G.4 ローリングアップデートの場合の移行手順」を参照してください。
- コマンドがエラーになった場合は、エラーを取り除いてコマンドを再実行してください。
- リポジトリのアップデート処理中にファイル入出力エラーが発生した際、コマンドの再実行時にメッセージ KEOS50133-E が出力される場合があります。この場合は、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.6.2 ファイルの入出力に失敗した場合の回復方法」を参照して、手動で環境を復旧してください。
- 運用環境のリポジトリのバージョンが古い場合は、次に示すディレクトリのあるドライブに対し、リポジトリのディスク使用量の3倍以上の空き容量があることを確認してください。
 - サービスプラットフォームのインストールディレクトリ
 - CSCMNG_HOME 環境変数に設定したディレクトリ

cscfscls (共通フォルダの参照)

形式

```
cscfscls [-h]
         -user <ログインユーザID>
         -pass <ログインパスワード>
         {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
         {-folder <共通フォルダ定義名> | -all}
         [-t <開始日時> | -d <日数>]
         [-recursive]
```

機能

共通フォルダ内のファイルを参照します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

共通フォルダ以下に、ユーザが作成したファイルおよびディレクトリが存在する場合は、ディレクトリ内のファイルおよびディレクトリを再帰的に参照することができます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.21 共通フォルダの情報を参照する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。大文字と小文字は区別されます。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

クラスタ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-folder <共通フォルダ定義名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-64 文字))

共通フォルダ定義名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-all

すべての共通フォルダを対象とします。

-t <開始日時>

指定した日時以前の共通フォルダ内のファイルを参照します。-recursive オプションが指定され、かつ共通フォルダ内のサブフォルダにファイルが存在しない場合は、指定した日時以前のサブフォルダを参照します。なお、指定できる日時の形式は次の形式です。また、存在する日時を省略しないで 14 桁で指定してください。

YYYYMMDDhhmmss

YYYY：西暦年（1970 ≤ YYYY）

MM：月（01 ≤ MM ≤ 12）

DD：日（01 ≤ DD ≤ 31）

hh：時（00 ≤ hh ≤ 23）

mm：分（00 ≤ mm ≤ 59）

ss：秒（00 ≤ ss ≤ 59）

-d <日数> ~<整数> ((0-365))

指定した日数より以前の共通フォルダ内のファイルを参照します。-recursive オプションが指定され、かつ共通フォルダ内のサブフォルダにファイルが存在しない場合は、指定した日数より以前のサブフォルダを参照します。日数を日単位で指定してください。0 を指定した場合、すべての共通フォルダ内のファイルを参照します。

-recursive

サブフォルダ内のファイルを再帰的に参照します。サブフォルダ内のファイルは FileName に共通フォルダルートからの相対パスで表示します。サブフォルダ内にファイルが存在しない場合は、FileName にフォルダ名+” / ” を表示します。

出力形式

- サブフォルダ内のファイルを再帰的に参照しない場合

```
HCSCServerName CommonFolderName FileSize LastModifiedTime FileName
<HCSCサーバ名> <共通フォルダ定義名> <ファイルサイズ> <ファイルの最終更新時刻> <ファイル名>
:
<HCSCサーバ名> <共通フォルダ定義名> <ファイルサイズ> <ファイルの最終更新時刻> <ファイル名>
```

- サブフォルダ内のファイルを再帰的に参照する場合

```
HCSCServerName CommonFolderName FileSize LastModifiedTime FileName
<HCSCサーバ名> <共通フォルダ定義名> <ファイルサイズ> <ファイルまたはフォルダの最終更新時刻> <ファイル名またはフォルダ名>
:
<HCSCサーバ名> <共通フォルダ定義名> <ファイルサイズ> <ファイルまたはフォルダの最終更新時刻> <ファイル名またはフォルダ名>
```

説明

表示項目	説明
HCSCServerName	HCSC サーバ名を示します。
CommonFolderName	共通フォルダ定義名を示します。
FileSize	ファイルサイズ（バイト）を示します。フォルダを表示する場合は、0 バイトを表示します。

表示項目	説明
LastModifiedTime	ファイルまたはフォルダの最終更新時刻 (YYYY/MM/DD hh:mm:ss) を示します。
FileName	ファイル名またはフォルダ名を示します。ファイル名が 200 バイトを超える場合は、先頭から 200 バイトまでを表示します。

出力例を次に示します。

- サブフォルダ内のファイルを再帰的に参照しない場合

HCSCServerName	CommonFolderName	FileSize	LastModifiedTime	FileName
HCSC 6_39_111	FOLDER1	1024	2010/04/26 14:26:39	ftpcommon.txt2010_04_26_14_2
HCSC 22	FOLDER2	1050	2010/04/26 14:26:40	ftp.txt2010_04_26_14_26_39_2
HCSC 33	FOLDER3	1020	2010/04/26 14:26:50	ftp.txt2010_04_26_14_26_39_3

- サブフォルダ内のファイルを再帰的に参照する場合

HCSCServerName	CommonFolderName	FileSize	LastModifiedTime	FileName
HCSC	FOLDER1	156	2015/04/22 10:01:20	ftpcommon.txt
HCSC	FOLDER1	297	2015/04/22 10:01:20	sub1/ftp.txt
HCSC	FOLDER1	1089	2015/04/22 10:01:20	sub1/sub2/ftp.txt
HCSC	FOLDER1	0	2015/04/22 10:01:20	sub3/
HCSC	FOLDER1	0	2015/04/22 10:01:21	sub4/sub5/

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscfscrm (共通フォルダの削除)

形式

```
cscfscrm [-h]
  -user <ログインユーザID>
  -pass <ログインパスワード>
  {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
  {-folder <共通フォルダ定義名>
  [-targetfilename <ファイル名またはフォルダ名> | -t <削除開始日時> | -d <日数>]
  [-all [-t <削除開始日時> | -d <日数>]]}
```

```
[-retrycount <リトライ回数>]  
[-retryinterval <リトライ間隔(秒)>]  
[-recursive]
```

機能

共通フォルダ内のファイルおよびサブフォルダ配下のファイルを削除します。共通フォルダ、および共通フォルダ以下のフォルダは削除されません。共通フォルダ内にサブフォルダが存在する場合、サブフォルダ内のファイルを再帰的に削除することができます。

リトライ回数およびリトライ間隔はロックの取得時に使用します。複数のファイルを指定した場合、それぞれのファイルに対して有効になります。

複数のファイルを削除する場合、エラーが発生したあと、処理を中断します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.22 共通フォルダ内のファイルを削除する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。大文字と小文字は区別されます。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

クラスタ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-folder <共通フォルダ定義名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-64 文字))

共通フォルダ定義名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-targetfilename <ファイル名またはフォルダ名> ~((1-200 バイト))

削除したいファイル名またはサブフォルダ名を指定します。サブフォルダを指定した場合は、サブフォルダ直下のファイルを削除します。サブフォルダ配下のファイルを再帰的に削除する場合は、-recursive オプションを付与する必要があります。サブフォルダ内のファイルやフォルダを指定する場合は、共通フォルダルートからの相対パスで指定してください。

共通フォルダ内にあるファイルを指定してください。共通フォルダ内のファイルを参照するには、cscfscls コマンドを実行してください。

-t <削除開始日時>

指定した日時以前の共通フォルダ内のファイルを削除します。-recursive オプションが指定されている場合は、指定した日時以前のサブフォルダ内のファイルも削除します。なお、指定できる日時の形式は次の形式です。また、存在する日時を省略しないで 14 桁で指定してください。

YYYYMMDDhhmmss

YYYY：西暦年 (1970 ≤ YYYY)

MM：月 (01 ≤ MM ≤ 12)

DD：日 (01 ≤ DD ≤ 31)

hh：時 (00 ≤ hh ≤ 23)

mm：分 (00 ≤ mm ≤ 59)

ss：秒 (00 ≤ ss ≤ 59)

-d <日数> ~<整数> ((0-365))

指定した日数より以前の共通フォルダ内のファイルを削除します。-recursive オプションが指定されている場合は、指定した日時以前のサブフォルダ内のファイルも削除します。日数を日単位で指定してください。0 を指定した場合、すべての共通フォルダ内のファイルを削除します。

-all

すべての共通フォルダを対象とします。

-retrycount <リトライ回数> ~<整数> ((0-10000))

リトライ回数を指定します。デフォルトは 0 です。

0 を指定した場合、リトライをしません。

-retryinterval <リトライ間隔(秒)> ~<整数> ((0-86400))

リトライ間隔を秒で指定します。デフォルトは 1 です。

0 を指定した場合、間隔を空けずにリトライを実施します。

-recursive

サブフォルダ内のファイルを再帰的に削除します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 共通フォルダ内のファイルは自動では削除されません。ファイルの保持期限をあらかじめ決定して、定期的に削除することをお勧めします。
- コマンドを実行する前に、共通フォルダ以下に必要なファイルがないか確認してください。
- 削除対象のファイルはすべてのビジネスプロセスからアクセスされていないことを確認してください。
- ビジネスプロセスの実行中にこのコマンドを実行する場合、他プロセスとの競合によってファイルロックが取得できない可能性を考慮する必要があります。このコマンドおよび共通フォルダにアクセスする各機能で、適切なロックリトライ回数およびロックリトライ間隔を設定してください。

cscfswls (作業フォルダの参照)

形式

```
cscfswls [-h]
          -user <ログインユーザID>
          -pass <ログインパスワード>
          {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
          {-name <受付ID> | -all}
          [-t <開始日時> | -d <日数>]
```

機能

受付単位で作業フォルダを参照します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

作業フォルダ以下に、ユーザがファイルおよびディレクトリを作成した場合、ディレクトリだけが表示されます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.19 作業フォルダを参照する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。大文字と小文字は区別されます。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

クラスタ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-name <受付 ID> ~ <半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

受付 ID を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-all

すべての作業フォルダを対象とします。

-t <開始日時>

指定した日時以前の作業フォルダを参照します。なお、指定できる日時の形式は次の形式です。また、存在する日時を省略しないで 14 桁で指定してください。

YYYYMMDDhhmmss

YYYY：西暦年 (1970 ≤ YYYY)

MM：月 (01 ≤ MM ≤ 12)

DD：日 (01 ≤ DD ≤ 31)

hh：時 (00 ≤ hh ≤ 23)

mm：分 (00 ≤ mm ≤ 59)

ss：秒 (00 ≤ ss ≤ 59)

-d <日数> ~<整数> ((0-365))

指定した日数より以前の作業フォルダを参照します。日数を日単位で指定してください。0 を指定した場合、すべての作業フォルダを参照します。

出力形式

```
HCSCServerName ReceptionID FolderSize LastModifiedTime FolderName
<HCSCサーバ名> <受付ID> <フォルダ内のファイルサイズ合計> <フォルダの最終更新時刻> <フォルダ名>
:
<HCSCサーバ名> <受付ID> <フォルダ内のファイルサイズ合計> <フォルダの最終更新時刻> <フォルダ名>
```

説明

表示項目	説明
HCSCServerName	HCSC サーバ名を示します。
ReceptionID	受付 ID を示します。
FolderSize	フォルダ内のファイルサイズの合計のバイト数を示します。フォルダ自身のサイズは含まれません。
LastModifiedTime	フォルダの最終更新時刻（YYYY/MM/DD hh:mm:ss）を示します。 フォルダ内にファイルが存在する場合は、存在するファイルの中で最終更新時刻が最も新しいファイルの最終更新時刻を出力します。
FolderName	フォルダ名を示します。

出力例を次に示します。

```
HCSCServerName ReceptionID FolderSize LastModifiedTime FolderName
HCSC rcp1 1020 2010/04/26 14:26:39 01111101111120100426142639111000
HCSC rcp2 1030 2010/04/26 14:26:40 01111101111120100426142640111000
HCSC rcp3 1004 2010/04/26 14:26:50 01111101111120100426142650111000
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscfswrm (作業フォルダの削除)

形式

```
cscfswrm [-h]
          -user <ログインユーザID>
          -pass <ログインパスワード>
          {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
          {-name <受付ID> | -all }
          [ -t <削除開始日時> | -d <日数>]
```

機能

受付単位で作業フォルダを削除します。

複数のファイルを削除する場合、エラーが発生したあとの処理は終了します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.20 作業フォルダを削除する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。大文字と小文字は区別されます。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

クラスタ名を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-name <受付 ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

受付 ID を指定します。大文字と小文字は区別されます。

-all

すべての作業フォルダを対象とします。

-t <削除開始日時>

指定した日時以前の作業フォルダを削除します（作業フォルダ内のファイルやフォルダも削除します）。なお、指定できる日時の形式は次の形式です。また、存在する日時を省略しないで 14 桁で指定してください。

YYYYMMDDhhmmss

YYYY：西暦年（1970 ≤ YYYY）

MM：月（01 ≤ MM ≤ 12）

DD：日（01 ≤ DD ≤ 31）

hh：時（00 ≤ hh ≤ 23）

mm：分（00 ≤ mm ≤ 59）

ss：秒（00 ≤ ss ≤ 59）

-d <日数> ~<整数> ((0-365))

指定した日数より以前の作業フォルダ内のファイルを削除します。日数を日単位で指定してください。0 を指定した場合、すべての作業フォルダを削除します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意

- 作業フォルダが残っていると、サブディレクトリ数が OS のファイルシステムの上限に達してリクエストが実行できなくなるおそれがあります。そのため、作業フォルダは定期的に削除してください。作業フォルダを削除するときは、ビジネスプロセスの実行期間などを考慮して削除開始日時および日数を決定してください。
- コマンドを実行する前に、作業フォルダを管理する受付、およびその受付から呼び出されるビジネスプロセスを停止してください
- 削除開始日時には、実行環境の日時を指定してください。
- コマンドを実行する前に、作業フォルダ以下に必要なディレクトリおよびファイルがないか確認してください。

cscmsgtk (メッセージトラッキング機能の起動)

形式

```
cscmsgtk [-h]
          -prf <性能解析トレースファイル名>
          [-date [<読み込み開始日時>],[<読み込み終了日時>]]
```

機能

指定した条件の性能解析トレースを読み込み、メッセージトラッキング機能を起動します。メッセージトラッキング機能が起動すると、メッセージトラッキング専用の対話型のプロンプトが表示されます。このプロンプトは、メッセージトラッキング機能で使用するコマンド（メッセージトラッキングプロンプト専用のコマンド）の入力待ち状態となります。

性能解析トレースファイル名は、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.10 メッセージトラッキングを利用した障害解析」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-prf <性能解析トレースファイル名> ~((1-200 バイト))

メッセージトラッキング機能の起動時に読み込む性能解析トレースのファイル名（CSV 形式）を絶対パス、または相対パスで指定します。指定したファイルがない場合、異常終了します。

-date [<読み込み開始日時>],[<読み込み終了日時>] ~<半角数字>

メッセージトラッキング機能の起動時に読み込む性能解析トレースの範囲を指定します。なお、読み込み開始日時および読み込み終了日時は、次のどれかの形式で指定してください。また、日時には存在するものを指定してください。

形式 1：hhmmssMMddyyyy

形式 2：hhmmssMMdd

形式 3：hhmmss

- hh：時 (00 ≤ hh ≤ 23)
- mm：分 (00 ≤ mm ≤ 59)
- ss：秒 (00 ≤ ss ≤ 59)

- MM：月 (01 ≤ MM ≤ 12)
- dd：日 (01 ≤ dd ≤ 31)
- yyyy：西暦年 (1970 ≤ yyyy)

西暦年だけを省略した場合 (形式 2)，コマンド実行時の西暦年を設定します。西暦年，月，および日を省略した場合 (形式 3)，コマンド実行時の西暦年，月，および日を設定します。読み込み開始日時を省略した場合は，最も古い性能解析トレースから読み込みます。読み込み終了日時を省略した場合は，最も新しい性能解析トレースまで読み込みます。

メッセージトラッキングプロンプトで使用するコマンド

障害解析コマンド

形式

```
prf <ルートアプリケーション情報のIPアドレス>/<ルートアプリケーション情報のプロセスID>/<
ルートアプリケーション情報の通信番号>
[<通番>]
```

説明

指定したルートアプリケーション情報に一致する性能解析トレースの情報を出力します。

ルートアプリケーション情報の IP アドレス/ルートアプリケーション情報のプロセス ID/ルートアプリケーション情報の通信番号

指定したルートアプリケーション情報の一連のトレースの内容を出力します。

通番

指定した性能解析トレースの詳細情報を出力します。

一覧表示コマンド

形式

```
ls [-e] [-t] [<表示する件数>]
```

説明

ルートアプリケーション情報の一覧を出力します。出力開始日時の昇順に出力されます。

-e

エラーが発生したルートアプリケーション情報を出力します。リターンコードが 0 以外のトレースを含むルートアプリケーション情報だけが出力されます。

-t

ルートアプリケーション情報が示す一連の性能解析トレースで，最初に出力されたトレースから最後に出力されたトレースまでの経過時間が長いルートアプリケーション情報を出力します。経過時間の昇順に出力されます。

表示する件数

指定した件数のルートアプリケーション情報を出力します。性能解析トレースの出力開始日時が新しい方から、指定した件数分が出力されます。

参考

オプションは「-et」のように、続けて指定することもできます。

(例) 表示件数を 3 件に指定した場合

```
ls -et 3
```

解析対象絞り込みコマンド

形式

```
focus [<絞り込み日時>]
```

説明

指定した絞り込み日時に実行していた処理のトレースだけを解析対象に絞り込みます。

絞り込み日時

性能解析トレースの絞り込み日時を次のどれかの形式で指定します。また、日時には存在するものを指定してください。

形式 1 : hhmmssMMddyyyy

形式 2 : hhmmssMMdd

形式 3 : hhmmss

- hh : 時 (00 ≤ hh ≤ 23)
- mm : 分 (00 ≤ mm ≤ 59)
- ss : 秒 (00 ≤ ss ≤ 59)
- MM : 月 (01 ≤ MM ≤ 12)
- dd : 日 (01 ≤ dd ≤ 31)
- yyyy : 西暦年 (1970 ≤ yyyy)

西暦年だけを省略した場合 (形式 2)、コマンド実行時の西暦年を設定します。西暦年、月、および日を省略した場合 (形式 3)、コマンド実行時の西暦年、月、および日を設定します。

メッセージトラッキング機能の起動時の範囲に解析対象を戻したい場合は、絞り込み日時の指定を省略して focus コマンドを実行します。

出力モード切り替えコマンド

形式

```
mode {normal | detail}
```

説明

性能解析トレースの出力モードを切り替えます。

- normal

標準出力モードで出力します。サービスプラットフォームのトレースポイントで取得される性能解析トレースだけが出力されます。

- detail

詳細出力モードで出力します。すべての性能解析トレースが出力されます。

トレース取得ポイント表示コマンド

形式

```
id {<イベントID> | list}
```

説明

性能解析トレースの取得ポイントを表示します。

- イベント ID

指定したイベント ID のトレース取得ポイントが表示されます。

- list

サービスプラットフォームのすべてのトレース取得ポイントが表示されます。

終了コマンド

形式

```
quit
```

説明

メッセージトラッキングプロンプトを終了します。

ヘルプ表示コマンド

形式

```
help | ?
```

説明

ヘルプ情報を表示します。

入力例

(1)すべてのトレースを読み込む場合

```
cscmsgtk -prf prf_trace.csv
```

(2)コマンド実行日の 8 時 45 分 00 秒から 17 時 15 分 00 秒の間に取得したトレースを読み込む場合

```
cscmsgtk -prf prf_trace.csv -date 084500,171500
```

(3)コマンド実行年の 3 月 23 日 8 時 45 分 00 秒から 3 月 24 日 17 時 15 分 00 秒の間に取得したトレースを読み込む場合

```
cscmsgtk -prf prf_trace.csv -date 0845000323,1715000324
```

(4)2008 年 3 月 23 日 8 時 45 分 00 秒から 2008 年 3 月 24 日 17 時 15 分 00 秒の間に取得したトレースを読み込む場合

```
cscmsgtk -prf prf_trace.csv -date 08450003232008,17150003242008
```

(5)コマンド実行日の 17 時 15 分 00 秒以前に取得したすべてのトレースを読み込む場合

```
cscmsgtk -prf prf_trace.csv -date ,171500
```

(6)コマンド実行日の 8 時 45 分 00 秒以降に取得したすべてのトレースを読み込む場合

```
cscmsgtk -prf prf_trace.csv -date 084500,
```

注意事項

- 次の場合はエラーになります。
 - コマンドの引数の構文が不正な場合
 - 性能解析トレースファイルへのアクセスに失敗した場合
 - 読み込み開始日時または読み込み終了日時の指定に誤りがある場合
- cscmsgtk コマンドの実行中、またはメッセージトラッキング機能の起動中に表示されるメッセージは、ログファイルには出力されません。
- ほかのコマンドの実行中に、ファイルサイズの大きい性能解析トレースファイルを読み込んでメッセージトラッキング機能を起動した場合、ほかのコマンドのスループットが低下するおそれがあります。

cscpasswd (ユーザの管理)

形式

```
cscpasswd [-h]
  -user <ログインユーザID>
  -pass <ログインパスワード>
  {-print
   | -cscmnguser <変更後のユーザID>
   | -cscmngpass <変更後のパスワード>
   | -mng <Manager名>
   | -mnguser <変更後のユーザID>
   | [-mngpass <変更後のパスワード>]
   | -csc <HCSCサーバ名>
```

```
-cscuser <変更後のユーザID>  
-cscpass <変更後のパスワード>
```

機能

指定された条件に従ってユーザ情報を変更します。変更した情報は、コマンド正常終了後、次の画面でのログイン時、または次のコマンド起動時に反映されます。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「2.4.2 ユーザ情報を設定する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-print

HCSC-Manager が管理している HCSC-Manager のユーザ ID、Manager へアクセスするユーザ ID、および HCSC サーバが使用するデータベースへアクセスするユーザ ID を表示します。

-cscmnguser <変更後のユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager の変更後のユーザ ID を指定します。

-cscmngpass <変更後のパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

変更後の HCSC-Manager のユーザ ID に対するパスワードを指定します。

-mng <Manager 名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

Manager セットアップ時に入力した Manager 名を指定します。Manager へログイン時のユーザ情報を変更する場合に指定します。HCSC サーバ構成定義ファイルで指定した Manager 名を指定してください。

-mnguser <変更後のユーザ ID> ~ ((1 文字以上))

変更後の Manager のユーザ ID を指定します。

-mngpass <変更後のパスワード> ~ ((1 文字以上))

変更後の Manager のユーザ ID に対するパスワードを指定します。変更する Manager のユーザ ID にパスワードを設定している場合にだけ、このオプションを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-8 文字))

HCSC サーバのセットアップ時に入力した HCSC サーバ名を指定します。HCSC サーバへログイン時のユーザ情報を変更する場合に指定します。

-cscuser <変更するユーザ ID> ~ ((1 文字以上))

HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID を指定します。

-cscpass <変更するパスワード> ~ ((1 文字以上))

変更する HCSC サーバが使用するデータベースの、ユーザ ID に対するパスワードを指定します。

入力例

(1)HCSC-Manager のユーザ ID を「user1」に、パスワードを「password」に変更する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -cscmnguser user1 -cscmngpass password
```

(2)Manager 名が Manager のユーザ ID を「admin」に、パスワードを「admin」に変更する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -mng Manager -mnguser admin -mngpass admin
```

(3)HCSC サーバ「HCSC」で、アクセスするデータベースのユーザ ID を「server1」に、パスワードを「password」に変更する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -csc HCSC -cscuser server1 -cscpass password
```

(4)HCSC サーバ「HCSC」で、アクセスするデータベースのユーザ ID を「"user1"」に、パスワードを「"pass"」に変更する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -csc HCSC -cscuser ¥"user1¥" -cscpass ¥"pass¥"
```

(5)HCSC-Manager のユーザ情報を表示する場合

```
cscpasswd -user admin -pass admin -print
```

表示形式

ユーザ情報を表示する場合 (-print 指定時)

```
HCSC-Manager:HCSC-ManagerのユーザID
+ Manager名:Manager名に対応するユーザID
    HCSCサーバ名:HCSCサーバ名に対応するユーザID
    HCSCサーバ名:HCSCサーバ名に対応するユーザID
    :
+ Manager名:Manager名に対応するユーザID
```

HCSCサーバ名:HCSCサーバ名に対応するユーザID

:

注

データベースにユーザ ID を設定していない場合、HCSC サーバ名に対応するユーザ ID が表示されません。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscpidelete (プロセスインスタンスの実行履歴の削除)

形式

```
cscpidelete [-h]
             -user <ログインユーザID>
             -pass <ログインパスワード>
             -csc <HCSCサーバ名>
             {-where <where句>
              | -idlist <プロセスインスタンスの識別子のリストが
                  記載されたファイル名>
              | -wherefile <where句が記載されたファイル名>
              | [-processname <ビジネスプロセス定義名>]
                [-date [<照会開始日時>],<照会終了日時>]
                [-status {executing | completed | faulted | error | exited | all}]
              | -force}
             [-encoding <エンコーディング名>]
             [-canceltimer <中断時間>]
```

機能

セットアップ後の HCSC サーバに対して、指定された条件に従ってプロセスインスタンスの実行履歴を削除します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「6.1.4 プロセスインスタンスの実行履歴を削除する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

SQL を実行する HCSC サーバ名を指定します。

-where <where 句> ~ ((1 文字以上))

削除対象となるプロセスインスタンスのプロセス概要情報を検索するための where 句を指定します。where 句に記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL リファレンスマニュアルを参照してください。

なお、where 句には、テーブル名の指定およびコメント行の追加はできません。where 句の設定で、誤った例と正しい例を次に示します。

設定例 1

```
誤った例：テーブル名を指定している
P.Status='Completed'
正しい例：テーブル名を指定していない
Status='Completed'
```

設定例 2

```
誤った例：コメント行を追加している
Status='Completed' AND
# ProcessDefinitionName like 'BP%'
正しい例：コメント行を追加していない
Status='Completed' AND
ProcessDefinitionName like 'BP%'
```

-idlist <プロセスインスタンスの識別子のリストが記載されたファイル名> ~ ((1-200 バイト))

プロセスインスタンスの識別子のリストが記載されたファイル名を指定します。プロセスインスタンスの識別子のリストは、改行区切り (「`¥r¥n`」または「`¥n`」) で記載します。ファイルパスは、絶対パス、または相対パスで指定します。1 つの改行の先頭と終端の空白文字は削除します。設定例を次に示します。

設定例

ProcessID が「11111」, 「44444」, 「77777」のビジネスプロセスを削除する場合（改行コードは「¥n」で表示しています）。

```
11111¥n
44444¥n
77777¥n
```

-wherefile <where 句が記載されたファイル名> ~((1-200 バイト))

where 句が記載されたファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。指定されたファイル内容に改行コードをスペースに置き換えて、プロセス概要情報を検索し、該当するプロセスインスタンスの実行履歴を削除します。

-processname <ビジネスプロセス定義名> ~((1 文字以上))

指定したビジネスプロセス定義名のプロセスインスタンスを削除します。

-date [<照会開始日時>],<照会終了日時> ~<半角数字>

指定した照会開始日時から照会終了日時までの間に開始したプロセスインスタンスを削除します。照会開始日時を省略した場合、照会終了日時より前に開始したプロセスインスタンスを削除します。照会開始日時と照会終了日時の間のコンマ (,) の前後に余分なスペースを指定しないでください。

なお、照会開始日時と照会終了日時は次の形式で指定します。日時の指定にはデフォルトタイムゾーンを使用してください。

YYYYMMDDhhmmss

YYYY：西暦年 (1970 ≤ YYYY)

MM：月 (01 ≤ MM ≤ 12)

DD：日 (01 ≤ DD ≤ 31)

hh：時 (00 ≤ hh ≤ 23)

mm：分 (00 ≤ mm ≤ 59)

ss：秒 (00 ≤ ss ≤ 59)

-status {executing | completed | faulted | error | exited | all} ~<<completed>>

指定した状態のプロセスインスタンスを削除します。-where オプション、-idlist オプション、-wherefile オプション、-status オプション、および-force オプションをすべて省略した場合、このオプションの completed が有効になります。

- **executing**
状態が「実行中」のプロセスインスタンスの履歴情報を削除します。
- **completed**
状態が「完了」のプロセスインスタンスの履歴情報を削除します。
- **faulted**

状態が「フォルト終了」のプロセスインスタンスの履歴情報を削除します。

- error

状態が「エラー発生」のプロセスインスタンスの履歴情報を削除します。

- exited

状態が「途中終了」のプロセスインスタンスの履歴情報を削除します。

- all

全状態のプロセスインスタンスの履歴情報を削除します。

-force

データベース内の全プロセスインスタンスの情報を削除します。

-encoding <エンコーディング名> ~((1文字以上)) <<JavaVMのデフォルトエンコーディング>>

-wherefile オプションや-idlist オプションで指定した入力ファイルのエンコーディング名を指定します。次のエンコーディング名を指定できます。

- UTF-8
- US-ASCII
- ISO-8859-1
- JavaVM がサポートしているエンコーディング名

-canceltimer <中断時間> ~((0-86400)) <<0>>

特定の時間を経過しても処理が終了しない場合、処理を中断できます。処理中断までの時間を秒数で指定します。

- 0以外の秒数を指定した場合

指定された時間を経過すると、条件に合致するレコードが残っていても処理を中断し、資源を解放します。コマンドは戻り値 10 で正常終了します。その際、メッセージログとコンソールに警告メッセージが出力されます。

- 0を指定した場合

条件に合致するすべてのレコードの処理が終わるまで、処理は中断されません。

入力例

(1)全情報を削除する場合

```
cscpidelete -user admin -pass admin -csc HCSC -force
```

(2)ステータスが「完了」のプロセスをすべて削除する場合

```
cscpidelete -user admin -pass admin -where "State='Completed'"
```

(3)ProcessID が「11111」,「22222」, および「33333」のプロセスを削除する場合

- where 句が記載されたファイルで指定する場合

```
cscpidelete -user admin -pass admin -wherefile delete_where.txt -csc HCSC
```

delete_where.txt の中身

```
ProcessID='11111' OR ProcessID='22222' OR ProcessID='33333'
```

- プロセスインスタンスの識別子のリストを改行区切りで作成したファイルで指定する場合

```
cscpidelete -user admin -pass admin -idlist idlist.txt -csc HCSC
```

idlist.txt の中身

```
11111
```

```
22222
```

```
33333
```

(4)ステータス「完了」のプロセスをすべて削除する場合。ただし、300 秒を経過しても削除処理が終わらないときは、残りの削除処理を中止する

```
cscpiselect -user admin -pass admin -where "State = 'Completed'" -canceltimer 300
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。
10	指定された中断時間を超過したため、処理を中断しました。

注意事項

- このコマンドは SQL の where 句をオプションに指定します。そのため、使用するユーザ ID およびパスワードを定期的に変更するなどして、第三者に不当にコマンドを実行されないようにしてください。
- 100 件以上のプロセスインスタンスを削除対象として指定し、101 件目以降の削除で例外が発生した場合、削除対象となっていた前 100 件のプロセスインスタンスは削除済みの状態になります。その場合、前 100 件の削除済みの情報は、エラーメッセージの詳細情報として表示されます。
- データベースを使用する場合だけ、このコマンドを使用できます。

cscpireexec (プロセスインスタンスの再実行)

形式

```
cscpireexec [-h]
             -user <ログインユーザID>
             -pass <ログインパスワード>
             -csc <HCSCサーバ名>
             {-processname <ビジネスプロセス定義名>
              | -processnamefile <ビジネスプロセス定義ファイル名>
              | -all}
             [{-processid <プロセスインスタンスの識別子>
              | -processidfile <プロセスインスタンスの識別子を記載したファイル名>
              | -targetcsc <再実行対象とするHCSCサーバ名>
              [-status <再実行の条件となるアクティビティの状態>]}]
             [-encoding <エンコーディング名>]
             [-summary]
```

機能

指定された条件に従って、中断したプロセスインスタンスを再実行します。

また、指定した HCSC サーバで実行されたプロセスインスタンスだけを再実行することもできます。その場合、再実行の対象となるプロセスインスタンスをアクティビティの状態に応じて指定できます。

再実行の対象となるプロセスインスタンスを次に示します。

- サービス呼出アクティビティの状態が「実行中 (Executing)」または「エラー発生 (Error)」のプロセスインスタンス
- 待機アクティビティの状態が「実行中 (Executing)」のプロセスインスタンス
- スコープアクティビティの状態が「実行中 (待ち受け) (Executingwait)」, 「エラー発生 (Error)」または「完了 (待ち受け) (Completedwait)」のプロセスインスタンス
- 応答アクティビティの状態が「完了 (待ち受け) (Completedwait)」のプロセスインスタンス

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「6.1.5 プロセスインスタンスを再実行する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

再実行する HCSC サーバ名を指定します。

-processname <ビジネスプロセス定義名> ~ <XML スキーマの NCName 型の文字列> ((データベースの文字コードで 64 バイト以内))

再実行するプロセスのビジネスプロセス定義名を指定します。

-processnamefile <ビジネスプロセス定義ファイル名> ~ ((1-200 バイト))

再実行するプロセスのビジネスプロセス定義ファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。ファイル内にはビジネスプロセス定義名だけを指定します。

ビジネスプロセス定義ファイルの内容が読み込まれると、前後の空白、タブ、および改行が削除され、再実行するプロセスインスタンスの識別子となります。

-all

再実行の対象となるすべてのプロセスインスタンスを一括して再実行します。

-processid <プロセスインスタンスの識別子> ~ ((1-240 バイト以内))

再実行するプロセスの、プロセスインスタンスの識別子を指定します。このオプションと-processidfile オプションを指定していない場合は、-processname オプション、または-processnamefile オプションで指定したビジネスプロセス定義名の中断したプロセスがすべて再実行されます。

プロセスインスタンスの識別子は長い文字列 (最大 240 文字) になる可能性があります。応答電文出力ディレクトリに深いディレクトリ階層を設定すると、ファイルを生成できない場合があるため注意してください。再実行しても、応答電文ファイルが生成されない場合はメッセージが出力されます。

-processidfile <プロセスインスタンスの識別子を記載したファイル名> ~ ((1-200 バイト))

再実行するプロセスの、プロセスインスタンスの識別子をファイルに記載しておき、ファイル名を絶対パスまたは相対パスで指定します。このファイルには、プロセスインスタンスの識別子だけを指定してください。

コマンドを実行すると、プロセスインスタンスの識別子を記載したファイルの内容が読み込まれ、前後の空白、タブ、および改行が削除され再実行するプロセスインスタンスの識別子となります。

このオプションと-processid オプションを指定していない場合は、-processname オプションまたは-processnamefile オプションで指定したビジネスプロセス定義名の、実行中状態で中断したプロセスがすべて再実行されます。

-targetcsc <再実行対象とする HCSC サーバ名> ~ ((1-8 文字))

再実行対象とする HCSC サーバ名を指定します。指定した HCSC サーバで実行されていたプロセスインスタンスが再実行対象となります。ただし、08-70 以前に実行されたプロセスインスタンスは再実行対象とはなりません。

このオプションを省略した場合、すべての HCSC サーバで実行されていたプロセスインスタンスが再実行対象となります。

-status <再実行の条件となるアクティビティの状態>

再実行条件となるアクティビティの状態を指定します。指定できる状態は次のとおりです。コンマ (,) で区切って複数指定することもできます。

- **executing**
状態が「実行中」のサービス呼出アクティビティまたは待機アクティビティを持つプロセスインスタンスを再実行対象とします。
- **error**
状態が「エラー発生」のサービス呼出アクティビティまたはスコープアクティビティを持つプロセスインスタンスを再実行対象とします。
- **executingwait**
状態が「実行中 (待ち受け)」のスコープアクティビティを持つプロセスインスタンスを再実行対象とします。
- **completedwait**
状態が「完了 (待ち受け)」のスコープアクティビティまたは応答アクティビティを持つプロセスインスタンスを再実行対象とします。

このオプションを省略した場合は、上記のすべての状態が再実行対象となり、次に示すアクティビティを持つプロセスインスタンスが再実行対象となります。

- 状態が「実行中」のサービス呼出アクティビティまたは待機アクティビティ
- 状態が「エラー発生」のサービス呼出アクティビティまたはスコープアクティビティ
- 状態が「実行中 (待ち受け)」のスコープアクティビティ
- 状態が「完了 (待ち受け)」のスコープアクティビティまたは応答アクティビティ

-encoding <エンコーディング名> ~ <<JavaVM のデフォルトエンコーディング>> ((1 文字以上))

-processidfile オプションや-processnamefile オプションで指定した入力ファイルのエンコーディング名を指定します。次のエンコーディング名を指定できます。

- UTF-8
- US-ASCII
- ISO-8859-1

- JavaVM がサポートしているエンコーディング名

-summary

再実行の結果を成功および失敗の件数で表示する場合に指定します。

入力例

(1) プロセスインスタンスの識別子が「11111」、ビジネスプロセス定義名が「PC 貸し出し」のプロセスインスタンスを再実行する場合

```
cscpireexec -user admin -pass admin -processidfile process_id.txt -csc HCSC -processnamefile processname.txt
```

process_id.txt の中身：11111

processname.txt の中身：PC 貸し出し

(2) ビジネスプロセス定義名が「PC 貸し出し」のサービス部品を一括再実行する場合

```
cscpireexec -user admin -pass admin -csc HCSC -processname "PC貸し出し"
```

(3) 再実行の対象となるすべてのプロセスインスタンスを一括再実行する場合

```
cscpireexec -user admin -pass admin -csc HCSC -all
```

(4) HCSC サーバ「CSCSrv2」で実行された、「実行中」状態のプロセスインスタンスを一括再実行する場合

```
cscpireexec -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -all -targetcsc CSCSrv2 -status executing
```

(5) HCSC サーバ「CSCSrv2」で実行された、「実行中」、「実行中（待ち受け）」、「完了（待ち受け）」状態のプロセスインスタンスを一括再実行する場合

```
cscpireexec -user user1 -pass password -csc CSCSrv1 -all -targetcsc CSCSrv2 -status executing,executingwait,completedwait
```

表示形式

(1)-summary 未指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, Result, ErrorMessage
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, 呼び出し結果, エラー情報
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, 呼び出し結果, エラー情報
:
```

説明

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。

表示項目	内容	説明
Result	呼び出し結果	呼び出し結果を示します。次のどちらかが表示されます。 Success：呼び出しが正常終了 Failure：呼び出しが失敗
ErrorMessage	エラー情報	エラー情報を示します。Result 欄（呼び出し結果）の内容によって、次のように表示されます。 Success：「”」 Failure：エラー情報

これらの表示項目は、CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS テーブルの 1 レコードの情報を示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C.1 プロセスインスタンスの実行履歴の管理に関するテーブルの情報」を参照してください。

(2)-summary 指定時

KEOS52290-I のメッセージが出力されます。KEOS52290-I のメッセージには、再実行が成功した件数および再実行が失敗した件数が表示されます。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム メッセージ」の「2.30 KEOS50000～KEOS59999 のメッセージ」を参照してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- データベースを使用する場合だけ、このコマンドを使用できます。
- 再実行の対象となるプロセスインスタンスが多数存在する場合、再実行が完了するまでに時間が掛かることがあります。
- 再実行の対象となるプロセスインスタンスが存在しない場合は、コマンドは異常終了します。

cscpiselect (プロセスインスタンスの検索)

形式

```
cscpiselect [-h]
             -user <ログインユーザID>
```

```

-pass <ログインパスワード>
-csc <HCSCサーバ名>
-table
  {process | activity | link | set | string | numeric | boolean
   | message | relation | process_set}
[-detail]
[-separator {comma | tab}]
[{-count | -orderby <ソート条件>}]
[{-where <where句>
  | -wherefile <where句が記載されたファイル名>
  | [-processname <ビジネスプロセス定義名>]
  [-date [<照会開始日時>], <照会終了日時>]
  [-status {executing | completed | faulted | error | exited
  | executingwait | completedwait | all}]
  [-targetcsc <検索対象とするHCSCサーバ名>}}]
[-encoding <エンコーディング名>]
[-canceltimer <中断時間>]

```

機能

セットアップ後の HCSC サーバに対して、指定された条件に従ってビジネスプロセス情報を検索し、CSV または TSV 形式で出力します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「6.1.2 プロセスインスタンスの実行履歴を検索する」
- 「6.1.3 プロセスインスタンスの実行履歴の詳細情報を取得する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

SQL を実行する HCSC サーバ名を指定します。

-table {process | activity | link | set | string | numeric | boolean | message | relation | process_set}

検索するテーブルを指定します。

このオプションに process_set を指定した場合、内部でプロセス概要情報と相関セット情報を連結して検索します。そのため、検索条件にプロセス情報のカラムを指定する場合は、where 句に「P」を、相関セット情報のカラムを指定する場合は、「C」を付けてください。

このオプションに process_set 以外を指定した場合は、where 句にテーブル名の指定は不要です。where 句に記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL リファレンスマニュアルを参照してください。

- **process**

指定した検索条件に該当するプロセスの概要情報を表示します。

なお、where 句には、テーブル名の指定およびコメント行の追加はできません。where 句の設定で、誤った例と正しい例を次に示します。

設定例 1

```
誤った例：テーブル名を指定している
           P.Status='Completed'
正しい例：テーブル名を指定していない
           Status='Completed'
```

設定例 2

```
誤った例：コメント行を追加している
           Status='Completed' AND
           # ProcessDefinitionName like 'BP%'
正しい例：：コメント行を追加していない
           Status='Completed' AND
           ProcessDefinitionName like 'BP%'
```

- **activity**

検索条件に該当するアクティビティ情報を表示します。

- **link**

検索条件に該当するリンク情報を表示します。

- **set**

検索条件に該当する相関セット情報を表示します。

- **string**

検索条件に該当する string 変数情報を表示します。

- **numeric**

検索条件に該当する numeric 変数情報を表示します。

- **boolean**

検索条件に該当する boolean 変数情報を表示します。

- **message**

検索条件に該当する message 変数情報を表示します。

- **relation**

検索条件に該当するメッセージ関連情報を表示します。

- **process_set**

検索条件に該当するプロセス概要情報を相関セット情報から検索し表示します。なお、where 句には、テーブル名を指定してください。where 句の設定で、誤った例と正しい例を次に示します。

設定例

```
誤った例：テーブル名を指定していない
           State='Completed'
正しい例1：テーブル名を指定している
           P.State='Completed'
正しい例2：テーブル名を指定している
           P.State='Completed' AND
           C.ProcessDefinitionName like 'BP%'
```

-detail

テーブルの全情報を出力する場合に指定します。

-separator {comma | tab} ~<<comma>>

情報を区切るセパレータを指定します。

-count

検索結果の行数だけが出力されます。このオプションは、検索結果のデータが大量にある場合に、検索件数だけを知るときに使用します (SQL 文の count(*)に相当します)。

-orderby <ソート条件> ~ ((1 文字以上))

データをソートする条件を指定します。SQL 文の order by 句に相当します。-count オプションと同時に指定できません。order by 句に記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL リファレンスマニュアルを参照してください。-orderby オプションを指定しない場合は、order by 句の指定がないと仮定されます。

-where <where 句> ~ ((1 文字以上))

where 句を指定します。where 句に記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL リファレンスマニュアルを参照してください。

SplitKey 列を指定して検索した場合、SplitKey 列の情報は出力されません。また、-table オプションの設定値によっては、次の表に示すビュー表に SplitKey 列の追加が必要となります。ビュー表の構成については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C.1 プロセスインスタンスの実行履歴の管理に関するテーブルの情報」の、ビュー表の情報に関する記述を参照してください。

表 5-5 SplitKey 列の追加が必要なビュー表

-table オプションの設定値	事前に SplitKey 列の追加が必要なビュー表
process	なし
activity	CSCBP_<クラスタ名>_V_ACTIVITY
link	CSCBP_<クラスタ名>_V_LINK
set	なし
string	CSCBP_<クラスタ名>_V_STR_VARIABLE
numeric	CSCBP_<クラスタ名>_V_NUM_VARIABLE
boolean	CSCBP_<クラスタ名>_V_BOOL_VARIABLE
message	CSCBP_<クラスタ名>_V_MSG_VARIABLE
relation	なし
process_set	なし

-wherefile <where 句が記載されたファイル名> ~ ((1-200 バイト))

where 句が記載されたファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。指定されたファイルの内容に改行コードをスペースに置き換えて、SQL が実行されます。記載できる内容については、使用しているデータベースの SQL リファレンスマニュアルを参照してください。

なお、SplitKey 列を指定して検索する場合の注意事項は、-where オプションと同じです。

-processname <ビジネスプロセス定義名> ~((1 文字以上))

ビジネスプロセス定義名で検索する場合に指定します。-table オプションで relation または process_set 以外を指定した場合だけ指定できます。

-date [<照会開始日時>],<照会終了日時> ~<半角数字>

プロセスインスタンスの開始日時で検索する場合に指定します。指定した照会開始日時から照会終了日時までの間に開始したプロセスインスタンスを検索します。-table オプションで process または activity を指定した場合だけ指定できます。照会開始日時を省略した場合、照会終了日時より前に開始したプロセスインスタンスから検索します。照会開始日時と照会終了日時の間のコンマ (,) の前後に余分なスペースを指定しないでください。

なお、照会開始日時と照会終了日時は次の形式で指定します。日時の指定にはデフォルトタイムゾーンを使用してください。

YYYYMMDDhhmmss

YYYY : 西暦年 (1970 ≤ YYYY)

MM : 月 (01 ≤ MM ≤ 12)

DD : 日 (01 ≤ DD ≤ 31)

hh : 時 (00 ≤ hh ≤ 23)

mm : 分 (00 ≤ mm ≤ 59)

ss : 秒 (00 ≤ ss ≤ 59)

-status {executing | completed | faulted | error | exited | executingwait | completedwait | all} ~<<all>>

プロセスインスタンスおよびアクティビティインスタンスの状態を検索する場合に指定します。

引数 `executing`, `completed`, `faulted`, `error` は, `-table` オプションで `process` または `activity` を指定した場合だけ指定できます。引数 `executingwait`, `completedwait` は, `-table` オプションで `activity` を指定した場合だけ指定できます。`exited` は, `-table` オプションの検索するテーブルに `process` を指定した場合だけ指定できます。

- **executing**

状態が「実行中」のプロセスインスタンスのプロセス概要情報またはアクティビティ情報を検索します。

- **completed**

状態が「完了」のプロセスインスタンスのプロセス概要情報またはアクティビティ情報を検索します。

- **faulted**

状態が「フォルト終了」のプロセスインスタンスのプロセス概要情報またはアクティビティ情報を検索します。

- **error**

状態が「エラー発生」のプロセスインスタンスのプロセス概要情報またはアクティビティ情報を検索します。

- **exited**

状態が「途中終了」のプロセスインスタンスのプロセス概要情報を検索します。

- **executingwait**

状態が「実行中 (待ち受け)」のアクティビティ情報を検索します。

- **completedwait**

状態が「完了 (待ち受け)」のアクティビティ情報を検索します。

- **all**

全状態のプロセス概要情報またはアクティビティ情報を検索します。

`-status` オプションに引数 `executingwait` を指定した場合を例に, `-table` オプションの誤った例と正しい例を次に示します。

設定例

```
誤った例 : -table オプションに activity を指定していない
            -table process -status executingwait
正しい例 : -table オプションに activity を指定している
            -table activity -status executingwait
```

-targetcsc <検索対象とする HCSC サーバ名> ~ ((1-8 文字))

検索対象とする HCSC サーバ名を指定します。指定した HCSC サーバで実行されていたプロセスインスタンスが検索対象となります。なお、08-70 以前に実行されたプロセスインスタンスは、検索対象とはなりません。

このオプションを省略した場合は、すべての HCSC サーバで実行されていたプロセスインスタンスが検索対象となります。

-encoding <エンコーディング名> ~<<JavaVM のデフォルトエンコーディング>> ((1 文字以上))

-wherefile オプションで指定した入力ファイルのエンコーディング名を指定します。次のエンコーディング名を指定できます。

- UTF-8
- US-ASCII
- ISO-8859-1
- JavaVM がサポートしているエンコーディング名

-canceltimer <中断時間> ~((0-86400)) <<0>>

特定の時間を経過しても処理が終了しない場合、処理を中断できます。処理中断までの時間を秒数で指定します。-count オプションを指定している場合は、このオプションを指定しても無視されます。

- 0 以外の秒数を指定した場合
指定された時間を経過すると、条件に合致するレコードが残っていても処理を中断し、資源を解放します。コマンドは戻り値 10 で正常終了します。その際、メッセージログとコンソールに警告メッセージが出力されます。
- 0 を指定した場合
条件に合致するすべてのレコードの処理が終わるまで、処理は中断されません。

入力例

(1) プロセスの概要情報の全情報を出力する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -csc HCSC -table process
```

(2) 関連セット定義名が「rentalNumber」で、関連セット値が 100 であるプロセスの概要情報の全情報を出力する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -wherefile sql_where.txt -csc HCSC -table process_set
```

sql_where.txt の内容

```
C.CorrelationSetName = 'rentalNumber' AND C.CorrelationSetValue = '100'
```

(3) アクティビティ情報からビジネスプロセス定義名が「BP」で始まる文字列の行数を表示する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -count -wherefile sql_where.txt -csc HCSC -table activity
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessDefinitionName like 'BP%
```

(4) リンク情報を全件検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -csc HCSC -table link
```

(5) 関連セット情報を全件検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -csc HCSC -table set
```

(6) string 変数情報を ProcessID = '11111' である条件で検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -wherefile sql_where.txt -csc HCSC -table string
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessID = '11111'
```

(7) numeric 変数情報を ProcessID = '11111', かつ、ビジネスプロセス定義名が「BP」で始まる条件で検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -wherefile sql_where.txt -csc HCSC -table numeric
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessID = '11111' AND ProcessDefinitionName like 'BP%
```

(8) boolean 変数情報を ProcessID = '11111', かつ定義値が 0 である条件で検索する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -where "ProcessID = '11111' AND VariableValue = 0" -csc HCSC -table boolean
```

(9) message 変数情報を ProcessID = '11111', かつ変数定義名に ABC が含まれる条件で検索し、検索結果を ProcessID の降順で並べる場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -wherefile sql_where.txt -orderby "ProcessID DESC" -csc HCSC -table message
```

sql_where.txt の内容

```
ProcessID = '11111' AND VariableName like '%ABC%
```

(10) 最後に実行された HCSC サーバを指定してプロセスの概要情報を検索し、情報を出力する場合

```
cscpiselect -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -table process -targetcsc CSCSrv2
```

(11)2012年3月31日までの実行履歴を検索する場合（ただし、検索時間が300秒以上掛かる場合は処理を停止し、リソースを解放する）

```
cscpiselect -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -table process -date ,20120331235959 -canceltimer 300
```

表示形式

(1)プロセス概要情報（process 指定時, process_set 指定時）

- -detail 未指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion, State, StartTime, EndTime, CSCServerName
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, PI状態, PI開始時刻, PI終了時刻, HCSCサーバ名
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, PI状態, PI開始時刻, PI終了時刻, HCSCサーバ名
:
```

注

ProcessID（PI 識別子）から EndTime（PI 終了時刻）までは改行されないで表示されます。

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion, State, StartTime, EndTime, ChangeCount, CSCServerName
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, PI状態, PI開始時刻, PI終了時刻, 更新回数, HCSCサーバ名
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, PI状態, PI開始時刻, PI終了時刻, 更新回数, HCSCサーバ名
:
```

注

ProcessID（PI 識別子）から ChangeCount（更新回数）までは改行されないで表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_PROCESS テーブルの1レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。
State	PI 状態	プロセスインスタンスの状態を示します。
StartTime	PI 開始時刻	プロセスインスタンスの開始時刻（GMT）を示します。

表示項目	内容	説明
StartTime	PI 開始時刻	java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒
EndTime	PI 終了時刻	プロセスインスタンスの終了時刻（GMT）を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒
ChangeCount	更新回数	データの更新回数を示します。
CSCServerName*	HCSC サーバ名	最後に実行した HCSC サーバ名を示します。

注※

プロセスインスタンスの履歴情報に値が存在しない場合は、何も表示されません。

(2) アクティビティ情報 (activity 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, ActivityNumber, ActivityDefinitionName, ActivityKind, State, StartTime, EndTime, WaitTime
PI識別子, ACI識別子, AC定義名, AC種別, ACI状態, AC開始時刻, AC終了時刻, AC待機解除時刻
PI識別子, ACI識別子, AC定義名, AC種別, ACI状態, AC開始時刻, AC終了時刻, AC待機解除時刻
:
```

注

ProcessID (PI 識別子) から WaitTime (AC 待機解除時刻) までは改行されないで表示されます。

- -detail 指定時

```
ProcessID, ActivityNumber, ProcessDefinitionName,
ProcessDefinitionVersion, ActivityDefinitionName, ActivityKind,
ParentNumber, ScopeNumber, RepeatNumber, State,
FirstChildNumber, LastChildNumber, StartTime, EndTime, WaitTime, CSCServerName
PI識別子, ACI識別子, ビジネスプロセス定義名,
ビジネスプロセス定義バージョン, AC定義名, AC種別
親ACI識別番号, 所属SCI識別番号, 所属RP識別番号, ACI状態,
先頭の子ACI識別番号, 最後の子ACI識別番号, AC開始時刻, AC終了時刻, AC待機解除時刻, HCSCサーバ名
:
```

注

ProcessID (PI 識別子) から CSCServerName (HCSC サーバ名) までは改行されないで表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_ACTIVITY テーブルの 1 レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ActivityNumber	ACI 識別子	アクティビティインスタンスの識別番号を示します。 プロセスインスタンス内で一意の値です。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。
ActivityDefinitionName	AC 定義名	アクティビティ定義名を示します。
ActivityKind	AC 種別	アクティビティ種別を示します。
ParentNumber	親 ACI 識別番号	親アクティビティインスタンスの識別番号を示します。
ScopeNumber	所属 SCI 識別番号	所属するスコープインスタンスの識別番号を示します。
RepeatNumber	所属 RP 識別番号	所属する繰り返し処理の識別番号を示します。
State	ACI 状態	アクティビティインスタンスの状態を示します。
FirstChildNumber	先頭の子 ACI 識別番号	先頭の子アクティビティインスタンスの識別番号を示します。
LastChildNumber	最後の子 ACI 識別番号	最後の子アクティビティインスタンスの識別番号を示します。
StartTime*	AC 開始時刻	アクティビティの開始時刻 (GMT) を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、 YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none">• YYYY : 西暦年• MM : 月• DD : 日• hh : 時• mm : 分• ss : 秒
EndTime*	AC 終了時刻	アクティビティの終了時刻 (GMT) を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、 YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。

表示項目	内容	説明
EndTime*	AC 終了時刻	<ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒
WaitTime*	AC 待機解除時刻	アクティビティの待機解除時刻（GMT）を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、 YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒
CSCServerName*	HCSC サーバ名	最後に実行した HCSC サーバ名を示します。

注※

プロセスインスタンスの履歴情報に値が存在しない場合は、何も表示されません。

(3) リンク情報 (link 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, LinkDefinitionName, State
PI識別子, リンク定義名, リンク状態
PI識別子, リンク定義名, リンク状態
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion,
LinkDefinitionName, RepeatNumber, State
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
リンク定義名, 所属RP識別番号, リンク状態
:
```

注

ProcessID (PI 識別子) から State (リンク状態) までは改行されないで表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_LINK テーブルの 1 レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。

表示項目	内容	説明
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。
LinkDefinitionName	リンク定義名	リンク定義名を示します。
RepeatNumber	所属 RP 識別番号	所属する繰り返し処理の識別番号を示します。
State	リンク状態	リンクの状態（真偽値）を示します。

(4) 関連セット情報（set 指定時）

- -detail 未指定時

```
ProcessID, CorrelationSetName, CorrelationSetValue
PI識別子, 関連セット定義名, 関連セット値
PI識別子, 関連セット定義名, 関連セット値
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion, ScopeDefinitionName,
ScopeNumber, CorrelationSetName, CorrelationSetValue, State
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, SC定義名,
SCI識別番号, 関連セット定義名, 関連セット値, 関連セット有効性
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン, SC定義名,
SCI識別番号, 関連セット定義名, 関連セット値, 関連セット有効性
:
```

注

ProcessID（PI 識別子）から State（関連セット有効性）までは改行されないで表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_CORRELATIONSET テーブルの 1 レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。
CorrelationSetName	関連セット定義名	関連セット定義名を示します。
CorrelationSetValue	関連セット値	関連セット値を示します。文字列化および連結され格納されます。
State	関連セット有効性	関連セットの有効性（真偽値）を示します。

(5)string 変数情報 (string 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, VariableName, VariableValue  
PI識別子, 変数定義名, 変数値  
PI識別子, 変数定義名, 変数値  
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion,  
ScopeDefinitionName, ScopeNumber, VariableName, VariableValue  
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,  
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名, 変数値  
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,  
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名, 変数値  
:
```

注

ProcessID (PI 識別子) から VariableValue (変数値) までは改行されないで表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_STR_VARIABLE テーブルの 1 レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。
VariableName	変数定義名	変数定義名を示します。
VariableValue	変数値	変数値を示します。

(6)numeric 変数情報 (numeric 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, VariableName, VariableValue  
PI識別子, 変数定義名, 変数値  
PI識別子, 変数定義名, 変数値  
:
```

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion,  
ScopeDefinitionName, ScopeNumber, VariableName, VariableValue  
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,  
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名, 変数値
```

PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名, 変数値
:

注

ProcessID (PI 識別子) から VariableValue (変数値) までは改行されないで表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_NUM_VARIABLE テーブルの 1 レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。
VariableName	変数定義名	変数定義名を示します。
VariableValue	変数値	変数値を示します。

(7)boolean 変数情報 (boolean 指定時)

• -detail 未指定時

ProcessID, VariableName, VariableValue
PI識別子, 変数定義名, 変数値
PI識別子, 変数定義名, 変数値
:

• -detail 指定時

ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion,
ScopeDefinitionName, ScopeNumber, VariableName, VariableValue
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名, 変数値
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名, 変数値
:

注

ProcessID (PI 識別子) から VariableValue (変数値) までは改行されないで表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_BOOL_VARIABLE テーブルの 1 レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。
VariableName	変数定義名	変数定義名を示します。
VariableValue	変数値	変数値を示します。

(8)message 変数情報 (message 指定時)

- -detail 未指定時

```
ProcessID, VariableName,
VariableValue
PI識別子, 変数定義名,
変数値
PI識別子, 変数定義名,
変数値
:
```

注

ProcessID (PI 識別子) から VariableName (変数定義名) までは改行されないで表示され、VariableValue (変数値) は次行に表示されます。

- -detail 指定時

```
ProcessID, ProcessDefinitionName, ProcessDefinitionVersion,
ScopeDefinitionName, ScopeNumber, VariableName,
VariableValue
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名,
変数値
PI識別子, ビジネスプロセス定義名, ビジネスプロセス定義バージョン,
SC定義名, SCI識別番号, 変数定義名,
変数値
:
```

注

ProcessID (PI 識別子) から VariableName (変数定義名) までは改行されないで表示され、VariableValue (変数値) は次行に表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_MSG_VARIABLE テーブルの 1 レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ProcessDefinitionName	ビジネスプロセス定義名	ビジネスプロセス定義名を示します。
ProcessDefinitionVersion	ビジネスプロセス定義バージョン	ビジネスプロセス定義バージョンを示します。
ScopeDefinitionName	SC 定義名	スコープ定義名を示します。
ScopeNumber	SCI 識別番号	スコープインスタンスの識別番号を示します。
VariableName	変数定義名	変数定義名を示します。
VariableValue	変数値	変数値を示します。

(9)メッセージ関連情報 (relation 指定時)

- detail 未指定時

```
MessageID, ProcessID, ActivityNumber, SendOrReceive
MSG識別子, PI識別子, ACI識別番号, 送受信フラグ
MSG識別子, PI識別子, ACI識別番号, 送受信フラグ
:
```

- detail 指定時

```
MessageID, ProcessID, ActivityNumber, SendOrReceive, AsynchronousMessagingID
MSG識別子, PI識別子, ACI識別番号, 送受信フラグ, ID
MSG識別子, PI識別子, ACI識別番号, 送受信フラグ, ID
:
```

注

MessageID (MSG 識別子) から AsynchronousMessagingID (ID) までは改行されないで表示されます。

説明

CSCBP_<クラスタ名>_MSG_RELATION テーブルの 1 レコードの情報を次の表に示します。情報の詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

表示項目	内容	説明
MessageID	MSG 識別子	メッセージの識別子を示します。
ProcessID	PI 識別子	プロセスインスタンスの識別子を示します。
ActivityNumber	ACI 識別番号	アクティビティインスタンスの識別番号を示します。
SendOrReceive	送受信フラグ	メッセージの送受信フラグを示します。
AsynchronousMessagingID	ID	Reliable Messaging を使用した非同期メッセージの ID を示します。

(10)カウント表示

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。
10	指定された中断時間を超過したため、処理を中断しました。

注意事項

- コメント行などは記載しないでください。
- このコマンドは SQL の where 句をオプションに指定します。そのため、使用するユーザ ID およびパスワードを定期的に変更するなどして、第三者に不当にコマンドを実行されないようにしてください。
- データベースを使用する場合だけ、このコマンドを使用できます。
- 次のオプションをすべて指定しない場合は、where 句の指定がないと仮定されます。
 - -where オプション
 - -wherefile オプション
 - -processname オプション
 - -date オプション
 - -status オプション

cscprecache (フォーマット定義およびデータ変換定義の事前キャッシュ)

形式

```
cscprecache [-h]
             -user <ログインユーザID>
             -pass <ログインパスワード>
             -csc <HCSCサーバ名>
             [-name <サービスID>]
```

機能

本番運用に入る前に、HCSC コンポーネントで定義したすべてのフォーマット定義およびデータ変換定義を解析して、HCSC サーバ上にキャッシュさせます。これによって、リクエスト処理の性能向上を図ります。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。複数のコンポーネントに解析要求を送信する場合の最大スレッド数は、HCSC-Manager 定義ファイル (cscmng.properties) のプロパティに値を定義することで設定できます。また、各コンポーネントでの事前キャッシュ処理のタイムアウト時間は、HCSC サーバランタイム定義ファイル (cscsvconfig.properties) のプロパティに値を定義することで設定できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.3.22 ビジネスプロセスの定義情報をキャッシュする」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

解析要求を送信する HCSC サーバ名を指定します。

-name <サービス ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

解析要求を送信するサービス名を指定します。

入力例

(1)HCSC サーバ内のすべてのコンポーネントを解析する場合

```
cscprecache -csc <HCSCサーバ名>
```

(2)特定のコンポーネントだけ解析する場合

```
cscprecache -csc <HCSCサーバ名> -name <サービスID>
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドをサービスアダプタまたはユーザ定義受付に対して実行するとエラーになります。
- コマンドの実行前に、HCSC サーバランタイム定義ファイルの formatdef-maxcache-num プロパティおよび transformdef-maxcache-num プロパティのキャッシュ上限値が、フォーマット定義およびデータ変換定義の設定数より大きいことを確認してください。フォーマット定義およびデータ変換定義の設定数より小さい場合はキャッシュが削除されるため、性能向上が図れないことがあります。

cscrcptnstart (標準受付およびユーザ定義受付の開始)

形式

```
cscrcptnstart [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
               [{-standard | -userdef}]
               [-nogc]
```

機能

受付（標準受付およびユーザ定義受付）を開始します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「5.3.9 ユーザ定義受付を開始する」
- 「5.3.10 標準受付を開始する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

受付を開始する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

受付を一括開始するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-standard

標準受付だけを起動します。-standard, -userdef とともに指定しない場合は、受付をすべて起動します。

-userdef

ユーザ定義受付をすべて起動します。個別のユーザ定義受付を起動する場合は、csccompostart コマンドで起動してください。-standard, -userdef とともに指定しない場合は、受付をすべて起動します。

-nogc

FullGC を発生させないで受付を起動します。ただし、このオプションを指定しても、JavaVM が自動的に発生させる FullGC や、J2EE サーバの異常処理で発行される FullGC は抑止されません。

HCSC コンポーネント開始時に明示的に FullGC を発生させる場合は、javagc コマンドを実行してください。javagc コマンドについては、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス コマンド編」の「javagc (GC の強制発生)」を参照してください。

入力例

(1)HCSC サーバ「HCSC」の受付を開始する場合

```
cscrcptnstart -user admin -pass admin -csc HCSC
```

(2)クラスタ「Cluster」下にある HCSC サーバごとに標準受付を一括開始する場合

```
cscrcptnstart -user admin -pass admin -cluster Cluster -standard
```

(3)FullGC を発生させないで、HCSC サーバ「CSCSrv1」下にある受付を一括開始する場合

```
cscrcptnstart -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -nogc
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは停止状態の受付に対して実行してください。
- コマンド実行時に HCSC サーバは起動している必要があります。
- -cluster を指定してエラーになった場合、結果を cscstatus コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。
- このコマンドを複数のクライアントから 1 つの HCSC サーバに対して同時に実行すると、処理エラー（排他エラー、またはコンポーネントへの操作重複による異常終了）となるおそれがあります。エラーが発生した場合は、コマンドを再実行してください。

cscrcptnstop（標準受付およびユーザ定義受付の停止）

形式

```
cscrcptnstop [-h]
              -user <ログインユーザID>
              -pass <ログインパスワード>
              {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
              [{-standard | -userdef}]
              [-stopfg {normal | wait | force}]
              [-nogc]
```

機能

受付（標準受付およびユーザ定義受付）を停止します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「5.3.35 標準受付を停止する」
- 「5.3.36 ユーザ定義受付を停止する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

受付を停止する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

受付を一括停止するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-standard

標準受付だけを停止します。-standard, -userdef とともに指定しない場合は、受付をすべて停止します。

-userdef

ユーザ定義受付をすべて停止します。個別のユーザ定義受付を停止する場合は、csccompostop コマンドで停止してください。-standard, -userdef とともに指定しない場合は、受付をすべて停止します。

-stopfg {normal | wait | force}

標準受付の停止オプションを指定します。-userdef オプションを指定した場合、この定義は無視されません。デフォルトは normal です。

- normal
通常停止の場合に指定します。
- wait
計画停止の場合に指定します。
- force

強制停止の場合に指定します。

-nogc

FullGC を発生させないで受付を停止します。ただし、このオプションを指定しても、JavaVM が自動的に発生させる FullGC は抑止されません。

入力例

(1)HCSC サーバ「HCSC」の受付を停止する場合

```
cscrcptnstop -user admin -pass admin -csc HCSC
```

(2)クラスタ「Cluster」下にある HCSC サーバごとに、受付を一括停止する場合

```
cscrcptnstop -user admin -pass admin -cluster Cluster
```

(3)FullGC を発生させないで、HCSC サーバ「CSCSrv1」下にある受付を一括停止する場合

```
cscrcptnstop -user admin -pass admin -csc CSCSrv1 -nogc
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは開始状態の受付に対して実行してください。
- コマンド実行時に HCSC サーバは起動している必要があります。
- -cluster を指定してエラーになった場合、結果を cscstatus コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。
- このコマンドを複数のクライアントから 1 つの HCSC サーバに対して同時に実行すると、処理エラー（排他エラー、またはコンポーネントへの操作重複による異常終了）となるおそれがあります。エラーが発生した場合は、コマンドを再実行してください。

cscrepcheck (インポート可否の検証)

形式

```
cscrepcheck [-h]
             -user <ログインユーザID>
             -pass <ログインパスワード>
             -replib <リポジトリZIPファイル名>
             [-compo [-name {<サービスID> | ユーザ定義受付 (呼出先選択) の<受付ID>} ] ]
```

機能

指定されたりポジトリ ZIP ファイル名のインポート可否を検証します。インポート不可と検証された場合は、エラーメッセージで原因を出力します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「4.6 コンポーネント単位でのリポジトリの追加, 更新, および削除」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-replib <リポジトリ ZIP ファイル名> ~ ((1-200 バイト))

インポート可否の検証対象となるリポジトリ ZIP ファイルを絶対パスまたは相対パスで指定します。

-compo

リポジトリのコンポーネント単位でのインポートができるかを検証する場合に指定します。

指定を省略した場合、リポジトリ ZIP ファイル全体のインポートが検証の対象となります。

-name {<サービス ID> | <ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID>} ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

検証の対象とする HCSC コンポーネントを次のどちらかで指定します。

<サービス ID>

ビジネスプロセスまたはサービスアダプタのサービス ID を指定します。

<ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付 ID>

ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付 ID を指定します。

指定を省略した場合、リポジトリ ZIP ファイル内のすべての HCSC コンポーネントが検証の対象となります。

入力例

(1)リポジトリ ZIP ファイル「repository.zip」のインポート可否を検証する場合

```
cscrepcheck -user admin -pass admin -repfile repository.zip
```

(2)リポジトリ ZIP ファイル「repository.zip」のコンポーネント単位でのインポート可否を検証する場合

```
cscrepcheck -user admin -pass admin -repfile repository.zip -compo
```

(3)リポジトリ ZIP ファイル「repository.zip」内のサービス ID「1」の HCSC コンポーネントを対象に、インポート可否を検証する場合

```
cscrepcheck -user admin -pass admin -repfile repository.zip -compo -name 1
```

(4)リポジトリ ZIP ファイル「repository.zip」内の受付 ID「2」の HCSC コンポーネントを対象に、インポート可否を検証する場合

```
cscrepcheck -user admin -pass admin -repfile repository.zip -compo -name 2
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 現在の運用環境のリポジトリ情報とインポートするリポジトリ情報で、データベースおよび Reliable Messaging を使用するかどうかが異なる場合、インポート時にエラーになることがあります。
- 現在の運用環境のリポジトリ情報と、インポートするリポジトリ情報の SOAP モードが異なる場合、インポート時にエラーになります。
- リポジトリ内に複数のクラスタ環境がある場合、エラーになります。

cscrepctl (インポート/エクスポート)

形式

```
cscrepctl [-h]
  -user <ログインユーザID>
  -pass <ログインパスワード>
  {-import <ファイル名> [-overwrite]
  [ {-check | -compo
    [ {-name {<サービスID> | <ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付ID>}
      | -namelist <HCSCコンポーネント指定ファイル名>} ]
    [-nouoc] } ]
    | -export <ファイル名>
    | -autoexport
    | -delete {-name {<サービスID> | <ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付ID>}
              | -namelist <HCSCコンポーネント指定ファイル名>} }
```

機能

リポジトリ内の情報を ZIP 形式ファイルに出力したり、ZIP 形式で保存された情報をリポジトリに展開したりします。また、リポジトリ内のコンポーネントの削除もできます。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「4.2 リポジトリのエクスポート」
- 「4.3 リポジトリのインポート」
- 「4.6 コンポーネント単位でのリポジトリの追加、更新、および削除」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-import <ファイル名> ~ ((1-200 バイト))

展開する ZIP 形式ファイルを絶対パス、または相対パスで指定します。

-overwrite

インポート時に ZIP 形式で保存された HCSC コンポーネントを運用環境のリポジトリに展開します。このオプションは、-import 指定時に有効になります。

-overwrite オプションを指定した場合は、変更されていない HCSC コンポーネントを含め、ZIP 形式ファイルに保存された HCSC コンポーネントのすべてを運用環境のリポジトリに展開します。

-overwrite オプションを省略した場合は、ZIP 形式ファイルに保存された HCSC コンポーネントのうち変更された HCSC コンポーネントだけが、ZIP 形式ファイルから運用環境のリポジトリに展開されます。このとき、変更のない HCSC コンポーネントは、現在ある運用環境のリポジトリの HCSC コンポーネントをそのまま使用します。

-check

現在の運用環境のリポジトリ情報とインポートするリポジトリ情報で、HCSC サーバの構成情報が同じかどうかをチェックします。HCSC サーバの構成情報が異なる場合は、エラーになります。このオプションは、-import 指定時に有効になります。なお、標準インポートの場合は、このオプションを指定しないでください。

-compo

コンポーネント単位でインポートします。

-name {<サービス ID> | <ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID>} ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

インポートまたは削除の対象を次のどちらかで指定します。

<サービス ID>

ビジネスプロセスまたはサービスアダプタのサービス ID を指定します。

<ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID>

ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID を指定します。

-compo オプションの指定時にこのオプションを省略した場合、すべての HCSC コンポーネントがインポートの対象となります。

-namelist <HCSC コンポーネント指定ファイル名> ~((1-200 バイト))

インポートまたは削除する HCSC コンポーネントを HCSC コンポーネント指定ファイルで指定します。

絶対パスまたは相対パスで指定します。ファイルが存在しない場合は異常終了します。HCSC コンポーネント指定ファイルについては、「[6.5.5 HCSC コンポーネント指定ファイル](#)」を参照してください。

なお、指定された HCSC コンポーネントの実行順序に決まりはありません。

-nouoc

コンポーネント単位でのインポート時に UOC を更新しない場合に指定します。UOC とは、開発環境の HCSCTE プロジェクト内でユーザが独自に作成したソース、クラスおよびライブラリを示します。

このオプションは -compo オプションの指定時だけ指定できます。

-export <ファイル名> ~ ((1-200 バイト))

出力する ZIP 形式ファイルのファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。指定したファイルまでのディレクトリがない場合、異常終了になります。指定したファイルがすでにある場合、上書きされます。指定したファイルの拡張子を「.zip」にしなかった場合は、「.zip」が付けられます。

-autoexport

ZIP ファイルをデフォルトファイル名で出力する場合に指定します。デフォルトファイル名は、次の形式で付与されます。

- IPv4 の場合：aaabbbcccd_YYYYMMDDhhmmss.zip
- IPv6 の場合：aaaabbbbccccdddeeeeffffggghhhh_YYYYMMDDhhmmss.zip

aaabbbcccd :

コマンドを実行したマシンの IPv4 アドレスを示します。

aaaabbbbccccdddeeeeffffggghhhh :

コマンドを実行したマシンの IPv6 アドレスを示します。

YYYYMMDDhhmmss :

バックアップした時間を示します。

YYYY : 西暦年, MM : 月, DD : 日, hh : 時, mm : 分, ss : 秒

出力先は cscmng.properties (HCSC-Manager 定義ファイル) に指定できます。出力先を指定しなかった場合はカレントディレクトリに出力されます。

-delete

運用環境のリポジトリから、指定されたサービス ID のコンポーネントを削除します。このオプションの後ろに、削除対象のサービス ID を -name オプションまたは -namelist オプションで指定してください。

このオプションを指定してサービスを削除すると、ほかのビジネスプロセスから呼び出されるサービスも削除されます。そのため、削除するサービスは適切に選択してください。

入力例

(1) repository.zip の内容をリポジトリに展開する場合

```
cscrcpctl -user admin -pass admin -import repository.zip
```

(2)カレントディレクトリにリポジトリ情報を収集した repository.zip を出力する場合

```
cscrepctl -user admin -pass admin -export repository.zip
```

(3)デフォルトファイル名で出力する場合

```
cscrepctl -user admin -pass admin -autoexport
```

(4)repository.zip の内容をコンポーネント単位でインポートする場合

```
cscrepctl -user admin -pass admin -import repository.zip -compo
```

(5)サービス ID, またはユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID が 1 の HCSC コンポーネントをインポートする場合

```
cscrepctl -user admin -pass admin -import repository.zip -compo -name 1
```

(6)repository.zip の内容のうち HCSC コンポーネント指定ファイル hcsccomponent.txt に指定されているすべての HCSC コンポーネントをインポートする場合

```
cscrepctl -user admin -pass admin -import repository.zip -compo -namelist hcsccomponent.txt
```

(7)サービス ID, またはユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID が 1 の HCSC コンポーネントを削除する場合

```
cscrepctl -user admin -pass admin -delete -name 1
```

(8)HCSC コンポーネント指定ファイル hcsccomponent.txt に指定されている HCSC コンポーネントをすべて削除する場合

```
cscrepctl -user admin -pass admin -delete -namelist hcsccomponent.txt
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 運用環境にログイン中の場合は、このコマンドを実行できません。
- インポートする場合は、必ずリポジトリに設定したディレクトリ以下のディレクトリおよびファイルを参照していないことを確認してから、cscrepctl コマンドを実行してください。
- 現在の運用環境のリポジトリ情報とインポートするリポジトリ情報で、データベースおよび Reliable Messaging を使用するかどうかの設定が異なる場合、インポート時にエラーになることがあります。

- 現在の運用環境のリポジトリ情報と、インポートするリポジトリ情報の SOAP モードが異なる場合、インポート時にエラーになります。

cscrepdiff (リポジトリ情報の差分の表示)

形式

```
cscrepdiff [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            -repfile <エクスポートされたリポジトリZIPファイル名>
            [-allinfo]
            [ {-check
              | -compo [-name {<サービスID> | <ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付ID>} ] } ]
            [-listfile <出力先のHCSCコンポーネント指定ファイル名>]
```

機能

現在の運用環境のリポジトリ情報と、指定されたリポジトリ情報との HCSC コンポーネントの差分を出力します。このコマンドは、次に示すリポジトリ情報の項目が同じ場合、同じ HCSC コンポーネントと見なして差分を表示します。

- サービスアダプタのサービス ID
- ビジネスプロセスのサービス ID
- ユーザ定義受付の受付 ID

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「4.5 リポジトリの差分情報の参照」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-repfile <エクスポートされたリポジトリ ZIP ファイル名> ~((1-200 バイト))

エクスポートされた差分表示の対象となる ZIP ファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。

-allinfo

すべての HCSC コンポーネントの変更情報を表示します。インポート後の HCSC コンポーネントがすべて表示されるため、リポジトリ内に HCSC コンポーネントが多いと、大量に表示される場合があります。

このオプションを省略した場合、差分が発生した HCSC コンポーネントだけが表示されます。

-check

現在の運用環境のリポジトリ情報と比較対象のリポジトリ情報で、HCSC サーバの構成情報が同じかどうかをチェックします。HCSC サーバの構成情報が異なる場合は、エラーになります。なお、標準インポートの場合は、このオプションを指定しないでください。

-compo

コンポーネント単位でインポートする場合の、HCSC コンポーネントの差分情報を表示します。

-name {<サービス ID> | <ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID>} ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

コンポーネント単位でインポートする場合に、ZIP ファイル中の HCSC コンポーネントの種類を次のどちらかで指定します。

<サービス ID>

ビジネスプロセスまたはサービスアダプタのサービス ID を指定します。

<ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID>

ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付 ID を指定します。

このオプションは、-compo オプションを指定した場合に指定できます。

このオプションを省略した場合は、ZIP ファイル中のすべての HCSC コンポーネントがコンポーネント単位のインポートの対象となります。

-listfile <出力先の HCSC コンポーネント指定ファイル名> ~((1-200 バイト))

指定したファイルへ、HCSC コンポーネントの差分情報と変更種別を出力します。絶対パスまたは相対パスで指定します。パスが存在しない場合は異常終了します。

出力形式は HCSC コンポーネント指定ファイルと同じです。HCSC コンポーネント指定ファイルの記述形式については、「[6.5.5 HCSC コンポーネント指定ファイル](#)」を参照してください。

出力形式

-listfile オプションを指定した場合の、HCSC コンポーネント指定ファイルの出力形式を示します。

(1)すべての項目で変更があるリポジトリをファイルに出力する場合 (-listfile オプション指定時)

```
#Repository File: リポジトリファイル名
#Command Edit Time: コマンド発行時間
```

```
#[BusinessProcess]
#change:
change. ビジネスプロセスID
#delete:
delete. ビジネスプロセスID
#add:
add. ビジネスプロセスID
```

```
#[ServiceAdapter]
#change:
change. サービスアダプタID
#delete:
delete. サービスアダプタID
#add:
add. サービスアダプタID
```

```
#[UserDefinedReception]
#change:
change. ユーザ定義受付ID
#delete:
delete. ユーザ定義受付ID
#add:
add. ユーザ定義受付ID
```

(2)すべての項目で変更があるリポジトリをコンポーネント単位でファイルに出力する場合 (-compo, -listfile オプション指定時)

```
#Repository File: リポジトリファイル名
#Command Edit Time: コマンド発行時間
```

```
#[BusinessProcess]
#change:
change. ビジネスプロセスID
#add:
add. ビジネスプロセスID
```

```
#[ServiceAdapter]
#change:
change. サービスアダプタID
#add:
add. サービスアダプタID
```

```
#[UserDefinedReception]
#change:
change. ユーザ定義受付ID
#add:
add. ユーザ定義受付ID
```

(3)変更がある項目と変更がない項目が混在するリポジトリをファイルに出力する場合 (-allinfo, -listfile オプション指定時)

```
#Repository File: リポジトリファイル名  
#Command Edit Time: コマンド発行時間
```

```
#[BusinessProcess]  
#no change:  
#ビジネスプロセスID  
#change:  
change. ビジネスプロセスID  
#delete:  
delete. ビジネスプロセスID  
#add:  
add. ビジネスプロセスID
```

```
#[ServiceAdapter]  
#no change:  
#サービスアダプタID  
#change:  
change. サービスアダプタID  
#delete:  
delete. サービスアダプタID  
#add:  
add. サービスアダプタID
```

```
#[UserDefinedReception]  
#no change:  
#ユーザ定義受付ID  
#change:  
change. ユーザ定義受付ID  
#delete:  
delete. ユーザ定義受付ID  
#add:  
add. ユーザ定義受付ID
```

表示形式

表示形式の記号の意味は次のとおりです。

< : 現在のリポジトリ情報に存在する HCSC コンポーネント

> : 指定した ZIP ファイルのリポジトリ情報に存在する HCSC コンポーネント

(1)すべての項目で変更がある場合

```

KEOS52129-I cscrepdiff will now start.
Command Edit Time: コマンド発行時間
[BusinessProcess]
change:
<クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間※
>クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間※
delete:
<クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間※
add:
>クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間※

[ServiceAdapter]
change:
<クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間※
>クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間※
delete:
<クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間※
add:
>クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間※

[UserDefinedReception]
change:
< クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間※
> クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間※
delete:
< クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間※
add:
> クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間※
KEOS52130-I cscrepdiff ended normally.

```

} 更新された
 } ビジネスプロセス
 } 削除された
 } ビジネスプロセス
 } 追加された
 } ビジネスプロセス

 } 更新された
 } サービスアダプタ
 } 削除された
 } サービスアダプタ
 } 追加された
 } サービスアダプタ

 } 更新された
 } ユーザ定義受付
 } 削除された
 } ユーザ定義受付
 } 追加された
 } ユーザ定義受付

注※ 開発環境でHCSCコンポーネントをパッケージングした時間です。したがって、開発環境のマシンの時間に依存します。

(2)ユーザ定義受付（呼出先選択）だけ変更がある場合

```

KEOS52129-I cscrepdiff will now start.
Command Edit Time: コマンド発行時間
[UserDefinedReception]
change:
<クラスタ名/ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付ID 更新時間※
>クラスタ名/ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付ID 更新時間※
KEOS52130-I cscrepdiff ended normally.

```

} 更新された
 } ユーザ定義受付（呼出先選択）

注※ 開発環境でHCSCコンポーネントをパッケージングした時間です。したがって、開発環境のマシンの時間に依存します。

(3)ビジネスプロセスだけ変更がある場合

```

KEOS52129-I cscrepdiff will now start.
Command Edit Time: コマンド発行時間
[BusinessProcess]
change:
<クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間※
>クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間※
KEOS52130-I cscrepdiff ended normally.

```

} 更新された
 } ビジネスプロセス

注※ 開発環境でHCSCコンポーネントをパッケージングした時間です。したがって、開発環境のマシンの時間に依存します。

(4)変更がない場合（-allinfo オプション省略時）

5. コマンド（運用環境・実行環境）

```

KEOS52129-I cscrepdiff will now start.
Command Edit Time: コマンド発行時間
KEOS52130-I cscrepdiff ended normally.

```

(5)すべての項目で変更があるが、項目内に変更がないコンポーネントが含まれる場合 (-allinfo オプション指定時)

[BusinessProcess]	
no change:	
クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*	
change:	
< クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*	} 更新された ビジネスプロセス
> クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*	
delete:	
< クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*	} 削除された ビジネスプロセス
add:	
> クラスタ名/ビジネスプロセスのサービスID 更新時間*	} 追加された ビジネスプロセス
[ServiceAdapter]	
no change:	
クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*	
change:	
< クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*	} 更新された サービスアダプタ
> クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*	
delete:	
< クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*	} 削除された サービスアダプタ
add:	
> クラスタ名/サービスアダプタのサービスID 更新時間*	} 追加された サービスアダプタ
[UserDefinedReception]	
no change:	
クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*	
change:	
< クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*	} 更新された ユーザ定義受付
> クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*	
delete:	
< クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*	} 削除された ユーザ定義受付
add:	
> クラスタ名/ユーザ定義受付の受付ID 更新時間*	} 追加された ユーザ定義受付

注※ 開発環境でHCSCコンポーネントをパッケージングした時間です。したがって、開発環境のマシンの時間に依存します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 現在の運用環境のリポジトリ情報と比較対象のリポジトリ情報で、データベースおよび Reliable Messaging を使用するかどうかの設定が異なる場合、コマンド実行時にエラーになることがあります。

- 現在の運用環境のリポジトリ情報と、比較対象のリポジトリ情報の SOAP モードが異なる場合、コマンド実行時にエラーになります。

cscrepls (リポジトリ情報の表示)

形式

```
cscrepls [-h]
         -user <ログインユーザID>
         -pass <ログインパスワード>
         [{-repfile <エクスポートされたリポジトリZIPファイル名>
           | -envbackfile <HCSC-Manager環境バックアップファイル名>}]
         [{-csc <HCSCサーバ名> | -oldtype | -private}]
         [-listfile <出力先のHCSCコンポーネント指定ファイル名>]
```

機能

リポジトリ情報を標準出力に出力します。これによって、cscutil コマンドの引数に指定する値を確認できます。また、リポジトリに含まれるすべての HCSC コンポーネントの一覧をファイルへ出力します。

HCSC コンポーネントのリポジトリ情報の出力順は次のとおりです。存在しない HCSC コンポーネントの情報は出力されません。

1. ユーザ定義受付 (呼出先選択)
2. ビジネスプロセスまたはユーザ定義受付 (呼出先固定)
3. サービスアダプタ

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「4.4 リポジトリの情報の参照」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-repfile <エクスポートされたリポジトリ ZIP ファイル名> ~((1-200 バイト))

エクスポートされたリポジトリ ZIP ファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。エクスポートされたリポジトリファイルの中を参照し、構成情報が出力されます。-envbackfile とは同時に指定できません。

-envbackfile <HCSC-Manager 環境バックアップファイル名> ~((1-200 バイト))

HCSC-Manager 環境バックアップファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。エクスポートされたリポジトリファイルの中を参照し、構成情報が出力されます。-repfile とは同時に指定できません。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-8 文字))

指定した HCSC サーバ情報だけが出力されます。

-oldtype

バージョン 07-20 以前の情報が出力されます。

-private

リポジトリ、またはリポジトリファイルに存在する、非公開コンポーネントを含めた情報を表示する場合に指定します。

-listfile <出力先の HCSC コンポーネント指定ファイル名> ~((1-200 バイト))

指定したファイルへ、リポジトリに含まれるすべての HCSC コンポーネントの一覧を出力します。絶対パスまたは相対パスで指定します。パスが存在しない場合は異常終了します。

出力形式は HCSC コンポーネント指定ファイルと同じですが、変更種別は出力されません。HCSC コンポーネント指定ファイルの記述形式については、「[6.5.5 HCSC コンポーネント指定ファイル](#)」を参照してください。

出力形式

-listfile オプションを指定した場合の、HCSC コンポーネント指定ファイルの出力形式を示します。

```
#Command Edit Time:コマンド発行時間

#Cluster Name:クラスタ名
#HCSC-Server Name:HCSCサーバ名
#UserDefinedReception
ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付ID
#BusinessProcess
ビジネスプロセスのサービスID
#UserDefinedReception
ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID
#BusinessProcess
ビジネスプロセスのサービスID
#UserDefinedReception
ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID
#ServiceAdapter
サービスアダプタのサービスID
```

```
#HCSC-Server Name:HCSCサーバ名
#UserDefinedReception
ユーザ定義受付（呼出先選択）の受付ID
#BusinessProcess
ビジネスプロセスのサービスID
#UserDefinedReception
ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID
#BusinessProcess
ビジネスプロセスのサービスID
#UserDefinedReception
ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID
#ServiceAdapter
サービスアダプタのサービスID
```

```
#Cluster Name:クラスタ名
#HCSC-Server Name:HCSCサーバ名
#BusinessProcess
ビジネスプロセスのサービスID
#UserDefinedReception
ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID
#BusinessProcess
ビジネスプロセスのサービスID
#UserDefinedReception
ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID
#ServiceAdapter
サービスアダプタのサービスID
```

説明

表示項目	説明
#Command Edit Time	<p>コマンド発行時間を示します。</p> <p>java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒 • SSS：ミリ秒
#Cluster Name	クラスタ名を示します。
#HCSC-Server Name	HCSC サーバ名を示します。
#UserDefinedReception	ユーザ定義受付（呼出先選択）または、ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付 ID を示します。
#BusinessProcess	ビジネスプロセスのサービス ID を示します。
#ServiceAdapter	サービスアダプタのサービス ID を示します。

表示形式

(1)-csc オプションで HCSC サーバを指定しない場合

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
Domain(name:ドメイン名)
- Cluster(name:クラスタ名)
  cluster-display-name:クラスタ表示名
  cluster-type:クラスタ種別
  db-use:データベースの使用有無
  rm-use:Reliable Messagingの使用有無
  SOAP-mode:使用するSOAPモード
- HCSC-Server(CSCSrvName:HCSCサーバ名)
  display-name:HCSCサーバ表示名
  J2EESrvName:J2EEサーバ名
  RMSystemName:RMシステム名
  Cosminexus Manager(Manager名, ManagerのホストIPアドレス:Managerのポート番号)
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先選択)の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  Type:受付種別
  ContextRoot:コンテキストルート
  deployed:受付配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付(呼出先選択)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:ビジネスプロセス配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  Type:受付種別
  ContextRoot:コンテキストルート
  deployed:受付配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:ビジネスプロセス配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  Type:受付種別
  ContextRoot:コンテキストルート
  deployed:受付配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタのサービスID)
  ServiceName:アダプタ表示名
  deployed:アダプタ配備状態
  modified-time:サービスアダプタが更新された時間
- HCSC-Server(CSCSrvName:HCSCサーバ名)
  display-name:HCSCサーバ表示名
  J2EESrvName:J2EEサーバ名
  RMSystemName:RMシステム名
  Cosminexus Manager(Manager名, ManagerのホストIPアドレス:Managerのポート番号)
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先選択)の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  Type:受付種別
  ContextRoot:コンテキストルート
  deployed:受付配備状態
```

- modified-time:ユーザ定義受付（呼出先選択）が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付（呼出先固定）が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付（呼出先固定）が更新された時間
- ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタ名)
 - ServiceName:アダプタ表示名
 - Type:アダプタ種別
 - deployed:アダプタ配備状態
 - modified-time:サービスアダプタが更新された時間
- Cluster(name:クラスタ名)
 - cluster-display-name:クラスタ表示名
 - cluster-type:クラスタ種別
 - db-use:データベースの使用有無
 - rm-use:Reliable Messagingの使用有無
 - SOAP-mode:使用するSOAPモード
- HCSC-Server(GCSCSrvName:HCSCサーバ名)
 - display-name:HCSCサーバ表示名
 - J2EESrvName:J2EEサーバ名
 - RMSystemName:RMシステム名
 - Cosminexus Manager(Manager名, ManagerのホストIPアドレス:Managerのポート番号)
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付（呼出先固定）が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付（呼出先固定）が更新された時間
- ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタのサービスID)

ServiceName:アダプタ表示名
Type:アダプタ種別
deployed:アダプタ配備状態
modified-time:サービスアダプタが更新された時間

(2)-csc オプションで HCSC サーバを指定した場合

Command Edit Time:コマンド発行時間
Domain(name:ドメイン名)
- Cluster(name:クラスタ名)
 cluster-display-name:クラスタ表示名
 cluster-type:クラスタ種別
 db-use:データベースの使用有無
 rm-use:Reliable Messagingの使用有無
 SOAP-mode:使用するSOAPモード
- HCSC-Server(CSCSrvName:HCSCサーバ名)
 display-name:HCSCサーバ表示名
 J2EESrvName:J2EEサーバ名
 RMSystemName:RMシステム名
 Cosminexus Manager(Manager名, ManagerのホストIPアドレス:Managerのポート番号)
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先選択)の受付ID)
 ReceptionName:受付名
 Type:受付種別
 ContextRoot:コンテキストルート
 deployed:受付配備状態
 modified-time:ユーザ定義受付(呼出先選択)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 deployed:ビジネスプロセス配備状態
 modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
 ReceptionName:受付名
 Type:受付種別
 ContextRoot:コンテキストルート
 deployed:受付配備状態
 modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 deployed:ビジネスプロセス配備状態
 modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
 ReceptionName:受付名
 Type:受付種別
 ContextRoot:コンテキストルート
 deployed:受付配備状態
 modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタのサービスID)
 ServiceName:アダプタ表示名
 Type:アダプタ種別
 deployed:アダプタ配備状態
 modified-time:サービスアダプタが更新された時間

(3)-oldtype オプションを指定した場合

Command Edit Time:コマンド発行時間
Domain(name:ドメイン名)

- Cosminexus Manager(name:Manager名)
 - display-name:Manager表示名
 - management-ip:ManagerのホストIPアドレス
 - port:Managerのポート番号
- HCSC-Server(CSCSrvName:HCSCサーバ名)
 - display-name:HCSCサーバ表示名
 - cluster-name:クラスタ名
 - cluster-display-name:クラスタ表示名
 - cluster-type:クラスタ種別
 - J2EESrvName:J2EEサーバ名
- SessionBean
 - Url:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するURL
 - LookupName:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名
- WebService(SOAP1.1)
 - Url:同期サービス (Webサービス・SOAP1.1) 呼び出し時に使用するURL
- WebService(SOAP1.2)
 - Url:同期サービス (Webサービス・SOAP1.2) 呼び出し時に使用するURL
- MDB(WS-R)
 - Url:非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用するURL
- MDB(DBQueue)
 - Name:DBキュー名
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付 (呼出先選択) の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付 (呼出先選択) が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付 (呼出先固定) の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付 (呼出先固定) が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付 (呼出先固定) の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付 (呼出先固定) が更新された時間
- ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタのサービスID)
 - ServiceName:アダプタ表示名
 - Type:アダプタ種別
 - deployed:アダプタ配備状態
 - modified-time:サービスアダプタが更新された時間
- HCSC-Server(CSCSrvName:HCSCサーバ名)
 - display-name:HCSCサーバ表示名
 - cluster-name:クラスタ名
 - cluster-display-name:クラスタ表示名
 - cluster-type:クラスタ種別
 - J2EESrvName:J2EEサーバ名

- SessionBean
 - Url:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するURL
 - LookupName:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名
- WebService(SOAP1.1)
 - Url:同期サービス (Webサービス・SOAP1.1) 呼び出し時に使用するURL
- WebService(SOAP1.2)
 - Url:同期サービス (Webサービス・SOAP1.2) 呼び出し時に使用するURL
- MDB(WS-R)
 - Url:非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用するURL
- MDB(DBQueue)
 - Name:DBキュー名
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付 (呼出先固定) の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付 (呼出先固定) が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付 (呼出先固定) の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付 (呼出先固定) が更新された時間
- Cosminexus Manager(name:Manager名)
 - display-name:Manager表示名
 - management-ip:ManagerのホストIPアドレス
 - port:Managerのポート番号
- HCSC-Server(CSCSrvName:HCSCサーバ名)
 - display-name:HCSCサーバ表示名
 - cluster-name:クラスタ名
 - cluster-display-name:クラスタ表示名
 - cluster-type:クラスタ種別
 - J2EESrvName:J2EEサーバ名
- SessionBean
 - Url:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するURL
 - LookupName:同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名
- WebService(SOAP1.1)
 - Url:同期サービス (Webサービス・SOAP1.1) 呼び出し時に使用するURL
- WebService(SOAP1.2)
 - Url:同期サービス (Webサービス・SOAP1.2) 呼び出し時に使用するURL
- MDB(WS-R)
 - Url:非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用するURL
- MDB(DBQueue)
 - Name:DBキュー名
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - deployed:ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付 (呼出先固定) の受付ID)
 - ReceptionName:受付名

- Type: 受付種別
- ContextRoot: コンテキストルート
- deployed: 受付配備状態
- modified-time: ユーザ定義受付（呼出先固定）が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName: ビジネスプロセス表示名
 - deployed: ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID: ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID)
 - ReceptionName: 受付名
 - Type: 受付種別
 - ContextRoot: コンテキストルート
 - deployed: 受付配備状態
 - modified-time: ユーザ定義受付（呼出先固定）が更新された時間
- HCSC-Server(CSCSrvName: HCSCサーバ名)
 - display-name: HCSCサーバ表示名
 - cluster-name: クラスタ名
 - cluster-display-name: クラスタ表示名
 - cluster-type: クラスタ種別
 - J2EESrvName: J2EEサーバ名
- SessionBean
 - Url: 同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するURL
 - LookupName: 同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名
- WebService(SOAP1.1)
 - Url: 同期サービス (Webサービス・SOAP1.1) 呼び出し時に使用するURL
- WebService(SOAP1.2)
 - Url: 同期サービス (Webサービス・SOAP1.2) 呼び出し時に使用するURL
- MDB(WS-R)
 - Url: 非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用するURL
- MDB(DBQueue)
 - Name: DBキュー名
- BusinessProcess(ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName: ビジネスプロセス表示名
 - deployed: ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID: ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName: ビジネスプロセス表示名
 - deployed: ビジネスプロセス配備状態
 - modified-time: ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID: ユーザ定義受付（呼出先固定）の受付ID)
 - ReceptionName: 受付名
 - Type: 受付種別
 - ContextRoot: コンテキストルート
 - deployed: 受付配備状態
 - modified-time: ユーザ定義受付（呼出先固定）が更新された時間

(4)-private オプションを指定した場合（下線部が非公開コンポーネントの情報）

- Command Edit Time: コマンド発行時間
- Domain(name: ドメイン名)
 - Cluster(name: クラスタ名)
 - cluster-display-name: クラスタ表示名
 - cluster-type: クラスタ種別
 - db-use: データベースの使用有無
 - rm-use: Reliable Messagingの使用有無
 - SOAP-mode: 使用するSOAPモード
 - HCSC-Server(CSCSrvName: HCSCサーバ名)

- display-name:HCSCサーバ表示名
- J2EESrvName:J2EEサーバ名
- RMSystemName:RMシステム名
- Cosminexus Manager(Manager名, ManagerのホストIPアドレス:Managerのポート番号)
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先選択)の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付(呼出先選択)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタのサービスID)
 - ServiceName:アダプタ表示名
 - Type:アダプタ種別
 - modified-time:サービスアダプタが更新された時間
- HCSC-Server(CSCSrvName:HCSCサーバ名)
 - display-name:HCSCサーバ表示名
 - J2EESrvName:J2EEサーバ名
 - RMSystemName:RMシステム名
 - Cosminexus Manager(Manager名, ManagerのホストIPアドレス:Managerのポート番号)
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先選択)の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - deployed:受付配備状態
 - modified-time:ユーザ定義受付(呼出先選択)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
 - ServiceName:ビジネスプロセス表示名
 - modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
 - ReceptionName:受付名
 - Type:受付種別
 - ContextRoot:コンテキストルート
 - modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタのサービスID)

```

ServiceName:アダプタ表示名
Type:アダプタ種別
deployed:アダプタ配備状態
modified-time:サービスアダプタが更新された時間
- Cluster(name:クラスタ名)
  cluster-display-name:クラスタ表示名
  cluster-type:クラスタ種別
  db-use:データベースの使用有無
  rm-use:Reliable Messagingの使用有無
  SOAP-mode:使用するSOAPモード
- HCSC-Server(CSCSrvName:HCSCサーバ名)
  display-name:HCSCサーバ表示名
  J2EESrvName:J2EEサーバ名
  RMSystemName:RMシステム名
  Cosminexus Manager(Manager名, ManagerのホストIPアドレス:Managerのポート番号)
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:アダプタ配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  Type:受付種別
  ContextRoot:コンテキストルート
  deployed:アダプタ配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
  ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  deployed:アダプタ配備状態
  modified-time:ビジネスプロセスが更新された時間
- UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
  ReceptionName:受付名
  Type:受付種別
  ContextRoot:コンテキストルート
  deployed:アダプタ配備状態
  modified-time:ユーザ定義受付(呼出先固定)が更新された時間
- ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタのサービスID)
  ServiceName:アダプタ表示名
  Type:アダプタ種別
  deployed:アダプタ配備状態
  modified-time:サービスアダプタが更新された時間
- PrivateComponents
  - UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先選択)の受付ID)
    ReceptionName:受付名
    Type:受付種別
    ContextRoot:コンテキストルート

  - BusinessProcess(ServiceID:ビジネスプロセスのサービスID)
    ServiceName:ビジネスプロセス表示名
  - UserDefinedReception(ReceptionID:ユーザ定義受付(呼出先固定)の受付ID)
    ReceptionName:受付名
    Type:受付種別
    ContextRoot:コンテキストルート
  - ServiceAdapter(ServiceID:サービスアダプタのサービスID)
    ServiceName:アダプタ表示名
    Type:アダプタ種別

```

説明 ((1)-csc オプションで HCSC サーバを指定しない場合、および(2)-csc オプションで HCSC サーバを指定した場合)

表示項目	説明
Command Edit Time	<p>コマンド発行時間を示します。</p> <p>java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒 • SSS：ミリ秒
Domain (name)	ドメイン名を示します。
Cluster (name)	クラスタ名を示します。
cluster-display-name	クラスタ表示名を示します。*1
cluster-type	<p>クラスタ種別を示します。次のどちらかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • LB：ロードバランスクラスタ • HA：HA クラスタ
db-use	<p>データベースを使用しているかどうかを示します。次のどちらかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ON：使用しています。 • OFF：使用していません。
rm-use	<p>Reliable Messaging を使用しているかどうかを示します。次のどちらかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ON：使用しています。 • OFF：使用していません。
SOAP-mode	<p>使用する SOAP モードを示します。次のどちらかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1.1：SOAP1.1 モードを示します。 • 1.1/1.2：SOAP1.1/1.2 併用モードを示します。
HCSC-Server (CSCSrvName)	HCSC サーバ名を示します。
display-name	HCSC サーバ表示名を示します。*1
J2EESrvName	J2EE サーバ名を示します。
RMSystemName	RM システム名を示します。
Cosminexus Manager (name, ip : port)	<p>次の情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Manager 名 • Manager のホスト IP アドレス • Manager のポート番号

表示項目	説明
BusinessProcess (ServiceID)	ビジネスプロセスのサービス ID を示します。
ServiceAdapter (ServiceID)	サービスアダプタのサービス ID を示します。
ServiceName	ビジネスプロセス表示名, またはサービスアダプタ表示名を示します。
UserDefinedReception (ReceptionID) ※2	ユーザ定義受付の受付 ID を示します。
ReceptionName※2	ユーザ定義受付の受付名を示します。
Type※2	アダプタ種別の場合, 次の情報が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • WebService : SOAP アダプタ • SessionBean : SessionBean アダプタ • MDB_WSR : MDB (WS-R) アダプタ • MDB_DBQ : MDB (DB キュー) アダプタ • Custom : 上記以外のサービスアダプタ (07-50 より古いリポジトリの情報は, 空白で表示されます) 受付種別の場合, 次の情報が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • WebService : SOAP 受付 • Custom : SOAP 受付以外のユーザ定義受付
ContextRoot※2	コンテキストルートを示します。情報が存在しない場合は空白で表示されます。
deployed※2	ビジネスプロセス, サービスアダプタ, またはユーザ定義受付が配備されているかどうかを示します。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • true : 配備されています。 • false : 配備されていません。
modified-time※2	ビジネスプロセス, サービスアダプタ, またはユーザ定義受付が更新された時間を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに, YYYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYYY : 西暦年 • MM : 月 • DD : 日 • hh : 時 • mm : 分 • ss : 秒 なお, 更新時刻は開発環境でパッケージングした時間です。

注※1

次の条件の両方に当てはまる場合, 文字化けが発生するおそれがあります。

- HCSC サーバ表示名, クラスタ表示名, またはユーザ電文に次の文字を使用している。
 - 基本多言語面 (BMP) 以外の文字
 - Unicode のコードポイント U+10000~U+10FFFF の範囲の文字
 - UTF-16 エンコーディングでのサロゲート・ペアで表される文字

- Windows でこのコマンドを使用している。

注※2

ユーザ定義受付（呼出先選択）とユーザ定義受付（呼出先固定）は別の個所に出力されます。

- ユーザ定義受付（呼出先選択）の項目は、BusinessProcess より前に出力されます。
- ユーザ定義受付（呼出先固定）の項目は、BusinessProcess の下位項目として出力されます。

説明（(3)-oldtype オプションを指定した場合、および(4)-private オプションを指定した場合）

表示項目	説明
Command Edit Time	コマンド発行時間を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒 • SSS：ミリ秒
Domain (name)	ドメイン名を示します。
Cosminexus Manager (name)	Manager 名を示します。
display-name	次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • Manager 表示名^{*1} • HCSC サーバ表示名^{*1} • ビジネスプロセス表示名 • サービスアダプタ表示名
management-ip	Manager のホスト IP アドレスを示します。
port	Manager のポート番号を示します。
HCSC-Server (CSCSrvName)	HCSC サーバ名を示します。
cluster-name	クラスタ名を示します。
cluster-display-name	クラスタ表示名を示します。
cluster-type	クラスタ種別を示します。次のどちらかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • LB：ロードバランスクラスタ • HA：HA クラスタ
J2EESrvName	J2EE サーバ名を示します。
RMSystemName	RM システム名を示します。
Url	次のどれかが表示されます。

表示項目	説明
Url	<ul style="list-style-type: none"> • SessionBean の場合：同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用する URL • WebService (SOAP1.1) の場合：同期サービス (Web サービス・SOAP1.1) 呼び出し時に使用する URL • WebService (SOAP1.2) の場合：同期サービス (Web サービス・SOAP1.2) 呼び出し時に使用する URL • MDB (WS-R) の場合：非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出し時に使用する URL
LookupName	同期サービス (SessionBean) 呼び出し時に使用するルックアップ名を示します。
Name	DB キュー名を示します。
BusinessProcess (ServiceID)	ビジネスプロセスのサービス ID を示します。
UserDefinedReception (ReceptionID) ※2	ユーザ定義受付の受付 ID を示します。
ReceptionName※2	ユーザ定義受付の受付名を示します。
Type※2	<p>アダプタ種別の場合、次の情報が表示されます。07-50 より古いリポジトリの情報は、空白で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebService：SOAP アダプタ • SessionBean：SessionBean アダプタ • MDB_WSR：MDB (WS-R) アダプタ • MDB_DBQ：MDB (DB キュー) アダプタ • Custom：上記以外のサービスアダプタ <p>受付種別の場合、次の情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebService：SOAP 受付 • Custom：SOAP 受付以外のユーザ定義受付
ContextRoot※2	コンテキストルートを示します。情報が存在しない場合は空白で表示されます。
deployed※2	<p>ビジネスプロセス、またはサービスアダプタが配備されているかどうかを示します。次のどちらかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • true：配備されています。 • false：配備されていません。
modified-time※2	<p>ビジネスプロセス、またはサービスアダプタが更新された時間を示します。java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒 <p>なお、更新時刻は開発環境でパッケージングした時間です。</p>

表示項目	説明
ServiceAdapter (ServiceID)	サービスアダプタのサービス ID を示します。

注※1

次の条件の両方に当てはまる場合、文字化けが発生するおそれがあります。

- HCSC サーバ表示名, クラスタ表示名, またはユーザ電文に次の文字を使用している。
 - ・ 基本多言語面 (BMP) 以外の文字
 - ・ Unicode のコードポイント U+10000~U+10FFFF の範囲の文字
 - ・ UTF-16 エンコーディングでのサロゲート・ペアで表される文字
- Windows でこのコマンドを使用している。

注※2

ユーザ定義受付 (呼出先選択) とユーザ定義受付 (呼出先固定) は別の個所に出力されます。

- ユーザ定義受付 (呼出先選択) の項目は, BusinessProcess より前に出力されます。
- ユーザ定義受付 (呼出先固定) の項目は, BusinessProcess の下位項目として出力されます。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

-reprofile 指定時は, 次の情報は出力されません。

- ビジネスプロセスの配備状態, およびサービスアダプタの配備状態
- 次のサービス呼び出し時に使用する URL[※]
 - 同期サービス (SessionBean)
 - 同期サービス (Web サービス(SOAP1.1))
 - 同期サービス (Web サービス(SOAP1.2))
 - 非同期サービス (MDB (WS-R))
- DB キュー名[※]
- クラスタ種別

注※

サービス部品呼び出し時に使用する URL，および DB キュー名は，-oldtype 指定時に出力されます。

cscrepupdate (リポジトリのアップデート)

形式

```
cscrepupdate [-h]
               -user <ログインユーザID>
               -pass <ログインパスワード>
               -inputfile <アップデート前のZIPファイル名>
               -outputfile <アップデート後のZIPファイル名>
```

機能

旧バージョンで作成されたりポジトリを対象に，インストールされているバージョンで利用できるリポジトリへアップデートします。リポジトリのアップデート処理が必要ない場合は，何も出力されません。

ログインユーザ ID などの必須オプションは，HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで，このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については，マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 H.2 新規にインストールして運用環境のリポジトリを移行する手順」のリポジトリのアップデートに関する説明を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は，ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-inputfile <アップデート前の ZIP ファイル名> ~((1-200 バイト))

アップデート前の古いバージョンのリポジトリ ZIP ファイルを絶対パスまたは相対パスで指定します。

指定したファイルが存在しない場合は，エラーになります。

-outputfile <アップデート後の ZIP ファイル名> ~((1-200 バイト))

アップデート後の新しいバージョンのリポジトリ ZIP ファイルの出力先を絶対パスまたは相対パスで指定します。指定したファイルの拡張子を「.zip」にしなかった場合は、「.zip」が付加されます。-inputfile オプションと同じ ZIP ファイルは指定できません。

指定したファイルがすでに存在する場合は上書きされます。また、次の場合はエラーになります。

- 指定したファイルのディレクトリが存在しない場合
- ファイル以外を指定した場合

入力例

repository_old.zip の内容をアップデートし、カレントディレクトリに repository_new.zip として出力する場合

```
cscrepupdate -user admin -pass admin -inputfile repository_old.zip -outputfile repository_new.zip
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドでアップデートできるのは 08-00 以降のリポジトリです。07-60 以前のリポジトリをアップデートしたい場合は、開発環境でインポートを実行してリポジトリをアップデートしてください。
- コマンドを実行する前に、次に示すディレクトリのあるドライブに対し、リポジトリのディスク使用量の 2 倍以上の空き容量があることを確認してください。
 - サービスプラットフォームのインストールディレクトリ
 - CSCMNG_HOME 環境変数に設定したディレクトリ

cscresinfo (リソース稼働情報の表示)

形式

```
cscresinfo [-h]
            -user <ログインユーザID>
```

```
-pass <ログインパスワード>  
-csc <HCSCサーバ名>  
[-item cache]
```

機能

HCSC サーバ上で開始している、リソースアダプタ、標準受付、および HCSC コンポーネントの稼働情報を表示します。HCSC サーバが起動していない場合、これらの稼働情報は表示されません。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.3.18 HCSC サーバのリソース稼働情報を確認する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

稼働情報を表示したい HCSC サーバ名を指定します。

-item cache

稼働情報のほかに、フォーマット定義およびデータ変換定義のキャッシュ数と、それらのキャッシュ数の上限値を表示する場合に指定します。

出力形式

- HCSC サーバが起動状態で、かつ標準受付および HCSC コンポーネントが開始状態の場合

```
Information Get Time : 稼働情報収集時刻  
[HCSC-Server]  
<クラスタ名>.<HCSCサーバ名>:active  
JavaVM Heap Size(MB)          Java VMヒープサイズ最大値/Java VMヒープサイズ上限値  
  
[DBConnector]  
リソースアダプタ名 DBコネクション数最大値/DBコネクション数上限値  
  
[StandardReception]  
受付種別
```

queue キュー滞留数最大値/キュー滞留数上限値
instance 実行数の最大値/実行数の上限値

[UserDefinedReception]

ユーザ定義受付の受付ID

queue キュー滞留数最大値/キュー滞留数上限値
instance 実行数の最大値/実行数の上限値

[BusinessProcess]

ビジネスプロセスのサービスID 実行数の最大値/実行数の上限値

[ServiceAdapter]

サービスアダプタのサービスID 実行数の最大値/実行数の上限値

[FormatDefinition]※

Binary バイナリフォーマット定義のキャッシュ数/フォーマット定義のキャッシュ数の上限値

XML XMLスキーマのキャッシュ数/フォーマット定義のキャッシュ数の上限値

[TransformDefinition]※

データ変換定義のキャッシュ数/データ変換定義のキャッシュ数の上限値

注※

コマンドに「-item cache」を指定した場合に出力されます。

- HCSC サーバが起動状態で、かつ開始状態の標準受付および HCSC コンポーネントがない場合

Information Get Time : 稼働情報収集時刻

[HCSC-Server]

<クラスタ名>.<HCSCサーバ名>:active

JavaVM Heap Size(MB) Java VMヒープサイズ最大値/Java VMヒープサイズ上限値

[DBConnector]

リソースアダプタ名 DBコネクション数最大値/DBコネクション数上限値

[StandardReception]※¹

[UserDefinedReception]※¹

[BusinessProcess]※¹

[ServiceAdapter]※¹

[FormatDefinition]※²

Binary バイナリフォーマット定義のキャッシュ数/フォーマット定義のキャッシュ数上限値

XML XMLスキーマのキャッシュ数/フォーマット定義のキャッシュ数上限値

[TransformDefinition]※²

データ変換定義のキャッシュ数/データ変換定義のキャッシュ数上限値

注※¹

見出しだけが表示されます。

注※²

コマンドに「-item cache」を指定した場合に出力されます。

• HCSC サーバが起動状態でない場合

```
[HCSC-Server]
<クラスタ名>. <HCSCサーバ名>:HCSCサーバ稼働状態※1

[FormatDefinition]※2
Binary      バイナリフォーマット定義のキャッシュ数/フォーマット定義のキャッシュ数上限値
XML         XMLスキーマのキャッシュ数/フォーマット定義のキャッシュ数上限値

[TransformDefinition]※2
データ変換定義のキャッシュ数/データ変換定義のキャッシュ数上限値
```

注※1

active 以外が表示されます。

注※2

コマンドに「-item cache」を指定した場合に出力されます。

説明

表示項目	説明
稼働情報収集時刻	稼働情報を収集した時刻を示します。java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss の形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒
クラスタ名	クラスタ名を示します。
HCSC サーバ名	HCSC サーバ名を示します。
Java VM ヒープサイズ最大値	収集した 60 秒間での、Java VM ヒープサイズの最大値（単位：MB）を示します。次の場合は「-」が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 • 稼働情報が未取得の場合 未取得となるのは、HCSC サーバが起動してから稼働情報が収集されるまでの間（デフォルトでは 60 秒間）に、コマンドを実行した場合です。
Java VM ヒープサイズ上限値	Java VM ヒープサイズの上限値（単位：MB）を示します。次の場合は「-」が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 • 稼働情報が未取得の場合 未取得となるのは、HCSC サーバが起動してから稼働情報が収集されるまでの間（デフォルトでは 60 秒間）に、コマンドを実行した場合です。
リソースアダプタ名	リソースアダプタ名を示します。
DB コネクション数最大値	収集した 60 秒間での、DB コネクションの最大値を示します。

表示項目	説明
DB コネクション数最大値	<p>また、次の場合は DB コネクション数上限値と合わせて「NA/NA」（無効値）が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 該当のリソースアダプタが、ルートリソースアダプタ、または Reliable Messaging 連携用 DB コネクタの場合 • コネクションプールの上限值が 0 に設定されている場合
DB コネクション数上限値	<p>DB コネクションの上限値を示します。DB コネクション数上限値だけ「NA」と表示される場合は、無制限を示します。</p> <p>DB コネクション数最大値と合わせて「NA/NA」と表示される場合については、「DB コネクション数最大値」の説明を参照してください。</p>
受付種別	<p>標準受付の受付種別を示します。次のどちらかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebService(SOAP1.1) • WebService(SOAP1.2)
キュー滞留数最大値	<p>収集した 60 秒間での、キュー滞留数の最大値を示します。</p> <p>次の場合は「-」が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 • 稼働情報が未取得の場合 <p>未取得となるのは、対象となる受付または HCSC コンポーネントが開始してから稼働情報が収集されるまでの間（デフォルトでは 60 秒間）に、コマンドを実行した場合です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ定義受付（SOAP 受付以外）の場合
キュー滞留数上限値	<p>キュー滞留数の上限値を示します。</p> <p>次の場合は「-」が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 • 稼働情報が未取得の場合 <p>未取得となるのは、対象となる受付または HCSC コンポーネントが開始してから稼働情報が収集されるまでの間（デフォルトでは 60 秒間）に、コマンドを実行した場合です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ定義受付（SOAP 受付以外）の場合
実行数の最大値	<p>収集した 60 秒間での、実行数の最大値を示します。</p> <p>次の場合は「-」が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 • 稼働情報が未取得の場合 • 未取得となるのは、対象となる受付または HCSC コンポーネントが開始してから稼働情報が収集されるまでの間（デフォルトでは 60 秒間）に、コマンドを実行した場合です。
実行数の上限値	<p>実行数の上限値を示します。「NA」または「0」と表示される場合は、無制限を示します。</p> <p>次の場合は「-」が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 • 稼働情報が未取得の場合 <p>未取得となるのは、対象となる受付または HCSC コンポーネントが開始してから稼働情報が収集されるまでの間（デフォルトでは 60 秒間）に、コマンドを実行した場合です。</p>

表示項目	説明
ユーザ定義受付の受付 ID	ユーザ定義受付の受付 ID を示します。
ビジネスプロセスのサービス ID	ビジネスプロセスのサービス ID を示します。
サービスアダプタのサービス ID	サービスアダプタのサービス ID を示します。
HCSC サーバ稼働状態	HCSC サーバの稼働状態を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • active：起動状態 • inactive：停止状態 • startfailed：起動失敗 • stopfailed：停止失敗 • starting：起動中 • stopping：停止中 • unknown：取得失敗
バイナリフォーマット定義のキャッシュ数	バイナリフォーマット定義のキャッシュ数を示します。 次の場合は「-」が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 HCSC サーバが起動状態ではないか、データ通信に失敗した場合です。
XML スキーマのキャッシュ数	XML スキーマのキャッシュ数を示します。 次の場合は「-」が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 HCSC サーバが起動状態ではないか、データ通信に失敗した場合です。
フォーマット定義のキャッシュ数の上限値	フォーマット定義のキャッシュ数の上限値を示します。 次の場合は「-」が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 HCSC サーバが起動状態ではないか、データ通信に失敗した場合です。
データ変換定義のキャッシュ数	データ変換定義のキャッシュ数を示します。 次の場合は「-」が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 HCSC サーバが起動状態ではないか、データ通信に失敗した場合です。
データ変換定義のキャッシュ数の上限値	データ変換定義のキャッシュ数の上限値を示します。 次の場合は「-」が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 稼働情報の取得に失敗した場合 HCSC サーバが起動状態ではないか、データ通信に失敗した場合です。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscstatus (状態表示)

形式

```
cscstatus [-h]
          -user <ログインユーザID>
          -pass <ログインパスワード>
          [-csc <HCSCサーバ名>
          -type {system | reception | compo}]
```

機能

HCSC サーバ、標準受付、および HCSC コンポーネントの状態を表示します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「5.3.12 PRF の状態を確認する」
- 「5.3.13 HTTP Server の状態を確認する」
- 「5.3.16 HCSC サーバの情報を確認する」
- 「5.3.19 サービスアダプタの情報を確認する」
- 「5.3.20 ビジネスプロセスの情報を確認する」
- 「5.3.21 ユーザ定義受付の情報を確認する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8文字))

標準受付または HCSC コンポーネントの状態を表示したい HCSC サーバ名を指定します。このオプションを指定した場合、必ず-type オプションを指定してください。このオプションを省略した場合、すべての HCSC サーバの状態が表示されます。

-type {system | reception | compo}

状態を表示する標準受付または HCSC コンポーネントの種類を指定します。

- system

HCSC サーバと、HCSC サーバが管理する論理サーバの状態（PRF の状態）を表示する場合に指定します。

- reception

標準受付およびユーザ定義受付の状態を表示する場合に指定します。

- compo

HCSC コンポーネントの状態を表示する場合に指定します。

表示形式

(1)HCSC サーバの状態

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
HCSCサーバの状態 HCSCサーバ名
```

説明

表示項目	説明
HCSC サーバの状態	HCSC サーバの状態を示します。次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none">• active：開始状態• inactive：停止状態*• starting：起動処理中• startfailed：起動失敗状態• stopping：停止処理中• stopfailed：停止失敗状態• unknown：取得失敗
HCSC サーバ名	HCSC サーバ名を示します。次の形式で表示されます。 <クラスタ名>.<HCSC サーバ名>

注※

HCSC サーバの状態の取得に要した時間が、HCSC サーバランタイム定義ファイルの csc-command-timeout で設定したコマンドタイムアウト時間以上となった場合にも、inactive で出力されます。

(2)HCSC サーバが管理する論理サーバの状態(-csc 指定時)

- -type system 指定時

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
HCSCサーバの状態 HCSCサーバ名
論理サーバの稼働状態 論理サーバ名
```

説明

表示項目	説明
HCSC サーバの状態	<p>HCSC サーバの状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active：開始状態 • inactive：停止状態※ • starting：起動処理中 • startfailed：起動失敗状態 • stopping：停止処理中 • stopfailed：停止失敗状態 • unknown：取得失敗
論理サーバの稼働状態	<p>論理サーバの状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active：開始状態 • inactive：停止状態 • starting：起動処理中 • stopping：停止処理中 • abnormal ended：異常停止 • recovering：回復中 • communication error：通信障害 • auto stopping：自動停止中 • auto restarting：自動再起動中 • force stopping：強制停止中 • planned stopping：計画停止中

注※

HCSC サーバの状態の取得に要した時間が、HCSC サーバランタイム定義ファイルの csc-command-timeout で設定したコマンドタイムアウト時間以上となった場合にも、inactive で出力されます。

(3)標準受付およびユーザ定義受付の状態(-csc 指定時)

- -type reception 指定時

Command Edit Time:コマンド発行時間
標準受付の状態 reception
ユーザ定義受付の状態

説明

表示項目	説明
標準受付の状態	<p>標準受付の状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active：開始状態 • inactive：停止状態※ • starting：起動処理中 • startfailed：起動失敗状態 • stopping：停止処理中 • stopfailed：停止失敗状態 • unknown：取得失敗

表示項目	説明
ユーザ定義受付の状態	<p>ユーザ定義受付の状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active：開始状態 • inactive：停止状態 • starting：起動処理中 • startfailed：起動失敗状態 • stopping：停止処理中 • stopfailed：停止失敗状態 • deleting：削除処理中 • undeployed：配備前 • unknown：取得失敗

注※

HCSC サーバの状態の取得に要した時間が、HCSC サーバランタイム定義ファイルの csc-command-timeout で設定したコマンドタイムアウト時間以上となった場合にも、inactive で出力されます。

また、HCSC サーバの稼働状態が inactive となる場合、標準受付の稼働状態も inactive で出力します。

(4)HCSC コンポーネントの状態(-csc 指定時)

- -type compo 指定時

Command Edit Time:コマンド発行時間
 ビジネスプロセスの状態 ビジネスプロセスのサービスID 更新時間※
 サービスアダプタの状態 サービスアダプタのサービスID 更新時間※
 ユーザ定義受付の状態 ユーザ定義受付の受付ID 更新時間※

注※

開発環境で HCSC コンポーネントをパッケージングした時間です。したがって、開発環境のマシンの時間に依存します。

説明

表示項目	説明
<ul style="list-style-type: none"> • ビジネスプロセスの状態 • サービスアダプタの状態 • ユーザ定義受付の状態 	<p>ビジネスプロセス、サービスアダプタ、およびユーザ定義受付の状態を示します。次のどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • active：開始状態 • inactive：停止状態 • starting：起動処理中 • startfailed：起動失敗状態 • stopping：停止処理中 • stopfailed：停止失敗状態 • deleting：削除処理中 • undeployed：配備前 • unknown：取得失敗

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscsetup (本番環境の簡易セットアップ)

形式

```
cscsetup [-h]
         {-setup <定義ファイルの格納先ディレクトリ> [-hcscenv <CSCMNG_HOMEディレクトリ>]
          | -unsetup [-force] [-deleteunit <サービスユニット名>]
          | -change <定義ファイルの格納先ディレクトリ> [-unit <サービスユニット名>]}
         [-yes]
```

機能

本番環境に適用できるシステムをセットアップおよびアンセットアップします。また、簡易セットアップで設定した情報を容易に変更します。

このコマンドの使用方法和、追加構築可能環境をセットアップまたはアンセットアップする場合の注意事項については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「3.5.3 HCSC 本番環境簡易セットアップ機能の実行」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-setup <定義ファイルの格納先ディレクトリ> ~((1-100バイト))

本番環境をセットアップする場合、定義ファイルの格納先ディレクトリを絶対パスで指定してください。指定されたディレクトリの定義ファイルを参照し、本番環境がセットアップされます。

格納先ディレクトリは次の点に注意して指定してください。

- 格納先ディレクトリの定義ファイルには、インストールしたバージョンのJDKで使用できる機能が定義されている必要があります。

JDK 17 をインストールした環境で、-setup オプションに JDK 17 環境構築用でない定義ファイルの格納先ディレクトリを指定すると、コマンドが実行エラーとなりセットアップに失敗します。このエラーが発生した場合は、次の手順でセットアップを再実行してください。

1. 強制アンセットアップを実行する
 2. このコマンドの-setup オプションに JDK 17 環境構築用の定義ファイルの格納先ディレクトリを指定して、コマンドを再実行する
- 指定したディレクトリ内の SOA.xml には、SOAP モード (SOAP1.1 モードまたは SOAP1.1/1.2 併用モード) に応じたコンテナ拡張ライブラリ用の jar ファイルを設定してください。設定しない場合の動作は保証しません。

-hcscenv <CSCMNG_HOME ディレクトリ> ~((1-100 バイト))

本番環境を追加セットアップする場合、環境変数 CSCMNG_HOME に設定するディレクトリを絶対パスで指定してください。このオプションは、-setup オプションと併せて指定します。

追加構築可能環境に論理サーバ/HCSC サーバの追加セットアップを実行した場合、警告終了が発生することがあります。警告終了が発生した場合、cscsetup コマンドの実行結果を確認し、出力されている警告メッセージに従って対処してください。

-unsetup

本番環境をアンセットアップします。

-force

アンセットアップ中にエラーが発生した場合、強制的にアンセットアップを続行します。

このオプションは、-setup オプションを指定したセットアップや-unsetup オプションを指定したアンセットアップに失敗し、処理が続行できなくなった場合に使用します。通常のアンセットアップをしたい場合は、-force オプションではなく-unsetup オプションを指定してアンセットアップすることをお勧めします。

HCSC-Manager 定義ファイルに cscmng.repository.root (リポジトリのルートディレクトリパス) を指定している場合、追加構築可能環境ごとに一意の値が設定されていることを確認してから、アンセットアップを実行してください。

-deleteunit <サービスユニット名> ~<半角英数字, アンダーバー (_), およびハイフン (-)> ((1-32 文字))

アンセットアップしたい論理サーバまたは HCSC サーバに対応するサービスユニット名を指定します。このオプションは、-hcscenv オプションを使用して構築した本番環境を-unsetup オプションを指定してアンセットアップする場合に指定します。

指定するサービスユニット名は、本番環境の簡易構築に使用した簡易構築定義ファイル (SOA.xml) にある、アンセットアップしたい論理サーバが定義されている<unit>下の<name>定義の値と一致する値を指定します。

-change <定義ファイルの格納先ディレクトリ> ~((1-100 バイト))

本番環境の情報を変更する場合、定義ファイルの格納先ディレクトリを絶対パスで指定してください。指定されたディレクトリの定義ファイルを参照し、本番環境の情報を変更します。

なお、変更に関しては次の点に注意してください。

- 構築済みの環境の SOAP モードを変更した場合、動作については保証しません。
- J2EE サーバの互換モードは変更できません。変更する場合は、アンセットアップ後に再度セットアップする必要があります。
- Web サーバの J2EE サーバとの連携方法は変更できません。変更する場合は、アンセットアップ後に再度セットアップする必要があります。

-unit <サービスユニット名> ~<半角英数字, アンダーバー (_), およびハイフン (-) > ((1-32 文字))

変更したい論理サーバまたは HCSC サーバに対応するサービスユニット名を指定します。このオプションは、-hcscenv オプションを使用して構築した本番環境を-change オプションを指定して変更する場合に指定します。

指定するサービスユニット名は、本番環境の簡易構築に使用した簡易構築定義ファイル (SOA.xml) にある、変更したい論理サーバが定義されている<unit>下の<name>定義の値と一致する値を指定します。

-yes

確認メッセージが表示されないようにします。

入力例

単一サーバ構成の本番環境の場合

- (1)本番環境をセットアップする場合

```
cscsetup -setup C:¥esb_1.1_1.2mode_v11
```

- (2)本番環境をアンセットアップする場合

```
cscsetup -unsetup
```

- (3)本番環境を強制アンセットアップする場合

```
cscsetup -unsetup -force
```

- (4)本番環境の情報を変更する場合

```
cscsetup -change C:¥esb_1.1_1.2mode_v11
```

サーバ (論理サーバまたは HCSC サーバ) の追加構築を可能とする本番環境の場合

- (1)本番環境をセットアップする場合

```
cscsetup -setup C:¥esb_1.1_1.2mode_v11 -hcscenv C:¥cscmng1
```

(2)本番環境にサーバを追加構築する場合

```
cscsetup -setup C:¥esb_1.1_1.2mode_v11_add -hcscenv C:¥cscmng2
```

(3)本番環境から指定したサービスユニットに構築されているサーバをアンセットアップする場合

```
cscsetup -unsetup -deleteunit Unit1
```

(4)本番環境から指定したサービスユニットに構築されているサーバを強制アンセットアップする場合

```
cscsetup -unsetup -force -deleteunit Unit1
```

(5)本番環境から指定したサービスユニットに構築されているサーバの情報を変更する場合

```
cscsetup -change C:¥esb_1.1_1.2mode_v11 -unit Unit1
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。
20	コマンドが警告終了しました。

注意事項

UNIX の場合、定義ファイルの格納先ディレクトリに cscsetup コマンド定義ファイル (cscsetup.properties) が存在しないと、スーパーユーザで処理が実行されます。そのため、Component Container 管理者を変更して運用したい場合は、cscsetup コマンド定義ファイル (cscsetup.properties) でオーナー名およびグループ名を指定してください。cscsetup コマンド定義ファイルについては、[\[6.4.1 cscsetup コマンド定義ファイル\]](#) を参照してください。

cscsvcctl (サービス情報の管理)

形式

```
cscsvcctl [-h]
           -user <ログインユーザID>
           -pass <ログインパスワード>
           {-getfile <サービス情報変更定義ファイル名>
            | -setfile <サービス情報変更定義ファイル名>
            | -cluster <クラスタ名> -name <サービスアダプタのサービスID> -props <プロパティ>}
```

機能

cscsvcctl コマンドには、次に示す機能があります。

- サービス情報変更定義ファイルを出力する機能 (-getfile オプションを使用)
- サービス情報変更定義ファイルを入力し、一括してサービス情報の変更を設定する機能 (-setfile オプションを使用)
- サービス情報変更定義ファイルを使用しないで、個別にサービス情報の変更を設定する機能 (-cluster, -name, および-props オプションを使用)

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「3.1.6 サービス情報を変更する」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-getfile <サービス情報変更定義ファイル名> ((1-200 バイト))

出力するサービス情報変更定義ファイル名を指定します。絶対パスまたは相対パスで指定します。指定したファイルまでのディレクトリがない場合、異常終了します。指定したファイルがすでにある場合、上書きされます。指定したファイル名と同名のディレクトリがある場合は、異常終了します。

なお、出力したサービス情報変更定義ファイル中で、プロキシサーバのユーザ ID/パスワード、ベーシック認証のユーザ ID/パスワードの設定値は、次のように表示されます。

- 値が設定されている場合：The value has already been set.
- 値が設定されていない場合：空白

-setfile <サービス情報変更定義ファイル名> ((1-200 バイト))

入力するサービス情報変更定義ファイル名を指定します。絶対パスまたは相対パスで指定します。指定したファイルがない場合、異常終了します。

なお、サービス情報変更定義ファイルを設定する際、プロキシサーバのユーザ ID/パスワード、ベーシック認証のユーザ ID/パスワードを変更しない場合は、-getfile オプションで取得したままの値を設定してください。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

サービス情報を変更するサービスアダプタがあるクラスタ名を指定します。

-name <サービスアダプタのサービス ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

サービス情報を変更するサービスアダプタのサービス ID を指定します。

-props <プロパティ> ~((1 文字以上))

操作対象に渡す情報を<key>=<value>形式で指定します。<key>はサービス情報表示コマンド (cscsvcls) で表示されるキー名称を使用します。指定値はダブルクォーテーション (") で囲みます。また、-name オプションで指定したサービスアダプタに関するサービス情報であれば複数指定できます。複数指定する場合、指定値をコンマ (,) で区切ります (例: -props "a=b,c=d")。なお、サービス情報表示コマンド (cscsvcls) で確認した LocalCall の値が false の場合は true へ変更しないでください。

入力例

(1) サービス情報変更定義ファイルを出力する場合

```
cscsvcctl -getfile service_info.txt
```

(2) サービス情報変更定義ファイルを入力し、一括してサービス情報の変更を設定する場合

```
cscsvcctl -setfile service_info.txt
```

(3) サービス情報変更定義ファイルを使用しないで、個別にサービス情報の変更を設定する場合

```
cscsvcctl -cluster Cluster -name adapter1 -props "Url=aaa,ReadTimeout=60"
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

-setfile オプションまたは-name オプションを指定した場合、サービス情報を変更するサービスアダプタが配備中 (HCSC サーバがクラスタ構成の場合、クラスタ内のどれかの HCSC サーバに配備中) の状態になっていると、cscsvcctl コマンドはエラーになります。

cscsvcls (サービス情報の表示)

形式

```
cscsvcls [-h]
         -user <ログインユーザID>
         -pass <ログインパスワード>
         [-detail]
```

機能

サービス情報を標準出力に出力します。出力したサービス情報は、cscsvctl コマンド (サービス情報の管理) の -props オプションに指定するプロパティ情報として確認できます。

サービス情報は、次のアダプタ種別の場合に出力できます。

- SessionBean
- WebService
- MDB_WSR
- MDB_DBQ

これ以外 (ユーザ定義受付, またはアダプタ種別が Custom のサービスアダプタ) の場合は、開発環境または運用環境で設定されている定義ファイル名と、その定義ファイルの状態 (運用環境で変更しているか) を出力します。なお、定義ファイルの取得・設定は、cscmctl コマンド (定義ファイルの管理) でも実施できます。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

ただし、実行環境の独自定義ファイル設定機能を使って実行環境に配置した独自定義ファイルは、このコマンドで情報を出力できません。実行環境の独自定義ファイル設定機能については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.10.3 実行環境の独自定義ファイル設定機能を使用した独自定義ファイルの定義手順」を参照してください。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す箇所を参照してください。

- 「3.1.7 サービス情報を確認する」
- 「3.1.12 運用環境の定義ファイルの状態を確認する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-detail

開発時に設定した値を表示する場合に指定します。

出力形式

-detail を指定しない場合

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
Cluster(name: クラスタ名)
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: アダプタ種別)
  属性名: 値
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: アダプタ種別)
  属性名: 値
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: Custom)
  定義ファイル名: 状態
-UserDefinedReception(ReceptionID: 受付ID, ReceptionType: 受付種別)
  定義ファイル名: 状態
```

-detail を指定する場合

```
Command Edit Time:コマンド発行時間
Cluster(name: クラスタ名)
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: サービスアダプタ種別)
  属性名(def): 開発時に設定した値
  属性名(set): 値
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: サービスアダプタ種別)
  属性名(def): 開発時に設定した値
  属性名(set): 値
- ServiceAdapter(ServiceID: サービスアダプタのサービスID, ServiceType: Custom)
  定義ファイル名: 状態
  プロパティのキー名称: プロパティの値
-UserDefinedReception(ReceptionID: 受付ID, ReceptionType: 受付種別)
  定義ファイル名: 状態
  プロパティのキー名称=: プロパティの値
```

説明

表示項目	説明
Command Edit Time	コマンド発行時間を示します。 java.text.SimpleDateFormat で定義されているフォーマットに、YYYY/MM/DD hh:mm:ss.SSS 形式で出力されます。 <ul style="list-style-type: none">• YYYY : 西暦年• MM : 月

表示項目	説明
Command Edit Time	<ul style="list-style-type: none"> • DD：日 • hh：時 • mm：分 • ss：秒 • SSS：ミリ秒
Cluster (name)	クラスタ名を示します。
ServiceAdapter (ServiceID)	サービスアダプタのサービス ID を示します。
ServiceType	サービスアダプタ種別を示します。次のどれかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • SessionBean：同期 (SessionBean) • WebService：同期 (Web サービス) • MDB_WSR：非同期 (MDB (WS-R)) • MDB_DBQ：非同期 (MDB (DB キュー)) • Custom：上記以外のサービスアダプタ
属性名	現在有効なサービス情報が出力されます。
属性名 (def)	開発時に設定したサービス情報が出力されます。
属性名 (set)	サービス情報変更定義に設定されているサービス情報が出力されます。
受付 ID	受付 ID を示します。
受付種別	受付種別を示します。次のどれかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • WebService：SOAP 受付 • Custom：SOAP 受付以外のユーザ定義受付
定義ファイル名 ^{※1}	定義ファイル名を示します。
状態	定義ファイルの状態を示します。次のどれかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • noChange：独自定義ファイルを運用環境に設定していない状態 • add：独自定義ファイルを運用環境に追加した状態 • changed：運用環境に追加した定義を変更している状態
プロパティのキー名称 ^{※2}	定義ファイルの拡張子が「*.properties」の場合にプロパティのキー名称が出力されます。
プロパティの値 ^{※2}	定義ファイルの拡張子が「*.properties」の場合にプロパティの値が出力されます。

注※1

サービスアダプタの場合、アプリケーション統合属性ファイル名が表示されることがあります。

注※2

拡張子が*.properties 以外の場合は表示されません。

サービス情報の出力形式を次の表に示します。なお、表中の SOAP モードは SOAP1.1 モードおよび SOAP1.1/1.2 併用モードを表します。

表 5-6 サービス情報の出力形式

サービスアダプタ種別	SOAP モード		出力形式（出力順）	サービス情報変更定義ファイルの相当する属性
	1.1	1.1/1.2 併用		
WebService	○	○	BasicAuthenticationId	basic_authentication_id※1※2
	○	○	BasicAuthenticationPass	basic_authentication_pass※1※2
	○	○	BasicAuthenticationUse	basic_authentication_use※1
	○		SessionMaintain	c4web.application.app_maintainsession※1
	○		NonProxyHosts	c4web.application.non_proxy_hosts※1
	○		ProxyHost	c4web.application.proxy_host※1
	○		ProxyPassword	c4web.application.proxy_password※1※2
	○		ProxyPort	c4web.application.proxy_port※1
	○		ProxyUser	c4web.application.proxy_user※1※2
		○	AutoDeleteIncompleteFile	com.cosminexus.csc.auto-delete-incomplete-file※1
	○		ConnectTimeout	c4web.application.socket_connect_timeout※1
		○		com.cosminexus.csc.connect.timeout※1
		○	FileReadLockRetryCount	com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.count※1
		○	FileReadLockRetryInterval	com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.interval※1
	○		ReadTimeout	c4web.application.socket_read_timeout※1
		○		com.cosminexus.csc.request.timeout※1
	○		WriteTimeout	c4web.application.socket_write_timeout※1
	○		PrfTraceLevel	c4web.common.prf_trace_level※1

サービスアダプタ種別	SOAP モード		出力形式（出力順）	サービス情報変更定義ファイルの相当する属性
	1.1	1.1/1.2 併用		
WebService	○		ReceiveMaxSoapEnvelopeSize	c4web.common.receive_max_soap_envelope_size ^{*1}
	○		SendMaxSoapEnvelopeSize	c4web.common.send_max_soap_envelope_size ^{*1}
		○	SessionMaintain	com.cosminexus.csc.session.maintain ^{*1}
	○	○	Url	url
SessionBean	○		Timeout	c4web.application.ejb_timeout ^{*1}
	○		PrfTraceLevel	c4web.common.prf_trace_level ^{*1}
	○		LookupName	lookupName
	○		Url	url
MDB_WSR	○		LocalCall	local_call
	○		QueueName	queue_name
	○		Url	url
	○		MaxMessageNum	max_message_num
	○		QosInOrder	qos_in_order
	○		RdAreaName	rdarea_name
MDB_DBQ	○	○	QueueName	queue_name

(凡例)

○：サービス情報の出力に対応していることを示します。

空欄：サービス情報の出力に対応していないことを示します。

注※1

設定されていない場合は、空白が表示されます。

注※2

設定されている場合は、「The value has already been set.」が表示されます。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。

戻り値	意味
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscsvconfig (HCSC サーバランタイムの定義)

形式

```
cscsvconfig [-h]
             -user <ログインユーザID>
             -pass <ログインパスワード>
             {-operation get -csc <HCSCサーバ名>
              | -operation set -propfile <HCSCサーバランタイム定義ファイル名>
              {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}}
```

機能

サーバセットアップ後の HCSC サーバに対して、定義情報の取得や変更をします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- -operation オプションに set を指定した場合の使用方法
「3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する」
- -operation オプションに get を指定した場合の使用方法
「3.1.5 HCSC サーバの定義内容を確認する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-operation {get | set}

このコマンドの操作を指定します。

- get
指定した HCSC サーバに設定されている定義が標準出力に出力されます。
- set
-propfile オプションで指定したファイルの内容が、指定した HCSC サーバに反映されます。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

定義情報の取得や変更の対象となる HCSC サーバ名を指定します。

-propfile <HCSC サーバランタイム定義ファイル名> ~ ((1-200 バイト))

HCSC サーバに定義する定義一覧を記載したファイル名を相対パス、または絶対パスで指定します。このオプションは、-operation オプションで set を指定したときに有効になります。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC サーバ定義を一括更新するクラスタ名を指定します。-operation で set を指定したときに有効になります。ただし、クラスタ種別が HA のときにこのオプションを指定した場合はエラーになります。

入力例

(1)HCSC サーバ「HCSC」の定義を取得する場合

```
cscsvconfig -user admin -pass admin -csc HCSC -operation get
```

(2)HCSC サーバ「HCSC」の定義を設定する場合

```
cscsvconfig -user admin -pass admin -csc HCSC -operation set -propfile config.properties
```

(3)クラスタ「Cluster」に存在するすべての HCSC サーバの定義を変更する場合

```
cscsvconfig -user admin -pass admin -cluster Cluster -operation set -propfile config.properties
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

cscsvsetup (HCSC サーバのセットアップ)

形式

```
cscsvsetup [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            [-csc <HCSCサーバ名>]
            [-cluster <クラスタ名>]
            -profile <HCSCサーバ構成定義ファイル名>
```

機能

HCSC サーバのセットアップをします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「3.1.3 HCSC サーバをセットアップする」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

セットアップする HCSC サーバ名を指定します。セットアップ済みの HCSC サーバ名と大文字、小文字だけが異なる HCSC サーバ名を使用しないでください。使用すると、データベーステーブル名やキュー名が重複してセットアップが失敗することがあります。このオプションの指定を省略した場合、HCSC サーバ構成定義ファイルに指定した HCSC サーバ名が仮定されます。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))<<-csc オプションで指定したサーバ名>>

セットアップする HCSC サーバが属するクラスタ名を指定します。クラスタ間で一意になるクラスタ名を指定します。セットアップ済みのクラスタ名と大文字、小文字だけが異なるクラスタ名を使用しないでください。使用すると、データベーステーブル名やキュー名が重複してセットアップが失敗することがあります。

ます。このオプションの指定を省略した場合、HCSC サーバ構成定義ファイルに指定したクラスタ名が仮定されます。

-profile <HCSC サーバ構成定義ファイル名> ~ ((1-200 バイト))

HCSC サーバ構成定義ファイル名を相対パス、または絶対パスで指定します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- 追加セットアップをする場合は、HCSC サーバ、各ビジネスプロセス、および各サービスアダプタが停止してからコマンドを実行してください。停止していない場合はエラーになります。
- 同じクラスタ内では、データベースおよび Reliable Messaging を使用するかどうかの設定を一致させてください。
- 同じリポジトリ内では、すべての HCSC サーバの SOAP モードを一致させてください。

cscsvstart (HCSC サーバの起動)

形式

```
cscsvstart [-h]
            -user <ログインユーザID>
            -pass <ログインパスワード>
            {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
            [{-logical <論理サーバ名> | -system }]
```

機能

HCSC サーバ、または論理サーバを起動します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「5.3.3 PRF を起動する」
- 「5.3.4 HCSC サーバを起動する」
- 「5.3.6 HTTP Server を起動する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-8 文字))

起動する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー (_) > ((1-8 文字))

HCSC サーバを一括起動するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに -cluster を指定するとエラーになります。

-logical <論理サーバ名> ~<半角英数字, アンダーバー (_), およびハイフン (-) > ((1-128 文字))

起動する論理サーバ名を指定します。このオプションで設定した論理サーバの種類とその動作を次の表に示します。なお、このオプションを指定した場合、HCSC サーバは起動しません。

表 5-7 -logical オプションに指定した論理サーバの種類とその動作 (起動時)

項番	指定した論理サーバの種類	動作
1	PRF	PRF を起動します。
2	スマートエージェント	スマートエージェントを起動します。
3	CTM ドメインマネージャ	CTM ドメインマネージャを起動します。
4	CTM デーモン	CTM デーモンを起動します。
5	J2EE サーバ	J2EE アプリケーションを起動しないで J2EE サーバを起動します。*
6	Web サーバ	Web サーバを起動します。

注※

HCSC サーバが起動していない状態でコマンドを実行します。

-system

HCSC サーバの起動と同時に、HCSC-Manager 定義ファイルの `cscmng.server.<HCSC サーバ名>.system` で定義した論理サーバを起動します。

入力例

(1)HCSC サーバ「HCSC」を起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -csc HCSC
```

(2)クラスタ「Cluster」下にある HCSC サーバを一括起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -cluster Cluster
```

(3)クラスタ「Cluster」下にある HCSC サーバを論理サーバと同時に一括起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -cluster Cluster -system
```

(4)クラスタ「Cluster」下にある論理サーバ名 PRF を一括起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -cluster Cluster -logical PRF
```

(5)J2EE アプリケーションを起動しないで、HCSC サーバ「HCSC」にある J2EE サーバ「J2EEServer」を起動する場合

```
cscsvstart -user admin -pass admin -csc HCSC -logical J2EEServer
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、セットアップ済みで、かつ停止済みの HCSC サーバに対して実行してください。
なお、このコマンドは起動状態の HCSC サーバに対して実行してもエラーになりません。
- cluster を指定してエラーになった場合、結果を `cscstatus` コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。
- HCSC サーバの起動時にサービスアダプタまたはビジネスプロセスが開始できないと、サービスアダプタ、ビジネスプロセス、または受付が停止状態になる場合がありますが、HCSC サーバの起動は正常終了します。

cscsvstop (HCSC サーバの停止)

形式

```
cscsvstop [-h]
           -user <ログインユーザID>
           -pass <ログインパスワード>
           {-csc <HCSCサーバ名> | -cluster <クラスタ名>}
           [{-logical <論理サーバ名> | -system}]
           [-force]
```

機能

HCSC サーバを停止します。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、目的にあわせてマニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の次に示す個所を参照してください。

- 「5.3.39 HTTP Server を停止する」
- 「5.3.41 HCSC サーバを停止する」
- 「5.3.42 PRF を停止する」

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

停止する HCSC サーバ名を指定します。

-cluster <クラスタ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

HCSC サーバを一括停止するクラスタ名を指定します。クラスタ種別が HA のときに-cluster を指定するとエラーになります。

-logical <論理サーバ名> ~<半角英数字, アンダーバー (_), およびハイフン (-) > ((1-128文字))

停止する論理サーバ名を指定します。このオプションで設定した論理サーバの種類とその動作を次の表に示します。なお、このオプションを指定した場合、HCSC サーバは停止しません。また、-force は無効になります。

表 5-8 -logical オプションに指定した論理サーバの種類とその動作 (停止時)

項番	指定した論理サーバの種類	動作
1	PRF	PRF を停止します。
2	スマートエージェント	スマートエージェントを停止します。
3	CTM ドメインマネージャ	CTM ドメインマネージャを停止します。
4	CTM デーモン	CTM デーモンを停止します。
5	J2EE サーバ	J2EE サーバを停止します。*
6	Web サーバ	Web サーバを停止します。

注※

HCSC サーバが起動していない状態でコマンドを実行します。

-system

HCSC サーバの停止と同時に、HCSC-Manager 定義ファイルの cscmng.server.<HCSC サーバ名>.system で定義した論理サーバを停止します。

-force

HCSC サーバの強制停止をします。標準受付、ユーザ定義受付が起動中でも HCSC サーバを停止します。HCSC サーバが稼働する論理 J2EE サーバは通常停止します。

入力例

(1)HCSC サーバ「HCSC」を停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -csc HCSC
```

(2)クラスタ「Cluster」下にある HCSC サーバを一括強制停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -cluster Cluster -force
```

(3)クラスタ「Cluster」下にある HCSC サーバを論理サーバと同時に一括停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -cluster Cluster -system
```

(4)クラスタ「Cluster」下にある論理サーバ「PRF」を一括停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -cluster Cluster -logical PRF
```

(5)HCSC サーバ「HCSC」にある J2EE サーバ「J2EEServer」を停止する場合

```
cscsvstop -user admin -pass admin -csc HCSC -logical J2EEServer
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- このコマンドは、起動状態の HCSC サーバに対して実行してください。
- -cluster を指定してエラーになった場合、結果を cscstatus コマンドで確認し、障害要因を取り除いたあとに、再度コマンドを実行してください。

cscsvunsetup (HCSC サーバのアンセットアップ)

形式

```
cscsvunsetup [-h]
              -user <ログインユーザID>
              -pass <ログインパスワード>
              -csc <HCSCサーバ名>
              [-ignore]
```

機能

HCSC サーバのアンセットアップをします。

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「3.3.6 HCSC サーバをアンセットアップする」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-csc <HCSC サーバ名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-8 文字))

アンセットアップする HCSC サーバ名を指定します。

-ignore

実行環境側のアンセットアップに失敗した場合もリポジトリの情報を更新する場合に指定します。ハードディスク障害やアンセットアップ時の通信障害などによる実行環境とリポジトリ環境の不整合を調整するために使用します。HCSC コンポーネントが配備されていた場合は、リポジトリの情報は更新されません。HCSC コンポーネントの情報を削除する場合は、`csccompounddeploy` コマンドで `-ignore` オプションを指定して削除してください。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

HCSC サーバを停止後、各 HCSC コンポーネントが未配備、または未セットアップ状態にしてからこのコマンドを実行してください。HCSC サーバが起動しているときや、各 HCSC コンポーネント配備状態、またはセットアップ状態の場合はエラーになります。

cscutil (各種操作)

形式

```
cscutil [-h]
        -user <ログインユーザID>
        -pass <ログインパスワード>
        {-mng <Manager名>
         | -host <IPアドレス>:<ポート番号> -mnguser <管理ユーザID>
         [-mngpass <管理ユーザパスワード>]}
        -target {server | compo | compo_urecp | request_service}
        -operation {start | stop | get_setup_info | get_info
                   | get_bp_info | get_adapter_info}
        {-props <プロパティ> | -propfile <プロパティファイル名>}
        [-binary <ファイル名>]
```

機能

次に示す操作ができます。

- HCSC サーバの起動と停止
- HCSC サーバセットアップ情報、HCSC サーバ情報の取得
- ビジネスプロセス・サービスアダプタの開始、停止および情報取得
- 標準受付の開始と停止
- ユーザ定義受付の情報取得

ログインユーザ ID などの必須オプションは、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルにデフォルト値を設定することで、このコマンドでの指定を省略できます。

-target オプションと-operation オプションで設定する内容を操作ごとに次の表に示します。

表 5-9 -target オプションと-operation オプションの値によって実施できる操作

操作内容	-target オプション	-operation オプション
HCSC サーバの起動	server	start
ビジネスプロセスの開始	compo	start
サービスアダプタの開始	compo	start
標準受付の開始	request_service	start
標準受付の停止	request_service	stop
サービスアダプタの停止	compo	stop
ビジネスプロセスの停止	compo	stop
HCSC サーバの停止	server	stop
HCSC サーバのセットアップ情報取得	server	get_setup_info

操作内容	-target オプション	-operation オプション
HCSC サーバの情報取得	server	get_info
ビジネスプロセスの情報取得	compo	get_bp_info
サービスアダプタの情報取得	compo	get_adapter_info
ユーザ定義受付の情報取得	compo_urecp	get_info

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ ID> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するユーザ ID を指定します。

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

HCSC-Manager ログイン時に使用するパスワードを指定します。

-mng <Manager 名> ~<半角英数字およびアンダーバー () > ((1-16 文字))

Manager のマネージャ識別名を指定します。リポジトリ内に存在する Manager 名を指定してください。

-host <ホスト名または IP アドレス> : <ポート番号> ~<ホスト名または IP アドレス : 文字列, ポート番号 : 数字> ((文字列 : 1 文字以上, ポート番号 : 1-65535))

Manager リモート管理機能のホスト名 (または IP アドレス) とポート番号を「:」で連結して指定します。IP アドレス、ポート番号ともに省略はできません。

リポジトリが存在しない状態でも、-host オプションは指定できます。-host オプションを指定する場合、-mnguser オプションおよび-mngpass オプションを指定してください。

-mnguser <管理ユーザ ID> ~ ((1 文字以上))

Manager の管理ユーザ ID を指定します。

-mngpass <管理ユーザパスワード> ~ ((1 文字以上))

Manager の管理ユーザ ID に対するパスワードを指定します。変更する Manager のユーザ ID にパスワードを設定している場合だけ、このオプションを指定できます。

-target {server | compo | compo_urecp | request_service}

実行する操作対象を指定します。

- server

実行する操作対象が、HCSC サーバの場合に指定します。

- **compo**
実行する操作対象が、ビジネスプロセスまたはサービスアダプタの場合に指定します。
- **compo_urecp**
実行する操作対象が、ユーザ定義受付の場合に指定します。
- **request_service**
実行する操作対象が、標準受付の場合に指定します。

-operation {start | stop | get_setup_info | get_info | get_bp_info | get_adapter_info}

実行する操作を指定します。

- **start**
指定した操作対象を開始する場合に指定します。
- **stop**
指定した操作対象を停止する場合に指定します。
- **get_setup_info**
指定した HCSC サーバのセットアップ情報を取得する場合に指定します。
- **get_info**
指定した HCSC サーバの情報を取得する場合に指定します。
- **get_bp_info**
指定したビジネスプロセスの情報を取得する場合に指定します。
- **get_adapter_info**
指定したサービスアダプタの情報を取得する場合に指定します。

-props <プロパティ> ~ ((0 文字以上))

指定した **-target** (操作対象) や **-operation** (操作) に指定するプロパティを「<キー値>= <指定値>」の形式で指定します。指定値はダブルクォーテーション (") で囲みます。

ただし、キー値および指定値には、次に示す文字を指定できません。指定すると、動作が不定となります。

- ダブルクォーテーション (")
- 等号 (=)
- コンマ (,)

また、複数指定する場合、各引数はコンマ (,) で区切ります。

(例) `-props "J2EESrvName=HCSCサーバをセットアップしたJ2EEサーバ名, CSCSrvName=起動するHSCCサーバ名"`

次の表に、操作内容に応じた **-target** および **-operation** の指定値と、 **-props** に指定するプロパティを示します。

表 5-10 操作内容に応じた-target (操作対象), -operation (操作), および-props オプションの指定内容

操作内容	-target	-operation	-props で指定するプロパティ
HCSC サーバの起動	server	start	<ul style="list-style-type: none"> J2EESrvName=HCSC サーバをセットアップした J2EE サーバ名 CSCSrvName=起動する HCSC サーバ名
ビジネスプロセスの開始	compo	start	<ul style="list-style-type: none"> AdapterName=起動するビジネスプロセスのサービス ID ServiceKind=アダプタ種別 bp: ビジネスプロセス J2EESrvName=アダプタを起動する J2EE サーバ名 CSCSrvName=アダプタを起動する HCSC サーバ名
サービスアダプタの開始	compo	start	<ul style="list-style-type: none"> AdapterName=起動するサービスアダプタのサービス ID ServiceKind=アダプタ種別 serviceAdapter: サービスアダプタ J2EESrvName=アダプタを起動する J2EE サーバ名 CSCSrvName=アダプタを起動する HCSC サーバ名
標準受付の開始	request_service	start	<ul style="list-style-type: none"> J2EESrvName=HCSC サーバが起動している J2EE サーバ名 CSCSrvName=リクエスト受付ができる HCSC サーバ名
標準受付の停止	request_service	stop	<ul style="list-style-type: none"> J2EESrvName=インポートする J2EE サーバ名 CSCSrvName=リクエスト抑止する HCSC サーバ名 ForceFlag=強制停止フラグ NORMAL_OPTION: 通常停止 WAIT_OPTION: 計画停止 FORCE_OPTION: 強制停止
サービスアダプタの停止	compo	stop	<ul style="list-style-type: none"> J2EESrvName=アダプタを停止する J2EE サーバ名 CSCSrvName=アダプタを停止する HCSC サーバ名 AdapterName=停止するサービスアダプタのサービス ID
ビジネスプロセスの停止	compo	stop	<ul style="list-style-type: none"> J2EESrvName=アダプタを停止する J2EE サーバ名 CSCSrvName=アダプタを停止する HCSC サーバ名 AdapterName=停止するビジネスプロセスのサービス ID

操作内容	-target	-operation	-props で指定するプロパティ
HCSC サーバの停止	server	stop	<ul style="list-style-type: none"> • J2EESrvName=HCSC サーバをセットアップした J2EE サーバ名 • CSCSrvName=停止する HCSC サーバ名 • ForceFlag=強制停止フラグ false：通常停止 true：強制停止
HCSC サーバのセットアップ情報取得	server	get_setup_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName=HCSC サーバ名
HCSC サーバの情報取得	server	get_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName=状態表示する HCSC サーバ名
ビジネスプロセスの情報取得	compo	get_bp_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName=HCSC サーバ名 • AdapterName=ビジネスプロセスのサービス ID
サービスアダプタの情報取得	compo	get_adapter_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName=HCSC サーバ名 • AdapterName=サービスアダプタのサービス ID
ユーザ定義受付の情報取得	compo_urecp	get_info	<ul style="list-style-type: none"> • CSCSrvName=ユーザ定義受付の情報を取得する HCSC サーバ名

-propfile <プロパティファイル名> ~ ((1-200 バイト))

引数を記述したプロパティファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。J2SE のプロパティファイル形式で指定します。

-binary <ファイル名> ~ ((1-200 バイト))

バイナリ形式のファイル名を絶対パス、または相対パスで指定します。このオプションは将来使用するために定義されているオプションです。

入力例

(1)HCSC サーバ「HCSC」を起動する場合

```
cscutil -user admin -pass admin -mng Manager -target server -operation start -props "CSCSrvName=HCSC, J2EESrvName=J2EEServer"
```

(2)プロパティファイル「cscutil.properties」を使用して、HCSC サーバ「HCSC」を起動する場合

```
cscutil -user admin -pass admin -host 10.209.13.165:9001 -mnguser admin -mngpass admin -target server -operation start -propfile cscutil.properties
```

cscutil.properties の中身

```
CSCSrvName=HCSC
J2EESrvName=J2EEServer
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
2	通信タイムアウトが発生しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- cscutil コマンドを実行する場合、参照機能（HCSC サーバ情報の参照など）は、複数同時に実行できません。
- 運用機能（HCSC サーバの起動やサービスアダプタの停止など）を複数同時に実行できません。

csmftppaddusr（FTP インバウンドアダプタのユーザの登録・更新）

形式

```
csmftppaddusr { -userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>  
                | -usr <ユーザ名>  
                -pass <パスワード>}  
[-r]
```

機能

FTP インバウンドアダプタに新規のユーザを登録します。登録できるユーザ数は 2,048 までです。ユーザがすでに登録されている場合は、パスワードを更新します。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- このコマンドの -pass オプションにパスワードを指定した場合、プロセスの引数を確認できる OS 機能などによって、パスワードが検知されるおそれがあります。このため、-userinfofile オプションを使用した、ユーザ情報指定ファイルでのパスワードの設定を推奨します。
- コマンドにユーザ情報指定ファイルを指定する場合、運用コマンドを実行する管理者にだけ、ユーザ情報指定ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。

このコマンドは HCSC サーバの稼働の状態に関係なく実行できます。このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.12 FTP インバウンドアダプタのユーザ情報を確認・変更する」を参照してください。

引数

-userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>

ユーザ名、パスワードが記載されているユーザ情報指定ファイルのパスを絶対パスで指定してください。パスが空白を含む場合は、パス全体をダブルクォーテーション (") で囲んでください。

指定されたユーザ情報指定ファイルのユーザ情報がすべて正常であれば、その内容が一括で登録または更新されます。ただし、次の場合はエラーとなり、登録・更新は実施されません。

- 指定されたファイルが存在しない場合
- ファイル内のユーザ情報に1つでも不正があった場合
- ファイル内にユーザ名が重複している場合
- 登録済みユーザ情報とユーザ情報指定ファイル内のユーザ情報の合計数が、登録できるユーザ数の上限を上回っている場合

ユーザ名が指定されていない (anonymous) ユーザは、ユーザ情報指定ファイルに登録できません。また、実行対象のユーザ情報指定ファイルには、ユーザ情報の登録または更新のどちらかだけを指定できます。

ユーザ情報指定ファイルの記載方法については、「[6.21.1 ユーザ情報指定ファイル](#)」を参照してください。

-usr <ユーザ名> ~<半角英数字および半角記号> ((1-80文字))

登録または更新したいユーザ名を指定します。ユーザ名が指定されていない (anonymous) ユーザは登録できません。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 ((
- 終わり小括弧 ())
- 正符号 (+)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)

- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (`)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

-pass <パスワード> ~<半角英数字および半角記号> ((1-80 文字))

登録または変更したいユーザ名に対するパスワードを指定します。使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。英字の大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号は -usr オプションと同じです。

更新したい場合 (-r オプションを指定する場合)、更新後のパスワードを指定します。

-r

すでに登録されているユーザ ID のパスワードを変更する場合に指定します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- FTP インバウンドアダプタが停止している状態でコマンドを実行してください。コマンドの実行内容（ユーザの登録・更新）は、FTP インバウンドアダプタの開始後に有効となります。
- FTP インバウンドアダプタが開始している状態でコマンドを実行した場合、コマンドの実行内容（ユーザの登録・更新）は、次に FTP インバウンドアダプタを開始したあとに有効となります。
- 次の場合はエラーになります。
 - ユーザの登録，更新，削除および表示を実行中の場合
 - システム管理者以外がコマンドを実行しようとした場合

csmftpdelusr (FTP インバウンドアダプタのユーザの削除)

形式

```
csmftpdelusr -usr <ユーザ名>
```

機能

FTP インバウンドアダプタに登録されているユーザを削除します。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.12 FTP インバウンドアダプタのユーザ情報を確認・変更する」を参照してください。

引数

-usr <ユーザ名> ~<半角英数字および半角記号> ((1-80 文字))

削除したいユーザ名を指定します。使用できる文字は、半角英数字、半角記号（ASCII コードの「0x21」～「0x7E」）、および半角スペース（ASCII コードの「0x20」）です。英字の大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())

- 正符号 (+)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフлекс (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (˘)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- FTP インバウンドアダプタが停止している状態でコマンドを実行してください。
- HCSC サーバの稼働の状態に関係なく、コマンドを実行できます。

- コマンドの実行内容（ユーザの削除）は、FTP インバウンドアダプタの開始後に有効となります。また、FTP インバウンドアダプタが開始している状態でコマンドを実行した場合、コマンドの実行内容（ユーザの削除）は、次に FTP インバウンドアダプタを開始したあとに有効となります。
- 次の場合はエラーになります。
 - ユーザの登録，更新，削除および表示を実行中の場合
 - システム管理者以外がコマンドを実行しようとした場合

csmftplsusr（FTP インバウンドアダプタのユーザの表示）

形式

```
csmftplsusr
```

機能

FTP インバウンドアダプタに登録されているユーザを表示します。表示結果は標準出力に出力されます。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.12 FTP インバウンドアダプタのユーザ情報を確認・変更する」を参照してください。

表示形式

1：ユーザ ID1

2：ユーザ ID2

3：ユーザ ID3

:

1 行に 1 ユーザ名を表示します。

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- FTP インバウンドアダプタが停止している状態でコマンドを実行してください。

- HCSC サーバの稼働の状態に関係なく、コマンドを実行できます。
- 次の場合はエラーになります。
 - ユーザの登録、更新、削除および表示を実行中の場合
 - システム管理者以外がコマンドを実行しようとした場合

csmftplshistory (転送履歴の表示)

形式

```
csmftplshistory {<J2EEサーバ名> | -logdir <転送履歴ログ格納ディレクトリパス>}
                [-csv <出力ファイルパス>]
                [-date {<表示開始日時>,[<表示終了日時>] | [<表示開始日時>],<表示終了日時>}]
```

機能

転送履歴を表示します。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.4.18 転送履歴を取得する」を参照してください。

引数

<J2EE サーバ名>

HCSC の開始時に指定した J2EE サーバ名を指定します。

アンセットアップされた J2EE サーバ名を指定した場合は、アンセットアップされた J2EE サーバで取得済みの転送履歴が表示されます。

このオプションは、-logdir オプションを指定した場合は省略できます。

-logdir <転送履歴ログ格納ディレクトリパス> ~<<<J2EE サーバのログ出力ディレクトリ>>%csc%inbound-adapter%ftp%FTP_Inbound_Resource_Adapter>>

転送履歴ログ格納ディレクトリを絶対パスまたは相対パスで指定します。ただし、Windows の場合はドライブレター付きの相対パス（例：C:temp%historyLogDir）は指定できません。指定すると、KDEC07581-E（パラメタ不正）を出力してコマンドが異常終了します。

指定されたディレクトリ下にあるファイル「history.log」「history<面数>.log」が、転送履歴として表示されます。

指定を省略した場合、FTP インバウンドアダプタの転送履歴ログ格納ディレクトリのファイルが、転送履歴として表示されます。

-csv <出力ファイルパス>

転送履歴を CSV 形式のファイルに出力します。出力ファイルパスは絶対パスまたは相対パスを指定してください。ただし、Windows の場合、ドライブレター付きの相対パス（例：C:temp¥history.csv）は指定できません。省略した場合は、転送履歴を標準出力に出力します。

-date <表示開始日時>,<表示終了日時>

転送コマンド開始日時が表示開始日時から表示終了日時までの転送履歴だけを出力する場合に指定します。

なお、表示開始日時と表示終了日時は次の形式で指定してください。

YYYYMMDDhhmmss

YYYY：西暦年（1970 ≤ YYYY）

MM：月（01 ≤ MM ≤ 12）

DD：日（01 ≤ DD ≤ 31）

hh：時（00 ≤ hh ≤ 23）

mm：分（00 ≤ mm ≤ 59）

ss：秒（00 ≤ ss ≤ 59）

表示終了日時に、表示開始日時よりも古い日時が指定された場合は、何も表示されません。また、転送処理が異常終了した場合など、転送コマンド開始日時が転送履歴に保存されていない場合は、その転送履歴は表示されません。

出力形式

- CSV 形式の出力例

先頭行に出力項目の名称を出力し、1 行に 1 回の転送の履歴情報を出力します。

```
TransferID UserName ServerFileName...ClientPort
10.209.12.111/2200/0x0000000000000000c7 admin /service1/file1...1071
10.209.12.111/2200/0x0000000000000000c8 admin /service1/file2...1072
:
```

- 標準出力への出力例

```
TransferID           :10.209.12.111/2200/0x0000000000000000c7
UserName             :admin
ServerFileName       :/service1/file1
TransferType         :RETR
TransferMode         :ASCII
CompressionMode     :uncompress
Status               :SUCCESS
TransferCmdStartTime :2010/07/22 19:00:00.000
TransferCmdEndTime   :2010/07/22 19:00:02.000
TransferCmdTime      :2.000
TransferStartTime    :2010/07/22 19:00:01.000
TransferEndTime      :2010/07/22 19:00:02.000
TransferTime         :1.000
TransferSize         :1024
ClientIP             :10.209.12.110
```

ClientPort

:1071

:

説明

表示項目	説明
TransferID	<p>転送ごとのユニークな番号を示します。PRF のルートアプリケーションの情報となります。 xxx.xxx.xxx.xxx/aaa/bbb の形式で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • xxx.xxx.xxx.xxx：ルートアプリケーションの IP アドレス • aaa：ルートアプリケーションのプロセス ID • bbb：ルートの通信番号
UserName	<p>認証されたユーザ名を示します。</p>
ServerFileName	<p>クライアントから転送要求されたサーバのファイル名を示します。 /<振分識別子>/<ファイル名>の形式で表示されます。</p>
TransferType	<p>送受信種別を示します。次に示すどれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • RETR：サーバからクライアントへのファイル転送 • STOR：クライアントからサーバへのファイル転送 • APPE：クライアントからサーバへのファイル転送（サーバ上のファイルへ追加書き）
TransferMode	<p>転送要求時に指定した転送モードを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ASCII：ASCII モード • BINARY：BINARY モード
CompressionMode	<p>転送要求時に指定した圧縮モードを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • compress：圧縮 • uncompress：非圧縮 • unknown：データ接続のオープンに失敗
Status	<p>ファイル転送の終了状態を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SUCCESS：成功 • FAILURE：失敗
TransferCmdStartTime	<p>転送コマンドを受信して転送コマンドの処理を開始した時刻を示します。 YYYY/MM/DD HH:MM:SS.mmm の形式で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • HH：時 • MM：分 • SS：秒 • mmm：ミリ秒 • *****：転送コマンドの処理開始前にエラーが発生
TransferCmdEndTime	<p>転送コマンドの処理を終了した時刻を示します。 YYYY/MM/DD HH:MM:SS.mmm の形式で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年

表示項目	説明
TransferCmdEndTime	<ul style="list-style-type: none"> • MM：月 • DD：日 • HH：時 • MM：分 • SS：秒 • mmm：ミリ秒
TransferCmdTime	<p>転送コマンドの処理に掛かった、通算の時間を示します。 ss.SSS の形式で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ss：秒 • SSS：ミリ秒 • *****：転送コマンドの処理開始前にエラーが発生
TransferStartTime	<p>ファイル転送を開始した時刻を示します。 YYYY/MM/DD HH:MM:SS.mmm の形式で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • HH：時 • MM：分 • SS：秒 • mmm：ミリ秒 • *****：転送開始前にエラーが発生
TransferEndTime	<p>ファイル転送を終了した時刻を示します。 YYYY/MM/DD HH:MM:SS.mmm の形式で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • YYYY：西暦年 • MM：月 • DD：日 • HH：時 • MM：分 • SS：秒 • mmm：ミリ秒 • *****：転送に失敗
TransferTime	<p>ファイル転送に掛かった、通算の時間を示します。 ss.SSS の形式で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ss：秒 • SSS：ミリ秒 • *****：転送に失敗
TransferSize	<p>転送したファイルのデータサイズをバイトで示します。 転送に失敗した場合は「-1」と表示されます。</p>
ClientIP	<p>転送が要求されたクライアントの IP アドレスを示します。</p>
ClientPort	<p>転送が要求されたクライアントのポート番号を示します。</p>

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
3	排他エラーが発生しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- HCSC サーバの稼働の状態に関係なく、コマンドを実行できます。
- FTP インバウンドアダプタの状態に関係なく、コマンドを実行できます。
- システム管理者以外がコマンドを実行しようとした場合、エラーとなります。

csmmailaddusr (メールアダプタユーザ情報の登録・更新)

形式

```
csmmailaddusr [-h]
                { -userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>
                  | -user <ログインユーザ名>
                    -pass <ログインパスワード>}
                [-r]
                -f <メールアダプタアカウント定義ファイルのパス>
```

機能

メールアダプタアカウント定義ファイルに新規のユーザを登録します。登録できるユーザ数の上限はありません。すでに登録されているユーザに対しては、パスワードを更新します。

コマンドを実行する前の注意事項を次に示します。

- このコマンドの-pass オプションにパスワードを指定した場合、プロセスの引数を確認できる OS 機能などによって、パスワードが検知されるおそれがあります。このため、-userinfofile オプションを使用した、ユーザ情報指定ファイルでのパスワードの設定を推奨します。
- コマンドを実行する管理者にだけ、メールアダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。
- コマンドにユーザ情報指定ファイルを指定する場合、コマンドを実行する管理者にだけ、ユーザ情報指定ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.5.1 ユーザ情報の管理」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-userinfofile <ユーザ情報指定ファイルのパス>

ログインユーザ名、ログインパスワードが記載されているユーザ情報指定ファイルのパスを指定します。絶対パス、またはコマンド実行時のカレントディレクトリからの相対パスで指定してください。パスが空白を含む場合は、パス全体をダブルクォーテーション (") で囲んでください。

指定されたユーザ情報指定ファイルのユーザ情報がすべて正常であれば、その内容がメールアダプタアカウント定義ファイルに一括で登録または更新されます。ただし、次の場合はエラーとなり、登録・更新は実施されません。

- 指定されたファイルが存在しない場合
- ファイル内のユーザ情報に1つでも不正があった場合
- ファイル内にログインユーザ名が重複している場合

なお、実行対象のユーザ情報指定ファイルには、ユーザ情報の登録または更新のどちらかだけを指定できません。

ユーザ情報指定ファイルの記載方法については、[\[6.21.1 ユーザ情報指定ファイル\]](#) を参照してください。

-user <ログインユーザ名> ~<半角英数字および半角記号>

登録または更新したいユーザ名を指定します。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 ((
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)

- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (˘)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

-pass <ログインパスワード> ~<半角英数字および半角記号>

登録または更新したいユーザ名に対応するパスワードを指定します。使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号は-user オプションと同じです。

更新したい場合 (-r オプションを指定する場合)、更新後のパスワードを指定します。

-r

すでに登録されているユーザのパスワードを変更する場合に指定します。

-f <メールアダプタアカウント定義ファイルのパス>

メールアダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パス、または絶対パスで指定します。空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

ファイルが存在しない場合、新規にメールアダプタアカウント定義ファイルが作成されます。ただし、ディレクトリが存在しない場合は、エラーになります。既存のメールアダプタアカウント定義ファイルに新規ユーザ情報を追加する場合は、既存のメールアダプタアカウント定義ファイルを指定してください。

入力例

(1)ユーザ名「user2」、パスワード「password2」をメールアダプタアカウント定義ファイル「account.properties」に登録する場合

```
csmmailaddusr -user user2 -pass password2 -f account.properties
```

(2)ユーザ情報指定ファイル「userinfo.txt」に記載されたユーザ情報を一括でメールアダプタアカウント定義ファイル「account.properties」に登録する場合

```
csmmailaddusr -userinfofile userinfo.txt -f account.properties
```

(3)メールアダプタアカウント定義ファイル「account.properties」に登録されているユーザ名「user2」のパスワードを「passwordnew」に更新する場合

```
csmmailaddusr -user user2 -pass passwordnew -r -f account.properties
```

(4)メールアダプタアカウント定義ファイル「account.properties」に登録されているユーザ情報をユーザ情報指定ファイル「userinfo.txt」に記載されたユーザ情報で一括更新する場合

```
csmmailaddusr -userinfofile userinfo.txt -r -f account.properties
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- メールアダプタアカウント定義ファイルは編集できません。

csmmaildelusr (メールアダプタユーザ情報の削除)

形式

```
csmmaildelusr [-h]  
-user <ログインユーザ名>  
-f <メールアダプタアカウント定義ファイルのパス>
```

機能

メールアドレスアカウント定義ファイルに登録されているユーザ情報を削除します。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.5.1 ユーザ情報の管理」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-user <ログインユーザ名> ~<半角英数字および半角記号>

削除したいユーザ名を指定します。使用できる文字は、半角英数字、半角記号（ASCII コードの「0x21」～「0x7E」）、および半角スペース（ASCII コードの「0x20」）です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)

- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (`)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

-f <メールアダプタアカウント定義ファイルのパス>

メールアダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パス、または絶対パスで指定します。空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

入力例

メールアダプタアカウント定義ファイル「account.properties」に登録されているユーザ名「user2」のユーザ情報を削除する場合

```
csmmaildelusr -user user2 -f account.properties
```

ユーザ情報の削除コマンドの実行によって、メールアダプタアカウント定義ファイルの内容は次のように変更されます。

【コマンド実行前】

```
1: user1
2: user2
  :
  :
```

【コマンド実行後】

```
1: user1
  :
  :
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- メールアダプタアカウント定義ファイルは編集できません。
- メールアダプタアカウント定義ファイルのユーザ情報が0個になってもメールアダプタアカウント定義ファイルは削除されません。
- コマンドを実行する前に、コマンドを実行する管理者にだけ、メールアダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。

csmmailsusr (メールアダプタユーザ情報の表示)

形式

```
csmmailsusr [-h]  
-f <メールアダプタアカウント定義ファイルのパス>
```

機能

メールアダプタアカウント定義ファイルに登録されているユーザを表示します。表示結果は標準出力形式で出力します。

このコマンドの使用方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.5.1 ユーザ情報の管理」を参照してください。

引数

-h

コマンドの使用方法が表示されます。このオプションを指定している場合は、ほかのオプションを指定しても無視されます。

-f <メールアダプタアカウント定義ファイルのパス>

メールアダプタアカウント定義ファイルのパスを相対パス、または絶対パスで指定します。空白を含む場合は、オプション引数全体をダブルクォーテーション (") で囲みます。

表示形式

(1) ユーザ情報が登録されている場合

```
1: User ID1  
2: User ID2  
:
```

ユーザ名は、アルファベット順に1行ずつ表示されます。

(2) ユーザ情報が登録されていない場合

```
none
```

戻り値

戻り値	意味
0	正常終了しました。
1	コマンドが異常終了しました。
9	実行権限のチェックエラーが発生しました。

注意事項

- メールアダプタアカウント定義ファイルは編集できません。
- コマンドを実行する前に、コマンドを実行する管理者にだけ、メールアダプタアカウント定義ファイルに対する更新・参照のアクセス権を設定してください。

6

定義ファイル（運用環境・実行環境）

この章では、サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用する定義ファイルの文法について説明します。

6.1 定義ファイルの種類

運用環境・実行環境の定義ファイルの種類を次に示します。列「入力形式」のうち「任意の形式」を除くファイル形式については、「6.2 定義ファイルの入力形式」を参照してください。

表 6-1 定義ファイル一覧（運用環境・実行環境）

分類	ファイル名	概要	入力形式
HCSC サーバの構築で利用するファイル	cscsetup コマンド定義ファイル	cscsetup コマンドの動作に必要なとなる情報を設定します。	プロパティファイル形式
	HCSC サーバ構成定義ファイル	HCSC サーバの構成定義情報を設定します。	XML 形式
	HCSC サーバセットアップ定義ファイル	HCSC サーバのセットアップ時に設定できる内容を設定します。	プロパティファイル形式
HCSC サーバの運用で利用するファイル	HCSC-Manager コマンド JavaVM 起動オプション定義ファイル	コマンドの実行時に適用する JavaVM 起動オプションを設定します。「csc」で始まるコマンドが対象です。	Windows の場合、バッチファイル形式 UNIX の場合、シェルスクリプトファイル形式
	HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル	各コマンドのオプションのデフォルト値を定義します。	プロパティファイル形式
	HCSC-Manager 定義ファイル	HCSC-Manager の動作に必要なとなる情報を設定します。	プロパティファイル形式
	HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル	HCSC-Messaging コマンドの動作に必要な情報を設定します。	Windows の場合、バッチファイル形式 UNIX の場合、シェルスクリプトファイル形式
	HCSC コンポーネント指定ファイル	HCSC コンポーネントと処理内容を設定します。	テキストファイル形式
	HCSC サーバランタイム定義ファイル	セットアップ後の HCSC サーバの定義情報を HCSC-Manager から設定します。	プロパティファイル形式
	エミュレート設定情報定義ファイル	サービスのエミュレーション機能の設定情報を XML 形式で設定します。	XML 形式
	コンポーネント ID 設定ファイル	ユーザ電文トレースへの出力有無を HCSC コンポーネント ID で設定します。	プロパティファイル形式
	コンポーネント種別設定ファイル	ユーザ電文トレースへ出力する HCSC コンポーネントを HCSC コンポーネント種別で設定します。	プロパティファイル形式

分類	ファイル名	概要	入力形式
HCSC サーバの運用で利用するファイル	サービス情報変更定義ファイル	サービスアダプタのサービス情報の変更を設定します。	プロパティファイル形式
SOAP 連携で利用するファイル	SOAP Fault 動作定義ファイル	targetNamespace の URI を設定します。	独自形式
	ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル	SOAP 受付の情報を設定します。	プロパティファイル形式
TP1 連携で利用するファイル	TP1 アダプタ実行環境プロパティファイル	TP1 アダプタが実行環境で動作するときの、TP1/Client/J 環境定義ファイルのパスなどを設定します。	プロパティファイル形式
FTP 連携で利用するファイル	FTP アダプタアカウント定義ファイル	ユーザアカウント情報を一括管理します。ファイルの内容は運用コマンドで管理します。	(編集不可)
	FTP アダプタコマンド定義ファイル	FTP アダプタで使用するコマンドのメッセージログの構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	FTP アダプタ実行環境プロパティファイル	FTP アダプタごとの構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル	すべての FTP アダプタに共通の構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	FTP 受付コンフィグファイル	FTP 受付をセットアップしたあとに設定変更が発生する頻度が高い内容を設定します。	プロパティファイル形式
	FTP コマンド許可リスト定義ファイル	実行を許可する FTP コマンドを設定します。FTP アダプタ用と FTP 受付用の 2 種類を指定できます。	プロパティファイル形式
	FTP 実行許可リスト定義ファイル	FTP 受付に関連づけられたビジネスプロセスの実行を許可するユーザや、許可しないユーザを設定します。	プロパティファイル形式
	ファイル操作アダプタ実行環境プロパティファイル	ファイル操作アダプタが実行環境で動作する際のメッセージログとトレースログの出力レベルなどを設定します。	プロパティファイル形式
	リストコマンドオプション定義ファイル	FTP クライアントが実行するリストコマンドの引数に指定できるオプション文字列を設定します。	独自形式
ファイルイベント連携で利用するファイル	ファイルイベント受付コンフィグファイル	特定のファイルイベント受付に関する構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	ファイルイベント受付共通コンフィグファイル	すべてのファイルイベント受付に共通する構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
ファイルアダプタで利用するファイル	ファイルアダプタ実行環境プロパティファイル	ファイルアダプタが実行環境で動作するときのメッセージログおよびトレースログの出力レベルなどを設定します。	プロパティファイル形式

6. 定義ファイル (運用環境・実行環境)

分類	ファイル名	概要	入力形式
Object Access アダプタで利用するファイル	Object Access アダプタ実行環境プロパティファイル	Object Access アダプタが実行環境で動作する際のログやトレースの出力レベルなどを設定します。	プロパティファイル形式
Message Queue アダプタで利用するファイル	Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイル	Message Queue アダプタが実行環境で動作する際のログやトレースの出力レベルなどを設定します。	プロパティファイル形式
メールアダプタで利用するファイル	メールアダプタアカウント定義ファイル	ユーザアカウント情報を一括管理します。ファイルの内容は運用コマンドで管理します。	プロパティファイル形式
	メールアダプタコマンド定義ファイル	メールアダプタで使用するコマンドのメッセージログの出力情報を設定します。	プロパティファイル形式
	メールアダプタ実行環境プロパティファイル	メールアダプタごとの構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	メールヘッダ定義ファイル	ユーザが定義した任意のメールヘッダのオプションを設定します。	プロパティファイル形式
HTTP アダプタで利用するファイル	HTTP アダプタアカウント定義ファイル	ベーシック認証に必要なユーザアカウント情報を一括管理します。ファイルの内容は運用コマンドで管理します。	プロパティファイル形式
	HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル	HTTP アダプタごとの構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル	すべての HTTP アダプタに共通の構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
コマンドアダプタで利用するファイル	実行許可コマンド定義ファイル	コマンドアダプタで実行できる外部コマンドを設定します。	任意の形式
	プロセス環境変数定義ファイル	外部コマンドプロセスだけで有効になる環境変数を設定します。	プロパティファイル形式
	コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル	コマンドアダプタごとの構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル	すべてのコマンドアダプタに共通の構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
SFTP アダプタで利用するファイル	SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル	SFTP アダプタごとの構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル	すべての SFTP アダプタに共通の構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
Kafka アダプタで利用するファイル	Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル	Kafka アダプタごとの構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル	すべての Kafka アダプタに共通の構成情報を設定します。	プロパティファイル形式

6. 定義ファイル (運用環境・実行環境)

分類	ファイル名	概要	入力形式
スケジュール駆動受付で利用するファイル	スケジュール駆動受付コンフィグファイル	特定のスケジュール駆動受付に関する構成情報を設定します	プロパティファイル形式
	スケジュール駆動受付共通コンフィグファイル	すべてのスケジュール駆動受付に共通の構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
gRPC アダプタで利用するファイル	gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル	gRPC アダプタごとの構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
	gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル	すべての gRPC アダプタに共通の構成情報を設定します。	プロパティファイル形式
ユーザ認証情報で利用するファイル	ユーザ認証情報管理コマンド定義ファイル	ユーザ認証情報管理コマンドを実行した場合の構成定義を設定します。	プロパティファイル形式
	アカウント情報管理コマンド定義ファイル	アカウント情報管理コマンドを実行した場合の構成定義を設定します。	プロパティファイル形式
ユーザ情報の登録で利用するファイル	ユーザ情報指定ファイル	ユーザ情報を設定します。	任意の形式

6.2 定義ファイルの入力形式

「6.1 定義ファイルの種類」の表の列「入力形式」の種類ごとに、定義ファイルの作成または編集時の注意事項を示します。

プロパティファイル形式

次に示す Java のプロパティファイル形式で作成または編集します。

形式

定義ファイルの入力形式を次に示します。

```
<キー名称> = <値>
```

```
#<コメント>
```

各項目について説明します。

- キー名称

定義するキー名称を指定します。

同じキーを定義ファイル内に複数指定した場合は、java.util.Properties クラスの仕様にに基づき、最後に指定したキーの値が反映されます。

指定値を省略する場合はキー名称とあわせて省略してください。キー名称だけを記述することはできません。

- 区切り文字

区切り文字として「=」を指定します。スペースまたはタブでも代替できます。

- 値

定義する値がある場合に指定します。改行までを値とするため、値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は指定できません。

- コメント

行頭に「#」または「!»を記述した場合、その行はコメントとして扱われます。

なお、各項目は、ISO-8859-1 文字エンコーディングを使用してください。ISO-8859-1 文字エンコーディングで直接表現できない文字を記述した場合は、次に示す hjdk.native2ascii.jar ツールを実行して Unicode へ変換してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%jdk%bin%java -jar <サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%jdk%lib%hcompatlib%hjdk.native2ascii.jar <入力ファイルパス> <出力ファイルパス>
```

hjdk.native2ascii.jar ツールの詳細については、JDK のドキュメントを参照してください。

XML 形式

XML の仕様に従って作成または編集します。

バッチファイル形式またはシェルスクリプトファイル形式

OS に応じて次に示すファイル形式で作成または編集します。

- Windows の場合：Win32 のバッチファイル形式
- UNIX の場合：シェルスクリプトファイル形式

独自形式

定義ファイル独自の仕様に従って作成または編集します。

6.3 定義ファイルの文法の記述形式

以降で説明する定義ファイルの文法について、次の形式で記述します。なお、すべてのファイルを次の形式で記述しているわけではありません。また、各ファイルの固有情報を記載している場合があります。

形式

ファイルの記述形式を示します。

機能

ファイルの機能について説明します。

DTD

ファイルの DTD について説明します。

ファイルの格納先

ファイルの格納先を示します。

設定できる要素

ファイルの中で指定できる XML の要素について説明します。

設定できるパラメタ

ファイルの中で指定できるパラメタについて説明します。

設定できるプロパティ

ファイルの中で指定できるプロパティについて説明します。プロパティ名の可変値は<>で囲んで示します。

記述例

ファイルの内容の記述例を示します。

使用方法

ファイルの使用方法について説明します。

注意事項

ファイルを設定または使用する際の注意事項を説明します。

この章の文法の説明で使用している記号を次に示します。

記号	意味
	横に並べられた複数の項目に対する項目間の区切りを示し、「または」を意味します。 (例) A B A または B を指定することを示します。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから 1 つを選択することを示します。項目が横に並べられ、記号 で区切られている場合は、そのうちの 1 つを選択します。 (例) {A B C} A, B または C のどれかを指定することを示します。

記号	意味
[]	この記号で囲まれている項目は省略してもよいことを示します。 (例) [A] 「何も指定しない」か「Aを指定する」ことを示します。
< >	この記号で囲まれている項目は、該当する要素を指定することを示します。 (例) <プロパティ> プロパティを記述します。
…	記述が省略されていることを示します。 (例) ABC… ABCの後ろに記述があり、その記述が省略されていることを示します。
~	この記号の前に示された項目が、記号~に続く< >, (()), << >>などの規則に従うことを示します。
< >	項目を記述するときに従わなければならない構文要素を示します。構文要素については、次の表を参照してください。
(())	項目で指定できる値の範囲を示します。
<< >>	項目を省略したときに、システムが仮定する標準値を示します。

この章で使用している構文要素の種類と定義を次に示します。

種類	定義
英字	A~Z a~z
英小文字	a~z
英大文字	A~Z
数字	0~9
英数字	A~Z a~z 0~9
記号	_ . -
文字列	任意の文字の配列

6.4 HCSC サーバの構築で利用するファイル

6.4.1 cscsetup コマンド定義ファイル

(1) 形式

```
owner=Component Container管理者で設定するオーナー  
group=Component Container管理者で設定するグループ
```

(2) 機能

cscsetup コマンドの動作に必要な情報を設定します。HCSC 本番環境簡易セットアップで使用する定義ファイルです。

(3) ファイルの格納先

次に示すテンプレートファイルを任意のディレクトリにコピーし、コピーしたファイルを編集して定義ファイルを作成してください。

本番環境をセットアップする場合

SOAP1.1 モードのテンプレートファイル

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%hset  
up%esb%cscsetup.properties
```

SOAP1.1/1.2 併用モードのテンプレートファイル (J2EE サーバの互換モードが推奨モードの場合)

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%hset  
up%esb_1.1_1.2mode_v11%cscsetup.properties
```

SOAP1.1/1.2 併用モードのテンプレートファイル (J2EE サーバの互換モードが V9 互換モードの場合)

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%hset  
up%esb_1.1_1.2mode%cscsetup.properties
```

セットアップ済みの本番環境にサーバを追加 (追加セットアップ) する場合

SOAP1.1 モードのテンプレートファイル

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%hset  
up%esb_add%cscsetup.properties
```

SOAP1.1/1.2 併用モードのテンプレートファイル (J2EE サーバの互換モードが推奨モードの場合)

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%hset  
up%esb_1.1_1.2mode_v11_add%cscsetup.properties
```

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%hset  
up%esb_1.1_1.2mode_add%cscsetup.properties
```

(4) 設定できるパラメタ

owner=Component Container 管理者で設定するオーナー ~<<スーパーユーザ>>

Component Container 管理者で設定するオーナーを指定します。

group=Component Container 管理者で設定するグループ ~<<スーパーユーザ>>

Component Container 管理者で設定するプライマリ GID を指定します。

(5) 注意事項

owner および group の値を指定しない場合は、次に示す値がデフォルト値となります。任意の Component Container 管理者に変更して運用したい場合は、この定義ファイルでオーナーおよびグループを指定してください。

Linux の場合

オーナー：root, グループ：root

AIX の場合

オーナー：root, グループ：system

6.4.2 HCSC サーバ構成定義ファイル

(1) 形式

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>  
<!DOCTYPE csc-setup-definition SYSTEM "cscsvsetup_1_3.dtd">  
<!-- All Rights Reserved. Copyright (C) 2006, 2008, Hitachi, Ltd. -->  
<csc-setup-definition>  
  <cluster>  
    <name>クラスタ名</name>  
    <type>クラスタ種別</type>  
  </cluster>  
  <cosminexus-manager>  
    <!-- Cosminexus Manager Definition -->  
    <name>Manager名</name>  
    <ip-address>ManagerのIPアドレスまたはホスト名</ip-address>  
    <port>Managerのポート番号</port>  
    <id>Management Serverの管理ユーザID</id>  
    <password>Management Serverの管理ユーザパスワード</password>  
  <csc-server>  
    <!-- HCSC-Server Definition -->
```

```

    <name>HCSCサーバ名</name>
    <id>HCSCサーバが使用するデータベースのユーザID</id>
    <password>HCSCサーバが使用するデータベースのパスワード</password>
    <j2ee-server-name>HCSCサーバが使用するJ2EEサーバ名</j2ee-server-name>
    <setup-properties>HCSCサーバセットアップ定義ファイル名</setup-properties>
  </csc-server>
</cosminexus-manager>
<reception>
  <soap-reception>
    <!-- WebServer Definition -->
    <ip-address>WebサーバのIPアドレスまたはホスト名</ip-address>
    <port>Webサーバのポート番号</port>
    <protocol>プロトコル種別</protocol>
  </soap-reception>
  <jms-reception>
    <!-- WebServer Definition-->
    <ip-address>WebサーバのIPアドレスまたはホスト名</ip-address>
    <port>Webサーバのポート番号</port>
    <protocol>プロトコル種別(http or https)</protocol>
    <rm-service-context-root>RMのサービスコンテキストルート</rm-service-context-root>
  </jms-reception>
  <jms-physical-reception>
    <!-- WebServer Definition-->
    <ip-address>WebサーバのIPアドレスまたはホスト名</ip-address>
    <port>Webサーバのポート番号</port>
    <protocol>プロトコル種別</protocol>
    <rm-service-context-root>RMのサービスコンテキストルート</rm-service-context-root>
  </jms-physical-reception>
  <ejb-reception>
    <!-- NameServer Definition-->
    <ip-address>NameServerのIPアドレスまたはホスト名</ip-address>
    <port>NameServerのポート番号</port>
  </ejb-reception>
</reception>
</csc-setup-definition>

```

(2) 機能

HCSC サーバの構成情報を XML 形式で設定します。

(3) DTD

```

<!ELEMENT csc-setup-definition (cluster?,cosminexus-manager, reception?)>
<!ELEMENT cluster (name?,display-name?,type?)>
<!ELEMENT name (#PCDATA)>
<!ELEMENT display-name (#PCDATA)>
<!ELEMENT type (#PCDATA)>
<!ELEMENT cosminexus-manager (name,display-name?, ip-address,port, id,password?,csc-server)>
<!ELEMENT ip-address (#PCDATA)>
<!ELEMENT port (#PCDATA)>
<!ELEMENT id (#PCDATA)>
<!ELEMENT password (#PCDATA)>
<!ELEMENT csc-server (name?,display-name?, id?,password?, j2ee-server-name,setup-properties)>
<!ELEMENT j2ee-server-name (#PCDATA)>
<!ELEMENT setup-properties (#PCDATA)>

```

```
<!ELEMENT reception (soap-reception?, jms-reception?, jms-physical-reception?, ejb-reception?)>
<!ELEMENT soap-reception (ip-address?, port, protocol)>
<!ELEMENT protocol (#PCDATA)>
<!ELEMENT jms-reception (ip-address?, port, protocol, rm-service-context-root?)>
<!ELEMENT rm-service-context-root (#PCDATA)>
<!ELEMENT jms-physical-reception (ip-address?, port, protocol, rm-service-context-root?)>
<!ELEMENT ejb-reception (ip-address?, port)>
```

(4) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%cscsvsetup.xml
```

(5) 設定できる要素

(a) cluster の定義

cluster タグは省略できます。

name クラスタ名 ~<半角英数字とアンダーバー (_) > ((1-8 文字))

クラスタ名を指定します。このタグを設定することで、cscsvsetup コマンドの-cluster を省略できます。

type クラスタ種別 ~<<LB>>

クラスタ種別として、次のどちらかを指定します。ロードバランスクラスタ構成の場合は、省略できます。なお、必ず大文字で指定してください。

- LB
ロードバランスクラスタ構成の場合に指定します。
- HA
HA クラスタ構成の場合に指定します。

(b) cosminexus-manager の定義

name Manager 名 ~<半角英数字とアンダーバー (_) > ((1-16 文字))

HCSC-Manager が Manager を認識するための HCSC-Manager 独自の識別名を指定します。HCSC-Manager で Manager (ホスト) 単位に一意になる識別名を指定します。

ip-address Manager の IP アドレスまたはホスト名 ~((1 文字以上))

Management Server が起動している IP アドレスまたはホスト名を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

port Manager のポート番号 ~((1-65535))

Management Server のリモート管理機能への接続ポート番号を指定します。

com.cosminexus.mngsvr.management.port の値を指定します。指定がない場合は、28099 を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

id Management Server の管理ユーザ ID ～((1 文字以上))

Management Server の管理ユーザ ID を指定します。

password Management Server の管理ユーザパスワード ～((1 文字以上))

Management Server の管理ユーザパスワードを指定します。このタグは省略できます。省略した場合、パスワードの指定がないとみなされます。

(c) csc-server の定義

name HCSC サーバ名 ～<半角英数字とアンダーバー (_) > ((1-8 文字))

HCSC サーバ名を指定します。このタグを設定することで、cscsvsetup コマンドの-csc を省略できます。

id HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID ～((1 文字以上))

HCSC サーバが使用するデータベースのユーザ ID を指定します。文字列の最大値および指定できる文字は、使用するデータベースに依存します。データベースを使用する場合は、必ず設定します。データベースを使用しない場合は、省略できます。

password HCSC サーバが使用するデータベースのパスワード

HCSC サーバが使用するデータベースのパスワードを指定します。文字列の最大値および指定できる文字は、使用するデータベースに依存します。データベースを使用する場合は、必ず設定します。データベースを使用しない場合は、省略できます。

j2ee-server-name HCSC サーバが使用する J2EE サーバ名 ～((1 文字以上))

HCSC サーバをセットアップする J2EE サーバ名を指定します。J2EE サーバ名は 110 バイト以内を推奨します。ローカルマシンに IPv6 アドレスを使用している環境では、111 バイト以上の J2EE サーバ名を指定すると、プロセスインスタンスの生成でエラーが発生する可能性があります。その場合は、HCSC サーバランタイム定義の short-processid プロパティに ON を指定してください。

setup-properties HCSC サーバセットアップ定義ファイル名

HCSC サーバセットアップ定義ファイル名を相対パス、または絶対パスで指定します。

(d) soap-reception の定義

同期サービス (Web サービス) 呼び出しをする場合に指定します。同期サービス (Web サービス) 呼び出しをしない場合は、soap-reception タグを省略してください。

ip-address Web サーバの IP アドレスまたはホスト名 ～<<Manager と同じ IP アドレスまたはホスト名>>

Web サーバが起動している IP アドレスまたはホスト名を指定します。受付と Management Server の IP アドレス（またはホスト名）が同じ場合は、省略できます。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

port Web サーバのポート番号 ～((1-65535))

Web サーバの受付ポート番号を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

protocol プロトコル種別

Web サーバの受付プロトコルとして、次のどちらかを指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

- **http**
HTTP で受け付けられます。
- **https**
HTTPS で受け付けられます。

(e) **jms-reception** の定義

クラスタ種別が HA クラスタで、非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをする場合に指定します。非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをしない場合は、**jms-reception** タグを省略してください。クラスタ種別がロードバランスクラスタの場合は、値を指定しても無視されます。

ip-address Web サーバの IP アドレスまたはホスト名 ～<<Manager と同じ IP アドレスまたはホスト名>>

Web サーバが起動している IP アドレスまたはホスト名を指定します。受付と Management Server の IP アドレス（またはホスト名）が同じ場合は、省略できます。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

port Web サーバのポート番号 ～((1-65535))

Web サーバの受付ポート番号を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

protocol プロトコル種別

Web サーバの受付プロトコルとして、次のどちらかを指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

- **http**
HTTP で受け付けられます。
- **https**
HTTPS で受け付けられます。

`rm-service-context-root` RM のサービスコンテキストルート ～((1 文字以上))

Reliable Messaging のサービスコンテキストルート名を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

(f) `jms-physical-reception` の定義

クラスタ種別がロードバランスクラスタで、非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをする場合に指定します。非同期サービス (MDB (WS-R)) 呼び出しをしない場合や、Reliable Messaging を使用しない場合は、`jms-physical-reception` タグを省略してください。クラスタ種別が HA クラスタの場合は、値を指定しても無視されます。

`ip-address` Web サーバの IP アドレスまたはホスト名 ～<<Manager と同じ IP アドレスまたはホスト名>>

Web サーバが起動している IP アドレスまたはホスト名を指定します。受付と Management Server の IP アドレス (またはホスト名) が同じ場合は、省略できます。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

`port` Web サーバのポート番号 ～((1-65535))

Web サーバの受付ポート番号を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

`protocol` プロトコル種別

Web サーバの受付プロトコルとして、次のどちらかを指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

- `http`
HTTP で受け付けられます。
- `https`
HTTPS で受け付けられます。

`rm-service-context-root` RM のサービスコンテキストルート ～((1 文字以上))

Reliable Messaging のサービスコンテキストルート名を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

(g) `ejb-reception` の定義

SessionBean を呼び出す場合に指定します。SessionBean を呼び出さない場合は、`ejb-reception` タグを省略してください。

`ip-address` NameServer の IP アドレスまたはホスト名 ～((1 文字以上))<<Manager と同じ IP アドレスまたはホスト名>>

ネームサーバが起動している IP アドレスまたはホスト名を指定します。受付と Management Server の IP アドレス（またはホスト名）が同じ場合は、省略できます。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

port NameServer のポート番号 ～((1-65535))

ネームサーバの受付ポート番号を指定します。2 回目以降設定を変えて再セットアップすると、値が上書きされます。

(6) 記述例

HCSC サーバ構成定義ファイルの記述例を次に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<!DOCTYPE csc-setup-definition SYSTEM "cscsvsetup_1_2.dtd">
<!-- All Rights Reserved. Copyright (C) 2006, Hitachi, Ltd. -->
<csc-setup-definition>
  <cluster>
    <name>LBクラスタ</name>
    <type>LB</type>
  </cluster>
  <cosminexus-manager>
    <!-- Cosminexus Manager Definition -->
    <name>MNG1</name>
    <ip-address>10.209.114.162</ip-address>
    <port>28099</port>
    <id>admin</id>
    <password>admin</password>
    <csc-server>
      <!-- HCSC-Server Definition -->
      <id>admin</id>
      <password>admin</password>
      <j2ee-server-name>LBServer</j2ee-server-name>
      <setup-properties>cscsvsetup.properties</setup-properties>
    </csc-server>
  </cosminexus-manager>
  <reception>
    <soap-reception>
      <!-- WebServer Definition -->
      <ip-address>10.209.15.197</ip-address>
      <port>80</port>
      <protocol>http</protocol>
    </soap-reception>
    <jms-physical-reception>
      <!-- WebServer Definition-->
      <ip-address>10.209.114.162</ip-address>
      <port>80</port>
      <protocol>http</protocol>
      <rm-service-context-root>uCosminexusRM</rm-service-context-root>
    </jms-physical-reception>
    <ejb-reception>
      <!-- NameServer Definition-->
      <ip-address>10.209.114.9</ip-address>
      <port>900</port>
```

```
</ejb-reception>  
</reception>  
</csc-setup-definition>
```

(7) 使用方法

cscsvsetup コマンドの-propfile オプションの引数に HCSC サーバ構成定義ファイルを指定します。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「3.1.3 HCSC サーバをセットアップする」を参照してください。

6.4.3 HCSC サーバセットアップ定義ファイル

(1) 形式

```
[db-use={ON|OFF}]  
[rm-use={ON|OFF}]  
[hcscserver-data-filepath=HCSCサーバのシステム管理情報を保存する出力先のパス]  
  
request-ebb={ON|OFF}  
request-soap={ON|OFF}  
request-jms={ON|OFF}  
[request-jms.maxmessage=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のキューの最大メッセージ数]  
request-dbq={ON|OFF}  
[request-dbq.maxmessage=標準の非同期受付 (MDB (DBキュー)) のキューの最大メッセージ数]  
[request-jms-rdarea=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のRDエリア名]  
[request-dbq-rdarea=標準の非同期受付 (MDB (DBキュー)) のRDエリア名]  
[request-dbq-maxlen=標準の非同期受付 (MDB (DBキュー)) の最大メッセージ長]  
  
[request-userdef-soap={ON|OFF}]  
  
[naming-service-hostname=ネーミングサービスのホスト名]  
[naming-service-port=ネーミングサービスのポート番号]  
  
[rm-systemname=Reliable Messagingのシステム名]  
[rm-displayname=Reliable Messagingの表示名]  
  
[dbcon-xadisplayname=XATransactionまたはLocalTransaction用DB Connectorの表示名]  
[dbcon-nodisplayname=NoTransaction用DB Connectorの表示名]  
  
[dbtype={HIRDB|ORACLE11G}]  
[jdbc-type={DBPSV|HIRDB-TYPE4|ORACLE-THIN}]  
[jdbc-url=JDBC用データベースURL]  
[jdbc-dbhostname=データベースのホスト名]  
[jdbc-dbconnectinfo=データベースの接続情報]  
[db-character-sets={ASCII | Shift_JIS | UTF-8 | EUC-JP}]  
[db-tbl-split-key={NONE | MONTH}]  
[db-tbl-split-corcheck-use={ON | OFF}]  
  
[bp-status-compatible={ON | OFF}]  
  
[bp-invoke-status-compatible={ON | OFF}]
```

```
[cscserverinfo-tbl-area=HCSC基本情報テーブル領域]
[server-trans-tbl-area=連携HCSC用テーブル領域]
[location-tbl-area=ロケーション用テーブル領域]
[routing-tbl-area=ルーティング用テーブル領域]
[cv-tbl-area=データ変換用テーブル領域]

[exehistory-tbl-area=実行履歴情報テーブル領域]
[exehistory-idx-area=実行履歴情報テーブルのインデックスを格納する領域]
[process-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用PROCESSテーブルを格納する領域]
[process-idx-area=ビジネスプロセス基盤用PROCESSテーブルのインデックスを格納する領域]
[activity-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用ACTIVITYテーブルを格納する領域]
[activity-idx-area=ビジネスプロセス基盤用ACTIVITYテーブルのインデックスを格納する領域]
[link-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用LINKテーブルを格納する領域]
[link-idx-area=ビジネスプロセス基盤用LINKテーブルのインデックスを格納する領域]
[correlationset-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用CORRELATIONSETテーブルを格納する領域]
[correlationset-idx-area=ビジネスプロセス基盤用CORRELATIONSETテーブルのインデックスを格納する領域]
[string-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用STRING-VARIABLEテーブルを格納する領域]
[string-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用STRING-VARIABLEテーブルのインデックスを格納する領域]
[numeric-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用NUMERIC-VARIABLEテーブルを格納する領域]
[numeric-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用NUMERIC-VARIABLEテーブルのインデックスを格納する領域]
[boolean-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用BOOLEAN-VARIABLEテーブルを格納する領域]
[boolean-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用BOOLEAN-VARIABLEテーブルのインデックスを格納する領域]
[message-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-VARIABLEテーブルを格納する領域]
[message-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-VARIABLEテーブルのインデックスを格納する領域]
[message-variable-val-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-VARIABLEテーブルのVariableValue列を格納する領域]
[message-relation-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-RELATIONテーブルを格納する領域]
[message-relation-idx-area=ビジネスプロセス基盤用MESSAGE-RELATIONテーブルのインデックスを格納する領域]
[clusterinfo-tbl-area=クラスタ情報を格納する領域]
[haasyncadp-tbl-area=クラスタ内で配備された非同期アダプタサービスIDを格納する領域]
[sql-scriptfilename=SQLスクリプトファイルパス]
[activitynumber-maximum-compatible={ON|OFF}]

[xmlanalyze-mode={standard|advanced}]
```

(2) 機能

HCSC サーバのセットアップ時に設定できる内容を設定します。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%cscsvsetup.properties
```

(4) 設定できるプロパティ

(a) セットアップ構成関連

db-use={ON | OFF} ~<<ON>>

HCSC サーバでデータベースを使用するかどうかを指定します。

- ON
データベースを使用します。
- OFF
データベースを使用しません。

rm-use={ON | OFF} ~<<ON>>

HCSC サーバで Reliable Messaging を使用するかどうかを指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティに ON を指定するとエラーになります。

- ON
Reliable Messaging を使用します。
- OFF
Reliable Messaging を使用しません。

hcscserver-data-filepath=HCSC サーバのシステム管理情報を保存する出力先のパス ~<最大 100 バイトの文字列><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥CSC¥spool¥msg>>

HCSC サーバのシステム管理情報を保存する出力先を絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合、および指定した文字列が 100 バイトを超える場合はエラーになります。そのため、<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>が 84 バイトを超える場合は、このプロパティを明示的に指定してください。なお、指定できる長さのバイトは、ISO-8859-1 でデコードしたあとの長さになります。

(b) 標準受付関連

request-ejb={ON | OFF}

標準の同期受付 (SessionBean) を使用するかどうかを指定します。

- ON
標準の同期受付 (SessionBean) を使用します。
- OFF
標準の同期受付 (SessionBean) を使用しません。

次に示す場合は、ON を指定してください。

- サービスリクエスタから SessionBean を使用してサービス部品を呼び出す場合
- 運用環境の画面上でプロセスインスタンスを再実行する場合
- cscpireexec コマンドを使用してプロセスインスタンスを再実行する場合

`request-soap={ON | OFF}`

標準の同期受付 (Web サービス) を使用するかどうかを指定します。

- ON
標準の同期受付 (Web サービス) を使用します。
- OFF
標準の同期受付 (Web サービス) を使用しません。

サービスリクエスタから Web サービスを使用してサービス部品を呼び出す場合は、ON を指定してください。

`request-jms={ON | OFF}`

標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) を使用するかどうかを指定します。rm-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティに ON を指定するとエラーになります。

- ON
標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) を使用します。
- OFF
標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) を使用しません。

次に示す場合は、ON を指定してください。

- サービスリクエスタから MDB (WS-R) を使用してサービス部品を呼び出す場合
- 配備するビジネスプロセスで応答アクティビティを実行したあとに、基本アクティビティ (受付, サービス呼出, Java 呼出, データ変換, 代入, 無操作, フォルト送付, 補償, 待機, ログ出力, 途中終了) を実行するようなビジネスプロセスを定義した場合

`request-jms.maxmessage=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のキューの最大メッセージ数 ~<数字>((1-65535))<<1024>>`

標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の受付キュー作成時の最大メッセージ数を指定します。Reliable Messaging での設定値に依存します。request-jms プロパティで ON を指定した場合だけ有効になります。

`request-dbq={ON | OFF}`

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) を使用するかどうかを指定します。rm-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティに ON を指定するとエラーになります。

- ON

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) を使用します。

なお、Oracle の場合は ON を指定できません。

- OFF

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) を使用しません。

サービスリクエストから (MDB (DB キュー)) を使用してサービス部品を呼び出す場合は、ON を指定してください。

`request-dbq.maxmessage=標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) のキューの最大メッセージ数 ~<数字>((1-65535))<<1024>>`

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の受付キュー作成時の最大メッセージ数を指定します。Reliable Messaging での設定値に依存します。request-dbq プロパティで ON を指定した場合だけ有効になります。

`request-jms-rdarea=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の RD エリア名 ~<先頭が英字の英数字, 空白, およびアンダーバー (< >)((1-30 文字))`

標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) の RD エリア名を指定します。データベースに Oracle を使用している場合は無効になります。Reliable Messaging での設定値に依存するため、Reliable Messaging を使用する場合だけ指定できます。

`request-dbq-rdarea=標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の RD エリア名 ~<先頭が英字の英数字, 空白, およびアンダーバー (< >)((1-30 文字))`

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の RD エリア名を指定します。データベースに Oracle を使用している場合は無効になります。Reliable Messaging での設定値に依存するため、Reliable Messaging を使用する場合だけ指定できます。

`request-dbq-maxlen=標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の最大メッセージ長 ~<数字>((1000-1048576))<<33000>>`

標準の非同期受付 (MDB (DB キュー)) の最大メッセージ長をバイト単位で指定します。Reliable Messaging での指定値に依存します。

(c) ユーザ定義受付関連

`request-userdef-soap={ON | OFF} ~<<OFF>>`

SOAP 受付を使用するかどうかを指定します。

- ON

SOAP 受付を使用します。

- OFF

SOAP 受付を使用しません。

注意事項

OFF の場合でもユーザ定義受付を配備・実行できます。ただし、OFF の場合、開発環境でユーザ定義受付を定義するとき、サービスリクエストからの要求先 Web サービスのアドレスが表示されないので注意してください。

(d) J2EE 関連

`naming-service-hostname`=ネーミングサービスのホスト名 ~<文字列>

ネーミングサービスのホスト名を指定します。サービスプラットフォームで指定した名称に依存します。このプロパティの指定を省略した場合、Management Server で設定しているホスト名が設定されます。

`naming-service-port`=ネーミングサービスのポート番号 ~<数字>((1-65535))

ネーミングサービスのポート番号を指定します。サービスプラットフォームでの設定値に依存します。このプロパティの指定を省略した場合、Management Server で管理している論理 J2EE サーバのインプロセスネーミングサービス用のポート番号が設定されます。

(e) Reliable Messaging 関連

`rm-systemname`=Reliable Messaging のシステム名 ~<先頭が英字の大文字英字または数字>((1-3文字))

HCSC サーバが使用する Reliable Messaging の RM システム名を指定します。Reliable Messaging を使用しない場合は指定できません。

サービスプラットフォームで指定した名称に依存します。`rm-use` プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。`rm-use` プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

`rm-displayname`=Reliable Messaging の表示名 ~<英数字およびアンダーバー (_) >

HCSC サーバが使用する Reliable Messaging (リソースアダプタ) の表示名をサニタイズ (半角英数字以外をアンダーバー (_) に変更) した値を指定します。Reliable Messaging を使用しない場合は指定できません。

サービスプラットフォームでの名称に依存します。`rm-use` プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。`rm-use` プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

(f) DB コネクタ関連

`dbcon-xadisplayname`=XATransaction または LocalTransaction 用 DB Connector の表示名 ~<英数字およびアンダーバー (_) >

HCSC サーバが使用する XATransaction 用、または LocalTransaction 用の DB Connector の表示名をサニタイズ (半角英数字以外をアンダーバー (_) に変更) した値を指定します。サービスプラットフォーム

ムでの名称に依存します。db-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

dbcon-nodisplayname=NoTransaction 用 DB Connector の表示名

HCSC サーバが使用する NoTransaction 用 DB Connector の表示名をサニタイズ（半角英数字以外をアンダーバー（_）に変更）した値を指定します。サービスプラットフォームでの名称に依存します。db-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

(g) データベース関連

dbtype={HIRDB | ORACLE11G}

HCSC サーバで使用するデータベース種別を指定します。db-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

- **HIRDB**
使用するデータベースとして HiRDB を使用します。
- **ORACLE11G**
使用するデータベースとして Oracle を使用します。

jdbc-type={DBPSV | HIRDB-TYPE4 | ORACLE-THIN}

HCSC サーバオフライン時に使用する JDBC ドライバの種別を指定します。db-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。db-use プロパティで OFF を指定した場合、このプロパティを指定するとエラーになります。

- **DBPSV**
DABroker Library の JdbcDbpsvDriver を使用します。DBPSV を指定した場合は、必ず jdbc-dbhostname プロパティ、および jdbc-dbconnectinfo プロパティを指定します。DABroker Library を使用して Oracle へのデータベースにはアクセスできません。J2EE サーバの互換モードが V9 互換モードの場合だけ指定できます。
- **HIRDB-TYPE4**
HiRDB Type4 JDBC Driver を使用します。HIRDB-TYPE4 を指定した場合は、必ず jdbc-dbhostname プロパティ、および jdbc-dbconnectinfo プロパティを指定します。
- **ORACLE-THIN**
Oracle JDBC Thin Driver を使用します。dbtype プロパティで、使用するデータベース種別に ORACLE11G を指定した場合は、必ず指定します。また、ORACLE-THIN を指定した場合は、必ず jdbc-url プロパティを指定します。

jdbc-url=JDBC 用データベース URL ~<文字列>

HCSC サーバオフライン時に使用する JDBC ドライバごとに対応した接続設定情報として、Driver.connect メソッドで接続する際に指定する、接続先のデータベースの URL を指定します。jdbc-type プロパティで、JDBC ドライバ種別に ORACLE-THIN を指定した場合は必ず指定します。

- jdbc-type プロパティに DBPSV を指定した場合
jdbc-url プロパティの指定は無効になります。
- jdbc-type プロパティに HIRDB-TYPE4 を指定した場合
jdbc-url プロパティの指定は無効になります。
- jdbc-type プロパティに ORACLE-THIN を指定した場合
Oracle JDBC Thin Driver がデータベースに接続する際に使用する URL を指定します。
「jdbc:oracle:thin:@」より後ろの部分を指定します。URL の形式については、Oracle のマニュアルを参照してください。データベースに接続する際に使用するユーザ名とパスワードを含む URL は指定しないでください。なお、データベースに接続する際のユーザ名とパスワードは、HCSC サーバ構成定義ファイルで指定します。

jdbc-dbhostname=データベースのホスト名 ～<文字列>((最大 2086 文字))

HCSC サーバオフライン時に HCSC サーバが使用する HiRDB のホスト名または IP アドレスを指定します。jdbc-type プロパティで、JDBC ドライバ種別に DBPSV および HIRDB-TYPE4 を指定した場合は必ず指定します。jdbc-type プロパティに ORACLE-THIN を指定した場合、jdbc-dbhostname プロパティの指定は無効になります。

jdbc-dbconnectinfo=データベースの接続情報 ～<英数字>

HCSC サーバオフライン時に使用する接続情報（ポート番号、または環境変数グループ名）を指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。DABroker または HiRDB の設定値に依存します。jdbc-type プロパティで、JDBC ドライバ種別に DBPSV および HIRDB-TYPE4 を指定した場合は必ず指定します。

- jdbc-type プロパティに DBPSV を指定した場合
HiRDB システムのポート番号、または HiRDB クライアントの環境変数グループ名を指定します。環境変数グループ名を指定する場合、必ず先頭の @DABENVGRP を含めて指定します。
- jdbc-type プロパティに HIRDB-TYPE4 を指定した場合
HiRDB システムのポート番号、または HiRDB クライアントの環境変数グループファイル名を指定します。環境変数グループファイル名を指定する場合、必ず先頭の @HIRDBENVGRP=指定に続けて、環境変数グループファイル名を絶対パス名で指定します。
- jdbc-type プロパティに ORACLE-THIN を指定した場合
jdbc-dbconnectinfo プロパティの指定は無効になります。

db-character-sets={ASCII | Shift_JIS | UTF-8 | EUC-JP}

使用するデータベースで指定した文字コード種別を指定します。

コマンド受付 (MBean) や標準受付で入力チェックの際に「XML スキーマ定義の NCName」の長さ (データベースに入れることができる文字列のバイト数) を、指定された文字コードに変換してチェックするために使用します。

db-use プロパティで ON を指定した場合は、必ず指定します。データベースを使用しない場合は、このプロパティの指定を省略できます。db-use プロパティで OFF を指定した場合で、このプロパティを指定しなかったときは、UTF-8 に変換してチェックします。UTF-8 以外を指定した場合は、指定された文字コードでチェックします。

- ASCII
使用するデータベースで指定した文字コード種別が ASCII の場合に指定します。
- Shift_JIS
使用するデータベースで指定した文字コード種別が Shift_JIS の場合に指定します。
- UTF-8
使用するデータベースで指定した文字コード種別が UTF-8 の場合に指定します。
- EUC-JP
使用するデータベースで指定した文字コード種別が EUC-JP の場合に指定します。

db-tbl-split-key={NONE | MONTH} ~<<NONE>>

日付データによるテーブルのレンジ分割機能を使用するかどうかを指定します。

- NONE
レンジ分割機能を使用しません。
- MONTH
レンジ分割機能を使用します。プロセスインスタンスが開始された月 (GMT) を分割キーとして、テーブルに登録されます。

テーブルのレンジ分割機能を使う場合の分割方法は、sql-scriptfilename プロパティで指定された SQL スクリプトファイルで定義します。テーブルの構成については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

db-tbl-split-corcheck-use={ON | OFF} ~<<OFF>>

相関セットの重複チェックを強化するかどうかを指定します。HiRDB で実行履歴情報テーブルの分割機能を利用する場合は ON を指定してください。

- ON
相関セットの重複チェックを強化します。
- OFF
相関セットの重複チェックを強化しません。

テーブルの分割機能を利用する場合、分割方法は sql-scriptfilename に指定する SQL スクリプトファイルで定義します。テーブルの構成については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 C データベースのテーブルの情報」を参照してください。

(h) ビジネスプロセスの状態の互換性

bp-status-compatible={ON | OFF}

次の内容を指定します。永続化するビジネスプロセスを使用する場合に有効となります。

- ビジネスプロセスのサービス呼出アクティビティが実行中の状態で例外（エラー）が発生した場合、プロセスインスタンスおよびアクティビティをエラー状態（Error）に設定するかどうか
- 通信モデルが同期のサービス呼出アクティビティの実行時以外で、トランザクションを終了または開始するかどうか

サービス呼出アクティビティのトランザクションおよびステータス遷移は、bp-status-compatible と bp-invoke-status-compatible の組み合わせによって異なります。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「3.4.4 サービス呼出アクティビティのトランザクション」を参照してください。

08-10 以降を新規インストールした場合のデフォルト値は「OFF」です。また、08-00 以前のバージョンから移行した場合のデフォルト値は「ON」です。

(i) サービス呼出アクティビティの状態の互換性

bp-invoke-status-compatible={ON | OFF}

ビジネスプロセスのサービス呼出アクティビティの実行が正常に完了した場合、トランザクションを終了または開始するかどうかを指定します。

bp-status-compatible に「OFF」を指定した場合に有効になります。また、永続化するビジネスプロセスを使用する場合に有効となります。

サービス呼出アクティビティのトランザクションおよびステータス遷移は、bp-status-compatible と bp-invoke-status-compatible の組み合わせによって異なります。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「3.4.4 サービス呼出アクティビティのトランザクション」を参照してください。

新規インストールした場合のデフォルト値は「OFF」です。また、08-70 以前のバージョンから移行した場合のデフォルト値は「ON」です。

(j) データベースの RD エリア（表領域）情報

cscserverinfo-tbl-area=HCSC 基本情報テーブル領域 ~<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

HCSC 基本情報テーブルを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

server-trans-tbl-area=連携 HCSC 用テーブル領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

連携 HCSC ディレクトリを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

location-tbl-area=ロケーション用テーブル領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

ロケーションディレクトリを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

routing-tbl-area=ルーティング用テーブル領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

ルーティングディレクトリを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

cv-tbl-area=データ変換用テーブル領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

データ変換ディレクトリを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

exehistory-tbl-area=実行履歴情報テーブル領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

実行履歴情報テーブルを作成するテーブル領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

exehistory-idx-area=実行履歴情報テーブルのインデックスを格納する領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

実行履歴情報テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

process-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルを格納する領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

process-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルのインデックスを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 PROCESS テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

activity-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

activity-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルのインデックスを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 ACTIVITY テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。

- Oracle の場合

表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

link-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合

RD エリア名を指定します。

- Oracle の場合

表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

link-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルのインデクスを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 LINK テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合

RD エリア名を指定します。

- Oracle の場合

表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

correlationset-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合

RD エリア名を指定します。

- Oracle の場合

表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

correlationset-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルのインデックスを格納する領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 CORRELATIONSET テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

string-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルを格納する領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

string-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルのインデックスを格納する領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 STRING-VARIABLE テーブルのインデックスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデックス領域が決定されます。

numeric-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルを格納する領域 ～<文字列, RD エリア名の場合：先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合：1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

numeric-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 NUMERIC-VARIABLE テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

boolean-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

boolean-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 BOOLEAN-VARIABLE テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**

表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

message-variable-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

message-variable-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルのインデクスを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

message-variable-val-area=ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルの VariableValue 列を格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合: 先頭が英字の英数字と空白> ((RD エリア名の場合: 1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-VARIABLE テーブルの VariableValue 列を作成する領域を指定します。

- **HiRDB の場合**
指定は不要です。このプロパティを指定しても無効となります。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

message-relation-tbl-area=ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合:先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合:1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

message-relation-idx-area=ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルのインデクスを格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合:先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合:1-30 文字))

ビジネスプロセス基盤用 MESSAGE-RELATION テーブルのインデクスを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってインデクス領域が決定されます。

clusterinfo-tbl-area=クラスタ情報を格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合:先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合:1-30 文字))

クラスタ内でセットアップされたクラスタ情報を格納するテーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- **HiRDB の場合**
RD エリア名を指定します。
- **Oracle の場合**
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

haasyncadp-tbl-area=クラスタ内で配備された非同期アダプタサービス ID を格納する領域 ~<文字列, RD エリア名の場合:先頭が英字の英数字と空白>((RD エリア名の場合:1-30 文字))

クラスタ内で配備された非同期アダプタサービス ID を格納するテーブルを作成する領域を指定します。使用するデータベースの種類によって、指定する値が異なります。

- HiRDB の場合
RD エリア名を指定します。
- Oracle の場合
表領域を指定します。

このプロパティの指定を省略した場合、使用するデータベースに従ってテーブル領域が決定されます。

sql-scriptfilename=SQL スクリプトファイルパス ~<文字列>

データベース作成用の SQL スクリプトファイルパスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。

このプロパティはオプション機能です。このプロパティでユーザ SQL ファイルを指定する場合、SQL ファイルの TABLE 名、INDEX 名、VIEW 名を誤らないようにしてください。誤ったものを指定すると動作は保証されません。また、HCSC サーバのアンセットアップ時には、SQL ファイルの内容に関係なく、HCSC サーバが使用するテーブル一式が削除されます。ただし、HA クラスタ内で共有できるテーブルについては、クラスタ内で最後の HCSC サーバをアンセットアップする場合にだけ削除します。HCSC サーバが使用するテーブル一式については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.5.3 HCSC サーバのセットアップおよびアンセットアップ時の回復方法」を参照してください。

また、SQL スクリプトファイルについては、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「付録 D SQL スクリプトファイルの設定」を参照してください。

なお、このプロパティを指定した場合、次に示すプロパティは無効になります。

- cscserverinfo-tbl-area
- server-trans-tbl-area
- location-tbl-area
- routing-tbl-area
- cv-tbl-area
- exehistory-tbl-area
- exehistory-idx-area
- process-tbl-area
- process-idx-area
- activity-tbl-area
- activity-idx-area
- link-tbl-area
- link-idx-area
- correlationset-tbl-area

- correlationset-idx-area
- string-variable-tbl-area
- string-variable-idx-area
- numeric-variable-tbl-area
- numeric-variable-idx-area
- boolean-variable-tbl-area
- boolean-variable-idx-area
- message-variable-tbl-area
- message-variable-idx-area
- message-variable-val-area
- message-relation-tbl-area
- message-relation-idx-area
- clusterinfo-tbl-area
- haasyncadp-tbl-area

(k) アクティビティインスタンスの最大数の互換性

activitynumber-maximum-compatible={ON | OFF} ~<<OFF>>

1つのプロセスインスタンスで生成できるアクティビティインスタンスの識別番号の上限値を指定します。

- ON
最大 32,768 個を生成できます。
- OFF
最大 2,147,483,648 個を生成できます。

デフォルト値は次のとおりです。

- 08-50 以降を新規インストールした場合
デフォルト値は「OFF」です。
- 08-10 以前のバージョンから移行した場合
データベースを使用していない環境ではデフォルト値は「OFF」、データベースを使用している環境ではデフォルト値は「ON」です。

(l) XML 解析

xmlanalyze-mode={standard | advanced} ~<<standard>>

XML の解析モードを次の中から選択します。XML 解析処理で 09-00 以前との互換性を重視する場合、または SOAP 添付ファイル機能を利用する場合は、「standard」を設定してください。

- standard
XML 全体を解析します。
- advanced
次に示す処理を実行する場合に、メモリ使用量や処理性能が改善します。
 - SOAP1.1/1.2 併用モードの SOAP 受付を使用する場合
 - SOAP1.1/1.2 併用モードの SOAP アダプタを使用する場合
 - DB アダプタを使用する場合
 - データ変換を実行する場合

「advanced」を指定した場合の注意事項を次に示します。

- XML 文章全体を解析しないため、不正な XML であってもエラーが発生しない場合があります。
- SOAP 添付ファイル機能が利用できません。
- 次に示すコンポーネントは、XML 電文の解析に StAX を使用します。
 - SOAP 受付 (SOAP1.1/1.2 併用モードの場合)
 - SOAP アダプタ (SOAP1.1/1.2 併用モードの場合)
 - DB アダプタ
 - ビジネスプロセス (ヘッダ割当て処理)

そのため、次の点に注意してリクエストやサービスを作成してください。

- XML バージョン 1.1 の電文を設定した場合、例外が発生します。
- ISO-10646-UCS-4 エンコーディングを使用した場合、例外が発生します。
- XML 文書に「:」で始まる要素名が含まれる場合、例外は発生しません。
- XML 文書中の文字データの中に CDATA セクション終了区切り子 ("]>") が単独で含まれる場合、例外は発生しません。
- 空要素タグは次のように、開始タグと終了タグで出力されます。

(例) <sample></sample>

StAX を使用する場合の注意事項については、マニュアル「XML Processor ユーザーズガイド」の「6.4 StAX に関する注意事項」を参照してください。

(5) 記述例

HiRDB を使用した場合の例を次に示します。

```
db-use=0N
rm-use=0N
request-ejb=0N
request-soap=0N
request-jms=0N
```

```
request-dbq=OFF
rm-systemname=RM
rm-displayname=Cosminexus_Reliable_Messaging
dbcon-xadisplayname=DB_Connector_for_HiRDB_Type4_Cosminexus_RM
dbcon-nodisplayname=DB_Connector_for_HiRDB_Type4
dbtype=HIRDB
jdbc-type=HIRDB-TYPE4
jdbc-dbhostname=localhost
jdbc-dbconnectinfo=22200
db-character-sets=Shift_JIS
cscserverinfo-tbl-area=RDDATA1
location-tbl-area=RDDATA1
routing-tbl-area=RDDATA1
cv-tbl-area=RDDATA1
exehistory-tbl-area=RDDATA2
exehistory-idx-area=RDINDX2
process-tbl-area=RDDATA1
process-idx-area=RDINDX1
activity-tbl-area=RDDATA1
activity-idx-area=RDINDX1
link-tbl-area=RDDATA1
link-idx-area=RDINDX1
correlationset-tbl-area=RDDATA1
correlationset-idx-area=RDINDX1
string-variable-tbl-area=RDDATA3
string-variable-idx-area=RDINDX3
numeric-variable-tbl-area=RDDATA3
numeric-variable-idx-area=RDINDX3
boolean-variable-tbl-area=RDDATA3
boolean-variable-idx-area=RDINDX3
message-variable-tbl-area=RDDATA3
message-variable-idx-area=RDINDX3
message-relation-tbl-area=RDDATA4
message-relation-idx-area=RDINDX4
```

(6) 使用方法

HCSC サーバ構成定義ファイルの要素 setup-properties に HCSC サーバセットアップ定義ファイルを指定します。

(7) 注意事項

- 同じプロパティを複数指定した場合は、動作は保証されません。
- 標準受付を使用しない場合でも、次のプロパティのどれかには"ON"を設定してください。ON に設定した場合は、関連する HCSC サーバ構成定義ファイルの<reception>タグも併せて設定してください。設定していない場合、HCSC サーバセットアップ時にメッセージ KDEC10073-E が出力されます。
 - request-ejb
 - request-soap
 - request-jms
 - request-dbq

- パスを指定する場合の注意事項を次に示します。
 - 相対パス、親ディレクトリ表現 (「..¥」, 「../」), およびカレントディレクトリ表現 (「.¥」, 「./」) を含むパスは指定しないでください。
 - シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
 - Windows の場合, UNC 形式, NTFS のストリーム名, および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また, パスの大文字と小文字は区別されません。

6.5 HCSC サーバの運用で利用するファイル

6.5.1 HCSC-Manager コマンド JavaVM 起動オプション定義ファイル

(1) 形式

Windows の場合

Win32 のバッチファイル形式で指定してください。△は半角スペースを示します。

```
set△cscjvmopt_<コマンド名>=<JavaVM起動オプション1> [△<JavaVM起動オプション2>] [△…]
```

UNIX の場合

シェルスクリプトファイル形式で指定してください。△は半角スペースを示します。

```
cscjvmopt_<コマンド名>="<JavaVM起動オプション1> [△<JavaVM起動オプション2>] [△…]"
```

(2) 機能

コマンドごとに、適用する JavaVM 起動オプションを設定します。対象となるコマンドは、運用環境または実行環境のコマンドのうち、コマンド名が「csc」で始まるコマンドです。運用環境または実行環境のコマンドについては、「5. コマンド (運用環境・実行環境)」を参照してください。

設定した JavaVM 起動オプションは、コマンドの環境変数 (UNIX の場合は変数) の値として設定されます。そのため、ファイルを設定または変更した場合は、次回のコマンド実行時から適用されます。

ファイルの作成時には次の点に注意してください。

- UNIX の場合、オプション全体を「"」(ダブルクォーテーション) で囲んで指定してください。
- "=" の前後にはスペースを入れないでください。
- スペルミスなど、JavaVM 起動オプションとして不正な値が設定された場合の挙動は JavaVM に依存します。

なお、JavaVM 起動オプションを設定した場合の動作は JavaVM の仕様に従います。コマンドの実行時に JavaVM エラーが発生するなど、期待どおりの動作とならない場合は、ファイルを修正してコマンドを再実行してください。

JavaVM 起動オプションの引数に次のようなファイルパスを指定した場合、動作は保証しません。

- スペースを含むファイルパスを指定した場合。
- ファイルパスを「"」(ダブルクォーテーション) や「'」(シングルクォーテーション) で囲んだ場合。

指定誤りの例 (UNIX の場合)

```
cscjvmopt_cscpiselect=-XX:HitachiJavaLog:"/opt/Program△Files"
```

(3) ファイルの格納先

Windows の場合

テンプレートファイル：

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%cscjvmopt.bat
```

設定したファイルの格納場所およびファイル名：

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%cscjvmopt.bat
```

UNIX の場合

テンプレートファイル：

```
/opt/Cosminexus/CSC/config/manager/templates/cscjvmopt
```

設定したファイルの格納場所およびファイル名：

```
/opt/Cosminexus/CSC/config/manager/cscjvmopt
```

(4) 設定できる JavaVM 起動オプション

JavaVM 起動オプションの引数の設定範囲など詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス 定義編(サーバ定義)」の「14. JavaVM 起動オプション」を参照してください。ここに記載していない JavaVM 起動オプションを設定した場合、動作は保証できません。

-Xms

ヒープ領域 (New 領域 + Old 領域) の初期値を指定します。

-Xmx

ヒープ領域 (New 領域 + Old 領域) の最大値を指定します。

-Xss

スレッドのスタックサイズを指定します。

-XX:MetaspaceSize

Metaspace 領域の初期値を指定します。

-XX:MaxMetaspaceSize

Metaspace 領域の最大値を指定します。

-XX:HitachiJavaLog

JavaVM ログファイルのプリフィックスおよびログファイルの出力先ディレクトリを指定します。

複数の HCSC-Manager 環境を構築した場合のログファイル出力先の設定について

環境変数 CSCMNG_HOME を複数設定して 1 台のマシンに複数の HCSC-Manager 環境を構築した場合、ログファイル出力先が重複しないよう設定してください。同じログファイル出力先を設定した場合は動作を保証できません。環境変数 CSCMNG_HOME については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「2.9.2 1 台のマシンに複数の環境を構築する流れ」を参照してください。

HCSC-Manager 環境ごとにログファイル出力先を切り替えるには、引数に環境変数 CSCMNG_HOME を含めることを推奨します（例：-XX:HitachiJavaLog:%CSCMNG_HOME%¥log）。

この場合、ログファイルの出力先は次のように HCSC-Manager 環境ごとに切り替えられます。

環境変数 CSCMNG_HOME の設定（HCSC-Manager 環境 1）

```
set CSCMNG_HOME=C:¥WorkPri
```

これによってログファイル出力先は次のようになります。

```
C:¥WorkPri¥log¥java¥log01.log
```

環境変数 CSCMNG_HOME の設定（HCSC-Manager 環境 2）

```
set CSCMNG_HOME=C:¥WorkSec
```

これによってログファイル出力先は次のようになります。

```
C:¥WorkSec¥log¥java¥log01.log
```

注意事項

環境変数 CSCMNG_HOME に設定されたパスに空白が含まれている場合は、ログ出力先のパスに環境変数 CSCMNG_HOME は設定できません。この場合は代わりに、空白を含まないパスを設定した任意の環境変数を使用し、環境変数 CSCMNG_HOME とあわせて切り替えるよう運用してください。

-XX:HitachiJavaLogFileSize

JavaVM ログファイルの 1 ファイル当たりのファイルサイズの上限值を指定します。

-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile

作成する JavaVM ログファイルの最大ファイル数を指定します。

-XX:[+|-]HitachiVerboseGC

GC が発生した場合に拡張 verbosegc 情報を出力するかどうかを指定します。

(5) 記述例

cscpiselect コマンドに JavaVM 起動オプションを設定する例を次に示します。

Windows の場合

```
set cscjvmopt_cscpiselect=-Xmx512m -Xms512m
```

UNIX の場合

```
cscjvmopt_cscpiselect="-Xmx512m -Xms512m"
```

6.5.2 HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル

(1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

```
csc.all.<コマンド引数名>=値  
csc.<コマンド識別子>.<コマンド引数名>=値
```

(2) 機能

各コマンドのオプションのデフォルト値を設定します。設定ファイルの変更後、次回コマンドの発行時に更新情報が反映されます。この定義ファイルおよびコマンドの両方でオプションの値を指定した場合、コマンドの指定が有効になります。

この定義ファイルには、ユーザ ID やパスワードなどの情報が含まれるため、適切にファイルパーミッションを設定してください。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%csccmd.properties
```

(4) 設定できるパラメタ

```
csc.all.<コマンド引数名>=値
```

すべてのコマンドに共通する引数のデフォルト値を指定します。コマンド引数名はハイフン (-) を除いた値を指定してください。値がない場合は値の指定は不要です。

(指定例 1)

すべてのコマンドの -user オプションに、指定値「admin」を仮定する場合

```
csc.all.user=admin
```

(指定例 2)

すべてのコマンドに、-all オプションが指定されていると仮定する場合

```
csc.all.all=
```

csc.<コマンド識別子>.<コマンド引数名>=値

コマンド識別子に対応したコマンドのデフォルト引数を定義します。コマンド識別子はコマンド名から"csc"を除いた値を指定してください。コマンド引数名はハイフン (-) を除いた値を指定してください。値がない場合は値の指定は不要です。

(指定例 1)

cscpiselect コマンドの-csc オプションに、指定値「HCSC」を仮定する場合

```
csc.piselect.csc=HCSC
```

(指定例 2)

cscsvstart コマンドに、-system オプションが指定されていると仮定する場合

```
csc.svstart.system=
```

(5) 注意事項

次の例に示すように、HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの指定内容と、コマンド引数の指定に矛盾がある場合、コマンド引数が不正になります。

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイルの内容

```
csc.all.user=AAA  
csc.all.pass=BBB  
csc.repctl.autoexport=
```

コマンド入力例

```
> cscrepctl -import repository.zip
```

この例では、cscrepctl コマンドで、-import オプションと-autoexport オプションの両方が指定されています。そのため、コマンド引数の不正でエラーとなります。

6.5.3 HCSC-Manager 定義ファイル

(1) 形式

```
cscmng.repository.root=リポジトリのルートディレクトリパス
```

```
cscmng.log.dir=ログ出力先ディレクトリパス
cscmng.log.<チャンネル名>.filesize=ログファイルサイズ
cscmng.log.<チャンネル名>.filenum=ログファイル面数

cscmng.manager.<マネージャ識別名>.timeout=読み込みタイムアウト値

cscmng.pireexec.response.dir=応答電文格納ディレクトリパス
cscmng.pireexec.response.encoding=応答電文格納文字コード

cscmng.server.<HCSCサーバ名>.system=論理サーバ名

cscmng.repctl.export.dir=エクスポートファイルの出力先ディレクトリパス

cscmng.envbackup.dir=環境バックアップの出力先ディレクトリパス
cscmng.envbackup.dir.envrestore=リストア前の環境バックアップの出力先ディレクトリパス
cscmng.envbackup.dir.import=インポート前の環境バックアップの出力先ディレクトリパス
cscmng.envbackup.autoget={ON | OFF}
cscmng.envbackup.autoget.off={envrestore | import | envrestore, import}

cscmng.precache.thread.maximum=cscmprecacheコマンドで並列処理するスレッドの最大数

cscmng.server.<HCSCサーバ名>.hws.svstop={normal | wait}
cscmng.server.<HCSCサーバ名>.hws.svstop.timeout=HTTP Server計画停止時のタイムアウト値
```

(2) 機能

HCSC-Manager の動作に必要な情報を設定します。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%cscmng.properties
```

(4) 設定できるパラメタ

(a) リポジトリ設定

```
cscmng.repository.root=リポジトリのルートディレクトリパス ~<最大 100 バイトの文字列><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%repository>>
```

リポジトリのルートディレクトリを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。

相対パスを指定した場合、エラーになる場合があります。存在しないディレクトリを指定した場合、および指定した文字列が 100 バイトを超える場合はエラーになります。そのため、<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>が 84 バイトを超える場合は、このプロパティを明示的に指定してください。

なお、1 台のマシンに複数の運用・実行環境を構築（環境変数 CSCMNG_HOME を設定）している場合、省略値は次のようになります。

```
%CSCMNG_HOME%¥repository
```

(b) ログ設定

cscmng.log.dir=ログ出力先ディレクトリパス ~<最大 100 バイトの文字列><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥CSC¥log¥manager>>

ログ出力先ディレクトリを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。相対パスを指定した場合、エラーになる場合があります。存在しないディレクトリを指定した場合、および指定した文字列が 100 バイトを超える場合はエラーになります。そのため、<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>が 84 バイトを超える場合は、このプロパティを明示的に指定してください。

なお 1 台のマシンに複数の運用・実行環境を構築（環境変数 CSCMNG_HOME を設定）している場合、省略値は次のようになります。

```
%CSCMNG_HOME%¥log¥manager
```

cscmng.log.<チャンネル名>.filesize=ログファイルサイズ ~<数字>
((4096-16777216))<<1048576>> チャンネルが maintenance の場合は<数字>
((4096-16777216))<<4194304>>

ログファイル 1 つ当たりの上限サイズをバイト単位で指定します。不正な値を指定した場合は、省略値が指定されます。チャンネル名には、次のどれか 1 つを指定します。

- message：メッセージログ
- exception：例外ログ
- maintenance：メンテナンスログ

cscmng.log.<チャンネル名>.filenum=ログファイル面数 ~<数字>((1-16))<<2>>

ログファイル面数を指定します。不正な値を指定した場合は、省略値が指定されます。チャンネル名には、次のどれか 1 つを指定します。

- message：メッセージログ
- exception：例外ログ
- maintenance：メンテナンスログ

(c) Manager 設定

cscmng.manager.<マネージャ識別名>.timeout=読み込みタイムアウト値 ~<数字>
((0-86400))<<0>>

Manager との接続の読み込みタイムアウトを秒単位で指定します。0 を指定した場合はタイムアウトしません。不正な値を指定した場合は、省略値が指定されます。マネージャ識別名は HCSC サーバ構成定義ファイルに指定した Manager 名を設定してください。

(d) プロセスインスタンス再実行設定

`cscmng.pireexec.response.dir=応答電文格納ディレクトリパス ((1-100 バイト))`

プロセスインスタンス再実行で応答電文を受け取った場合の応答電文格納ディレクトリを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。相対パスを指定した場合、エラーになる場合があります。指定しない場合は、応答電文が格納されません。存在しないパスを指定した場合、エラーになります。また、パスを含むファイル長が OS の MAX_PATH を超える場合はファイルを作成できません。

`cscmng.pireexec.response.encoding=応答電文格納文字コード ~<<UTF-8>>`

応答電文格納時の出力文字コードを、JavaVM がサポートしているエンコーディング名で指定します。存在しない文字コードを指定した場合、省略値が指定されます。

(e) HCSC サーバ運用設定

`cscmng.server.<HCSC サーバ名>.system=論理サーバ名`

HCSC システムの管理下におく論理サーバを指定します。管理下におくと、論理サーバの各種運用 (HCSC サーバとの一括起動・停止、および状態の参照) ができるようになります。

論理サーバ名は、「論理サーバ名,論理サーバ名,...」のようにコンマ (,) 区切りで指定します。コンマ前後の半角スペースやタブ文字は無視されます。論理サーバの起動停止順序は、Manager で設定した順序になります。HCSC サーバも同時に起動する場合は、J2EE サーバの起動順序になります。

(指定例)

HCSC サーバ (HCSC) 上に、論理パフォーマンストレーサ (PRF)、および論理 Web サーバ (WebServer) を同時に起動停止する場合

`cscmng.server.HCSC.system=PRF,WebServer`

(f) リポジトリエクスポート

`cscmng.repctl.export.dir=エクスポートファイルの出力先ディレクトリパス ~((1-100 バイト))<<カレントディレクトリ>>`

`cscrepctl` コマンドで `-autoexport` オプションを指定してリポジトリをエクスポートする場合の、エクスポートファイルの出力先ディレクトリを指定します。

(g) 環境バックアップ

`cscmng.envbackup.dir=環境バックアップの出力先ディレクトリパス ~((1-100 バイト))<<カレントディレクトリ>>`

cscenvbackup コマンドで環境をバックアップする場合、環境バックアップファイルの出力先ディレクトリを指定します。

cscmng.envbackup.dir.envrestore=リストア前の環境バックアップの出力先ディレクトリパス ~
((1-100 バイト))

cscenvrestore コマンドで環境をリストアする場合、リストア前の環境バックアップファイルの出力先ディレクトリを指定します。このパラメタの指定は、cscmng.envbackup.dir パラメタの指定よりも優先されます。このパラメタを省略した場合、リストア前の環境バックアップファイルは、cscmng.envbackup.dir パラメタで指定したディレクトリに出力されます。cscmng.envbackup.dir パラメタも省略した場合は、次のディレクトリに出力されます。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%spool¥manager¥
```

なお、1 台のマシンに複数の運用・実行環境を構築（環境変数 CSCMNG_HOME を設定）している場合、省略値は次のようになります。

```
%CSCMNG_HOME%¥spool¥manager
```

cscmng.envbackup.dir.import=インポート前の環境バックアップの出力先ディレクトリパス ~
((1-100 バイト))

cscrepctl コマンドで-import オプションを指定してリポジトリをインポートする場合、インポート前の環境バックアップファイルの出力先ディレクトリを指定します。このパラメタの指定は、cscmng.envbackup.dir パラメタの指定よりも優先されます。このパラメタを省略した場合、インポート前の環境バックアップファイルは、cscmng.envbackup.dir パラメタで指定したディレクトリに出力されます。cscmng.envbackup.dir パラメタも省略した場合は、次のディレクトリに出力されます。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%spool¥manager
```

なお、1 台のマシンに複数の運用・実行環境を構築（環境変数 CSCMNG_HOME を設定）している場合、省略値は次のようになります。

```
%CSCMNG_HOME%¥spool¥manager
```

cscmng.envbackup.autoget={ON | OFF} ~<<ON>>

自動でバックアップするかどうかを指定します。

- ON
自動でバックアップします。
- OFF
自動でバックアップしません。

cscmng.envbackup.autoget.off={envrestore | import | envrestore,import}

環境をリストアする際、またはリポジトリをインポートする際に、自動バックアップをしない場合に指定します。環境のリストア、およびリポジトリのインポートの両方で自動バックアップをしない場合は、`envrestore` と `import` をコンマ (,) 区切りで指定します。コンマ前後のスペース文字は無視されます。

- **envrestore**

`cscenvrestore` コマンドを実行して環境をリストアした場合に、自動バックアップをしません。

- **import**

`cscprepctl` コマンドで `-import` オプションを指定してリポジトリをインポートした場合に、自動バックアップをしません。

(指定例)

- 環境をリストアする際に自動バックアップをしない場合
`cscmng.envbackup.autoget.off=envrestore`
- リポジトリをインポートする際に自動バックアップをしない場合
`cscmng.envbackup.autoget.off=import`
- 環境をリストアする際、およびリポジトリをインポートする際に自動バックアップをしない場合
`cscmng.envbackup.autoget.off=envrestore,import`

ポイント

`cscmng.envbackup.autoget` パラメタと `cscmng.envbackup.autoget.off` パラメタの指定の組み合わせによって、環境をリストアする際、またはリポジトリをインポートする際に、自動バックアップをするかどうか異なります。`cscmng.envbackup.autoget` パラメタと `cscmng.envbackup.autoget.off` パラメタの関係を次の表に示します。

表 6-2 `cscmng.envbackup.autoget` パラメタと `cscmng.envbackup.autoget.off` パラメタの関係

<code>cscmng.envbackup.autoget</code> パラメタの指定	<code>cscmng.envbackup.autoget.off</code> パラメタの指定	環境のリストア時	リポジトリのインポート時
なし	なし	○	○
なし	<code>envrestore</code>	×	○
なし	<code>import</code>	○	×
なし	<code>envrestore,import</code>	×	×
ON	なし	○	○
ON	<code>envrestore</code>	×	○
ON	<code>import</code>	○	×
ON	<code>envrestore,import</code>	×	×

cscmng.envbackup.autoget パラメタの指定	cscmng.envbackup.autoget.off パラメタの指定	環境のリストア時	リポジトリのインポート時
OFF	なし	×	×
OFF	envrestore	×	×
OFF	import	×	×
OFF	envrestore,import	×	×

(凡例)

- ：自動バックアップをします。
- ×

(h) コマンド用スレッド設定

`cscmng.precache.thread.maximum=cscmprecache` コマンドで並列処理するスレッドの最大数 ～<数字>((1-1024))<<16>>

`cscmprecache` コマンドで並列して事前解析要求を送信する場合の最大スレッド数を指定します。未指定または不正な値を指定した場合、エラーになります。

解析要求を送信する対象がないまたは1つだけの場合、スレッドは生成されないため、このプロパティの値は無視されます。

(i) HTTP Server 運用設定

`cscmng.server.<HCSC サーバ名>.hws.svstop={normal | wait}` ～<<wait>>

HTTP Server 停止時の動作を指定します。不正な値を指定した場合は、省略値が指定されます。このパラメタは、論理サーバを一括で停止する場合、HTTP Server の論理サーバを停止する場合、および運用環境の画面から HCSC サーバを停止する場合に有効になります。

- normal
通常停止します。
- wait
計画停止します。

`cscmng.server.<HCSC サーバ名>.hws.svstop.timeout=HTTP Server 計画停止時のタイムアウト値` ～<数字>((0 以下, または 60-1800))<<300>>

HTTP Server 計画停止時のタイムアウトを秒単位で指定します。不正な値を指定した場合は、省略値が指定されます。

0 以下の値を指定した場合は、Management Server に設定されている停止監視時間が指定されます。設定されている停止監視時間が0のときはタイムアウトしません。停止監視時間については、マニュアル「ア

アプリケーションサーバ 運用管理ポータル操作ガイド」の「11.11.1 Web サーバの起動／停止の設定」を参照してください。

このパラメタは、論理サーバを一括で停止する場合、HTTP Server の論理サーバを停止する場合、および運用環境の画面から HCSC サーバを停止する場合に有効になります。

なお、HWSGracefulStopTimeout ディレクティブに 0 以外の値を指定している場合は、HWSGracefulStopTimeout ディレクティブに指定した値でもタイムアウト監視します。HWSGracefulStopTimeout ディレクティブについては、マニュアル「HTTP Server」の「6.2.4 E, F, G, H, I で始まるディレクティブ」を参照してください。

(5) 記述例

```
cscmng.repository.root=C:/Program Files/Hitachi/Cosminexus/CSC/repository

cscmng.log.dir=C:/Program Files/Hitachi/Cosminexus/CSC/log/manager
cscmng.log.message.filesize=1048576
cscmng.log.message.filenum=2
cscmng.log.exception.filesize=1048576
cscmng.log.exception.filenum=2
cscmng.log.maintenance.filesize=4194304
cscmng.log.maintenance.filenum=2

cscmng.manager.node1.timeout=180
cscmng.manager.node2.timeout=180

cscmng.pireexec.response.dir=C:/TMP
cscmng.pireexec.response.encoding=UTF-8

cscmng.server.HCSC.system=PRF, WebServer

cscmng.repctl.export.dir=C:/TMP/autoexport

cscmng.envbackup.dir=C:/TMP/enbbackup
cscmng.envbackup.dir.envrestore=C:/TMP/envrestore
cscmng.envbackup.dir.import=C:/TMP/import
cscmng.envbackup.autoget=ON
cscmng.envbackup.autoget.off=envrestore

cscmng.precache.thread.maximum=16

cscmng.server.HCSC.hws.svstop=wait
cscmng.server.HCSC.hws.svstop.timeout=300
```

(6) 注意事項

- HCSC-Manager 定義ファイルは、画面およびコマンドのプロセス起動時に 1 度だけ読み込みます。そのため、HCSC-Manager 定義ファイルを変更した場合、変更した設定値は次にプロセスを起動した際に反映されます。ただし、ファイルサイズ/面数の変更を有効にするためには、ファイルの退避、または削除が必要です。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.3.1(3) ログおよびトレース取得時の注意事項（全般的な注意事項）」を参照してください。

- HCSC サーバをセットアップしたあと、アンセットアップするまでは `cscmng.repository.root` パラメータの値を変更しないでください。変更した場合、セットアップ済みの HCSC サーバに対する操作ができなくなるおそれがあります。
- `HWSGracefulStopTimeout` ディレクティブは、HCSC-Manager が自動的に設定するディレクティブです。セットアップウィザードで構築した環境の場合、`HWSGracefulStopTimeout` ディレクティブの設定は運用管理ポータルから変更できません。HTTP Server 定義ファイル (`httpsd.conf`) で `HWSGracefulStopTimeout` ディレクティブの設定を直接書き換えた場合も、設定情報を配布するときに設定が元に戻るため注意してください。
- パスを指定する場合の注意事項を次に示します。
 - 相対パス、親ディレクトリ表現 (`[..*]`, `[../]`)、およびカレントディレクトリ表現 (`[.*]`, `[./]`) を含むパスは指定しないでください。
 - シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
 - Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

6.5.4 HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル

(1) 形式

Windows の場合

```
@echo off
set HCSC_ADDCLASSPATH=<HiRDB Type4 JDBC Driver または Oracle JDBC Thin Driverのパス>
```

UNIX の場合

```
#!/bin/sh
HCSC_ADDCLASSPATH=<HiRDB Type4 JDBC Driver または Oracle JDBC Thin Driverのパス>
```

(2) 機能

HCSC-Messaging コマンド (`csm` で始まるコマンド) の動作に必要な情報を設定します。

(3) ファイルの格納先

Windows の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%cmdconf.bat
```

UNIX の場合

```
/opt/Cosminexus/CSC/config/msg/cmdconf
```

(4) 設定できるパラメタ

HCSC_ADDCLASSPATH

各データベースのドライバのファイル名を絶対パスで指定します。

- HiRDB の場合

HiRDB Type4 JDBC Driver を使用するとき、HiRDB Type4 JDBC Driver (pdjdbc2.jar) のファイル名を絶対パスで指定します。

- Oracle の場合

Oracle JDBC Thin Driver を使用するとき、Oracle JDBC Thin Driver のファイル名を絶対パスで指定します。

上記以外の場合は環境変数の定義だけを指定して、値は指定しないでください。

注意事項

環境変数として、HCSC_ADDCLASSPATH 以外を設定しないでください。

(5) 記述例

HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイルの記述例を次に示します。

Windows の場合

```
@echo off
set HCSC_ADDCLASSPATH=C:¥win32app¥hitachi¥hirdb_s¥CLIENT¥UTL¥pdjdbc2.jar
```

UNIX の場合

```
#!/bin/sh
HCSC_ADDCLASSPATH=/opt/HiRDB_S/client/lib/pdjdbc2.jar
```

6.5.5 HCSC コンポーネント指定ファイル

(1) 形式

```
[<変更種別>.] {<サービスID> | <受付ID>}
:
[<変更種別>.] {<サービスID> | <受付ID>}
```

(2) 機能

HCSC コンポーネントの追加・変更・削除をテキストファイル形式で設定します。複数の HCSC コンポーネントを記載する場合は、1 行ずつ記載してください。作成した HCSC コンポーネント指定ファイルをコマンドに指定することで、複数の HCSC コンポーネントに対する処理を一括で実行できます。

HCSC コンポーネント指定ファイルはテキストファイル形式で入力することもできますが、次のコマンドで HCSC コンポーネントの情報をファイル出力して作成することもできます。

- cscrepdiff コマンドの-listfile オプション (HCSC コンポーネントの差分情報を出力)
- cscrepls コマンドの-listfile オプション (HCSC コンポーネントの一覧を出力)

(3) ファイルの格納先

HCSC コンポーネント指定ファイルの格納先となるパスおよびファイル名は任意です。

(4) 設定できるパラメタ

[<変更種別>.] {<サービス ID> | <受付 ID>}

追加・変更・削除する HCSC コンポーネントをサービス ID または受付 ID で指定します。

HCSC コンポーネントの変更種別は次の中から指定します。

- add
指定した HCSC コンポーネントを処理対象に追加します。
- change
配備済みの HCSC コンポーネントに変更が生じた場合に、HCSC コンポーネントを再配備します。
- delete
配備済みの HCSC コンポーネントを処理対象から削除します。
- 指定なし
指定した HCSC コンポーネントを配備状態に関係なく、すべてのコマンドで処理対象とします。

-namelist オプションで HCSC コンポーネント指定ファイルを指定できるコマンドと、指定できる変更種別の組み合わせを次に示します。

コマンド名	変更種別			
	add	change	delete	指定なし
csccompostart	○	○	×	○
csccompostop	×	○	○	○
csccompodeploy	○	○	×	○

コマンド名	変更種別			
	add	change	delete	指定なし
csccompounddeploy	×	○	○	○
cscrepctl -import -compo	○	○	×	○
cscrepctl -delete	×	×	○	○

(凡例)

○：有効となります。

×：無効となります。

(5) 記述例

HCSC コンポーネント指定ファイルの記述例を次に示します。

```
#[BusinessProcess]
change.BP2
delete.BP3
add.BP4

#[ServiceAdapter]
change.adp2
delete.adp3
add.adp4

#[UserDefinedReception]
change.rcp2
delete.rcp3
add.rcp4
```

(6) 使用方法

作成した HCSC コンポーネント指定ファイルは、次に示すコマンドの-namelist オプションの引数に指定します。各コマンドの実行方法については、「5. コマンド (運用環境・実行環境)」の各コマンドの記述を参照してください。

- csccompostart コマンド
- csccompostop コマンド
- csccompodeploy コマンド
- csccompounddeploy コマンド
- cscrepctl -import -compo コマンド
- cscrepctl -delete コマンド

(7) 注意事項

- 複数の HCSC コンポーネントを指定した場合、HCSC コンポーネントの実行順序はコマンドによって異なります。実行順序については、各コマンドの説明を参照してください。
- サービス ID または受付 ID の指定が重複していると、変更種別が異なっていてもエラーとなります。
- 配備する HCSC コンポーネントが配備済みの場合など、処理対象外である HCSC コンポーネントはスキップされます。
- 各行の先頭 1 文字にシャープ (#) を指定した行はコメントと見なされます。
- 各行の先頭と終端の半角空白はトリムされます。
- 空行の場合は参照されないでスキップされます。

6.5.6 HCSC サーバランタイム定義ファイル

(1) 形式

```
[methodtrace-filepath=メソッドトレース・例外ログ出力先パス]
[methodtrace-filenum=メソッドトレース面数]
[methodtrace-filesize=メソッドトレースファイルサイズ]
[methodtrace-level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]
[requesttrace={ON | OFF}]
[requesttrace-filepath=リクエストトレース出力先パス]
[requesttrace-filenum=リクエストトレース面数]
[requesttrace-filesize=リクエストトレースファイルサイズ]
[telegramtrace={ON | OFF}]
[telegramtrace-filepath=ユーザ電文トレース出力先パス]
[telegramtrace-filenum=ユーザ電文トレース面数]
[telegramtrace-filesize=ユーザ電文トレースファイルサイズ]
[telegramtrace-trigger={NORMAL | SYSERR | FAULT | DTERR}]
[telegramtrace-component-type-filepath=ユーザ電文トレースのコンポーネント種別設定ファイルのパス]
[telegramtrace-component-id-filepath=ユーザ電文トレースのコンポーネントID設定ファイルのパス]
[telegramtrace-format={FIXED | READABLE}]
[bpacttrace={ON | OFF}]
[bpacttrace-filenum=ビジネスプロセスのアクティビティトレース面数]
[bpacttrace-filesize=ビジネスプロセスのアクティビティトレースファイルサイズ]
[bpacttrace-extend-item={NONE | PROCESSINSTANCEID}]
[bptrace-level={0 | 10 | 20 | 30}]
[bptrace-filenum=BPトレースの面数]
[bptrace-filesize=BPトレースのサイズ]
[bpexptrace-filenum=ビジネスプロセス基盤の例外ログ面数]
[bpexptrace-filesize=ビジネスプロセス基盤の例外ログファイルサイズ]
[cscexptrace-filenum=メッセージング基盤の例外ログ面数]
[cscexptrace-filesize=メッセージング基盤の例外ログファイルサイズ]
[kafka-protocoltrace-enabled={ON | OFF}]
[kafka-protocoltrace-level={ERROR | WARN | INFO | DEBUG | TRACE}]
[kafka-protocoltrace-filenum=Kafkaプロトコルトレース面数]
[kafka-protocoltrace-filesize=Kafkaプロトコルトレースファイルサイズ]
```

[grpc-transporttrace-enabled={ON | OFF}]
 [grpc-transporttrace-level={SEVERE | WARNING | INFO | CONFIG | FINE | FINER | FINEST}]
 [grpc-transporttrace-filenum=gRPC通信ログの最大面数]
 [grpc-transporttrace-filesize=gRPC通信ログの1面当たりの最大サイズ]

[request-ejb.instance.minimum=標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最小数]
 [request-ejb.instance.maximum=標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最大数]
 [request-ejb.ctm={true | false}]
 [request-ejb.parallel.count=CTMがアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数]
 [request-ejb.optional.name=標準の同期受付 (SessionBean) の別名]
 [request-soap.instance.minimum=標準の同期受付 (Webサービス・SOAP1.1) の最小同時実行数]
 [request-soap.instance.maximum=標準の同期受付 (Webサービス・SOAP1.1) の最大同時実行数]
 [request-soap.exclusive.threads=標準の同期受付 (Webサービス・SOAP1.1) の占有スレッド数]
 [request-soap.queue-size=標準の同期受付 (Webサービス・SOAP1.1) の実行待ちキューのサイズ]
 [request-soap1_2.instance.minimum=標準の同期受付 (Webサービス・SOAP1.2) の最小同時実行数]
 [request-soap1_2.instance.maximum=標準の同期受付 (Webサービス・SOAP1.2) の最大同時実行数]
 [request-soap1_2.exclusive.threads=標準の同期受付 (Webサービス・SOAP1.2) の占有スレッド数]
 [request-soap1_2.queue-size=標準の同期受付 (Webサービス・SOAP1.2) の実行待ちキューのサイズ]

[request-jms.instance.maximum=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数]
 [request-jms.rollback-count=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) ロールバック警告メッセージ出力回数]

[receptionstop-monitor-timer=受付キュー監視タイムアウト時間]
 [csc-receptionstop-timeout=受付終了待ち通信タイムアウト時間]

[soapfault-targetnamespace-filepath=SOAP Fault動作定義ファイルの絶対パス]
 [soapfault-handling-mode={DETAIL | FAULTCODE}]
 [oa-adapter-character-code={SJIS | MS932}]

[formatdef-maxcache-num=フォーマット定義をキャッシュできる数]
 [transformdef-maxcache-num=サーバ単位にデータ変換定義をキャッシュできる数]
 [xmltelegram-maxcache-num=XML電文をキャッシュできる数]
 [telegram-validation={ON | OFF}]
 [xmltelegram-namespace-complement={ON | OFF}]
 [telegram-undefined-character-code={ERROR | REPLACE}]
 [telegram-notfound-soapheader={ERROR | IGNORE}]
 [validation-activity={ON | OFF}]
 [transform-binary-error-check={ON | OFF}]
 [code-table-root-path=コード変換テーブル格納パスのルートパスの絶対パス]

[syserr-to-fault-convert={ON | OFF}]
 [syserr-to-fault-convert-all-activity={ON | OFF}]
 [validate-fault-compatible={ON | OFF}]
 [bp-reply-after-min-thread-pool-size=応答アクティビティ後のアクティビティを実行するために使用するスレッドの最小数]
 [bp-reply-after-max-thread-pool-size=応答アクティビティ後のアクティビティを実行するために使用するスレッドの最大数]
 [bp-reply-after-thread-pool-keep-alive=応答アクティビティ後のアクティビティを実行するために使用するスレッドの保持時間]
 [service-emulate.enable={true | false}]
 [service-emulate-def-filepath=エミュレート設定情報定義ファイルの絶対パス]
 [bp-log-activity-definition-filepath=ログ出力アクティビティ定義ファイルの絶対パス]

[j2ee-stopapp-timeout=J2EEアプリケーション停止監視時間]
 [startcsc-timeout=J2EEサーバ起動監視時間]
 [stopcsc-timeout=J2EEサーバ停止監視時間]

[csc-command-timeout=コマンドタイムアウト時間]

[csc-precache-timeout=事前キャッシュ処理のためのビジネスプロセスへのEJB通信のタイムアウト時間]

[cookie-parsing={ON | OFF}]

[work-folder=作業フォルダルートへの絶対パス]

[common-folder-<共通フォルダ定義名>=共通フォルダへの絶対パス]

[definition-file-base-path=実行環境の独自定義ファイルの格納先ディレクトリの絶対パス]

[dba-separate-transaction={true | false}]

[common-uoc-prop-path=コンポーネント共通UOC用プロパティファイル格納フォルダ]

[short-processid-servername=プロセスインスタンスの識別子で使用するHCSCサーバ名の識別子]

[short-processid={ON | OFF}]

[xml-pooled-instance-minimum=XML処理に使用するクラスのインスタンスプールの最小数]

[xml-pooled-instance-maximum=XML処理に使用するクラスのインスタンスプールの最大数]

[request-id-separate-key={slash | atsign | period}]

[fileevent-reception.monitored-file.enabled={true | false}]

[fileevent-reception.monitored-folder=監視フォルダへの絶対パス]

[fileevent-reception.monitor-interval=ファイル監視の間隔]

[fileevent-reception.monitor-starting.delay=ファイル監視の開始待ち時間]

(2) 機能

セットアップ後の HCSC サーバの定義情報を HCSC-Manager から設定します。

(3) ファイルの格納先

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%cscsvconfig.properties

(4) 設定できるプロパティ

(a) ログトレース

methodtrace-filepath=メソッドトレース・例外ログ出力先パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<J2EE サーバのログ出力先ディレクトリ>%csc%maintenance>>

メッセージング基盤およびビジネスプロセス基盤の、メソッドトレースと例外ログの出力先パスを絶対パスで指定します。

ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合は、省略値が使用されます。省略値はサービスプラットフォームの設定値に依存します。

methodtrace-filenumber=メソッドトレース面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

メソッドトレースの最大面数を指定します。

methodtrace-filesize=メソッドトレースファイルサイズ ~<数字>
((4096-2147483647))<<2097152>>

メソッドトレースファイルの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

methodtrace-level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>

メソッドトレースの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
入力ファイルおよび出力ファイルの情報 (ファイルパス, ファイルの形式, ファイルサイズ, レコード数) ※1	○※1	○※1	○※1	○※1	○※1
標準受付メソッドの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値) ※2	×※2	○※2	○※2	○※2	○※2
外部 (BP など) のインターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	×	○	○	○
コンポーネント内インターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	×	×	○	○
デバッグ情報 (処理の分岐などの情報)	×	×	×	×	○

(凡例)

- : 出力されます。
- × : 出力されません。

注※1

ファイル変換オペレーションの場合だけ出力します。

注※2

DB アダプタの場合は該当しません。

requesttrace={ON | OFF} ~<<ON>>

リクエストトレースを採取するかどうかを指定します。

- ON
採取します。
- OFF
採取しません。

requesttrace-filepath=リクエストトレース出力先パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白>
<<<J2EE サーバのログ出力先ディレクトリ>%csc>>

リクエストトレースの出力先パスを絶対パスで指定します。requesttrace プロパティで ON を設定した場合だけ有効になります。

ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合は、省略値が使用されます。省略値はサービスプラットフォームの設定値に依存します。

requesttrace-filenum=リクエストトレース面数 ~<数字>((1-16))<<4>>

リクエストトレースの最大面数を指定します。requesttrace プロパティで ON を設定した場合だけ有効になります。

requesttrace-filesize=リクエストトレースファイルサイズ ~<数字>
((4096-2147483647))<<2097152>>

リクエストトレースファイルの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。requesttrace プロパティで ON を設定した場合だけ有効になります。

telegramtrace={ON | OFF} ~<<OFF>>

ユーザ電文トレースを採取するかどうかを指定します。デバッグ情報を出力する場合は ON を指定してください。

- ON
採取します。
- OFF
採取しません。

telegramtrace-filepath=ユーザ電文トレース出力先パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<J2EE サーバのログ出力先ディレクトリ>¥csc>>

ユーザ電文トレースの出力先パスを絶対パスで指定します。telegramtrace プロパティで ON を設定した場合だけ有効になります。

ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合は、省略値が使用されます。省略値はサービスプラットフォームの設定値に依存します。

telegramtrace-filenum=ユーザ電文トレース面数 ~<数字>((1-16))<<4>>

ユーザ電文トレースの最大面数を指定します。telegramtrace プロパティで ON を設定した場合だけ有効になります。

telegramtrace-filesize=ユーザ電文トレースファイルサイズ ~<数字>
((4096-2147483647))<<2097152>>

ユーザ電文トレースファイルの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。telegramtrace プロパティで ON を設定した場合だけ有効になります。

telegramtrace-trigger={NORMAL | SYSERR | FAULT | DTERR} ~<<NORMAL>>

ユーザ電文トレースの出力契機を指定します。telegramtrace プロパティで ON を設定した場合だけ有効になります。

- NORMAL

正常処理時に出力。NORMAL を指定する場合は、HCSC サーバの処理性能への影響を考慮して、テスト環境やデバッグ環境で指定してください。

- SYSERR

システム例外検出時に出力

- FAULT

フォルト検出時に出力

- DTERR

バイナリデータの変換処理でエラーが発生した場合にデバッグ情報を出力

NORMAL, SYSERR, FAULT の出力契機と、出力される電文との組み合わせは次のとおりです。

出力契機	タイミング	電文の種類		
		要求電文	応答電文	フォルト電文
NORMAL	正常処理時	○	○	×
	システム例外検出時	×	×	×
	フォルト検出時 (catch なし)	×	×	×
	フォルト検出時 (catch あり)	×	×	×
SYSERR	正常処理時	×	×	×
	システム例外検出時	○	×	×
	フォルト検出時 (catch なし)	○	×	×
	フォルト検出時 (catch あり)	×	×	×
FAULT	正常処理時	×	×	×
	システム例外検出時	×	×	×
	フォルト検出時 (catch なし)	○	×	○
	フォルト検出時 (catch あり)	○	×	○

(凡例)

- ：出力されます。
- ×

DTERR の出力契機と、出力される情報との組み合わせは次のとおりです。

出力契機	タイミング	出力される情報
DTERR	バイナリデータの読込処理（バイナリ→DOMの変換）時	エラー発生時までに処理できた電文（バイナリ、DOM）の情報
	バイナリデータの生成処理（DOM→バイナリの変換）時	エラー発生時までに処理できた電文（DOM）の情報

設定値はコンマ区切りで複数指定できます。複数の契機を指定した場合も、同じ情報は繰り返し出力されません。例えば、正常処理時に要求電文が出力済みであった場合、システム例外時またはフォルト検出時には出力されません。

`telegramtrace-component-type-filepath`=ユーザ電文トレースのコンポーネント種別設定ファイルのパス ～<文字列（2バイト文字含む）および空白>

ユーザ電文トレースに特定のコンポーネント種別の情報だけを出力したい場合、コンポーネント種別が記述されたコンポーネント種別設定ファイルを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。存在しないファイルを指定した場合は、エラーになります。

`telegramtrace` プロパティで ON, `telegramtrace-trigger` プロパティで NORMAL を設定した場合だけ有効になります。

コンポーネント種別設定ファイルの定義方法については、「[6.5.9 コンポーネント種別設定ファイル](#)」を参照してください。

なお、正常処理時のユーザ電文トレースの出力対象とする HCSC コンポーネントは、次の2とおりの方法で指定できます。同じ HCSC コンポーネントに対して、コンポーネント ID 設定ファイルとコンポーネント種別設定ファイルの両方で設定した場合、コンポーネント ID 設定ファイルの設定が適用されます。

- コンポーネント種別で指定（`telegramtrace-component-type-filepath` プロパティ）
- HCSC コンポーネントの ID で指定（`telegramtrace-component-id-filepath` プロパティ）

HCSC コンポーネントを指定したユーザ電文トレースの出力内容については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「[7.4.4 ユーザ電文トレース](#)」を参照してください。

`telegramtrace-component-id-filepath`=ユーザ電文トレースのコンポーネント ID 設定ファイルのパス ～<文字列（2バイト文字含む）および空白>

ユーザ電文トレースに特定の HCSC コンポーネントの情報だけを出力したい場合、HCSC コンポーネントの ID と出力可否を記述したコンポーネント ID 設定ファイルを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。存在しないファイルを指定した場合は、エラーになります。

`telegramtrace` プロパティで ON, `telegramtrace-trigger` プロパティで NORMAL を設定した場合だけ有効になります。

コンポーネント ID 設定ファイルの定義方法については、「[6.5.8 コンポーネント ID 設定ファイル](#)」を参照してください。

なお、正常処理時のユーザ電文トレースの出力対象とする HCSC コンポーネントは、次の 2 とおりの方法で指定できます。同じ HCSC コンポーネントに対して、コンポーネント ID 設定ファイルとコンポーネント種別設定ファイルの両方で設定した場合、コンポーネント ID 設定ファイルの設定が適用されます。

- コンポーネント種別で指定 (telegramtrace-component-type-filepath プロパティ)
- HCSC コンポーネントの ID で指定 (telegramtrace-component-id-filepath プロパティ)

HCSC コンポーネントを指定したユーザ電文トレースの出力内容については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.4.4 ユーザ電文トレース」を参照してください。

`telegramtrace-format={FIXED | READABLE} ~<<FIXED>>`

ユーザ電文トレースの出力形式を指定します。telegramtrace プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

- **FIXED**

16 進数形式データと ASCII 形式データを同じ行に出力します。

文字は次の基準で出力します。

- 0x20~0x7E の範囲にある文字は、ASCII 文字として出力します。
- 0x00~0x1F, 0x7F~0xFF の範囲にある文字は、ピリオド (.) に変換して出力します。

- **READABLE**

16 進数形式データと UTF-8 形式データはそれぞれ別の行に出力します。

文字は次の基準で出力します。

- 0x20~0x7E の範囲にある文字は、ASCII 文字として出力します。
- 次の範囲にある文字は、ピリオド (.) に変換して出力します。
0x00~0x08
0x0B~0x0C
0x0E~0x1F
0x7F
- 0x09 の場合は、水平タブを出力します。
- 改行コード (0x0a または 0x0d) は、改行の位置やデータの種類に関係なく、出力されません。
- 0xFE~0xFF の範囲にある文字は、クエスチョンマーク (?) を出力します。

- 存在するマルチバイト文字が記述されている場合は、マルチバイト文字として出力します。

マルチバイト文字の区分と文字コードの範囲を次の表に示します。この範囲内で、存在するマルチバイト文字が記述されている場合に出力されます。出力するデータの並びが文字セットにとって不当な場合や、出力するデータの並びが正当でも有効な文字に対応付けできない場合は、クエスチョンマーク (?) を出力します。

表 6-3 UTF-8 のマルチバイト文字の文字コードの範囲

区分	文字コードの範囲 (16 進数)
2 バイト文字の開始バイト	0xC0~0xDF
3 バイト文字の開始バイト	0xE0~0xEF
4 バイト文字の開始バイト	0xF0~0xF7
5 バイト文字の開始バイト	0xF8~0xFB
6 バイト文字の開始バイト	0xFC~0xFD
マルチバイト文字の 2 バイト目以降	0x80~0xBF

なお、対応しない文字コードで記述された電文やバイナリデータも、範囲内に該当するデータがあれば、UTF-8 のマルチバイト文字で出力されます。

`bpacttrace={ON | OFF} ~<<OFF>>`

ビジネスプロセスのアクティビティトレースを採取するかどうかを指定します。アクティビティトレースについては、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.4.5 アクティビティトレース」を参照してください。

- ON
採取します。
- OFF
採取しません。

`bpacttrace-filenum=ビジネスプロセスのアクティビティトレース面数 ~<数字>((1-16))<<4>>`

ビジネスプロセスのアクティビティトレースの最大面数を指定します。bpacttrace プロパティで ON を設定した場合だけ有効になります。

`bpacttrace-filesize=ビジネスプロセスのアクティビティトレースファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>`

ビジネスプロセスのアクティビティトレースファイルの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。bpacttrace に ON を設定した場合だけ有効になります。

`bpacttrace-extend-item={NONE | PROCESSINSTANCEID} ~<<NONE>>`

ビジネスプロセスのアクティビティトレースに対し、出力項目を追加するか指定します。bpacttrace に ON を設定した場合だけ有効になります。

- NONE
アクティビティトレースへ追加で出力する項目はなし。
- PROCESSINSTANCEID

アクティビティトレースにプロセスインスタンスの識別子を出力する。

応答アクティビティのあとにアクティビティを実行した場合、応答アクティビティの前後でスレッド ID が異なりますが、プロセスインスタンスの識別子を出力することでリクエストを特定できます。

bptrace-level={0 | 10 | 20 | 30} ~<<10>>

ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの出力レベルを指定します。出力レベルと出力内容を次の表に示します。

出力レベル	出力内容
0	エラー情報
10	エラー情報, 他プログラム*との入出力/データ 主要な関数の入出力/データ ビジネスプロセスのデバッグ実行機能が実行する通信の開始/終了, デバッグ処理の開始/終了
20	エラー情報, 他プログラム*との入出力/データ 関数の入出力/データ
30	エラー情報, 他プログラム*との入出力情報 関数の入出力/データ 主要な個所のポイント情報

注※

メッセージング基盤, データ変換基盤も含まれます。

bptrace-filenum=BP トレースの面数 ~<数字>((1-16))<<16>>

ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースの面数を指定します。

bptrace-filesize=BP トレースのサイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>

ビジネスプロセス基盤のメソッドトレースのサイズをバイト単位で指定します。

bpexptrace-filenum=ビジネスプロセス基盤の例外ログ面数 ~<数字>((1-16))<<16>>

ビジネスプロセス基盤の例外ログの最大面数を指定します。

bpexptrace-filesize=ビジネスプロセス基盤の例外ログファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>

ビジネスプロセス基盤の例外ログファイルの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

cscexptrace-filenum=メッセージング基盤の例外ログ面数 ~<数字>((1-16))<<16>>

メッセージング基盤の例外ログの最大面数を指定します。

cscexptrace-filesize=メッセージング基盤の例外ログファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>

メッセージング基盤の例外ログファイルの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

`kafka-protocoltrace-enabled={ON | OFF} ~<<OFF>>`

Kafka プロトコルトレースを採取するかどうかを指定します。

- ON
プロトコルトレースを採取します。
- OFF
プロトコルトレースを採取しません。

Kafka プロトコルトレースを採取する場合は ON を指定してください。Kafka プロトコルトレースは、Kafka インバウンドアダプタと Kafka アダプタで共通して使用されます。

Kafka プロトコルトレースについては、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.7.20(6) Kafka プロトコルトレース (Kafka アダプタ・Kafka インバウンドアダプタ共通)」を参照してください。

`kafka-protocoltrace-level={ERROR | WARN | INFO | DEBUG | TRACE} ~<<ERROR>>`

Kafka プロトコルトレースの出力レベルを指定します。

出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル				
	ERROR	WARN	INFO	DEBUG	TRACE
エラーレベルのログ	○	○	○	○	○
警告レベルのログ	×	○	○	○	○
情報レベルのログ	×	×	○	○	○
デバッグレベルのログ	×	×	×	○	○
詳細なログ	×	×	×	×	○

(凡例)

- ：出力されます。
- ×：出力されません。

`kafka-protocoltrace-filename=Kafka プロトコルトレース面数 ~<数字>((1-16))<<4>>`

Kafka プロトコルトレースの出力ファイル面数を指定します。kafka-protocoltrace-enabled に ON を設定した場合だけ有効になります。

`kafka-protocoltrace-filesize=Kafka プロトコルトレースファイルサイズ ~<数字>((1-2048))<<10>>`

Kafka プロトコルトレースの出力ファイルサイズをメガバイト単位で指定します。kafka-protocoltrace-enabled に ON を設定した場合だけ有効になります。

grpc-transporttrace-enabled={ON | OFF} ~<<OFF>>

gRPC 通信ログ機能 (gRPC OSS ライブラリが出力するログメッセージを採取する機能) を有効にするかどうかを指定します。

- ON
有効にします。
- OFF
無効にします。

grpc-transporttrace-level={SEVERE | WARNING | INFO | CONFIG | FINE | FINER | FINEST} ~<<FINEST>>

gRPC 通信ログの出力レベルを指定します。

出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル						
	SEVERE	WARNING	INFO	CONFIG	FINE	FINER	FINEST
致命的な処理の失敗が発生した旨を示すメッセージ	○	○	○	○	○	○	○
警告レベルのメッセージ	×	○	○	○	○	○	○
情報メッセージ	×	×	○	○	○	○	○
静的な構成に関するメッセージ	×	×	×	○	○	○	○
トレース情報を提供するメッセージ	×	×	×	×	○	○	○
詳細なトレース情報を提供するメッセージ	×	×	×	×	×	○	○
非常に詳細なトレース情報を提供するメッセージ	×	×	×	×	×	×	○

(凡例)

- ：出力されます。
- ×

例えば、INFO を指定した場合、致命的な処理の失敗が発生した旨を示すメッセージ、警告レベルのメッセージ、情報メッセージが出力されます。

`grpc-transporttrace-filenum=gRPC 通信ログの最大面数 ~<数字>((1-16))<<4>>`

gRPC 通信ログの最大面数を指定します。

`grpc-transporttrace-enabled` に ON を設定した場合だけ有効です。

`grpc-transporttrace-filesize=gRPC 通信ログの 1 面当たりの最大サイズ ~<数字>((1-2147483647))<<10485760>>`

gRPC 通信ログの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

`grpc-transporttrace-enabled` に ON を設定した場合だけ有効です。

(b) 標準受付関連

`request-ejb.instance.minimum=標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最小数 ~<数字>((0, または 1-request-ejb.instance.maximum プロパティでの設定値))<<request-ejb.instance.maximum プロパティでの設定値>>`

プール内の標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最小数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `request-ejb` プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

`request-ejb.instance.maximum=標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最大数 ~<数字>((1-1024))<<10>>`

プール内の標準の同期受付 (SessionBean) のインスタンス最大数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `request-ejb` プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

CTM を使用している場合で CTM の同時実行数を動的に変更するときは、127 以上を指定してください。

`request-ejb.ctm={true | false} ~<<false>>`

CTM 連携をするかどうかを指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `request-ejb` プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

- true
CTM 連携をします。
- false
CTM 連携をしません。

`request-ejb.parallel.count=CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数 ~<数字>((1-127))<<1>>`

CTM がアプリケーションを呼び出すために用意するスレッド数を指定します。request-ejb.ctm プロパティで true を指定している場合だけ有効になります。なお、request-ejb.instance.maximum プロパティで指定した値以下の値を指定してください。

request-ejb.optional.name=標準の同期受付 (SessionBean) の別名 ~<英数字, アンダーバー (_), ピリオド (.), およびスラッシュ (/) >((1≦文字列長≦255))

標準の同期受付 (SessionBean) の別名を指定します。標準受付を利用する場合はすべての HCSC サーバで同じ別名を設定してください。

このプロパティは、JavaVM のシステムプロパティで ejbserver.cui.optionalname.enabled が true に設定されている場合だけ有効になります。ejbserver.cui.optionalname.enabled については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス 定義編(サーバ定義)」の「5.2.3 usrconf.properties (サーバ管理コマンド用システムプロパティファイル)」を参照してください。

なお、次の名前を指定した場合、リクエスト受付の起動に失敗します。

- 次の値と重複した名前 (起動状態のもの)
 - サービスアダプタのサービス ID
 - ビジネスプロセスのサービス ID
 - ユーザ定義受付の受付 ID
 - そのほか、J2EE アプリケーションの optional-name の指定値など
- "HITACHI_EJB"で始まる名前
- 名前の先頭または末尾に、スラッシュ (/) またはピリオド (.) を指定した名前
- スラッシュ (/) だけ、またはピリオド (.) だけの名前
- スラッシュ (/) が連続している名前
- スラッシュ (/) およびピリオド (.) が連続している名前

また、文字列の前後に空白または改行がある場合は、取り除かれて設定されます。文字列の途中に空白、改行がある場合はエラーになります。

request-soap.instance.minimum=標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.1) の最小同時実行数 ~<数字>((0, または 1-request-soap.instance.maximum プロパティでの設定値))<<request-soap.instance.maximum プロパティでの設定値>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.1) の最小同時実行数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの request-soap プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

request-soap.instance.maximum=標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.1) の最大同時実行数 ~<数字>((1-1024))<<10>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.1) の最大同時実行数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの request-soap プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

`request-soap.exclusive.threads=標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.1) の占有スレッド数` ~<数字>((0-1024))<<0>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.1) の占有スレッド数を指定します。最大同時実行数 (`request-soap.instance.maximum`) を超えない範囲で値を指定してください。0 を指定した場合、スレッドは占有されません。

なお、この指定値は WAR の属性 `thread-control-exclusive-threads` に設定されます。このため、Web コンテナ全体の最大同時実行スレッド数や最大接続数などの値を考慮して指定する必要があります。

`request-soap.queue-size=標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.1) の実行待ちキューのサイズ` ~<数字>((0-2147483647))<<8192>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.1) の実行待ちキューのサイズを指定します。

`request-soap1_2.instance.minimum=標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.2) の最小同時実行数` ~<数字>((0, または 1-request-soap1_2.instance.maximum プロパティでの設定値))<<request-soap1_2.instance.maximum プロパティでの設定値>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.2) の最小同時実行数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `request-soap` プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

`request-soap1_2.instance.maximum=標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.2) の最大同時実行数` ~<数字>((1-1024))<<10>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.2) の最大同時実行数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの `request-soap` プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

`request-soap1_2.exclusive.threads=標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.2) の占有スレッド数` ~<数字>((0-1024))<<0>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.2) の占有スレッド数を指定します。最大同時実行数 (`request-soap1_2.instance.maximum`) を超えない範囲で値を指定してください。0 を指定した場合、スレッドは占有されません。

なお、この指定値は WAR の属性 `thread-control-exclusive-threads` に設定されます。このため、Web コンテナ全体の最大同時実行スレッド数や最大接続数などの値を考慮して指定する必要があります。

`request-soap1_2.queue-size=標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.2) の実行待ちキューのサイズ` ~<数字>((0-2147483647))<<8192>>

プール内の標準の同期受付 (Web サービス・SOAP1.2) の実行待ちキューのサイズを指定します。

`request-jms.instance.maximum=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数` ~<数字>((1-1024))<<10>>

プール内の標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) のインスタンス最大数を指定します。HCSC サーバセットアップ定義ファイルの request-jms プロパティで ON を指定している場合だけ有効になります。

request-jms.rollback-count=標準の非同期受付 (MDB (WS-R)) ロールバック警告メッセージ出力回数 ~<数字>((1-2147483647))<<0>>

MDB (WS-R) 受付で、キューから同一メッセージの抜き出しとロールバックが指定した回数以上実行された場合に、警告メッセージ (KDEC00049-W) を出力します。0 を指定した場合は、警告メッセージを出力しません。

receptionstop-monitor-timer=受付キュー監視タイムアウト時間 ~<数字>((0-600))<<0>>

非同期標準受付 (MDB (WS-R), MDB (DB キュー)) のメッセージ処理のタイムアウト時間を秒単位で指定します。

キューの最大メッセージ数とメッセージ 1 件当たりの処理時間から、キューの中に仕掛かり中のメッセージが残る最大時間を算出して、それより大きな秒数を指定してください。0 以外を指定する場合は、csc-receptionstop-timeout プロパティにも値を指定する必要があります。

なお、次のどちらかに該当する場合は、デフォルト値 (タイムアウトしない) のままでかまいません。

- 非同期標準受付 (MDB (WS-R), MDB (DB キュー)) を利用しない場合
- 計画停止を実行しない場合

0 を指定した場合はタイムアウトしません。なお、Reliable Messaging にデッドメッセージキューを設定しない場合、ロールバックによって無限ループになるおそれがあるため、0 は指定しないでください。

csc-receptionstop-timeout=受付終了待ち通信タイムアウト時間 ~<数字>((0-86400))<<csc-command-timeout プロパティの設定値>>

非同期標準受付 (MDB (WS-R), MDB (DB キュー)) の通信処理のタイムアウト時間を秒単位で指定します。receptionstop-monitor-timer プロパティの設定値より長いタイムアウト時間を指定してください。

なお、次のどちらかに該当する場合は、デフォルト値 (csc-command-timeout プロパティの設定値) のままでかまいません。

- 非同期標準受付 (MDB (WS-R), MDB (DB キュー)) を利用しない場合
- 計画停止を実行しない場合

0 を指定した場合はタイムアウトしません。

(c) サービスアダプタ関連

soapfault-targetnamespace-filepath=SOAP Fault 動作定義ファイルの絶対パス~<文字列>

SOAP Fault 動作定義ファイルを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。このプロパティは、SOAP アダプタで Web サービスからの SOAP Fault をすべてフォルトとして扱う場合に指定します。

SOAP Fault 動作定義ファイルの詳細については、「6.6.1 SOAP Fault 動作定義ファイル」を参照してください。

`soapfault-handling-mode={DETAIL | FAULTCODE} ~<<FAULTCODE>>`

SOAP アダプタで Web サービスからの SOAP Fault をフォルトとして扱うかどうか判別する処理の動作モードを指定します。このプロパティには「DETAIL」を指定することを推奨します。09-70 以前との互換性を重視する場合は、「FAULTCODE」を指定してください。

- **DETAIL**

SOAP1.1 の SOAP Fault の detail 要素の直下の子要素、または SOAP1.2 の SOAP Fault の Detail 要素の直下の子要素によって、フォルトとして扱うかどうか判別します。

- **FAULTCODE**

SOAP1.1 の SOAP Fault の faultcode 要素の値によって、フォルトとして扱うかどうか判別します。SOAP1.2 の SOAP Fault はフォルトとして扱いません。

`oa-adapter-character-code={SJIS | MS932} ~<<SJIS>>`

Object Access アダプタがサービス部品と送受信する電文の文字コードを指定するプロパティです。

すべての Object Access アダプタで、指定した文字コードが使用されます。

(d) データ変換関連

`formatdef-maxcache-num=フォーマット定義をキャッシュできる数 ~<数字>`
`((1-2147483647))<<2147483647>>`

フォーマット定義をキャッシュできる数の上限を指定します。この上限は、XML フォーマット定義とバイナリフォーマット定義とで別々に適用されます。

なお、HCSC サーバが使用するフォーマット定義は、次に示す数の総和です。any 型は対象外となります。

- それぞれのビジネスプロセスで定義している全メッセージ型変数の数
- それぞれのユーザ定義受付で定義している全要求電文フォーマットの数
- それぞれのユーザ定義受付で定義している全応答電文フォーマットの数
- それぞれのサービスアダプタで定義している全要求電文フォーマットの数
- それぞれのサービスアダプタで定義している全応答電文フォーマットの数

もし、この総和を超えた値をプロパティに指定しても、不必要なメモリが使用されることはありません。リポジトリ中の全フォーマット定義をキャッシュさせたい場合は、大きい値を設定してください。

transformdef-maxcache-num=サーバ単位にデータ変換定義をキャッシュできる数 ~<数字>
((1-2147483647))<<2147483647>>

データ変換定義をキャッシュできる数を指定します。データ変換定義が再利用されるためには、定義したデータ変換の数以上の数を指定します。

もし、定義したデータ変換の数以上の数をプロパティに指定しても、不必要なメモリが使用されることはありません。リポジトリ中の全データ変換定義をキャッシュさせたい場合は、大きい値を設定してください。

xmltelegram-maxcache-num=XML 電文をキャッシュできる数 ~<数字>
((0-2147483647))<<0>>

XML 電文オブジェクトをキャッシュできる数を指定します。キャッシュされた XML 電文オブジェクトが再利用されることによって、同じ形式の XML 電文の処理時間を短縮できます。XML 電文が再利用されるためには、次に示す値以上の数を指定します。

(サービスアダプタ・ビジネスプロセスのデータ変換設定数) + (ビジネスプロセスのパス操作設定数)

0 を指定した場合は、キャッシュされません。

なお、要素数の少ない XML 電文の場合、処理時間が遅くなることがあります。

telegram-validation={ON | OFF} ~<<OFF>>

指定した電文フォーマットに対して、送受信する電文が適切かどうかを検証します (データ検証機能)。

- ON
検証します。
- OFF
検証しません。

データ検証機能については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「6.2 データ検証機能」を参照してください。

xmltelegram-namespace-complement={ON | OFF} ~<<OFF>>

HCSC サーバ内を流れる XML 電文に対して、XML 電文内に存在する属性値に指定した名前空間接頭辞に対応する名前空間宣言を補完するかどうかを指定します。

- ON
名前空間接頭辞に対応する名前空間宣言を補完します。
- OFF
名前空間接頭辞に対応する名前空間宣言を補完しません。

HCSC サーバ内を流れるユーザ電文で、XML スキーマの属性値の型に QName 型を使用する場合は、ON を指定してください。ただし、ON を指定すると、OFF を指定した場合よりも電文サイズが大きくなるため注意してください。

詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「4.5 XML 電文内の属性値に指定した名前空間接頭辞の補完」を参照してください。

telegram-undefined-character-code={ERROR | REPLACE} ~<<ERROR>>

バイナリデータの文字コード変換処理で、未定義の文字コードが検出された場合の動作を指定します。

- ERROR

検出時にエラーとなり処理を終了します。

- REPLACE

未定義部分の文字コードを空白、または任意の文字コードに置換して処理を続けます。

空白はすべて全角に置換することも、シフト・エスケープ状態にあわせて全角・半角に置換することもできます。設定方法については、「1.3.1 フォーマットダイアログ」を参照してください。

telegram-notfound-soapheader={ERROR | IGNORE} ~<<IGNORE>>

ビジネスプロセスで定義したヘッダ割当変数に該当するデータが、送受信する電文に含まれない場合に、処理を継続するかどうかを指定します。

- ERROR

エラーメッセージを出力して処理を中断します。

- IGNORE

処理を続けます。

validation-activity={ON | OFF} ~<<ON>>

検証アクティビティでメッセージ型変数 (XML) を検証するかどうかを定義します。HCSC サーバ内すべてのビジネスプロセスの検証アクティビティが対象となります。

- ON

検証アクティビティに指定したメッセージ型変数 (XML) を検証します。

- OFF

検証アクティビティに指定したメッセージ型変数 (XML) を検証しません。

transform-binary-error-check={ON | OFF} ~<<ON>>

バイナリデータ変換時のエラーチェックの実施有無を定義します。データ変換アクティビティの延長で、生成したバイナリデータがバイナリフォーマット定義に沿っているかをチェックできます。

- ON

バイナリフォーマット定義に沿っているかのエラーチェックをします。データ変換でバイナリデータに変換する場合は ON を設定してください。

- OFF

バイナリフォーマット定義に沿っているかのエラーチェックをしません。

`code-table-root-path`=コード変換テーブル格納パスのルートパスの絶対パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥¥CSC¥¥userlib¥¥codetables>>

コード変換テーブル格納パスのルートパスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合は、HCSC サーバの起動に失敗します。

(e) ビジネスプロセス関連

`syserr-to-fault-convert`={ON | OFF} ~<<OFF>>

システム例外が発生した場合に汎用フォルトを発生させるかどうかを定義します。

次に示すアクティビティが対象です。`syserr-to-fault-convert-all-activity` プロパティとは対象となるアクティビティが異なりますが、出力する汎用フォルト電文の内容は同じです。

- データ変換アクティビティ
- 代入アクティビティ
- 分岐アクティビティ

汎用フォルト電文の出力内容については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.12.1 汎用フォルト電文を定義するスキーマファイル」を参照してください。

このプロパティは、`syserr-to-fault-convert-all-activity` プロパティと同時に指定してもエラーにはなりません。`syserr-to-fault-convert-all-activity` プロパティと指定が異なる場合は、ON を指定したプロパティが適用され汎用フォルトが発生します。

プロパティには次のどちらかを指定します。

- ON

システム例外をキャッチして汎用フォルトを発生させます。

- OFF

システム例外発生時に汎用フォルトを発生させません。

`syserr-to-fault-convert-all-activity`={ON | OFF} ~<<OFF>>

システム例外が発生した場合に汎用フォルトを発生させるかどうかを定義します。汎用フォルトが発生するすべてのアクティビティおよびコネクションが対象です。

対象となるアクティビティおよびコネクションを次に示します。syserr-to-fault-convert プロパティとは対象となるアクティビティが異なりますが、出力する汎用フォルト電文の内容は同じです。

- Java 呼出アクティビティ
- データ変換アクティビティ※
- 代入アクティビティ※
- フォルト送出アクティビティ
- 検証アクティビティ
- ログ出力アクティビティ
- 繰り返しアクティビティ
- 分岐アクティビティ※
- リンクコネクション

注※

syserr-to-fault-convert プロパティと指定が異なる場合は、ON を指定したプロパティが適用され汎用フォルトが発生します。

汎用フォルト電文の出力内容については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.12.1 汎用フォルト電文を定義するスキーマファイル」を参照してください。

このプロパティは、syserr-to-fault-convert プロパティと同時に指定してもエラーにはなりません。

プロパティには次のどちらかを指定します。

- ON
システム例外をキャッチして汎用フォルトを発生させます。
- OFF
システム例外発生時に汎用フォルトを発生させません。

`validate-fault-compatible={ON | OFF} ~<<ON>>`

検証フォルトで送られるフォルト電文のフォーマットを 09-00 以前まで使用していたフォーマットとすることが定義されます。

- ON
フォルト電文を 09-00 形式以前のフォーマットで送信します。
- OFF
プロセスインスタンス識別子やアクティビティ名を持つ、新しいフォーマットでフォルト電文を送信します。

`bp-reply-after-min-thread-pool-size`=応答アクティビティ後のアクティビティを実行するために使用するスレッドの最小数 ~<数字>((1-2147483647))<<16>>

応答アクティビティ後のアクティビティを実行するために使用するスレッドの、スレッドプール内で使用していないスレッドを保存する最小数を定義します。

定義内容は HCSC サーバ単位で有効となるため、HCSC サーバ内で応答後にアクティビティを定義したビジネスプロセスの同時実行数を考慮した値を設定してください。

`bp-reply-after-max-thread-pool-size` より大きい値を設定した場合は、`cscsvconfig` コマンド実行時にエラーとなります。

`bp-reply-after-max-thread-pool-size`=応答アクティビティ後のアクティビティを実行するために使用するスレッドの最大数 ~<数字>((1-2147483647))<<32>>

応答アクティビティ後のアクティビティを実行するために使用するスレッドの、スレッドプール内に生成できる最大数を定義します。

定義内容は HCSC サーバ単位で有効となるため、HCSC サーバ内で応答後にアクティビティを定義したビジネスプロセスの同時実行数を考慮した値を設定してください。

`bp-reply-after-thread-pool-keep-alive`=応答アクティビティ後のアクティビティを実行するために使用するスレッドの保持時間 ~<数字>((1-2147483647))<<60>>

応答アクティビティ後のアクティビティの実行で使用していないスレッド数が、`bp-reply-after-min-thread-pool-size` で指定した数を超過している場合、スレッドの終了までに保存しておく時間（単位：秒）を定義します。

定義内容は HCSC サーバ単位で有効となるため、HCSC サーバ内で応答後にアクティビティを定義したビジネスプロセスの同時実行数を考慮した値を設定してください。

`service-emulate.enable`=`{true | false}` ~<<false>>

サービスのエミュレーション機能を有効にするかどうかを指定します。

- `true`
サービスのエミュレーション機能を有効にします。
- `false`
サービスのエミュレーション機能を有効にしません。

`service-emulate-def-filepath`=エミュレート設定情報定義ファイルの絶対パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白>

実行環境でサービスのエミュレーション機能を実行 (`service-emulate.enable=true` を指定) する場合に、エミュレート設定情報定義ファイルのパスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用してください。

service-emulate.enable=true が指定されている場合にこのプロパティの指定を省略すると、cscsvconfig コマンド実行時にエラーになります。

エミュレート設定情報定義ファイルの定義方法については、「6.5.7 エミュレート設定情報定義ファイル」を参照してください。

bp-log-activity-definition-filepath=ログ出力アクティビティ定義ファイルの絶対パス ～<文字列 (2 バイト文字含む) および空白>

ログ出力アクティビティを使用する場合に、ログ出力アクティビティ定義ファイルのパスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用してください。

(f) J2EE 関連

j2ee-stopapp-timeout=J2EE アプリケーション停止監視時間 ～<数字>
((0-2147483647))<<60>>

リクエスト受付停止、ビジネスプロセスまたはサービスアダプタの停止コマンドで発行する J2EE アプリケーションが停止した際の監視時間を秒単位で指定します。リクエスト処理中の場合、指定された時間だけ待機します。

タイムアウト発生後、リクエスト受付、ビジネスプロセス、サービスアダプタを強制停止します。

startcsc-timeout=J2EE サーバ起動監視時間 ～<数字>((1-2147483647))<<180>>

HCSC サーバ起動コマンドで、J2EE サーバ起動を監視する監視値を秒単位で指定します。HCSC サーバ起動コマンドでタイムアウトが発生しても、J2EE サーバの起動処理は継続されます。

なお、09-50 以降でこのプロパティを設定しても無効になるため、設定は不要です。

stopcsc-timeout=J2EE サーバ停止監視時間 ～<数字>((1-2147483647))<<180>>

HCSC サーバ停止コマンドで、J2EE サーバ停止を監視する監視時間を秒単位で指定します。HCSC サーバ停止コマンドでタイムアウトが発生しても、J2EE サーバの停止処理は継続されます。

なお、09-50 以降でこのプロパティを設定しても無効になるため、設定は不要です。

(g) コマンドの通信のタイムアウト時間の監視

csc-command-timeout=コマンドタイムアウト時間 ～<数字>((0-86400))<<300>>

次に示す機能で、J2EE サーバのスローダウンや、J2EE サーバとデータベースの間で通信障害が発生した場合に、クライアント側に通知するためのタイムアウト時間を秒単位で指定します。

- csc で始まるコマンド
- 運用管理 GUI (Eclipse)
- 開発画面 GUI (Eclipse)

0を指定した場合は、タイムアウトしません。

csc-precache-timeout=事前キャッシュ処理のためのビジネスプロセスへのEJB通信のタイムアウト時間 ~<数字>((0-86400))<<0>>

各ビジネスプロセスでの事前キャッシュ処理のタイムアウト時間を秒単位で指定します。

0を指定した場合は、タイムアウトしません。

(h) Cookie情報の引き継ぎ

cookie-parsing={ON | OFF} ~<<OFF>>

Cookie情報を引き継ぐかどうかを指定します。

- ON
Cookie情報を暗黙的に引き継ぎます。
- OFF
Cookie情報を暗黙的に引き継ぎません。

(i) フォルダ関連

work-folder=作業フォルダルート¹の絶対パス ~<文字列(2バイト文字含む)および空白><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥CSC¥spool¥ftp¥work>>

作業フォルダルート¹を絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合は、HCSCサーバの起動に失敗します。

指定した作業フォルダの配下には、製品として153バイトのパスが必要です。任意の作業フォルダルート¹を指定する場合は、OSの最大パス長を超えないようにしてください。

common-folder-<共通フォルダ定義名>=共通フォルダの絶対パス ~<文字列(2バイト文字含む)および空白>((1≦文字列長≦64))<<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥CSC¥spool¥ftp¥com>>

共通フォルダの絶対パスを指定します。異なる共通フォルダ定義名を指定すると、同じディレクトリを指定できます。

<共通フォルダ定義名>

共通フォルダ定義名に指定できる値は、半角英数字とアンダーバー()です。

指定を省略した場合の共通フォルダ定義名は「default」になります。

共通フォルダの絶対パス

ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。存在しないディレクトリを指定した場合は、HCSCサーバの起動に失敗します。

なお、共通フォルダの使用時は、共通フォルダの配下に次に示す長さのパスが作成されます。これを考慮して、パス全体の長さが OS の最大パス長を超えないよう共通フォルダを指定してください。

ユーザ指定ファイル名の長さ+106バイト

なお、HTTP アダプタとメールアダプタの場合は、機能に応じて使用するパスの長さが異なります。機能ごとに必要なパス長を次に示します。

サービスアダプタの種類	使用する機能	パス全体の長さ※1
HTTP アダプタ	HTTP リクエストでファイルを送信する場合	以下を合計したバイト数 <ul style="list-style-type: none"> 共通フォルダルートのパスのバイト数 共通フォルダの配下のパスのバイト数 (106 バイト※2) 使用するファイル名のバイト数
	HTTP レスポンスでファイルをダウンロードする場合	以下を合計したバイト数 <ul style="list-style-type: none"> 共通フォルダルートのパスのバイト数 共通フォルダの配下のパスのバイト数 (156 バイト※2)
メールアダプタ	メール本文として使用するファイルを送信する場合	以下を合計したバイト数 <ul style="list-style-type: none"> 共通フォルダルートのパス 共通フォルダの配下のパスのバイト数 (106 バイト※2) 使用するファイル名のバイト数
	メールの添付ファイルを送信する場合	以下を合計したバイト数 <ul style="list-style-type: none"> 共通フォルダルートのパス 共通フォルダの配下のパスのバイト数 (106 バイト※2) 使用するファイル名のバイト数

注※1

サブフォルダを使用する場合は、サブフォルダの相対パス長も加算されます。

注※2

サブフォルダを使用する場合は、さらにパス長が 1 バイト加算されます。

`definition-file-base-path=実行環境の独自定義ファイルの格納先ディレクトリの絶対パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥¥CSC¥ ¥config¥¥services>>`

実行環境の独自定義ファイル設定機能を使用する場合に、独自定義ファイル格納ディレクトリを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。実行環境の独自定義ファイル設定機能については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「5.10.3 実行環境の独自定義ファイル設定機能を使用した独自定義ファイルの定義手順」を参照してください。

ネットワーク経由で他ホスト上のディレクトリを指定した場合は、動作を保証しません。該当するディレクトリを次に示します。

- Windows の場合：ネットワークドライブおよび UNC で参照できるディレクトリ
- UNIX の場合：NFS マウントで参照できるディレクトリ

(j) DB アダプタ関連

`dba-separate-transaction={true | false} ~<<false>>`

DB アダプタのトランザクションをビジネスプロセスとは別に開始するかどうかを指定します。

ビジネスプロセスとは別に DB アダプタのトランザクションを開始する場合、「true」を指定するか、SQL オペレーション定義ファイルの dba_separate_transaction 属性に「Y」を指定したうえで、DB アダプタのアプリケーション統合属性ファイルの trans-attribute 要素指定値を Required から RequiresNew に変更してください。

- true

ビジネスプロセスとは別に DB アダプタのトランザクションを開始します。

- false

ビジネスプロセスと同一のトランザクションを DB アダプタでも使用します。

(k) コンポーネント共通 UOC 関連

common-uoc-prop-path=コンポーネント共通 UOC 用プロパティファイル格納フォルダ ~<文字列 (2 バイト文字含む) >

コンポーネント共通 UOC 用プロパティファイルの格納フォルダを絶対パスで指定します。フォルダ区切りは「/」または「¥¥」を使用してください。なお、プロパティ名だけ指定して格納フォルダを指定しないと、HCSC サーバランタイム定義ファイルの読み込み時に例外が発生します。

コンポーネント共通 UOC 用プロパティファイルを指定すると、コンポーネント共通 UOC 機能が使用され、UOC クラスの呼び出しの前後で性能解析トレースが出力されます。

コンポーネント共通 UOC 用プロパティファイルの指定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 基本開発編」の「付録 G コンポーネント共通 UOC」を参照してください。また、コンポーネント共通 UOC 機能で出力される性能解析トレースについては、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「7.4.3 性能解析トレース」を参照してください。

(l) HCSC サーバ関連

short-processid-servername=プロセスインスタンスの識別子で使用する HCSC サーバ名の識別子 ~<半角英数字, アンダーバー (_) >((1-8 文字))<<HCSC サーバ名>>

プロセスインスタンスの識別子で使用する HCSC サーバ名の識別子を指定します。クラスタ内で一意となる識別子を設定してください。一意でない値を設定した場合は動作を保証しません。

このプロパティは、short-processid プロパティで ON を指定した場合だけ有効です。

short-processid={ON | OFF} ~<<OFF>>

プロセスインスタンスの識別子を短縮するかどうかを設定します。ローカルマシンに IPv6 アドレスを使用し、かつ J2EE サーバ名が 111 バイト以上である場合は、プロセスインスタンスの生成でエラーが発生する可能性があります。その場合は ON を指定してください。

- ON

プロセスインスタンスの識別子を短縮します。

- OFF

プロセスインスタンスの識別子を短縮しません。

(m) インスタンスのプール

xml-pooled-instance-minimum=XML 処理に使用するクラスのインスタンスプールの最小数 ~<数字>((0-2147483647))<<0>>

要求電文・応答電文の処理に使用するクラスのインスタンスをキャッシュする最小数を指定します。xml-pooled-instance-maximum プロパティの設定値以下の値を設定してください。xml-pooled-instance-maximum プロパティより大きい値を設定すると、cscsvconfig コマンドの実行時にエラーが発生します。

HCSC サーバの起動時には、このプロパティに指定された数のインスタンスを生成してプールに設定します。0 を指定すると、HCSC サーバの起動時にインスタンスはキャッシュされません。

usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル) の

csc.dt.pool.DocumentBuilder.initialSize プロパティが設定されている場合は、それと同じ値を設定してください。

xml-pooled-instance-maximum=XML 処理に使用するクラスのインスタンスプールの最大数 ~<数字>((0-2147483647))<<64>>

要求電文・応答電文の処理に使用するクラスのインスタンスをキャッシュする最大数を指定します。

usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル) の

csc.dt.pool.DocumentBuilder.maxSize プロパティが設定されている場合は、それと同じ値を設定してください。csc.dt.pool.DocumentBuilder.maxSize プロパティを設定していない場合は、HCSC サーバ内のすべてのリクエスト受付の、最大実行数の総和以上の値を指定してください。

0 を指定した場合はキャッシュされません。

設定した最大数を超えるリクエストが来た場合、リクエストの処理待ちが発生する場合があります。

(n) カスタム受付関連

request-id-separate-key={slash | atsign | period} ~<<slash>>

FTP 受付および HTTP 受付で生成するリクエスト ID の分割キーを指定します。

- slash

リクエスト ID の分割キーとして半角スラッシュ (/) が使用されます。

- atsign

リクエスト ID の分割キーとして半角アットマーク (@) が使用されます。

- period

リクエスト ID の分割キーとして半角ピリオド (.) が使用されます。

注意事項

リクエスト ID の分割キーを変更する際は、エラーまたは実行中状態のプロセスインスタンスが存在しない状態で変更してください。

この訂正内容は、Service Coordinator 09-51-01 以降で該当します。

`fileevent-reception.monitored-file.enabled={true | false} ~<<false>>`

ファイル監視の可否を指定します。

- true
ファイル監視機能を有効にします。ファイルイベント受付を使用する場合は、true を設定してください。
- false
ファイル監視機能を無効にします。

`fileevent-reception.monitored-folder=監視フォルダの絶対パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥¥CSC¥¥spool¥¥fileevent>>`

監視フォルダのパスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。共通フォルダと同じディレクトリは指定しないでください。

絶対パスで指定されていない場合や、存在しないディレクトリを設定した場合は、HCSC サーバの起動に失敗します。

取得対象ファイルを監視する場合はこのプロパティの指定は不要です。指定しても無効となります。

`fileevent-reception.monitor-interval=ファイル監視の間隔 ~<数字>((1-44640))<<10>>`

ファイル監視の間隔を分単位で指定します。

`fileevent-reception.monitor-starting.delay=ファイル監視の開始待ち時間 ~<数字>((1-44640))<<10>>`

HCSC サーバの起動の何分後にファイル監視を開始するかを指定します。

ファイル監視は、HCSC サーバの起動コマンドを実行した時点から、ここで指定した時間が経過したのちに開始されるようになります。

(5) 記述例

サンプルファイルを次に示します。

```
methodtrace-filepath=c:¥¥TMP
requesttrace-filepath=c:¥¥TMP
```

```
telegramtrace-filepath=c:¥¥TMP
methodtrace-filenum=8
requesttrace-filenum=4
telegramtrace-filenum=4
methodtrace-filesize=2097152
requesttrace-filesize=2097152
telegramtrace-filesize=2097152
telegramtrace-trigger=NORMAL
methodtrace-level=3
requesttrace=ON
telegramtrace=ON
bptrace-level=10
bptrace-filenum=16
bptrace-filesize=2097152
request-ejb.instance.minimum=10
request-ejb.instance.maximum=10
request-ejb.ctm=false
request-ejb.parallel.count=1
request-soap.instance.minimum=10
request-soap.instance.maximum=10
request-jms.instance.maximum=10
receptionstop-monitor-timer=0
```

(6) 使用方法

cscsvconfig コマンドの-propfile オプションの引数に HCSC サーバランタイム定義ファイルを指定します。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「3.1.4 HCSC サーバの定義情報を設定する」を参照してください。

(7) 注意事項

パスを指定する場合の注意事項を次に示します。

- 相対パス、親ディレクトリ表現（「..¥」, 「../」）、およびカレントディレクトリ表現（「.¥」, 「./」）を含むパスは指定しないでください。
- シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
- Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

6.5.7 エミュレート設定情報定義ファイル

(1) 形式

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE HCSCAutoEmulate SYSTEM "debug_auto_emulate_list_file_1_0.dtd">
<HCSCAutoEmulate>
<viewState>
<emulate condition="(条件式)" operation="(オペレーション名)" service="(サービス名)" type=
```

```
"(応答種別)" valid="(エミュレーションの実行有無)" xmlfile="(応答電文ファイルのパス)" />
<emulate condition="(条件式)" operation="(オペレーション名)" service="(サービス名)" type=
"(応答種別)" valid="(エミュレーションの実行有無)" xmlfile="(応答電文ファイルのパス)" />
:
</viewState>
</HCSCAutoEmulate>
```

(2) 機能

エミュレーション機能の設定情報を XML 形式で設定します。サービスのエミュレーション機能については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「4.13 サービスのエミュレーション機能の概要」を参照してください。

エミュレート設定情報定義ファイルは、リクエストごとに次に示すタイミングで読み込んで解析されます。

- ビジネスプロセス内で最初に定義されているサービス呼出アクティビティの実行時
- 応答アクティビティ後の最初に定義されているサービス呼出アクティビティの実行時
- 待機アクティビティ後に最初に定義されているサービス呼出アクティビティの実行時

また、プロセスインスタンスの再実行時には、再実行の範囲内で最初に定義されているサービス呼出アクティビティ実行時に読み込んで解析されます。

ファイル内の xmlfile 属性に設定した応答電文ファイルも、リクエストのたびに読み込まれます。そのため、エミュレート設定情報定義ファイルや応答電文ファイルの内容を変更すると、変更内容は次回のリクエストで反映されます。なお、リクエスト実行中にこれらのファイルの内容を変更した場合の動作は保証しません。

注意事項

- 開発環境のビジネスプロセスのデバッグ機能で応答電文をエミュレーションした場合、該当するサービス呼出アクティビティでは、エミュレート設定情報定義ファイルの設定は有効となりません。
- エミュレーション実行時はサービスアダプタを呼び出さないため、サービスアダプタで実行するサービスアダプタ固有の機能や、ビジネスプロセスのサービス呼出アクティビティの機能の一部は使用できません。

エミュレート設定情報定義ファイルは次の手順で作成し、実行環境に反映してください。

1. 次のテンプレートファイルを任意のディレクトリにコピーします。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%templates%service_emulate_info.aels
```

必ずテンプレートファイルを基に定義してください。それ以外の方法で作成した場合の動作は保証しません。

2. 要素の記述を編集して、拡張子「.aels」の任意のファイル名で保存します。

拡張子が「.aels」でない場合は、cscsvconfig コマンド（HCSC サーバランタイムの定義）実行時にエラーとなります。

(3) 設定できる要素

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
```

このファイルが XML ファイルであることを示す XML 宣言です。

```
<!DOCTYPE HCSCAutoEmulate SYSTEM "debug_auto_emulate_list_file_1_0.dtd">
```

DTD サブセットを示す要素型定義宣言です。

```
<HCSCAutoEmulate>
```

エミュレート設定情報定義のルート要素です。

```
<viewState>
```

エミュレート設定情報定義のルート要素です。

```
<emulate condition="(条件式)" operation="(オペレーション名)" service="(サービス名)" type="(応答種別)" valid="(エミュレーションの実行有無)" xmlfile="(応答電文ファイルのパス)"/>
```

エミュレート設定情報を定義します。emulate 要素は複数定義することもできます。

次の条件を満たす複数の emulate 要素が定義された場合、emulate 要素は出現順に有効となります。

- condition 属性に設定された条件式の評価結果が「真」
- service 属性と operation 属性の値が同じ
- valid 属性が true

emulate 要素の優先順位の詳細については、「[\(4\) エミュレーション時に使用する定義の優先順位](#)」を参照してください。

emulate 要素の指定内容を次に示します。

```
condition="(条件式)"
```

サービスをエミュレーションする条件式を string 型の XPath で入力します。

条件式は、要求電文の変数種別が「XML」または「non-XML」の場合だけ設定できます。「any」の場合は動作を保証しません。

条件式は、valid=true（エミュレーション機能が有効）が設定されている場合に評価されます。

条件式の指定に関する注意事項を次に示します。

- 条件式を使用しない場合は空文字列を指定してください。条件式を使用しない場合、条件式の評価結果は真とみなされます。

- 条件式には、bpws:getVariableProperty などの拡張関数や、変数名を直接指定して情報を取得する方法で XPath を指定しないでください。指定した場合の動作は保証しません。
- 条件式にエスケープ文字「< > & " '」を含める場合は、実体参照で指定してください。

operation="(オペレーション名)"

サービスアダプタのオペレーション名を string 型で指定します。

service="(サービス名)"

サービスアダプタのサービス名を string 型で指定します。

type="(応答種別)"

応答種別を次のどちらかで指定します。

- RESPONSE_NORMAL
通常応答の場合に指定します。
応答電文ファイルの内容を応答電文として返します。
- RESPONSE_FAULT
フォルト応答の場合に指定します。
応答電文ファイルの内容をフォルト電文として返します。

valid="(エミュレーションの実行有無)" ~<<false>>

エミュレーションの実行有無を次のどちらかで指定します。

- true
エミュレーションを実行します。
- false
エミュレーションを実行しないでサービスアダプタを呼び出します。

xmlfile="(応答電文ファイルのパス)"

エミュレーションする電文が記載された応答電文ファイルのパスを string 型の絶対パスで指定します。パスの区切り文字は、HCSC サーバが Windows 上にある場合は「¥」、UNIX 上にある場合は「/」を指定してください。

ファイルパスにエスケープ文字「< > & " '」を含める場合は、実体参照で指定してください。

応答電文に XML 形式のデータを指定する場合は、XML の文字コードが UTF-8 である必要があります。なお、応答電文ファイルに XSLT スタイルシート（ファイル拡張子「.xsl」）を指定すると、要求電文を XSLT スタイルシートで変換した結果を応答電文としてエミュレーションできます。このエミュレーションでの注意点を次に示します。

- 要求電文と応答電文の両方の変数種別が XML の場合だけ実行できます。両方の変数種別が XML でない場合、動作は保証しません。
- 変換元（要求電文）を複数指定することはできません。
- XSLT スタイルシートには、マッピング定義エディタから生成したデータ変換定義ファイルで、かつファイル拡張子が「.xsl」のファイルを指定する必要があります。それ以外のファイルを指定した場合の動作は保証しません。

(4) エミュレーション時に使用する定義の優先順位

エミュレーションで使用する定義の優先順位は、エミュレート設定情報定義ファイルの emulate 要素の出現順となります。

優先順位は、エミュレート設定情報定義ファイル内で次の条件を満たす emulate 要素同士で適用されます。

- service 属性と operation 属性が同一である
- valid 属性が true である

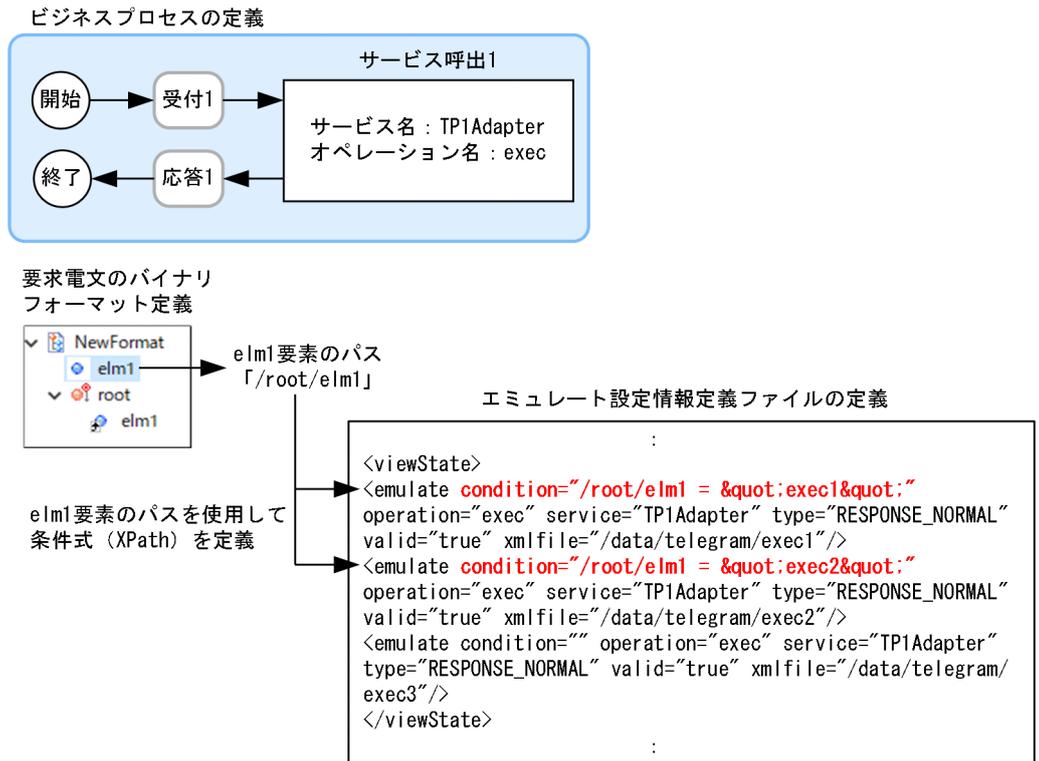
次の例では、1 番目の emulate 要素の valid 属性に false が設定されています。そのため、2 番目の emulate 要素の設定情報がエミュレーションの実行対象となります。

```
        :
<viewState>
<emulate condition="/root/elm1 = &quot;exec1&quot;;" operation="exec" service="TP1Adapter" ty
pe="RESPONSE_NORMAL" valid="false" xmlfile="/data/telegram/exec1"/>
<emulate condition="/root/elm1 = &quot;exec2&quot;;" operation="exec" service="TP1Adapter" ty
pe="RESPONSE_NORMAL" valid="true" xmlfile="/data/telegram/exec3"/>
<emulate condition="" operation="exec" service="TP1Adapter" type="RESPONSE_NORMAL" valid="tr
ue" xmlfile="/data/telegram/exec3"/>
</viewState>
        :
```

なお、この優先順位は、condition 属性に設定された条件式の評価結果が偽である emulate 要素には適用されません。そのため、条件式の評価結果に応じて、エミュレーションする応答電文を変えることができます。

次の例では、一部の emulate 要素の condition 属性に条件式を設定しています。条件式では、要求電文の elm1 要素の設定値に応じて、エミュレーションの実行対象となる応答電文が変わるよう定義しています。

図 6-1 エミュレート設定情報定義ファイルに条件式を設定する場合の定義例



条件式 (XPath) を定義するには、評価する要求電文の要素のパスが必要です。パスは、ビジネスプロセス定義画面の変数一覧から該当する変数を選択し、[表示] ボタンをクリックすることで取得できます。

図中の3つの emulate 要素は、service 属性と operation 属性の値が同じで、valid 属性が true です。そのため、condition 属性に設定された条件式の評価結果に応じて、有効となる emulate 要素が次のように変わります。

- 要求電文の値が「exec1」の場合
1 番目の emulate 要素が有効となります。
- 要求電文の値が「exec2」の場合
1 番目の emulate 要素の条件式の評価結果が「偽」であるため、2 番目の emulate 要素の条件式が評価されます。
2 番目の emulate 要素の条件式の評価結果が「真」であるため、2 番目の emulate 要素が有効となります。
- 要求電文の値が「exec3」の場合
1 番目・2 番目の emulate 要素の条件式の評価結果が「偽」であるため、3 番目に出現した emulate 要素が有効となります。

(5) 記述例

エミュレート設定情報定義ファイルの記述例を次に示します。この例では、TP1 アダプタの exec オペレーションをエミュレーションしています。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE HCSCAutoEmulate SYSTEM "debug_auto_emulate_list_file_1_0.dtd">
<HCSCAutoEmulate>
<viewState>
<emulate condition="" operation="exec" service="TP1Adapter" type="RESPONSE_NORMAL" valid="true" xmlfile="/data/telegram/exec1"/>
</viewState>
</HCSCAutoEmulate>
```

この例では次の値を設定しています。

属性名	設定値
condition	条件を定義しないことを示す空文字列 ("") を設定しています。
operation	サービス呼出アクティビティのオペレーション名で選択されている「exec」を設定しています。
service	サービス呼出アクティビティのサービス名で選択されている「TP1Adapter」を設定しています。
type	通常応答を意味する「RESPONSE_NORMAL」を設定しています。
valid	エミュレーション機能を実行するため「true」を設定しています。
xmlfile	応答電文ファイル「/data/telegram/exec1」を設定しています。 このファイルの内容は、サービス呼出アクティビティの応答電文のボディ割当変数「out」に設定されます。

6.5.8 コンポーネント ID 設定ファイル

(1) 形式

```
[<HCSCコンポーネントID>={ON | OFF}]
:
[<HCSCコンポーネントID>={ON | OFF}]
```

(2) 機能

ユーザ電文トレースへの HCSC コンポーネントの出力可否を HCSC コンポーネント ID（受付 ID または サービス ID）で設定します。HCSC コンポーネントは 1 行ずつ、J2SE のプロパティファイル形式で設定します。

参考

ユーザ電文トレースの出力有無を HCSC コンポーネント種別で設定するには、コンポーネント種別設定ファイルを設定してください。

コンポーネント ID 設定ファイルとコンポーネント種別設定ファイルは、両方設定することもできます。同じ HCSC コンポーネントに対して、コンポーネント ID 設定ファイルとコンポーネント種別設定ファイルの両方で設定した場合、コンポーネント ID 設定ファイルの設定が適用されます。

(3) ファイルの格納先

コンポーネント ID 設定ファイルにはテンプレートファイルはありません。

作成したコンポーネント ID 設定ファイルのファイル名、格納先は任意です。

作成したコンポーネント ID 設定ファイルを有効にするには、HCSC サーバランタイム定義ファイルの `telegramtrace-component-id-filepath` プロパティでパスを指定してください。

(4) 設定できるパラメタ

<HCSC コンポーネント ID>={ON | OFF}

ユーザ電文トレースへの HCSC コンポーネントの出力可否を指定します。

<HCSC コンポーネント ID>

サービス ID または受付 ID を指定します。

{ON | OFF}

指定された HCSC コンポーネントをユーザ電文トレースへ出力するか指定します。

- ON：ユーザ電文トレースへ出力します。
- OFF：ユーザ電文トレースへ出力しません。

設定値 (ON または OFF) は完全一致で判定されるため、それ以外の値や空文字を指定した場合は、コンポーネント ID を指定しなかった場合と同じ動作となります。

なお、ユーザ電文トレースへの HCSC コンポーネントの出力可否は、コンポーネント種別設定ファイル (HCSC コンポーネント種別での指定) でも指定できます。同じ HCSC コンポーネントに対して、コンポーネント ID 設定ファイルとコンポーネント種別設定ファイルの両方で設定した場合、コンポーネント ID 設定ファイルの設定が適用されます。

(5) 記述例

- ユーザ電文トレースへ次に示す情報を出力する場合を例に示します。
 - HCSC コンポーネント ID 「RCP1」 の情報を出力する
 - HCSC コンポーネント ID 「ADP1」 の情報を出力しない

この場合、コンポーネント ID 設定ファイルには次のように記述します。

```
RCP1=ON  
ADP1=OFF
```

- ユーザ電文トレースに、HCSC コンポーネント ID 「FTP_RCP1」 「FTP_ADP1」 「FTP_ADP3」 を除くすべての FTP 受付と FTP アダプタの情報を出力する場合、コンポーネント種別設定ファイルとコンポーネント ID 設定ファイルを組み合わせる次のように記述します。
 - コンポーネント種別設定ファイルの内容 (FTP 受付と FTP アダプタを出力)

```
reception.urecp.ftp
adapter.ftp
```

- コンポーネント ID 設定ファイルの内容 (HCSC コンポーネント ID 「FTP_RCP1」 「FTP_ADP1」 「FTP_ADP3」 を出力対象から除外)

```
FTP_RCP1=OFF
FTP_ADP1=OFF
FTP_ADP3=OFF
```

6.5.9 コンポーネント種別設定ファイル

(1) 形式

```
[<HCSCコンポーネント種別>]
:
[<HCSCコンポーネント種別>]
```

(2) 機能

ユーザ電文トレースへ出力する HCSC コンポーネントの種別を 1 行ずつ設定します。J2SE のプロパティファイル形式で設定します。

参考

ユーザ電文トレースの出力有無を HCSC コンポーネント ID で設定するには、コンポーネント ID 設定ファイルを設定してください。

コンポーネント ID 設定ファイルとコンポーネント種別設定ファイルは、両方設定することもできます。同じ HCSC コンポーネントに対して、コンポーネント ID 設定ファイルとコンポーネント種別設定ファイルの両方で設定した場合、コンポーネント ID 設定ファイルの設定が適用されます。

(3) ファイルの格納先

テンプレートファイルは次の場所に格納されています。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%templates%csctelegram_component_type.properties
```

作成したコンポーネント種別設定ファイルのファイル名，格納先は任意です。

作成したコンポーネント種別設定ファイルを有効にするには，HCSC サーバランタイム定義ファイルの telegramtrace-component-type-filepath プロパティでパスを指定してください。

(4) 設定できるパラメタ

<HCSC コンポーネント種別>

ユーザ電文トレースに出力する HCSC コンポーネントの種別を指定します。指定する HCSC コンポーネントの種別を次の表に示します。

表 6-4 HCSC コンポーネントの種別

種類		指定する種別	
受付	標準受付	標準受付 (Web サービス)	reception.standard.soap
		標準受付 (SessionBean)	reception.standard.ejb
		標準受付 (MDB (WS-R))	reception.standard.wsr
		標準受付 (MDB (DB キュー))	reception.standard.dbq
	ユーザ定義受付	SOAP 受付	reception.urecp.soap
		TP1/RPC 受付	reception.urecp.tp1
		FTP 受付	reception.urecp.ftp
		HTTP 受付	reception.urecp.http
		Message Queue 受付	reception.urecp.mq
		ファイルイベント受付	reception.urecp.fileevent
		Kafka 受付	reception.urecp.kafka
		スケジュール駆動受付	reception.urecp.scheduletriggered
		gRPC 受付	reception.urecp.grpc
		カスタム受付	reception.urecp.rcpffw
サービスアダプタ	SOAP アダプタ	adapter.soap	
	SessionBean アダプタ	adapter.ejb	
	MDB (WS-R) アダプタ	adapter.wsr	
	MDB (DB キュー) アダプタ	adapter.dbq	
	DB アダプタ	adapter.db	
	TP1 アダプタ	adapter.tp1	
	ファイルアダプタ	adapter.ff	

種類		指定する種別
サービスアダプタ	Object Access アダプタ	adapter.oa
	Message Queue アダプタ	adapter.mq
	FTP アダプタ	adapter.ftp
	ファイル操作アダプタ	adapter.fop
	メールアダプタ	adapter.mail
	HTTP アダプタ	adapter.http
	コマンドアダプタ	adapter.cmd
	SFTP アダプタ	adapter.sftp
	Kafka アダプタ	adapter.kafka
	gRPC アダプタ	adapter.grpc
	汎用カスタムアダプタ	adapter.custom

(5) 記述例

- ユーザ電文トレースに、FTP 受付と FTP アダプタの情報だけを出力する場合の記述例を次に示します。

```
reception.urecp.ftp
adapter.ftp
```

6.5.10 サービス情報変更定義ファイル

(1) 形式

各サービスに対応する情報が、キーの昇順でソートされて出力されます。

(a) SOAP アダプタ (SOAP1.1 モード) 用のサービス情報

```
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.url=サービス部品の呼び出しに使用するURL
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_read_timeout=読み込みタイムアウト値
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_connect_timeout=接続タイムアウト値
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.socket_write_timeout=書き込みタイムアウト値
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.proxy_host=プロキシサーバのホスト名
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.non_proxy_hosts=プロキシサーバを使用しないホスト名
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.proxy_port=プロキシサーバのポート番号
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.proxy_user=プロキシサーバのユーザ
<クラスタ名>.<サービスID>.WebService.c4web.application.proxy_password=プロキシサーバのパスワード
```

<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.c4web.common.prf_trace_level=性能解析トレース出力オプション
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.c4web.common.receive_max_soap_envelope_size=受信SOAPEnvelopeの最大バイト数
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.c4web.common.send_max_soap_envelope_size=送信SOAPEnvelopeの最大バイト数
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.basic_authentication_use={true | false}
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.basic_authentication_id=ベーシック認証のユーザ
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.basic_authentication_pass=ベーシック認証のパスワード
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.c4web.application.app_maintainsession={true | false}

(b) SOAP アダプタ (SOAP1.1/1.2 併用モード) 用のサービス情報

<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.url=サービス部品の呼び出しに使用するURL
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.com.cosminexus.csc.request.timeout=読み込みタイムアウト値
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.com.cosminexus.csc.connect.timeout=接続タイムアウト値
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.com.cosminexus.csc.session.maintain={true | false}
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.com.cosminexus.csc.auto-delete-incomplete-file={true | false}
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.count=ロックリトライ回数
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.interval=ロックリトライ間隔
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.basic_authentication_use={true | false}
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.basic_authentication_id=ベーシック認証のユーザ
<クラスタ名>. <サービスID>. WebService.basic_authentication_pass=ベーシック認証のパスワード

(c) SessionBean アダプタのサービス情報

<クラスタ名>. <サービスID>. SessionBean.url=サービス部品の呼び出しに使用するURL
<クラスタ名>. <サービスID>. SessionBean.lookup_name=ルックアップ名
<クラスタ名>. <サービスID>. SessionBean.c4web.application.ejb_timeout=呼び出しタイムアウト値
<クラスタ名>. <サービスID>. SessionBean.c4web.common.prf_trace_level=性能解析トレース出力オプション

(d) MDB (WS-R) アダプタのサービス情報

<クラスタ名>. <サービスID>. MDB_WSR.queue_name=サービスアダプタがメッセージを送信するキュー名
<クラスタ名>. <サービスID>. MDB_WSR.local_call={true | false}
<クラスタ名>. <サービスID>. MDB_WSR.url=転送先のキュー間転送用WebアプリケーションのURL
<クラスタ名>. <サービスID>. MDB_WSR.max_message_num=転送キューが保持できるメッセージの最大数
<クラスタ名>. <サービスID>. MDB_WSR.qos_in_order={true | false}
<クラスタ名>. <サービスID>. MDB_WSR.rdarea_name=転送キュー作成先RDエリア名

(e) MDB (DB キュー) アダプタのサービス情報

<クラスタ名>. <サービスID>. MDB_DBQ.queue_name=サービス部品に関連づけられているキュー名

(2) 機能

サービスアダプタのサービス情報の変更を設定します。

(3) ファイルの格納先

cscsvctl コマンドの-getfile オプションに指定したパスに格納されます。

(4) 設定できるパラメタ

(a) SOAP アダプタ (SOAP1.1 モード) 用のサービス情報

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.url=サービス部品の呼び出しに使用する URL

サービス部品の呼び出しに使用する URL を指定します。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.socket_read_timeout=読み込みタイムアウト値

サービスアダプタのソケットの読み込みタイムアウト値 (単位: 秒) を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.socket_read_timeout」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.socket_connect_timeout=接続タイムアウト値

サービスアダプタのソケットの接続タイムアウト値 (単位: 秒) を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.socket_connect_timeout」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.socket_write_timeout=書き込みタイムアウト値

サービスアダプタのソケットの書き込みタイムアウト値 (単位: 秒) を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.socket_write_timeout」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.proxy_host=プロキシサーバのホスト名

プロキシサーバのホスト名または IP アドレスを指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.proxy_host」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.non_proxy_hosts=プロキシサーバを使用しないホスト名

プロキシサーバを使用しない場合のホスト名または IP アドレス群を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.non_proxy_hosts」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.proxy_port=プロキシサーバのポート番号

プロキシサーバのポート番号を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.proxy_port」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.proxy_user=プロキシサーバのユーザ

プロキシサーバの認証ユーザ ID を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.proxy_user」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.proxy_password=プロキシサーバのパスワード

プロキシサーバの認証ユーザ ID に対応するパスワードを指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.proxy_password」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.common.prf_trace_level=性能解析トレース出力オプション

性能解析トレースの出力オプションを指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.common.prf_trace_level」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.common.receive_max_soap_envelope_size=受信 SOAPEnvelope の最大バイト数

受信できる SOAP エンベロープの最大バイト数を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.common.receive_max_soap_envelope_size」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.common.send_max_soap_envelope_size=送信 SOAPEnvelope の最大バイト数

送信できる SOAP エンベロープの最大バイト数を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.common.send_max_soap_envelope_size」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.basic_authentication_use={true | false}

サービスアダプタがベーシック認証を使用するかどうかを指定します。ベーシック認証を設定する場合は、ベーシック認証を使用する、使用しないにかかわらず必ず指定します。

- true

使用します。

- false

使用しません。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.basic_authentication_id=ベーシック認証のユーザ ID ~<半角英数字, 半角記号 (ASCII コードの「0x21」 ~ 「0x7E」 ※), および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) >((1 文字以上))

ベーシック認証のユーザ ID を指定します。ベーシック認証を設定する場合は、ベーシック認証を使用する、使用しないにかかわらず必ず指定します。

値の先頭に半角スペース (ASCII コードの「0x20」) を指定する場合は、半角スペースの前に「¥」と指定してください。また、値に「¥」を指定する場合は、「¥¥」と指定してください。

注※

(ハッシュマーク), : (コロン), ? (クエスチョン), @ (アットマーク), / (スラッシュ) は使用できません。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.basic_authentication_pass=ベーシック認証のパスワード ~<半角英数字, 半角記号 (ASCII コードの「0x21」 ~ 「0x7E」 ※), および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) >((1-40 文字))

ベーシック認証のパスワードを指定します。ベーシック認証を設定する場合は、ベーシック認証を使用する、使用しないにかかわらず必ず指定します。

値の先頭に半角スペース (ASCII コードの「0x20」) を指定する場合は、半角スペースの前に「¥」と指定してください。また、値に「¥」を指定する場合は、「¥¥」と指定してください。

注※

(ハッシュマーク), : (コロン), ? (クエスチョン), @ (アットマーク), / (スラッシュ) は使用できません。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.c4web.application.app_maintainsession={true | false}

HTTP セッションの維持の有無を指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.application.app_maintainsession」の説明を参照してください。

(b) SOAP アダプタ (SOAP1.1/1.2 併用モード) 用のサービス情報

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.url=サービス部品の呼び出しに使用する URL

サービス部品の呼び出しに使用する URL を指定します。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.com.cosminexus.csc.request.timeout=読み込みタイムアウト値

サービスアダプタのソケットの読み込みタイムアウト値（単位：秒）を指定します。指定する値については、「3.6.2 クライアント定義ファイル」の設定項目の「com.cosminexus.csc.request.timeout」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.com.cosminexus.csc.connect.timeout=接続タイムアウト値

サービスアダプタのソケットの接続タイムアウト値（単位：秒）を指定します。指定する値については、「3.6.2 クライアント定義ファイル」の設定項目の「com.cosminexus.csc.connect.timeout」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.com.cosminexus.csc.session.maintain={true | false}

HTTP セッションの維持の有無を指定します。指定する値については、「3.6.2 クライアント定義ファイル」の設定項目の「com.cosminexus.csc.session.maintain」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.com.cosminexus.csc.auto-delete-incomplete-file={true | false}

SOAP アダプタがサービス部品から添付ファイルを受信し、作業フォルダまたは共通フォルダにファイルを出力する際にエラーが発生すると不完全なファイルが生成されます。この不完全なファイルを自動的に削除するかどうかを指定します。指定する値については、「3.6.2 クライアント定義ファイル」の設定項目の「com.cosminexus.csc.auto-delete-incomplete-file」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.count=ロックリトライ回数

共通フォルダ内のファイルの共有ロック取得失敗時のロックリトライ回数を指定します。指定する値については、「3.6.2 クライアント定義ファイル」の設定項目の「com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.count」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.interval=ロックリトライ間隔

共通フォルダ内のファイルの共有ロック失敗時のロックリトライ間隔を秒単位で指定します。指定する値については、「3.6.2 クライアント定義ファイル」の設定項目の「com.cosminexus.csc.file.read-lock.retry.interval」の説明を参照してください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.basic_authentication_use={true | false}

サービスアダプタ定義でのベーシック認証の使用可否チェックを指定します。

- true
使用します。
- false
使用しません。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.basic_authentication_id=ベーシック認証のユーザ ~<半角英数字, 半角記号 (ASCII コードの「0x21」 ~ 「0x7E」 ※), および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) >((1 文字以上))

サービスアダプタ定義でのベーシック認証のユーザ名を指定します。

注※

: (コロン), / (スラッシュ) は使用できません。

<クラスタ名>.<サービス ID>.WebService.basic_authentication_pass=ベーシック認証のパスワード ~<半角英数字, 半角記号 (ASCII コードの「0x21」 ~ 「0x7E」 ※), および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) >((1-40 文字))

サービスアダプタ定義でのベーシック認証のパスワードを指定します。

注※

: (コロン), / (スラッシュ) は使用できません。

(c) SessionBean アダプタのサービス情報

<クラスタ名>.<サービス ID>.SessionBean.url=サービス部品の呼び出しに使用する URL

サービス部品の呼び出しに使用する URL を指定します。

<クラスタ名>.<サービス ID>.SessionBean.lookup_name=ルックアップ名

サービス部品の呼び出しに使用するルックアップ名を指定します。

<クラスタ名>.<サービス ID>.SessionBean.c4web.application.ejb_timeout=呼び出しタイムアウト値

サービス部品の呼び出しタイムアウト値 (単位: 秒) を指定します。0~86400 の値を指定します。0 を指定した場合はタイムアウトしません。

<クラスタ名>.<サービス ID>.SessionBean.c4web.common.prf_trace_level=性能解析トレース出力オプション

性能解析トレースの出力オプションを指定します。指定する値については、マニュアル「アプリケーションサーバ SOAP アプリケーション開発の手引」の「10.3 クライアント定義ファイルの設定」の「c4web.common.prf_trace_level」の説明を参照してください。

(d) MDB (WS-R) アダプタのサービス情報

<クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.queue_name=サービスアダプタがメッセージを送信するキュー名

サービスアダプタがメッセージを送信するキュー名を指定します。

<クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.local_call={true | false}

サービスアダプタがローカルホスト、またはリモートホストのどちらのサービス部品に接続するかを指定します。

- true
ローカルホストのサービス部品に接続します。
- false
リモートホストのサービス部品に接続します。

サービス情報変更定義ファイルで設定するパラメタに、すべて正しい値を指定している場合だけ、local_call の値を true から false へ変更できます。なお、local_call の値は、false から true へ変更しないでください。

<クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.url=転送先のキュー間転送用 Web アプリケーションの URL

サービスアダプタが使用する転送キューのメッセージ転送先を指定します。メッセージ転送先には、転送先のキュー間転送用 Web アプリケーションの URL を指定します。local_call パラメタが false の場合だけ有効になります。

<クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.max_message_num=転送キューが保持できるメッセージの最大数 ~<数字>((1-65535))

サービスアダプタが使用する転送キューが保持できるメッセージの最大数を指定します。local_call パラメタが false の場合だけ有効になります。

クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.qos_in_order={true | false}

サービスアダプタが使用する転送キューがメッセージを正しい順序で転送することを保証するかどうかを指定します。local_call パラメタが false の場合だけ有効になります。

- true
保証します。
- false
保証しません。

<クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_WSR.rdarea_name=転送キュー作成先 RD エリア名 ~<半角英数字, アンダーバー (_) および半角スペース () >((30 バイト以内))

サービスアダプタが使用する転送キューの作成先の RD エリア名を指定します。local_call パラメタが false の場合だけ有効になります。なお、ALL は指定しないでください。

(e) MDB (DB キュー) アダプタのサービス情報

<クラスタ名>.<サービス ID>.MDB_DBQ.queue_name=サービス部品に関連づけられているキュー名

サービス部品に関連づけられているキュー名を指定します。

(5) 使用方法

- cscsvctl コマンドの-getfile オプションにファイル名を指定してサービス情報変更定義ファイルを取得します。取得したファイルに変更内容を定義し、cscsvctl コマンドの-setfile オプションにファイル名を指定して設定します。
- 運用環境で変更していないサービス情報は、パラメタの先頭にコメントを表す「#」が付けられています。サービス情報を変更する場合、該当するパラメタに付けられている「#」を削除してください。
- 運用環境での変更を無効にする場合（開発環境の設定値を有効にする場合）は、パラメタの先頭にコメントを表す「#」を付けてください。

(6) 注意事項

- 値の先頭に半角スペース（ASCII コードの「0x20」）を指定する場合は、半角スペースの前に「¥」と指定してください。また、値に「¥」を指定する場合は、「¥¥」と指定してください。
- 値を設定または変更する場合は、Java のプロパティファイル形式として編集してください。
- cscsvctl コマンドの-getfile オプションで取得したサービス情報に次に示す文字が含まれていた場合は、「¥」を付加した形で出力されます。
 - 半角感嘆符 (!)
 - 半角番号記号 (#)
 - 半角コロン (:)
 - 半角等号 (=)

6.6 SOAP 連携で利用するファイル

6.6.1 SOAP Fault 動作定義ファイル

(1) 形式

```
[targetNamespaceのURI]  
[targetNamespaceのURI]  
:
```

(2) 機能

targetNamespace の URI を設定します。targetNamespace の URI は、サービスアダプタが Web サービスから SOAP Fault を受け取った場合に、Fault として扱うかどうかの判別をするために使用されます。設定された内容は HCSC サーバの起動後に有効となります。

(3) 指定方法

- targetNamespace の URI を改行で区切って指定します。サービスアダプタの作成に使用する WDSL の targetNamespace の記述をそのまま指定してください。
- targetNamespace に使用できる文字は、ISO-8859-1 文字エンコーディングでの次に示す文字です。
 - 英数字
 - 感嘆符 (!)
 - ダブルクォーテーション (")
 - 番号記号 (#)
 - ドル記号 (\$)
 - パーセント (%)
 - アンパサンド (&)
 - アポストロフィ (')
 - 始め小括弧 (()
 - 終わり小括弧 ())
 - 正符号 (+)
 - コンマ (,)
 - ハイフン (-)
 - ピリオド (.)
 - スラッシュ (/)

- コロン (:)
 - セミコロン (;)
 - 左アングルブラケット (<)
 - 右アングルブラケット (>)
 - 等号 (=)
 - クエスチョンマーク (?)
 - 単価記号 (@)
 - 始め角括弧 ([)
 - 終わり角括弧 (])
 - 円マーク (¥)
 - アクサンシルコンフлекс (^)
 - アンダーバー (_)
 - アクサングラーブ (`)
 - 始め波括弧 ({)
 - 終わり波括弧 (})
 - パイプライン (|)
 - 波ダッシュ (~)
- 行頭に「#」を記述した場合はコメントと扱われます。
 - 空行は無視されます。また、行頭および行末の半角スペースとタブも無視されます。
 - WSDL に宣言されている targetNamespace 属性値が空文字 (値がない) の場合や targetNamespace 属性が定義されていない場合は、「""」(ダブルクォーテーション 2 つ) を記述してください。

(4) 不正な定義がある場合の動作

「指定方法」に示すルールに合わない定義がある場合 (ただし、ISO-8859-1 文字エンコーディングの条件に合っていない場合は除く) は、HCSC サーバの起動に失敗します。

次の場合、サービス部品から SOAP Fault が返ってきたときに、正常に動作しないことがあるため注意してください。

- 誤った targetNamespace を指定した場合*
- WSDL の targetNamespace として使用できない文字を指定した場合
- 指定した文字エンコーディング以外を使用した場合

注※

サービスアダプタの作成に使用する WDSL の targetNamespace の記述をそのまま記述してください。「http://www.xxx.com/」と、「http://w%77w.xxx.com/」は URI としては同義ですが、別の URI として認識されます。

(5) 記述例

```
http://dictionary.com
urn:sample.co.jp:xmlns:wSDL:2007-06
```

6.6.2 ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル

(1) 形式

```
user-defined-reception-soap.threads.maximum=最大同時実行数
user-defined-reception-soap.exclusive.threads=占有スレッド数
user-defined-reception-soap.queue-size=実行待ちキューサイズ
```

(2) 機能

SOAP 受付の情報を設定します。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%manager%templates%cscurcptnc
onfig.properties
```

(4) 設定できるパラメタ

user-defined-reception-soap.threads.maximum=最大同時実行数 ～<数字>((1-1024))<<10>>

SOAP 受付の最大同時実行数を指定します。占有スレッド数以上の値を指定する必要があります。

user-defined-reception-soap.exclusive.threads=占有スレッド数 ～<数字>((0-1024))<<0>>

SOAP 受付の占有スレッド数を指定します。最大実行数を超えない範囲で値を指定する必要があります。0 を指定した場合、スレッドは占有されません。

なお、この指定値は WAR の属性 thread-control-exclusive-threads に設定されます。このため、Web コンテナ全体の最大同時実行スレッド数や最大接続数などの値を考慮して指定する必要があります。

user-defined-reception-soap.queue-size=実行待ちキューサイズ ～<数字>
((0-2147483647))<<8192>>

SOAP 受付の実行待ちキューのサイズを指定します。

(5) 使用方法

ユーザ定義受付ランタイム定義ファイルは、`cscocompoconfig` コマンドの `-profile` オプションの引数に指定します。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム システム構築・運用ガイド」の「3.1.15 ユーザ定義受付の定義情報を設定する」を参照してください。

6.7 TP1 連携で利用するファイル

6.7.1 TP1 アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
tp1client.config=TP1/Client/J環境定義ファイルのパス  
[buffer.keep={true | false}]  
[message.level={0 | 10 | 20}]  
[trace.level={0 | 10 | 20}]  
[trace.filesize=トレースログの出力サイズ]  
[trace.filenum=トレースログの出力面数]
```

(2) 機能

(a) ファイルの種類

TP1 アダプタ実行環境プロパティファイルは、TP1 アダプタが実行環境で動作する場合の TP1/Client/J 環境定義ファイルのパスなどを定義します。

また、1つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、TP1 アダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。プロパティファイル間で同じプロパティが指定された場合、プロパティの優先度は次のようになります。

ファイルの種類	プロパティ重複時の優先度
TP1 アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	高
TP1 アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	低

なお、重複しないプロパティの指定はマージされます。

(b) 作成手順

サンプルファイルを利用して作成します。サンプルファイルの格納先を次に示します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter¥TP1¥config¥templates  
¥adtp1.properties
```

TP1 アダプタ実行環境プロパティファイルの作成手順を次に示します。

1. サンプルファイルをコピーして、次のディレクトリに格納します。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%TP1%config
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%TP1%config%<HCSCサーバ名>
```

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないで、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者 (Service Coordinator 管理者) がアクセスできるように、適切なアクセス権限を設定してください。

2. ファイル名を<サービス ID>.properties に変更します。

3. 定義内容を編集して保存します。

TP1 アダプタ実行環境プロパティファイルは、TP1 アダプタの開始時に実行環境に反映されます。そのため、TP1 アダプタ実行環境プロパティファイルの内容を変更する場合は、TP1 アダプタを停止してから実施してください。TP1 アダプタを再開すると、変更内容が実行環境に反映されます。

(3) 設定できるプロパティ

tp1client.config=TP1/Client/J 環境定義ファイルのパス ~<文字列>

TP1/Client/J 環境定義ファイルのパスを記述します。パスのディレクトリ区切りは「¥」ではなく、「¥¥」を使用してください。

TP1/Client/J 環境定義ファイルの定義方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「付録 A.2 TP1/Client/J の定義」を参照してください。

buffer.keep={true | false} ~<<true>>

送受信バッファ生成のオプションを指定します。

- true
TP1 アダプタ起動時に送受信バッファを生成・保持します。
- false
RPC 通信時に送受信バッファを生成・解放します。

上記以外を指定した場合、警告メッセージ (KDEE12021-W) が出力され true 指定時の動作となります。また、buffer.keep プロパティ自体を記述していない場合は、警告メッセージは出力されないで true 指定時の動作となります。

message.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>

メッセージログの出力レベルを指定します。

- 0：メッセージ種別「E (Error)」のメッセージを出力します。
- 10：メッセージ種別「E (Error)」, 「W (Warning)」のメッセージを出力します。
- 20：全メッセージを出力します。

`trace.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>`

トレースログの出力レベルを指定します。

- 0：メソッドトレース情報を取得しません。
- 10：メソッドトレース情報を取得します。
- 20：メソッドトレース情報・データトレース情報を取得します。

`trace.filesize=トレースログの出力サイズ ~<符号なし整数>`
`((4096-2147483647))<<2097152>>`

TP1 アダプタが取得するトレース情報の出力ファイルサイズを指定します (単位：バイト)。

`trace.filenum=トレースログの出力面数 ~<符号なし整数>((1-16))<<8>>`

TP1 アダプタが取得するトレース情報の出力ファイル面数を指定します。

(4) 注意事項

パスを指定する場合の注意事項を次に示します。

- 相対パス, 親ディレクトリ表現 (「..¥」, 「../」), およびカレントディレクトリ表現 (「.¥」, 「./」) を含むパスは指定しないでください。
- シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
- Windows の場合, UNC 形式, NTFS のストリーム名, および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また, パスの大文字と小文字は区別されません。

6.8 FTP 連携で利用するファイル

6.8.1 FTP アダプタアカウント定義ファイル

(1) 機能

FTP アダプタで接続する FTP サーバのユーザ認証情報を一括管理します。

ファイルの内容は次に示す運用コマンドで管理します。ファイルを直接編集することはできません。

- `csaftpuseradd` コマンド (FTP アダプタのユーザの登録・更新)
- `csaftpuserdel` コマンド (FTP アダプタのユーザの削除)
- `csaftpuserls` コマンド (FTP アダプタのユーザの表示)

(2) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%templates%account.properties
```

FTP アダプタアカウント定義ファイルは、`csaftpuseradd` コマンドで指定したパスとファイル名で作成されます。

作成した FTP アダプタアカウント定義ファイルを有効にするには、ファイルの絶対パスを FTP アダプタ実行環境プロパティファイルの `ftpadp.account-inf-filepath` プロパティに指定する必要があります。プロパティを省略した場合、次に示すディレクトリに格納されている FTP アダプタアカウント定義ファイルが利用されます。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%common%account.properties
```

また、`csaftpuseradd` コマンドを `-name` オプション指定で実行すると、上記パスに FTP アダプタアカウント定義ファイルが自動生成されます。上記パスに FTP アダプタアカウント定義ファイルが格納されていない場合、FTP アダプタの起動時にエラーになります。

6.8.2 FTP アダプタコマンド定義ファイル

(1) 形式

```
[ftpadp.command.messagelog.filepath=FTPアダプタコマンドのメッセージログファイルの出力先ディレクトリの絶対パス]  
[ftpadp.command.messagelog.filenum=FTPアダプタコマンドのメッセージログファイルの面数]
```

[ftpadp.command.messagelog.filesize=FTPアダプタコマンドのメッセージログファイルの1面当たりの最大サイズ]

(2) 機能

FTP アダプタコマンドのメッセージログの構成情報を定義するファイルです。

(3) ファイルの格納先

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%adpftpcommand.properties

(4) 設定できるパラメタ

ftpadp.command.messagelog.filepath=FTP アダプタコマンドのメッセージログファイルの出力先ディレクトリの絶対パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%log>>

FTP アダプタ関連コマンドのメッセージログファイルの出力先ディレクトリを絶対パスで指定します。存在しないディレクトリを指定した場合は、省略値が使用されます。

なお、メッセージログは「message<面数>.log」という名で作成されます。

ftpadp.command.messagelog.filenum=FTP アダプタコマンドのメッセージログファイルの面数 ~<数字>((1-64))<<2>>

FTP アダプタ関連コマンドのメッセージログファイルの面数を指定します。

ftpadp.command.messagelog.filesize=FTP アダプタコマンドのメッセージログファイルの1面当たりの最大サイズ ~<数字>((4096-16777216))<<1048576>>

FTP アダプタ関連コマンドのメッセージログファイルの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

(5) 注意事項

パスを指定する場合の注意事項を次に示します。

- 相対パス、親ディレクトリ表現 (「..¥」, 「../」), およびカレントディレクトリ表現 (「.¥」, 「./」) を含むパスは指定しないでください。
- シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
- Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

6.8.3 FTP アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
[ftpadp.host-ipaddr=接続するFTPサーバのIPアドレスまたはホスト名]
[ftpadp.host-con-port=接続するFTPサーバの制御コネクション用のポート番号]
[ftpadp.file-name.charset={UTF-8 | MS932}]

[ftpadp.ftps.enable={TRUE | FALSE}]
[ftpadp.ftps.protocol-name={TLS | SSL}]
[ftpadp.ftps.implicit-mode={TRUE | FALSE}]
[ftpadp.ftps.data-con-secure={TRUE | FALSE}]
[ftpadp.ftps.server-authentication={TRUE | FALSE}]

[ftpadp.client-ipaddr=HCSCサーバのIPアドレス]
[ftpadp.client-con-port.min=FTPアダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値]
[ftpadp.client-con-port.max=FTPアダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値]
[ftpadp.client-pasv-port.min=データコネクションがPASVモードの場合のFTPアダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最小値]
[ftpadp.client-pasv-port.max=データコネクションがPASVモードの場合のFTPアダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最大値]
[ftpadp.listen-port.min=データコネクションがPORTモードの場合のFTPアダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最小値]
[ftpadp.listen-port.max=データコネクションがPORTモードの場合のFTPアダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最大値]

[ftpadp.ftp-user=接続するFTPサーバのログインユーザ名]
[ftpadp.ftp-type={A | a | I | i}]
[ftpadp.ftp-mode={S | s | C | c}]
[ftpadp.pasvport={PASV | pasv | PORT | port}]

[ftpadp.file-size-check={TRUE | FALSE}]

[ftpadp.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]
[ftpadp.methodtrace.filepath=保守用ログの出力先ディレクトリの絶対パス]
[ftpadp.methodtrace.filenum=保守用ログの面数]
[ftpadp.methodtrace.filesize=保守用ログの1面当たりの最大サイズ]

[ftpadp.ftpprotocoltrace.filenum=プロトコルトレースファイルの面数]
[ftpadp.ftpprotocoltrace.filesize=プロトコルトレースファイルの1面当たりの最大サイズ]

[ftpadp.messagelog.level={0 | 10 | 20}]

[ftpadp.account-inf-filepath=FTPアダプタアカウント定義ファイルの絶対パス]
[ftpadp.cscthrough-filepath=FTPコマンド許可リスト定義ファイルの絶対パス]

[ftpadp.control-con.retry.count=制御コネクションを確立できなかったときのリトライ回数]
[ftpadp.control-con.retry.interval=制御コネクションを確立できなかったときのリトライ間隔]
[ftpadp.control-con.connect.timeout=制御コネクションの接続タイムアウト時間]

[ftpadp.data-con.retry.count=PASVモードでデータコネクションを確立できなかったときのリトライ回数]
[ftpadp.data-con.retry.interval=PASVモードでデータコネクションを確立できなかったときのリトライ間隔]
[ftpadp.data-con.connect.timeout=データコネクションの接続タイムアウト時間]
```

[ftpadp.read-lock.retry.count=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数]
[ftpadp.read-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間隔]
[ftpadp.write-lock.retry.count=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ回数]
[ftpadp.write-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ間隔]

[ftpadp.data-con-put.timeout=データ転送時タイムアウト時間]
[ftpadp.data-con-get.timeout=データ取得時タイムアウト時間]

[ftpadp.ftp-command-reply.timeout=リプライタイムアウト時間]

[ftpadp.listen.timeout=Listenタイムアウト時間]

[ftpadp.data-con.read.timeout=パッシブモードでのデータ接続の受信バッファからの読み込みタイムアウト時間]

[ftpadp.put-client-buffer.size=ファイル転送（送信）するときのクライアントバッファサイズ]
[ftpadp.get-client-buffer.size=ファイル転送（受信）するときのクライアントバッファサイズ]
[ftpadp.exptrace.filenum=例外ログの面数]
[ftpadp.exptrace.filesize=例外ログの1面当たりの最大サイズ]

[ftpadp.listen-port.reuse={TRUE | FALSE}]

[ftpadp.session.keep={TRUE | FALSE}]
[ftpadp.session.idle-timeout=ログインセッションアイドルタイムのタイムアウト時間]
[ftpadp.session.max=ログインセッションのFTPアダプタ内の最大数]

(2) 機能

FTP アダプタの実行環境に依存するパラメタを設定します。

(a) ファイルの種類

FTP アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- FTP アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の FTP アダプタ
- FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての FTP アダプタ

これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1 つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、FTP アダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

プロパティファイル間で同じプロパティが指定された場合、プロパティの優先度は次のようになります。

ファイルの種類	プロパティ重複時の優先度
FTP アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	高

ファイルの種類	プロパティ重複時の優先度
FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
FTP アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	
FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	低

(b) 作成手順

FTP アダプタ実行環境プロパティファイル、および FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルは、テンプレートファイルを基に作成します。

FTP アダプタ実行環境プロパティファイルは次の手順で作成してください。FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルの作成手順は、「[6.8.4 FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、FTP アダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%templates%adpftp.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<サービス ID>.properties」で次のディレクトリに格納します。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config<HCSC サーバ名>
```

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないため、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者 (Service Coordinator 管理者) がアクセスできるように、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

(a) 要求電文または FTP アダプタ実行環境プロパティファイルでの設定が必須のプロパティ

次に示すプロパティは、要求電文または FTP アダプタ実行環境プロパティファイルのどちらかで必ず設定しなければならないプロパティです。要求電文と FTP アダプタ実行環境プロパティファイルの両方に設定している場合、要求電文の値が有効になります。

```
ftpadp.host-ipaddr=接続するFTPサーバのIPアドレスまたはホスト名
ftpadp.ftp-user=接続するFTPサーバのログインユーザ名
```

要求電文の指定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.10 FTP アダプタを定義する」を参照してください。

●サーバ情報関連

`ftpadp.host-ipaddr`=接続する FTP サーバの IP アドレスまたはホスト名

接続する FTP サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。

FTP アダプタの要求電文でも指定が可能です。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

注意事項

Windows を使用する場合、ループバック IP アドレス (127.0.0.1 または localhost) を指定すると、FTP 接続に失敗する場合があります。実 IP アドレスまたはホスト名を設定してください。

●FTP 設定関連

`ftpadp.ftp-user`=接続する FTP サーバのログインユーザ名 ~<文字列>((1-80 文字))

FTP アダプタアカウント定義ファイルに指定した、FTP アダプタが接続する FTP サーバのログインユーザ名を指定します。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)

- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (`)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

指定するログインユーザ名はファイル操作の実行権限が与えられている必要があります。ここで指定した値は USER コマンドの引数として使用されます。

また、FTP アダプタの要求電文でも指定が可能です。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

このプロパティの指定を省略した場合は、必ず FTP アダプタの要求電文でログインユーザ名を指定してください。ログインユーザ名を指定しないと、FTP アダプタの呼び出し時にシステム例外が発生します。

(b) 要求電文および FTP アダプタ実行環境プロパティファイルで設定できるプロパティ

次に示すプロパティは、必要に応じて要求電文または FTP アダプタ実行環境プロパティファイルで設定するプロパティです。要求電文と FTP アダプタ実行環境プロパティファイルの両方に設定している場合、要求電文の値が有効になります。FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルを使用して運用時に管理する定義ファイルの数を削減したい場合で、一部リクエスト単位で異なる値を設定したいプロパティがあるときは、要求電文で設定してください。

```
ftpadp.host-con-port=接続するFTPサーバの制御コネクション用のポート番号
ftpadp.file-name.charset={UTF-8 | MS932}
```

```
ftpadp.ftp-type={A | a | I | i}
ftpadp.ftp-mode={S | s | C | c}
ftpadp.pasvport={PASV | pasv | PORT | port}

ftpadp.file-size-check={TRUE | FALSE}

ftpadp.ftps.enable={TRUE | FALSE}
ftpadp.ftps.protocol-name={TLS | SSL}
ftpadp.ftps.implicit-mode={TRUE | FALSE}
ftpadp.ftps.data-con-secure={TRUE | FALSE}
ftpadp.ftps.server-authentication={TRUE | FALSE}

ftpadp.session.keep={TRUE | FALSE}
ftpadp.session.idle-timeout=ログインセッションアイドルタイムのタイムアウト時間
ftpadp.session.max=ログインセッションのFTPアダプタ内の最大数
```

●サーバ情報関連

`ftpadp.host-con-port`=接続する FTP サーバの制御コネクション用のポート番号 ~<数字>
(1-65535)<<21>>

接続する FTP サーバの制御コネクション用のポート番号を指定します。

FTP アダプタの要求電文でも指定が可能です。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

`ftpadp.file-name.charset`={UTF-8 | MS932} ~<<UTF-8>>

FTP サーバとの間で次の情報を送受信する際に使用する、文字セットの名称を指定します。

- 制御コネクションで送受信する情報（ファイル名など）
- LIST コマンドまたは NLST コマンドの実行時に、データコネクションを介して FTP サーバから受け取る情報（ファイルの一覧情報）

FTP アダプタの要求電文でも指定できます。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

指定できる値は次のとおりです。大文字と小文字は区別されません。

- UTF-8
文字セットとして UTF-8 を使用します。
- MS932
文字セットとして MS932 を使用します。

●FTP 設定関連

`ftpadp.ftp-type`={A | a | I | i}

転送するデータのタイプとして、次のどちらかを指定します。ここで指定した値は TYPE コマンドの引数として使用されます。

- **A または a**
ASCII 形式で転送します。
- **I または i**
image (BINARY) 形式で転送します。

FTP アダプタの要求電文でも指定が可能です。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

指定が省略された場合は、FTP プロトコルの仕様 (RFC959) に従って ASCII 形式で転送されます。

`ftpadp.ftp-mode={S | s | C | c} ~<<S>>`

転送するデータを圧縮するかどうかを指定します。ここで指定した値は MODE コマンドの引数として使用されます。

- **S または s**
ファイルを圧縮しないで転送します。
- **C または c**
ファイルを圧縮して転送します。

FTP アダプタの要求電文でも指定が可能です。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

`ftpadp.pasvport={PASV | pasv | PORT | port} ~<<PASV>>`

データ接続の接続モードを次のどちらかに指定します。

- **PASV または pasv**
PASV モードでデータ接続を設定します。
- **PORT または port**
PORT モードでデータ接続を設定します。

●ファイルサイズチェック関連

`ftpadp.file-size-check={TRUE | FALSE} ~<<FALSE>>`

送信側と受信側で、転送されたファイルのサイズが正しいかどうかを確認する機能を、実行するかどうかを指定します。

- **TRUE**
ファイルサイズを確認します。
- **FALSE**

ファイルサイズを確認しません。

●FTPS 関連

`ftpadp.ftps.enable={TRUE | FALSE} ~<<FALSE>>`

FTP サーバとの接続に FTPS を使用するかどうかを指定します。

FTP アダプタの要求電文でも指定できます。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

• TRUE

FTP サーバとの接続に FTPS を使用します。

TRUE を選択すると、制御コネクションおよびデータコネクションの通信は暗号化されます（データコネクションの通信の暗号化を抑制する設定となっている場合は、暗号化されません）。ただし、接続先の FTP サーバが FTPS による接続をサポートしている必要があります。

• FALSE

FTP サーバとの接続に通常の FTP を使用します。

FALSE を選択すると、制御コネクションおよびデータコネクションの通信は暗号化されません。

接続先の FTP サーバが FTPS の Implicit モードで動作している場合に FALSE を指定すると、FTP サーバに接続してからタイムアウトが発生するまで待ち状態となるときがあります。タイムアウト発生までの時間は、次の 2 つのタイムアウト時間のうち短い方の時間が適用されます。

- `ftpadp.control-con.connect.timeout` プロパティで指定した値（制御コネクションの接続タイムアウト時間）
この値でタイムアウトとなった場合、`ftpadp.control-con.retry.count` プロパティで指定した回数分リトライしたあと、メッセージ KDEK30407-E を出力します。
- 接続先 FTP サーバ側で設定されたタイムアウト値
この値でタイムアウトとなった場合、メッセージ KDEK30428-E を出力します。

`ftpadp.ftps.protocol-name={TLS | SSL} ~<<TLS>>`

FTP サーバとの接続で FTPS を使用する場合に使用する、セキュリティ通信用のプロトコルを指定します。この指定は、FTP サーバとの接続に FTPS を使用する場合だけ有効となります。

FTP アダプタの要求電文でも指定できます。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

• TLS

セキュリティ通信用のプロトコルに TLS を使用します。

• SSL

セキュリティ通信用のプロトコルに SSL を使用します。

`ftpadp.ftps.implicit-mode={TRUE | FALSE} ~<<FALSE>>`

FTP サーバとの接続に FTPS を使用する場合に、FTPS の Implicit モードを使用するかどうかを指定します。この指定は、FTP サーバとの接続に FTPS を使用する場合だけ有効となります。

FTP アダプタの要求電文でも指定できます。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

- **TRUE**

Implicit モード（FTP サーバに接続した直後から暗黙的に暗号化された通信が開始されるモード）を使用します。FTP サーバに接続した直後から暗黙的に暗号化された通信が開始されるモードを使用します。

- **FALSE**

Explicit モード（FTP サーバに接続したあとに FTP クライアント側から AUTH コマンドを実行して、明示的に暗号化された通信を開始するモード）を使用します。FTP サーバに接続したあとに FTP クライアント側から AUTH コマンドを実行して、明示的に暗号化された通信を開始するモードを使用します。

接続先の FTP サーバが FTPS の Implicit モードで動作している場合に FALSE を指定すると、FTP サーバに接続してからタイムアウトが発生するまで待ち状態となるときがあります。タイムアウト発生までの時間は、次の 2 つのタイムアウト時間のうち短い方の時間が適用されます。

- `ftpadp.control-con.connect.timeout` プロパティで指定した値（制御コネクションの接続タイムアウト時間）
この値でタイムアウトとなった場合、`ftpadp.control-con.retry.count` プロパティで指定した回数分リトライしたあと、メッセージ KDEK30407-E を出力します。
- 接続先 FTP サーバ側で設定されたタイムアウト値
この値でタイムアウトとなった場合、メッセージ KDEK30428-E を出力します。

`ftpadp.ftps.data-con-secure={TRUE | FALSE} ~<<TRUE>>`

FTP サーバとの接続に FTPS を使用する場合に、データコネクションの通信を暗号化するかどうかを指定します。この指定は、FTP サーバとの接続に FTPS を使用するときだけ有効となります。

FTP アダプタの要求電文でも指定できます。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

- **TRUE**

データコネクションの通信を暗号化します。

- **FALSE**

データコネクションの通信は暗号化しません。

`ftpadp.ftps.server-authentication={TRUE | FALSE} ~<<FALSE>>`

FTP サーバとの接続に FTPS を使用する場合に、FTP サーバのサーバ認証をするかどうかを指定します。この指定は、FTP サーバとの接続に FTPS を使用する時だけ有効となります。

FTP アダプタの要求電文でも指定できます。重複して指定されている場合、要求電文の値が有効になります。

- TRUE

サーバ認証をします（証明書をチェックします）。

FTPS の接続先である FTP サーバの公開鍵の証明書が信頼できるかどうかをチェックし、信頼できる場合だけ処理を実行します。

TRUE を指定する場合は、トラストストアに関する設定が必要です。トラストストアの設定に関しては、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「付録 H.2 セキュアプロトコルによる暗号化・認証（FTP インバウンドアダプタ）」を参照してください。

- FALSE

証明書をチェックしません。

FTPS の接続先である FTP サーバの公開鍵の証明書が信頼できるかどうかはチェックしないで、処理を実行します。

●セッション維持関連

`ftpadp.session.keep={TRUE | FALSE} ~<<FALSE>>`

ログインセッション維持機能の有効・無効を指定します。

- TRUE

ログインセッション維持機能を有効とします。

- FALSE

ログインセッション維持機能を無効とします。

ログインセッション維持機能については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「8.6.6 ログインセッションの維持」を参照してください。

`ftpadp.session.idle-timeout=ログインセッションアイドルタイマのタイムアウト時間 ~<数字>`
`((1-86400))<<300>>`

ログインセッションアイドルタイマのタイムアウト時間を秒単位で指定します。

未使用時間がこの指定値に達したログインセッションは、破棄されます。

`ftpadp.session.max=ログインセッションの FTP アダプタ内の最大数 ~<数字>`
`((1-100000))<<100>>`

FTP アダプタ内の最大ログインセッション数を指定します。

0 を指定した場合は、最大数は無制限となります。

この最大数を越えた数のログインセッションを確立しようとした場合、最もアイドル時間が長いログインセッションが破棄されます。すべてのログインセッションがFTPアダプタのオペレーションで使用中の場合は、オペレーションの終了を待って破棄します。

(c) FTP アダプタ実行環境プロパティファイルでだけ設定できるプロパティ

次に示すプロパティは、FTP アダプタ実行環境プロパティファイルで設定するプロパティです。運用時に管理する定義ファイルの数を削減したい場合は、FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルを利用してください。

```
ftpadp.client-ipaddr=HCSCサーバのIPアドレス
ftpadp.client-con-port.min=FTPアダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値
ftpadp.client-con-port.max=FTPアダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値

ftpadp.control-con.retry.count=制御コネクションを確立できなかったときのリトライ回数
ftpadp.control-con.retry.interval=制御コネクションを確立できなかったときのリトライ間隔
ftpadp.control-con.connect.timeout=制御コネクションの接続タイムアウト時間

ftpadp.client-pasv-port.min=データコネクションがPASVモードの場合のFTPアダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最小値
ftpadp.client-pasv-port.max=データコネクションがPASVモードの場合のFTPアダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最大値

ftpadp.data-con.retry.count=PASVモードでデータコネクションを確立できなかったときのリトライ回数
ftpadp.data-con.retry.interval=PASVモードでデータコネクションを確立できなかったときのリトライ間隔
ftpadp.data-con.connect.timeout=データコネクションの接続タイムアウト時間

ftpadp.listen-port.min=データコネクションがPORTモードの場合のFTPアダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最小値
ftpadp.listen-port.max=データコネクションがPORTモードの場合のFTPアダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最大値

ftpadp.listen-port.reuse={TRUE | FALSE}

ftpadp.listen.timeout=Listenタイムアウト時間

ftpadp.data-con.read.timeout=パッシブモードでのデータコネクションの受信バッファからの読み込みタイムアウト時間

ftpadp.exptrace.filenum=例外ログの面数
ftpadp.exptrace.filesize=例外ログの1面当たりの最大サイズ

ftpadp.ftpprotocoltrace.filenum=プロトコルトレースファイルの面数
ftpadp.ftpprotocoltrace.filesize=プロトコルトレースファイルの1面当たりの最大サイズ

ftpadp.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}
ftpadp.methodtrace.filepath=保守用ログの出力先ディレクトリの絶対パス
ftpadp.methodtrace.filenum=保守用ログの面数
ftpadp.methodtrace.filesize=保守用ログの1面当たりの最大サイズ

ftpadp.messagelog.level={0 | 10 | 20}

ftpadp.account-inf-filepath=FTPアダプタアカウント定義ファイルの絶対パス
```

ftpadp.cscthrough-filepath=FTPコマンド許可リスト定義ファイルの絶対パス

ftpadp.read-lock.retry.count=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数
ftpadp.read-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間隔
ftpadp.write-lock.retry.count=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ回数
ftpadp.write-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ間隔

ftpadp.data-con-put.timeout=データ転送時タイムアウト時間
ftpadp.data-con-get.timeout=データ取得時タイムアウト時間

ftpadp.ftp-command-reply.timeout=リプライタイムアウト時間

ftpadp.put-client-buffer.size=ファイル転送（送信）するときのクライアントバッファサイズ
ftpadp.get-client-buffer.size=ファイル転送（受信）するときのクライアントバッファサイズ

●クライアント情報関連（基本設定）

ftpadp.client-ipaddr=HCSC サーバの IP アドレス

HCSC サーバの IP アドレスを指定します。ここで指定した IP アドレスが制御コネクションおよびデータコネクションで使用されます。

このプロパティの指定を省略した場合、システムによって自動的に任意の IP アドレスが割り当てられます。IP アドレスは java.net.NetworkInterface クラスでまとめて取得し、そのうち最初に見つかった実 IP アドレスが割り当てられます。実 IP アドレスが存在しない場合はループバック IP アドレスが割り当てられます。

■ 注意事項

Windows を使用する場合、ループバック IP アドレスを指定すると、FTP 接続に失敗する場合があります。実 IP アドレスを設定してください。

ftpadp.client-con-port.min=FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値 ~<数字>
((1024-65535))

FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値を指定します。

指定できる値を次に示します。

- ftpadp.client-con-port.max プロパティ（FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値）以下の範囲の値
- ftpadp.client-pasv-port.min プロパティ（データコネクションが PASV モードの場合の FTP アダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最小値）から、ftpadp.client-pasv-port.max プロパティ（データコネクションが PASV モードの場合の FTP アダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最大値）までに指定した範囲と重複しない値
- ftpadp.listen-port.min プロパティ（データコネクションが PORT モードの場合の FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最小値）から、ftpadp.listen-port.max プロパ

ティ（データコネクションが PORT モードの場合の FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最大値）までに指定した範囲と重複しない値

上記以外の値を指定した場合、FTP アダプタの起動時、または FTP アダプタの要求電文の<pasvport>でデータコネクションの接続モードを変更したリクエストの処理時にエラーとなります。

注意事項

ftpadp.client-con-port.max プロパティ（FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値）を省略した場合はこのプロパティも省略してください。省略しない場合は、FTP アダプタの起動時にエラーとなります。

このプロパティの指定を省略した場合、システムによって自動的に任意のポート番号が設定されます。

ftpadp.client-con-port.max=FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値 ~<数字>
((1024-65535))

FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値を指定します。

指定できる値を次に示します。

- ftpadp.client-con-port.min プロパティ（FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値）以上の範囲の値
- ftpadp.client-pasv-port.min プロパティ（データコネクションが PASV モードの場合の FTP アダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最小値）から、ftpadp.client-pasv-port.max プロパティ（データコネクションが PASV モードの場合の FTP アダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最大値）までに指定した範囲と重複しない値
- ftpadp.listen-port.min プロパティ（データコネクションが PORT モードの場合の FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最小値）から、ftpadp.listen-port.max プロパティ（データコネクションが PORT モードの場合の FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最大値）までに指定した範囲と重複しない値

上記以外の値を指定した場合、FTP アダプタの起動時、または FTP アダプタの要求電文の<pasvport>でデータコネクションの接続モードを変更したリクエストの処理時にエラーとなります。

注意事項

ftpadp.client-con-port.min プロパティ（FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値）を省略した場合はこのプロパティも省略してください。省略しない場合は、FTP アダプタの起動時にエラーとなります。

このプロパティの指定を省略した場合、システムによって自動的に任意のポート番号が設定されます。

●制御コネクションの接続タイムアウト関連

ftpadp.control-con.retry.count=制御コネクションを確立できなかったときのリトライ回数 ~<数字>
>((0-10000))<<5>>

制御コネクションを確立できなかったときのリトライ回数を指定します。0を指定した場合、リトライしません。

ftpadp.control-con.retry.interval=制御コネクションを確立できなかったときのリトライ間隔 ~<数字>
>((0-86400))<<2>>

制御コネクションを確立できなかったときのリトライ間隔を秒単位で指定します。0を指定した場合、間隔を空けないでリトライします。

ftpadp.control-con.connect.timeout=制御コネクションの接続タイムアウト時間 ~<数字>
>((1-3600))<<10>>

制御コネクションの接続のタイムアウト時間を秒単位で指定します。

●クライアント情報関連 (データコネクションがPASVモードの場合)

ftpadp.client-pasv-port.min=データコネクションがPASVモードの場合のFTPアダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最小値 ~<数字>((1024-65535))

データコネクションがPASVモードの場合、FTPアダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最小値を指定します。このプロパティはデータコネクションがPASVモードの場合だけ有効になります。

指定できる値を次に示します。

- ftpadp.client-pasv-port.max プロパティ (データコネクションがPASVモードの場合のFTPアダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最大値) 以下の範囲の値
- ftpadp.client-con-port.min プロパティ (FTPアダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値) から、ftpadp.client-con-port.max プロパティ (FTPアダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値) までに指定した範囲と重複しない値

上記以外の値を指定した場合、FTPアダプタの起動時、またはFTPアダプタの要求電文の<pasvport>でデータコネクションの接続モードを変更したリクエストの処理時にエラーとなります。

注意事項

ftpadp.client-pasv-port.max プロパティ (データコネクションがPASVモードの場合のFTPアダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最大値) を省略した場合はこのプロパティも省略してください。省略しない場合は、FTPアダプタの起動時にエラーとなります。

このプロパティの指定を省略した場合、システムによって自動的に任意のポート番号が設定されます。

このプロパティの値と ftpadp.client-pasv-port.max プロパティの値の範囲内にある値をポート番号に指定します。

指定した値がポート番号として使用できなかった場合に範囲内にある、ほかの値をポート番号に指定しリトライを実施します。

リトライを実施する場合、メッセージ KDEK30410-W が出力されます。

このプロパティを省略してデータコネクションの確立に失敗した場合、または範囲内の値すべてがデータコネクションのポート番号として使用できなかった場合、メッセージ KDEK30409-E が出力されます。

ftpadp.client-pasv-port.max=データコネクションが PASV モードの場合の FTP アダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最大値 ~<数字>((1024-65535))

データコネクションが PASV モードの場合、FTP アダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最大値を指定します。このプロパティはデータコネクションが PASV モードの場合だけ有効になります。

指定できる値を次に示します。

- ftpadp.client-pasv-port.min プロパティ (データコネクションが PASV モードの場合の FTP アダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最小値) 以上の範囲の値
- ftpadp.client-con-port.min プロパティ (FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値) から、ftpadp.client-con-port.max プロパティ (FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値) までに指定した範囲と重複しない値

上記以外の値を指定した場合、FTP アダプタの起動時にエラーとなります。

次の場合、このプロパティを省略してください。省略しない場合は、FTP アダプタの起動時、または FTP アダプタの要求電文の<pasvport>でデータコネクションの接続モードを変更したリクエストの処理時にエラーとなります。

注意事項

ftpadp.client-pasv-port.min プロパティ (データコネクションが PASV モードの場合の FTP アダプタがデータコネクション確立するポート番号の範囲の最小値) を省略した場合はこのプロパティも省略してください。省略しない場合は、FTP アダプタの起動時にエラーとなります。

このプロパティの指定を省略した場合、システムによって自動的に任意のポート番号が設定されます。

このプロパティの値と ftpadp.client-pasv-port.min プロパティの値の範囲内にある値をポート番号に指定します。

指定した値がポート番号として使用できなかった場合に範囲内にある、ほかの値をポート番号に指定しリトライを実施します。

リトライを実施する場合、メッセージ KDEK30410-W が出力されます。

このプロパティを省略してデータコネクションの確立に失敗した場合、または範囲内の値すべてがデータコネクションのポート番号として使用できなかった場合、メッセージ KDEK30409-E が出力されます。

●データコネクションの接続タイムアウト関連

`ftpadp.data-con.retry.count`=PASV モードでデータコネクションを確立できなかったときのリトライ回数 ~<数字>((0-10000))<<5>>

PASV モードでデータコネクションを確立できなかったときのリトライ回数を指定します。0 を指定した場合、リトライしません。

リトライをする場合、メッセージ KDEK30410-W を出力します。リトライ回数がこの値以上になった場合、メッセージ KDEK30409-E が出力されます。

`ftpadp.data-con.retry.interval`=PASV モードでデータコネクションを確立できなかったときのリトライ間隔 ~<数字>((0-86400))<<2>>

PASV モードでデータコネクションを確立できなかったときのリトライ間隔を秒単位で指定します。0 を指定した場合、間隔を空けないでリトライします。

`ftpadp.data-con.connect.timeout`=データコネクションの接続タイムアウト時間 ~<数字>((1-3600))<<10>>

PASV モードでの、データコネクション接続のタイムアウト時間を秒単位で指定します。

●クライアント情報関連 (データコネクションが PORT モードの場合)

`ftpadp.listen-port.min`=データコネクションが PORT モードの場合の FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最小値 ~<数字>((1024-65535))<<49152>>

データコネクションが PORT モードの場合の、FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最小値を指定します。

このプロパティはデータコネクションが PORT モードの場合だけ有効になります。

指定できる値を次に示します。

- `ftpadp.listen-port.max` プロパティ (データコネクションが PORT モードの場合の FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最大値) 以下の範囲の値
- `ftpadp.client-con-port.min` プロパティ (FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値) から、`ftpadp.client-con-port.max` プロパティ (FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値) までに指定した範囲と重複しない値

上記以外の値を指定した場合、FTP アダプタの起動時、または FTP アダプタの要求電文の<pasvport>でデータコネクションの接続モードを変更したリクエストの処理時にエラーとなります。

このプロパティと ftpadp.listen-port.max プロパティで指定した範囲内の値を待ち受けるポート番号に指定します。

指定した値がポート番号として使用できなかった場合、範囲内にある、ほかの値をポート番号に指定しリトライを実施します。

リトライを実施する場合、メッセージ KDEK30410-W が出力されます。

範囲内の値すべてが待ち受けるポート番号として使用できなかった場合、メッセージ KDEK30409-E が出力されます。

ftpadp.listen-port.max=データコネクションが PORT モードの場合の FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最大値 ~<数字>((1024-65535))<<65535>>

データコネクションが PORT モードの場合、FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最大値を指定します。

このプロパティはデータコネクションが PORT モードの場合だけ有効になります。

指定できる値を次に示します。

- ftpadp.listen-port.min プロパティ (データコネクションが PORT モードの場合の FTP アダプタがデータコネクションを待ち受けるポート番号の範囲の最小値) 以上の範囲の値
- ftpadp.client-con-port.min プロパティ (FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最小値) から、ftpadp.client-con-port.max プロパティ (FTP アダプタの制御コネクションポート番号の範囲の最大値) までに指定した範囲と重複しない値

上記以外の値を指定した場合、FTP アダプタの起動時、または FTP アダプタの要求電文の <pasvport> でデータコネクションの接続モードを変更したリクエストの処理時にエラーとなります。

このプロパティと ftpadp.listen-port.min プロパティで指定した範囲内の値を待ち受けるポート番号に指定します。

指定した値がポート番号として使用できなかった場合、範囲内にある、ほかの値をポート番号に指定しリトライを実施します。

リトライを実施する場合、メッセージ KDEK30410-W が出力されます。

範囲内の値すべてが待ち受けるポート番号として使用できなかった場合、メッセージ KDEK30409-E が出力されます。

●ポート再利用関連

ftpadp.listen-port.reuse={TRUE | FALSE} ~<<TRUE>>

OS が Linux か AIX で、かつデータコネクションの接続モードが PORT モードの場合に、TIME_WAIT 状態のポートを再利用するかどうかを指定します。データコネクションの接続モードが PORT モード以外の場合、このプロパティの指定は無視されます。

再利用するポートは ftpadp.listen-port.min の設定値から ftpadp.listen-port.max の設定値までの範囲のポート番号が対象です。

- TRUE

TIME_WAIT 状態のポートを再利用します。

また、SO_REUSEADDR が有効になります。

このプロパティを省略した場合や、プロパティ名だけが指定された場合も、TRUE 選択時と同じ状態となります。

注意事項

PASV モードで使用するポート番号 (ftpadp.client-pasv-port.min の設定値から ftpadp.client-pasv-port.max の設定値までの範囲) の指定有無によって、ポート番号に次に示す重複がないよう注意してください。重複する場合の動作は保証しません。

- PASV モードで使用するポート番号を指定しているとき

PORT モードで使用するポート番号の範囲 (ftpadp.listen-port.min の設定値から ftpadp.listen-port.max の設定値までの範囲) と重複しないようにしてください。

- PASV モードで使用するポート番号を指定していないとき

OS の動的ポートの使用できる範囲を PORT モードで使用するポート番号の範囲 (ftpadp.listen-port.min の設定値から ftpadp.listen-port.max の設定値までの範囲) と重複しないようにしてください。

- FALSE

TIME_WAIT 状態のポートを再利用しません。

また、SO_REUSEADDR が無効になります。

Windows でこのプロパティを指定した場合は、FTP アダプタの起動時にエラーとなります。

注意事項

Linux または AIX でこのプロパティを指定する場合は、HCSC サーバ内にあるすべての PORT モードの FTP アダプタに同じ値を指定してください。同じ値を指定しなかった場合の動作は保証しません。

●Listen タイムアウト関連

ftpadp.listen.timeout=Listen タイムアウト時間 ~<数字>((1-3600))<<60>>

PORT モードの場合、PORT コマンドのリプライを受けたあと、Listen 状態での監視時間を秒単位で指定します。指定した時間を経過してもサーバからデータコネクションの接続要求がなかった場合は例外（エラー）が発生します。

●データ読み込みタイムアウト関連

`ftpadp.data-con.read.timeout`=パッシブモードでのデータコネクションの受信バッファからの読み込みタイムアウト時間 ~<数字>((0-3600))<<0>>

パッシブモードでの、データコネクションの受信バッファからの読み込みタイムアウト時間を秒単位で設定します。

0を設定した場合はタイムアウトしません。

●例外ログ関連

`ftpadp.exptrace.filenum`=例外ログの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

例外ログの面数を指定します。

`ftpadp.exptrace.filesize`=例外ログの1面当たりの最大サイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>

例外ログの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

●FTP プロトコルトレース関連

`ftpadp.ftpprotocoltrace.filenum`=プロトコルトレースファイルの面数 ~<数字>((1-16)) <<8>>

プロトコルトレースファイルの面数を指定します。

`ftpadp.ftpprotocoltrace.filesize`=プロトコルトレースファイルの1面当たりの最大サイズ ~<数字>((4096-2147483647)) <<2097152>>

プロトコルトレースファイルの1面当たりの最大サイズ数をバイト単位で指定します。

●保守用ログ関連

`ftpadp.methodtrace.level`={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>

保守用ログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
エラー情報（例外発生原因）	○	○	○	○	○
リクエストサービスマソッドの入口／出口情報（クラス名，メソッド名，引数，戻り値）	×	○	○	○	○

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
外部 (BP など) のインターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	×	○	○	○
コンポーネント内インターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	×	×	○	○
デバッグ情報 (処理の分岐などの情報)	×	×	×	×	○

(凡例)

○ : 出力されます。

× : 出力されません。

`ftpadp.methodtrace.filepath=保守用ログの出力先ディレクトリの絶対パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<J2EE サーバのログ出力先ディレクトリ>>><<<サービス ID>>>`

保守用ログの出力先ディレクトリを絶対パスで指定します。

<J2EE サーバのログ出力先ディレクトリ>は `usrconf.cfg` (J2EE サーバ用オプション定義ファイル) の `ejb.server.log.directory` で指定します。

指定したパスの直下にサービス ID のディレクトリが作成され、そのディレクトリの中に保守用ログが作成されます。なお、保守用ログは「`cscftpadpmtd_<HCSC サーバ名>_<面数>.log`」という名前で作成されます。

存在しないディレクトリを指定した場合、またはサービス ID のディレクトリを作成できなかった場合、メッセージ `KDEK20903-W` を出力して、デフォルトの出力先ディレクトリに出力されます。

`ftpadp.methodtrace.filenum=保守用ログの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>`

保守用ログの面数を指定します。

`ftpadp.methodtrace.filesize=保守用ログの 1 面当たりの最大サイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>`

保守用ログの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

●メッセージログ関連

`ftpadp.messagelog.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>`

メッセージログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル		
	0	10	20
エラー情報 ・ 例外または障害の発生原因	○	○	○
警告情報 ・ 発生した問題など	×	○	○
インフォメーション ・ 電文や引数の内容 ・ HCSC-Messaging の状態の変更（起動時や終了時） ・ コマンド受付時と実行完了時 ・ イベントの通知	×	×	○

(凡例)

- ：出力されます。
- ×：出力されません。

●パス関連

`ftpadp.account-inf-filepath`=FTP アダプタアカウント定義ファイルの絶対パス ～<文字列（2 バイト文字含む） および空白>

FTP アダプタアカウント定義ファイルのパスを絶対パスで指定します。

`ftpadp.cscthrough-filepath`=FTP コマンド許可リスト定義ファイル（FTP アダプタ用）の絶対パス ～<文字列（2 バイト文字含む） および空白>

FTP コマンド許可リスト定義ファイル（FTP アダプタ用）のパスを絶対パスで指定します。指定を省略した場合、ユーザ指定の FTP コマンドは、転送前、転送後、リストコマンド実行前、リストコマンド実行後、ファイルのリネーム前、およびファイルのリネーム後には実行できません。

●排他取得タイムアウト関連

`ftpadp.read-lock.retry.count`=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数 ～<数字> <<0>>

共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数を指定します。

`ftpadp.read-lock.retry.interval`=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間隔 ～<数字> <<1>>

共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間隔を秒単位で指定します。

`ftpadp.write-lock.retry.count`=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ回数 ～<数字> <<0>>

共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ回数を指定します。

ftpadp.write-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ間隔 ~<数字>((1-1024))<<1>>

共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ間隔を秒単位で指定します。

●データ転送取得タイムアウト関連

ftpadp.data-con-put.timeout=データ転送時タイムアウト時間 ~<数字>((1-86400))<<60>>

データ送信時に、ファイル全体の送信が完了するまでの監視時間を秒単位で指定します。指定した時間を経過しても送信が完了しない場合は例外（エラー）が発生します。

ftpadp.data-con-get.timeout=データ取得時タイムアウト時間 ~<数字>((1-86400))<<60>>

データ受信時に、ファイル全体の受信が完了するまでの監視時間を秒単位で指定します。指定した時間を経過しても受信が完了しない場合は例外（エラー）が発生します。

●FTP コマンドリプライタイムアウト関連

ftpadp.ftp-command-reply.timeout=リプライタイムアウト時間 ~<数字>((1-3600))<<60>>

FTP コマンドを発行して、リプライされるまでの監視時間を秒単位で指定します。指定した時間を経過してもコマンドのリプライがなかった場合は、例外（エラー）が発生します。

●バッファサイズ関連

ftpadp.put-client-buffer.size=ファイル転送（送信）するときのクライアントバッファサイズ ~<数字>((512-262144))<<40960>>

ファイル転送（送信）するときのクライアントバッファのメモリのサイズを、バイト単位で指定します。

この値は、メモリが制限されるときや転送効率を上げたいときなどに変更してください。なお、転送効率は回線の速度や利用状況、CPU の性能などによって変動します。

ftpadp.get-client-buffer.size=ファイル転送（受信）するときのクライアントバッファサイズ ~<数字>((512-262144))<<40960>>

ファイル転送（受信）するときのクライアントバッファのメモリのサイズを、バイト単位で指定します。

この値は、メモリが制限されるときや転送効率を上げたいときなどに変更してください。なお、転送効率は回線の速度や利用状況、CPU の性能などによって変動します。

(4) 注意事項

- 次に示すプロパティは、PORT モードのすべての FTP アダプタで同じ値を設定する必要があるため、FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルで定義することを推奨します。FTP アダプタごとに異なる値が設定された場合の動作は保証しません。

- ftpadp.listen-port.reuse

- パスを指定する場合の注意事項を次に示します。
 - 相対パス、親ディレクトリ表現 (「..¥」, 「../」), およびカレントディレクトリ表現 (「.¥」, 「./」) を含むパスは指定しないでください。
 - シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
 - Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

6.8.4 FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル

(1) 形式

ファイルの記述形式は FTP アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。記述形式については、[\[6.8.3 FTP アダプタ実行環境プロパティファイル\]](#) を参照してください。

(2) 機能

すべての FTP アダプタに共通する構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

FTP アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- FTP アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の FTP アダプタ
作成手順については [「6.8.3 FTP アダプタ実行環境プロパティファイル」](#) を参照してください。
- FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての FTP アダプタ

これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1 つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。

プロパティファイル間で同じ内容が複数設定された場合のプロパティの優先度については、[「6.8.3 FTP アダプタ実行環境プロパティファイル」](#) を参照してください。

(b) 作成手順

FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、FTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%templates%adpftp.properties
```

2. 編集後のファイルを次のディレクトリに格納します。

なお、ファイル名「adpftp.properties」は変更しないでください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%common
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%<HCSC サーバ名>%common
```

サブディレクトリ名の<HCSC サーバ名>と「common」を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないなので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者（Service Coordinator 管理者）がアクセスできるよう、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

設定できるプロパティは、FTP アダプタ実行環境プロパティファイルと一部差異があります。設定できるプロパティについては、「[6.8.3 FTP アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

6.8.5 FTP 受付コンフィグファイル

(1) 形式

```
[urecp-ftp.permission-def.filepath=FTP実行許可リスト定義ファイルのパス]  
[urecp-ftp.ftp-command-allow.filepath=FTPコマンド許可リスト定義ファイルのパス]  
[urecp-ftp.request-timeout=FTP受付後のビジネスプロセスの処理時間]  
[urecp-ftp.resident-thread.count=FTP受付後の処理時間の監視で利用する常駐スレッド数]  
[urecp-ftp.timer-thread.maximum=FTP受付の処理時間の監視で利用する最大スレッド数]  
[urecp-ftp.list-command-option.filepath=リストコマンドオプション定義ファイルのパス]  
[urecp-ftp.read-lock.retry.count=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数]  
[urecp-ftp.read-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間  
隔]  
[urecp-ftp.write-lock.retry.count=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ回数]  
[urecp-ftp.write-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ間  
隔]
```

(2) 機能

FTP 受付をセットアップしたあとに、設定変更が発生する頻度が高い内容を設定します。FTP 受付開始時に、FTP 受付コンフィグファイルに設定した内容が有効になります。

FTP 受付の実行環境に依存するパラメタを設定します。

FTP 受付コンフィグファイルは、FTP 受付ごとに設定する個別定義ファイルと、すべての FTP 受付に適用される共通定義ファイルの 2 種類があります。すべての FTP 受付に適用される共通定義ファイルのことを FTP 受付共通コンフィグファイルと呼びます。

FTP 受付コンフィグファイルと FTP 受付共通コンフィグファイルの両方が設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。同じプロパティが設定されている場合、FTP 受付コンフィグファイルの内容が有効になります。

FTP 受付コンフィグファイル、および FTP 受付共通コンフィグファイルは、テンプレートファイルを基に作成します。

●FTP 受付コンフィグファイルの作成手順

FTP 受付コンフィグファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、FTP 受付コンフィグファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftp%templates%ftp%_config.properties
```

2. 編集後の FTP 受付コンフィグファイルのファイル名を「<受付 ID>.properties」という名称に変更し、次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftp%ftp%common
```

●FTP 受付共通コンフィグファイルの作成手順

FTP 受付共通コンフィグファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、FTP 受付共通コンフィグファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftp%templates%ftp%_config.properties
```

2. 編集後の FTP 受付共通コンフィグファイルを次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftp%ftp%common
```

ファイル名は変更しないでください。

(3) 設定できるプロパティ

urecp-ftp.permission-def.filepath=FTP 実行許可リスト定義ファイルのパス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白>

FTP 実行許可リスト定義ファイルのパスを絶対パスで指定します。

このプロパティの指定を、個別定義ファイルと共通定義ファイルの両方で省略した場合、すべてのユーザーに対して、FTP 受付が関連づけられたビジネスプロセスの実行を許可します。

`urecp-ftp.ftp-command-allow.filepath=FTP コマンド許可リスト定義ファイルのパス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白>`

FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP 受付用) のパスを絶対パスで指定します。

個別定義ファイルと共通定義ファイルの両方でこのプロパティを省略した場合、転送前、転送後、リストコマンド実行前、およびリストコマンド実行後にユーザ指定の FTP コマンドの実行を許可しません。

`urecp-ftp.request-timeout=FTP 受付後のビジネスプロセスの処理時間 ~<数字>`
`((0-2147483647))<<0>>`

FTP 受付後にビジネスプロセスに要求電文を渡して応答電文が返ってくるまでの処理時間を秒単位で指定します。

- 0 を指定した場合や、キーまたは値を省略した場合は、処理時間は監視されません。
- 1 以上を指定した場合、処理時間を監視するためにスレッドが常駐します。常駐スレッド数は `urecp-ftp.resident-thread.count` プロパティで指定してください。

数字以外の値や範囲外の値が指定された場合は、コマンド実行時にエラーとなります。

`urecp-ftp.resident-thread.count=FTP 受付後の処理時間の監視で利用する常駐スレッド数 ~<数字>`
`((0-2147483647))<<0>>`

FTP 受付後にビジネスプロセスでの処理時間を監視する際、常駐させるスレッド数を指定します。常駐スレッドは FTP 受付の起動時に生成されます。

また、監視を実行しない場合はスレッドが生成されないため、このプロパティに指定された値は無視されます。

数字以外の値や範囲外の値が指定された場合は、コマンド実行時にエラーとなります。また、`urecp-ftp.timer-thread.maximum` プロパティの指定値より大きい値を指定した場合、コマンド実行時にエラーとなります。

`urecp-ftp.timer-thread.maximum=FTP 受付の処理時間の監視で利用する最大スレッド数 ~<数字>`
`((0-2147483647))<<FTP 受付定義ファイルの urecp-ftp.pooled-instance.maximum の指定値>>`

FTP 受付の処理時間の監視で利用する最大スレッド数を指定します。処理時間を監視しない場合はスレッドが生成されないため、このプロパティに指定された値は無視されます。

キーまたは値を省略した場合は、デフォルト値として FTP 受付定義ファイルの `urecp-ftp.pooled-instance.maximum` (受付処理およびカスタム受付フレームワークのプール内のインスタンスの最大数) の指定値が適用されます。`csccompoconfig` コマンドによる変更は適用されません。

次の場合、最大スレッド数は 1 となります。

- 0 を指定した場合
- デフォルト値が適用された際に、FTP 受付定義ファイルの `urecp-ftp.pooled-instance.maximum` の指定値が 0 である場合

`urecp-ftp.list-command-option.filepath`=リストコマンドオプション定義ファイルのパス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白>

リストコマンドオプション定義ファイルのパスを絶対パスで指定します。

このプロパティの指定を、個別定義ファイルと共通定義ファイルの両方で省略した場合、リストコマンドの引数に指定された情報はすべてパスの情報と解釈されます。

`urecp-ftp.read-lock.retry.count`=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数 ~<数字> ((0-1024))<<0>>

共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数を指定します。共通フォルダを使用しない場合、ファイルの共有ロックは行われなため、このプロパティに指定された値は無視されます。

キーまたは値を省略した場合は、デフォルト値で動作します。

数字以外の値や範囲外の値が指定された場合は、コマンド実行時にエラーとなります。

`urecp-ftp.read-lock.retry.interval`=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間隔 ~<数字> ((1-1024))<<1>>

共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間隔を秒単位で指定します。共通フォルダを使用しない場合、ファイルの共有ロックは行われなため、このプロパティに指定された値は無視されます。

キーまたは値を省略した場合は、デフォルト値で動作します。

数字以外の値や範囲外の値が指定された場合は、コマンド実行時にエラーとなります。

`urecp-ftp.write-lock.retry.count`=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ回数 ~<数字> ((0-1024))<<0>>

共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ回数を指定します。共通フォルダのファイルを削除しない場合、ファイルの占有ロックは行われなため、このプロパティに指定された値は無視されます。

キーまたは値を省略した場合は、デフォルト値で動作します。

数字以外の値や範囲外の値が指定された場合は、コマンド実行時にエラーとなります。

`urecp-ftp.write-lock.retry.interval`=共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ間隔 ~<数字> ((1-1024))<<1>>

共通フォルダのファイルの占有ロック失敗時のリトライ間隔を秒単位で指定します。共通フォルダのファイルを削除しない場合、ファイルの占有ロックは行われなため、このプロパティに指定された値は無視されます。

キーまたは値を省略した場合は、デフォルト値で動作します。

数字以外の値や範囲外の値が指定された場合は、コマンド実行時にエラーとなります。

(4) 記述例

記述例を次に示します。

- Windows の場合

```
urecp-ftp.permission-def.filepath=C:¥¥my_config¥¥permission_A.properties
urecp-ftp.ftp-command-allow.filepath=C:¥¥my_config¥¥command_allow_X.properties
urecp-ftp.list-command-option.filepath=C:¥¥my_config¥¥list_command_option.txt
```

- UNIX の場合

```
urecp-ftp.permission-def.filepath=/my_config/permission_A.properties
urecp-ftp.ftp-command-allow.filepath=/my_config/command_allow_X.properties
urecp-ftp.list-command-option.filepath=/my_config/list_command_option.txt
```

(5) 注意事項

パスを指定する場合の注意事項を次に示します。

- 相対パス、親ディレクトリ表現 ([..¥], [../]), およびカレントディレクトリ表現 ([.¥], [./]) を含むパスは指定しないでください。
- シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
- Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

6.8.6 FTP コマンド許可リスト定義ファイル

(1) 形式

```
[ftp-command.allow=実行を許可するFTPコマンド]
[ftp-command.site.allow=SITEコマンドで実行を許可するコマンド]
```

(2) 機能

実行を許可する FTP コマンドを設定します。指定した FTP コマンドは次に示すタイミングで実行できます。

- 転送前・転送後
- リストコマンドの実行前・実行後
- ファイルのリネーム前・リネーム後 (FTP アダプタの場合)

FTP コマンド許可リスト定義ファイルには、FTP アダプタ用と FTP 受付用の 2 種類があります。FTP 受付または FTP アダプタの開始時に、FTP コマンド許可リスト定義ファイルに設定した内容が有効になります。

FTP アダプタ用と FTP 受付用とで、作成手順は次のように異なります。

(a) FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP 受付用) の作成手順

FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP 受付用) は次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP 受付用) を定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftprecp%templates%ftp_command_allow.properties
```

2. 編集後の、FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP 受付用) を次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftprecp%common
```

ファイル名は変更しないでください。

参考

次のプロパティを指定した場合、FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP 受付用) を任意のパスに任意のファイル名で格納できます。

- FTP 受付コンフィグファイルの urecp-ftp.command.allow.filepath プロパティ

このプロパティを省略した場合、手順 2. で示したディレクトリに格納されている FTP コマンド許可リスト定義ファイルが利用されます。手順 2. で示したディレクトリに FTP コマンド許可リスト定義ファイルが格納されていない場合、すべての FTP コマンドの実行を許可しません。

(b) FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP アダプタ用) の作成手順

FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP アダプタ用) は次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP アダプタ用) を定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%templates%cscthrough.properties
```

2. 編集後の、FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP アダプタ用) を次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%common
```

ファイル名は変更しないでください。

参考

次のプロパティを指定した場合、FTP コマンド許可リスト定義ファイル (FTP アダプタ用) を任意のパスに任意のファイル名で格納できます。

- FTP アダプタ実行環境プロパティファイルの ftpadp.cscthrough-filepath プロパティ

このプロパティを省略した場合、手順 2. で示したディレクトリに格納されている FTP コマンド許可リスト定義ファイルが利用されます。手順 2. で示したディレクトリに FTP コマンド許可リスト定義ファイルが格納されていない場合、すべての FTP コマンドの実行を許可しません。

(3) 設定できるプロパティ

ftp-command.allow=実行を許可する FTP コマンド ~<文字列または半角アスタリスク (*) >

ビジネスプロセスで実行することを許可する FTP コマンドを指定します。大文字と小文字は区別されません。

このプロパティの指定を省略した場合、SITE コマンド以外のすべての FTP コマンドの実行を許可しません。

注意事項

- このプロパティの設定は、FTP 受付コンフィグファイルまたは FTP アダプタ実行環境プロパティファイルに、この定義ファイルのパスを設定している FTP 受付または FTP アダプタにだけ適用されます。
- SITE コマンドの引数として指定するコマンドは、ftp-command.site.allow プロパティで許可するかどうかを指定するため、このプロパティに SITE コマンドを指定する必要はありません。
- 複数のコマンドを指定する場合は、「コマンド,コマンド,...」のようにコンマ (,) 区切りで指定します。コンマ前後の半角スペースやタブ文字は無視されます。
- 半角アスタリスク (*) だけを指定した場合、サービスプラットフォームでサポートする SITE コマンド以外のすべての FTP コマンドが許可されます。
- 次に示すコマンドは、サービスプラットフォームでサポートしていないため、指定しても許可されません。半角アスタリスク (*) を指定している場合も、同様に許可されません。

STOR コマンド

APPE コマンド

STOU コマンド

RETR コマンド

LIST コマンド

NLST コマンド

ログインセッション維持機能が有効な場合の QUIT コマンド

ftp-command.site.allow=SITE コマンドで実行を許可するコマンド ~<文字列または半角アスタリスク (*) >

ビジネスプロセスで実行することを許可する、FTP サーバが独自にサポートしているコマンドを指定します。このプロパティでは、SITE コマンドの第 1 引数として指定されるコマンドが対象になります。大文字と小文字は区別されません。

このプロパティの指定を省略した場合、すべての SITE コマンドの実行を許可しません。

注意事項

- このプロパティの設定は、FTP 受付コンフィグファイルまたは FTP アダプタ実行環境プロパティファイルに、この定義ファイルのパスを設定している FTP 受付または FTP アダプタにだけ適用されます。
- SITE FSIZE コマンドは、FTP インバウンドアダプタで処理されるので、このプロパティの値に FSIZE を指定しても無視されます。
- 複数のコマンドを指定する場合は、「コマンド,コマンド,…」のようにコンマ (,) 区切りで指定します。コンマ前後の半角スペースやタブ文字は無視されます。
- 半角アスタリスク (*) だけを指定した場合、FSIZE 以外のすべての SITE コマンドが許可されます。

(4) 記述例

記述例を次に示します。

```
ftp-command.allow=STAT, RNFR, RNT0, DELE, RMD
ftp-command.site.allow=CHMOD, UMASK
```

記述例の詳細を次に示します。

- 許可する FTP コマンド (SITE コマンド以外) : STAT, RNFR, RNT0, DELE, および RMD コマンド
- 許可する SITE コマンド : CHMOD, および UMASK コマンド

6.8.7 FTP 実行許可リスト定義ファイル

(1) 形式

```
[urecp-ftp.permission.allow=実行を許可するユーザ名]
[urecp-ftp.permission.deny=実行を許可しないユーザ名]
```

(2) 機能

FTP 受付に関連づけられたビジネスプロセスの実行を許可する、または許可しないユーザを設定します。

FTP 実行許可リスト定義ファイルは、テンプレートファイルを基に作成します。

FTP 実行許可リスト定義ファイルは、次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、FTP 実行許可リスト定義ファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftprecp%templates%ftp_per  
mission_allow.properties
```

2. 編集後の、FTP 実行許可リスト定義ファイルを次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%ftprecp%common
```

ファイル名は変更しないでください。

参考

次のプロパティを指定した場合、FTP 実行許可リスト定義ファイルを任意のパスに任意のファイル名で格納できます。

- FTP 受付コンフィグファイルの urecp-ftp.permission-def.filepath プロパティ

このプロパティを省略した場合、手順 2. で示したディレクトリに格納されている FTP 実行許可リスト定義ファイルが利用されます。手順 2. で示したディレクトリに FTP 実行許可リスト定義ファイルが格納されていない場合、すべての FTP コマンドの実行を許可しません。

(3) 設定できるプロパティ

urecp-ftp.permission.allow=実行を許可するユーザ名 ~<文字列または半角アスタリスク (*) >
<<*>>

FTP 受付に関連づけられたビジネスプロセスの実行を許可するユーザのユーザ名を指定します。

複数のユーザを指定する場合は、「ユーザ名,ユーザ名,...」のように半角コンマ (,) 区切りで指定します。半角コンマ前後の半角スペースやタブ文字は無視されます。

また、空のユーザ名 (長さ 0 のユーザ名) も無視されます。次のように指定した場合は、空文字を無視して FTP 受付が正常に起動します。

```
urecp-ftp.permission.allow = <ユーザ名1>,  
urecp-ftp.permission.allow = <ユーザ名1>, Δ  
urecp-ftp.permission.allow = <ユーザ名1>, Δ, <ユーザ名2>  
urecp-ftp.permission.allow = <ユーザ名1>, , , , , , , , <ユーザ名2>  
urecp-ftp.permission.allow = , <タブ文字><ユーザ名1><タブ文字>, <タブ文字><タブ文字>
```

(凡例)

△：半角スペースを示します。

半角アスタリスク (*) だけを指定した場合、すべてのユーザに実行が許可されます。なお、次に示す形式のユーザ名を指定する場合は、前後をタブ文字で囲んでください。

- 半角コンマ (,) の文字を含むユーザ名
- 先頭または末尾に半角スペースがあるユーザ名
- 半角アスタリスク (*) 1文字のユーザ名

このプロパティを省略した場合、半角アスタリスク (*) が設定されます。

注意事項

urecp-ftp.permission.deny プロパティ (実行を許可しないユーザ名) で指定されたユーザは、FTP 受付に関連づけられたビジネスプロセスの実行は許可されません。

urecp-ftp.permission.deny=実行を許可しないユーザ名 ~<文字列または半角アスタリスク (*) >

FTP 受付に関連づけられたビジネスプロセスの実行を許可しないユーザのユーザ名を指定します。

複数のユーザを指定する場合は、「ユーザ名,ユーザ名,...」のように半角コンマ (,) 区切りで指定します。半角コンマ前後の半角スペースやタブ文字は無視されます。

また、空のユーザ名 (長さ 0 のユーザ名) も無視されます。次のように指定した場合は、空文字を無視して FTP 受付が正常に起動します。

```
urecp-ftp.permission.deny = <ユーザ名1>,  
urecp-ftp.permission.deny = <ユーザ名1>, △  
urecp-ftp.permission.deny = <ユーザ名1>, △, <ユーザ名2>  
urecp-ftp.permission.deny = <ユーザ名1>,,,,,,<ユーザ名2>  
urecp-ftp.permission.deny = ,<タブ文字><ユーザ名1><タブ文字>,<タブ文字><タブ文字>
```

(凡例)

△：半角スペースを示します。

なお、次に示す形式のユーザ名を指定する場合は、前後をタブ文字で囲んでください。

- 半角コンマ (,) の文字を含むユーザ名
- 先頭または末尾に半角スペースがあるユーザ名

注意事項

このプロパティで指定したユーザは、`urecp-ftp.permission.allow` プロパティ（実行を許可するユーザ名）でユーザ名を指定、または半角アスタリスク（*）を指定されていても、FTP 受付に関連づけられたビジネスプロセスの実行は許可されません。

(4) 記述例

記述例を次に示します。

- すべてのユーザを許可する場合（デフォルト）

```
urecp-ftp.permission.allow=*
```

なお、FTP 受付コンフィグファイルで、`urecp-ftp.permission-def.filepath` プロパティ（FTP 実行許可リスト定義ファイルのパス）を指定しない場合も、すべてのユーザが許可されます。

- ユーザ名「root」およびユーザ名「admin」だけを許可する場合

```
urecp-ftp.permission.allow=root, admin
```

- ユーザ名「guest1」およびユーザ名「guest2」以外のユーザを許可する場合

- `urecp-ftp.permission.allow` プロパティ（実行を許可するユーザ名）を指定する場合

```
urecp-ftp.permission.allow=*  
urecp-ftp.permission.deny=guest1, guest2
```

- `urecp-ftp.permission.allow` プロパティを省略する場合

```
urecp-ftp.permission.deny=guest1, guest2
```

6.8.8 ファイル操作アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
[messageLog-level={0 | 10 | 20}]
```

```
[methodTrace-level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]
```

```
[methodTrace-fileNum=保守用ログの面数]
```

```
[methodTrace-fileSize=保守用ログの1面当たりの最大サイズ]
```

```
[expTrace-fileNum=例外ログの面数]
```

```
[expTrace-fileSize=例外ログの1面当たりの最大サイズ]
```

```
[readLock.retry.count=共有ロック取得失敗時のロックリトライ回数]
```

```
[readLock.retry.interval=共有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔]
```

```
[writeLock.retry.count=占有ロック取得失敗時のロックリトライ回数]
```

```
[writeLock.retry.interval=占有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔]
```

```
[transform.limitsize=ファイルの変換を打ち切る入力ファイルのサイズ]
[transform.timeout=ファイルの変換を打ち切るタイムアウト時間]
[compress.inputfile.limitsize=ファイルの圧縮を打ち切る入力ファイルのサイズ]
[compress.outputfile.limitsize=ファイルの圧縮を打ち切る出力ファイルのサイズ]
[compress.timeout=ファイルの圧縮を打ち切るタイムアウト時間]
[extract.inputfile.limitsize=ファイルの伸張を打ち切る入力ファイルのサイズ]
[extract.outputfile.limitsize=ファイルの伸張を打ち切る出力ファイルのサイズ]
[extract.timeout=ファイルの伸張を打ち切るタイムアウト時間]
[writeList.outputfile.limitsize=ファイルの一覧書き込みを打ち切る出力ファイルサイズ]
[read.limitsize=ファイルの読み込みを打ち切る入力ファイルのサイズ]
[write.limitsize=ファイルの書き込みを打ち切る出力ファイルのサイズ]
[write.output-folder-name=共通フォルダ定義名]
[write.output-file-name=出力ファイルパス]
[write.output-mode={new | append}]
[write.output-file-validation={ON | OFF}]
```

(2) 機能

ファイル操作アダプタが実行環境で動作する際のメッセージログとトレースログの出力レベルなどを設定します。

(3) ファイルの格納先

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%adpfop%<サービスID>.properties
```

(4) 設定できるプロパティ

(a) メッセージログ

```
messagelog-level={0 | 10 | 20} ~<<10>>
```

メッセージログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル		
	0	10	20
エラー情報 ・ 例外または障害の発生原因	○	○	○
警告情報 ・ 発生した問題など	△	○	○
インフォメーション ・ 電文や引数の内容 ・ HCSC-Messaging の状態の変更（起動時や終了時） ・ コマンド受付時と実行完了時 ・ イベントの通知	△	△	△

(凡例)

○：出力されます。

△：重要なログメッセージだけ出力されます。

(b) 保守用ログ

`methodtrace-level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>`

保守用ログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
リクエストサービスメソッドの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	○	○	○	○
外部 (BP など) のインターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	×	○	○	○
コンポーネント内インターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	×	×	○	○
デバッグ情報 (処理の分岐などの情報)	×	×	×	×	○

(凡例)

○：出力されます。

×：出力されません。

`methodtrace-filenum=保守用ログの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>`

保守用ログの面数を指定します。

`methodtrace-filesize=保守用ログの1面当たりの最大サイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>`

保守用ログの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

(c) 例外ログ

`exptrace-filenum=例外ログの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>`

例外ログの面数を指定します。

`exptrace-filesize=例外ログの1面当たりの最大サイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>`

例外ログの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

(d) 排他取得

`readLock.retry.count=共有ロック取得失敗時のロックリトライ回数 ~<数字>((0-1024))<<0>>`

共有ロック取得失敗時のロックリトライ回数を指定します。

`readLock.retry.interval=共有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔` ~<数字>((1-1024))<<1>>

共有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔を秒単位で指定します。

`writeLock.retry.count=占有ロック取得失敗時のロックリトライ回数` ~<数字>((0-1024))<<0>>

占有ロック取得失敗時のロックリトライ回数を指定します。

`writeLock.retry.interval=占有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔` ~<数字>((1-1024))<<1>>

占有ロック取得失敗時のロックリトライ間隔を秒単位で指定します。

(e) その他

`transform.limitsize=ファイルの変換を打ち切る入力ファイルのサイズ` ~<数字>
((0-2147483647))<<62914560>>

ファイル変換オペレーションで、変換対象とする入力ファイルの上限サイズをバイト単位で指定します。入力ファイルが上限サイズを超える場合、エラーメッセージ (KDEC80051-E) を出力し、処理を終了します。0 を指定した場合は、無制限となります。

`transform.timeout=ファイルの変換を打ち切るタイムアウト時間` ~<数字>((0-86400))<<60>>

ファイル変換オペレーションで、分割処理方式のタイムアウト時間を秒単位で指定します。ファイル変換オペレーションの実行開始から、分割されたすべてのレコードの処理が完了するまでの経過時間が、指定したタイムアウト時間を過ぎた場合、エラーメッセージ (KDEC80052-E) を出力し、処理を終了します。

なお、一括処理方式では指定しても無視されます。

0 を指定した場合はタイムアウトしません。

`compress.inputfile.limitsize=ファイルの圧縮を打ち切る入力ファイルのサイズ` ~<数字>
((1-9223372036854775807))<<4294967296>>

ファイル圧縮オペレーションで、圧縮対象とする入力ファイルの上限サイズをバイト単位で指定します。最大値を指定した場合は無制限の扱いとなります。入力ファイルが上限サイズを超える場合、エラーメッセージ (KDEC80105-E) を出力し、処理を終了します。

`compress.outputfile.limitsize=ファイルの圧縮を打ち切る出力ファイルのサイズ` ~<数字>
((1-9223372036854775807))<<4294967296>>

ファイル圧縮オペレーションで、圧縮対象とする出力ファイルの上限サイズをバイト単位で指定します。最大値を指定した場合は無制限の扱いとなります。出力ファイルが上限サイズを超える場合、エラーメッセージ (KDEC80106-E) を出力し、処理を終了します。

`compress.timeout=ファイルの圧縮を打ち切るタイムアウト時間` ~<数字>((0-86400))<<60>>

ファイル圧縮オペレーションで、圧縮のタイムアウト時間を秒単位で指定します。ファイル圧縮オペレーションの実行開始からファイルの圧縮までの時間が、ここで指定したタイムアウト時間を過ぎた場合、エラーメッセージ (KDEC80107-E) を出力し、処理を終了します。

0 を指定した場合はタイムアウトしません。

`extract.inputfile.limitsize=ファイルの伸張を打ち切る入力ファイルのサイズ ~<数字>`
`((1-9223372036854775807))<<4294967296>>`

ファイル伸張オペレーションで、伸張対象とする入力ファイルの上限サイズをバイト単位で指定します。最大値を指定した場合は無制限の扱いとなります。入力ファイルが上限サイズを超える場合、エラーメッセージ (KDEC80126-E) を出力し、処理を終了します。

`extract.outputfile.limitsize=ファイルの伸張を打ち切る出力ファイルのサイズ ~<数字>`
`((1-9223372036854775807))<<4294967296>>`

ファイル伸張オペレーションで、伸張対象とする出力ファイルの上限サイズをバイト単位で指定します。最大値を指定した場合は無制限の扱いとなります。出力ファイルが上限サイズを超える場合、エラーメッセージ (KDEC80127-E) を出力し、処理を終了します。

`extract.timeout=ファイルの伸張を打ち切るタイムアウト時間 ~<数字>((0-86400))<<60>>`

ファイル伸張オペレーションで、伸張のタイムアウト時間を秒単位で指定します。ファイル伸張オペレーションの実行開始からファイルの伸張までの時間が、ここで指定したタイムアウト時間を過ぎた場合、エラーメッセージ (KDEC80128-E) を出力し、処理を終了します。

0 を指定した場合はタイムアウトしません。

`writeList.outputfile.limitsize=ファイルの一覧書き込みを打ち切る出力ファイルサイズ ~<数字>`
`((0-214743647))<<62914560>>`

ファイル一覧書き込みオペレーションで、ファイル一覧情報を出力するファイルの上限サイズをバイト単位で指定します。出力ファイルが上限サイズを超える場合、エラーメッセージ (KDEC80182-E) を出力し、処理を終了します。0 を指定した場合は、無制限となります。

`read.limitsize=ファイルの読み込みを打ち切る入力ファイルのサイズ ~<数字>`
`((1-9223372036854775807))<<4294967296>>`

ファイル読み込みオペレーションで読み込める入力ファイルの上限サイズをバイト単位で指定します。最大値を指定した場合は、無制限となります。

`write.limitsize=ファイルの書き込みを打ち切る出力ファイルのサイズ ~<数字>`
`((1-9223372036854775807))<<4294967296>>`

ファイル書き込みオペレーションで書き込める出力ファイルの上限サイズをバイト単位で指定します。最大値を指定した場合は、無制限となります。

write.output-folder-name=共通フォルダ定義名 ~<文字列>

ファイル書き込みオペレーションの要求電文（ヘッダ）が省略された場合に適用される、共通フォルダ定義名を指定します。要求電文（ヘッダ）の output-folder-name の指定値の代わりとなります。作業フォルダで指定しても無効になります。

要求電文（ヘッダ）の指定がある場合は、このプロパティの指定は無視されます。要求電文とこのプロパティの両方とも指定されていない場合は、ファイル書き込みオペレーション実行時にエラーになります。

write.output-file-name=出力ファイルパス ~<文字列>

ファイル書き込みオペレーションの要求電文（ヘッダ）が省略された場合に適用される、出力ファイルパスを指定します。要求電文（ヘッダ）の output-file-name の指定値の代わりとなります。作業フォルダで指定しても無効になります。

出力ファイルパスは、共通フォルダからの相対パスで指定します。また、出力ファイルパスには次に示す記号は使用できません。

- 円マーク (¥)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- アスタリスク (*)
- クエスチョンマーク (?)
- ダブルクォーテーション (")
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- パイプライン (|)

要求電文（ヘッダ）の指定がある場合は、このプロパティの指定は無視されます。要求電文とこのプロパティの両方とも指定されていない場合は、ファイル書き込みオペレーション実行時にエラーになります。

write.output-mode={new | append} ~<<new>>

ファイル書き込みオペレーションの要求電文（ヘッダ）が省略された場合に適用される、ファイルの出力方式を指定します。要求電文（ヘッダ）の output-mode の指定値の代わりとなります。

- **new**
ファイルを新規作成します。既存のファイルがある場合は上書きします。
- **append**
既存のファイルの末尾に追加します。

要求電文（ヘッダ）の指定がある場合は、このプロパティの指定は無視されます。

write.output-file-validation={ON | OFF} ~<<OFF>>

ファイル書き込みオペレーションの要求電文（ヘッダ）が省略された場合に適用される、ファイルの検証有無を指定します。要求電文（ヘッダ）の output-file-validation の指定値の代わりとなります。

- ON
出力ファイルを検証します。
- OFF
出力ファイルを検証しません。

要求電文（ヘッダ）の指定がある場合は、このプロパティの指定は無視されます。

(5) 記述例

記述例を次に示します。

```
message-log-level=10
methodtrace-level=3
methodtrace-filenum=8
methodtrace-filesize=2097152
:
```

6.8.9 リストコマンドオプション定義ファイル

(1) 形式

```
[<オプション文字列1>]
 [<オプション文字列2>]
      :
 [<オプション文字列n>]
```

(2) 機能

FTP クライアントが実行するリストコマンド（LIST コマンドおよび NLST コマンド）の引数となるオプション文字列を 1 行ずつ設定します。複数のオプション文字列を設定できますが、1 つのコマンドに適用されるオプション文字列は 1 つだけです。

リストコマンドオプション定義ファイルを定義しない場合と定義した場合の、リストコマンドの実行形式の違いを次に示します。△は 1 文字の半角スペースを示します。

- リストコマンドオプション定義ファイルを定義しない場合
リストコマンドの実行形式は次のとおりです。

```
LIST [Δ<パス>]
NLST [Δ<パス>]
```

この場合、リストコマンドの引数で指定された情報は、すべてパス情報と解釈されます。

- リストコマンドオプション定義ファイルを定義した場合

リストコマンドオプションとして<オプション文字列>を定義しておくことで、次の実行形式のリストコマンドを実行できます。

```
LIST [Δ<オプション文字列>] [Δ<パス>]
NLST [Δ<オプション文字列>] [Δ<パス>]
```

リストコマンドの引数に指定した情報は、FTP 受付がリストコマンドオプション定義ファイルの定義に従って<オプション文字列>と<パス>に分割し、実行されます。

(3) ファイルの格納先

リストコマンドオプション定義ファイルは、テンプレートファイルがないため、ファイルを新規に作成してください。

リストコマンドオプション定義ファイルの格納先となるパスおよびファイル名は任意です。

ただし、リストコマンドオプション定義ファイルの格納場所は、FTP 受付コンフィグファイルの `urecp-ftp.list-command-option.filepath` プロパティに絶対パスで指定する必要があります。`urecp-ftp.list-command-option.filepath` プロパティを省略した場合は、次のディレクトリに格納されているリストコマンドオプション定義ファイル (`ftp_command_option.txt`) が利用されます。次のディレクトリにリストコマンドオプション定義ファイルが格納されていない場合、リストコマンドの引数で指定された情報は、すべてパス情報と解釈されます。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%FTP%config%common
```

(4) 設定できるプロパティ

<オプション文字列> ~<文字列>

リストコマンドの引数で指定できるオプション文字列を設定します。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。先頭および末尾に半角スペースおよびタブ文字は指定できません。

使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)

- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (`)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

(5) 記述例

オプションを「-al」と「-la」のどちらでも指定できるようにしたい場合は、次のように両方の形式のオプション文字列を指定します。

```
-al  
-la
```

オプションを「-l」と「-L」のどちらでも指定できるようにしたい場合は、次のように両方の形式のオプション文字列を指定します。

```
-l  
-L
```

(6) 注意事項

- リストコマンドオプション定義ファイルの指定内容を変更した場合、指定値を有効にするために、そのリストコマンドオプション定義ファイルを使用している FTP 受付を再起動してください。
- オプション文字列の先頭および末尾に半角スペースは指定できません。
- 指定されたオプション文字列の先頭が「¥」の場合、「¥」はエスケープ文字と解釈され、それ以降の文字列がオプション文字列と見なされます。
なお、オプション文字列の途中で指定した「¥」は、エスケープ文字でなく通常 of 文字列「¥」と扱われます。
「#」または「¥」で始まるオプション文字列を定義する場合は、その前にエスケープ文字「¥」を付けてください。
- エスケープ文字「¥」の直後に半角スペースまたはタブ文字を指定したり、エスケープ文字「¥」だけの行を定義したりすることはできません。指定するとエラーになります。
- 改行までが値になります。ただし、先頭および末尾の半角スペースおよびタブ文字は無視されます。
- 指定された文字列の先頭の非空白文字（半角スペースでもタブ文字でもない文字）が"#"の場合、その行はコメントとみなされます。

6.9 ファイルイベント連携で利用するファイル

6.9.1 ファイルイベント受付コンフィグファイル

(1) 形式

```
[urecp-fileevent.trace.filenum=ファイルイベントトレースの面数]  
[urecp-fileevent.trace.filesize=ファイルイベントトレースの1面当たりの最大サイズ]
```

(2) 機能

ファイルイベント受付のセットアップ後に、特定のファイルイベント受付に関する構成情報を変更する場合に設定します。変更頻度が高い情報を設定する場合にも使用します。

(a) ファイルの種類

ファイルイベント受付コンフィグファイルには次の種類があります。同じプロパティが両方のファイルに設定されている場合、ファイルイベント受付コンフィグファイルのプロパティ値が適用されます。

- ファイルイベント受付コンフィグファイル
有効範囲：特定のファイルイベント受付
- ファイルイベント受付共通コンフィグファイル
有効範囲：すべてのファイルイベント受付
作成手順については「[6.9.2 ファイルイベント受付共通コンフィグファイル](#)」を参照してください。

(b) 作成手順

ファイルイベント受付コンフィグファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、ファイルイベント受付コンフィグファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%fileevent%config%templates%fileeventrecp_config.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<受付 ID>.properties」で次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%fileevent%config%
```

作成したファイルはファイルイベント受付の開始時に読み込まれ、設定内容が有効になります。

(3) 設定できるプロパティ

urecp-fileevent.trace.filenum=ファイルイベントトレースの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

ファイルイベントトレースの面数を指定します。

プロパティ名と値のどちらかが省略された場合はデフォルト値で動作します。数字以外の値や範囲外の値が指定された場合はエラーとなります。

`urecp-fileevent.trace.filesize=ファイルイベントトレースの1面当たりの最大サイズ ~<数字> ((4096-2147483647))<<2097152>>`

ファイルイベントトレースの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

プロパティ名と値のどちらかが省略された場合はデフォルト値で動作します。数字以外の値や範囲外の値が指定された場合はエラーとなります。

(4) 記述例

ファイルイベント受付コンフィグファイルの記述例を次に示します。

```
urecp-fileevent.trace.fileenum=8
urecp-fileevent.trace.filesize=2097152
```

6.9.2 ファイルイベント受付共通コンフィグファイル

(1) 形式

ファイルの記述形式はファイルイベント受付コンフィグファイルと同じです。記述形式については、「6.9.1 ファイルイベント受付コンフィグファイル」を参照してください。

(2) 機能

すべてのファイルイベント受付に共通する構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

ファイルイベント受付コンフィグファイルには次の種類があります。同じプロパティが両方のファイルに設定されている場合、ファイルイベント受付コンフィグファイルのプロパティ値が適用されます。

- ファイルイベント受付コンフィグファイル
有効範囲：特定のファイルイベント受付
作成手順については「6.9.1 ファイルイベント受付コンフィグファイル」を参照してください。
- ファイルイベント受付共通コンフィグファイル
有効範囲：すべてのファイルイベント受付

(b) 作成手順

ファイルイベント受付共通コンフィグファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、ファイルイベント受付共通コンフィグファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%fileevent%config%templates%fileeventrecp_config.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「fileeventrecp_config.properties」で次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%fileevent%config%common%
```

作成したファイルはファイルイベント受付の開始時に読み込まれ、設定内容が有効になります。

(3) 設定できるプロパティ

設定できるプロパティはファイルイベント受付コンフィグファイルと同じです。記述形式については、[\[6.9.1 ファイルイベント受付コンフィグファイル\]](#)を参照してください。

(4) 記述例

記述例はファイルイベント受付コンフィグファイルと同じです。記述形式については、[\[6.9.1 ファイルイベント受付コンフィグファイル\]](#)を参照してください。

6.10 ファイルアダプタで利用するファイル

6.10.1 ファイルアダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
[message.level={0 | 10 | 20}]  
[methodtrace.level={0 | 10 | 20 | 30}]  
[methodtracefile.size=メソッドトレースの出力サイズ]  
[methodtracefile.num=メソッドトレースの出力面数]  
fileaccess.path1=入出力許可ファイルパス1  
[fileaccess.path2=入出力許可ファイルパス2]  
[fileaccess.path3=入出力許可ファイルパス3]  
[fileaccess.path4=入出力許可ファイルパス4]  
[fileaccess.path5=入出力許可ファイルパス5]  
[fileaccess.maxsize=入力ファイル最大サイズ]  
character.code={MS932 | UTF8 | UTF16_BIG | UTF16_LITTLE | JIS | KEIS+EBCDIC | KEIS+EBCDIK}  
[codetable.path=変換テーブル格納パス]
```

(2) 機能

ファイルアダプタ実行環境プロパティファイルは、ファイルアダプタが実行環境で動作するときのメッセージログおよびトレースログの出力レベルなどを定義します。サンプルファイルを利用して作成します。

サンプルファイルの格納先を次に示します。

```
<実行環境のサービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%File%config%templates%adpff_exe.properties
```

ファイルアダプタ実行環境プロパティファイルの作成手順を次に示します。

1. サンプルファイルをコピーして、次のディレクトリに格納します。

```
<実行環境のサービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%File%config
```

2. ファイル名を<サービス ID>.properties に変更します。

3. 定義内容を編集して保存します。

ファイルアダプタ実行環境プロパティファイルは、ファイルアダプタを開始する際に実行環境に反映されます。ファイルアダプタ実行環境プロパティファイルの内容を変更する場合は、ファイルアダプタを停止してから作業をします。ファイルアダプタを再開すると、変更内容が実行環境に反映されます。

(3) 設定できるプロパティ

```
message.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>
```

メッセージログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル		
	0	10	20
エラー情報	○	○	○
警告情報	△	○	○
インフォメーション	△	△	○

(凡例)

○：すべて出力されます。

△：重要なメッセージログだけ出力されます。

`methodtrace.level={0 | 10 | 20 | 30} ~<<10>>`

メソッドトレースの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル			
	0	10	20	30
メソッド内のエラー	○	○	○	○
外部から呼び出されるメソッド情報およびファイル入出力メソッドの開始・終了情報	×	○	○	○
ほかの HCSC コンポーネントから参照する public メソッドの開始・終了情報	×	×	○	○
ほかの HCSC コンポーネントから参照しない内部メソッド (public 以外のメソッド) の開始・終了情報	×	×	×	○

(凡例)

○：出力されます。

×：出力されません。

`methodtracefile.size=メソッドトレースの出力サイズ ~<数字>`
`((4096-2147483647))<<4194304>>`

ファイルアダプタが取得するメソッドトレース情報の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

`methodtracefile.num=メソッドトレースの出力面数 ~<数字>((1-16))<<4>>`

ファイルアダプタが取得するメソッドトレース情報の出力ファイル面数を指定します。2面以上を推奨します。

`fileaccess.path((1-5))=入出力許可ファイルパス`

ファイル入出力を許可するディレクトリの絶対パスを指定します。これらのキーに指定されたディレクトリ配下でファイルの入出力ができます。また、サブディレクトリを作成できます。

ファイル入出力を許可するディレクトリの絶対パスは5つまで指定できます。

fileaccess.maxsize=入力ファイル最大サイズ〜<数字>((1-524288000))<<4194304>>

読み込みを行うファイルの最大サイズを指定します。

character.code={MS932 | UTF8 | UTF16_BIG | UTF16_LITTLE | JIS | KEIS+EBCDIC | KEIS+EBCDIK}

バイナリデータの文字コードを指定します。このプロパティを設定した場合は、必ず「codetable.path」プロパティを設定してください。このプロパティはファイル形式が固定長形式、レングスタグ形式、またはセパレータ形式で、書き込みモードの機能を実行する場合に設定してください。

codetable.path=変換テーブル格納パス

コード変換機能の変換テーブル（ユーザマッピングファイル）の格納パスとして、ユーザマッピングファイルのカスタマイズの有無に応じて次に示すパスを指定します。なお、パス指定時はディレクトリ区切りとして「¥」を使用してください。

- ユーザマッピングファイルをカスタマイズしないで、標準値で利用する場合

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥CSC¥lib¥external¥table

- Code Converter を利用して、任意にカスタマイズしたユーザマッピングファイルを利用する場合
Code Converter の変換テーブル（ユーザマッピングファイル）の格納パス

このプロパティを設定した場合は、必ず「character.code」プロパティを設定してください。このプロパティはファイル形式が固定長形式、レングスタグ形式、またはセパレータ形式で、書き込みモードの機能を実行する場合に設定してください。

(4) 注意事項

パスを指定する場合の注意事項を次に示します。

- 相対パス、親ディレクトリ表現（「..¥」、「../」）、およびカレントディレクトリ表現（「.¥」、「./」）を含むパスは指定できません。
- シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
- Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定できません。また、パスの大文字と小文字は区別されません。なお、パスのディレクトリ区切りは「¥」を使用してください。
- パス長は UTF-8 で変換した際に 1~198 バイトの範囲で指定できます。

6.11 Object Access アダプタで利用するファイル

6.11.1 Object Access アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
[message.level={0 | 10 | 20}]  
[trace.level={0 | 10 | 20 | 30}]  
[methodtracefile.size=メソッドトレースの出力サイズ]  
[methodtracefile.num=メソッドトレースの出力面数]  
[datatracefile.size=データトレースの出力サイズ]  
[datatracefile.num=データトレースの出力面数]  
[exptracefile.size=例外ログの出力サイズ]  
[exptracefile.num=例外ログの出力面数]
```

(2) 機能

Object Access アダプタが実行環境で動作する際に出力される、ログやトレースの情報を定義します。

Object Access アダプタ実行環境プロパティファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、Object Access アダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%0A%config%templates%adpoa.properties
```

2. 編集後の Object Access アダプタ実行環境プロパティファイルを次に示すファイル名で保存します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%0A%config%<サービスID>.properties
```

Object Access 実行環境プロパティファイルは、Object Access アダプタの開始時に実行環境に反映されます。

Object Access 実行環境プロパティファイルの内容を変更する場合は、Object Access アダプタを停止してから変更してください。変更後は、変更内容を実行環境に反映するために Object Access アダプタを再開始してください。

(3) 設定できるプロパティ

message.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>

メッセージログの出力レベルを指定します。

指定できる出力レベルと、出力レベルに対応する出力情報を次の表に示します。

情報種別	出力レベル		
	0	10	20
エラー情報	○	○	○
警告情報	△	○	○
インフォメーション	△	△	○

(凡例)

○：すべて出力します。

△：重要なログメッセージだけ出力します。

`trace.level={0 | 10 | 20 | 30} ~<<10>>`

メソッドトレースおよびデータトレースの出力レベルを指定します。

指定できる出力レベルと、出力レベルに対応する出力情報を次の表に示します。

情報種別	出力レベル			
	0	10	20	30
外部から呼び出されるメソッド情報	×	○	○	○
外部メソッドのうち、引数を持つメソッド、または通信をするメソッドの呼び出し情報	×	○	○	○
外部メソッドの呼び出し情報、およびほかのコンポーネントから参照する public メソッドの開始・終了情報	×	×	○	○
ほかのコンポーネントから参照しない内部メソッド (public 以外のメソッド) の開始・終了情報	×	×	×	○
メソッド内のエラー	○	○	○	○

(凡例)

○：出力します。

×：出力しません。

`methodtracefile.size=メソッドトレースの出力サイズ ~<符号なし数字>`
`((4096-2147483647))<<4194304>>`

Object Access アダプタが取得するメソッドトレース情報の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

`methodtracefile.num=メソッドトレースの出力面数 ~<符号なし数字>((1-16))<<4>>`

Object Access アダプタが取得するメソッドトレース情報の出力ファイル面数を指定します。「2」以上を推奨します。

`datatracefile.size=データトレースの出力サイズ ~<符号なし数字>`
`((4096-2147483647))<<1048576>>`

Object Access アダプタが取得するデータトレース情報の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

datatracefile.num=データトレースの出力面数 ~<符号なし数字>((1-16))<<4>>

Object Access アダプタが取得するデータトレース情報の出力ファイル面数を指定します。「2」以上を推奨します。

exptracefile.size=例外ログの出力サイズ ~<符号なし数字>
((4096-2147483647))<<4194304>>

Object Access アダプタが取得する例外情報の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

exptracefile.num=例外ログの出力面数 ~<符号なし数字>((1-16))<<4>>

Object Access アダプタが取得する例外情報の出力ファイル面数を指定します。

(4) 記述例

指定値を省略する場合はキー名を含めて省略してください。キー名だけを記述し値を省略することはできません。trace.level を省略する場合の記述例を次に示します。

正しい記述方法

```
      :  
message.level=20  
methodtracefile.size=4194304  
      :
```

誤った記述方法 (trace.level の値が指定されていない)

```
      :  
message.level=20  
trace.level=  
methodtracefile.size=4194304  
      :
```

6.12 Message Queue アダプタで利用するファイル

6.12.1 Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
[message.level={0 | 10 | 20}]
[trace.level={0 | 10 | 20 | 30}]
[methodtracefile.size=メソッドトレースの出力サイズ]
[methodtracefile.num=メソッドトレースの出力面数]
[datatracefile.size=データトレースの出力サイズ]
[datatracefile.num=データトレースの出力面数]
codetable.path=変換テーブル格納パス
[exptracefile.size=例外ログの出力サイズ]
[exptracefile.num=例外ログの出力面数]
[transaction.local={true | false}]
```

(2) 機能

Message Queue アダプタが実行環境で動作する際に出力される、ログやトレースの情報を定義します。

Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%MQ%config%templates%adpmq.properties
```

2. 編集後の Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイルを次に示すファイル名で保存します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%MQ%config<サービスID>.properties
```

Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイルは、Message Queue アダプタの開始時に実行環境に反映されます。

Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイルの内容を変更する場合は、Message Queue アダプタを停止してから変更してください。変更後は、変更内容を実行環境に反映するために Message Queue アダプタを再開始してください。

(3) 設定できるプロパティ

message.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>

メッセージログの出力レベルを指定します。メッセージログの出力レベルを次に示します。

表 6-5 出力レベルと出力情報の対応

情報種別	出力レベル		
	0	10	20
エラー情報	○	○	○
警告情報	△	○	○
インフォメーション	△	△	○

(凡例)

○：すべて出力します。

△：重要なログメッセージだけ出力します。

`trace.level={0 | 10 | 20 | 30} ~<<10>>`

メソッドトレースとデータトレースの出力レベルを指定します。

メソッドトレースの出力レベルを次に示します。

情報種別	出力レベル			
	0	10	20	30
外部から呼び出されるメソッド情報およびメッセージ送信・受信入力メソッドの開始・終了情報	×	○	○	○
ほかの HCSC コンポーネントから参照する public メソッドの開始・終了情報	×	×	○	○
ほかの HCSC コンポーネントから参照しない内部メソッド (public 以外のメソッド) の開始・終了情報	×	×	×	○
メソッド内のエラー	○	○	○	○

(凡例)

○：出力します。

×：出力しません。

データトレースの出力レベルを次に示します。

情報種別	出力レベル			
	0	10	20	30
メッセージ送受信要求データ情報	×	×	×	○
メッセージ送受信応答データ情報	×	×	○	○
Fault 情報の Detail 情報	○	○	○	○
メッセージ送信失敗および受信メッセージの XML 形式変換失敗	○	○	○	○

(凡例)

○：出力します。

×：出力しません。

データトレースの出力レベルを 20 以上にした場合のメリットとデメリットを次に示します。メリット、デメリットを考慮して出力レベルを指定してください。

表 6-6 データトレース出力レベルのメリット・デメリット

メリット・デメリット	出力レベル	
	10	20 以上
メリット	<ul style="list-style-type: none">データトレースはエラーが発生した場合だけ出力されます。そのため、出力レベル 20 以上と比べると、格段に処理性能が良くなります。データトレースを出力するディスク容量は要求エラーの発生回数分であるため少量で済みます。	メッセージ受信やメッセージ送受信要求が失敗した場合、ユーザデータが紛失するおそれがあります。この場合、データトレースから復旧できます。
デメリット	メッセージ受信やメッセージ送受信要求が失敗した場合、ユーザデータが紛失するおそれがあります。この場合、紛失したユーザデータを回復できなくなります。	<ul style="list-style-type: none">ユーザデータがデータトレースに出力されます。そのため、出力レベル 10 と比べると処理性能が大幅に劣化します。データトレースを出力するディスク容量にはメッセージ送受信量に応じた容量が必要になります。

`methodtracefile.size=メソッドトレースの出力サイズ ~<符号なし数字>`
`((4096-2147483647))<<4194304>>`

Message Queue アダプタが取得するメソッドトレース情報の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

`methodtracefile.num=メソッドトレースの出力面数 ~<符号なし数字>((1-16))<<4>>`

Message Queue アダプタが取得するメソッドトレース情報の出力ファイル面数を指定します。

`datatracefile.size=データトレースの出力サイズ ~<符号なし数字>`
`((4096-2147483647))<<1048576>>`

Message Queue アダプタが取得するデータトレース情報の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

`datatracefile.num=データトレースの出力面数 ~<符号なし数字>((1-16))<<4>>`

Message Queue アダプタが取得するデータトレース情報の出力ファイル面数を指定します。

`codetable.path=変換テーブル格納パス ~<コード変換機能の変換テーブル (ユーザマッピングファイル) の格納パス>`

コード変換機能の変換テーブル (ユーザマッピングファイル) の格納パスを指定します。Windows の場合、パスのディレクトリ区切りは「¥」ではなく、「¥¥」を使用してください。

バイナリ形式メッセージを送信する場合、要求電文に送信キュー特定情報または受信キュー特定情報を指定する場合は必ず指定してください。

ユーザマッピングファイルのカスタマイズの有無に応じて、次に示すパスを指定してください。

- ユーザマッピングファイルをカスタマイズしないで標準値でのユーザマッピングファイルを利用する場合

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%lib¥external¥table

- コード変換機能を利用して任意にカスタマイズしたユーザマッピングファイルを利用する場合

<コード変換機能の変換テーブル（ユーザマッピングファイル）の格納パス>

パスを指定する場合の注意事項を次に示します。

- 相対パス、親ディレクトリ表現（「..¥」, 「../」）、カレントディレクトリ表現（「.¥」, 「./」）およびシンボリックリンクを含むパスは指定できません。
- Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。
- パス長は、UTF-8 への変換結果が 1~198 バイトになるよう指定してください。

exptracefile.size=例外ログの出力サイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<4194304>>

Message Queue アダプタが取得する例外情報（スタックトレース）の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

exptracefile.num=例外ログの出力面数 ~<数字>((1-16))<<4>>

Message Queue アダプタが取得する例外情報（スタックトレース）の出力ファイル面数を指定します。

transaction.local={true | false} ~<<true>>

Message Queue アダプタで、トランザクション決着処理を実行するかどうか指定します。リソースアダプタのトランザクションサポートレベルに XATransaction を指定する場合は、false を設定してください。

また、リソースアダプタのトランザクションサポートレベルに LocalTransaction を指定する場合、false を指定していると、トランザクションの決着は、ビジネスプロセスのトランザクションをコミットするタイミングで実行されます。

6.13 メールアダプタで利用するファイル

6.13.1 メールアダプタアカウント定義ファイル

メールアダプタアカウント定義ファイルは、メールアダプタからメールサーバに接続するときの認証に必要なユーザ名およびパスワードを管理するためのファイルです。

メールアダプタアカウント定義ファイルは、`csmmailaddusr` コマンドで指定したパスとファイル名で作成されます。`csmmailaddusr` (メールアダプタユーザ情報の登録・更新) コマンドの詳細は、「5 コマンド (運用環境・実行環境)」の「`csmmailaddusr` (メールアダプタユーザ情報の登録・更新)」を参照してください。

作成したメールアダプタアカウント定義ファイルを有効にするには、ファイルの絶対パスをメールアダプタ実行環境プロパティファイルの `mailadp.account.file.path` キーに指定する必要があります。

なお、ファイル内容は運用コマンドで管理するため、編集はできません。

6.13.2 メールアダプタコマンド定義ファイル

(1) 形式

```
[mailadp.command.message.log.filepath=コマンドメッセージログの出力先ディレクトリ]
[mailadp.command.message.log.file.num=コマンドメッセージログの面数]
[mailadp.command.message.log.file.size=コマンドメッセージログの1面当たりの最大サイズ]
[mailadp.command.message.log.level={10 | 20 | 30}]
```

(2) 機能

メールアダプタで使用するコマンドのメッセージログの出力先、出力レベルなどを設定するためのファイルです。

メールアダプタコマンド定義ファイルは「`adpmailcommand.properties`」というファイル名で作成します。

(3) ファイルの格納先

テンプレートファイルの場所：

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%mail%templates%adpmailcommand.properties
```

メールアダプタコマンド定義ファイルの格納場所：

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%mail
```

(4) 設定できるプロパティ

mailadp.command.messagelog.filepath=コマンドメッセージログの出力先ディレクトリ ~<文字列 (2バイト文字含む) および空白>

コマンドメッセージログの出力先ディレクトリを絶対パスで指定します。

ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。指定を省略した場合、または指定したフォルダが存在しない場合、<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>¥csc¥log¥adapter¥commandに出力されます。

mailadp.command.messagelog.filenum=コマンドメッセージログの面数 ~<数字> ((1-64))<<2>>

コマンドメッセージログの面数を指定します。

mailadp.command.messagelog.filesize=コマンドメッセージログの1面当たりの最大サイズ ~<数字> ((4096-16777216))<<1048576>>

コマンドメッセージログの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

mailadp.command.messagelog.level={10 | 20 | 30} ~<<20>>

コマンドメッセージログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力内容	出力レベル		
		10	20	30
エラー情報	例外またはエラーの発生原因	○	○	○
警告情報	発生した問題など			
インフォメーション	引数の内容 コマンド受付時と実行完了時 イベントの通知			
スタックトレース情報	エラー発生時のスタックトレース	×	○	○
デバッグ情報	エラー発生時のデバッグ情報	×	×	○

(凡例)

- ：出力されます。
- ×：出力されません。

(5) 記述例

メールアダプタコマンド定義ファイルの記述例を次に示します。

```
mailadp.command.messagelog.filepath=C:¥¥Program Files¥¥Hitachi¥¥Cosminexus¥¥csc¥¥Log¥¥adapter¥¥command
```

```
mailadp.command.messageLog.fileName=2
mailadp.command.messageLog.fileSize=1048576
mailadp.command.messageLog.level=20
```

(6) 注意事項

- 2 バイト文字などは不正な文字列に解釈されるため、次に示す `hjdk.native2ascii.jar` ツールで変換してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%jdk%bin%java -jar <サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%jdk%lib%hcompatlib%hjdk.native2ascii.jar <入力ファイルパス> <出力ファイルパス>
```

`hjdk.native2ascii.jar` ツールの詳細については、JDK のドキュメントを参照してください。

- パスを指定する場合の注意事項を次に示します。
 - 相対パス、親ディレクトリ表現 (`[..%]`, `[../]`), およびカレントディレクトリ表現 (`[.%]`, `[./]`) を含むパスは指定しないでください。
 - シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
 - Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

6.13.3 メールアダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
mailadp.smtp.host.name=接続するメールサーバのIPアドレスまたはホスト名
[mailadp.smtp.port=接続するメールサーバのポート番号]
```

```
[mailadp.user=接続するメールサーバのログインユーザ名]
mailadp.addr.from=メールのFROMフィールドに設定するアドレス
[mailadp.addr.to=メールのTOフィールドに設定するアドレス]
[mailadp.addr.cc=メールのCCフィールドに設定するアドレス]
[mailadp.addr.bcc=メールのBCCフィールドに設定するアドレス]
[mailadp.addr.count.max=設定できるアドレスの最大数]
[mailadp.mail.body.size=メール本文のサイズ]
[mailadp.attach.path.<n>=添付ファイルの絶対パス]
[mailadp.attach.file.size=メールの添付ファイルの最大サイズ]
[mailadp.max.attach.count.per.mail=最大添付ファイル数]
[mailadp.mail.format={text/plain | text/html | text/xml}]
[mailadp.mail.body-text=メール本文に挿入するテキスト]
[mailadp.mail.body-filepath=メール本文に挿入するテキストのファイルのパス]
[mailadp.mail.body-filecharset={UTF-8 | MS932}]
[mailadp.subject.size=メール主題のサイズ]
[mailadp.subject.text=メール主題に挿入するテキスト]
[mailadp.smtp.encoding=メール用エンコード]
[mailadp.smtp.auth={LOGIN | PLAIN}]
[mailadp.user.header.path=メールヘッダ定義ファイルの絶対パス]
[mailadp.account.file.path=メールアダプタアカウント定義ファイルの絶対パス]
```

```

[mailadp.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]
[mailadp.methodtrace.filepath=メンテナンスログの出力先ディレクトリ]
[mailadp.methodtrace.filenum=メンテナンスログの面数]
[mailadp.methodtrace.filesize=メンテナンスログの1面当たりの最大サイズ]

[mailadp.messagelog.level={0 | 10 | 20}]

[mailadp.smtp.timeout=メール送信時のタイムアウト時間]
[mailadp.smtp.connectiontimeout=メールサーバ接続のタイムアウト時間]

[mailadp.read-lock.retry.count=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数]
[mailadp.read-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間隔]

[mailadp.exptrace.filenum=例外ログファイルの最大出力面数]
[mailadp.exptrace.filesize=例外ログファイルの最大出力ファイルサイズ]

[mailadp.smtps.enable={TRUE | FALSE}]
[mailadp.smtps.starttls.enable={TRUE | FALSE}]
[mailadp.smtps.starttls.required={TRUE | FALSE}]

```

(2) 機能

(a) ファイルの種類

メールアダプタ実行環境プロパティファイルは、メールアダプタの構成情報を設定します。

また、1つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、メールアダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

プロパティファイル間で同じプロパティが指定された場合、プロパティの優先度は次のようになります。

ファイルの種類	プロパティ重複時の優先度
メールアダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	高
メールアダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	低

(b) 作成手順

1. 次のテンプレートファイルを基に、メールアダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%mail%templates%adpmail.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<サービス ID>.properties」で次のディレクトリに格納します。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%mail
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%mail%<HCSC サーバ名>
サブディレクトリ<HCSC サーバ名>を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者 (Service Coordinator 管理者) がアクセスできるように、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

(a) サーバ情報関連

maildp.smtp.host.name=接続するメールサーバの IP アドレスまたはホスト名

接続するメールサーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。このプロパティは省略できません。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

maildp.smtp.port=接続するメールサーバのポート番号 ~<数字>((1-65535))<<25>>

接続するメールサーバのポート番号を指定します。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

(b) メール設定関連

maildp.user=接続するメールサーバのログインユーザ名

接続するメールサーバのログインユーザ名を設定します。使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。

使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()

- 終わり小括弧 ()
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (`)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

SMTTP 認証の型が LOGIN の場合はこのプロパティを必ず設定してください。SMTTP 認証の型が PLAIN の場合、設定は不要です。

mailadp.addr.from=メールの FROM フィールドに設定するアドレス

送信メールの FROM フィールドに設定する有効なアドレスを指定します。このプロパティは省略できません。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.addr.to=メールの TO フィールドに設定するアドレス

送信メールの TO フィールドに設定する有効なアドレスを指定します。複数のアドレスを指定する場合は、区切り文字としてコンマ (,) を挿入してください。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.addr.cc=メールの CC フィールドに設定するアドレス

送信メールの CC フィールドに設定する有効なアドレスを指定します。複数のアドレスを指定する場合は、区切り文字としてコンマ (,) を挿入してください。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.addr.bcc=メールの BCC フィールドに設定するアドレス

送信メールの BCC フィールドに設定する有効なアドレスを指定します。複数のアドレスを指定する場合は、区切り文字としてコンマ (,) を挿入してください。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.addr.count.max=設定できるアドレスの最大数 ~<数字>((1-2147483647))<<768>>

アドレスフィールドに設定できるアドレスの最大数を指定します。

アドレスの最大数は、TO、CC、および BCC フィールドに設定するアドレスの合計数を指します。同一のアドレスが複数設定されている場合、それぞれが 1 件としてカウントされます。

mailadp.mail.body.size=メール本文のサイズ ~<数字>((1-2147483647))<<1024000>>

メール本文のサイズをバイト単位で指定します。

mailadp.attach.path.<n>=添付ファイルの絶対パス

添付ファイルのパスを絶対パスで指定します。<n>には添付ファイルの数に応じて 1~100 までの自然数を指定します。指定例を次に示します。

- 添付ファイルが 1 つの場合

```
mailadp.attach.path.1=C:¥¥temp¥¥attach1.txt
```

- 添付ファイルが複数の場合

```
mailadp.attach.path.1= C:¥¥temp¥¥attach1.txt
mailadp.attach.path.2= C:¥¥temp¥¥attach2.txt
:
```

ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。添付ファイルを複数指定する場合、同じファイルを2つ指定したときは同じファイルが2つ添付されます。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.attach.file.size=メールの添付ファイルの最大サイズ ~<数字>
(0-2147483647)<<5242880>>

メールの添付ファイル1つの最大サイズをバイト単位で指定します。

mailadp.max.attach.count.per.mail=最大添付ファイル数 ~<数字>(0-2147483647)<<10>>

1つのメールに添付できるファイルの最大数を指定します。

mailadp.mail.format={text/plain | text/html | text/xml} ~<<text/plain>>

メールのフォーマットとして、text/plain、text/html または text/xml*を指定します。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

注※

text/xml を指定した場合、メールアダプタではプレーンテキスト形式で表示されます。

mailadp.mail.body-text=メール本文に挿入するテキスト

メール本文に挿入するテキストを設定します。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.mail.body-filepath=メール本文に挿入するテキストのファイルのパス

任意のファイルパスを指定します。ここで設定したファイルのテキストがメール本文に読み込まれます。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.mail.body-filecharset={UTF-8 | MS932} ~<<UTF-8>>

mailadp.mail.body-filepath キーで指定したファイルの文字セットを指定します。大文字と小文字は区別されません。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.subject.size=メール主題のサイズ ~<数字>((0-2147483647))<<80>>

メール主題のサイズを指定します。主題の文字数が指定したサイズを超えた場合、超えた文字が切り落とされます。

mailadp.subject.text=メール主題に挿入するテキスト

メール主題に挿入するテキストを指定します。設定しない場合、主題なしのメールが送信されます。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.smtp.encoding=メール用エンコード ~<<ISO-2022-JP>>

メール用エンコードを指定します。設定されたエンコードがメール送信中に使用されます。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.smtp.auth={LOGIN | PLAIN} ~<<PLAIN>>

メールサーバに対する認証の型を指定します。大文字と小文字は区別されません。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.user.header.path=メールヘッダ定義ファイルの絶対パス

メールヘッダ定義ファイルのパスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。

メールアダプタの要求電文フォーマットでも設定できます。重複して指定されている場合、要求電文フォーマットの値が有効になります。

mailadp.account.file.path=メールアダプタアカウント定義ファイルの絶対パス

メールアダプタアカウント定義ファイルのパスを絶対パスで指定します。ディレクトリ区切りは「/」または「¥」を使用します。

(c) メンテナンスログ関連

mailadp.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>

メンテナンスログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル※				
	1	2	3	4	5
エラー情報（例外発生原因）	○	○	○	○	○
リクエストサービスマソッドの入口／出口情報（クラス名，メソッド名，引数，戻り値）	×	○	○	○	○
外部（BP など）のインターフェースの入口／出口情報（クラス名，メソッド名，引数，戻り値）	×	×	○	○	○
コンポーネント内インターフェースの入口／出口情報（クラス名，メソッド名，引数，戻り値）	×	×	×	○	○
メール送信情報（メールサーバの接続，メールの詳細，メッセージトレース）	×	×	×	○	○
デバッグ情報（処理の分岐などの情報）	×	×	×	×	○

（凡例）

- ：出力されます。
- ×

注※

メンテナンスログの出力レベルに 4 または 5 を指定した場合，メール送信に使用するメールアドレスが出力されます。

mailadp.methodtrace.filepath=メンテナンスログの出力先ディレクトリ

メンテナンスログの出力先ディレクトリを絶対パスで指定します。このディレクトリに例外ログも出力されます。ディレクトリ区切りは「/」または「¥¥」を使用します。

指定したフォルダが存在しない場合は，<J2EE サーバの作業ディレクトリ>¥ejb¥<J2EE サーバ名>¥logs¥CSCADP¥MAILADP¥maintenance¥<サービス ID>に出力されます。

なお，<J2EE サーバの作業ディレクトリ>¥ejb¥<J2EE サーバ名>¥logs は usrconf.cfg（J2EE サーバ用オプション定義ファイル）の ejb.server.log.directory キーで変更できます。usrconf.cfg の詳細は，マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス 定義編(サーバ定義)」の「2.2.2 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。

mailadp.methodtrace.filenum=メンテナンスログの面数 ～<数字>((1-16))<<8>>

メンテナンスログの面数を指定します。

mailadp.methodtrace.filesize=メンテナンスログの 1 面当たりの最大サイズ ～<数字>((4096-147483647))<<2097152>>

メンテナンスログの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

(d) メッセージログ関連

mailadp.messagelog.level={0 | 10 | 20} ～<<10>>

メッセージログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力内容	出力レベル		
		0	10	20
エラー情報	例外または障害の発生原因	○	○	○
警告情報	発生した問題など	×	○	○
インフォメーション	電文や引数の内容 HCSC-Messaging の状態の変更（起動時や終了時） コマンド受付時と実行完了時 イベントの通知	×	×	○

(凡例)

○：出力されます。

×：出力されません。

(e) 再接続関連

`maildp.smtp.timeout=メール送信時のタイムアウト時間 ~<数字>((0-3600))<<180>>`

メール送信時のタイムアウト時間を秒単位で指定します。0を指定した場合は、タイムアウトしません。

このプロパティの値は、SMTPサーバへメールの送信時に使用するJavaMailのセッションプロパティ"`mail.smtp.timeout`"へ設定します。

`maildp.smtp.connectiontimeout=メールサーバ接続のタイムアウト時間 ~<数字>((0-86400))<<180>>`

メールサーバ接続のタイムアウト時間を秒単位で指定します。0を指定した場合は、タイムアウトしません。

このプロパティの値は、SMTPサーバへメールの送信時に使用するJavaMailのセッションプロパティ"`mail.smtp.connectiontimeout`"へ設定します。

(f) 排他取得タイムアウト関連

`maildp.read-lock.retry.count=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ回数 ~<数字>((0-1024))<<0>>`

共通フォルダのファイルの共有ロックに失敗した場合のリトライ回数を指定します。

`maildp.read-lock.retry.interval=共通フォルダのファイルの共有ロック失敗時のリトライ間隔 ~<数字>((1-1024))<<1>>`

共通フォルダのファイルの共有ロックに失敗した場合のリトライ間隔を秒単位で指定します。

(g) 例外ログ関連

例外ログはメンテナンスログと同じディレクトリに出力されます。出力先の指定方法については`maildp.methodtrace.filepath` プロパティを参照してください。

mailadp.exptrace.filenum=例外ログファイルの最大出力面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

例外ログファイルの最大出力面数を指定します。

mailadp.exptrace.filesize=例外ログファイルの最大出力ファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>

例外ログファイルの最大出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

(h) TLS 関連

mailadp.smtps.enable={TRUE | FALSE} ~<<FALSE>>

SMTP サーバとの接続に TLS を使用するかどうかを指定します。大文字と小文字は区別されません。

- TRUE
TLS を使用して SMTP サーバに接続します。
- FALSE
TLS を使用しません。SMTP で SMTP サーバに接続します。

mailadp.smtps.starttls.enable={TRUE | FALSE} ~<<TRUE>>

SMTP サーバとの接続に TLS を使用する場合に、STARTTLS を使用するかどうかを指定します。mailadp.smtps.enable で TRUE を指定した場合だけ有効になります。大文字と小文字は区別されません。

- TRUE
STARTTLS を使用します。通常の SMTP で通信を開始し、STARTTLS で双方が TLS に対応しているか確認したあとに、TLS で再接続します。
- FALSE
STARTTLS を使用しません。SMTP 通信がすべて TLS によって暗号化されます。

mailadp.smtps.starttls.required={TRUE | FALSE} ~<<FALSE>>

メールアダプタで STARTTLS を使用する場合、接続先の SMTP サーバで次の現象が発生した際に、メールアダプタからエラーを発生させるかどうかを指定します。

- 接続先の SMTP サーバが STARTTLS をサポートしていない
- 接続先の SMTP サーバで STARTTLS の処理中にエラーが発生した

mailadp.smtps.enable と mailadp.smtps.starttls.enable の両方で TRUE を指定した場合だけ有効になります。大文字と小文字は区別されません。

- TRUE
メールアダプタでエラーを発生させます。
- FALSE

SMTP を使用して SMTP サーバに接続します。

(4) 記述例

メールアダプタ実行環境プロパティファイルの記述例を次に示します。

```
mailadp.smtp.host.name=domainName.com
mailadp.smtp.port=25
mailadp.user=john
mailadp.addr.from=sampleuser@XXXXXX.com
```

(5) 注意事項

- 次に示すプロパティのうち、一つも指定されていない場合はエラーになります。
 - mailadp.addr.to
 - mailadp.addr.cc
 - mailadp.addr.bcc
- 2 バイト文字などは不正な文字列に解釈されるため、次に示す `hjdk.native2ascii.jar` ツールで変換してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%jdk%bin%java -jar <サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%jdk%lib%hcompatlib%hjdk.native2ascii.jar <入力ファイルパス> <出力ファイルパス>
```

`hjdk.native2ascii.jar` ツールの詳細については、JDK のドキュメントを参照してください。

- パスを指定する場合の注意事項を次に示します。
 - 相対パス、親ディレクトリ表現 (`[..%]`, `[../]`)、およびカレントディレクトリ表現 (`[.%]`, `[./]`) を含むパスは指定しないでください。
 - シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
 - Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

6.13.4 メールヘッダ定義ファイル

(1) 形式

```
[<キー名称>=<値>]
```

(2) 機能

メールの重要度、返信要求の有無など、ユーザが定義した任意のメールヘッダのオプションを設定するためのファイルです。

メールヘッダ定義ファイルは、任意のパスに任意のファイル名で格納できます。ただし、メールヘッダ定義ファイルの絶対パスが、メールアダプタ実行環境プロパティファイルの `mailadp.user.header.path` キーで指定されている必要があります。

(3) ファイルの格納先

テンプレートファイルの場所：

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%mail%templates%mail-header.properties
```

(4) 記述例

メールヘッダ定義ファイルの記述例を次に示します。

```
Importance=High  
Sensitivity=Private
```

(5) 注意事項

- キー名と値を重複して指定した場合、動作は保証されません。
- 同一のヘッダが複数回定義された場合、動作は保証されません。
- キー名に対して空の値は指定できません。空の値を指定した場合はエラーになります。
- メールヘッダ定義ファイルに何も定義されていない場合、ユーザ定義のメールヘッダなしでメールが送信されます。
- メールヘッダ定義ファイルの動作は、メールサーバおよびメールを受信するクライアントに依存します。
- メールアダプタ実行環境プロパティファイルまたは要求電文に定義されたメールヘッダと同一のメールヘッダをメールヘッダ定義ファイルに定義しないことを推奨します。同一のメールヘッダをメールアダプタ実行環境プロパティファイルおよびメールヘッダ定義ファイルに指定した場合、動作はメールサーバに依存します。
- 2バイト文字などは不正な文字列に解釈されるため、次に示す `hjdk.native2ascii.jar` ツールで変換してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%jdk%bin%java -jar <サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%jdk%lib%hcompatlib%hjdk.native2ascii.jar <入力ファイルパス> <出力ファイルパス>
```

`hjdk.native2ascii.jar` ツールの詳細については、JDK のドキュメントを参照してください。

6.14 HTTP アダプタで利用するファイル

6.14.1 HTTP アダプタアカウント定義ファイル

HTTP アダプタアカウント定義ファイルは、次の内容を管理するためのファイルです。

- ベーシック認証に必要な認証情報（ユーザ名、パスワードおよび接続先 URI）
- 署名付き AWS API リクエストの署名情報付与で使用する情報（アクセスキー ID、シークレットアクセスキーおよびアクセスキーペア ID）

HTTP アダプタアカウント定義ファイルは、`csahttpuseradd` コマンドの `-f` オプションで指定したパスおよびファイル名で作成されます。`csahttpuseradd` コマンドの詳細は、「5.4 サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンド」の「[csahttpuseradd \(HTTP アダプタで使用するアカウント情報の登録・更新\)](#)」を参照してください。

作成した HTTP アダプタアカウント定義ファイルを有効にするには、ファイルの絶対パスを HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルの `adphttp.config.account-inf.filepath` キーに指定する必要があります。

なお、ファイル内容は運用コマンドで管理するため、編集はできません。

6.14.2 HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
[adphttp.request.method={GET | HEAD | POST | OPTIONS | PUT | DELETE}]
[adphttp.request.uri-scheme-authority=URIのスキームとオーソリティ]
[adphttp.request.uri-path=URIのパス]
[adphttp.request.uri-query.<追番>=URIのクエリ]

[adphttp.request.header.authorization.type={none | raw | basic}]
[adphttp.request.header.authorization=認証情報]

[adphttp.request.header.content-type.charset=Content-Typeヘッダの文字コード]
[adphttp.request.header.content-type=Content-Typeヘッダのメディアタイプ]

[adphttp.request.header.userdef.<追番>=リクエストヘッダ]

[adphttp.request.body.style={single | multipart/form-data}]

[adphttp.request.part.message.binding={none | raw | form-data}]
[adphttp.request.part.message.part-id=HTTPリクエストボディのパートに付与するID]
[adphttp.request.part.message.content-type.charset=Content-Typeの文字コード]
[adphttp.request.part.message.content-type=Content-Typeの値]

[adphttp.request.part.file.<追番>.part-id=ファイルのパートに付与するID]
[adphttp.request.part.file.<追番>.input-folder-name=共通フォルダ定義名]
```

```
[adphhttp.request.part.file.<追番>.local-file-name=読み込み対象のファイル名]
[adphhttp.request.part.file.<追番>.file-name=送信時のファイル名]
[adphhttp.request.part.file.<追番>.content-type.charset=Content-Typeの文字コード]
[adphhttp.request.part.file.<追番>.content-type=Content-Typeの値]

[adphhttp.request.output-folder-name=共通フォルダ定義名]
[adphhttp.request.output-sub-folder=ファイル出力先のサブフォルダ名]

[adphhttp.config.account-inf-filepath=HTTPアダプタアカウント定義ファイルのパス]

[adphhttp.config.trace.path=ログの出力先の親ディレクトリ]
[adphhttp.config.message.log.level={0 | 10 | 20}]
[adphhttp.config.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]
[adphhttp.config.methodtrace.filenum=メンテナンスログファイルの面数]
[adphhttp.config.methodtrace.filesize=メンテナンスログファイルのファイルサイズ]
[adphhttp.config.exptrace.filenum=例外ログファイルの面数]
[adphhttp.config.exptrace.filesize=例外ログファイルのファイルサイズ]

[adphhttp.config.password-auth-inf-filepath=パスワード認証情報定義ファイルのパス]

[adphhttp.config.publickey-auth-inf-filepath=公開鍵認証情報定義ファイルのパス]

[adphhttp.request.header.signed.aws.api.request.type={none | header}]
[adphhttp.request.header.signed.aws.api.request=アクセスキーペアID]
[adphhttp.request.header.signed.aws.api.request.version=署名バージョン]
[adphhttp.request.header.signed.aws.api.request.service=接続先AWSサービス]
[adphhttp.request.header.signed.aws.api.request.region=接続先AWSリージョン]
```

(2) 機能

HTTP アダプタごとの構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の HTTP アダプタ
- HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての HTTP アダプタ
作成手順については「[6.14.3 HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

同じ内容が要求電文（ヘッダ）、HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル、HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルの間で複数設定された場合、次の表でより優先度の高いものが適用されます。

指定箇所	重複時の優先度
要求電文 (ヘッダ)	高
HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	
HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	低

プロパティ名と要求電文 (ヘッダ) との対応については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.16.14 要求電文 (ヘッダ) と HTTP アダプタ実行環境 (共通) プロパティファイルのパラメタの対応関係」を参照してください。

(b) 作成手順

HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルは次の手順で作成してください。HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルの作成手順は、「6.14.3 HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル」を参照してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config%templates%serviceid.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<サービス ID>.properties」で次のディレクトリに格納してください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config<HCSC サーバ名>
```

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないため、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者 (Service Coordinator 管理者) がアクセスできるように、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

(a) リクエストライン

```
adphhttp.request.method={GET | HEAD | POST | OPTIONS | PUT | DELETE}
```

リクエストの HTTP メソッド名を指定します。

GET, HEAD, POST, OPTIONS, PUT, DELETE 以外のメソッド名を指定した場合は、動作を保証しません。

`adphttp.request.uri-scheme-authority=URI` のスキームとオーソリティ

URI のスキームとオーソリティを「<スキーム>://<オーソリティ>」の形式で指定します。

`adphttp.request.uri-path=URI` のパス

URI のパス部分を指定します。URI のパスがルートパス ("/") の場合は指定を省略できます。

`adphttp.request.uri-query.<追番>=URI` のクエリ

URI のクエリ部分を「<キー>=<値>」の形式で 1 つずつ指定します。

<追番>には 1~1024 の数字を指定できます。

(b) WWW 認証

`adphttp.request.header.authorization.type={none | raw | basic} ~<<none>>`

WWW 認証の認証タイプを指定します。大文字と小文字は区別されません。

- none

認証情報は送信されません。

- raw

`adphttp.request.header.authorization` プロパティに指定した認証情報（任意の認証文字列）が、HTTP リクエストヘッダの Authorization に設定されて送信されます。

- basic

ベーシック認証の場合に指定します。認証情報は次のように取得・設定して送信されます。

- `adphttp.request.header.authorization` プロパティに指定した認証情報（ユーザ名）を基に、対応するパスワードが HTTP アダプタアカウント定義ファイルから取得されます。
- HTTP リクエストヘッダの Authorization に、HTTP アダプタ内部で生成したベーシック認証用文字列が設定されます。

このプロパティを指定した場合は、必ず `adphttp.request.header.authorization` プロパティに認証情報を指定してください。

`adphttp.request.header.authorization=認証情報`

WWW 認証の認証情報を次のように指定します。

- `adphttp.request.header.authorization.type` プロパティで none を指定した場合コメントを外してください（空文字列を指定）。

- `adphttp.request.header.authorization.type` プロパティで `raw` を指定した場合
任意の認証情報を指定してください。
- `adphttp.request.header.authorization.type` プロパティで `basic` を指定した場合
HTTP アダプタアカウント定義ファイルに登録したユーザ名を指定してください。
ベーシック認証の場合の指定例を次に示します。

```
adphttp.request.header.authorization.type=basic
adphttp.request.header.authorization=user1
```

(c) HTTP ヘッダの Content-Type ヘッダ

`adphttp.request.header.content-type.charset=Content-Type` ヘッダの文字コード

HTTP リクエストヘッダの Content-Type ヘッダの文字コードを指定します。

要求電文 (ボディ) のバインド方法に `form-data` を指定した場合、ここで指定した文字コードにフォームデータを変換してから HTTP リクエストが送信されます。指定できる文字コードは JavaVM が使用できる文字コードに限ります。

要求電文 (ボディ) のバインド方法に `raw` を指定した場合、要求電文 (ボディ) の文字コードに合わせて文字コードを指定してください。

`adphttp.request.header.content-type` プロパティを指定しなかった場合、このプロパティの指定は無視されます。キーだけ指定して値を指定しない場合はエラーになります。

`adphttp.request.header.content-type=Content-Type` ヘッダのメディアタイプ

HTTP リクエストヘッダの Content-Type ヘッダのメディアタイプを「`*/*`」の形式で指定します。キーだけ指定して値を指定しない場合はエラーになります。

(d) HTTP ヘッダの任意指定

`adphttp.request.header.userdef.<追番>=リクエストヘッダ`

任意のリクエストヘッダ (1 つのヘッダ) を「`<フィールド名>:<フィールド値>`」の形式で指定します。`<追番>`には 1~1024 の数字を指定できます。

このプロパティは拡張ヘッダの設定を推奨します。標準ヘッダを定義した場合の動作は保証しません。また、特殊な HTTP ヘッダは指定しても無視されます。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.16.3 HTTP リクエストと要求電文の関係」の、HTTP リクエストヘッダに関する記述を参照してください。

設定した値は、最初の「`:`」を区切り文字として`<フィールド名>`と`<フィールド値>`に分割して HTTP ヘッダに設定されます。`<フィールド名>`と`<フィールド値>`に余分な空白文字が含まれていても除去されません。

<フィールド名>と<フィールド値>には改行文字を指定しないでください。改行文字が含まれる場合、エラーになります。

(e) リクエストボディのパート形式

`adphttp.request.body.style={single | multipart/form-data} ~<<single>>`

リクエストボディのパート形式を次の中から指定します。大文字と小文字は区別されません。

- single
単一パートの送信処理を実行します。
- multipart/form-data
マルチパート型の処理を実行します。マルチパート型の処理については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「2.16.3 HTTP リクエストと要求電文の関係」を参照してください。

(f) 要求電文 (ボディ)

`adphttp.request.part.message.binding={none | raw | form-data} ~<<none>>`

要求電文 (ボディ) の HTTP リクエストボディへのバインド方法を指定します。大文字と小文字は区別されません。

- none
HTTP リクエストボディを送信しません。
- raw
パススルーモードとして、要求電文 (ボディ) で指定したデータがそのまま HTTP リクエストボディに設定されます。
- form-data
ノーマルモードとして、要求電文 (ボディ) のフォームデータが「Content-Type: application/x-www-form-urlencoded」の形式で HTTP リクエストボディに設定されます。
OAuth 2.0 が対応する認証フローを使用する場合は、認証情報をフォームデータとして送信するため、form-data を設定してください。

`adphttp.request.part.message.part-id=HTTP リクエストボディのパートに付与する ID ~<任意のパート ID>`

HTTP リクエストボディのパートに付与する ID を指定します。マルチパート型の場合に、各パートの Content-Disposition ヘッダの name 属性の値として使用されます。

「csc_http_adapter_telegram_name」で始まる値は設定できません。設定した場合の動作は保証しません。

未定義の場合、HTTP アダプタで生成されたシーケンス番号が使用されます。未定義かつ次に示す条件をすべて満たす場合は、「csc_http_adapter_telegram_name_1」が設定されます。

- リクエストボディのパート形式が「multipart/form-data」である

- ボディ要求電文のリクエストボディへのバインド方法が「raw」である

`adhttp.request.part.message.content-type.charset=Content-Type` の文字コード ~<任意の文字コード名>

HTTP リクエストボディのパートの Content-Type の文字コードを指定します。マルチパート型の場合に、各パートの Content-Type ヘッダの charset 属性として使用されます。未定義の場合は charset 属性を設定しません。

`adhttp.request.part.message.content-type` プロパティを指定しなかった場合、このプロパティの指定は無視されます。

`adhttp.request.part.message.content-type=Content-Type` の値 ~<任意のメディアタイプ>

HTTP リクエストボディのパートの Content-Type の値を指定します。マルチパート型の場合に、各パートの Content-Type ヘッダの値として使用されます。未定義の場合は Content-Type を設定しません。

なお、`adhttp.request.part.message.content-type.charset` プロパティに有効な値が設定されていて、かつ charset 属性を付加した場合、動作は保証しません。

(g) 入力ファイル

注意事項

ここで記載するプロパティ名の<追番>には、プロパティ名を一意とするための数値を 1~1,024 の範囲で指定します。<追番>の指定時の留意点を次に示します。

- 「001」のように数値の前に 0 は付けないでください。
- 1 つのプロパティを複数指定する場合、重複しない数値を指定してください。連番にする必要はありません。また、数値の大小は参照順などに影響しません。
- 同じ入力ファイルを定義するプロパティ同士には、同じ数値を指定してください。

また、ここに記載するプロパティと要求電文の file 要素と同時に指定した場合、要求電文の指定が優先されます。

`adhttp.request.part.file.<追番>.part-id=ファイルのパートに付与する ID` ~<任意のパート ID>

ファイルのパートに付与する ID を指定します。マルチパート型の場合に、各パートのヘッダの Content-Disposition の name パラメタの値として使用します。

<追番>の指定については、「(g) 入力ファイル」の冒頭の説明を参照してください。

「csc_http_adapter_file_name」で始まる値は設定できません。設定した場合の動作は保証しません。

未定義の場合、HTTP アダプタで生成されたシーケンス番号が使用されます。未定義かつ次に示す条件をすべて満たす場合は、「csc_http_adapter_file_name_<1 から始まる連番>」が設定されます。連番は製品内で採番されます。

- adphttp.request.body.style プロパティの値に「multipart/form-data」を指定した
- adphttp.request.part.file.<追番>.input-folder-name プロパティおよび adphttp.request.part.file.<追番>.local-file-name プロパティが設定されている

adphttp.request.part.file.<追番>.input-folder-name=共通フォルダ定義名

読み込み対象のファイルが格納された共通フォルダの定義名を指定します。

<追番>の指定については、「(g) 入力ファイル」の冒頭の説明を参照してください。

指定した共通フォルダ定義名が不正な場合は、エラーになります。キーだけ指定して値を指定しない場合はエラーになります。共通フォルダを使用しない場合は指定を省略できます。

このプロパティを指定した場合は、必ず adphttp.request.part.file.<追番>.local-file-name プロパティに読み込み対象のファイル名を指定してください。

adphttp.request.part.file.<追番>.local-file-name=読み込み対象のファイル名

読み込み対象のファイルの名称を指定します。

<追番>の指定については、「(g) 入力ファイル」の冒頭の説明を参照してください。

階層構造や上位のパスを指定した場合はエラーになります。サブフォルダを使用する場合は、共通フォルダルートからファイル名までの相対パスで設定してください。キーだけ指定して値を指定しない場合はエラーになります。

このプロパティを指定した場合は、必ず adphttp.request.part.file.<追番>.input-folder-name プロパティに共通フォルダ定義名を指定してください。

シンボリックリンク以外のファイルを指定してください。

adphttp.request.part.file.<追番>.file-name=送信時のファイル名

送信時のファイルの名称を指定します。マルチパート型の場合に、各パートの Content-Disposition ヘッダの filename 属性の値として使用されます。未定義の場合、filename 属性は設定されません。

<追番>の指定については、「(g) 入力ファイル」の冒頭の説明を参照してください。

adphttp.request.part.file.<追番>.content-type.charset=Content-Type の文字コード ~<任意の文字コード名>

ファイルのパートの Content-Type の文字コードとして、任意の文字コード名称を指定します。マルチパート型の場合に、各パートの Content-Type ヘッダの charset 属性として使用されます。未定義の場合、charset 属性は設定されません。

このプロパティを指定した場合は、必ず `adphttp.request.part.file.<追番>.content-type` プロパティを指定してください。

<追番>の指定については、「(g) 入力ファイル」の冒頭の説明を参照してください。

`adphttp.request.part.file.<追番>.content-type=Content-Type` の値 ~<任意のメディアタイプ>

ファイルのパートの Content-Type の値として、任意のメディアタイプを指定します。マルチパート型の場合に、各パートの Content-Type ヘッダの値として使用されます。未定義の場合、Content-Type は設定されません。

<追番>の指定については、「(g) 入力ファイル」の冒頭の説明を参照してください。

なお `adphttp.request.part.file.<追番>.content-type.charset` プロパティに有効な値が設定されていて、かつ charset 属性を付加した場合、動作は保証しません。

(h) 出力ファイル

`adphttp.request.output-folder-name=共通フォルダ定義名`

書き込み対象のファイルを格納する共通フォルダの定義名を指定します。

指定した共通フォルダ定義名が不正な場合は、エラーになります。キーだけ指定して値を指定しない場合はエラーになります。

共通フォルダを使用しない場合は指定を省略できます。

`adphttp.request.output-sub-folder=ファイル出力先のサブフォルダ名`

HTTP レスポンス時にダウンロードファイルを出力するサブフォルダを指定します。

`adphttp.request.output-folder-name` プロパティで共通フォルダを指定し、かつサブフォルダを使用する場合に、書き込み対象のファイルを出力するサブフォルダを指定します。

共通フォルダルートからサブフォルダまでの相対パスを設定してください。相対パスの先頭および末尾のファイル区切り文字 (/) は省略できます。

指定したサブフォルダが存在しない場合は、実行時にフォルダを作成します。

共通フォルダルートより上位のパスを指定した場合はエラーになります。

`adphttp.request.output-folder-name` プロパティで共通フォルダ定義名が定義されていない場合、指定値は無視されます。

(i) HTTP アダプタアカウント定義ファイル

`adphttp.config.account-inf-filepath=HTTP アダプタアカウント定義ファイルのパス`

HTTP アダプタアカウント定義ファイルのパスを絶対パスで指定します。

署名付き AWS API リクエストの署名情報付与機能に関する設定を要求電文（ヘッダ）で設定する場合も、このプロパティの指定が必要です。

HTTP アダプタアカウント定義ファイルは、`csahttpuseradd` コマンドで登録した情報が入ったファイルです。`csahttpuseradd` コマンドについては、「5. コマンド（運用環境・実行環境）」の「[csahttpuseradd（HTTP アダプタで使用するアカウント情報の登録・更新）](#)」を参照してください。

(j) ロギング

`adphttp.config.trace.path`=ログの出力先の親ディレクトリ ~<<<J2EE サーバ用オプション定義ファイル (usrconf.properties) の `ejb.server.log.directory` キーで指定したログ出力ディレクトリ>>>

メンテナンスログおよび例外ログの出力先の親ディレクトリを絶対パスで指定します。指定したフォルダが存在しない場合は HTTP アダプタ起動時にフォルダを作成します。

ここで指定したパスを基に、ログファイルは次の個所へ出力されます。

```
<adphttp.config.trace.pathで指定したパス>%CSCADP%ADPHTTP%maintenance%<サービスID>
```

`adphttp.config.messagelog.level`={0 | 10 | 20} ~<<10>>

メッセージログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力内容	出力レベル		
		0	10	20
エラー情報	例外または障害の発生原因	○	○	○
警告情報	発生した問題など	△	○	○
インフォメーション	電文や引数の内容 HTTP アダプタの状態の変更（起動時や終了時） イベントの通知	△	△	○

(凡例)

○：出力されます。

△：重要なログメッセージだけ出力されます。

`adphttp.config.methodtrace.level`={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>

メンテナンスログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
エラー情報（例外発生原因）	○	○	○	○	○
主要な外部モジュールのインターフェースの入口／出口情報（クラス名、メソッド名、引数、戻り値）	×	○	○	○	○

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
外部モジュールのインターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	×	○	○	○
主要なコンポーネント内インターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値)	×	×	×	○	○
コンポーネント内インターフェースの入口/出口情報 (クラス名, メソッド名, 引数, 戻り値) や, デバッグ情報 (処理の分岐などの情報)	×	×	×	×	○

(凡例)

○ : 出力されます。

× : 出力されません。

`adphttp.config.methodtrace.filenum`=メンテナンスログファイルの面数 ~<数字>((1-16)) <<8>>

メンテナンスログのファイルの面数を指定します。

`adphttp.config.methodtrace.filesize`=メンテナンスログファイルのファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647)) <<2097152>>

メンテナンスログの1面当たりの最大ファイルサイズをバイト単位で指定します。

`adphttp.config.exptrace.filenum`=例外ログファイルの面数 ~<数字>((1-16)) <<8>>

例外ログの面数を指定します。

`adphttp.config.exptrace.filesize`=例外ログファイルのファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647)) <<2097152>>

例外ログの1面当たりの最大ファイルサイズをバイト単位で指定します。

(k) パスワード認証情報定義ファイル

`adphttp.config.password-auth-inf-filepath`=パスワード認証情報定義ファイルのパス

パスワード認証のユーザ情報を `csuseradd` コマンドで登録している場合、パスワード認証情報定義ファイルのファイル名を絶対パスで指定します。`csuseradd` コマンドの実行時に `-f` オプションで指定したパスワード認証情報定義ファイルのパスを指定してください。

指定するファイルには、HCSC サーバの管理者のアクセス権限が必要です。

指定したファイルが存在しない場合は、サービスアダプタの開始時にエラーとなります。

(l) 公開鍵認証情報定義ファイル

`adphttp.config.publickey-auth-inf-filepath`=公開鍵認証情報定義ファイルのパス

公開鍵認証の秘密鍵情報を `csakeyadd` コマンドで登録している場合、公開鍵認証情報定義ファイルのファイル名を絶対パスで指定します。`csakeyadd` コマンドの実行時に `-f` オプションで指定した公開鍵認証情報定義ファイルのパスを指定してください。

指定するファイルには、HCSC サーバの管理者のアクセス権限が必要です。

指定したファイルが存在しない場合は、サービスアダプタの開始時にエラーとなります。

(m) 署名付き AWS API リクエスト

`adphttp.request.header.signed.aws.api.request.type={none | header} ~<<none>>`

署名付き AWS API リクエストの認証方法を指定します。

- none
署名付き AWS API リクエストの署名情報を生成しません。
- header
署名付き AWS API リクエストの署名情報を生成し、署名情報をリクエストヘッダに付与して送信します。

`adphttp.request.header.signed.aws.api.request=アクセスキーペア ID`

署名付き AWS API リクエストで使用するアクセスキーペア ID を指定します。

指定されたアクセスキーペア ID をキーにして、HTTP アダプタアカウント定義ファイルから署名付き AWS API リクエストの署名生成に必要なアクセスキー ID、シークレットアクセスキーを取得します。

`adphttp.request.header.signed.aws.api.request.version=署名バージョン ~<<aws4_request>>`

署名付き AWS API リクエストの署名バージョンを指定します。指定できる値を次に示します。

- aws4_request
署名バージョン 4

`adphttp.request.header.signed.aws.api.request.service=接続先 AWS サービス`

接続先 AWS サービスを指定します。指定できる値を次に示します。

- s3
Amazon S3 へ接続します。

存在しない AWS サービス名を指定した場合は、AWS サーバがエラー応答を返します。

`adphttp.request.header.signed.aws.api.request.region=接続先 AWS リージョン`

接続先 AWS リージョンを次の中から指定します。存在しない接続先 AWS リージョンを指定した場合は、AWS サーバがエラー応答を返します。

指定できる値	接続先 AWS リージョン
us-east-2	米国東部 (オハイオ)
us-east-1	米国東部 (バージニア北部)
us-west-1	米国西部 (北カリフォルニア)
us-west-2	米国西部 (オレゴン)
af-south-1	アフリカ (ケープタウン)
ap-east-1	アジアパシフィック (香港)
ap-south-2	アジアパシフィック (ハイデラバード)
ap-southeast-3	アジアパシフィック (ジャカルタ)
ap-southeast-4	アジアパシフィック (メルボルン)
ap-south-1	アジアパシフィック (ムンバイ)
ap-northeast-3	アジアパシフィック (大阪)
ap-northeast-2	アジアパシフィック (ソウル)
ap-southeast-1	アジアパシフィック (シンガポール)
ap-southeast-2	アジアパシフィック (シドニー)
ap-northeast-1	アジアパシフィック (東京)
ca-central-1	カナダ (中部)
ca-west-1	カナダ西部 (カルガリー)
eu-central-1	欧州 (フランクフルト)
eu-west-1	欧州 (アイルランド)
eu-west-2	欧州 (ロンドン)
eu-south-1	欧州 (ミラノ)
eu-west-3	欧州 (パリ)
eu-south-2	欧州 (スペイン)
eu-north-1	欧州 (ストックホルム)
eu-central-2	欧州 (チューリッヒ)
il-central-1	イスラエル (テルアビブ)
me-south-1	中東 (バーレーン)
me-central-1	中東 (アラブ首長国連邦)
sa-east-1	南米 (サンパウロ)
us-gov-east-1	AWS GovCloud (米国東部)
us-gov-west-1	AWS GovCloud (米国西部)

(4) 記述例

記述例を次に示します。

```
adphttp.request.method=GET
adphttp.request.uri-scheme-authority=http://localhost:80
adphttp.request.uri-path=trans/EN2JP/something
adphttp.request.uri-query.1=name=id
adphttp.request.header.authorization.type=none
adphttp.request.header.authorization=
adphttp.request.header.content-type.charset=utf-8
adphttp.request.header.content-type=application/msword
adphttp.request.header.userdef.1=cache-control:no-cache
adphttp.request.part.message.binding=none
adphttp.config.messagelog.level=10
adphttp.config.methodtrace.level=3
adphttp.config.methodtrace.filenum=8
adphttp.config.methodtrace.filesize=2097152
adphttp.config.exptrace.filenum=8
adphttp.config.exptrace.filesize=2097152
```

(5) 注意事項

- プロパティファイルは文字コードを UTF-8 にして保存してください。UTF-8 以外の文字コードを使用した場合、設定値を正しく解釈できない場合があります。
- パスを指定する場合の注意事項を次に示します。
 - 相対パス、親ディレクトリ表現 ([..¥], [../]), およびカレントディレクトリ表現 ([.¥], [./]) を含むパスは指定しないでください。
 - シンボリックリンクを含むパスは指定しないでください。
 - Windows の場合、UNC 形式、NTFS のストリーム名、および予約デバイス名を含むパスは指定しないでください。また、パスの大文字と小文字は区別されません。

6.14.3 HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル

(1) 形式

ファイルの記述形式は HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。記述形式については、[\[6.14.2 HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル\]](#) を参照してください。

(2) 機能

すべての HTTP アダプタに共通する構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の HTTP アダプタ
作成手順については「[6.14.2 HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。
- HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての HTTP アダプタ

これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1 つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。

プロパティファイルおよび要求電文間で同じ内容が複数設定された場合のプロパティの優先度については、「[6.14.2 HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

プロパティ名と要求電文（ヘッダ）との対応については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「[2.16.14 要求電文（ヘッダ）と HTTP アダプタ実行環境（共通）プロパティファイルのパラメタの対応関係](#)」を参照してください。

(b) 作成手順

HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config%templates%adphttpcom.properties
```

2. 編集後のファイルを次のディレクトリに格納します。

なお、ファイル名「adphttpcom.properties」は変更しないでください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config%common
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config%<HCSC サーバ名>%common
```

サブディレクトリ名の<HCSC サーバ名>と「common」を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないのので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者（Service Coordinator 管理者）がアクセスできるよう、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

設定できるプロパティは HTTP アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。詳細は「[6.14.2 HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

(4) 注意事項

プロパティファイルは文字コードを UTF-8 にして保存してください。UTF-8 以外の文字コードを使用した場合、設定値を正しく解釈できない場合があります。

6.15 コマンドアダプタで利用するファイル

6.15.1 実行許可コマンド定義ファイル

(1) 形式

- チェック対象文字列を受理する正規表現を、改行文字区切りで記述します。
- 使用できる文字コードは UTF-8 です。
- 空文字列行は無視されます。
- 正規表現の記述仕様は、`java.util.regex.Pattern` クラスの仕様に従います。

(2) 機能

コマンドアダプタで実行できる外部コマンドとコマンドライン引数の組み合わせを正規表現で設定します。

コマンドアダプタへのリクエスト時、要求電文で指定された外部コマンドと各コマンドライン引数をそれぞれ半角空白で結合した文字列に対して、実行許可コマンド定義ファイルに指定した正規表現で判定します。

実行許可コマンド定義ファイルは次の手順で作成してください。

1. コマンドアダプタで実行を許可するファイルパス、および指定可能とするコマンドライン引数の仕様をまとめます。
2. チェック対象文字列を受理する正規表現を作成して、ファイルに記載します。
3. 作成した実行許可コマンド定義ファイルは、任意の場所に任意のファイル名で保存します。

注意事項

実行許可コマンド定義ファイルを有効にするには、コマンドアダプタ実行環境プロパティファイルの `adpcmd.config.command.allow-file-path` プロパティに保存先のファイルパスを指定してください。

(3) 記述例

実行許可コマンド定義ファイルの記述例を次に示します。

```
/bin/ls(?: -l)?  
/usr/share/product/bin/[^ /]+.sh[^&|<>]*
```

(4) 注意事項

外部コマンドやコマンドライン引数の部分の受理正規表現は適切に設定してください。特に、システム設計時に次に示す前提条件がある場合は、システム管理者が意図しないプロセスの起動を抑止することで、セキュリティのリスクを回避できます。

- ビジネスプロセスを介さないでアダプタを直接呼び出せる状態（標準受付起動時）である
- ビジネスプロセス上で、エンドユーザのリクエストからの値が直接コマンドアダプタの要求電文にマッピングされている

参考

不適切な正規表現の一例を次に示します。

- 任意文字列を受理する表現（例えば、.+や.*など）
意図しないプロセスの起動を防げません。
- シェルやコマンドプロンプトで実行制御の意味を持つ特殊な文字（例えば、&, |, >, <など）
コマンドライン引数内に意図しないプロセスを指定された場合に起動を防げません。

6.15.2 プロセス環境変数定義ファイル

(1) 形式

Java のプロパティファイル形式です。

1 行に 1 つの環境変数を指定してください。

```
<環境変数名1>=<変数値1>  
<環境変数名2>=<変数値2>  
:  
<環境変数名n>=<変数値n>
```

注意事項

ASCII 文字以外を使用する場合は、次のどちらかの対策をしてください。

- ファイルを UTF-8 で保存
- Java の `java.util.Properties` クラスで規定する Unicode エスケープで指定

(2) 機能

プロセス環境変数定義ファイルでは、外部コマンドプロセスだけで有効になる環境変数を設定します。

プロセス環境変数定義ファイルは次の手順で作成してください。

1. 外部コマンドプロセスで使用する環境変数の仕様（環境変数名と変数値）をまとめます。
2. Java のプロパティファイル形式に従って、環境変数名と変数値をファイルに記述します。
3. 作成したプロセス環境変数定義ファイルは、任意の場所に任意のファイル名で保存します。

注意事項

プロセス環境変数定義ファイルを有効にするには、コマンドアダプタ実行環境プロパティファイルの `adpcmd.config.process-environment.variable-file-path` プロパティに保存先のファイルパスを指定してください。

(3) 記述例

プロセス環境変数定義ファイルの記述例を次に示します。

```
SIZE_OF_LIST=20000  
OPTION_STATUS=1
```

(4) 注意事項

- 環境変数名の大文字と小文字を区別するかどうかは、オペレーティングシステムの仕様に依存します。
- Java のプロパティファイル形式のため、環境変数名、変数値ともに、エスケープが必要となるケースがあります。
- ほかに変数値を参照することや、自身の元の値を参照することはできません。
- 同一のキーを複数指定した場合、どれが有効になるかは不定です。

6.15.3 コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

`adpcmd.config.command.allow-file-path`=実行許可コマンド定義ファイルのパス

[`adpcmd.config.process-environment.variable-file-path`=プロセス環境変数定義ファイルのパス]
[`adpcmd.config.process-environment.working-dir-path`=外部コマンドプロセスの作業ディレクトリパス]

[`adpcmd.config.timeout.value`=外部コマンドプロセスのタイムアウト値]
[`adpcmd.config.timeout.enable-kill-process`={true | false}]

[`adpcmd.config.stdout.size`=応答電文で取得する標準出力の上限サイズ]

[`adpcmd.log.message.log.level`={0 | 10 | 20}]
[`adpcmd.log.methodtrace.level`={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]

```
[adpcmd. log. methodtrace. filenum=メンテナンスログファイルの面数]
[adpcmd. log. methodtrace. filesize=メンテナンスログファイルのファイルサイズ]
[adpcmd. log. exptrace. filenum=例外ログファイルの面数]
[adpcmd. log. exptrace. filesize=例外ログファイルのファイルサイズ]
[adpcmd. log. stderr. enable={true | false}]
[adpcmd. log. stderr. charset={UTF-8 | MS932 | EUC-JP}]
[adpcmd. log. stderr. filenum=標準エラー出力ログファイルの面数]
[adpcmd. log. stderr. filesize=標準エラー出力ログファイルのファイルサイズ]
```

(2) 機能

コマンドアダプタごとの構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

コマンドアダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定のコマンドアダプタ
- コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべてのコマンドアダプタ
作成手順については「[6.15.4 コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1 つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、コマンドアダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

同じ内容が要求電文、コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル、コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイルの間で複数設定された場合、次の表でより優先度の高いものが適用されます。

指定箇所	重複時の優先度
要求電文	高
コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	
コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	低

(b) 作成手順

コマンドアダプタ実行環境プロパティファイルは次の手順で作成してください。コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイルの作成手順は、「[6.15.4 コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、コマンドアダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config%templates%serviceid.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<サービス ID>.properties」で次のディレクトリに格納してください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config<HCSC サーバ名>
```

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないなので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者 (Service Coordinator 管理者) がアクセスできるように、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

(a) 実行許可コマンド定義ファイルのパス

adpcmd.config.command.allow-file-path=実行許可コマンド定義ファイルのパス

実行許可コマンド定義ファイルのパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。相対パスを指定した場合の基点ディレクトリを次に示します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config
```

参考

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ> が「C:%Example」で、実行許可コマンド定義ファイル「acc.txt」を「C:%Example%CSC%custom-adapter%Command%config」に作成したと仮定した場合、次の2つの例はどちらを指定しても動作は同じです。

● 絶対パス指定の例

```
adpcmd.config.command.allow-file-path=C:%Example%CSC%custom-adapter%Command%config%acc.txt
```

● 相対パス指定の例

```
adpcmd.config.command.allow-file-path=acc.txt
```

(b) 外部コマンドプロセスの環境設定

adpcmd.config.process-environment.variable-file-path=プロセス環境変数定義ファイルのパス

プロセス環境変数定義ファイルのファイルパスを絶対パスまたは相対パスで指定します。相対パスを指定した場合の基点ディレクトリを次に示します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config
```

adpcmd.config.process-environment.working-dir-path=外部コマンドプロセスの作業ディレクトリパス ~<<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%spool%Command>>

外部コマンドプロセスの作業ディレクトリを絶対パスで指定します。

(c) タイムアウト

adpcmd.config.timeout.value=外部コマンドプロセスのタイムアウト値 ~<数字>((0-86400)) <<60>>

外部コマンドプロセスのタイムアウト値（単位：秒）を指定します。

0を指定した場合、プロセスがタイムアウトなしとなり、外部コマンドプロセスが終了するまで待ちます。

注意事項

サービスプラットフォームでは、運用環境から外部コマンドプロセスを停止する手段を提供していません。したがって、確実に終了する外部コマンドを指定するか、状態が確認できる外部コマンドを作成してください。

adpcmd.config.timeout.enable-kill-process=タイムアウト発生時の外部コマンドプロセス強制終了可否 ~{true | false} <<true>>

タイムアウトが発生した際に、その時点で外部コマンドプロセスの強制終了を試みるかどうかを指定します。

- true
強制終了を試みます。
- false
強制終了しません。

trueの場合でも、外部コマンドプロセスの状態によっては強制終了に失敗するケースがあります。強制終了の成功可否については、メッセージログで確認してください。

false の場合、コマンドアダプタや HCSC サーバの状態に関係なく、起動した外部コマンドプロセスは処理を継続します。

注意事項

サービスプラットフォームでは、運用環境から外部コマンドプロセスを停止する手段を提供していません。したがって、確実に終了する外部コマンドを指定するか、状態が確認できる外部コマンドを作成してください。

(d) 応答電文で取得する標準出力の上限サイズ

`adpcmd.config.stdout.size=応答電文で取得する標準出力の上限サイズ ~<数字>((0-104857600)) <<2097152>>`

応答電文で取得する標準出力の上限サイズ（単位：バイト）を指定します。

0 を指定した場合、標準出力を応答電文で取得できません。

外部コマンドプロセスの標準出力への出力データサイズが、このプロパティの指定値を超えた時点で、メッセージログに警告メッセージが出力されます。ただし、0 を指定した場合、警告メッセージは出力されません。

(e) ロギング

`adpcmd.log.messagelog.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>`

メッセージログの出力レベルを指定します。

出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力内容	出力レベル		
		0	10	20
エラー情報	例外または障害の発生原因	○	○	○
警告情報	システムを運用する上で確認する必要がある状態	△	○	○
インフォメーション	コマンドアダプタの状態変更（起動および停止） イベント通知（外部コマンドの起動および終了）	△	△	○

(凡例)

○：すべて出力されます。

△：重要なログメッセージだけ出力されます。

`adpcmd.log.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>`

メンテナンスログの出力レベルを指定します。

出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
エラー情報（例外発生原因）	○	○	○	○	○
主要外部モジュールのインターフェース情報（カスタムアダプタフレームワーク関連）	×	○	○	○	○
外部モジュールのインターフェース情報（外部コマンドプロセス関連）	×	×	○	○	○
主要なコンポーネント内インターフェース情報	×	×	×	○	○
デバッグ情報	×	×	×	×	○

(凡例)

- ：出力されます。
- ×：出力されません。

`adpcmd.log.methodtrace.filenum=メンテナンスログファイルの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>`

メンテナンスログの面数を指定します。

`adpcmd.log.methodtrace.filesize=メンテナンスログファイルのファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647)) <<2097152>>`

メンテナンスログの1面当たりの最大ファイルサイズ（単位：バイト）を指定します。

`adpcmd.log.exptrace.filenum=例外ログファイルの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>`

例外ログの面数を指定します。

`adpcmd.log.exptrace.filesize=例外ログファイルのファイルサイズ ~<数字>((4096-2147483647)) <<2097152>>`

例外ログの1面当たりの最大ファイルサイズ（単位：バイト）で指定します。

`adpcmd.log.stderr.enable={true | false} ~<<true>>`

外部コマンドプロセスの標準エラー出力への出力内容をログファイルに書き込むかを指定します。

- true
標準エラー出力ログを有効とします。
- false
標準エラー出力ログを無効とします。

`adpcmd.log.stderr.charset={UTF-8 | MS932 | EUC-JP} ~<<UTF-8>>`

外部コマンドプロセスが標準エラー出力へ出力する際の文字コードを指定します。

外部コマンドプロセスがASCII文字だけを出力する場合は、文字コードの指定を省略（デフォルトの設定を利用）できます。

adpcmd.log.stderr.filenum=標準エラー出力ログファイルの面数 ~<数字>((1-16)) <<8>>

標準エラー出力ログの面数を指定します。

adpcmd.log.stderr.filesize=標準エラー出力ログファイルのファイルサイズ ~<数字>
((4096-2147483647)) <<2097152>>

標準エラー出力ログの 1 面当たりの最大ファイルサイズ (単位: バイト) を指定します。

6.15.4 コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル

(1) 形式

ファイルの記述形式はコマンドアダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。記述形式については、[\[6.15.3 コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル\]](#) を参照してください。

(2) 機能

すべてのコマンドアダプタに共通する構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

コマンドアダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲: 特定のコマンドアダプタ
作成手順については [\[6.15.3 コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル\]](#) を参照してください。
- コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲: すべてのコマンドアダプタ

これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1 つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、コマンドアダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。

プロパティファイルおよび要求電文間で同じ内容が複数設定された場合のプロパティの優先度については、[\[6.15.3 コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル\]](#) を参照してください。

(b) 作成手順

コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config%templates%serviceid.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「adpcmdcom.properties」で次のディレクトリに格納します。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config%common
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config%<HCSC サーバ名>%common
```

サブディレクトリ名の<HCSC サーバ名>と「common」を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者（Service Coordinator 管理者）がアクセスできるよう、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

設定できるプロパティはコマンドアダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。詳細は、「6.15.3 コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル」を参照してください。

注意事項

次に示すプロパティに相対パスを指定したときの基点ディレクトリは、コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイルの配置ディレクトリ（<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Command%config%common）です。

- adpcmd.config.command.allow-file-path
- adpcmd.config.process-environment.variable-file-path

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ> が「C:%Example」で、実行許可コマンド定義ファイル「acc.txt」を「C:%Example%CSC%custom-adapter%Command%config」に作成したと仮定した場合、次の2つの例はどちらを指定しても動作は同じです。

● 絶対パス指定の例

```
adpcmd.config.command.allow-file-path=C:%Example%CSC%custom-adapter%Command%config%acc.txt
```

● 相対パス指定の例

```
adpcmd.config.command.allow-file-path=acc.txt
```

6.16 SFTP アダプタで利用するファイル

6.16.1 SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
[sftpadp.host-ipaddr=接続するSFTPサーバのIPアドレスまたはホスト名]
[sftpadp.host-con-port=接続するSFTPサーバのポート番号]
[sftpadp.user=接続するSFTPサーバのログインユーザ名]

[sftpadp.client-ipaddr=HCSCサーバのIPアドレス]
[sftpadp.client-port.min=セッション確立するポート番号の範囲の最小値]
[sftpadp.client-port.max=セッション確立するポート番号の範囲の最大値]

[sftpadp.data-compression={true | false}]
[sftpadp.strict-hostkey-checking={true | false}]
[sftpadp.host-auth-inf-filepath=ホスト公開鍵ファイルの絶対パス]
[sftpadp.user-auth-type={password | publickey}]
[sftpadp.password-auth-info=パスワード認証のユーザ名]
[sftpadp.password-auth-inf-filepath=パスワード認証情報定義ファイルの絶対パス]
[sftpadp.publickey-auth-info=公開鍵認証で使用する認証情報のID]
[sftpadp.publickey-auth-inf-filepath=公開鍵認証情報定義ファイルの絶対パス]
[sftpadp.kex-exchange.algorithm=暗号化通信で使用する鍵交換方式の優先順位]
[sftpadp.common-key.cryptosystem.c2s=共通鍵暗号方式の優先順位 (クライアントからサーバへの通信)]
[sftpadp.common-key.cryptosystem.s2c=共通鍵暗号方式の優先順位 (サーバからクライアントへの通信)]
[sftpadp.message-authentication-code.c2s=メッセージ認証コード方式の優先順位 (クライアントからサーバへの通信)]
[sftpadp.message-authentication-code.s2c=メッセージ認証コード方式の優先順位 (サーバからクライアントへの通信)]
[sftpadp.host-key.algorithm=ホスト認証の方式の優先順位]
[sftpadp.data-compression.algorithm.c2s=データ圧縮アルゴリズムの優先順位 (クライアントからサーバへの通信)]
[sftpadp.data-compression.algorithm.s2c=データ圧縮アルゴリズムの優先順位 (サーバからクライアントへの通信)]
[sftpadp.strict.key.exchange.enabled={true | false}]
[sftpadp.required.strict.key.exchange={true | false}]
[sftpadp.pubkey.accepted.algorithms=公開鍵認証で許可する署名アルゴリズム]

[sftpadp.session.timeout=セッション接続処理のタイムアウト時間]
[sftpadp.session-con.retry.count=セッション確立失敗時のリトライ回数]
[sftpadp.session-con.retry.interval=セッション確立失敗時のリトライ間隔]

[sftpadp.read-lock.retry.count=共通フォルダの共有ロック失敗時のリトライ回数]
[sftpadp.read-lock.retry.interval=共通フォルダの共有ロック失敗時のリトライ間隔]
[sftpadp.write-lock.retry.count=共通フォルダの占有ロック失敗時のリトライ回数]
[sftpadp.write-lock.retry.interval=共通フォルダの占有ロック失敗時のリトライ間隔]

[sftpadp.data-read.timeout=SFTPサーバからの応答監視時間]

[sftpadp.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]
[sftpadp.methodtrace.filenum=保守用ログの面数]
```

[sftpadp.methodtrace.filesize=保守用ログの1面当たりの最大サイズ]

[sftpadp.exptrace.filenum=例外ログの面数]

[sftpadp.exptrace.filesize=例外ログの1面当たりの最大サイズ]

[sftpadp.sftpprotocoltrace.filenum=SFTPプロトコルトレースファイルの面数]

[sftpadp.sftpprotocoltrace.filesize=SFTPプロトコルトレースファイルの1面当たりの最大サイズ]

(2) 機能

SFTP アダプタごとの構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

SFTP アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の SFTP アダプタ
- SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての SFTP アダプタ
作成手順については「[6.16.2 SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、SFTP アダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

同じ内容が要求電文、SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル、SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルの間で複数設定された場合、次の表でより優先度の高いものが適用されます。

指定箇所	重複時の優先度
要求電文	高
SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	
SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	低

(b) 作成手順

SFTP アダプタ実行環境プロパティファイルは次の手順で作成してください。SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルの作成手順は、「6.16.2 SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル」を参照してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、SFTP アダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%SFTP%config%templates%adpsftp.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<サービス ID>.properties」で次のディレクトリに格納してください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%SFTP%config
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%SFTP%config<HCSC サーバ名>
```

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないなので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者（Service Coordinator 管理者）がアクセスできるよう、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

(a) サーバ情報

sftpadp.host-ipaddr=接続する SFTP サーバの IP アドレスまたはホスト名

接続する SFTP サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスを指定する場合は、IPv4 ドット記法または IPv6 コロン記法で指定してください。

要求電文の host-ipaddr 要素とこのプロパティの両方が設定されている場合は、host-ipaddr 要素の設定が優先されます。両方とも設定されていない場合は、リクエスト処理がエラーとなります。host-ipaddr 要素については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.15 SFTP アダプタを定義する」を参照してください。

sftpadp.host-con-port=接続する SFTP サーバのポート番号 ～<数字>((1-65535))

接続する SFTP サーバのポート番号を指定します。

要求電文の host-con-port 要素とこのプロパティの両方が設定されている場合は、host-con-port 要素の設定が優先されます。両方とも設定されていない場合は、リクエスト処理がエラーとなります。host-con-port 要素については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.15 SFTP アダプタを定義する」を参照してください。

sftpadp.user=接続する SFTP サーバのログインユーザ名 ~<文字列>((1-80 文字))

接続する SFTP サーバのログインユーザ名を指定します。

使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 (()
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)
- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフлекс (^)
- アンダーバー (_)

- アクサングラーブ (ˆ)
- 始め波括弧 ({})
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (ˆ)

指定するログインユーザには、ファイル操作の実行権限が与えられている必要があります。

要求電文の sftp-user 要素とこのプロパティの両方が設定されている場合は、sftp-user 要素の設定が優先されます。両方とも設定されていない場合は、リクエスト処理がエラーとなります。sftp-user 要素については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.15 SFTP アダプタを定義する」を参照してください。

(b) クライアント情報関連

sftpadp.client-ipaddr=HCSC サーバの IP アドレス

HCSC サーバの IP アドレスを指定します。IP アドレスを指定する場合は、IPv4 ドット記法または IPv6 コロン記法で指定してください。

指定された IP アドレスが不正な場合はシステム例外が発生します。このプロパティの指定を省略した場合は、システムによって自動的に任意の IP アドレスが割り当てられます。

sftpadp.client-port.min=セッション確立するポート番号の範囲の最小値 ~<数字>((1024-65535))

SFTP アダプタがセッションを確立するポート番号の範囲を sftpadp.client-port.max プロパティと対で指定します。このプロパティにはポート番号の範囲の最小値を指定し、sftpadp.client-port.max プロパティには最大値を指定してください。これらのプロパティの指定を両方とも省略した場合は、システムによって自動的に任意のポート番号が割り当てられます。

次の場合は、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。

- ポート番号の範囲の最大値 (sftpadp.client-port.max プロパティで指定) を超える値を指定した場合
- sftpadp.client-port.min プロパティと sftpadp.client-port.max プロパティのどちらか一方だけ指定した場合

sftpadp.client-port.max=セッション確立するポート番号の範囲の最大値 ~<数字>((1024-65535))

SFTP アダプタがセッションを確立するポート番号の範囲を sftpadp.client-port.min プロパティと対で指定します。このプロパティにはポート番号の範囲の最大値を指定し、sftpadp.client-port.min プロパティには最小値を指定してください。これらのプロパティの指定を両方とも省略した場合は、システムによって自動的に任意のポート番号が割り当てられます。

次の場合は、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。

- ポート番号の範囲の最小値 (sftpadp.client-port.min プロパティで指定) を下回る値を指定した場合
- sftpadp.client-port.min プロパティと sftpadp.client-port.max プロパティのどちらか一方だけ指定した場合

(c) SFTP 設定

sftpadp.data-compression={true | false} ~<<false>>

転送データを圧縮するかどうかを指定します。

- true
転送データを圧縮します。
- false
転送データを圧縮しません。

要求電文の data-compression 要素とこのプロパティの両方が設定されている場合は、data-compression 要素の設定が優先されます。両方とも設定されていない場合は、デフォルト値が適用されます。data-compression 要素については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.15 SFTP アダプタを定義する」を参照してください。

sftpadp.strict-hostkey-checking={true | false} ~<<false>>

ホスト認証時に厳格なホスト鍵チェックを実施するか指定します。

- true
厳格なホスト鍵チェックを実施します。
SFTP サーバから受けとったホスト鍵と、sftpadp.host-auth-inf-filepath プロパティに指定されたホスト鍵とを比較し、接続先が目的のサーバであるかが検証されます。ホスト鍵が存在しない場合や、ホスト鍵が変更されている場合はエラーとなります。
ホスト認証にはホスト公開鍵ファイルを使用するため、sftpadp.host-auth-inf-filepath プロパティでホスト公開鍵ファイルの絶対パスを指定する必要があります。
- false
厳格なホスト鍵チェックは実施しません。

要求電文の strict-hostkey-checking 要素とこのプロパティの両方が設定されている場合は、strict-hostkey-checking 要素の設定が優先されます。両方とも設定されていない場合は、デフォルト値が適用されます。strict-hostkey-checking 要素については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.15 SFTP アダプタを定義する」を参照してください。

sftpadp.host-auth-inf-filepath=ホスト公開鍵ファイルの絶対パス

ホスト公開鍵ファイルを絶対パスで指定します。ホスト公開鍵ファイルはユーザが事前に作成し、HCSC サーバの管理者のアクセス権限を付与する必要があります。

指定したホスト公開鍵ファイルが存在しない場合、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。また、厳格なホスト鍵チェックを実施する場合 (sftpadp.strict-hostkey-checking=true を指定) にこのプロパティが設定されていないと、リクエスト処理時にエラーになります。

`sftpadp.user-auth-type={password | publickey}`

ユーザ認証の方式を指定します。

- password
パスワード認証を実施します。
- publickey
公開鍵認証を実施します。

要求電文の user-auth-type 要素とこのプロパティの両方が設定されている場合は、user-auth-type 要素の設定が優先されます。両方とも設定されていない場合は、リクエスト処理がエラーとなります。user-auth-type 要素については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.15 SFTP アダプタを定義する」を参照してください。

`sftpadp.password-auth-info=パスワード認証のユーザ名 ~<文字列>((1-80 文字))`

パスワード認証を実施する場合に、パスワード認証に使用するユーザ名を指定します。

csuseradd コマンドで登録したユーザ名を指定してください。使用できる文字は、半角英数字、半角記号 (ASCII コードの「0x21」～「0x7E」)、および半角スペース (ASCII コードの「0x20」) です。大文字と小文字は区別されます。使用できる半角記号を次に示します。

- 感嘆符 (!)
- ダブルクォーテーション (")
- 番号記号 (#)
- ドル記号 (\$)
- パーセント (%)
- アンパサンド (&)
- アポストロフィ (')
- 始め小括弧 ((
- 終わり小括弧 ())
- アスタリスク (*)
- 正符号 (+)
- コンマ (,)
- ハイフン (-)
- ピリオド (.)

- スラッシュ (/)
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- 左アングルブラケット (<)
- 右アングルブラケット (>)
- 等号 (=)
- クエスチョンマーク (?)
- 単価記号 (@)
- 始め角括弧 ([)
- 終わり角括弧 (])
- 円マーク (¥)
- アクサンシルコンフレックス (^)
- アンダーバー (_)
- アクサングラーブ (`)
- 始め波括弧 ({)
- 終わり波括弧 (})
- パイプライン (|)
- 波ダッシュ (~)

要求電文の user-auth-info 要素とこのプロパティの両方が設定されている場合は、user-auth-info 要素の設定が優先されます。user-auth-info 要素、sftpadp.publickey-auth-info プロパティ、およびこのプロパティのどれも設定されていない場合は、リクエスト処理がエラーとなります。user-auth-info 要素については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.15 SFTP アダプタを定義する」を参照してください。

sftpadp.password-auth-inf-filepath=パスワード認証情報定義ファイルの絶対パス

パスワード認証を実施する場合に、パスワード認証情報定義ファイルの絶対パスを指定します。csuseradd コマンドで作成したパスワード認証情報定義ファイルを指定してください。

指定するパスワード認証情報定義ファイルには、HCSC サーバの管理者のアクセス権限が必要です。

指定したパスワード認証情報定義ファイルが存在しない場合は、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。また、パスワード認証を実施する場合にこのプロパティが設定されていないと、リクエスト処理時にエラーとなります。

注意事項

ユーザ認証は必ず実施されるため、このプロパティか、または `sftpadp.publickey-auth-inf-filepath` プロパティのどちらか1つを必ず指定してください。どちらも省略した場合はリクエスト処理時にエラーになります。

`sftpadp.publickey-auth-info`=公開鍵認証で使用する認証情報の ID ~<半角英数字とアンダーバー (<code>)</code>>((1-8文字))

公開鍵認証を実施する場合に、公開鍵認証に使用する認証情報の ID を指定します。 `csakeyadd` コマンドで登録した鍵 ID を指定してください。

要求電文の `user-auth-info` 要素とこのプロパティの両方が設定されている場合は、`user-auth-info` 要素の設定が優先されます。`user-auth-info` 要素、`sftpadp.password-auth-info` プロパティ、およびこのプロパティのどれも設定されていない場合は、リクエスト処理がエラーとなります。`user-auth-info` 要素については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「3.3.15 SFTP アダプタを定義する」を参照してください。

`sftpadp.publickey-auth-inf-filepath`=公開鍵認証情報定義ファイルの絶対パス

公開鍵認証を実施する場合に、公開鍵認証情報定義ファイルの絶対パスを指定します。`csakeyadd` コマンドで作成した公開鍵認証情報定義ファイルを指定してください。

指定する公開鍵認証情報定義ファイルには、HCSC サーバの管理者のアクセス権限が必要です。

指定した公開鍵認証情報定義ファイルが存在しない場合は、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。また、公開鍵認証を実施する場合にこのプロパティが設定されていないと、リクエスト処理時にエラーとなります。

注意事項

ユーザ認証は必ず実施されるため、このプロパティか、または `sftpadp.password-auth-inf-filepath` プロパティのどちらか1つを必ず指定してください。どちらも省略した場合はリクエスト処理時にエラーになります。

`sftpadp.kex-exchange.algorithm`=暗号化通信で使用する鍵交換方式の優先順位

鍵交換方式の優先順位を指定します。鍵交換方式は、暗号化通信を確立するために使用されます。

指定できる鍵交換方式と、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらの鍵交換方式を優先順位の高い順に、「`sftpadp.kex-exchange.algorithm`=鍵交換方式,鍵交換方式,鍵交換方式」のようにコマンドで区切って指定してください。この表にない鍵交換方式を指定すると、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	鍵交換方式
高	ecdh-sha2-nistp256
↑	ecdh-sha2-nistp384
	ecdh-sha2-nistp521
	diffie-hellman-group-exchange-sha256
	diffie-hellman-group16-sha512
↓	diffie-hellman-group18-sha512
低	diffie-hellman-group14-sha256

sftpdp.common-key.cryptosystem.c2s=共通鍵暗号方式の優先順位（クライアントからサーバへの通信）

クライアントからサーバへの暗号化通信の確立に使用する、共通鍵暗号方式の優先順位を指定します。

指定できる共通鍵暗号方式と、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらの共通鍵暗号方式を優先順位の高い順に、「sftpdp.common-key.cryptosystem.c2s=共通鍵暗号方式,共通鍵暗号方式,共通鍵暗号方式」のようにコマンドで区切って指定してください。この表にない共通鍵暗号方式を指定すると、SFTPアダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	共通鍵暗号方式
高	aes128-ctr
↑	aes192-ctr
	aes256-ctr
↓	aes128-gcm@openssh.com
低	aes256-gcm@openssh.com

sftpdp.common-key.cryptosystem.s2c=共通鍵暗号方式の優先順位（サーバからクライアントへの通信）

サーバからクライアントへの暗号化通信の確立に使用する、共通鍵暗号方式の優先順位を指定します。

指定できる共通鍵暗号方式と、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらの共通鍵暗号方式を優先順位の高い順に、「sftpdp.common-key.cryptosystem.s2c=共通鍵暗号方式,共通鍵暗号方式,共通鍵暗号方式」のようにコマンドで区切って指定してください。この表にない共通鍵暗号方式を指定すると、SFTPアダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	共通鍵暗号方式
高	aes128-ctr
↑	aes192-ctr

デフォルトの優先順位	共通鍵暗号方式
	aes256-ctr
↓	aes128-gcm@openssh.com
低	aes256-gcm@openssh.com

sftpdp.message-authentication-code.c2s=メッセージ認証コード方式の優先順位（クライアントからサーバへの通信）

クライアントからサーバへの通信で使用する、メッセージ認証コード方式（データの改ざんを防ぐ機構）の優先順位を指定します。

指定できるメッセージ認証コード方式と、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらのメッセージ認証コード方式を優先順位の高い順に、「sftpdp.message-authentication-code.c2s=コード方式,コード方式,コード方式」のようにコンマで区切って指定してください。この表にないメッセージ認証コード方式を指定すると、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	メッセージ認証コード方式
高	hmac-sha2-256-etm@openssh.com
↑	hmac-sha2-512-etm@openssh.com
	hmac-sha1-etm@openssh.com
	hmac-sha2-256
↓	hmac-sha2-512
低	hmac-sha1

sftpdp.message-authentication-code.s2c=メッセージ認証コード方式の優先順位（サーバからクライアントへの通信）

サーバからクライアントへの通信で使用する、メッセージ認証コード方式（データの改ざんを防ぐ機構）の優先順位を指定します。

指定できるメッセージ認証コード方式と、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらのメッセージ認証コード方式を優先順位の高い順に、「sftpdp.message-authentication-code.s2c=コード方式,コード方式,コード方式」のようにコンマで区切って指定してください。この表にないメッセージ認証コード方式を指定すると、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	メッセージ認証コード方式
高	hmac-sha2-256-etm@openssh.com
↑	hmac-sha2-512-etm@openssh.com
	hmac-sha1-etm@openssh.com
	hmac-sha2-256

デフォルトの優先順位	メッセージ認証コード方式
↓	hmac-sha2-512
低	hmac-sha1

sftpadp.host-key.algorithm=ホスト認証の方式の優先順位

ホスト認証の方式の優先順位を指定します。

指定できるホスト認証の方式と、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらのホスト認証の方式を優先順位の高い順に、「sftpadp.host-key.algorithm=ホスト認証の方式,ホスト認証の方式,ホスト認証の方式」のようにコンマで区切って指定してください。この表にないホスト認証の方式を指定すると、SFTPアダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	ホスト認証の方式
高	ecdsa-sha2-nistp256
↑	ecdsa-sha2-nistp384
	ecdsa-sha2-nistp521
↓	rsa-sha2-512
低	rsa-sha2-256

sftpadp.data-compression.algorithm.c2s=データ圧縮アルゴリズムの優先順位（クライアントからサーバへの通信）

クライアントからサーバへの通信で使用する、データ圧縮アルゴリズムの優先順位を指定します。

指定できるデータ圧縮アルゴリズムと、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらのデータ圧縮アルゴリズムを優先順位の高い順に、「sftpadp.data-compression.algorithm.c2s=データ圧縮アルゴリズム,データ圧縮アルゴリズム,データ圧縮アルゴリズム」のようにコンマで区切って指定してください。この表にないデータ圧縮アルゴリズムを指定すると、SFTPアダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	データ圧縮アルゴリズム
高	zlib@openssh.com
低	zlib

sftpadp.data-compression.algorithm.s2c=データ圧縮アルゴリズムの優先順位（サーバからクライアントへの通信）

サーバからクライアントへの通信で使用する、データ圧縮アルゴリズムの優先順位を指定します。

指定できるデータ圧縮アルゴリズムと、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらのデータ圧縮アルゴリズムを優先順位の高い順に、「sftpadp.data-compression.algorithm.s2c=データ圧縮アルゴリズム,データ圧縮アルゴリズム,データ圧縮アルゴリズム」のようにコンマで区切って指定してください。この表にないデータ圧縮アルゴリズムを指定すると、SFTPアダプタの開始時にエラーとなります。

ム,データ圧縮アルゴリズム,データ圧縮アルゴリズム」のようにコンマで区切って指定してください。この表にないデータ圧縮アルゴリズムを指定すると、SFTPアダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	データ圧縮アルゴリズム
高	<code>zlib@openssh.com</code>
低	<code>zlib</code>

`sftpadp.strict.key.exchange.enabled={true | false} ~<<true>>`

SFTP サーバとの接続時に厳密な鍵交換をするかどうかを指定します。このプロパティまたは `sftpadp.required.strict.key.exchange` プロパティに `true` が設定された場合は、厳密な鍵交換が実施されます。

- `true`
SFTP サーバとの接続時に厳密な鍵交換 (strict key exchange) を実施します。
ただし、接続先の OpenSSH サーバが厳密な鍵交換機能をサポートしていなければ、厳密な鍵交換は実施されません。
- `false`
SFTP サーバとの接続時に厳密な鍵交換 (strict key exchange) を実施しません。

`sftpadp.required.strict.key.exchange={true | false} ~<<false>>`

厳密な鍵交換機能をサポートしていない SFTP サーバとの接続を禁止するかどうかを指定します。このプロパティまたは `sftpadp.strict.key.exchange.enabled` プロパティに `true` が設定された場合は、厳密な鍵交換が実施されます。

- `true`
厳密な鍵交換機能をサポートしていない SFTP サーバとの接続を禁止します。
厳密な鍵交換機能をサポートしていない SFTP サーバと接続しようとした場合、リクエスト処理を中断してエラー終了します。
- `false`
厳密な鍵交換機能をサポートしていない SFTP サーバとの接続を禁止しません。
厳密な鍵交換機能をサポートしていない SFTP サーバとの接続は許可されます。

`sftpadp.pubkey.accepted.algorithms=公開鍵認証で許可する署名アルゴリズム`

公開鍵認証で許可する署名アルゴリズムを指定します。

指定できる署名アルゴリズムと、デフォルトの優先順位を次の表に示します。これらの署名アルゴリズムを優先順位の高い順に、「`sftpadp.pubkey.accepted.algorithms=署名アルゴリズム,署名アルゴリズム,署名アルゴリズム`」のようにコンマで区切って指定してください。この表にない署名アルゴリズムを指定すると、SFTP アダプタの開始時にエラーとなります。

デフォルトの優先順位	署名アルゴリズム
高	ecdsa-sha2-nistp256
↑	ecdsa-sha2-nistp384
	ecdsa-sha2-nistp521
↓	rsa-sha2-512
低	rsa-sha2-256

(d) セッション接続タイムアウト

`sftpadp.session.timeout=セッション接続処理のタイムアウト時間 ~<数字>((1-3600))<<10>>`

セッション接続処理のタイムアウトまでの待ち時間を指定します (単位: 秒)。

`sftpadp.session-con.retry.count=セッション確立失敗時のリトライ回数 ~<数字>((0-1000))<<5>>`

相手先のビジーなどによってセッションを確立できなかった場合に、接続をリトライする回数を指定します。0を指定した場合はリトライされません。

`sftpadp.session-con.retry.interval=セッション確立失敗時のリトライ間隔 ~<数字>((0-86400))<<2>>`

相手先のビジーなどによってセッションを確立できなかった場合、接続をリトライする間隔を指定します (単位: 秒)。0を指定した場合は、間隔をあげないでリトライします。

(e) 排他取得タイムアウト

`sftpadp.read-lock.retry.count=共通フォルダの共有ロック失敗時のリトライ回数 ~<数字>((0-1024))<<0>>`

共通フォルダのファイルの共有ロックに失敗した場合のリトライ回数を指定します。

`sftpadp.read-lock.retry.interval=共通フォルダの共有ロック失敗時のリトライ間隔 ~<数字>((1-1024))<<1>>`

共通フォルダのファイルの共有ロックに失敗した場合のリトライ間隔を指定します (単位: 秒)。

`sftpadp.write-lock.retry.count=共通フォルダの占有ロック失敗時のリトライ回数 ~<数字>((0-1024))<<0>>`

共通フォルダのファイルの占有ロックに失敗した場合のリトライ回数を指定します。

`sftpadp.write-lock.retry.interval=共通フォルダの占有ロック失敗時のリトライ間隔 ~<数字>((1-1024))<<1>>`

共通フォルダのファイルの占有ロックに失敗した場合のリトライ間隔を指定します (単位: 秒)。

(f) データ読み込みタイムアウト

sftpadp.data-read.timeout=SFTP サーバからの応答監視時間 ~<数字>((1-3600))<<60>>

GET オペレーション実行時のファイルデータ取得やアルゴリズムネゴシエーションの結果取得など、SFTP サーバからの応答の監視時間を指定します（単位：秒）。

指定した時間を経過しても受信が完了しない場合は、例外（エラー）が発生します。

(g) 保守用ログ

sftpadp.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>

保守用ログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

出力情報	出力レベル				
	1	2	3	4	5
リクエストサービスマソッドの入口／出口情報（クラス名，メソッド名，引数，戻り値）	×	○	○	○	○
外部（BP など）のインターフェースの入口／出口情報（クラス名，メソッド名，引数，戻り値）	×	×	○	○	○
コンポーネント内インターフェースの入口／出口情報（クラス名，メソッド名，引数，戻り値）	×	×	×	○	○
デバッグ情報（処理の分岐などの情報）	×	×	×	×	○

(凡例)

○：出力されます。

×：出力されません。

sftpadp.methodtrace.filenum=保守用ログの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

保守用ログの面数を指定します。

sftpadp.methodtrace.filesize=保守用ログの 1 面当たりの最大サイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>

保守用ログの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

(h) 例外ログ

sftpadp.exptrace.filenum=例外ログの面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

例外ログの面数を指定します。

sftpadp.exptrace.filesize=例外ログの 1 面当たりの最大サイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<2097152>>

例外ログの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

(i) SFTP プロトコルトレース

sftpadp.sftpprotocoltrace.filenum=SFTP プロトコルトレースファイルの面数 ~<数字>((1-16))
<<8>>

プロトコルトレースファイルの面数を指定します。

sftpadp.sftpprotocoltrace.filesize=SFTP プロトコルトレースファイルの 1 面当たりの最大サイズ ~
<数字>((4096-2147483647)) <<2097152>>

プロトコルトレースファイルの 1 面当たりの最大サイズ数をバイト単位で指定します。

6.16.2 SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル

(1) 形式

ファイルの記述形式は SFTP アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。記述形式については、[\[6.16.1 SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル\]](#) を参照してください。

(2) 機能

すべての SFTP アダプタに共通する構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

SFTP アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の SFTP アダプタ
作成手順については [\[6.16.1 SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル\]](#) を参照してください。
- SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての SFTP アダプタ

これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1 つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。

プロパティファイルおよび要求電文間で同じ内容が複数設定された場合のプロパティの優先度については、[\[6.16.1 SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル\]](#) を参照してください。

(b) 作成手順

SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%SFTP%config%templates%adpsftp.properties
```

2. 編集後のファイルを次のディレクトリに格納します。

なお、ファイル名「adpsftp.properties」は変更しないでください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%SFTP%config%common
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%SFTP%config%<HCSC サーバ名>%common
```

サブディレクトリ名の<HCSC サーバ名>と「common」を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者（Service Coordinator 管理者）がアクセスできるよう、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

設定できるプロパティは SFTP アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。設定できるプロパティについては、「[6.16.1 SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

6.17 Kafka アダプタで利用するファイル

6.17.1 Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
[message.level={0 | 10 | 20}]
```

```
[methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]  
[methodtracefile.num=メソッドトレースの出力面数]  
[methodtracefile.size=メソッドトレースの出力サイズ]
```

```
[datatrace.level={0 | 10 | 20}]  
[datatracefile.num=データトレースの出力面数]  
[datatracefile.size=データトレースの出力サイズ]
```

```
[exptracefile.num=例外ログの出力面数]  
[exptracefile.size=例外ログの出力サイズ]
```

producer.bootstrap.servers=Kafka クラスタへの初期接続を確立するために使用するホスト/ポート

```
[producer.buffer.memory=レコードをバッファリングするために使用できるメモリの合計バイト数]  
[producer.receive.buffer.bytes=TCP受信ソケットバッファのサイズ]  
[producer.send.buffer.bytes=TCP送信ソケットバッファのサイズ]
```

```
[producer.security.protocol={PLAINTEXT | SSL}]  
[producer.ssl.key.password=キーストアファイル内の秘密鍵のパスワード]  
[producer.ssl.keystore.key=キーストアファイルの秘密キー]  
[producer.ssl.keystore.location=キーストアファイルの格納場所]  
[producer.ssl.keystore.password=キーストアファイルのストアパスワード]  
[producer.ssl.truststore.location=トラストストアファイルの格納場所]  
[producer.ssl.truststore.password=トラストストアファイルのパスワード]  
[producer.ssl.enabled.protocols=SSL接続が有効になっているプロトコルのリスト]  
[producer.ssl.keystore.type=キーストアファイルのファイル形式]  
[producer.ssl.protocol=SSLコンテキストの生成に使用されるSSLプロトコル]  
[producer.ssl.provider=SSL接続に使用されるセキュリティプロバイダの名前]  
[producer.ssl.truststore.type=トラストストアファイルのファイル形式]
```

(2) 機能

Kafka アダプタごとの構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

Kafka アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の Kafka アダプタ
- Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル

有効範囲：すべての Kafka アダプタ

作成手順については「[6.17.2 Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、Kafka アダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

同じ内容が Kafka アダプタ実行環境プロパティファイルと Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイルの間で複数設定された場合、次の表でより優先度の高いものが適用されます。

指定箇所	重複時の優先度
Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	高
Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	
Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	低

(b) 作成手順

Kafka アダプタ実行環境プロパティファイルは次の手順で作成してください。Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイルの作成手順は、「[6.17.2 Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、Kafka アダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Kafka%config%templates%serviceid.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<サービス ID>.properties」で次のディレクトリに格納してください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Kafka%config
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Kafka%config<HCSC サーバ名>
```

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないため、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者 (Service Coordinator 管理者) がアクセスできるように、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

(a) メッセージログ関連

message.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>

メッセージログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル		
	0	10	20
エラー情報	○	○	○
警告情報	△	○	○
インフォメーション	△	△	○

(凡例)

○：出力されます。

△：重要なメッセージログだけ出力されます。

(b) メソッドトレース関連

methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>

メソッドトレースの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル				
	1	2	3	4	5
メソッド内のエラー	○	○	○	○	○
外部から呼び出されるメソッド情報およびファイル入出力メソッドの開始・終了情報	×	○	○	○	○
ほかの HCSC コンポーネントから参照する public メソッドの開始・終了情報	×	×	○	○	○
ほかの HCSC コンポーネントから参照しない内部メソッド (public 以外のメソッド) の開始・終了情報	×	×	×	○	○
デバッグ情報	×	×	×	×	○

(凡例)

○：出力されます。

×：出力されません。

methodtracefile.num=メソッドトレースの出力面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

Kafka アダプタが取得するメソッドトレース情報の出力ファイル面数を指定します。

methodtracefile.size=メソッドトレースの出力サイズ ~<数字>
((4096-2147483647))<<4194304>>

Kafka アダプタが取得するメソッドトレース情報の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

(c) データトレース関連

`datatrace.level={0 | 10 | 20} ~<<0>>`

データトレースの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル		
	0	10	20
メッセージ送信成功	×	×	○
メッセージ送信失敗	×	○	○

(凡例)

○：出力されます。

×：出力されません。

`datatracefile.num=データトレースの出力面数 ~<数字>((1-16))<<8>>`

Kafka アダプタが取得するデータトレース情報の出力ファイル面数を指定します。

`datatracefile.size=データトレースの出力サイズ ~<数字>
((4096-2147483647))<<67108864>>`

Kafka アダプタが取得するデータトレース情報の出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

(d) 例外ログ関連

`exptracefile.num=例外ログの出力面数 ~<数字>((1-16))<<8>>`

Kafka アダプタが取得する例外ログの出力ファイル面数を指定します。

`exptracefile.size=例外ログの出力サイズ ~<数字>((4096-2147483647))<<4194304>>`

Kafka アダプタが取得する例外ログの出力ファイルサイズをバイト単位で指定します。

(e) サーバ情報

`producer.bootstrap.servers=Kafka クラスタへの初期接続を確立するために使用するホスト/ポート`

Kafka クラスタへの初期接続を確立するために使用するホスト/ポートを指定します。指定は省略できません。

指定した値は、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「bootstrap.servers」に設定されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

(f) データサイズ制限

`producer.buffer.memory`=レコードをバッファリングするために使用できるメモリの合計バイト数 ~<<33554432>>

レコードをバッファリングするために使用できるメモリの合計バイト数を指定します。

指定した値は、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「`buffer.memory`」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.receive.buffer.bytes`=TCP 受信ソケットバッファのサイズ ~<<32768>>

TCP 受信ソケットバッファのサイズを指定します。

指定した値は、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「`receive.buffer.bytes`」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.send.buffer.bytes`=TCP 送信ソケットバッファのサイズ ~<<131072>>

TCP 送信ソケットバッファのサイズを指定します。

指定した値は、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用される Producer API のプロパティ「`send.buffer.bytes`」に設定されます。設定できる値の範囲などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

(g) セキュリティ情報

`producer.security.protocol`=`{PLAINTEXT | SSL}` ~<<PLAINTEXT>>

Broker との通信に使用されるプロトコルを指定します。

- PLAINTEXT
Broker との通信用のプロトコルに PLAINTEXT を使用します。
- SSL
Broker との通信用のプロトコルに SSL を使用します。

指定した値は Producer API のプロパティ「`security.protocol`」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

`producer.ssl.key.password`=キーストアファイル内の秘密鍵のパスワード ~<<null>>

キーストアファイル内の秘密鍵のパスワードを指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.key.password」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.keystore.key=キーストアファイルの秘密キー ~<<null>>

キーストアファイルの秘密キーを指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.keystore.key」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.keystore.location=キーストアファイルの格納場所 ~<<null>>

キーストアファイルの格納場所を指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.keystore.location」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.keystore.password=キーストアファイルのストアパスワード ~<<null>>

キーストアファイルのストアパスワードを指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.keystore.password」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.truststore.location=トラストストアファイルの格納場所 ~<<null>>

トラストストアファイルの格納場所を指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.truststore.location」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.truststore.password=トラストストアファイルのパスワード ~<<null>>

トラストストアファイルのパスワードを指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.truststore.password」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.enabled.protocols=SSL 接続が有効になっているプロトコルのリスト ~<<TLSv1.2,TLSv1.3>>

SSL 接続が有効になっているプロトコルのリストを指定します。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.enabled.protocols」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.keystore.type=キーストアファイルのファイル形式 ~<<JKS>>

キーストアファイルのファイル形式を指定します。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.keystore.type」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.protocol=SSL コンテキストの生成に使用される SSL プロトコル ~<<TLSv1.3>>

SSL コンテキストの生成に使用される SSL プロトコルを指定します。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.protocol」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.provider=SSL 接続に使用されるセキュリティプロバイダの名前 ~<<null>>

SSL 接続に使用されるセキュリティプロバイダの名前を指定します。デフォルト値で動作させる場合は、このプロパティを定義しないでください。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.provider」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

producer.ssl.truststore.type=トラストストアファイルのファイル形式 ~<<JKS>>

トラストストアファイルのファイル形式を指定します。

指定した値は Producer API のプロパティ「ssl.truststore.type」に設定され、Kafka サーバへのメッセージ送信に使用されます。設定できる値などの詳細については、Apache Kafka の公式ドキュメントを参照してください。

6.17.2 Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル

(1) 形式

ファイルの記述形式は Kafka アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。記述形式については、「6.17.1 Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル」を参照してください。

(2) 機能

すべての Kafka アダプタに共通する構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

Kafka アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の Kafka アダプタ
作成手順については「6.17.1 Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル」を参照してください。
- Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての Kafka アダプタ

これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1 つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。

プロパティファイル間で同じ内容が複数設定された場合のプロパティの優先度については、「6.17.1 Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル」を参照してください。

(b) 作成手順

Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Kafka%config%templates%adpkafkacom.properties
```

2. 編集後のファイルを次のディレクトリに格納します。

なお、ファイル名「adpkafkacom.properties」は変更しないでください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Kafka%config%common
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%Kafka%config%<HCSC サーバ名>%common

サブディレクトリ名の<HCSC サーバ名>と「common」を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者（Service Coordinator 管理者）がアクセスできるように、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

設定できるプロパティは Kafka アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。設定できるプロパティについては、「[6.17.1 Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

6.18 スケジュール駆動受付で利用するファイル

6.18.1 スケジュール駆動受付コンフィグファイル

(1) 形式

```
[urecp-scd.eventhistory.log.enabled={true | false}]
[urecp-scd.eventhistory.log.filenum=イベント履歴ログのファイル面数]
[urecp-scd.eventhistory.log.filesize=イベント履歴ログのファイルサイズ]

[urecp-scd.request-timeout=タスク実行時のビジネスプロセスの処理時間]
[urecp-scd.resident-thread.count=常駐させるスレッド数]

[scdrecep.schedule-start-time=スケジュールの実行開始時刻]
```

(2) 機能

スケジュール駆動受付のセットアップ後に、スケジュール駆動受付に関する構成情報の変更に使います。変更頻度が高い情報を変更できます。

このファイルは必要に応じて設定してください。

(a) ファイルの種類

スケジュール駆動受付コンフィグファイルには次の種類があります。同じプロパティが両方のファイルに設定されている場合、スケジュール駆動受付コンフィグファイルのプロパティ値が適用されます。

- スケジュール駆動受付コンフィグファイル
有効範囲：特定のスケジュール駆動受付
- スケジュール駆動受付共通コンフィグファイル
有効範囲：すべてのスケジュール駆動受付
作成手順については「6.18.2 スケジュール駆動受付共通コンフィグファイル」を参照してください。

(b) 作成手順

スケジュール駆動受付コンフィグファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、スケジュール駆動受付コンフィグファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%schedule%config%templates%scheduletriggeredrecp_config.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<受付 ID>.properties」で次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%schedule%config
```

作成したファイルはスケジュール駆動受付の開始時に読み込まれ、設定内容が有効になります。

(3) 設定できるプロパティ

(a) イベント履歴ログ

`urecp-scd.eventhistory.log.enabled={true | false} ~<<true>>`

イベント履歴ログを出力するかどうかを設定します。

- true
イベント履歴ログを出力します。
- false
イベント履歴ログを出力しません。

`urecp-scd.eventhistory.log.filenum=イベント履歴ログのファイル面数 ~<数字>((1-16))<<8>>`

イベント履歴ログのファイル面数を指定します。

`urecp-scd.eventhistory.log.filesize=イベント履歴ログのファイルサイズ ~<数字>
((4096-2147483647))<<2097152>>`

イベント履歴ログの1面当たりのファイルサイズをバイト単位で指定します。

(b) タイマ監視

`urecp-scd.request-timeout=タスク実行時のビジネスプロセスの処理時間 ~<数字>
((0-2147483647))<<0>>`

タスク実行時のビジネスプロセスの処理時間を秒単位で指定します。

0を指定すると、タイマ監視は実行されません。

1以上を指定した場合、タイマ監視のため内部的にスレッドを生成して常駐させます。常駐スレッド数は `urecp-scd.resident-thread.count` プロパティで定義します。

`urecp-scd.resident-thread.count=常駐させるスレッド数 ~<数字> ((0-64))<<0>>`

タスク実行時のビジネスプロセスの処理時間をタイマ監視する場合に、常駐させるスレッド数を指定します。常駐スレッドは、スケジュール駆動受付を起動したときに生成されます。タイマ監視をしない場合は、スレッドが生成されないため指定された値は無視されます。

指定値は、スケジュール駆動受付定義ファイルの `urecp-scd.task.processing-max.parallel.count` プロパティの指定値を超えない数値にしてください。この条件を満たさない場合、運用コマンド実行時にエラーとなります。

(c) 時刻の指定

scdrecp.schedule-start-time=スケジュールの実行開始時刻 ~< HH:mm:ss 形式または mm 形式の文字列>

スケジュールの実行開始時刻を次のどちらかの形式で指定します。

- HH:mm:ss 形式

実行開始時刻を時 (00~23)・分 (00~59)・秒 (00~59) で指定します。

この場合、実行開始時刻は次のようになります。

- 実行開始日は、スケジュール機能の開始処理を呼び出した日となります。すでにその時刻を過ぎている場合は翌日になります。
- ミリ秒以下は 0 となります。

(例) プロパティに「14:30:00」と指定した場合

スケジュール機能の開始処理を「2025/07/03 14:10:00」に呼び出した場合、スケジュールの実行開始時刻は「2025/07/03 14:30:00」となります。

- mm 形式

実行開始時刻の分 (00~59) だけを指定します。

この場合、実行開始時刻は次のようになります。

- 実行開始日は、スケジュール機能の開始処理を呼び出した日となります。すでにその時刻を過ぎている場合は翌日になります。
- 時・秒は、スケジュール機能の開始処理を呼び出した時刻の時・秒となります。
- ミリ秒以下は 0 となります。

(例) プロパティに「30」と指定した場合

スケジュール機能の開始処理を「2025/07/03 14:10:10」に呼び出した場合、スケジュールの実行開始時刻は「2025/07/03 14:30:10」となります。

このプロパティの指定を省略すると、スケジュール機能の開始時にスケジュールの実行が開始されます。

スケジュールの実行開始時刻の指定方法については、マニュアル「サービスプラットフォーム 解説」の「3.6.1 スケジュール駆動受付でのスケジュールの設定」を参照してください。

6.18.2 スケジュール駆動受付共通コンフィグファイル

(1) 形式

ファイルの記述形式はスケジュール駆動受付コンフィグファイルと同じです。記述形式については、「6.18.1 スケジュール駆動受付コンフィグファイル」を参照してください。

(2) 機能

すべてのスケジュール駆動受付に共通する構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

スケジュール駆動受付コンフィグファイルには次の種類があります。同じプロパティが両方のファイルに設定されている場合、スケジュール駆動受付コンフィグファイルのプロパティ値が適用されます。

- スケジュール駆動受付コンフィグファイル
有効範囲：特定のスケジュール駆動受付
作成手順については「[6.18.1 スケジュール駆動受付コンフィグファイル](#)」を参照してください。
- スケジュール駆動受付共通コンフィグファイル
有効範囲：すべてのスケジュール駆動受付

(b) 作成手順

スケジュール駆動受付共通コンフィグファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、スケジュール駆動受付共通コンフィグファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%schedule%config%templates%scheduletriggeredrecp_config.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「scheduletriggeredrecp_config.properties」で次のディレクトリに格納します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-reception%schedule%config%common
```

作成したファイルはスケジュール駆動受付の開始時に読み込まれ、設定内容が有効になります。

(3) 設定できるプロパティ

設定できるプロパティはスケジュール駆動受付コンフィグファイルと同じです。記述形式については、「[6.18.1 スケジュール駆動受付コンフィグファイル](#)」を参照してください。

6.19 gRPC アダプタで利用するファイル

6.19.1 gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル

(1) 形式

```
adpgrpc.request.target=接続するgRPCサーバ  
[adpgrpc.request.use-plaintext={true | false}]  
  
[adpgrpc.config.messagelog.level={0 | 10 | 20}]  
[adpgrpc.config.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5}]  
[adpgrpc.config.methodtrace.filenum=メソッドトレースのファイル面数]  
[adpgrpc.config.methodtrace.filesize=メソッドトレースのファイルサイズ]  
[adpgrpc.config.exptrace.filenum=例外ログのファイル面数]  
[adpgrpc.config.exptrace.filesize=例外ログのファイルサイズ]  
[adpgrpc.config.datatrace.enabled={true | false}]  
[adpgrpc.config.datatrace.filenum=データトレースのファイル面数]  
[adpgrpc.config.datatrace.filesize=データトレースのファイルサイズ]  
  
[adpgrpc.security.tls.certificate-chain=証明書チェーンのファイルパス]  
[adpgrpc.security.tls.client.certificate-chain=クライアントの証明書チェーンのファイルパス]  
[adpgrpc.security.tls.client.private-key=クライアントの秘密鍵のファイルパス]  
[adpgrpc.security.tls.client.private-key-password=クライアントの秘密鍵のパスワード]  
[adpgrpc.security.token-based-auth.scope=0Auth 2.0スコープ]  
[adpgrpc.security.token-based-auth.credentials=サービスアカウントキーファイル]
```

(2) 機能

gRPC アダプタごとの構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

gRPC アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の gRPC アダプタ
- gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての gRPC アダプタ
作成手順については「[6.19.2 gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、gRPC アダプタ実行環境プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。これらのファイルが両方設定されている場合、2つのファイルの定義内容がマージされます。

同じ内容が gRPC アダプタ実行環境プロパティファイルと gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイルの間に複数設定された場合、次の表でより優先度の高いものが適用されます。

指定箇所	重複時の優先度
gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	高
gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：あり)	
gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	
gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル (HCSC サーバ単位の指定：なし)	低

(b) 作成手順

gRPC アダプタ実行環境プロパティファイルは次の手順で作成してください。gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイルの作成手順は、「[6.19.2 gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル](#)」を参照してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、gRPC アダプタ実行環境プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%gRPC%config%templates%serviceid.properties
```

2. 編集後のファイルをファイル名「<サービス ID>.properties」で次のディレクトリに格納してください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%gRPC%config
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%gRPC%config<HCSC サーバ名>
```

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないため、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者 (Service Coordinator 管理者) がアクセスできるように、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

(a) プロトコル動作指定

adpgrpc.request.target=接続する gRPC サーバ ~<文字列>

接続する gRPC サーバを次の形式で指定します。[:] は半角のコロンです。

IPアドレスまたはホスト名:ポート番号

このプロパティが定義されていない場合や、不正な値が設定されている場合は、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.request.use-plaintext={true | false} ~<<false>>`

gRPCサーバへのプレーンテキスト接続の有無を設定します。大文字と小文字は区別されます。

- true
gRPCサーバへプレーンテキスト接続します。
- false
TLSによるgRPCサーバとの接続を実施します。

範囲外の値を指定した場合、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

(b) ロギング

`adpgrpc.config.messagelog.level={0 | 10 | 20} ~<<10>>`

メッセージログの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル		
	0	10	20
エラー情報	○	○	○
警告情報	△	○	○
インフォメーション	△	△	○

(凡例)

- ：出力されます。
- △：重要なメッセージログだけ出力されます。

範囲外の値を指定した場合、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.config.methodtrace.level={1 | 2 | 3 | 4 | 5} ~<<3>>`

メソッドトレースの出力レベルを指定します。出力情報と出力レベルを次の表に示します。

情報種別	出力レベル				
	1	2	3	4	5
メソッド内のエラー	○	○	○	○	○
外部から呼び出されるメソッド情報およびファイル入出力メソッドの開始・終了情報	×	○	○	○	○
ほかの HCSC コンポーネントから参照する public メソッドの開始・終了情報	×	×	○	○	○

情報種別	出力レベル				
	1	2	3	4	5
ほかの HCSC コンポーネントから参照しない内部メソッド (public 以外のメソッド) の開始・終了情報	×	×	×	○	○
デバッグ情報	×	×	×	×	○

(凡例)

○：出力されます。

×：出力されません。

範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.config.methodtrace.filenum`=メソッドトレースのファイル面数 ~<数字>
 ((1-16))<<8>>

メソッドトレースのファイル面数を指定します。

範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.config.methodtrace.filesize`=メソッドトレースのファイルサイズ ~<数字>
 ((4096-2147483647))<<2097152>>

メソッドトレースのファイルサイズをバイト単位で指定します。

範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.config.exptrace.filenum`=例外ログのファイル面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

例外ログのファイル面数を指定します。

範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.config.exptrace.filesize`=例外ログのファイルサイズ ~<数字>
 ((4096-2147483647))<<2097152>>

例外ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。

範囲外の値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.config.datatrace.enabled`={true | false} ~<<false>>

データトレースの出力有無を指定します。大文字と小文字は区別されます。

- true

データトレースを出力します。

- false

データトレースを出力しません。

範囲外の値を指定した場合、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.config.datatrace.filenum`=データトレースのファイル面数 ~<数字>((1-16))<<8>>

データトレースのファイル面数を指定します。

範囲外の値を指定した場合、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

`adpgrpc.config.datatrace.filesize`=データトレースのファイルサイズ ~<数字>
((4096-2147483647))<<2097152>>

データトレースのファイルサイズをバイト単位で指定します。

範囲外の値を指定した場合、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

(c) セキュリティ

`adpgrpc.security.tls.certificate-chain`=証明書チェーンのファイルパス

証明書チェーンのファイルパスを指定します。

存在しないファイルを指定した場合、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

証明書チェーンは PEM エンコードとする必要があります。PEM エンコードでない場合は動作を保証しません。

指定を省略した場合は、信頼できる証明書を格納したキーストア（トラストストア）が使用されます。詳細については、マニュアル「サービスプラットフォーム 開発ガイド 受付・アダプタ定義編」の「付録 K.1 キーストアに関する設定」を参照してください。

`adpgrpc.security.tls.client.certificate-chain`=クライアントの証明書チェーンのファイルパス

クライアントの証明書チェーンのファイルパスを指定します。

存在しないファイルを指定した場合、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

証明書チェーンは PEM エンコードとする必要があります。PEM エンコードでない場合は動作を保証しません。

`adpgrpc.security.tls.client.private-key`=クライアントの秘密鍵のファイルパス

クライアントの秘密鍵のファイルパスを指定します。

存在しないファイルを指定した場合、gRPCアダプタの起動でエラーとなります。

秘密鍵は PKCS#8 形式とする必要があります。PKCS#8 形式でない場合は動作を保証しません。

`adpgrpc.security.tls.client.private-key-password`=クライアントの秘密鍵のパスワード

クライアントの秘密鍵のパスワードを指定します。

不正なパスワードを指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

adpgrpc.security.token-based-auth.scope=OAuth 2.0 スコープ

Google API へのアクセスに必要となる OAuth 2.0 スコープを「コンマ (,)」区切りで指定します。認証されたユーザを承認するか判定するために使用されます。

不正な値を指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

adpgrpc.security.token-based-auth.credentials=サービスアカウントキーファイル

サービスアカウントキーファイルのファイルパスを指定します。指定されたファイルが JSON 形式でない場合の動作は保証しません。

存在しないファイルを指定した場合、gRPC アダプタの起動でエラーとなります。

6.19.2 gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル

(1) 形式

ファイルの記述形式は gRPC アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。記述形式については、「[6.19.1 gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

(2) 機能

すべての gRPC アダプタに共通する構成情報を設定します。

(a) ファイルの種類

gRPC アダプタ実行環境プロパティファイルは、次に示す 2 種類があります。

- gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル
有効範囲：特定の gRPC アダプタ
作成手順については「[6.19.1 gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。
- gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル
有効範囲：すべての gRPC アダプタ

これらのファイルが両方設定されている場合、2 つのファイルの定義内容がマージされます。

また、1 つのマシンに複数の HCSC サーバをセットアップした場合、gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイルを HCSC サーバごとに定義することもできます。

プロパティファイル間で同じ内容が複数設定された場合のプロパティの優先度については、「[6.19.1 gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

(b) 作成手順

gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイルを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%gRPC%config%templates%adpgrpccom.properties
```

2. 編集後のファイルを次のディレクトリに格納します。

なお、ファイル名「adpgrpccom.properties」は変更しないでください。

全 HCSC サーバ共通の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%gRPC%config%common
```

特定の HCSC サーバ用の定義の場合

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%gRPC%config%<HCSC サーバ名>%common
```

サブディレクトリ名の<HCSC サーバ名>と「common」を作成する際は、Windows では大文字・小文字は区別されないので、注意してください。

サブディレクトリ<HCSC サーバ名>には、HCSC サーバの管理者（Service Coordinator 管理者）がアクセスできるよう、適切なアクセス権限を設定してください。

(3) 設定できるプロパティ

設定できるプロパティは gRPC アダプタ実行環境プロパティファイルと同じです。設定できるプロパティについては、「[6.19.1 gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル](#)」を参照してください。

6.20 ユーザ認証で利用するファイル

6.20.1 ユーザ認証情報管理コマンド定義ファイル

(1) 形式

```
[authinfo.command.messagelog.filepath=メッセージログファイルの出力先ディレクトリの絶対パス]
[authinfo.command.messagelog.filenum=メッセージログファイルの面数]
[authinfo.command.messagelog.filesize=メッセージログファイルの1面当たりの最大サイズ]
```

(2) 機能

次に示すユーザ認証情報管理コマンドを実行した場合の構成定義を設定します。

- csakeyadd コマンド (公開鍵認証の秘密鍵情報の登録・更新)
- csakeydel コマンド (公開鍵認証の秘密鍵情報の削除)
- csakeyls コマンド (公開鍵認証の秘密鍵情報の表示)
- csouseradd コマンド (パスワード認証のユーザ情報の登録・更新)
- csouserdel コマンド (パスワード認証のユーザ情報の削除)
- csouserls コマンド (パスワード認証のユーザ情報の表示)

ユーザ認証情報管理コマンド定義ファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、プロパティを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg%templates%authinfocommand.properties
```

2. 編集後のファイルを次のディレクトリに格納してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%config%msg
```

ファイル名「authinfocommand.properties」は変更しないでください。

(3) 設定できるプロパティ

```
authinfo.command.messagelog.filepath=メッセージログファイルの出力先ディレクトリの絶対パス ~
<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>
>%CSC%log%msg%command>>
```

ユーザ認証情報管理コマンドのメッセージログファイルの出力先ディレクトリを絶対パスで指定します。

authinfo.command.messagelog.filenum=メッセージログファイルの面数 ~<数字>
((1-64))<<2>>

ユーザ認証情報管理コマンドのメッセージログファイルの面数を指定します。

authinfo.command.messagelog.filesize=メッセージログファイルの1面当たりの最大サイズ ~<数字>
((4096-16777216))<<1048576>>

ユーザ認証情報管理コマンドのメッセージログファイルの1面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

(4) 注意事項

同一のプロパティを複数記述しないでください。複数記述した場合、どの値が有効になるか保証されません。

6.20.2 アカウント情報管理コマンド定義ファイル

(1) 形式

```
[authinfo.command.messagelog.filepath=メッセージログファイルの出力先ディレクトリの絶対パス]  
[authinfo.command.messagelog.filenum=メッセージログファイルの面数]  
[authinfo.command.messagelog.filesize=メッセージログファイルの1面当たりの最大サイズ]
```

(2) 機能

次に示すアカウント情報管理コマンドを実行した場合の構成定義を設定します。

- csahttpuseradd コマンド (HTTP アダプタで使用するアカウント情報の登録・更新)
- csahttpuserdel コマンド (HTTP アダプタで使用するアカウント情報の削除)
- csahttpuserls コマンド (HTTP アダプタで使用するアカウント認証のユーザ情報の表示)

アカウント情報管理コマンド定義ファイルは次の手順で作成してください。

1. 次のテンプレートファイルを基に、プロパティを定義します。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config%templates%authinfocommand.properties
```

2. 編集後のファイルを次のディレクトリに格納してください。

```
<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>%CSC%custom-adapter%HTTP%config
```

ファイル名「authinfocommand.properties」は変更しないでください。

(3) 設定できるプロパティ

authinfo.command.messagelog.filepath=メッセージログファイルの出力先ディレクトリの絶対パス ~<文字列 (2 バイト文字含む) および空白><<<サービスプラットフォームのインストールディレクトリ>>%CSC%log%adapter%command>>

アカウント情報管理コマンドのメッセージログファイルの出力先ディレクトリを絶対パスで指定します。

authinfo.command.messagelog.filenum=メッセージログファイルの面数 ~<数字>
((1-64))<<2>>

アカウント情報管理コマンドのメッセージログファイルの面数を指定します。

authinfo.command.messagelog.filesize=メッセージログファイルの 1 面当たりの最大サイズ ~<数字>
((4096-16777216))<<1048576>>

アカウント情報管理コマンドのメッセージログファイルの 1 面当たりの最大サイズをバイト単位で指定します。

(4) 注意事項

同一のプロパティを複数記述しないでください。複数記述した場合、どの値が有効になるか保証されません。

6.21 ユーザ情報の登録で利用するファイル

6.21.1 ユーザ情報指定ファイル

(1) 形式

ユーザ情報指定ファイルの指定形式は、コマンドによって次のように異なります。コマンド内でパラメタの指定順序は変更できません。

- csaftpuseradd コマンドの場合

```
<ログインユーザID><タブ文字><ログインパスワード><タブ文字>[<課金情報>]
```

- csmftpaddusr コマンドの場合

```
<ユーザ名><タブ文字><パスワード>
```

- csmmailaddusr コマンドの場合

```
<ログインユーザ名><タブ文字><パスワード>
```

- csakeyadd コマンドの場合

```
<秘密鍵のファイルパス><タブ文字><鍵ID><タブ文字>[<秘密鍵のパスフレーズ>]
```

- csauseradd コマンドの場合

```
<ユーザ名><タブ文字><パスワード>
```

- csahttpuseradd コマンドの場合

```
<ユーザ名><タブ文字><パスワード><タブ文字><接続先URI>
```

または

```
<アクセスキーID><タブ文字><シークレットアクセスキー><タブ文字><アクセスキーペアID>
```

(2) 機能

ユーザ情報指定ファイルには、コマンドに応じたユーザ情報を記載します。コマンドのオプション「-userinfofile」にファイルパスを指定して実行することで、設定されたユーザ情報を登録または更新できます。

ユーザ情報指定ファイルを指定できるコマンドを次に示します。これらのコマンドについては、「[5.4 サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンド](#)」にある、該当するコマンドの説明を参照してください。

- csaftpuseradd コマンド (FTP アダプタのユーザの登録・更新)

- csmftppaddusr コマンド (FTP インバウンドアダプタのユーザの登録・更新)
- csmmailaddusr コマンド (メールアダプタユーザ情報の登録・更新)
- csakeyadd コマンド (公開鍵認証の秘密鍵情報の登録・更新)
- csauseradd コマンド (パスワード認証のユーザ情報の登録・更新)
- csahttpuseradd コマンド (HTTP アダプタで使用するアカウント情報の登録・更新)

ユーザ情報指定ファイルの指定規則を次に示します。

- パラメタの間はタブ文字で区切って指定してください。
- 複数のユーザ情報を記載する場合は、改行文字で区切ってください。空行は無視されます。
- ファイルに使用できる文字コードは、BOM コード無しの UTF-8 だけです。それ以外の文字コードを使用した場合の動作は保証しません。
- ユーザ情報指定ファイルの内容が次の状態である場合は、コマンド実行時にエラーとなります。
 - 指定が必要なパラメタが記載されていない
 - 指定できないパラメタが記載されている
 - ユーザ情報指定ファイルが空 (または改行だけ) である

(3) ファイルの格納先

任意のファイル名で任意のディレクトリに保存してください。

(4) 設定できるパラメタ

(a) csaftppuseradd コマンドの場合

設定できるパラメタを次に示します。各パラメタの設定方法は、列「該当するコマンドオプション」に示すオプションと同じです。

パラメタ	該当するコマンドオプション
ログインユーザ ID	-user
ログインパスワード	-pass
課金情報	-account

設定方法については、「[csaftppuseradd \(FTP アダプタのユーザの登録・更新\)](#)」の該当するオプションの記載を参照してください。

なお、ファイル内に同じログインユーザ ID が重複して記載されている場合、コマンド実行時にエラーとなります。

(b) csmftpaddusr コマンドの場合

設定できるパラメタを次に示します。各パラメタの設定方法は、列「該当するコマンドオプション」に示すオプションと同じです。

パラメタ	該当するコマンドオプション
ユーザ名	-usr
パスワード	-pass

設定方法については、「[csmftpaddusr \(FTP インバウンドアダプタのユーザの登録・更新\)](#)」の該当するオプションの記載を参照してください。

なお、ファイル内に同じユーザ名が重複して記載されている場合、コマンド実行時にエラーとなります。

(c) csmmailaddusr コマンドの場合

設定できるパラメタを次に示します。各パラメタの設定方法は、列「該当するコマンドオプション」に示すオプションと同じです。

パラメタ	該当するコマンドオプション
ログインユーザ名	-user
ログインパスワード	-pass

設定方法については、「[csmmailaddusr \(メールアダプタユーザ情報の登録・更新\)](#)」の該当するオプションの記載を参照してください。

なお、ファイル内に同じログインユーザ名が重複して記載されている場合、コマンド実行時にエラーとなります。

(d) csakeyadd コマンドの場合

設定できるパラメタを次に示します。各パラメタの設定方法は、列「該当するコマンドオプション」に示すオプションと同じです。

パラメタ	該当するコマンドオプション
秘密鍵のファイルパス	-keyfile
鍵 ID	-keyid
秘密鍵のパスフレーズ	-pass

設定方法については、「[csakeyadd \(公開鍵認証の秘密鍵情報の登録・更新\)](#)」の該当するオプションの記載を参照してください。

なお、ファイル内に同じ鍵 ID が重複して記載されている場合、コマンド実行時にエラーとなります。

(e) csauseradd コマンドの場合

設定できるパラメタを次に示します。各パラメタの設定方法は、列「該当するコマンドオプション」に示すオプションと同じです。

パラメタ	該当するコマンドオプション
ユーザ名	-user
パスワード	-pass

設定方法については、「[csauseradd \(パスワード認証のユーザ情報の登録・更新\)](#)」の該当するオプションの記載を参照してください。

なお、ファイル内に同じユーザ名が重複して記載されている場合、コマンド実行時にエラーとなります。

(f) csahttpuseradd コマンドの場合

設定できるパラメタを次に示します。各パラメタの設定方法は、列「該当するコマンドオプション」に示すオプションと同じです。

パラメタ	該当するコマンドオプション
ユーザ名	-user
パスワード	-pass
接続先 URI	-uri
アクセスキー ID	-accesskey
シークレットアクセスキー	-secretaccesskey
アクセスキーペア ID	-accesskeypairid

設定方法については、「[csahttpuseradd \(HTTP アダプタで使用するアカウント情報の登録・更新\)](#)」の該当するオプションの記載を参照してください。

なお、ファイル内にユーザ名と接続先 URI の同じ組み合わせが重複して記載されている場合、コマンド実行時にエラーとなります。

(5) 記述例

csaftpuseradd コマンドの-userinfofile オプションで指定する、ユーザ情報指定ファイルの記述例を次に示します。

```
user1<タブ文字>pass1
user2<タブ文字>pass2<タブ文字>account2
```

付録

付録 A 文字コード対応表

ここでは、Code Converter での文字コードの対応表を掲載しています。

Code Converter のユーザマッピングを作成する場合、または文字コード変換 UOC 内で Code Converter の API を利用する場合には、次に示すバージョンの Code Converter を使用してください。

Windows の場合

実行環境

- Code Converter - Server Runtime for Java 04-02 以降

開発環境

- Code Converter - Development Kit for Java 04-02 以降

Linux の場合

実行環境

- Code Converter - Runtime for Java 04-02 以降

付録 A.1 半角コードの対応表

Code Converter の半角コードの変換対応表を次に示します。

図 A-1 半角コードの変換対応表

文字	EBCDIC	EBCDIK	EBCDIC (IBM版標準 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版標準 カタカナ文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 カタカナ文字 セット)	EUC	JEF版 EBCDIC	JEF版 EBCDIK	Unicode	ASCII
NUL	00	00	00	00	00	00	00	00	00	0000	00
SOH	01	01	01	01	01	01	01	01	01	0001	01
STX	02	02	02	02	02	02	02	02	02	0002	02
ETX	03	03	03	03	03	03	03	03	03	0003	03
EOT	37	37	37	37	37	37	04	37	37	0004	04
ENQ	2D	2D	2D	2D	2D	2D	05	2D	2D	0005	05
ACK	2E	2E	2E	2E	2E	2E	06	2E	2E	0006	06
BEL	2F	2F	2F	2F	2F	2F	07	2F	2F	0007	07
BS	16	16	16	16	16	16	08	16	16	0008	08
HT	05	05	05	05	05	05	09	05	05	0009	09
LF	15	15	25	25	25	25	0A	15	15	000A	0A
VT	0B	0B	0B	0B	0B	0B	0B	0B	0B	000B	0B
FF	0C	0C	0C	0C	0C	0C	0C	0C	0C	000C	0C
CR	0D	0D	0D	0D	0D	0D	0D	0D	0D	000D	0D
SO	0E	0E	—	—	—	—	0E	0E	0E	000E	0E
SI	0F	0F	—	—	—	—	0F	0F	0F	000F	0F
DLE	10	10	10	10	10	10	10	10	10	0010	10
DC1	11	11	11	11	11	11	11	11	11	0011	11
DC2	12	12	12	12	12	12	12	12	12	0012	12
DC3	13	13	13	13	13	13	13	13	13	0013	13
DC4	3C	3C	3C	3C	3C	3C	14	3C	3C	0014	14
NAK	3D	3D	3D	3D	3D	3D	15	3D	3D	0015	15
SYN	32	32	32	32	32	32	16	32	32	0016	16
ETB	26	26	26	26	26	26	17	26	26	0017	17
CAN	18	18	18	18	18	18	18	18	18	0018	18
EM	19	19	19	19	19	19	19	19	19	0019	19
SUB	3F	3F	3F	3F	3F	3F	1A	3F	3F	001A	1A
ESC	27	27	27	27	27	27	1B	27	27	001B	—

文字	EBCDIC	EBCDIK	EBCDIC (IBM版標準 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版標準 カタカナ文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 カタカナ文字 セット)	EUC	JEF版 EBCDIC	JEF版 EBCDIK	Unicode	ASCII
FS	1C	1C	1C	1C	1C	1C	1C	1C	1C	001C	1C
GS	1D	1D	1D	1D	1D	1D	1D	1D	1D	001D	1D
RS	1E	1E	1E	1E	1E	1E	1E	1E	1E	001E	1E
US	1F	1F	1F	1F	1F	1F	1F	1F	1F	001F	1F
SP	40	40	40	40	40	40	20	40	40	0020	20
!	4F	4F	4F	5A	5A	5A	21	4F	4F	0021	21
"	7F	7F	7F	7F	7F	7F	22	7F	7F	0022	22
#	7B	7B	7B	7B	7B	7B	23	7B	7B	0023	23
\$	E0	E0	5B	5B	E0	E0	24	5B	E0	0024	24
%	6C	6C	6C	6C	6C	6C	25	6C	6C	0025	25
&	50	50	50	50	50	50	26	50	50	0026	26
'	7D	7D	7D	7D	7D	7D	27	7D	7D	0027	27
(4D	4D	4D	4D	4D	4D	28	4D	4D	0028	28
)	5D	5D	5D	5D	5D	5D	29	5D	5D	0029	29
*	5C	5C	5C	5C	5C	5C	2A	5C	5C	002A	2A
+	4E	4E	4E	4E	4E	4E	2B	4E	4E	002B	2B
,	6B	6B	6B	6B	6B	6B	2C	6B	6B	002C	2C
-	60	60	60	60	60	60	2D	60	60	002D	2D
.	4B	4B	4B	4B	4B	4B	2E	4B	4B	002E	2E
/	61	61	61	61	61	61	2F	61	61	002F	2F
0	F0	F0	F0	F0	F0	F0	30	F0	F0	0030	30
1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	31	F1	F1	0031	31
2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	32	F2	F2	0032	32
3	F3	F3	F3	F3	F3	F3	33	F3	F3	0033	33
4	F4	F4	F4	F4	F4	F4	34	F4	F4	0034	34
5	F5	F5	F5	F5	F5	F5	35	F5	F5	0035	35
6	F6	F6	F6	F6	F6	F6	36	F6	F6	0036	36
7	F7	F7	F7	F7	F7	F7	37	F7	F7	0037	37
8	F8	F8	F8	F8	F8	F8	38	F8	F8	0038	38
9	F9	F9	F9	F9	F9	F9	39	F9	F9	0039	39
:	7A	7A	7A	7A	7A	7A	3A	7A	7A	003A	3A
;	5E	5E	5E	5E	5E	5E	3B	5E	5E	003B	3B
<	4C	4C	4C	4C	4C	4C	3C	4C	4C	003C	3C
=	7E	7E	7E	7E	7E	7E	3D	7E	7E	003D	3D
>	6E	6E	6E	6E	6E	6E	3E	6E	6E	003E	3E
?	6F	6F	6F	6F	6F	6F	3F	6F	6F	003F	3F
@	7C	7C	7C	7C	7C	7C	40	7C	7C	0040	40
A	C1	C1	C1	C1	C1	C1	41	C1	C1	0041	41

文字	EBCDIC	EBCDIK	EBCDIC (IBM版標準 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版標準 カタカナ文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 カタカナ文字 セット)	EUC	JEF版 EBCDIC	JEF版 EBCDIK	Unicode	ASCII
B	C2	C2	C2	C2	C2	C2	42	C2	C2	0042	42
C	C3	C3	C3	C3	C3	C3	43	C3	C3	0043	43
D	C4	C4	C4	C4	C4	C4	44	C4	C4	0044	44
E	C5	C5	C5	C5	C5	C5	45	C5	C5	0045	45
F	C6	C6	C6	C6	C6	C6	46	C6	C6	0046	46
G	C7	C7	C7	C7	C7	C7	47	C7	C7	0047	47
H	C8	C8	C8	C8	C8	C8	48	C8	C8	0048	48
I	C9	C9	C9	C9	C9	C9	49	C9	C9	0049	49
J	D1	D1	D1	D1	D1	D1	4A	D1	D1	004A	4A
K	D2	D2	D2	D2	D2	D2	4B	D2	D2	004B	4B
L	D3	D3	D3	D3	D3	D3	4C	D3	D3	004C	4C
M	D4	D4	D4	D4	D4	D4	4D	D4	D4	004D	4D
N	D5	D5	D5	D5	D5	D5	4E	D5	D5	004E	4E
O	D6	D6	D6	D6	D6	D6	4F	D6	D6	004F	4F
P	D7	D7	D7	D7	D7	D7	50	D7	D7	0050	50
Q	D8	D8	D8	D8	D8	D8	51	D8	D8	0051	51
R	D9	D9	D9	D9	D9	D9	52	D9	D9	0052	52
S	E2	E2	E2	E2	E2	E2	53	E2	E2	0053	53
T	E3	E3	E3	E3	E3	E3	54	E3	E3	0054	54
U	E4	E4	E4	E4	E4	E4	55	E4	E4	0055	55
V	E5	E5	E5	E5	E5	E5	56	E5	E5	0056	56
W	E6	E6	E6	E6	E6	E6	57	E6	E6	0057	57
X	E7	E7	E7	E7	E7	E7	58	E7	E7	0058	58
Y	E8	E8	E8	E8	E8	E8	59	E8	E8	0059	59
Z	E9	E9	E9	E9	E9	E9	5A	E9	E9	005A	5A
[4A	4A	4A	AD	4A	70	5B	4A	4A	005B	5B
\	5B	5B	E0	B2	5B	5B	5C	E0	5B	005C	5C
]	5A	5A	5A	BD	—	80	5D	5A	5A	005D	5D
^	5F	5F	5F	B0	5F	B0	5E	5F	5F	005E	5E
_	6D	6D	6D	6D	6D	6D	5F	6D	6D	005F	5F
`	79	79	79	79	—	79	60	79	79	0060	60
a	81	59	81	81	—	62	61	81	59	0061	61
b	82	62	82	82	—	63	62	82	62	0062	62
c	83	63	83	83	—	64	63	83	63	0063	63
d	84	64	84	84	—	65	64	84	64	0064	64
e	85	65	85	85	—	66	65	85	65	0065	65
f	86	66	86	86	—	67	66	86	66	0066	66
g	87	67	87	87	—	68	67	87	67	0067	67

文字	EBCDIC	EBCDIK	EBCDIC (IBM版標準 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版標準 カタカナ文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 カタカナ文字 セット)	EUC	JEF版 EBCDIC	JEF版 EBCDIK	Unicode	ASCII
h	88	68	88	88	—	69	68	88	68	0068	68
i	89	69	89	89	—	71	69	89	69	0069	69
j	91	70	91	91	—	72	6A	91	70	006A	6A
k	92	71	92	92	—	73	6B	92	71	006B	6B
l	93	72	93	93	—	74	6C	93	72	006C	6C
m	94	73	94	94	—	75	6D	94	73	006D	6D
n	95	74	95	95	—	76	6E	95	74	006E	6E
o	96	75	96	96	—	77	6F	96	75	006F	6F
p	97	76	97	97	—	78	70	97	76	0070	70
q	98	77	98	98	—	8B	71	98	77	0071	71
r	99	78	99	99	—	9B	72	99	78	0072	72
s	A2	80	A2	A2	—	AB	73	A2	80	0073	73
t	A3	8B	A3	A3	—	B3	74	A3	8B	0074	74
u	A4	9B	A4	A4	—	B4	75	A4	9B	0075	75
v	A5	9C	A5	A5	—	B5	76	A5	9C	0076	76
w	A6	A0	A6	A6	—	B6	77	A6	A0	0077	77
x	A7	AB	A7	A7	—	B7	78	A7	AB	0078	78
y	A8	B0	A8	A8	—	B8	79	A8	B0	0079	79
z	A9	B1	A9	A9	—	B9	7A	A9	B1	007A	7A
{	C0	C0	C0	C0	—	C0	7B	C0	C0	007B	7B
	6A	6A	6A	4F	4F	4F	7C	6A	6A	007C	7C
}	D0	D0	D0	D0	—	D0	7D	D0	D0	007D	7D
~	A1	A1	A1	A0	A1	A1	7E	A1	A1	007E	7E
DEL	07	07	07	07	07	07	7F	07	07	007F	7F
	20	20	—	—	—	—	80	—	—	—	—
	21	21	—	—	—	—	81	—	—	—	—
	22	22	—	—	—	—	82	—	—	—	—
	23	23	—	—	—	—	83	—	—	—	—
	24	24	—	—	—	—	84	—	—	—	—
	25	25	—	—	—	—	85	—	—	—	—
	06	06	—	—	—	—	86	—	—	—	—
	17	17	—	—	—	—	87	—	—	—	—
	28	28	—	—	—	—	88	—	—	—	—
	29	29	—	—	—	—	89	—	—	—	—
	2A	2A	—	—	—	—	8A	—	—	—	—
	2B	2B	—	—	—	—	8B	—	—	—	—
	2C	2C	—	—	—	—	8C	—	—	—	—
	09	09	—	—	—	—	8D	—	—	—	—

文字	EBCDIC	EBCDIK	EBCDIC (IBM版標準 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版標準 カタカナ文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 カタカナ文字 セット)	EUC	JEF版 EBCDIC	JEF版 EBCDIK	Unicode	ASCII
	0A	0A	—	—	—	—	8E	—	—	—	—
	1B	1B	—	—	—	—	8F	—	—	—	—
	30	30	—	—	—	—	90	—	—	—	—
	31	31	—	—	—	—	91	—	—	—	—
	1A	1A	—	—	—	—	92	—	—	—	—
	33	33	—	—	—	—	93	—	—	—	—
	34	34	—	—	—	—	94	—	—	—	—
	35	35	—	—	—	—	95	—	—	—	—
	36	36	—	—	—	—	96	—	—	—	—
	08	08	—	—	—	—	97	—	—	—	—
	38	38	—	—	—	—	98	—	—	—	—
	39	39	—	—	—	—	99	—	—	—	—
	3A	3A	—	—	—	—	9A	—	—	—	—
	3B	3B	—	—	—	—	9B	—	—	—	—
	04	04	—	—	—	—	9C	—	—	—	—
	14	14	—	—	—	—	9D	—	—	—	—
	3E	3E	—	—	—	—	9E	—	—	—	—
	E1	E1	—	—	—	—	9F	—	—	—	—
	57	57	—	—	—	—	A0	—	—	—	—
。	41	41	—	42	41	41	8EA1	—	41	FF61	—
「	42	42	—	43	42	42	8EA2	—	42	FF62	—
」	43	43	—	44	43	43	8EA3	—	43	FF63	—
、	44	44	—	45	44	44	8EA4	—	44	FF64	—
.	45	45	—	46	45	45	8EA5	—	45	FF65	—
ヲ	46	46	—	47	46	46	8EA6	—	46	FF66	—
ア	47	47	—	48	47	47	8EA7	—	47	FF67	—
イ	48	48	—	49	48	48	8EA8	—	48	FF68	—
ウ	49	49	—	51	49	49	8EA9	—	49	FF69	—
エ	51	51	—	52	51	51	8EAA	—	51	FF6A	—
オ	52	52	—	53	52	52	8EAB	—	52	FF6B	—
カ	53	53	—	54	53	53	8EAC	—	53	FF6C	—
ク	54	54	—	55	54	54	8EAD	—	54	FF6D	—
コ	55	55	—	56	55	55	8EAE	—	55	FF6E	—
ッ	56	56	—	57	56	56	8EAF	—	56	FF6F	—
ー	58	58	—	58	58	58	8EB0	—	58	FF70	—
ア	59	81	—	59	81	81	8EB1	—	81	FF71	—
イ	62	82	—	62	82	82	8EB2	—	82	FF72	—
ウ	63	83	—	63	83	83	8EB3	—	83	FF73	—

文字	EBCDIC	EBCDIK	EBCDIC (IBM版標準 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版標準 カタカナ文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 カタカナ文字 セット)	EUC	JEF版 EBCDIC	JEF版 EBCDIK	Unicode	ASCII
エ	64	84	—	64	84	84	8EB4	—	84	FF74	—
オ	65	85	—	65	85	85	8EB5	—	85	FF75	—
カ	66	86	—	66	86	86	8EB6	—	86	FF76	—
キ	67	87	—	67	87	87	8EB7	—	87	FF77	—
ク	68	88	—	68	88	88	8EB8	—	88	FF78	—
ケ	69	89	—	69	89	89	8EB9	—	89	FF79	—
コ	70	8A	—	70	8A	8A	8EBA	—	8A	FF7A	—
サ	71	8C	—	71	8C	8C	8EBB	—	8C	FF7B	—
シ	72	8D	—	72	8D	8D	8EBC	—	8D	FF7C	—
ス	73	8E	—	73	8E	8E	8EBD	—	8E	FF7D	—
セ	74	8F	—	74	8F	8F	8EBE	—	8F	FF7E	—
ソ	75	90	—	75	90	90	8EBF	—	90	FF7F	—
タ	76	91	—	76	91	91	8EC0	—	91	FF80	—
チ	77	92	—	77	92	92	8EC1	—	92	FF81	—
ツ	78	93	—	78	93	93	8EC2	—	93	FF82	—
テ	80	94	—	8A	94	94	8EC3	—	94	FF83	—
ト	8A	95	—	8B	95	95	8EC4	—	95	FF84	—
ナ	8B	96	—	8C	96	96	8EC5	—	96	FF85	—
ニ	8C	97	—	8D	97	97	8EC6	—	97	FF86	—
ヌ	8D	98	—	8E	98	98	8EC7	—	98	FF87	—
ネ	8E	99	—	8F	99	99	8EC8	—	99	FF88	—
ノ	8F	9A	—	9A	9A	9A	8EC9	—	9A	FF89	—
ハ	90	9D	—	9B	9D	9D	8ECA	—	9D	FF8A	—
ヒ	9A	9E	—	9C	9E	9E	8ECB	—	9E	FF8B	—
フ	9B	9F	—	9D	9F	9F	8ECC	—	9F	FF8C	—
ヘ	9C	A2	—	9E	A2	A2	8ECD	—	A2	FF8D	—
ホ	9D	A3	—	9F	A3	A3	8ECE	—	A3	FF8E	—
マ	9E	A4	—	AA	A4	A4	8ECF	—	A4	FF8F	—
ミ	9F	A5	—	AB	A5	A5	8ED0	—	A5	FF90	—
ム	A0	A6	—	AC	A6	A6	8ED1	—	A6	FF91	—
メ	AA	A7	—	AE	A7	A7	8ED2	—	A7	FF92	—
モ	AB	A8	—	AF	A8	A8	8ED3	—	A8	FF93	—
ヤ	AC	A9	—	B3	A9	A9	8ED4	—	A9	FF94	—
ユ	AD	AA	—	B4	AA	AA	8ED5	—	AA	FF95	—
ヨ	AE	AC	—	B5	AC	AC	8ED6	—	AC	FF96	—
ラ	AF	AD	—	B6	AD	AD	8ED7	—	AD	FF97	—
リ	B0	AE	—	B7	AE	AE	8ED8	—	AE	FF98	—
ル	B1	AF	—	B8	AF	AF	8ED9	—	AF	FF99	—

文字	EBCDIC	EBCDIK	EBCDIC (IBM版標準 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 英小文字 セット)	EBCDIC (IBM版標準 カタカナ文字 セット)	EBCDIC (IBM版拡張 カタカナ文字 セット)	EUC	JEF版 EBCDIC	JEF版 EBCDIK	Unicode	ASCII
レ	B2	BA	—	B9	BA	BA	8EDA	—	BA	FF9A	—
ロ	B3	BB	—	BA	BB	BB	8EDB	—	BB	FF9B	—
リ	B4	BC	—	BB	BC	BC	8EDC	—	BC	FF9C	—
ル	B5	BD	—	BC	BD	BD	8EDD	—	BD	FF9D	—
レ	B6	BE	—	BE	BE	BE	8EDE	—	BE	FF9E	—
ロ	B7	BF	—	BF	BF	BF	8EDF	—	BF	FF9F	—
	B8	B2	—	—	—	—	8EE0	—	—	—	—
	B9	B3	—	—	—	—	8EE1	—	—	—	—
	BA	B4	—	—	—	—	8EE2	—	—	—	—
	BB	B5	—	—	—	—	8EE3	—	—	—	—
	BC	B6	—	—	—	—	8EE4	—	—	—	—
	BD	B7	—	—	—	—	8EE5	—	—	—	—
	BE	B8	—	—	—	—	8EE6	—	—	—	—
	BF	B9	—	—	—	—	8EE7	—	—	—	—
	CA	CA	—	—	—	—	8EE8	—	—	—	—
	CB	CB	—	—	—	—	8EE9	—	—	—	—
	CC	CC	—	—	—	—	8EEA	—	—	—	—
	CD	CD	—	—	—	—	8EEB	—	—	—	—
	CE	CE	—	—	—	—	8EEC	—	—	—	—
	CF	CF	—	—	—	—	8EED	—	—	—	—
	DA	DA	—	—	—	—	8EEE	—	—	—	—
	DB	DB	—	—	—	—	8EEF	—	—	—	—
	DC	DC	—	—	—	—	8EF0	—	—	—	—
	DD	DD	—	—	—	—	8EF1	—	—	—	—
	DE	DE	—	—	—	—	8EF2	—	—	—	—
	DF	DF	—	—	—	—	8EF3	—	—	—	—
	EA	EA	—	—	—	—	8EF4	—	—	—	—
	EB	EB	—	—	—	—	8EF5	—	—	—	—
	EC	EC	—	—	—	—	8EF6	—	—	—	—
	ED	ED	—	—	—	—	8EF7	—	—	—	—
	EE	EE	—	—	—	—	8EF8	—	—	—	—
	EF	EF	—	—	—	—	8EF9	—	—	—	—
	FA	FA	—	—	—	—	8EFA	—	—	—	—
	FB	FB	—	—	—	—	8EFB	—	—	—	—
	FC	FC	—	—	—	—	8EFC	—	—	—	—
	FD	FD	—	—	—	—	8EFD	—	—	—	—
	FE	FE	—	—	—	—	8EFE	—	—	—	—
	FF	FF	—	—	—	—	8EFF	—	—	—	—

(凡例)

—：該当する文字がありません

注 1

EBCDIC および EBCDIK (KEIS 版) は準標準版に対応しているコードです。

標準版では、 $(5D)_{16}$ が $(4F)_{16}$ に、 $(21)_{16}$ が $(5A)_{16}$ になります。

注 2

EBCDIC および EBCDIK (KEIS 版) で、 $(0A)_{16}$ は全角コードと半角コードの切り替えコードとして扱います。

注 3

EBCDIC (IBM 版) では、(0E)₁₆ と (0F)₁₆ は全角コードと半角コードの切り替えコードとして扱います。

注 4

EBCDIC (JEF 版) および EBCDIK (JEF 版) では、(28)₁₆、(29)₁₆、および(38)₁₆ は全角コードと半角コードの切り替えコードとして扱います。

出力時には、(28)₁₆ と(29)₁₆ だけを全角コードと半角コードの切り替えコードとして扱います。

付録 A.2 特殊文字のコード対応表

Code Converter の特殊文字のコード対応表を次に示します。

Code Converter は、ベンダ特殊文字として Windows 特殊文字、IBM 選択文字、および NEC 選定 IBM 拡張文字の 3 種類に対応しています。IBM 選択文字、NEC 選定 IBM 拡張文字を使用する場合には、ユーザマッピングの定義が必要になります。

表 A-1 ベンダ特殊文字のコード対応表の変換内容一覧

変換内容		記載箇所
Windows 特殊文字	SJIS と Unicode (UCS-2)	付録 A.2(1)(a)
	Unicode (UCS-2) から SJIS	付録 A.2(1)(b)
IBM 選択文字		付録 A.2(2)
NEC 選定 IBM 拡張文字		付録 A.2(3)

(1) Windows 特殊文字の変換対応表

(a) Windows 特殊文字の対応表 (SJIS と Unicode (UCS-2))

H \ L	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
874	① 2460	② 2461	③ 2462	④ 2463	⑤ 2464	⑥ 2465	⑦ 2466	⑧ 2467	⑨ 2468	⑩ 2469	⑪ 246A	⑫ 246B	⑬ 246C	⑭ 246D	⑮ 246E	⑯ 246F
875	⑰ 2470	⑱ 2471	⑲ 2472	⑳ 2473	I 2160	II 2161	III 2162	IV 2163	V 2164	VI 2165	VII 2166	VIII 2167	IX 2168	X 2169		ミリ 3349
876	キロ 3314	センチ 3322	メートル 334D	グラム 3318	トン 3327	アール 3303	ヘクタール 3336	リットル 3351	フット 3357	カロリー 330D	ドル 3326	セント 3323	パーセント 332B	ミリヘル 334A	ページ 333B	mm 339C
877	cm 339D	km 339E	mg 338E	kg 338F	cc 33C4	m ² 33A1									平成 337B	
878	〃 301D	々 301F	No. 2116	KK 33CD	Tel 2121	Ⓔ 32A4	Ⓜ 32A5	Ⓣ 32A6	Ⓔ 32A7	Ⓢ 32A8	(株) 3231	(有) 3232	(代) 3239	明治 337E	大正 337D	昭和 337C
879	≡ 2252	≡ 2261	∫ 222B	∫ 222E	Σ 2211	√ 221A	⊥ 22A5	∠ 2220	∟ 221F	∠ 22BF	∴ 2235	∩ 2229	∪ 222A			

注 1

表中の H/L 欄の数字は、SJIS です。フォント (字体) が記載されている欄の数字は、Unicode (UCS-2) です。

注 2

太枠部分は、SJIS から Unicode (UCS-2) への変換だけです。Unicode (UCS-2) から SJIS への変換対応は、「(b) Windows 特殊文字の対応表 (Unicode (UCS-2) から SJIS)」のようになります。

(b) Windows 特殊文字の対応表 (Unicode (UCS-2) から SJIS)

Unicode (UCS-2)	≡ 2252	≡ 2261	∫ 222B	√ 221A	⊥ 22A5	∠ 2220	∴ 2235	∩ 2229	∪ 222A
SJIS	81E0	81DF	81E7	81E3	81DB	81DA	81E6	81BF	81BE

(2) IBM 選択文字の対応表

(a) IBM 選択文字の対応表 (SJIS と Unicode (UCS-2))

H \ L	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
FA4	i 2170	ii 2171	iii 2172	iv 2173	v 2174	vi 2175	vii 2176	viii 2177	ix 2178	x 2179	I 2160	II 2161	III 2162	IV 2163	V 2164	VI 2165
FA5	VII 2166	VIII 2167	IX 2168	X 2169	一 FFE2	丨 FFE4	丿 FF07	丶 FF02	𠄎 3231	No. 2116	𠄎 2121	𠄎 2235	纒 7E8A	嬰 891C	鍬 9348	銈 9288
FA6	葩 84DC	倍 4FC9	炆 70BB	昱 6631	槽 68C8	銀 92F9	鼻 66FB	莠 5F45	丨 4E28	乞 4EE1	任 4EFC	佂 4F00	仔 4F03	但 4F39	佻 4F56	佻 4F92
FA7	佻 4F8A	佻 4F9A	佻 4F9A	佻 4F9A	佻 5040	佻 5022	佻 4FFF	佻 501E	佻 5046	佻 5070	佻 5042	佻 5094	佻 50F4	佻 50D8	佻 514A	
FA8	𠄎 5164	𠄎 519D	𠄎 51EC	𠄎 51EC	𠄎 5215	𠄎 529C	𠄎 52A6	𠄎 52C0	𠄎 52DB	𠄎 5300	𠄎 5307	𠄎 5324	𠄎 5372	𠄎 5393	𠄎 53B2	𠄎 53DD
FA9	𠄎 FA0E	𠄎 549C	𠄎 548A	𠄎 54A9	𠄎 54FF	𠄎 5586	𠄎 5759	𠄎 5765	𠄎 57AC	𠄎 57C8	𠄎 57C7	𠄎 FA0F	𠄎 FA10	𠄎 589E	𠄎 58B2	𠄎 590B
FAA	𠄎 5953	𠄎 595B	𠄎 595D	𠄎 5963	𠄎 59A4	𠄎 59BA	𠄎 5B56	𠄎 5BC0	𠄎 752F	𠄎 5BD8	𠄎 5BEC	𠄎 5C1E	𠄎 5CA6	𠄎 5CBA	𠄎 5CF5	𠄎 5D27
FAB	𠄎 5D53	𠄎 FA11	𠄎 5D42	𠄎 5D6D	𠄎 5DB8	𠄎 5DB9	𠄎 5DD0	𠄎 5F21	𠄎 5F34	𠄎 5F67	𠄎 5FB7	𠄎 5FDE	𠄎 605D	𠄎 6085	𠄎 608A	𠄎 60DE
FAC	𠄎 60D5	𠄎 6120	𠄎 60F2	𠄎 6111	𠄎 6137	𠄎 6130	𠄎 6198	𠄎 6213	𠄎 62A6	𠄎 63F5	𠄎 6460	𠄎 649D	𠄎 64CE	𠄎 654E	𠄎 6600	𠄎 6615
FAD	𠄎 663B	𠄎 6609	𠄎 662E	𠄎 661E	𠄎 6624	𠄎 6665	𠄎 6657	𠄎 6659	𠄎 FA12	𠄎 6673	𠄎 6699	𠄎 66A0	𠄎 66B2	𠄎 66BF	𠄎 66FA	𠄎 670E
FAE	𠄎 F929	𠄎 6766	𠄎 67BB	𠄎 6852	𠄎 67C0	𠄎 6801	𠄎 6844	𠄎 68CF	𠄎 FA13	𠄎 6968	𠄎 FA14	𠄎 6998	𠄎 69E2	𠄎 6A30	𠄎 6A6B	𠄎 6A46
FAF	𠄎 6A73	𠄎 6A7E	𠄎 6AE2	𠄎 6AE4	𠄎 6BD6	𠄎 6C3F	𠄎 6C5C	𠄎 6C86	𠄎 6C6F	𠄎 6CDA	𠄎 6D04	𠄎 6D87	𠄎 6D6F			
FB4	𠄎 6D96	𠄎 6DAC	𠄎 6D6C	𠄎 6DF8	𠄎 6DF2	𠄎 6DFC	𠄎 6E39	𠄎 6E5C	𠄎 6E27	𠄎 6E3C	𠄎 6EBF	𠄎 6F88	𠄎 6FB5	𠄎 6FF5	𠄎 7005	𠄎 7007
FB5	𠄎 7028	𠄎 7085	𠄎 70A8	𠄎 710F	𠄎 7104	𠄎 715C	𠄎 7146	𠄎 7147	𠄎 FA15	𠄎 71C1	𠄎 71FE	𠄎 72B1	𠄎 72BE	𠄎 7324	𠄎 FA16	𠄎 7377
FB6	𠄎 73BD	𠄎 73C9	𠄎 73DE	𠄎 73E3	𠄎 73D2	𠄎 7407	𠄎 73F5	𠄎 7426	𠄎 742A	𠄎 7429	𠄎 742E	𠄎 7462	𠄎 7489	𠄎 749F	𠄎 7501	𠄎 756F
FB7	𠄎 7682	𠄎 769C	𠄎 769E	𠄎 769B	𠄎 76A6	𠄎 FA17	𠄎 7746	𠄎 52AF	𠄎 7821	𠄎 784E	𠄎 7864	𠄎 787A	𠄎 7930	𠄎 FA18	𠄎 FA19	
FB8	𠄎 FA1A	𠄎 7994	𠄎 FA1B	𠄎 799B	𠄎 7AD1	𠄎 7AE7	𠄎 FA1C	𠄎 7AEB	𠄎 7B9E	𠄎 FA1D	𠄎 7D48	𠄎 7D5C	𠄎 7DB7	𠄎 7DA0	𠄎 7DD6	𠄎 7E52
FB9	𠄎 7F47	𠄎 7FA1	𠄎 FA1E	𠄎 8301	𠄎 8362	𠄎 837F	𠄎 83C7	𠄎 83F6	𠄎 8448	𠄎 84B4	𠄎 8553	𠄎 8559	𠄎 856B	𠄎 FA1F	𠄎 86B0	𠄎 FA20
FBA	𠄎 FA21	𠄎 8807	𠄎 88F5	𠄎 8A12	𠄎 8A37	𠄎 8A79	𠄎 8AA7	𠄎 8ABE	𠄎 8ADF	𠄎 FA22	𠄎 8AF6	𠄎 8B53	𠄎 8B7F	𠄎 8CF0	𠄎 8CF4	𠄎 8D12
FBB	𠄎 8D76	𠄎 FA23	𠄎 8ECF	𠄎 FA24	𠄎 FA25	𠄎 9067	𠄎 90DE	𠄎 FA26	𠄎 9115	𠄎 9127	𠄎 91DA	𠄎 91D7	𠄎 91DE	𠄎 91ED	𠄎 91EE	𠄎 91E4
FBC	𠄎 91E5	𠄎 9206	𠄎 9210	𠄎 920A	𠄎 923A	𠄎 9240	𠄎 923C	𠄎 924E	𠄎 9259	𠄎 9251	𠄎 9239	𠄎 9267	𠄎 92A7	𠄎 9277	𠄎 9278	𠄎 92E7
FBD	𠄎 92D7	𠄎 92D9	𠄎 92D0	𠄎 FA27	𠄎 92D5	𠄎 92E0	𠄎 92D3	𠄎 9325	𠄎 9321	𠄎 92FB	𠄎 FA28	𠄎 931E	𠄎 92FF	𠄎 931D	𠄎 9302	𠄎 9370
FBE	𠄎 9357	𠄎 93A4	𠄎 93C6	𠄎 93DE	𠄎 93F8	𠄎 9431	𠄎 9445	𠄎 9448	𠄎 9592	𠄎 F9DC	𠄎 FA29	𠄎 969D	𠄎 96AF	𠄎 9733	𠄎 973B	𠄎 9743
FBF	𠄎 974D	𠄎 974F	𠄎 9751	𠄎 9755	𠄎 9857	𠄎 9865	𠄎 FA2A	𠄎 FA2B	𠄎 9927	𠄎 FA2C	𠄎 999E	𠄎 9A4E	𠄎 9AD9			
FC4	𠄎 9ADC	𠄎 9B75	𠄎 9B72	𠄎 9B8F	𠄎 9BB1	𠄎 9BBB	𠄎 9C00	𠄎 9D70	𠄎 9D6B	𠄎 FA2D	𠄎 9E19	𠄎 9ED1				

注 1

表中の H/L 欄の数字は、SJIS です。フォント（字体）が記載されている欄の数字は、Unicode (UCS-2) です。

注 2

太枠部分は、SJIS から Unicode (UCS-2) への変換だけです。Unicode (UCS-2) から SJIS への変換対応は、「(b) IBM 選択文字の対応表 (Unicode (UCS-2) から SJIS)」のようになります。

(b) IBM 選択文字の対応表 (Unicode (UCS-2) から SJIS)

Unicode (UCS-2)	ㄣ FFE2	∴ 2235
SJIS	81CA	81E6

(c) IBM 選択文字の対応表 (IBM コードと Unicode (UCS-2))

	IBM	Unicode (UCS-2)		IBM	Unicode (UCS-2)	
i	41B1	2170		𪗇	527B	84DC
ii	41B2	2171		𪗈	5294	4FC9
iii	41B3	2172		𪗉	529E	70BB
iv	41B4	2173		𪗊	52EB	6631
v	41B5	2174		𪗋	5386	68C8
vi	41B6	2175		𪗌	5394	92F9
vii	41B7	2176		𪗍	5397	66FB
viii	41B8	2177		𪗎	53C7	5F45
ix	41B9	2178		丨	5644	4E28
x	41BA	2179		𪗏	565D	4EE1
I	41F1	2160		𪗐	5662	4EFC
II	41F2	2161		𪗑	5665	4F00
III	41F3	2162		𪗒	5666	4F03
IV	41F4	2163		𪗓	566A	4F39
V	41F5	2164		𪗔	566E	4F56
VI	41F6	2165		𪗕	5670	4F92
VII	41F7	2166		𪗖	5671	4F8A
VIII	41F8	2167		𪗗	5674	4F9A
IX	41F9	2168		𪗘	567B	4F94
X	41FA	2169		𪗙	5686	4FCD
ㄣ	—	—	※	𪗚	568A	5040
∴	426A	FFE4		𪗛	5691	5022
′	427D	FF07		𪗜	5694	4FFF
″	427F	FF02		𪗝	5698	501E
(株)	446D	3231		𪗞	56A2	5046
No.	446E	2116		𪗟	56A3	5070
TEL	446F	2121		𪗠	56A4	5042
∴	—	—	※	𪗡	56A8	5094
續	51BF	7E8A		𪗢	56B2	50F4
襲	51DA	891C		𪗣	56B5	50D8
鋏	51F7	9248		𪗤	56C9	514A
銑	524B	9288		𪗥	56CE	5164

注※ IBMコード⇄Unicode変換での数学記号 2 (ㄣと∴) は、内字コードとして1対1で存在するため、IBM選択文字として扱いません。

	IBM	Unicode (UCS-2)
冃	56DC	519D
洽	56E8	51BE
夙	56EF	51EC
劦	56F7	5215
尢	574F	529C
劦	5750	52A6
劦	5756	52C0
勛	5758	52DB
勻	5761	5300
匆	5763	5307
匡	576B	5324
邵	577C	5372
厓	5780	5393
厲	5787	53B2
覘	578B	53DD
雙	578E	FA0E
吃	57A9	549C
味	57AE	548A
咩	57BD	54A9
哿	57C0	54FF
喆	57DE	5586
垩	5860	5759
坦	5863	5765
垠	586C	57AC
垠	5870	57C8
垠	5873	57C7
垠	5877	FA0F
塚	5882	FA10
增	588A	589E
撫	588C	58B2
發	58A1	590B
麥	58AD	5953

	IBM	Unicode (UCS-2)
夤	58B0	595B
夤	58B1	595D
夤	58B2	5963
好	58BE	59A4
妹	58C0	59BA
仔	58EC	5B56
窠	58FC	5BC0
甯	58FE	752F
眞	5942	5BD8
寬	5944	5BEC
奈	5951	5C1E
豈	5967	5CA6
岑	5968	5CBA
崑	5970	5CF5
崑	5978	5D27
崑	597F	5D53
嶠	5980	FA11
嶠	5984	5D42
嶠	5987	5D6D
嶠	5993	5DB8
嶠	5995	5DB9
嶠	5997	5DD0
鉅	59C7	5F21
葶	59CB	5F34
彳	59D8	5F67
德	59E8	5FB7
忝	59F1	5FDE
愨	5A44	605D
悅	5A51	6085
愨	5A57	608A
愨	5A5F	60DE
愨	5A65	60D5

	IBM	Unicode (UCS-2)
愠	5A67	6120
憚	5A68	60F2
悞	5A76	6111
愷	5A79	6137
愧	5A7E	6130
愷	5A94	6198
忒	5AB5	6213
柄	5ADA	62A6
捷	5AFB	63F5
摠	5B50	6460
擣	5B53	649D
擎	5B54	64CE
教	5B7E	654E
昀	5B97	6600
昕	5B98	6615
昂	5B99	663B
昉	5B9D	6609
昂	5BA0	662E
昞	5BA1	661E
昞	5BA4	6624
皖	5BA7	6665
哈	5BA8	6657
峻	5BAB	6659
晴	5BAE	FA12
晷	5BAF	6673
晷	5BB4	6699
暘	5BB6	66A0
暘	5BB8	66B2
暘	5BBB	66BF
曹	5BC7	66FA
脛	5BC8	670E
朗	5BC9	F929

	IBM	Unicode (UCS-2)
杓	5BD8	6766
榘	5BE3	67BB
栾	5BEC	6852
披	5BF0	67C0
柳	5BF3	6801
枕	5BF9	6844
榑	5C5F	68CF
榑	5C66	FA13
楨	5C6E	6968
榑	5C78	FA14
榑	5C79	6998
褶	5C90	69E2
榑	5C9A	6A30
横	5C9B	6A6B
舞	5CA6	6A46
櫛	5CA9	6A73
櫛	5CAF	6A7E
櫛	5CB9	6AE2
櫛	5CBC	6AE4
毳	5CEA	6BD6
洸	5CF6	6C3F
汜	5CF9	6C5C
沆	5CFD	6C86
沆	5CFE	6C6F
泚	5D4E	6CDA
洄	5D58	6D04
涇	5D60	6D87
浯	5D62	6D6F
涇	5D6B	6D96
涇	5D72	6DAC
溟	5D74	6DCF
清	5D7A	6DF8

	IBM	Unicode (UCS-2)
澆	5D7F	6DF2
森	5D80	6DFC
洵	5D8A	6E39
湜	5D8E	6E5C
滌	5D93	6E27
羨	5D95	6E3C
澗	5DA6	6EBF
澈	5DC1	6F88
漸	5DCA	6FB5
瀆	5DD5	6FF5
澄	5DD7	7005
瀆	5DD8	7007
瀨	5DE3	7028
炅	5DEA	7085
炫	5DED	70AB
烝	5DF5	710F
焄	5DF6	7104
焅	5DFB	715C
焆	5DFC	7146
輝	5DFD	7147
熙	5E49	FA15
燁	5E4B	71C1
燾	5E5A	71FE
犰	5E73	72B1
狢	5E75	72BE
狣	5E86	7324
猪	5E8A	FA16
獠	5E94	7377
珣	5E99	73BD
珥	5E9E	73C9
珧	5E9F	73D6
珨	5EA1	73E3

	IBM	Unicode (UCS-2)
珩	5EA2	73D2
琇	5EA7	7407
琇	5EA8	73F5
琦	5EAA	7426
琪	5EAB	742A
瑁	5EAD	7429
琮	5EAE	742E
琤	5EBC	7462
璉	5EBD	7489
璜	5ECO	749F
瓶	5ED1	7501
峻	5EE7	756F
皂	5F69	7682
皜	5F70	769C
皞	5F71	769E
皟	5F72	769B
皠	5F73	76A6
益	5F7A	FA17
皖	5F8E	7746
劭	5FAA	52AF
砒	5FAE	7821
砑	5FB2	784E
砒	5FB3	7864
砑	5FB6	787A
礪	5FD1	7930
礪	5FD2	FA18
神	5FD5	FA19
祥	5FD9	FA1A
禔	5FDC	7994
福	5FDD	FA1B
禛	5FDF	799B
竝	604F	7AD1

	IBM	Unicode (UCS-2)
靖	6058	7AE7
靖	6059	FA1C
靖	605A	7AEB
筭	6082	7B9E
精	60AD	FA1D
紉	60C4	7D48
紉	60C6	7D5C
粹	60D4	7DB7
緑	60DA	7DA0
緒	60E1	7DD6
繪	60FD	7E52
罇	6157	7F47
羨	616E	7FA1
羽	6177	FA1E
茁	61F8	8301
苧	6248	8362
葦	625B	837F
菇	6267	83C7
葦	6274	83F6
葦	627E	8448
蒨	628A	84B4
蕓	629E	8553
蕓	62A1	8559
董	62A8	856B
蔞	62B9	FA1F
薰	62BB	85B0
蘊	62CE	FA20
蚌	62E2	FA21
蠓	635E	8807
裊	6390	88F5
訃	63C5	8A12
諄	63CB	8A37

	IBM	Unicode (UCS-2)
詹	63D4	8A79
誦	63DF	8AA7
閻	63E1	8ABE
諛	63ED	8ADF
諸	63EE	FA22
諶	63EF	8AF6
諛	6445	8B53
諛	6450	8B7F
賸	647C	8CF0
賴	647D	8CF4
贖	6485	8D12
趕	648D	8D76
赴	648E	FA23
軌	64C9	8ECF
返	64F1	FA24
逸	6549	FA25
遑	6553	9067
郎	6564	90DE
都	6566	FA26
鄉	6567	9115
鄧	656B	9127
鈇	6583	91DA
釗	6585	91D7
鈇	6586	91DE
釭	658A	91ED
鈇	658C	91EE
鈇	658D	91E4
鈇	658F	91E5
鈇	6590	9206
鈇	6593	9210
鈇	6595	920A
鈇	659B	923A

	IBM	Unicode (UCS-2)
鉀	659E	9240
鉀	659F	923C
鉀	65A1	924E
鉀	65A3	9259
鉀	65A5	9251
鉀	65A6	9239
鉀	65A8	9267
鉀	65AB	92A7
鉀	65AC	9277
鉀	65AD	9278
鉀	65B4	92E7
鉀	65B5	92D7
鉀	65B6	92D9
鉀	65B7	92D0
鉀	65B8	FA27
鉀	65B9	92D5
鉀	65BC	92E0
鉀	65BD	92D3
鉀	65C1	9325
鉀	65C3	9321
鉀	65C5	92FB
鉀	65C6	FA28
鉀	65C8	931E
鉀	65C9	92FF
鉀	65CC	931D
鉀	65CE	9302
鉀	65D0	9370
鉀	65D5	9357
鉀	65D8	93A4
鉀	65DD	93C6
鉀	65E4	93DE
鉀	65E8	93F8

	IBM	Unicode (UCS-2)
鎧	65F0	9431
鎧	65F4	9445
鎧	65F6	9448
閨	664A	9592
隆	6674	F9DC
隴	6678	FA29
隴	6679	969D
隴	667F	96AF
隴	6697	9733
隴	6699	973B
隴	669E	9743
隴	66A2	974D
隴	66A3	974F
青	66A4	9751
靖	66A5	9755
顛	66CB	9857
顛	66CC	9865
飯	66DD	FA2A
飼	66DF	FA2B
餒	66E5	9927
館	66E6	FA2C
替	66F9	999E
驕	6759	9A4E
高	676B	9AD9
駢	676C	9ADC
鯨	678F	9B75
鮪	6791	9B72
鮭	6793	9B8F
鮭	679B	9BB1
鮭	679F	9BBB
鰻	67B1	9C00
鵬	67E2	9D70

	IBM	Unicode (UCS-2)
鶉	67E4	9D6B
鶉	67F4	FA2D
鶉	67FE	9E19
黑	6856	9ED1

(3) NEC 選定 IBM 拡張文字の対応表

(a) NEC 選定 IBM 拡張文字の対応表 (SJIS と Unicode (UCS-2))

H \ L	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
ED4	纈 7E8A	嬰 891C	饒 9348	銈 9288	醜 84DC	倍 4FC9	垢 70BB	豈 6631	精 68C8	銀 92F9	鼻 66FB	擗 5F45	𠂇 4E28	仵 4EE1	任 4EFC	佞 4F00
ED5	仔 4F03	𠂇 4F39	𠂇 4F56	𠂇 4F92	𠂇 4F8A	𠂇 4F9A	𠂇 4F94	𠂇 4FCD	𠂇 5040	𠂇 5022	𠂇 4FFF	𠂇 501E	𠂇 5046	𠂇 5070	𠂇 5042	𠂇 5094
ED6	𠂇 50F4	𠂇 50D8	𠂇 514A	𠂇 5164	𠂇 519D	𠂇 51BE	𠂇 51EC	𠂇 5215	𠂇 529C	𠂇 52A6	𠂇 52C0	𠂇 52DB	𠂇 5300	𠂇 5307	𠂇 5324	𠂇 5372
ED7	厓 5393	厲 53B2	𠂇 53DD	𠂇 FA0E	𠂇 549C	𠂇 548A	𠂇 54A9	𠂇 54FF	𠂇 5586	𠂇 5759	𠂇 5765	𠂇 57AC	𠂇 57C8	𠂇 57C7	𠂇 FA0F	
ED8	塚 FA10	増 589E	塹 58B2	交 590B	麥 5953	𠂇 595B	𠂇 595D	𠂇 5963	𠂇 59A4	𠂇 59BA	𠂇 5B56	𠂇 5BC0	𠂇 752F	𠂇 5BD8	𠂇 5BEC	𠂇 5C1E
ED9	𠂇 5CA6	𠂇 5CBA	𠂇 5CF5	𠂇 5D27	𠂇 5D53	𠂇 FA11	𠂇 5D42	𠂇 5D6D	𠂇 5DB8	𠂇 5DB9	𠂇 5DD0	𠂇 5F21	𠂇 5F34	𠂇 5F67	𠂇 5FB7	𠂇 5FDE
EDA	𠂇 605D	𠂇 6085	𠂇 608A	𠂇 60DE	𠂇 60F2	𠂇 6120	𠂇 6111	𠂇 6137	𠂇 6130	𠂇 6198	𠂇 6213	𠂇 62A6	𠂇 63F5	𠂇 6460	𠂇 649D	
EDB	𠂇 64CE	𠂇 654E	𠂇 6600	𠂇 6615	𠂇 663B	𠂇 6609	𠂇 662E	𠂇 661E	𠂇 6624	𠂇 6665	𠂇 6657	𠂇 6659	𠂇 FA12	𠂇 6673	𠂇 6699	𠂇 66A0
EDC	𠂇 66B2	𠂇 66BF	𠂇 66FA	𠂇 670E	𠂇 F929	𠂇 6766	𠂇 67BB	𠂇 6852	𠂇 67C0	𠂇 6801	𠂇 6844	𠂇 68CF	𠂇 FA13	𠂇 6968	𠂇 FA14	𠂇 6998
EDD	𠂇 69E2	𠂇 6A30	𠂇 6A6B	𠂇 6A46	𠂇 6A73	𠂇 6A7E	𠂇 6AE2	𠂇 6AE4	𠂇 6BD6	𠂇 6C3F	𠂇 6C5C	𠂇 6C86	𠂇 6C6F	𠂇 6CDA	𠂇 6D04	𠂇 6D87
EDE	𠂇 6D6F	𠂇 6D96	𠂇 6DAC	𠂇 6DCF	𠂇 6DF8	𠂇 6DF2	𠂇 6DFC	𠂇 6E39	𠂇 6E5C	𠂇 6E27	𠂇 6E3C	𠂇 6EBF	𠂇 6F88	𠂇 6FB5	𠂇 6FF5	𠂇 7005
EDF	𠂇 7007	𠂇 7028	𠂇 7085	𠂇 70AB	𠂇 710F	𠂇 7104	𠂇 715C	𠂇 7146	𠂇 7147	𠂇 FA15	𠂇 71C1	𠂇 71FE	𠂇 72B1			
EE4	𠂇 72BE	𠂇 7324	𠂇 FA16	𠂇 7377	𠂇 73BD	𠂇 73C9	𠂇 73D6	𠂇 73E3	𠂇 73D2	𠂇 7407	𠂇 73F5	𠂇 7426	𠂇 742A	𠂇 7429	𠂇 742E	𠂇 7462
EE5	𠂇 7489	𠂇 749F	𠂇 7501	𠂇 756F	𠂇 7682	𠂇 769C	𠂇 769E	𠂇 769B	𠂇 76A6	𠂇 FA17	𠂇 7746	𠂇 52AF	𠂇 7821	𠂇 784E	𠂇 7864	𠂇 787A
EE6	𠂇 7930	𠂇 FA18	𠂇 FA19	𠂇 FA1A	𠂇 7994	𠂇 FA1B	𠂇 799B	𠂇 7AD1	𠂇 7AE7	𠂇 FA1C	𠂇 7AEB	𠂇 7B9E	𠂇 FA1D	𠂇 7D48	𠂇 7D5C	𠂇 7DB7
EE7	𠂇 7DA0	𠂇 7DB6	𠂇 7E52	𠂇 7F47	𠂇 FA1E	𠂇 8301	𠂇 8362	𠂇 837F	𠂇 83C7	𠂇 83F6	𠂇 8448	𠂇 84B4	𠂇 8553	𠂇 8559		
EE8	𠂇 856B	𠂇 FA1F	𠂇 86B0	𠂇 FA20	𠂇 FA21	𠂇 8807	𠂇 88F5	𠂇 8A12	𠂇 8A37	𠂇 8A79	𠂇 8AA7	𠂇 8ABE	𠂇 8ADF	𠂇 FA22	𠂇 8AF6	𠂇 8B53
EE9	𠂇 8B7F	𠂇 8CF0	𠂇 8CF4	𠂇 8D12	𠂇 8D76	𠂇 FA23	𠂇 8ECF	𠂇 FA24	𠂇 FA25	𠂇 9067	𠂇 90DE	𠂇 FA26	𠂇 9115	𠂇 9127	𠂇 91DA	𠂇 91D7
EEA	𠂇 91DE	𠂇 91ED	𠂇 91EE	𠂇 91E4	𠂇 91E5	𠂇 9206	𠂇 9210	𠂇 920A	𠂇 923A	𠂇 9240	𠂇 923C	𠂇 924E	𠂇 9259	𠂇 9251	𠂇 9239	𠂇 9267
EEB	𠂇 92A7	𠂇 9277	𠂇 9278	𠂇 92E7	𠂇 92D7	𠂇 92D9	𠂇 92D0	𠂇 FA27	𠂇 92D5	𠂇 92E0	𠂇 92D3	𠂇 9325	𠂇 9321	𠂇 92FB	𠂇 FA28	𠂇 931E
EEC	𠂇 92FF	𠂇 931D	𠂇 9302	𠂇 9370	𠂇 9357	𠂇 93A4	𠂇 93C6	𠂇 93DE	𠂇 93F8	𠂇 9431	𠂇 9445	𠂇 9448	𠂇 9592	𠂇 F9DC	𠂇 FA29	𠂇 969D
EED	𠂇 96AF	𠂇 9733	𠂇 973B	𠂇 9743	𠂇 974D	𠂇 974F	𠂇 9751	𠂇 9755	𠂇 9857	𠂇 9865	𠂇 FA2A	𠂇 FA2B	𠂇 9927	𠂇 FA2C	𠂇 999E	𠂇 9A4E
EEE	𠂇 9AD9	𠂇 9ADC	𠂇 9B75	𠂇 9B72	𠂇 9B8F	𠂇 9BB1	𠂇 9BBB	𠂇 9C00	𠂇 9D70	𠂇 9D6B	𠂇 FA2D	𠂇 9E19	𠂇 9ED1			𠂇 2170
EEF	𠂇 ii	𠂇 iii	𠂇 iv	𠂇 v	𠂇 vi	𠂇 vii	𠂇 viii	𠂇 ix	𠂇 x	𠂇 一	𠂇	𠂇 '	𠂇 `			

- 注1 表中のH/L欄の数字は、SJISです。
 フォント(字体)が記載されている欄の数字は、Unicode(UCS-2)です。
- 注2 太枠部分は、SJISからUnicode(UCS-2)への変換だけです。
 Unicode(UCS-2)からSJISへの変換の対応は、「(b) NEC選定IBM拡張文字の対応表 (Unicode(UCS-2)からSJIS)」のようになります。
- 注3  部分はフォントが存在しないため、未定義とします。

(b) NEC 選定 IBM 拡張文字の対応表 (Unicode (UCS-2) から SJIS)

Unicode (UCS-2)	↵ FFE2
SJIS	81CA

マニュアルで使用する用語について

マニュアル「アプリケーションサーバ & BPM/ESB 基盤 用語解説」を参照してください。

索引

C

- csaftpuseradd 566
- csaftpuserdel 571
- csaftpuserls 573
- csahttputeradd 575
- csahttputerdel 582
- csahttputerls 584
- csakeyadd 585
- csakeydel 588
- csakeys 589
- csamkxmls 340
- csauseradd 590
- csauserdel 595
- csauserls 596
- cscapputil 597
- cscbinaryparse 341
- csccmctl 600
- csccompoconfig 603
- csccompodeploy 606
- csccompostart 610
- csccompostop 613
- csccompounddeploy 616
- cscenvbackup 619
- cscenvrestore 621
- cscenvupdate 622
- cscfdx2xsd 345
- cscfscls 623
- cscfscrm 626
- cscfswls 629
- cscfswrm 632
- cscgenbinary 346
- cscjson2xsd 351
- cscjson2xsdadv 353
- cscjsonxmlconv 354
- cscjsonxmlconvadv 356
- cscmsgtk 634
- csoas2servicedef 357
- cscpasswd 638
- cscpidelete 641
- cscpireexec 646
- cscpiselect 650
- cscprecache 667
- cscrcptnstart 669
- cscrcptnstop 671
- cscrepcheck 674
- cscrepctl 676
- cscrepdiff 680
- cscrepls 686
- cscrepupdate 702
- cscresinfo 703
- cscsetup 713
- cscsetup コマンド定義ファイル 766
- cscsoapmode 360
- cscstatus 709
- cscsvctl 716
- cscsvcls 719
- cscsvconfig 724
- cscsvsetup 726
- cscsvstart 727
- cscsvstop 730
- cscsvunsetup 732
- csctransform 361
- cscutil 734
- csmeexecutebp 366
- csmftpaddusr 739
- csmftpdelusr 742
- csmftplshistory 745
- csmftplsusr 744
- csmmailaddusr 749
- csmmaildelusr 752
- csmmaillsusr 755

D

- DB アダプタマッピング設定ダイアログ 288

DB アダプタ用の XML フォーマット定義ファイルの生成 340

DOM とバイナリデータの相互変換 341

F

FTP アダプタアカウント定義ファイル 867

FTP アダプタコマンド定義ファイル 867

FTP アダプタ実行環境プロパティファイル 891

FTP アダプタ実行環境プロパティファイル 869

FTP アダプタのユーザの削除 571

FTP アダプタのユーザの登録・更新 566

FTP アダプタのユーザの表示 573

FTP インバウンドアダプタのユーザの削除 742

FTP インバウンドアダプタのユーザの登録・更新 739

FTP インバウンドアダプタのユーザの表示 744

FTP 受付コンフィグファイル 892

FTP 受付定義ファイル 386

FTP コマンド許可リスト定義ファイル 896

FTP 実行許可リスト定義ファイル 899

FTP 連携で利用するファイル〔運用環境・実行環境〕 867

FTP 連携で利用するファイル〔開発環境〕 386

G

gRPC アダプタ実行環境共通プロパティファイル 1000

gRPC アダプタ実行環境プロパティファイル 995

gRPC アダプタで利用するファイル〔運用環境・実行環境〕 995

gRPC アダプタで利用するファイル〔開発環境〕 475

gRPC アダプタ独自定義ファイル 475

gRPC 受付定義ファイル 480

gRPC 受付で利用するファイル〔開発環境〕 480

H

HCSCTE 結果ビュー〔HCSC コンポーネントおよびデータ変換定義作成時〕 21

HCSC XPath 評価ビュー 27

HCSC エミュレートビュー 26

HCSC コンポーネント指定ファイル 810

HCSC コンポーネント情報表示画面 90

HCSC コンポーネントの開始 610

HCSC コンポーネントの定義 603

HCSC コンポーネントの停止 613

HCSC コンポーネントの配備 606

HCSC コンポーネントを作成する画面の構成 20

HCSC サーバ構成定義ファイル 767

HCSC サーバセットアップ定義ファイル 774

HCSC サーバのアンセットアップ 732

HCSC サーバの運用で利用するファイル 797

HCSC サーバの起動 727

HCSC サーバの構築で利用するファイル 766

HCSC サーバのセットアップ 726

HCSC サーバの停止 730

HCSC サーバランタイム定義ファイル 813

HCSC サーバランタイムの定義 724

HCSC 自動エミュレートビュー 25

HCSC-Manager 環境のバックアップ 619

HCSC-Manager 環境のリストア 621

HCSC-Manager コマンド JavaVM 起動オプション定義ファイル 797

HCSC-Manager コマンド共通定義ファイル 800

HCSC-Manager 定義ファイル 801

HCSC-Messaging コマンド共通定義ファイル 809

HTTP アダプタアカウント定義ファイル 939

HTTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル 952

HTTP アダプタ実行環境プロパティファイル 939

HTTP アダプタ定義ファイル 423

HTTP アダプタで使用するアカウント情報の削除 582

HTTP アダプタで使用するアカウント情報の登録・更新 575

HTTP アダプタで使用するアカウント認証のユーザ情報の表示 584

HTTP アダプタで利用するファイル〔運用環境・実行環境〕 939

HTTP アダプタで利用するファイル〔開発環境〕 423

HTTP 受付サービス選択定義ファイル 430

HTTP 受付定義ファイル 431

HTTP 受付で利用するファイル〔開発環境〕 429

HTTP 受付ルーティング定義ファイル 443

HTTP レスポンスヘッダ定義ファイル 429

I

- IBM 選択文字の対応表 (IBM コードと Unicode (UCS-2)) 1021
- IBM 選択文字の対応表 (SJIS と Unicode (UCS-2)) 1020
- IBM 選択文字の対応表 (Unicode (UCS-2) から SJIS) 1021

J

- Java 呼出アクティビティダイアログ 162
- JSON 形式データから XSD ファイルへの変換 (拡張モード) 353
- JSON 形式データから XSD ファイルへの変換 (標準モード) 351
- JSON 形式データと XML 形式データの相互変換 (拡張モード) 356
- JSON 形式データと XML 形式データの相互変換 (標準モード) 354
- JSON 形式データと XML 形式データの変換で利用するファイル [開発環境] 483
- JSON-XML 変換定義ファイル 483

K

- Kafka アダプタ実行環境共通プロパティファイル 989
- Kafka アダプタ実行環境プロパティファイル 982
- Kafka アダプタ定義ファイル 455
- Kafka アダプタで利用するファイル [運用環境・実行環境] 982
- Kafka アダプタで利用するファイル [開発環境] 455
- Kafka 受付定義ファイル 460
- Kafka 受付で利用するファイル [開発環境] 460

M

- Message Queue アダプタ環境定義ファイル 409
- Message Queue アダプタ実行環境プロパティファイル 921
- Message Queue アダプタ通信構成定義ファイル 411
- Message Queue アダプタで利用するファイル [運用環境・実行環境] 921
- Message Queue アダプタで利用するファイル [開発環境] 409

- Message Queue 受付定義ファイル 417
- Message Queue 受付で利用するファイル 417

N

- NEC 選定 IBM 拡張文字の対応表 (SJIS と Unicode (UCS-2)) 1027
- NEC 選定 IBM 拡張文字の対応表 (Unicode (UCS-2) から SJIS) 1028

O

- Object Access アダプタ実行環境プロパティファイル 918
- Object Access アダプタ通信構成定義ファイル 405
- Object Access アダプタで利用するファイル [運用環境・実行環境] 918
- Object Access アダプタで利用するファイル [開発環境] 405
- OpenAPI 仕様書を HCSC コンポーネントの定義に変換 357

S

- SFTP アダプタ実行環境共通プロパティファイル 980
- SFTP アダプタ実行環境プロパティファイル 965
- SFTP アダプタで利用するファイル [運用環境・実行環境] 965
- SOAP Fault 動作定義ファイル 860
- SOAP 受付定義ファイル 402
- SOAP モードの設定 360
- SOAP 連携で利用するファイル [運用環境・実行環境] 860
- SOAP 連携で利用するファイル [開発環境] 402

T

- TP1/RPC 受付定義ファイル 376
- TP1 アダプタ環境定義ファイル 378
- TP1 アダプタ実行環境プロパティファイル 864
- TP1 アダプタ通信構成定義ファイル 380
- TP1 連携で利用するファイル [運用環境・実行環境] 864
- TP1 連携で利用するファイル [開発環境] 376

U

- URL パターン 444
- URL パラメタ 445

W

- Windows 特殊文字の対応表 (SJIS と Unicode (UCS-2)) 1019
- Windows 特殊文字の対応表 (Unicode (UCS-2) から SJIS) 1019
- WSDL カスタムバインディングファイルに関連するダイアログ 297

X

- XPath ダイアログ 284

あ

- アイコンのサイズを設定する [パレット] 316
- アウトラインビュー 28, 34
- アウトラインビューのフィルタ機能の設定 331
- アウトラインビュー [ビジネスプロセス定義画面] 67
- アカウント情報管理コマンド定義ファイル 1003
- アクティビティ一覧表示の有効・無効を設定する 331
- アクティビティのアイコンのラベルサイズを変更する 326
- アクティビティのオートコネクト機能 321
- アクティビティの自動整列機能 324
- アクティビティのスナップ機能 319
- 値置換えダイアログ 275
- 値の設定ダイアログ 205
- アプリケーションの操作 597

い

- 一覧表示コマンド (cscmsgtk) 635
- 色を変更する [マッピングの線] 329
- インポート 676
- インポート可否の検証 674

う

- 受付アクティビティダイアログ 153

え

- エクスポート 676
- エディタエリア 518
- エミュレート設定情報定義ファイル 841

お

- 応答アクティビティダイアログ 156
- オートコネクト機能 321
- オブジェクトを切り取る 309
- オブジェクトをコピーする 309
- オブジェクトを削除する 312
- オブジェクトを整列する 312
- オブジェクトを貼り付ける 310
- オペレーション名の取込ダイアログ (受付アクティビティ) 155
- オペレーション名の取込ダイアログ (応答アクティビティ) 158

か

- 解析対象絞り込みコマンド (cscmsgtk) 636
- 各種操作 734
- カスタムダイアログ 280
- 稼働運用ページ 532
- 稼働運用ページ [HCSC サーバ] 532
- 稼働運用ページ [サービスアダプタ] 534
- 稼働運用ページ [ビジネスプロセス] 535
- 稼働運用ページ [ユーザ定義受付] 537
- 稼働確認ページ 540
- 画面 (運用環境) 516
- 画面 (開発環境) 18
- 画面構成 (運用環境) 517
- 画面構成 (開発環境) 19

き

- 基数変換ダイアログ 278
- 基本アクティビティ 64
- 基本情報ページ 520
- 基本情報ページ [HCSC サーバ] 520
- 基本情報ページ [サービスアダプタ] 522

基本情報ページ [ビジネスプロセス] 521
基本情報ページ [ユーザ定義受付] 527
キャンバス 65
キャンバスの表示を拡大する 314
キャンバスの表示を縮小する 314
キャンバスの表示を元のサイズに戻す 315
共通フォルダの削除 626
共通フォルダの参照 623

く

空白除去ダイアログ 246
クライアント定義ファイル 403
繰り返しアクティビティダイアログ 184
繰り返し条件設定ダイアログ 187
くり返し設定ダイアログ 216
くり返しダイアログ 266
繰り返しリスト設定ダイアログ 185

け

検索結果フィールド [履歴管理ページ] 548
検索条件フィールド [履歴管理ページ] 545
検証アクティビティダイアログ 176
検証・パッケージングに関連するダイアログ 299

こ

公開鍵認証の秘密鍵情報の削除 588
公開鍵認証の秘密鍵情報の登録・更新 585
公開鍵認証の秘密鍵情報の表示 589
構成要素ダイアログ 120
構造アクティビティ 65
コマンド (開発環境) 334
コマンドアダプタ実行環境共通プロパティファイル 963
コマンドアダプタ実行環境プロパティファイル 957
コマンドアダプタで利用するファイル [運用環境・実行環境] 955
コマンドの種類 [運用環境・実行環境] 555
コマンドの種類 [開発環境] 335
コマンドの同時実行 560
コマンドの入力形式 [運用環境・実行環境] 562

コマンドの入力形式 [開発環境] 336
コマンドの文法の記述形式 [運用環境・実行環境] 564
コマンドの文法の記述形式 [開発環境] 338
コメントの背景色を変更する 318
コメントを最小化する 318
コメントを元のサイズに戻す 318
コンソールビュー [HCSC コンポーネントおよびデータ変換定義作成時] 21
コンソールビュー [運用環境・実行環境] 519
コンソールビュー [バイナリフォーマット作成時] 20
コンポーネント ID 設定ファイル 847
コンポーネント共通 UOC 機能 838
コンポーネント種別設定ファイル 849

さ

サービスアダプタ定義画面 35
サービスアダプタ定義画面 (MDB (DB キュー) の基本画面) 49
サービスアダプタ定義画面 (MDB (WS-R) の基本画面) 46
サービスアダプタ定義画面 (MDB (WS-R) の詳細画面) 47
サービスアダプタ定義画面 (SessionBean の基本画面) 43
サービスアダプタ定義画面 (SessionBean の詳細画面) 44
サービスアダプタ定義画面 (Web サービスの基本画面) 35
サービスアダプタ定義画面 (Web サービスの詳細画面) 41
サービスアダプタ定義画面 (汎用カスタムアダプタの基本画面) 54
サービスアダプタ定義画面 (汎用カスタムアダプタの詳細画面) 59
サービス情報の管理 716
サービス情報の表示 719
サービス情報変更定義ファイル 851
サービスの操作に関連するダイアログ 292
サービスプラットフォームの運用環境および実行環境で使用するコマンド 566

サービスプラットフォームの開発環境で使用するコマンド 340
サービス呼出アクティビティダイアログ 160
作業フォルダの削除 632
作業フォルダの参照 629

し

識別子検索 548
実行環境のバージョンアップ 622
実行許可コマンド定義ファイル 955
自動整列機能 324
自動マッピング候補選択ダイアログ 215
自動マッピング元設定ダイアログ 213
シフト演算ダイアログ 259
終了コマンド (cscmsgtk) 637
出力モード切り替えコマンド (cscmsgtk) 636
障害解析コマンド (cscmsgtk) 635
条件式の作成ダイアログ 192
条件設定ダイアログ 204
条件設定ダイアログ (ノード条件の設定) 225
条件設定ダイアログ (分岐アクティビティ) 190
条件設定ダイアログ (並列処理アクティビティ) 197
条件値設定ダイアログ 129
条件追加/編集ダイアログ 273
詳細情報フィールド [履歴管理ページ] 549
状態表示 709
[新規バイナリフォーマット定義ファイル] ウィザードのページ 138

す

数値演算ダイアログ 250
数値フォーマット変換ダイアログ 248
スキーマツリービューアから要素のパスをコピーする 330
スキーマ論理名 71
スケジュール駆動受付共通コンフィグファイル 993
スケジュール駆動受付コンフィグファイル 991
スケジュール駆動受付定義ファイル 471
スケジュール駆動受付で利用するファイル [運用環境・実行環境] 991

スケジュール駆動受付で利用するファイル [開発環境] 471
スコープアクティビティダイアログ 183
スナップ機能 319

せ

設定ダイアログ (WSDL カスタムバインディングファイルの設定) 297
設定ダイアログ (検証・パッケージングの動作設定) 299
設定ダイアログ (データ変換の設定) 235
セパレータ選択ダイアログ 136
セパレータ追加/変更ダイアログ 137
選択ダイアログ 270

そ

関連セット検索 547
操作を元に戻す [データ変換定義画面] 328
操作を元に戻す [バイナリフォーマット定義エディタ] 307
操作を元に戻す [ビジネスプロセス定義画面] 313
操作をやり直す [データ変換定義画面] 328
操作をやり直す [バイナリフォーマット定義エディタ] 307
総和ダイアログ 254
ソート条件追加/編集ダイアログ 268
属性 71

た

待機アクティビティダイアログ 175
代入アクティビティサブダイアログ 168
代入アクティビティダイアログ 166
タブ 519
タブ [ビジネスプロセス定義画面] 66
タブを閉じる 67
タブを開く [上位階層のタブ] 67
単純内容 71
単純内容要素ダイアログ 102

ち

置換種別 ([フォーマット] ダイアログ) 98, 99

つ

ツールの一覧の表示または非表示を設定する 316
ツリービュー [HCSC コンポーネントおよびデータ変換定義作成時] 21
ツリービュー [運用環境・実行環境] 517

て

定義画面および情報表示画面 29
定義情報ページ 529
定義情報ページ [HCSC サーバ] 529
定義情報ページ [ユーザ定義受付] 531
定義ファイル (運用環境・実行環境) 757
定義ファイル (開発環境) 370
定義ファイルの管理 600
定義ファイルの種類 [運用環境・実行環境] 758
定義ファイルの種類 [開発環境] 371
定義ファイルの入力形式 [運用環境・実行環境] 762
定義ファイルの入力形式 [開発環境] 373
定義ファイルの文法の記述形式 [運用環境・実行環境] 764
定義ファイルの文法の記述形式 [開発環境] 374
定義領域 [HCSC コンポーネントおよびデータ変換定義作成時] 21
定義を保存する 329
定数ダイアログ 283
データ変換アクティビティダイアログ 164
データ変換コマンドプロパティファイル 486
データ変換単体テストコマンドで利用するファイル [開発環境] 486
データ変換定義画面 70
データ変換定義画面の操作 328
データ変換に関連するダイアログ 207
データ変換のテスト 361
データ変換用システムプロパティファイル 491
データ変換を定義する画面の構成 20
デバッグ構成ダイアログ 201
デバッグビュー 22

転送履歴の表示 745

電文フォーマットの取込ダイアログ 151

と

特殊文字のコード対応表 1018
途中終了アクティビティダイアログ 182
トレース取得ポイント表示コマンド (cscmsgtk) 637

な

名前空間接頭辞を XML に出力する [データ変換定義画面] 328

に

日時/状態検索 546
入力値を除去ダイアログ 286

の

ノード条件設定ダイアログ 224
ノード数取得ダイアログ 263
ノード選択ダイアログ (データ変換) 217
ノード選択ダイアログ (バイナリフォーマット定義) 131
ノード調査ダイアログ 264
ノード名取得ダイアログ 262

は

バイナリ電文生成コマンドプロパティファイル 495
バイナリ電文生成定義ファイル 499
バイナリパースコマンドプロパティファイル 502
バイナリフォーマット定義エディタ 31
バイナリフォーマット定義画面 30
バイナリフォーマット定義画面の操作 302
バイナリフォーマット定義に関連するダイアログ 95
バイナリフォーマット定義ファイルから XML フォーマット定義ファイルの生成 345
バイナリフォーマット定義ファイルを定義する画面の構成 19
配備済みの HCSC コンポーネントの削除 616
端数処理ダイアログ 252
パスワード認証のユーザ情報の削除 595

パスワード認証のユーザ情報の登録・更新 590
パスワード認証のユーザ情報の表示 596
パッケージ・エクスプローラー 19
パレット設定ダイアログ 198
パレット〔データ変換定義画面〕 72
パレットの表示を設定する 315
パレット〔ビジネスプロセス定義画面〕 62
半角コードの対応表 1010

ひ

ビジネスプロセスエディタ 24
ビジネスプロセス実行コマンド定義ファイル 513
ビジネスプロセス定義画面 62
ビジネスプロセス定義画面の操作 309
ビジネスプロセスに関連するダイアログ 144
ビジネスプロセスの実行 366
ビジネスプロセスの実行で利用するファイル〔開発環境〕 513
ビジネスプロセスのデバッグ画面の構成 21
ビジネスプロセスのデバッグに関連するダイアログ 201
否定演算ダイアログ 255
非表示にする〔パレットのツールの一覧〕 316
表示させる〔パレットのツールの一覧〕 316
標準受付およびユーザ定義受付の開始 669
標準受付およびユーザ定義受付の停止 671

ふ

ファイルアダプタ実行環境プロパティファイル 915
ファイルアダプタで利用するファイル〔運用環境・実行環境〕 915
ファイルイベント受付共通コンフィグファイル 913
ファイルイベント受付コンフィグファイル 912
ファイルイベント受付定義ファイル 452
ファイルイベント連携で利用するファイル 912
ファイルイベント連携で利用するファイル〔開発環境〕 452
ファイル操作アダプタ実行環境プロパティファイル 902
ファイル操作アダプタ定義ファイル 389

ファンクション選択ダイアログ 219
フォーマットダイアログ 95
フォーマット定義およびデータ変換定義の事前キャッシュ 667
フォルト処理の割当ダイアログ 152
フォルト送出アクティビティダイアログ 172
フォントを設定する〔パレット〕 316
複合内容 71
複合内容要素ダイアログ 115
複数サービス削除ダイアログ 295
複数サービス追加ダイアログ 293
複数パッケージングダイアログ 292
複製マッピング範囲設定ダイアログ 230
複製マッピング元設定ダイアログ 231
部分文字列取得ダイアログ 240
ブレークポイントビュー 24
プロセスインスタンスの検索 650
プロセスインスタンスの再実行 646
プロセスインスタンスの実行履歴の削除 641
プロセス環境変数定義ファイル 956
プロパティビュー〔HCSC コンポーネントおよびデータ変換定義作成時〕 21
プロパティビュー〔バイナリフォーマット作成時〕 20
分岐アクティビティダイアログ 189

へ

並列処理アクティビティダイアログ 195
ヘッダ割当変数ダイアログ 147
ヘルプ表示コマンド (cscmsgtk) 637
変換先スキーマツリービューア 71
変換ファンクション選択ダイアログ 285
変換元スキーマツリービューア 71
変換元スキーマファイル設定ダイアログ 207
変換元・変換先スキーマファイル設定ダイアログ 208
変数一覧表示の有効・無効を設定する 331
変数の表示ダイアログ 150
変数ビュー 23
変数・相関セット一覧ダイアログ 144

ほ

- 補償アクティビティダイアログ 174
- 本番環境の簡易セットアップ 713

ま

- マッピング線の色を変更する 329
- マッピング定義登録ダイアログ 229
- マッピング定義のインポートダイアログ 232
- マッピング定義のエクスポートダイアログ 234
- マッピングビューア 71
- マッピングビューアのファンクションをコピーして貼り付ける 330
- マッピング元設定ダイアログ 211

む

- 無操作アクティビティダイアログ 171

め

- 名称検索ダイアログ 220
- メールアダプタアカウント定義ファイル 925
- メールアダプタコマンド定義ファイル 925
- メールアダプタ実行環境プロパティファイル 927
- メールアダプタで利用するファイル〔運用環境・実行環境〕 925
- メールアダプタユーザ情報の削除 752
- メールアダプタユーザ情報の登録・更新 749
- メールアダプタユーザ情報の表示 755
- メールヘッダ定義ファイル 937
- メッセージ定義ファイル 509
- メッセージトラッキング機能の起動 634
- メッセージトラッキングプロンプトで使用するコマンド (cscmsgtk) 635
- メニューバー 517

も

- 文字コード対応表 1010
- 文字数取得ダイアログ 243
- 文字列調査ダイアログ 245
- 文字列連結ダイアログ 238

元に戻した操作をやり直す〔ビジネスプロセス定義画面〕 313

問題ビュー〔HCSC コンポーネントおよびデータ変換定義作成時〕 21

問題ビュー〔バイナリフォーマット作成時〕 20

ゆ

- ユーザ情報指定ファイル 1005
- ユーザ情報の登録で利用するファイル 1005
- ユーザ定義受付削除ダイアログ 290
- ユーザ定義受付情報表示画面 93
- ユーザ定義受付定義画面 75
- ユーザ定義受付定義画面 (SOAP 受付の基本画面) 76
- ユーザ定義受付に関連するダイアログ 290
- ユーザ定義受付ランタイム定義ファイル 862
- ユーザ認証情報管理コマンド定義ファイル 1002
- ユーザ認証で利用するファイル 1002
- ユーザの管理 638

よ

- 要素選択ダイアログ 135
- 要素を移動する 304
- 要素をコピーする 302
- 要素を削除する 304
- 要素を貼り付ける 302

り

- リストコマンドオプション定義ファイル 908
- リソース Key 510
- リソース稼働情報の表示 703
- リポジトリ情報の差分の表示 680
- リポジトリ情報の表示 686
- リポジトリのアップデート 702
- 履歴管理ページ 545
- リンクダイアログ 196

る

- ルート要素選択ダイアログ 210

れ

レイアウトを設定する [パレット] 315

ろ

ログ出力アクティビティサブダイアログ 180

ログ出力アクティビティダイアログ 178

ログ出力アクティビティ定義ファイル 506

ログ出力アクティビティで利用するファイル [開発環境] 506

ログの出力レベル 510

論理演算ダイアログ 257

わ

割当関連セット群ダイアログ 148